

役満で上がると惚れられる

黒岩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の麻雀競技人口は一億人の大台を突破した——が、そんな明るいニュースとは裏腹に、二軍のプロ雀士、東郷仁は不運も重なり、自身が所属するチームから戦力外通告を受け、露頭に迷おうとしていた。落ち込みながらも知り合いとの待ち合わせ場所に向かう仁は道中、道端の怪しい占い師からこう告げられる。

「役満で上がると惚れられるぞ」

何を馬鹿な、と占い師の言葉を一蹴。そのまま知り合い達と合流し、流れて三麻を打ち始めたのだが、その卓で役満をツモる。すると彼女たちの様子がおかしくなり、ホテルの部屋にまで連れ込まれ、あれよこれよとそのまま3P。天国のような体験をした仁は自分のオカルトに気づき、その力で全国の美少女雀士を己のモノにしたいと、下心満載の行動原理で動き始めた。

咲っておもちキャラ多いのに、おもちハーレムとか、そもそもハーレムものって少ないよね？ って思ってた自分用SSを投稿しときます。息抜きで色々書く予定

目次

戦力外通告	1
初めての3P	24
夢のような現実	45
余韻と野望	62
北の大地	73
初めての指導	86
アイドルの素質	114
雪の日の夜	141
夜のユキ	156
約束	171
東の都	190
過去	201
好きな人	218
疑惑のデート	231
後輩おっぱい	245
後輩との初めて	263
次の目的地は	279
ネット麻雀	293
4月6日	310
誕生日おっぱい	329
アイドル雀士ハーレム	346
信州の名門	364
強豪校での初めての指導	384
弁当と池田	402

生まれ持ったモノ	791
休日コミュニケーション	779
ステルスモモ	764
見える人	746
峰の上に咲く花	723
初夏の出会い	700
ちよつとした縁	682
和と夜エツチ	663
オフパコ本番	650
オフパコでおっぱい	634
オフ会	620
すれ違い	607
人和	595
清澄での出会い	582
孤独	560
衣日和	546
団欒	531
月の支配者	517
龍門瀏家	504
嫁になったキャプテン	493
嫁プレイ	479
嫌よ嫌よも好きのうち	463
対策	446
焼き肉	431
猛指導	417

妹	937
恋	924
裏長野県予選一戦目	904
違和感	890
長野県予選1日目	878
決意	865
ステルスデート	849
ステルスえっち	836
ステルスおっぱい	822

戦力外通告

——プロ2年目の冬。俺は戦力外通告を受けた。

一般にも、戦力外通告という言葉はそれなりに浸透していると思う。有名なドキュメンタリー番組もあるし、コアなファンであれば今年は二軍選手の誰が戦力外通告になったのかと態々チェックしているだろうし、実際に麻雀雑誌の後ろの方にも小さく戦力外通告された選手のリストが載る。

だがまさか自分がそうなるとは——まあ、思わないこともなかったが、それでも実際にそうなったことは非常にショックな出来事だった。

前日、自分が住んでいるアパートの一室。ベッドに寝転がりながらタイトル戦をテレビで見ていると、突如として携帯の着信音。表示されている相手が自身の所属するチームの本部長であることを理解すると慌てて電話を取った。そして一言、

『明日、スーツを着て、本部まで来てほしい』

この発言に、俺は携帯を落としかけるほどの衝撃を受けた。その意味が分からないはずもない。一昔前の会社員で言うところの、肩たたきに相当する言葉。

プロ雀士がスーツを着て試合や練習に望むことは珍しくもない。が、それは個人のタイトル戦やリーグ戦などの服装の自由が認められている試合くらいである。プロチームに所属するなら、チームのユニフォームなどを身に着けて試合に望む。まあ、一部、スター選手などはトレードマークとも言える自身の個性的な格好をして試合に望むこともなくはないが、二軍で鳴かず飛ばずの成績を収める自分には縁のない話であり、その例には含まれない。

普段の服装、試合や練習に臨む時は、紫色のジャケットにワイシャツ、紺色のスラックスである。これは従姉妹からプレゼントされたもので、微妙にスーツっぽく見えなくもないが、そう認識しているとしたら態々スーツで来いなんて言わないだろう。むしろ疑念が確信に変わってしまった。

ただでさえ最近是不眠症気味だというのに、結局殆ど眠ることが出来ないまま翌日。自身の車を運転してチームが所持する練習場所兼、チームのスタッフ、職員なども働いているビルに向かうと、そのまま応接室まで通され、これまた話は直ぐに済んだ。

——戦力外通告。

プロ2年目。まだまだ引退するには早すぎる、そもそももう少し長い目で、育成感覚で見たいところであったが、現実は厳しかった。1年目の新人戦でそれなりの活躍をし、それなりの成績を収めていた時とは考えられない事態だ。

それもこれも、1年目に所属していたチームが、経営会社が潰れたことによつて一緒に解体されたことが原因の一端だと思ふ。

残つた選手たちはプロ麻雀連盟や他のプロチームとの協議によつて、比較的均等に、選手それぞれと交渉の末に各チームに移籍することになり、自分も何とかそこに滑り込んだ。

しかし自分は1年目の最初の方こそそこそこ活躍していたとはいへ、それからは成績も悪く、二軍生活が板についてきた身。新しいチームでも結果は振るわず、そのままプロ2年目に突入。

何とか食らいつこうと自分なりの努力を続けてきたが、今日この日に戦力外通告を受けてしまった。

眼の前が真っ暗になるとは正にこのことだろう。自分は今まで、麻雀には結構本気で取り組んできたはずだった。

「……いや、そんなことはない、か」

そう思いかけて、直ぐに訂正する。そんなのは、中学の終わり頃までの話だったと。

家に帰つて書類を置き、机の上に置かれた薄汚れた麻雀牌や牌譜を見て自嘲気味に笑ふ。

これをどうしようか。このままゴミ箱に突っ込んでやろうか。いや、でも。

そんなことを考えていると、従姉妹からの連絡。近くのお店で食事のお誘いだ。

きつとお祝いも兼ねてだろう。従姉妹は今年、プロ1年目にして、

シルバーシューター。そして当たり前のようにルーキーオブザイヤー（新人賞）を取り、幸先の良いプロ人生を歩み始めたところだ。そしてプロ2年目。プロ麻雀せんべいの紹介だと、ドランカーと称された東郷仁は、早くも戦力外通告だ。

さしずめプロ雀士の光と影か。カードでも、俺はハズレ扱いだが、従姉妹は結構なレア物だ。

持つものと持たざる者の差を改めて感じ入る。やはり、俺は従姉妹や他の選ばれた連中とは違うのだと。

プロ雀士の中には、時折、奇妙な力を持つ者がいる。

これは俺達雀士の中では有名な話だ。人によつては高校生、あるいはそのずっと前から奇妙な力で麻雀を打つ者がいる。

牌が偏つたり、特定の役で上がりまくったりと、様々な力がある。

それを知る者達は、オカルトと呼んでいる。かく言う従姉妹もオカルト持ちだ。

そして俺にはないもの。子供の頃からその存在を知り、痛感しながらも、ついぞそういうものは発現せず、結局はデータ型なのか、直感型なのか、よく分からない打ち手となった俺にはないもの。

それがあればどれだけ楽だったかと。中学の頃から大会にそういう奴らが現れはじめ、高校に上がる頃には馬鹿らしいと情熱を殆ど失いかけていた。

しかし麻雀名門校に入ってしまったのと、それでも今までの経験からそこそこ打てることもあって、男子の部でそこそこに活躍。晴れてプロになれたのはいいが、結果はこのザマだ。

「何がドランカーだ。ふざけやがって……こちとらまだ二十歳だつての……」

つい今年、酒を飲めるようになったばかりなのに、1年目からそういう異名をつけられたのも微妙にムカつく。打ち方がころころ変わり、まるで酔っ払いを相手にしているようだからドランカーらしいが、麻雀なら打ち方を配牌や相手、点数状況で変えるのは至極当然のことであり、無理矢理付けられたようにしか思えない。

後は多分、見た目や服装も相まって、どこかの怪しいホストみたい

だからだろうか。

不眠症になつてから目の下のクマは取れないし、この半目気味の眼は遺伝だからしょうがない。見た目はそれほど悪くないと踏んでいるのだが、やはり纏う雰囲気は良くないのだろうか。一向にモテたことはないというのに。

運が悪い。巡り合わせが悪い。つまり、持っていない。いや、持っていない奴でもプロで活躍している者はいるのだから言い訳に過ぎないのだろうが、それでもガキの頃からオカルトと関わってきた身としてはそう言わざるを得ない。

「オカルト持ちなんて消え失せろよ……くそつ、つーか、これからどうするんだ俺……」

従姉妹から誘われた食事には、なんだかんだでオーケーと返してしまい、そのまま車に乗り込みながら頭を抱える。当然だが、麻雀ばかりやってきた自分に就職など難しい……と思う。いや、経験がないので分からないが。

2年のプロ雀士生活、とはいえ二軍なので給料はそれほどあつた訳ではないので貯金も心許ない。数ヶ月か、あるいは切り詰めれば一年くらいは生活出来るかもしれないが、それ以降は何かをしなければならぬ。

雀荘で稼ぐつても悪くないか……と思うが、どうだろうな。腐つてもプロで、そこらのアマチュアに比べれば鬼のように強いはずだが、麻雀は運要素も高いし、時折オカルトを持っていたりヤバい奴もいる。安定して稼げるかどうかは不安なところだ。

もしくはどこかの学校や実業団で麻雀のコーチとかはどうだろう。麻雀教室を開くとか。ただまあ正式に雇われるなら色々売り返まなければならぬし、そもそもこんなプロといつても中途半端な自分を雇いたがる場所があるのだろうか。

それでもどうにかする必要はある。迷つた末に自分の携帯のSN Sアカウントと殆ど更新されていないブログに、麻雀打ちます教えます。一日5000円”と、自分で見ても引く、中々に酷い募集を書き込んでしまった。

それも、戦力外通告を受けたばかりの精神だからだろう。誰がどう思おうと気にならない。これ以上の最悪など存在しないのだから。

「つと、着いたか……」

待ち合わせ場所のお店に近い繁華街のパーキングエリアに車を止めて降りる。プロの契約金を使って見栄で買ってしまったこの中古のレクサスも売っぱらってやろうかと思う。これを買ったらもう一年くらいは遊んで暮らせるかもしれない。

我ながらクズみたいなことを考えていると、約束のお店も見えてきた——が、ここに来て行きたくないな、と思ってしまう。

先程の連絡で、従姉妹と一緒にあの人もいると聞いたし、ぶっちゃけこのテンションで会いたくない。というか深くは考えていなかったが、戦力外通告の俺がどの面下げて祝いの席に同席するのだろうか。空気が死ぬだろ。

「バックレるか……?」

人が行き交う繁華街。適当な場所で立ち止まり、足を迷わせる。こうやってると本気でホストの客引きか何かだと思われないだろうか。いや、こんな目の下にクマがある男についていく女はいないだろう。

改めて行くかどうかを迷うが、やはり急用が出来たと言ってキャンセルした方が良くはないかと思う。祝いの席で空気を殺してしまるのはさすがにどうかと思うし、もう1人でやけ酒でも煽るか、風俗でも行って一瞬の快楽に身を任せてみるかとも思う。

そんな風に迷っているとだ。不意に横の路地から声を掛けられた。

「——お主、オカルトを持っておるな?」

「は?」

声の方向に振り向けば、そこには声と全く同じイメージのしわくちゃの老婆が小さな机と水晶玉と共に椅子に腰掛けていた。

如何にもな胡散臭い占い師。こういう繁華街らしいといえばらしいが、

「……悪い。言ってる意味が分からないな。おばあちゃん、大丈夫かい?」

「お主にはオカルトがある。それも、今日目覚めたばかりのオカルトがな」

これでも一応はプロ。いや、元プロ。エンターテイメント。興行だつてするし、人前に顔を見せる職業だった。

故に丁重に接してみたが、老婆は言葉を変えなかった。再度念押しするように告げられ、こちらの表情も笑みから真顔に変わつてしまふ。

「オカルト、ね……よく分からないが、どんなオカルトがあるつて言うんですかね？ あれですか、背後霊が憑いてるとか」

まあ実際に憑いてたら従姉妹が感知し、親戚がいる鹿児島の方まで行つてお祓いとかされるのは目に見えてるのでないだろうかと思ひながら言う。

こうやつて会話が成立している時点で、相手の術中にはまっている気はしたが、今の俺を縛る者はない。待ち合わせも放棄しようと思つていたところだ。

故に老婆との会話に付き合つてみたのだが、次に告げられた言葉は、予想の斜め上を行くものだった。

「役満を上がると惚れられる」

「……は？」

「お主が役満を上がれば、同席していた女子は惚れる」

……この婆、大丈夫か？ 病院とか連れて行った方がいいか？

さすがに少し心配になるが、続く言葉にはドキリとさせられた。

「お主、待ち合わせをしとるじやろう」

「っ……」

言い当てられ、動揺しかける——が、それをすんでのところ堪える。おかしな推理じゃない。

なにせ自分は、ここで立ち止まっていたのだ。不自然に。数メートルの範囲で足を迷わせ。繁華街のど真ん中だ。見ていれば、誰かと待ち合わせをしていると思つてもおかしくない。

占い師とは、少ない情報から相手を見抜くことに長けていると聞く。今のも、俺の機微からそうだろうと推測したのだろう。

別にバレたところで何がどうなるという話でもないのだが、どうにもこの手の心理戦には隙を見せないようにしていた癖もあり、隠し通してしまった。その上で問いかける。

「どうだろうな。だが、もし待ち合わせをしていたとしたらどうだつて言うんだ？」

「その相手の女子らとの卓で、役満が上がってみせるがいい。さすがに、お主は幸福となるだろう」

「——役満が上がれ？　ははっ、面白い事を言うな」

女性と当てられたのはどうでもいいが、その相手との卓で役満が上がれ、というのも最高にふぎけた占いだ。

そんなことは不可能に決まってる。麻雀の世界に絶対はないにして、極めてゼロに近い。良くて数%といったところだろうか、俺があの2人相手に役満を上がるというのは。

冗談にしては面白い。少しツボに入ってしまった俺は、財布から千円札を取り出し、老婆に差し出す。

「面白い占いを聞いた。ありがとな、お婆ちゃん。お代は書いてないが、これくらいでいいか？」

「お代はいらぬよ。儂は、ただ導くだけじゃ」

「まあそう言わないでくれ。何も渡さずに立ち去ったんじや外聞が悪い。ここに置いておくからな」

と、お代はいらないと言う老婆に対して、千円札を置いてその場から立ち去る。

ほんの少しだが、気力を取り戻した。いや、一過性のものでしかないので数分後には自分の状況を思い出してブルーになると思うが、この一瞬だけは気力がある。

人間なんて単純なもので、悪いことがあっても、少し良いことがあったり、逆に良いことがあっても、悪いことがあればその瞬間は忘れてしまえるものだ。

まあ、プロ生活に思ったより未練が無かった可能性もあるが、これまた後で思い出したらブルーになりそうなことを考え、俺は待ち合わせ場所へと向かった。

「遅いですよ、ブラザー。十分の遅刻です」

「ああ、いや、悪い。少し道に迷ってな。後、俺達は兄妹じゃないだろ。従兄弟だ。英語だと……なんて言うんだ？」

「カズン、ですが、言い難いのでブラザーでいいでしょう」

「思ったより適当だよな、お前は……」

待ち合わせ場所。指定されたお店の前に着くと、パンツルックの女性性の姿があつた。

髪色は同じ。身長は160センチくらい。上半身にはカーディガンを身に付け、その胸元は街行く一般女性と比べてもかなり盛り上がり、思わず目を奪われそうな谷間を覗かせる——そんな控えめに言っても美女の姿。

戒能良子。俺の従姉妹で、小さい頃からの幼馴染。

歳はこちらの一つ下で、麻雀の実力は俺より遙かに上。今話題のスーパールーキーの姿がそこにはあつた。

彼女からの誘いを受け、やってきた俺だが、相変わらずの美女っぷりに眼のやり場に困ってしまいそうになる。

「……はあ」

「どうかしましたか、仁。今日は一段とクマが濃ゆいようですが」

「何でもない……それより、はやりさんは？」

「店の中ですよ。先について待っているようです。オーダーもしているようなので急ぎましょう」

ああ、と頷いて俺は良子と共に店の中へ。

そこは個室があるタイプの小洒落たレストランだった。ここらに住んで一年経つが、俺も知らない店。

中に入って名前を告げると、そのまま店員の案内を受けてとある一室に通される。良子が扉を開けると、そこからは可愛らしい声が聞こえてきた。

「よしこちゃんに東郷くん！ 待ってたよ」

「お待たせしました、はやりさん」

「お久しぶりです。すいません、遅刻してしまっ
「いいよいいよ。待ったと言ったけど、たいして待つてないからね
☆」

ふりふり、と可愛らしく手を振って迎えてくれたのは、良子以上に
有名なプロ雀士だった。

瑞原はやり。牌のお姉さんとしても有名なアイドル雀士だ。

彼女を見ると、思わず溜息が漏れそうになる。

はやりさんは相変わらず可愛いな……。

綺麗で長い髪をツーサイドアップに纏めた小柄な女性。年齢を感
じさせない童顔さや肌のツヤ。

そして何より、カットソーから覗く良子以上の乳の谷間が、こちら
を惑わせる。

その爆乳に顔を埋めてみたいと懸想したことは一度や二度ではな
い。

良子は従姉妹であるため、顔立ちやスタイルが好みであつても半ば
諦めがつくが、プロ1年目に彼女と知り合いになつてしまい、俺は下
心が湧いてしまうのをいつも抑えてきた。

いや、厳密には抑えきれないだろう。下心があり、当然出会う
度に話しかけているし、露骨にはなつてないだけでずつと狙っている
のだから。

ただまあ、そんなものは夢みたいなものだ。なにせはやりさんはあ
の牌のお姉さんで、ハートビーツ大宮に所属するトップ選手。

グラビアにも頻繁に登場し、男性プロどころか、日本中に男女問わ
ずファンがいる。

彼女の前で考えるのも何だが、彼女のグラビアにお世話になつてい
る男子も相当いるだろう。

そんな無自覚に性の対象を振りまく彼女と知り合いになり、なおか
つこうやって食事にも参加出来るのだから、俺は恵まれている。

プロ1年目で彼女と仲良く会話してただけで、次の試合で同卓し
た全員が俺を狙ってきたくらいだ。

というか、今年に入ってから少数ない二軍の試合も、良子が従姉

妹だということがバレて狙い撃ちにされたくらいだ。俺の成績が落ちた理由、それなんじゃないか……？

実際の真偽は不明だが、この2人と食事をしていると知られたら今まで以上にボコされていたかもしれない。

そういう意味では、プロを止めてよかった。いやよくない。良いわけあるか。

「ど、どうしたの東郷くん……？ 今日是一段と頭を抱えてるけど……」

「チームから厳しいことでも言われましたか？ まあ、ネバーギブアップの精神で頑張ることですよ」

「ああ、いや……ちよつとな……」

俺の様子にはやりさんが少し困惑しながら心配してくれ、良子もなんだかんだで励ましてくれる。いや、うん。状況的には恵まれている。それは自覚している。

しかしだ。この2人に俺への恋愛感情なんて欠片もないだろうし、そもそも二軍の、いや、クビになった元プロと人気女子プロなんて釣り合いが取れていないにも程がある。

それ故に、プロ2年目に入ってから俺も半ば諦めているのだ。どうあっても仲の良い友達止まりだと。

二軍と一軍のスター選手の日程の違いから、会う回数も激減した。プロに入って最初の方は、別チームではあっても、それなりに会って仲良くしていたようにも思うが、今は2ヶ月に一度でも連絡を取れば良い方だ。

はやりさんも、機会があればこうやって誘ってくれるが、やはりスケジュールの問題もあり、忙しいので中々会えない。それでも変わらず接してくれるこの人は、本当に優しいんだな、と思う。

俺なんて麻雀の実力もなければ熱意も中途半端、今までなあなあで麻雀をやってきた下心満載のクズだと言うのにだ。

はやりさんとよく一緒に食事に行っている時期、はやりさんの無防備さにムラムラしすぎて、食事を終えたその足で風俗に向かったような男だ。あまりにも虚しい上にはやりさんとは比べることも出来な

い相手だったので、さすがに即風俗というのはやめたが、結局は性欲を抑えきれずにはやりさんや良子、他の女子プロのグラビアや妄想で自家発電を繰り返してしまっている。

男なら普通のことと気に病むことはないはずだ。事実、高校生くらいまではそれくらいどうということもなかったはず。

ただ、彼女たちの純真さを実際に接することで感じていると、なんだか自分がとんでもないクズな気がしてしょうがない。いや、実際にクズなことには違いないが。

それに、はやりさんを狙っているはずなのに、他の女性にも目を奪われ、そちらで抜くこともある訳で、男としてはおかしくないと思うかも知れないが、純愛どころか恋愛のれも字もないような汚れっぷりなので、正直、まともな人と接していると俺がおかしいんじゃないかと思う。

とどのつまり、俺は結局、性欲で相手を選んだどこにでもいるようなクズ男で、やれる相手がいれば迷わずやっちゃうような、典型的なダメ男なのだ。漫画でよくいるようなラブコメ主人公にはなれない。ヒロインの美少女からのエロい誘惑とか、2秒で落ちる自信がある。なんなら、なんで拒否出来るんだとムカつきすらする。こいつらイ○ポなのかと。

だがまあ、リアルな関係の中で下心満載の行動は取れない。ましてや腐ってもプロ雀士。人気商売でもあるのだ。酷いことは出来ない。

とはいえ最近ではプロ界限でも重婚したり、浮気相手との子供を腹に宿しながら対局するような、何とも言えない事だつてある。この国の風紀は色々とおかしいのだ。いやほんと。

そのせいで女性同士で恋愛する人も増えてきているとかで、なんとも止めてほしい。ただでさえ有り余る男性の孤独死が加速する。いや、羨ましかったよな、重婚したニユース。俺も両手に花といきたいものだ。はやりさんと……良子でも、まあ、いい。もしくは佐藤アノウンサーとか。野依プロとか。三尋木プロなんかも趣があつて良いかも知れない。ロリと巨乳を侍らせるってロマンだよな。

「それじゃあ今日はよしこちゃんのシルバーシューターとルーキーオ

ブザイヤーを祝って——……かんぱーい！」

「……乾杯」

「チアーズ、です。二人共、ありがとうございます」

そんなクズみたいなことを考えていると、はやりさんの音頭で祝いの食事は始まった。ああ、2人の純真な笑顔が眩しい。こんな時にエロい妄想するとか、俺って本当に最低のクズ。でも乾杯した時に2人の胸がたゆんつと揺れたのは最高だった。やっぱりクズいな。

「えへへ、よしこちゃん。あの対局はすごかったね☆ はやり、感動しちゃった」

「そういうはやりさんは最後の対局、やられてましたね。良いやられっぷりでした」

「はやっ!? あ、あれは咏ちゃんが一枚上手で……う、うう、思い出したらちよつと悔しい……」

「あー……あれは三尋木プロ、うまかったですよね。でもはやりさんも、当たり牌何枚も抱えながら振り込まなかったじゃないですか。あれはしょうがないですよ。三尋木プロ、あの対局だとかかなりノツてましたしね」

「そうだよねっ。ほら、東郷くんはそう言ってくれてるよ、よしこちゃん！」

「いやー……まあいいですけど。そう言う仁はどうなんですか？ 来シーズンは一軍に上がれそうですか？」

「東郷くんなら大丈夫だよっ。一番最近の試合だと、結構調子出てきてたもんね？」

「……あ、あー……そ、そうですね……はい。来シーズンは頑張りたいです」

食事が始まってしばらく、3人の麻雀プロ。いや、元プロが混ざったその席だと、話題は必然的に麻雀の話になる。

そうになると、不意に良子が俺にとっての激痛な話題を振ってきた。はやりさんもそれに乗っかってきて、俺はそれに答えざるをえなくな

るが、なんとかはぐらかす。はぐらかせたと思いたい。

だが良子は眼を細めた。やばい。そう思ったのも束の間、やはり問いかけてきた。

「……もしかして、また何かあったんですか？ 先程から時折、上の空になっっていますよ」

「……いや、それは……」

「もしかして悩みとか？ もし話せそうな事なら遠慮しないでね☆」
「う、うーん……」

2人のその問いかけに、俺は悩む。

いや、どの道バレることであるため、今言ってもいいのではないか
と思い始めてるのだ。

後でバレて、なんであの時言ってくれなかったの？ ってなったらそれはそれで困る。優しいはやりさんと、なんだかんだで優しい良子だ。後で凄く怒られそうだし、はやりさんくらいになると悲しんでくれそうなのが更に困る。

だから今言ったほうがダメージは少ないのではないかと思った。
だから俺は、おそろおそろそれを口にする。

「いや、まあ……ついさっきの事なんですけどね……」

「うんうん☆ それで？」

はやりさんが笑顔で先を促してきたので、俺は告げた。苦笑気味に、

「……チームから、戦力外通告を受けてしまいました……ははは、いやー、急すぎて笑えてきますよねー……」

「なーんだ。そんなことだったんだ！ それならはやり……え？」

「………は？」

2人の表情が、動きが、空気が、固まる。

やってしまったと俺は思う。分かっていたことなのに。

俺が自嘲気味な笑みを浮かべることしか出来ないでいると、はやりさんが驚愕の様子で前のめりになって言った。

「そ、それって大丈夫なの!?! って、大丈夫じゃないよね!?!」

「……なんで先にそれを言わないんですか？」

やはりこうなった。良子の視線が痛い。やはりさんはエロいや、前のめりになると谷間がめっちゃ見えるから止めて欲しい。

「ほ、他のチームとかに移籍は？ 誘いとかないの？」

「……プロテストを受けて別のチームに入るという方法も無くはないですが……」

「……まだ何も考えてないんすよね……何分、つい先程のことなので……とはいえ、今の俺がプロテストに合格なんて……」

いや、まあそれも考えなくはなかったが、ただでさえ狭きプロの門。地方の独立リーグとかならワンチャンあるかもしれないが、トップチームに入れるなんて夢はないだろう。それが出来るなら俺はとっくに一軍にいる。

だからまあ、思う。2人が心配してくれているのが分かったからだろうか。少しは前向きになれる。活力が湧く。

「……でもまあ、幸いにも貯金はまだあるし、元プロってことでコーチとかの道とかも無くはないし、その辺りを考えてます。まあ、それが無理なら、適当に……最悪、実家に戻ればいいし、生活に困ることは……」

「そ、そうなんだ……」

「……………」

やはりさんが困ったように頷くが、良子の方は無言だ。

その場の空気が暗いものになる。こうなるとさすがの俺も、エロい妄想で現実逃避なんてしてられない。

何か明るい話題があればいいのだが、それもない。なんだろう。最近、やはりさん似のAV女優を見つけてそれでシコったんだけど、ありえないくらい濃いのが出たとか？ ——口が裂けても言えないことを思いつくとか、さすがだな、俺。

いやほんと、本物のはやはりさんとは比べるべくもないってのに、失礼な話だ（そういうことじゃない）。

ともあれ、自分から明るく何か言っても空元気に見えそうでも何も言えない。場合によっては余計に空気が落ち込みそうだし。

そんなことを考えていると、はやりさんは思い出したように両手を胸の上で叩いて言った。

「そうだつ。麻雀、しよつ?」

「え、麻雀?」

「うん。ここのお店、奥に個室の麻雀スペースがあつてね? 後で軽く打とうかなつて思つてたの!」

いきなり何を言い出すんだこのエロ可愛い人は、と思つたが、そうだったのか。まあ、それほど悪いチョイスではない。

麻雀をすれば、相手の心や、考えていることが何となく分かったり、打ち解けてしまつたりすることがある。プロ雀士である俺達にとつて、麻雀とはただの競技の一つではない。

「……そうですね。オーケー。そうしましょう」

「決まりだね☆ それじゃあ店員さん呼ぼつか!」

良子も頷くと、はやりさんは立ち上がつて早速店員に雀卓が使えるかを聞きに行った。

結果は大丈夫だつたようで、俺と良子も直ぐに立ち上がり、はやりさんの後が続くと、そこには自分の家のワンルームほどの大きさの個室に、慣れ親しんだ自動卓が置かれていた。

3人で席につく。卓をサイコロで決めることは敢えてせず、皆思い思いの席に座つた。

「えへへ……3人で打つの、久しぶりだね」

「……そうですね。前に打つたのは3ヶ月ほど前でしたか」

「あー、確かそうだったかな……」

その時は、俺が最下位だつた。いや、というか大体いつも最下位。最下位以外を取つたのは、2回か3回くらい。それも、良子がプロに入つて直ぐの時の事だ。

今では良子も立派なトッププロ。高校時代よりもかなり腕を上げているし、はやりさんの方は言うまでもない。

俺では勝てるはずのない2人。持つ者と、持たざる者の差。

今回も、俺はそれを痛感することになる。

——はずだったのだが、

「オーラスだね」

「はやりさんがトップですか。なんとかまくりたいところですね」
「いやあー……相変わらず容赦ねえなあ……」

三麻を始めてしばらく、オーラスとなり、今の順位ははやりさんが一位で良子が二位で8000点差。

そして俺はそこから更に1万点ほど下がり、最下位。
ここまですべて通りだ。

故に今回も負けるなあ、と気軽に打っていると、配牌が終わる。それを確認して心で思う。

……九種九牌かあ……何とも言えねえー。

三麻だし、さつさと北抜いとくか、とも思うが、どうだろう。逆転するならそれなりに高い手を作らなければならないが。

……ダメ元で国士でも狙ってみるか……。

九種九牌とはいえ、国士無双はそんなには出てこない。まあ役満の中ではそれなりに上がりやすい方かもしれないが、プロになってから役満は一度も上がったこともないのだ。学生時代や非公式のこういう対局でならそりや和了ったこともあるが、やはりプロ相手だと中々厳しい。

そこでふと、何かが降りてきたように思い出す。

そういえば、さつきの老婆が言ってたな……役満で上がると、女性から惚れられるとか——はっ、そんなことあるかよ。

あつたら苦労しない。というかもそんなオカルトがあるなら全力で役満だけを狙う。役満狙いはキツイとはいえ、それだけを狙い続けければ絶対に無理というほどでもない。今まで何度も対局してるし、一回くらいなら可能性があるかもしれない。

そしたら今頃、この2人は俺の性奴隷も同然な訳だが……。

我ながら、どうしようもない妄想をしてしまう。まあそういうエロ同人やAVの設定みたいなオカルトがあればの話なのだから仕方ないだろう。少しくらい考えてみることは。

この世にオカルトがあることは知っていても、自分が持っている訳もなければ、そんな都合のいい力がある訳でもない。

でもまあ、最後にこの2人相手に役満決めて終わるってのも、気持ちいいかもな……。

と、珍しく哀愁を感じるようなこと思ってしまう。自分でも引く。気持ち悪い。俺はそんなキャラじゃないだろう。

ともあれ対局は進む。山からツモり、一九字牌以外を捨てていく。——するとどうだろうか。

……マジで来やがった……：国土無双十三面待ち！

七巡目にして最強とも言える待ちが完成してしまった。国土無双で特定の牌を待つ場合だと、なんだかんだで上がれないことも多いが、十三面待ちは十中八九上がれる。どんだけ振り込まないことで定評のあるはやりさんやオカルト満載の良子とはいえ、この上りを阻止することは中々難しい。

なにせ振り込まなくとも、さすがにツモる。ここまで来たらツモる運命なのだ、と思うとやはり、

「——ツモ！ 国土無双、役満！ まさかの逆転勝ちっ！」

「！」

柄にもなくテンションが上がってしまう。いや、それほどにこの2人相手に役満。そして逆転勝ちなど凄いいことなのだ。

最後の最後にきつと、神様が恵んでくれた奇跡だろう。いや、うん。これで少しは胸を張って生きていける。あのトッププロにも勝ったことあるんだぜ、と。

「いやあ、最後の最後にこれとか、さすがに出来すぎな気がしますよねえ——つて、どうしたんすか？」

喜んで調子に乗ってみたのだが、2人の様子がおかしい。

役満をツモられて放心した？ よく分からないが、2人がこちらを見て驚いたまま固まっている。

なんだろう。そんなに俺が役満を上がること、もとい、2人から勝ったことが珍しいのだろうか。いや、確かにそうなのだが、そんな

に驚かれるときすがに傷つくな……どんだけ雑魚だと思ってたんだ。雑魚だけど。

「ちよつとお二人さん？ そんなに驚かれると、さすがに俺も傷つくだけど……」

「——え？ あ、うんつ、その、ご、ごめんね☆ 役満なんて久しぶりに上がられて……はやり、びっくりしたなー！ ね、よしこちゃん？」

「——あ、はい……そうですね……仁も、やれば出来るじゃないですか。いつもこうなら今頃はトッププロですよ」

「それが無理だからプロ落ちしたんだよ！ 心を抉るようなこと言うんじゃないねえ！」

中々に傷つくことを言ってくれる。確かにいつもこうならプロ落ちすることなんてなかったが、麻雀はなんだかんだで運要素も大きい競技。今が実力ではなく、ただの運であったことくらいは理解している。

2人はそんなに俺の役満が珍しかったのか、妙に俺の方も見ていたが、それほどか？ 良子なんかは子供の時に何回も見てると思うが。

「……東郷くんが勝つたし、今日はここで終わりにしとかない？」
「……そうですね」

「あれ、いいんですか？ 俺に気を使うことはないですよ？ まだ始まったばかりですし、もうちよつと打つても……」

「ううん、大丈夫！ その……あ、東郷くん、今日は車？ 出来れば、はやりをホテルまで送ってほしいんだけど……大丈夫？」

「……私も、送ってください」
「ああ、はい。それは勿論。じゃあ、行きますか？」

どうやら二人共、俺に気遣ってここで終わってくれるらしいが、いや、調子が出てきたのでちよつとくらい続けてもいいとは本気で思っていた。最後に負け越すのは分かりきっているが。もう少し調子に乗らしてほしい。

だがまあ、いつものこととはいえ、はやりさんにホテルまで送ってほしいと言われると、男としてちよつとテンション上がる。周りに自

慢出来そうだ。ふふん、俺、瑞原はやりとホテルに入ったことだつてあるんだぜ？——普通のホテルだけだ。しかもただの送り迎えだけだ。悲しいが、それ以上を望めないのは理解しているので妄想で我慢しておく。

故にお会計を済ませて（一番年上で稼いでいるからとはやりさんが。女性に奢らせる甲斐性のない俺を蔑むような眼で店員が見ていた）外に出ると、車があるパーキングまで移動し、2人を車に乗せて、2人が泊まっているホテルへと向かった。

だが、

「……良子に、はやりさんも、大丈夫ですか？」

「う、うんっ。大丈夫だから気にしないで。あはは……今日はちよつと熱いかも……」

「そうですね……今日はホットな感じですよ……」

いや、年も明けたとはいえ、まだまだ真冬の季節だ。最近の日本は温暖化だったりするし、今日も確かに比較的暖かい方だとは思いますが、さすがに熱くはない。

だがまあ、もしかしたら規格外のおっぱいを持つ2人だし、熱かったりするのかもしれない。熱が籠もってるというか。熱々のはやりパイとか、物凄く美味しそう。むしろぶりつきたい。そんな感じのおかし作って商品化したらネーミングだけで爆売れするんじゃないだろうか。麻雀連盟、はよ。なんなら俺が陣頭指揮を取ってもいい。

「……んっ」

うっ、おお……!? 今日最高か？

車を運転しながら、2人のことを心配していると、助手席に座るはやりさんが胸元をぱたぱたと掴んで空気を入れるように動かし始めた。

その動きに合わせて、はやりさんのそのたつぷりと実った胸がたゆたゆと揺れるし、上から深い谷間を覗かせてくれる。

シートベルトを装着し、パイストラ状態になったはやりさんの胸は、よそ見運転を余儀なくされるほど強力で魅惑的だ。危ないから今はやめて。

しかしいつもながら無防備だが、今日は特に無防備だ。あんまりエロいところを見せられると、未練が凄くなるからやめてほしい。

そんなことを考えていると、ホテルが見えてきた。名残惜しいが、はやりさんの時間もここまで。良子とも、これからはあまり会わなくなるかもしれない。

だがそんな時だ。はやりさんがこちらを見て、

「……あの、東郷くん。良かったらちよつと上がっていかない？」

「えっ？　上がってって、ホテルの部屋につすか？　さすがにそれは……」

最高だが、下心を出すとアレなので難色を示す。好意のない相手からの下心ほど気持ち悪いものはないって昔学んだ。悲しい。

だが後部座席に座る良子も、

「グッドですね。もう少し、喋りたかったところですよ」

「……良子まで珍しいな。いやまあ、そこまで言うなら……」

と、俺は結局了承する。

最後の最後くらい、こんな時間があつてもいいだろう。正直、手を出せない状態で部屋に上がるとか、ただの拷問でしかないのだが。

俺は自分で自分に許可を出し、ホテルの駐車場に車を止めて上がっていくことにした。

「中はこんな感じなんですね」

「少し広すぎるかな？」

「1人だと、もうワンランク下でも十分ですよね」

部屋に着くなり、その部屋の広さ——とはいえ、めちやくちやに広い訳でもないが、1人で使うには広すぎる部屋に驚く。

やはりトッププロにもなると違うものだな……と、染み染みと思う。俺も、順調に成績を上げて一軍になっていけば、軽い地方巡業でもこんな上等な部屋に泊まれたのだろう。

俺ははやりさんの後ろに続いて部屋に入り、近くの椅子にでも腰掛けようとして、止められる。何事かと思うと、はやりさんがベッドに

腰掛け、その横をぽんぽんと叩いて、

「東郷くん、こっち座って?」

「っ……」

思わず喉を鳴らしてしまう。

ベッドに座るはやりさん。普段から身長差で見下ろす形になる華奢で可愛い人だが、こっち座ってベッドに座った彼女を見ると、それだけで堪らない気持ちにさせられる。

しかもベッドに座り、隣に座つてと誘われるなど、今直ぐにでも押し倒したいくらいだ。

だがそれは出来ない。というか背後から、

「……何をしてるんですか。早く座ったらどうです?」

「あ、ああ」

良子がいつもの調子で、こちらを軽く押しして座るように促す——が、いつもなら無防備なはやりさんを注意するところな気もする。

しかしまあ、たまにはいいのかもしれない。3人だと、間違いが起ることもないと考えているのやも。

だがそう思つてはやりさんの隣に、少し距離を置いて座ると、はやりさんは即座に距離を詰めてきた。

「よいしょっと」

「っ」

距離が近い。近すぎる。

はやりさんが詰めてきた距離は、まさしくこちらとの距離を埋めるもの。太腿がくつつき、こちらの腕と彼女の肩が触れ合う。

というか、その大きな膨らみも、後少し近づくだけで押し付けられそうになり、

「それでは、私はこちらに」

「っ……」

ちよつとだけ身体を逸らそうとすると、今度は良子が自分の右隣に座ってきた。

しかも、はやりさん同様にかなり距離を詰めて。その引き締まった太腿が触れ、はやりさん程ではないが、それでもかなり大きな胸が押

し付けられそうになる。

「……く、あつ……これ……なんだ……？」

2人の身体の感触。女性らしい柔らかさと瑞々しさに満ちた感触を感じ、2人の匂いまでもが鼻孔をくすぐる。

触れ合う距離に誰もが羨むような爆乳美女を侍らせるような形になり、身体が勝手に興奮しかける。

変な、引き攣った笑みが出そうに、いや、実際に出てしまいながらも、俺は平静を保つようにして2人に声を掛けた。

「い、いやあー、はやりさんに良子も、距離が近いですね？　なんかキヤバクラにいるみたいな気分ですよ」

ちよつとふざけた感じでそう言ってみたが、

「……キヤバクラ、行ったことあるんだ……」

「……初耳ですね」

「……あ」

しまった。つい口を滑らせてしまい、2人のジトツとした視線を感じる。それから逃れるように、

「い、今のは言葉の綾……ってことにならないですかね……？」

「……キヤバクラって、女の子とお酒呑んだりする、ちよつといかがわしいお店だよね」

「は、はい……まあ、概ねそんな感じで……」

別に普段から通ってる訳じゃないが、たまにはそういう気分の時もある。だから許してほしい。

だが2人のその視線は逸らされることはなく、

「……女の子と、エッチなこととか、したいの？」

「うっ、それは……」

「……仁はスケベですからね……」

「よ、良子。余計な事を言うな」

俺がスケベっていうか、男性が皆スケベなんだ。だから俺は悪くない。というかいい加減にしないと襲ってしまう。2人を両手で抱きしめてそのまま押し倒し、妄想の中でしか出来ないような欲望の限りを

尽くしたいと思ってしまう。

正直、もう己の股間は2人の爆乳美女の無自覚(?)な誘惑に半勃ちしてしまっている。

股間がムズムズしてしょうがない。このままだと完全に起立してしまっだろうし、はやりさんも、エッチとか口に出すのはやめてほしい。破壊力が凄い。牌のお姉さんの顔を赤らめて上目遣いしながらの、エッチなことしたいの？ 発言は、冗談抜きで売れる。抜ける。その発言を聞いただけで、血が集まるのが分かった。

というか、さつきからのこの状況、まさかなのか？

「……俺は……まあ、どうでしょうね……まあ人並みにと言いますか……全く考えないといえば、嘘になりますか……」

一応、誤魔化しとしてそう言った。

だがその直後。

「……それじゃあ、その………はやりとか、どうかな？」

「え？」

「！ はやりさん……！」

なんか、凄まじいことを耳にした。直ぐには理解が及ばない。

だが次に来る感触には、否応にも理解させられた。

「……はやりは、東郷くんのこと……好き、だよ……？」

「え、あ……っ」

はやりさんは首に手を回し、少しずつ近づいてくる。

ゆっくりと抱きつき、真っ先にその盛り上がった部分が胸板に押し付けられ、柔らかく形を変えて押し広がる。

ドクドクと股間に血が集まっていくのを感じながら、近づいてくるはやりさんの顔。とても綺麗で、可愛く潤んだその表情。それが近づき、

「はやりと……エッチなこと……しよ？」

そう言って、はやりさんは俺の唇に、その柔らかく瑞々しい唇を、押し付けてきた。

初めての3P

「ちゅっ……はあ、んっ……」

「っ……あ……」

はやりさんにキスをされた。あのはやりさんに、キスをされた。

2回思った、と思う前にまた思った。何回自覚するんだって思われそうだが、だってしようがない。

今、俺の身に何が起きてる？

はやりさんの部屋のベッドで、左隣に座ったはやりさんから、突然好きだと言われ、潤んだ表情のまま唇を重ね合わせた。あり得ないくらいに、柔らかい。しかも滅茶苦茶いい匂いがする。

頭がクラクラする。正直、俺が知ってるキスとは別次元のものだ。

キスはしたことあるし、こうやって女性と抱き合ったことだって、当然ある——が、それは、こう言っては相手の女性に悪いが、はやりさんとは比べ物にならない相手だった。

しかし経験があることには変わりない。だからこそ、キスだけでそれほど感じる必要も興奮する必要もない——なんていうのは甘い考えだ。

さつきも言ったが、この人、滅茶苦茶唇が柔らかい。いや、厳密に言えば、全身柔らかすぎておかしい。触れた部分がふわりと柔らかく、それでいて確かな質量を持って俺の身体にその形を伝えてくる。

その最たるものが、胸板にたっぷり押し付けられてるはやりさんの爆乳。俺の服とはやりさんの服。幾つかの布を隔てているというのに、もう、なんだこれ、語彙が無くなりそうなくらい柔らかく、それでいてしっかりと押し返してくるような、触れた俺の胸板で滅茶苦茶主張してくる。

だというのに、はやりさんは物凄く華奢だ。細身の俺、身長172センチ（公式プロフィールだと175センチ）の俺とは上背が20センチ近く違う。故に身体は全体的には小柄。肩なんかは細く、抱きしめればおそらく俺の腕の中にすっぽり埋まりそうな華奢さなのに、胸だけは身体からはみ出るくらいに大きいとか反則ではないだろうか。

さつきから、胸板に押し付けられることで広がり、胸だけは身体の面積に釣り合わないほど広く押し付けられてるので、その大きさが分かって酷く興奮する。

後、やつぱ滅茶苦茶可愛い。慣れてないのだろうか。ちゅっちゅとキスをしてくるはやりさんの色んな感触に堪らず、目を開いて彼女の顔を間近で見たが、キス顔可愛すぎでは？唇をちよんと控えめに突き出してキスを続けるはやりさんは、年上のお姉さんという感じはしない。精々大学生くらいか、正直高校生でも通じるだろう。それくらい、慣れていない。

そして慣れてないはずなのに、色々としてこようとするのはどうしようもなく愛情を感じて頭が熱っぽくなる。軽く舌で舐めると、ピクツと肩を震わせながらもそれを受け入れた。そして思った。この人、唾液まで甘いか本当に人間か？女性とはいえ、別に唾液は無味無臭。もしくは、ちよつとは匂いはするものだが、それは人間として普通だ。別に女性に幻想を抱いてはいない。だというのにはやりさんは全身、どこからも控えめな甘い匂いがして、どこもかしこも華奢で女性らしいのに、丸みをしっかりと帯びて柔らかい。ガキの頃に夢見た女性の幻想を具現化したのではないだろうか。それとも、美少女や美女は皆こうなのだろうか。

そして、服を着てのハグとキスだけでこれである。全裸で何の布も隔ててない状態だとどうなるのか。ちよつと想像がつかない。

「んっ……はあ……」

やがて、顔が離れ、キスを一旦やめると、身体の感触も少し離れる——のだが、普通は。ちよつと離れただけじゃまだ胸が当たってるから、離れたことになってない。この人、実はサキユバスか何かだったりしないだろうか。幾ら何でもエロ過ぎる。

「はやや……キスって……凄いだね……♡」

「は……初めてなんすか……？」

「う、うん……でも、凄く頭がぼーつとして、その……えへへ……♡」

何が、はやや、だ。何が、ぼーつ、とだ。何が、えへへ……、だ。この人、27歳だつてのに萌えキャラみたいなあざざといこと言いやがっ

て。クソ可愛いから困る。本当に年齢詐称してないんだろ？

というか、だ。やはりさっきの言葉を信じられない。今更だが、さっきこの人なんて言った？

「……俺のこと、好きって……本当ですか？」

「……うん……その、結構前から……」

「ま、マジっすか……」

本気なのか。本気で言ってるのか。

夢か何かと思うが、そうではない。これは現実。

嘘である線もたどるが、やはりさんはこちらを見て、凄く顔を赤らめ、今にも顔を隠してしまいそうなくらい滅茶苦茶恥ずかしそうにしている。嘘には見えない。女性は生まれながらの女優とはいえ、この感じは嘘じゃない。決して多くない俺の特技だ。高い確率でそれは見抜ける。

つまり本当だと言うことだ。さっきの言葉も全て。

つまり俺は、やはりさんに想われ、そしてこのままエッチなことを……。

「……夢か何かか？」

「——ドリームじゃありません」

「っ、良子……そういえば、お前も——んんっ!？」

「わわっ、やっぱり、良子ちゃんも……」

右から声を掛けられ、そういえば良子もこの場にいることを忘れていたと、振り向くと、その直後に唇に柔らかい感触。身体にも柔らかい感触。2回目ともなると、さすがに何が起きたかは分かる。良子からもキスされたのだ。

「んっ、ちゅっ、はあ、んちゅ……♡」

「ん、っ……よ、良子……ん、ああ……」

良子からのキス。こっちは更に情熱的だった。

口を開き、舌を懸命に伸ばして、こちらの口を、舌を絡めようとしてくる。こっちもされたことで条件反射気味に口を開いて受け入れたのだが、またこいつも唇はびつくりするくらいふわふわだし、口中はほのかに甘いし、別次元の生き物だった。従姉妹なのだから俺も

実はそういう体質だったりするの？　と思うが、風俗で体験した時、相手から特に何か言われた覚えもないし、なんならやりすぎて引かれた気もするのでそんなはずもない。これは美女特有の能力だろうか。

そしてまた、良子も、はやりさんには負けるが、その実りまくった胸を、こちらの胸板に押し付けてくる。抱きつくだけで胸を押し付けることになる女ってズルい。巨乳ってズルい。どう足掻いても興奮させられてしまう。

良子のはやりさんよりも身長は高く、スラッとしたスレンダー体型——だというのに、これまた胸だけは大きい。女性からしたら殺され——ることはない。むしろ憧れの目で見られる。良子はちよつとミステリアスでクール系。実際は結構素直で普通、マイペースだが、割と常識的な性格をしているが、周囲から見た印象はやっぱリステリアスな美女。イタコで海外の傭兵って噂が上がってるのを見た時は笑った。

だが良子も、そのスレンダーな身体は触れる箇所全てが引き締まっ——ていて、それでいて女性らしい柔らかさに満ちている。スレンダーと表現はしたが、出るとこ出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる、美しいスタイルだとも言えるだろう。

それと、普段からそれほど表情を変えないというのに、今の良子は瞳を半開きにし、頬を染め、どこかうつとりした様子で抱きつき、キスをしてくる。

そして何よりだ。ちよつとこの状況は理性が死ぬ。

「はやや……すごい……」

何しろ、良子から抱きつかれ、キスしている間にも、はやりさんは俺の左側から俺に抱きついていてる。

多分だが、これを仮に他人に言っただとしても伝わらない。もしくは妄想で補完してもらうしかないが、両側から女性に抱きつかれているというのは、単純に倍で計算出来るような気持ちよさではない。

ただでさえ、気持ちいい、可愛い爆乳美女が2人。1人だけでも抱きつかれキスされるのは夢見心地だと言うのに、2人に抱きつかれ、

その胸を押し付けられているのは、もう興奮しすぎる。

人気の女性プロ雀士2人。確か最近だと、2人で写ってる水着グラビアなんかも掲載されていたはずだ。

日本中にファンがいる、大人気の牌のお姉さんとスーパーキーの2人が侍ってる。2人の女体を、同時に身体で感じている。

はつきり言おう。もう股間はヤバイ。

まだ触れられてもないというのに、俺の股間は既にギンギンに勃起し、おそらく先走りを零しているだろう。

股間がムズムズする。触られてもないのにこれだけの快感を、セックスの予感を感じさせられると、快感を得たくてもう腰が動いてしまう。

もうヤバイ。もう2人を抱きしめて押し倒してしまおうか——などと思っていると、良子はそこで唇をようやく離した。

「はあ……はあ……これ、は……グッドですね……」

「っ……お前……なんで……いや——」

「……私も、ラブだということですよ……」

問おうとしてそれを止めると、その先を自ら口にした良子。

マジか、と従姉妹からの告白を、というか、俺達従姉妹なんだけどいいのか？ と問うこともなく考えていると、左側のはやりさんが、

「……よしこちゃんも、東郷くんのが好きだったんだね……」

「……そうですね……はやりさん……どうしますか……？」

いやほんとだよ。自分の事ながら、なんなんだこの状況はと思う。

だけどだ。正直、この状況だと俺は収まりがつかない。

だからその後ののはやりさんの発言は、俺にとつて渡りに船だった。

「……東郷くんは、どうしたいかな？ その、やはりは、東郷くんの願いを、叶えてあげたいかなー……って……」

「俺の願い……」

はやりさんが頷く。首を抱く腕の力が強まり、更に強く抱きしめられる。そして、

「東郷くんを、慰めてあげたいから……」

「……そうですね……仁が、したいなら……」

そう言つて、2人は俺の顔を、俺の顔から下に視線を向かわせた先にある、起立した股間をちらりと見て、

「……3人で、する……?」

「これももう、我慢出来なさそうですね……」

「う、ぐっ……二人、共……っ!」

それぞれの右手と左手が、俺の股間のテントに、おそろおそろと手を伸ばした。

2人の、男と比べてとんでもなく華奢で小さいすべすべの手が、ズボンの上からとはいえ、俺の股間を撫でているのだ。

欲望の炎が一気に燃え広がるのが分かる。分かっているけど、抑えきれないこの衝動。

俺は両手を動かした。

「3人でほしい……!」

「あんっ、と、東郷くん……♡」

「んっ、仁……♡」

両手でそれぞれ2人を抱きしめると、先程までもすごかった2人の身体の感触が更に強くなり、2人がその衝撃に、肉棒をきゅっ握ったので、それがまた気持ちよすぎた。

もうクズだのなんだの思ったとしても言つてられない。というかこの2人を抱けるのならクズでも構わない。

そう思つて、俺はもう性欲のままに口と手を動かした。

「二人共、脱いでくれ……俺も、脱ぐから……!」

その提案を、2人は目を見合わせながら、こくりと頷いてくれた。

「……よしこちゃん、いつ見ても綺麗だよね。憧れちゃうよ」

「はやりさんこそ、小柄でキュートなのに、胸は凄く大きくて、素敵だと思います」

いやもう、二人共たまらないけど……。

2人が一度離れ、服を脱ぎ捨て始めると、お互いの身体を見て褒め

あっているが、ぶつちやけどつちもたまらない。この2人のストリップショーが見れるなら、家とか建てれる金額を払う人も、中にはいるかもしれない。

それに、この後やることを考えるとだ。

「二人共、ヤバい……早く、脱いでみせて」

「東郷くん……すつごい見てる……そんなに見たいんだね」

「特に、バストに視線が来てますね……」

それは当然だろう。見ない訳がない。

無論、他の部分も見てる。二人共、腰が滅茶苦茶細いし、お尻だって女性らしく丸みを帯びていて、はやりさんはとても柔らかさそうで、良子は引き締まっている。

肌にはシミ一つない。それまでが、2人のストリップの途中までの感想だ。

後はおっぱいを見るだけ。2人の、グラビアでも強調される2人の乳房。

「……東郷くんは、やっぱり、おっぱいが好き？」

「好きです——が、よく分かりましたね……」

「いや、すつげー分かりやすいですよ……？　今とか……」

はやりさんの照れながらの質問、そして良子の呆れ気味の声に、俺は馬鹿な、と少しショックを受ける。普段は結構注意していたはずだが、

「普段からそんなに、わかりやすかったですか……？」

「そんなことはないけど……今はすつごく見てるから、好きなのかなーって」

「私は気づいてました」

「良子は……まあ、うん。そうかもな……」

昔からの付き合いだし、バレていても不思議ではない。だからスルーする。

というかその間も、後はおっぱいを残すのみとなったストリップショーに、俺は我慢ならなかった。

「……東郷くんがおっきいおっぱいが好きで良かった」

「そうですね」

「うっ」

はにかみながらのその台詞は中々に心に響いた。いや嘘、チンコに響いた。

2人が自らのおっぱいをもにゆつと確かめるように触ると、その柔らかさを想像出来るようで、股間がギンギンになる。さつきからギンギンだが、見るだけで興奮させ、気持ちいいとは恐れ入るものだ。

2人が服に手をかけていくと、俺も喉をごくりと鳴らす。

そうして2人が服を捲くりあげ、あるいはボタンを、ぷち、ぷち、と外すと、とうとうおっぱいがまろび出てきた。

「どう、かな？」

「お気に、召しましたか？」

2人が生まれたままの姿で、その美しく、エロ過ぎる女体を晒している。

はやりさんは、右手で左手の肘を掴んで少し恥ずかしそうにもじもじと身体を揺らしながら。

良子もこちらからチラチラと視線を逸らしたりして、その行いに照れているようである。

妄想の中で何度も犯したその極上エロボディは、想像よりも遥かに美しく、興奮を駆り立てるものだった。

「はあ、はあ……最っ高、すぎる……!」

思わず肉棒を更に、過去最高にバキバキにさせ、息を荒くしてしまふ。

いや、この状況はちよつと無理だ。理性を壊される。

この2人と3Pって、なんだ俺は。天国か？ 前世でどんな徳を積んだんだ？

俺みたいな普通の人間が、プロをクビになったような男が、グラビアアイドルとしても活躍するようなトッププロ2人の裸体を独占している。

興奮しすぎて喉がカラカラだ。特に、2人のその大きなおもち。おっぱいには目を奪われる。

想像通りの薄いピンク色の乳首。はやりさんの方はちよつぴり陥没気味だろうか。良子はツンと上向きの乳首である。

「二人共、こつち来て……!」

「うん……東郷くん……」

「仁……」

堪らず2人を呼ぶ。ベッドの端に足を広げて座り、すでにビンビンになった肉棒を下着の上から見せつけるようにしていると、2人は爆乳をばいんばいんと揺らしながら近づいてくる。

その2人を欲望の限りに、両脇に抱え込んでみたのだが、その瞬間、俺の息は荒く、理性は崩壊した。

「う、あつ、はあ……はやりさん、良子……!」

「はやあ……おっぱい、掴まれちゃったあ……」

「ほんと、おっぱい好きなんです……ここも、こんなにエレクトさせ……」

2人の背中に手を回し、その誰しもが憧れる爆乳を右手と左手ですれぞれすくい上げるように鷲掴みにして揉むと、異次元の感触を得た。

なんだこれ!? なんだこれ!? こんな、おっぱいって、こんなにも、手がとろけるような感触だったか……!?

比喩なのだが、手が幸せでいっぱいになった。どちらも、俺の男の手では掴みきれないたわわな乳房。

もにゆんつ、もにゆんつ、と右手で良子の、左手ではやりさんのを揉み比べる。どちらも、3桁は越えるのではないかと噂される魔性の乳。特にはやりさんの方は確実にそうだろう。

しかも、2人を抱きしめている。今度はさつきみたいに衣服越しではなく、生まれたままの姿の肢体と、肌を合わせている。すると先程想像した通り、いや、それ以上の柔らかさが密着し、堪らないと声を漏らしてしまう。

俺の太腿を挟み込むように2人の女性らしい柔らかさと熱を帯びた太腿やお尻が密着し、その乳房の片方も押し付けられ、胸板をむにゆむにゆとおっぱいが刺激してくる。男の硬い胸板で、柔らかい2

人のおっぱいを押し潰すのが堪らず、2人抱え込む力を強くするが、2人は嫌がるどころか、興奮し、嬉しそうに身体を擦りつけてきた。そして重量感のある、たわわでいやらしい2人の乳房を揉み比べ。手の形に合わせて形を変える乳肉。はやりさんの方が大きく、ふわふわで極上のマシユマロかパン生地のような感触だが、良子のも俺の掌をいっぱいにし、張りのある乳肉が俺の手を押し返して幸せになる。あり得ないくらい贅沢な2人の乳比べ。乳頭を指で弄ってみるのも楽しく甘美に過ぎる。

もう頭がおかしくなるくらいに幸福感が俺を襲うが、それは終わらない。2人が視線を下に下げ、肉棒を見たからだ。

「男の人の……東郷くんの、こんなになるんだね……すっごく、大きくなってる」

「苦しそうですね……そろそろ、脱がしてあげましょう、はやりさん」
「そ、そうだよ。うん、東郷くん、どうしたらいいか、はやり達に教えて……？」

教える教える。もうめちやくちや教える。

はやりさんのそんなおねだりを拒否することなど今の俺にはありえない。

2人の手が、俺のトランクスのゴムにかかる。そのまま引つかかりに気をつけさせて脱がしてしまえば、ビンビンに反り立つ見慣れた肉棒の姿が。

はやりさんと良子に己の肉棒を見せつける。これだけでも股間には血が集まる。2人は肉棒を見たことはないのだろう。あるいは、あつても父親か、子供の時のものでしかないはずで、初めて見たのが俺の肉棒である。

AVなんかを見ていて、男優の、つまり自分の肉棒とは違うことからちよつとした違和というか、まあ他者の映像なのだから当たり前なのだが、そういうのがある。

だが今は、見慣れた俺の肉棒を2人の前に突き出している。日本人としては一般的ともいえる仮性包莖。密かに平均より大きいのが自慢の17センチにギリギリ届かない程度の俺の肉棒。リアルな自分

のイチモツと2人が、同じ映像の中で並んでいる。

股間はとつくに、極上の雌2人との性の予感を感じ取って、先走り垂らしている。

学生の頃ほどではないとはいえ、まだまだ性欲満載の俺だ。反り返る肉棒を2人に早く弄ってほしいと、たまらなくなつて口に出してしまふ。

当然、密着し、2人の乳房からは手を離していない興奮の極地のままで、

「2人とも、触つて……あ、ああ……！」

はやりさんと良子が俺の指示に従つて肉棒に手を伸ばすと、もう俺は股間をもじもじとさせて快感に喘ぐしかなかった。

「はやや……すごく硬い……♡」

「確か……上下に擦るのだと、聞いたことがあります。試してみましよう」

「上下に……？　こんな感じかな？」

「うっ、ああ……そう、ですが……」

2人が俺の反応を見ながら、股間を弄ってくる。自分の手ではない。すべすべとした女性の手の、慣れておらず、どこが気持ちいいのかわかっていない、だからこそ予想のつかない触れ方をしてくる他人の、爆乳美女2人の手コキだ。

たかが手コキで、と思う人もいるかもしれないが、こんな美女2人に挟まれて揉んでいるだけで気持ちいい爆乳を贅沢に揉み比べしながらのそれを、耐えられる男がいるのだろうか。いるかどうかは知らないし興味もないが、俺は無理だと断定する。

はやりさんが亀頭やカリなどの先端辺りを、しゅっしゅっ、と。良子はその下の幹から根本の部分を擦り、時折袋の方まで手を伸ばしてくる。

「大丈夫……？　東郷くん、ちゃんと気持ちいいかな……？」

「やっぱり、スケベですね……顔が、だらしなくなってますよ」

「あ、ほんとだ……腰ももじもじしてて、なんか可愛い……♡」

そして、2人が俺を至近距離で見つめながら声を掛けてくるのがエ

口くてしょうがない。

くちゆくちゆといやらしい音を自らの手で鳴らしているのに気づいているだろうか。2人の遠慮のない手つき。特に先端部分担当のはやりさん。無自覚にしこしこことカ리를擦ったり、先端を撫でるか。

こみ上げてくる快感に、しかし自分が弄っている訳ではないので、臨界点ギリギリで阻止することなど出来ない。越えても、いつイクか分からない2人は変わらさずしこしここと手コキを続けてくれる。

俺が出来るのは、報告とさらなる欲望の解放だけだ。ただそれだけが口から出る。

「二人共、キスして……!」

「ふあつ、んっ——とうごう、くん……!」

「んんっ——ちゆ、いひなり……!」

2人を強く抱きしめ、密着感を増させる。4つの乳房が胸板に押し付けられ、もう上半身は乳肉に浸かっているようなたっぷり幸せの感触を味わい、同時に2人同時にキスをするという贅沢過ぎる行為。

舌を絡ませ、荒い息を吐き出す中、2人は手を動かすことをやめてくれない。俺には極上の女体を強く抱きしめながら、ただ腰を突き出すことしか出来なかった。

「で、るっ……!! あ、ぐ、うう……!!」

「ちゅっ、んあ、東郷、くんっ♡」

「仁っ……あつ、これ、は……♡」

腰がびくびくと震え、頭がチカチカとする中、精液を彼女たちによって絞り出される。

びゆるるっ、びゆるるっ。びゆるっ、びゅっ。

と、そんな音がマジで聞こえてくるかのような極上の吐精。

アイドル雀士2人によるハーレム手コキ。妄想が現実になるという今まで体験したことのない性の快感に、射精が濃く、そして中々止まってくれない。

しかもまたこの、性経験がない故か、無自覚なこの2人は、

「はやや……はやりの手の中に白いのが出てる……これが、東郷くん

の精液なんだ」

「すっごくいいですね……しかも、まだまだ力チ力チにエレクトトして……まだ抜く必要がありそうですね」

「そ、そんなのかな……でも、しゃ、射精してる東郷くん、可愛い……えっと、好きさただけ、出してね？」

「うっ、あっ、はあ、やばっ……」

良子は何を勘違いしてるのか、しゅっしゅっと根本を緩く抜く中、はやりさんはびっくりしたのか、亀頭を手で包んで射精を掌で受け止めている。プロ雀士の商売道具ともいえる手に、それもはやりさんの掌に受け止めてもらえると知ってか、肉棒もドクドクと跳ねて、嬉しそうに射精をしている気がした。

だがやがて、その射精も落ち着く。荒い息を吐きながら、2人と少し距離をあげるが、別に性欲が収まった訳ではなかった。

「はやり、さん……よ、良子……次は、嫌じゃなかったら……」

「やっぱり、まだ色々あるんですね……私は平気ですが」

「うん、嫌じゃないよ。その、ちよつと恥ずかしいけど、はやり、もつと色々してあげたい……ううん、したい、かな」

一応頭の中がピンク一色とはいえ、問いかけると、2人は全く嫌がることなく、それを受け入れてくれた。

肉棒もまだまだギンギンである。一度出したというのに、衰える気配はない。まだ一度も出していないような感覚である。

まあ自家発電でも、最低2回くらいはやらないと落ち着かないし、時にはそれ以上の時もある。はやりさんと良子という2人の美女相手に、萎える訳がないだろうと、俺は2人に次にやってほしいことを伝える。

「その、おっぱいで……してこないっすか……？」

「おっぱいで……」

「はやりさん。いわゆる、ティッツファックのことですよ」

なんで英語だ。と、さすがに知ってる英語の名称を良子が告げて内心でツッコミを入れる。知ってるのは、そりゃあ海外のそういうサイトも見るからだ。男子の嗜み。

だがはやりさんは知らないのだろうか。まあ知らないよなあ、と思っっていると、

「あ、うん……一応、なんとなくは知ってるよ?」

あ、知ってるんだ。恥ずかしそうなのはやりさんを見て、肉棒が震えた。股間にきた。いやまあ、はやりさんくらい大きいと、さすがにどこかで知ることになるだろう。友人から聞くか、あるいはちよつとした嫌がらせのファンレターとか……は、事務所、チームのスタッフなんかが検閲してるだろうからないとしても、まあ大人だし、幾ら純真でも知ってはいるか。

「はやりのおっぱいで……東郷くんの、おちん……ちん、を、挟めばいいんだよね……?」

また破壊力の高い台詞を言われ、股間にクリティカルヒットする。腕を胸の前で組むと、ただでさえ深い谷間が更に強調されて、期待させてくれる。良子の方も、自分の胸を、もにゅつと持ち上げ、

「私とはやりさんくらいの大ききならイージーでしょうからね。……しかし、どちらが……?」

同時に——と反射的に言いそうになったが、すんでのところでやめておく。いや、順序というものがあるだろう。

まずはそれぞれを愉しみたいものだ。

「それじゃあ……先に、はやりさん、お願いできますか?」

「う、うんっ。その、初めてだから、上手く出来ないかもだけど……」
いやいやご謙遜を。例えテクニクがなかりうと、はやりさんのその乳房に包まれないと思わないファンはいない。

むしろ彼女の初パイズリを頂戴し、なおかつそれを教え込むことが出来る——やっぱ俺、何が起きたんだ? 夢か何か? 都合良すぎで妄想か何かかと思ってしまう。

だが間違いなく現実で、このリアルな空気感が堪らない。

はやりさんが俺の足の間にぺたりと座り込む。やっぱり小柄で、それに見合わぬ大きな爆乳が胸元にはぶら下がっている。いや、改めて観察してみても素晴らしい。普通はこれだけ大きければ垂れたり張りを失ったりと問題が出てくる気がするのだが、はやりさんの乳房は

綺麗な形を保ち、瑞々しささえ兼ね備えている。グラビア写真で見ても前々から思っていたが、美女にはそういった自然の摂理は適用されないのだろう。神の奇跡か。

「それじゃあ……挟んでみるねっ?」

その大きな乳房をやはりさんが両手で抱えてそう言う。いやこちらこそ。対戦よろしくお願いします。

大きな期待に、震える肉棒。いや、さすがにパイズリは初めてなのでちよつと期待が大きい。

しかし実際にはどうたら、と言う声も聞かなくはないので、どうなるかとその光景をまじまじと見る。

やはりさんが胸を持ち上げ、ベッドの端でギンギンに上を向く俺の肉棒に、谷間を被せると、

にゅぷんっ♡

「んしょっ」

「うあつ、あつ……!?!」

肉棒に向かつて、谷間が寄せられると、俺の肉棒はやはりさんの乳谷間の中に消えてしまった。

瞬間、俺は腰を浮かせてしまう。

やはりさんの胸に包まれた感触は、俺の妄想を遥かに越える心地だった。

先程まで、俺の胸板に押し付けられ、俺の手で味わったふわふわもちもちの魔乳。その魔乳に、俺の肉棒は根本から先端まで、ずっぽりと包まれてしまっている。

肉棒の根本、俺の鼠径部にはやはりさんの下乳がみっちり密着している。胸の中の感触は更に甘美だった。

まず、全体的に温かい。やはりさんの胸の中はぬるま湯に肉棒を突っ込んだかのように温かく、それでいてもちもちとしていて、吸い付くような乳圧で硬い肉棒を包み込んでいる。

ただ包まれているだけなのに、じわあ、と漏れそうな射精感を感じてマズいと思う。腰を浮かせたのも気持ちよすぎたせい。そして、あの現役アイドルの瑞原はやりが、そのいやらしすぎるエロエロおっぱ

いで俺の肉棒をパイズリしているという光景に、その事実に興奮しすぎて、それを実感したくて腰を浮かせたのだ。

だがそうしても、俺の肉棒はやりさんの谷間から飛び出すことなく、ただ下乳に腰が押し付けられ、むにゆうっ♡と谷間の形を変えただけだった。

そしてはやりさんは俺が軽く腰を浮かせたのも気にせず、胸で俺の肉棒を抱きしめ、上目遣いで問いかけてくる。

「次は、どうするの……？ 動かせばいいのかな……？」

「うう、あー、あ、そう、ですね……上下に、扱くように、動かして貰えれば……っ」

「上下、扱くように……こんな感じ？」

「あー、あー……そ、そう……それやば……うあつ」

俺の股間の上ではやりさんのおっぱいが、にゅぽにゅぽ♡と音を立てて上下に動かされる絶景を、俺は呻きながら見下ろすしかなかった。

成人した大人として情けない限りだが、時折上を見上げてあーあーと喘いでしまう。気持ちよすぎる。おっぱいとセックスしているかのような。

乳圧だけでもやばかったはやりさんのパイズリは、単調ながらも、ただ動くだけで異次元の快感をもたらしてくれた。

同時に、凄まじい達成感や、なんなら全能感まで感じてしまう。

見下ろした先には、日本中の男性、女性を問わず、その可愛さで大人気の牌のお姉さん。グラビアでも大活躍のその爆乳がたぱたぱと俺の股間の上で揺れている。その夢のような感触に、天井を見上げて溜息を漏らし、軽く腰を浮かせると、胸の中でにゅぷつと擦られ、確かに俺の肉棒が挟まれていることを実感し、再び顔を見下ろせば、一本の長い谷間が俺の股間の正中線と一致し、下乳が鼠径部にぺちっ♡ぺちっ♡と押し付けられる。今日日本で一番幸福な男は俺だろう——そう錯覚してしまうほどのたまらなさがここにある。

自身の性欲求を満たすような行為をするとこんな気持ちになるのだな、とちよつとしたことを考え、しかし長くは持たない。もうイキ

そうだけどまだまだこの乳房に包まれていたいと思っていると、横から、

「よだれまで垂らして……随分と気持ちよさそうですね」

「っ、ああ、良子……」

不意に、良子が横から抱きつき、その乳房を押し付けながら口元から垂れていた俺のよだれを舌で舐め取ってきた。

そうだった。俺は今、はやりさんだけでなく、あの良子ともしているのだ。

はやりさんにパイズリされているというのに、横から全裸で抱きついて、その肌の感触を押し付けてくる良子に、俺の股間の奥が、ドクンと跳ねた。

「れる、ちゆる、ぷはあ……はやりさんに大きさでは負けませんが……ラブでは負けません……後で、もっと気持ちよくしてあげますよ……」

「よ、良子……ああ……っ」

唇にキスを落とすし、たつぷりと愛情を示しながら、上半身を左右に動かし、その爆乳をすりすり擦りつけてきた。

はやりさんには負けるとはいえ、その胸は堪らない。いや、この腕の中に収まるスレンダー爆乳の美女を抱きしめる感触は、はやりさんとはまた別の魅力がある。

だがその一瞬、良子に気を取られていると、

「……はやりも、東郷くんのこと、大好きだから……」

「う、あ……」

対抗心でも出してきたのだろうか。はやりさんが両手で左右から胸を締め付け、谷間の中にある俺の肉棒を挟み潰すようにしてくる。

「はやりのおっぱいで、沢山気持ちよくしてあげるから……さつきみたいにな、いっぱい出して……っ♡」

「ああ、うぐ、はやり、さん……俺、もう……」

「はやりさんの胸の中でエクスタシーするんですか……？　なら、後で私にも出してもらいますからね……♡」

「っっ、う、うぐ、ああ……」

2人が同時に別々のことをしてくる、このハーレム感。

全く受け流すことが出来ない、1人だと体験出来ない天国のような快感に、俺はもう射精することしか頭に残らなかった。

良子を右手で強く抱き寄せ、キスをしながらその胸を左手で揉みまくる。同じ視線の中では、こちらを見上げ、肉棒を魔乳で扱き上げるはやりさんの姿があった。

強く谷間を押さえすぎて、僅かに楕円形の谷間を作ってたぽんっ♡
たぽんっ♡と俺の肉棒を扱き上げるおっぱい。

腰を浮き上がらせ、俺ははやりさんの胸の中で射精した。

「ん、ぐっ……!!」

「っ、おっぱいの中で、震えて……あっ♡」

ドクンドクンと、はやりさんのおっぱいに乳内射精を決める。

腰を思わずぐりぐりと押し付けて、その包まれながらの射精を堪能しようとしてしまうが、はやりさんは谷間をぎゅっつと締めながら、俺の肉棒を包み込んだままにいる。

「はあっ……やばっ、はやりさんの胸に……う、ぐ……」

「気持ちよさそうですね」

「幾らでも、出していいからね？ 東郷くんが気持ちよくなってくれるならばやり、何回だつてするから……」

「っ、は、はやりさん……」

出しきり、谷間から解放され、白い液体に濡れた俺の肉棒。そしてはやりさんの胸の谷間は、俺の精子でいっぱいになっていた。おっぱいの谷間に、精液で出来た橋が作られている。はやりさんのおっぱいを、俺が征服した証だ。

とんでもなく出してしまった。妄想が現実になるとこうなる。それを理解した。

そしてまだ、俺の肉棒は萎えていない。あまりにも気持ちよすぎて、状況が最高すぎて、興奮が収まらないのだ。

次はどうするか。もう一度おっぱいか。それとも啜えてもらうか。もう入れてしまうか。

そう考えていると、横にいた良子が俺の肉棒に顔を近づけていっ

た。

「——ちゅっ」

「っ……………」

「あ、良子ちゃん……………」

何が起きたか。今度もまた、2秒前くらいには理解出来た。

良子が俺の精液塗れの肉棒に、キスを落としたのだ。

従姉妹とはいえ、美女の唇。瑞々しいその柔らかさを先端に感じて、俺は背筋をぞくりと震わせる。

しかも良子は止めるつもりはないようで、

「ちゅるっ、はむっ、れろ、ちゅぽっ……………」

「く、良子、啜えられ、くっ……………」

「すごい良子ちゃん……………東郷くんのおちんちん、啜えちゃってる……………」
そう。はやりさんが言うように、良子は俺の肉棒を口で迎え入れ、慣れない癖にその精液を舐め取ろうとしていた。

出したばかりの俺は堪らず腰をくねらせてしまうが、良子は離してくれない。熱い口内で、肉棒が舌で甘やかされ、ペロペロとしやぶられる。

思わず良子の頭に右手を置いてしまい、征服欲を感じながら撫でてしまう。

すると舌の動きが、気持ち情熱的になった。裏筋をなぞられ、はあ、と息を吐いて喘いでしまう。この女子プロ期待のスーパールキーは、こういうところでも無駄に優秀だった。

ベッドに押しつぶされてはみ出ている乳房や、綺麗な背中から腰、お尻の曲線などを舐め回すように見下ろしてしまう。こうしてまじまじと見ると、やはり綺麗で、そしてとてもいやらしい。

「あ……………良子、それ……………良い……………もっ……………」

「ちゅ……………くちゅっ、んぷっ、はぷっ、じゅる、じゅるる、れろ……………」

「っ、吸い付かれ……………ああ、やば……………」
フェラの快感。懸命にしゃぶってくる良子が普段よりも倍増して可愛く見える。

頭だけでなく、胸や背中、お尻などにも手を伸ばし、ぐにぐに、す

りすりと撫で回し、美女からもたらされる快感を堪能していた。とうか、亀頭ばかりペロペロと舐め回してきやがる。気持ちいいからちよつと待ってほしい。出したばかりなのにもうイキそう。

だがそうしていると今度は、

「……東郷くん……はやり、もう我慢出来ない、かも……」

「っ、はやりさん……」

良子がフェラを楽しんでいる間、いつの間にか精液を処理——まさか舐め取ったのか、普通に拭いたのか——したはやりさんは、左側から俺に近づき、またしても抱きついてきた。

先程楽しんだばかりの爆乳が再び押し付けられ、しかも耳元で熱い吐息付きでこう言われる。

「……はよりの初めて……東郷くんに貰ってほしい……♡」

「っ……」

「ちゆる、んん……っ♡」

そのたまらないおねだりに、俺の肉棒がまた肥大化するのを感じる。しかも良子の口の中で。それがまた絶妙に気持ちよくて腰を揺らしてしまった。ちよつと悪いと思っただが、これでもさつきから我慢出来ているほうだ。腰をガンガン動かしたいのをずつと我慢している。興奮しすぎて、肉棒に刺激がないとムズムズして落ち着かないのだ。

だがそうしてはやりさんと見つめ合っていると、ちゅぽんっ、と良子が唇を肉棒から離し、こちらを見上げて言った。

「なら、私のヴァージンも、貰ってもらいます……」

「良子……だが、俺達は……」

「こんなにギンギンに勃たせておいて、今更そういうこと言うのはノーですよ」

「いや、まあ……」

それを言われると何とも言えなかった。従姉妹とはいえ、俺はずつと良子をそういう性的な対象で見えてきたことには違いない。今も馬鹿みたいに興奮してしまっている。

「3人でするって、言ったもんね……なら——」

「そうですね……だから早く——」

と、2人は言った。

抱きついて、その濡れた太腿を押し付けながら、

——初めてを貰って、と。

その発言に、己の精巣がドクンドクンと跳ねて、精子を作り上げるような感覚を得る。

興奮しすぎて、脳が焼き切れそうだった。

「……駄目と言っても、もう止まらないからな……！」

「いいよ、東郷くん来て……♡」

「仁、贯いてください……♡」

俺は両手を広げて、まとめて2人を押し倒した。

夢のような現実

天国——という言葉は、こういう時に使えばいいのだろうか、と思う。

ホテルのベッドの上。覆いかぶさる形になった俺の腕の下には、2人の美女がいた。

「ん……はあ……見られちゃってる……♡」

「早く、欲しいです……♡」

1人は仰向けになり、はあはあと熱い呼吸を繰り返し、仰向けになっても形を失わない爆乳が緩やかに上下している。

その横では、四つん這いになり、頭を横向きにベッドに置いて、こちらを見上げながらお尻をフリフリと振って誘ってきている。

瑞原はやりと戒能良子。人気女子プロの裸体。

グラビアやテレビでは決して見れない、熱っぽい潤んだ表情と、興奮しているのか、僅かに赤みがかったシミひとつない綺麗な肌。

彼女達が秘部を俺に晒し、俺の肉棒が突き入れられるのを待ち望んでいる。

「はあ、はあ……二人共、綺麗だ……」

「あつ、やあん……♡」

「んっ、そこは……♡」

2回射精しても未だ興奮の極地にいる俺は、右手ではやりさんのもっちりした太腿を、左手で引き締まった良子の尻を撫でる。

どちらも理想の女性と言っている、すべすべとした肌触り。触れるとモチ肌の手が吸い付き、いつまでもすりすりしたり、五指で揉みしだきまくりたくなるたまらない感触を伝えてくれる。

ほんと、やばい。そのたわわなおっぱいだけではない。どこを触っても、この2人は気持ちいい。

それを撫で比べしているという状況も、頭がクラクラするほどに興奮する。おそらく、どちらか1人だろうと夢中になって貪ってしまう最高の美女。

それを2人同時に頂くシチュエーションに、俺の理性も、俺の肉棒

も、もう収まりが効かない。

放置していると猿みたいに腰をカクつかせるか、馬鹿みたいに己の手で扱きあげるだろうが、今はそうしなくていい。

「はあ、っ、ああ、はやりさん、もう、いいか……?」

「や、んっ……う、うん、東郷くん……♡ はやりの中に、来て……♡」

肉棒の先端をはやりさんの綺麗な秘部に擦りつける。特に愛撫はしていないというのに、そこは既にはやりさんの愛液でぐちよぐちよだった。

先端を擦りつけるだけで死ぬほど気持ちいい。はやりさんも感じているのか、身体をピクリと跳ねさせ、気持ちよさそうに目を閉じたり、やんやんと首を左右に振ってるのが可愛くてエロ過ぎる。

そうしてはやりさんに俺の肉棒を挿入する直前、横の良子は少し拗ねたように、

「私にも、後で絶対挿れてくださいね……?」

「っ、あ、ああ……挿れる……! 絶対、挿れてやる……!」

こちらにお尻を向けながら、その綺麗な弓なりな身体のラインを左右に揺らす。後ろから見るその堪らないボディラインに、その突き上げられたお尻と秘部に、今直ぐ俺の肉棒をぶちこんでガン突きしたい衝動に駆られるが、困ったことに俺の下にも、既に俺の肉棒を今か今かと待ち望む、エロ可愛い爆乳アイドル雀士の姿が。

仮にどちらか一方だけ。と告げられれば選びきれないだろう。俺の肉棒が、2人の美女とのセックスを予感をしてピクピクと震えてしまう。今の俺は酷い顔をしているだろう。興奮しすぎて、自分がどんな顔をしているか分からないし、そしてどんな顔をしていようと構わないとさえ思ってしまう。

そして俺は衝動のままに、はやりさんの嘘みたいにくびれた腰を掴んで、肉棒を膣内に挿入していく。

「あっ、入って……っ♡」

はやりさんが目を閉じて、俺の肉棒が自分の中に挿れられていくのを感じている。

そして俺も、はやりさんの中を犯していく感覚に、新雪に足跡をつ

けるような感覚を感じながら突き進んでいた。そして、

「あ——あっ♡ん、んーっ♡」

プチツ、と亀頭の先端で抵抗のあったその壁を突き破った感触を感じる。

そして俺の肉棒が、はやりさんの一番奥まで到達する。

頭が、視界が、ふらふらするような目眩を覚えた。

……お、俺……今、あのはやりさんと……！

「は、入った……！」

「んゆっ♡ はあう……え、えへへ、ちよつと痛かったけど、嬉しい……んっ……♡」

「はやりさん……っ」

はやりさんが俺の下で、呼吸を荒くしながら、はにかんでくれている。

誰もが夢見る爆乳を呼吸と共に上下させ、その小柄な身体に、胸から考えるとありえないくびれのウエストを、俺は掴んでいる。視線を更に向ければ、俺の肉棒をみっちりと啜えこんでいるはやりさんの媚肉。キュウっ♡と俺の肉棒を歓迎するように、キツく、甘く、熱く締め付ける膣内の感触にそれが現実であることを思い知る。

憧れの現役アイドル雀士の、多くの人がテレビや写真で見て想像するしかない彼女と、俺は今セックスしている。合意の上で、その初体験を奪ってしまったている。その優越感に酔いしれてしまう。

「はやりさん、もう、俺……」

「動いて、いい、よっ……はやりも、痺れて……♡ 東郷くんの、おちん、ちん……硬くて、気持ちいい……♡」

その言葉を聞いて、はやりさんの中にある俺の肉棒がドクンと跳ねて大きくなった気がした。

もう俺は我慢出来ない。はやりさんの腰を掴んで、俺は腰を振り始めた。

「あぐっ、うぐうっ、ああ……！ はやりさん、はやりさんっ、気持ちいいっ……くうう……！」

「あっ、あっ、あっ、あんっ♡ とうづう、くん、東郷くうん……♡」

俺は獣のような声を上げ、はやりさんの身体に激しく肉棒を突き入る。

相手は処女。気を使わないといけない——なんて意識が頭の片隅に置かれていたが、それもはやりさんの気持ちよさそうな可愛い喘ぎ声でどこかに消えてしまった。

その気持ちよすぎる穴を搔き分けてほじくりまくり、俺の形に矯正していく。俺の肉棒に熱く吸い付いてくるはやりさんの膣内。キツいのに、蕩けるような中の感触に腰が止まらない。

しかも腰を突き上げれば、上下に揺れるはやりさんの爆乳が視界にはある。俺の腰の振りに合わせて揺れるそのいやらしい光景を、もつと見たいと腰を振れば、期待に込えてたぼんたぼんと淫らな音と共に揺れてくれた。

「はやりさん、凄い……可愛い、いやらしい……!」

「やっ、ああっ♡ おっぱい……また揉まれて……♡ んんうっ♡」

堪らず身体を前に倒し、右手でその爆乳を揉みしだきまくる。手に収まりきらないこのポリウム感と、突き立てた五指が埋もれてしまふこのむにゅむにゅ感。柔らかさと張りを兼ね備えたこのモチモチ爆乳が堪らない。

しかも可愛いと言うと、はやりさんの中が、きゅんつと俺の肉棒を甘く締め付けてきた。

「うあっ、ぐう、はやりさん、可愛い! 可愛い! はあっ……んっ!」
「ふああ……東郷くんっ、くすぐった、あっ♡ やあっ、んんう……♡」

もつとそれが味わいたくて可愛いと言いながら、今度ははやりさんの身体を隠すように覆いかぶさる。その細く白い首元に顔を埋め、はやりさんの甘い香りを肺いっぱい吸い込みながら、彼女の両手を上から握って抱きしめる。柔らかい乳房が俺の身体の下で潰れ、更に興奮を増長させる中、感じているはやりさんが可愛くて首筋に舌を這わせる、くすぐったそうに喘ぎ声を漏らしてくれた。

そのままちゅうちゅうと吸い付き、俺の物だという証を自然と刻み込もうとしてしまいながら、逃げ場をなくしたはやりさんの上で滅茶苦茶に腰を振る。あまりにも良すぎる快感。今まで経験してきた

セックスとは何だったのかと思ってしまうほどの極上の性行為。

他のことを考えることなど出来ず、ただただはやりさんのハメ穴に俺の肉棒を突き入れ、彼女を俺の物にしようとオスの衝動だけで動いている。すると、少し離れた俺の顔に、

「東郷くん、大好きい……♡　ちゅうっ、れる、はむ♡」

「っ、あっ——」

はやりさんが俺の口元にキスをして、そのまま舌を伸ばして俺の舌をペロペロと舐め回してきた。

愛情たつぷりのディープキス。告げられた言葉とぬるぬると彼女の舌が口内に侵入してくる感触に、俺の腰がドクンと跳ねた。

「ああ~~~~っ……!!　はや、り、さ、出る、あ、あああっ……!!」

「んちゅっ、あっ、んんう♡　ら、ひてえ……はやりもっ、はやりもっ……♡」

耐えられない。死ぬほどの快感を得ていた俺は、ちよつとした一押しによって敢えなくはやりさんの中で射精してしまった。

「うぐううっ！　か、はっ……！　ああ、あああ……！」

「んんんうううっ——♡」

死ぬほど気持ちいい射精とはまさにこのことだろう。挿れてからどれくらい経ったか分からないが、性欲が完全に満たされるような引き絞るような射精。最高の女性の中に己の遺伝子を吐き出すことの快感、優越感。

はやりさんもこの時に、嬌声を上げていたので、イッたのかもしれないが、この時の俺にはそのことは頭になかった。

「ああ、はやり、さん……うぐ、ああ……」

「東郷、くん……んんう……好き……♡」

はやりさんの手が俺の首に回される。好きと言われて抱きしめられるのがこんなに気持ちいいとは。

中出しを決めてしまいなながらも、全くの後悔がなく、ただその心地よさの余韻で酔いつぶれそうな中、俺の顔には、また別の顔まで近づいてきた。

「エクスタシーでよだれを垂らす顔、中々にセクシーですよ……」

ちゅっ♡」

「っ、ああ、良子……」

四つん這いで近づいてきた良子が、俺の顔を掴んでキスを何度も落としてくる。

その顔は赤く、酷く興奮しているようであり、全くの遠慮がない。美女の連続キス。はやりさんの中出しをようやく終えようというところに絶え間なくやってきた、二人目の美女の感触が肌に吸い付く。

理性を取り戻す暇もなく、思わず俺はそのまま腰をカクカクと振ってしまっていた。

「はやっ、ああ、んっ、東郷くんの、またはやりの中を、掻き回してるよお……♡」

「んちゅ、はあ……♡ 駄目ですよ、次は私と、私にください……」
「あう、はあ、良子……っ」

はやりさんの、俺の精子で更にぐちよぐちよになった膣内を掻き回すのは本来、やめることが出来ないほどに甘美だったが、横から良子が俺に抱きつき、その爆乳をぐいぐいと押し付けてきながら、挿れて欲しいとおねだりしてきたことで、俺ははやりさんの膣から肉棒を、にゅぽんっ、と勢いよく抜いて、そのまま間髪入れずに良子を襲った。

「良子、お……あぐ、ああ……！」
「んんっ♡ ——バックから、ああっ……♡」

良子も処女だ。だというのに、やはりぐちよぐちよに濡れて、キツく俺の物をぬっぷりと受け入れた良子の膣内は、はやりさんのものとはまた違って気持ちよく、それがまた俺を興奮させた。

爆乳美女の膣内をその場で比べる。馬鹿みたいに贅沢な行為に、肉棒は硬く、俺の興奮も未だ止まらない。

ぷちり、と良子の、二人目の処女も奪ってしまったことも、理性を失った頭で理解しながら、俺は快感に酔いしれた。

「良子も、いいぞ……はあ、綺麗で、最高だ……！」
「せ、センキューで、ああ♡ はあっ、動いて、ずんずんと突かれ、ああっ……♡」

後ろから良子のほっそりとした腰を掴み、お尻に腰を密着させる。腰の上に密着したその引き締まったお尻、母性を象徴するような女性の丸みを帯びたその感触に興奮する。

やはり良子はびっくりするくらいに身体のラインが綺麗だ。後ろから見下ろすと、そのモデルのような腰の細さや、長い手足。だどいうの後ろからでもはつきりと輪郭が見える爆乳が、またしても俺の突きに合わせて揺れていて、優越感と支配欲を加速させる。

小さい頃からの知り合い。親戚で、年下の女の子。中学の時くらいから体つきが女性らしくなり、高校生の頃には、制服を盛り上げるその胸や、綺麗な身体のラインは既に完成しており、その頃から意識はしていた。

だが今は更に、その頃よりもエロくなっている。従姉妹だからと諦め、なるべく意識しないようにと努めていたが、日に日に綺麗にエロくなり、グラビアなども掲載される良子を、こうやって犯したかった——その欲望が現実になっている。

「良子……お前も、可愛いぞ……！　はあ、うぐ、胸も、こんなに育ちやがって……！」

「はあ、あつ、ああつ、そ、ソーリーです……んんうっ　♡　お詫びに、好きなだけ、テイストしてくださいっ……♡」

「当たり前、だ……く、あつ、柔らかくて、くっ、気持ちいい……！」
身体を倒して背後から、良子の身体の前に手を伸ばして胸を持ち上げるように揉む。

はやりさんに劣るとはいえ、その胸はやはり俺の手に収まらない至高の乳房だ。張りがあつてたぶたぶなその幸せな感触を、掌いっぱい堪能し、獣のように腰を振る。

そうしていると、今度もまた、横から参戦してくる影が、

「東郷くん……♡」

「ああつ、はやりさん……！」

再び良子の腰やお尻を撫で回して腰を振っていると、横からはやりさんが抱きついてくる。

すりすり、俺の身体に抱きついて、その瑞々しい肌と乳肉を、身

体にたつぷりと押し付けてくる。

再び味わうハーレム感。最高の女性に後ろからガン突きをかましている最中に、はやりさんという別の美女から抱きつかれて顔にキスをされると、肉棒が良子の膣内で一回り大きくなった気がした。

「中で、大きく、うくつ……………♡ はあ、もつと、突いてください……………♡」

「ちゅ、れろ、んっ……………よしこちゃん、気持ちよさそう……………♡ あんなに弓なりに身体反らして……………東郷くん、突いてあげて……………?」

「う、あっ……………はい……………わかって、ます……………!」

こちらの肉棒を咥えこんだまま、お尻をフリフリと左右に振って誘ってくる良子と、爆乳を押し付けてきながらちろちろと首筋を舐めてくるはやりさん。

四回目だというのに、またしても肉棒が射精の準備をしているのが分かった。だからその衝動に従い、俺は滅茶苦茶に良子のハメ穴を肉棒で突きまくる。

「よ、良子……………はやりさん……………っ、俺、また……………!」

「は、あっ、んん♡ あっ……………いい、ですよ……………出して、出してください……………仁の、精液……………♡」

「はやりに出してくれたみたい……………沢山出して……………んっ……………♡」

「うぐっ、ああっ、もう、エロ過ぎる……………っ! 二人共、俺の女になれ……………かはっ、くっ、俺の女あ……………!」

そんな想いが、つい口から出てしまう。この時、拒否されればこの瞬間は大丈夫でも後から死ぬほど後悔するような発言。

だというのに2人は、

「うんっ……………はやり、東郷くんのもものになりたい……………東郷くんだけの、女の子にして……………♡」

「あっ、あっ、ああ……………♡ わ、私は、もうとっくに、そうだと思って……………はあ、んあっ♡」

こんな欲望塗れの言葉にも、嬉しそうに頷いてくれた。

何かが、ブチツ、と切れるような音を自覚する。幻聴ではあるだろうが、切れたことは間違いなかった。

「ああっ! くあ、もう出る……………! 出すっ……………!」

「うん、出して……気持ちよくなって……ちゆうっ♡」

「あ、あつ、ああつ♡ 私も、もう——」

ありえない程の快感に鼻息も荒く、滅茶苦茶な速度で腰を振り、良子のきゆうきゆうに締め付けてくる膣内で肉棒に最後の1押しを入れる。

するとはやりさんがまた、俺の口にちゆうつと好意を示すキスを落とすとしてくれて、

「イクっ、ああああ、ぐううううっ!!」

「ん、ああああ——♡」

馬鹿みたいな量の射精を、喘ぐ良子の中で行った。

一番奥に種付けするような射精。びゆうううっ、びゆる、びゆるっ
と、またしても濃い、音が聞こえそうな、死ぬほど気持ちいい頭が真っ白になるような射精。都合、四回目の射精だ。

「んっ、東郷くんのお気持ちよさそうな顔、はやり、可愛くて好きだよ……♡
ちゆうっ、ちゆうっ、好き♡ 可愛い。もっと可愛い顔見せて……♡」

「あ、ああつ……♡ ……じ、ん……もっと、セックス、してください……好き、です……♡」
「うぐ、ああ、ああ……」

二人の美女に再び求められる——そんな幸福を感じながら、俺はその求めと、自分の衝動に従って、腰を振り始めた。

——俺史上、最高の夢を、見た気がした。

はやりさんと良子。俺の身近にいるトッププロ。美少女プロ雀士。その二人とホテルの部屋で、夢のようなハーレムを味わう夢だ。

たまに、その手のエロい夢を見ることはあるが、大体は曖昧なもので、しかも肝心なところで途切れたりするタイプの夢。

だというのにその夢は、まさに俺の欲望を具現化したように甘美な夢だった。

気持ちよすぎて、久しぶりにぐっすり眠ってしまうほどである。

プロをクビになって、最悪な気持ちになった。落ち込み、また悩みのタネが増えたため、今日も眠れないなど思っていたところへのこれだ。

正直、この夢を朝起きて思い出せたとしたら、思い出しながら自家発電を行えるほどのエロ過ぎる夢。

二人のおっぱいをその手に掴んで贅沢な揉み比べ。二人のマンコをとつかえひつかえして、その可愛い表情や堪らない身体を眺め、その肌の柔らかさを味わいながら滅茶苦茶に犯しまくつての射精。それを喜ぶ二人。

いつも妄想してること。それが天国だと言われれば、俺は疑いはしないし、今からでも天国に行けるように善行を積みまくるだろう。

しかし、それよりも今は考えないといけないことがある——と思いい、俺は気づいた。

——あれ？ どこからどこまでが夢だっけか？

そうして俺は覚醒した。

「——ん、あ……ああ………？」

あれ……朝、か………？

俺は目を覚ました。そして目を覚まして、それなりにスッキリしていることに、浅い覚醒状態のまま驚いた。

何故なら、俺は慢性的な不眠症気味であるからだ。

最近はまだマシになってきているが、プロに入ってからというものの、俺はあまり満足に眠ることが出来ず、毎日の平均睡眠時間が、3時間程度。5時間寝られればかなり眠れた方で、酷い時は1時間くらいか、限界が来るまで全く眠れないこともあった。

故に俺は、朝に弱い。いや、普通の人とは少し違うのかもしれないが、眠いは眠かったりするし、普段から満足な睡眠時間を取れていないため、たまに眠れると、まだ起きたくないベッドに籠もっていたくなる。

良い大人なのだからしつかりした方が良いのだろうが、大丈夫だ。

俺は約束があれば大体それよりは早く起きれるし、きちんと動ける。何も無い日であれば、昼過ぎまでダラダラしていることもあるが……まあこんなものだろう。大人が全員、すっかりとしていると思うなよ、と最近の子供に教えてやりたいところだ。

とはいえ、今日は割とスツキリしているので、起きることは容易い——と思っただが、どうにも起きたくない。

というのも、なんかめちやくちや気持ちいい。なんだろう。すべすべして、ふわふわの布団が俺の身体を覆っている。布団なんか変えたか？

とにかく、身体全体が柔らかくて気持ちいい。そういう意味では、身体を動かして、気持ちよさを味わいたくはある。

それにこの気持ちよさは、妙にムラムラさせてくれる。俺の肉棒は馬鹿だから、布団の気持ちよさを女の肌の気持ちよさ、温かさ勘違いで、朝勃ち以上に勃起してしまっているのだろう。哀れだ。

だがほんとに気持ちいい。なんだろう。

と、思っていると、俺とは関係無しに、布団の方が動いたので、おかしく思う。

んん？ ん？ なんかおかしいぞ。これ、布団じゃなくね？

さすがにそう思って、俺は頭を覚醒させ、瞳を薄つすらと開いてみた。そして、気づく。

「……………あ、……………あぁ？」

気づいた、が、気づいた上で間の抜けた声を出してしまった。

俺の部屋ではない。ホテルの一室。真っ白いふかふかのベッドの上。

その上で、俺は仰向けになって寝ている。寝転がっている。

布団は被っていない。じゃあ何を被っているのか。視線を左右に向けると、

「すうー……………すうー……………」

「……………」

女だ。

しかも、見知った二人だ。

全裸で、寝息を立てている、瑞原はやりと、戒能良子だ。

その豊満なおっぱいを、両側から同様に全裸である俺に押し付けてきている二人だ。

柔らかく、瑞々しい肌の感触。

俺の身体の上で、二人の乳房が押し潰れ、計4つのおっぱいが左右から、俺の上半身をむにむにと刺激してくる。

「……………ふう……………」

俺は頭を抱える——ことは手がふさがっていて、無理だが、大きな溜息を吐く。

……………さて、昨夜のはなんだったのか……………。

さすがに思い出す。昨夜、おそらく、昨夜のことを。

二人と滅茶苦茶に性行為をした、多分現実のことだ。

いや、こういう時、普通なら夢なんだろうと真っ先に思うのが、フィクションだとお約束だ。

しかし、別に俺は浴びるほど酒を呑んだわけでもないし、呑んだとしても記憶を無くすタイプではない。生憎と、記憶力は良いほうだ。

故に、この現実の感触を真っ先に現実である可能性を考える。相当リアルな夢であるという可能性も0ではないかもしれないが、それを確かめる術なんかない。いや、100%現実だった。

だからこそ、俺は落ち着くために息を吐いた。すると、右側に眠っていたはやりさんが身じろぎし、

「ん……………ふあ……………あ、東郷くん……………起きた……………？」

寝ぼけ眼のはやりさんが、声を掛けてきた。俺も落ち着いて、

「ああ……………はい……………おはようございます……………」

「おはよう……………えへへ……………」

ただ挨拶しただけなのに、はにかんで笑ってみせたはやりさん。なんだこれ。可愛いな。どうしてくれようか。

しかし、そうだな……………どうだろう。一応夢であるという可能性を考えて、色々試してみるのはい。

雀士であるというなら、様々な可能性を考えなければ駄目だ。そして、それに対応出来るように一手を放つ。クビになった雑魚プロだけ

ど。

ともあれ、やってみることにした。はやりさんに向かって、

「はやりさん……おはようのキス……」

「あっ……うん。それじゃあ——ちゅっ」

はやりさんが一瞬、驚いて恥ずかしそうに顔を赤らめたが、そのまま嬉しそうに俺の唇にキスを落としてきた。いや、ほんとにやってきた。びっくりするくらい唇が柔らかい。至近距離で見たキス顔が可愛い。

いや、まだこれは夢である可能性がある。だからまだ試さなければならぬ。

「はやりさん……おはようのおっぱい」

「お、おはようのおっぱい？ ど、どういうこと……？」

「おっぱいで俺の顔を包んで起こすんです……すると、気持ちよく起きれたり……する」

——俺、何言ってるんだろうな。馬鹿かな？ 自分で言っていて頭おかしいと思う。

だがはやりさんは、少し戸惑いながらも頷き、身体を、少し上に移動させた。そして、俺の顔の上に胸を持っていくようにした。ゆらゆらと揺れる乳房が絶景かと思った瞬間、

「えっと……こんな感じで、大丈夫？」

ぱふんっ♡

あー……そうそう。めっちゃ柔らかけー。顔が気持ちいい。最高。

ほつかほかで、あったかい、もちもちのはやりパイで顔が挟まれる。いや、包まれる。たっぷりとしたこのボリューム感。重柔らかさ、左右から押し寄せる乳圧を顔で満遍なく感じて、吐息が漏れる。思わず顔を左右に動かしてしまい、

「やんっ……東郷くん……そんな顔動かして……」

「はふっ、はあ、気持ちいい……」

「……ふふ、可愛い♡」

顔を動かしておっぱいのたぶんだぶん感を味わっていると、はやりさんが笑って俺の顔を抱きかかえるようにして、おっぱいで包み込ん

でくれた。谷間に顔がフィットし、むにゅむにゅと左右から圧迫されてたまらん。はやりパイすご……。

「気持ちいいっ！」

「はふっ、はあ……あー……はい……もつと、ぱふぱふと左右から圧迫して……」

「……………」

「んー、はあ、やばっ、んー……んぐっ、んー」

「あっ……♡ も、もう、東郷くん……おっぱい吸うなんて、赤ちゃんみたいだよ……っ！」

は？ 赤ちゃんでもいいんだが？ というかその反応は余計にしゃぶりたくなるからやめてほしい。いや、やっぱやめないでほしい。

左右からぱふぱふとぼゆんぼゆんとおっぱいで圧迫されると、もう高まってしょうがない。息を吸い込むと、はやりさんの甘い匂いでいっぱいだし、視界がはやりさんのおっぱいで埋まるのはもうヤバかった。時折、喋るために顔を少し離してみたり、再度飛び込んだりを繰り返していると、たまらなくなっておっぱいの先にある乳首にしゃぶりつく。

しかしそれでも、はやりさんは嫌がる様子を見せない。これは現実だな（迫真）。

「はふ、はふ……はあ、最高……」

「……………朝から何をやってるんですかブラザー……」

「あ、おはよう良子ちゃん」

気がつけば、左にいた良子も目を覚まし、俺の様子に呆れたような半目を向けてきていた。そして、マイペースに俺の顔をおっぱいで抱きしめ続けながら挨拶するはやりさん。マジ聖母。

だが良子の方はどうだろうと、俺は思った。うん、いや、別に下心なんてない。これはあくまで夢か現実かを確かめるための正当な行為だ。決して、朝からたまらなくなったからエロい行為をしようとしてる訳じゃない。

「んんっ、良子……おはよう……はあ」

「……グッドモーニング。はやりさん、仁」

相変わらず英語で挨拶してくる良子に、俺は言った。はやりさんのおっぱいに顔を埋めながら、

「良子……朝の挨拶……」

「……朝の挨拶？」

「……おっぱい」

「……は？」

あ、さすがに駄目だったか。くそ。やっぱり現実じゃないか！

だが良子は、俺と、何やら下の方に視線を向けると、溜息をついて、

「……はあ、全く、スケベですね」

と、呆れるような、それでいて、苦笑するような声が聞こえ、

「……なら、私はこちらを」

「っ、おおっ……!?!」

良子の声が少し遠ざかったかと思うと、不意に俺の腰を浮かせた。

俺の腰の下に膝を潜り込ませるようにしてしまう。

「確か、こんなポジションでしたか……っ」と

「ああ……っ」

そして俺の股間で、先程からピンピンにそそり立っていた肉棒が、柔らかく、張りのある感触に包み込まれる。

見えていないが、分かる。これは良子のおっぱいだ。はやりさんのおっぱいを持ち上げて、軽く視線を下に向かわせると、やはり俺の物をすっぽりと胸で包み込む良子がいた。

「あ、ああっ……ヤバイ……朝からこれは……」

「昨日、あんなにシタというのに、こんなに硬く……とんでもないモンスターですね。時間的に、そろそろシャワーを浴びてチェックアウトしなければですが……」

「あ、それもそうだね……それじゃあ……ええと、一回だけだからね？」

東郷くん？」

「んぐ、ああ……はふっ」

はやりさんの声がおっぱい越しに耳に届く。話は理解出来るが、それどころじゃない。

朝から上も下もおっぱいで挟まれ、堪らない状態になっているのだ。

良子も、その爆乳を股間の上でたぶんだぶんと揺らし、

「ほら、早くエクスタシーしてください……昨日、はやりさんがした時は、かなりスピーディでしたよね？」

「？ 早いと駄目なの？」

「ワールドワイド的には、まあ……いえ、私もそんなに知りませんが」「えー、可愛いから良いと思うんだけどなー……」

だ、誰が早漏じゃい!? 普段の俺はむしろ遅い。風俗なんかでも、たまに嬢に面倒くさがられる。お前らがエロ過ぎる、もとい、全体的に気持ちよすぎるのが悪い。俺は悪くねえ!

見てろよ……と思う。昨日、あれだけしたのだ。さすがに耐性が——あ、無理。朝一だし、こんな顔をはやりさんのおっぱいでばふばふとされながら、良子のおっぱいでパイズリされるとか、耐えられる訳がない。並の相手ならまだしも、二人共、極上の美女。昨日理解したはずだ。普通の女とは色んな意味でレベルが違う。

「うぐっ、ああ……出る……っ!」

「んっ……胸から飛び出して……やっぱり、早いですね」

「えへへ、気持ちいい? 時間もまだあるし、はやりもしてあげよっか?」

良子の胸の中で朝一番の射精。相変わらず、自家発電や風俗とは比べ物にならない快感とオスとしての優越感を感じながら、今度ははやりさんが顔にキスをしてくれながら、もつとする? と聞いてきてくれる。なんだこれ。当然頷く。するとはやりさんがはにかんで、俺のチンコをお掃除フェラし始めた。どんな天国だこころは。実は俺、もう死んでる?

しかし感触が現実過ぎて、もう疑う余地もない。この二人から告白されてまさかの——二股? になるのか? いや、そもそも付き合う云々どころか、エッチして、なんか、俺の女になれとは言ったが、その辺りの話はしてない。とりあえず保留だ。また後で話そう。とりあえず、エロエロ出来る関係になったのは、夢みたいだが現実のよう

だ。

高嶺の花過ぎるはやりさんと、従姉妹で、同じく高嶺の花の良子。俺に恋愛感情の欠片もないであろうこの二人が、急に惚れてくれるなど、我ながらとんでもない。後でSNSに投稿してみるか。誰かに刺されそう。

それは冗談にしても、夢みたいなのは確かだ。昨日は、プロをクビになって、でも二人から役満が上がって逆転勝利したりと、イベントが目白押しで――。

……………ん？

俺はそこで、あることに気づく。

いや、まさか……………まさかだよな？ いや、でも状況的には……………。

この死ぬほど天国な状況。二人がいきなり告白してきたこと。

それを説明出来る事が、一つだけあった。

昨夜の老婆。怪しい占い師から告げられた事を思い出す。

『お主、オカルトを持っておるな？』

『役満が上がると惚れられる』

『その相手の女子らとの卓で、役満が上がってみせるがいい。さすれば、お主は幸福となるだろう』

それらの言葉を思い出し、俺は気づいた。

……………もしかして、役満で二人から上がったから、惚れられた？

俺の“オカルト”。それに気づいたのは、良子に舌を絡ませるキスをされながら、はやりさんの口の中で射精した瞬間だった。

余韻と野望

「あー……」

俺は玄関の鍵を開け、靴を脱ぎ捨てると、ただいま、とは言わずただ声を出した。

一人暮らしたとただいまと言う事もない。挨拶の相手がいらないから。返事も返ってこないのだし、やる意味はない。

だから帰ってきた俺は鍵と財布、携帯を机に投げ捨て、ジャケットを脱いでハンガーにかける。そして靴下を洗濯カゴに投げ入れた。

そうしてそれほどサイズは大きくないが、それなりにいい値段のするソファの上に座れば、ようやく一息をつく——のだが、自然とそこまでやったところで何か飲みたくなってしまうたので、冷蔵庫を開けて冷えた飲み物——まあ色々あるが、気分的にコーラを一本取って氷と共にグラスに入れてソファに戻る。眼の前の四つ足のクラシックなテーブルに置いてあったリモコンを手に取り、40インチのテレビのスイッチを入れて適当な番組を垂れ流した。

「はー……」

コーラで喉を潤し、グラスを机に置いて息を入れると、ようやく落ち着いて一人の時間になった。

普段であれば、ここから何かをする。いや何もしない訳がないのだが、風呂に入ったり、洗濯をしたり、食事をしたり、録画しておいたバラエティ番組や麻雀中継を見たり、牌譜を見たり、本を読んだり、ゲームをしたり、酒を飲んだり。

一人暮らしたと誰かに気を使う必要がない所為か、周囲から見れば、何故その順番？　と思うような行動を取っていたりするのだろうか、そういうものだろう。風呂から入るか、食事から取るかなんてのは人それぞれだし、あまりお腹が空いてないから先に別のことをしたり、やろうと思ったが、一瞬で飽きて別のことをしたり——なんてことは一々言わなくても良いレベルで日常茶飯事の筈だ。

だが今日は、何か目に見える行動をすることはなかった。やるのは、考え事。頭の中で行うことだからだ。

「はやりさん……」

先程まで一緒に居た彼女たちの事を思い出して、途中まで声に出す。良子、とまで言わなかったことに意味はない。独り言であるため、言葉は途中で切られることもある。

結局、ホテルを出た後、車ではやりさんと良子を駅まで送り届けると、俺達はそこで別れた。

プロをクビになった俺とは違い、二人には次の仕事がある。

はやりさんはハートビーツ大宮。埼玉県の自宅に一度帰っていったし、良子の所属するチームは松山フロテイヤ。良子もまた、チームの本拠地であり実家のある愛媛県まで帰っていった。

一応はオフシーズンであるとはいえ、プロ雀士——特にトップで活躍するプロの生活は忙しい。

チームのリーグ戦は春から秋に掛けて行われるため、まずいちばん忙しいのはその時期だ。中学生や高校生の大会、インターミドルやインターハイなども行われるため、プロには解説の仕事だって回ってくる。

それに加え、個人の7つあるタイトル戦の試合は一年掛けて行われるため、実力の高い雀士ほど忙しい。

更にはプロ全体で、興行、イベントなどにも参加する必要があるため、二軍に所属するようなプロ雀士であっても、それなりにやることは多い。

世界的に人気な競技のプロというのは伊達ではないのだ。俺もついこの間までは、企業のイベントなどで訪れた参加者相手に麻雀を打つ、などの仕事をよく行っていた。

雑誌やテレビの取材、番組出演だってあるし、人気のあるプロなら、グラフィア撮影やフアッション誌にだって呼ばれたりする。俺も、プロになりたてのまだそこそこに活躍し、期待されていた頃は色んな仕事を経験したものだ。

全く休みがない、という程でもないが、忙しいは忙しい。充実している仕事ではあるのだが、

「クビ、か……」

そう、俺はもうプロではない。元プロ。

ついでに言うは無職だ。いや、まあクビになったばかりの俺を無職だと称するのは、さすがにどうかと思うが、如何せん事実だ。

いやほんと、どうするんだと。プロ雀士は個人事業主扱いだし、辞めた直後の年の税金の支払いが厳しいことになると話で聞いている。

貯金があるのでまだ切羽詰まっている訳ではないが、とはいえどうするかを考える必要があるだろう。

しかしだ。今の俺には、もうひとつ、気になることがある。それが、「オカルト……オカルトか」

そう。オカルトのことだ。

役満を上がると、同卓していた女性から惚れられる——あの老婆の話を鵜呑みにするなら、そういうことだ。

昨夜、いきなり天国のような3Pを、はやりさん、良子と体験した。彼女たちに惚れられ、俺は男性としてはとてつもなく恵まれた状況になった。

が、確かにおかしい。俺が、俺なんかが、彼女達に惚れられるはずがないのだ。

ルックスに惚れた？ いや、確かに俺は、顔立ちこそ従姉妹に似て悪くないし、スタイルだって、多少痩せ気味だが悪くない。悪口というか、からかい混じりだが、やさぐれたホストと言われることもあるのだ。少なくとも、見れない顔ではないはず。

だがとはいえ、目の下のクマは酷いし、髪はボサボサという訳ではないが、セツトなんてすることもない。ナチュラルヘアという言い訳で誤魔化してる。服だって、従姉妹からの贈り物以外は適当だ。というか、それだけで事足りるので他に買う必要があまりないとも言える。別に特別優しい訳でも善良な訳でもない。むしろ、性格の方はクズだと自覚している。

というか今まで一度もモテたことがなく、彼女すらいたことのない素人童貞だった俺だ。風俗通いと、一応は従姉妹や女友達のおかげでコミュニケーションは取れるというだけで、モテる風に見せている。しかも、一応汚れたことで慣れるには慣れたどうしようもない大人

だ。

麻雀だって、プロだが、プロの中では下から数えた方が早い二軍プロ雀士。しかもクビになっている現在進行系の無職。財力は微妙。というか負けてる。

こうして考えてみると、やはり俺が彼女達に惚れられる筈もない——となれば、オカルトの可能性がやはり高い。

オカルトを信用しない、なんてことはない。プロ雀士であったため、余裕で見たこともあれば、従姉妹や親戚関係を中心にオカルトにだって関わっているため、実在することはよく知っているし、知識だってある。

ただ、この俺が、という気持ちではある。そういう意味では信じられないような気持ちだ。

実は先程、このオカルトのことを聞けないかと昨日の場所について老婆を探してみたが、見つかることはなかった。

だが、確かにあの老婆の言う通り、役満を和了った直後、二人が驚いた様子で、こちらをじつと見つめていたのは確かだ。あの時の二人はおかしかった。

つまり、二人が俺に惚れたのはオカルトのおかげということになる。人の感情を操作する、ゲスな行為。人として、どうかと思う行為だ。仮に、人がそういう事をしていとなれば、俺は止めると思う。嫉妬だな、うん。

だがまあ、善良ではなくとも、普通に悪いことをする奴に憤慨したり、気が向けば人に親切にするくらいには道徳的で、普通の人間の筈だ。

しかし、そうであっても、

「はあ……」

ソファに寝転がり、顔を押しさえる。溜息を吐いたが、この溜息は後悔や罪の意識を感じての溜息ではない。

むしろその逆だ。俺の頭にあるのは、道徳には程遠い——彼女達の痴態なのだ。

「はやりさんに、良子……凄かったな……」

今でも不思議な感じだ。つい数時間前まで、彼女達と誰もが羨む性的な行為をしていたというのは。

だが、微かに疼くこの股間の違和感、痛みにも近いこれが、先程まで俺の肉棒を酷使していたことの証明だ。

これまで体験してきた性行為とは、一線を画すもの。今までの全てがひっくり返される程の極上の性体験。

彼女達の柔肌の感触をまだこの手が、身体が憶えている。

「あー……」

俺は寝転がったまま、机に置いてある携帯を手に取り、慣れた動作で操作すると、検索サイトで二人の名前を検索。そのまま、彼女達の動画や写真を視界に映していく。

二人の姿。写真で見ても、相変わらず可愛くて綺麗だ。はやりさんはアイドル活動をしている姿やグラビア写真が多く、良子は試合の時の様子を映したものが多くだろうか。それでも水着写真などはあつたりするため、メディアはよく分かっているなと思う。

彼女達のその恵まれた容姿。男を魅了するその極上の肢体が衣服や水着に包まれ、ネットの海に放出されている。

シミひとつない白い肌。艶やかな髪。白くて長い足や女性らしい太腿の曲線。魅惑的な腰のくびれからむっちりしたお尻の肉感や、縦一本に線が入った深い谷間。男の手ですら掴みきれないたわわな乳果実。

そういった彼女達の魅力を閉じ込めた画像や動画を差して、あまり健全ではない掲示板などではコメントで、エロいだのシコいだの、やりたい、即ハボだの、むしろぶりつきたいだの、パイズリしてほしいだの、彼女達のファンであろう欲望に塗れたコメントが散見される。

女性プロ雀士とはいえ、こういった欲を全く持たれない訳がないのだ。そりゃあ、麻雀は世界的競技で健全なものだし、多くのファンはまともで純粋に彼女達の事が好きで応援している——いや、欲望に塗れたコメントをしている奴らの99%も、表ではそりゃあ善良的だろうと思う。こういう掲示板のコメントは、良くも悪くも正直だ。特に深く考えず、正直にコメントして、そういう欲求があるぞ、と感想を

述べているだけ。

きつと実際にイベントなどで目の当たりにしても、そういった悪質な事は言わないし、表に出すことはないだろう。

だが、そういった欲求を多くの男性、あるいは女性から持たれているのは事実な訳だ。そういう風に見ている連中もいると当然俺は知っているし、というか俺もそうだ。

だが、それを今見ると——口元が思わずニヤつきそうになってしまふ。

「ははっ……」

沸き立つのは高揚感の様なもの。どうしようもない優越感。

皆が欲望を向けるその可愛くていやらしい美女は、俺が征服したのだぞという醜いマウント取りだ。

ああ、駄目だ。あまりこういうのはよくない——とは自覚しているが、思うだけならタダだろう。誰にも迷惑をかけない。心の中で、嘘はつけない。

お前らが妄想するしかない彼女達の裸体を、俺は現実に知っている。

お前らは、その肌が、どれだけ柔らかいか知らないだろう？ 俺は知っている。触れれば吸い付いてくるようなもち肌の感触を。甘い匂いを。男を気持ちよくするために作られたような熱い口内やあのもちもちのエロ乳。きゅんきゅんと締め付けてくる彼女達の媚肉の気持ちよさを。

お前らがそこで書き込む欲望に塗れた行為を、俺は実際に味わった。

もうとつくに処女ではない。俺が奪った。俺が二人共、女にした。しかも同時に。

そういう仄暗い喜びを感じてしまい、思わず顔を押しさえる。

「あー、やばい……」

彼女達の写真や動画。そしてそのコメントなどを見ると、昨夜と朝の体験を思い出し、俺の肉棒は硬くなってしまっていた。

どうしようもなく、やりたくなってしまうている。

今直ぐ彼女達をここに呼びつけて、また天国のようなラブラブハーレムエッチを味わいたい。

まるで思春期の中学生のような酷い性衝動だ。

だが、あんなものを知ってしまったのだからしようがないだろうと言いたい。性欲が人間の3大欲求と言われる理由を理屈ではなく本能で理解した。性的嗜好をあれほど満たされると、そのことしか考えられない。また、何度でも、ああいう快感を味わいたいと思ってしまう。

そしてその欲求が沸き立ってしまうのが、己がクズであることを自覚させた。普通なら、彼女達の想いをオカルトによって歪めた申し訳無さがあるはずなのに。

彼女達が俺に惚れて幸せそうだからいいだろう、などと自分にとって都合のいい言い訳でその行為を正当化してしまう。

人間なんてそんなものだ。誰がこの状況に耐えられるのか。10人いれば、10人とも耐えられない。真実かもしれないが、それすらも言い訳であった。

そして今度は、このオカルトのことがよく分からないからもっとよく知る必要があるよな、と、そんな言い訳をして、俺はこのオカルトを使えないかどうかを試そうとしてしまっている。

そんな様々な欲求が湧いてくるのだが、

「……会えるのはまた先だよなあ……」

はやりさんと良子とまたそういうことをしたいと思い、どれだけ欲望を募らせて、肉棒を硬く大きくしようと、彼女達にも彼女達の都合があり、今直ぐには出来ない。

別れ際にもはやりさんから、また連絡するねっ、と可愛くそう言われた。良子は何も言っていなかったが、薄く笑みを浮かべながら、また、とは言っていたので、同じことだろう。

おそらくはまた2ヶ月近く会えないのだろう。まあ、ひよつとしたらオフや何かの仕事が偶然入って、会いに来る可能性も0ではないのかもしれないが、それでも今直ぐという訳にはいかない。

「ああ、やべー……やりてー……」

思わずソファーからベッドに移動し、欲求を口にしながらごろごろと転がってしまう。馬鹿みたいだが、1人の時なんてこんなもん。というか、実際に来れるまでは、こうやって欲求を募らせるのは匿名掲示板の奴らと何も変わらねえな、と思う。普通なら、こうやってムラムラしたら自家発電か風俗だ。

だが、はやりさんと良子という最高の美女達との甘美すぎるセックスをってしまった今、風俗なんて行ける気が、もとい、イける気がしないというか、全く満足出来る気がしない。もしかしたら勃たない可能性すらある。

自家発電も、彼女達とやれる関係になっていと思うと、それを吐き出すのはもったいなく感じてしまう。溜めて、彼女達にしてもらった方が絶対に気持ちいい。仮に2ヶ月溜めた上でしてもらったとしたら、腰が震えるほど気持ちいいだろう。我慢が全く出来ない気もするが、そうやって彼女達に暴発気味に射精させられるのも、またエロいと思ってしまう。

くそ、駄目だ。2ヶ月も我慢出来る気もしないが、だとしたらどうするか。そもそも、自分は自分で何かをしなければならぬというのに……。

「……飯行くか」

と、考えた末に、ご飯でも食べに行くかと思いつ。3大欲求に対抗出来るのは3大欲求しかない。

睡眠は珍しく取れてるし、時刻は4時過ぎ。少し早いけど、夕食にしても問題ないだろう。移動すればもう少しは経つのだし。

そうしながら、今後どうするかでも考えた方が良さそう。携帯を再び操作したのだが、

「……あ」

どこに食べに行くか。というか、プロをクビになったの、マジでどうすっかなー……と、考えていると、ふと思いつき、携帯を操作する。

そして自分のブログ。SNSをチェックすると、

「げ……えっ?」

麻雀打ちます教えます。一日5000円———適当過ぎる募集を見

て、自分で自分に引く。

そして削除しようかと考えたところで、さらに自問する。メッセ―ジ来てるんだが、と。

しかもその量が結構ある。ざっと見ても数十件。

マジかよ。やっぱ腐つてもプロだし、需要あんのな……。

いや、まあ、冷やかしばかりな可能性もあるしな、と思う。というか、よく考えると一日5000円でプロと打てるというのが安すぎたか。もうプロじゃないけど。

ともあれ、確認していく——って、やっぱり冷やかし多いな。『じゃあ114514日教えろ』とか『じゃあ一日。場所はグルジア。あと、高いからタダにして』とか、どう考えてもふざけるとしか思えないものが、主にSNSの方に多数。

いやまあ、具体的なことを書いてない俺が悪い。反応してくれてるだけ、むしろ有り難いかもしれない。殆ど更新しない、ほぼ死んでるアカウントとブログだしな。

それらを確認し、どう考えても冗談なものを除いて、何かないかと確認していく。

すると、ダイレクトメッセ―ジやメールの方には、まさかのちゃんとしたような依頼っぽいのが来てたのだが、

『3日お願いします！ 北海道の女子高生です！ 連絡先は〇〇〇の

——』

「いや、無理だろ……」

こいつ、俺の所属チーム見たのか？ 名古屋だぞ？ 出身地は鹿児島だし。プロフィールにもプロ麻雀カードなんかにもきちんと記載されてるだろ。北海道まで5000円で行く訳がない。書いてないとはいえ、近辺で募集だと分かるようなものだが……というかいきなり連絡先書くな。こっちがプロ雀士だからと信用してるのかもしれないが、ちよつとは気をつけた方がいいと思う。多分これ、携帯の番号だし、家の住所だし。特定余裕すぎる。

もうこんなのばかりな気がするし、放置しておこうかな、とも思う。反応が返ってこなければ諦めるだろう。

そう思っていたが、ちょっとだけひらめいたことがあった。それは、

……女子高生、か……。

女子高生の雀士。まあ、麻雀部とかなのだろう。幾らでもいる。珍しくもない。

だが俺が思ったのは、性的な欲望だった。

「いや……さすがに……でも……」

理性と欲望がせめぎ合う。もしオカルトがまた発動して、合意の上であれば、またああいふ行為が出来るかもしれない。

だが、そこで更に思う。俺のオカルト、よく考えなくても面倒じゃないか？

相手を選ばないと、女性であれば誰でも発動するなら、好みじゃない相手が惚れる可能性がある。というか、昨日は三麻だったが、四麻だと、同卓した3人全員が惚れるのか？　そもそもツモだったが、口ン和了りだどうなるんだ？　……まさかとは思うが、男相手には発動しないよな？

そもそも、麻雀のオカルトというのは、対局する上で有利に運ぶものなのに、別に対局には全く影響しない辺りが意味不明な上に残念すぎる。どうせなら、何かの条件を満たしたら役満で上がれる、とかであれば俺にも再起の道が見えてくるんだが。

自力で役満を上がらなければならぬというのもキツイ。そう考えると昨夜は滅茶苦茶に運が良かったと思う。上がれなければ意味がないのだから。

まあ、女子高生相手なら、プロほどキツくはないだろうし、役満を和了ることも……と、またさり気なくそっちの方向に、言い訳をしながら舵を取ろうとしているが、本気でどうしよう。

しかし、エロエロしたくてしょうがないのもまた確かだ。というか、このオカルトを上手く使えば、本気でハーレムを、エロ漫画やAVでしか見たことないような、最高のハーレムを作ることにも不可能はないのだろうか。

麻雀の世界には、妙に美少女が多い。プロ雀士もそうだが、毎年イ

ンターハイを見ていると、活躍している選手はもれなく美少女だ。見
ていて好みだったので、正直抜いたこともある。

そんな彼女達も、俺が実際に会って対局し、役満を上げれば——そ
の妄想が現実になる。

そのことを自覚すると、どうしようもない欲が、衝動が、溢れてく
るのを感じた。

簡単な事ではないが、それが出来るというだけで、もう妄想が止ま
らない。思わずニヤけてしまう。収まりかけた肉棒が、またしても硬
くなってしまう。

全国の美少女雀士を、俺の女にしてとっかえひっかえする。

そんな馬鹿みたいな野望を思い、俺は衝動的に携帯の操作をして—
—その第一歩を踏んでしまった。

北の大地

麻雀において、最初から役満を狙う者は『馬鹿』である。

正確に言うなら、最初から特定の役を狙う者は愚かである。

麻雀とは、その時々——配られた手牌、河の状況や自分と相手の点数を考慮し、山から牌をツモりながら、その時の最善を尽くす競技である。

故に最初から特定の役を狙うのは、賢い行いではない。それは素人の、もしくはルールや役をあまり理解していない者の行動だ。

手牌が配られてから、その手牌から最も近い役満を狙うのであれば話は変わる——が、それでも愚かと言わざるを得ない。

役満の点数は麻雀という競技の中で最大の破壊力を秘めている。その威力は、一撃で相手を粉碎し、こちらの勝利を決定づけるもの。その難易度は推して知るべし。試しにやってみると良いだろう。

役満の中で比較的和了りやすい役は三つあるが、その中で、どうしても役満を狙うのであれば、大三元をお勧めする。

大三元は字牌の、白・発・中を三枚揃えてしまえば、残り的一面子と雀頭は何でもよい。鳴いて集めることも出来るので、役満の中では比較的和了りやすい方だろう。

だが、それは相手を考慮しない場合の話。役満に限らないが、麻雀とは四人で対局する競技である。

相手だって、それは当然警戒する。白発中の内、どれか一つだけ鳴くだけならそれほど警戒はされないかもしれないが、二つ鳴けば、最後の一つを捨てる者などいない。役満を直撃させられる可能性があるのだ。鳴いて集めるとしても、現実的には一つ。残りは自力でツモれるというなら二つでも鳴いてみるといいだろうが、一定以上の実力を持つ相手だと、安い手で流される可能性が高い。

他にも、国士無双と四暗刻が役満の中では和了りやすいだろう。国士無双は言わずもがな、一九字牌を揃え、頭を一つ作ればいい。四暗刻は、暗刻を四つ揃える単純にして麻雀で最も美しい形の役満。これらは初心者でも分かりやすい役であるが故に、麻雀を始めた頃の頃で

あれば自然と狙ってしまう役なのかもしれない。それもいいだろう。初心者であれば、まずは好きに打ってみるといい。

だが中級者以上であれば、もしくはそれ以上を目指すのであれば、やはり役満を狙うのはお勧めしない。

麻雀とは四人でやる競技。確率を単純に計算しても、半荘一回では二回しか上がれない。

無論、実際には偏りがあるため、一度も和了れない時や、逆に連荘しまくって5本場、6本場。気がついたらそのまま相手を飛ばしていた……なんてこともよくある話である。

だが、何千局と打てば、確率は収束していくとも言われている。何千局と打つても、和了れる回数は2割から3割ほど。プロであれば4割に届くか否か、というところである。

そして点数の高い役、難易度の高い役であればあるほど、和了れる確率は相応に低い。

3,900点を三回刻むか、満貫を一度和了るか。この辺りはプロでも意見が別れるところだが、そのどちらもが最善で、賢い打ち方だと言える。勝つだけなら相手の点数を上回るだけでいいのだから、それ以上の無駄な点数は必要ない。

しかし、私は敢えてこうも言いたい。——役満の可能性を捨てるなと。

役満とは、試合を一撃で終わらせる破壊力を持っている。それまでどれだけ自分が、チームが負けていようと、役満を和了れば、それだけで逆転が可能だ。例えば自分とトップの点差が7万あり、それがオースであったとしても、役満を直撃させれば試合はひっくり返る。

謂わば、役満こそが、麻雀という競技の幅広さを担っていると言えるのかもしれない。

著 大沼秋一郎 『火薬の美学』から一部抜粋

『——到着便のご案内をいたします。〇〇〇、496便は、ただいま到着いたしました…… Ladies and gentlemen,

……」

「……………ふう」

通りのいいアナウンスが耳に届き、俺はその本を閉じた。

時間を潰そうと少し読み返すだけのつもりだったが、久しぶりに読むと止まらなかつた。

いやあ、さすがは大沼さん。中々に読ませてくれる。本を沢山出してただけはあるというか、やっぱり大御所は違うな。貫禄がある。何度が飲みに行ったこともある人だが、凄みがあるんだよな、やっぱ。

と、本を自分の横に置いていたスーツケースにしまうと、俺は息を入れて立ち上がった。いつもの服装にマフラー。サングラス。そろそろ移動するかと思いい、そういえば携帯を機内モードから切り替えようと変えてみると、幾つかチャットが来ていた。

『そろそろ着いた？ 頑張つてねっ☆ はやり、応援してるから！』
『お土産、よろしくお願いします』

二人からのチャット。それに返信しておく。あの日から、連絡——こういった軽い感じのものはよく届くようになっていた。まあ、やはり仕事が忙しいのか、返しても直ぐに返信は来なかつたが。

「寒っ……………」

ガラガラとスーツケースを押しながら俺が今いる場所、空港内から外に出ると、飛行機を降りた時以上の冷気が押し寄せてきた。

そうして、不意に大きく息を吐く。吐く息は白い。この吐息はちよつとした後悔というか、何してんだ俺、という意味が含まれている。何故なら、

「北海道……………来ちまつたな……………」

日本最北の地。試される大地ごと、北海道。

新千歳空港からの景色。その寒空を見て、俺は北海道に来たこと。来てしまったことに頭を抱えたのだ。

自分で航空券を取って、誰に強制されるでもなく自分の足でやってきたというのに、若干の後悔が襲っているのは、その目的が目的だからだ。

自分のSNSを見て依頼した北海道の女子高生だと言うその相手

に、俺はあの後連絡を入れ、日取りを調整してやって来てしまったのだ。

一日5000円で麻雀を打つ。教える。まだプロをクビになったことが世間一般に知られていない俺が、プロとして受けた安すぎる割りに合わない依頼。

ただその目的は別にある。それは相手が女子高生だということ。

俺は女子高生をオカルトで落とすし、エロいことをする——ただそれを目当てにやって来てしまったのだ。

……俺、馬鹿なのか？

思わず自問自答。いや、よく考えなくても馬鹿な気がする。

別に国内を多少旅行するくらいの貯金は普通に残っているが、とはいえ今の俺はプロをクビになった無職。お金は出来るかぎり節約した方がいいに決まっている。

それなのに女子高生という文面に踊らされ、こんな北の地までのこのことやって来てしまった。よく考えたら、相手が本当に女子高生かどうかなんて怪しいものだし、それが可愛い相手である保障はない。一応、どこの高校なのかを尋ねてみたが、えーと、確か……

「有珠山高校……聞いたことねー……」

小声で呟く。一応、インターハイは毎年見てるし、Weekly麻雀TODAYなんかもちやんと購読している。俺がプロをクビになったことが書かれているかどうか確認するためにも、今週分もちやんと買って見てみた。まだ書かれてはいなかった。

そもそも、二年……三年前までは俺も高校生だったし、有名校くらいは知っている。男子だろうと女子だろうと。北海道で言うところ、琴似栄なんか有名だったはずだ。

ただ、有珠山高校というのは聞いたことがない。調べてみればミツシヨン系の学校らしい。有珠山、及び、洞爺湖の近くにある学校っぽかった。

ただまあ、いきなり強豪校に行くつても確かに困る。目的を考えると。高校生とはいえ、強豪校のエース級の選手、インターハイで活躍する選手には、プロになっても即戦力になるような魔物もいるの

だ。そこらの高校生、インターハイに出るような選手でも、普通にやれば普通に勝てるだろうが、極一部にはほんと化け物がいる。

最近だと、永水女子。うちの従姉妹、良子とは別の従姉妹が今年入学する俺の地元の高校や、龍門渕なんかが有名になった。他にも大阪の千里山に姫松。広島鹿老渡高校や、福岡の新道寺女子とか。

後はまあ……白糸台……もそうだが、正直あまり考えたくはない。プロをクビになったことが知れたらOB連中がうるさそうだし、後輩にも……って、そういやあいつは今年卒業だったか。あいつもあいつでまた……あー、失敗した。行くなら東京行つた方が近場だし、麻雀打とうって言えば打ってくれそうな相手がいるじゃん。なんで今思いつくんだ俺……。

まあこれが終わつたらその辺も考えてみよう。そもそも、今回の北海道遠征(?)は実験みたいなものだ。

そもそも本当に通用するのか、半信半疑ではある。まだ一度しか使ったことがないからな。一度だけなら何かの間違いつて可能性もなくはない。二回、三回と成功するようなら、それはもう疑う余地のないものだ。

とはいえ、可愛くなかったりすれば役満を和了ることはしないだろうし、通用しなかったらしなかったで……まあ、北海道旅行だと思おう。北海道まで来るのはプロの試合で遠征していた頃以来なのだ。旅行だと思ふとそれなりに気分は良い。北海道は飯も美味しいな。もし収穫がなくても、普通に女子高生に指導して、はやりさん達へのお土産でも買って帰ろう。

そうと決まればまずはレンタカーを借りに行く。目的地の洞爺湖周辺までは車で——って、二時間くらい掛かるのか。さすがは北海道。近そうに見えて、結構距離がある。ただ、これでもマシなんだろうな。札幌から東の……ぶつちやけ北海道の地理はよく分からないが、某ドラマで有名な富良野とかそれよりもっと東に行くのとか凄く面倒くさそう。最北端の稚内とかも。一回くらい行ってみたくはあるんだが。

後、寒いが害虫とかいなさそうだし、台風とかも、南に比べたらあ

まり来ないだろうし、過ごしやすそうだな。その辺のところ、北海道在住の人に聞いてみたいところである。ぶっちゃけ、俺は地元の九州とか、西日本。住んでいたこともある関東くらいまでは良く訪れるので知ってはいるが、東北とか北海道については遠征で来るくらいなので知識はそれほどないのだ。

故に異国感はあるので、ちよつと楽しみといえれば楽しみである。というわけで、ロータリーで市内に降りて、レンタカーでも借りてくか。一応、八人乗りくらいのセレナで。お昼くらいには着くだろ。洞爺湖周辺の美味しい店でも調べとくか。

「はぁーん……海鮮にラーメンにそばに……お、洋食屋もあるのか……どれにすつかなあ」

とまあ、そんな訳で高速道路を使うこと、二時間。目的地の洞爺湖町までやってきた訳だが、

「ううん……でかいな、北海道……」

行つたつもりで、北海道、でつかいどう。日〇のラーメン屋さん——と、昔やっていたインスタントラーメンのCMを思い出してしまふ。昔、あの歌を替え歌にしてた友人がいてだな……くそくだらないのに大笑いしていた思い出があるのでよく憶えてしまっている。

とはいえさすが北海道。広い大地。洞爺湖の大きさ。聳え立つ有珠山。雄大な自然を感じる。

うーん、なんかもう、このまま普通に旅行でもしたい気分だが、これからは一応、建前としてはプロとしてちゃんとしなければ。

予約していたビジネスホテルにチェックインし、荷物を部屋に置くので歩きで向かう。車が必要になれば取りに戻るくらいだ。

そうして高校の前までやって来たのだが、これ、どっかに許可取らないと駄目だよな？ 多分。事務室か職員室はどこだ……？

「ああ、そうだ」

と、思い立ち、俺は携帯を操作してある電話番号に掛ける。数秒し

て繋がった。

「もしもし」

『あ、もしもしーどちらさん?』

「東郷ですけど、獅子原さんの電話で合ってるかな」

『お、早い! もう来た! 上がって上がってー! 部室は特別棟の

奥ね! 入ったら分かるから!』

「……いや、許可——」

ツー、ツーと、虚しい音が耳に届く。

「……学生ってこんなもんだったっけか……」

別に怒ることもないが、なんというか、ノリが若い。元気だな、というのが純粹な感想だ。人の話を聞かないとも言える。

でもよく考えたら学生の頃なんか、先生なんかには気軽にタメ口で、友達感覚で話しかけてたような気がする。そういう感覚なんだろうか。まあ今の俺は、先生、ってことになるだろうからな。

と、おそるおそる校内をうろつき、特別棟とやらを見つめる。部室なんかがあるっぽいな、とスリッパに履き替えて中に入り、見渡しながら奥へ。つーか、許可は? 取ってるんだろうな? 事前に伝えてたとしても、俺が直接なんか書くこととかあるんじゃないのか?

なんかいまさらながらドキドキしてくる——が、やましいことはないので問題ない——とも言い切れない。目的はやましいものだった。

「部室あるし……」

しかも部室を見つけてしまう。もういい。一度入って、彼女らに連れて行って貰えばいいだろう。それくらいは許されるはずだ。

と、俺は部屋の扉をノックする。すると、中から「どうぞー」という声が聞こえたので扉を開く。すると、

「——ようこそ、有珠山高校麻雀部へ!」

「ま、麻雀部へ!」

「……」

と、元気な声と、戸惑うような様子で歓迎されてしまった。

俺はどう反応していいか分からず、無言となってしまう。なんだその横断幕は。でっかい紙に、今急いで書きました、って感じがありあ

りと伝わるミミズ文字で、ようこそ！ と書かれている。本当に今書いたんじゃないだろうな。

と、思っているのだ。そこにいた2人の内1人——髪をサイドに結った快活そうな印象の少女が、

「……どうも。獅子原爽ししはらさわやです。有珠山高校二年。麻雀部です」

「……東郷仁だ」

「えっ、流すんだ……」

と、礼儀正しくお辞儀をして自己紹介をしてきた。突然すぎて、俺まで普通に挨拶してしまう。

奥にいる金髪のストリートロング。お嬢様のような見た目の少女のツツコミが部屋に響く。

とはいえ、微妙な空気感でやるのはなんか悪い気がするので、俺は大人として話をすすめることにした。

「麻雀を打って欲しいって依頼されてやって来たんだが……合ってるか？」

「そうそう。私が呼んだ！」

ビシッと自分に指を立てて言う獅子原爽という女子高生。なんかこの子、ノリが女子高生っぽくないな……いや、ある意味女子高生っぽいのか？ 分かん。

するとフォローなのか、後ろからもう1人が進み出てきて、

「なんかすいません……ひもりちかこ松森誓子と言います」

「ああ、いや、気にしないでいいが」

「ようし、早速打とう！ せっかくプロが来てくれてるんだからな！」

私のお年玉の犠牲を無駄には出来ない！」

「爽が勝手に払って勝手に呼んだんだけどね……」

なんだか、一瞬でこの二人の関係性が分かった気がする。苦勞させる爽と苦勞する誓子。うん、まあよくあるよな。そういう関係。

「打つのはいいんだが……人が少ないな？」

「あ、今ちよつと買い出しに出てて……もう少しで戻ってくると思いますので、どうぞぞ」

「ああ、悪い」

自動卓の近くにある椅子を差し出されたので、俺はその気遣いを受け取ってそこに腰掛ける。はあ、部室の中は温かい。何気に外の寒さが応えていたからな。

「あれ？　また調子が悪いな。チカー、機嫌直してー」

「な……その言い方だと私が機嫌悪いみたいだからやめてよもう」

獅子原が自動卓の下でしゃがみ込んで、自動卓のスイッチを入れようとしていたが——入らないのか、それを桧森を呼んで直させる。桧森は微妙に恥ずかしそうだったが、俺は微妙な表情で、

「……別に、誰が入れても壊れてるなら動かないんじゃないか？」

「いや、これがね。チカ入れ直すと動くんだ。——ほら！」

「ほんと、システムがわかんない……」

ええ……なんだそれ。本当に桧森がスイッチを入れると動き出した。訳分かんなくて困惑してしまう。

そして二人を見て、俺は心の中で思う——レベル高いな、と。

無論、打つ前から麻雀の実力の高さを感じ取った訳ではない。ただの容姿のレベルだ。

獅子原爽と桧森誓子。長いスカートに赤いブレザーの制服に身を包んだ彼女達の容姿は、正直、美少女と言っても全く文句がない。

獅子原は身長が150くらいか。桧森は結構高い。良子よりは大きいから165とかそれくらいか？　スラツとして綺麗である。どちらも胸はない——いや、桧森はそれなりにあるな。獅子原の方は女子高生として相応という感じか。だが、どちらも女子高生らしい魅力を放っていた。

というか、なんだろうな。数年前までは俺も高校生であり、その頃は特にどうとも思っていなかったはずなのに……JKという事実や、彼女達の制服が妙にキラキラとして見えるのは。

やっぱ、大人になって見ると違うというか、もう届かないという意味でレア感でも感じてしまっているのだろうか——後、今のは良い表現をしたが、悪い表現をすると、ちよつとフェチズムを感じる。

制服のスカートがヒラヒラと動いたり、獅子原と桧森が自動卓の下を覗こうとしゃがみ込んだ時の仕草とスカートを折り曲げる仕草な

んかが、こう、なんか……学生の頃に同級生に感じた異性への高鳴りを思い出すようだ。

こうなってくると、やはり期待してしまう。仮にオカルトが成功すれば、現役JKに惚れられ、そういうことを出来る可能性があるということだ。

いや、なんだろう。それが出来るという事実のせいかな、更に魅力的に見えてくるから不思議だ。まるで料理のカタログなんかを眺めている気分。クズい表現だが、実物が目の前にあって、食べようと思えば食べれる。そして匂いなんかは漂ってくると、食欲を唆るじゃん？腹が減るじゃん？ 食べたくなるじゃん？ ——つまりそういうことだよ。

正直、大きいおっぱいが大好きでしようがない俺も、こう、たまには趣を感じてみたくなるというか、大人になってから美味しく感じるものもあるというか……女子高生って最高なのでは？

これは思わぬ収穫だなあ、と思う。今後、雑誌で見ると有名な選手——俺の好みの相手とかを実際に見た時、自分を抑えられない気がする。今でさえ、使えたら使ってヤツちまいたくなるというか、据え膳食わぬは男の恥って言うし、やれるならやるよね？ って感じの心境になってしまっているし。

そんなクズクズした思考をしていると、部室の扉が開いて、外から別の子達が入ってきた。おそらく、同じ麻雀部の——

「たっだいまー……って、うわ!? ほんとにプロ来てる!?!」

「わあ……プロの先生が来るなんて素敵です!」

まず入ってきたのは、黒髪ポニーテールの長身。身長は大きい。俺より少し小さいくらい制服を着崩したおしゃれっぽい女の子と、身長がかなり小さい、右目を前髪で隠した小柄で可愛らしい女の子だった。

二人が俺を見て驚く。そんな彼女達に獅子原が近づいて、

「だから言ったじゃん。プロ呼んだよって」

「いや、爽のいつもの冗談かと思った……」

「どうやって呼んだんですか?」

「一日5000円で来てくれるって書いてたから連絡したら来てくれた。おかげで私のお年玉は無くなった」

「安っ……え、プロってそんなに安いの……?」

黒髪ポニーテールの方が困惑しているが、まあそうだろう。俺だつて引いたもん。プロ5000円で呼べるとか安い。というか、一日計算にしたせいで、時給に換算したら酷いことになると思う。仮に24時間頼むって言われたらヤバイ。時給208円とか死ぬるな。

「……まあ、普通は呼べないけどな。俺はプロの中でも二軍の、暇な方だし。自分の特訓にもなるかと思つて来させて貰った」

「あー、そうなんですか……」

「なんだか武者修行みたいですね」

ポニテが微妙そうな顔を、前髪隠れの子が純粹そうにそんなことを言う。

だが、そこで、もう1人も部屋に入ってきて、声を出したのだが――

「――二軍でもプロと5000円で打てるならコスパ良いですね」

「コスパって、言い方……」

「お買い得だったしね」

もう1人の少女の声に、桧森が苦笑いしたツツコミを入れると、獅子原がまたしても得意気な顔をする。

俺はその時、ちよつとした衝撃を受けているところだったが、なんとか持ち直し、ごほんと、咳払いをして、

「あ、あー……改めて、名古屋ドラグーンズの東郷仁だ。3日間、この有珠山高校麻雀部の指導をさせて貰うが……その三人も、名前を覚えてもらつてもいいか?」

指導対局なんかをする時のように挨拶すると、他の三人も名前を覚えてくれた。

俺は彼女達を視界に映しながら、その印象を頭の中で声にする。

「ええつと……一年の岩館揺杏いわだてゆあんです。よろしくお願いします」

「一年の本内成香ほんうちなるかですつ。よろしくお願いします!」

黒髪ポニーテールの長身、岩館揺杏と、右目を前髪で隠した小柄な

少女、本内成香。

有珠山高校の制服を身に着けた二人の自己紹介に、俺はよろしくと返しながら……もうひとり視線に向けて、平常心を保って疑問を問いかける。

「……そつちの子は……中学生、か……？」

「ああ、ユキは4月からここに通うんだ。新一年生で、前からここに遊びに来てる後輩」

「まだ入学はしていませんが……受験はしました」

「合格発表は3月だっけ？」

「まー、ユキなら大丈夫でしょ。模試だとA判定だし」

「揺杏や私、チカも入れたんだから大丈夫だね」

「な、なんでそこに私もっ!？」

賑やかなやり取りが行われる中、俺は目を細めてその子を見た。

中学生の制服を来た眼鏡の、黒髪ポニーテールの、身長140センチほどと思われる本内よりも背の低い可愛らしい子の、

「……つまり、ここの5人の指導をすればいいんだな」

「お願いしまーす!」

「真屋由暉子まやゆきこです。よろしくお願いします、先生」

ぺこり、とその最後の真屋由暉子と名乗った中学生も、そのミステリアスな真顔のまま礼儀正しく挨拶をしてくれる。

先生、と呼ばれたことに対しては、またしても獅子原達が反応し、

「先生ではないけどな」

「? プロの先生ですよね?」

「あー、まあそういう呼び方もあるか……よし! それじゃあ頼む先生! うちらをインターハイまで連れて行ってくれ!」

「そしてユキを有名に! 目指せ、ポスト瑞原はやり!」

「いや、3日じゃ無理でしょ……」

「ユキちゃんのプロデュースまで任せるんですか……?」

女三人寄れば姦しい——とは言いが、5人もいればそれはもう賑やかだった。

「ああ……よろしくな」

俺はそのやり取りを見ながら、内心でそのレベルの高さに頭を抱えるしかない。

獅子原と桧森だけで、残りは微妙である可能性も考えていたが、岩館や本内も、それぞれ違うタイプの美少女だった。

そして俺が一番心を震わせたのは、その最後の、女子中学生。高校生ですらない。もう少しで卒業も近いが、現役JCの美少女。

真屋由暉子。ユキと皆に呼ばれた少女は、ただでさえ美少女揃いの5人の中でもかなりレベルの高い美少女だった。

やぼったい眼鏡と長くて綺麗な黒髪を後ろでひとつ結びにした彼女だが、その背丈はかなり小柄で、俺の肩にも届かない華奢な少女だ。だがそれでいて——特徴的な、真っ先に目に入るのは、その胸だった。

身長が140センチもないかもしれないそのロリ中学生の胸元は、その制服を大きく押し上げていた。

その大きさは、ぱつと見ても、良子よりも大きいだろう。打倒はやりさんと言っていたが、確かにはやりさんに迫る大きさだった。純朴そうな可愛い顔立ちをしていながら、その胸元は窮屈そうである。G？ H？ I？ ——いやそれくらいじゃ収まらない。

ロリ巨乳——いや、ロリ爆乳という語句が頭に浮かぶ。まさかこれほどの、こんな子が、存在するとは。俺より20センチ近く低いはやりさんよりも更に20センチ近く小柄なロリ美少女のその乳は、俺の中の欲望を再燃させるのに十分なものである。

……ヤバい、な……。

喉がゴクリと鳴る。表向きで平静を保ち、麻雀の準備をしながら、俺はもう——最初から役満を決めるといふ意志を定めていた。

初めての指導

対局が始まれば、周りの目は気にならなくなる。頭が冷え、相手と牌だけしか見えなくなる。

——なんてことはなく、有珠山高校麻雀部との対局は始まった。

「サイコロ振るよー」

「ぶ、プロとの対局なんてドキドキします……」

「よろしくお願いしますね」

「そんなに緊張しなくてもいい。お手柔らかに頼む」

席を決めて、サイコロで最初の親、起家を決めてしまう。

対局する三人は、まず二年生を除いた三人。岩館揺杏、本内成香、真屋由暉子の三人だった。

女子高生との対局。プロになってからはイベントなどで訪れる相手をたまに相手にするくらいだったが、さすがに部室の中で三人の女子高生——いや、1人は中学生か。まあそれらと対局するのは少し緊張しなくもない。

だが、さすがにプロと対局する三人の方が緊張してる様子なので一応声を掛けておく。お手柔らかに頼む、といったのは本心だ。正直、相手が女子高生とはいえ実力が未知数な相手には違いはない。

プロをクビになったとはいえ、矜持——なんて大層なものではないが、ちよつとしたプライド、意地みたいなのはまだ残っているの、負けるのはさすがに嫌だと思うが、

「成香は初心者だし、揺杏はそれほど強くないから先生こそお手柔らかに」

「それ言わないでよ。事実だけ」

「一応ルールは覚えたんですけど……まだ始めて2、3ヶ月しか経ってなくて……」

「一応、私が後ろで見といて上げるわね」

と思ったが、どうやら岩館はそれほど強くはなく、成香に至っては初心者らしい。成香の後ろには松森が、岩館の後ろには獅子原がかいかい混じりに付く。

それならさすがに負けはない。狙うだけの余地はありそうだ——
と思ったが、もう1人が気になる。

「そうなのか。……真屋は、結構出来るのか？」
「少しは」

特に含むところもなく頷いて応えてくれる。何もしていないのに
自然と前に突き出ている巨乳に目を奪われそうになるが、自重だ、自
重。もうサングラスは外してしまったのだ。目線でバレる。

しかしそうか。美少女には強い奴が多いが、由暉子は強いのか。出
来れば俺も名字ではなく名前と呼んでみたいが、プロが指導として来
てる以上、あまり馴れ馴れしいのもどうかと思って全員を名字で呼ん
でいる。

そんなことを思いながら自動卓が配牌し、ドラをめぐって対局が始
まる。白か。この場合のドラは発。ドラは開示された牌の次の牌と
なる。数牌であれば次の数。字牌は、三元牌は白発中。風牌は東南西
北、の順番だ。

本内が初心者と聞いたので、何となく頭の中で解説しようかと反復
してみたが、さすがにその辺は理解しているようだ。

そうやって、自分の配牌を見るのだが……うん、まあ、そこまで悪
くない。というか良い方だ。かなりグッド。

何故なら、中が三つ。発が二つ、白も一つある。

これだと何が出来るか、そうご存知、役満、大三元が狙いやすい。
更にそれだけではなく、今のドラは中である。ドラは一つ増えるご
とに一翻。つまり、役が一つついて点数が上がる。ドラが三つあるの
でドラ3、三翻もあがるのだ。

それに加えて役牌、発に中。それぞれ一翻ずつ。これだけでも結構
高めで、仮に大三元じゃなくても小三元も狙えるので、二翻は増やせ
るし、立直、鳴かない場合は門前でそれぞれ一翻ずつ。仮に一発なら
更に一翻。裏ドラが乗る可能性だつてあるので、こうなつてくると数
え役満も狙えてくる。ついでに親は自分。どう少なく見積もつても、
満貫以上は固いし、期待値はそれ以上だ。

まあ、これを説明しても麻雀をよく分からない人は分からないだろ

うな、と思う。誰かに説明する場合、とりあえず悪い手牌ではない、役満も狙えなくもない、くらいしか言えない。

さて、どうなるか……と俺はとりあえず山から牌を一つツモリ、それを取って手牌から何を捨てるかを選んで、河に捨てていく。

プロなら緊張感があるものだが、高校生の部活。それも弱小っぽい子達の中での対局であるため、それほど緊張感はない。

「えっと……これだと……こうで、こうだから……」

「うっげ……」

「……」

ポーカーフェイスという言葉がある。表情で相手に真意を、こちらの手を探らせない。無表情だったり、機微が少ない場合にも例えられる言葉だ。

だがこの場に殆ど、それはない。本内はまだ慣れていないのか、真剣に頑張ってるのは伝わってくるが、色々と迷ってる様子だし、岩館は僅かに表情が引き攣っていた。配牌が悪かったのだろう。

ただ由暉子だけは先程から変わらないおっとりした無表情で牌をツモって、対局を進めていた。どうでもいいが、牌を山からツモる際に、卓の手前に胸が当たって形を変えるのが妙にエロい。集中力を乱してくる。盤外戦術なんて卑怯だぞ！

いや、うん。俺が勝手に見てるだけだけど——とか思っていると、
「……ポン」

由暉子がツモで発を捨て、それはまだ見送ったのだが、続いて俺、成香の番となったところで、また発が出てきたのでやむをえずに鳴く。

副露。鳴きは要は、二枚ある牌を誰かが捨てた瞬間に手番に関係なく貰っていいよ、というルールだ。それがポン。鳴いて捨て牌からその牌を貰った場合、手牌からその牌を開示して、卓の右側に並べて置く。並べ方は貰った相手の席の部分を横に、他の二つは縦にする。チーやカンだとまた違うのだが、その辺りは割愛。

とりあえず、発を俺が二枚抱え、一枚が捨てられた時点で残りの発は一枚なのだ。その最後のものが出てしまったので、俺はやむをえずに鳴いてそれを回収した、ということになる。

あんまり鳴きたくはないんだけどな、と思いながらも手牌からいら
ない牌を捨てて再び成香の手番。鳴いたらその人から再び反時計回
りで再開。これを利用して上家の手番を飛ばしたり、なんてことも出
来る。

ただまあ鳴くと門前がつかなくなったり、立直が出来なかったりで安
くなりやすいのが欠点ではある。早上がりをする際は役に立つ。親
を継続したい時や、相手の親を流す時。役がつくなら鳴いて速攻とい
うのも一つの戦術だ。

ともあれ、自分のことばかり考えてはいられない。10巡した辺り
で俺は彼女達の捨て牌を見ながら考える。

本内は……萬子ばかり出てるな。裏目ったか？ とりあえず、索子
か萬子。二索はなし。一索と四索もない。六索は俺が抱えてるから
持ってたとしても一つ。真屋と岩館から出てるし。テンパイはして
ないか。岩館は……筒子の六筒以降辺りとかか？ 萬子と索子はそ
れなりに出てる。萬子は本内が放出してるし、索子を抱えてる可能性
も無くはないが、六索は俺が抱えてるし……由暉子が少し分かりにく
い。これは……ん、よく見れば北が出てない。北は真屋の自風だし、
抱えてる可能性もあるか。それはいいとしても、結構ばらけてるな。
まあ、筒子の二筒から六筒辺りとかクサイか？ 筋的にも……それに
ツモ切りも多くなってる。ダメでもうテンパイしてる可能性も考え
た方がいいな。

対局中は考えることが沢山ある。自分の牌と河の状況。相手の動
向を探るために捨て牌が増える度に情報を更新して思考を続けるの
だ。

というか誰も鳴かないし立直もしない。麻雀の一局は17、18巡
目には終わる。それが終われば次の局。これを基本的な半荘、東南戦
の場合は、東一局から四局、南一局から四局までの八回行う。

親が和了れば、例えば、東一局一本場、などになり数字は変わらず、
連荘することになるため、10局以上は回すことになるが、誰かの点
数がなくなれば、誰かが飛ばせばその限りではない。順位はそのどちら
かの終了時に決まる。まあ、稀に西入……西一局に突入することもあ

るが、あれはほんと勘弁してほしい。昔友人と深夜にやってて、もう朝方でそろそろ終わるかって時に西入すると、大体全員流れが悪い泥沼状態なので、早く終われよ、ってなる。それで、深夜で集中力が落ちたりして、誰かがチョンボしてくっそ微妙な終わり方をする時がある。俺は思わず食ったラーメンをぶちまけた。いや、雀荘で食べる食べ物って、どうせそれほど美味しくないって分かっても食べちゃう。海の家とか、サービスエリアと同じ現象。

それはともかく、さすがに10巡を越えると、無理かな？ っと思う。いや、一応テンパイはしたのだが……白が一枚足りない。俺の白はどこだ……？

そんなことを考えてると16巡目——普通に上がり牌をツモってしまう。

「ツモ——小三元。発。中。ドラ3。50符の7翻。跳満、6000オールだ」

「わあっ……！」

「っ、いきなりげつろ……」

「……どうぞ」

三者三様の驚き方で返され、点棒を貰う。これで43000点。他は19000点で横並びだ。

「いきなりえげつないな、先生。初心者相手にそれは」

「運が良かったただだからな。まあ、こういうこともある。ほら、切り替えて次だ」

「うーん、さすがはプロね……綺麗に当たり牌躲してたわ」

「はい……躲されました」

桧森と由暉子がそれぞれ感心したように言う。確かに、見れば由暉子は既にテンパっており、当たり牌は俺が抱えていた。

とはいえ、こちとら一応プロ。元プロ。デジタル打ちだったり読みくらはさすがにそれなりに出来る。今のは本当に運が良かっただけだ。

しかし……今のを和了れなかったのは痛いな……と思う。結局、最後の白は山の奥に隠れていたようだ。

役満を和了れないことにはオカルトが発動しない。役満を上がらなければどうなるかも分からない。分かっていたことだが、ハードルは高かった。

だが、次の局——東一局の一本場で、

……おいおい……また来たぞ……！ 滅茶苦茶ツイてるな俺……！

またしても大三元のチャンス。しかも今度はそれぞれ三枚ともツモって、後は雀頭、上がり牌を揃えるだけ。

これは来てる。俺は対局する三者を見る。JK 2人にJC 1人。漏れなく美少女。おら、ツモれツモれ！ もしくは振り込め！ 出来れば由暉子！ 頼む！ 来い！ 来いっ！

俺は拝む。テンパイし終わると、後は願うくらいしか出来ないものだ。

頭の中は煩惱だらけ。こんな俺に麻雀の神様が微笑むはずは……などと思っていたが、しかし麻雀の神様は意外と優しくかったようだ。

「ツモ！ 大三元！ 16000オール！」

「！」

「！」

「！」

俺は役満、大三元を上げることに成功した。三者——いや、この場にいる有珠山高校麻雀部の目が驚きに見開かれる。

いや、俺の時代来てるのでは？ あの夜の対局から。俺、強くなったのでは？ この分だとプロテストもいけるんでない？

いや、今はそれよりもJKだ。JCだ。おっばいだ。ユキぱいだ。さあ、どうなる——？ と、俺はドキドキしながら彼女達の反応を待つ。すると、

「えー！ ちょっとそれはないって！ プロ、もっと手加減してくださいー！」

「役満、素敵です！」

「残り3千点ですか……」

……ん、どう、だ？ どうなんだこれは？

岩館の抗議の声。本内のキラキラした視線。そして、由暉子のマイペースな呟き。

その反応が、どうにも判断しづらく、俺は頭に疑問符を浮かべながら、今度は二年二人の声を聞く。

「先生やるじゃん！もしかして大三元のプロ!? よし、全員にそれを伝授してくれ！」

「いやいや……それはないでしょ。凄いやけど」

獅子原と松森の音が響き、しかし対局は続く。残り全員が1000点。立直は一回出来るだけの点数。

故に、終わるのも早かった。由暉子が東一局二本場で、岩館から、
「……ロン。3900です」

「うえー、最下位じゃん……」

岩館を飛ばしてしまい、トップが俺。二位が由暉子。三位に本内に、最下位が岩館という順位になって終局。

そうすると、再び皆が俺を見て、

「揺杏、落ち込むことはない。相手はプロだからな。私の15000円分くらいは挑んで揉まれてこい」

「まだそれ気にしてるの……?」

「うー、まあ、結構やるつてのは分かったけどさあ……」

「強くなれそうで素敵です……!」

「そうですね。まだ一局ですが、学ばせてもらいました」

そんなことを口々に言う。が、俺としては色々と気になるころなのだ。

しかし、どう惚れた? と言ってみる訳にもいかない。気持ち悪すぎる。なので普通に会話を行うしかない。

「……運が良かったな。まあ……それで、なんだ。お前達はインターハイを目指してるのか?」

そんな無難なことを聞いてしまう。すると獅子原が拳をグツと握って、

「そうそう。このユキのビジュアルを知らしめるためにな!」

「ユキの、ビジュアル?」

思わずオウム返ししてしまう。そこがよく分からないが、すると続けて獅子原と岩館が、

「ほら、ユキって可愛いだろ？ だからインターハイで有名になって貰うんだ」

「インターハイで活躍すれば雑誌に乗ったりもするからね。それで、目指すはポスト瑞原はやり！」

「なる、ほど？ ……つまり、牌のお姉さんを目指してるのか？」

「まあそれじゃなくてもいいけど、とりあえず有名にしてアイドルになつてもらおうと思つてな！ だから全員で麻雀の特訓してインターハイまで行こうって目標を立てたんだ」

ええ……どんな目標だよ……と思つたが、そういえばやはりさんも牌のお姉さんになるためにインターハイで活躍したらしいし、少し変わつてるがおかしな目標でもない、か。

それでも部員全員が由暉子のアイドル化を目指してるつても面白い話だ。そうしていると、右隣の本内が、

「先生から見ても、ユキちゃんは可愛いと思いますよねっ」

「ん……まあ……そう、だな。可愛いと思うぞ」

「……ありがとうございます」

そう問われたことは一瞬驚いたが、まあ普通にそれを認める。可愛いというだけじゃ変な感じもないしな。由暉子も、目線を僅かに逸らしながらも、普通にそれを受け取ってお礼を言った。

すると獅子原も、

「そういえば、先生もプロならはやりんと会つたことあるでしょ？」

「比べてどんな感じ？」

「あ、あ……そうだな……比べてどうかは分からないが、アイドルになれるくらいの可愛さはあると思うぞ。アイドルっぽい格好したらそれっぽくなるかもな」

と言つてみる。言いながら、これ、誰も惚れて無くね？ オカルト不発か？ と自問する。普通にショックなだけ……。

まさか三麻じゃないと駄目とか？ 何か他に隠された条件があるのか？ と、色々考えてみるが答えは出ないし、思考するには会話が

続くため、この場には向いていない。

「よし、それなら……揺杏!」

「オツケー。ユキもいい?」

「……はい。大丈夫です。お願いします」

獅子原は何かを思いついたのか、ニヤリと口端を上げて、揺杏を呼ぶ。揺杏もニヤリと笑みを浮かべてユキを呼ぶと、ユキもこくりとそれに頷いた。

俺は頭に疑問符を浮かべ、

「? 何だ?」

「えーと……変身?」

「ユキちゃん、ほんと可愛いんですよ。ちょっと待っててください!」
と、部屋の端の一角。カーテンが掛かっているそこにユキと揺杏が入っていく。

一体何が始まるのかとそれを待っていると、中から、

「えーと……まずは服を——って、ユキ。また胸大きくなってない?」
「そう言うならそうかも知れません。確かに、言われてみれば、少し胸の部分がキツイような……」

「あー、また採寸し直しかなあ……でもまあ、今はこれでいくか。大丈夫?」

「大丈夫です」

「よしよし、それじゃあ髪下ろすねー」

と、そんな声が漏れ聞こえてくる。俺は思わず眉を顰め、

「お、おい、何やってるんだ? ……というか、外に出た方がいいような……」

「あ、あー……多分、もう少しで終わると思うんで気にしないでください」

さすがにどうかと思ったのか、桧森は少し目線を逸らして、恥ずかしそうにそう言うってくる。カーテンで隠れているとはいえ、同じ部屋の中で、おそらく、着替えをするのとはどうかと思うのだ。

だが由暉子や岩館、獅子原、本内と、あまり気にしてる様子はないので結局出て行くタイミングを逃してしまった——が、その会話は

中々に興奮させてくれる。ナイスだ岩館。ちよつと胸が大きくなつた話をもう少しお願いします。

妙に興奮させるような話を聞いて、しばらく待っていると、

「——お待たせしました」

「じゃーん！　これがユキのビジュアル力だ！」

「つ、これは……なるほど。確かに……」

カーテンから着替えを終えて出てきた由暉子は、その長くて綺麗な髪を下ろし、眼鏡を取っていた。

服もカジュアルな、ファッション誌に載っていそうなもの。首元に巻いたマフラーが可愛いし、やはり彼女は美少女だった。眼鏡も良かったが、こちらも、なるほど。とつても可愛い。

それに……やはり、服を変えても、その胸元の盛り上がりは悩ましい。大人顔負けの大きな乳房。張りの良さを示すようなふるふる、たゆたゆ具合。これで中学生。ビジュアルも、胸以外はロリコンが歓喜しそうなレベルで高い。

しかも、胸だけでなく全体的にスタイルが良い。小柄だが、腰つきは女性的な曲線をしっかりと描いており、スカートの丸みからお尻の方もぷりぷりしてそうである。

小柄で幼い顔立ちのロリ美少女と思わせて、スタイルはしっかり女性的な魅力に満ちた、そのアンバランスな発育の良さ。男の欲望を詰め込んだような都合の良い持て余すような体つきのJC。

こんなのが中学の教室にいたりとか、同級生はたまらんだろ。というか、大人でもこれはちよつと息を呑む。犯罪的なビジュアルだ。

まあこんな思考をする大人は少数派——特に麻雀界隈は妙に風紀が緩いというか、純粋な人が多いから、俺みたいにムラムラする人は異端なんだろうが……。

ただちよつと思つたのが、

「……真屋はアイドルになりたいのか？」

「……はい。先輩方が取り柄を見出してくれたので、とりあえず頑張ってみようかと」

「ユキはいじめられっ子だったからな。アイドルになつて見返してみ

ようつてことで！」

「なんか、新たな目標まで追加されてるし……」

表情の機微が少ないので分かりにくいだが、由暉子の可愛さを見出した他の面子に応えるためらしい。……というか、いじめられてたって……なんだ、やつかみか？ まあ同じ女性からするとこんな見た目、先程の少し地味な見た目でも反則的だもんな……男子なら、それは多分、好きな子に関わりたいが故のよくある奴だろう。俺も小学生の時はそのタイプだった。いや、なんだろうな、あれ。今思い返すと馬鹿らしいが、当時の気持ちを思い返すと、ようは関わられて、好きな子が反応を見せてくれるのが嬉しいのだ。それも小学生くらいだと結構ムキになって、声を上げたりするので、からかったりするといいい反応を見せてくれるってこと。まあ、大体相手が泣き出してから後悔するやつ。俺はそこまでやらなかったが、今思うとやつぱアホらしい。普通に仲良くした方が良いに決まってるのだ。

まあ俺の熱い自分語りはどうでもいいとしても、まあ、由暉子はそのことをあまり気にしているようには見えないので、そこまで深刻ではないのかもしれない。せいぜい無視されたり仕事を押し付けられたり、マイルドないじめだろう。いじめにマイルドもくそもないと言いたいかもしれないが、確かにあるんだよな。単純にクラス内の立場が低くてないがしろにされがちなやつ。大抵、やってる側はそこまで意識してないか、単純に舐めているパターンだ。あまり言いたくはないが、俺にも経験がある。麻雀でそこそこ成績出して、見た目も同級生に比べて勝つてるとちよつとしたナルシスト気味になっていた黒歴史を思い出してしまふ。とりあえず、忘れよう。あまり思い出したくはない。

「とりあえず、先生にユキの可愛さを知ってもらうために、このまま続けるか。次は私とチカが入るぞ」

「ぶ、プロと打つなんて初めてだからドキドキするわね……」

「誰が残ります？」

「二位のユキでいいんじゃないか？ それで、揺杏と成香は先生の後ろで勉強させて貰うといい」

「りようかーい」

「先生、お願いしますねっ」

「ああ……」

対局者が入れ替わる。今度は獅子原と松森が、岩館、本内と入れ替わる形だ。由暉子はそのまま。だが見た目が変わってて……うん、いや、確かに近くで見るとより可愛いな。こんなちっこくて超可愛いのに、その上、胸は大きくて……いや、確かにヤバイ。あまり近くで見るとものじゃない。昔、初めてはやりさんを見た時くらいのためらなさがある。幾ら何でも中学生にガチ恋はヤバイ。いや、全然ガチ恋じゃないけど。単純に下半身に従ってるだけだけど。いや、ほんと、そういう恋とかわっかんねー。昔っから可愛い子は皆好きだった俺だ。というか、そういうもんじゃないの？ どうせ男の殆どは好きな女の子が複数いて、その中で付き合えそうな子とか距離が近い子を意識して、付き合えたから付き合って、好きって言ってるだけだろ？ じゃなかったら不倫や浮気がこんな多い訳ない。

まー、この国は同性婚だろうが重婚だろうがなんでも認められるような恋愛が自由すぎる国だし、それほど問題にはならないが、にしてもその辺りは気になるところだ……是非を問いはしません。現在進行系ではやりさんと良子の二人と肉体関係を持ち、更にその範囲を女子高生に、しかも女子中学生に向けてる俺だ。言っても説得力がなさすぎる。

ともあれ、次はまたどうなるか——というか、効果が出てるか分からないの不便すぎる。効果出てないんじゃないか？ 全然惚れられてる気がしないんだが。

「ツモ。6000オール」

——って、そんなこと考えている間に獅子原が上がって……ってか、こいつ……、

「……獅子原……お前……」

「? どうした、先生?」

「……いや……やるな。お前、この部で一番強いだろ」

「うーん、どうかな。先生はどう思う?」

「そりゃ——っ」

獅子原が問いを、不敵な笑みと共に投げかけてくる——その瞬間、俺は背筋が凍った。

獅子原のその何かを感じてしまったのだ。

「うわっ！　びっくりした……」

「きゅ、急に跳ねてどうしたんですか、先生？」

「……い、いや、なんでもない……」

ビクツと肩を跳ねさせてしまった。おかげで肩口から覗き見していた岩館と本内がびっくりする。というか、今更だが、女子高生に囲まれている対局というのは、いい匂いがするな。男や大人とは違う、ほのかな甘い匂いがする。

だがそんなものを感じてる余裕はない、ヤバい。死ぬ。いや、ほんと。

俺は、オカルトの気配にだけは敏感だ。これは幼少から良子と関わっていたからか、家系の特徴なのかは分からないが、俺はオカルトを持つていない時から、オカルトの気配だけは感じることは出来た。自然と汗が溢れる。暖房が効きすぎた訳じゃない。獅子原の近くにいるナニカを感じてしまったがゆえだ。

とんでもない化け物を飼っている。おそらくは、良子と似た、何かを呼び出すタイプのオカルト。麻雀以外にも使うことの出来るヤバい系統のオカルトだ。

オカルト持ちのこの怖さは、オカルトを持っていないか、もしくは一定以上の実力がないと気づかないだろう。事実、岩館や本内、桧森も平然としている。由暉子は一瞬、獅子原を見たので、気づいているのかもしれない。

というか、その由暉子も、不意に、

「あの……左手を使ってもいいでしょうか？」

「……ああ、いいぞ」

「はいよ」

「どうぞ」

左手を使うことを申告する。昔はマナー的に左手を使うことは駄

目とされていたが、今はそんなことはない。前に大沼さんから聞いたことがある。イカサマを疑われるとか、左手で先ヅモすると上家にぶつかるとか色々あるが、科学の進歩のおかげもあり、公式試合などではイカサマはまず不可能なので前者の心配がなくなったことが大きいらしい。

が、左利き、という訳でもないはず。なら使う理由はなんなのか――その理由はすぐに分かった。

「ツモ。4000オールです！」

ユキが少し嬉しそうに和了りと点数を告げる。ああ、そういうことか。特定の条件でツモ運が高くなるとか、ツキがよくなったり、高い手で和了れるとか、そういうタイプのオカルト。

このタイプはオカルトの中では強力という訳でもないが、それでも脅威であることには違いない。支配系とか憑依系とか、訳わからん、いい加減にしろよ、って言いたくなるようなオカルトも多いから、これくらいはマシだと言える。いやほんと、支配系とか特に消えてほしい。和了れないようにする、みたいなガキが考えたみたいなクソチートオカルトがあるからほんとイラッとするのだ。どう対応しろって言うんだよ。普通の麻雀させろ。

だがまあ、さすがに中学、高校辺りでそれも慣れた。諦めた。情熱を失ったのもその所為か……女子は高校、中学くらいからオカルトが飛び交うことも珍しくないし、レベルが一段落ちる男子も、プロになればオカルト持ちは珍しくないし、トッププロにもなれば狂気染みだ、はつきり言つて、頭がおかしい狂った奴も多い。

そういうのに比べれば由暉子のそれは可愛いものだ。4000点くらいくれてやる。ただし、獅子原。テメーは駄目だ。良子もそうだが、霊体とか精霊とか、場合によっては神とか降ろしてくるのやめろ。なんだよ、初手テスカトリポカって。シャー○ンキ○グでやってろ。実際、憑依合体みたいなことする奴もいるから困る。良子にそれ言ったら、「よみ○ーえーれー」って気の抜けた声と共に変なの呼び出されてボコボコにされた。次会った時は「きーみにと○けーのーざんらーい」だった。ハマってんじゃねえよ。そつちまで教えた覚えはねえ

よ。あいつ、結構良い声してるからマジに歌うと上手いのが腹立つ。まあ、オカルト持ちって言うのは、そういう痛いことを現実に来るやべー奴らなのだ。俺もオカルト持ち……になったはずなんだが、肝心のオカルトは条件を満たしてないのか、どうなのか。発動したかどうかとも分らないし、麻雀の対局には関係ないという欠陥品である。

そしてこの流れだと、桧森もヤバいのかと思ったが……

「ツモ。1300。2600」

……普通だった。

いや、上手いには上手い。岩館や本内に比べれば結構良い打ち手だ。

とはいえ、由暉子、獅子原に比べれば劣る。うん、普通に上手いから特に言うことがない。

結局、その対局は獅子原が圧倒的一位。少し離れて由暉子が二位。最初のツモで少し離された俺が三位で、四位が桧森だった。一応頑張つて最下位は回避したが、獅子原が暴れ過ぎだし、ずっと狙われれば最下位は俺だった。

というか、さつきまでは滅茶苦茶ツキが回ってきてると思っていたが、途端に普通になったな。いつもの俺だった。躲すのはそこそこに上手いが、それだけな俺。別に高い手を張れたりはしなかった。

「……なんだ、結構やるじゃないか」

震え声。ふざけんな獅子原。こんな化け物がいるなんて聞いてねえぞ。

こんなの役満を上がるところの話じゃない。耐えて、なんとか二位か三位を拾うのが精一杯だろう。最下位だけはプロとして回避したいところだが、何度もやればキツイだろうな。最下位率が少なくなるように頑張ろう。

「よっし、プロに一勝だね」

「二位だと勝ったと言えるんでしょうか?」

「うえー……最下位……」

皆が対局を終えてそれぞれ喜び、自問し、落ち込んでいる。

俺は息を入れ、

「……インターハイ、いけるかもな」

「え、マジ？ 今のだけで分かったの？」

「私、初心者ですよ……？」

岩館と本内が問うてくる。俺は汗を拭いながら言ってやった。

「獅子原の実力は全国レベルだし、真屋も良い腕をしてる。松森は堅実な打ち手だし、岩館も粘り強くはあるし、本内にも伸びしろがある。インターハイ予選はこれから半年近くあるし、このまま練習を続けていけば可能性はあるんじゃないか？」

「お、おー……」

「まあそのために呼んだからね。15000円で」

「まだ言うの……？」

一応そう言っただけだったが、本当にそう思った。

いや、それだけ獅子原のレベルは桁が違う。多少他の面子が成績を残せずとも、獅子原一人で逆転が可能なほどに強い。

それにも実際、由暉子も全国レベルだろうし、他の面子に伸びしろがあることも確か……だと思う。まだ分からないが、その二人がいるだけで期待する価値はあるだろう。

本気でとは言ったが、少しリツプサービスだったか？ しかしそれくらいはいいだろう。実際、光り輝くものは感じる。

……しかし、やはり惚れられてる気はしねえ……なんなんだよ、ほんと。マジで分からん……俺の野望、早速頓挫したのでは？

「よし、それじゃあ次私も。先生にリベンジするぞー」

「今度は見ってもらってアドバイスしてもらった方がいいんじゃない？」

「あ、出来ればそういうの、私はお願ひしたいです……」

「うーん。じゃあ一回見てもらうか。私は抜けるから、四人で打って先生に見てもらおう」

と、今度は獅子原がそんなことを言う。うん、まあ、おかしいことじゃない。指導ってこういうことだ。ぶつちやけ、役満を上げる機会は減るが、俺もある意味でありがたい。あんまり情けない姿を見せる

のもあれだし、麻雀の指導は得意な方だ。

そうして、今度は獅子原以外の4人の対局が始まったのだが……、

「ロン。3900」

「うげっ、またいきなり……」

「——ロン。5800」

「はい……」

うーん、これはなんというか……。

皆が打っているところを周囲を回って、手牌を見ながら見ていく。由暉子の後ろに回った時、上から見る胸の膨らみが素晴らしかった——のは置いといて、だ。一応真面目に見てみた。

その感想を、対局終了後に率直に言う。

「……お前達に必要なのは、防御だな」

「防御、ですか」

「攻めたりないとかじゃなくて？」

「ああ、特に岩館と本内……はまだ初心者だからしょうがないが、振り込む率が高い。後、裏目に出ることもな」

「名指しでダメ出しされるとかきついなあ」

「防御と言うと、相手の和了り牌を予測……するんですよね？ 裏目する時は……すみません、分かりません」

「謝らなくてもいい。それに、前者で合ってるぞ」

初心者だが、一応ルールや何を気をつけるべきかを知っている本内に頷く。しかし岩館が、

「と言ってもなく当たり牌を予測するのとか難しいよね」

「プロくらいになれば完全に当てることとかも出来るんですか？」

本内が中々なことを聞いてくる。いや、まあ、そこがミソでもある。

「完全には無理だが、それに近いことは理論上、可能だ」

「ええ、幾らなんでもそれは……」

「いや、出来るぞ。要は予測すればいい」

と言って、俺はよく使う例題を出すことにする。プロ雀士にとっては有名な話だ。

「本内。お前、電車に乗ったことはあるか？」

「電車、ですか？ はい、ありますけど……」

急にそんなことを聞かれて、困惑してる様子だ。だがまあ関係あるんだよな、これが。

「お前が電車に乗っていると想像し、次の駅で最初に乗ってくる人を当ててみる」

「ええっ!? そんなの、無理じゃないですか……？ 素敵じゃないです……」

まあ、それだけならそうだろう。本内の言っていることは正しい。だが、俺は続ける。

「なんで無理だと思う？ 岩館も考えてみる」

「いや、誰が乗ってくるかなんて分からないよね？」

「なんで誰が乗ってくるか分からないなんて思うんだ？」

「……先生。急に馬鹿になった？」

「なっていない。……そうだな、それじゃあ時間を、朝の7時から8時頃だとする。その時間で考えてみる」

「時間？ そりや、朝だと……サラリーマン？」

「満員電車って凄そうだよな。拷問系アトラクションみたいだよ」

「満員電車、怖いです……」

話が脱線しかける。獅子原、ちよつと黙っててくれ。本内も、そこまで怖がらなくても……いやまあ、都心とかだと酷いけどな。俺も、満員電車が嫌いすぎてやむを得ず車で移動するようになったのだ。別に車がそこまで好きという訳ではなかったのに。

ともあれそうじゃない。この話の肝は、

「そう、サラリーマンか。学生が乗ってくる可能性が高いだろうな。なら、それに加えて、駅も指定してみよう。次の停車駅がオフィス街である場合。乗ってくる確率が高いのは？」

「そりや、サラリーマン——って、あつ」

と、岩館が気づいたようだった。本内も気づいた様子である。そう、つまりそういうことだ。

「麻雀でも、同じことだ。山から次にツモる牌。相手の当たり牌。それらのヒントは、卓のどこかに必ず転がっている。自分の牌。捨て

牌。相手の牌の並べ方や視線の動き。開示される情報が増えれば増えるほど、局の後半になればなるほど、予測しやすくなる。その予測の仕方を、少し憶えるだけでいい」

「あー……って、それでもキツくない？」

「難しそうです……」

まあ、難しいな、うん。ただ、インターハイで活躍する選手やプロ、防御に定評がある選手は、それをして、訳の分からない躲し方をしてくる。

確か大阪の有名選手にもいたはずだが……えーと、ド忘れした。ちよつと面白い顔の、有名プロの娘。ここまで出てくるのに名前が出てこない。こういうことってあるよな。愛宕……愛宕、愛宕選手だ。下の名前忘れた。愛宕プロは憶えてるから出てきただけ。

まあそれはいいとして、

「男子の有名なプロ雀士は、電車に乗って、最初に乗ってくる乗客を当てる特訓をして強くなったらしいぞ。要は、牌には気配なんかがあつて、予測だけでなく、勘を鍛えることにも繋がるらしい。シックスセンス……第六感って奴だな」

「シックスセンス……カッコいいです」

えっ、なんか由暉子ちゃんがここまでで一番の笑顔を浮かべてるんだが。なに、そういうの好きなの？ オカルト系好き？ 地元の曰くつきの品とかあげようか？ 謎の効能がありそうで怖いけど。人に上げたら呪われそう。

「まあ、勘を鍛えるのは置いといても、予測出来るように鍛えることは出来る……ほら、これをやってみろ」

「え、なにこれ？ クロスワードパズル？」

「違う。当たり前牌を当てる……まあ、将棋で言う詰将棋か、パズルみたいなものだ」

俺は携帯を開いて、幾つかの問題を見せてやる。それは言った通り、パズルだった。

「自分の手牌と河の状況や相手の鳴いた牌なんかの卓の状況を映した問題だ。そこから当たり牌を当てればいい……ま、本当は対局で鍛え

の方がいいが、やらないよりはマシだろ。サイトを教えるから暇な時に家でやってみろ」

「はー、こういうのもあるんだ。さすがはプロ。色々知ってる」
「難しそうです」

うん、まあ……正直遊びみたいなものだが、ほんと、やらないよりはマシだろう。

特に初心者か、中級者の入り口くらいにいる人にはお勧めだ。まあ対局って良くも悪くも神経使うし、気軽にやりたい時もあるだろう。

そうやって岩館と本内にそれを教えたのだが、

「私はどうすればいいですか？」

「……真屋は……そうだな……」

気がついたら、近くに由暉子がいた。小さいから見下ろす形になる。いや……ちよつとあまり近づかないでほしい。この子、胸が大きいかから近いと触れそうだし、ちよつとムラムラする。真面目な時にそれをやってしまうと死ぬので今はなんとか平静を保つ。

「……まだなんとも言えないけどな。もう少し、打ってみるか」

「……なら、お願いします」

うん。言えないな。何か言おうと思ったけど、胸を見てたら頭から飛んだとか。俺ってホント馬鹿。下半身脳。

しかし由暉子の技量に、俺が何かを言えるのかと言う部分では間違っていない。獅子原もそうだが、俺が偉そうに知った風な口でアドバイス出来る相手ではないからだ。

獅子原は格上だし、由暉子も、オカルト持ちで、技量も殆ど変わらないと思う。まだ中学生でこれは、将来有望である。考えてると凹む。

……つーかオカルトはどうした……。何も変わってねえよ。変わってたとしても、普通に先生として打ち解けてる程度だし。しかもそれも、普通に接してるからそうなるだけで、別に獅子原と桧森と大差ない。

やっぱ三麻じゃないと駄目？ だとしても面子が揃ってるのに三麻をやるうとするのは不自然だしな。ロン和了りじゃないと駄目と

かなんだろうか……だとしたらまたキツいな……。

とにかく、試行回数を稼いでみるしかない。時間は有限だしな。

——しかし結局、その日の対局中、役満を和了することも、最初みたいなツキもなかった。

「——もう一度だ」

「よーし、どんどん行くぞー！」

「いやいやいや、もうそろそろ下校時間なんだけど……」

夕方になって日が落ちる。日落ちるの早いな。冬だし北の方だしな。しょうがないとはいえ、なんとも口惜しい。

くそつ、和了らせろ！ やくたたずの俺のオカルトが！ さつき和了ったのに何も起きねえとか詐欺かよ！ 俺はJK、JCとセックスしたいんだよ！ さつきからずつと接しててムラムラが溜まる一方だしよ！

なんて心の中で思ったところで、役満は和了れない。テンパることすら出来ない。くそ。さすがに……何局だ？ 数十局くらいじゃ無理だつてか？

最初に一度和了ただけでも奇跡な気がする。とはいえ、それで効果を発揮してないんだから意味がない。ふざけやがって。

「熱心ですね」

「まー明日も来るならそろそろ終わりでもいいんじゃない？ お腹空いたし」

由暉子と岩館がそんなことを言う。そこで俺は気づいた。

「……確かに、腹が減ったな……」

そういえば昼を食べるの忘れてた。うん、めちやくちや腹が減った。

もうこれ以上引き伸ばすことは出来ない。もう明日にしようかと諦めに、そして軽く自暴自棄に入った俺は……、

「……お前ら、ここらで上手い飯屋とか知らないか？」

「レストラン？ あー、色々あるけどね。何が食べたいかにもよるかな」

「私は肉が食べたい」

「爽には聞いてないでしょ」

焼肉か。そういえば、ジンギスカンなんかも北海道だと有名だな。

「……食べるか？」

「えっ」

俺はこの場にいる面子に言う。思うところがありつつも、

「案内してくれたらおごってやる。車もあるしな。まあ、家でも夕飯があるだろうし、大丈夫ならだが……」

ちよつとした気まぐれ……つて訳でもない。元々、そうしようと思っていたのだ。

金欠の癖に何を見栄張ってんだと思われそうだが、しょうがない。せつかく女子高生に先生と言われて指導してるんだから、ちよつとくらい部活の顧問気分を味わってもいいだろう。

とはいえ、会ったばかりの奴に着いてくるかは疑問だけどな。幾らプロ雀士とはいえ。とか思っていると、

「行く行く！ よし待ってる！ 家に連絡する！」

「先生、太っ腹じゃん！ いやー、是非行かせてもらいますよ」

「焼肉、素敵です……！」

「え、ええ……少し悪いような……」

獅子原を筆頭に、岩館が続き、本内も行く気の様である。獅子原が残る由暉子に向けて、

「ユキは？」

「私も大丈夫です。うちは親の帰りがかなり遅いですし……」

「それじゃあ辞退するのはチ力だけか」

「ちかちゃん、来ないんですか？」

「い、行かないとは言っていないでしょ！ 待ってて！ 親に連絡してくる！ ということで先生！ よろしくお願ひしますっ」

「お、おう……」

勢いに狼狽える。まさか5人全員来るとは。

レンタカー、4人乗りとかにしなくて正解だったな。

「近くのホテルに車停めてるが、付いてきて直接乗るか？ ここで

待っててもいいが……」

「近くのホテルって……ああ、あそこか。なら皆で歩いて行くか！」

獅子原がそう言っつて、部室の暖房などの設備を切つていく。いやほんと、遠慮ないつていうか、凄いな。でもまあ学生なんてこんなもんか。確かに、ご飯奢るつて言われたら余裕でついていく。ある程度信用しての相手なら。まあプロ雀士つて肩書の効果だな。普通ならこうはいかない気がする。

もうこうなつたら俺もヤケ食いしよう。せつかく北海道まで来たんだ。オカルト云々のことは一瞬忘れよう。

そうして俺は5人のJK。JCを連れて地元で有名な焼肉屋に向かった。地元の人の案内つて間違いないよね。

「ジン、ジン、てんててー。へいらいだー、ほーらいたー、はんにやにや、はんにやにや……」

「……先生。なにその変な歌。先生のテーマソング？」

「どこかで聞いたことある……」

「別に俺の名前とは関係ない。ネットだとそこそこ有名な海外の歌だ。ちなみに、羊肉は微塵も関係ない。アジアの英雄の歌だ」

「なにそれ……」

伝わらない。悲しいことだ。中学生の時、情報の授業中に死ぬほど見ただろ。モス〇ワの歌とかマイ〇ヒの歌とか。……伝わらないよな、うん。俺も歌詞忘れたから適当に歌つた。

ということだ。ジンギスカンが有名な焼肉屋へ。JK4人、JC1人と。しかも全員美少女。この状況だけ見たら俺つて勝ち組だな。うん、社会的立場は死んでるけど。

とはいえ席に案内してもらつて早速ジンギスカンパーティだ。ジンギスカンくそ美味そう。いや、今どきどこでもやつてるかと思いきや、北海道ほど美味い店はないし、北海道に来た時くらいしか食べないからな。というか北海道は食材そのものが美味いから困る。玉ねぎとか甘すぎてびっくりする。じゃがいもとかも美味しい。

「いえーい！ チカセンの肉もらいー！」

「なっ——」

「成香、その肉貰っていい？」

「だ、駄目です。上げません」

「お前ら、少しは落ち着いて食えよ……」

うーん、こういうノリも、昔は俺もやってた気がするが、今となつては懐かしいな……俺は眼の前のジンジスカンを箸で取ろうとして——取られる。は？

「岩館ア！ 俺の肉を取るとはいい度胸だなあ!？」

「いや、つい」

「ま、まあまあ、先生。私のお肉をどうぞ」

と、左隣に座っていた成香が肉を取り分けてくれる。優しい。この子、凄く良い子なのでは？ 明日はこの子を重点的に見てやろう。そして岩館には厳しくしていいらしい。なのでそうしようと思う。えこひいきではない。

とはいえ、なんだろうな。微妙にこういう雰囲気も嫌いじゃない俺がいる。若返った気分になれる、うん。俺、やっぱ高校とかのコーチが天職なんじゃないか……？ どこか雇ってくれるとことかないかな。プロには戻りたいけど、どうせ戻れないだろうし、こうやってJKと楽しく麻雀を指導する気さくなコーチ。聖職者。そしてたまにオカルトを使ってエロいことをする。性職者。我ながら思考がゲス過ぎる。

でも肝心のオカルトがなあ、と思う。俺は右隣に座る。唯一のJCを見た。

「？ どうしました？」

「いや……美味しいか？ 食べたいものがあつたら遠慮しないでいいからな？」

「はい。大丈夫です、先生。お気遣いなく。ちゃんと味わってますから」

その言葉通り、変わらない表情でもくもくと食べる由暉子。

その見た目は出会った時の眼鏡と制服に戻っている。……うーん、

やっぱり素晴らしいアングルだな。上から見下ろすと体格差とか背丈の差でロリ感がより感じられる上、自然と上目遣い。しかもその巨乳が……しかし、本内も岩館もそうだが、全然惚れられてる気がしねえ……。

もし発動しているなら——ん？ でもどうなんだ？ はやりさんや良子の時はホテルまで誘ってきて露骨に誘われたが……どうにかして二人つきりとかになれば誘ってくれたりするのかな？

だがそれも微妙なところだな。あの時は今思い返すと、明らかにおかしかったし。

今はこれ、どう甘く見積もっても普通に慕われてるだけだ。獅子原と岩館は割と気安いし。成香も実は怖がりなのかと思ったが、そういう様子でもない。松森は普通の学生が大人に接するようない感じだし。由暉子に至っては……表情の機微が少ないので全く分からない。この子、凄く可愛いし、俺は構わないけど、アイドルになるならもうちよつと——つて、ん？

「？ どうした？」

なんか見てるような視線を感じたので右を見ると、由暉子がこちらを見上げていた。なんだ？ と問いかけると、やはり真顔のまま、

「……目の下のクマ、凄いですね」

「……寝不足なんだ。不眠症気味でな。プロになってからずっとこうで……写真なんかも大体これで写ってる。おかげで格好も相まってやさぐれたホストとか言われるようになってな。凄いだろ」

「そうなんですな」

「……まあ、知らないか。二軍のプロだしな。ドランカーなんて呼ばれてたりもするんだが……」

「ドランカー……」

何かを思うようにそう呟いて、間が空く。何この子、会話難しいいや、会話が難しい訳じゃないけど、ちよつと笑わせようと言ったり、今日一日、他の子達とも合わせて会話を試みたが、基本、表情の機微とかがフラットだ。

まあ受け答えはしつかりしてるし、特に問題はないし、刺々しい感じもしないから、こういう性格なのだろう。別に嫌な感じはしないのでいいのだが、とか思っていると、

「かっこいいですね」

「えっ」

何故か俺の異名をかつこいいと言って、ちよつとワクワクしたような笑みを浮かべた。ええ……難しいこの子。やっぱそういうのが好きなのか？

そう思つて、俺は話題を振つてみる。

「……オカルト系の話とか興味あるか？ 超能力とか霊能力とか——」

「あります！ ——あつ」

ああ、やっぱそういうのが琴線に振れるんだな、と拳を胸の前で握つて目を輝かせた由暉子。勢い良く身を乗り出すように反応したため、胸が揺れた。だがそれよりも、

「つと——」

「あつ、ごめんなさい……！」

その時に手が近くのコップを倒してしまい、ジュースが俺の方に溢れる。

すると由暉子は目を見開いて、あわあわといった表情で謝つた。

ああ、やっぱ本気でよくいるような無表情系って訳ではなくて、良子みたいな普段はフラットなだけか、とその中学生らしい表情の機微を見ながら、

「あーつと、結構溢れたな、つてアイスかよ……まあ、お絞りで拭くか」

「ありや、ドジした？」

おしぼりを取つて机とズボンを拭くことにする。由暉子だけでなく他の皆も、目を向けてくる——が、大したことじゃない。

「先生、ごめんなさい……ズボンが濡れて……その、クリーニング代、出します」

「いや、いい。ちよつと濡れただけだからな。こんなもん安もんだし、洗濯すればいいだけだ。クリーニングに出すほどじゃない……。」

うか、暖房と火でちよつと暑かったところだし、むしろちよつどいいな。もつと濡らしとくか？」

「いやいやいや、濡らしてどーすんのさ」

「コップに中途半端に残ったから勿体ないかと思つてな。……まあそれはいいとして——あ、すいません。クリームメロンソーダ、もう一ついいですか？ 後、ちよつと零してしまつたんで拭くものを何か……」

と、俺は近くに通つた店員を呼びつけて、由暉子が零したクリームメロンソーダをもう一杯注文する——が、店員が去つていこうとする途中で由暉子が、

「あつ、私は——」

「零しちゃまつたんだからもう一つ欲しいだろ。遠慮するな。それとも別のが良いか？」

「……でも、少し悪い気が……」

「んー……いや、実は俺もクリームメロンソーダが欲しくなつてな。無くなつたのが残念だから、お前が飽きたら少しくれ。嫌なら別いいが」

「え……？ あ、はい。いいですけど……」

「焼肉の締めつてアイスとか食べたくなるよな。お前らも頼んでいいぞ」

「え、マジ？」

「冬に暖房が効いた室内でアイス食べると美味しいよな！」

「えー……どうせなら、こっちの抹茶プリンの方が……」

「あ……そういえばここの牛乳、家の牧場のものを使つてます！」

「家が牧場なのか。へえ、凄いな……あつ、すみません。ありがとうございます。あ、いや、自分で拭きます。ズボンにも零してしまつたんで。後、追加注文なんですが——」

「……………」

俺は下着まで濡れてズボンのひんやり感を感じながら、追加注文をすることにした。ホテルに帰ったら洗濯だな、うん。というか、何気に俺、由暉子に、JCに間接キスの許可を貰つたな。だがまあよくい

る変態キャラならそれに大喜びするのがフィクションでのお約束だが、幾ら美少女とはいえ、別に今更間接キスくらいで何とも思わない。間接キスするくらいならキスさせろ。もしくははおっぱい吸わせろ。やだ、俺の心の声、めっちゃアホっぽい……。

そんな馬鹿なことを考えながら、俺は焼肉店を後にし、皆を車で家まで送り届けてからホテルに戻ると、北海道での一日目を終えた。結局、普通の遠征である。はー、めっちゃやりたい。オカルトいい加減にしろよゴラァ!! 役満上がったんだからちゃんと発動しやがれ!!

アイドルの素質

「あー……そろそろ朝食バイキング行く、か……あー……」

ホテルの部屋って眠れる時と眠れない時があるよね。それ、大体は空調設定失敗してる時。暖房だろうと冷房だろうと、その時は暖かかったり、涼しく感じても、後から妙に寝苦しくて汗かいたりしてうんうんと唸る時がある。今の俺がそれだ。

北海道の朝。二日目の朝。暖房が少し効きすぎたビジネスホテルの一室で、俺は緩く目を覚ました。

今日は4時間は眠れたと思う、うん、俺的には割と眠れた方だといっただころだ。

とはいえ、途中で起きたりしてしまったし、眠いことには違いない。だから、ホテルのあの緩い寝間着を殆ど半脱ぎ状態にし、布団を横向きに抱きながらだらだらとしていた。

眠いからこうやって時間を潰してる訳だが、しかしそれだけではない。理由の一つは、この股間のギンギン具合が関係する。

「はあ、ユキ……」

俺は昨日、出会ったばかりのJCのあだ名を溜息付きで呼ぶ。このシーンだけ見れば恋煩いしてるようにでも見えるだろうか。まあ違うが。要はやりたくて、ムラムラしてしょうがないのだ。

最後にエッチなことを、プロをクビになって、はやりさんと良子と3Pをしてから一週間程が経っている。それから、一度も抜いてない。風俗は勿論だが、自家発電すらしていない。

俺は酷い時、一日3回は抜く……いや、ちょっとかつこつつけた。酷い時なら5、6回は抜いてる。時間がある時、主に休日、家でゴロゴロしてる時限定だけだな。

だがまあ、あまり他人に聞いたことはないが、こんなもんだらう？

男なんて。自家発電を憶えた最初の学生の頃なんて、猿みたいに抜きまくってたはずだ。俺も何回にも分けて最大15回くらいは抜いたことがある。知ってるか？ それくらいするともう痛いだけだ。そして何も出てこない。そして翌日、チンコが痛い。

さすがに今はそんなにすることはないが、仕事の日でも必ず一回は自家発電か風俗で抜いていた。ただなんだろうな。はやりさんと良子みたいなどんでもなくエロ可愛い美女と一応身近にいたからか、数回抜いても全然ムラムラしてたから困る。サキユバスの血とか入ってないよな？ オカルトがあることを知ってるから、0ではないのが怖いところだ。

まあそれは冗談にしても、俺ははやりさんと良子という極上の女の味を憶えてしまつて、なんというか、自分で抜くのが勿体なく感じてしまつていた。いや、その気になれば抜いてもらえるという事実がそこにあると、とにかく気持ちよく射精したいもんなんだ。まさに射精中心の生活。

「あー……やりてー……はあ、やりてー……」

うわ言のように欲望を直球で呟きながら、布団を横に抱きしめて、それを妄想上の女の子に見立てて腰を軽くカクカクと揺すつてしまふ。勃起した肉棒が下着の中でヤラセろ、そこに女がいるのか？ と勘違いをしてギンギンになっている。気持ち悪いと思うか？ だがそう思った奴、果たして本当に俺を馬鹿に出来るのか？ こういうことを一度もしたことがないと言えるのか？ 好きな女の子ややりた女の子、もしくはAVや二次元絵を見て妄想し、股間を虚しく擦りつけたことがないか？ ないなら幾らでも馬鹿にするといいが、まあ、男なんてこんなものだろう。一度性欲に火がつくとどうしようもなくアホになる悲しい生き物。程度の差はあれ、絶対頭の中には性への衝動を飼いこなしている。表向きは格好良く見せているが、家で一人になればこんなこと珍しくもない。誰も見ていないし、誰にも迷惑をかけない範囲でなら幾ら気持ち悪かろうと、欲望を丸出しにした発言をしよう構わない。この現実を女が見れば幻滅するだろうか。だがまあ、どれだけ情けなくキモかろうがこれが現実。大多数の男の真実。歳老いればどうか分からないが、若い時は射精のことばかり考えてる。

そしてこれは逆に、殆どの男が体験したことないだろうが、妄想が現実になった時の快感は想像を絶する、絶大な快樂だ。

家で一人、妄想していた叶うはずのないと思っていた出来事が叶う。はやりさんと良子。男女問わず羨む極上の美女。グラビアでも人気のアイドル雀士。それらと実際にヤツた時の、脳汁と言えいいのか、それは凄まじかった。

快感も、今までの全てが吹き飛ぶようなもの。異性への性衝動を覚えた思春期のような性欲が復活するほどの衝撃。

あれを何度だって味わいたい。それが出来る力が、オカルトが、俺にはある。——これで動かない奴がいるか？ どんなクソニートや社会不適合者でも、男なら外に出て行動を起こすだろう。それだけ性欲のエネルギーは強い。

アホなことをしているとという自覚はあっても止められない。このバイタリテイはまるで、何か大きなことを成し遂げようとする起業家や冒険家、研究者のような情熱だ。——やってることは最低だが。

まあ歴史上の偉人なんかも、案外俺みたいにハーレムを作ろうとして頑張ったのではなからうか。そんな誰にでも言えるようなことを思い、俺は布団から起き上がって頭を冷やそうとシャワーを浴び、ホテルの朝食バイキングへと向かうことにした。何気にホテルの朝食って旅行の楽しみなんだよな……。

——と、ホテルの自室では野望と下心に満ちあふれていたが。

「せんせーって眼のクマ凄いよね。アイシャドウでもつけてるの？」

「アイシャドウでこんななるかつ。岩館、昨日の話を聞いてなかったのか？」

「じゃあ炭だ！」

「どこの部族だつ。獅子原、俺は野球選手じゃないからな」

「どうして目の下に炭を塗ることが野球選手になるんですか？」

「ん……ああ、アイブブラックって言ってな。見たことないか？ 野球選手は光の眩しさを抑えるために目の下に黒いシールみたいなのを貼ることもあってな。今はグリースやステッカーだが、昔は炭を使っていたらしい。元々はアメリカで、アメフトの選手がやってたものだ

な」

「アメフト、怖いです……」

「ムキムキで凄いやなっ！ こう筋肉がぶつかりあう感じが！」

「爽、昔はやんちゃだったもんねー」

「アイブラック……かつこいいです。ちゃんと効果もあるんですね」

「……………つけるなよ？」

有珠山高校麻雀部への指導二日目。俺も含めた6人でメンバーを入れ替えながら麻雀を打つのだが、なんとというか、普通に雑談してしまっている。

なんだろうな。昨日よりは親しみを感じるか。昨日一日と焼肉でそれなりに打ち解けた気がする。

「せんせーって実家どこ？」

「鹿児島だ」

「遠いな！ こことは逆だ！」

「いや沖縄があるだろ……日本で2番目に南だな」

「鹿児島……黒豚さんが素敵ですっ」

「あとなんだっけ？ 火山？ 神社？ その辺りで生まれ育った？」

「いや、火山では生まれ育たないでしょ……」

「……家は……まあ、鹿児島市内だ。桜島は、同じ市内だし小学校の時に何回か。霧島神宮は霧島市で隣の隣だな。観光するのなら、基本的に自然巡りになるから若い奴らが見に来ても面白いかどうかは保障しない。島とか滝とか森とか山とか……」

「海とかは綺麗そうですが、海は駄目なんでしょうか？」

「どこもそうだろうが、観光地で紹介されるような場所は人も多いからな。穴場とかいっても紹介されてる時点で穴場じゃないし、夏休みシーズンの観光はお勧めしない。だがまあ、砂浜とか温泉とか綺麗な場所はあるし、そういう場所なら人が多くても落ち着けるか……どうしても泳ぐっていうなら、まあ、場所はなくてはならないが……」

「へー……それじゃ、もし行くことになったら先生に案内してもらおうか！」

えー……いや、ぶつちやけ帰省することになるからあまり……い

や、待て。そうなると彼女達の水着を見れるんじゃないか？

美少女JKの水着を人のいない浜辺で堪能する。俺だけで独占する。最高なのでは？ 実家に帰るのは気乗りしないが、そういうことなら考えなくもない。

特に由暉子の水着とか絶対破壊力高い。やべえ、超見たい。くっ、どうにかしてこの子らを地元まで連れていけないか……？ あっ、そううだ。はやりさんと良子に今度水着を着てエッチして貰おう。なんでそんな最高なことを今まで思いつかなかったのか。グラビアの水着とか着てもらって……あ、まずい。興奮してきた。自重しろ。今は一旦忘れろ。

しかし、まあ、やはり惚れられてる気はしないし、少し雑談しながらなら皆も隙があるだろうからと役満を上げないか試行錯誤してるが、全然そんな気配はない。獅子原は昨日みたいなヤバイ力は使っていないようだが普通に上手いし、俺としてもあまり気は抜けないのだ。

とうるか……やっぱりあれだな。どれだけホテルで意気込んだところで、実際に会って対局し、普通に慕われた感じで雑談するしかないから何とも言えない。

当たり前だが、下心なんて出せないし、出来ることなんて結局役満が和了れるように麻雀を続けるだけ。だからそれまでは普通に指導し、普通に大人として接するしかないのだ。相変わらず普通にいい匂いはするし、皆可愛くて良い子達だし、このまま普通に指導を終えても普通に楽しい思い出になるのでは？ だが……はあ、どうにか出来ないのか、マジで。全然来ない。普段なら役満が幾ら来なろうが、そんなもんだろって感じで全く気にならないのだが、今は一局毎に配牌や最初の数巡のツモ牌を見て、あっ無理、ってなる度に凄い残念になる。そこで途中交代したりして、対局してる四人を見たり、残った1人にアドバイスをしたりする。その間は当然役満のチャンスはない。

「岩館、手牌見えてるぞ」

「え……わっ、ほんとだ！ やっべー……」

「気をつけろよ。手牌を容易に晒すと当たり前だが不利になる。後、お前全然鳴かないな。もう少し副露してみろ」

「えー、でも高い点数で和了りたいじゃん」

「それで和了れるならいいが、お前は門前するまで粘った挙げ句、他家に振り込む率が高すぎる。粘り強いのもいいが、聴牌が遅いと話にならないし、ちよつとスピード重視の打ち方も試してみないか？」

「あー、うーん……でも、稼ぐ練習した方が団体戦だと有利じゃない？」

「いや、収支が順位に影響する個人戦と違って、団体戦は最終的な点数さえ他のチームにさえ勝っていればいい。なら戦略として、安い手で流しまくってこちらは極力振り込まず、点差をそれほど変動させずに次に回すのも手だ。仮にこのメンバーで団体戦に出るとするなら、大将は獅子原だろ？」

「まあ、そうだね。一応そんな風に考えてるかな。エースの集まる先鋒に私が出てもいいけど、最初に点数上げて順位を上げると、次から狙われるだろうしね。でも私だけで勝てるほど甘くはないだろうから私も含めて、もつと練習しないとね」

獅子原がフラットな笑みのまま言う。結構やんちゃでノリ重視っぽい奴だが、麻雀のことになると部の中で一番見立てが的確だ。実力も一番で、実は頭の中はかなり冷静に見ているのだと思う。このチームは由暉子を目立たせることを目標に置いているが、柱は実力的にも精神的にも獅子原だろう。絶対的エースにして、分析も出来る指揮官としても有能な若きホープ。しかも強力なオカルト持ち。……なんでこんなのが埋もれてるんだ？ インターハイ常連校でもエースになれる逸材だぞ？

まあそこは獅子原の自由だし、友人との縁を重視したのだろうから特に俺が何か言うことはないが、それでも獅子原がいるのといないとじゃ相当でかい。

が、獅子原一人に頼りすぎるのは負担が大きすぎるし、いざ獅子原が成績を残せなかった時が厳しい。由暉子も中3にして既に全国を期待出来るレベルの打ち手。松森だって悪くない。聞けば小学生の

大会ではベスト8に入れるくらいには麻雀をきちんと続けてるらしい。正直、この三人だけでも地方予選で結構いいところまでいけるだろう。有珠山高校が出場することになる南北海道予選には琴似栄というインターハイ常連校があるが、途中で当たりさえしなければベスト4は余裕だと思う。琴似栄を倒せるかどうか。それとインターハイで結果を出して目立てるかどうか。彼女達にとって重要な課題はそれだ。

それには、岩館と本内の成長が、ともすれば一番重要かもしれない。本内はこのまま初心者に毛が生えたレベルで参加するのはさすがに厳しいし、岩館も全国レベルの相手と張り合うには、やや力不足だ。まあそれでも獅子原達なら予選を突破していいところまで行く可能性はあるが、それでも彼女達が成長すればそれだけ獅子原や由暉子が楽を出来ることに違いはない。

……なーんて、偉そうにクビになった雑魚プロの分際で分析してみたが、何言ってるんだろうな。実業団やプロで実績を残した打ち手ならともかく、俺なんか言っても全く説得力がない。俺の判断なんかより、獅子原や、己自身で判断させた方が正しいだろうし、後悔もしないだろう。

だが俺は指導してほしいと呼ばれた身だ。だから俺はフォローと
いうか補足をしながら、その間を取ることにする。

「……まあ、こうは言ったが、高い手を狙っていくスタイルで成長することもあるし、岩館がそれを好むならその方が合ってる可能性もある。どちらがいいかは岩館が選んでくれ。俺はどちらでも成長出来るようにアドバイスさせて貰う」

と、さつきあんなこと言っておいて、いきなり掌返し。どっちでもいいよ、と。やっぱ俺向いてないんじゃないか？ 普通は正しい判断だと思つたらそうするように言つた方が良い筈だ。指導者つてのは決断力なんかも重要だからな。じゃないとオーダーを決める際や、選手のどの部分を育てるかで迷いすぎるのもどうかと思う。選手の自主性に任せると言えば聞こえはいいが、俺の場合は自分の判断を信用しきれず、ただ優柔不断で責任を半ば放棄しているようなものだ。

実際どうなんだろうな、と自嘲していると、岩館は少し考え込んでいたが、

「……うん、じゃあちよつとやってみる。せんせーや爽の言う通り、成長の可能性を探った方がいいからね！」

「そうそう、その意気だ！ ユキのために頑張ろう！」

「よっしゃー、鳴きまくるぞ！ 単騎待ちで和了りまくる！」

「いや、極端過ぎでしょ……」

ほんとだよ。松森の言う通り、単騎待ちまでする必要はない。そこまでは上がり牌が狭まるからむしろ上がりにくい。

とまあ俺が呆れていると、後ろから袖を引っ張られる。

「あの……先生。私にも、何かもつと出来ることはありませんかっ」

対局から外れていた本内だった。この子も、高1にしては小さいよな。なんだか小動物チックな可愛さがある。それでも、由暉子よりは大きい。大きくて小さい。由暉子は、小さくて大きい。比べるとか最低過ぎて苦笑。なにわろてんねん！

「……本内は、まずはセオリーを覚えないな」

「……そうですね」

初心者以上、中級者未満といった本内に、正直言えることはあまりないというか、普通のことしか言えないのだが、そうやって露骨にしゅんとされると罪悪感が凄い。美少女ってこういうところズルいと思います！ 俺は何も悪いことしてないのに、悪い感じになる！ いや、食ってやろうと考えてるクズだけど、まだ未遂だからまだクズじゃない！ 多分。

「……まあ、それを覚えたら応用を憶えるといい。麻雀は牌効率通りに打つても良い結果が出るとは限らないからな。本内は物覚えも早いし、それに初心者ってことは伸びしろの限界がこの中で一番見えないうってことでもある。努力を続ければ、ひよつとしたらこの中で一番強くなれるかもしれないぞ？」

「先生……」

「そうだぞ成香！ 私なんて追い越せ！ でも身長は追い越すな！」

「身長は駄目なの……？ まあ、なるかは昔からがんばり屋だし、きつ

と強くなるわ！」

幼馴染とかなんだろうか、獅子原に続いて、桧森がそう元気づける。すると本内は頷き、

「爽さん、ちかちゃん……はいっ！ 私、強く素敵になれるよう頑張りますっ！」

は？ 可愛いんだが？ あざといんだが？ というか眩しい。なんだこいつら。どいつもこいつも良い子かよ。学生時代にこんなやり取りしたことねえよ。俺、微妙に嫌われてたっぽいし。友人も浅い関係の変な奴しかいなかったし、麻雀部は男子も女子もそれほど仲の良い奴はいない。補欠だった後輩の女子とかちよつと交友もあったが、周囲のやつかみがうざかったんで結局俺の方から離れた。まあ、今でもたまに連絡してくれたりもするが……プロになつてからは本当に連絡を返すくらいか。今はそういうのもないし、麻雀打って役満上がれば……うーん、いい話っぽい雰囲気の中でこの思考。これはクズですわ。

「……少し、退席します」

とか考えていると、対局を終えた由暉子が席を立った。間髪入れず獅子原が、

「トイレか——」

「そこまでー！」

由暉子がぴしゃりと獅子原の発言を遮る。ええ……さすがにそれはねえよ獅子原。幾ら俺でもないわ。由暉子みたいなタイプが退席するって言った時点で何となく察する。その当たりの機微は氣をつけないといけない。はやりさんも直接的な言葉を使わないタイプなので慣れた。それに、俺は性欲は強いが、そういう趣味はないので例え美少女がお花を摘みに行つたところで何とも思わない。いや……まあネットとかでさ、よく美少女がトイレに行くってなると立ち上がる奴とかいるけど、まあ笑うけど、ネタだろ？ もしくは二次元限定だろ？ リアルで考えろ。普通に無しだ。少なくとも俺は。本当にそういう趣味の奴は知らん。ただ、リアルでそういうことさせてくれる彼女とかいんのか？ と思う。特殊な性癖持つてる奴って大変そ

うだなつて……。

その点俺は女の子の肉体そのものに興奮するだけの至ってノーマルだから問題ない。おっぱい星人だつてくらい。どうでもいいが、おっぱい星人つて実はもう死語らしい。問題はないが、AVとかエロ漫画とか官能小説とか漁つてると微妙に困る。いや、ああいうので、エロいと評価されてる奴つてさ、ちよつとマニアックなのが多いんだよな……レイプしたり、ハードなSMだったり、寝取り寝取られ……輪姦したり、軽くスカ入つてたり……何故か陵辱系が多い気がする。こう、女優やキヤラは可愛いのに、プレイの内容はこちらの好みを外してくるのだ。まあ需要があるからしょうがない。性癖の違いは人それぞれ。それぞれが好きなものを楽しみ、他のジャンルには干渉せず、寛容すればいいのだ。——が、それでも言いたい。もうちよつと純愛ハーレム増えろ。それが巨乳モノならなおよし。複数の男とか、寝取りとか、個人的にはちよつと分からん……忌避感を感じる訳ではないが……うん、これ以上はやめよう。個人的なこととはいえ、この思考をその趣向の人にもし見られたら怒られそうだ。皆違って皆良い。エロに貴賤はない。皆でエロ界限を、それぞれのジャンルを盛り上げて行こうじゃないか。

とかなんとか考えてたら、俺までトイレに行きたくなってきたな……このタイミングで行くと由暉子を追いかけてみたいでアレだし、少しタイミングをずらすか。

と、俺は由暉子が部屋を出て少しした後で、トイレの場所を聞いて部屋を出た。

「はぁ……寒」

やっぱり北海道の冬は冷えるな、とトイレから出て思う。南の人間だから寒さには強くない。外は雪が降っている。雪も北海道や東北、北陸に住む人には見慣れたものかもしれないが、俺にとっては珍しい。昨日、何気に転けそうになって怖かった。車の運転もスリッパしないように普段より注意してる。やっぱり、試される大地だ……。

寒いし、暖房ぬくぬくの部室にさつきと戻ろうと廊下を歩いていると、

「あ……う？」

一階の窓の外、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下から少し外れたところにあるベンチに、由暉子が座っていた。何やってるんだ？ 絶対寒いだろ。北海道の人間とはいえ、態々外のベンチに腰掛けるとか……。

というかトイレに行ったと思っていたが、まだ戻ってない？ もしくはそもそも行ってない？ 分からん。分からんが……どうするか、これ。

「……うーん」

俺は迷う。外寒そう。迷った末に、俺は廊下の奥の扉を開けて、由暉子の元に歩いていった。

「何してるんだ？」

「あ……先生」

俺が声を掛けると、由暉子は相変わらずのつぶらな瞳で俺を見上げてきた。

由暉子の格好は昨日と似たようで少し違う。中学の制服。眼鏡は同じだが、髪を下ろしている。うーん、やっぱ可愛い。小さい。なのに胸は大きい。ビジュアル力高すぎる。

「外、冷えないのか？」

「はい、冷えます」

「……なら部室に戻らないのか？」

「……少し考え事をしていて」

「……そうか」

一応、なんで外にいるのかと会話をして聞き出すことに成功したが、そう言われると何とも言えないな。考え事か。

もしかして、俺が由暉子のおっぱいに注目していることがバレたか？ 俺の煩惱に塗れた視線が。いや、でも俺は普段は割と気づかれてない自信がある……と思う。はやりさんもそう言ってたし。もしかしてリップサービスで、実は気づいてたりするのかな……。

それはともかくだ。マジでどうしよう。ちよつと、この機会にオカ

ルトが発動してるかどうか確認……する方法なんてないが、どうだろうな。少し様子を見てみるか。

「よいしょつと……はあ、結構積もるもんだな」
「……………」

俺はベンチの上の雪を手で払う。学校の敷地内の降雪量はこれ、どんなもんだ。数センチ？ いや、よく見ればなんか雪かきされたっぽい形跡があるし、学校が休みでも事務員とか業者がやってたりするか？ 雪かき事情はよう分からん。大変そうだな、としか。

とはいえ俺はベンチの上に座って、特に話しかけることもなく由暉子の様子を窺うことにする……が、よく考えたらこの行動がすでに怪しいというかキモいのでは？ 黙って隣に座る出会って二日の男。多少なりとも打ち解けてなかったら通報だな。

だが由暉子は動かない——あ、いや動いてる、か。動いたけど、止まってる。こちらを見た。不思議そうにしてるのか？ なんでいきなり隣に座ったの？ キモくない？ みたいな。由暉子ちゃんはそんなこと言わないし思わないと思います。

とか思っていると、再び由暉子が正面を向く。何か喋ってほしい。勝手に座っておいてなんだが、やっぱ寒い。手袋とか買っとけば良かったな……北海道の冬を舐めてた。手の冷えて致命的だわ。

「……少し聞いて貰ってもいいですか？」
「んっ……ああ、いいぞ。何か相談か？」

と思つてたら由暉子の方から来た。告白とかだったらいいな。まあ違うな、この雰囲気は。

「私、先輩方が期待するようなアイドルになれるでしょうか？」
「……それは俺には何とも言えないが……自信がないのか？」
「どうでしょう……ただ、瑞原プロの記事や動画を見ました」

あー、俺もよく見る見る。どういふところが良かった？ ライブとかであのおっぱいがたゆんたゆん揺れてたり、最高だよな——なんて言ったら一瞬で評価が地に落ちるな。どう考えても同じ目的ではない。真面目な話だろう。俺は一応頷いて、
「……………それで？」

「すごかったです。キラキラして、笑顔でステージを駆け回って、麻雀も強い」

「まー、やはりさんはプロ雀士の中でも上位数%の実力者、トッププロで、しかもアイドルだからな。そりやすごい」

俺なんかとは比べ物にならない。だからそれを言われても俺も、あの人凄いよ、としか言えない訳だが。

「……正直、想像が尽きません。先輩方の期待に応えて、努力する気ではいますが……壁は高いですし、なんと云いますか、もしそれに応えられなかったらと思うと……」

「……ああ……」

なるほどな。由暉子がいつもの表情のまま——いや、僅かに下を向いて表情を落としたところで気づく。

それは俺でも分かる。俺も経験したことがあるものだからだ。それを告げてやる。

「まあ……期待されて、それに応えられなかった時のことを想像すると怖いよなあ」

「……」

由暉子が無言のまま、僅かにスカートを手で握った。まあ無理もない。

この子はしっかりとっている。たった二日だが、正直、俺なんかよりしっかりと考えた考えを持つてるかもしれない。最近の子供って思考が大人びてるよな。俺なんかガキ丸出しだったつてのに。

しかししっかりといても、まだ15歳の子供だ。

大きな期待を寄せられ、プレッシャーを感じてしまい、失敗した時のことを考えて怯える。それを乗り越えられるかは周りの助けや、もしくは精神力が必要だよな。慣れれば、プレッシャーに怯えることもなくなる。周囲の期待も小さくなるし、そもそも失敗することに慣れてしまえばいい。それで解決する。

だが……まあ、由暉子のことをそれほどまだ知らないが、彼女にとって、初めての大きな挑戦なのではないだろうか。

いじめられっ子だと言っていたし、先輩である獅子原達との絆を大

切にしようとしている。その期待に応え、努力し、挑戦しようとしている。

インターハイで活躍し、アイドルになるという目標。とてつもなくデカイ挑戦だ。成功すればその喜びは無二の輝きとなるだろうが、その反面、挫折し、失敗した時のリスクも高い——なんて考えるだろう。ひよつとしたら、失敗することでその繋がりが消えたとでも考えているのかもしれない。そんな訳ないと思うけどな。

しかし俺が言ったところで心には響かなそうだな。俺にはずっと一緒にいたいと思えるような仲の良い友達なんていない。挑戦することも、中学の半ば、高校に入る頃には諦めた。多少それまでの蓄積分と多少器用だったからそれなりに成績を出してプロにもなった。

もう熱くなれるようなことは何も残ってない。まあ性欲くらいか？　だがこんなもん、人に誇れるものじゃない。道徳的には最低なものだ。

「先生……私は、アイドルに向いてるんでしょうか？　本当に、なれるんでしょうか……？」

だからそんなことを言われても俺には分からない。アイドルじゃねえし。アイドルになったこともなければ目指したこともない。人気者とは程遠い男だ。可愛いとは思うが、それとアイドルになれるかは別問題だ。そう言っただけでもいいが、正直気休めにしかならん。

だから俺はこう答えるしかない。

「……悪いな。俺には分からない」

「……そう、ですか……」

由暉子が残念そうな顔をする。

が、俺は一言添えてポケットから携帯を取り出した。

「——俺には、な」

「えっ？」

由暉子が間の抜けた声でこちらを見る。その間に俺は携帯を操作し、お目当ての連絡先にコール。

出るかどうかは分からないが——少しして繋がる。運は良いみた

いだな。俺じゃなくて由暉子は。

『……と、東郷くん!? どうしたの? 今北海道だよね?』

「すみませんはやりさん。今大丈夫ですか?」

「えっ……!?!」

由暉子が驚いた表情を浮かべるがそつちに反応している場合ではない。俺ははやりさんが慌てた様子であることに不安を感じながら返事を待つ。仕事中だったかな、やっぱ。

『う、うん……少しなら大丈夫だけど、どうしたの?』

が、どうやら大丈夫だったようだ。俺は事情を話すことにする。

「実は、こつちで牌のお姉さんを目指してる中学生の子と会ったんですが……ちよつとその子の話を聞いてもらえませんか?」

『はやつ?! えっ、私、まだ引退しないよ!?!』

誰も引退しろなんて言っただけで落ち着いてほしい。はやりさんはまだまだイケる。キツいとか言ってる奴は分かってない。これがいいんだよこれが。というかはやりさん、一人称が私になってる。よっぽど焦つたのだろうか。

「いや……なんて言うんですかね……ちよつと悩んでるみたいなんで……それに牌のお姉さんじゃなくてアイドルでもいいらしいので、はやりさんは心配しなくてもいいと思います」

『ほっ、そうなんだ。うん、それならいいよ。ちよつと顔も見てみたいから画面切り替えていい?』

「はい。それじゃあ切り替えて代わります」

「え、あ、あの……」

と、俺は画面をテレビ通話に切り替えて、戸惑う由暉子に手渡す。ここからは俺の関与は必要ない。

『もしもし——わっ、可愛い! あなたがアイドルになりたいって子?』

「は、はい……えっと、真屋由暉子と言います。本物の、瑞原プロ……ですよね?」

『そうだよっ☆ はやりんって呼んでほしいなっ☆』

アイドルモードのはやりさんが画面の中で笑顔でウィンクする。

はあ、久し振りに見ると可愛いし堪らん。ちょっと、どうにもならなかったら後でホテルで変則的なプレイでもお願いしようかな。いかん、ちよつとゲスな思考はやめておこう。なんか大事な話になりそうだし。

『それで、悩みって何かな?』

「……はい。私、学校の……これから入る学校の先輩方にアイドルになれるって期待されて、来年のインターハイで活躍するために練習してるんですけど……」

『うん』

「私には、取り柄とか何もなくて……今まで、人からの雑用とか、頼まれごとだけをこなして自分の価値を感じていたんです」

『うん』

「そんな時に先輩方が私を誘ってくれて……アイドルになれば、誰かを喜ばせることが出来るって言われて……そうやって言ってくれた先輩方の期待にも応えたくて……」

『うん』

「でも私、身長は低すぎるし、胸は大きいし、あまりアイドルに向いてないんじゃないかって……」

『うん。それで?』

「……もし、アイドルになれなかったら……先輩方の期待を裏切ってしまったら……どうなるんだろうって、考えてしまって……」

そう告げる由暉子の表情はいつもより少し不安そうだった。はやりさんはそれに相槌を打ちながら優しい笑顔で聞き続ける。

そして続けて言った。由暉子が、

「だから、教えてください。私、アイドルに向いてるんでしょうか?」

……それとも、やつぱり、私みたいな子じゃ……」

と、由暉子はそこで俯く。その表情は少し物悲しさがあった。

だがそんな由暉子にはやりさんは画面の中から、

『……由暉子ちゃん、でいいかな。こっち見て』

「え……?」

画面の中のはやりさんが由暉子を呼ぶ。そしてアイドル衣装のは

やりさんは、その右手を顔の横まで持っていく。

その手に握られているのは、麻雀牌の白だ。真っ白の、何も描かれていない牌。そのことにおそらく由暉子も気づいている。

そうして言った。やりさんはその白を一瞬で、

『——元気になって!!』

「っ、わ、白が中に……! 凄いです……! 手品ですか……!?!」

由暉子が言うように、はやりさんが白を中にする手品を披露する——が、由暉子、少し目を輝かせすぎだろ。元気になるのはいいんだが、変わりようが……。

「……あつ、す、すみません……取り乱しました」

そのことに由暉子も気づいたのか、少し恥ずかしそうに謝罪する、が、はやりさんはそれを見て嬉しそうな笑顔で、

『ふふつ、元気になってよかった。……それと、そうだね。由暉子ちゃん、誰かを、その先輩達を喜ばせたいんだよね?』

「はい……それが……?」

はやりさんは言った。それなら、と、

「——人を喜ばせようとするってことは、由暉子ちゃんにもアイドルの素質があるのかも」

「——」

はやりさんのその……どこか実感の籠もった言葉を聞いて、由暉子は一瞬、呆然と目を見開いた。

そして少しして、その言葉を噛み締める。表情を普段のものに戻して、

「……私、瑞原プロほど媚びれないですけど大丈夫なんですか?」

『はやっ!? だ、大丈夫だよ☆ はやりも、昔は……うん、由暉子ちゃんも、そのうち笑顔で、皆を喜ばせることが出来るよっ』

「そうなんですか……」

『そうそう! それにさっき言ったことだけど、はやりだって身長はそんなに高い方じゃないし、胸だっておっきいよ!』

「……なるほど、確かに。需要があるんですね」

うん、それには俺も頷ける。需要はすっごいある。主に俺。俺みた

いな奴にぶつ刺さる。まあ後、女性もなんだかんだで可愛い子が好きだし、全然イケる。

『その東郷くんだったって、おっぱい大きい方が好きなんだし!』

「……そうなんですか?」

「……………えっ」

おおいつ!? なんて言うんだはやりさん!? バレたら引かれる、もとい、色々と台無しじゃないか! セっかくここまで隠してきたつてのに!

まさかのはやりさんからの口撃に怯む俺。なんて答えればいいんだ。ここで嫌っていうと、それはそれで由暉子の励ましにならないっていう……いい、いやまあ、普通に、ナチュラルに答えればいい。いやらしい感じがなければ普通に聞こえるだろ。

「……まあ、まあ、そう、だな……大きいのが好き、だな……うん」

「……………そうですか」

『うんうん! だから大丈夫☆ 後は……笑顔かな。アイドルになる秘訣は!』

「笑顔……」

由暉子が呟く。うん、笑顔ではないが、普段の調子が戻ったようだ。「……ありがとうございます、瑞原プロ。おかげで、少し迷いが晴れました」

『うん! それなら良かった! 頑張ってね☆』

「はい」

よし、これで一件落着だな!

我ながらいい仕事をしたと思う。まあ俺が同じこと言ったところで説得力皆無だからな。

アイドルの悩みはアイドルに。アイドルといえば瑞原はやり。目指すアイドルそのものの言葉は、おそらく由暉子にちゃんと届いたことだろう。

まあ、ほんと、俺なんかには眩しすぎる。なんかゲスい思考をする気にもならないし、携帯預けてちよつと飲み物でも買ってこようかな。ホットの飲み物。ぶつちやけ、実はさつきから寒すぎて震えてる

んです！

と思つてその場から離れようと思ひ、気づく。そして気づいた瞬間に、背後から声も掛けられる。

『あ、それじゃあ東郷くんに代わつてくれる？ 通話に切り替えてから』

「あ、はい。先生、お返します」

「ん、ああ……」

もういいのか、と思つたが返された携帯を思わず受け取つてしまふ。そして通話モードに戻つた携帯に耳を押し当てる。すると、

『……えへへ、東郷くん。優しいね』

「え？ あ、いや……別に……俺はまあ、ちよつと……まあ、一応指導してる身として、それっぽいことしてみただけ、みたいな……？」

急にそんなことを言われて面食らう。いや、下心満載で近づいて、他力本願で電話で仲介しただけの俺だ。ぶっちゃけ褒められても困る。目的は未だゲスいままだ。

だがはやりさんは優しいげな声色で、

『由暉子ちゃんのこと、ちゃんと見てあげてね？』

「あ、はい。それはまあ……とはいえ、俺が出来ることなんてたかが知れてると思いますが」

『えー、そんなことないと思うけどな。ふふ、そろそろお仕事だから切るね？ また連絡するから』

「あ、はい。それじゃあまた」

と、俺は別れの言葉を言う。通話が終わるといふその瞬間、

『……そういうところ、大好きだよ——ちゅっ♡』

「っ——へっ？ ……え、あ、は、はやりさん!？」

耳にその柔らかさを伝えるようなリップ音が届き、俺は一瞬背筋を震わせ、戸惑つてしまひはやりさんの名を通話口に呼ぶ。

だが耳からは何も聞こえない。既に通話は切られていた。

「……………」

俺は切れた携帯の画面を見ながら、思う。

くつつつつつつつつつ可愛いんだが!? は!? は!? 何今の!?

やばくね？ 何ちよつと恥ずかしがって電話ぶつ切りしてんの!!
恥ずかしがるくらいならやんなきやいいのによお！ でもそれなの
にやっってしまうくらい俺に惚れて——ぐううううう！ くそ、距離が
恨めしい！ 目の前にいたら分かせてやるのによお！ この昂り
を！

いかん。落ち着け……こんなところで興奮する訳にはいかない。
マイサン、今はお前の出番じゃない。座ってる。気持ちは分かるが、
ここで立ち上がっても何も出来やしないんだ。悲しいことにな。

くそ……気分的には最高だが、性欲は滾る一方だ。オカルトも全く
発動しねえし……だが効果が絶大であることは改めて理解した。以
前までのやりさんなら俺にあんなことしないうらうしな。

だが肝心の昨日の二回目は不発。やっぱ訳分からん。なんだ？
やっぱり役満だけじゃない条件でもあんのか？ それとも——、

「あの……先生」

「ん……ああ、そろそろ戻るか。お前も、悩みは解消しただろ。それ
に——」

「はい——見えていますね」

由暉子に声を掛けられ、そして一緒になって校舎の方を見る。そこ
には、

「あ、目があっちゃった……」

「ど、どうでしょう……？」

「いや、ほら、私らもトイレに行こうと……ね、爽？」

「そうそう、それも大——」

「——そこまで!!」

由暉子がここから校舎の扉の影に隠れる面々に大声で注意する
……うん、どつちにツッコむべきかな。爽の発言か、由暉子の大声
ツッコミか……まあ、どつちでもいいか。

「戻るか……」

「そうですね……あの」

「？ まだ何かあるのか？」

正直寒い。手がかじかむ。頭に雪も積もってきた気がする。しか

しだからといって無視する訳にはいけないので立ち止まると、

「……先生。ありがとうございます」

腰を折ってお礼を告げてきた。胸が……いや、というか、

「……俺は仲介しただけだからな。ま、悩みが解決してよかったな。獅子原達もあの様子だと、失敗したところで縁が切れることはないだろ。お前の弱いところも見てみたいだし」

「……はい、そうですね」

そう言つて、由暉子は笑みを浮かべた。うお、可愛い。なるほど。普段の表情も可愛いが、中々に笑顔の破壊力も高い。はやりさんの見立ては間違つてないな。

「……先生も、ちゃんと見てくれますか？」

「ん……俺は……まあどうだろうな。明後日には帰るし、いつふらつとプロじゃなくなるかも分からない二軍プロの俺だし、保障は難しいか」

「……そうですね」

由暉子も頷いた。まあ、実際、実はもうプロをクビになつてるし……また会える保障もないしな。俺に惚れたりするなら分からないが、今のところは出来てないし、仮に由暉子がプロやアイドルになる頃には、俺は麻雀界限からは消えてるだろ。まあ、細々とコーチとかやれてたりすればいいんだが……。

ぶつちやけ、この子、可愛すぎて家に持つて帰りたいくらいではあるんだが……それが叶いそうにないのが虚しい。くそっ、ほんとオカルト頼むぜ……。

心の中で自分のオカルトに対する愚痴を呟きながら、俺は由暉子と共に部室へと戻った。

——だが、その機会が訪れたのはその直後だった。

「うーん、こつちかなあー？ それともこつちかー？」

「揺杏ちゃん、あんまり口に出してると当たつちやいますよ……？」

「早く捨ててください」

「まあまあ、いいけどね。身内との対局なら公式試合みたいに厳格にする必要ないし、少しくらい待っても。——ねえ、東郷先生？」

「ん……まあ、そうだな」

と、対局者である播杏、由暉子、爽——その爽の声に頷きながらも、俺の意識は手牌にしかない。何故なら、

……来た……ッ！ 大三元聴牌……！

上がり牌は白。白をツモるか、誰かからの振り込みを待つのみ。

やつとだ。役満だ役満！ なんだろうなこの高揚感。昔のポ○モ
ンで孵化厳選が終了する時のそれみたいな。最近のは簡単になっ
てるんだよね。お手軽でいいけど。

だがここでツモれば……あるいは誰かが振り込めば、今度こそ誰か
が俺に惚れる可能性がある。岩館か、獅子原か、由暉子か。頼む！
今度こそは！ 俺に役満を！ さっきのはやりさんのあれもあって、
そろそろ限界なんだ！

そんな最低な願いを込めて、俺は心臓をバクバクさせながらその時
を待つ。後ろで松森が俺の手牌を見てたが、頼むから表情に出して悟
られるなよ。もうチャンスは来ないかもしれないんだからな。

そうして、上家の爽が……捨てる。一筒。違う。俺がツモる。北
じゃない。下家の播杏が……迷った末に捨てたのは………六索。
違う！

後、二巡でこの局も終わる。流局はやめろ。せめてツモるかだれか
振り込んでくれ！ 頼む！

俺は願った。そして次は対面の由暉子の番だ。

「……………」

由暉子が山から牌をツモった。由暉子は立直済み。ツモ切りしか
選択肢はない。

一瞬、その牌を見て動きを止めた由暉子だが、それを河へと捨てた
牌は——

「………、ロン！ ——大三元ツ！ 32000点!!」

「！」

——白だった。

その瞬間、由暉子は昨日と同じ様に、一瞬驚いたように目を見開く。
だがそれは他の皆も同じだ。どうなるのか。また不発か？ まだ

わからない。

「まーた大三元!? 最下位じゃん!」

「……東郷先生って、実は大三元を和了れる特殊能力とか持つてる? イカサマ?」

「そんな能力持つてたら最強だろ……イカサマでもない」

「東郷先生がまた役満……素敵です!」

「二日で役満二回って……」

俺が一位だった爽をまくり、対局が終わる。というか、何気に爽に勝てたのもヤバいな。役満上がったんだからまあそういうことになる可能性も高いが。初めて勝ったのが情けない。この魔物め。

何気に皆が俺のことを時折、東郷先生と呼ぶようになったのは……なんだろうな。さっきのやり取りを見てたからなんだろうか。まあ悪い気はしないので特に何かを言うことはない。

それよりも……由暉子の様子はどうか? 俺は彼女を試してみるが、

「……大三元……何度も出ていいものじゃないですね」

「ねー、ズルいよねー? 罰としてせんせー、今日もご飯奢つてよ」

「岩館……別にズルくないだろ。後、別にご飯に連れていくのはいいが、二日連続とかいいのか?」

「へーきへーき! 合宿みたいなもんで、皆と食べるって言うてあるし!」

「先生は何か食べたいものとかありますか……?」

「昨日はお肉だったし、私は魚が食べたい」

「爽には聞いてないでしょ……あ、もし行くなら連絡するから、少し待つててください」

……いやいいけどさあ……うん、ちよつと由暉子の様子が全然変わってる気がしないんだけど? は? また不発か? 二回も和了ったのに? 直撃させたのに? はー、このオカルト、ほんまつかえ。

もう今日もヤケ食いするしかない。なんだ、今日は海鮮か? え、カニ? カニ鍋? カニだけじゃない? 元有名板前のおっちゃんかやってる海鮮料理専門店のお店? いや……そんなの絶対美味いや

ん……でも、6人分も奢らなきゃならないの？ そんなの無理——
—行けらあ!! しょうがねえから行ってやんよお!

俺はヤケクソ気味に、今日もまた全員を連れて飯を食べに行くことにした……これ、獅子原からの15000円とか余裕で飯で使い切るどころかマイナスになるな……もうヤケクソ気味というか、性欲を満たせないならせめて食欲くらいは……って気持ちだから別にいいけど。

「——この魚屋は世界一美味しい。魚、刺し身、食べる」

「あ、今度はなんか聞いたことある!」

「私も、聞いたことがあります……! お父さんが歌ってたような……っ。」

「私は分かるわ! 昔の有名なアイドルソングよね!」

「よく分かったな桧森。正解だ」

「まあ、ここは魚屋じゃないけどね。魚あるけど」

獅子原にそうツッコまれる。が、別にそれはいいだろう。北海道の海鮮! 一番の目玉と言っている。個人的に北海道に来たら、海鮮とラーメン、ジンギスカンは欠かせない。ということは明日はラーメンかな? まあ、ラーメンならそこまで出費は……というか、明日も行く気でやんの。俺ってほんとチョロい。JK、JCと楽しく飯が食えるってだけなのに……まあキャバクラよりはマシか。それに、キャバクラなんか目じゃないほどのぴちぴちの美少女達。海鮮もピチピチだけどうちの教え子達も負けてないだろ? 勝手に自分の教え子にするとかやべー奴だな、俺。とりあえず、席に着くか……。

と、俺は通された席の真ん中に、適当に腰掛けたのだが、

「お隣、失礼します」

「ん、ああ……」

すつと昨日と同じく俺の右隣に由暉子が座ったのだが……ん?

いや、別に普通か。一瞬、俺の隣に座りたい——つまり、俺に惚れてるのではないかという図式を完成させようかと思ったが、そんなくらい

で惚れてるって判断するのは幾らなんでも童貞すぎる。特に含むところは無いだろう。

——だが、

「先生、歳は幾つですか？」

「二十歳だ。四月に21歳になるな」

「それにしても目のクマが……」

「放つとけ」

「……………」

なんとというか、

「先生、これ美味しいです」

「ああ、美味しいな。近場にあつたら通いたいくらいだ」

「……そうですね」

微妙に、違和感を感じる。

「はー、食った食った」

「ごちそうさまでしたー」

「お魚も素敵でした……!」

「美味かったな。ほら、それじゃあ車乗れ。送ってくから」

「はい。よろしくお願いします」

「あ、ユキ助手席？」

「はい。今日は雪が降ってますから、道案内役が必要かと」

「ああ、確かに。雪の夜道はねー」

「ユキだけに雪!」

「その駄洒落は素敵じゃありません……」

……俺は案内してもらった海鮮料理屋での食事を終えて、車で皆を家まで送り届けていくのだが……うん、もしかするともしかしてか？

いや、そういう感じはしないが……。

「それじゃあユキちゃんに先生! また明日です!」

「はい、また明日ですね」

「ああ、また明日な」

と、由暉子の案内通り、皆を順番に送り届けていくと、最後に由暉子だけが助手席に残った。

「ええっと、こつちだったか？」

「はい。その先を真つ直ぐ。200メートル先の信号で右方向ですね」

なんかカーナビみたいな説明をされるが、由暉子のカーナビか。売れそう。はやりさんとかの音声収録したら普通に売れるのでは？

そう思いながらも、俺は雪が降る夜道を車で走っていく。

先程までは3人以上で賑やかだったが、そこまでお喋りという訳ではない由暉子との二人きりの車内は静かだった。

その横顔を見るが、表情は変わらない……うん、やっぱり全然落ちてる感じしないな。今思えばだが、はやりさんなんかは分かりやすかったし。なんか熱いとか言ってたもんな。

今日もユキぱいはゲット出来ず。誰もゲット出来ず。ムラムラを解消出来ない。あー、もう、ぶつちやけそろそろ限界だ。諦めて自家発電でもするか？ いやでも明日もあるし、そもそもホテルで自家発電か……うーんなんとも言えない。

「つと、着いたか」

「ええ、ありがとうございます」

ああ、と頷きながら、由暉子の家だという2階建ての一軒家を見上げる。結構な豪邸である。そこそこのお金持ちなのかな？ 電気は点いていない。親の帰りは遅いのだそうだ。

しかしまあ、ホント、どうしたもんかなあ、と思う。思わず溜息を吐くと、

「——先生」

「ん？ なんだ？ 忘れ——」

何だ、と顔を助手席に向けると——突然、唇にぷにっとしたものが押し付けられた。——え？ あ、え？

「んっ……」

「っ……あ……」

至近距離にあったのは、この二日間。何度も見た由暉子の可愛らしい顔。つぶらな瞳を閉じたキス顔だった。

ふわりとした、甘いミルクのような香り。唇に触れたとてもちっ

ちやな唇。肩口にふにゆりと押し付けられたその、由暉子の中学の制服越しの爆乳。

一瞬でその状況を理解し、しかし由暉子がすぐに唇を離れたため、俺は驚きの表情を由暉子に向けていただろう。

由暉子のつぶらなタレ目は普段よりも、とろん、としており、口を小さく半開きにして、僅かに息を吐く。そしてその、おそらく、俺がファーストキスを奪った唇から、由暉子が俺に奪わせた唇から、決定的な言葉が飛び出す。

「先生……私、先生のこと、好きになっちゃってしまっただけかもしれません」「っ、ほ……本当か？」

本当か？ などと、普通はびっくりするところを、確認の言葉を投げかけてしまう。まあ、そこまで不自然ではないが。由暉子はこくりと小さく首を縦に振り、

「私……こんな気持ち、初めてなんです……さっきから、先生を見ると胸がドキドキして……多分これ、恋だと思います。今こうしていても、全然嫌じゃありません」

由暉子はそう言いながらも、由暉子らしく、冷静な、物怖じしないはつきりとした口調だった。

俺は心臓をバクバクとさせてしまう。近くで見る由暉子の、有珠山高校の麻雀部の中でも随一の美少女が、まだ中学生で身長が140センチもないのに、体つきだけはとっついてもいやらしいロリ爆乳美少女が、そうやって恋をした女の表情で俺を見つめている。

その小さくて、肌のきめ細やかさを感じさせる手が、俺の手の甲に添えられて、

「先生……実は今日、両親は帰ってこないんです。だから良かったら――」

と、由暉子は頬を赤く染めながら、

「……私と、もう少し一緒に過ごしませんか？」

雪の日の夜

「どうぞ、先生」

「ああ、お邪魔します……」

由暉子が家の中に案内をしてくれる。俺が靴を脱いで玄関に足を踏み入れると、由暉子は俺の横を通り抜けて玄関の鍵を閉めた。

「二階が私の部屋なんですっ」

「そうなのか。良い家だな」

「普通だと思えますけど……とにかく上がって下さい。今、お茶を持ってきますねっ」

「あ、いや……」

階段を上がって由暉子の部屋に、そのファンシーな内装の部屋に通されると、由暉子はさつきと一階へ降りて行ってしまった。

その様子はなんとというか、浮かれているようにも見える。普段よりも強引で、嬉しい気持ちを抑えきれていないのだろう。

しかしそう冷静に分析している場合ではない。俺だって、普通に見えて普通じゃないのだ。

「ああ……遂に……」

由暉子の部屋の中で、どこに座っていいか分からず、立ったままでも感慨深い呟きを漏らす。

なにせ、到達すべき場所に到達したのだ。この一週間、そろそろ十日となる、悶々とした欲望を吐き出すことの出来る聖地に。

由暉子の部屋の中はめちやくちやにいい匂いがする。家具は白系の色の物が多い。由暉子の小柄な身体には不釣り合いであろう大きなベッドは、まるで俺がここに来るために備わっていたものにする感じる。

腰がムズムズする。イライラする。先程から、由暉子にキスをされてその誘いを受けた瞬間から、俺の肉棒はズボンの中でギンギンに勃起していた。

そして、この勃起すら気持ちいい。ああ、今のこの感覚はなんだろう。まあ、似たところで言うなら、セックスを、これから行う性の気

配を敏感に感じ取っている時の気持ちのいいムズムズ。

親しい女性の部屋に訪れた時。逆に自分の部屋に招き入れた時。風俗の待合室。ラブホテルのエレベーターで借りた部屋に向かう時の、高揚感、興奮。

美少女の部屋に通され、右往左往するような初心な感覚は俺にはない。ただ、今からここで起きることに期待し、股間を硬く隆起させるだけ。

はやりさんと良子とシた時は、向こうからの突然のもので、しかも3Pであつたため、正直余裕はなかった。欲望に忠実に動いてはいても、これから何をしようとか、下心を隠すようなズルさはなかった。ただ今は、相手が一人であり、そして何が起きているかを理解しているため、ただただ美少女に惚れられ、これからエロいことが出来るという気分の良さが全身に行き渡っている。

「はあ、やべー……この時点で幸せ……」

肉棒を硬く勃起させながら、俺は由暉子を待つ。俺に惚れた、とっても可愛いロリ爆乳中学生。——もう俺の女だ。いや、今はまだだが、俺の女にする。

股間はもうその準備が出来ている。この股間を、由暉子はその幼い成熟した肉体でたっぷりと気持ちよくしてくれるのだろう。その確信がある。

そう思つて部屋の内装を何となく見ていると、由暉子が戻ってきた。

「お待ちせしました」

「つと、ありがとう。ユキは気が利いて良い子だな」

「っ、はい……」

飲み物を、しかも温かいお茶を態々入れてきてくれた由暉子に笑顔でお礼を言う。惚れてると確信出来る女の子が相手だから、照れや躊躇もない。先程より馴れ馴れしく言葉を掛けてしまう。

すると由暉子が、一瞬驚き、そして少し照れたように顔を綻ばせた。あー、めっちゃ可愛い。なんなの？ さっきまですまし顔だったのに、そんな女の子の表情して……。

だがこれが、由暉子が惚れた男にだけ見せる表情なのだ。

彼女は恋愛経験もなく、まだ中学生の子供である。故に全部がはじめてのことで、少し浮かれてしまっているのだろう。

きつと由暉子の内心は今、色んな感情が渦巻いているはずだ。ドキドキと胸を高鳴らせ、嬉しさと気恥ずかしさが沸き立ち、逆に不安でもあつたはず。

そんな由暉子に、その思いを肯定し、褒めるような発言をすればどうなるか。答えは、お茶を机に置いた由暉子が見せてくれた。

「——先生っ」

「っ、お……あ、ユキ……!」

不意に、由暉子が俺に正面から飛び込むように抱きついてくる。俺はそれを当然受け止めたのだが——そこで、一つの幸せな誤算が発生する。

「名前で、呼んでくれるの嬉しいです……好きです。先生、やつぱかっこいいです……」

「あ、ああ……ユキ、俺も好きだぞ……」

「! 先生っ!」

ぎゅうっ、と由暉子の、ユキの抱擁する力が強くなる。俺もその思いに応え、抱きしめ返すのだが……あつ、やつぱい……これ……。

ユキの身体の感触は、実はそれほど感じれていない。何故なら、身長差があるから。

ユキの背丈は、おそらくギリギリ140に届かないほどに小さく華奢だ。正面から抱きついてても、俺はユキの頭を胸に抱きしめるような形になる。

胸に顔を埋めてスリスリとしてくるユキはもうめっちゃやくちや可愛くてたままないし、手で感じるユキのさらさらした髪も、小ささを感じれる頭も、撫でていても気持ちいい。

しかしそれだけではヤバくはない。何よりもヤバく、堪らないのは……ユキのその、大きく盛り上がった胸だ。

おっぱいの大きい子を抱きしめるのは好きだ。とても気持ちいい。胸板で感じる柔らかな感触は何度でも味わいたくなるほどに、こちら

の官能を高めてくれる。

これがはやりさんや良子なら、そのたつぷりと実った爆乳を胸板の周辺辺りを感じて、その下腹やお腹に俺の肉棒をグリグリと押し付けて、足を絡ませる……そんな最高の体験が出来るのだが、ユキの場合それは出来ないのに最高だった。

なにせ……その爆乳が、股間に押し付けられているからである。

「っ、はぁ……ユキ……可愛い……ヤバイ……」

「先生……」

正面から俺の腰に腕を回して抱きついてくるユキ。

だが……これはたまらなさ過ぎる……っ、く、あ……！

ユキの、俺の肩にも届かない身長差だと、ユキのその特徴的なロリ爆乳は、俺の股間と高さが一致する。

したがって、抱きつくだけで俺の股間に、そのたつぷり実ったロリ乳がむにゅむにゅと押し付けられるのだ。

それが……たまらなさ過ぎる。布越しとはいえ、俺のギンギンになつた肉棒を、そのテントをユキの爆乳が甘く圧迫し、なんなら胸の間に位置するため、軽く挟まれたようにもなるが……こんなのが、こんな普通に抱きついているだけなのに気持ちよくさせられるのか。まだハグしただけなのに、おっぱいでむにゅむにゅと甘やかされて俺の肉棒はメロメロである。はぁ、ほんと柔らかか……まだ布越しだつてのに……。

俺は迷う。もうこのまま押し倒してやろうかと。ユキは拒まないだろう。それとも先におっぱいを愉しむか。十日分のムラムラ。股間に溜まっているであろう精液のまず一発目をユキのこのおっぱいの中で迎えるのは至福だろう。幸せすぎておかしくなる。

俺は我慢できずに股間を軽く擦り付けてしまう。するとユキは言った。俺を見上げて、その可愛らしい上目遣いの表情で、

「……これ、先生の男性器ですか？」

「……ああ、そうだ……ユキに興奮して……はぁ……こうなつたんだ。

それと、オチンチンと呼ぶと俺は嬉しいぞ、うん」

「おちんちん……」

ぐはっ。ユキが自身の胸に、正確にはその下にある俺の肉棒に視線を向けて眩く。破壊力が凄い。

「興奮して刺激を与えると射精するんですよ」

「ああ、よく知ってるな。そうすると、男は……いや、俺は喜ぶ」

「……そうなんですか……いえ、知識では一応……」

男は、と言い掛けて言い直す。他の男のことなんてどうでもいい。この子に教えるのは俺の肉棒のことだけで十分だ。

というか知ってることを褒めて頭を撫でたら、恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに目を細めたのが可愛いかった。

「……先生。私、先生のこと、喜ばせてあげたいです。どうしたらいいですか？」

「いいのか……エッチなこと頼むぞ？」

「はい……先生と、先生にならなんでもしてあげたいです」

ユキが女の顔で言う。頬を紅潮させ、瞳をとろんとさせたエッチな顔だ。

せつかくの熱いお茶が冷めそうだな、と思いながらも俺は止まれな。俺はユキの身体に、その肩に手をかけながら言う。

「それじゃあ、脱ぐか。お互いに……まずは脱がせてもいいか？」

「……はい。少し、恥ずかしいですが……どうぞ」

と、言ったので俺は一度、後ろのベッドに座り、ユキを軽く抱き寄せる。身長差もあるからな。ユキは軽く俺の肩に手を置いた。

そんな可愛いユキの背中に手を回し、俺はその下に手を伸ばす。

「あっ……」

ユキが可愛い声を短く発した。俺はユキのお尻をスカートの上から掴んでいた。

はあ、やば、めっちゃぷりぷりしてる……こんな小ぶりなのに……。

痴漢のように、そのお尻を撫で回すと、スカートの上から握りやすさを感じられた。女の子としての丸みをしっかり帯びてるのに、サイズが小さいから握みやすいロリ尻。スカートの上からでも十分気持ちいい……が、そこでは欲は収まらない。俺はそのままユキのスカートを捲り上げるように手を下に入れ

てみる。

「んう……ふう……」

ユキがくすぐったいのか気持ちいいのか。腰をふりふりと動かすが、そんな仕草は俺を刺激するだけだ。一々可愛いやらしい仕草と表情を見せるロリ美少女。下着越しのお尻の堪らない感触を楽しみながら、俺はスカートのホックも外してそれを脱がせる。するとそこには、

「っ、いやらしい下着履いてるんだな……?」

「そ、そうですか……? んっ」

スカートが脱がせると、そこには薄い紫と白の縞々。それでいて紐パンというエッチな下着を履いているユキの肉付きの良い下半身。

まるでユキの小さいのに大人びた発育をしている魅力を表すかのようだ。スケベすぎる。たまらずその下着の上からお尻を撫で回すと、手にぷりぷりとした感触が弾けるように伝わってきた。手に吸い付いてくる。ユキのきめ細やかな肌は、どこを触っても触れた箇所が気持ちよくなれる魔性のロリ爆乳美少女だ。

エロい。これだけでもエロ過ぎるのだが——それでも彼女の一番魅力的な部分が温存されているという事実。

「上も、脱がすぞ……?」

「はい……先生、どうぞ」

俺はお尻や、肉付きのいいぷにぷにの太腿を這わせる手を、彼女の輪郭に沿って上に持っていく。ウエストのくびれ。この曲線がたまらない。このほっそりした掴みやすい腰を両手で掴み、背後からユキのお尻に腰を打ち付けたい。が、それは出来る。後のお楽しみだ。

俺は先に、その上半身を覆うユキの制服に手をかけた。するとユキも脱がしやすいように両手を上げてくれる。子供の世話をしているようにも見えるが、彼女はとてもいやらしい女で、俺の肉棒はビンビンと上を向いている。そこを見れば、とてもそうは見えない。

そして脱がせると、その突き出た乳房が、俺の前に姿を現した。

「っ、すっげえ……」

「ん、はあ……」

ユキが僅かに息を吐く。解放されたといった様子だが、無理もない。服の中にこんなものをぶら下げていたのならな。

薄紫の縞々。パンツと同じ柄のブラに包まれた、そのユキのたつぷりと実ったおっぱい。小さいユキの顔と比べると、片乳だけでも同じくらいに見える。

そのカップに収められた窮屈そうなおっぱい。縦に一本の線。信じられないくらい深い谷間。ブラ紐と乳の間が浮いていてエッチだ。これでまだ15歳。女子中学生だというのだから堪らない。背丈は小学生と言っても通じるほどなのに、こんな男を興奮させる肉付き。犯罪的なビジュアルだ。

「たまらないな……」

「……興奮、しますか？」

「めっちゃするな……」

するに決まっていた。見ただけなのに、俺の肉棒が震えている。眼の前の極上のどちやくそエロいロリ爆乳美少女を自分のモノにしろと必要以上の準備を始めている。たまらない。俺は服を脱ぎ捨てることにした。

「あー、もう……」

「先生も脱いでる……」

「ユキの身体を直接味わいたくてな……はあ、つと、よし、俺の足の間に座ってくれるか？ 背中を預ける感じで」

「あっ……はい……」

下着一枚になった俺を見て、少しぽーっとしていたユキだが、俺がそう言うと、ユキは後ろを向いて、ベッドに座る俺にその縞々の紐パンに包まれたロリエ口尻を向けて、そのまま座り込んだ。

すると、ユキのお尻に俺の肉棒が押し付けられる形になり、

「っ、はあ、ユキ……」

「あ、先生……先生の、が……」

気持ちよくて俺はユキの身体を後ろから抱きしめる。吸い付く肌。赤ん坊みたいなぷにぷにの柔らかい肌と、甘いミルクのようなユキの香りを楽しむ。そしてこうすると、やはりちっちゃい。俺の腕の中に

すっぽりと収まるユキの華奢な身体。

なのに身体のラインはしつかり女の子。お尻は俺を誘うように丸みを帯びて、腰つきは俺という男に掴ませるためにほっそりとしている。

だというのに、肩口から見えるユキの谷間は深く、その膨らみで下が見えないほど。こんなエッチで可愛い女の子がいていいのと思う。堪らずお尻に肉棒を擦りつけると、ユキは腰をもじもじとさせた。

「気になるか……？ く、はあ……」

「はい……んっ、先生の、おちんちん、硬いですね……それに大きくて……ムズムズしてしまいます」

「ユキが可愛くて、エッチすぎるからな……っ、はあ……そろそろ、おっぱい揉むぞ……」

「はい、どうぞ……んう」

お尻の割れ目に肉棒を擦りつけながらユキのもじつく可愛い仕草を見てると堪らず、その魅力的な膨らみへと手をのばすことにした。

ユキの輪郭を楽しみながら手を徐々に上に持つていく。むちむちの太腿からくびれた腰に。そしてその腰から上に手を這わせていくと、途中で手が柔らかい膨らみにぶつかった。

「っ、ああ……」

下乳の付け根。その部分に両の手の人差し指が接触すると、そのまま持ち上げるようにユキの乳房を揉み上げる。すると、とてつもない気持ちよさが俺の手を襲う。

むにゆううう……♡

ああ、ユキぱいがとうとう俺の手の中に……！ あ、てかヤバい、これ……っ、手に吸い付いてくる……！

両手をめいっぱい広げてユキの乳房を揉みあげたが、やはり掴みきれない。

そして俺の指が、むにゅっと乳肉に埋まっていく。

そして、吸い付いて離さない。きめ細かく、張りのあるユキのおっぱいは、触れた部分を放さないといったように、たっぷりと甘えてき

た。

手の指と指の間から、乳肉が溢れてくる。

「柔らかか……おつきい……はあ、ヤバい。最高だこれ……」

「はふ……ん……先生……はあ……」

ユキも、俺におっぱいを揉まれて呼吸を乱しているように見えた。その様子も可愛くたまらない。俺の手の動きに合わせて、もにゅもにゅと形を変える楽しみを眼で味わい、その掴みきれない口り爆乳を、その重柔らかさを手で受け止め、好きに揉みしだく幸せを味わう。

両側から中央に寄せれば、おっぱいは僅かに縦に長く、深い谷間を更に深くし、手に乗せて弾ませてみれば、たぶんっ、たぶんっ、と俺の手の上でたっぷり弾んでくれる。抱くようにして腕をユキのアンダー、乳の下に潜りこませて上に持ち上げれば、そのずっしりとした全体の大きさを手でいっぱい感じる事が出来た。

それに、体温が高めなのか、もの凄く温かい。手でもっちり掴んでいるだけで、即席のカイロのように手を温めてくれる。

乳揉みだけでこんなに幸せにしてくれる最高の乳に、俺はもう夢中だった。しかもユキは胸を揉まれる度に可愛い声を、息を漏らし、お尻を無意識に肉棒に擦りつけてくる。もう完全に俺を誘っていた。

「はあ、ん……ふう、自分で触っても、何とも思いませんでしたが……好きな人に触れられると、んっ、気持ちいいんですね……」

「っ、また可愛いことを……」

「あっ、ああ……」

俺はユキのブラを剥ぎ取り、そのまま生乳を揉みしだく。その先端、桃色の、しかも陥没した乳首が見えて、もう堪らない。指でそこを摘んだり、谷間に指を出し入れしたりと、もう全力で欲望の限りに乳揉みを楽しむ。

そうしながら、俺はこちらの身体に背中を預けて身体をくねくねとさせるユキの耳元で聞いてみた。気になると、

「ほんと、まだ中学生なのにこんな大きくて……サイズ幾つだ……この俺を喜ばせるエッチなおっぱいは……?」

「サイズ……んっ、あっ、さ、サイズは……95のKカップでしたが

……あつ」

95のKカップ。そんな15歳の中学生ではありえないドスケベおっぱいに興奮し、思わず強く揉み上げてしまう。

だが、ユキは言葉を止めなかった。感じながらも、

「はあ……はあ……今日、先生が来る前に測り直したら……97センチになってました……あつ」

ビクン、とユキのお尻の間で俺の肉棒が跳ねる。

97。その数字を頭で理解する前に、続きも耳にした。

「Lカップ、です……」

ビクン、ビクンと俺の肉棒がまた跳ねた。先走りもぴゅっぴゅと漏らしてしまっている。

たまらない。俺は俺の手で今まさに掴んでいる、掴みきれないユキの爆乳の感触をたつぷりと味わいながら思う。

中学生にしてLカップ。背丈は140に満たず、抱きつけば自然と股間におっぱいをひたつかせるようなドスケベな身体は、想像を遙かに越えるやらしさであったらしい。

息を乱すユキの可愛い顔。その剥けたゆで卵のような、ほっそりとした綺麗ななで肩。頼りないともいえるその華奢な肩の下に、大人顔負けの爆乳がぶら下がっている。

肌のきめ細やかさは国宝級。触れば吸い付き、綺麗な形を保ちながらも、男の手には、俺の手にはたつぷりと甘えてくる魔性の乳房。

十日に及ぶ禁欲を重ねた俺だが、その魔力に抗う術はなかった。俺は荒くなった息で言う。

「はあ、はあ……ユキ、ちよつと立ってくれ……こつちを向いてな……」

「……？ はい、わかりました」

ユキが一度立ち上がる。そして俺も立ち上がった。

そして先端がぐしよぐしよになったパンツを脱ぎ捨て、むき出しになった、ギンギンの肉棒をユキの眼の前に突きつける。

「っ……これが、先生の、おちんちん……」

はあ、はあ、とユキの吐息が届いてくるようだ。そうでなくとも、何

も身に着けず、外気に触れる感じが気持ちいい。それがアイドルになれそうなどてつもない美少女の前だというなら尚更だ。

もう興奮しすぎてヤバイ。ただでさえ、おっぱいを揉みながらユキのお尻に擦りつけていたので、もうとにかく吐き出したかった。

「ユキ……おっぱいを寄せて、俺のを挟んでくれ……」

「胸で……そういえば、抱きついた時に興奮してました。先生は、それが気持ちいいんですか？」

「ああ、だから胸を寄せといってくれ……ここに入れるから」

と、俺はユキの谷間を、そのおっぱいを軽く揉んで、肉棒をそこに近づける。中学生のLカップの谷間を目の前にした肉棒は、もう上を向いて気持ちよくなりたくて仕方ないようだった。

それを見て、ユキはこくりと頷くと、その小さな手で谷間を寄せる。

「分かりました先生。私の胸で……たくさん喜んでください」

むぎゆうっ♡ と更に深くなったその谷間。肉棒が震える。

もう限界だった。俺はユキの華奢な肩に手を置くと、肉棒の先端の位置を調節して……ユキの谷間に肉棒の先端を触れさせる。

「っ、ああ……!」

ふにゅ、と亀頭とおっぱいの谷間が触れただけで、その吸い付く柔らかさに陶醉しそうになる。

だがゆつくりと、腰を押し進め、先走りでダラダラになった肉棒でユキのおっぱいを掻き分けていった。

にゅううう……♡

「はあ……はあっ……」

埋まっていく。俺の肉棒は、ユキのおっぱいを掻き分けて、亀頭から徐々に乳肉に包まれていく。

ユキの吸い付いてくるロリ爆乳は、肉棒に対しても同じように、肉棒全体をあまあまに密着し、カリ首の溝にまで乳肉が形を変えて密着してくるので、腰を押し進めれば、満遍なく全てがおっぱいで擦られる。

おっぱいで肉棒を握られているような、乳肉で手コキされてるような感覚。実際には乳コキ、極上のパイズリ以外の何者でもないが、そ

れほどに、左右から押し寄せるたつぷりとした乳圧は股間を気持ちよくしてくれる。

「んっ、全部、入ってきましたね……」

「あ、あー……ユキぱい、やばい……中学生Lカップやば……!」

やがて、俺の肉棒は完全にユキのおっぱいに、ずっぽりと挟み込まれる。

俺の肉棒の根本を——いや、腰をぐりつと押し付けてようやく胸の奥に辿り着くほどのたまらない深さ。これをこんな小柄なロリ美少女が持ち合わせているというアンバランスな魅力。肉棒がビキビキとおっぱいの中で歓喜の涙を流している。

アングルだけでも死ぬる。こちらを見上げるユキは滅茶苦茶に可愛く、しかし視線を俺の腰に向ければ、腰にはユキの97センチのLカップエロエロ乳が押し付けられ、肉棒は見えない。しかしその肉棒にかかるたつぷりとしたおっぱいの乳圧や温かさが、確かに挟まれていることを自覚出来る。

しかもユキは屈んだりしていない。立ったまま、俺の肉棒を縦パイズリ。

身に着けているのは縞々の紐パンだけ。その背中とお尻、太腿のラインだつてエロい。小さいから、上から見下ろすと俺の身体との差を実感してより背徳感を感じる。

この光景を写真に収めれば、幾らでも自家発電が出来る。動画にすれば、一生オカズには困らない。そんな最高の行為を受けているのは俺だった。

そしてこの、ユキのおっぱいを犯しているというこの達成感。征服感。優越感。新雪に足跡をつけるかのようなこの満たされた感覚。

もうこのユキぱいが俺の股間に密着してるこの感触が、もう俺から理性を剥ぎ取った。俺は腰を、荒く動かしてしまう。

「あつ、あつ、くっ……ユキ、ユキのおっぱい、気持ちいいぞ……!」
「あ、先生の腰が……」

ユキがおっぱいを押さえつけている。その谷間に、俺は腰を振りまくる。

乳圧が、この吸い付きがたまらない。にゅぽにゅぽ、ぱちゅぱちゅと音が鳴っている。97センチLカップの谷間のにゅるにゅると肉棒が擦られる。めちやくちや気持ちいい。腰が止まらない。

「ん、あつ……なるほど。胸で刺激を与えて射精を……んっ、先生の胸の中で動いて、変な感じですよ……」

「うっ、ああ、最高……ああ、最高……ユキ、ユキ……！」
気持ちよすぎて、語彙が貧弱になる。どれだけ腰を振っても、ユキの爆乳クッションが腰を受け止めてくれた。

きつと今の俺は相当に情けない。おっぱいに夢中になって酷い締めりのない顔をしていることだろう。

だがユキは、そんな俺を見上げて、微笑を浮かべた。

「でも……先生がこんなに喜んでくれるんですね……私、これ好きです」

「っ、ユキ……！」

「先生、気持ちよくなってください。何度でもしますから」

むにゅう、とユキが手でおっぱいを左右から寄せ、更に乳圧を強くした。

「……こう、ですか？ 先生、もつと教えてほしいです。先生のオチンチン、先生の好きな大きな胸で気持ちよくしてあげたいです」

「っ、ああ……ユキ……ああ……！」

健気に好意を寄せ、そのおっぱいで俺の肉棒を、俺を喜ばせようとしてくれるユキ。

もう駄目だ——もう気持ちよすぎる。たまらなさ過ぎる。

「あ、くっ、もう出る……！ 腰振るから押さえて……ああっ……！」

「はい。あつ、んっ、んっ、あつ」

「はあ、可愛い……気持ちいい……！ ユキ、ユキの、Lカップおっぱいに……！ ロリ爆乳の中に出すぞ……！ 出す……！」

十日分の精液が、その一発目が腰の奥から放出されそうになる。

俺の腰の動きに合わせてたぶんたぶんと揺れ、ひしゃげるおっぱいがたまらない。

短いストロークでユキの谷間の中を行き来させる。もう限界だと

腰をユキのおっぱいに強く押し付けた瞬間、ユキは何を思ったのか、顔を俺の身体に近づけて、

「先生……大好きです——ちゅう♡」

俺の右の乳首に——その小さくて可愛い口と舌でキスをして吸い付いてきた。

乳首にちゅつとした感触、リップ音。そして軽くぺろつとユキの舌が這う感触に、俺は頭が真っ白になった。

「っ、あ——あああああっ！ 出るっ、ううううぐー！」

びゅるるる、びゅるるる、びゅるっ、びゅるっ、びゅうっ。

そんな音が、鳴っているはずがないのに、聞こえかねないほどの濃い射精をする。

「先生、好き……ちゆる、れろ、れろ……♡」

「あつ、ああ、ユキ、それ、あ、ああ……！」

中学生のLカップおっぱいに包まれての射精だけでも頭がおかしくなるのに、射精中も、ユキはおっぱいでぎゅうつと肉棒を包みこみながら、乳首をぺろぺろと可愛い小さな舌でぬるぬると舐め続けてきた。

ユキのようなロリっ子に乳首を舐められる感触にゾクゾクと背筋を震わせながら、濃密過ぎる射精をする。

「ああ……気持ちいい……幸せ……」

射精が落ち着いてくると、甘い快感と陶酔感だけが残りだす。

射精を終えても、肉棒は精液で濡れたユキの爆乳にぬっぽりと包まれたままで気持ちいいし、好意を伝えながら乳首をぺろぺろと舐めてくるユキは、震えるほどに可愛い。

この奉仕で感じたのか、その小ぶりなお尻をもじもじ、ふりふりと揺らしてるのも、可愛すぎる。

もう俺を気持ちよくするために地上に降りてきたロリ爆乳天使なのではと思う。当たり前だが、ギンギンの肉棒が全然収まらない。射精し終えたおっぱいの谷間の中を、にゆるにゆると腰を揺すって絞り出すのがエロすぎる。谷間から精子が溢れているし、ユキは嫌がりもやめようともしない。たまらなくなった俺がユキの顔を胸に抱いて

も、顔を俺の胸にすりすりすると、胸をむにむにと、股間にこすりつけてくるだけである。

「ユキ……はあ、好きだ……可愛い、お前、気持ちよすぎるぞ……」

「先生、私も……はあ、好き、です。もっと、触れ合っていたい、です……♡」

そんなことを言ってくれる。顔は完全に発情していた。

下乳から垂れる精液と一緒に、床にはユキの太腿から垂れた雫が落ちていている。

「……ならユキ……続きだ……」

「……はい……ご指導、よろしくお願いします……♡」

俺はユキを、自分のモノにしてやろうと続いて指導を行うことにした。

夜のユキ

「そう、足を開いて……はあ、可愛いぞ」

「ん……先生……♡」

胸に吐き出した精液を一度拭き取り、ベッドへと移動した俺とユキ。

仰向けにユキを寝かせ、その最後の布を剥ぎ取ると……そこに現れたのは無毛の幼い少女の秘部だった。

「もうこんなに濡れて……俺のを欲しがってるな……」

「ひゃっ……あつ、先生のが当たって……♡」

濡れたユキの入り口に、肉棒の先端を擦りつけると、ユキが感じた様子で可愛い声を出した。

「今からここに、俺のオチンチンが入る……入れるからな……」

「はあ……はあ……♡ 入るん、ですか……?」

荒い呼吸をしながら、そのことを心配するユキ。確かに、そう思うのも無理はないだろう。

ユキの身体は小さい。俺の肉棒を、ユキの下腹に擦り付ければそれがよく分かる。その可愛らしいへそに届きそうで、そのサイズの差にロリ感が凄くて興奮する。

だが、大丈夫だ。多分。……大丈夫だよな？

少し心配になったが、これほど濡れていれば大丈夫だと信じる。俺は肉棒をユキの膣へと押し当てながら、

「大丈夫……あ、ああ……行くぞ……!」

「はい……先生、来て——あっ♡」

くちゅっ、と肉棒の先端がユキの膣内へと埋まっていく。亀頭にも、その締め付けのキツさ。熱々にとろけた柔らかい媚肉がきゅうきゅうと俺を感じさせてくれる。たまらない。背筋がゾクゾクする。

「ああ、ユキの中……凄……めっちゃキツ……あ……!」

「ん、んんんう……! せ、先生……先生……♡」

俺の肉棒が入ってくるのを感じているのだろう。目の端に涙を滲ませ、首を左右に振っている。その様子すら可愛くて、俺はユキの掴

みやすい腰を上下にすりすりとお撫でて掴みながら、腰を押し進める途中にあつた膜を、一思いに破つてみせる。

「~~~~~♡ あつ、せんせ、い……あつ♡」

「はあ、すっげ……ユキ、入ったよ……奥まで……俺が、俺ので、ユキのを……!」

そのみちみちのロリまんこの感触に、上も下も陶醉してよだれを垂らしてしまう。ユキの中はめちやくちやに熱く、肉棒だけが熱いお湯の中にあるようで、その上濡れ濡れで、ぷりぷりキツキツの媚肉が全方位を覆つて、きゅっ、きゅっ、と締め付けてきていた。

その光景もそうだが、もうこうしてただけで気持ちいい。小柄でほっそりとした、俺が掴めば容易に半周は出来るお腹の中に、俺の肉棒が入っていることを確かに感じる。ギンギンの肉棒が上向きに、そして大きくなろうとするが、それを拘束されてる感がたまらない。

そして上を見れば、その中学生美少女のLカップおっぱいが呼吸と共に上下し、ユキは濡れた瞳でこちらを見ていた。

「ん、あつ♡ せんせ……きす……キス、欲しいです……♡」

「ああ、幾らでもくれてやる……っ」

「せんせえ……しゅき……ちゅ、ちゅっ、んっ、ちゅっ、れろ……♡」

ユキがキスを懇願してきたので、身体を倒して、かなりキツイが、ユキの唇にキスをする。するとユキがちゅっちゅっど何度もキスをしてくるのがいじらしくて可愛い。ほんと、口もちっちゃい。舌も。その小さい口と舌で懸命に俺を求めてくると、肉棒を何度も跳ねさせてしまう。

キスをする度に、きゅんきゅんと肉棒にまで、龟头を、その奥の子宮口がちゅっちゅとキスをするように吸い付いてくるのだ。まるで上と連動するように。上と下で繋がり合う。そんなことをされたらもう堪らない。

「ユキ……ああ、動く、ぞ……!」

「んう、せんせ、先生の……おっきいのが、中で……んんっ♡」

可愛くて気持ちいいキツイ中をほじくるように腰を動かすと、期待以上の快感が腰を突き抜けた。

しかもあの澄ました顔のユキが、目尻を下げ、口を開きながら、あんんと喘いでいるのが可愛くてエツチだ。

胸も揺れる。俺が腰を一突きすればたゆんつ、と。俺が連続で、リズムよく突けば、おっぱいがばいんばいんと上下に弾んで、俺の目を愉しませ、支配欲が満たされる。もつとこの幸せな光景を見たい。俺の肉棒でユキを感じさせる。その可愛い声を上げさせる。その手で掴みきれないおっぱいをもつと揺らしてあげたい。

肉棒にかかる気持ちよさも相まって、俺はもうたまらないし、限界だった。

「ユキっ、ユキ……可愛い、ユキは可愛いぞ……あ、はあ、最高だ……！」

「あつ、ああつ、あつ……♡ほんと、ですか……？先生、喜んでくれて、あつ♡ますかつ……っ？」

「ああ……嬉しい……最高だ……はあ、ユキが可愛くていやらしくて気持ちよくて……っ、あつ、もうたまらん……！」

ユキを中から肉棒で突き上げまくる。その小さい身体はその俺の突きを受け止めてくれる。華奢で頼りないのに、しっかりと俺を気持ちよくしてくれる。

「なら、先生っ、あつ、もつと喜んで、ください……っ♡私、先生のためにも、もつと可愛くなりますから……♡」

「っ、ユキ……！」

しかも、そんないじらしいことを、俺の征服感を満たすようなことまで言ってくれる。

「な、ら……俺の女になれ……っ、はあ、はあ、ユキ、俺だけの……！」
独占欲が口から出る。可愛いユキの健気な発言を突くようなズルい発言。

だがユキはそれすらも、甘く受け止めてくれる。

「は、い……先生にあげます……先生と、えっちなこと、いっぱいします……♡」

ユキが俺の身体に下から抱きついてくる。

きゆうきゆうと俺の肉棒を熱く甘く締め付け、俺のお腹の辺りにユ

キのLカップの爆乳がむにゆううう、と押し付けられる。全部、俺を気持ちよくするために甘えてきてる。

もう理性が溶かされる。俺は滅茶苦茶に動いた。

「っ、ぐっ、あ、ユキ、ユキい……………」

「あ、せんせ、先生え……………」

俺はユキを、ユキのその可愛らしい顔にキスをして、その首筋に顔を埋めて息を吸い込む。甘いミルクのような香りが広がる。その細い首筋に吸い付きながら、

「ユキっ…………もう駄目って言っても、聞かないからな……………」この、おっぱいも……………」

「あっ、あっ、胸、も…………先生の、です……………」

俺はユキのLカップおっぱいを両手で揉みあげ、谷間を深くつくりながらユキの顔の方に、俺の顔の近くまで持つていくと、その乳の上側や、その谷間に吸い付く。人差し指でその乳首をほじくりながら、もにゅもにゅとその掴みきれないポリューム感を堪能する。

「は、あ…………っ！ もう、俺のだ…………ユキ、俺の、可愛いユキ……………」
「んんっ、せんせ、好き…………もっとなら抱いてください……………」

たまらないとユキを抱きしめると、ユキは俺の身体に、腕の中に隠れるように収まる。可愛すぎるロリ美少女のサイズ感に興奮する。

だが胸だけは、強く限界まで押し付ければ俺の身体からはみ出るほどに大きい。普段からも、ユキの身体の輪郭からはみ出るほどで、大人の俺の肉棒をすっぽりと包み込んでしまう極上エロ爆乳。その擦り付けられる中学生のLカップおっぱいにも興奮する。

小さいのに、どこもかしこも女の子の柔らかさで満ちているユキ。体温は高めで、触れた部分を温めてくれる。

「あ、ああ……………もう、出る……………出る……………ユキ、出すぞ……………ユキい……………」

そして何より、ユキの熱々トロトロのロリまんこが、俺を愛するように肉棒を締め付けてくるこの快感に、もう我慢が効かない。

もう出すことしか考えられない。最高の美少女の身体を好きに蹂躪する。

ユキも、その喘ぎが大きくなる。イキそうなのか。一緒にイクなど結構難しく成立しづらいものだが、このロリ爆乳天使は、こんなところでも俺を喜ばせてくれるらしい。

「あ、ああああああっ、で、る……！ ユキ、あああああああー！」
「せんせっ、先生っ♡ な、なにかっ、くる、せんせ——ん、んんんっ♡」

俺が腰を奥に叩きつけた瞬間、ユキの膣内がぎゅううっつと俺を締め付けた。その最高の瞬間に、引き絞りきった射精を俺は行う。

びゅ——っ、びゆるるっ、びゆるっ、びゆるるるっ。

「あ、あっ……ユキ……！ ユキ、気持ちいい……！ あっ、幸せ……！ あ、ああ……！」

気持ちよすぎる射精は、ストレートな言葉だけを口から吐かせる。ユキという最高の美少女の感触を全身で味わいながらの中出しは、もう本気で今この瞬間が人生で一番気持ちいいのだと思ってしまうほど。

「あっ、せんせ、んっ、これ、こんなっ、はじめて……っ♡」

「うっ、くう……ユキ、イってるの可愛い……！ はあ、めっちゃ絞り出される……ユキ、好き、だ……！」

「んーっ♡ んっ、これが、イク、ですか……んう♡」

初めて性の絶頂を感じたのか、ユキがこんな時なのに得心したような表情を浮かべた。それもまた可愛い。身体の方はしっかりと俺の肉棒から子種を絞り出そうとしているのに。

しかしユキはそれを知って、俺に向かってとろけた笑みを浮かべると、

「教えてくれて、ありがとうございます……はあ、ふう……好きな人の性行為って、これほどに気持ちのいいものなんです……あんっ……♡」

「っ、そんな可愛いこと言うと、男は、俺はまた興奮するから……覚えとけよ、ユキ……」

「なるほど……なら、もっと言います。先生、大好きです……私、お世辞でもなんでもなく、先生とのセックスが人生で一番気持ちのいい瞬間

間でした。んっ、今も、先生のおちんちんが中でおつきく硬くなって、とても気持ちいいです……あっ」

「う、うあっ、くっ、ユキ……！」

ユキは初めての性の快感に、はふ、と息を吐きながらその余韻を楽しんでいるのか、俺の肉棒が入ってるであろう下腹を手ですりすりと撫でる。

すると俺の肉棒も撫でられたような、微かだが、確かに上からの振動が伝わってビクビクと動いてしまう。出したばかりだが、まだ2回目。しかもユキという国宝級のロリ爆乳美少女相手だ。多少落ち着いたとは言え、10日分の性欲はまだ収まっていない。

「ユキ、ほんと可愛いぞ……もつと、俺とエッチしよう……いっぱい教えてやる……うっ」

「はい……先生を喜ばせる方法を、んっ、もつと教えてください——あっ……♡」

「ああ、もう……可愛すぎだ……腰が止まらん……！ はっ、はあっ……！」

素直に俺とのセックスを受け止め、更に気持ちよくしようとする向上心を見せる真面目でどこか抜けているユキを、俺はもつと犯してやろうと腰を振った。

その後、3回ほどユキの中で射精した後によく俺はお茶を飲んで一息つく。

計5回の射精。短時間でのこれは、性のことで頭がいつぱいになった男を落ち着かせるのに十分なものだ。

しかし落ち着いたとしてもだ。

「そう……亀頭を舌で……ああ、そう、カリ首も丹念に、裏筋をなぞって……はあ……」

「ちゅっ、れろ、ちゆる、んっ、んー……」

ユキを跪かせて、肉棒をしゃぶってもらう。ロリ美少女の小さな舌と口は、その熱さもあって最高の心地だった。

「あー、気持ちいい……こっち見て……そう、そのまま」

「ん、ちゅ……はあむ」

「あ、あー……可愛い、最高……」

ユキが俺の教えに従い、上目遣いのまま裏筋から亀頭へ、舌でペロペロと撫で回すと、そのまま口を開いて肉棒を咥えこんでくれる。

口内の熱さ、狭さはまたしても俺をたまらない気持ちにしてくれる。じーつとユキの可愛い顔がこちらを上目遣いで見つめてくれるのもエロくて最高だった。

「んっ、んっ、ちゅ、んく、れろ、ん……」

「ああ、ユキ……可愛い、最高……また出そう……飲んでくれるか……？」

「ん、ふあい……へんへ……ふらふあい……ちゆう」

「っ、ああ……ヤバイ、口の中熱くて……出る……！」

「んんっ、んぐ、んー……」

咥えたまま、こくりと頷き、そのちっちゃい口で肉棒を扱いてくれるユキ。その快感、可愛さ、たまらなくなつて、頭を撫でていると、ユキの口の中でドクン、と肉棒が跳ねる。

美少女に咥えられたままの射精は腰が跳ねてしまうほどに心地良いものだ。咥えた肉棒の裏筋をユキの小さい舌がれろんれろんと舐め回し、亀頭を、鈴口をペロりと舐める。その舌の上に、射精している。

「あっ、あ、はあ……ユキ、大丈夫か？」

「ん、ちゅるっ……はあ、全部、飲めました」

やっぱりこういうところでも真面目さが出るといふか、肉棒を最後まで舐め回し、全部を舐め取ったことをきちんと報告するユキ。口から僅かに漏れた精液を指ですくって舌で舐め取ってる辺りも、その幼さとやっていることのギャップでエツチだった。

これで6回目……さすがに少しだが、落ち着いてきた。

「ユキ、お風呂に入ってもいいか？」

「んくっ……はい。それじゃあ、沸かしてきますね」

「頼む」

「ごくん、俺の精子を飲んだユキが立ち上がったって、裸のまま一階へと降りてお湯を張りに行く。汗も掻いたし、精子も沢山出したし、そろそろ風呂に入って落ち着こうと思ったのだ。」

「——だが、落ち着けたのはお湯が溜まるまでの10分ちよつとだけだった。」

「こんな感じでいいですか？」

「あー……そう。気持ちいい」

広めの浴室に入り、シャワーで身体を流し、身体を洗う段階になると、眼の前でたぶたぶと揺れるユキぱいにまたしても眼が向く。

なのでそのおっぱいで背中を洗ってもらったのだが……これがまた震えるほど気持ちいい。

にゆるんにゆるると、俺の背中が潰れ、形を変えながら俺の背中を這いずり回るユキのおっぱい。

それだけでも堪らないが、前面を洗ってもらうのもまた最高なのだ。ユキのあわあわLカップが俺の胸板に密着する。

「あー、ユキ。気持ちいい。もつと擦りつけて……」

「はい。……こうですか？」

「はあ、そう……おっぱい気持ちいいよ……」

小柄なユキが、一生懸命に俺の上半身に抱きついて、そのおっぱいでむにゅむにゅと俺を洗ってくれる。吸い付いてくる瑞々しいぷりぷりのたまご肌。ボリユームたつぷりの肉感に再び俺の肉棒が上を向き始める。

「先生のおちんちん、また大きくなってます。どうしますか？」

「あー……そのまま密着しながら下行って、おっぱいで洗って」

「わかりました」

と、ユキが頷いて、俺の胸板からおっぱいを、にゆるくっ♡と下に向かって滑らせる。

すると途中で、亀頭が下乳を突く。爆乳の感触に背筋が震えたかと思っただけにはユキのおっぱいは俺の股間を覆っており、

「……こうですか？」

「あー、そうそう……ユキのおっぱい凄い……俺の肉棒隠れちゃうく

らしいこのポリウム……はあっ……」

ユキが股間の上でおっぱいを滑らせまくる。肉棒が中学生し力ツプの愛撫を受けてビクビクと跳ねてしまった。こちらからも腰を浮かせたりして、おっぱいを楽しむ。下乳を突き上げればおっぱいがむにゆりとたわんで、左右に動かせばにゆるにゆると肉棒の裏側をおっぱいかなぞるように擦ることが出来る。

もうたまらん。おっぱいで勃起したチンコは、このままおっぱいで抜いてもらおうと腰を突き上げる。

「ユキ、挟んで擦って……」

「先生のおちんちん、また凄い硬いです……出したいんですか?」

「ああ……ユキのおっぱいで出させてくれるか?」

「はい。……でも、少し滑ってしまいますね。難しいです。ん……」

ユキが自分のおっぱいを掴んで肉棒を挟み込みながらも、泡で滑ってしまい、時折抜けていってしまう。まあ俺の肉棒がギンギンすぎて、常に上を向こうとするから泡塗れだと滑ってしまうのは必然だ。

だがユキはどうか挟み込もうと色々試して、肉棒をその口り爆乳でにゆるにゆると擦るのだが……そのぎこちなさ、リアル感がまた堪らない。そりやそうだよ。いきなりは難しいよね。まあしようがない。このままでも可愛いし、おっぱいが股間の上をぬるぬる這いずり回るのはそれはそれで気持ちいいのだが、ユキの為にも、そして俺の為にも手助けすることにした。

「一旦、泡を流して湯船に入ろうか」

「えっ? でも、先生のおちんちん……勃ってしまったら、射精させないと駄目なんですよね? 私、ちゃんと出させてあげたいです」

「っ、ああ、まあ、お風呂の中でも出来るから、そっちでやろうか」

中々エロいことを言ってくれる。まあ、俺がセックスの最中に言ったことだが、律儀に憶えて実践しようとしてくれるこの可愛さ。

ユキと俺の身体の泡を流し、湯船に入ると、俺は背中を縁に預け腰を水面に浮かせた。

「ユキ、足の間に入って」

「……なるほど、理解しました」

と、ユキは頭もいいから、すぐに察してくれる。お風呂に身体を沈め、俺の足の間に入ると、俺の腰の上におっぱいを乗せて肉棒を挟み込んだ。

「あー……気持ちいい……ほんと、ユキのおっぱいすごい……」

「……先生は、やはりさんが言っていた通り、大きな胸が本当に好きなんですわね」

「ああ、そうだな……」

ユキがむぎゅつと左右から俺の肉棒に乳圧をかけてくれる。股間にはユキのおっぱいが乗つかつて、ちやぷちやぷとお湯を波立たせながら扱ってくれた。お風呂のおかげでほかほかになったユキのLカップ爆乳は先程よりも少ししつとりとしていて、肉棒に張り付いてきた。ユキぱいほんとすごい。幸せすぎる……と、俺はユキのパイズリ奉仕に溜息を漏らしていると、

「はやりさんとも、こういうことしてるんですか?」

「うっ……どうしてそう思う?」

「普段の先生はそう分かるようなところないですし」

あー……と、俺は何とも言えない感じになる。ユキぱいで扱かれながらではあるが。うん、まあオカルトの力があるから平気だろうが、なんともクズらしいところを見せてしまった。そういえばはやりさんのおっぱいはサイズ幾つあるんだろう。良子のおっぱいもだ。はやりさんはユキよりほんのちよつと大きそうだし、良子もユキと同等か……もしくは少し小さいか? 体格とかも違うから分からん。ユキは小さいから余計に大きく感じるし。

と、2人のことを考えながら別の女の子にパイズリされるといふ、なんとも最悪なことをしていたが、ユキは俺の肉棒をおっぱいでむぎゅつ強く挟み込むと、

「……私、先生のことと気持ちよくします」

「っ、おお……!? は、ユキ……!」

股間の上でユキぱいが、たぶんたぶんっ♡と跳ねまくる。ユキの奉仕が激しくなった。ああ、ヤバイ。この乳圧で絞り出される。ユキぱいほんとやば……!

「っ、出る……！ ああっ……！」

「んっ……！」

腰を浮かせて、ユキのおっぱいに乳内射精を決める。ユキはその射精を感じながら、肉棒をまだおっぱいで絞り出そうとしていた。ああ、それまた勃たされるやつだから止めて……。

「うっ、く、はあ……ユキ、ありがとう……凄いい気持ちよかった」

「っ、ありがとうございます、先生」

俺はユキの頭を撫でて褒めると、ユキが嬉しそうにお礼を言う。いや、俺がお礼を言ってるんだけどな。しかしヤバイ。風呂から出たら落ち着いて寝ちまおうと思ってたんだが、ユキが予想以上にエロ可愛すぎて、この後も勃たない保障がない。

そう思っつて、俺はユキと共に後始末をして風呂を出た——が、そこでタオルで俺の身体を拭いているときに気づく。

「……そういえば、泊まっていつてほしいって言ってたが……」

「はい。両親は明後日まで帰ってこないの。お願いします」

うん、そう。ユキの両親は今日どころか、明後日まで帰ってこないらしい。

三連休とはいえ、いや、三連休だからこそ、そんなに帰ってこないほど忙しいなんて何をやってるのかと聞いたが、どうやら学者らしい。しかも2人とも。父親が考古学者で、母親が天文学者。それで2人ともフィールドワークと学会に出向いているのだとか。なんとも俺に都合の良い状況だ。だからまあ、泊まるのはまあ良いとしても……、

「……寝間着とか持ってきてないから……どうするか」

「お父さんのシャツ借りますか？」

いや、なんかそれはちよつと……恐れ多い。まあ娘を傷物にしてる時点で礼儀もクソもないのだが、こういう細かいところが気になっってしまう俺である。

でもまあ、

「……いいか、もう。このまま裸で寝ていいか？」

「なら、私も裸で寝ます」

物凄く真面目な、至極当然といった顔でユキは言うが、それはエツチ過ぎない？ いいの？ 俺多分、いたずらしまくるよ？ まあ服を着ていても一緒ではあるが。

「それじゃあ、布団行くか。……ちよつといたずらしてもいい？」
「先生と布団の中でいちゃつくの楽しそうです」

……なんかこの子、覚醒してない？

無知気味のロリキャラから、好奇心旺盛なロリキャラに変身してる気がする。

いやまあいいんだけど……と、2人して廊下へ、暖房の効いた室内で、階段を上がってユキの部屋に向かうのだが、裸のユキはやっぱりエロい。後ろから見ると、なんかまた堪らない気持ちになってくる。ちっちゃいのおっぱいは背中からはみ出てるし、お尻はぷりぷりだし。この子もサキユバスか何かだろうか。

「先生、どうぞ」

「ああ」

と、ユキに案内されてベッドへ。一応、シーツやら何やらを風呂を溜めてる最中に取り替えている。まあ匂いは多分残ってるが、自分達には気づかない。というかユキの甘い匂いしかない。

布団の中に先にユキが入り、俺が入るのだが……やっぱりたまらん。裸のユキが布団の中で俺を誘っている。俺はユキを抱きしめた。

「っ、先生……」

「んー、はあユキ温かいな……スベスベだし全身柔らかいし、気持ちいい……」

お風呂であったかくなったユキは、まるで極上の抱き枕。お風呂で気持ち、更に吸い付くようになった肌に、どこを触ってもぷにぷにゆぶにゆで、華奢な身体。太腿はもちもちでお尻もぷにぷに、上半身に押し付けられたLカップのロリ爆乳は、もうぷるんぷるんで堪らない。

温かい部屋のフカフカのベッド。その布団の中でユキの温かい小さな身体を抱くのは気持ちが良いすぎる。ちよつと、これ、持って帰りたい。どこかに売ってないですかね？ あったかロリ爆乳美少女ユキちゃん。100万くらいなら余裕で出す。

「あー……ほんと、おっぱいも大きいし……滅茶苦茶可愛くていい匂いがする……はあ」

「んっ、胸に顔を埋めて……先生の息が熱いです」

ユキぱいに顔を飛び込ませてぱふぱふしてもらおう。鼻先をユキの谷間の奥まで潜り込ませて息を吸うと、クラクラするような甘い匂いが。そのままモチモチLカップに顔全体をむにゅんっ♡ むにゅんっ♡ と揉みほぐしてもらおう。はあ……幸せ。そのまま背中を手を回してすべすべの背中や、もちもちのお尻も撫で回したり、掴んで引き寄せたりする。もう天国だ。

「……先生、やっぱかっこいいです」

「えっ?」

俺がユキの身体を堪能しまくっていると、ユキが俺の顔を見てそんなことを言った。そしてそのまま顔を近づけてちゅっ、と可愛くキスをしてくれる。いいんだが、何が?

「ん、はあ……ユキ、俺のどこがかっこよくて好きなんだ? 言っちゃあなんだが、今もおっぱいから手が離せないアレな大人なんだが……」

と、自分で言うのもなんだが、ちよっと聞いてみる。まあオカルトがあるから否定的な言葉は返ってこないだろうとは思いながら。すると、ユキは俺の顔を見上げながら、

「そんなことないです。先生は……大人の男の人って感じでしたっかっていて優しくて頼りがいがあって大好きです」

「お、おおぅ……そうか」

「昔、クラスの人が、同年代は子供っぽくて恋愛対象にならないとか、そういう話をしていたのを耳にしたことがあります、今ならその気持ちの方が分かります。年上の男の人……先生みたいな人、凄くかっこいいです……ちゅっ」

そう言って、ユキは目を閉じて嬉しそうに俺の顎やほっぺなどにちゅっちゅっど何度もバードキスをしてくる。やっぱ、めっちゃ惚れられて……さすがオカルト。この、なんだろう。ユキみたいなそういう感情を抱いたことのない女の子が、初めてそういう気持ちを持つ

て、それを受け入れられて、何分初めてだから、めちやくちやに好き好きしてくるこの感じは、リアル感が凄い……いや、本気で惚れられたことないから分かんけど。

ただこのイチヤイチャ感。バカツプルになる感じのイチヤつきはエロい上に気持ちよくてたまらない。ユキみたいな美少女相手だとなおさらだ。

「まったく……こんなエロい乳で俺を誘って……やらしい子だな……」

「ん……先生……私も、悪戯していいですか？」

「？ 何をする気だ……って、おおう……」

横向きに見つめ合うように寝る俺達。俺がユキのおっぱいを手で揉んでいると、ユキがこちらを見上げて、手を下側に、俺の肉棒にその小さな手を絡みつかせてきた。

「……普段はこんな感じなんです。先生の。ん……また硬く……？」

「当たり前だろ……はあ、ユキ、そうやって興奮させると眠れなくなるぞ？」

ユキが俺の肉棒を確認するようにまさぐってくる。その遠慮のない手つき。小さくてすべすべの手が肉棒を這い回る感触に、どんどん俺の肉棒が硬くなってきた。

するとユキも、俺の肉棒をシコシコと布団の中で扱いてくれる。いや、ほんと、この子エロ可愛いな……。

「——おいこらっ。そうやって悪戯する生徒には、体罰だ」

「きやつ……あつ、せんせ、んっ、先生、くすぐった……ん、ふふ、あつ、もう……！」

巫山戯た感じでユキの首元や、細い腰の脇腹を手でこちよこちよとくすぐってやると、ユキは布団の中でくすぐったそうに身を振らせて俺の手を首で挟み込んだり、腰を逃したりする。そしてユキも、俺の横腹に手を回して、

「んっ……私も先生をくすぐりますっ」

「悪いが、俺はあまりその辺りは効かないからな。くすぐろうとする

悪い子はもつとくすぐってやる」

「ああっ、せんせ、ずるいです……じゃあこっちは……」

「遅いな、おらっ、捕まえたぞー！」

「きやつ、ん、先生、脇は駄目です……！」

ユキが俺の横腹をくすぐってきたが、それをかいくぐって俺はユキの脇を手でくすぐってやる。またくねくねと身を振って逃げようとしていたので、小柄なユキを上から抱きついて押さえるようにして身体をまさぐる。ユキの身体の色んな部分が、俺の身体に触れて気持ちいい。おっぱいがぶるんぷるんと身を振るので揺れていたし、ユキも楽しそうに笑みを浮かべていた。

そうして上からユキの身体を見下ろすと、やっぱりユキの体つきのいやらしさを確認出来てたまらない。全裸のユキ。肌にシミ一つない、そのロリ爆乳ボディは、俺が付けた小さく僅かなキス跡だけが首筋に残るのみだ。

そうしてイチヤイチヤして、ただただ気持ちのいい瞬間。そこで――ああ、もうこの子は俺のものになったんだ、という事が実感出来て、とてつもない幸せを感じられる。

結局、その雪の日の夜は、ユキを抱き枕にして寝た。久し振りの熟睡……気持ちのいい睡眠ではあったが、肉棒がギンギンのままで寝たので、睡眠時間はそこまで確保出来なかったが、とにかく気持ちよかった。

約束

北海道の朝は冷える——いや、昼でも夜でも冷えるが？ どっちも
ち寒いつちゆうねん！

ただまあ、これがあれば耐えられる。——そう、ユキちゃんがいれば
ね。

「んー、ぬくい……」

「んっ、先生、そろそろ……」

俺は朝、目を覚ますと、朝ご飯を作ってくれるユキを後ろから抱き
しめて、そのおっぱいで手のひらを温めていた。

ユキの体温は高い。ロリっ子だから。ロリっ子は体温が高いって
古来より決まってる。古事記にも書いてある（大嘘）。

いや、ほんと馬鹿な思考してしまうくらい、ユキっぱいは温かくて
もにゅんもにゅんでたまらん。この手のひらっぱいを感じる吸い
付く中学生Lカップに抱きやすい小柄な身体……はあ、ほんと、この
子、家を持って帰れんかな……？

美少女を抱いて、好き勝手堪能して煩惱を満たしていると、締りの
ない思考や表情になってしまう。ただただ気持ちいい。昨日までは
布団を抱いて、肉棒を布団に擦りつけていたのに、今はユキを抱いて、
ユキの柔らかい肌に肉棒を擦りつけている。あー、気持ちいい……。

朝勃ちなのかユキで勃起したのか、分からないが、とにかく一晩
経って再びギンギンになった肉棒は、ユキの背中に擦りつけられてい
る。

とりあえず、朝飯が出来たというので、トーストと目玉焼き、ソー
セージというシンプルでどこにもあるような朝食を頂く。いや、ど
こにでもあるが、これもまたいいものだ。

「美味しいな。ユキは料理も出来るのか」

「それほど得意という訳では……これも、書いてあるやり方で作った
だけですよっ。」

「世の中にはその書いてあるやり方も出来ない人もいるもんだ……そ
れに、ユキが作ったと思うとこの市販のパンや卵、ソーセージだって

美味しいぞ」

「……先生……ありがとうございます。とても、嬉しいです」

かああつと、頬を赤くして恥ずかしそうに喜ぶユキ。あー、朝から可愛いもん見ながらの朝食、マジで進む。テレビでは朝のニュース番組が、今日のにゃんこのコーナーをやってて和むが、こっちの方が可愛いし和む。今日のユキのコーナー。朝ご飯を褒められて顔を赤くするユキ。可愛い。毎日やれ。

それに、朝ご飯の方だってお世辞じゃない。いやほんと。これ、スーパーで買って作ればそりゃ誰でも食べれるんだけど、その買って作るってのが、一人暮らしの男には、まあまあ機会が訪れなかったりする。

いや、作る人は作るだろうし、俺も一時期は毎日の様にご飯を作ってた。ちよつと自分でチャーシュー作ってみたり、残った魚で粗汁を作ってみたり、色々凝ったことをしてみるのは男の料理あるあるじゃないか？ カレーとか炒飯とか、自分で作るのが異常に美味しい、美味いと感ずるのはほんとあるあるだと思う。

ただ、まあ……なんだろうな。ふとした瞬間、唐突に——飽きる。面倒になる。ちよつとそういうのが続くと、今度はあまり作らなくなる。最近美味くて安い店見つけたからそつちでいいや、みたいな感じで、ちよつとずつ作らなくなったりするのだ。

俺の場合、プロの仕事はストレスというか精神力も使うし、外出や遠征も多いから、スーパーで食材を買って置いておいても、腐ってしまったりするので余計に遠ざかった。まあこれからは暇になりそうだから作るかもしれないが、少なくとも最近の俺の朝食はシリアルだ。牛乳掛けて食べるだけでそれなりに健康的で美味しい。割とお勧め。ただ、これも牛乳がなあ……たまに腐る。

だからこういう朝食は好きだ。実はホテルの朝食バイキングで昨日食べることも出来たが、昨日は和食を中心に食べたし、今日に至ってはユキの家でお泊り。まあ、ある意味ちよつといいか。普通の朝ご飯を普通に美味しく食べれるってのは小さな幸せだと思う。いやマジで。

しかも女の子が、美少女が作ってくれるというのが最高。何気に普通ってのもポイント高いよね。凝りすぎると、それはそれでびっくりにしない？ 実は食べたことないような凝った健康的な食べ物を沢山作るより、食べ慣れた一般的なものを出す方が嬉しい男も多いので、女の子はそれを実践しろ。作ってくれるのは有り難いし、文句を言うべきではないって分かってるからこそ、何も言えなくてフラストレーションが溜まることだってあるんだよって。

何が言いたいかって言うと、サクサクトースト美味え。シャキシャキウインナー美味え。目玉焼きも美味しい。いや、実は卵焼き派で、そんなに目玉焼きは、ハンバーグに半熟目玉焼き乗せる以外は食べないのだが、たまに食うと趣がある。それに加えて、こんな洋食の朝は、オレンジジュースに限る。コーヒー？ いや、嫌いじゃないんだけど、俺、実は一時期コーヒー飲みまくってたら胃がおかしくなったんでもう飲まなくなった。味も香りも好き。けどまあ、柑橘系の果物は基本好きなので、子供みたいにコップ一杯のオレンジジュースをゴクゴクと飲むのが爽快なのだ。100%に限るな、うん。

「ごちそうさま」

「……ジュースのおかわりいりますか？」

「貰う」

二杯目。ユキがパックを持って近寄ってきたので、有り難く頂戴する。今度はちよつとずつ。いや、二杯目は味わって飲みたいんだよ（我儘）。

それはともかく、腹が膨れて気力が満たされてくると、少し気分も落ち着いて冷静になってくる。

今日は北海道遠征、そして有珠山高校麻雀部への指導最終日である。今日の夜の最終便で、飛行機で名古屋まで帰ることになっている。これから、朝の10時過ぎくらいにはまた有珠山高校に顔を出すのだが……一回ホテルに戻ってチェックアウトした方がいいか。指導が終わって……そうだな。5時くらいに最後の飯でも連れてってからお開きだ。そこから車で新千歳空港まで。正確にはレンタカーに寄ってからだだが、まあ、2時間ちよい、十分間に合う。家に帰るの

はそれなりに遅くなりそうだが……まあ、しょうがない。自分で決めた二泊三日の日程だ。

そして後2時間くらいで……いや、一度ホテルに戻るからもう少し早く戻らないと駄目か。だがそれくらいには麻雀部に顔を出さないといけないので、ここでそうゆつくりもしてられない。

食事を取って、我が物顔で真屋家の家のリビングでソファに腰を預けているが、さて、どうしようか——ムラムラする。

昨日あれだけしたのに、朝になればもう性欲が湧いてくる。いや、本来なら湧いてこないだろうが、やれる美少女が朝から目の前にいるっていうのが堪らないのだ。さっきまでおっぱい揉んでチンコ擦りつけてたし。

しかしほんとどうしよう。自由に出来る時間が後1時間半くらいなのだ。その時間でやるのも……うーん、ガッツリやるのは後始末がな……。

とかなんとか考えていると、ユキが近寄ってきた。しかも抱きついてきた。うーん、可愛い。懐ききった猫みたい。でも猫じゃなくて美少女。可愛いだけじゃなくて性欲だつて湧いてしまう。胸に押し付けられたむにゅむにゅのおっぱいを揉み上げながら、俺は聞く。

「どうした？」

「……先生……今日、帰るんですよね……」

おおっと、ここでそれを言われるか。うん、まあ、そうだけど……そんなしゅんとしながら言われると罪悪感を感じてしまうからやめてほしい。困る。いや、俺だつて残念だよ。ほんと。ユキとこうやってエロエロイチャイチャするのもそうだが、単純に彼女達、有珠山高校麻雀部の面々には、たった二日、まだ三日すら経ってないのに、ちよつと愛着が湧き始めてるくらいだ。

まあそれも、彼女達がいい子たちだからだろう。プロとしてはゴミみたいな自分の指導を、自ら頼んだとはいえきちんと聞いてくれて、一緒にご飯を食べに行ってくれるほどに慕ってもくれている。まあ、単に飯に釣られただけかもしれないけどな。でもそういうところも可愛げがあつて気に入りは始めている。可愛げつてのは大事だ。別に

優秀じゃなくても、ちよつと手が掛かったとしても、可愛げがあればつい面倒を見てしまう。見た目だけの問題じゃない。なんだろうな、不器用でも一生懸命な奴とか見るとどうも憎めない。迷惑を掛けられても許してつい首を突っ込んでしまう。

彼女達は俺を認めてくれてる……まあたった3日だし、本当のところはどうか分からないけどな。ただ、少なくとも普通には接してきている。

それを嬉しくは思うし、何よりユキは……オカルトの効果とはいえ、俺に惚れて、俺がいなくなることを寂しく思ってくれてる。

俺だつて嫌だが、こればかりは仕方ない。だからまあ、こう言うしかない。

「……まあ、そうだが……そのうち遊びに来るさ。北海道は結構気に入ってるからな」

「……週何ですか？」

「えっ、いや、それは無理だろ……行きつけの店じゃないんだから……」

「……月一ですか？」

「いや、多分……そうだな、半年……いや、4ヶ月……か、3ヶ月に1回くらいなら、まあ……」

そう言うと、ユキの腕の力が強まった。ソファーに座る俺の上に座り、ぎゆうつと強く抱きついてくる。

「……先生はズルいと思います」

「ん……まあ、悪いな」

「私、先生の女ですよ」

「ああ。……そうだな。俺が好きなら、これからも頑張ってみたらどうだ？」

「何を頑張るって言うんですか。頑張っても、先生は……」

「いや、例えばだが、ユキが頑張ってインターハイで活躍なんかしてくれば、俺もこっちに來られるかもだし、ユキだつて将来、俺と頻繁に会うことも出来るかもだぞ？」

「！ それは……どういふことですか？」

悲しそうだったユキの目が見開かれる。

だから俺は言つてやる。まあ、下心のようなものだ。良い話でもなんでも無いが、

「実のところ、俺はプロの中でもかなり崖っぷちでな。いつプロをクビになつてもおかしくないんだが……プロをクビになつたら、どこかの高校か、実業団のコーチでも出来ないかと考えてる。どうせプロには戻れっこないしな」

「それは……。あ、でもそれなら有珠山高校に……！」

「いや、有珠山高校の麻雀部は実績も何もないだろ？ 外部からコーチを雇う余裕も理由もない。部費だつて殆どないだろうからな」

「私、一生懸命頼みます。先生に」

「いやいや、そういう問題じゃないだろ、と内心でツツコミを入れる。まあ俺が校長とか理事長ならユキみたいな美少女の頼みは聞いちゃいそうだが、まあ、普通は無理だ。何もしてなければ。」

でも、今年は違うだろ？ と、俺は言つてやる。

「実績が無ければ外部コーチも雇えないだろうが、実績が……つまり、お前達がインターハイなんかで活躍すれば、話は変わる。コーチの話だつて聞き入れてくれる可能性は高いだろうな」

「！・ほんとですかっ!？」

ああ、本当だ。それくらいは学校も許可するだろう。

ただまあ……俺を雇ってくれるかはまた別の話だ。全国で活躍するほどの高校。もし今年活躍すれば、多少でも来年からは人だつて集まるだろう。学校側だつてこうなると欲が出てくる。毎年、インターハイで活躍するような部であれば、入学希望者だつて増える。

そうなると、学校側も、むしろ自ら設備やコーチなどに投資するかもしれない。そうなつてくると、実績のある元プロなどの人材を選ぶだろう。

だから俺が選ばれるかどうかは微妙なところ。彼女達が俺を慕つてくれている……という部分に賭けて、ようやく半々つてところか。かなり甘く見積もつてるが、まあこんなところでもいいだろう。

どつちかつていうと、ユキが近くにいたいというなら次の方法の方

がいいだろうからな。

「それに……ユキはアイドルになるんだろ？」

「！……はい。先輩方や先生、励ましてくれた瑞原プロのためにも……」

その部分の想いに変わりはないようだ。なら大丈夫だろう。

「……それなら、アイドルになって……もしくは、牌のおねえさんみたいなアイドル兼プロ雀士なんかになれば、全国を回れるし、俺にだって会いやすいかもだろ？」

「……なるほど」

ユキが頷く。うん、まあ、会いやすくはあると思う。ただ一個問題があるとするれば、

「まあ、アイドルになったら俺とこういう関係でいるのも本当はよくないだろうけどな。……ただ、ユキはそれでも俺とこうしていたいだろう？」

「はい。アイドルになっても、私は先生が大好きです。だから、悪いとは思いますが、必ず会いに行きます」

うん、問題だけど問題じゃなかった。

俺にしては強気な発言だが、まあ、これはオカルトのおかげだ。ユキが俺にべた惚れしてるって確信があるし、きつとアイドルだろうがなんだろうが関係なく俺のことを好きで居続ける。……それって何気に最高では？

卒業してアイドルになったユキを、人気者になったユキを、俺は変わらず抱き続けることが出来る。皆の人気者になったかもしれないが、ユキは俺の女なのだ。俺がしゃぶれと言ったらその可愛い声を出す小さい口でしゃぶるし、挟めと言ったらそのこれからも成長するであろう男を惑わす魔性のロリ爆乳がぬっぷりと俺の肉棒を挟む。抱かせろと言えば抱かせてくれるだろう。アイドルまんこはすでに俺に売約済み。この身体も心も俺のものなのだ。

しかもよくよく考えれば、これでオカルトによって俺の女になった美少女は3人。将来的には、4Pだって出来るし、はやりさんとユキのアイドルハーレムとかも……ヤバイ、想像したら興奮する。

日本の健全な男共のオカズになるような爆乳美少女アイドルは、俺にだけ奉仕し、俺の精子だけを実際には搾り取るのだ。

そのオスとしての優越感は、身悶えしてしまうほどの気持ちよさだろう。想像しただけでもだらしのない笑みを浮かべてしまいそうになる。まあそれはそうだろう。まだユキはアイドルになつていないとはいえ、誰もが羨むような美少女であることには変わりなく、彼女も含めた美少女を3人も自分のものにしたのだから。

妄想でしかありえないようなハーレム。現実ではありえない状況を、実際に作っているのは俺という事実。

しかもその気になれば、ここから更に数を増やすことだって出来るかもしれない。男1人に、最低でも3人以上。両手で美女を抱きかかえながら、その下でもう1人に腰を打ち付けることだって出来る。

ああ、最低だが最高すぎる。今からユキと離れなければいけないというのに、野望が俺を昂ぶらせる。いや、ユキと離れなければならぬいからこそ、それを考えることでその先を考えないようにしているだろう。

だからこそ、俺はユキに希望を与えるのだ。俺のモノで居続けられるようにと、

「今だつてこうしてるし、バレなければ……まあ、ユキはずっと俺の女だ」

「……なら私、頑張ります。先生のためにも負けません」

「ああ、その意気だ。可愛いぞ。そういうところも好きだ」

「はい。私も先生が大好きです……それに、私が一番先生に愛されてみせます」

「え？……つて、ちょ、ユキ……!」

ユキが俺のズボンに手をかけ、下着ごと脱がして俺の肉棒をさらけ出させる。先程から抱きつかれたり、想像でギンギンになった肉棒だ。

そこをユキは握って優しくシコシコと扱くと、服をめくって下乳の谷間だけを露出した。

「瑞原プロよりも……私の方が先生を気持ちよくしてあげられます」

「っ、おお……あつ、着衣パイズリとは……やるな……うお」

その下乳の谷間。魅惑のおっぱいホールの入り口に、ユキは肉棒を迎え入れて、しっかりとホールドしておっぱいで肉棒を捕まえる。

その瑞々しい吸い付く乳肌、思わず腰を浮かせてしまうが、

「気持ちよくなってる先生も、私、大好きです。集合時間まではまだ時間がありますし、好きなだけ先生の大好きな私の大きな胸で……パイズリで気持ちよくなってください……」

「っ、あ、ああ……！ 朝一のユキの着衣パイズリは……やば、い……はあ、最高……」

ユキが俺が教えたパイズリという言葉を使って、俺を興奮させようとしながらLカップのおっぱいをたぶたと腰の上で動かしてくれ。あー、なんというかも……この子、持って帰りてー！

結局、集合時間までユキのおっぱいで2回。お口でも2回抜かれた俺は、一応スッキリとした状態でホテルへと戻り、3日目の指導に向かった。

——とまあ、俺の心情さえ無ければ良い話に見えなくもないようなやり取りを交わし、俺の北海道遠征は終わると思ったのだが、

「よし、先生！ 200万払うからもう1年だ！ ——出世払いで！」

「いや、獅子原。そういうのは詐欺だ——あ、いや、獅子原ならありうるか……？」

「私も払います。——身体で」

「ええっ!? か、身体で払うんですかつ、ユキちゃん!?!」

「ユキなら払えるね！ なにせアイドルになるから！」

「あ、アイドルと身体の値段って関係あるの……？」

いや、関係ある（断言）。多分、2百万くらい払っても、ユキや、はやりさんみたいなアイドルなら買う奴もいるだろう。

ただまあ、そんな冗談を言うほど、他の面子も俺のことを気に入ってくれてるとは意外だな。もうちよつとあつさりと別れるものだと思っていたが——後、ユキ。その発言は危ない。真顔で言っていたた

め、冗談だと思って流されたみたいだが、かなりギリギリだ。どう甘く見積もっても、俺相手になら身体で払ってもいいって思ってるように聞こえる。事実なのだろうか。

「はあ、ほらお前ら、そんなこと言っていないでさっさと打て。今日は5時には終わるんだからな」

「え、なんで5時？」

「昨日まではもう少し遅い時間まで見てくれましたよね……？」

岩館と本内がもつともな質問をするので、俺は答えてやる。

「……5時に終わらないと、最後の飯に行けねーだろうが！俺は最後にラーメン食って帰るんだよ！」

「え、もしかして今日も奢り？」

「支払いは任せろー！バリバリ！」

「よくわかんないけど奢りだね！」

いや、そこは、やめて！なんだよなあ……だが如何にノリが良い連中とはいえ、知らないネタに乗ることは出来ない。口でバリバリって言うの、中々アレなだけだな。まあいいが。

とりあえず、俺は最後まで、麻雀を打った。一応、役満も狙い続けながら。——全然、チャンスすら来なかつたけどな！

ただまあ、なんだろう。久し振りに、麻雀を打って楽しい気分になった。いや、楽しいっていうか……気楽といえはいいのだろうか。凄く肩の力を抜けた気がする。

そうして日が沈み、約束の5時になると、部室を片付けて、学校の駐車場に止めていた俺のレンタカーに皆が乗り込む。するとその車内で、

「……先生。私のこと……いえ、皆を名前で呼んでください」

「……なんだ突然。ユキ、とか、爽々、とか呼べばいいのか？」

「なんで私の名前、そんな気の抜けた呼び方？でも先生なら構わないけどね」

「おいおい、また会えるかどうか分からないのに、名前で呼んで仲良くか？微妙に切ないな」

「いや、先生にはまた来てもらう！——お小遣いが溜まったら！」

「いや、それするくらいなら、皆でお金を出し合った方がいいんじゃないの……?」

「そうですねっ。その方が素敵です!」

「えー、せんせーならタダでもくるでしょ? だって5000円もらったところでただどころか赤字だし」

「それを言うな岩館エ! 俺も、採算が取れてないのは分かってんだ……はあ、いや、いいんだけどな」

車の中で、そんな会話。青春真っ只中の彼女達との会話だ。

その一場面に、その思い出に、俺が入ってることが少し奇妙でむず痒く感じる。

「……ま、安心してよ。夏になったら皆で東京行くからさ。先生も来ればいいじゃん?」

と、不意に爽が不敵にそんなことを言う。ははっ、中々面白い。そんな簡単に、口先だけの約束でインターハイに行けたら苦労しない。

……だがまあ、彼女達の実力は俺が……よく知っているとまでは行かないかも知れないが、ある程度は知っている。

その可能性はあるだろう。いや、あるって俺が信じたいだけかな。もしかしたら行けない可能性の方が高いかもしれない。

だからまあ、もしインターハイまで来れたら、

「……はっ、そうだな。その時は、お前達を名前で呼んで……ついでは控え室にでも乗り込んでやるよ。コーチ面してな。追い出されないようにどうか関係者枠にでもねじ込んでけ」

「お、言ったな? よし、インターハイに行く理由がもう一つ増えたぞ!」

「はい。——絶対行きます」

「まあ、せんせーのお財布事情を考えるとね」

「爽のお財布事情もね」

「そういう約束も素敵ですっ!」

皆が、ちよっとした冗談交じりのようなノリだが、確かにそう言ってくれる。

いや、分かる。彼女達は本気で行く気なんだろう。全国の高校生の

頂点を決める大会——インターハイに。

だからこそ、俺なんかを呼んで少しでも強くなろうとした。

それに、俺は少しでも応えられたらどうか——なんて、俺には似合わないな。うん、この思考はやめよう。俺なんか居なくとも、彼女達は前に進むだろうしな。俺はまあ、相変わらずクズい思考で自分の為に動くだけだ。

……ただ、少しくらいなら、普通に彼女達の為になるような、そんな普通のことをするのも悪くない。この楽しませてくれた借りの分くらいは。

車を運転し、ラーメン屋に着くと、皆が降りていく中で、最後尾のユキが駆け寄ってきた。そして誰も見ていない瞬間、俺の手を引っ張る。

「先生、約束ですからね」

ちゅっ、と触れるだけのキス。

随分とギリギリな瞬間のキスだ。それをして、ユキは皆の輪に入っていく。

「ははっ……どんな状態だよ、俺……」

傍目には良いコーチみたいだが、その実教え子と隠れて恋愛をしているかのような変な感じもある。どうにもアンバランスだが……当然、俺の立場としては悪くはないな。

贅沢な気持ちを感じながら、俺は北海道の冬空の下で、3日間だけの教え子たちとラーメンを食べる。なんとなく、あくまでもなんとなくだが、俺はこの思い出を忘れないような気がした。

……なーんて、思ってたこともあった。

「あー……帰ってきちまったなあ……」

俺が住むマンション。その4階。高くもなく低くもない中途半端な階にある、正に俺のような高さに、俺の部屋はある。

スーツケースを押して、鍵を開けて家の中に入れば、3日振りの部屋の中。

久し振りなせいか、家特有の匂いがする。別に臭くはないが、空気が籠もってるか？

「ふうー……」

俺はベランダを開けて、空気を入れ替えながらなんとなく外を見る。

冷蔵庫から冷えたグレープフルーツジュースと、家に常備しているウォッカを取り出し、グラスに氷を入れると、ウォッカを適当に、まあ、45ml程度。そしてグレープフルーツジュースを入れて適当に混ぜる。俺がよく、家で1人飲みするときの飲み方だ。

名前としてはブルドッグというらしいが、俺は自分でこれを二十歳の時に適当にやってから飲み始め、後から名前を知った。ソルティードッグの塩無し版といえれば分かりやすいかもしれない。

「はー……」

喉を潤す。グレープフルーツの酸味と、ウォッカが混ざりあつた、少し苦味もあるこの味わい。

喉の奥から熱くなるような、冬に最適なお酒を飲む。

そうして、傍目にはちよつとハードボイルドに見えなくもないような、感じて飲みながら思うのは……最低なことだった。

……あー、やりてえー……

セックスである。そう、エッチがしたい。

帰ってきて、思った。なんでユキがいないんだと。

もし北海道なら、このままラブラブエッチである。昨日の夜のような、男として最高の幸せを味わえるのである。

だが家の中にユキはいない。はやりさんもいなければ、良子だつていない。

そう、やれる女が、俺の女が3人もいるのに、1人としていつだつてやれる女はいない。

いや、1人も女がいないなら諦めもつくし、こんなにムラムラすることはない。が、俺には最高の女達が3人もいるのだ。

だからこそ、俺の中の性衝動は、肉棒は、女が欲しくてたまらないのである。どうしようもなく猿なのだ。射精なのだ。

マジでホストの振りしてそこの女を引つ掛けてやろうかと思うが、そこの女なんかで満足出来る筈もない——と、アルコールが入った頭で馬鹿なことを考える。

「あー、クソ……結局、こうなるのか……」

と、頭をガシガシと掻きながら、その悩みを呟く。欲求不満になると髪を触るというが、ここまで欲求不満になると、髪を掻き塗りたくなるような気がする。

だがこうしていてもどうにもならないのだ。俺は帰り道で立ち寄った、コンビニの袋からツマミにしようと思ってきた柿ピーを皿に開けて、先にピーナッツだけをちびちび食べる。変わった食い方だと言われるが、これが好きなのだから仕方ない。

そうしながら次に取り出したのは雑誌だ。今日発売したばかりの——Weekly麻雀TODAY。

毎週月曜日発売の麻雀雑誌。麻雀雑誌は数多くあれど、一番売れて話題になるのはこの雑誌だろう。

プロの対局、リーグから、高校生、中学生。時には小学生の話題だっ て載ってるし、女性プロ雀士や高校生なんかのグラビア写真が乗るのもこの雑誌だ。いや、ほんとこの間のはやりさんと良子の水着にはお世話になった。今度、絶対それ着てエッチして貰う。

「さーて、今日は誰かな——つと……」

俺は一応、一ページ目から開いてみたのだが、往々にしてグラビアは最初の方に載っているものだ。

だからまあ、それを最初に見るのは至極当然。そこに写っていたのは——見知った顔だった。

「……………」

俺は無言で、その顔を、写真を、そして煽り文。次のページまで続く水着姿の彼女の説明、記事を読む。

今年からプロになったハートビーツ大宮の若手。高校三年生であった前年度は、名門、白糸台高校、チーム虎姫のキャプテンを務めていた。4月より、本格的なプロデビューを迎える、その大型新人の美麗グラビア写真が——

「はっ、前も撮ってただろうが……」

俺はそれを見て、息を吐いてしまう。気分が盛り下がる。

ただその反面、その美少女の可愛らしいルックスと、そのグラビアに適した出るところが出ていて、引っ込むところが引っ込んでいるいやらしい肢体を見て、興奮している自分もいる。

ただ、この興奮はそれだけではない。自分が一番よくわかっている。この興奮の正体を。

ただ同時に、昔を思い出して気分が落ち込むのも確かなのだ。だから、興奮はしても愉快的な気持ちではない。

「チツ……はあ、あいつも、もうプロか……」

時が経つのは早いな、とジジくさいことを考えてしまう。俺がプロをクビになったつてのに、その時にこいつはプロデビューしているし、俺の母校からの出身者はどうもこいつも実業団やプロで活躍、期待され、俺が知らない現在校生の連中も、特に女子はインターハイ二連覇を達成したらしい。

なんともまあ、羨ましいことで——俺は自嘲気味に、お酒も入っているからか、少し嫌味なことを考えてしまう。

「あー……ほんとによお……って、そういえば、俺の事は書かれてるか……？」

と、そこで思い出し、俺は雑誌の後ろの方をパラパラと捲り、小さく載っているプロの解雇者リストを見る——と、そこにはだ。

「書いてんじやねーか、俺の名前……」

東郷仁——紛れもない俺の名前がそこには書かれていた。

これで世間からも俺がクビになったことは知れた訳だ。いや、まあこんなところを一々見る奴がいればの話だな。

二軍選手が1人、クビになったところで世間の連中は気にも留めない。憶えすらないだろう。

だからこれくらいでは何とも思わない。思わないはずだ。クビが、これ以上ない分かりやすい形で現実になったとしても……

「……あ？」

その時、俺の携帯が鳴った。

こんな夜中に、と思う前に、こんな時に、と思う。

今は虫の居所が悪いんだよなあ、と思いつながら携帯を取る。

「はい、もしもし——」

「てめつ、先輩！ プロクビになってんじゃねーか!!」

……と、デカイ声で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

俺は思う。コイツかよ、と。そしてぞんざいなテンションで応答することにした。

「うっせーな渡辺。今何時だと思ってるんだ。近所迷惑だぞ。罰として、今から焼きそばパン買ってこい。3日までなら待つ」

「どこ住んでるかも分かんねーのに行けるか！ それより、クビだよクビ！ なんでクビになってんだよふぎげんなー！」

「冗談だ。つーか、敬語はどうした。俺は先輩だぞ？」

「せ、先輩が敬語じゃなくてもいいつつた……んじやないっすか！」

「それも冗談だ。憶えてるぞ。——なんで敬語使ってるんだ琉音。物覚えが悪いのか？」

「ふぎげんな先輩！ ぶつ潰す!! 今度……つて、そうじゃねえ。今は、そうじゃねえ……」

相変わらず、良い反応をする奴だな、と俺は後輩の女子からの電話を聞く。

わたなべるね 渡辺琉音。白糸台の一年後輩だった女子で、今はハートビーツ大宮

の現役プロ。

今雑誌に載ってる後輩の一年先輩でもある妙に強気な奴だ。

そんな琉音に、俺はこちらから質問を聞いた。

「……それで？ 俺がクビになったって知ったのか？」

「……雑誌に書いてあんだろ。見りゃわかる」

ま、そりゃそうだよな。

だがまあ、そこで俺に電話してくる意味が分からない。俺はそれを問う。

「それで、それがどうした？ 別にいいだろ？ ムカつく先輩がプロをクビになったんだ。せいせいするだろ。別にいいんだぜ？ 笑つても——」

「そんなこと思う訳ねーだろ!! つーか、思ってる奴は私がぶっ飛ばす!!」

「……そうかよ。それじゃあなんの用だ? 飯でも奢ってほしいのか?」

「だから……ああ、くそ。頭がまとまらねえ……もう簡単に言うぞ」

最初からそうしろ、と言おうと思ったが、また脱線しそうなのでやめた。俺は琉音の言葉に耳を傾ける。

「……さっさと逃げやがって。嘘ついてんじゃねえよ。栞も、心配してたんだよ」

「……まあ、それは悪かったな。嘘ついちまって。幻滅したか? それなら、こんな奴とはさっさと縁でも切っちゃまえ」

「別に……そういうんじゃねえよ。それに……あれだよ、あれ……なんつーかなあ……」

「なんだよ」

言葉が急に出てこなくなった琉音。まあこいつは感情で話すから途中でこうなることだつてある。

その言葉を待っていると、少しして琉音が続きを口にした。

「別に嘘ついたのは許す……が、謝れよ! 直接! 会ってから!」
何を言うかと思えば……、

「……電話越しじゃ駄目なのか?」

「私はいいが、栞は知らん」

「……じゃあ栞の電話番号教えろ。俺、あいつの電話番号知らなくてな」

「は? てつきり知つてると……じゃあなおさら教えられねーな!!」

「なんでだよ。意味不明過ぎてこっちが馬鹿になったみたいな感じになるな」

「感じじゃなくて先輩は馬鹿じゃねえか。マジでなんでそうなるんだ……」

電話越しの琉音の声は、どうにも呆れ果てるように聞こえるが……なんだ? 本気で分からん。

俺の行動や言動にこいつを呆れさせるものがあったとも思えない

しな。過去も含めて。強いて言うなら嘘ついちゃまったことくらい。

ただ琉音は、呆れながらもその話をまだ続けるようで、

「……いいから、会いに來い。東京な。クビになったんなら暇だろ、無職先輩」

「次にその呼び方したらマジでお前の腹にホルモンとビールぶち込むからな」

「な、なんだそれ……って、普通の事なのに怖い言い方するのやめろよ……！」

「……！ それに私、まだ未成年だぞ……！」
こいつ、そういえば微妙に怖がりだったな……意外と突然の出来事なんかには弱いし、プロになってからもその辺は解消出来ていないらしい。

だが……と俺は思う。会う、か。色々と諦めていた俺だが、オカルトがある今の俺なら、とも思ってしまう。

それは今更ながら最低な行動だが、もう俺を止めるものもないよな、と思う。そろそろ吹っ切る頃だとも。

「……分かったよ。栞には……そうだな。まあ、2週間以内には会いに行くと言っても言っとけ」

「はあ？ もっと早く来いよ。私も行くから」
「なんでお前が——あ、いや待て。一応お前も来い。あくまで一応な。お前はついでだ」

「すげえムカつく言い方だな……だけど来るってんなら許してやる。だけど、もっと早く——」

「あー、あー、分かった分かった。そんじゃ来週な。来週くらいには行ってやるよ。そんくらいは待てるだろ？」

「……まあ、それなら……それじゃあ栞にもそう言っとくからな！」
「おう、それじゃあな」

と、俺は電話を切ると、切った後で即、琉音にチャットを送る——
やっぱり2週間後くらいな、と。

そして携帯の電源を切り、ソファへと投げ捨てる。いや、悪いな琉音。こっちにも、ちよつと心の準備が必要なんだ。

何しろ……一応、このグラビアに載ってる栞は——俺が学生の頃

に、好きだった女だからな。

東の都

誰しも若い頃つてのはあるだろう。人間である以上——いや、生き物である以上は当然のことだ。

だが人間であれば、学生時代。ちよつとクサイ言い方をすれば、青春時代つてのがあるはずだ。

人によつては楽しかったような、苦かったような、大人になった後で思い返せばくだらなかつたような、そんな若かつた日々のことだ。

まあ多くの大人はその学生時代つてのを、戻りたいあの日々。つまり、良いこととして基本的には捉えてると思う。大人つてのは大体若い頃の話をしたがるものだ。酷い時はこつちが聞いてもないのに、ペラペラと若い頃はやんちゃだった、遊んでた、好きな女の子云々……とまあ、本当かどうかは分からないが、よくもまあそんなに楽しそうに話せるものだ。

いや、実際に楽しいからこそだろう——が、中には苦しい思い出だったという者も、当然いる。

こうやって話題にするだけでも、本当に苦しい思いをした奴は嫌に違いないが、社会や大多数の大人は学生時代楽しく過ごしてきた連中だからその深刻さつてのを分かつてないだろう。

実際、俺にだつてそういう気持ちは分からない。いじめとか。被害者になった覚えも、加害者になった覚えもない——いや、加害者は分からない。俺が自覚してないだけで実際は嫌だつたつていう可能性もあるからな。そこが難しいところだ。

それにいじめではないが、俺も学生時代の——特に、荒れていた高校時代の話をするのはあまり好きじゃない。苦しいつてほどじゃないが、苦い気持ちになるからな。

だから他人から学生の頃の話や……後は、家の話をされたら大体はぐらかしてる。中学の時の話をしたり、家じゃなくても地元の話をしたりな。そうやって上手く躲すことも処世術の一つだ。突っ込んで聞いてくる奴は知らん。空気読めない馬鹿か、悪気のない馬鹿だから無視しろ。もしくは適当に言うか、嘘でもつけ。面白くなくても答

えを聞けば納得するだろうからな。

さてまあ、話を戻すが、大人が学生時代の話が好きな理由。青春時代が楽しかったというポピュラーな理由には、恋愛つてのがあるだろう。

思春期で、異性を意識する頃。男も女も、身体が発達して男らしく、女らしくなる。精神の方も大人なような子供のような、ちよつと歪にも感じるような、そんな年頃。

誰だって、好きな人の1人や2人はいただろう。いなくても、魅力的だと思つた相手はいたんじゃないか？ 別に同級生や先輩後輩などの身近な人物に限らず、大人や好きなアイドルや芸能人なんかでもいい。異性として魅力的だと思つた相手だ。学生風に言うなら、付き合いたいと思うような相手。別に学生風でもないか。とにかく、好きな人はいただろう。

特に男子は、性を憶えた頃、大体中学生くらいからそれが強くなるだろう。誰が好きで付き合いたい。エッチがしたい。あいつでシコつた——とまあ、下世話な話をなんども男同士でしたもんだ。

そういう意味でなら、俺にも好きな人は何人もいた。ちよつとでも可愛かったり、異性を感じたり、親しく話す相手は全員、もし告白されたら付き合っていただろう。誰からもされなかつたけど。悲しいけどこんなもんよね。

それでまあ、そういう訳で俺には恋愛つてのがよく分からない。だから誰かが本気で好きだという他の男子の話を聞いて、どうせただやりただけだろ？ と思つていたし、今でも思つてる。別に容姿に惹かれるのは当たり前だから特にツッコむこともないが、その内面も好きで、手を繋ぐだけで十分だと言うようなプラトニックな恋愛が出来るような奴がどれだけいるというのか。生物学的に無理だろ。付き合つたらやりたくなくなるに決まつてる。内面だけで相手を好きになる？ 女のことは分からないが、男にそんな奴がいればちよつとその顔を見てみたいものだ。——いや、中にはいるんだろうけどな。ただまあ、話は通じなさそうだ。価値観が違いすぎて。そういう奴らと比べたら、俺のような男は最低なんだろうが、周囲の男を今まで見てきて、

俺の考えは未だ誰かに否定されたことはない。聖人君子かと思うような男。彼女だけを一生愛するなんて神の前で誓った先輩のプロは結婚生活一年後に不倫し、離婚した。いやいやいや、守れない誓いなら結ぶんじゃないやねーよ。マジで。結局はその時だけのノリじゃねーかって何度も思った。口にはしなかったが。

だけどもあ、勘違いしたくなるのも分かる。特に若い頃は経験がないから、これが異性を好きになるってことかといいついてしまおうのだ。

何故それが分かるのかと言うと、かくいう俺も高校時代に好きになった女が——いや、好きになりかけた女がいたのだ。

やりたいという性衝動だけではない——ほんの短い時だが、本気になりかけた相手。

だから俺はこの街も、高校時代も好きじゃない。荒れていた自分と——その女を思い出すから。

「——あー……西口ってこつちか……？ いや、違え……あつちじゃねーか……」

雑踏。人混み。コンクリートジャングル。

行き交う人の声。行き交う人はサラリーマン、学生、ギャル、オタク、オカマ、外人、ドン○ホーテ・ドフ○ミンゴ——って、なんかやべえコスプレした小太りのやべーおっさんがいる……近寄らんとこ……。

とにかく様々な人がいる。それはもう鬱陶しいくらいに。

だがまあしようがない。ここはそういうもんだと思うしかない。

「東京も久し振りだな……」

疲れたのでちよつと道の端で立って休憩。そう思いながらも街の光景を見てなんとも言えない気分になる。

日本の首都——東京。

小田急、新宿駅の前。百貨店やらユニ○ロやらビックカ○ラやらが見えるその通りで、俺はペットボトルの果実水を飲んで一息つく。

あんまりにもあんまりなので、独り言を呟いてしまった。気分的には、そこまで高揚感はない。

実際、東京はそこまでテンション上がらない。初めて来た時とはともかく、大人になるとそこそこ行く機会があるだろう？ そうなってくるに慣れるし、普通の街に見えてくる。

とはいえ人の多さや店の多さなんかは凄いけどな。でも別にプラス要素かっていうと微妙なところだ。それに初めて来た時も、あまり大きい声では言えないが、臭いが……うん。田舎って空気綺麗なんだなって思う。

ただまあどこかの国のPM_{2.5}に比べればマシだし、慣れれば問題は無い。それに本当にヤバイのは渋谷とかであって、他はそうでもなかったりもする。まあ、今はもう何も感じないが。

とはいえこの人の多さはどうにかならんのかとも思う。なんもかも政治が悪い。いい加減にしてどうぞ。いやマジで。

色々思うところはあるが、まあ、そう思えるのも俺が東京には何度も来たことがあるからだろう。

試合の遠征。イベントや興行などの仕事もあれば、そもそも俺は東京に住んでたことだってある。23区内ではないが。なので多少久し振りってくらいで、そこまで新鮮味は感じないのだ。

だから遠出した期待感よりも……ちよつとだけ、今の俺はセンチなのだ。キャラじゃないのは分かってるが、たまにはそういう時もある。

これから会う奴のことを考えれば、微妙な気持ちになる。そして、それだというのに、

——やりたくてしょうがないってのがまた……。

あの日から二週間。2月も終わり、後数日で3月となる頃に俺は東京までやって来た訳だが……その間、俺はやはり性欲にうなされていった。

いや、性欲以外にも悩みというか鬱陶しいことはあったのだが、無視した。実家からの電話とか、知り合いからの連絡とか、例の麻雀を教えてほしいとかいう依頼とか……いや、時間があれば東京でも依頼

があるっぼいし、別に行ってもいいんだが、少なくとも今はそんな気分じゃない。

とにかく、やりたい。エッチがしたい。今考えれば、ユキは最高だったと思う。中学生なのにあんなエロい体つき。アイドルを目指せるほどの美少女。ほんと最高だった。

ただユキも、その前のはやりさんや良子とのエッチも、思い出せばムラムラしてしまうため、1人の時は苦しいのだ。

今回は相手が相手なため、少しは我慢出来たが、二週間も経てばさすがに限界だった。いや、今朝新幹線の車内で読んだ今週のWeekly麻雀TODAY。それに載っていた三尋木プロのグラビアですら勃っちゃったくらいだから相当ムラムラしている。三尋木プロ……脱ぐこともあるんだな、和服。てつきりそういう写真はNGなのかと思っていた。

別にロリっ子も嫌いじゃないから不思議じゃないんだが、公共の場でグラビアを見たくらいで勃起するほど俺は馬鹿じゃない。だどいうのにしてしまったことが、俺の溜まり具合を物語っているといえる。

まあそれもあったか、俺は覚悟を決めてきているのだ。過去の苦い思い出なんて忘れて、あいつをゲットしてやると。そう思っ上を見上げてみると、

「——おらあー！」

「ぐおっ!?!」

後ろから背中に衝撃。なんだ、通り魔か!?! くそっ、どこかに棒とかないか!?!

なんてまあ思うより先に、聞き覚えのある声であることに気づく。だからまあ、俺はいつもの調子で、後ろから軽くどついてきた奴を捕まえる。

「……おいおい、先輩相手に随分な挨拶だな、琉音」

「来週来るって言ってただろうが！　なのにすぐ二週間後に言い直しやが——痛い痛い痛い！」

俺は振り向き、予想通り、三白眼に毛先が跳ねた癖っ毛の少女の首

根っこを押さえると、背中をつねってやる。

「社会人としてのルールを先輩の俺が教えてやろう。先輩に会ったらまずおはようございますだ。挨拶は大事だぞ。まさかプロになつてから調子にノッてるのか？　だとしたら再教育だな」

「痛いっつーの！　こ、この……少しは女らしい扱いしろよ！　女の先輩の背中つねるか!?　普通!?!」

「お前が先輩の女らしい振る舞いをすれば、それ相応に接してやらなくは——」

「あ？　んだよ——って、なんだ。しおりも来たのか」

と、俺は琉音を放してやり、やって来た人物に目を向ける。琉音がその名を呼んだその彼女が、

「琉音さんと……せ、先輩……」

「……葉、か……久し振りだな」

「お、お久しぶりです！　その、遅れてしまってすみません……!」

「あ？　私らも今来たところだから気にすんな。それにシーズンオフの私と無職の先輩と違ってそつちには色々あんだろ。——卑猥な写真撮ったりな」

「琉音さん!?!　せ、先輩の前でその話は……!」

「おいこら琉音。次にその呼び方したらビールとホルモン腹にぶち込むって言ったよな？　俺はやるといったら本気でやる男だぞ」

「だから私は未成年だっつーの！　——でも肉は奢れ!」

「だからお前は馬鹿なんだ。ノンアルコールビールってのが世の中にはあるんだよ。肉と一緒にしこたま飲ませてやる。覚悟しとけ」

「な、なっ……なんだそれ、いや、聞いたことあるな……」

「琉音さん、そんなに恐れなくても」

怖がる琉音に葉があはは……と微妙な笑みでツツコミを入れる。

軽快なやり取りだが、俺は先程から葉を見て、ドクンドクンと鼓動を強くしてしまっていた。

卒業とプロ入りを控えた彼女は高校在籍中ながらもそれなりに有名な人であるためか、お洒落な伊達メガネを掛けて申し訳程度の変装をしていた。

だがその女の子らしい春先のカジュアルな格好に、俺は思わず感嘆してしまう。

おしやれで、俺が今まで見てきた中で最も女の子らしい女の子。それが宇野沢うのさわしおりだ。

白糸台高校の現三年生。来年からは琉音やはやりさんと同じ、ハートビーツ大宮に所属することが決定しており、俺の二つ下の後輩でもある彼女。

ふわりとしたセミショート。ボブカットの明るい色の髪。大きな瞳。笑った時や、口を開けた時に覗く八重歯がチャームポイント。顔立ちは明るい印象を持たせるような可愛らしい美しさを持った美少女で、コロコロ変わる表情が普通の女の子らしくて可愛い。優しくて、少し母性も感じられる。

身長は琉音よりも少し低い——確か、153センチ。少し小柄だ。

だがその服の胸元は大きく盛り上がり、彼女の動きに合わせて微かに揺れる。同年代の少女達と比べても明らかに大きいだろう。実際、自分がいた時は校内に彼女より胸の大きい女子は存在しなかった。

だというのに、その腰はセクシーにくびれている。スカートの先から見える太腿は、オーバーニーソックスに太腿の絶対領域が、そのムチとした柔らかく弾力のありそうな、それでいて太すぎない絶妙な女性らしさを内包した肉が乗っているし、そこから想像出来るスカートを押し上げるお尻の丸みもとても魅力的だ。

だというのに、彼女は自身の魅力に気づいているのかいないのか。割と無自覚で、何処にでもいるような等身大の女の子なのだ。

料理やお菓子作りが得意で、嬉しいことや楽しいことがあれば笑うし、悲しいことがあれば落ち込む。以前は少し自己評価の低い子だった。が、今は少し自信に満ちあふれているようにも感じられる。

久し振りに見た、生の栞。仲の良い者が少なかった高校時代において、女子としてはそれなりに交流のあった相手。そんな彼女を見て、やっぱり思ってしまう——可愛い、好きだ。

ただこの好きはやりたいたいという意味の好きではあるが……ただそれでも、色々と思い出深い相手であることも確かである。

「先輩……お久しぶりですね」

「……ああ。最後に会ったのは……去年の夏の大会の時だったか。インターハイの時」

「でもその時の先輩、応援しに来てくれたと思って、挨拶だけしたらすぐに帰っちゃったじゃないですか……あれ、会ったって言わないと思います……」

「ん……まあ、悪いな。急用を思い出したんだ」

「もう……ふふ、でもそういう気まぐれでそっけないところも相変わらずですね、先輩は」

呆れたと思ったら、昔を思い出したのか、懐かしむような笑みで言う葉。そんな姿を見ると俺も昔を思い出す。息が漏れそうになる。実際、軽く息を入れたところで、

「それでどうするんだ？ 肉か？」

「もう琉音さん。まだお昼ですよ？」

「ああ？ 別に昼から肉食ってもいいじゃねえか。お前だって朝からお菓子食べるだろ」

「そ、それはそうですけど……まずはお茶にしません？ 先輩も、それでいいですか？」

「ん、ああ。そうするか。ほら、肉は夜連れてってやるから我慢してろ」

「言ったからな。連れて行かなかったらぶっ飛ばす」

「もう、また先輩にそうやって……相変わらずですね、琉音さんも」

そうして、俺は葉と琉音の2人を連れて歩き出した——昔のことを、思い出しながら。

白糸台高校。今では有名な名前だが、当時はそれほどではなかった。

インターハイ予選では西東京地区に所属し、全国から一応選手を集めている、麻雀にそれなりに力を入れている高校。

だが実績がそれほどある訳ではない。女子の最高成績は団体戦ベ

スト8。男子は一応優勝。どちらも一度だけの、しかも地区予選での成績だ。

とはいえ弱い訳ではない。西東京地区はそれなりの激戦区だ。そこでベスト8やベスト4に入れるなら、そこそこの強豪校……まあ、中堅校つてところか。

成績は振るわないが、名門ということもあり、特待生制度もあれば、寮だって完備しているし、設備もそれなりに整っている。そしてそれなりの進学校でもある。まあ全体的なアベレージは高いが、どれも特筆すべきレベルではないという、こう言ってはなんだが、中途半端な学校だ。

そんな白糸台高校に、俺は麻雀特待生として入学した。

理由は色々あるが、簡単に言えば都合が良かったのだ。

地元から離れられるし、他の学校同様、中学の時の俺の成績を見てスカウトに来てくれたし、かといって他の高校と違って、インターハイで優勝を争うほどの強豪校という訳でもない。寮だってあるし、死ぬほど厳しい訳でもない。男女共学。麻雀強豪校は何故か、男子女子共に、男子校、女子校が多かったりするので、地味に重要である。

そんな訳で、俺は白糸台高校に入学。東京に1人で上京した。

当時の俺はあまりやる気もなかったが、それでも一年生ながら校内ランキングでは一位。女子を交えても勝ち越せるくらいには強かった——まあ、地区予選ベスト8が最高成績の女子部や、地区予選を突破して本戦に行っても、一回戦を突破するのが関の山の学校に所属する生徒の実力なんてこんなものだ。中途半端な俺でも無双出来る——だからこの学校を選んだ。

それでまあ、麻雀が強い奴つてのは本来人気者である。そりゃそうだろう。日本どころか世界でも大人気の競技。高校生の強い選手なんかは、メディアで露出し、男子だろうが女子だろうがファンがついたり、モテたりすることも多い。

学校内でも、麻雀部といえばスクールカーストで言えば最上位だ。麻雀部つてだけでモテることも、あながちないとは言えない。

だからその麻雀部でも一番強い俺つてのは、本来女生徒にキャー

キヤーと黄色い声援を浴びせられ、男子からも尊敬を集めるはずなのだ……こういう中途半端な強豪校の先輩つてのはプライドが高いんだよな。

因縁つけられて部の先輩から呼び出されて馬鹿にされたので、俺はその先輩らと喧嘩。先輩だからって遠慮はしない。生意気だのなんだの言っただけを仕掛けてきたのは向こうだし、若い時つてのは妙にイキってしまうものだ。たかが歳が二つ上の先輩に、俺は負けやしない。まあ、多少卑怯なことはするがな。

……それでまあ、勝つには勝った。勝ったがそのことで、俺は部内での居場所をなくした。

どうにも、俺が一方的にボコったと噂が広まっていたのだ。実際、俺は殆ど怪我はしなかったが、先輩の方は運悪く肋骨が骨折していたし、俺がボコったとみなされるには十分だったらしい。

だが運良く目撃者がいて、俺が一方的に悪い訳ではなくなったのだが、それでも怪我をさせたのだから悪いと、一応一週間の停学。適当な処罰だな、と俺は思ったが、まあそれはいい。問題はその後の学校生活だ。

停学明け。クラスの人達からは思いつきり引かれてたし、無視されることはなくても距離を取られた。何名かの男連中からは興味を持たれたが、その時の俺は大分素っ気なかったし、割と傍若無人であったため、残った友人は麻雀部に所属する奴も含めて3名。ま、これでも十分だとは思うが。

しかしモチもしなければ部内でも俺に意見する奴はいない。練習をサボっても苦言を呈するのは部長か監督のみ。それも、俺が部で一番強いとなれば黙るしかない。いや、正確に言えば強くは言えない、か。

結局、練習は程々に行くくらいで落ち着き、程々にサボる。そんな生活を、俺は二年間過ごしてきた。

一応、大会なんかでは成績を残してやったし、そうなることで余計に俺に関わる奴はいなくなった。同じチームの連中や友人以外は誰もだ。

だがまあ別にそれでも良かった。その頃には寮生活や東京にも慣れ、好きな音楽を聴いて好きなバンドのライブに行ったり、数少ない友人とゲーセンに入り浸ってみたり、学校をサボってみるくらいのも、真面目ではないが、普通の学生としての生活を謳歌していた。

だから最後の一年も、そうやって過ごすんだろうなって思ってた。家のこととか、不安なことはあるが、不安に思っただけでもどうしようもない。色々考えてイライラしながらも、結局は現状維持。

そんな時だったか。体育館と武道場の裏で、俺は後輩と、栞と出会ったのだ。

過去

「——僕と付き合ってくれ」

「——っ」

「お……う？」

どこの学校でも、人気のない場所は愛の告白の人気スポットである。

適当に校内を彷徨いて暇を潰そうとしていた俺は、偶然その場面に遭遇した。

思わず身を隠し、その場面を覗き見る。視界の中には、うちの制服にVネックのスクールセーターを上から着たよくあるスタイルの女子の後ろ姿と、見知った男の顔。

そいつはうちの麻雀部の、男子の部長だった。

「はっ……部長サマが随分と真面目な顔でまあ……」

端正な顔つきのイケメン。成績優秀で運動神経もよく、先生や周囲からの評価も高く、生徒会長を務め、麻雀部の部長もしている。

まあ、学校の人気者。女子からキヤーキヤーと黄色い声援を送られ、なんなら告白だってされまくるような男だ。麻雀部の部長つてところも人気の一つ。やっぱ麻雀は国民的競技だけあって注目度も高く、モテるのだ。

しかし、そいつは俺よりも弱い。校内ランキングじゃ、そいつは3位で、俺は1位。

しかもこの二年間。団体戦にすら参加出来ていないのに、やたらと俺に突っかかってくる負け犬野郎——だと俺は思っていた。

だというのにこんな校舎の裏で女子に告白。インターハイで活躍する。プロになるなんて目標を立てるような奴が、俺よりも弱いにも関わらず、そんなことをしている。

今だから言える——それは「嫉妬」だ。

いや、単純にそれだけって訳でもないが。インターハイに行くって言うくらいなら、練習もまともに参加しない俺なんかに負けてんじやねーよとか、そんなんじや一生掛かっても無理だな、とか何も現実を

分かってない態度に苛つきを感じてもいた。

しかし俺は単純にそいつが気に入らなかったのも、邪魔してやろうと思った。なので、別にタイミングを計った訳ではないが、俺がそこに進み出たのは、そいつがその女生徒の手首を掴んだ時だった。

「——おいおい、生徒会長にして我が麻雀部の部長サマがこんなところで女子と逢引か？ 雑魚の分際で随分と偉くなったもんだな？」

「っ…………と、東郷…………!?!」

その様子は完全にただの輩だ。ニヤニヤと馬鹿にするような笑みを浮かべて部長に近づいていく。部長はこちらを見て驚愕の表情を浮かべると、女生徒から距離を取ってこちらを睨んだ。

「なんでお前が…………」

「別に俺がどこにいようと勝手だろうが。雑魚過ぎて毎日練習しないとならないお前と違って、俺は部室に籠もるようなことはしないからな」

「くっ…………」

「それで？ 告白の続きはどうした？ しかも手首まで掴んで、随分と強引だったじゃねえか。そんなに欲求不満だったのか？ くく…………ほら、言い返してみろよ。品行方正の生徒会長サマ？」

俺は挑発を繰り返す。当時の俺は随分とイキってた。来るなら来い。挑発で激昂して喧嘩になろうと、それはそれで構わないのだと。まあ校内だと怖いもの知らずだったからな。お山の大将って奴だ。しかしお山とはいえ、大将は大将。しかも相手はそこらの凡人よりも、ほんの少しはマシな頭をしている部長様だったこともあり、殴りかかってくるような愚は犯さない。

「だ、誰にも言うなよ！ くそ…………!」

「あ…………？ おい、逃げてんじや——」

と、部長は結局、少し焦った様子で、その場から逃げるように立ち去っていった。

俺は拍子抜けする。もうちょっと口で言い返してくるかと思ってたんだがと。

だがこうなるとつまらない。さっさと俺も立ち去るかと踵を返そ

うとした瞬間、

「あ、ありがとうございますっ!」

「……は?」

背後から、女生徒のお礼を言う声。そういえばいたな、と俺は振り返る。

するとそこにいたのは、

「……っ」

「えっと、男子部の、東郷先輩、ですよ? 私、宇野沢葉って言います。一年生で女子部の。さつきはちよつと困ってて……助けてくれて助かりました」

ハキハキと礼を告げるその宇野沢葉と名乗った女生徒。どうやらうちの麻雀部の女子らしい。

だがそんなことよりも、その葉の可愛さに、俺は驚いていた。

……可愛いな、こいつ……。

なるほど、確かに、告白されるくらい容姿はしていた。というか、俺が今まで見てきた中じゃ、従姉妹と同じランクに位置する美少女。

あと、胸が大きい。一年生なのに。制服を押し上げるそのたわわな膨らみは、見るだけなのに股間にかあつと血が集まるようだった。

麻雀やっていると、会場なんかでとんでもない美少女を目にしたりするものだが、うちの部はそれほどでもない——と思っていたが、どうやら一年生にはこんな可愛い子が入ってきたらしい。

ただ、ここで童貞らしい反応を見せる俺ではない。

一応、女子には慣れている。主に従姉妹のせい。だから俺はこの時も、少し素っ気なく返してしまった。

「……たまたま見かけただけだからな」

「はい。それでも、ありがとうございます」

「おう。……それじゃあな」

「あ、はいっ。その……」

と、俺はさっさとその場から退散する……うん、今思えばこれはこれで童貞っぽいな。

しかし年頃の男子なんてこんなもんだ。いや、本当ならば非仲良く

しようとするのだが、俺はこの時、その後輩のおっぱいの揺れを見て半勃ちしてしまったのを隠すので精一杯だった。

学生の頃は荒れていたとはいえ、高校生らしく性への欲求は強かったので、こんなもん。可愛い後輩の、後輩らしからぬその巨乳を見れば、初対面だし、思わず勃起してしまうのも仕方ない。仕方ないったら仕方ないのだ。

それが俺と栞の初めての出会い。俺からすれば、ムカつく奴に絡みに行っただけのどうってことない出来事だが、他者から見れば俺はちよつと怖いかもしれない。だからまあ、同じ学校で同じ麻雀部とはいえ、交流はなくなるかと思っただが、そうはならなかったのだ。

「へえ、良い雰囲気のお店だな」

「あ、はいっ。去年の大会で見て回ってる時に見つけたんです。紅茶やケーキが美味しくて……あっ、奥に自動卓もあるんですよ、ここ」
「お、ならちようどいいじゃねーか。先輩をぶつ潰してやろうと思っただころだしな」

「先輩を潰すことの何がちようどいいんだ。……まあ、いいけどな。少しは手加減しろよ？」

俺達は、栞に案内されて都内のとある喫茶店に足を踏み入れる。

内装はシックで、おしゃれだが少し大人っぽい。店内の客はまばらで数人程度だが、有名人のサインなんか飾られていて、知る人ぞ知る店感がある気がする。

とりあえず、席について注文。琉音が最初から雀卓に向かおうとしていたが、首根っこを捕まえて座らせる。まだ早いだろ。少しは落ち着け。

とりあえずケーキと紅茶を頼むと、俺はまずは用件を告げた。

「……栞、琉音。約束破って悪かったな」

「先輩……」

「いきなりかよ……いや、いいけどな。それよか、先輩は大丈夫なのかよ」

まずは謝罪。俺は頭を下げると、栞と琉音がこちらを心配した様子で声を掛けてくれる。俺はその質問にも答えた。

「まあ、な。とりあえず、コーチでも目指して頑張ってみるつもりだ」
「はあ？ プロには戻らねえのかよ。色々あんだろ。プロテストとかなんとか」

「戻れたら苦労しねえんだよ」

「……あつ、そういうえば先輩、麻雀を教えるとか、そういう募集してましたね？」

「あー思い出した。それだよそれ。あれもよく分からないんだよな。一日5000円とか……どうなってんだ先輩は」

「うるせえ。こっちにも色々あんだよ……って、ここのケーキ、マジで美味しいな……」

「そうですねっ。このビターな甘さが美味しくて……私も、暇な時に色々試してるんですけど、ここまでの完成度は中々再現出来なくて……」

お菓子作りが得意な栞は、どうやら今でもその趣味を続けているらしい。

プロ入りと卒業を控えて忙しいだろうにな。俺も食べたことはあるが……栞の作る物はここのケーキと比べてもかなり美味しい。少なくとも、個人的には、栞のお菓子の方が好みである。

だがまあ、会話の中で俺は言った。少し冗談混じりに、

「お前らも5000円払ったら教えてやっても良いぞ。まあ、お前らに教えられることなんてもうないだろうけどな。優秀なコーチがいるみたいだし」

「そんなことはないと思います。先輩の教えは……宮永さんのそれとは違いますけど、ちゃんと為になりますから」

「あー……宮永と比べたら駄目だろ。あいつはヤバいからな」

栞が俺をフォローし、琉音もそれに頷くが、そりゃそうだろう。

今の白糸台。俺が卒業した後に入ったそいつは真正銘の魔物だからな。かなりの美少女だが、役満を決めるのは多分無理。決めに行く途中でこっちがスクリーンツモで殺される。何言ってるか分かん

ねーだろ？ 俺も意味不明な事言ってるなって思うが、でも本当なんだ。俺もそうとしか言えない。別に麻雀のルールを逸脱してる訳じゃないんだけど、色んな意味で宮永照ってのはヤバい。どうせ会うことはないだろうからそこまで気にすることはないだろうが。

「俺は直接会ったことはないが、やっぱりヤバいか、宮永照は。俺の従姉妹も、相当危なかったって言ってたしな」

「凄いい子だよ。麻雀の実力だけじゃなくて、アドバイスなんかも的確で……お菓子は好きだけど」

「つつても地区大会じゃ私の方が活躍したけどな！」

「知ってるから大声出すな。——馬鹿みたいな高い手で上がりまくったんだろ？」

「馬鹿みたいって言うんじゃねーよ！ やっぱりそこでやるか!？」

「あ、あはは、琉音さん、落ち着いて……」

大声出して席を立ち上がった琉音だが、栞に窘められて席に座る。からかうと面白い奴だが、そろそろ自重しとくか。あんまり言ってるの後でめちやくちやにされそうだしな。

「……でも、先輩の教え方も上手でしたよ。私、ちゃんと憶えています。先輩に教えてもらったこと……」

「……そうか」

栞が昔を懐かしむように言う。まあたつた二年くらい前の事だが、確かにもの凄く昔に感じてしまう。

それくらい、俺にとっても、色々と思うところのある相手だった。だが今は、

「……やっぱり、ちよつと打つか」

「お」

「え、いいんですか？」

俺は席を立ち上がり、奥の雀卓へと向かう。俺が受けるとは思っていなかったのか、2人は意外な顔をしたが、

「良いも悪いも、元々そのつもりだ」

なにせ——俺は過去の思いを叶えに来たんだからな。いや、良い言い方だけど、その実は最低。俺って良い話ブレイカーだよな……。

そうして俺は栞と琉音。三人で卓についた。そして、未だに俺と関わろうとする二人を思い、やはり不思議だよなと思う。

昔の俺って相当、今よりもクズだった気がするんだけどなあ……。

「うーっす」

「！」

「と、東郷……」

「東郷先輩だ……」

部室のドアをぞんざいに開けて中に入ると、どいつもこいつも俺を見て顔を引き攣らせる。

普段から部活をサボり、それでいて校内ランキング1位。傍若無人の振る舞いをする俺に態々近づく奴はいない。同級生ですらそうなのだから、後輩からすれば俺は恐怖の対象でしかないだろう。

ただでさえ白糸台高校の麻雀部はバチバチしてるのにだ。いつにも増して雰囲気はあまりよくなかった。

だが中には俺に話し掛ける奴もいる。それが俺のチームメイトの連中だ。

「——YO！ YO！ 待ちくたびれたぜブラザー！ 調子はどうだ？」

「ああ。実はさっき、道端で200円拾ってな。気分がいいから来てやった。おらボブ。お前にも奢ってやるよ」

「ヒュ〜！ 百円1枚ならよくあるが2枚も落っこちてたつてのかブラザー？ そいつはラッキーだ。オレも今日はこっちに来て正解だな。神に感謝しとくぜ」

俺が部室の奥に進むと、途中で首にヘッドホンを掛けた身長190センチくらいのドレッドヘア、サングラスの黒人ハーフの男子が俺に話しかけてきた。

こいつはまあ、ボブって言って俺の数少ない友人。同級生の同じクラスで、同じ麻雀部。校内ランキングで二位。同じチーム、〃獅子王〃で麻雀をやってる男。

見ての通りキャラの濃い奴で、ちよつと変わった奴。それだけに、一年の時から俺に話しかけてきて、気がついたらよくつるんでいる。妙に部の練習をサボる辺りも同じで、たまに一人でどこか遊びに出かけたりするくらいには仲が良い。

だがそれ以外、同じチームの三人はそうでもない。

「せ、先輩、おはようございますー！」

「おはようございますっー！」

「つすー、おはぎいまっす!! どうぞ、先輩！」

「おう。倉橋、池田、小坂。調子はどうか？」

「倉橋、ば、万全です！」

「池田絶好調です！」

「小坂元気です!!」

「よし、じゃあ池田。ジュース買ってこい。ほら、二百円。俺とボブの分だ」

「はいっ！ 行ってきますっ！」

二年の倉橋と池田。一年の小坂。その中からパシリや舎弟が似合うちよつと猫っぽい印象の池田にジュースを買いに行かせる。倉橋はよく知らんが細身の眼鏡を掛けたオタクで、小坂は小柄だが元運動部らしく声が大きくて元気の良い短髪。

麻雀部つてのは、体育会系だ。特にうちは結構上下関係には厳しい。女子はそれほどでもないかもしれないが、男子は運動部ともそれほど変わらない。一応、中堅程度の名門校であれば尚更だ。

優勝を争うような名門校ならそこまで厳しくない可能性もあるが、少なくとも白糸台高校であれば、先輩が来たら何があるうと立ち上がって大きな声で挨拶。大会なんかだと補欠や後輩総出で団体戦メンバーに、その筋の奴らなんじゃないかって思うくらいの挨拶で出迎えたりもする。

それに加え、俺は後輩に怖がられているし、特にその辺りは皆注意している。さつきは練習中だったため、部内の殆どのメンバーはこちらに挨拶することはなかったが、それでもかなりビクビクしていた。

だが直属の後輩であるこいつらはそうはいかない。だがこいつら

も、抜けようと思えば抜けられるし、本当のところどう思ってるかは知らないが、基本的に忠実で、練習をサボる俺やボブに対しても何も言わない。

というのも、白糸台高校麻雀部のある特色の所為だろう。

「イエア！ これで俺達、チーム“獅子王”も勢揃い！ 後はただだ勝つしかない！ 俺達無敵の最高チームイエア！」

「つつても面倒だな。調整したらさっさと帰るぞ」

「オーケーブラザー。それなら後でハコ寄らねえか？ 結構良い面子揃ってるYO！」

「あー、行くか。まあ用事済ませてから行くから先行つといてくれ」

「オーケーだブラザー」

「はあ、はあ、ジュース買ってきました！」

おう、と俺は後輩からジュースを受け取り、椅子に背中を預けながらそれを飲む。

そうしながら俺は持ってきた紙を後輩に見せてやった。

「ほら、団体戦のオーダーだ。頭に入れとけ」

「二はい！ ありがとうございます！」

「といつてもいつも通りだなブラザー！」

「いつも通りでいいからな。毎日せこせこ練習してる癖に、インターハイ予選突破どころか、団体戦にすら出れないそこの雑魚相手にはどうやったって負けはない」

「HHHHH！ 相変わらず辛辣だぜブラザーは！」

手を叩いて大笑いするボブだが、俺の発言とそのやり取りに、他の卓についてる部員。特に三年生から敵意のようなものを感じる――が、直接何かを言う者はいない。

きつと彼らの内心は煮えくり返っているだろう。実際、俺はこう言ったが、中には先程の部長を始め、それほど弱くはない部員だっている。少なくとも、俺のチームの後輩はそれほどランキングも高くないため、個々人の強さで団体戦のメンバーが決まるなら、彼らはもうちよつと大会に出れていただろう。

だが白糸台高校麻雀部のシステムは他の学校とは違う。

部活内で幾つかのチームを作って対抗戦をし、それで勝ったチーム。成績が1位のチームがそのまま団体戦のメンバーとなる方式なのだ。

これは白糸台の伝統である。なんでも、個人で強い5人を集めて団体戦に出るより、仲の良い5人で団体戦に出た方が良い成績を残すことが多々ある——ということらしいが、実際のところはどうかだろうな。

ただ実際、麻雀には成績だけでは分からない何かがあるし、オカルトの存在だってある。だからまあ、そこまで間違いではないだろうが、合つてるとも言い難いかもしれない。

少なくとも、うちのチームは仲良しとは程遠い。俺とボブは友人だが、それ以外は部内だけでの関係だ。

だがそれでも、俺は一年の時から団体戦に出場し続けている。それが他の三年生などの部員が腸が煮えくり返ってるだろうと評した理由だ。ちなみにチーム名の「獅子王」は、ボブが考えて俺が修正した。ボブに適当なチーム名を作れって言ったら、ライオンキングが良いとふざけたことを言い出したので、漢字に変換して今に至る。いやほんと、修正して良かった。じゃないと俺は今頃、チーム、ライオンキングのキャプテンになっただろう。なんだライオンキングのキャプテンって。ム○アサか？ シ○バか？ どつちみちネタにされそうだから嫌だ。

だがまあ、このシステムがあるからこそ、チームに所属する後輩は俺を恐れていながら、それでもなおこのチームに所属することを決めている。嫌なら抜けられるからな。パシリでもなんでもやって、それでもチームに所属するのは、それだけ団体戦に、レギュラーとして大会に参加したいからだ。こいつらも、麻雀部に所属して真剣に大会で成績を残そうと夢見る連中だし、その目的の為なら強い人についていこうとするのは当然だろう。

だからこいつらの忠誠心はちよつとした舎弟並だ。仮に俺とボブが別の奴とチーム組むわ、つてなったら困るからな。ジューズやパンくらい幾らでも買いに行くし、休日に呼び出そうが必ず1時間以内に

はやって来る。うん、やっぱ仲良しでもなんでもないな。この制度、止めたほうが良いんじゃないかね？

「……ま、いいだろ。このまま真面目に練習しとけ」

「(ご)指導ありがとうございます!!」(ご)」

「結構楽しかったな。——さあ、ブラザー、ここからはファンキーな時間だ。オレは先に行ってるぜ?」

「意味分かんないけど先に行ってる。用事を済ませたら行く」

「オーケーブラザー! アデュー!」

相変わらずノリノリで馴れ馴れしい奴だが、正直慣れた。俺はチームのメンバーや部員、ボブと別れ、男子部を後にする。

そして用事……まあ、用事とは言ったが、単純に気になったから見に行くだけだ。

だから俺は少し歩いて、女子部の部室へ向かったのだが、

「! って、先輩か……」

「よう琉音。そんなところで何してる。負けが込んでブルーなのか?」

「……そうですよ。だから放っておいてください」

ベンチに座る渡辺琉音。二年の後輩の女子を見つけ、適当に話し掛ける。

女子部の補欠である琉音は、負けが込むとよく1人で黄昏れていた。別に落ち込んでいる訳ではないが、気持ちを落ち着かせてるのだろう。なんだかんだで熱意はある奴だからな。

そして俺は、そういう琉音は嫌いではない。なんとというか、可愛げがあるんだよな、生意気だけど。

「敬語は使わなくていいつつつたろ。俺は女子には優しいんだ。あんまり怯えさせるのも悪いしな」

「それだったらそれ相応の扱いをしたらどうなんすか。……というか、一体何の用で……」

「いや何、そっちに……あー……宇野沢葉ってのがいなかったかと思ってるな」

「宇野沢葉……ああ、うちの一年っすね。何か用ですか? 呼び出し

てきましようか?」

「いやいい。ちよつと気になっただけだからな」

「……? はい。それじゃあ……」

と、琉音との距離を離す——が、正直呼び出してほしかったのがこの時の本音だ。

だがなんだか気恥ずかしい気がして、俺は素っ気なくそう言っってしまったのだ。

だからこそ、俺は女子部の前にたどり着いても、何も出来ずにいた。

「……何しに来たんだ俺は……」

なんだろうな。いや、もっかいあの巨乳が拝みたい。そんな感じか。多分そう。

実際、俺も女と関わりたい年頃であつたし、なんとなく足が向いてしまったというのもある。あるが、これじゃあただの追っかけ。スニーカーみたいなもんだ。

だからこそ、俺は少し考えた末にそこから離れることにした。今日は何も考えていないし、間が悪い。男子と女子で練習する時なんか、さり気なく話しかけるのがいいだろう。

ただ、噂なんかもあるし、怖がって近寄ってこないかもな、とも思う。そう思っている時に、

「あれ?先輩じゃないですか」

「つ……と、し、葉か」

いきなり眼の前に、目当ての人物が現れたため驚き、しかも心の中で呟いていた名前を口に出してしまったが、もう遅い。しまったと思つた時には言葉は出し切っている。馴れ馴れしくはないかと思つたのだが、

「はい。女子部に何か用事ですか?」

「あ、いや……別に、なんとなくだ。足がこつちを向いたから来た」

と、意味不明過ぎる理由を告げてしまう。足がこつちを向いたから来たってなんだよ。いきなり理由もなく校内を徘徊しだす奴ってヤバすぎだろ。とか思つて後悔したが、

「……ふふつ、なんですか、それ」

と、葉は口元に手を当ててそんなくだらない事にも笑った。
その時、思わずドキリとする。久し振りに間近で見た女子の、しかも美少女の笑顔だ。

俺はその瞬間、嬉しくなってテンションを上げてしまう。あるだろう？ 女子とちよつと良い感じに話せると舞い上がって調子に乗ってノリが良い感じになるやつ。

で、後からなんて馬鹿なこと言ったんだって後悔するやつ。その時の俺はそれだ。

「お、おう……まあ俺は結構気まぐれだからな！ ふうふうして何かやることがないか探すんだよ！」

「……？ それってボランテアとかってことですか？」

「そういう時もある！」

いや、ない。ボランテアとか、小学生の時に無理矢理やらされたことくらいしかない。

俺がフラフラする時って、大体コンビニとかライブ帰りで深夜徘徊してたり、ボブと調子に乗って騒ぎすぎてたら、地元のヤンキーとか、アングラっぽい雰囲気のある大学生とか大人に追いかけて、数人ボコして、やっぱ多数は無理なので逃げたりしてる時くらいだ。別にこっちから因縁吹っつけた訳でもないのに、妙に目をつけられるのはなんなんだろうな。いやほんと。

「へえ、先輩ってやっぱ良い人ですね。私の時も助けてくれたし……」

「まあ……」

いや、あれもあれで、いつも俺に突っかかってくるムカつく奴の告白を失敗させるか、もしくは嫌味でも言っただろうと思っただけだ。どうやら葉の話の話を聞くに、結果的に俺が助けた形になっただけだ。別にそういうつもりだった訳じゃない。というか、部長断られたんか。ははっ、ざまあー！！ と内心でメシウマ状態になりながら、俺はその時こう言った。

「……そうだ。せつかく俺がふうふうしてる時に会ったんだ。何か助けてやる」

「え？ でも……」

「何かないか？ 例えば……あ、麻雀とかどうだ？ 一応ちよつとなら教えてやれるぞ？ これでも男子の……いや、この学校じゃ一番強いからな。それなりに助けにはなると思うが……どうだ？」

「……………」

震え声。いやほんと、葉、啞然として無言になっちゃったじゃん。まああまりにも突拍子もない提案だもんな。俺ってばすっげー馬鹿。どんな提案だよ。

だがこの時の俺は、まあ、関わりたくてこう言ったんだろう。とりあえず、女子との接点を消したくなって言った下心だらけの発言。

そんな俺の下心にも気づかず、葉はふっと笑って、

「…………ふふ、それじゃあ……先輩、お願いしてもいいですか？」

「お、おう。任せろ」

そんな感じで、俺は葉に麻雀を教えることになった。まあ、この頃の葉は滅茶苦茶弱かったからな。だから俺でも教えることは出来た。連絡先を交換し、約束をする。今日は練習もあるから今度、空いた時間にも麻雀を教えよう。

そうして別れた訳だが……その時から、俺はどうもおかしかった。

「遅いぜブラザー！ 今日二度目の待ちぼうけを食らうかと思っただぜ！ だがまあどつちもギリギリセーフだ！ アゲてこうぜ！ イエイエイエイ！」

「…………おお」

電車に乗って都心まで。日の沈んだ東京の街に繰り出す時は、ライブハウスなんかでボブの好きなインディーズバンドのライブに付き合う時や、まあ適当に遊び歩く時か。カラオケとかボウリングとか、普通に学生らしい遊びだ。別に非行に走っていた訳ではない。

まあ、ライブなんかは俺も好きだし、なんとなくこういう雰囲気が好きなの時期だった。ちよつと道を外れてる感と云えばいいのか。真面目に麻雀やら何やらに打ち込んできた頃を考えると落ちたものだが、それでもその時は周囲に流されない自分が嫌いじゃなかった——とまあ、そんなイキってる上に痛い奴だった訳だが、学生時代の黒歴

史なんて誰にでも一つくらいはあるだろ？ 俺にとってのそれがこれだ。

しかしいつもは楽しいライブも、今日はあまり乗ることは出来ない。

鼓膜に直接振動を与えてくるスピーカー越しの楽器や人の声も、脳裏に浮かぶそれには敵わない。

朶の可愛らしい顔、表情。制服の袖のところは微妙に指先が余るいわゆる萌え袖状態だし、スカートは結構短めで、魅惑の太腿が覗いていて、腰のくびれも女性らしさを感じられて溜息を吐いてしまう。

そして何より、まだ高校一年生だというのに、従姉妹に匹敵するほどの大きな乳房が制服に包まれ、動く度にたゆんつと重そうに揺れる。とても悩ましく、魅力的な膨らみ。そしてまた顔や足。

それを思い出してしまい、俺は上の空だったのだ。

俺の様子をおかしく思い声を掛けてくるボブの言葉もあまり憶えていない。とにかくそのことで頭が一杯だった。

ようやく上の空から回復したのも、回復せざるを得ない状況になってからだった。

「——おいこらあつ!! ここで何歩いてんだ!! ここは俺達のシマなんだよおおおうごらあ!!」

「舐めてつとぶつ殺すぞー!」

「シヤバ僧がガンくれてきやがってよお——!」

——と、まあ、如何にもなヤンキー達に気がつけば絡まれていた。……いやほんと、こいつらなんなん？ アホなの？ 単細胞なの？

シマってなんだよ。シマがあつたとしてもお前らのじゃねえよ。自治体か国のものだろ。舐めるとかガンくれてとか、そんなくらいでキレて襲いかかってくるなよ。別に俺達は不良でもなんでもないんだから関わらないでほしい。

だがそんなことを言っても聞き届けてくれないのがこういう人達。となれば逃げるしかないのだが、人数が多いとそれはそれでどうするかなってなる。

「おいおいどうするブラザー？ 俺達、囲まれちまったぜ？ そして

オレの携帯が鳴っちゃった。多分、パパからの電話だと思いがどうしたらしい？ 嫌な予感が胸をよぎるゼイエア」

「冷静になれボブ」

「……ああ！ 情けないぜブラザー。助けてくれヒエア、眼の前の奴らに追われて、もとい、囲まれてるんだ。もう駄目かもしれない、ブラザー」

「二人を裂くように電話が切れるんだな。俺達、電話してないけどな」
「俺達は——」

「てめえら二人で懐かしい歌歌ってんじゃねえよ!! 状況分かってんのか!? アア!? ちよつと羨ましいんだよ!」

「H A H A H A H A! 良いツツコミだ! 関西人かY O!」

いや、うん……ついやっちゃまったけどそんな馬鹿やってる場合じゃないよね。今のおふぎけでヤンキー共が完全にやったるぞモードに入ってる。こうなると何を言っても殴りかかってくる。喧嘩が始まる5秒前って感じだ。

ボブなんかは体格が良いし、親の影響で格闘技やってるらしいから割と平気なんだろうが、俺の場合はちよつと不安が残るのだ。

「おいボブ。どこかに棒とか落ちてないか?」

「それなら股間にあるものを使えばいい。オススメだゼイエア」

「こつちの棒は帰ってから使うから駄目だ」

いや、下ネタ言ってる場合じゃないんだよなあ……。

だが帰ってから使うのは本当だ。自家発電だけだ。

今の俺は、とにかく抜きたくてしょうがない。こんなヤンキー共の顔じゃなくて、可愛いあの子のことを考えながら抜いて、そして眠りにつく。

だからこんなところでボコられる訳にはいかないのだ、と俺は周囲を見渡してお目当てのものを探す。すると公園の奥に、なんだろう。山登りに使う時になぜか持っていく太い木の棒を見つけた。あれ、なんで山とかよく行く人は持つてるんだろうな……杖か何かだろうか。

だがまあ、あれならちよつといいな、と俺は走り出す。

「つと、ちよつとボブ任せた」

「オーケーブラザー！ オレのボブ術を見せてやるぜヒエア！ でも程々に相手して逃走まっしぐらだYO！」

「っ、待てごらあ!! ツ——！」

ボブがヤンキーに向かって思い切りシヨルダータツクル。すると吹っ飛ぶ。ヤンキー達がボブに群がる。まあボブは強いけど、あんまり一人でやらせると怪我もするしキツイだろうからさっさと戻らないとね。勝てるかどうかはしんないけど。

だが俺は葉の為に——って、ここの回想いらないな……なんでこの時のことまで思い出したんだ……？

とにかく、俺は明日も葉に会うために、そして友人のボブを助けるために走った。もはやボブがメインな気がするが気の所為だよな？

好きな人

「ち、ちくしよ……くそ……」

「待ちやがれ……!」

俺とボブはヤンキー達を程々に捌いてその場から逃げることに成功した。

まあやられた奴は漫画みたいに分かりやすく逃げるというか、無言で逃げていったし、まだ大丈夫そうな奴はまだ頭に血が上つてるので周りなんて見えてない。だから適当に相手したところで逃げないと本当にボコボコにしないと終わらない。まあそんなのキリがないしやる意味がないので逃げるのだ。

理不尽に喧嘩を売られた憤りつてのは勿論あるが、ちよつとやり返したくらいで満足しておくことにする。

そうやってなんとか逃げて寮の近くの路地までやって来たところで俺達は立ち止まったのだ。

「はあ……つたく、なんでこうなるんだ」

「H A H A H A H A! 全くだ!」

あんなことがあったのにボブは元気である。いつも通り手を叩いて大笑いしていたが、今はそれなりに遅いのであまり大声は出さない方が良いだろう。

しかしだ。俺が注意するより早く、ボブは自ら声を落としたのだ。そして俺を見て、

「そういえば以前から気になってたんだがY O。ブラザー、普段はそうでもないのに棒を持つと強いよな。何かやってたのかY O?」

「……………別にいいだろ。それより、さっさと帰ろうぜ。疲れた」

「オーウ、そうだった。そろそろ帰らないとパパに怒られる」

と、俺とボブは揃って歩き出す。俺は寮だが、ボブは実家だ。だが途中までは同じ道順である。

故に夜道を歩いていたのだが、ふとボブが言った。

「なあ、ブラザー」

「なんだよ。さっきのことなら答えねえぞ」

「そうじゃなくてY O。ブラザー、好きなガールでも出来たのか？」

「……………好きっていうかまあ、気になる女はいるけどな」

「それを好き、ラブって言うんだぜ、ブラザー」

そう、そうだった。こいつ、こんなんで妙に鋭いというか、意外と周りをよく見てるんだよな。

だからこの時もいきなりそれを当てられて、ただまあ、好きって言うかも微妙な、単純にやりたいというだけの思考だった気がするし、普通に答えたんだ。

すると話は自然にそういう話題になる。男子高校生だとそんなもんだ。

「誰なんだ？ ブラザーの好きな相手はY O」

「教えてほしけりやお前から先に言え」

「隣のクラスの宮本だぜイエア。…………いや、その…………ほら、ちよつと小柄で可愛い感じだから…………」

「お、おおう…………ボブ、お前、そういう奴が好みだったのか…………初めて知ったぜ」

「だ、誰にも言うなY O! 頼むぜブラザーヒエア！」

普段とは少し様子が違って、声を落とすし、恥ずかしそうに告げるボブのそれは真に迫っていた。俺は思わず、通り道にあったコンビ二の前で、

「…………じゃあお前、プロ雀士なら誰が好きだ？」

「三尋木プロ。ブラザーは？」

「はやりん」

「…………おっぱい星人か」

「黙れロリコン」

そう、ボブはロリコンだった。三年目の付き合いで初めて知る事実。いや、うん。別にいいんだけどね、驚きだった。

「…………まあでも分かるぜ。三尋木プロの魅力も。膝に乗せて可愛がりたいよな」

「おお、さすがはブラザー…………いや、オレもはやりんの魅力…………魅力…………う、ううん…………」

「分かんねえのかよ！　そこは分かれＹＯ！」

「いや、すまねえブラザー……オレ、自分に嘘はつけない……オレ、身長150センチ以下でつるぺたじゃないと抜けないんだ……」

「お、おおう……そうか」

そう、ボブは重症だった。末期だった。いや、うん。頑張れ。超頑張れ。応援する。

そしてそれを考えると、ボブの好きな人だという隣のクラスの宮本は確かにそれに当て嵌まっていた。

とかなんとか思っていると、

「……はやりんみたいな子がタイプってことはブラザーの好きな人は一年の宇野沢葉かＹＯ？」

「なんで知ってたんだよ」

「ちよつと話題になってたゼイエア。胸が大きくて可愛い一年生がいるってな。まあオレはどうでもよくて、むしろオレは一年の棚橋菜月ちゃんの方が……」

「ほー……今度見てみるか」

「あ、アプローチ掛けるなＹＯ？　オレがちよつと狙ってるんだぜヒェア……」

「おい、宮本はどうした？」

「……宮本が駄目だったら……」

「お前最低かつ」

いや、うん。俺が言えたことじゃないんだが、ボブもこう見えて普通の男子高校生だった。うん、まあ好みの女の子と触れ合いたいよね。……しかし、190センチ越えのボブと150以下の子ってなるとちよつと大丈夫なのかと思ってしまう。絵面が中々にな……。

「まあ、オレもブラザーの恋を応援するゼイエア」

「別に恋かって言われるとどうだかな……ただやりたいだけのようない気も……」

「今はそうでも、関わってくる内に内面も好きになっていくかもだぜブラザー」

「……そういうもんか」

「そういうもんだYO。……それで、先に卒業したら感想教えてくれ」
「……お前もな」

ガシツと俺はボブと固い握手を結んだ。性癖や好きな子をバラし
あったおかげで、以前よりも仲良くなれた気がした。

そしてこの時が、俺の中の好きな人を「宇野沢栞」だと定義した最
初の日であった。

「それじゃあサイコロ振るぞ」

「はい。お願いします琉音さん」

「……始めるか」

三人での三麻。とうとう麻雀が始まり、俺は昔を思い出していた。
いやほんと……懐かしいな。ボブとか、ちゃんとやってんのか？

確かボブは卒業後、海外にダンサーになる夢を叶えるとか言って単
身、欧州に旅立った。いや、ラッパーじゃねえのかYO！ てつきり
ラッパーとかDJになりたいのかと思ってたが、まさかのダンサー
だった。不思議な奴だ。

だがまあ、過去は過去だ。俺が如何に、栞を過去に好きだったとは
いえ、結局は仲が良くなっただけで卒業後はほぼ会わなかったし、そ
の時結んだ約束だって守れなかった。栞や琉音はきちんとプロに
なったっていうのにな。

そのことを悪いと思う気持ちはある。あるが、今はそれよりも、過
去の思いを、栞とやることを目的としてきたのだ。

そのために、俺は二週間という準備期間を経た。態々琉音に文句を
言われることを呑んでまで期間を二週間にしたのは、一週間では心の
準備が足りないと思ったからだ。

それだけ、俺にとつて栞という後輩は……うん、まあ、そこそこ大
きいだ。

やっぱ学生時代の思い出っるのが一番デカイ。どうも色々と考え
てしまうのだ。

だがそれだけに、期待感も大きい。栞という、学生時代好きだった

相手とやれるかもしれない——そう考えるだけで、俺は異様に興奮してしまい、勝手に股間が硬くなっていく。

「おら、地和来い！」

「琉音さん、さすがにそれは……」

馬鹿なことを言ってる琉音の隣。俺の右隣には、相変わらず琉音を優しく嗜める栞がいる。

その学生時代より格段に大きくなった胸や、可愛らしい八重歯。スカートの中から伸びる太腿に思わず目が行ってしまう。

本当に可愛い。昔よりも魅力的になっていくかもしれない。

そんな彼女に役満。役満さえ上がれば、俺は彼女を惚れさせ、やる事が出来る。

そう俺がやるべきことはこの場で役満を和了り、出来ればそれを栞に直撃させることだ。

何故直撃させることにこだわるかと言うと、そっちの方が確実にあるからだ。

北海道での有珠山高校のメンバーとの対局で、俺は役満をツモ和了りしたが、あの時は効果がなかったように見えた。

しかしその後のロン和了り——ユキに直撃させた役満は、その後、オカルトがきちんと発動し、晴れて俺はユキとすることが出来たのだ。

だからこそ、俺はロン和了りの方が確実なのではないかと思っている。いや、その前のはやりさんと良子の時はツモ和了りでも成功したため、その辺りの謎が、北海道での最初の役満でオカルトが発動しなかった理由が不明なのだが、直撃の方が確実であることは確かだろう。

だからこそ、俺は役満を狙う。狙うのだが——そう甘くはないことも理解している。

「——ツモ。3000、6000だ」

「げ……」

「わー、琉音さん、いきなり高め……親つかぶり……」

東一局でいきなり琉音が跳満ツモ。

琉音の持ち味は火力だからな。この火力で、琉音は三年生の時の夏の大会で、あの宮永照よりも得点を稼ぎ、今もプロでその持ち味を活かして活躍している。

そしてその次の局では、

「ポンー！」

葉が俺の捨てた牌からポン。鳴いて牌を取る。だが続いて、今度は琉音が捨てた牌からも、

「ポンー！」

2副露。また鳴く。

そして次の手番で、

「ツモっ。2000、4000ですっ」

「早上がりでその点数かよっ!?!」

「……つたく、キッツいな」

思わず本音が口に出る。そう、葉だってそりや実力は高い。

葉は副露するようになってから格段に伸びた。宮永照のアドバイスらしいが、それからというものは、葉は全国でも通用し、今年の春からプロになるほどの実力を発揮したのだ。

つまり、この場で俺が相手にするのは、俺より後輩とはいえ、俺よりも強いプロ二人となる。

昔とは違う。昔は俺が一番強かったが、今の俺は格下だ。

この中で役満を上がるというのは中々に厳しい。出来たとしても、相手を選ぶような余裕はないかもしれない。仮に役満張って、琉音から和了り牌が飛び出たらどうしようか。それはそれで悪くはない、か……? 琉音も見た目が悪い訳ではない。三白眼で少し怖い印象を持たれやすいが、琉音だって美少女には違いないのだ。

ただなあ……関係性的に迷うところだ。正直、琉音と適当な応酬を出来るこの関係は嫌いではない。

だから出来れば葉から和了りしたいのだが……ここに来て、葉にかつて牌効率や守備に関して教えたことが響きそうでもある。

それに葉は結構鳴く方だから、それだけ早く和了りやすい。まあ三麻なのでチーは——前の人から順子を副露することは出来ないから

少しは楽ではある。……まあ、葉の「チー」はちよつと可愛いから聞きたいんだけどな。いや、言ってる場合じゃない。

だからある意味琉音の方が強敵かもしれない。ただ目標は葉な訳で……全力で抗うにしても、役満を狙う余裕があるのだろうか。

——そんなことを思っていた時もありました。

「おいおいどうした先輩よ。もうちよつと張り合つてこいよ」

「え、えつと琉音さん。先輩は……えつと、こういう時もありますよ！

そうですよね？」

「……ああ。葉は優しいな。少しは気を使えよ琉音」

「え、あつ、はい……ありがとうございます先輩」

「いや、昔そんな感じで煽ってきたの先輩の方だっただろうが!」

琉音や葉と会話しながらの麻雀。まあガチではないにしろ、皆それなりに出来るのだからレベルは高め。

俺は最下位で葉が二位。琉音がトップだ。

だが俺の手牌には今——数え役満が張られている。

……ま、マジかよ……え、いや、なんか最近の役満聴牌する確率高くねえか……?」

まさかこれもオカルトなのか？ 確かに、オカルトにはオカルトを成立させるために効果を発揮するものもあるが……どうなのだろう。さすがにまだ断定は出来ないが。役満を見る確率が高くなっている気がする。

そしてこれもまた……珍しい。いや、まあ役満の中ではある方だ。

数え役満というのは、役が十三翻以上になれば成立する役満のことだ。

他の役満のように、ある程度決まった形が存在せず、とにかく役を重ねていって、それを十三翻に到達させればいい。

今の俺の場合——ツモだと門前で一翻、混一色で三翻、三暗刻で二翻、南と白がそれぞれ一翻ずつ。そしてドラ6で六翻、これで十四翻だ。

葉がカンをしてドラを増やしたこと、場風が南であること。色々と重なって手が高くなった。例えばロン上がりで門前が消えても十三翻

である。

後は七索さえくれば、数え役満——役満が成立する。

……いや、オカルト発動するよな？ 数え役満も役満には違いない。

ただ、ルールによつては役満と見做されない場合もある。日本だと、インターハイやプロの試合でも適用されているため、多分大丈夫だと思いたいんだが……いや頼む。マジで頼む。

塵も積もれば山となる。小さい役をコツコツと積み上げて出来た俺の数え役満。頼む！ 実ってくれ……！

そう思い、俺はツモ切りをしながらその時を待った。出来れば葉から来てほしいな、と。そう思いながら待ち続け……遂にその時が来た

「！ ロン——」

だがその瞬間——明かりが消えた。

「っ!？」

「おおっ!？ って、なんだ!？」

「——て、停電!？」

そう、停電だ。俺達がいた喫茶店の奥の個室の部屋の電気が消えてしまった。

いや、単純に電気が消されたのか？ とも思う。ただスイッチは室内にあったと思うんだが……と、思っていると、明かりが点いて、扉が開かれた。外から女の店員さんが、

「申し訳ありません。突然、ブレーカーが落ちてしまい……」

「あ、ああ……そうでしたか。もう大丈夫なんですよね？」

「ああ、はい。それは勿論。大変申し訳ございませんでした」

「いえ、いいですけど……」

と、応対しつつ、ペコペコと謝る店員さんを尻目に俺は席に戻ろうとして気づく。

「げっ!？」

「なんだ、大丈夫なのか……って、先輩？ そういえば……あ」

「山が崩れちゃってますね……って、先輩……そ、それ、あれ？ 数え

役満じゃないですか!？」

ああ、うん。そうだ。そうなんだが……その前に停電が起こり、思わず山を手で倒してしまった……のだと思う。

もしかしたら誰かの膝かなんかが当たった衝撃で——いやまあ自動卓結構重いし、それくらいでは倒れないと思うが、とにかく倒れてしまったのだ。

この場合、重要なのは犯人や原因探しではない。少なくとも俺の中では。

俺にとって重要なのは、この役満が成立し、オカルトが発動しているかどうかだ。

葉の捨てた牌で和了った。和了ったが……手牌は倒しているが、点数の申告はまだだし、そもそも、その前に山が崩れてしまっている。

こうなると、まあ、俺がやっていたとしてもチョンボだし、そうでなくとももう一度……ということになるのか? いや、ちよつとこういうケースは初めてだから分からん。悪意のないアクシデントでこういうのは不問になるだろうし、そもそも公式試合でもないこの場合だからな。一応、成立させることは出来るし、成立はさせるだろう。今も葉は点棒を手に取り出してるし、

「32000ですね。うーん、まさかの逆転なんて……やっぱり先輩って凄いですねっ」

「あ、ああ……いや……」

「いや、今の先輩が崩したとしたらチョンボだしな。無しでもよくね?」

「役満張った俺が態々山を崩す訳ねえだろ! ああ、もう、微妙にケチがついたような……」

「まあまあ……それより、また打ちましようよ。私、もつと打ちたいです」

「……まー、そうだな。役満張ったのは先輩の実力だし、無しにされてもこつちが納得出来ねえ」

「なら無しとか言うんじゃないやねえよ……」

と、言いながらも、俺は葉をチラリと横目で見る。するとふと目が

合い、

「……ど、どうしたんですか先輩？ 私の顔に何かついてます？」

「！ いや……伊達眼鏡、似合ってると思ってるな」

「あつ、ほんとですか？ ちよつと、最近街で声を掛けられることも多くて……今日は琉音さんや先輩と会う日だったので、目立たないように昨日買ってきたんですよ」

「あー、わかるわかる。ファンなのは嬉しいけど、あんまりしつこいと鬱陶しいよな。写真撮ってくれ、とか。こっちはやりさんや葉みたいに卑猥な写真撮ってないんだから自重しろよって」

「あ、あはは……でも似合ってるなら良かったです」

「ふーん。私も何か対策でも考えるか。——先輩は何かやってるんすか？」

「いや、俺の場合はそんなちやほやされる方じゃないし、ほぼ気づかれないから必要ないんだよな……」

「あー……そういう……なんか悪い」

「……でも先輩。コアなファンは多いって聞いてますよ？」

「ん、まあ……確かに、特に何も発信してないのに、地味にSNSのフォロワーが4桁近くいるが……でも一般人でもこれくらいの奴はいるしな。というかどこ情報だ、それは」

——と、そういうやり取りをしながら、俺は葉を観察するのだが……正直、分からない。

前々からこうだった気がするし、ちよつと好意的に見えなくもない。いやでも、普通に先輩として慕ってくれてるのは前からだし……いやどうなんだ。マジで分からん。

だがユキの時も、途中までは分からず、二人きりになったところで急ぎきたから、今回もそのパターンなんだろうか……いやでもユキが分かりにくかったのは、単純にそういう子だったからな気がするし……。

うん、まあ、とりあえずもう少し様子を見るしかない。どの道、もう数日は東京に滞在する。ホテルも取ってあるしな。もし何かあるなら、この後葉の方から分かりやすい露骨なアクションがあるはず

だ。

だから俺は、その後しばらく麻雀を打ちながら二人との会話を楽しんでんだ——結局、役満の機会はその後訪れなかった。

——だが、アクシオンは訪れた。

「はあー、食った食った」

「おい琉音。女がそんな食った食ったとか言うんじゃねえよ。お前、そんなんで大丈夫なのか？ プロ雀士はメディア露出も多いぞ」

「そういう時は猫かぶればいいだろ、別に。私だってファンの前で下品なことは言わねえよ」

「下品だって自覚はあるんですね、琉音さん……」

「え、い、いや、別に食った食ったって言うくらいは下品じゃねえだろ!? え、大丈夫だよな？ これくらいで記事になったり、炎上したりしないよな？」

「しねえだろ。お前、幾らなんでもノミの心臓過ぎんぞ。三尋木プロのSNSとか見てみる。出た番組や中継に対しての批判的なコメントに全部、〃わっかんね〃とか〃いや、知らんし〃とか、〃ふーん、どの辺が？〃とかで返すんだぞ。あの返しはもう無敵過ぎる。ファンもそれを期待してコメントしてる節あるし、三尋木プロのファンは批判されると全部そうやって返すから会話にならないって評判だ。お前もそれを見習え」

「そこまでいくとどうなんでしょうか……?」

「あの人、一回話したけど掴みどころのない人だよな……」

「でもこの間の国際親善試合の活躍、凄かったですよ」

「そりゃ日本代表の先鋒に抜擢され続けるくらいだからな。レベルが違う……つと、着いたか」

東京の夜。琉音の希望通り、肉を食わせるためにステーキハウスに連れて行った帰り道。

俺は二人と会話しながら歩いて、俺が泊まる予定のホテルにまで辿り着いた。本当は送っていいかとも思ったが、すぐにタクシーに乗って帰るらしいし、平気だろうと俺のホテルで別れることにしたのだ。

「それじゃあまた明日な」

「……ん、またな。ほら行くぞ葉」

「は、はい。また明日！」

「……おお」

ん……？　なんか違和感が……いや、気の所為か。

とりあえず、二人と別れてホテルに入ると、部屋に入って一息つく。今回もビジネスホテルだ。まああんまり良いホテルを取る余裕なんてないしな。

だが、どうなるか……とホテルのベッドに座りながら、俺は思う。一応、琉音はオフで、葉も卒業を一週間後に控えて学校に登校する必要はほぼないため、明日も約束はしてある。

だから先程もまた明日と別れたのだが、こうなってくると葉と二人きりになることは中々難しい気がする。

しかし俺から出来ることなんてそう多くはない。やれることといえば、もしオカルトが発動しなかった時に備えて、麻雀を打つ機会を作ったり、そのための口実を考えることくらいだ。

「はあ……やっぱ葉は可愛かったな……」

ベッドに背を預けて天井を見上げながら呟く。久し振りに見るとやっぱり美少女だったなど。

……ないと思うが、学校で彼氏とか作ってたりしないよな？　うん、いやそういう話は琉音や葉からも聞かないし、ないと思うが、あれだけ可愛いっておっぱいが大きいと不安になるよね。

あんな子、誰だっけ彼女にしたいに決まってる。グラビアに載ったり、プロ入りが決まって今話題の選手だし……。

あー、嫌だ。俺のモノにしたい。ちよつと他の男のモノになるとか考えられない。考えたくもない。

しかし役満が成立したのかどうかすら、オカルト発動判定に入ったかどうかすら定かではないし、万全を期すなら、やはりもう一度――「あ？」

と、携帯が鳴る。チャットか。誰だ？　と俺は携帯を開くと、そこには示し合わせたかのようなチャットが二件。

一つは琉音からのチャット——『悪い。明日は急用が入って行けなくなつた』……というもの。

そしてもう一つは……葉。『先輩、琉音さんから聞きました？ 明日は二人きりなので……一緒に、遊園地に行きませんか？——なんて提案。

それを見て、俺は少し困惑しながらこう思う——これはどっちだ？と。

疑惑のデート

どんな鈍感な男でも、女から二人きりで出かけようなんて言われたらさすがに気づくだろう。

まさかこれを、デートじゃない、なんて言う男はいない。いたら馬鹿だ。多分、漫画とかに出てくる朴念仁系の主人公。性欲ないんじゃないのって思っちゃうくらいの奴な。あれ見る度にちよつとイラつてする。というか、女の子もつと怒った方がいい。女扱いされてないってことだから。さつさと見限つとけ。

とまあ、俺の個人的な感想は良いとしても、少し困ったことはある。こつちなら俺も理解出来るし現在進行系でお悩み中だ。

即ち——デートはデートでも、本気のやつなのかってこと。

デート。それはまあ男女二人で出かけて、楽しく遊んで、親睦を深めるような行為のことである。

当然、ちよつと気になる相手や、一緒に出かけてもいいかも？ とか思う程度には、相手に好意や信頼を置いていなければデートというものとは成立しない。嫌いな相手ではそもそも一緒に出かけてすらくれないだろう。そういう意味で、多少の好意があることは疑う余地もない。

だが、デートというものは、実はそれほど重いものではない。軽くもないが、それだけで恋愛的な好意を持っていると浮かれるには早すぎるのだ。

恋人同士でも何でもない男女が行うデートというのは、ちよつとしたお試しのような要素も含まれている。

つまり、この人と付き合ってもいいのか、この人は自分にちやんと好意を抱いているのか、などと自分と相手をテスト、確認のような意味合いを持つのだ。

実際に二人で出かけてデートしてみて、色々合わなくて楽しくなかったり、そもそもそんなに好きじゃないなと気づいたり、甲斐性が無かったり、そもそも人間的におかしいと思ったり、お互いに相手を見極め、駄目ならそのままお友達のままっていう話もよくあること

だ。

故に、デートに誘われたくらいじゃ舞い上がるには早すぎるのである。それを分らずに、デートだから両思いみたいなもんだと思つてがつついて失敗する男もいるだろうから、その辺りは気をつけた方がいい。

まあ両思いだという可能性も高いが、それでも少し落ち着いて相手や状況を見た方がいい。そして確実に見極めて適切な行動を取れば、ゴールは目前である。後は少しの度胸があればいい。

……なんて、色々と講釈垂れてみたが、そう上手く行けば苦労しないだろうな、というのも理解出来る。

まあ俺なんかは、デートは……キャバ嬢と飲みに行つたくらい？ それくらいしか経験がない。結局何も無かつたし。

後は良子ややはりさんとかとは二人で出かけたことはあるが、良子とはそういう感じじゃないし、やはりさんとも食事に行くくらいだった。故にこうやってちゃんとしたデートをするのは、初めてといえは初めてである。そう考えるとちよつと緊張しそうになるが、まあ俺だってもう大人である。女性経験だつてある。別にデートくらいでドギマギするほど初心ではないのだ。

だが心情的には不安というか疑念が渦巻いている。まあオカルトのことだ。

今回デートに誘われたのは、果たしてオカルトの発動で好意を抱かれたからなのか、それとも本当に偶然、琉音が行けなくなったから、別に俺ならいいかと軽い気持ちで、二人でちよつと出かけてみようつて思つた程度なのか、それを見極めなければならぬ。

問題なのは葉が元々、二人で遊園地に行つてもおかしくなくくらいには俺が信頼されてるだろうつてことだ。

これが元々嫌われてたり、明らかに初対面くらいの状態で誘われるなら惚れられたと分かりやすいのだが、普段の状態でも、葉ならありえる。ありえるからこそ、オカルトが効果を發揮してるのか分からない。

だから俺には慎重かつ大胆な行動が要求される。オカルトが発動

していると見ればこつちも相手を窺う必要もなく、俺の事好きなんだからこつちからアプローチを掛けるみたいなのをしても喜んでくれるだろうが、そうでない場合だと嫌がられる可能性もあるので、あんまり直接的な行動は取れない。かといって、何もしいままだと真偽が分からないしな、うん。

だからまあ、俺はある意味、普通のデートのような緊張感を持って臨んでいた。臨んで、今は待ち合わせの最中なのだが、

「遊園地、遊園地ね……最後に行ったのいつだっけか……」

そう、これから向かうのは千葉にある有名なテーマパーク。千葉の癖に東京の名を持つアレだ。え？ アレって何かって？ おい馬鹿やめろよ。分かってんだろ？ 名前を言っただけじゃないあの方だぞ。あの方っていうか場所の名前だけど。名前を言ったら居場所が特定されて恐ろしい目に遭うあそのことだよ。ハハッ。だから言えないんだ。

俺も昔、子供の頃に連れて行ってもらった覚えが微かにあるくらいで、殆ど憶えてはないが、一応行ったことはある。恋人や家族にも大人気の場所だ。いや、作品は大量に見ただけどな。家にビデオとかあったし。なんだかんだで面白いからな、今見ても。たまーに懐かしくなって見たくなる。

なんかそう考えると普通に楽しみなな。あの懐かしのキヤラクターに会える。幼児退行したい気分。色んな意味で。

しかし、待ち合わせの人気スポットで待ち合わせしてる訳だが、なんかあれだな。こういう場所って皆浮ついてるし、恋人ばつかでイチヤついてるし、ちよつとイラつてするな。なんかマウント取られる気がする。被害妄想。だがお前らが俺相手に優位に立てるのも葉が来るまでだ——とそんな噂をすれば遠くから葉が。よし、お前ら震えろ。あれが俺のデートの相手だ。

「……せ、先輩、お待たせしました……！ その、遅くなってごめんなさい」

「……いや、俺も今来たところだから気にするな」

と、デートでありがちな受け答え。別に遅刻してる訳ではなく、約

束の時間の15分前にはやってきた葉は、俺がいるのを見て少し小走りで駆け寄ってきた。

私服の葉は、やっぱり可愛かった。俺は思わずまじまじと見つめてしまう。

グレーのチェック柄で丈が短めのコルセットスカートに黒のオーバーニーソックス。昨日と同じく、その太腿の絶対領域が眩しい。昨日は白だったか。それにやっぱりスタイルが良いからか、身体のラインが際立つような服を着ても似合うのだ。

上はノースリーブニットで、肩から掛けるタイプの鞆が———というか、パイストラになってる。パイストラである。パイストラじゃないか！最高すぎて三回思った。

葉の、JKとしてはかなり大きいおっぱいが、ただでさえノースリーブニットでなんか強調されてエロいのに、さらにそこにパイストラである。ヤバイ。めっちゃエロい。あ、通りがかった男が今チラツと見たな。見てんじやねえよ。これは俺のだ。金取るぞこら。

「……今日の服も似合ってるな。さすがは葉。お洒落だな」

「あ、ありがとうございます。嬉しい、です……えへへ」

——は？ クソ可愛い。何身体の前で手組んでもじもじとしながらはにかんでんの？ 腕を前で組まれるとおっぱいの谷間が左右から腕に挟まれて余計に強調されてエロいんだけど？ どうかって聞かれる前に、こっちから褒めてやったらこれだよ。恐ろしい奴め……。

でもまだ分からん。これって惚れてんのか？ 普段通りか、単純に二人で出かけるからちよつと浮ついてるって可能性もなくはないから確信が持てない。これで惚れてるってんなら腕でも組んでもらって、そのおっぱいを腕で感じたいところだが……いや、それだとちよつと股間が立ち上がりそうだし止めといた方がいいかもしれないけど。

「それじゃあ行くか。子供の時以来だからな。普通に楽しみだ」

「あ、そうなんです。私は家族で3年くらい前に来ましたが……でも、先輩と一緒にですし、私も楽しみですっ」

「……おお、そうか。ならせつかくだし、楽しまないとな」

あれ？ やっぱりこれ惚れてるのか？ ヤバい。ユキとは別の意味で分かりにくい。何気に昨日久し振りに会った訳だし、以前からこうだった気もするからちよつと分からん。平常心で対応してみたが、微妙に会話が成立してない気もするし、俺もちよつと混乱してるかもしれない。

ともあれ俺は栞を伴って、テーマパークへと向かった。周囲の独り身の男から、先程の俺のような視線が来る。やっかみの視線。だが今の俺は無敵。見ろ、俺のデート相手は巨乳JKだぞ。しかも超絶可愛い。お前らの嫉妬の視線など、一瞬で優越感に変換される。なるほどな、デートにもこういう楽しみがあるのか。なんか間違ってる気もしないでもないが、まあ、彼氏や彼女を自慢したくなる奴らの気持ち分かる。今度からSNSでそういうの見かけても優しい気持ちになれそう、多分。いや、おっぱい美少女だったら嫉妬するな。だから見ないようにしよう。

とにかく、そういう訳で俺と栞は遊園地へと向かっていった。

「それで、琉音はどうしたんだ？ 仕事か？」

「あ、はい。急に仕事が入ったそうなんです。それで、今日は二人なので……こういうところに行くのもどうかかと」

「ほー、そうか。あいつも、ちゃんとプロの仕事してんだな。てつきりバックレて来たのかと」

「あはは……琉音さんが聞いたらまた怒りますよ？ もう」

栞が苦笑しながら俺を嗜める。が、その様子も楽しそうであった。……というか、今日はまた一段と可愛く見えるな……。

いや、普段も可愛いんだが、今日のおよそ行きの、ちよつと大人っぽい装いを見ると、女子高生の瑞々しさと大人の色気のようなものが入り混じってるような、正に卒業を控えた今の栞のような魅力を感じる。むき出しの肩とか超エロい。抱き寄せてスリスリしたい。こんな美少女特有の白いスベスベの肌、ほっそりとした無駄な肉がついて

いない肩や腰の間には、重量感たつぷりの爆乳があつて……うーん、やっぱ堪らん……。

そんな子とデート。それを実感すると口元がだらしなくニヤけてしまいそうである。しかも俺に惚れてるかもしれない、そうだとすれば俺の女になるのも目前……ともなれば、優越感が凄まじい。

だが確実ではないし、ずっとただ駄弁っている訳にもいかない。色々とアクションを起こしてみなければならぬが、

「わあ……人、結構いますね？」

「春休みシーズンはまだとはいえ、さすがだな」

遊園地の園内。人はそれなりにいた。

とはいえ、GWやクリスマス、夏休み冬休みの長期休暇や祝日に比べれば空いていると言えるだろう。

ただそれでも人が多いのはさすがの知名度、集客力といったところか。春休みはまだもう少しと先とはいえ、今年度ももう後一月だし……いや、理由はよく分かんが、意外とこの時期は人がいるのかもしれない。

やっぱ地方の遊園地とは違うな、と思う。俺の地元、九州と言えば、三井グリーンランド。知る人ぞ知る熊本県の遊園地だが、これは多分、九州民か修学旅行なんかで行ったことある奴しか知らない。そこそこちゃんとした遊園地なだけだな。昔友達と3、4階建てのお化け屋敷を大声で駆け回ったり、水を被った状態でマイナス30度の世界みたいな、名前は忘れたけどそういうのが体験出来る施設で髪の毛凍って出てきたのを見て爆笑した憶えがあるが、今考えるとやべー奴らだな……。

ただまあ、こういう人混みは……まあ別に好きじゃないし嫌いだが、我慢出来ない程でもない。

プロの仕事やっていると大勢の人の前にも出ることも多いしな。後は並ぶのも慣れる。俺、行列が出来るタイプの飯屋とか、意外と並ぶのが苦じゃないタイプだからな。特に人と一緒なら延々と駄弁つてるだけで時間経つし、勿論好きじゃないが我慢は出来る。

ただまあ、なんだ。この状況を利用しない手はない。

俺は柄にもなくちよつとドキドキしながら栞に何気ない感じを装って言う。

「……せつかくだし、手でも繋いでいくか」

「！ て、手ですか？」

「ああ、まあ、嫌ならいいが……」

と、聞き返されると思わずそんな逃げ腰になってしまふ。いや、うん。つい気を使っちゃうんだよな……。

だが栞は少し驚いた様子でいたが、俺がそう言ったところで勢いよく、

「つ……繋がります！ せつかくですから……」

「お……おお。それじゃあ……」

「あ……」

栞の左手を右手でそつと握る。栞の手は女の子らしくスベスベで華奢で、触るだけでも気持ちよかった。

しかもこちらを頬を染めながらチラチラと見て意識してるようで、

「……よし、それじゃあ行くか」

「は、はいっ。行きましょう！」

二人で園内を進むが……これはどうなんだ？ さすがに確定か？ 惚れてない相手に対してこんな感じになるか？

栞の手はスベスベで体温が感じられて気持ちいいが、ちよつぴりしつとりともしているようだった。いや、これ俺の手汗か？ どっちだ？ それともどっちもか？

分からないが……とりあえず、俺達は手を繋いだまま先に進む。すると早速、

「わっ、先輩！ ○○ッ○ーですよ！ ○○ッ○ー！」

「あんまり連呼するなよ……色んな意味で狙われるぞ」

「えっ？」

栞が頭に疑問符を浮かべる。うん、まあね。はしやぎたくなる気持ちには分らんでもない。

ただこういうマスコットってこうしてると——絶対寄ってくるよね。

「――！」

「あつ、こつち来ました！」

「近くで見ると意外と大きいよな、この着ぐるみ」

「……！……！」

マスコットの着ぐるみが大げさに手や首を振って着ぐるみじやないと訴えている。こういう身振り手振りなんかもきっちり練習して合格しないと駄目だったりするんだろうな……ドリームランドの裏事情はあんまり考えない方がいいな、うん。

思わず、給料幾ら貰ってんの？ 手取りは？ ボーナスとかある？

とか聞きそうになったが、さすがにそれをする中の人困るので自重する。いや、中の人なんていないんだ。うん。彼らは本物のドリームランドの住人。そういうことにおこう。

「せつかくだし、写真でも撮ってもらおうか？」

「あ、私撮りたいです！ 先輩、一緒に撮って貰いましょう！」

「ああ。……お願いできますか？」

「――！」

グツ、とマスコットがサムズアップ。そして○○ツ〇ーは手招きして遠くの仲間を呼んだ。○○ル〇だ。アメリカの大統領ではない。声がヤバいアヒル野郎だ。いや、他のキャラクターもそうだが、あんな声どうやって出してるんだ……。ちなみにイヌ公は他の客のお相手中。大変そうだな。なんか子供にウザ絡みされてるし。こちら後ろから叩いたり中をどうにかして覗こうとするんじゃない。お前のその軽率な行動の所為で次の日には魂が入れ替わるかもしれないんだぞ……と心の中で注意したところで状況は変わらない。子供ってのは残酷なものだ。イヌ公がこつちに助けを求めている気がしたが俺には何も出来ないんだ。悪いなイヌ公。精々、次の転生先でも探しておくんだな。

その間、平和なこちらはとりあえず、葉の携帯を○○ル〇に渡して撮ってもらうことに。そうして、俺と葉は並んだのだが、

「！」

「え？ なに？ もっと近くに寄れって？」

「あ、はい。……これくらいいいですか？」
「っ……」

葉が頭を近づけてきた。ふわっと葉の髪からほのかな甘い香りが。俺は一瞬動揺したが、直ぐに気を取り直して写真撮影。笑顔を浮かべろという命令がアヒル野郎から下されたので、一応笑顔を浮かべる。まあこれでも人前に入るプロだ。普通に笑うくらいは出来る。そうして写真を撮ってもらおうと、ようやくその香りから解放された。

「なんというか、いつ来ても撮っちゃいますよね。こういうの」「そうだな……そして、いつも切ない気持ちになる」

「えっ？ ど、どういう意味ですか？」

「気にするな。俺達はただこのドリームランドを楽しめばいい。思う存分な」

「？ なんだか意味深ですね……？」

葉は分かっているようだったが、分からなくて正解だ。多分、子供の対応を上手く捌けなかったイヌ公は後で先輩から注意されるんだろうな。もしくは同情されて優しい言葉を飯とともに奢ってもらえるか。出来れば後者であることを俺は願う。

……まあそれはそれとして、再び葉と手を繋いで進む。うん、やっぱり気持ちいいな。それに、美少女とこうしていると意味もなく気分が高揚してくる。美少女のバフ効果つてのは凄いやな……。

そして、俺達は普通にデートを楽しんでいくのだが、

「先輩、次はアレ乗りましょう！」

「おー……懐かしいな。子供の時に乗った気がする。よし、行くか」「はいー」

まあ、特に言うことはない。いやあるけどない。葉が可愛いつてくらしい。それと俺が段々と普通に楽しくなってきたってくらいだな。

いや、こういう遊園地って行く前はそんなに気乗りしないんだけど、行ってみるとやっぱり楽しいもんだ。俺はまあ、出無精だからな。用事がなければ外に出たくはない。別に家の中に居続けても苦じゃないタイプだし。かといって人に誘われたり外食や好きなもののためなら出れる、普通によくいるタイプのどっちかっていうとインドア

派なタイプだ。運動とかも好きなんだけどな。ただやるまでは面倒って思っちゃうよな。

ともあれ、普通に楽しみはじめていたんだが、

「それじゃあ、昼食買ってくるから席取って待っていてくれ」

「はい、ありがとうございます先輩。えっと、お金は——」

「学生に払わせるほど駄目な大人になったつもりはないぞ。ってわけで俺に奢られる。大人しく座っとけ」

「……ふふ、もう……相変わらず強引ですね。分かりました」

栞を席に座らせ、俺は園内のフードコートで昼食を買うことにする。栞の食べたいものを聞いて、俺の方は……まあ、適当でいいか。ここって意外と色々あるんだよな。まさか中華料理まであるとは。後、隣だとカレーが美味いらしい。カレーもいいな。しかし、この後のことを考えるとあっさりしたものの方がいいか？ 一応夕食も一緒だろうし。

とかなんとか考えて歩いていると……途中で、目についた少女がいた。

「むう……ない、ない……私のお小遣い……」

……なんだあの金髪少女……。

辺りを探して歩いている……中学生、か？ いや、高校生かもしれないが。かなりの美少女が何やらうーうー唸りながら不満顔で辺りを見回っていた。

金髪の長い髪に、妙にあざといような、自分のことを可愛いと思ってるような自信ありげなファッションの美少女だが……なんだろう。どこかアホっぽい匂いがする。

だが微妙に困ってる様子でもある。財布でも探してるのか？ いやまあそれならさっさと係員にでも伝えた方がいい気もするがな。

俺はなんとなく、そこで立ち止まる。いや、こういうのはなんだろう。プロの癖なんだ。人前に入るプロ雀士。実質芸能人のように人から注目される俺達なんかは、こう言うてはなんだが、普段の生活でもちよつと粋な行動を、というか、見られてる前提で行動しろと言われていた。

まあ昨今、別にちよつとアレなことをした程度でバツシングを受け
るような厳しい風紀の社会ではないとはいえ、良いことをした方が良
いには決まつてる。特に子供や老人相手には、優しくしておくのがい
い。

だからまあ、俺は声を掛けることにした。明らかに困つてるだろう
しと善意で、

「……ちよつといいか？」

「ふえ？ え、何？ ナンパ？ ——え〜？ 幾らあわいちゃんが超
可愛いからつて、いきなりそういうのは〜……うーん、どうしよつか
なあ〜？」

は？ なんかいきなりドヤ顔で調子に乗り始めたんだが。何この
子。やっぱ馬鹿なの？

と思つたが、まあいきなり声を掛けたらそう思われるのも無理はな
いと思つて告げる。出来るだけ優しく、

「いや、財布でも落としたのかと——」

「うーん。でもおにーさん、顔立ちは悪くないけど、目の下のクマは凄
いし、なんかやさぐれたホストっぽい！ それに麻雀も弱そうだし、
可愛すぎて麻雀も強いあわいちゃんとは釣り合わないかなつて。だ
からごめんなさい！」

「ナンパじゃなくて財布でも落としたのかつて聞いてんだよつ！」

声を掛けただけで振られる俺。というか、とんでもなく失礼な奴
だった。誰が麻雀弱そうだ。プロとしては弱いが、強くないだけで
全体的に見れば弱くはない。だから中の上か下の上くらいの人が正
しい。言つて悲しくなるな……。

ちよつとツツコンでしまったが、その少女には一応届いたようだ。
小首を傾げたその少女が、

「え？ ナンパじゃないの？ こんなに可愛いのに？」

「可愛いからつて声掛けてくる奴が全員ナンパだと思ふなよ……自信
過剰か」

「え〜？ だつて私可愛いもん。可愛さレベルで言うと、美少女レベ
ル100くらいー！」

「……とにかく、財布が何かでも落としたりたんじやないのか？」

「あつ、そうだった！　ねー、財布見なかった？　私みたいに可愛い感じのやつ」

「その説明じゃ分かんねえよ……」

やっぱりこの少女は馬鹿なのかもしれない。いや、中学生ってこんなものだろうか。妙に自己評価の高い奴だが、美少女であることには違いないので何も言えない。

俺は溜息をつきつつ、

「というかお前、1人なのか？　親か友達は……」

「あー、うん。友達と一緒に来たんだけどね。ちよつと喧嘩しちゃって皆どっか行っちゃった」

何気ない調子で言う少女。俺はげんなりする。

「喧嘩って……なんだ、アトラクション決めて揉めたのか？　どっちが悪いか知らないが、すぐにでも——」

「ううん。なんか高校に入ったら麻雀部に入ってインターハイに出てくとか言ってたから、弱すぎて絶対無理だから諦めた方がいいよって言ったら怒っちゃった。ホントのこと言っただけなのにねー？」

「あー……」

大分やべー奴だった。いや、うん。全部こいつが悪いじゃねーかって。

ただなんだろうな。俺はあまりそれに強くは言えない。昔の俺も似たような発言を部内や他の格下に言い続けてきたしな。

俺はなんとなく他人事とは思えないので、少し眉を顰めながら言うてやる。その少女に、

「……お前、それは事実でも面と向かって言わない方がいいぞ。因縁付けられて面倒だからな。思うだけならどうにもならないし、見下すのは心の中だけにしとけ」

「あれ？　怒らないんだ？」

「俺も学生時代は周りにそんな感じの事言いまくってたからな……経験者として言わせて貰うが、敵を作りすぎると学校でも浮くし、友達も出来ないから心で思うだけにしといた方がいい」

「へー、おにーさんもそうだったんだ。でも別によくない？ 弱い人とか別にいなくなっても困らないし」

「……これでも元プロでな……いや、それはいいか、それより、現に今困ってるだろ」

「べ、別に困ってないもん！ ——って、プロ？ おにーさん、プロ雀士なの？」

「元だ。クビになったからな。だからそんなに強くはないが……弱くもない、はず」

プロという言葉に反応したし、先程の発言内容からして、どうやらこいつは中学生で、麻雀をやってるみたいだな。それと、それなりに自分の実力に自信があるようだ。

まあ昔の俺みたいでなんとも言えないが、こいつは美少女だし、俺よりも勝ち組だな……とかどうでもいいことを考えてると、

「へえ……元でもプロなんだ。うーん、それじゃあちよつとだけ釣り合いは取れるかな？」

「いや待て。なんか嫌な予感がするから先に言っとくけどな。俺は今デート中だ」

「えっ？ それじゃあデート中なのに声掛けてきたの？ ……うわあ、おにーさんって結構アレな人なんだね」

「アレってなんだアレって。だからナンパじゃないって言ってるだろ」

ただまあ、複数の女性と関係を持つてるのは事実なのでこれもあまり強くは言えない。うん、やっぱアレな奴だな、俺。

とはいえこれじゃ話が進まない。こいつ、話を脱線させるのが上手すぎる。なのでとりあえず俺はポケットから財布を取り出し、

「……とりあえず、これくらいでいいか」

「えっ?! 何、まさかあわいちゃんのお金をお金で——」

「違えよ！ ほら、財布がないなら帰るお金とか色々困るだろ？ 財布が見つかるかどうか分かんねえし、そこまで面倒見きれないからとりあえず貰っとけ」

と、俺は財布から5000円札を取り出して少女に突き出す。する

と少女はその5000円札を不思議そうに見た後にこちらを見上げ、
「……これは私と縁を作って、後からフラグを立てようと……」

「意味分かって言ってるのか？」

「んーん、分かんない。フラグってどういう意味？」

「本当に分かんねえのかよ……いや、まあいい。とりあえず、これだけあれば足りるだろう？」

と、少女にお金を握らせる。すると少女はいきなりテンションが上がったのか、

「いきなり5000円貰えるとか超ラッキーだ！ 私の財布に入ってたお金より多いし！」

「ならちよつと返せ。千円札と取り替える」

「じよ、冗談冗談。えつと、ありがとう？」

「なんで疑問形なんだ」

「んく……まあいいや。おにーさん、ありがとね！ この5000円、将来100倍返しにして返すから！」

「あ、おい——」

と、少女は最後に笑顔でお礼を言い、自信たっぷりな宣言とともに、そこから走って立ち去っていった。

だが、なんとなくその最後の発言と、調子の良さに笑ってしまい、「ははっ、100倍か……50万になるんだが、分かってんのかあいつ……」

名前は分からないが——いや、「あわい」って言ってたか。ちよつとアホっぽい面白い奴だな。中学生にしては胸もある方だったし。……いや、そこはどうでもいいか。相変わらず思考がブレないな、俺……って、かなり時間食っちゃったし、さっさと昼飯買いに行くか。俺は栞とのデートに戻るために、再び売店へと足を向けた。

後輩おっぱい

昼食を摂り終え再び園内を歩き始めた俺達は、おそらく、よくある恋人同士のようなデートをしているのだろう。

デートというのは、こういう場所であつても、殆どは会話。コミュニケーションを続けることだ。アトラクションでわーきゃーした後、並んでいる最中、歩いている最中に栞と会話を行う。

「さっきの、凄かったですね」

「久し振りに乗ると中々クるもんだな。栞はああいう絶叫系は大丈夫なのか？」

「はい。私は大丈夫です。……琉音さんは絶対無理だつて言つてましたけど……」

「あいつ、ホラーとかも苦手だからな。面白そうだから今度、機会があれば連れてつて無理矢理乗せてやろう」

「もう先輩？ あんまり意地悪しちゃ駄目ですよっ」

「ああ、悪い悪い。……ま、それなら栞を連れ回してやるかな。栞は平気そうだし」

手を繋ぎながらの何気ない会話。だがそう言うと、栞は少し距離を詰めて肩を触れさせあい、俺の顔を見上げて、

「……はい。先輩と一緒になら、どこでも平気ですよ」

「……おう、そうか」

思わず素っ気ない返事をしてしまう。

が、それだけ栞の上目遣い、繋いでいる手にキュツと力を込めて、ちよつとおねだりするような、栞にしては珍しい直接的なアプローチに、俺は鼓動を強くして動揺してしまう。

だが同時に高揚感と、溜息を吐きたくなるような充足感を感じる。これはなんとというか、栞が可愛すぎることに。魅力的過ぎるからこそ、触れ合つて好意を感じさせるようなやり取りが気持ちいい。

いや、こんな誰かが振り返るようなおっぱい大きい美少女を手を繋いで連れ回して、先輩先輩つて慕われてるんだぞ？ そりゃ誰だつてデレデレしてしまうだろう。

かくいう俺も、油断すれば締まりのない表情を浮かべてしまいそうになるのを耐えている。ここまでされればさすがに分かる。確定ではないにしろ、十中八九、俺に惚れているのだと。

その事実、現実はどうしようもなく興奮してしまう俺がいる。気を散らさなければ勃起してしまう。彼女の手や、時折触れる肩の感触が、ほんとどうしようもなく性の気配を感じてしまって、股間がムズムズする。

歩く度に微かに揺れるその大きな乳房。ほっそりとしたむき出しの肩。太腿の肉感や、口を大きめに開く度に覗く八重歯。大きくぱっちりした目がこちらを捉え、先輩っ、と可愛い声で呼ばれる度に俺はたまらない気持ちにさせられる。

俺が学生時代に何度も夢想したシチュエーション。二人きりでデートに行き、そして最後には——という夢が今まさに現実になろうとしている。

デートが続き、日が傾いて、時刻が夜に近づくに連れて、俺も期待も高まっていく。葉の方も、気持ち口数が少なくなってきた気を感じた。

このテーマパーク特有の有名なパレードの夕方の部を見終わると、俺は時間を見ながら彼女をレストランに連れて行った。そのことに葉は驚く。

「先輩、よく予約取れましたね？ 昨日言い出したことですし、てつきりご飯は外で食べるのかと……」

「昨日誘われてすぐに携帯で調べまくったからな。敷地内やホテルのレストランの前日予約は人気のところほど難しいみたいだが……運が良かったみたいでな。なんとか取れた」

そこは落ち着いた雰囲気のレストラン。ダイナーなどに使われるコース制の料理を提供するお店で、家族というよりは、カップルが訪れるような、大人っぽい雰囲気を醸し出す人気のスポット。

時刻は夕方頃だが、店内は少し暗め。テーブルに置かれたキャンドルの明かりがこの雰囲気演出しているのだろう。

二人がけの向かい合う席に着いて、俺達はダイナーを始める。さす

がは世界的なテーマパークに併設されるだけはあって、サービスなども高品質だし、値段も安くはないが、べらぼうに高い訳でもない。デートには最適だ。

「さすがにここは来たことないです。いつもは家族で、ビュツフェとか家族向けの場所に入りますから」

「俺も初めてだ。こういう……なんだ。落ち着いた場所に、つてのはな」

曖昧な言葉になってしまふ。恋人が来るようなお店に女性と二人きりでというのは初めてだった。

まあちよつとお洒落なレストランくらいであればはやりさんや良子が行ったことはあるが、それでもここまで明らかな場所には行ったことがない……うん、ないはずだ。落ち着いた雰囲気のレストランと言つても色々あるからな。ちよつと高級なステーキハウスなんかだと家族連れとかでも行くし、昨日なんかは正にそういうところに食べに行つた。

だから俺も、こうやって向かい合つて、明らかなデートという感じでダイナーを楽しむのは初めてである。故に気恥ずかしさを感じる。会話が出来ない訳じゃないが、少し話題を考えて間が空く。その時に、葉はこちらを見て言つた。

「……そ、その……そうですね。私もこういう……ここ、恋人同士で来るような場所は、初めてです……」
「っ……」

葉が、俺が差し止めた言葉をはつきりと言葉にした。

顔を赤くしてどこか落ち着かないようにもじもじとしている。視線がチラチラとこちらと別のところを行き来する。その様子は、とても可愛い。こう言つてはなんだが、とても唆る。

「周り、恋人同士っぽい人ばかりで……私たちも、そう見られてるんでしょうか?」

「……まあ、客観的に見て……そう見られてるかもな」

「あはは、先輩と食事に行くのは初めてじゃないのに……その、凄くドキドキしますねっ」

「ああ、そういえばそうだな……学生時代の時か。よくお前を連れ回したっけか」

「はい。麻雀の練習終わりに、歌が歌いたくなったりとか言ってカラオケに行ったり、ラーメンが食べたくなったりからついてこいって言われて連れて行かれたり……ふふ、あの頃の先輩は凄く強引でしたよね？」

「あー……まあ、そうだな。いや、悪かったな。強引に連れ回しちまうて」

そういえばそうだったな、と思いながらも昔の行動に謝罪をする。

学生時代、葉と知り合って麻雀を教えていた俺は、麻雀が終わった後も葉と関わりたくて、自分がそうしたくなつたという理由を建前に、葉を色んな所に連れ回した。

食事なんかもその時に経験している。……まあこんな色っぽい場所に行ったことはないけどな。学生らしく、そこらのファミレスやらファーストフードやらラーメン屋やら、そんな感じだ。

今思うとガキだったな、と思う。たった数年前の自分だということに、酷く昔のように感じられた。少し自己嫌悪する。

だが葉は俺の謝罪に対して笑みを浮かべた。

「いいえ。私も楽しかったです。……それに先輩、強引な様でちゃんと気を使ってくれましたよね？ 私が甘いものが好きだつて言ったら、次の日にはデザートが美味しいお店に連れて行ってくれたり、私の方が後輩なのに、とっても優しく、気を使わせないように色々とお話を振ってくれたり……」

げっ、バレてた。くっそ恥ずかしい。そういう気遣い——いや、気遣いつていうか下心で優しくしてただけだと思っただが、どちらにせよそれが実はバレてたつてのは物凄く恥ずかしい。思わず顔を背けたくなる。

だが葉の言葉は止まらない。こちらを懐かしむような優しい笑みでじつと見て、

「……そんな先輩と、今もこうして一緒に……二人きりでいるのが、夢みたいです。約束は……その、まだ叶ってませんけど……」

「ああ……それは悪かったな。俺が不甲斐なくて……」

「いえ、大丈夫です。まだ、叶わないと決まった訳じゃありませんから」

「それは……」

栞の言葉に俺はなんと答えていいか分からずに目を背ける。その信頼は有り難いが、それが出来るとは限らないのだ。

栞や……そう、後琉音とも交わした約束。それは学生時代のことだ

「——おうボブ。これ見てみるよ」

「ん？ って、これは今週のWeekly麻雀TODAYのグラビアじゃねえかYO！ しかもはやりんとうたたんの二本立てグラビア！」

「ああ、最高だな。このはやりんの水着。はあ、何カップくらいあるんだろうな。なあ、ボブ。お前はどれくらいあると思う？ 三桁は固いと俺は思うんだが」

「うたたんは水着じゃないが、この薄い腰のヒップラインが……はあ、オレのリビドーが突き抜ける……あ、はやりんの方はどうでもいいYO。バストはどれだけ大目に見ても80以下じゃないと駄目なんだぜイエア」

「お前……ロリコンカミングアウトしてから清々しいくらい正直になったな。まあいいけどよ。……いやあまあ、三尋木プロも可愛いし悪くはないけどなあ……やっぱおっぱいがなあ」

「バストだけが女性の全てじゃないヒエア」

「ロリコンに言われても何も響かないな。いや、ほんとおっぱいって、巨乳って最高だよな……栞もめっちゃくちゃ大きいし……Hよりは確実に上だと思うんだがどう思うよ？ 大きいと、こう、挟まれたりして最高だよな……」

「……あんなのただの脂ほ——」

「てめえボブ！ 言っちゃあならねえこと言いやがったな!! おっぱ

いは夢だ！ 夢とロマンの塊だ！ 俺はロマンを汚す奴は許さねえ！ 全世界のおっぱい星人を代表してお前を成敗してやる！」

「の、ノー!? わ、悪かったブラザー！ だから掃除用のモップ持って暴れるのは——」

「問答無用！ チエイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

——つて、これじゃねえ。これは三年の夏頃に交わしたボブとの会話だ。

約束の方は確か、

「先輩……もうすぐ卒業ですね」

「ああ、そうだな」

「プロ入り、おめでとうございます。その……寂しくなりますけど、私、先輩の教えを胸に頑張りますねっ」

「……まあ、頑張れよ。お前なら……そうだな。いつかはプロになれるかもしれないな」

「え、ええっ!? それはさすがに無理ですよ。私、めっちゃくちゃ弱いですし……」

「いやいや、諦めるなよ。確かに弱いが、お前、根性はあるし、まだまだ伸びそうだしな。諦めずにやればプロだっていけるだろ。俺が行けたくらいだしな」

「……でも……」

「いいから頑張れ。それで……まあ、なんだ。プロになったら、また一緒に対局なんかして、色々教えてやる」

「! ほ、本当ですか?」

「ああ。男女混合の試合やイベントなんかもあるしな。同じプロになればまた先輩として面倒見てやるよ」

「それなら……頑張ります。約束、ですからね?」

「ああ、約束してやる。プロで待ってるからな」

——なーんて、かつこつつけた約束をしたが、当の俺はプロ二年目で情けなくも戦力外通告を受けてしまいましたとき。

うーん、我ながら情けなさが凄い。ほんと、俺って馬鹿だよな。自分の事がまるで見えてなかった。

プロに残り続けることすら出来なかった俺。そんな俺と、高校時代に輝かしい成績を収めてプロ入りする若きホープ。

どうしようもなく差がある。釣り合わない。だというのに、彼女はこんな俺を先輩と呼んで慕う姿勢を見せてくれている。

ま、オカルトのおかげだろうけどな。オカルトの力ってすげー。

だが栞は信頼してくれているが、俺がもう一度プロに戻るのなんて不可能だろう。

俺は弱い。弱いし、需要だつてない。オカルトは手に入れたが不安定。難関のプロテストを合格できるとは到底思えない。

だから俺は言葉を迷わせたのだ。それは無理だと遠回しに分からせるつもりだった。

だが栞は言う。俺を見つめて、

「……先輩は……私に、色んな事を教えて、楽しいことを沢山教えてくれました。今だって、先輩と一緒に、私……凄く嬉しくて……」

「栞……」

栞が言う。テーブル越しに、潤んだ瞳で、

「……先輩。私、もっと先輩と一緒にいたいです……その……この後も……」

「っー」

この後。その言葉を耳にした瞬間、俺の血の巡りが早くなる。

予定では、ディナーを終えたら解散だ。デートは終了。

だが、これも誰でも分かるだろう。夜になって、まだこの後も一緒にいたいと言われて、ただ遊びの誘いだと思う奴はただの間抜けだ。

これは……夜のお誘いだ。デートの最後を締めくくる、最高のイベ

ント。

正直、最低な話だが、男は最後にこうなるために、デートをしてい
ると言っても過言ではない。昼間に女性が喜ぶようなエスコートを
して、気を使ったり、プレゼントを送ったりするのは、全てその雄と
して最高の瞬間を迎える為である。

やれない女に金を使う意味なんてない——なんて言葉だつてネッ
トには飛び交っている。極端ではあるが、それもまた一つの真実。エ
ロいことをするために、男は女に気を使って、甘い言葉を送るのであ
る。

俺も例外ではない。自分が愉しみたいという思いとオカルトの効
果が出ているかを探るために、俺はデートをしていたのである。別に
葉を楽しませようという気がない訳ではないが、主目的は前者であ
る。俺は葉と、かつて好きだった女の子と、ラブラブエッチがしたい
のだ。

だからもう、それを言われた時の俺は、まだその時ではないとい
うのに、股間に血流が集まり、頭がクラクラするほどの興奮を感じた。
今直ぐ襲いたい。この子を、自分のモノにしたい。

もう食事の味も、その間にどんな会話をしたかも殆ど憶えていな
い。無難な会話をしながら、会計を済ませたことは憶えている。

そして食事を終えて店を出ると、

「先輩……」

「っ、ああ……」

葉が腕を絡めてくる。俺の右腕に抱きつくように。

しなやかでスベスベの手が俺の手に絡みつき、そしてその葉の大き
な胸が、その横乳が、ふにゆうっ、と俺の腕に柔らかさと弾力に満ち
た至高の幸せを押し付けてくれている。

今から、このおっぱいと、こんな大きいおっぱいをぶら下げた美少
女とエッチをするんだよ？ と分からされるように。

そこらの男達がちらりと盗み見る魅惑の膨らみ。それを押し付け
られてる俺への嫉妬の視線。二人の間を流れる甘い雰囲気。今から
二人でエッチします、と周囲に宣言していることとほぼ同義だ。

もしこれを俺が第三者の立場で見たら、羨ましすぎて、そして嫉妬で相手の男を呪い殺したくなるだろう。

グラビアアイドルも真っ青どころか、グラビアで活躍してしまうほどの、ほぼアイドルと同意義なまだ18歳。ぴっちぴちのJKである巨乳美少女。卒業を控えた青く、しかし実りまくった魅惑の果実は、今から俺の手によって収穫される。

「……俺の部屋、来るか……？」

「……はい……連れて行ってください……先輩……」

俺が小さい声で決定的な言葉を呟くと、栞が内緒話をするような声量で、俺の耳に熱っぽく、色っぽい声を通らせる。

栞の小首がこてん、と俺の肩に擦り付けられる。ふわりと靡いた髪から栞の匂いが、そしてその、もたれかかってくる栞の確かな重みが、まさしく俺に委ねられていることを自覚して酷く興奮する。

股間は既にギンギンに勃起していた。バレてないだろうか。ズボンに押しえつけられていて、上を向いてはいないため、バレてはないと思うが、腰が引けてしまっているのはバレている可能性もある。

帰りは電車ではなくタクシーを使った。出費はかさむが、電車だと人も多いし、何よりこの雰囲気壊したくない。

「先輩……」

「っ、栞……」

タクシーの後部座席で、俺達は互いを呼ぶ。栞の太腿が、腰が、俺の太腿と腰に密着してたまらない。

なんてこの子は魅力的なんだと思う。こんな、男が理想にするようなエツロい身体付き。これを味わえる幸福と優越感でどうにかなりそうだ。

タクシーの運転手、30代くらいの男性が、チラチラとバックミラー越しに栞と俺を盗み見る。彼にも分かっていることだろう。今から俺達がセックスするってことを。

栞という美少女を、俺が今からたつぷりと欲望のままに味わう。それを理解して何を思うか。栞の可愛さ、そのエロさに、帰ってから一人寂しく俺になることを、俺と入れ替わることを妄想して、肉棒を扱

きたてるのかと。

まあ、幾らでも思えばいい。思うだけならタダだ。

ただし、現実の葉は俺のモノだ。この可愛くてエッチな雌は俺の番だ。

もう気持ちいい。好きだった女の子を、誰もが羨む美少女、巨乳JKを自分のモノだと思い、見せつけるだけでありえないくらい興奮する。

だが辛い。早くやりたい。この子を味わいたい。ホテルまでの移動時間は酷く長く感じた。

だがその時間は絶対に訪れる。都内のホテルへと辿り着き、会計を済ませてタクシーを降りると、二人で俺の泊まるホテルの部屋へ。

「んう……♡」

「っ、はあ……」

二人きりのホテルのエレベーター。そこが一番危なかった。

密室で、エッチの瞬間が目の前に迫っている。もう俺は手をワキワキとさせて、なんとか耐えた。

葉も興奮しているのか、俺に身体を擦り寄せてきている。ああ、だはまだ駄目だ。エレベーターを出て、ホテルの廊下を、俺の部屋までの道取りを歩く。まだ駄目だ。俺の部屋までは後数メートル。そこに行けば、そこに行けば、葉とエッチ出来る。あの葉と。巨乳美少女とエッチ出来る。部屋の前についた。部屋の鍵となるカードキーを差し込む。葉の手を引いてその中に。そして葉を先に通し、部屋の電気を点けるためにカードキーを室内の入り口に差し込むと、我慢する必要はなくなった。

「はあ、はあ……葉……」

「んっ、せんぱあい……♡」

正面から、葉を抱きしめる。その待望の瞬間。待ち望んでいた柔らかな身体の感触に、先走りかビュルビュルと漏れた気がした。

「んっ……んちゅ……♡」

いきなりのキス。葉のファーストキスを奪う。瑞々しくぶるんとして柔らかい。最後に食べたデザートのア이스クリームの味がする。

そうしてキスをしながらも、もう止まれない。葉がとろんとした表情で、

「せ、せんぱい、シャワー、は……んんっ♡」

「葉……好きだ……可愛い……」

「んああ……♡　せんぱい、私も、好き、です……ずっと、こうしてほしくて……先輩に初めてを奪って貰えて、嬉しいです……♡」

「ああ……葉い……!」

強く抱きしめてキスをする。好きだった子の唇の感触。そして今日一日中見続けてきた葉のエッチで可愛い身体を味わう。

胸板に押し付けられるその爆乳が最高で、もっと押し付けてほしくてぎゅうぎゅうと抱きしめる力を強めながら、胸板でおっぱいを押し込んでしまう。手は葉の背中をまずは撫で、その女の子らしい身体のラインをなぞって楽しむ。下に手を伝っていけば、そこにはスカートに包まれた安産型のヒップが。骨盤が広めの子作りに適したエッチな下半身。興奮した肉棒は細いお腹の中心にグリグリ、かくかくと腰を押し付けてしまう。

葉に圧迫されて肉棒が気持ちよく、キスだったたまらない。気がつけば舌を口内に侵入させて、れろれろと互いの舌を絡ませていた。

「はあ、はあ、葉……脱がせるぞ……!　はあ、可愛い……!」

「ああ、先輩……先輩の、硬いのがお腹に押し付けられて……んんう……♡」

肉棒の感触を感じて、腰をくねくねとさせる葉だが、その仕草がまた俺を興奮させる。セックスするようにお腹へ腰を振って肉棒を押し付けながら、俺は葉を剥いていく。

自分も靴を脱ぎながら靴を脱がせ、オーバーニーソックスに包まれた太腿を揉みながら脱がせる。コルセットスカートはそのウエストのラインを楽しみ、そしてそのお尻はやはり、ぷりんと丸みを帯びた安産型。しかも俺を興奮させるためか、マリンブルーのちよつとセクシーな下着。お尻に手を伸ばせば、いつまでも掴んでいたくなるぷりぷりの弾力。後ろからめちやくちやにガン突きしたくなる良いお尻の感触。俺の方に引き寄せるように揉んで、同時に肉棒をぐりぐりと

押し付ければ、もうセックスしているかのようなたまらなさが俺を襲う。

そして、ノースリーブニットを下から上に捲り上げるように脱がせると、とうとう、たぽんっ、と重そうにまろび出てくる魅惑の膨らみ。

「っ、ああ……大きい……すげえ……！」

「はあ、んっ、せんぱいに、見られてる……♡」

見るに決まっている。それだけ、このおっぱいは魅力的だ。

あの水着グラビアで見た膨らみ。深い胸の谷間が俺の目の前にある。

ブラ紐が、大きすぎる胸を持ち上げようとして、胸と紐の間に隙間が出来ているのがエロい。大きいからこそその現象だ。これがまた俺を興奮させる。

「ブラも脱がせるぞ……葉……俺に見せてくれ……っ！」

「……は、はい……どうぞ、先輩……♡」

脱がしやすいように、そして触りやすいように、胸をそらしておっぱいを強調してくれる葉。まるで、俺に差し出されたもの、これは俺のモノだと言われているようでその仕草とたゆんと揺れるおっぱいに興奮する。

そうして、ブラのホックを外して脱がせれば、ツンと突き出た桃色の乳首が見えた。

「う、あ……葉、エロ過ぎる……たまらない……」

「せんぱいの視線が突き刺さって……んっ、せんぱい、おっぱい好きなんですね……♡」

「ああ、大好きだ……だって、エロ過ぎる……こんなの、こんなの……！」

恥ずかしがる葉の胸元にぶら下がる特盛の果実。

まだ誰も見たことがないその生のおっぱいに、眼が釘付けになる。俺はその最高すぎるおっぱいを、正面から両手を伸ばして——五指でそれぞれ揉みあげた。

「柔らかい……！ ふわふわなのにしっとりモチモチで……！」

「はあ、最高……大好きだ……！」

「んうっ、先輩の手に揉まれて……はあ、はあ……♡」

葉のおっぱいは、まるでマシユマロのようにふわふわでもにゅんもにゅんの至高の揉み心地だった。

ずっしりとした重量感がありながら、指を押し込めば指が沈む。ふわふわなのに、確かな反発力を持って、おっぱいをおっぱい足らしめるたぷんたぷん感を演出している。

その爆乳を手で揉みしだき、そのぷるんぷるんと揺れる光景を視界で楽しみ、葉が熱い息を吐く。

「ああ……気持ちいい……葉、葉……！」

「あっ、先輩、おっぱいに飛び込むなんて……んっ♡ はあ、えへへ、でも、可愛い……♡」

谷間に顔を埋め込んで、左右からぱふぱふとおっぱいの圧迫感を樂しむと、葉が俺の首に手を回して、顔をおっぱいに押し込めてくれる。顔が葉の乳房でむにゅんむにゅんと甘やかされ、俺は葉の細い腰に手を回して顔を振って甘えてしまう。顔でおっぱいの重みを感じるのは本当に気持ちいい。コリコリとした乳首の感触もエロく、口に含んでちゅーちゅーと吸ってしまふ。すると葉が、あっ、と感じた声を出して、俺の顔を更に抱きしめた。顔にかかるおっぱいの圧が増す。最高。肉棒はどんだんを硬く大きくなった。もうたまらない。

「っ、はあ……葉……このおっぱいで俺のチンコ挟んで……」

「んっ、ああ……そ、それって……ぱ、パイズリですか？」

思わずおっぱいの谷間の中で欲望を口ずさむと、どうやら葉はそれを知っていたらしい。おっぱいの谷間を下から上に舌を這わせ、おっぱいを楽しみながら問う。

「知ってたんだな……？」

「あ、うう……その、先輩が、大きな胸が好きって噂があったので……その、もしこうなったら、先輩にやってあげたいなあって思ってたんです……」

その言葉に、俺の肉棒がドクンと跳ねる。噂の出処がまた気になるが、それよりも葉が俺にパイズリしようと思っただけの事実にくどくど興奮する。

「はあ、はあ……じゃあ、是非やってくれ……」

「は、はい……それじゃあ……」

「脱ぐから待ってくれ……!」

俺はもう我慢できず、さっさと服を脱ぎ捨てる。もうさっさと全裸になる。彼女の肌を直接味わいたい。そうしてベッドの端に足を広げて、ギンギンの肉棒をさらけ出す。

「わあ……これが、先輩のおちんちん……すごく、大きいんですね……」

またこの子は男の自尊心を満足させるような言葉を吐いてくれる。別にそこまで大きくはないだろうが、彼女にとって初めてみた男の勃起オチンチンが、俺の肉棒なのだ。それを思うと更に興奮が増す。

そして俺の肉棒に、菜の手が絡んでくる。女の子の手。好きだった女の子に触られる。もうそのことに興奮して肉棒がいつも以上に感じてい。軽く、しゅっしゅっとして擦られるだけでめちやくちや気持ちいい。パンツだけでほぼ裸体の菜にそうされている。この光景がまじろ口過ぎる。

「先輩のおちんちん……近くで見るとドキドキします……ちゅっ♡」
「っ、ああ……!」

そして菜が肉棒の先端にキス。鈴口から溢れた我慢汁をぺろりと掬い取る。

かつての学校一と言っているいい美少女のキスは俺の口だけでなく、グロテスクな俺の肉棒の先端にも落とされる。その事実には背筋が震えた。

「ちゅっ、ちゅっ、れろお……♡」

「っ、ああ……いい」

こちらを上目遣いでじっと見詰めたまま——可愛い顔をこちらに見せてくれたまま、カリ首をぺろりと舌で回転するように舐め、顔を下げて、根本から裏筋を先端に向かってぺろおっと舐める。

菜の唾液が俺の肉棒に塗られていく。ぬるぬるになって菜の口が龟头まで来たところでもう一度龟头を舌で舐め回すと、

「せんぱあい……ああむっ……♡」

「くっはあ……っ」

肉棒の先端が、熱に包まれた。

亀頭が、肉棒が、葉の口内に包まれたのだ。

葉の口の中はとても熱くてぬるぬるだった。裏筋と亀頭にぴったりとくっついた舌と唇の気持ちよさ。柔らかな手は陰囊を包み、もう片方の手もちらの太腿を撫でてきている。

しかも俺の肉棒を啜えたまま上目遣い。テクニックがある訳ではないが、俺の好きな愛情たっぷりな舐め方だ。

気持ちよすぎて、口の中でビクツビクツと肉棒が動いてしまっている。

「ちゅる、れる、ちゅぱっ、んっ、んっ♡」

首を振って、俺の肉棒を唇で扱く。

綺麗な髪が揺れ、美しい顔の、口の中に、俺の肉棒がある。

唇を輪っかにして肉棒を扱きながらも、舌で裏筋や亀頭をぺろぺろと舐め回してくれる。

思わず葉の頭に手を置く。征服欲が増す行為だ。あの葉が舐めてくれている。俺の股間に顔を埋めて首を振っている。うっとりとしてしまう最高の瞬間。そして何となく頭を撫でると、

「！んっ、ちゅる、んっ、れる、んっ……っ♡」

「っ、ああっ、葉い……っ！」

動きが激しくなる。

しかも膝立ちの先にある安産型の尻が左右に僅かに揺れている。

上から見ると葉のスタイルの良さが確認出来てエロい。悩ましい腰つきや、深い胸の谷間が見えてヤバイ。というか出そうになる。多分、パイズリのための知識を拾ってきたのだろうし、濡らすためにフェラをしようとしたのだろうが、これはマズい。

葉の口の中で出すのも最高だと思ってしまう。慣れてないからか、時折歯が、八重歯が当たりかけるのが、逆に気持ちいい。この口内にいる感じがたまらない。だがヤバイと、

「葉、そろそろ……っ！」

「ん、ふあい……はあ、それじゃあ先輩、私のパイズリで、気持ちよく

なっってくださいね……♡」

と、おっぱいを持ち上げ、ギンギンにそびえ立つ肉棒に近づけると、そのまま左右から、むにゆううつ♡ と俺の肉棒を包み込んできた。左右から、乳圧が押し寄せてきて、俺は呻く

「う、あああ……！」

「ん、先輩のおちんちん、凄く硬い……おっぱいの中で、動いてる……♡」

あの葉の、何度も妄想した、何度も挟まれないと思ったおっぱいに、俺の肉棒は遂に呑み込まれた。

陶醉する。口を半開きにしてだらしなく。それだけたまらないのだ。

すっぽりと包まれている。男が一番性感を感じられる一番硬い場所が、女の子の柔らかく、一番のセックスアピールと言っているわいな膨らみにむにゆうむにゆうと包まれている。

おっぱいによって根本から先っぽまで全てが包み込まれるこの幸せ。腰の根本に下乳が、むにゆり、と密着するこのたまらなさ。グラビアを見たであろう全ての男がこうされたいと思った行為を、実際にされてしまった。しかも更にここから、

「えっと、動かすんですよね……おっぱいで扱くように……」

「っ、あつ、ああ……やばっ」

むぎゆうつ、とおっぱいが上に、乳圧を高めながら持ち上げられ、そして、たぶん♡ と腰におっぱいが落とされる。

その単調な動き。しかし、俺はそれだけでイキそうなほど高まっていた。

先程のフェラの快感もあるが、そもそも二週間も溜めてきているし、そもそも三年近くこうしたいと思っていたことが現実になっているのだ。

もうその達成感やらなんやらでありえないほどの快感とたまらなさが俺を襲ってる。腰を浮かせておっぱいの谷間をかき分けると、もうヤバイ。この肉棒を包み込む最高のむにゆうむにゆうの中で射精したいと思ってしまう。

予習済みの葉は俺の肉棒で初めての実践を行いながらも、少し気恥ずかしそうに、

「先輩が気持ちよさそう……えへへ、ちょっと恥ずかしいですけど、喜んでくれるなら良かったです……」

「あ、ああ、最高……葉、気持ちいいぞ……ああ、はあ……！」

「あつ、先輩の腰が浮いておっぱい突かれちゃってる……♡ やっぱ可愛いです。ぎゅうっ……♡」

「う、ああ……！」

「先輩、私のおっぱいで、いっぱいシコシコ♡ ってしますから……沢山気持ちよくなってください……♡」

葉のおっぱいを軽く突き上げる俺を見て、優しい笑みを浮かべた葉は、おっぱいを左右から押さえ、突き上げてくる肉棒を甘い乳圧で受け止める。

葉の動きと俺の腰の動きが合わさって、にゅぽにゅぽ♡ と音がなり始めた。もうヤバイ。自分で腰を振るのもヤバイが、更にそれに合わせて葉がおっぱいを締め付けてくるのが気持ちよすぎる。

もうヤバイ、と思う途中、しかし俺は気になって、欲望に満ちた問いを声に出す。

「ああ、ああ……葉……これ、おっぱいのサイズ幾つあるんだ……？」

ああ……！」

「え、大きさ、ですか？ あ、その、えっと……」

葉は少し恥ずかしいのだろう。パイズリは止めないが、少しこちらをチラチラと見ながらも、やがて、

「……ひゃ、100センチの、Kカップです」

「う、ぐ、あ……！」

俺の腰が跳ねた。葉の、何度も妄想したおっぱい。

昔より大きくなってているだろうが、今のサイズは3桁。100センチのKカップ。

その言葉が頭をぐるぐると駆け巡る。ギンギンになって先走りを漏らした肉棒。その肉棒をにゅぷにゅぷ♡ と現在進行系で挟み込み、柔らかく扱きあげる葉のKカップ。100センチ。グラビアおっ

ばい。その谷間が俺の腰の上で上下に弾んでいる。

腰の上で感じるおっぱいの快感に、俺は二週間の呻りと三年分の想いを吐き出した。

「う、ぐあああああつ！ イク！ 出る……！ う、ぐう……！」

「きやつ！ お、おっぱいの中で吹き出して……んっ♡」

びゅーっ、びゅーっ、びゆるる、びゆるっ、と、死ぬほど濃い射精。

おっぱいの中で、葉の3桁おっぱいの中で引き絞るように吐き出す射精は、正に極楽だった。

溜まりきったフラストレーション。何度も勃起させられたそのおっぱいで、実際に挟まれて吐き出す快感は幸せすぎる。

葉のパイズリの処女を奪い、征服した証——おっぱいの谷間に掛かる精液の橋を見て、俺の肉棒はまだまだギンギンにやる気を見せ続けていた。

「す、すごい出るんですね……男の人って……んっ」

「はあ、ああ……葉が良すぎたからな……う、最高……」

「きやつ、先輩……乳首に擦りつけられるのくすぐった……ああん……♡」

射精し終えた肉棒を掴んで、葉のコリコリの乳首に擦りつける。柔らかさとその乳首のアクセントを感じて肉棒から再び快感が走る。

またおっぱいで、この俺が征服したKカップおっぱいで射精したいとも思うが、まずは葉を俺の女にすることが先だ。

「葉……次はお前のここに入れるぞ……！」

「あつ、は、はい……先輩、来て下さい……大好きな先輩……♡」

俺は葉のおっぱいを拭きながら、葉をベッドに押し倒していく。葉の眼の色も、既に俺のを受け入れたいと情欲に濡れているようだった。

後輩との初めて

「んっ、せんぱいのっ、凄く当たって……はあ……♡」

「はあ、はあ……そのまま、腰を下ろして……っ……」

葉の濡れた下着を脱がせ、お互いに生まれたままの姿になると、俺は葉を上を跨がらせた。

背中にはホテルのベッドの感触。そして腰、ギンギンに勃起した俺の肉棒の先端は、葉の秘部とちゅっちゅつとラブラブなキスをしながら、その奥にハメる機会を窺っている。

だがその時は今だ。今なのだ。俺の指示に従い、葉は腰を下ろす。肉棒が葉の膣の入り口に、くちゅっ♡ と音を鳴らして沈んでいく。己の肉棒で好きだった後輩の、誰もが夢見る爆乳美少女の中へ初めての侵入を試みる。もうその時点でめちやくちやに気持ちいい。亀頭が熱っぽく、トロトロに溶けた媚肉に啜えこまれ、吸い付いてきている。そこを俺の肉棒でこじ開ける。俺の肉棒の形に矯正する。男の幸せ。人生における喜びの瞬間。

「先輩……あっ、大好き……んんっ♡」

「ああ、俺も好きだぞ、葉……くっ、あっ」

愛の言葉を紡ぎ、プチツと彼女の初めての証を貫く。俺が奪い去る。葉の表情が一瞬、耐えるように歪んだ。更に奥へとかき分ける俺の肉棒。その最高の快楽を感じながら、陶醉してしまう。

あ、ああ……遂に……あの葉と……！

学生時代に好きだった美少女。片思いであった後輩。そういった恋だったり、想いというのは実らないのが普通だろうが、今の俺はそれを実現させている。

思い出すのは彼女と過ごし、そして夢想した日々。制服の中で揺れる巨乳を想像し、自室のベッドで己の肉棒を扱きたてる。妄想の中で、その巨乳に挟まれ、処女を奪い、最高にエロいセックスをする。

自分が卒業した後、大会などで活躍するようになった彼女は雑誌などにも載り、グラビアなども掲載された。その肢体をある程度解放した水着グラビア。学校中の男子が憧れるその魅惑の身体は、全国に住

む大多数の人にとっても憧れのものとなった。

だがそれは今、俺のモノになっていく。いや、既に俺のモノだ。肉棒が現在進行系で朧の美しくエロい身体に埋まっていく。安産型のヒップが、俺の腰に密着する。朧の身体の柔らかい重さを確かに感じる。股間が、朧の愛液で濡れている。朧の手が、俺の腹に置かれた。触れた箇所全てが気持ちいい。いきり勃つ股間が跳ね、それに反応するように朧が、

「んっ、あっ、はあ……♡先輩の、中で跳ねて……んっ、え、エッチつて凄いですね……あんっ♡」

気持ちよすぎて、思わず腰を浮かせて、朧の中を突き上げると、朧が可愛い声で喘いだ。

普段聞くことなど絶対出来ない、女性が感じた時に出す声だ。

それだけではない。下から見上げる彼女の裸体も。足を広げ、膣が俺の肉棒をみっちりと咥えこんでいるその光景。グラビアモデルになるのも納得のくびれた腰。そしてKカップの、100センチおっぱいが布を何も身につけることもなく、俺が突き上げたことでたぶんっつと揺れる。

朧の顔も、紅潮し、瞳は濡れている。俺を真っ直ぐに見ている。誰も見ることが出来ない、俺だけが見ることの出来る彼女の痴態。

しかも中は、俺の肉棒を酷く甘く締め付けてくる。きゆうきゆうと俺の肉棒を愛してくる。中は凄く熱い。亀頭が、肉棒がふやけそう
だ。

「あっ、ああっ、ヤバい……朧……朧、気持ちいいっ……!」

「あっ、んっ♡先輩、気持ちいいんですか……? あっ、えへへ、わ、私も……初めては痛いって聞いてたのに……先輩が相手だからか、んっ♡凄く、気持ちいい、です……あっ♡」

朧が俺の肉棒で感じて、ずっとそのままているのが落ち着かないのか、腰をくねらせる。

だがその動きがヤバい。朧の動きに合わせて、中にいる俺の肉棒もにちゅにちゅと擦られる。

男を、俺を搾り取る魔性の腰使い。その細い腰が動き、その中に俺

がいて、爆乳を揺らしながら快感を得ている栞を見ると、俺はもうたまらなかつた。

「あつ、栞、出そう……！ ヤバい、あつ、出ちゃう……！」

「え、あつ、出るんですか先輩……んっ♡ な、なら、中に出してください……先輩の……エッチな汁、中で受け止めますから……あつ♡」
「う、うううっ、くっ、栞い……！」

なんてたまらないことを言うんだと、思いながら、俺はもう我慢できずに腰を突き上げる。

まさかこんなに早いとは、と自分で思う。

だがこれはリアル。これがエロ漫画やAVなら、尺稼ぎにもうちよつと色々とあるのだろう。竿役も、我慢して女の子の濡れ場を見せるために黒子に徹するはずだ。

だがやはり、これは現実なのだ。竿役は俺。誰に見せることもない、彼女のセックスの相手は俺。尺稼ぎをする必要もなければ、黒子に徹する必要もない。彼女の可愛いところを、エロいところを見て、感じすぎて射精してしまうのはしょうがないし、誰にも憚ることはないのだ。

もう俺は彼女の中で射精したくてしょうがない。栞を、一刻も早く俺の女にしたいとしょうがない。学生時代に好きだった女の子だ。股間の収まりは効かない。

俺は栞の太腿を、腰を思い切り両手で掴む。瑞々しい柔らかさが返ってくる。そして彼女の中を確かに突き、肉棒で彼女の中をしつかりと感じながら、

「っ、イッツツツく……！ ああつ、ああああつ！」

「んんっ♡ せん、ぱい……♡」

かくかくと栞の中へ腰を振りながらの射精。積年の想いと共に栞の中を汚す。

びゆるびゆると凄まじく濃い射精。栞のまんこで扱きたてた射精は、凄まじい快感を俺にもたらした。

「あ、ああ、栞、栞……可愛い……あつ、ああっ……」

「んっ、あつ、先輩の、中で凄い出てる……♡ 熱い……あつ、これ、

気持ちいい、かも……♡」

「ああ、やばっ、めっちゃ出る……」

葉の中の熱さを感じながらの射精。その肉付きの良い太腿をすりすりとして手で撫で、その細い腰にも手を這わせたりして、この中に出してるんだ、と感じながらの射精は正に幸せのひと時だ。

何度だってこれを味わいたい。これを味わうためなら、どんな苦労も惜しくないと感じてしまう。

そして——これは俺が彼女のような美少女とセックスをしてから初めて分かったことだが……極上の美女相手に本当に気持ちのいい射精をすると、興奮は冷めやらない。

むしろこんな美女を抱いたのだ、射精したのだという事実、肉棒から伝わる快感の名残で、また気持ちよくなり、勃起してしまふ。

「はあ、ああ……葉……好きだ……」

「やつ、あつ、先輩、おっぱい触りたかったんですか……んんうっ♡」

「ああ、ずっと触りたかった……はあ、柔らかい……最高だ、葉のおっぱい……」

そして一度こうなれば、理性は蕩け墮ちる。

心の中に秘めていた正直な欲望が、ありのままの言葉が口から出てしまふ。

葉のぷるんぷるんのおっぱいを両手で鷲掴み、ぽよぽよと揉みしだいたり揺らしたりして楽しむと、その手から伝わる感触に肉棒がまた上向きになり、更に葉の中で大きく硬くなる。

そしてその大きくなつた肉棒を歓迎してくれるかのように、葉の中がきゅんきゅんと収縮する。俺の精液によつて更にドロドロに蕩けている中の感触は、再び俺の腰が動いてしまふのに十分なものだった。

「あつ、あつ、せんぱ、いつ♡ 腰、激しっ、んっ♡」

「はあ……っ、葉、エロい……可愛い……ほんとお前、ヤバすぎる……っ、そんな声まで上げて、ああ……」

「せ、せんぱいが突くから……あつ、あつ、あつ♡」

葉が可愛い声をあげてくれるのが堪らず、腰をガンガン突き上げて

しまう。

おっぱいから手を離し、お尻を引き寄せるように鷲掴みにして腰を揺らすと、今度はさつきまで俺の手で押さえていたKカップおっぱいがぶるんぶるんといやらしく揺れる。

まるで触つてと言わんばかりのいやらしい揺れ方だ。だがその乳揺れを見ていたいと思うし、もう一度触つてめちやくちやにそのおっぱいの感触を楽しみたいとも思う。

最高に悩ましい選択肢。俺は悩んだ末に、しばらくその乳揺れを堪能した後、第三の選択肢を選んだ。

「葉、キス……キスしようっ……身体を前に倒して……!」

「あっ、は、はい、せんぱい……んんっ♡」

葉が繋がったまま、身体を前に倒して俺と密着し、そのまま口づけする。

葉の柔らかい唇と甘い唾液と舌の感触にうっとりしながら、同時に葉の身体が覆いかぶさっているこのたまらなさも感じる。

そのいやらしいKカップが俺の胸にむにゅん、むにゅん、と押し付けられて気持ちいい。その先端のコリコリの乳首も合わさって、背筋がゾクゾクと震える。

その柔らかさ、葉の体温、葉と密着するこの心地がたまらない。極上の肉布団だ。

女の子って、美少女ってなんでこんなに気持ちいいんだろうと、そんなことを考えてしまう。触れた箇所がどこもかしこも柔らかく、瑞々しさに満ちている。

「ちゅっ、ちゅる、はあ、んっ、れろ、ちゅぷっ、ん、はあ……せ、せんぱあい、しゅきい……ちゅうっ、ちゅうっ♡」

間近で蕩けた顔の葉とラブラブのキスを交わし、葉の味を楽しむ。鼻で息を吸えば、葉のふわつとした甘い香りが身体の中に入り込んでクラクラするし、両手で彼女のすべすべの肩をさすさすときすすってみる。女の子らしい華奢なで肩。熱を秘めた彼女の腕が、俺の首に回される。もつと密着したい、好きだという彼女の意志、この甘い雰囲気気がたまらない。俺も手を背中に回して彼女に抱きつけば、おっぱい

が面積を広げて俺の身体の間で押し潰れる。抱きつくだけで俺を気持ちよくしてくれる柔らかふわふわのKカップおっぱい。3桁に届く大きさの乳を持ちながら、この細い腰は俺が抱きつきやすいように、くびれてるんじゃないかと思うほどに魅力的で、この腰の曲線が、俺の胸板に押し付けられているおっぱいや、俺が手を今から伸ばす……この安産型のお尻の丸みを強調しているようで堪らない。俺の腰の上で揺れる、俺の肉棒がこの葉の中にある。葉のお尻の丸みを両手で確かめるように、円を描いて揉みしだく。すべすべで弾力があつて気持ちいい。触れた箇所が多ければ多いほど気持ちいい。最高の心地を感じながら、一番性感を感じられる俺の肉棒は、ここからじや見えなくても、確かに彼女の中にいることを感じられる。凄まじい興奮にブクブクと肉棒の幹が太るような、気持ちのいい勃起をするが、それもまた、葉の中で熱く溶かされ、突けば葉の喘ぎ声とともに、確かな快感が伝わり、俺の上の葉の身体が擦れて気持ちいい。

「ん、葉い、もう、最高……気持ちいい……好きだ……」

「あ、せんぱい、せんぱい……くび、それ、気持ちいい、あつ、んんっ♡」

夢見心地。もう何もかも気持ちいいと、腰を動かしながらただ欲望のままに動く。葉の首筋に顔を埋め、その細い首元を舌で舐めて、そのまま吸い付く。可愛い子の首にキスをして、吸い付くのはほんと自分のモノにした感じがして最高の気分になれる。耳元で聞こえる葉の声がたまらない。反対側にも潜り込んで、めちやくちやにキスをしてやる。俺の跡をつけてやると、これを見た他の男は葉がもう俺のモノになったことを理解するだろう。どれだけ葉が表ですまし顔で純朴な表情を浮かべていても、裏にいる俺という男の影を見るだろう。そのことに絶望するだろうか。それともあんな子が……と、興奮するだろうか。本気で恋心を抱いている男は鬱になり、それでも鬱勃起してしまうだろうか。そんなことにすら興奮してしまう。彼女はもう俺のモノなんだ。俺のモノなんだ。頭の中でその事実が反復する。

「んん、せんぱい、私も……んちゅ……♡」

「っ、ああ……！ 葉、葉い……！ それ……あつ……ああ……！」

そんなことをしているとだ。葉までも、俺の首に吸い付いてくる。ちゆるちゆると舌が、ぬるんぬるんの感触が俺の首に来た。状況的に葉しかない。葉が俺の首筋を舐めたかと思うと、俺の首にちゅうちゅうと吸い付いてきたのだ。

くすぐったいような、ゾクゾクとするような快感が全身を走り抜ける。女の子に首筋を舐められるこの快感。なるほど、確かに気持ちいい。みっともなく声を上げてしまおう。くすぐったさと性感が混じったような、そんな気持ちよさだ。

そしてそれだけに、どうしようもなく愛を感じてしまおう。葉が確実に俺に惚れていることを理解してしまおう。

「葉、ああ、好きだ、好きだ……ああ、気持ちいい、葉……」

「せんぱい、好きです、だいしゆき……♡ んっ、せんぱい、せんぱあい……♡」

お互いに、会話になっていないやり取り。文脈もへったくれもない。低レベルな日本語の応酬。

だがお互いの好意を伝えるにはそれだけで十分だった。確かに相手と意志を疎通している。

俺の勃起した肉棒を、葉の濡れ濡れまんこにずっぽり嵌め込みながら、全身ペツティング。俺は手をめちやくちやに、常に動かして葉の背中から腰、お尻を中心に堪能しながら、葉のおっぱいを中心とした柔らかさを全身で感じる。そしてキスを、舌を絡ませながら、彼女のチャームポイントである八重歯を感じ、相手の身体に自分の証を刻み込み、相手呼んで好きだと伝える。

仮に言葉を理解していなくとも、この状況であれば意志は伝わるだろう。人間に原初から伝わるコミュニケーションだ。その意味を、理論ではなく本能で理解する。最高の雌とのセックスに必要な以上の言葉はいらない。そんな余計な事を考える余裕すらない。

知的に講釈垂れてる学者様は、本当にこれを知っているのかと思う。そこらの妥協した女とのセックスじゃない。見た目という、最低だが異性に惹かれる最強の真理。己が好みで心の底からやりたいと思ひ懸想するような、性癖、性的嗜好とも言い換えられる相手との、好

意に満ちたラブラブセックスを。

マイナス要素なんて一つもない極上の美少女。これで性格が悪かったり、何か思うところが一つでもあれば、ここまでの興奮は起こらないだろう。

葉はお菓子作りが趣味で、少し遠慮がちな普通の女の子だ。ただし見た目は美少女。俺のことを先輩と呼んで慕い、そのいやらしい肉付きの身体で俺を誘う極上の雌だ。

「ああ、葉、葉……気持ちいい、葉、ああ、うぐっ、はあ……！」

「あつ、あつ、あつ♡　せ、せんぱつ、わ、私、も、もう、せんぱいつ、好きっ、きちやうっ、あつ、あつ♡」

ホテルのベッドの上で、葉とセックス。ベッドがきしきしと軋む音と、彼女の嬌声が俺の耳に届く。

五感全てが気持ちいい。自分の好みの見た目の極上の美少女。おっぱいが大きくて、細い腰。ぷりんとした女性らしい丸みを帯びた臀部を他ならぬ俺の身体で味わう。

葉が、どうやらイキそうだという気配を、葉の声から察する。俺は本当に僅かに残った脳の機能でそれを理解すると、俺も俺の腰の疼きに従ってめちやくちやに腰を振った。

尻を掴んでのガン突き。処女なのに感じてイキかけている爆乳美少女を、俺の肉棒によってイカせる。もうたまらない。何もかもが気持ちいい。

「ああ、葉っ！　俺の、俺のお！　あ、ああ、出るっ！　葉、俺の女っ！　出るっ！　葉の中でっ、あつ、ああっ……！」

「んっ、あつ、ああっ、せ、せんぱつ、あ、せんぱい、もっ、出し、てっ……！　わたし、をっ、ん、あつ、せんぱいの、女に、してっ……好き、好きっ、あつ、イク、あつ♡」

「う、ううううっ！　葉い！　俺の、女あ！　あ、ああ出すぞ！　葉の中、でっ——」

欲望が口をついて出た言葉。脳がオーバーヒートを起こすような興奮の中で、俺は頭が真っ白になるほどの快感を得た。

「ん、んんんんっ——♡」

びゆるびゆるびゆるっ！　びゅうびゆるっ！　びゆるっ！　びゆるる！

弓を引き絞りきって、限界まで溜めて放ったような射精。凄まじい快感と充足感、優越感や支配欲などを満たされた射精に、うっとりとしながら震えてしまう。

「あ、あぁっ……葉、気持ちいい……めちやくつちや出る……出るう……」

「あ、あぁ、せんばあい……せんばあい……♡」

葉もイツたのか、俺の抱擁を受け——いや、彼女も俺の首に手を回して抱擁しながら、うわごとのように声を漏らしている。

ぐったりした葉の身体の重さが心地良い。どっちの身体がピクツと震えたのか。身体を震わせて、お互いにすりすりとしながら絶頂の余韻、快感を楽しむ。

息をはあはあと吐いて、呼吸を整えていく。燃え上がりすぎて、少し回復まで時間が掛かった。

だが葉の方は凄かった。何が凄いかというと、

「ん、んんっ……せんばい、好き、好き、大好きです……♡」

ちゅっ、ちゅっ、せんばいかっこいい、ちゅっ、すきい、好き、好き……♡」

「うっ、あっ、葉……」

ちゅっちゅっどエツチの余韻を楽しんでる最中、理性がまだ蕩けた状態で好意を口にしながらめちやくちや擦りついてくる。

漫画的表現が通じるなら、目がハートマークになっていることだろう。女の子はエツチの後こそ甘えてきたり、イチヤイチヤしようとしてくる。それを証明するかのようには、葉は俺の顔にキスを落とすまわってきていた。

これがそこの女であれば鬱陶しく感じるだろうが、美少女が相手だと凄まじく良い気分になるから美少女って卑怯だ。ここまで好意を示されてやる気にならない男はいない。

この様子じゃ、二回戦——俺の射精の回数で言うなら四回目に出発するのも近いだろう。そう感じざるを得なかった。

——気がつけば、射精回数は二桁に突入していた。

葉という学生時代に好きだった女とのセックス。念願の性交は、その精神的なものもあつてとんでもなく燃え上がってしまう。

相手が処女だということなどお構いなしにやりまくってしまう。まあ、これまでも別に手加減することはなかったが、やはり美少女とのセックスは普通の女とは一線を画すと言わざるを得ない。

この女尊男卑気味な御時世、こんなことを言えば炎上待ったなしだが、思うだけならタダだ。それに悲しいことに、男の本能として、これは少なからず真実なのだ。

見た目が極上の、遺伝子が優れてる女性とのセックスは男としてもどうしようもなく興奮してヤル気になってしまうのだろう。

とかなんとか、少し落ち着いた頭では色々考えてしまう訳である。まあ落ち着いてるとは言っても、やはり目の前に意識はいつているが、

「んっ、先輩のおちんちん、私のおっぱいの間でまだビンビンになって……ふふ、気持ちいいんですか？」

「あー、そう。最高……葉のおっぱい気持ちいい。Kカップで勃たされる……」

「も、もう……あんまりおっぱいの事言わないでくださいよ……恥ずかしいんですから」

「あつ、あー、ぬぶぬぶされて……あー、ヤバい。これでまた出せそう……」

俺達は今、ホテルに備え付きのユニットバスの浴槽内で、身体を洗い流していた。

まあさすがに身体がドロドロになったし、汗もめちやくちや搔いてしまった。お互いが落ち着いたタイミングで、お風呂に入ることは自然な事だろう。

……ただ、まあ、一緒に狭い浴槽内でシャワーを浴びて、眼の前で葉の裸体がふるんぷると惜しげもなく晒されているのを見ると、当

然身体を身体で洗って欲しくなるわけだ。

するとまあ、当然の様にそのおっぱいで肉棒を洗ってもらおう。立つたままの俺に対し、膝立ちになった葉がおっぱいを寄せて肉棒を包み込んでくれる。それがまた気持ちよくて、

「あ、葉、ぎゅってして、おっぱいで包み込んで、あー出そう……！」
「ん、先輩、出していいですよ……おっぱい好きな先輩の為に、いっぱいしてあげますから……んんっ♡」

「あ、あー……！ おっぱいに、おっぱいの中に、出す……！ Kカッ
プおっぱいに中出し……！」

結局、ドクドクと葉の爆乳に包まれたまま1……2？ 12回目くらい
の射精をする。

さすがにそれくらいになると、とんでもなく気持ちよくても、射精
後は落ち着いて小さくなっていく。

というか本当はもう出来ないと思ってたのだが、葉のおっぱいで洗ってもらってるうちにちよつと勃起かけて、挟んでもらってみると、見事に勃起させられた。パイズリで肉棒を起こして貫うのも最高だが、こうやって、頼めばしてもらえるとこの状態も最高すぎる。巨乳美少女を彼女に——自分の女に持つ者だけの特権だ。それがこれだけの美少女で、グラビアモデルにもなるほどの相手ともなれば尚更優越感に浸ってしまう。

「はあー……最高だった……って、葉……うおっ……」
「ん、ちゆるっ、はむっ、んんっ、れろ、れろ、ひゃんほ、ひへいにひかないほ……んーっ……♡」

余韻に浸っていると、葉が射精後に肉棒を口に咥えてお掃除フェラ。正直、シャワーで洗い流せばいいと思うのだが、そんな野暮なツッコミはしない。射精後の肉棒をぺろぺろと舐められるのは、勃っ
ていないとしても最高の心地だった。

温かい口内で裏筋や亀頭をぺろぺろ、ちゅうちゅうとされていると、
と、というか……

「あー、あー……気持ちいい……葉、もうそろそろ……」
「んっ……ちゅうっ……んっ、気持ちいいなら、もっと勃ってもー

……」

「つて、おい。やっぱりまた勃たせようとしてんのか」

チンコを口から離し、そんなことを呟いた葉にさすがにツツコミを入れる。すると葉は少しバツが悪そうな笑みを浮かべ、

「あ、あはは……ごめんさい、その……先輩のおちんちん、射精させるの、段々と楽しくなってきたら……」

「っ……おお……そうか……」

何気にエロいことを天然で言いやがったので、思わず襲いたくなるが、さすがに自重。どれだけ可愛くても勃たなければ出来ない。まあ一瞬勃ちかけたけど。少し時間を置けばまた出来そうなのが恐ろしいところだ。

「おちんちんくん、頑張ったねー。でももうダメだったね……よしよし」

つて、今度はチンコに向かってあやすように話しかける。

その様子に勃起があが——いやいや、待て待て。そんな愛おしそうな感じで肉棒を撫でるな。ちよつと本気でもう一回やろうか考えてしまふ。ちよつと着替えてコンビニ行つて精力増強剤でも買つてこようかと本気で迷う。この子、エッチ過ぎる。

そしてまあ、とりあえず、シャワーで身体やら色々洗い流して綺麗になった俺達は、再びベッドに戻つてなんとなく寝転がる。多少は綺麗にしたが、ちよつと濡れてたりする部分があるのは仕方ない。そのうち乾くだろう。すると葉もベッドに、正確には俺の近くに寝転んで身体を擦り寄せてくる。

「先輩の身体、気持ちいいですねっ。温かくて硬くて、頼もしいです」

「いやあ……お前の身体の方が気持ちいいんだよなあ……」

「やんっ、もー、またおっぱいですか？」

お湯で綺麗になった葉の肌は、しつとりすべすべでとんでもなく気持ちいい。すつごい幸せな感触だ。おっぱいもそうだが、どこを触つても気持ちいいのが反則だと思う。

この子とエッチしたんだよな……と冷静な頭で思つてとんでもない優越感を感じながらなんとなくおっぱいを手に掴んで揉んでいる

と、ふと疑問に思ったことが。それを口に出す。

「そういえば、泊まっていたって良かったんだよね？」

「あ、はい。親には外泊するってちゃんと云ってるので大丈夫です」
「そりやそうか」

まあ、千葉まで遠出したんだし、そりやそうなるだろうなど。卒業を控えているとはいえ、栞はまだJKだし、一応はそういうところも気になる。ユキほど気にしなくては良さそうだが。

「今も家はあっちの方が。卒業したらどうするんだ？」

「えっと、卒業したら埼玉で一人暮らしする予定ですね。あの、琉音さんやはやりさんの紹介もあつて……」

「あー……ハートビーツだもんな。まあ、そうなるか」

卒業してハートビーツ大宮にプロ入りが内定——というかもう契約を交わしているだろう栞は、ハートビーツの本拠地である埼玉県に単身、引っ越すという。

まあ都内からでも通えなくはないが、やっぱり近い方が便利だからな。練習なんかもあるし。選手寮なんかも完備してる筈だが、どうやら同じハートビーツのはやりさんと琉音に物件も紹介されて、諸々の手続きも済んでいるだろう。

……しかし、そう考えると思うところはあつた。今後の事だが、

「……そういえば先輩」

「ん、どうした？」

「先輩って……は、はやりさんと付き合ってるんですか？」

「……あ、あー……」

ちょうどそういうことを考えていた俺に、タイミングよくそんな質問が栞から飛んでくる。うん、まあ、なんと云えばいいかな……何気に重要な部分だ。

なんで知ってるんだと思うが、やっぱりはやりさんからだろうか。まあ、何気にはやりさんとはあれから連絡を密に取ってるし、実はあの日に撮った2ショット写真だつてある。良子も同様に。もしかして待ち受けとかにしてたりすのかなあ、と思う。まさか付き合つてることを言つてはいないだろうが、栞が俺の母校の後輩と知つて、つ

い俺の話を、俺のことを聞いたりしまくってた可能性もある。という
か考えれば考えるほどそれな気がする。

だがまあ、オカルトの効果もあるし、おそらくは大丈夫な筈……と、
俺は言ってみる。クズなことをはつきりと、

「まあはやりさんと良子とかとは……こういうことする関係……では
あるな。一応、二人……いや、三人と付き合ってるということになる
のか……」

「……そうなんですな」

栞が少し尻を落として頷く。いやまあ、どうだろう。なんて言わ
れるかな。大丈夫だと思っただけでもちよつとヒヤヒヤするな。

とか思っている、栞はこちらを見上げて真っ直ぐと、

「……なら、私ともそういう関係でいさせてください」

「お……おお。まあ、むしろ大歓迎だが……」

いいのか？ と口に出そうになる。が、その前に栞は再度頷いた。

「先輩、いつでも私のこと呼んでくださいね」

「え、いつでも？」

「はいっ。……あ、でも仕事がある時は無理かもしれないですけど
……それでも、先輩が望むなら私いつでも……え、エッチなこととして、
先輩を喜ばせますから……」

あはは……と恥ずかしそうに笑いながらそんな俺にとって都合の
いいことを言う栞。胸の前で指を合わせてもじもじするな。なんか
可愛いし、おっぱいの谷間が強調されてエロい。

だがいつでも、いつでもかあ……と思う。とはいえ遠いんだよな、
と。

しかしはやりさんや良子ほど忙しくもなければ、ユキほど遠くもな
いし、ある意味、今一番いつでもやれる子なのかもしれない。——と
んでもなく最低な評価だが、間違っではないだろう。

それにしても……これで四股か。最低だが、最高だな。

大好きな爆乳美少女4人と付き合ってるという事実、気を抜けば
締まりのない顔を浮かべてしまいそうになる。まさしく、現代のハー
レムだ。重婚したり、同じ様に複数の女の子と付き合ってる奴はいて

も、これほどの美少女達と同時に付き合っている者はそうはいないだろう。

凄まじい優越感。いつか、女の子を両手で抱いて道を闊歩する日も来るのだろうか。そう考えると最高だな。というか……4P……いや、5Pしたいな……想像するだけでヤバイが、実現可能なところまで来ているのがもつとヤバイ。想像だけで股間が膨らみそうである。両手に花どころじゃない。俺の身体に群がる爆乳美少女達。最高過ぎる。きつと、至上の快樂を味わえるのだろう。

「……栞。俺は、栞のことだって大好きだからな……」

「あつ……はい先輩。私も先輩のことが大好きです……ちゅっ♡」

堂々と三股——四股宣言をした上での好意。やはり最低だが最高だった。

「ん……あー、栞可愛い。ほんと可愛くて柔らかくて最高。こうしてだけで気持ちいい」

「あんつ、先輩ってば、ほんとおっぱい好きなんですね。そんなに掴まなくても、おっぱいは逃げませんよっ」

「駄目。逃さん。もうこのおっぱいは俺のおっぱいだから……はあ、ほんとでつかくて柔らかくて最高……」

「もー……はいはい。私のおっぱいは先輩のもですよ……ふふ、こうすると気持ちいいですか？」

「うはあ……ああ……気持ちいい、幸せ……」

おっぱいを間近でモミモミしてた俺の顔を、抱きしめておっぱいの谷間で捕まえてくる栞。

左右から栞の100センチKカップふわふわおっぱいの乳圧がもにゅんもにゅんつと……あー……やっぱ、気持ちいい。ぱふぱふされるのヤバイ幸せ……。

「えへへ、先輩の顔、捕まえちゃいましたー。ほーら、先輩。先輩の大好きなおっぱいですよー？ 沢山気持ちよくなってくださいねー♡」

「う、ああ……はふっ、んぐっ……さいこっ……気持ちいい……俺専用おっぱい……」

「ふふ、気持ちいい時の先輩って、すごく可愛いんですね……よしよし……おっぱいは逃げませんよ……♡」

細い腰に抱きついて、おっぱいではふぱふ顔を甘やかされながら頭を撫でられる。どうしようもなく独占欲やらなんやらを満たされ、葉が俺の女になったという実感を得ながら——俺は、もつとこの男として最高の瞬間を味わっていた。

次の目的地は

後輩のおっぱいを堪能した翌日、俺は栞と一緒にかつての母校、白糸台高校を訪れていた。

「うお、懐かし……ってか全然変わってねえな……」

「ふふ、先輩が卒業してからまだ三年くらいですし、そんなにすぐには変わりませんよ」

いやまあ、そりやそうか。時間的にはそれほど経ってはいない。

でも酷く懐かしい気分になってしまうのはなんでだろうな。そんなに学校が恋しかったか、俺。学校に良い思い出なんてあんまりないんだけどな……。

強いて言うなら、栞とか、後はまあ、ボブとかとの思い出はそれに楽しかったが、他のことについては正直微妙なところだ。

「えっと、校内にも入りますか？」

「いや、休日つっても部活してる奴とかもいるだろうしな……遠慮しとく」

「……そうですか」

だからそんな栞の提案にも首を横に振ってしまう。……いや、そうやってしょんぼりされると凄惨な罪悪感。困るからやめてほしい。

というか俺が学校の中を見て回って、仮に麻雀部辺りを見ても正直迷惑だと思ふし、俺の方も特に感慨なんてものはない。

当時、部活の連中は眼中になかったというか、ボブ以外はいつでもいいと考えていたし、特別交流を持ったりはしなかった。部員の顔も名前もほとんど憶えていない。

だが今残っている栞と同世代の三年——まあ、もう引退してるだろうが、その世代は俺のことを憶えてるだろうし、もし鉢合わせしたらビビられそうで何とも言えない。典型的な怖い先輩だったと思うしな。別に暴力を振るったりしていた訳ではないが、最強という誰にも手出しできない優位な位置から一方的な上から目線の言葉を掛けていたことには変わらないし……いや、俺も若かったな。

今更ながら少し悪いことをしたな、と思う。考えは変わってない

が、もう少し大人に、言い方を工夫したり、心で留めたりすればよかったです。

例えば——あら、とんでもないお雑魚さんですわね。それだけ練習してこの腕前ならインターハイなんて諦めた方がよろしくつてよ？
みたいな。いや、なんでお嬢様言葉なんだ。真っ先に思いついたのがそれだった。

ただなんだろう。頭の中で想像するようなお嬢様がこう言っていると、ちよつとだけマシな感じがするな……やっぱ、美少女が言つてると思うと男が言うよりは断然マシだ。

ただまあ、今どき、こんな典型的なお嬢様言葉を使う奴なんていだろうな、と思う。家が金持ちで、大豪邸に住んで、メイドや執事がいて、親が学園の理事長とかで何でもかんでも好き放題……みたいな奴。まあいいだろう。いたら跪いて足を舐めよう。それでお金でも恵んでもらおう。美少女ならついでに麻雀してオカルトで——つて、こんな妄想したところであまり意味はないな、うん。どうせ想像するなら箱入り娘くらいの方が現実的だろう。多少家が裕福で、世間に疎い感じの堅物娘。それくらいならまあ、いそいだ。というか、親戚筋を辿ればいる。あー……そういえばそっちに行く手もあるんだよなあ……ただ、ちよつと……実家に帰る羽目になるのがなあ……それさえ無ければ従姉妹の春ちゃんに会いに行くという建前で——いやまあ、どうだろうな。その辺はおいおい考えることにしよう。

「それじゃあ他も見て回りましょうか」

「そうだな」

と、俺と栞は学校周辺を歩いて回る。うーん、やっぱり懐かしい。コンビニとか定食屋とか。学生時代はよく通っていた。

今はなんとも思わないが、学生の時に入るレストランとかつてなんとなく楽しい気がする。学生つて懐も厳しいし、友人と食へに行くとなんとか楽しくもんだ。

ただ、今はそんな思い出よりもだ。——セックスがしたい。

とりあえず、栞とのデート、誘いに乗ってここまでやって来たし、こ

これはこれでいいのだが、栞を見てるとまたムラムラしてきた。学生時代の思いもあるせいだろうか。昔は何も出来なかったが、今はいつでもエロいことが出来る関係というのが興奮する。

だから俺は、栞の肩を何気なく抱こうとして——しかし途中の声にそれを留められた。

「う、宇野沢……」

「えっ？——あっ……高坂さん……」

「あん？」

背後からの男の声。栞を呼ぶ声に誰だと振り向くと、そこにはどこか見覚えのある男の姿が。

そいつは栞と……そして俺を見て、呆然とした表情を浮かべているのだが。

……あれ、こいつ誰だっけ？ いや、知ってる。どつかで見た。絶対見覚えがあるのだが、ど忘れというか、思い出せない。

「あー……お前、なんだ。誰だっけか……」

「いや、あの……先輩。男子部の部長ですよ。先輩の同級生の……」

「あ……あー！ そういやそうだ！ うわっ完全に忘れてた……そういやそんな名前だったな、お前」

「っ、東郷……」

高坂……ああ、うん、思い出した。俺の同級生で生徒会長だったり男子麻雀部の部長とかしてた眼鏡君だよな。

俺が学生時代、散々にボコって煽りまくった相手でもある。結局、最後の最後まで団体戦は俺とボブのチームが掻っ攫っていったし、さぞや恨みがあるだろうと。

まさか御礼参りにでも来たのかと一瞬考えるが、こいつはそういう奴じゃない。そんな荒っぽいことをするタイプじゃないからな。やったこともないだろうし。

別に喧嘩云々とか、そんなことでマウントを取るような馬鹿らしいことをするつもりはないが、何の用だとは思う。仲は良くないからな。会って思い出話を語り合えるはずもない。

「それで、こんなところでどうした？ 態々俺に会いに来たか？」

「っ、ただの帰り道だ……大学と家の……」

「ああ？　へえ、そうなのか。ならさっさと帰ればいいだろ。一々話しかけてくんない」

「お前に話しかけた訳じゃない……！　というか、なんでお前が宇野沢と……」

「？　高坂さん、私に用事ですか？」

俺への声は随分と苛ついていたようだが、後半の声は尻すぼみに小さくなっていった。俺は聞こえたが、栞はほとんど聞こえなかったのだろうか。首を傾げて用件を問う。

その栞の言葉に、分かりやすく高坂は動揺した。いや、単に落ち着きがなくなったと言うべきか。というか栞も、よくこんな普通に対応出来るなと思うし、そもそもこの元部長サマは、まさかまだ栞のことを……と思う。

その後のやり取りをなんとなく眺め、俺はそれを確信した。

「い、いや、用という程では……その、なんだ。卒業おめでとう、宇野沢」

「あ、はい。ありがとうございます」

「そ、それと、プロ入りおめでとう。いや、さすがだな……宇野沢の才能と努力が見事に実を結んだ結果だと思う。同じ母校の麻雀部員として、誇りに思うよ」

「いえ、そんな才能なんて……先輩や宮永さん、周囲の人達のおかげですよ。私がプロになれたのは。とても私一人の功績だなんて思えません」

「う、うむ。そうだな。そういう姿勢もさすがだと思う。……あ、あー、それでだな。その……卒業とプロ入りの、お祝い……そう、僕からの個人的なお祝いとしてなんだが……こ、今度、僕と……」

「？　なんですか高坂さん」

「あ、う、うむ。だから、僕と——」

——いや、声がちっちゃなんだよ童貞野郎。栞が首を傾げるのも無理はない。俺もほぼ聞こえねえっつーの。

ただまあ、言いたいことはなんとなく理解する。要は、未だにこいつ

は栞のことを諦めてなくて、卒業とプロ入りにかこつけてアプローチを掛けようとしているのだろう。

うん、まあ、見ようによっちゃあいい場面にも見えるか？ こいつは顔も悪くないし、元生徒会長で部長なんていう学校の人気者。ドラマとか漫画の主人公にも見えなくもない。勇気を出して好きな後輩をデートでも誘うってか？ ブ男がまごついてるのなら女から非難轟々だろうが、イケメンだと可愛い扱いされるし、俺からすれば自分の実力も弁えずにインターハイ云々と夢見てた馬鹿野郎だが、他の多くの女の子からすれば、このシーンは正に夢で見るようなキュンキュンするシーンなのかもしれない。

……だけどまあ……残念ながら、これはリアルなんだよな。

俺はしばらく見物するつもりであつたが、それを止める。そして笑みを浮かべながら近づく。部長サマがもごもごしているところに割り込むように、

「そ、その……僕と、今度何処か——」

「——なあ、栞。そろそろ行こうぜ」

「あつ、先輩……」

「っ……！」

俺は態と少し大きめの声で栞に声を掛け、その腰を抱き寄せる。栞のくびれた腰。魅力的で、胸や尻ほど直接的な部分ではないとはいえ、お腹周りは女の子にとってデリケートな部分。誰にでも触らせるような場所ではない。

そこに手を回し、栞との距離を詰めると、面白いくらいに高坂くんの顔が歪んだ。

俺はそちらをちらりと見ながらも、無視して栞に声を掛ける。

「お腹空かないか？ どこかでランチにしようぜ」

「んっ、先輩、それはいいんですけど、少しくすぐりたいです……」

「ああ、悪い。つい癖だな。栞は嫌だったか？ 嫌ならやめるが」

「あ、いえっ、嫌じゃないです。その……先輩にそうされると、ドキドキしちゃうから困るだけで……むしろもっとしてほしいです」

「っ……」

栞が気恥ずかしい感じの笑顔を俺に向ける。俺に腰を抱き寄せられ、軽く抱きつくような形になり、俺に胸を押し付けることになっても嫌がらない。

それを見ていた高坂の、苦渋に満ちた、泣きそうな、それでいて必死に平静を取り繕うような表情を見て、俺は思わず愉悦を感じてしまった。

正確には、優越感を感じてしまっている。この高坂くんは気づいただろう。自分に向けられる表情と、憎い男に向けられる表情の差に。俺と栞の——いや、肉体関係にある男女特有の距離の近さとその雰囲気。

普通の男に腰を触らせたり、胸を押し付けたりはしない。どんなに純真だと言っても、その辺りの距離感というものはある。

漫画やドラマ、妄想ならいざ知らず、リアルにおける栞という美少女に向けるこいつの好意は実らない。その栞の好意は、残らず俺に向けられている。

悔しいだろうなあ、と思う。逆の立場なら苛ついて、頭を掻き毟りたくなるような嫉妬に駆られるだろう。

それを理解しているからこそその優越感だ。酷く趣味の悪い喜びだが、感じてしまうのだから仕方がない。

きっと高坂くんが主人公のストーリーであれば、あるいは表面的にこのワンシーンだけを切り取れば、俺はとんでもない悪人だろう。NTR野郎だと叩かれるかもしれない。高坂くんの頭の中と、それを俯瞰で見る傍観者であれば。

だが申し訳ないが、現実ではこんなことは往々にしてあるものだし、そもそもNTRでもなんでもない。こいつが勝手に想いを寄せて、片想いして、まごついてる間に俺が落としただけの話だ。オカルト云々とかは置いておくとしてだ。俺が誰の恋人でもない栞と関係を持ったという図式は特別悪いことでもないのだ。

しかしまあ、他の男から実際に勝ち取ったのだというのが分かるこの感じは悪くない。誰がどう見ても俺の勝ちみたいなものだ。

この感覚を何と言えはいいのだろうか。色んな男に惚れられるよ

うな極上の美少女を、俺の手で抱きかかえる。それを見せつけると、
どうしようもなく征服欲か支配欲、優越感が刺激されてたまらない。
普段よりも葉の身体の柔らかさが気持ちよく感じる。興奮して下
半身に血が集まる。ヤバイ。今直ぐ葉とやりたい。

自分が恵まれていることを実感出来る行為をしたい。それもあつ
てか、俺は話を終わらせてやろうと敢えて声を掛けた。

「つと、悪いな。そういう葉に話があるんだったか？」

「あつ、す、すみません。お話の途中で……その、結局用事は……？」

「つ、い、いや……」

「ん？ なんだ？ くく、言いたいことがあるなら言ったほうがいい
ぜ？」

「つ……くつ……！」

「え、あつ、高坂さん？」

俺が高坂くんをニヤニヤしながら問い詰めると、まあ俺の言外の意
志が伝わったんだろう。高坂くんはその場から小走りで立ち去つて
いった。

それを葉が不思議そうに見つめる。どうしたんだろうと。まあ葉
からすればそうだよな。

「えつと……どうしたんでしょうか……？」

「さあな。トイレじゃないか？ まあ本当に大事な用事ならまた後で
伝えるだろうし、気にしなくていいだろ」

「……そうですね。それじゃあ——きやつ」

と、俺は葉を後ろから抱きしめる。そして、既にズボンの中で勃起
した肉棒を柔らかい葉の尻にスカート越しにグリグリと擦りつけた。

「悪い葉……葉が可愛すぎて勃起した」

「え、あつ……こんなに硬く……も、もう先輩。こんなところで駄目で
すよ……するならホテルとかじゃないと……」

「我慢出来ない……葉、一回でいいから抜いてくれ……」

「え、えー……で、でもこんなところじゃ……せめてどこか部屋とか
……」

と、困惑しながらも満更でもない様子の葉。そんな葉が可愛くて

しようがない。

だから俺は道の先に見えるコンビニに目をつけた。高坂が走り去っていった方向とは別の道にあるコンビニ。葉の言うように部屋があればいいが、まあ、ないよりはマシだと、

「……そうだな。それじゃあついてきてくれ」

「んっ、はい……」

ギンギンの肉棒の感触に顔を赤らめる葉を連れて、俺はコンビニへと向かった。

「うっ、葉……葉っ……」

白糸台にあるとあるコンビニのトイレで、男は自分の肉棒を扱きたてていた。

男の名は高坂。現在大学二年生。来月から三年生。元白糸台高校男子麻雀部の部長で、生徒会長も務めていた男である。

彼は今、自分の想い人を想像して自慰に耽る、彼女を初めて見た時から度々続けている行為をコンビニのトイレで行っていた。

普段なら自室以外ではしないのに、こんなところで及んだ理由は、先程の光景が原因だ。

宇野沢葉。自分の2つ下の後輩で、今年度からプロ入りする美少女。

学生時代から水着グラビアなんてものを撮られるくらいには、スタイルが良い美少女。特にその大きな胸が魅力的だった。

高坂も、何度も彼女の身体を想像し、妄想の中で犯してきた。実際に告白もしたし、その後も諦めずに地道なアプローチを続けてきた。だが、

「うっ、くそっ……くそっ……」

その葉は、別の男のモノになってしまった。

しかも他でもない、あの東郷のモノに。あの嫌味な男のモノに。

高坂が学生時代より一番苦手な、目の上のたんこぶのような存在。麻雀が強いせいで、言いたいことも言えない相手に。

先程の東郷が、栞の腰を、あのくびれた腰を自分のモノのように触り、栞が声を上げたことに。そして栞が自分には決して見せない気恥ずかしそうな笑顔で東郷の身体に身を寄せ、あのおっぱいを東郷の身体に押し付けて、たわませたことに。

酷く悔しく、しかしその光景と、その先を想像して勃起してしまっ

た。
「栞……栞い……い……」

彼女の名を呼ぶ。現実では名前ですら呼べない相手も、1人の時は何度だって呼んできた。

彼女とキスをして、彼女の胸を揉み、腰や尻、太腿や足に触れ、自分の肉棒を手で扱かれ、フェラをされて、パイズリをされて、彼女の処女を奪う——そんな妄想を、愛し合う光景を頭の中に思い描きながらリアルでは自分の肉棒を自分で虚しく扱く。

「ううっ……くそっ、くそお……い……」

まさかこんなにも惨めな気持ちになるとは思いもしなかった。

手の届くような位置にしながら、手の届かなかった女性。それを他の男に取られてしまった屈辱。

あの東郷に押し付けて形がたわんだ大きな胸でパイズリされることを妄想して、トイレの便器に己の精液を出す。

一瞬の、虚しい快樂。満たされることのない情欲。人生最悪な気持ちを高坂は味わった。

「うっ、おお……栞のおっぱい……い……」

「もう……先輩ってば、こんなに硬くして……エッチすぎますよ?」

コンビニの個室トイレの中。人の目に映らないように入った俺達。

俺はトイレの便器に腰掛けると、栞が俺のズボンの上から肉棒を擦ってきた。

上目遣いの、エッチな表情。栞もちよつと楽しそうなのがエッチすぎる。

服を捲くりあげて、おっぱいをさらけ出す栞に対し、俺は興奮して

ズボンを下ろす。ギンギンになった肉棒が葉の前にさらけ出される
と、葉は上半身を近づけて、そのおっぱいを肉棒に寄せてきた。

「はあ……やっぱ最高……気持ちいい……」

「一回抜くだけですからね？ んしよ……」

「うっ、ああ……」

乳肉が、葉のKカップ乳肉が、肉棒をむにゆりと締め付ける。先程
まで衣服に包まれていたおっぱいは温かくホカホカだった。容易に
俺の勃起した肉棒を包み込んでしまったそのおっぱいの感触に夢中
になる。

「ああ、めっちゃ気持ちいい……なんか直ぐ出そう……」

「なら、直ぐ出させてあげます……先輩は、こういうのが好きなんです
よね……」

むにゆん♡ むにゆん♡ と俺の肉棒を上下に扱いてたぷんたぷ
ん。おっぱいが俺の腰に何度も落とされる。

ギンギンに硬くなった肉棒を葉の柔らかい乳房でたつぷりと扱か
れるのは何度味わっても最高だ。すべすべの乳肌。温かい人肌の体
温がおっぱいで揉みほぐされて肉棒に乳圧と共に浸透してくる。

しかも外で唐突に勃起したばかりの肉棒を、即おっぱいで抜いてく
れる。そんな状況が気持ちよすぎる。

「ほら先輩……先輩のおちんちん、胸の中でぴくんぴくんって動いて
……私の胸の中で出したいって言ってますよ……」

「あ、ああ……出したい……葉のおっぱいの中に俺の精子出したい
……けど、もうちょっと我慢して……」

「出してくれないんですか……？」

「う、あー……やばっ……」

まだこのパイズリを味わっていたいと我慢したいと思うも、葉が胸
をむぎゆうつと締め付けて、乳圧を強くしてくる。その上で上下に、
たぱんっ♡ たぱんっ♡ と強く扱き上げて、俺を気持ちよくする。

声を上げて腰を浮き上がらせてしまう気持ちよさ。だが肉棒を突
き上げて、おっぱいの上下運動は止まらず、俺が腰を突き上げた分
だけ、長いストロークで肉棒がおっぱいの谷間で扱かれ、快感が強く

なる。

「先輩が昨日何度も挟ませるせいで、私も先輩のおちんちんの挟み方、段々と憶えてきましたよ……んっ♡ ほら、こうやってむにゅむにゅ擦ると気持ちいいんですね……？」

「う、ああ、ヤバいな……もう完全に俺専用おっぱいになって……うう……！」

「そうですね。先輩がそういう風にしたんですから……責任取って、最後まで教えてくれなきゃ駄目です♡」

おっぱいの谷間で肉棒を抱きしめるように強く締める。乳肉に完全にホルドされての圧迫は、腰が蕩けるような心地だ。

「先輩、腰動いてますよ……？ ふふ、可愛い……おっぱいでおちんちん捕まえてあげますから、沢山動いて射精してくださいね……♡」

「あー、あー……！ 葉……ヤバい、もう……！」

たぶたぶとおっぱいが常に俺の肉棒を捉えて扱き続ける。ギンギンに上を向いて、へその方に反り返ろうとする肉棒を、おっぱいの谷間に無理矢理留められるのはそれだけで至高の趣がある。

亀頭が、カリ首が、何度も乳肉で甘やかされる。谷間の中を肉棒でかき分ける。100センチのたわわは、俺の肉棒など簡単に包み込んで、容易に射精させられるのだ。

「う、ああ……出る……っ！ ああ……！」

「あつ、先輩、駄目です……！ 服が汚れちゃいますから……ちゃんど胸の中で出して下さい……♡」

「あ、ああ……包まれたまま射精……むにゅむにゅで気持ちいい……うっ」

葉がおっぱいで肉棒を押さえ込み、谷間の中で射精をさせる。谷間から僅かに精液が飛び出してきたが、葉によって精液で汚す場所を胸の中に限定された俺は、乳肉の甘やかされながらの幸せ射精を味わった。

こんな幸せでいいのかと、俺は思う。学生時代好きだった相手にコンビニのトイレで軽い感じでそのKカップおっぱいでパイズリ抜きされるとか、もうヤバすぎて言葉が見つからない。

「ありがとう葉……好きだ」

「はい先輩。私も大好きです……♡」

ちゅっ、とパイズリし終えた葉とキス。それだけでまた勃ち上がりそうになるが、コンビニのトイレだし、時間も限られてるからさすがに自重する。

「というかだ……今はこれでいいが、また家に帰った時が地獄だな、と思う。」

今が最高なだけに、また女日照りの生活に戻るのには中々にキツイ。

もう今の内に、次のことを考える必要があるかもしれないな、と俺は後始末をしながら葉とコンビニを出る。……一応トイレを使わせてもらったので、買物物はしておいた。さすがに悪いし。

「すみません先輩、ちよつと待つててください」

「ん、ああ、分かった」

と、コンビニから出ようかなとしたところで、葉が俺にそんなことを言ってきたので、俺は何も聞かずに外に出て待つことにする。……まあこういう時は決まってるだろう。俺はそんな馬鹿なことは聞かない。これがエチケットって奴だ。

「んー……ほんと、どうすっかなあ……」

俺は携帯を開いて、自分のSNSを見る。まあ元プロという肩書になつてから、若干数が減ったりしたが、まだまだ俺にしては多い方だと思う。

「というか依頼の方はどうかと思ってみるとだ。なんか色々来る。」

……龍門渕や風越女子高校……って、普通に聞いたことある。風越女子は長野の強豪校で、龍門渕は同じく長野で去年のインターハイで風越女子を破って本選で活躍した高校じゃないか？

「確か大将の……子供？　みたいな奴がとんでもない化け物だったはずだ。龍門渕は。その2つから依頼が来る。」

風越女子の方は正式な依頼っぽいというか、なんか大人の方からの丁寧なメールが来ている。ご相談したいみたいな感じで。龍門渕の方は……え？　なんか10倍の5万で依頼来るんだけど、釣りかな

？ いやまあ、プロに依頼するならむしろこのくらい払っても全然おかしくないわけだが……一々多めに払うって羽振りの良いことだな。長野、長野ねえ……行ったことないんだよな、何気に。愛知県からだと割と近いんだけどな。隣の県だろうが用がないと行かないし、プロの試合でも……ん？ いや、一度行ったっけ？ どうだったかな……ただ、行ったとしても試合で行ってすぐ帰ったはずだからそこまですら記憶に残っていない。

二校も依頼があるならちよつと長めに滞在してみるのも悪くないが……ちよつと選手でも見てみるか？ 強豪校なら何故か美少女率が高いのは麻雀界の七不思議だし、そこまで心配してないが、お目当ての子がいればモチベも上がるし。……品定めを遂にし始めたな、俺。クズかな？ クズだったわ。

と、ネットで色々と検索。高校の名前とか選手で。まあ記事くらい幾らでも出てくるものだ。それを見ると、

「お……」

風越女子だと、ちよつと良い感じの、唆る子がいるな。福路美穂子。現二年生の部長で、長野県予選、個人戦では1位の選手か。見た目がすっごい美少女だし、胸も菜とかユキほどじゃないが、結構大きめだ。中々悪くない。まあ、強いってなると中々キツイ相手ではあるけどな……。

龍門渕の方は……うーんと、いや、こつちも可愛い子は多いな……ただ胸は……どう、だ？ なんか1人、着痩せしてるような気がする子も……というか1人子供が紛れ込んでるな。って、これが去年の化け物か。そういえば見覚えある。海底ばっかで和了るやべー奴って聞いた憶えが。この子はさすがにロリすぎるか？ ボブに写真送ったら喜びそうだし、送つところ——って、早っ!? もう返信来た!? なになに……『FOOOOOO!! エキサイティング!! ブラザー！ オレの息子が！ オレの息子がこの子を見た瞬間にBIN！ BIN！ エキサイティングだYO！ こうしちゃいらねえヒエア！ 今直ぐこのころたんの画像と動画を漁りまくるYO！ 情報提供サンキューブラザー！』——って、こいつ、まったくブレねえな

……ちやんとダンサーとして活動出来てんのか……？　せめて犯罪だけは犯さないように祈ろう——と、まあ俺が言ってもあんまり説得力がない。いやいや！　結婚は15歳から出来るし！　重婚だつて出来るし！　だから俺は大丈夫なんだYO！　……いやまあ、問題がないかと言われるとアレだけど……うん、そこは考えないようにしよう。

とりあえず、長野か……でもこれ、4月だよな。結構期間空いてるな……はあ、またどっか探さないとな。

俺はそれらの依頼を受ける旨の返信を返すと、戻ってきた栞とのデートに戻った——ちなみに、こつちにいる間は毎日エッチだ。あー、ほんと最高だわ。

ネット麻雀

春といえば、日本で言えば新年度。新たな生活が始まる季節だろう。

俺にとっては従姉妹の名前でもあるが、それは今はどうでもいい。まあ春つてのは基本的に年度が更新されるため、学年が一つ上がった、小学校から中学、中学から高校、高校から大学や社会人など、まあ日本人の生活に変化が訪れる季節だと思う。

だから出会いと別れの季節だとかよく言われるよな。別にそんな尊い物みたいに言われまくるのもどうかと思うが。悪い出会いや良い別れだつてある訳だし。……とかまあ、何でも良い方向に考えることは出来ない。どちらかと言うと悪い捻くれた考えをしてしまう俺である。

ぶっちゃけどうでもいいんだけどな。俺にとっての春はイベント事だらけで面倒だし、そんなに好きではなかったりする。

それに生活の変化云々も関係ない。なにせ、今の俺は――

「あ……………暇」

――約二ヶ月前にプロをクビになり、無職だからだ。

俺はTシャツと短パンでソファーに寝転がり、ゴロゴロとしていく。

……いや、人としてどうかと思うとか、社会的責任を果たせとか色々思うことはあるが、まあ実際問題、若くしてプロ雀士をクビになった俺がいきなり就職するつてのも酷な話だ。

ただ一応、麻雀の指導対局を請け負ったりしてるし、税金だって払ってるし、自分の貯金で生活してる。別に親の脛を齧ってる訳でもないから許して欲しいところだ。そもそも面倒見てくれる親なんていないしな。

ともあれ、差し迫った危機がないってのは中々人間を墮落させるものだ。そのうちなんとかしないと、と思うが、今はとりあえずオカルトを活かして美少女とエッチなことがしたい……なんてクズなんだ。字にするとんでもないクズになる気がする。

だがしかし、俺だって毎時間毎時間、やりたいやりたいって勃起させながら苦しんでいる訳ではない。

人間なんだから眠るし腹も減る。一日の時間は結構多い。プロの時は時間が少なく感じたが、こうやって無職になってみると時間があり余ってしまう。

「……飽きたな……」

規則正しく朝7時に起きて、朝飯を作って食べた——そうしてちよつと洗濯したり、漫画を読んだり、録画してたバラエティ番組を消化してみたり、積んでたゲームをやるかと思つて埃被つてたコントローラーを引っ張り出して……しかしゲームのアップデートが云々とかで出来ずにしばらく海外のスポーツ中継や……後一応、麻雀中継を見たり……ああ、プロなら今頃、リーグ開幕で忙しい頃だよな、と思う。高校生だって春の大会があるしな。結局今年はこの地方予選にすら呼ばれなかった。去年は一応呼ばれたつてのに。テレビだと、はやりさんや良子、琉音や栞など俺が知ってるプロ雀士の様々な試合が映っている。期待の新人である栞も結構注目を浴びてるし、プロ二年目の良子と琉音。何気に同期である二人は、ルーキーオブザイヤーとシルバースシューターを取った良子が物凄く注目され特集も組まれる一方で、琉音も負けてはいない。若手の中ではそれなりの活躍をしている。というか、良子が同期なのが運が悪かったか。良子がいなければルーキーオブザイヤーもあり得た。言つてもしようがないことだが。

なんというか、つい2、3週間程前は一緒に遊んだり、エッチしたりしてた栞。それに馬鹿みたいに騒いでた琉音がここまで活躍してるのを見ると何とも言えない気持ちになるな。活躍自体は嬉しいんだけど、自分が惨めに感じなくもない。遊びに誘ったら喜んでついてくるあいつらを既に懐かしく感じる。暇だ。

そうしてると一応、アップデートが終わったので1時間ほどゲームをして、久し振りにやってみると当時は最強だった装備が最強でなくなっていたり、当時俺が刀装備で挑んだボスソロタイムアタックのまあまあいいタイムが抜かれて微妙に癪だったが、やってない期間

が長すぎて今からやり直す気にもならなくて、結局ゲームも止めた。そしてちよつと嵌ってた昔のアニメを見直して……微妙な話を見ている最中にそれが飽きて、今はなんとなく家の掃除をしている。朝に調子に乗って食べ過ぎたので昼飯はゼリー飲料飲んで終わり。

「ああ、くそつ、邪魔なもん多いな……捨てるか」

家の押入れを開けて掃除を試みるも、古いものやいらぬものが多いなど感じたので捨てることをその場で即断する。学生時代に使ってたノート、捨てる。古い雑誌、捨てる。お気に入りだったスポーツチームのユニフォーム。ただしちよつと破れてる……捨てる。古いUSBケーブル、捨てる。遊○王カード……懐かしつ、残す。ユスノキ……残す。コロコロバ○ル鉛筆……つて、これもクソ懐かしいな……一応残す。ビー○マン……つて、さつきから懐かしいの多すぎない？ 一応残す。はやりさんに似た女優のAV……うーん……迷うが、捨てる……る。なんか実際にやった後だとパチもん感凄いなというか、あんまり魅力的に感じないしな……まあ残りも適当に仕分けして。

「終わったな……」

と、あっさり掃除も終わってしまう。やっぱ時間があると違うな。面倒な掃除も、やろうと思えば意外と早く終わるものだ。

マジで暇すぎる。東京から帰ってきてからというものの、マジでやることがない。麻雀の依頼も、年度が変わって4月からってのが多いしな。今は春の大会もあるし。というかナチュラルに遠方からの依頼も多いのがヤバイ。君等俺の所在地ちゃんと見たの？ つて。まあ詳しく書いてない俺が悪いにしてもだな、岩手とか奈良とか……うん、北海道に行った俺が言っても説得力ないけど。

ともあれヤって性欲を解消することも出来ないし、何か暇を潰さなければならぬのだが、

「……まー、やるか」

しゃーない、とこういう時にやってしまうのはやっぱり——麻雀だ。

俺は寝室のパソコンの前に座ってパソコンを起動。しばらく待つ

てからブラウザを起動してネット麻をすることにする。

俺はプロ……元プロだが、一応ネット用のアカウントも持っている。学生時代から同様のを使っていた。アカウント名は「ヤクマル」。なんだかヤ○中みたいだが、別にそういうんじゃない。名前の理由は割愛だ。

とりあえずログインして適当な部屋に入ってまずは挨拶——対局よろしくおねがいます。まあネットだろうがなんだろうが、礼儀つてのは大事だ。まあ勝負の挨拶つてのは俺はどうにも苦手なんだが、さすがに俺もいい大人だ。プロ時代に何度も挨拶くらいしてるし、挨拶の大事さは身につけている。特に気持ち悪さは感じない。

同じ様に挨拶が帰ってきたりして、そのまま適当に打つのだが……うん、まあ、クソみたいに弱い。数分後、俺は他家を飛ばして1位になつていた。

対局ありがとうございますと言つて部屋を出る。……当たり前だが、適当な部屋に入るのはよくなかったか、と俺は自分のレートを見て思う。

実は俺はネットだと最高段位持ちの有名雀士だったりする——のだが、こんなのは自慢出来るものじゃない。このサイトにいる99%の奴はアマチュア雀士。ひよつとしたら俺のように元プロ、プロが紛れ込んでる可能性もあるが、そんなのは上位1%にしか可能性がない。

だからまあ、俺がどんなにプロをクビになったゴミプロだと言つても、おおよそ殆どの雀士と比べたら勝率は段違い。鬼のように強い。というか、オカルトが介在しないであろうネット麻雀だと、正直プロ独特の緊張感とか、場の支配とかがないため、めちやくちややりやすい。

それに牌効率とか、そういうので打つていけばいいネット麻雀は割と得意な方だ。実際の対局だと雰囲気とか流れとかオカルトがあるから、牌効率だけ考えればいいってものじゃないんだが、これはそうではない。これは大きな違いだ。

余談だが、素人が麻雀を始めるなら、まずネット麻雀をお勧めする。

ネット麻雀だと実際の麻雀の流れの殆どを自動でやってくれるし、点数計算やらもしなくていいし、副露だつて出来る時は通知してくれるし、立直も同様だ。だから単純に牌を揃えて相手を見ることだけに集中出来る。そうやって麻雀の楽しさを先に味わってから、細かいところに手を伸ばしていくのが良いかもしれない。リアルで先に憶えた方が後々の為になるし、麻雀本来の魅力を味わえるって言うプロも多いんだけどな。ただ最初の敷居は低い方が良いに決まってる。門戸は広くした方が良い——と俺は思っている。

まあ実際のプロの興行、子供に教える麻雀教室みたいなのをやる時はそうも言えないので、丁寧に教えてやるしかないんだけどな。こういうのはやはりさんが一番得意だ。何と言っても牌のお姉さんだし。初心者から上級者まで、幅広い雀士に教えることが出来る。何気にはやりさんもネット麻強いんだよな。確か。対局したことないけど、前にそんな話を聞いたことがある。

ともあれ、俺はネットだとそこそこ出来る——いやほんと、これでプロの試合やってくれないかな。それなら多少は可能性が……あればいいなあ。

まあとにかく、対局を適当に進めていく。今日は日曜日だし、人も多い。それなりの段位の奴も多いが……適当に蹴散らしていく。

とはいえ負けることだつてあるのが麻雀だ。しかし、こういう時の負け方だつて重要。負ける時、どんなに酷くても三位。出来れば二位を取っていけば、自ずとレートも上がっていく。

駄目な時は駄目と切り替えて二位狙い、三位狙いとかしてしまつた方が結果的に上手くいく。まあトッププロとかだとね、勝率5割超えなんて当たり前だし、勝率8割、9割とか、はたまた国内無敗とかいう訳わからんのもいるし、常識が基本的に通用しない麻雀界だが、ネットは比較的平和だ。

本来、これが普通の麻雀つて気もするが、現実がああな以上、あれが麻雀なのだ。ネットの方が異端。世の殆どの奴らはオカルトなんて信じてないみたいだが、ちよつと疑問に思つた方がいい。国内無敗とか、毎局7連続、8連続和了とかするような奴らがいるんだぞ？

偶然な訳あるか。あんなのは全部能力だ能力。運が良いで済んだらオカルトなんていらぬ。この世は思ったより常識が通用しないんだ。ほんと、マジ魔境だわ。

……考えてると段々イラツとしてきたな。いや、まあある意味ストレス解消になるからいいんだけどな。

ネット麻雀は俺も無双出来る戦場。趣味は悪いが、雑魚を蹴散らして俺ツエーするのは気分が良いことには違いない。

「つと、次のカモが……」

一応雑魚狩りみたいなみつももない真似をするつもりはないので、部屋を立てて高段位以外を弾く設定で待っていると、部屋に新しい人が入ってきた。俺と同じ最高段位だ。名前は……「のどっち」？あれ、どこかで聞いたことあるような……。

「あー……思い出した。連戦連勝で噂の『のどっち』か」

ネット麻雀だと都市伝説みたいな感じで噂されてるプレイヤー、のどっち。なんでも滅茶苦茶強く、運営が用意したプログラムって噂もあるほどの雀士らしいが……まさかここで当たるとはな。

ここに二年程で格段に有名になったこともあって、俺は対戦経験がない。プロ生活中は殆ど、やっても一ヶ月に一回とか、それくらいの頻度でしかやってなかったしな。

だけどもまあ、最高段位とはいえ実力はたかが知れてる。先程から同じ様な相手と対局してきたが、特に他の奴らと変わらない。アマチュアに毛が生えたくらいのアマチュアだ。俺はそれで例えるなら、そこから数本は毛が生えたくらいの実力なので、負け越すことはないだろう。プロの世界に比べればこんな戦場は甘つちよろい。

なんだか可愛らしい天使のアバターから、『対局よろしくおねがいします』——と挨拶。こちらも同様に挨拶。何気に中途半端に強い連中だとマナーが悪い奴も多く、暴言なんか飛び出てくることもあるのだが、のどっちはそういうタイプではないか。

とはいえ、負けた時になんて言うかが見ものだな——と、俺は対局を始めたが、

「——う、嘘だろ……マジか……？」

俺は……負けていた。しかも連戦連敗。

二位に位置することは多いが、トップは常に「のどっち」。俺が一位になれた局はない。

とんでもない化け物だった。なるほど、これなら運営が用意したプログラムと噂されるのも頷ける。というか、そうであってほしい。もしそうでないとしたら……、

「ああああっ、クソっ！ もう一回だ！ もう一回！」

まるで現実のプロと対局するかのような理不尽さ。それをアマチュアから感じて、しかし俺はイラツとしてそれを認めきれず、何度も対局を挑む。

他の対局者がのどっちの強さに折れて部屋を退出し、別の者が入って再び対局——そして負ける。それを何度か繰り返す。

だが俺は現実とは違い、勝算があつた。それはネットだからこそだ。

「連戦連勝なんてありえねえ……どこかで絶対綻びが、隙があるんだよッ！ どんだけ早いっつても毎局毎局和了れる訳じゃねえだろうが!!」

そう、オカルトがないのであれば、全ては偶然だ。

ならば勝機はある。今は偶然、俺が負けているだけ。俺が負ける番が、偶然多めに来ているだけ。

一回も勝てないなんてあり得ないのだ。あるとしたら、それはもうオカルトだ。電子の世界にもオカルトが存在することの証明となる。それがそうであれば諦めもつくが、この段階ではまだ違う。オカルトでない可能性だってある。俺はオカルトがあると知っている身だが、だからといってこっちはまた別問題だ。ネットでオカルトが作用するなんて聞いたことがない。

むしろ場の支配なんかで滅茶苦茶なことをするオカルトも、ネットだとそれが出来ないという話も聞いたことがあるのだ。

だから電子でこれだけ強いということは……それこそ、現実でも化け物の可能性がある。

その可能性を考えて少し身震いするが……まだだ。まだそうと決

まった訳ではない。

諦めるのもう少しやってからだ。俺は対局者がいなくなつて、また集まるのを待ち、対局に備える。

願わくば、のどつちが飽きてこの部屋から退出しないことを祈るのみだが……まだやるつもりではあるらしい。俺と二人だけになつてもどつちは部屋を退出する気配を見せない。

だがそれでいい。タダでは帰らせねえ。ここは俺の最後の戦場だ。

プロの世界を追われた俺が、心の安寧を保てる最後の地。謂わば心の支柱。精神を守る大事な砦の一つだ。

ここでも完膚なきまでに負けでもしたら精神が崩壊——はさすがにしないが、まあ、ちよつと泣くかもしれない。みつともなく喚くかもしれない。漫画じゃないんだし、心が壊れるは言い過ぎたかもしれないが、少なくとも気分が悪いことは確かだ。

「よし……もう一回だ……!」

俺は次の対局へと進む。これで10局目。絶対、絶対一回は一矢報いてやる。一回だけというのが俺らしくて何とも情けないが、逆に言えば一回で十分だ。一回でも勝てたなら、それで心は保てる。一回勝てたなら、無敵ではない。次も勝てるのだから。

だから俺はじつと耐えて、その機を窺う。もうどれだけ負けようと関係ない。負ける度に俺のレートは下がって、のどつちに吸われ続けているが、構わない。幾らでも貰つてけ。こんなのはそらのゴミ共から集めた塵屑みたいなもんだ。別にいらん……って、吸われすぎて段位下がりそうじゃん。やっぱ止めて? のどつち、俺のレートちゅーちゅーするのやめて? ねえ聞いているのどつち? レートちゅーちゅーやめてくんない? ぬわあああんもおおお!! 段位下がるの嫌ああああ!!

レートくらいならともかく、段位下がるのは嫌っていう感覚分らない? 俺はそうなる。いやちよつと、ほんとに勘弁してくれませんかね……?

とか思つても対局は進む。切断したらどつちみちレート下がるし、どんなに嫌でも対局を進めるしかないのだ。

だが、そんなこんなで頭を悩ませていると――

「お……これ、四暗刻行けるのでは？」

役満、四暗刻。役満の中で最も出やすい、暗刻を四つ揃えるだけで成立する役だ。

他の特定の牌を使わなければいけない役満と違って、34種ある牌のどれを使っても成立させることの出来る自由な役満。

簡単に言えば、同じ絵柄を三つずつ集めればいい。3つで一つの1セット。4つ集めて残りは2つの同じ絵柄、対子があれば四暗刻だ。

まだ出やすい上に役満だとバレにくい役満でもある。プロや学生の試合でも、出ないことはない役満だ。

だからそこまでの驚きではないにしろ、のどっち相手の役満ともなれば、勝ちの目が出てくるため、悪くはない。シャンポン待ち――対子が二つではなく、単騎待ちではあるが、四暗刻はシャンポン待ちだとツモ和了りのみで、確定単騎待ちであればツモでもロンでも構わない。

つまり、のどっちにぶち当てて最下位に落とし、俺がトップになることも可能だということだ。

「よし……振り込め……振り込め……」

単騎であれば、待ちはこつちである程度操作可能だ。フリテンにだけ注意して、河を見ながら適当に……そうだな、この辺りで……。

俺はそうして後はただツモ切り。和了り牌が来るのを待つ。理想はのどっちに直撃だが、別にそうでなくともトップは確定だしな。ただ点差的にまくられる可能性を考えると、一応ロン和了りで誰かを飛ばしてしまった方が勝つには確実だ。

まあ役満なんて事故みたいなものだが、勝ちも勝ち。それこそ、野良犬に噛まれたとでも思っただけで諦めて貰おう。

というわけで、待つ。ひたすら待つ。こうなったら麻雀は祈ることしか出来ない。ただ祈って待つのみだ。

そうしていると、遂にそののどっちから――

「っ！ 来たああっ!!」

ロン、とクリック。音声の流れで、役満、四暗刻という表示。親は

俺。親の役満なので48000点だ。

のどっちの点数がマイナスになり、のどっちが飛ぶ。結果は俺がトップで、最下位がのどっち。対局は終了。

「やったぜ……いー イエス！ イエス！ イエス！」

ネット麻雀なのに久し振りに滅茶苦茶熱くなってしまう。現実でガッツポーズ。誰かとリアルでの対局ではない。現実で1人であるため、何をしても何を言っても問題ないのだ。俺は面白外人のように何度も勝利を喜ぶ。これはボブがやってたのがちよつと伝染っただけだ。ゲームとかだとこんな感じで喜ぶ。

だが見れば画面上では、のどっち以外の他二名が『役満とかつまね。抜けるわ』『チート乙』とか言っただけで抜けていった。は？ 君等何言っただけ？ 弱すぎなんだけどマジで！ 役満出たくらいで暴言とかチート扱いとかこのゲームやめたら？ お前らの頭はハッピーセツトかよ。

——なんて酷い煽りを頭の中で思い浮かべたが、実際には書き込むことはない。書き込む必要なんてないのだ。煽ったところで面倒にしかならないし、そもそもマナー的にどうなのよって。ネットだからってそんな暴言とかさあ、いい大人ならしなないと思います！

とりあえず、対局ありがとうございましてと打ったところで、どうするかと迷う。もうちよつと対局していつてもいいけどな。一応、今のでちよつとレートは取り返したし、まだ少し余裕はある。

だからまだリベンジするかどうかを、のどっちのアバターを見ながら考えていたのだが——って、ん？ なんかチャットが……。

『対局ありがとうございまして。役満、凄いですね』

おお？ さっきまでは普通に対局時の挨拶と終了時の挨拶。二種類しか書き込むことがなかったので、本気でプログラム説を考えてたところだったんだが、どうにもそうじゃないっぽい。普通に話しかけてきた。

何いきなり話しかけてきてる訳？ と返してもいいが、さすがに失礼だ。俺は無難に書き込む。

『それほどもないです』

『私、役満なんて久し振りに直取りされました』

私、か。結構丁寧な人なんだな。ネットの一人称ってリアルと違って丁寧寄りではあるから特におかしなことじゃない。

『まぐれですよ』

『それはそうですが、それでも凄いなと思います。役満の確率は僅か0.049%。約2000局に1回しか出ません』

いや、それはそうですが、まぐれであることは何気に否定しないのはなんなんだ？ 褒められてるのかそうじゃないのか……あ、いや、これ単純に役満が出たことを凄いつて話題に出してるだけか。

ということはお喋りでもしたいのかな？ まあ、ネットだとそういうのも醍醐味の一つだ。マナーを守ってやる分にはこういつた馴れ合いだって立派なコミュニケーションの一つ。普通に楽しめる。別にネットだからと馬鹿にすることも否定することもない。

『そうですね。役満は珍しいです。ただ最近はこちらと、役満で和了る確率も前よりは高くて、自分でもびっくりなんですけど……』

『それは凄い偶然ですね。偶然とはいえ……あ、いえ、すみません。別に偶然偶然と、ヤクマルさんの実力を否定している訳ではないんですが……』

『大丈夫ですよ、気にしなくても。偶然であることは自分が一番よく理解していますから』

『そういう風に聞こえたのなら申し訳ありません……』

ん、なんだ。今更気づいたのか？ いやまあ別にいいけど、どうにも……なんだろうな。多分、デジタル派でオカルトのことを微塵も信じてない感じがする。

役満なんて、オカルトを使用すればバンバン上がってくるやべー奴もいるくらいなんだが……まあ、それを言ってもしょうがない。実際俺のは偶然だしな。腕とか関係ない。

ただこの“のどっち”は今の一連の発言を少し申し訳なく思ったみたいだ。いやほんと、別にいいんだけどな。なんかこうなると変な感じだから俺の方から話題を変えてやろう。

『そんなことより、のどっちさんって凄く強いんですね』

『いえ、それほどでも……』

『最後に役満で一位を取ったとはいえ、完敗でした。自分も、もうちょっと精進しないと駄目ですね』

『ヤクマルさんは強いと思います。打ち方も凄く合理的でしたし、今まで相手にしてきた人達の中でもかなり手強かったですよ』

うん。それはいいんだが、なんか全部上から目線だなんて。こつちが下だから当然なんですけどね！

だがまあ、謙虚に行くしかない。俺はこういう人前では良い人振りがなくなるのだ。馬鹿にしたり、嫌味な事は心で思うだけで十分だ。直接、つい口にてちやう奴らよりは大分良心的だと思う。

『のどつちさんにそう言われると嬉しいですね。ありがとうございます』

』

あれ？ 返事が来ないな。チャット欄は俺のチャットを打った時点で中々返信が来ない。

まあネットだし、相手にも色々あるんだろうけどな。親や友人が来たとか、電話が来たとか、トイレに行きたくなったりとか色々。別にこれくらいでどう思うでもないが。なんなら切断されたところで、回線が切れたのかな、くらいにしかならない。

とか思ってたんとなく携帯でも開いて時間を潰していると、しばらくしてチャット欄が動いた。なににな——

『ヤクマルさん。私と、フレンドになってくれませんか？』

「んー……？」

現実で首を傾げて唸る。フレンドねえ……別にいいんだが、なったところでどうだと言うのがある。

まあのだつちといつでも麻雀が打てるのがメリットと言えばメリットか。普通に交流出来るつてもあるが、俺はそもそも、そんなに交流して楽しむ方じゃない。オンラインゲームとかならともかく、麻雀だしな。別にギルド作ったり、フレンドだからってパーティを組めたり、結婚出来たり、何か恩恵がある訳ではないのだ。別に何か恩恵がないと駄目って訳でもないんだけれども。

……ま、いいか。どっちみち暇だし、別にフレンドになつたところで交流する義務が発生する訳ではない。なので俺は軽い気持ちでキーボードを叩いた。

『いいですよ。それじゃあフレンド依頼、送りますね』

『はい！ よろしくお願いしますね、ヤクマルさん！』

『こちらこそ、よろしくお願いしますのどっちさん。暇があればまた対局しましょう』

『私は主に、平日の夕方から夜0時まで。土日祝日は今日みたいにお昼からインしてる時もあります』

なんか結構前のめりというか、グイグイ来るな……そんなに俺というカモをボコボコにしたいのかな？

ただのどっちくらいの強さだと、全員カモみたいなもんだし、ぶつちやけ誰だろうと変わらんだろうな。だからそういう訳ではないんだろう。

というかこれ……俺もいつログインしてるかとか言わないといけないんだろうか。えー、俺今無職だし……いつインするかとか気まぐれでしかないんだよね……逆に言えばいつでもいいんだけど、とはいえ俺にも最低限の見栄ってもんがあるしな。ええと、

『自分は仕事によつては一日中家にいない時もあるんですが、休日などは暇なのでお昼とか、あと夜も平気ですよ』

『わかりました。憶えておきます』

いや、別に憶える必要はないんだけどな。毎回その時間に来るって訳じゃないし。

というかのどっち……平日の夕方からで土日祝日は休みって、結構まともなところで働いてんねえ！ それとも学生かあ？ どっちにして俺からすれば眩しい奴だなあおい！

『今日はこれからどうするんですか？』

いや、何いきなり聞いてきてる訳？ まだ対局するかってこと？

リアルなこと聞いてきてるみたいで怖えよ。まさかとは思うが、ホモ野郎じゃないだろうな。

同性愛者も多いからなあ……特に、IPS細胞やら妊娠やらの技術

が向上して同性でも子供が作れるようになったりしてから多くなつたと聞く。

その関連技術のおかげで中出ししても避妊は容易になった訳だが……って、こんなこと考えてる場合じゃない。まあのだつちは微妙に変な奴な可能性があるとして、とりあえず返信を返そう。

『そうですね……もう少し、打ってはいかがかと』

『なら私も打ちます』

なんか反応早くない？ 圧が凄い。『なら』ってどういう意味だよ。深い意味はないんだろうな？ 意味深、とかだったら俺は即フレンド解除するが。

『そういえば、先程あれだけ負け続けていたのに、どうして私の部屋から出なかつたんですか？』

——いや、ここ、ワイの部屋や。思わずツツコミそうになる。いい加減にしろよハゲ！ 自然に乗っ取ろうとしてんじゃねえよ！

まあこの作った部屋を放置して、残った人に権限を渡して、俺がまた別のところに部屋を作ることも当然出来るので、それ自体はまだしも……もうちょっと気を使え。あれだけ同じ相手ボコしてレートちゅーちゅーする奴なんてそうはいないぞ。俺でも、数回やって一位取りまくってたら別の部屋に行く。部屋主じゃければな。マナーっていうか、暗黙の了解って奴だ。守らない奴も腐るほどいるし、俺も普段は気にならないが、自分の部屋のように言われるとそれはそれで気になる。

だが意味は理解る。多分、どうして自分との対局を止めなかったのかを聞きたいのだろう。確かに、のだつちとの対局で他の奴らは全員心が折れて退室していったしな。

ひよつとしたらのだつちはそういうことばかり起こしてきたため、全ての部屋を自分の物だと思ってるのかもしれない……いや、ねーよ。どんな暴君だそれは。滅茶苦茶すぎる。多分言い間違いとか、ちよつとしたうっかりだろう。気にしないことにする。

だがまあ、一応返信するか……んーと、ちよつとオブラートに包んでやろう。

『のどつちさんの鬪牌がとても魅力的で、なんというか、麻雀が好きだつて気持ちが伝わってくるような、凄くいきいきした打ち方をしてると思つたので、もつと対局したいなつて思つたんですよ。勿論、勝ちたいつて気持ちもありましたけどね。自分ものどつちさんと同じで、麻雀が好きですから』

こんなところか。意識すると……”てめえ、俺のことボコボコにしがつて、調子に乗つてんじゃねーよ。そんなに弱者を甚振るのが好きか？　なんかすげームカつくからどうかボコつてやれないかと思つたけどな。俺もお前と同じで、自分のこと強いと思つてる奴をボッコボコにするのが好きだからよお。……でもやつぱ無理でしたすみません”つてことだ。最後の謝罪が訳されてないのは、俺のプライド的に負けを認めるのがなんとなく癪だったという気持ちが隠れてる。意識だと、それが現れる。はい、ここテストにでまーす。

ここまで褒め殺したと、さすがに皮肉だと気づかれるかどうか。素直に受け取つたなら受け取つたで笑つてやろう。

「……つて、また返信来ねえ」

それに人も来ない。さすがにボコりすぎたか？　部屋を作り直さないと人が来ない気がする。ここは悪名高き部屋だと殆どの高段位の奴らにバレてるだろうし。

でも放置するのもなあ……つて、やつと来た。遅いんだよ。えーと、

『そうなんですわね』

質素な感想過ぎてなんも言えねー。さつきまで前のめりだった癖になんだ？　もしかしていつちよ前に照れてやがんのか？　だとしてら随分と可愛らしい性格してんじゃねえか。どうせおっさんの癖によ。

可愛いアバター使つてる奴が可愛い美少女の筈がない。いや、可能性としてはあり得るんだが、ネットだとネカマの可能性の方が高すぎる。いや、ネカマっていうか、単純に女キャラクター好きで使つてる率とかもな。別に女を装つてる訳じゃなくても、そういう奴つて多い。のどつちも、おそらくそうだろうと、

『すいませんヤクマルさん。急用が出来たので失礼します』

『あ、はい。分かりました』

『また必ず打ちましよう』

つて、今度はいきなり急用って……まあ急用ならしようがない。そこに文句を言ってもしようがないのだ。相手の事情が分かる訳でもないしな。もしかしたら本当に緊急事態である可能性もあるし、大した用事でもない、極端な話、抜けるための建前や嘘だったところで、こちらが何か言えることはない。浅い付き合いだからこそそのコミュニケーションだ。

だから特に含むところもなく、俺もログアウトしようかなーと思っ
ていたのだが、

『私も、ヤクマルさんともっと打ちたいです』

「……ん？」

え、何？ その何とも言えない一文。ちよつと怖いんだけど。いや、文章だから多少素っ気ないというか、ちよつとマジに見えるのは仕方ないのだが、それにしてもなんかやべー奴みたいな淡々とした文だから怖く見える。

おそらく深い意味はないのだと思われるが、なんかなー……いやいいんだけどぎ。別にネットで厄介な奴に遭遇したところで、いざとなつたらブロックなりなんなりすればいいしね。リアルで会うことなんてないんだからどうだっていいし、どうとでも出来る。

『それではまた』

『はい、また』

……大丈夫だよな？ 一応返事も返したけど、リアル特定されて凸とかしてこないよね？ ないとは思うし、警戒し過ぎだとは思うが、ネットでそんな真っ直ぐな言葉を伝えられると疑心暗鬼になってしまう。

いや、もしかして俺みたいに裏の意味を隠してんのかな？ もつとボコボコにしてレート吸いたい、みたいな。よくも私の無敗伝説を役満で阻止してくれやがったな、フレンドにして何度でもボコつてやるから覚悟しろ、みたいな。やだ怖い……確かに、そっちの方がありえ

るかも。負け越すのは确实だし。懸念は解消されたが、ちよつと別の意味で不安だ……もうちよつと練習しとこ……。

俺はしばらく、ネット麻で練習がてら、下がったレートを元に戻していく作業に没頭した。

——とある県のとある一軒家。その一室。

「……ヤクマルさん……」

はあ……と、熱い息を漏らしたその人物は、胸に抱いていたぬいぐるみに力を込め、自室のベッドへと寝転んだ。

4月6日

年度明けの4月6日。この日がなんの日か知っているか？

学校の入学式や始業式？ いやまあ確かに。ぶつちやけそのイベントが多くの人頭にあるだろう。6日つてのが絶妙だ。確実に土日は明けて平日だからな。1日とか2日みたいに明けてすぐって訳でもないし。割とちようどいい。だが違う。

城の曰？ いやそれも違う。だけどあれよね。〃しろ〃の語呂合わせって多いというか、4と6でキャラクターかなんかの日とかにされやすいよね。かくいう俺の好きなキャラも4と6で名前が作れる。もしくは8と6。斬れないものなどあんまり無さそう。

卓球の曰？ え、なにそれ知らん。なんで4月6日が卓球の日なの？ 卓球とかあんまり興味ないからわかんない。前陣速攻型とドライブ型とカット型があるくらいしか知らない。意外と知ってた。

4月6日の誕生日がブルーダイヤモンド？ それは知ってる。というか、そこまで出てきたならもうそれが答えだ。そう今日は――

「俺の誕生日……」

とある場所へと向かう道中、俺は今日が自分の誕生日であることを自覚した。

というかだ。今日の朝になるまで気づかなかった。いや、そういうのあるよね。一週間前くらいは意識してたけど何か用事あると忘れてて直前で思い出したりする感じ。

そういう訳で俺は今日から21歳になった訳だが……だからどうしたって感じだな。

別に誕生日だからって何かがある訳ではない。お祝い事もないしな。毎年何事もなく終わるといいうか、タイミングが悪いので友人からも祝ってもらえないことが多い悲しい日でもある。

なにせ入学式や始業式があったりするからな。進学の際は初めて会う相手に祝われることはないし、始業式があるとまた微妙だ。ギリギリ春休みだったりすると目も当てられない。

だから俺の20年の人生の中で、誕生日をちゃんと祝ってくれたの

は従姉妹の良子や春、後はボブくらいだ。良子と春の家族も一応。

というのもボブはともかく、良子と春は誕生日が近いんだよな……良子は4月10日で、春は4月18日。だからタイミングさえ合えば一緒にお祝いしてくれたりする。

良子は子供の時は春の大会とかで会ったり、春休みに会った時にお互いに祝い合う。春はなんだかんだで割と毎年祝ってくれたか。それが救いと言えば救いだ。普通の人よりは寂しいかもしれないが、特に不満はない。他人から見たら微妙に可哀想でも当人からすればそれが当たり前だからな。同情されるほうが鬱陶しかったりする。

とはいえ今年は……いつもよりは賑やかだ。俺は周囲の街並みを見ながら歩く。

「学生多いな……」

ボソリと呟く。うん、まあ时期的に、場所的にもそうだろうなと思う。

俺が今いるのは埼玉県。埼玉県だ。さいたま市だ。

……ぶつちやけ特に知らない。ハートビーツ大宮の本拠地ってくらい。あと有名な子供向けアニメ、漫画の舞台ってこと。

試合や興行では何回か来てるが、正直あまり……いや、埼玉県民に怒られそうだからやめよう。そういうのは良くない。

ただ正直、あまりよく知らないんだよな。普通に栄えてる感じ。名産品とか何があるんだろうか……後で調べておこう。

とりあえず、目的の場所まではもうちよつとだ。やっぱ結構都心なんだな、と思いつつ向かっていく。

すると不意に携帯が鳴った。俺はそれを直ぐに取る。相手は大体分かっているからな。すると案の定、

『……もしもし』

「もしもし。やっぱ春か」

見知った声。少し淡々とした落ち着いた声がスピーカー越しに聞こえる。

彼女は滝見春。俺の地元、鹿児島に住んでる従姉妹で、今年高校一年生になる少女だ。

結構昔から知っている相手だけに、特に建前などもなく、素直に応対する。

『お誕生日、おめでとう……』

「おお、ありがとな。態々電話で。そっちも今は高校入学で忙しいだろう?」

『別に……今日は入学式だけで暇だった。この後は姫様達と部室に行くだけだし……』

「あー、あの有名な……」

『いつものこと』

俺は春の言葉で1人の少女を思い浮かべる。姫様、と春が呼ぶ相手は1人しかない。

俺は面識はほぼない……いや、一、二回くらいは会ったことがあったか? ガキの頃に。そんなレベルなので知り合いという程でもないのだが、一応全国的にも有名な相手なので知ってはいる。

俺と春、そして良子は親戚だが、春の家とその親戚の……まあ、神職関係の連中との付き合いはほぼないのだ。

一応、霧島神境のやべー本殿とかに行つたこともあるが……なんとというか、常識が破壊されるスーパーオカルトな場所だつてことくらいは知ってる。

あんまり人に話すような——話せるような内容じゃないが、鹿児島神職連中はやべーオカルトなのだ。良子もそうだが、俺の中の常識を子供の頃に破壊した一因である。

とはいえ春はおとなしい……せいぜいお祓い出来るつてくらい。それもガチの。これくらいでは特に驚くこともないと思つてしまう。

春が入学したのも、神学系の永水女子高校。去年のインターハイで全国的にも有名になった高校で、全国ランキング3位のとんでもない学校でもある。

春も割と強いんだよな、と思いつつ、俺はそのお祝い電話を受け止めて、こちらからも用件を伝える。

「まあ、それはいいとして……お前も、もう少しで誕生日だし、高校入学もあつたら? 適当にプレゼント送つていたからな」

『……ありがとう……じん兄……ポリポリ』

「ああ、中身は——って、電話口で黒糖食うなっ。行儀悪いぞ」

『冗談……ほんとは食べてない』

「本当か……？ お前、いつも食べてるからな……信用出来ないが……」

『……黒糖は美味しいから……しょうがない』

「しょうがないけどな」

そう、春は黒糖が好物で、いつも持ち歩いては食べている。昔からそうだった。

どうやら今も変わってないようだが、そんなに黒糖食べて大丈夫か？ と思う。糖尿待ったなしな気もするが。

だが今気にしてもしょうがないので、呆れながらも諦めるしかない。まあ、今度会った時に注意してやるかと、

『そういうえば、見た』

「……？ 見たって何を」

『5000円で麻雀教えるやつ……』

「あー、あれか。いやまあちよつとした小遣い稼ぎというか、将来の為の投資というかそういうやつだ。評判が良ければどっかでコーチとして働くことも——」

『……なら、うち来る？』

「ああ？ ……うちって……」

『永水女子』

「そっくだよな……えー、いやまあ……」

春からそんなことを言われて、少し唖ってしまう。前々から考えることだが、ホントに迷いどころなのだ。

そりやちよつとこのオカルトを使って、あのテレビで見た有名な姫様とかと……とは思わないでもないが、あそこはオカルトの総本山みたいな場所だし、どいつもこいつもオカルト慣れしてる上に、麻雀だって強い。相当難易度が高いから行くのはちよつと覚悟がいる。

それにだ。何より、実家に帰りたくない。それに尽きる。実家さえ鹿児島に無ければ、俺も肉棒をギンギンにしてこの性欲を発散してや

ろうとウツキウキで向かうのだが……それがネツクなのだ。

オカルト満載でオカルト探知にも長けた良子に俺のオカルトも効いたし、オカルトの効力とか露見に心配はないが……それでも、あの神降ろしの魔物に効くのかと言われるとちよつと不安でもある。

逆に言えば、あれに効くならもう誰に対しても効くだろう。それを試す意味でも、どこかで永水女子とは接触したいんだけどな……あと、春がお世話になってるし、ちよつと普通に挨拶もしとくのも悪くない。

特に今は相当ムラムラしてるし、行けるものなら行きたい。はあ、おっぱい……おっぱい揉みたい。おっぱい欲を満たしたい。

『……考えといて』

「ん、ああ……そうだな。考えとくよ」

春の言葉にはそう返すしかない。そういえば春も、数年前に見た時は結構胸も膨らんできてたよな……今は結構成長してたりするんだろうか。親戚の良子があれだし、期待は出来る。若干の抵抗もある……あるが、良子とヤツた時点でそんなものは霧散したというか、性欲に勝るものではなくなくなってしまった。まあ従姉妹だし、兄妹とかならさすがに無理だけど、従姉妹なら全然イケる。世間的にも問題ない。

「とりあえず、またお前の誕生日にでも電話する。……あ、良子にもちゃんと——」

『先に電話した……おめでどうって』

「って、俺の方が誕生日先なのにつ!？」

4月6日の俺と10日の良子。今日は6日だし、一緒にお祝いするとはいえ、10日の良子よりも先におめでどうと言われて然るべきだと思うのだが、やはり性別の壁は大きかったか。

「はあ……それじゃあな」

『ん……また、ね』

春との電話を切り、二回目の溜息。相変わらずマイペースな奴だ。

ともあれ、態々誕生日に電話してくれたんだし、嬉しくは思う。祝ってくれる奴が少ないから、それだけにな。

とか思っていたら、携帯に別の連絡が。こっちはメールか？ えつと、

『誕生日おめでとう先生！ ユキも入学したし、有珠山高校麻雀部伝説の始まりの日でもあるな！ ほら写真！』

「つて、獅子原か……有珠山高校麻雀部員よりつて……」

獅子原爽。北海道、有珠山高校麻雀部の部長である彼女からのお祝いと報告メールが来ていた。

態々律儀な奴らだな、と思う。3日だけのコーチにここまで絡んでくるとか普通ないだろうと。

だが純粹に嬉しく思ってしまう。見れば5人全員で有珠山高校の制服を着た写真が添付されていた。入学したばかりのユキも当然入ってる。

『夏には東京行くから、その時は皆で写真撮ろう！』

「はは……もう行く気でいやがる……自信満々だな」

そして何気ないが、俺も皆の中にさりげなく入ってるのが面映い。いや、お前から5人で全員だろ。そこに俺が入るつてのはな——というツツコミが浮かぶが、どうも言う気にはなれないな。

俺は短く——期待してるぞ、と送ると携帯を閉じようとし……しかしチャットも届いていることに気づいた。というかこっちは、

『先生、お誕生日おめでとうございます。それと私、入学しました』
……ユキか。一応あの面々とは個人でも連絡先は交換してるからな。全員を代表して獅子原が送ってきただけかと思っただが、ユキの方もちゃんと送ってきてくれている。

送られてきた写真には、有珠山高校制服姿のユキの写真が。……やっぱでっかいな……こんなちっちゃいのにこんなでかいの犯罪すぎる。

このロリ爆乳美少女とエッチしたんだよな……と、つい感慨に耽つてしまうが、自重しないと出し勃起してしまう。ただでさえ、もう一ヶ月近く抜いてなくてヤバいのだ。ちよつとでも想像すると股間がイライラする。

だというのにだ。ユキの続くチャットと写真は、

『先生がいなくて寂しいですが、先生と会うために頑張ります。夏にはお会い出来ると思うので、その時は先生と沢山エッチしたいです』
そんないやらしさ、いじらしさが詰まった文面に股間がムズムズする。だからやめろって。想像するとヤバいから。

『それと、先生の為に自撮りというものをしてみましたので、どうぞ受け取ってください』

「っ……………これは……………」

思わず携帯の画面を周囲から隠す。一応人の往来が多い街中なのだ。この写真は見られたらマズい。

ユキから送られてきた写真は……………制服姿のユキ。上から撮ってみた写真で……………わざと、制服の胸元を緩めて、ユキの吸い込まれそうな深い胸の谷間と……………少しずらしてユキの左胸を——その先端の乳首を晒している写真。

やらしい陥没気味の乳頭。それを相変わらずの真顔。だが少し興奮しているのか、口を半開きにして頬を僅かに赤くしたユキが映っていて、

『最近、先生を想って1人でシてしまいます。それと、また胸が大きくなっただけかもしれません』

「っ……………」

『また先生に揉んで貰ったり、先生のおちんちんを挟んであげたいです。……………そうやって想像しながら自分で慰めてしまったからでしょうか?』

ぐっ……………うおお……………! 今直ぐ北海道行ってえ……………!!

なんだこのエロい子。そういうのを教えたつもりはないのに、気がつけば1人でオナニーしちゃうほどエッチに目覚めてやがる。いや、俺が目覚めさせてしまったのか。それを思うと興奮してしまう。くそっ、今直ぐこのユキとかいうJKデビューしたエッチな口り爆乳ちゃんを俺の肉棒で慰めてあげたい。ああ、なんで俺こんなところにいるんだ……………馬鹿か? 馬鹿なのか? こんなエロい子がいるのに……………!

くそっ、と俺は股間が勃ち上がるのをズボンの締め付けで無理矢理

押さえながら、チャットを打つ。自分でも気持ち悪いと思うが、

『夏になったら、また滅茶苦茶にしてやるからな』

『はい、絶対会いに行きます。その時は是非エッチしましょう』

すっごい真面目な文面っぽいのに、単語だけがヤバい。ユキの真面目というか、ある意味純粹さが出ている。純粹に俺とエッチなことがしたいのだろう。

あー、なんか、ちょっと誕生日祝われて気恥ずかしいような嬉しいような良い感じの気分だったのに、やっぱりムラムラしてしまった。ほんと良い話ブレイカーである。

こんなんで、この後のパーティ大丈夫なのかと思う。せっかく祝ってくれるんだぞ、俺の女達が。さすがの俺も少しは真面目にならないとな——。

「東郷くん、お誕生日おめでとう！」

「おめでとうございます先輩！」

「ハッピーバースデー、ジン」

「……お、おお、どうも」

目的地に着くと、早速祝われた。眼の前には笑顔の美少女が3人。

瑞原はやりに戒能良子、それに加えて宇野沢栞と、女子のトッププロに大型ルーキーの贅沢なメンバーであった。

「久しぶりだねー！ とりあえず、上がって待っててね！」

「あ、はい。お邪魔しますはやりさん……って、料理ですか」

「うん！ せっかくのお誕生日だし、しおりんも料理が得意みたいだから一緒に作ろうって。ね？ しおりん☆」

「はい。もう少しで出来るので楽しみにしてくださいね」

「わ……わかった。それじゃあ……」

俺ははやりさんの家——高級マンションの一室に足を踏み入れて、そわそわしながらソファアへと移動する。

俺を態々祝ってくれる3人。彼女達がいる室内はとても華やかで、料理の香ばしい匂いも合わさって、とんでもなく尊い空間である。

「オフが重なってラッキーでしたね」

「うん。特によしこちゃんも一緒だから一緒に祝えるし」

「あ、そういうえば先輩。琉音さんからもおめでとうって伝えてほしいと伝言が……」

「……いや、直接伝えろよ。なんで伝言……?」

「琉音ぴよん、今イベントで福島まで行ってるから誘ったけど難しそうだったんだよね」

「あー……そうなんすか。いやまあ、いいすけどね……それだけでも十分……」

エプロン着用で料理をするはやりさんに栞。そしてソファに足を組んで腰掛ける良子とやり取り。

琉音もどうやら祝おうとはしてくれなみたいで一応感謝するが、なんとというか、ほんとこういう雰囲気はどうしていいか分からない。

なんとなく、目線を逸らし、良子が座るソファのサイドから人2、3人分離れた中央に座る。

すると良子がちらをじっと見てくる。俺は訝しみ、

「……なんだ?」

「……照れてるんですか?」

「は? ……い、いや別に照れてねえよ」

「照れてますね」

は、いや、照れてないし。証拠でもあんのか。証拠だせオラア!

良子が全く見当違いのことを言ってきたので顔が熱くなる。はーやだやだ。勘違いとかもうね。いやなんかもう……やめてほしい。とにかくやめろ。そういうのはずるいから。

微妙に微笑ましい感じでごっちを見て微笑を浮かべる良子がムカつく。良子は春と似て、表情の起伏が分かりにくいけど、それでも春よりは分かりやすい。口角とかあんまり上がらないけど、昔から知ってるので俺には分かる。だがクールでミステリアスな感じがまた美人だから困る。ほんとずるいわ。久し振りに生で見たせいか、いつもより増し増しで美人に見える。長い足組むな。エロいから。ああ、ヤバい落ち着け。今ここで勃つのはヤバい。だから落ち着こうと俺はい

つものように話をすることにする。

「というか、お前は料理しないのかよ」

「私も今日はゲストなので。4日後は集まれませんからね。それぞれ試合もあって」

「……まあそうだろうけどな。どうなんだ、調子は」

「最近は何フティスとテスカトリポカの調子が良いですね」

「普通なら意味分かんねーはずなのに分かる自分が嫌になるな……」

相変わらずオカルト満載な麻雀をしてるっぽい良子。いやほんと、対戦相手に同情する。麻雀やってる筈なのに、訳分かんねえエフェクト出しまくるからな、こいつは。

「そっちはどうなんです？ 色々と足を伸ばしてるとは聞きましたか……」

「……別に、普通だ。消費する一方だからなんとか職を見つけたところだが中々厳しいって感じか」

「マネーですか。……まあ、本当に困ってるなら、少し貸しても構いませんが……」

「いらねえよ。年下の従姉妹から借りる馬鹿が何処にいるんだ」

「……そうですか。まあお金は余ってるので、困ったらいつでも連絡してください」

と、そう言ってくれるが、幾らクズの俺でも、従姉妹から金を借りるのはさすがにどうかと思う。

そもそも金の貸し借りがあんまり好きじゃない。借りると心苦しいし、貸すと……十中八九返ってこないしな。貸すくらいなら最初からあげちまう。

……とはいえ、困ってるっちゃ困ってるんだよな。別に今直ぐ困るって訳じゃないが、1年か2年以内にはなんとかしないと路頭に迷う。

ちよつと気になったので俺は聞いてみることにした。

「……っつかお前、幾ら貰ってんだ？」

「……中々デリケートなところを突っ込んできますね……ブラザーだからいいですが、普通は聞きませんよ……」

「俺だつてお前にしか聞かねえよこんなこと。お前、去年は大活躍で年俸は上がつてゐるだろうし、番組とか中継のギャラとかもあんだろ？」

後グッズとかイベント、国際試合で勝つた時の協会から出る支援金とか、雑誌の取材にグラビア……実際、若手でトッププロのお前がどんくらい稼いでゐるのかはちよつと興味ある」

「よくそうスラスラと出てきますね……まあ、構いませんが。ではちよつとイヤー貸してください」

と、良子が俺に座つたまま近寄つてくる。いい匂いがする。あ、ヤバイ。すげえムラムラする。近くで見ると胸とか腰とか、こいつのスタイルの良さが更によく分かるし……とか思つていたが、耳元から聞こえた金額でそういつた想いが吹き飛んだ。

「——は？ マジ？ やつべ……ひと月で俺の貯金の倍以上稼ぐじゃん……めげるわ……」

「いえ、最初は驚きましたけど、残高の0が一桁増えてからは正直麻痺してきますよ。それに、忙しくて使う機会があまり無いですしね。……それより、私でこれなので、はやりさんとかはもつと稼いでいるかと。そっちの方が私は気になりますね……」

「……言われてみれば、お前でそれなんだよな……つてことはだ。単純に考えても数倍は固いよな……」

「噂ですが、アイドルとしての印税がとんでもない額らしいですよ。逆に、牌のお姉さんのギャランティはそれほど……」

「ちよ、ちよつとふたりとも？ なんか嫌な話してない？」

「二ないない。ノーウェイノーウェイ」

「ほ、ほんとかな……？」

「先輩と良子さん、息びつたりですね……」

ひそひそ話がちよつと聞こえていたのか、はやりさんが嫌な予感を感じてツツコんで来たので、良子と二人して手と首を振つて誤魔化す。苦笑いの栞と共に不安そうなのはやりさんがキッチンに戻つていったが、そこで俺と良子は話を再開させた。

「……でも確かに、あの番組、国営だしギャラはあんまり高くないって聞くな……ならやつぱこんくらいか？」

「そうですね……私の予想ではそれよりもうちよつと上ですか」

「どつちにしろヤバそうだな……ちよつと良子。お前、痛さ爆発で聞いてこいよ。そういうの分かりませんって感じで」

「嫌ですよ。……それなら私がこの辺に漂う霊でも降ろして聞いてみた方が確実ですね。預金残高くらいなら知ることも不可能では——」

「——って、やっぱり嫌な話してるよね?! もう東郷くんよしこちゃん! そういう話は駄目だからねっ!」

「バレた……」

「あ、あはは……霊とかなんとかはツツコまなくて良いんでしょうか……」

二人して、はやりさんに注意される。うん、まあちよつと下世話な話過ぎたか。——あと栞。良子の霊とかオカルト云々はツツコんだら負けだ。麻雀以外でも使える奴だし、正直俺にとつては今更というか日常茶飯事である。お前もプロになるなら慣れた方が良い。

しかし良子の……若手のトッププロの稼ぎは衝撃だったな。

はやりさんも、この家とかもそうだが、家具とかも結構良いものっぽいのばかりだし、お金には困ってないよね、確実に。……この分だと、栞も俺より稼ぎそうだな……年俸は俺より確実に上だろうし、メディアの露出にも期待出来るし。

なんかもう、マジで養って貰った方が良いんじゃないかねって思う。いや、前々から思ってたことではあるが、さすがにみつともないかなって思ってた考えないようにしていることだ。男のプライド的にね……。

とはいえ、多少の緊張はほぐれた。……いや、こういう経験って殆どないから、どうしていいか分からんねんな。誕生日パーティとか初めてだし。去年、良子が食事に誘ってくれたくらいでもちよつと感動してしまった俺だ。

別にだからどうという訳でもないが、むず痒いのはしょうがない。というか、

「……そういえば良子も、20歳になるんだよな」

「イエス。お酒を飲むのが今から楽しみです」

「あー……まあ、大丈夫だとは思いますが、最初は程々にしろよ。自分のペースが分かるまでは」

「……なら今度、飲み連れて行ってください」

「お前がオフの時ならな……まあ、はやりさんよりは強いだろうけど」

「はやや……また私の話……」

「は、はやりさん！ 焦げちゃいますよ!?!」

キッチンがまた騒がしい。……いやまあ、あんまり見ないようにはしている。刺激が強いし。

お酒はまあ、親戚連中は皆強いし、良子も強いだろうからあまり心配はしていない。

逆にはやりさんは飲むと直ぐに酔ってふにやふにやになる。それはそれで可愛いしエツチだから良いんだが、手は掛かるので俺と良子で注意していたりするのだ。

俺も今日は誕生日だし、飲んでもいいのだが……出来れば遠慮したい。

何故なら、歯止めが効かなくなりそうで怖いからだ。

俺は先程から、ぶっちゃけ我慢している。——性欲が湧き立つのを。

俺は最後に葉とエツチした一ヶ月前から今日まで、一回も抜いていないのだ。

タイミングが合わないというか、依頼も4月からだったし、出来るタイミングが無かった。

一ヶ月抜いてないので、今の俺はやりたくてしょうがない。

だがちようにどよく誕生日だったので、この性欲を発散していいものか悩んでいる。

皆、態々俺の為に祝いの席を開いてくれるのだから、さすがに襲いかかる訳にはいかないだろうと。

だからちよつと良子といつものやり取りを交わしてみたり、視線を逸らしたりして気を紛らわせているのだが——どうしても視界に入ってしまうから、質が悪い。

今のこの状況……ここにいる3人は全員、俺の女なのだ。

キッチンを見れば相変わらず胸の谷間が開いたエッチな衣服とエプロンを身に着けたはやりさんと、同じくエプロンを身に着けて料理をする葉がいて、俺の隣にはタイトスカートから伸びる足が眩しい良子がいる。

どこを見てもおっぱいがぶるんぶるん揺れてて、とんでもなくムラムラする。料理をしているはやりさんと葉の後ろ姿もたまらない。後ろからはみ出るおっぱい。安産型のお尻。キュツとしまったウエスト。後ろから抱きついて襲いたくなる衝動を抑えるしかない。

だが隣には良子がいて、相変わらずそのスレンダー爆乳振りが俺の肉棒をイライラさせる。結局その無自覚な誘惑からは逃れられない。いや、本当は誘惑に負けたい。同じ部屋に俺好みで俺に惚れてる3人の爆乳美少女達がいて、男が俺1人という状況は、色々たまらないのだ。

このハーレム感に、俺の肉棒が勝手に反応しようとする。エッチしてもいい相手が近くに3人だ。全員、俺が女にした。

それを思うとニヤついてしまいそうになるが、自重せざるを得ない。それがキツイ。

今日この後、どうにか出来れば良いのだが……お祝いつてもあつてタイミングが難しく、しかも3人もいるため言い出しづらいのがある。

この一ヶ月の昂りを発散したい。したいが、彼女達の厚意を無碍にも出来ない。

結局俺は動くことは出来ずに、誕生日というイベントを普通に楽しむしかない。くっ、嬉しいのにキツイ……生殺しがこんなに辛いとは、かつて思いもしなかった。

「東郷くん、よしこちゃん、お料理出来たよっ」

「ケーキも作って置いたんです。今出しますね」

はやりさんと葉の声が届き、俺と良子はテーブルへと向かう。……いやほんと、有り難いことだ。この間だけは封印しよう。なんとか、多分ね。

——そうして、俺は3人と一緒に誕生日パーティを経験した。

はやりさんと栞が作った美味しい料理の数々。俺と良子の好物が多く、ケーキも態々栞が朝から作ってくれたらしい。

ケーキにロウソクを立ててお決まりのやつをやつて、誕生日プレゼントも貰った。良子も同様に。良子からも貰ったし、実は後日、俺も良子にプレゼントを送っている。それを言ったら喜んでいたので、まあ良かった。

それからは食事をして、色々な話をした。同じハートビーツだからか、はやりさんと栞はもうすっかり仲良くなっているし、良子も同様に、栞とは打ち解け始めていた。

俺は……こそばゆい気持ちになりながらも、まあ、普通に嬉しいというか、3人には感謝だな、と思っていた。

しょうがない。これだけ祝ってもらったのだし、今日くらいは諦めようと、また少し我慢する覚悟を決めたところだった。

——そんな矢先にだ。食事も終わり、ソファアで休憩してお喋りをしている最中に、はやりさんは言った。

「東郷くん……その、ね。私もよしこちゃんみたいに、名前で呼んでもいいかな？」

と、そんな可愛いことを言ってくれる。俺の答えは一つだ。

「全然いいですよ。むしろ、はやりさんから名前で呼ばれるなんて嬉しいですよ」

「良かった。それじゃあ……じんくんって呼ぶね？」

ズキユン、と心臓にダメージ。はやりさんの名前呼びは破壊力が凄かった。ついでに股間も反応しそうになる。自重しろ。

「お、オツケーです、はやりさん」

「えへへ……前から名前で呼びたいって思ってたから呼べて良かったよ」

「……はやりさん、そろそろ——」

「……………」

「あ、そうだね☆ ごめんねじんくん。実は、もう一つプレゼントがあ

るんだけど……その準備があるから、ちよつと席外すね。大丈夫？」

「あ、はい。全然大丈夫つすよ」

「良かった。……それじゃあよしこちゃん、しおりん、行こっか」

「はい」

「せ、先輩はここで待つててくださいね？」

「おう……ん？」

プレゼントがあると聞いて退席するはやりさんを見送る……のだが、3人ともリビングから別室に消えていった。

え、なに？ そんなに大掛かりな物なの？ てつきりはやりさんだけかと思つたのに、3人とも？ マジで何するつもり？

ちよつと予想がつかない。プレゼントか……いやまあ、何を貰つても嬉しいけどな。あの3人からなら。雑草でも家に飾るまである……いやごめん。さすがに雑草だとうだろう。まあ、無碍には出来ないので天ぷらにして食べるくらいか。揚げれば大体のものは食べれる。揚げ物って偉大だな。

とにかく、待つ。待つのだが……意外と遅いな。マジで何持つてくるつもりだ？

数分か、もしかしたら10分くらいは経つただろうか。俺はなんとなく携帯を開いて色々と確認していると——別室から声が届いた。

「じんくーん！ 準備が出来たから、こつち来てくれる？」

「あ、はい。……え、なに？」

はやりさんの声に従つて立ち上がり、3人が消えていった部屋へと向かう……いやなんだ？ほんと、持ち運べない程にとんでもないプレゼントだつたりするの？

俺は部屋の扉を開いて、中へと足を踏み入れる。——そして目の前に広がる光景を見て、俺は身体を固まらせた。

「えへへ、お待たせ、じんくん♡」

「サプライズプレゼントですよ」

「んっ……やっぱり、恥ずかしいですね、ちよつと……」

「っ……こ、これは……」

そこは寝室だった。

はやりさんが普段使っているとと思われるキングサイズのベッド。そしてそのベッドの縁、俺の正面に並んで座っているのは……水着姿の3人だった。

俺は喉を鳴らす。その水着には見覚えがあった。

「さ、3人とも……それ、水着グラビアの……」

「うん、そうだよつ。グラビアで着た水着。全部本物だよ」

「ジーンが1番喜ぶことと言えばこれですよね」

「その、恥ずかしいですけど……皆で相談して……先輩を喜ばせてあげようって」

「お、おお……」

雑誌に載せられたグラビア。3人の水着は、それぞれグラビアで見せた水着姿そのものだった。

はやりさんは桃色の、フリルやリボンのついた可愛らしいビキニトップにパレオで、良子は紫のセクシーな水着。栞に至っては、かなり露出度の高いマイクロビキニだ。それも同じく、実際に学生時代のグラビアで着たもの。

3人の魅力的な身体、その深い谷間を覗かせるおっぱいや、くびれた腰つき、女性らしい肉付きの太腿。シミ一つない白い肌。

本来、グラビア越しでしか見ることの出来ないアイドル雀士達の水着姿。それを、3人同時に、しかも密室となった寝室、ベッドに並んだ状態で視界に収めている。

その事実には、頭がクラクラする。写真ではなく、実際に水着姿で身体をよじる現実の彼女達を見て、俺の身体は勝手にその先を期待して、一瞬で準備が整う。

「今日は、その……他の人には見せないじんくんだだけのグラビア……じんくんだけのはやり達を楽しんでね♡」

「水着で、3人でシてあげます。水着で、4Pですね」

「先輩が大好きなおっぱいを、好きだけ味わってくださいいね？」

股間が、肉棒が、ギンギンにいきり勃つ。

ずらりと並んだ3人のトッププロ。アイドル雀士。水着に包まれた6つのおっぱいが、それぞれの動きに合わせて、ふるふると揺れ、俺

にその深い谷間を見せつけてくれる。

こんなのは、ヤバい。ヤバすぎる。

海やプールで水着を着るのとは訳が違う。彼女達は、寝室のベッドの上で水着を着ているのだ。

泳ぐために着ているのではなく、俺という男を誘惑するために。俺とエッチなことをするためだけに、多くの人の眼に映ったグラビア水着を着ている。

そのことに濃厚な性の気配を感じる。ベッドの上の水着姿の爆乳美少女3人。俺とハーレムエッチ。4Pという妄想でしかあり得ないことをしてくれる。

「はあ……はあ……ま、マジか……こんなの、たまらん……ヤバい……」

先程まであんなに我慢してた肉棒がギンギンに、最高潮に勃起し、俺は理性を一瞬で溶かしながら3人に真っ直ぐ近寄っていく。

ル○ンダイブ——なんてことは現実には出来ないが、ただ真っ直ぐに近づいて3人を味わおうと手を広げて飛び込んだ。

「はあ、ああ……！ 最高……ああ……！」

「あんっ。えへへ、久し振りに抱きしめられちゃった……んっ、じんくん……♡」

「私達も我慢してたんですよ？ だからもう……今日はもうずっとセックスです……♡」

「先輩、腕がせてあげます……あっ、腰もじもじして……可愛い……♡」

正面から、3人に抱きつく。右に栞、左に良子、正面にはやりさんだ。

腕を精一杯広げて、無理矢理彼女達と密着すると、それだけで大興奮だ。

想像以上の柔らかさ。瑞々しさ。上半身に押し付けられる、6つの特大おっぱい。

誰か1人でも、味わえたのなら死んでもいいと思えるような最高級の美少女達の肌の感触を、3人同時に味わう快樂は、もうそれだけで

締めりのない表情を浮かべ、陶醉してしまいかねないほどの最上位の優越感だ。

両手に花どころではない。上半身に——もうたつぷり。胸いっぱいには広がる女体の柔らかさ。全身で美少女3人を侍らせる。もうこれだけで肉棒がビクビクと跳ね回る。興奮しすぎて、先走りはおろか、弱めの射精をしてるんじゃないかと思えるほどの、継続的な甘い快感が腰回りにひたついてきている。

俺の身体で、もにゅもにゅ♡ と形を変える6つの水着おっぱい。もう今すぐそれを味わおうと服を脱ごうとしながら、顔を近づけてくる3人。俺だけが味わえる3人の柔らかかな唇。

それを皮切りに、男にとって、俺にとって、最高の快樂の時間は始まった。

誕生日おっぱい

「っ、はあ……好きだ……皆、好き……!」

「ちゅっ、んっ、ちゅっ……はあ……じんくん……♡」

「ちゅうっ、れろ、んっ、ちゅっ……ジン……♡」

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅるっ、んっ……せんぱあい……♡」

俺は水着姿の3人と、それぞれ唇を重ね合わせた。

これだけでもたまらない。恋人のようなラブラブキス。それを3人同時に行つて、愛の言葉を紡いでも俺は許されている。

1人でも最高の爆乳美少女とのキス。だがその唇を味比べし、また同時に味わうことがどうしようもなくたまらない。

そうされながら、俺は3人に脱がされていく。3人の細いなやかな指と手が俺の身体を這いずり回り、服を脱がしていく。

シャツの上に、ズボンを下に。女の子に手取り足取り脱がされるのは、自分がとても偉い存在になったかのように気持ちがいい。

そうしてパンツ1枚だけとなった俺に再び身体を重ね合わせてくる3人。ギンギンになった肉棒は下着の前面に先走りによる染みを付けながらビクビクと跳ね回っている。

だがそれもしようがない。水着姿のアイドル雀士3人とのペッティングだ。

理性は一瞬で剥ぎ取られ、肉棒は本能に従ってセックスの準備を万全にしている。俺の性癖、興奮を理解して硬くなっている。我慢出来るはずもない。

「はあ、おっぱい……!」

「あんっ……ん、じんくん、はやりのおっぱい恋しかった? 今日好きだけおっぱいあげるね。ぱふぱふ……♡」

俺は眼の前のおっぱいに顔を埋めた。正面にいるのははやりさんだ。

はやりさんの水着に包まれた乳房の谷間に顔を飛び込ませる。そうしながら両手はそれぞれ別のおっぱいを鷲掴みにしていた。

「んっ、はあ……どうですか、水着越しのバスの感触は……んっ♡」

「先輩に揉まれるの……あつ♡ 私、好きです……好きなだけ揉んでください……♡」

左手で良子、右手で葉。それぞれのおっぱいを手で掴むと、左手からは張りのあるおっぱいが、右手からはふわふわのおっぱいの感触がそれぞれ伝わってくる。

どれもずっしりと重い。その手で掴みきれないポリユーム感とおっぱい特有の柔らかさに死ぬほど興奮する。

顔はやはりさんのおっぱいにもっちりと挟まれ、もにゅもにゅと甘やかされる。もうたまらない。視界いっぱいのおっぱいと両手でそれぞれのおっぱいを揉みしだいてもう俺はおっぱいのことしか頭になかった。

「ああ、おっぱい……はふっ、全部、俺の……！ 俺のおっぱい……はあ、柔らかい……好き……！」

「んんっ、そんなにお顔ぐりぐりって……あつ、おっぱい舐めちゃって……もう、じんくんの悪戯っ子……♡」

「相当興奮してるみたいですね……んっ♡ 腰がカクカク揺れてますよ……」

「あつ……先輩のパンツ……おちんちんの先走りでじわあ……♡ っ
て濡れてる……♡」

顔の凹凸にはやはりさんの水着おっぱいがむにゅむにゅと押し付けられ、五指でたっぷりと揉み込む良子と葉のおっぱいに夢中になる。顔を押し付ければ顔に乳圧がたっぷりと。掌にはずっしり重く柔らかいおっぱいがあり、揉み込めば指の隙間からおっぱい肉が溢れてきそうになる。

こうなるともう、肉棒の方がたまらず、早く扱きたくてしようがない。

だがその願いは叶えられるのだ。やはりさんが顔からおっぱいを離し、

「はやりも、じんくんに悪戯するね……？」

と、可愛らしく言っ下下下がっていく。

おっぱいが離れていくのは名残惜しかったが、やはりさんの手がパ

パンツの縁のゴムに掛かった時、俺はさらなる期待に胸を躍らせた。

「脱がすね……♡」

「あ、ああ……!」

はやりさんが俺の腰元でパンツのゴムを引っ張り、それを足の方にシユルシユルと下げていく。はやりさんほどの美人に下着を脱がされるのはそれだけで妙な快感があった。しかもそれだけではない。その後も、

「うわあ……じんくんのおちんちん、もうこんなに……♡」

「すっごいバッキバキになってますね……♡」

「先輩のおちんちん……遅しくて素敵です……♡」

そそり勃勃外気に触れた肉棒に、3人の美少女の視線が集中し、絡みついてくる。ヤバイ。チンコを見せつけるだけでこんなに気持ちいいとは思わなかった。彼女達の口から俺の肉棒に対する感想が出る度に、肉棒をピクピクとさせて喜んでしまう。

特に正面のはやりさん。俺の肉棒の直ぐ近くにあるその可愛らしい顔。写真にすれば1枚に収まるそのビジュアルがエロすぎる。俺は思わず腰を動かしてしまい、

「やんっ……ふふ、もう、駄目だよ顔に擦りつけたら……あつ、駄目だっば♪」

「っ、はあ……はあ……! ヤバイ、はやりさん可愛い……!」

肉棒ではやりさんの可愛い顔を、ぺしっ、と軽く叩いてしまう。

叩くというよりじゃれつくような形だが、はやりさんの頬に肉棒が触れただけで凄まじく甘い快感が走った。身を振るはやりさんがまた可愛くて、肉棒で顔を追いかけてしまう。牌のお姉さんにこんなことをして許される筈がない。が、俺は許されている。ファンに見られたら殺されるような最低な遊びをしながら、更に天国は訪れるのだ。「もー……そんなに悪戯して……今からおっぱいで挟んであげるから、大人しくしてくれないと駄目だよ?」

「っ……おっぱいで……!」

肉棒がドクン、と跳ねる。期待で先走りを漏らす。その水着に包まれた深すぎる谷間を見て更に興奮してしまう。はやりさんがおっぱ

いをもにゆんつと持ち上げたのを見て、もはや俺の頭はパイズリ一色になる。

「ば、パイズリして……挟んで、はやりさん……!」

「えへへ……うん。挟んであげる。だからいっぱい気持ちよくなつてね♡」

そんな俺の欲望に塗れた要求を、はやりさんは母性たつぷりの笑顔で受け入れてくれる。

水着のまま、肉棒を下から突き入れ……おっぱいで包み込まれた。

「ああ……! やばっ……もう、めちやくちや気持ちいい……!」

「んっ、凄い……おちんちん、はやりのおっぱい押し返してくる……んっ、ぎゅうつとしないよね……!」

「うっ、うあっ……ヤバイ……!」

はやりさんの胸の谷間で、肉棒がビクビクと動いているのが自分でも分かる。

肉棒に左右から吸い付いてくるおっぱいの感触に、どうしようもなく感じてしまっていた。

以前にもしてもらったが、やはりグラビア用水着でのパイズリは、そのコスチューム効果もあってめちやくちやエロい。大多数の眼に晒されたその水着。雑誌に載っていたグラビア。水着姿のはやりさんは、写真ではなく、本物が目の前にいて、全く同じ格好で俺のチンコをパイズリしている。

待望の性奉仕というのもあるが、仮に昨日抜いていたとしても、この破壊力は損なわれない。今きつと、陰囊でめちやくちやに精子が作られているのだろう。なんとなくそんな気がする。

この最高の雌を相手に俺の中の雄が凄まじく昂ぶっている。もう俺は腰を浮かせる。何回も。カクカクと情けなく腰を揺らしてしまっている。

それだけではやりさんのおっぱいを肉棒でかき分けることが出来て快感が来る。だがはやりさんの方もじつとしてはいない。

「いっぱい擦ってあげるね? んっ……♡」

「っ、あっ、あぁっ……!」

はやりさんが胸の谷間を締めて、おっぱいを持ち上げるように肉棒を扱き始めると、直接的な快感が全身を駆け巡ってもうたまらなかつた。

はやりさんのおっぱいのポリウムが、根本から竿、亀頭の先までみっちり飲み込み、乳肉の柔らかさが伝わってくる。そのスベスベもちもちの肌が吸着し、肉棒の形になつてなぞっていく。

平均より大きいであろう俺の肉棒がおっぱいの中で溺れて出口を求めて乳肉の海を掻き分けるも、出口には届かない。腰が下乳に、たぱっ♡と音を立てて落ちてくる頃には、肉棒はおっぱいの奥まで突き挿れられているが、結局は戻るしかない。そのまま乳肉の海を逆流。にゆるにゆる、むにゅむにゅの中をなぞりあげられて、ただただ気持ちいい乳圧の中を通っていく。

そして再び、おっぱいが俺の腰に落とされる。楕円形に形を変える水着乳。水着を支える紐が、おっぱいを持ち上げた際に緩んで、おっぱいの上側に大きな隙間を作るのがまたエロい。左右から押し付けられると、おっぱいの乳穴は縦に長くなって、そのポリウム感がより強調される。その谷間の中でその乳圧を実際に享受しながら掻き分けていくのはおっぱい好きにとって至上の快樂だ。

これだけでももうヤバいというのに、更には左右から押し付けられる乳房の感触もある。

「随分とまた気持ちよさそうですね……顔がだらしく歪んでますよ？」

「よだれまで垂らして……んっ、ちゅっ、れろ……先輩、可愛いです……♡」

「んっ、はぁ……」

左右から良子と栞という2人の爆乳水着美少女が、その身体をたっぷり押し付けてくる。胸板に4つの乳房が押し付けられ、柔らかな感触を広げながらたわむ。腕の中に入ってきた2人にたまらず、俺の両手はそれぞれ、良子と栞の尻を掴んで撫で回す。水着に包まれた魅惑のヒップ。良子の引き締まったお尻と、栞の安産型のお尻をそれぞれ撫で回し、揉み比べる。こちらに引き寄せるようにしてそうすれ

ば、彼女達のそのいやらしい身体が俺の身体とより一層密着して気持ちいい。足が太腿に絡む。お尻だけでなく、細い腰だつて同時に。腕を回しておっぱいを揉むことだつて出来る。

そうやって両手が2人の美女で塞がっているというのに、それによつて更に勃起あがつた肉棒は、はやりさんというもう1人の美女にたぶたぶとパイズリされていた。

このハーレム感がたまらない。自分の手で肉棒を扱かなくても、女の子によつて奉仕される。両手は別々の女の子で塞がっている。俺の身体に密着してくる美少女達が本当にたまらない。

もうこんな我慢出来るはずがないのだ。だというのにこいつらはまだ俺を喜ばせ、よがらせたくてしようがないらしい。

「はやりさんのおっぱい……凄いですね……あんなに揺れて……」

「……ジン、良いことを教えてあげますね」

葉が呟いたその一言をきっかけに、良子が俺の耳元に吐息が掛かるほど口を近づけ、その秘密を漏らす。

「はやりさんの胸のサイズ……104センチのMカップだそうですよ」

「っ……!」

「はやっ!? ちょ、ちよつと良子ちゃん……それは秘密だつて……」

「ジンになら教えても構わないでしょう。ジンも喜びます。……それで、どんな気分ですか? グラビアアイドルも同然のはやりさんの、Mカップのおっぱいでパイズリされる気分は……」

「う、ぐっ、ああ、もうヤバイ……最高……イク、イク……はやりさんの胸の中で……!」

今この時初めて知ったのはやりさんの胸のサイズ。余裕の3桁。104センチ。Mカップ。

小柄なのにそれだけ大きなおっぱい。ユキよりも大きく、それなのに綺麗な形を保ち、張りりと柔らかさを兼ね備えたもちもちむにむむにゆのおっぱいははやりさんの胸。

それに挟まれている俺の肉棒が、俺の興奮を感じ取つてじわりともう我慢出来ない部分に到達した。もうイク。はやりさんのおっぱい

で出す。その意志を全身が固め始めたというのに、右から抱きついてくる葉と左から抱きついてくる良子の身体の、おっぱいの感触と耳元で呟かれる吐息付きの色っぽく、そして可愛らしい声に官能が頂点に達する。

「先輩、イクんですか……？　はやりさんの胸に包まれて……んっ♡
私のおっぱいもありますから安心して出してください……私も先輩にご奉仕しますから……♡」

「おっぱいが沢山あって幸せですか……？　はあ……っ、ちなみに……私のおっぱいは……103センチの、Lカップです。はやりさんには負けますが……どうですか？　この感触……んっ♡　私も練習してきましたので……挟んだらとっても気持ちいいですよ……っ？」

「はあ、はあ……んもう、良子ちゃんたら……♡　じんくん、はやりのおっぱいで出しているよ……はやりの水着姿も、じんくんのモノにして……♡」

「うっ、ああああ……！　出るっ！　出るう！　おっぱい！　おっぱい……！」

俺の中のおっぱい欲だけを満たそうとするような言葉の羅列に、実際に押し付けられる6つのおっぱいに、俺はただただ精液を吐き出すしかなかった。

どびゅうっ！　びゅるるるっ！　びゅるるるっ！　びゅうっ、びゅるるるっ！

「うぐううううっ！　あああっ！　でっ、あああああ!!」

「あっ、おっぱいから吹き出して……んっ、凄い量……♡」

「んっ……れる、ん……涙まで流して……随分と気持ちよさそうですが、まだ終わりじゃないですよ……っ？　次は私のおっぱいで挟んであげます……♡」

「ちゅっ、んっ……先輩、その次は私ですから……ちゅっ♡　ちゃんと精子、残しておいてくださいね……っ？」

「うっ、ああ……！　もっど、もっど出す……！　はあ、全員、おっぱい……！」

右手に葉のKカップ。左手に良子のLカップ。それらにひたつか

れ、はやりさんのMカップおっぱいの中に一発目の射精を行う。

どこを見ても、もちもちたぶたぶで天国だ。射精が落ち着きはじめても、俺の肉棒はギンギンのままで、はやりさんのおっぱいの中で自己主張を続けている。

水着の谷間から白い精液を垂らしてはあはあと息を乱すはやりさんがエロい。だが、左右から押し寄せる4つのおっぱいにも俺は自分の証を刻み込むべく、肉棒を引き抜いた。

すると今度は良子がベッドに仰向けになり、

「ほら……次はここですよ。よく狙ってください」

「っ、良子お……！ そんな誘いやがって……！」

良子がベッドに仰向けになると、水着の美しいボテイスタイルが上から見下ろせる。

長い足に引き締めりながらも女性的な魅力が詰まった下半身。その細い腰や無駄な部分が見当たらない肩や腕など、まるでモデルのようなスレンダーボディ。

——胸さえ見なければ。その胸だけは仰向けになっても形をしつかりと保ち、突きでていた。

Lカップの爆乳。その水着に包まれたいやらしい膨らみ。良子は水着の下側を少しずらし、下乳の谷間を見せつける。ここに挿入してと。俺のおっぱい欲を満たすために、態とそんないやらしいことをしているのだ。

「っ、はあ……はあ……挿れるぞ……！」

「はい、どうぞ……♡」

そんなのもう、挿れるしかない。

出したばかりだというのに、俺は良子に向かって一直線に、馬乗りになり、その肉棒を良子の下乳から突き入れた。

すると直ぐに、その張りのある爆乳がむにゅゅと俺の肉棒に張り付いてきて、

「あ、ああっ……！ 気持ちいい……！」

「んっ、熱い……出したばかりなのに凄く硬いですね……でもまだですよ。ほら、しつかり動いてください」

「うっ、良子……！」

と、良子は胸の谷間をぎゅうつと寄せて、狭い乳穴を作り上げた。仰向けなのに深い谷間が出来上がる。良子側から見れば、俺の鼠径部辺りは見えなくなっているだろう。その腰にあるポリユーム感がたまらない。

「こうやって押さえていますから……いっぱい犯してください……♡」

「っ……言われなくとも……犯してやる……！　ぐっ……！」

良子のそのおねだりで、俺は再び腰を動かす。

Lカップのおっぱいに、良子というまだ19歳の美人に馬乗りになって、その美爆乳を犯すのはめちやくちや興奮する。

そのくびれたお腹の上に馬乗りになって大丈夫なのかと思うが、そのスレンダーさと、それに見合わない爆乳に更に興奮する。一応体重を完全に預けはしないが、それでも腰振りは全力だ。

鼠径部に下乳がむにゅっ、むにゅっ、と密着する度にその谷間の深さにたまらない気持ちにさせられる。長いストロークを終えても肉棒はおっぱいの谷間からはみ出さない。

水着の締め付けもあって、ただただおっぱいに咀嚼されるように乳肉に肉棒を埋め込んでいく。精液でヌルヌルだったこともあり、動きもスムーズだ。

ただそうやっている、やはり残りの二人も絡みついてくる。

「もう……あんなに出して……後始末が大変なんだからね？　じんくん……っ♡」

「先輩、男らしくてかっこいいですよ……私にも、後であれくらい出して欲しいです……♡」

「うっ、はやりさん、葉……！」

左右から後始末をしていたであろうはやりさんと葉が合流してくる。そのおっぱいをたっぷりと俺の身体に押し付けてくる。

「しおりんと一緒に、おっぱいでくすぐってあげるね。こうやって押し付けて……んっ♡」

「あっ♡　先輩の乳首と合わせるの気持ちいい……♡　はあ、先輩は、

「どうですか……？」

「つつ、あつ、それヤバイ……気持ちいい……！」

何をするのかと思いきや、はやりさんと栞は、それぞれ水着を片方だけ少しずらし、おっぱいとその先端の乳首を、俺の両乳首に重ねるように押し付けてきた。

右に栞、左にははやりさん。Kカップのつつん乳首が俺の右に。Mカップの陥没気味の……先程の奉仕で感じたのか、少し浮き出ている乳首が俺の左胸に、むにゅむにゅ♡ と押し付けられる。

おっぱいのそのボリユームと柔らかさも然ることながら、乳首を擦ってくる二人の乳首が気持ちいい。俺は二人に腕を回して抱き寄せると、こちらからも胸を押し付けて快感を味わう。

「ああ……ふたりとも、もつと押し付けて……！ ああ、むにゅむにゅで気持ちいい……最高……！」

「あんっ……こうかな……んっ、これ、はやりも気持ちいい……はあ……♡」

「先輩と密着して……あつ、好きです……んっ、先輩、キスください……んっ、ちゅっ♡」

「あ、しおりんずるい……はやりも……じんくん、はやりにもキスして……ちゅっ、んっ、れろ……♡」

「あ、ああ……幸せ……やばっ、2人共……」

ちゅっちゅっ♡ とおっぱいを押し付けられながらのラブラブキスを受けて、そのハーレム感に陶醉する俺。2人を強く抱きしめる。その細い腰を抱く。ぷりぷりとしたお尻を撫で回し、4つのおっぱいを上半身で潰すように動かしながら、2人同時のキス。

ハートビーツ大宮が誇る爆乳アイドル雀士2人を侍らせる幸せ。しかも水着姿で。ハートビーツファンだけでなく、男であれば誰もが羨むであろう至高のハートビーツサンド。2人のKとMの3桁超えおっぱいに上半身を甘やかされながらキスをして、身体中を撫で回す。

そうしながらも、股間は良子によってぬっぷりずっぽりパイズリされているのだが、

「むっ……やはり、私も動かします」

「っ、あ、ああっ、良子……！」

胸の谷間を押さえることだけにしていた良子が、おっぱいを動かして肉棒を扱き始めた。

その表情は熱っぽくどろんどろんとしていながらも、その眉が僅かに立てられており、

「ほら、気持ちいいですか……っ。んっ、すぐ気持ちよく、いっぱい出させてあげますからね……私のおっぱいで……♡」

「あっ、あっ、ヤバイそれ……うっ、良子……！」

「んっ♡ ふふ、そんなに喘いで、気持ちいいんですね……んっ、いつでも出していいですよ……おっぱいに出すの、好きでしょう……っ？」

俺の腰の動きに合わせておっぱいを動かす良子。その水着に包まれたLカップのパイズリはまた格別だった。

自分で動くのは気持ちいい。そのおっぱいを道具か何かにしていくようで、とても満たされる。優越感や支配欲という雄の欲望を満たしてくれながら、更におっぱいを動かして快感を強められると、俺には為す術がない。

「ちゅっ、んっ、じんくん、はやりのおっぱいも気持ちいいよね……？」

んっ、ほら、こんなに押し付けて……あっ♡ はあ……凄いい、広がっちゃってるよ……っ？」

「ちゅるっ、れろ、んんっ……せんばあい……♡ 乳首、凄くコリコリしてきました……先輩も感じてるんですか……？ 私も、これ好きかもです……先輩におっぱい押し付けるの、大好きです……♡」

「っ、ああ、やはりさんに葉も……！」

なのに上半身では相変わらず、はやりさんと葉が胸を擦りつけてきている。二人のどろんどろんとした色っぽい表情がエロい。その下では俺の腰の動きで揺れる良子のLカップのおっぱい。腰から全身に走る快感。身体に走る快感がまた肉棒を肥大化させ、しかしその肉棒は即座にたっぷりの乳圧を受けて気持ちよくなれる。

ドクドクと腰に甘い感覚が、射精の前兆特有のたまらない快感が走ってきた。この状況で我慢なんて出来やしない。

「っ、ああっ！ 出るっ！ また出る……！ 良子お……ッ！」

「んっ、いいですよ。沢山出して下さい……おっぱいの中で……♡」
「あっ、んっ、いっぱいキスしておっぱい押し付けてあげるから、よしこちゃんにも沢山出してあげて……ちゅっ、んっ、ちゅる、はあ、れろ……じんくうん、大好き……♡」

「んっ、先輩、出して下さい……先輩が射精する時の顔、可愛くて好きです……♡ ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅるっ、れろ……♡」
「んんんっ——！ んっっっ、ク……ッ！」

口を2人の口と舌に塞がれ、声を満足に出すことも出来ない状態。美少女達の愛を一身に受けながらの射精を俺は行う。

びゅううううっ！ びゅるるるるっ！ びゅううううっ！ びゅうっ！

「あっ、ああああああっ！ 気持ちいい……！ 天国……っ！ 皆、好き……っ！」

「ああっ……！ 凄い出て……んっ、はあ、おっぱいの中でドクドクとして……はあ……♡」

「んっ、凄い抱きしめて……あっ、じんくん、出たの？ んっ、可愛い……ちゅっ、気持ちよかった？ でももつと気持ちよくなるうね？

んっ、あっ、もつと抱きついていいよ……あっ、じんくん、大好き……♡」

「先輩っ……そんな強く……あっ、んんっ♡ 先輩、かっこいいです……あんなに射精して……ちゅっ、まだ腰振って……でも、次は私ですからね……ちゅうっ♡」

射精の瞬間、気持ちよすぎて両側の2人を強く抱きしめてしまうが、それすら2人は喜んで、射精中もおっぱいをむぎゅむぎゅ擦りつけてキスをしてくる。良子もおっぱいをホルドしたまま、その射精を胸の中で受け止め続けていた。水着の谷間に白い液体が溜まっている。物凄い出してしまったと思うが、まだ俺の興奮は収まっていなかった。

「うっ、はあ……はあ……最高……もつと……」

だが、あまりの快感に少しふらついてベッドに倒れ込んでしまう。

——そこに葉が移動してきた。

「んっ、それじゃあ先輩……私も、先輩の逞しいおちんちん……おっぱいでしこしこしますね……？」

「っ……あっ……葉……」

俺の下半身に四つん這いで移動してきた葉が、俺の腰を持ち上げようとしたので、俺も腰を浮かせる。そうして葉の太腿の上に載せられた俺の腰は、肉棒が葉のKカップの谷間の前に位置し、

「それじゃ、挟みますね……んっ♡」

「はぁ……あっ……！」

葉のマイクロビキニの下側、下乳から差し込むように俺の肉棒がKカップおっぱいに包まれる。

葉が、むにゆうううっ♡ と俺の肉棒におっぱいを寄せて、乳圧を高めてくる。

そして俺の肉棒をしつかりホルドすると、そのまま上下に動かし始めた。

「んっ、先輩に教えられた通り、沢山気持ちよくなりますね……♡」

「あ、あっ、葉……その挟み込みやばっ……あっ」

何気に、葉はやはりさんと良子よりも俺と肌を重ねた回数が多く、パイズリの回数もそれなりにこなして、俺が教え込んだため、そのテクニクは2人よりも僅かに上だ。

手を猫の形にしておっぱいを左右から押さえて、谷間に向かってむぎゅむぎゅと、その中にある俺の肉棒に乳圧をたっぷり掛けてくる。それから上下に、にゅぽにゅぽ♡ と扱いてくる。楕円形になり、おっぱいの谷間が信じられないくらい深くなり、俺の肉棒をたっぷりと擦ってくれる。そのパイズリにすっかり俺の肉棒は出したばかりなのに気持ちよくなってしまっていた。

「うっ、あっ、気持ちいい……！ はぁ、腰浮く……！」

「んっ、気持ちいいんですね先輩……もつと良くなってください……はぁ……♡」

胸を左右に擦り合わせたり、緩急を付けてくる葉のKカップパイズリ。

今年プロ入りしたばかりのアイドル雀士のおっぴいは俺をメロメロにするには十分だった。

学生時代好きだった女の子にパイズリを教え込むというだけでも最高である。

夢見心地の時間を過ごす俺だが、やはりそれだけでは終わらない。俺の視界に、4つのおっぴいが現れた。

「もう、じんくんが凄く出すから、水着汚れちゃったよ……?」

「これはお仕置きするしかないですね、はやりさん」

「うん。それじゃあ行くよ、じんくん……んっ♡」

「行きますよジン……んっ♡」

ふにゆううんっ♡

「っ……は、ああ……!!」

瞬間、俺の顔は2人の生乳にたっぷりと包まれた。

後始末を終えた2人が水着のトップを外した状態で、はやりさんと良子が、右側からはやりさんが、左側から良子が、そのおっぴいを顔に下ろして来たのだ。

むにゆむにゆと、幸せすぎる感触が顔いっぱい広がる。

「あっ、先輩のおちんちん、凄くビクビクして……んっ♡ 腰もくねくねしちゃってますよ……?」

「そんなに気持ちいい? じんくん、顔おっぴいで挟まれるの、好きだよね……ふふ、顔赤くなってるよ?」

「はやりさんと私……4つのおっぴいで顔を挟まれて幸せそうですね、ジン……腰、我慢出来ませんか?」

「は、ああ……はふっ、はあ、し、しあわせ……やばっ、ああ、おっぴいが4つも……」

もう凄かった。顔に4つの、はやりさんと良子のおっぴいが押し付けられるのは、気持ちよすぎて顔が蕩けそうだった。

右からMカップが。左からLカップが。100センチ越えのおっぴいが顔をもちもち、むにゆむにゆと挟み込んで、俺の顔を埋め尽くす。

俺の声はくぐもってしか出せない。3人の声も、おっぴい越しにし

か聞こえない。耳までおっぱい。2人の爆乳は俺の顔にもつちり
びったりフィットしてしまっている。

「それじゃよしこちゃんといっぱいぱふしてあげるね？ よい
しよつと……」

「はやりさんと一緒に顔をパイズリしてあげます……行きますよ。
んっ」

むにゆうっ♡ もちゅんっ♡ もにゅっ♡ むにい……♡

「あつ、ああ……！」

もう駄目だった。この時の俺の思考は、もうおっぱいしかなかった。

顔に押し付けられる2人のMカップとLカップのおっぱい。視界
にはそれしか映らない。

耳からはおっぱいが擦り合わされるおっぱいの音しか聞こえず、嗅
覚には2人の甘い匂いが——それに混じって、僅かに俺の精液の匂い
が微かに残っていることが、2人のおっぱいを征服したのだと実感出
来てヤバかった。

首元から顎、頭部まで、4つの極上グラビアおっぱいでむにむにと
甘やかされる。時折、乳首が頬や目元、口元を擦る。

こんなのは本当に、天国で行われる所業だ。妄想やフィクションの
中でしか本来出来ない行為だ。もし鼻血を出すなら今この時だろう。
実際、血が上りすぎてもう頭はクラクラしていた。興奮しすぎて。

顔を包み込むおっぱい。そのたっぷりのポリウムともちもち甘
やかされる感覚に血が駆け巡り、股間が更にいきり勃つ。なのにその
肉棒は、

「んっ、先輩のおちんちんが胸の中で大きく……んっ、はあ、遅しい
……もつと扱いてあげますね……♡」

「んっ、ああ……っ!!」
肉棒も、後輩のKカップおっぱいにみっちり挟まれて扱かれてい
る。

おっぱいで更に勃起させられた肉棒が、即おっぱいで挟まれて扱か
れるという、もうおかしくなりそうな快楽に俺は腰が揺れ動きまくっ

てしまう。情けなく喘いでしまう。

ただ、今の俺は凄く笑顔だろう。分かる。もうこんな、表情筋が維持出来ない。もう正直に気持ちいい気持ちいいと笑顔で喘ぐしかないのだ。

「ああ……おっぱい、おっぱい……もう最高……はふっ、はふっ……んっ、ああ、気持ちいい、おっぱい気持ちよすぎる……っ！」

「んっ、あんっ♡ ふふ、嬉しい？ はやり達の誕生日プレゼント、ちゃんと楽しめてる？」

「はあ、んっ……一応、時間は明日までありますからね……明日まで、ずっとこんな感じで楽しんでいいんですよ？ 明日まで、おっぱい天国です」

「おっぱいもエッチも、好きだけ楽しんでくださいね、先輩。お誕生日、おめでとうございますっ♡」

「あ、ああああ……うっ、気持ちいい、うっ、気持ちいい……はあ、おっぱい天国……ああ、うっ、皆、大好き……！」

はやりさんのMカップと良子のLカップに顔をもっちり包み込まれ、過去最高に硬く大きくなった肉棒も葉のKカップにたぱっ、たぱっ、と音を鳴らして扱かれる。

腰をガンガン突き上げても葉はそのKカップでパイズリするのをやめないし、顔を左右にむにむにと動かし、両手でたぶたと遊んでも2人は更におっぱいを擦りつけてくるだけである。

これが誕生日プレゼントなど、最高すぎる。

もう幸せすぎて理性など完全に溶け落ちていた。

「はあ、もっとおっぱい……はやりさん……おっぱい……ちようだい……」

「あんっ、こう？ 　こうやって……むにむに……♡ 　ってしたら気持ちいいっ！」

「あ、あっ、最高、気持ちいい……っ」

「私のおっぱいはいらなんでしょうか？」

「いる……いる……良子、身体に、乳首にこすりつけて……！」

「さっきのはやりさん達みたいです？ ……こんな感じで……」

「あ、ああーっ……気持ちいい、気持ちいい……」

「きゃっ、先輩、おちんちんすっごい跳ねて、んっ♡ もうイキそうなんですか?」

「あっ、イク……!! もうイク……っ! 全身おっぱいで……ああ、もうイツちやう……イク……!!」

顔をはやりさんにおっぱいではふぱふと挟んでもらい、良子には俺の胸に抱きついておっぱいを押し付け擦り付けて貰い、葉には肉棒をぬぼぬぼパイズリしてもらう。

3回目だというのに耐えられない。耐えられる訳がない。おっぱいハーレム奉仕はそれだけの破壊力があつた。

良子を抱きしめ、Lカップおっぱいの感触を胸で味わい、顔面ははやりさんのMカップで包み込まれる。肉棒にむにゅむにゅと葉のKカップパイズリ。3人のアイドル雀士のハーレム奉仕。おっぱいに溺れる幸せを味わいながら、俺は3回目の射精を行った。

「でっっっ……あっ! イクっ……う、うぐううううううう!」
びゅううううううううっ! びゅうううううっ! びゅうううう!
びゆるる! びゆるっ!

「んっ、あっ、せんぱっ、あっ、凄い出てる……身体震えて……♡」

「相変わらず、凄いですね……ちゅっ、まだまだ出せそうです……ちゅっ、れろ、んっ♡」

「じんくん、次はどうする? なんでもしてあげるからなんでも言っ
てね? お口でもおっぱいでも……その、エッチでも。時間はたっぷりあるから……いっぱいしようね……ちゅっ♡」

「あ、あ、ああ……」

葉のおっぱいに凄まじい量の乳内射精を決めながら、俺は蕩けきつた頭で次のプレイに移行しながら思う——ああ……生まれてきて良かった……と。

アイドル雀士ハーレム

既に溶け切った理性と最高潮に達した興奮の狭間で、俺はエッチの為の行動を続けていた。

「んっ、じんくん、最初はよしこちゃんに挿れてあげて……よしこちゃんも、誕生日だから……あっ♡」

「ああ、そのつもりだ……挿れるぞ良子……うっ……はあ……！」

「あ、ジン……！ ジンのが、あっ、入って……！ あああ……♡」

「すごい……んっ、良子さんのあんな声、初めて聞きました……あっ、先輩、ほんと遅しくて素敵です……あんっ♡」

ベッドの上で、3人の美少女——はやりさん、良子、葉を四つん這いにして、お尻を向けさせる。

水着に包まれたお尻。女性らしい丸みを帯びた、それでいて大量の露で濡れているそれらを見比べると、欲望が再燃する。

両手を伸ばしてはやりさんと葉の尻を揉み比べ、肉棒を良子の尻に擦りつける。ハーレムの主にのみ許された快樂。幸せ。良子がすりすりとお尻を肉棒に擦りつけてエッチだったのと、良子が数日後に誕生日というのもあって、最初は良子の秘部へと肉棒を押し進める。水着をずらし、亀頭を嵌め込み、細い腰を掴んで突き進めると、良子の中が俺を歓迎するかのよういきゆういきゆうと出迎えてくれた。腰が震える。水着姿の従姉妹とのセックス。

お尻が完全に下腹に密着すると、良子はもう我慢出来ないのか、普段のミスティアスさなんて投げ捨てるように腰をフリフリと動かし

た。
「あ、ありがとうございま、す……んっ、あっ♡ ジン、もっ、私のおまんこ……楽しんでください……プレゼント、です……」

「っ……良子お！」

「あっ、ああっ！ 激しっ、腰振り、好きっ、ああっ、ジン、好きですっ、これ、ずっと欲しかったです……♡」

良子の腰を掴んでガン突き。後ろから見ても彼女が表情を蕩けさせていることが分かる。おっぱいもぶるんぶるん揺れていた。その

最高の光景にちんこが硬くなる。でも熱く柔らかい肉の中でジユクジユクに揉みほぐされて気持ちいい。更に気持ちよくなる。

そんなに俺のが欲しかったのか、と肉棒を突き入れまくる。ちんこが溶けそうだ。

だが彼女ばかり構ってもいられない。左右にも可愛い美少女達がいる。

「じんくん……はやりも、ずっと欲しかったんだよ……？ 早く挿れてほしいな……♡」

「せんぱあい……私も……私も、先輩とおちんちんのことばかり考えて……早くここに欲しいなあって……♡」

2人とも俺のことを呼んで肉棒が欲しいと蕩けた表情で誘ってくる。雄を誘ういやらしい雌の尻振り。この2人のこんなところを見れば、正常な雄はすぐに自らの性器をおっ勃てて、後ろから襲うように肉棒を突き挿れるだろう。

だが雄は俺1人。彼女達が求める雄は俺だけなのだ。

雌を支配する雄の優越感。たまらない快感が良子の中にある肉棒を襲う。気持ちいい。たまらない。2人にも挿れてあげたい。

「っ、ああ……2人にも挿れてやる……！ 2人とも俺のっ！ 俺の女！ 俺の良子！ ああっ、好きだ……！」

「あっ、んんっ、あんっ♡ はあっ、まだ駄目です……私の中で、まだ気持ちよくなつててください……っ、あっ♡」

「先輩……挿れてえ……♡ 先輩がいないと、私のおまんこ、寂しいです……♡」

「はやり、この2ヶ月……お仕事中でも、ずっとじんくんに抱かれたくて……現場の控え室とかで悶々としちゃって……んっ♡ グラビア撮ってる時も、じんくんに見て欲しいなあって思っちゃってたんだよ……っ。」

「っ、お、おお……！」

「んっ、中で大きく……あああっ♡」

2人のいやらしい言葉を聞いているとピストンが激しくなる。良子、好きだ……俺のモノ、俺のモノ、と言いながら腰を振り、相手もそれ

に応えてくれるのが最高に気持ちいい。

だがもう我慢出来ない。俺は衝動的に良子の中から肉棒を引き抜いてはやりさんの腰を掴むと、そのまま中へと肉棒を突き挿れた。

「はやり、さんっ……………」

「あつ、じんくんのおちんちん、来たあ…………あつ、んんっ、えへへ、いらっしやい……………」

「っ、可愛い、はやりさんっ…………はやりさんも大好き……………俺のっ、俺だけのはやりさん……………」

腰を密着させれば、はやりさんのお尻がぽにゅんっとなんて腰で潰れて気持ちいい。

しかも、いらっしやい、と可愛く迎え入れてくれたはやりさんの表情と言葉。それとはやりさんの熱々トロトロのおまんこの感触にギャップを覚え、腰をめちゃくちゃに動かす。はやりさんも俺の腰振り喜んで受け止めてくれた。

「ああ、ジン…………こっち、あつ、戻ってきてください…………はやりさんの中も気持ちいいでしょうが、こっちでもっと気持ちよくしてあげますから……………」

「先輩…………先輩のおちんちん欲しいです…………せんぱいも、おまんこでじゅぽじゅぽしたいですよね…………」私のおまんこ、もうじゅくじゅくで、いつでも先輩を気持ちよくしてあげられますよ…………？」

「はあ…………はあ……………うっ、くう……………」

「あつ、あつ、あつ、駄目、だよ……………まだ、はやりの中、んんっ、おちんちん突いてくれないと…………んっ、ああっ……………」

はやりさんが俺の肉棒を求めて自分からも腰を押し付けてくれる。テレビや雑誌では見ることの出来ないいやらしいはやりさんに興奮する。

だがそれは他の2人も同じ。2人も俺の肉棒が欲しいと淫語を放ち、俺に来てもらおうといやらしく誘惑してくれている。

良子とはやりさんのおまんこ味比べに腰の疼きがたまらないことになっている。しばらくの腰振りの後、俺はその衝動に従って今度は反対側の葉の後ろに向かった。

「栞……！俺のチンコだぞ……受け取れ……っ、か、はっ……！」
「あ、あああっ、先輩のおちんちん来たあ……先輩、大好きい♡先輩、先輩っ、先輩のおつきくて硬いおちんちん……♡」

栞の腰を掴んで肉棒をおまんこに挿入。安産型のお尻が俺の腰に密着している。母性を感じるこの丸みがたまらない。その中に、俺の肉棒が埋まっているということに興奮を憶える。

「栞、可愛い……栞、好きだ……！栞も俺のモノっ！栞、栞い……！」

「あっ、あっ、あっ、先輩、大好き！先輩、先輩、先輩の精子、私の中で出して……っ♡」

「うっ、ぐうう……そんな、こと、言われたら……！」

栞にも全力で腰振りをお見舞いするが、栞に中出しをおねだりされると腰の奥が更に熱くなる。自然と腰がカクカクと動く。

俺の堪えるような様子を見て、それを察した他の2人も俺に向かっておねだりをした。

「じんくうん……はやりの中にも出してえ……はやりも、じんくんのエッチな汁、中に欲しい……♡」

「ジン、私には出してくれないんですか……？私の奥で、どぴゅどぴゅってしていいんですよ……♡」

「うっ……ああ、全員に出す……！出したいい……！」

ううっ、と理性が溶け切った俺は獣のように3人のまんこを行き来させることにした。栞の中から肉棒を抜いて、良子に。良子でしばらく腰を振れば、次ははやりさんに。はやりさんの中を存分に楽しんでから、また栞に。

普通なら絶対に出来ないおまんこの味比べ。彼女達の媚肉の感触を俺1人で独り占め。俺だけが知る彼女達のおまんこの気持ちよさ。その嬌声。蕩けきって発情した表情。

もう本当に幸せでたまらない。腰の奥から勝手に射精の準備が整う。

皆俺のだ。全員俺の女。他の雄には絶対にやらん。そういう思いを込めてガンガンと腰を振る。

並んだお尻と腰を撫で回し、腰を振る度に彼女達の腰がくねくねと動き、大きなおっぱいをたぶんたふんと揺らす。弓なりの背中が、綺麗な女の子たちのエッチな身体を独り占め出来てとんでもない優越感を感じる。

「ああっ、好き！ はやりさん、良子、栞……！ 皆大好きだ……！
皆、俺の女……！ 皆に、出す……！」

「あっ、出して！ 出して！ わたしも、大好きい！ じんくんの精子、わたっ、はやりも、はやりもっ、中に欲しいっ♡」

「好きな時に中で出してください……あああっ、もう、駄目、です……はあ、イっちゃいます……ジン、好き、です……♡」

「先輩、先輩っ♡ 大好きですっ♡ 中出ししてくださいっ、先輩、私の中で出してっ！ 大好きい……♡」

「うっ、あああああっ！ もっ、あっ、イツツク……！！」
俺はもう誰の中に挿れているのか分からず、腰を振り、しかし全員に吐き出せるように動きながら射精を行った。

びゅーっ！！ びゅるるる！！ びゅううう！！ びゅるっ！
びゅるる！ びゅうー！

「あ、あああああああ……！ 全員に、中、出し……っ！」

「んんんっ……♡ じんくうん……大好きい……♡」
「あ、あああああ……♡ ジン、ジン……中出し、してくれたんですね……」

「や、あっ、ああああっ♡ 先輩、せんぱあい……♡ せんぱい、愛しています……」

もうその瞬間の事は途中からしか憶えてない。その瞬間、俺は矢継ぎ早に3人の中に出しを行った。

エロ漫画でしか見ないようなとんでもない所業。3人を同時にイかせ、3人の中に素早く順番に中出しをする。

まずありえないだろ、と思ってしまうような行為を、俺は確かに実行したのだ。普通の男では絶対に出来ないであろう行動を。

死ぬほど気持ちいい。もうほんと、ただの天国。

凄まじい達成感と、射精の快感、幸福感に包まれ、さすがの俺も脱

力してベッドに倒れる。気絶している訳ではないが、さすがに一切休憩無し。の4連続射精はかなり体力が持っていなかった。

この3人相手なら少し休めば回復するとはいえ、この瞬間だけは全身をビクツ、ビクツと跳ねさせながら快感の余韻に浸ってしまう。

——だが俺は、ハーレムエッチにおいて、そんな余裕がないのではないかと疑った。

「んっ、じんくんのおちんちん、お口で綺麗にするね……ちゅっ♡」

「あっ、ずるいですよ……はやりさん……私も、私もしゃぶります……ちゅっ♡」

「せんぱい大好き……私も、お掃除フェラしますう……ちゅっ♡」

「あ、ああっ……！」

仰向けに大の字で倒れた俺。精子と愛液で濡れた肉棒に、3人が顔を近づけてキスをしてくる。

そのとんでもない光景にブルつと震えてしまうが、それで僅かに興奮して勃起を維持したのが分かれ道だった。

やはり、硬いまま、大きいままだと、しゃぶりやすい。それを証明するかのように、3人はペロペロと舌を伸ばして俺の肉棒に奉仕をする。

「ちゅっ、れろっ、ペろっ……んっ♡」

「ちゅっ、はあ……れろ、ちゅっ♡」

「れろ、れろ、ちゅっ、んっ、ペろ、ちゅっ、ちゅっ……♡」

「うっ、はあ……3人、とも……！」

もう鼻血が出そうな光景だった。

情欲に濡れた3人の美少女。ほぼ全裸の彼女達。はやりさん、良子、葉という多くの男が届かない高嶺の花。アイドル雀士達が俺の肉棒をうっとりとした表情で舐めしゃぶってくれている。

ハーレムフェラ。トリプルフェラ。3人の舌が肉棒を這い回る。3人が俺の腰に顔を埋め、肉棒と同じフレームに位置するのがエロすぎる。はやりさんの長い髪などは、俺の太腿や鼠径部に垂れ下がってこそばゆいが、その感触が確かにそこに女の子の頭があることの証明であり、また気持ちいい。

3人の手も俺の太腿や肉棒の根本に添えられている。さすさすと下腹や根本を擦られると、腰の奥がまたどくどくと動き出す。甘い快感と共に精子が作り出されようとしている。

「あ、あー…………… エロすぎるう…………… 3人とも、あつ、あつ、そんな3人でとか……………」

「ちゅっ、んっ、じんくん、興奮してる……………えへへ、気持ちいいんだ……………可愛い……………ちゅうっ、もっとしてあげるね……………ちゅっ、ちゅう、れろお……………♡」

「そんなに喘いで、頭を抱きしめて……………ちゅっ、あつ……………堪らないですか……………？ れろ、れろ……………そんなことされたら、もうずっと舐めてあげたくりますよ……………ちゅうううっ♡」

「ふふ、先輩、もつと頭撫でてください……………ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、先輩のおちんちん、いっぱいペロペロしてあげますから……………れろれろ、感じてる先輩、すっごい可愛いですよ……………♡」

「うっ、ううっ、あつ、皆好き、俺の、俺の女、大好き、皆で舐めて……………ああ……………」

俺は3人の頭を抱きしめるように両手を使って肉棒にぐいぐい押し付ける。腰も浮かせて、肉棒を3人の顔に擦りつける。俺の肉棒に鼻先を密着させながらも、口と舌でペロペロと舐め回してくる3人が本当に最高すぎる。皆凄く可愛いのに、俺のグロテスクな肉棒を慈しむようにして、愛情たっぷりの奉仕をくれる。

3人のさらさらの髪を、髪色も髪型もそれぞれ違う3人の髪を手櫛で梳く。撫でながら3人の頭を両手で抱え込んでチンコに、俺の腰に、鼠径部にぐりぐりと押し付けるのは最高にエロい。もう完全に俺の女になったかのようなようだ。いや、こんなことをされても受け入れてくれる3人はもう、真正正銘、俺の女なのだろう。

それを意識すると再び射精感が湧き上がる。俺の意志で止めることは出来ない。自家発電ではないのだ。俺が射精の前兆を感じ取っている間も、3人はかわりばんこに肉棒を啜え、ちゅぼちゅぼと頭を振り、他の二人も肉棒をペロペロと舐め回している。しかも3人とも上目遣いで俺の顔を見ていた。とんでもないビジュアル。この光景だ

けで射精出来る。3人のアイドル雀士。雲の上の存在。こうしていることをファンなどに知られたら確実に俺は嫉妬で殺される。

故に止められない。先程は平等にしようとしていたが、突然湧き上がった射精感俺に平等にさせることを許さない。はやりさんが俺の肉棒をちゅぱちゅぱと啜えている時に絶頂は起こった。

「うっ、はやりさん、出る……！ 飲んで、飲んで……！」

「んんっ、ちゅっ、れろ、れろ、んっ、んっ、んんっ……♡」

「あっ、ずるいですよはやりさん……私にも分けてください……ちゅっ♡」

「そうですよ……先輩の精子、私も飲みたいです……ちゅっ、ちゅっ♡」

「あ、ああああ……！ もう、最っ高……」

良子と栞が、俺の陰囊に、左右の玉を労るようにそれぞれキスをして、ペロペロとキャンディを舐めるかのようにしてくれる。

その間にもはやりさんは俺の肉棒をそのふるふるの唇で扱き、舌で亀頭、カリ首、裏筋をれろれろと舐め回し、俺の精子を口内で受け止めてくれた。裏筋に舌がべっとり絡みついて密着してる時に射精すると、めっちゃ出る。キン〇マそれぞれにラブラブキスを受けると更に倍。5回目のはやりさんの口内で迎える射精も凄まじく、とんでもない快感だった。

実は俺は風呂好きだ。

まあそこまで珍しいことでもないだろうけどな。日本人なら割と好きだと思う。好きじゃなくても、嫌いまで行く人は少ないんじゃないか？

とにかく俺は朝と夜、1日2回風呂に入るくらいには風呂好きだ。まあ朝は汗を流して、単純に出かける前の身だしなみを整えるついでに入ってるのだが、それを続けてる内に好きになった。

温泉も好きだ。地元の温泉も多い。指宿、妙見、霧島——とまあ鹿児島はそれなりに温泉も多い。機会があればまた行きたいものだ。

機会があればだが。

ともかく、俺は風呂好きなのだが、それとは別の意味での、風呂も好きだ。

「あんつ、ぬるぬる滑っちゃうね。ちよつと気持ちいいかも……」

「先輩の身体を洗うの、気持ちいいですよね。んつ、乳首が擦れて……」

「前を取られたのは遺憾ですが、背中を独り占め出来るので我慢しましょう。ん、ふう……どうですか？ おっぱいで、身体を洗われるのは？」

「あー……最高……もうめっちゃ気持ちいい……はー、幸せ」

——特に、可愛くてエッチでおっぱいの大きい女の子達と一緒に入って、身体を洗われるのは大好きだ。

俺は今、休憩がてら4人で風呂に入っていた。

はやりさんの家の風呂場は広く、4人で入っても全然問題ない程度には広い。というかジャグジー付きの、よく見るお金持ちのお風呂を初めて見た。

そちらにも後で入るとして、今は皆で身体を洗っているのである。身体を泡泡にして、背後にLカップおっぱいを滑らせる良子。

上半身、右側にはやりさん、左側に栞が、俺の胸に抱きつくようにMカップとKカップを密着させてぬるんぬるんと洗ってくれている。

正におっぱいハーレム。極上のおっぱい美少女3人、人気プロ雀士である3人を侍らせる優越感は格別だった。

——というか、6つのおっぱいが身体を這い回る感触に身体が震える。天井を見上げてうっとりとしてしまう。締めりのない表情で、快感を正直に貪ってしまう。ある程度射精した後であるため、落ち着きがあるが、気持ちいいことに変わりはないし、たまらないことには違いない。

だから単純に、素直に気持ちよくなろうとしてしまうのだ。——こんな風に。

「あー、もつと密着して……あつ、気持ちいい……おっぱいほんとおつきいよな、皆……ああ……」

「んっ、もう、急に抱きしめて……じんくんのエッチ……♡」
「えへへ、先輩と密着するの、私も好きですよ。んっ……こうやってむにゅむにゅするの、気持ちいいですか？」

「抱きしめられるのはまたずるいですね……まあ、こうやって私も抱きつけば……んっ、これ、確かに変な感じがしますね……んっ」

「あー、幸せ……そうそう、皆で密着して……うっ、はあ、もうたぶんたぶんでぬるぬるで……あー、もう、気持ちよすぎる……っ」

ぎゅうつと両手ではやりさんと葉を抱きしめ、皆で密着してほしいとお願いすると、背後の良子も含めて皆が柔らかい肌を俺に押し付けてきた。

もう全身がむにゅむにゅのぬるぬる。女の子の柔らかい肌で全身が埋め尽くされる。足の上にはやりさんと葉の太腿や臀部の感触。お腹もぬるぬるで、俺が2人の脇の下から腕を回してその背中と腰を楽しむ。

そして上半身は極楽。俺の胸板に密着する2人の爆乳。そして背中にも広がる良子の爆乳。3桁の爆乳を独り占め。6つのおっぱいが上半身でそれぞれが当たって潰れながら俺を気持ちよくしてくれる。

何気に勃起した肉棒に、はやりさんと葉の太腿や足が当たるのが地味に気持ちいい。2人のその腰が、ムチムチした臀部が近くにあることを感じられてエッチだ。ハーレム感が凄い感じられる。

こうなると、またちよつと気持ちよくなりたくなる。もう俺はやりたいことをするだけなのだ。AVやエロ漫画の、勝手に進行して、勝手に尺を取るそれとは違う。言えば、動けば出来るのが最高すぎる。

「はあ、顔にも押し付けて……」

「ん、こっ……」

「さつきみたいにですよね」

「ほんと、おっぱいが好きですね……こうですか？」

「っ、お、おお……ああつ、最高……！」

3人が俺の言葉に従って、俺の顔におっぱいを押し付けてくれる。先程は2人だったが、今度は3人だ。6つのぬるぬるおっぱいが、俺

の顔を、頭をむにゅむにゅと挟み込む。そのたつぷりのポリューム。どこを見てもおっぱい。顔を、首を動かせばどのおっぱいも味わえる最高の状態に、俺は夢中になって顔を動かすしかない。はぁ……これ全部俺のとか最高……死ぬる……。

性的嗜好を満たされるのがこんなに幸せだとは思わなかった。もうこれは抑えられない。否応無しに興奮してしまう。休憩だって言ってるのに、もう気持ちよくなりたくなる。

「あー……はやりさん、葉……こっちも洗って……」

「ふ、2人で？」

「えつと……」

「2人でおっぱい合わせて……そう、そんな感じで——あつ、あー……！」

俺の言葉に若干惑ったはやりさんと葉に説明しながらおっぱいを肉棒に寄せてもらう。するとハートビーツサンド再び。夢のWパイズリの完成だ。

4つのおっぱいが腰の上で跳ね回る。ああ、ヤバい。チンコでおっぱい独り占め気持ちよすぎる……！

「ああ、もう、たまらん……！」

「んっ♡ 腰、動いて……また出したい？」

「先輩のおちんちん、またカチカチですごいです……♡」

ぱちゅっ、ぱちゅっ、と2人のおっぱいに腰振り。KカップとMカップのダブルパイズリ。1つでも俺の肉棒を覆い隠せる爆乳が2つ。

あまりにも贅沢過ぎる奉仕を受けて、腰の奥がグツグツと熱をためていく。

その熱を発散するように、2人のおっぱいの間を俺の肉棒で往復させる。俺の肉棒の形になって、むにゅむにゅと吸い付いてくる乳房の饗宴に官能がめちやくちやに高まる。

「おっぱい気持ちいい……！……くっ、あつ……腰溶けそう……！」

「はぁ……じんくん、気持ちよさそう……♡ しおりんと一緒にものと押し付けてあげるねっ！」

「はやりさん、んっ、あつ、おちんちんが乳首擦って……びりびりきちやいます……♡」

「あ、ああ、左右からむにゅむにゅって……!」

2人がおっぱいを押し付けると、間に挟まれた肉棒が乳圧に押しつぶされて、快感に喘ぐ。

ハートビーツの二大おっぱい。共に3桁の爆乳を俺一人で独占している。

100センチのKカップ。104センチのMカップ。合わせて200センチを超える爆乳による奉仕を、俺の肉棒一本だけで堪能していく。更には、

「んっ、また出すんですか……なら出していいですよ……ほら、後ろからも押し付けてあげます……」

「うっ、ああ、良子……!」

背後からも、背中にその103センチのLカップの爆乳をむにゅむにゅと押し付けて、首筋にちゅっちゅつと吸い付いてくる良子が。

3人によるハーレム奉仕。背中におっぱいの背もたれ。股間が2人の深い谷間に絶え間ないほど包み込まれた肉棒は、両側から押し寄せる乳の圧力に歓喜の身震いを繰り返している。

贅沢すぎる奉仕だ。思わず2人の肩に手を置きながら、

「はやりさん、良子、栞……! 大好きだ……!」

ダブルパイズリを受けながらの告白。不誠実にも程があるが、3人はそれを恥ずかしそうに顔を赤らめて受け止めてくれる。

「うん、はやりも大好きだよ……♡」

「私も……好きです……」

「先輩、大好き……もつと気持ちよくなって……♡」

背中から強く抱きついてくる。股間に向かって身を寄せながらそう言うってくる。間に挟まれる俺と俺の肉棒に、むにゅう……♡
と、乳圧を掛けてくれる。

もう腰を突き上げるしかない。

「ああ、気持ちいい……ああ、もう、大好きだ……!」

そう言っただけは2人のおっぱいに向かって腰を叩きつけた。

たぶつ、たばつ、と俺の腰に当たって音を鳴らす。3桁アイドル爆乳の所有権を示すように肉棒がギンギンに胸の中で膨らむ。

「あんっ、じんくんの、また胸の中で大きく……♡」

「先輩、男らしいです……♡」

男らしさの象徴である肉棒を感じてうっとりとする股間の2人。もうその褒め言葉だけでも堪らない。俺への愛情を表すようなたっぷりとした奉仕に腰の奥から堪らない快感が漏れ出てきて、

「ああ、イク……！ またイク……！ あっ、出るっ……！」

「きやつ、あんっ、また出て……♡」

「んっ、先輩、沢山出していいですよ……♡」

「……ずるいです。私にも、後1回は最低でも出して貰いますからね？」

「うっ、ああ……ヤバイ……ほんと、最高……」

ダブルパイズリを受けて、2人のおっぱいの中で射精。とてつもない満足感を味わいながら、気持ちよさには歯止めがないというか、まだまだ出来そうなのが我ながら恐ろしい。

湯船に入ってまた少し休憩したら、2回戦どころか3回戦に突入するだろう。

だがふと思う。このハーレムの快感は、明日になればまたしばらく味わえなくなるのだ。

それが惜しい。これだけの快感を知った後だと尚更。捨て去ることとは絶対に出来ないものだ。

……でも、もっと増やせば……。

俺は今からは長野へと向かう。幾つかの依頼が来ているからな。それなりに滞在する予定ではある。

そこでまた、新たな女をオカルトによって惚れさせることが出来れば、これと同等の——いや、これ以上のハーレムを味わうことが出来るのだ。

それを思っ、俺は浴槽で3人の美女を侍らせながら未来に期待する。野望が更に、その原動力が増した気がして、俺は自分の未来へ期待した。このオカルトがあれば自分だけの最高のハーレムが作れる。

ネガティブなことは何もないと。

——それだけを思っていたのは、話を聞くまでだった。

3つ。3人からそれぞれ、3つの話を俺は聞いた。それは一つ一つが考えさせられるものだった。まあ人間だし、生きていく上での面倒事つてのは誰にでもあるものだ。大したことではない。仕方ない。

まず一つ。はやりさんからだ。

夜中、眠っていた俺がトイレに行って部屋に戻ろうとすると、はやりさんもちようど起きてきたところで、なんとなく2人きりで話をした。そこで何気なく、はやりさんが思い出したように言った一言が、「——あつ、そういえばじんくん。名古屋に戻って時間があつたら、なおこちゃんに会いに行つてくれる？　なおこちゃんが話があるんだって」

「た、丹羽さんから……!?!」

俺はその話に、正確にはその名に戦慄した。

色んな意味で俺が恐れる先輩の名だ。なんというか、うん、俺は色んな意味であの人に頭が上がらない。

「……ど、どうしよう……俺、何されるんだろうな……とりあえず、土下座の練習でも……」

「お、大袈裟だよじんくん。きつと大丈夫だよ。なおこちゃんは優しいから——多分」

「多分じゃ大丈夫じゃなくないですか……?」

——とまあ、こんな話がまず1つ。

そして2つ目が朝、早起きして朝食を作る栞に、偶然先に起きて話をした時のこと。

それは話というか、何気ない願いだ。

「……先輩は、もうプロには戻ってくるつもりはないんですか?」

「……いやまあ、戻れないだろ。俺の実力じゃあ」

「……それは、戻れるなら戻るってことですか……?」

「ん……それはまあ……そうかもな」

栞のトーン低めのそんな言葉に俺は曖昧に答えるしかない。栞とは約束の事があるため、ちよつと強くは言えないのだ。

「……私は、出来れば先輩には……」

「……まあ、考えてはみる」

栞の小さな声に、こちらも聞こえないくらいの小さな声で答える。それだけ俺にプロに戻ってきてほしいみたいで、その気持ちは勿論嬉しいが、現実的に難しいことも理解しているため、そう安請け合いは出来ない。

結局、その話はそれっきりで、後は普段の栞だったが、やはり栞としては俺の今後が心配であるらしい。それが2つ目。

そして3つ目——そう、3つ目だ。

俺は帰りの新幹線に乗るための駅のホームで、良子からそれを聞いたのだ。

「……ジン。あまり言いたくはない話なんです……」

「なんだ？ 言いたくない話なら——」

「……私の方に、電話が来ましたよ。……ジンの、実家から「っ——」

それを聞いた瞬間、俺は頭が冷えていくのを感じた。

良子は真面目な、それでいてこちらを心配するような表情で俺を見ている。良子もある程度は俺のことを知っているからだ。

「プロをクビになったのなら、家に戻ってこいと——要はそういった内容の電話でした」

「……そうか。悪かったな。俺の家の事に巻き込んで」

「いえ、事情はおおよそ理解してますから。……でも、やはり今後の事は……」

「分かってる。なんとかするさ。……はあ、あの糞爺……」

「……実家に、鹿児島に一度戻るなら、私も付いていきますよ」

「……は？ いや別にそこまで気を使わなくても——」

「いやいや、ちよつとハルにも久し振りに会いたいですしね。仕事も、少しくらいなら融通が効きます。だから……話をつけに行くなら、一声掛けてください」

「……はあ、分かったよ。その時は声を掛けてやる」

「サンキューです」

良子の申し出を受け入れ、俺は溜息を吐く。まあ別に良いんだけど。ぶつちやけ、よほどの事が無ければ戻るつもりはないし、戻るとしてもまだ先だ。今は考えなくてもいい……はず。

だから俺は帰りの新幹線の中で長野で行く予定の高校との日程を確認すると、現実逃避気味にネット麻をすることにした。

するといきなりだ。個人チャットが飛んできた。

『こんにちは、ヤクマルさん』

『あ、どうものどっちさん。珍しいですね。平日の昼からいるなんて』『今日はお昼までだったんです。だから帰ってきて麻雀でもしようかなど……ヤクマルさんがいてくれたので、結果的に良かったです』『相変わらず懐いてんな……』

のどっちとかいうめっちゃつよネット麻プレイヤーとのチャット。この間フレンドになって、まだ数回しか交流してないのに、かなりフレンドリーな感じを出してきている。

別に変ではないが、何がそんなに気に入ったのかよく分からない。現実で友達がいなくてかなのかな……とちょっと少し哀れんだが、よく考えたら俺も友達は多くないのでブルーメンだった。なのでそこは気にしないことにする。

と、そこで思い出したようにチャットを打つ。そういえば、言っておくことがあったのだ。

『そういえば今月から、仕事で出張するのでもしかしたらあんまりインできないかもしれません』

『そうなんですか……あの、聞いていいのかわかりませんが……その、国内ですか？』

うん、まあ別にいいけどね。気を使ってそんな曖昧な言葉を聞いてくるくらいなら、別に直接聞いてもそんなに変わらないというか……まあ、特に問題はない。場所を教えたからなんだと言うのだと、

『あ、はい。長野ですね。しばらくは長野に滞在する予定でして……まあ別にホテルのパソコンや携帯でもイン出来るので、全く無理という訳ではないですが、期待されるのもアレなので言っておこうかと』と、打ってみたのだが、返事が返ってこない。うん、まあのだっち

はよくこういうことがあるので別に気にならないけどな。

駅で買った弁当でも食べようかな、と袋を開いていると、その段階でチャットが返ってきた。なにになに……、

『実は私、長野住みなんです。凄い奇遇ですね』

「えっ」

え、なにそのニアピン。いや、ほぼホールインワン。そういう偶然は……いや、いらないうるか、ええ……？ ちよつと困惑する。

別に構わないのだが、なんとも言えない感じだ。うーん、どうしよう。

『そうなんですか。確かに、凄い偶然ですね』

『はい。もしかしたら……ばったり会えるかもしれませんね』

『うーん、自分は仕事もあるのでなんとも言えませんが、そういうこともあるかもしれませんね』

『……あの、もし良かったら……オフ会というのも、どうでしょうか？』

「まあ、そういう展開になると薄々思ってたけどな……ええ、どうすつか……」

オフ会。いわゆる、ネット上での知り合いとリアルで会うことだ。

まあ、これは別に、俺としては忌避感がある訳ではないのだが、オフ会ってのは意外と地雷も潜んでるのでちよつと悩みどころではある。態々遠出してオフ会を快諾してみたら、男2人が何故か喧嘩して、女1人が男1人に告られたとか云々で相談され、次の日に露骨に落ち込んだその男が途中でいなくなったり、そもそもとんでもないヤベー奴が紛れ込んでたり——とかまあ、そういう話もオフ会には多いものだ。

ただのどつちは割と常識はある大人っぽいので、大丈夫そうではある。明らかにノリが良い奴より、こういう人の方が地雷率は低い。面白いかは別として、落ち着いた人ならそこまで失敗することはない。まあ、最初はヤベー奴かと思ったし、今も疑惑はあるが、ちよつと距離の詰め方が下手なくらいで、言動は普通だ……もしホモなら一瞬で逃げるけど。まあどうということはない。大丈夫なはずだ。

それに本当にヤベー奴だったら即解散すればいい。逃げて関係を切ったっていい。だから少し悩んで——俺はチャットを打ち込んだ。『いいですよ。仕事の合間とかになるので、少し遅くなるかもしれませんが』

『ほんとですか？ 嬉しいです。ヤクマルさんと会えるの楽しみにしていますね。日にちや時間が分かれば連絡してください。可能な限り、都合を合わせます』

『分かりました。向こうに着いてからになりますけど、折を見て連絡しますね』

『はい、よろしくおねがいします』

こちらこそ——と打ったところで、息を吐く。

なんか長野遠征は忙しくなりそうだな……と。出来ればもつと気楽に行きたいものだが、目的が目的なのでそういう意味では気合を入れていく必要がある。

俺は弁当を食べながらのどっちと対局し、来週には向かうことになる長野への想いを馳せた。——ちなみに、のどっちには負け越した。

信州の名門

『東郷君って麻雀も強いんだねー』

『優勝するなんてすごい』

『まごち、おじこじや。将来はプロになつとーかもしれんね』

——周囲には大勢の期待する人々がいた。

『——こげなのは遊あそつだ』

『もつと強なれ！ 今のままじゃ、なんも出来ん！』

『このままじゃ、がんたれじゃ』

——良くも悪くも、期待されていた。

『麻雀……私もやってみます』

『次は勝てる？』

——だから、失敗してはいけない。失敗してはいけなかったのだ。

『東郷君、負けたんだって』

『ええー、せつかく応援しちよつたのにー。残念じゃつとー』

『わい（お前）に麻雀の才能はないと言うたじやろが。わいは儂ゆの言ゆこ
とを聞けばええんじゃ』

——だがそれでも、何度かは立ち上がった。

『やzeroしかつ！ 馬鹿な事を言な！ 高校は東京のに行つたど？』

『東郷君、うちに来る気はないか？ 君のポテンシャルは高い。君ならばプロでも活躍出来ると信じているよ』

『東郷プロ！ プロ1年目でのタイトル戦決勝卓に勝ち上がった今のお気持ちはい！』

——だがやっぱり、駄目だった。

『東郷プロの成績はパツとしませんよね』

『今の東郷プロは牌効率も良いし、防御もそこそこ上手いが……それだけだな。昔の……それこそ、全小や世界ジュニアであったような怖さが全くない。中学時代まではその頃の面影もあったのだが……』

『……東郷。お前はまだ1年目だ。私のように50年とやっているならまだしもだ……気に病む暇があるなら打て。それで駄目な時は……あー、そうだな。こうして、飲み連れて行ってやるくらいは出

来る……』

『大丈夫大丈夫！ はやりにもそういう時あったけど、乗り越えられたから！ 東郷くんも乗り越えられるよっ☆』

『私も来年にはプロデビューです。だからフアイトですよ。ジンなら、また昔みたい……きつと、活躍出来ます』

——応援してくれる人は沢山いた。大勢とまではいれないが、確かにいた。

だが駄目だ。どれだけやっただとしても、自分はこれ以上、上にはいけない。上にはいけないのだ。

『血、血が……!?!』

『救急車じゃー！ 早よしろ!!』

『今、何よしたんだ……?』

『——良かぞ。良か腕じゃ。仁、そいでくさ、儂の孫じゃ』

——そう、駄目だ。駄目なんだ。俺は、駄目なんだ。

『仁。わいには母親かかどんも父親ちちどんもない。あいらはわいを捨てた。わいの家族は妹1人と儂のみ。他には何も無い。才能もない。何も無い。わいにあるのは“これ”一つのみじゃ』

——そう、俺という人間はゴミだ。クズだ。

俺には普通の人間が持つてるような物は何一つ持っていない。人間のクズだ——そう育てられた。

『何も考ぐつな。命いのちつを捨てろ。味を悟ることだけを考げろ。だがあの馬鹿もん共のようにはなるな。わいは、儂の言っことだけを考げればいい。下らない道徳心は捨てろ。自分の身すら案じるな。負くいこちや、許さん。わいは——』

——そう、俺は——。

「……………ん、ふぁー……………」

目が覚めると、頭と首が痛かった。そういうこと、よくあるよな。

そういう時って大体、二日酔いだったり寝違えてたりする。まあ俺は二日酔いは全然しないからその線はない。

つまり寝違えた訳だが、まあそれもしようがない。なんて言っていた、俺が寝ていたのは、

「つつー……車で寝るもんじゃねえな……やっぱり……」

俺は中古のレクサス——俺の愛車の中でボヤキながら身を起こした。

場所は長野県内のサービスエリアだ。時刻は昼頃。駐車場に車を止めてちよつとしたお昼寝だ。

というのも、長野には車で行くことにしたため、朝から高速乗って2時間ちよつとのドライブをしたのだが……まあ朝早かつたのもあつて眠くなつてしまつたのだ。

だからちよつと、ほんの30分か1時間ほど休むつもりだったのだが、思つたよりがつつり寝てしまつていた。時間に余裕はあるとはいえ、ちよつと時間を無駄にしたかと思う。

いや、電車か新幹線で行こうかともちよつと思つたけどな、ちよつとだけ。まあ1校だけならだ。思つたのは一瞬だけで結局は車一択だつた。

何しろ長野って……広いだわ。意外と。いや分かつてたつもりだが、長野って意外と広い上に、依頼が来てる高校はどつちも長野県内だが距離があつたりして、車がないと不便なのだ。

かといって、そこそこの滞在をするならレンタカーを借りるのもお金が掛かる。一応、節約出来るところは節約するというか、そこまで切り詰めてはいないが、無駄金を使う余裕はない。金持ちじゃないんだ。普通の大人なら普通の事である。

故に車で長野県にやつて来た訳だが……ちよつと首痛いし、もうちよつと休憩しようかと思う。ちよつとお昼時だし、飯でも食つてくかと車を降りる。

まあ、春先なんで人はそこそこ。長期休暇つて訳じゃないし割と空いてて快適である。

「何が名物なんだ……？ ……ほー……信州味噌ラーメンに信州せいろそば……後は山賊焼きか……」

サービスエリアに来たら、ちよつと飯が気になるよね。郷土料理と

か食べれるし。

そんな訳でお店の入り口にあるフードメニューとか、携帯で調べてちよつと色々見てみたが、どれも美味しそうで迷ってしまう。長野って意外と美味そうなもの多いな……滞在中の飯が楽しみだ。

やっぱ旅先の飯ってのは結構重要だよな。美味しいもんを食べるのは純粹に楽しみでやる気だつて上がる。

とはいえ今は起き抜けだし、揚げ物やラーメンって気分でもない。どっちも好きだが、今は蕎麦の気分だ。俺はお店に入って手打ちの信州せいり蕎麦の――

「いらつしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

「信州せいりそばの……あー、天ぷらセットで」

「かしこまりました」

いや、結局揚げ物頼むのかよ……と自分で自分に頭の中でセルフツツコミ。いや、直前まではそんな気はなかったのに、いざ注文する時になって結局気が変わる時つてよくあるよな……。

だがまあ、蕎麦だけだと少ないし……あ、でも大盛りつてあるじゃん。しくじつたな……今からでも変えて貰うかとも思うも、天ぷらは天ぷらで美味そうだったし、まあいいかと思う。

それにしても結構良さそうなお店だ。値段も、蕎麦屋にしては結構お高め。サービスエリアであることを差し引いてもそれなりだ。

実は俺は蕎麦は結構好きなので、何気に楽しみだ。せっかくだから長野にいる間は名店を巡ろうと思う。蕎麦とうどんなら蕎麦派だ。一応な。

なぜ一応かと言うと、安いうどんと安い蕎麦なら圧倒的に安いうどんの方が好きだからだ。うどんつて安くても高くても安定して美味しいんだよね。その点、蕎麦つてのは開きも一応ある。

逆に良い蕎麦と良いうどんなら圧倒的に良い蕎麦の方が好きだ。美味しい蕎麦つてのはレベルが高い。別に蕎麦通つてほどではないが単純に美味しいと思う。蕎麦湯とかも好きだしな。良い店だと食前の蕎麦掻きなんかも美味しいし、でも俺、汁にじゃぶじゃぶ漬けて食うし、薬味も最初からめっちゃ入れるから、蕎麦通の人から仲間扱いされる

と困る。すげえ変な目で見られるし。

だから言うなら、立ち食いとかの蕎麦、そこらのチェーン店のうどん、良いお店のうどん、良いお店の蕎麦の順で好きなのだ。両方最高品質だとすれば蕎麦。だから一応、蕎麦派。立ち食い蕎麦も普通に好きだけだね。ネギめっちゃ入れたくなるやつ。異論は認める。というかどうでもいい。一応っただけでどっちも好きだし。だからうどん県の方はシユバって来ないで。昔、SNSに似たようなこと書いたらめっちゃシユバってきてビビった。というか、意外と反響があった。この手の、どっち派？ みたいなネタってそれなりに盛り上がるよね。俺も嫌いじゃないが、マジで味覚否定からの罵詈雑言とか人格否定までしてくるようなマジな奴は怖い。いや、敢えて言うならであって、割と皆どっちも好きだったりするし、別に嫌いであつても個人の嗜好なんだからどうでもいいよな。たまにそういうのが湧いてくるとそっ閉じする。

ちなみに俺はきのこ派だ。ネコ派だ。紅茶派だ。コーヒーは飲みすぎて体調悪くなつてからあんまり飲まない。i o h o n e 派だ。目玉焼きはそもそもそんなに食べないが醤油。ラーメンは大体好きだけど、一番食べる頻度が高いのはとんこつ。お好み焼きは大阪風。たこ焼きはふわふわが好き。牛丼は吉〇家。ま〇屋は個人的にカレーを食べに行くところ。す〇屋は……安い、安くなって。巨乳と貧乳なら巨乳。おっぱいとお尻ならおっぱい——とまあこんな感じだ。全部合う奴は俺と親友になれる。全部合わない奴は……うん、まあでも話は盛り上がると思う。

ぶつちやけあまりこだわりがなくて何でも美味しいとかいう奴の方が人から慕われると思うけどな。特に食べ物関連。俺みたいに変にこだわり持つてる奴は面倒だし……いや、俺もそこまでこだわってる訳ではないと思うけどね。ただ話が盛り上がるのはこだわりというか、意見を持つてる奴の方だ。俺もボブとは何度もそのことで喧嘩——というほどでもないが、どの店に行くかで揉めたこともあった。あいつ、ま〇屋派だし……うん、まあそういうこともあるだろう。友人同士でも。

そんなことを考えながら、俺はひたすら待つ。手打ち蕎麦だし楽しみだな、と。そう思いながら俺は携帯を開いて適当に情報サイトでニュースや記事を見たりする。まあ麻雀も色んなことも。

「んー……春季大会で姫松が5位ねえ……優勝はまた白糸台で、千里山は2位……新道寺女子は……うっわ、微妙な順位……」

ちょうど高校女子の春季大会結果のまとめや記事が出てきてたので色々と見てみる。なんだかんだで高校の大会ってのは面白かったりするんだよな……オカルトだらけでたまに萎えるけど。

全国ランキングとか見てみると、我が母校は女子で1位だったりするし、応援するまでもなかつたりする。地元鹿児島の水女子も全国3位だしな……応援しなくても大体は勝つ。

まあどつちも魔物がいるからその影響が大きいのは言うまでもない。宮永照に神代小蒔——どつちも超やべー奴だ。神代小蒔は是非お近づきになりたいが、宮永照の方はマジでキツイ。成績とか見るとなんだこいつってなる。もうプロ行けよ。プロでも余裕で通用するから。高校だと殆どの試合が弱い者いじめになっててヤバイ。良子とかも高校時代は中々暴れ回ってたが、宮永照はそれ以上だ。

たまーにこういう牌に選ばれた魔物が現れるから怖い。勝てる気がしないよな、うん。でも白糸台からコーチ頼まれたらどうしよう……大人しく死ににいくしかないな。俺がこれから行く長野の高校には魔物がないことを祈る。いや、1人ヤバそうなのはいるんだが……魔物かどうかはまだ分からない。俺は実際に見たことないしな。牌譜や試合動画くらいは見たが、まだオカルト持ちのやべー奴ってくらいで、魔物って程ではない。俺が死ぬには十分なんだよなあ……。というか、なんかこう、そんなに強くないけどおっぱいはでかい美少女とかいないかな……そしたら俺がオカルトで……ふふふ。

「お待たせしました。天せいろでっ、あっ!?!」
「うおっ!?!」

とかなんとか考えてたら、急に店員がやって来て天つゆ零してきやがった。それでちよつと服が濡れた。おいおい、天つゆかけてんじやねーよ。蕎麦つゆじゃないだけマシだけど。

「も、申し訳ありません。ただちに拭くものを……!」

「……ああ、いえ、おしぼりで拭くので大丈夫ですよ。そんなに濡れてませんし」

と、だがまあ俺は笑顔で対応しておく。脇に置いておいたおしぼりで軽くズボンを拭きながらだ。

「申し訳ありません。直ぐにお取替えます……」

「天つゆだけ取り替えてくれればいいですよ。他のは大丈夫そうですし」

とまあそんな感じで謝罪する店員に適当に対応。この程度で怒ることもない。そう、なんと言ったら、俺は――

「――でさく、あいつ、仕事中にいきなりこんな風につ――あつ」

「ちよつとく、何ぶつかってんのよく、ウケるんだけどく」

「つと、あぶねえあぶねえ。危うく携帯落とすところだった。つと、すいませんね」

「……いえ、大丈夫ですよ」

「早く座ろく、足疲れちゃったく」

「おお、そうだな」

……まあいきなり背後からぶつかってきて俺の方は携帯を床に落としたが、別に怒ることはない。そう怒ることはない。

完全に向こうの不注意だし、そもそもいい歳して店の中ではしゃいでんじゃねえよって言いたいし、女の方もなんかムカつくというか鼻につく。いやウケねえよ。というかここサービエリアで確実に車で来てるはずなのに足疲れたってなんだよ。歩いて来たんか？

俺は携帯を拾いながら舌打ちしそうになるのを堪える。落ち着け。俺はあんな奴らに怒る必要はない。こう考えればすぐに怒りは収まる。――俺は、お前らと格が違うんだと。

どうやら彼女連れのようなだが……フツ、俺の勝ちだな。なんていつたって、こちらには4人の女がいる。

瑞原はやり、戒能良子、宇野沢葉、真屋由暉子――皆、とんでもない美少女達だ。スタイルがとっても良く、おっぱいが大きくて、性格だって良い。前者3人に至ってはグラビアに載るような人気プロだ。

こっちの戦闘力は圧倒的だ。それに比べてそっちはどうだ？ 明らかに劣っている。俺の女の方がイイ女だし、俺の方が圧倒的に勝ち組だ。その程度の女1人しか抱けないような奴に怒ってもしょうがない。争いは同レベルでしか起こり得ないんだからな。

——とまあ、こんな感じで心の中でマウントを取ってみれば怒りは収まる。とても気分が良くなるからな。

そう、俺は現代でハーレムを実現している男。突如発現したオカルトの力で美少女達を惚れさせる現代の帝王なのだ。……いやまあ帝王は言い過ぎか。そうでなくとも俺が普通の人よりも最高に恵まれた状況で、最高の体験をしているのには間違いない。

だからそんなちよつとしたことで怒る必要はない。ふっ、お前ら有象無象は知らないだろ？ 例えばだ。あのはやりさんが俺の下で可愛い声であんあん鳴きながらあのおっぱいをぶるんぶるん揺らして俺で感じてだな……奥を突くとそれはもう可愛くおねだりして……つと、まずい。思い出すと興奮してしまう。こんな場所で股間を膨らませれば変質者待ったなしだ。自重しないと。

でも最高だったなあ……あの4P。もうほんと、しばらく思い出しでは部屋で1人、ニヤついてしまうくらいには最高だった。自分でもその様子は気持ち悪いと思ったがしようがないだろう。あんな幸福感はそうない。思い出すだけで幸せ過ぎるのだ。

今でも4人とは時折チャットで連絡を取り合ってるし、俺はモテモテなのだ。オカルトの力とはいえ、現実なのだ。このことに優越感を感じていれば、多少の怒りは受け流せる。持てる者の余裕と言う奴だ。

金持ち喧嘩せずというが、その意味をちよつとだけ理解した。他者より何かに秀でる者はその分だけ余裕が持てる。他者よりも上で、多少迷惑を掛けられても心に負担がなかったり、余裕がある分、滅多なことでは怒らない。

俺も同じことだ。元々、そこらの一般人相手に怒ることはなかったが、それでも今のハーレム的な状況であれば怒りは以前よりも湧いてこない。一瞬イラツとするくらいだ。

とはいえ、今はこの場には1人であるため、そこまで優越感に浸れる訳ではないが、まあこれくらいなら――

「すいません！ 替えの天つゆをお持ち――ああつ!？」

「……………」

「す、すすすすいません!! 申し訳ありませんお客様! 足が滑って

……………また天つゆを……………」

「あはは、ウケる。見てあれ、写真撮つところ」

「おいおいやめてやれよ、可哀想だろ、ぷぷつ」

「……………怪我はないですか?」

そう、怒らない怒らない怒らない。怒るな。天つゆを顔にぶっかけられたくらいで怒るな。こんなガチでぶっかけられるのは漫画くらいでしか見たことないし、実際に足を滑らせる馬鹿を見たのは初めてだし、遠くの席でこつちを見て笑う馬鹿なカップルもぶん殴りたくなるが怒るな。俺は元プロだぞ。競技者だが、人気商売でもある。怒ると世間体が悪い。ハーレムの主でもある。こんなことで怒る器の狭い奴にはなるな。いやでもこれは怒っていい気がするが怒るな。一度怒ったら止まらなくなりそうだし。落ち着け。落ち着いて顔と服を拭いて、店員に手を差し伸べろ。そして続けてこう言うんだ。

「……………クリーニング代は請求しませんので、お代はタダにしてもらつていいですか?」

「えっ、それはちよつと……………」

「……………」

よし、落ち着け。落ち着け。ステイステイ…………ふう、耐えたな。耐えた。怒りつてのは6秒くらいで収まるらしいからな、それくらい耐えればいい。なので怒りは消えた。キレそう。

俺は黙ってジャケットを脱いで横の椅子に掛けると、蕎麦を食って店を出ることにした。…………それにしても、あんまり染みになるようなものかけられなくて良かったな…………とりあえず、早めに水で洗つところ……………というか、最初の気分通り、天ぷらを頼まなければ今の不運に見舞われることもなかったと考えると、完全に裏目つたな……………判断をミスった。麻雀でもよくある。

そんな感じで、俺の長野遠征は最初からなんとも先行きが不安になる微妙なスタートを切った。

「……一応落ちたか」

宿泊するホテルへチェックインし、部屋で一息つく。とりあえず、もうちよつとしたら俺はまた出かけねばならない。

先程天つゆを零されたいつもの紫色のジャケットをコインランドリーにぶち込んで部屋で乾かす。一応染みにはなっていない。

……まあこんなこともあるかど、同じジャケットをもう一枚持つてるから問題ないけどな。

良子が今年の誕生日プレゼントで送ってきた同じブランドの細かいデザインが違うだけのジャケットを鞆から取り出して身に着ける。うん、やつぱりしつくり来るな。なんだかんだでこのスタイルが俺は落ち着く。

ガッチガチのスーツほどフォーマルでもないが、カジュアル過ぎでもないこの服装。ちよつとホストっぽいとも言われるが、中途半端な俺にはこれくらいがちょうどいい。仕事をする大人、プロとしての体裁も保てるしな。

「とりあえず、仕事の事でも考えるか……」

と、俺はベッドに腰掛けて携帯を開く。最近、独り言が多くなってきたな。独り言なので相当小声ではあるが、たまに独り言を呟いてるなど自覚して可笑しく思う。でも別にそこまで気にしない。そんな誰にでもありそうな堂々巡りの事を頭の隅に、俺は行き先を改めて確認した。

「風越女子高校……」

そう、俺が向かう最初の高校は風越女子高校。長野の名門、麻雀強豪校だ。

高校麻雀界に多少詳しくければその名を聞いたことはあるだろう。

前年、ある高校に敗れるまでは6年連続で全国大会に出場していた由緒正しい名門。最近は古豪とも言われるが、別に昨年負けただけな

んだから古豪って程じゃないと思う。マスコミとか記者ってそういうレッテル貼り大好きだからしょうがないけど。俺もその手の記事では散々だったしな……。

まあ俺の話はどうでもいいとして、なんととっても強豪校だ。俺にとつて、2回目となる指導だが、正直、有珠山高校の時とはわけが違
う。

向こうは……まあ、一応弱小チームだ。実際には獅子原とかいう化け物を筆頭に、全国レベルの打ち手であるユキや、他の面子もそれなりに出来る面々が揃っているが、まだ実績を持ってないたった5人のチーム。

しかし強豪校、風越女子は部員は80名以上。長野県で麻雀を真剣にやって大会で成績を残したり、プロになろうと思うなら風越女子の門戸を叩く。もう一つの強豪校は昨年から強くなっただけで、部員も多
いって訳じゃないしな。

強豪校は選手層が厚い。つまり、俺にとつては品定め出来る数が多い訳だが……その分、狙いの相手と対局出来る機会も少ないと見るべきだ。

向こうの要望によっては特定の選手と打たされる可能性もあるし、こちらから打ちに行くのも限界がある。見どころがあると言つて対局に誘つてもいいが、あまり不自然過ぎるのは避けたい。

まさか80名以上の部員全員と打たされるようなことはないと思うが……それでも半分くらいは覚悟した方がいいのだろうか。まあ順当に考えるなら、部内のレギュラーや見どころのある者、精々10名から20名くらいを相手に見ることになるだろう。

俺の指導料は安いとはいえ、一応金を払つてるのだ。遊ばせておく理由はない。強豪校ではよくあるプロとの練習試合や指導なんかは、ひたすら対局することだ。練習にプロが交じる感じだな。どこも似たようなものだ。

風越女子もプロくらい何度も呼んでいるとは思うが……そういや、なんで元プロの俺を、つて感じだが、話した限りでは、やっぱり安いつてのが大きいか。強豪校の予算を考えると、5000円なんて端金

だ。本当ならその10倍以上は余裕で掛かるし。

一応俺も、あれからブログとSNSを更新して、もうちよつと詳しい情報を載せておいたのだが、それも効果があるのかどうかはまだ分からない。一週間毎に5000円値引きとか、遠方でも問題ないこと。そしてついでに、ちよつとした麻雀に関するそれっぽいことを書いておいた。牌効率の事とかそういう感じの。一応動画付きで初心者にも分かりやすいようにだ。

一応そつちは上手くいつてるような気がする。というか、意外と反応があるのだ。元プロの俺のSNSなんてチエツクする酔狂なファンがまだいたとは正直驚きだが……まあ、コアなファンにとってはまだ有名らしいし、そういうこともあるだろう。

今後、それを見て他の高校が指導を依頼してくることも……あつたらいいけどなあ。元プロに頼む高校がどれくらいあることか。値段が安いことだけが勝負だな。

「……はあ、そろそろ行くか……」

俺は立ち上がり、鍵や財布、携帯を持って部屋を出る——シャワーは入ったし大丈夫だと思うが、天つゆ臭くないよな？ 多分大丈夫だ。よし、行くぞ。

と、俺は勝負師の顔で風越女子高校へと赴いていった。——最低な意志を胸に秘めて。

「どうも久保さん、元プロの東郷仁です」

「風越女子高校麻雀部コーチの久保貴子です。東郷さん、本日からしばらく、うちの部員をよろしくお願いします」

風越女子高校にやって来た俺は、事務室のような場所で早速相手方と挨拶を交わした。

久保貴子さん。依頼される時に電話でも話したが、中々にかっこいい感じの姉さんだな。姉御って感じがする。ちよつと目つきが鋭いが、礼儀正しい普通の大人だ。安心する。そういう人相手だと、俺も割とやりやすいのだ。

「それにしても、風越さんほどの強豪が、自分なんかには依頼するとは……最初はびっくりしましたよ」

「いえまあ、うちはOGとの練習試合が多いので、プロはそんなに呼ぶことはないんですが……電話でも言いましたが、東郷さんは格安だったものですよ」

「ははは、まあそうですね。でも値段以上の働きはするつもりですよ。ご安心ください」

「はい、お願いします。——つと、そろそろ部員達も集まる頃ですよ、部室に行きましょうか。皆には昨日の内に元プロの先生が来ることは伝えてありますので」

「はい、紹介してくださいとありがたいです」

——とまあ、特に含むところのない大人のやり取り。俺もたった2年とはいえ、そういうやり取りには慣れたものだ。

久保さんは俺の一個年上だが、一応俺の事をプロの先生として扱ってくれるし、礼儀正しく穏便な感じで非常にやりやすいな。これなら指導の際も俺に都合良く進められるかもしれない。

そう思つて、俺は風越女子高校麻雀部の部室へ入った——のだが、

「——おまえら、全員揃つてるかあ!!」

「っ、はい！ おはようございます!!! コーチ!!!」

「っ……」

一瞬、俺は最初の声を誰が放つたのか分からなかった。

が、練習部室の一つである広い部室にいる麻雀部員達が一斉にこちらに——正確には俺の隣に挨拶しているのを見て悟る。久保さん……まさかそつち系かと。

それを俺に理解させるように、久保さんは先程とは打って変わった鬼の形相で部員たちの前に立った。ああ、うん。これ絶対下の人間が辛いやつだ、と。

「よおし!! 揃つてるな!! 昨日言った通り、今日からお越しいただいた元プロの先生を紹介する!! ——では東郷さん」

「あ、はい」

いや……俺は大丈夫だが、これ、普通に怖いだろうな、うん。

特に新1年生と思われる部員は超ビクビクしてる。まだ部に入つて1ヶ月と経つてない内にこれだろうし、まあキツいだろう。

ふるいに掛けられてるとも言えるが、2年生や3年生っぽい生徒もビビってるし、単純に怖いのだろう。体育会系の先生ってまー怖いもんな。俺は平気だけど。これくらいは大したことないしな。白糸台も監督は普通だったが、先輩は結構体育会系だったなあ……俺とボブとかは全然言うこと聞かなかったけど。でも実力で黙らせた。3年の時の俺は別に体育会系って訳じゃなかったとは思うけど、別の意味で怖かっただろうし、今思うと悪いことしたなっと思う。思うだけ。とりあえず俺は軽く挨拶する。

「元プロの東郷仁だ。あー……よろしく」

「よろしくおねがいます!!!」

やつべ、急に何を言うかど忘れして簡素な自己紹介になった。そういうことあるよね。

だがそれで問題はなかったらしい。生徒の挨拶が返ってきた。いやほんと、体育会系だな……。

「よし！ それじゃあ練習を始めろ!! ただしランキング10位以内の人間は残れ! ——福路イ!!」

「——はい、コーチ」

久保さんの大声で部員達が一斉に練習に戻る。1年の子達は練習っていうか、ほぼ雑用だけど、まあそういうこともありがち。伝統を重んじるタイプの名門だとね。本当に実力のある子以外、1年は皆雑用だつて決まっていたりする。勿論、打たない訳じゃないだろうが、優先するのは2年生や3年生に、レギュラーやレギュラーに近い実力のある者だ。

そして当然、コーチに態々名前を呼ばれるような子であれば——やはり、

「東郷さん、福路はうちのキャプテンで校内ランキングで1位。個人戦で全国出場経験もある選手です。彼女とレギュラー陣、ランキング10位以内の人間を重点的にお願いします。——おら、とつとと挨拶しろお!!」

「はい。キャプテンの福路美穂子です。よろしくお願いしますね、東郷プロ」

「あ、ああ……いや、俺は元プロだからプロとは呼ばなくて構わないぞ。適当に呼んでくれ」

「分かりました。では——東郷さん、うちの部員共々、よろしくお願いしますね」

「ああ、よろしく」

うっわ、超美人……美少女……記事の写真でも見たが、やっぱり美少女は生で動いてるところを見るに限るな……。

久保さんから紹介され、進み出てきた1人の部員——福路美穂子。

風越女子高校麻雀部のキャプテンを務め、1年からレギュラーとして団体戦、個人戦の両方で全国出場経験を持つ名選手だ。

昨年まで、長野県の最優秀プレイヤーといえれば彼女であった。いや、今も表向きにはそうだろう。個人戦では彼女が長野県1位なのだから。

まあ麻雀方面の実力に疑いの余地はないが、俺としては彼女のルックスに目が行ってしまう。

金色のショートボブ。何故か常に右目を瞑っている美少女。身長は160に届かないくらいで、スタイルは……おっぱいが結構大きい。腰は細い。お尻はそこそこの、スタイル抜群の美少女だ。

性格も、なんだか良い子そう。柔和な笑顔を向けてくれている。この体育会系の強豪校特有の練習の空気の中で、彼女だけが雰囲気にもまれることもなく、自分のペースを保っていた。

麻雀にそれが関係があるのかと言われそうだが、ないとも言えない。麻雀が強い奴——とりわけ、なんらかのオカルトを持つ者つてのはちよつと変わった奴が多く、傾向としてマイペースな人間が多いからだ。普段の立ち振る舞いからも、結構愉快だったりヤバイ奴が多い。

この福路美穂子は常に右目を瞑ってるし、何処と無く天然っぽい雰囲気もあるし、麻雀が強い奴特有の気配が何となくある。強い奴は強い奴の気配を感じ取れるからな。俺は強くないけど。ただ察知能力

だけは昔からオカルトに関わってきたため、それなりに自信がある。ああ、でも、そんなことより……この子、可愛いな……あー、高3なりたてでこんな美人とか反則だわ。なんか付き合ったら尽くしてくれそうな感じがある。控えめに言つて——やりたい。控えめに言つても最低な事には変わりないし、心の中でなら何言つてもオーケー無問題だから言うけど、あー、超エツチしたい。俺の女にしてえー……いやほんと、美少女って見てるだけで幸せだけど、落とせる可能性があると思うだけでポジティブになれるわ。最低なポジティブだけど。あー、ほんと思考がクズクズしてきた。

でも一応ちゃんとしなさいといけないからな。ある程度で自重しないといけない。うん、クズいのはところどころで十分だ。

「それじゃあ早速打つか、福路……でいいか？ 呼び捨てになるが」

「はいっ、大丈夫です。それじゃあ東郷さん、まずは私と、後は——」

美穂子ちゃん可愛い。まあいきなり名前で呼ぶのは不自然だしな。今は福路と呼ぼう。普通の名字だけど、美少女の名字ってだけで可愛く見えるから美少女のバフ効果って範囲広いと思う。

そうして、福路に続いて自動卓に近づく。福路が他の面子を選ぶのか、他のランキング10位以内の面々を見渡し、俺もついでに見渡すが……うーん、可愛い感じの眼鏡っ娘はいるな。ただ胸が薄い。他は……何とも言えないな……うん、まあ微妙だ。後もう1人が可愛い感じになってくらしい。

「っ……うう……！——」

「あ？」

「……華菜？」

とか何とか思っているとその件の1人が何やら唸り始め、福路共々、その場の面子も、華菜、と呼ばれた生徒を見た。

そして何を思ったか、俺と福路の間に——福路を背に立つと、

「——キャプテンっ!! 駄目ですよ、そんなに近づいちゃ!!」

「えっ? 急にどうしたの? 華菜?」

福路が戸惑う。いや、俺も戸惑う。なんだ? よく分からんが、とりあえず、

「……あー、お前も最初に打つか？ お前もレギュラーなら——」

「こいつ！ 絶対悪い男ですよっ！！ なんか目の下にクマあるし駄目なホストっぽいし！！」

「なっ——」

!!
だ、誰が悪い男だ!! 人を見かけて判断するな——当たってるけど

実際のところ、俺は悪人かは置いといて、女の子をオカルトで落とすクズで悪い男であることには違いない。女の敵、というのが正しいだろうか。くそっ、なんなんだこいつ……いきなりなんでそんなことを……偶然なのか……？

まさかオカルトじゃないだろうな、と思うが、そいつの顔を見て思う。なんとなく、違うっぽい。アホっぽいし。一応見た目は可愛いのが、なんか猫っぽくて馬鹿っぽい。多分、偶然だとは思う。

「華菜、どうしてそんなこと……それは東郷さんに悪いわ。失礼よ」
「華菜ちゃんの勘ですっ!! だってこの男、キャプテンのことをいやらしい目で見ってたしっ!! だからあまり近づかないで、気をつけてくださいキャプテン!!」

「そ、そんな訳ないでしょう？ 駄目よ、華菜。態々遠いところから来てくれた東郷さんにそんなこと言ったら」

そ、そそそそだよ。それは失礼だ。とんだ濡れ衣だ……いや、どうして分かった？ 俺の視線は中々気づかれないことで定評がある。今までも、長い付き合いである良子以外にバレたことはないというのに。

猫っぽいし、野生の直感ってやつか……？ くそ、厄介な奴め……実際にそういうことをしてなくても、そういう感じで警戒されるとやり辛いことこの上ない。

俺の方から歩み寄って懐柔でもしてみるか……？ なんか通用しなさそうだけど、試さずにはられないな。よし、行こう。

「……まあ、確かによく見た目でホストとかなんとか言われることもあるけどな。だが、俺はいいが、初対面の相手にそういう態度を取るのはいらない——」

「うっさい！ キャプテンを狙う悪い虫め！！ 華菜ちゃんの目が黒い内は、キャプテンには指一本——」

「——池田アアアツ！！」

「ひっ……!!?」

うおっ、さすがの俺も今の声にはびつくりした。部室内の生徒達も身体をビクツとさせてる奴が多数。いや、ちよつと怖いっすよ久保さん。

だが今のはしようがない。客観的に見て——この……池田？ 池田、華菜、でいいのか？ 福路と久保さんが呼んでたから多分そうだろう。そう、この池田が悪い。初対面で今の物言いは普通ならあり得ない。何か根拠があるならともかく、いきなりそんなことを言ったら折檻されてもしょうがない。

「てめエ、態々来てくれた元プロの先生に対してその口の聞き方はなんだア!! てめエはいつからそんなに偉くなったんだあ!?!」

「うっ、あつ、あ、あの、い、今は違って……こ、この男が——」

「この男お!?!? 池田ア!! てめエ、遂に上下関係も分からなくなりやがったのか!!!」

「ごっ、ごめんなさつ、その、東郷、さん、が……そのっ——」

「てめエ、まだ言うかあ!!! この……歯あ食いしばれエ!!!」

「ひっ……!!」

久保さんが池田の胸ぐらを掴み上げ、鬼の形相で怒声を張り上げながら右手を振りかぶる。

誰もがその瞬間が訪れると予期して諦めている瞬間——俺は思わず、

「ああ……!!? って、東郷さん……」

「あっ……いや……」

あつ、やべっ……やつちまった……思わず手を止めてしまった。

別にグーで殴る訳じゃないし、指導方針に横から口を出すつもりも権利もないのだから何もするつもりもなかったのだが、いきなりのとて無意識にビンタを止めてしまった。

久保さんもびつくりしてるし、どうしようか。なんかそれっぽいこ

と言つて横入りしたことを誤魔化すか。

「……東郷さん。確かにうちの部員への指導はお願いしましたが、うちのやり方に口を出すのは——」

「あつ、はい。勿論です。ですが今のは自分へのちよつとした軽口ですし……俺は気にしてないので、ちよつと大目に見てもらふことは出来ませんか……？ いや、最初はほら、仲良くしようと思つて冗談を言っただけかもしれないし……まあ次から同じようなことを言うならそちらにお任せしますので……」

「……ですがね……示してもんが……」

「いやほんと、口を出すつもりではなくてですね……それに今から練習もあるので、出来れば素の本来の状態で彼女達とは対局したいなつて……その、こう言つてはなんですが、久保さんのその指導を受けた後は素の状態とは言い難いのではないかと……」

「……ふー……ふー……ということだ池田アツ!! 先生に感謝するんだな!!」

「は、はははははいつ!! ありがとうございます先生っ!!」

「お、おう……次から気をつけろよー……」

ふー……なんとかなつた。なつたけど、ちよつとヒヤヒヤする。

別に庇う必要なんてないし、心情的にはいつそ一発くらい殴られとけて感じだが、庇つてしまった以上は大義名分というか、庇つた理由をでつち上げないといけないし、そういう意味でヒヤヒヤした。

なんとというか、大人になるとそういう細かい部分の方が気になるんだ……ぶつちやけ体罰自体はどうでもいい。思うところはあつたけど。俺が口出しすることじゃないし。

仮に2回目があれば今度は庇わない。庇わないようにする。

しかし池田は要注意人物だな……別の意味で。なんなんだこの番犬ならぬ番猫は……。

とりあえず、この場は収まったため、久保さんは他の部員の練習を見に。俺はランキング上位との対局に挑む訳だが、

「……東郷さん、華菜を庇ってくれてありがとうございます」

「ん——ああ、いや、さつきも言つたとおり、気にしてないからな」

「それでも、ありがとうございます。それと、失礼な事を言ってしまったごめんなさい」

「えっ、いや、言ったのは福路じゃ——」

「華菜の代わりに謝らせてください。キャプテンである私の責任もありませんから」

「って、近づいてきた福路さんが小声で謝ってきた。めっちゃいい匂い……ってそうじゃない。なんだ、聖人かよ。どう考えてもお前悪くねえだろって言いたくなる。申し訳ないって感じの微笑から申し訳ないって想いがガチで伝わってくる。それと、その池田の事を想ってることも。」

「いや、構わないが……その、なんだ。変わった奴なんだな」

「本当にごめんなさい、東郷さん。華菜はとつても良い子なの。ただ、その……ちよつとだけ、思い込みが激しいところもあるから。もしかしたら勘違いしてるのかも。根は良い子だから嫌わないであげて欲しいんです」

「ああ、さつきも言ったが、気にしてない……それより、始めるか」

「はい。ふふ、東郷さんが優しい人で良かったです。きつと華菜も直ぐに分かってくれると思いますから、東郷さんも落ち込まないでくださいね？」

「！ ああ……」

「なんだこの子……池田だけじゃなくて俺へのフオーも兼ねて話しかけてきたのか。聖人過ぎるが、それだけじゃないな。何気に聡明な感じもある。抜け目がないというか……。」

「……………ぐすつ、絶対、本性を暴いてやるし……」

「……ただ福路、その思いは池田に届いてないみたいだぞ……。」

「しかし俺が福路を狙ってるのは確かだから困る。なんだこれ。あの猫娘、マジで邪魔になりそうだな……。」

「風越女子高校での指導、福路美穂子を落とす道のりは前途多難になりそうだった。」

強豪校での初めての指導

とりあえず、まずは何にしても対局だ。

「それじゃ東郷さん、よろしくお願いしますね」

「……よろしくお願いします」

「……………」

「華菜？ 駄目よ、挨拶はちゃんとしなきゃ」

「……よろしくお願いします……」

「……おお、よろしくな」

自動車に並んだ俺を除く3人が挨拶をする——池田ア！ 挨拶も出来ねえのかア!! ……と、声が飛んできたりはしない。

やはり部員が80名もいると指導の手を行き渡らせるのは大変だろう。久保コーチは幾つかの卓を見て回りながら、時折大きな声で部員を叱咤している。室内の緊張感是中々のものだ。

だがこちらの方はそうでもない。ただ、別の意味で緊張感を持つてるようだ。

一応元プロの俺と対局するってんだから無理もない話だが……久保さんじゃないことにほっとしてもいるし、池田の反応にひやひやしてるようにも見える。

まあその池田はこちらをずっと見て——睨んでいる。いやいや、そんな見られても困るんだけどな……さっさと対局しようぜ。

別に俺は福路に直接アプローチをする訳ではない。真っ向から口説いて上手くいくなら口説いてる。上手くいく訳ないから、オカルトに頼っているのだ。

だから俺が福路に近づくかどうかを見ていてもしようがない。……まあ、その時が来れば接触はするが。

とはいえ麻雀の方もおろそかには出来ないんだよなあ。とりあえず、最初の試合は役満狙いで行きたいが、この面子は……、

「……池田もランキング上位なのか？」

「華菜は2位で去年の特待生なんです」

「そうだ！ 馬鹿にすんなし！ お前に比べたら——」

「華菜？」

「と、東郷……さんに比べたらあたしの方が凄いなだから！」

「ほー……」

強豪校だと麻雀特待生の枠で推薦で入れたりするのはよくあることだ。……というか池田。多分、福路は呼び方もそうだが、その後の言葉にも注意しようとしたと思うんだが……。

だがまあそうやってマウントを取ってくるなら好きにすればいい。その類なら逆に取り返すことも出来るのだ。

俺は何気ない感じで言ってる。席に着きながら、

「奇遇だな。俺も高校は特待生の枠で入ったんだ」

「まあ、そうなの？　なら私や華菜とは特待生仲間ですね！」

「ふ、ふん。どうせ大したことない学校だし」

「一応、白糸台なだけだな」

「えっ」

池田が間の抜けた声を出す。何気に会話を聞いていた他の部員も驚いていた。福路も手を叩いて、

「まあ、あの白糸台で特待生なんて、東郷さんは凄いなね！」

「っ、強くて有名なのは女子だけだし……」

池田ア!!　声が震えてるぞオ!?　ははは、さっきまでの勢いはどうした？

ま、俺に入った高校でマウントを取ってきたのが間違いだったな。麻雀をやってる女子高生で白糸台の名を知らない者はいない。白糸台に特待生としてスカウトされて入った俺は、このことを言うだけでそれはもう尊敬される。以前、キャバクラでこれを言ったら同席していたキャバ嬢が中高と麻雀をやっていたようで色々話を聞かれた。だが何気に池田の言葉も間違いではないというか、男子はそれほど有名というわけでもない。それでも、俺がいた3年間は毎年全国には行ってたけどな。そういう意味では俺の白糸台の看板も、虎の威を借りる狐という訳でもない。虎姫だけに。やかましいわ。

しかし池田が2位ってのはちよつと心配になるな……本当に強いのか？　風越女子……ランキング上位の面々もぱつとしないという

か、2年生が多いのが何とも悲壮感漂うというか……3年はどうしたんだろうな。こういってはなんだが、不作の年だったのだろうか。

俺と最初に対局する面々も、福路、池田、名もなき2年生だ。いや、名前はあるだろ。名もなきファ○オだつて名前あったし。だがちよつと分かんない。凄い太ましくて、ランキング4位らしいが……まあドムでいいや。ガン○ムほぼ分かんねえけど、足太いし。

一応ランキング上位の面々だが、さてどうなるか。……というか、この面々とツモ和了りだとちよつとキツイ……ツモ和了りのオカルト効果はなんとなく不安定とはいえ、もしこの席の3人が惚れるとなると、福路はともかく、池田やドムがついてくる。いらないセットだ。単品でくれ。

いやまあ、池田はよく見れば美少女なんだけど……ちよつとさつきから印象が……うん、なんとも言えない。

福路に直撃させればいいんだが、なんか普通に強そうなんだよなあ。どうしたものか、と対局が始まる訳だが、すると案の定、福路が、

「ツモ!! 1500・2900だし!!」

つて、池田アツ!! お前かよ! 後なにげに高え!!

いやいや、俺は親じゃないし、この和了りで俺に親が回ってくるから別にいいんだが……福路の立ち上がりは大人しいな。やべー奴だと東1局からヤバかったりするんだが、福路はそういうタイプではないらしい。それは朗報だな。後半爆発するタイプなら、前半にどうにか出来れば……出来れば苦労しないんだがなあ……。

とりあえず、対局を長引かせるに越したことはない。役満を狙えるなら狙うが、可能性を高めるために親の時は連荘しておいた方がいいのだ。

「ツモ。発のみ、500オール」

「——ロン。ダブ東、一本場で3200」

よしよし、まあこんな感じで……まあ、普通の麻雀ならこれでいいんだけどな……そうじゃない。全然よくない。俺は役満を和了らなければいけないのだ。

それをどうにか福路にぶち当てなければならぬ。こんないい女を捨て置く訳にはいかないのだ。

そういう使命感で二本場。俺はドムから受け取った点棒を収めつつ、次の自分の配牌を見て思う。

字牌多つ……これなら字一色か、場合によっては四暗刻も狙えるか……？

手牌に東、西、北が2つずつ、発が3つ、中が1つ。他は六索、一筒、八筒だが、一応、字一色が狙えなくもない。

役満、字一色つてのは、そのまんまの通り、字牌のみで作る役満だ。手牌を字牌で染めればいい。染めれるなら対々和だろうと2枚ずつの七対子でも構わない。七対子だと副露出来ないが、逆に言えば他は副露したつていいのだ。

だが字牌ばつか鳴いてると警戒されそうでなんとまあ……別にツモればいいって考えもあるが、それだとセットで池田とドムが……くっ、悩ましい……！

好きなおかずが入った弁当に嫌いな副菜が入ってる時の気分だ。自分で買った以上は、なんとなく全部食べないといけない感じがするので困る。お残しは駄目だ。何か理由があるならともかく食べ物を粗末にするのはいけない。

いや、マジでどうしよう……据え膳食わぬは男の恥とは言うが、嫌いな物が出てきても食べなきゃいけないのか？　しかし放置するとそれはそれで厄介な事になりそうだしな……あー、どうしよう。

しかもそんなこと言ってる間に綺麗に東、西、北をツモつて……つて、これルールによつちやあ字一色、四暗刻のダブル役満じゃねーか……！　おいおい、ダブルとか食らわせたらどうなるんだ……？

今年の高校のルールにダブル役満はないし、普通の役満と変わらないうだろが、いや、マジで来たのはいいが、これを福路が振り込む確率はあるのか……？　いや、残りは中だし、放銃する確率はあるな。鳴いてもないから情報も少ないし、全然あり得る。

だがそれは他の奴にも言えることだ。何気に単騎待ちつてのが痛い。もし一巡以内に福路以外の……池田からの捨牌を見過ごせば福

路からはフリテンになって和了れないしな。他の字牌をツモれば待ちを変えることも出来るが……出来ればさつきと福路が振り込んでほしい。

と、俺は福路をチラツと見るのだが——あれ、なんか右目開いてる……って、オッドアイ!? え、なにそれ? 自前? それともカラコン? いや、カラコン入れるタイプには見えないから自前だとは思うんだが、だとしたらそれ完全にオカルトじゃねえかよお!?

右目は青く、左目はブラウン。いや、オッドアイは一応、先天的に現れる珍しいが普通の症状だし、オカルトがあるとは限らないのだが……俺はそうは考えない。麻雀やってて、そういう分かりやすい特徴があるなら十中八九オカルト持ちだと考えた方がいい。

ってなると福路は既に何らかのオカルトを発動していると仮定すべきだが……。

「……………」

「!」

目が合つて、ニコツと微笑み掛けられた。可愛い。可愛いけどなんだ? どうせオカルト使つてんだろお!? そういう感じの笑顔はいらねえんだよ! 可愛いけども!

くそっ……絶対落として後でめちやくちやに可愛がつてやる……一応、こつちの方が有利の筈だ。

中はまだ場に出てない。どこかには眠ってるはず。抱えられてたらちよつと困るが、それでも可能性はある。

さあ、振り込め……! そう思った矢先のことだ。

「立直だしっ!!」

ビシツ、と牌を横に捨てて立直宣言。しかもそれは中だ——って、お前じゃねええんだよ池田アツ!! 俺の邪魔してんじゃねえ!!

ぐっ……池田、池田か……くそ……これが福路なら迷わずロンなんだが、池田を落としても……あ、いや、先に池田を落として言うことを聞かせれば福路への妨害札が1枚減るのでは……?!

将を射んと欲すれば先ず馬を射よ、という言葉もある。先に池田を落として——って、ああっ!? そんなこと考えてる間に場が進んでる

じゃねーか!? ああ、くそ、良かったような良くないような……。

だがこれでフリテンだし、これでは和了れない。と、俺はそのまま対局を進める……何気にその後すぐに福路も中を捨ててたのが何とも言えない。池田アツ!! お前が先に捨ててなければ直ぐにでも終わったのによお!!

とりあえず、待ちを替えて四暗刻単騎を狙ってみるも、ぬるりひらりと躲され続ける。全然当たんねえ……ツモった白で再び張つてもるも結局、

「テンパイ」

「くっ、和了れなかったし……」

と、俺や池田がテンパイで流局。そのまま次の局に移ろうとするのだが、福路が俺の方を見て目の色を変えると、

「……東郷さん、その手牌……」

「ん……ああ……これは——」

って、あつ。やべえ、そうだ。

「つ、字一色テンパイ!?!」

「うわっ……」

池田の驚きの声が響く——いや、まあそうだよな、バレるよな、手牌晒すし。

しかも何がマズいって、見逃したのがバレることだ。当然だが、福路はそれを見逃していないようで、

「……東郷さん。どうして華菜から直撃を取らなかったんですか？」

立直宣言の時に出た中は貴方の和了り牌ですよね?」

「って、あつ、本当だし!?!」

いやまあ、そうなるよな。なんで見逃してんのって。

さて困った。いや困った……どうするか。どうにか適当な理由をでっち上げないといけない。くそっ、こんなんばっかだな。なんかそれっぽく——

「……まだ試合は始まったばかりで、それも東2局の2本場だ」

「はい。でも、それが……」

「俺はお前達の実力を向上させるためにここに来たんだ。いきなり役

満ぶち当てて試合終了ですぐに交代じゃあお前達の腕を見ることも出来ないだろ？ だから見逃した」

「！なるほど……私達の腕を見るために……」

「て、手加減なんて、なんかズルい！」

うつさい、黙ってる池田。何もズルくない。いやまあプライド的にはアレかもしれないが、一応筋は通ってるはずだ。

「もう少し、俺にお前達の実力を見せてくれ。話はそれからだ」

「……分かりました東郷さん……！ なら、ここからは全力で行かせて貰いますね！」

「お、お前なんかには負けなしい!!」

あつ、なんかヤバそう……福路さんの目がキラキラしてる……。

どうにも火を付けてしまったらしい。池田の方も対抗心を向けてきている。

ああ……しかしどうしよう。これじゃあオーラスにでもならない限り、役満張つても見逃すしかないような気がする。いや、この場をやり過ごせたことに喜ぶべきか？ 半荘一回で役満出ただけでも御の字だ。

「ロンです。 7700」

「ツモです。 13000・26000」

「ツモです。 40000オール」

待て待て待て。福路さん待って。本気出しすぎイ!?

え、なにこの子、めっちゃ強お……さすが長野県1位。いや、感心してる場合じゃないんだよなあ……。

気がつけば福路さんの親番で連荘。何気にドムが飛びそう。俺は池田に僅差で負けてるし……ちよつとヤバい。役満とか言ってる場合じゃねえ。

「……ロン、 10000」

「なつ、まくられた!？」

いや、一々声に出さなくていいから。池田はうるさいな……いや、俺にだけか？ 普段からこれなら久保コーチにボコボコにされてさうだし。久保コーチが見てなくて助かったな。多分、耳では聞こえて

るかもだし、対局が終わった後が地獄な気がするが、頑張れ。

とりあえずなんとかゴミ手で福路の親を飛ばしてみるが……なんかすつごいニコニコしてる。なんなんだ。まさかもう俺に惚れて——る訳はないが、なんかプレッシャーというか期待が凄い気がする。まさか今さっきのやりとりでちよつと尊敬されてたりするんだろうか。なんかありえそうだな……人を疑わなさそうな感じあるし。

ともあれ、そこからもまた福路さんがオツドアイモードでめちやくちや和了った。結果、福路さんがトップ。俺は2位。池田が僅差で3位。ドムが最下位だ。

「どうですか、東郷さん。貴方のご期待に、私達は応えられましたか？」

「お……おう、そうだな。悪くない」

「くつ……もつかい！ もつかいだし！ キャプテンを除いてタイムマン勝負を挑む！」

「華菜ちゃん……麻雀にタイムマンなんてないよ……？」

そうだぞ、池田アツ!! その眼鏡ちゃんの言う通りだ。名前は分からんけど、ランキング上位のメンバーで池田の友達っぽい。それにこの中だと結構可愛いな。まあこの子なら、ツモ和了りでついでに落としてもまあ……しかも1人、選ぶとしたら池田になるのがなんとも……風越女子、こんだけ部員いるのに容姿のレベルは……うん、麻雀もだが、福路が1人飛び抜けてる感じがするな。

「ふふ、それじゃ次は吉留さん達とお願いします」

「あつ、はい！ よろしくお願いします、東郷さん！」

「……ああ、ならどんどん行くか」

福路さんの指示でメンバーが入れ替わる。先程の眼鏡っ娘と他2名……なんかパツとしないな。眼鏡っ娘は吉留って言うのか。他は名もなき2年生2人。いやだから名前あるっつーの。俺が知らないだけで。

さつさと回してまた福路と打たないと意味がないし、スピード勝負だ。でも最初の1局は手加減しないと、さつき言ったことと辻褃が合わないし、最初はゆつくり目に。この場には10人だから、福路と打

てるのは4局に一回くらいか。それでもまあまあキツいな……出来ればぶっ通しで打ちたい。他の卓で役満張つてもしようがないし。

「なら、次はまたあたしが打つ！ この悪い男を——」

「——池田アアツ!! 聞いてたぞ！ 目上への言葉遣いはどうしたア!!」

「ひっ、コーチ!?!」

あつ、池田がこつちに指差したと思ったたら捕まった。今度は助けないぞ。タメ口くらい許してやってもいいが、池田の場合は調子にノリそうだからちよつとは痛い目見た方がいいと思う。

それに風越側からするとやっぱ失礼だしな。そりゃ教育するだろ。久保さん、上下関係に厳しいっぽいし。

「てめエ、名門風越の顔に何度も泥を塗りやがつて！ 敬語の一つも使えねえのか、池田アツ！」

「うっ、うう……」

うーん……泣くくらいなら俺にああいいう態度取るなよ……分かりますってただろ？ というか福路さんがまた止めようとしてるし……福路さん、毎回ああやって止めてるんだらうなあ。

「コーチ。彼女の言葉遣いはキャプテンである私の責任でもありません。殴るなら、私も殴ってください」

って、止めてねえ!! ああ、そういう……明らかに悪くないのに自分にも責任があるとか言つて、相手に躊躇させる感じか。でも殴られそうだな……ええ……どうしよう。他の奴なら止める気はないけど、福路さんが殴られるのはなあ……うーん、人を選ぶとかさすがにクズい感じがするな……。

「よおし！ よく言つた福路イ!! 歯ア食いしばれエ!!」

「っ……」

「キャプテン!?!」

って、やっぱ殴るんかい！ いやー……体育会系って凄いよなあ。最近は体罰ってバレたら死ぬほど怒られるけど、こういう勝負の世界だと横行してるのよね、実は……まあやりすぎるとテレビとかで問題になるってくらい。ピンタくらいならちよいちよいあるんだ

よな。俺としても、ピンタくらいなら軽いな、と思ってしまうのは時代とか生まれの所為だろうか。

「……大丈夫か？」

「……はい！ 大丈夫です！ 皆、練習を続けましょう」

「きや、キャプテン……」

一応久保さんが戻っていった後に大丈夫かと聞いてみたのだが……頬を赤く腫らし、それを全く感じさせずに微笑んで練習を続けようと言う福路。この聖人感である。部員から滅茶苦茶慕われているのを肌で感じられる。池田も一緒に殴られてるし、泣きべそ掻きながら練習に戻ろうとした。

そんでまあ、ふと思ったんだが……風越が殆どプロではなくOGばかり呼んで練習試合してる理由が分かった。俺は平気だが、この空気はいたたまれないよね。普通の麻雀部や実業団なんかで過ごしてきたプロからしたら居心地悪いだろうし。さっきも言ったが、普通は体罰はご法度だ。

——と、そんな感じで風越のレギュラー陣と打ちまくったのだが、「本日のご指導、ありがとうございます!!」

「よおし！ 解散！ 1年は部室の片付けだ!! ——では、東郷さん」

「あ、はい」

結局、その日の練習は何事もなく終わり、俺は久保さんと一緒に部室を後にした。……結局、役満は一回つきりだったしな。しかも未遂だし。ありえないし。池田の口調が移るくらい、池田が邪魔だった。俺が福路に話しかける度に割って入ってきてたしな。敬語だったけど。さすがに懲りたのだろうか。でもあの分だとまた怒られそうだけだな。練習の妨げになってるし。

「……どうでしたか？ うちの生徒は」

「うーん……そうですね。まず、福路はさすがの全国区といったところですか。自分も結構凹まされてしまいました。正直、1人だけレベルが違うと言いますか……」

「……そうですね。あまり言いたくはありませんが……福路の代、今の3年生は、福路以外の成績は正直……」

別室で久保さんと今日の総括をするが、まあそうだろうな、と思う。ぶつちやけ福路さん強すぎ問題。逆に他が弱すぎる。名門校のレギュラー陣なら、正直俺より強い奴なんてザラにいたりするもんだが、風越女子は精々、福路さん以外は池田くらいか。後は五十歩百歩だ。到底全国区の打ち手とは言い難い。

「それ以外だと、池田もレベルは高いと思います。特待生と聞きましたが、それも納得ですね。……まあ、素行はアレですけど……」

「申し訳ありません……池田には、もつと強く、言い聞かせておきますから……」

いや、それ絶対殴られるやつやん。言い聞かせるっていうか、殴って聞かせるやつやん。ええ……別にいいんだけど、まるで俺がやらせたみたいでなんとも言えん気持ちになるし、一応フオローしとくか。「いえ、まあ……ですがあの負けん気が強さの原動力とも言えますし、あまり矯正しすぎない方がいいかと……麻雀で大成する者には、生意気な者も少なくありませんしね。かく言う自分も、学生時代の素行はあまり良くありませんでした」

「ん……そうですか。まあ、東郷さんがそう仰るなら、多少は大目に見ましよう……ですが池田はあまり調子に乗らせ過ぎるのも——」

ああ、うん。確かに、調子に乗りすぎてもダメそんな雰囲気はある。程々に調子に乗れば良さそうだが、その加減が難しいな。ああいうムラのある打ち手は精神状態が一番の肝だったりするし、指導者の素質が問われるだろう。お、なんかそれっぽいな、俺。指導者っぽいことと言えるなら指導者に向いてるんじゃないやね？ それが的確かどうかは分からないが、それっぽいことと言えるなら指導者にはなれるだろう、うん——指導者の方に謝った方がいいな。

「うちは去年のインハイで龍門渚に負けて切符を逃しています。今年こそは、なんとか雪辱を晴らしたいのですが……」

「新1年生に良さそうな生徒はいないんですか？」

「……一応、ランキング戦で見えていますですが、1年の時の福路や池田ほど飛び抜けている者はいませんね」

あー、なんとというか、ここもここで厳しそうだな。まあ強豪校とは

いえ、現実なんてこんなもんだとは思うけど。

地区予選で決勝までは確実にに行けるけど、いつもそこで負ける高校——というのも珍しくはない。麻雀に限らず、野球やサッカーなどのスポーツでもよくあることだ。

その地区にライバル校——それも相当強い学校があったりすると、チーム自体は全国レベルなのに、全国に行けないなんてこともよくある。

出場出来る高校は各地区で一校のみだしな。これが中々厳しい。麻雀は運も絡むし、4つのチームが競い合う競技であるため、ちよつと間違いが起こったり、運が悪かったりするだけであつさり敗退することもある。

まあ、それでも強いチームは毎年、ちゃんと全国への切符を手に入れて良い成績を残すもんなんだがな。麻雀が運ゲーではない証拠だとも言える。完全な運ゲーなら、毎年毎年勝ち進める筈もない。

つまり麻雀には流れやその場の空気——オカルトなどが絡んでいゝる。強い学校のエース級はマジで全員化け物じみてゝるからな。そしてそういう奴がプロに行く。だからプロの試合は魔境なんだが……観客も気づかないんだよな、意外と。あんな派手な展開が何度も続くに、オカルトが存在しない訳ないんだが、ファンや記者の連中は全く信じてないみたいだし。

まあそれはいいとして、風越女子高校にとっての救いは、福路美穂子という全国的に見ても上位の打ち手がいること。後一応池田も。福路は支配系の様な死ぬほど強力なオカルト持ちという訳ではないが、それでも本人の技量もあつてかなり強い。ユキに少し近いか。オカルト自体はそこそこだが、本人の技量も相まって全国レベルの実力を持つ雀士。

ただそれでも本物の怪物——宮永照や神代小蒔、最近だと千里山に未来が見えるエースとか……未来が見えるとかふざけてゝるが、マジっほいからしようがない。後は獅子原も今思えばそれに並ぶ化け物だな……あいつは何気に普通に打つても強かつたりするし、オカルトを使いこなしてゝる。個人戦に出れば怪物連中に並んで結構いい勝負を

しそうだな。

後は姫松の愛宕……愛宕選手。またど忘れした。絶対憶えてるんだけどな……とにかく福路は、愛宕選手と同等かちよつと劣る程度で強いかもしれない。あの愛宕選手も、オカルト持ちっぽい感じはしないんだけどな……それであれだけ強いんだから羨ましいというか、むしろオカルトがないのにあれだけ強いってのが逆にオカルトだ。たまにそういうタイプもいるが、分かりやすいオカルト持ちよりそういう奴の方が怖かったりする。

というかな……ぶつちやけ団体戦なんて1人他校を圧倒できるエースがいれば逃げ切ることも可能なんだけどな。他の学校にそれを上回る化け物さえいなければ。

「……うーん、龍門渕の団体戦メンバー去年、全員1年生でしたから今年も健在。それどころか、更に強くなってる筈ですし、確かに厳しそうですね」

「……そのために、練習をこれまで以上に厳しくしています。私もそのために呼ばれましたからね。こう言ってはなんですけど、龍門渕が現れるまで、地区予選はうちの1強状態でしたから、少しそれに甘えていた部分があると思いますし」

あつ、そうなのか。いや確かに、長野県の女子団体とか風越女子と……後なんだっけ、城山？ 確かそんな感じの名前の高校くらいしか聞かない。

龍門渕が現れるまでの長野県予選は風越女子にとつてはイーजीーステージで、本番は全国だったのだろう。そういや久保さんは俺の1個上で大学も出たばかりだし、何気にコーチに就任して間もないのか。龍門渕っていうやべー高校が出てきたからこそ、久保さんが呼ばれたと。

……どうしつよつかない……俺、何気に風越の次は龍門渕行くんだけど、それ言わない方がいいかな……。

それに合わせて、実は龍門渕についても色々調べた。まあ、天江衣っていう魔物の疑いがある子を中心に。ちよつと実際に見てみるとヤバさつてのは分からないが、牌譜や成績を見る限り、それでも

福路よりも化け物っぽいので団体戦、エースでゴリ押し戦法は使えないだろう。

……とまあ真面目に風越女子の為に頭を悩ませてみたが、やっぱり7：3つてところか。風越では、龍門渕相手が分が悪い。

どんだけ部員がようと、団体戦に出れるのは5名。極論、その5人にタレントが揃ってれば、部員の数なんてものは意味をなさない。

龍門渕は正にそのパターンだ。5名全員がそこそこ麻雀が打てる。化け物もいる。幾ら福路1人が強くて、池田が多少頑張ったとしても難しい。

「そうですね。明日からはもっと集中的に鍛えていきましょうか。福路は普通の雀士に持っていかないものを持っていますし、自分と福路を常に置いて、ランキング上位の生徒と回し打ちをすれば、福路とランキング上位の生徒、その両方にとって良い練習になるでしょう」

「……強い相手と、とにかく打たせまくるってことですか」

「まあ、そうですね。風越で1番実力のある福路との対局が、他の部員にとって1番の練習になる。レベルの高い打ち手との対局に慣れれば、レベルを引き上げることも、また勝てずとも、その躰し方を身体で憶えることが出来るでしょう」

「ええ、確かにそれはそうですね。ふむ、でしたら明日はそのように練習してみましようか」

よっしゃ！ 来たでこれ！ 福路さんとずっと打てるという大義名分を手に入れたぞ！

ぶっちゃけ他の面々の強化とかより、福路に役満ぶち当ててオカルト発動することが大事。今言ったことも嘘ではないが、他の奴らはついでに過ぎないのだ。一応仕事はやってるし問題ないな。

これで邪魔は最小限に――

「それと、出来れば池田も重点的に見て頂けませんか？」

って、池田もかーい！ ええ……いや、別にいいけど……というか断れないし。でも久保さん、あんだだけ怒ってたけど、実は池田のことを特別目に掛けてるんじゃないや……。

「……分かりました。まあ、彼女が自分の言うことを聞くかどうかは不安がありますけど……」

「申し訳ないです。その点だけは、きつちり、言つて聞かせておきますので、存分に指導してやってください」

あれ、なんだかツンデレに見えてきたな、そうなる。実は池田が1番のお気に入りなのか？——やべえ、超面白い。池田の事、気に入ってるんですね？とか言ってみようかな。いや、なんか俺がビンタされそうだしやめとこ。俺、一応年下だし、東郷オツ!! ってされる可能性もなくはない。元プロの先生つてことで来てるから丁寧に接してただけな気がするし。

「——すみません。コーチ、少しいいですか?」

「ああ? 福路か? 入れ」

「はい。失礼します」

とかなんとか考えて、そろそろ帰るかと思つていると、福路がドアをノックして声を掛けてきた。なんだろう。いやまあ、俺はもう帰るんだけどね。美少女と交流出来るなら残る。当たり前だよなあ。

「今日の牌譜の整理が終わつたので提出しに来ました」

「ああ、そうか、ご苦労。……また雑用か? 1年はどうした?」

「はい。1年生の子達が整理してくれたものを、キャプテンの私が代表して提出しに来たんです。——いけませんか?」

「……チツ、そうか。ならさっさと帰つて休め」

「はい。それでは——あつ、東郷さんももうお帰りですか? それなら、少し今日の事で相談があるんですけど……」

「えつ? ああ……別にいいが……」

「あまり迷惑を掛けるなよ。……東郷さん、すみません。お願いします」

「ああ、いえ、大丈夫です。それでは今日のところはそのまま帰りますね」

「ええ、明日もよろしくお願いします」

なんだか微妙に違和感のあるやり取りを見て、俺は福路と共に部屋を出る。いや、多分だが、そういうことなのだろう。なんか久保さん

の方はちよつと気に入らない感じが出てたし、俺は聞いてみることにする。

「……雑用を1年の代わりにやってるのか？」

「……いえ、ちよつとお手伝いをしただけです。手が空いていたので」

やっぱり雑用してたのか。なぜ3年でレギュラー、キャプテンの福路が、と思うも、なんかそういうのが好きだったりするんだろう。お世話好きというか、人の役に立つのが好きというか。めっちゃ聖人だな……そうだとしたら。俺の勝手なイメージだが、あまり間違っていないと思う。エプロンとか似合いそう……想像したらめっちゃ良いな。落としたあかつきには……。

「そうか。それで、相談だったか？」

「あ、はい。今日はご指導、ありがとうございます」

深々と腰を折ってお礼を言う。お辞儀の際の手が綺麗だな。手の前にして女の子らしい。笑顔だし。ほんと品のある美少女だな。

え、というか……なに？

「……………んんっ!! それだけか？」

「いえ、それと、苦手な物を聞いておこうと思って」

「……………苦手なもの？」

「はい。食べれない物とかありませんか？」

ん、それは意味がよくわからん。咄嗟に、池田って答えそうになったのは内緒だ。

苦手な食べ物か……いや、実は結構あるけどな。

まさか弁当でも作ってくれたりするんだろうかと思うも、さすがにそれはないと思う。初対面の人間の為に態々お弁当を作るような聖人なんて……いや、あり得るか？ 何気に明日は休日だし。……まさかとは思うが、聞いておこう。冗談めかして、

「……………ははは、まさか弁当でも作ってくれるのか？」

「はい。いけませんか？」

「えっ」

えっ、なにこの子……マジ？ 聖人っていうか、どういうこと？

なぜ弁当を？

まさか普段からこんなことでもしてるのだろうか。よく分からない。いや、まあありがたくはあるけどな。理由が分からんから困惑してしまっただけで。

「……べ、弁当か。いや、いいんだが、なんでだ？」

「お休みの日は一日中私達の練習を見てくれると聞いていますし、お昼になったらお腹が空きますよね？　ですから、せめてお弁当くらいはと」

「お、おお……そうか」

あらやだ、この子クソ可愛い……嫁力高い……。いや、まあこれでメシマズだったりしてオチがつきそうでもあるんだが、態々料理を作ってくる子がメシマズなんてことはない。ないと信じたい。

「ご迷惑でしたか？」

「ああ、いや、作ってくれるならありがたいな。それじゃあ材料費を……」

「くす、お気になさらないでください。好きでやっていることですし、大した金額ではないですから」

と、財布を取り出そうとした俺を優しく嗜める福路。よ、嫁や……！　嫁力高すぎてもう嫁に見える……！

J K新妻か……ありだな。というかなしの奴とかおんのけ？　いやい。

「あ、それと嫌いなものは特にないから大丈夫だ」

「分かりました。それじゃまた明日、よろしく願いますね、東郷さん」

「おお、気をつけて帰れよ。明日はもっと厳しいからな。今日は負けたが、明日は凹ましてやる」

「……はい。お気遣いありがとうございます。ですが……ふふ、私も、負けませんからねっ？」

と、最後まで丁寧な柔らかい対応で福路は去っていった。

そして思った。——は？　なにあの子、相当良い子じゃない？

しかもちよつと茶目っ気があるのがヤバイ。甘えたら延々と甘や

かしてくれそう。いや、もしかしたらあしらわれそうだけど、それも悪くないな。というか常にウイंकしてる感じなの卑怯じゃない？

それと、逆に困らせてみたくもある。

これは落とした時が楽しみだな……もつとも、今日の感じを見るとかなりキツそうではあるが、これはやる気が出る。新妻JKプレイとかしたい。あなた、とか呼ばせたら捗りそう。

「ヤバいやババ……自重しろ」

ちよつと興奮しかけたが抑える。まだ慌てるような時間じゃない。そういうのは落としてからだ。

とりあえず、今日のところは帰るとしよう。今日は福路の夢を見そうだな……エッチな夢だと面白い。頼むから見せろ。

弁当と池田

1年の大半を占める学校や仕事などの用事って、行く前が一番の鬼門だよな。

「はー……眠っ」

長野出張の2日目。ホテルでの朝を迎え、朝食を取って練習の時間までなんとなく部屋で時間を潰していると、ふと眠くなってしまふ。

まあこういうのはよくあることだ。不眠症気味ではあるが、眠い時は眠くなる。しかもこういう時に限ってだ。睡眠は基本的にまとめて取りたいのだがそれが中々出来ずにいる。

そしてこういうのが学校や出勤前に起きると辛いよな。ただでさえ面倒だつたりするのにすげえ行きたくなくなるよな。

別に学校は嫌いじゃなかったし、仕事も麻雀という、一応好きを仕事にしている俺でさえこうなのだから、世のサラリーマンはほんと頭が下がる思いだ。満員電車に乗って30分、1時間、場合によってはそれ以上掛けて通勤するとか、俺なら死んでもやりたくない。

ただまあ、なんだ。学生の時ならたまーに学校をサボるくらいはやってたし、その時はあまり深くは考えなかったが、大人になるとこういう時間に面倒を思いながらも色々考えるのだ。

一応仕事だし、責任とかバツクレた場合の損失とかとにかく色々考える。それで、やっぱ行かないとマズいんだよなあ、って思う。数分か、もしくはもつと短い一瞬で行かないとマズいというのを改めて自覚して、結局時間になると足は仕事場に向いているのだ。

まあ行けば楽なのだ。後は仕事をこなすのみだし、大人になればなるほど、仕事を上手く、要領よくこなすコツも掴める。もつと言うなら、精神的に我慢や折り合いを付ける方法。楽に思う方法も掴める。大体は行く直前が鬼門。そこを乗り越えれば後は楽。後はやるべきことをこなしていくだけ。

そして多くの者がおそらく——いや、実際どうなのか分からないが、少なくとも俺が実践している楽になるやり方を教えよう。

それは楽しみを見出すことだ。

ただ仕事にじゃないぞ。別にクソブラック企業の謳い文句のように、仕事にやりがいを、なんてことは言わない。仕事が楽しい、やりがいがあるって言う人間はこういう悩みとは無縁だろうから多分殆ど考えてなさそう。まあ俺も別に仕事が嫌な類の人間ではないが、それでも面倒だと思ふこともある。

そういう場合、ポジティブに考える。とりあえず、仕事の休憩に食べる昼食の事を考えたり、終わったらあれをしようこれをしようって考える。

要は仕事以外の楽しみを見出すのだ。そしてそれを得る代償として仕事に行くとも思えばいい。

まあ他にもっといい方法もあるだろう。先程も言ったが、ちよつとネガティブな方法だと、行かないと大変なことになる。もつと面倒なことになる、と思つてしまえばいいが、それだけだと精神的になんかアレなので個人的にはこれも悪くないと思う。

例えば、だ。俺の場合はほら、今は行けば美少女を惚れさせることが出来るかもしれないだろ？ これは動機付けとして結構有用な物の筈だ。

そんなのテーマだけだろバーカ——つて思われそうだが、それだけじゃない。今日は例えば、美少女が——福路が弁当を作ってくれる日でもある。

そう考えると凄い気力が湧いてくる。いや、やっぱ女は男にとって1番のやる気の源。モチベーションを高めるのに最も効率の良いものだと言わざるを得ない。

英雄色を好むって言うが、あれって要は異性がそれだけ活力になるってことだと思う。男だろうが女だろうが、己を最も突き動かすものは異性なのだ。

仮に1年間毎日働けば好みの異性とセックス——ないし、付き合えるとするれば、結構な数の人間がこぞつて働き出すと思う。

つまり俺が今日も真面目に仕事へ向かうのは性欲——と、一応元プロとしての矜持や大人としての責任感といったところか。

いやあ、楽しみだよな。なんてつたつて女の子に弁当作ってもら

んだぜ？ ラブコメ漫画でしか見たことない学生時代の夢の1つを俺は叶えられるんだ。

そりやあやる気も出るよな——と、俺はホテルの部屋を出て、今日も行動を始めた。

——そう、そうやって意気揚々と俺は風越女子高校、麻雀部の部室までやって来た訳だが……。

「キャプテンの弁当を賭けて勝負だ!!」

「……は？」

2日目の練習。昨日練習後のミーティングで久保さんと話した通り、福路と俺でランキング上位の面々と回し打ちをすると部員達が別れたその直後の事だ。

まあ訳の分からないことを池田が言うわけだ。指を差すな指を。自信満々なのもちよつとアホっぽくてイラツとくるな。

一応言ってる内容を噛み砕いて理解し、そして純粋に聞いてやる。息を吐きながら、

「……どうして俺がそんな勝負を……受けるメリットがないな。それに弁当はお前のものじゃない。訳の分からないことを言ってる暇があったら、さっさと席に着け」

「キャプテンの手作り弁当を食べるなんてズルいし！ あたしも今日はお弁当を忘れ——持ってきてないから勝ったほうがキャプテンの弁当を手に入れる……ってことに——」

「ならない。アホなのかお前は？」

お前が弁当を忘れてきたとか知らねえよ池田アツ!! ただの自業自得じゃねえか。

「もう……駄目よ華菜。お弁当がないと東郷さんが困るわ。お弁当なら私のを分けて上げるから。ね？」

「そ、それは分かってます。だから、負けてもこれをやる!」

俺が呆れていると、池田はビニール袋から取り出したそれを掲げてみせる。なんか見覚えのあるものだった。というか、

「プロ麻雀せんべい……また鬱陶しいものを……というかそんなに沢山どこから……」

「うちの部員で大量に集めてるのがいたから貰ってきたし！」

「いやいや、にしても多すぎだろ……軽く10個以上はある。箱で買ってんのか？」

「プロ麻雀せんべいというのは、まあ簡単に言えばプロ雀士カード付きのスナック菓子だ。よくある食玩の一種だな。」

「ポテトチップスが入って俺も食ったことはある。が、これを買う奴ってのはポテトチップス目当てではなく、おまけのプロ雀士カードを求めて買っている奴が殆どだ。」

「その年に活躍したプロ雀士やトッププロ、ルーキーなどを中心に毎年更新されており、レアなカードは中々出にくい。特に特定のレアカードを何枚か集めるとサイン入りカードと交換して貰えるなど、コレクション要素が強いロングセラー商品である。まあマニアやファン向け。学生なんかも買う奴は多いか。」

「かく言う俺も、学生時代は一時期集めていた……いや、懐かしいな。ある年のスターカードがどうしても欲しくて、後輩を使ってお店の片っ端から買い漁ったのだ。ボブにも協力してもらい、チーム獅子王総出で街へ繰り出したものだ。あの時の俺達は獅子王っていうか完全にカードゲームに出てくる悪役。グー○ズみたいな感じだった。別に人から奪ったりはしてないけど。」

「いやほんと懐かしいな。あの時は——」

『——全員集合オ！ おら、いくぞお前ら!!』

『フウーーー!! カード集めの時間だYO!』

『え、ええ!? 東郷さん、練習はどうするんですか!?!』

『うるせえ!! はやりんの限定スターカードと練習、どっちが大事だと思ってるんだ!!』

『ついでにうたたんのが出たらオレが貰ってくYO!』

『う、うう……僕も集めてるのに……出たら渡さないといけないなんて……』

『ああ!? 何か言ったか倉橋イ!? お前と池田は駅前のスーパーだ!』

「片っ端から買い占めてこい!!」

『な、なんでもありません……うう……』

『お、お金はどうするんですか東郷先輩!?!』

『心配しなくても用意してんだよ池田アツ!! おら、無くすんじやねーぞー! ちゃんとレシートも取ってこい!』

『東郷先輩! ボブ先輩! 自分はどうすれば……!?!』

『小坂ア!! お前は体力があるからな! 近場のコンビニをダツシユで回ってこい!! おら金だ!』

『りよ、了解です!』

『で、俺達はどうするんだブラザー?』

『俺達は公園で待機してひたすら開封作業だ。ぶっちゃけ買った後はこれが1番面倒だからな』

『ええ……ずる——』

『何か言ったか池田ア?! 他のカードはくれてやるし、菓子の方もくれてやるから気合入れろ!』

『ほ、他のカードをくれる……!?! と、東郷先輩! それじゃあ僕、野依プロのカードが欲しいです!』

『ま、マジっすか東郷先輩! ポテトチップス全部奢りとかマジ太っ腹っす!!』

『でもまたパシリ……ああ、でも行長プロのカードは欲しいなあ……』

『H A H A H A! かつてこれほどチーム獅子王がまとまったことはないゼイエア!』

『よし行け! 街中のカードを買い漁れ! プロ雀士カードは俺達のものだ!』

『おお!!』

——とかこんなことが確かあったな、うん。今思い出すと若干黒歴史だが……。

ともあれ、目当てのカードは手に入ったし、俺にとっては良い思い出だ。はやりさんのスターカードは今も家のホルダーに大事にしまっている。いや、そのスターカードを最初に見た時……ふふ、下品なんです、愚息がね……ふふふふ。

まあそんな感じでプロ雀士カードにはそんな思い出がある。そして、俺も1年前は確か収録されていたはずだ。クソみたいな異名がつ

いたのもその時だな。ぶつちやけレアでも何でもないので価値は低いと思われる。多分ではあるが。まあそれはともかく、

「……いや、お前が食えよ。弁当忘れたんだろ？」

「忘れた——訳じゃないし！ これは最初っから……そう！ 勝負を挑もうと思つて敢えて用意しなかった！」

「ほう、じゃあ朝の段階で福路が弁当を作つてきてるのは知つてた訳か。——どうやって知つたんだ？」

「えっ？ あ……あつ、それは……なんか、キャプテンからの、電波が届いたような……？」

「そんな電波を送つたのか？」

「電波ですか？ ……そもそも電波つてどうやって送るのかしら……？」

「ほら見ろ。電波の送り方が分からないのに送れる訳ないだろ。……ちよつとズレてるような気はするけど」

「キャプテンが機械音痴なの忘れてた……！」

機械音痴なのか……ああ、でもなんかそう言われてみるとそんな感じもしてくる。

ただ機械音痴といつてもどの程度かにも寄るけどな……パソコンの使い方が分からないとか？ 携帯が使えない——はさすがに行き過ぎか。気になるからちよつと聞いてみるか。

「福路はSNSとかやってるか？」

「SNS……？ あの、すみません。どういう意味か分からないんですけど……」

あつ、これは駄目なやつだ。機械つていうか、今の質問はネット寄りだけど、少なくともそういう話題は通じないというのが分かった。

「むっ……キャプテンの連絡先を聞こうつたつてそうはいかないし！」

「別にそういう訳じゃないんだけどな」

またしても池田が突っかかってくる。うーん、さすがに面倒だな……とはいえ、池田も重点的に見てくれて言われているから無視や放置も出来ないんだよなあ……もつと言うなら、遠ざけることも出来ない

い。

「というか久保さんに聞かれてたらまた折檻されるのに良いのか？
それとも、それを理解してなお俺に突っかかってきてるのか？
だとしたらとんでもなく警戒されてるな。」

「というか、だ。なんかこの池田は誰かを思い出す。なんか命令した
くなるような……あつ、そういえば……。」

「……池田。お前、東京に親戚とかいないよな？」

「……？ 別にいないけど、なんでそんなこと——はっ!? まさか
キャプテンだけじゃなくてあたしまで毒牙に掛けようと……!」

「かけねえよ。お前が俺の後輩に似てたからもしかしたらって思った
だけだ」

「はあ？ 意味分かんないし」

「うーん、やっぱあの池田の親戚とかか？ どっちでもいいが、微妙
に似てるせいでなんだか微妙に腹立つな……後輩にタメ口利かれて
る気分。普通の奴ならもつとムカついているが、ただこいつはタメ口で
も妙に可愛げがあるような……なんだろうな、俺が生意気な奴はそん
なに嫌いじゃないというか、生意気だけど可愛げがあると許せる気が
するから困る。あれだ、琉音に近いか。生意気だけど実は怖がりって
いうね。池田は怖がりかは知らないが、そんな感じがする。」

「へいへーい！ ビビってるんのかー!」

「なんかやたらと煽ってくるが、さてどうしようか。後輩とは全く関
係ない学生つてもあつてそんなに気にならないんだけどな。とは
いえちよつとどうにか大人しくさせないと攻略どころの話じゃない。
「……はあ、じゃあトップ率高い方が勝ちな。引き分けならなかつた
ことに」

「それでいいし！ よーし、燃えてきた！ キャプテンの弁当は渡さ
ないからな！」

「もう、華菜つたら……」

「さすがの福路も困ってるな。まあなんで池田がここまで対抗心を
むき出しにするか分からないのだろう。うん、というか俺も分からな
い。もしかしてこいつ、福路の事がガチで好きだったりするのか？」

今どき、同性愛者は珍しくないからな。それなら納得がいけないこともないが……とはいえそろそろ練習をしないと久保さんが飛んできそうだし、池田のことも真面目に指導しないといけないので午前中は真面目にやるとしよう。

なんか池田。高い手で和了りやすいっぽいし、ここは流しまくってお茶を濁すか。

それに万一トップを取れなくても、この条件なら問題ないのだ。トップ率が高いほうが勝ち、だからな。だがこの卓には、

「ツモです。4000・8000」

「お、親つかぶり……しかも倍満……」

うわ、容赦ねえ……だがさすが福路。やっぱり池田よりも数段上の腕前だな。

まあ俺と対局する時は必ず福路がいる以上、そして池田は回し打ちであるため、午前中だけだと打てる回数は割と少ないこと。それを考慮すれば、お昼頃には、

「お前との局だとどつちも2位以下だから引き分けだな。というわけではなかったことに。だから弁当は俺のものだ」

「ひ、卑怯だし！ キャプテンがいない状態でもういつかい勝負だ！」

「もうお昼休みだから無理だな」

「くっ……キャプテンの弁当をみすみす渡してしまうとは……」

まあ、こうなる。池田のいない局なら俺が1位になることもあったが、池田のいる局だと福路の活躍もあって池田も俺もトップを取つてないので引き分けで勝負は流れる。福路が池田に差し込むようなことがあれば分からなかったが、それはなかったので俺としては助かった。

というわけで弁当は正統なる所有者である俺のものだ。池田は悔しそうに拳を握っている。そんな池田を見かねて福路が近づいていく。

「もう、華菜？ お弁当なら私のを分けて上げるから元気を出して？」

「うっ……それはありがたいんですけど……」

「？ 駄目かしら……」

「だ、駄目じゃないです！ 貰えるならありがたいいただきます！」
「よかったわ！ それじゃあ皆でお弁当にしましょう！」

パン、と手を叩いて丸く収まったことを喜ぶ福路だが、池田は相変わらずこちらを親の仇を見るような目で見ている。警戒のされ方がえぐい。

だがそんなことよりも待ちに待った弁当の時間だ。福路が包みを持ってくる。

「はい東郷さん。お弁当です。お口に合うといいのだけれど……」

「……おう。ありがとな」

福路さんが渡してくれた手作り弁当。なんだかこうやって手渡される尊さが凄い。新妻みたい。はあ、嫁にしたい。嫁プレイしたい。

とりあえず、今日は天気が良いので、と中庭に移動するがそこには福路と池田も――

「池田アツ!! 飯の前に指導だ!! てめエ、あれだけ言ったのにまた失礼な物言いしまくってたみたいだな!」

「ひいつ、こ、コーチ!? い、今はちよつと……!」

「問答無用だ!! 大体お前はいつもいつも――」

……池田はコーチに連行されたのでついてこなかった。いや、どうだろう。すぐに復帰する気もするが、とりあえず邪魔者はいなくなつた。

とはいえだ。福路と2人きりになったところで、別に何か出来る訳でもないし、今池田がいなくなつたところであまり意味はないんだよな。対局中にいなくなつてくれるならいいんだが、別に池田がいなくとも他の部員がいるので面倒なことに変わりはない。

「どうでしょう? 男の人だから、多めに作ってみたのだけど……」

「いや……これは美味しいな。量もこれくらいでちょうどいいと思う」

「お口にあったのなら良かったですつ」

改めて福路攻略は難しいな、と思いつながらベンチで弁当を食べる――が、これはこれで中々に得難い時間というか、なんか付き合ってるみたいで良くないか? というか弁当めっちゃ美味え……なんだこ

の弁当、弁当に定番のおかずがバランス良く綺麗に配置されてるだけじゃなく、1つ1つの料理のレベルが高い。

なんだろう。別に料理人の料理って訳じゃないが……家庭的な料理、家庭的な味がする。家庭的な女がタイプ of 俺——いや、別にだみ声ラップはしないぞ。家庭的な女が割と好きなのはマジだけど。

いや、葉もそうだが、料理が美味い女の子良いな、うん。エプロンとか似合いそうなやつ。ちよっとネクタイとか締めてくれないかな。やっぱ新婚プレイが捗りそう。

「福路は料理上手なんだな」

「ありがとうございます。でも好きでやってることで、人よりちよつと慣れてるだけですよ？ 美味しいものを食べてもらったら相手も喜ぶし、私も嬉しくなれるので」

笑顔でそう言う福路。好きでやってるってのもポイント高いな。やっぱり面倒見が良いのだろう。

包容力があるというか……：そういういえば昨日も1年の雑用をしてたな。その辺りも福路の面倒見の良さを現してる。

「1年の代わりに雑用をやってるのも、他人に喜んで貰いたいから、とかか？」

「牌に沢山触れて、麻雀を楽しんでほしいんです。雑用ばかりだと牌に触れない子も出てくるでしょう？ それだともったいないので……」

なんだこの子、やっぱ聖人か？ 聖女か？ 良い奴すぎて眩しいんだが。

なるほど、他の部員や池田が慕うのもよく分かる。真面目にこんなこと言ってる奴がいればそりゃ慕うだろう。それに雑用をやってて自身は麻雀を打つ機会が減るのに、それでもなお部内でトップの実力者なのだから、そりゃ久保さんも福路にはそれほど強く言うことはない。というか、教えることが少ないんだよな、優秀過ぎて。

ぶっちゃけ福路は麻雀のことをかなり理解してるし、後は純粋に腕を高めていくだけだ。近場に魔物やプロでもいれば腕も高めやすいんだが、部内でトップというのがまた難しいところだな。こう言っ

はなんだが、自分より弱い奴と打つてもレベルの向上は見込めないし。

とかなんとか、真面目に指導者として考えてみたが、弁当の美味さに考えがcaき消される。料理だけならトップクラスというか、いやほんと、この家庭的な優しい味付けがなんとも……、

「——華菜ちゃん到着だしっ!!」

「あら、華菜。大丈夫だった?」

「池田ア……」

と、福路と2人きりの昼食を楽しんでるところにダッシュで池田が現れる。すごいお邪魔っぷりだな。久保さんに怒られた直後だつていうのに、そのバイタリティは呆れを通り越して感心してしまうほどに。

「へーきですキャプテン——つて、ベンチで2人きり!? そうはさせるか! 華菜ちゃんガード!!」

そんな池田は俺と福路を見て表情を驚きに変えると、俺と福路の間に座り込んできた。くそつ、鬱陶しい。せつかく美少女と触れ合つてたつてのに……。

「ふっふっふ、これでキャプテンと2人きりは防げたから、後はあたしの持ち前のウザさでcaき回せば完璧だし……」

つてふざけんな。聞こえてるぞ池田アツ!! ウザいつて自覚あつたのかよ。いやまあ、確かにこいつあまり人から好かれそうな性格ではないな……俺が言えたことでもないけど。

そういえば俺の後輩の池田も、俺の前では大人しかつたが、同学年や後輩相手だと割とウザ絡みする奴だと聞いた憶えが……やっぱり従姉妹じゃないか? 遠い親戚とか。共通点が多くてそうと思えない。

「ふふふ、はい。華菜の分もちやんと残してあるわ」

「わあ、ありがとうございますございますキャプテン! いただきます! はぐ、んぐ、はむ……!」

福路の弁当を分けてもらった池田が頭に耳が出るような勢いで弁当に齧りつく。やっぱこいつ猫っぽいな……アホっぽいし……福路

はその食べっぷりにニコニコしているが、俺は何とも言えない気分で見える。

弁当を食べ進め、完食すると、

「ごちそうさま。美味かった」

「お粗末様です。お茶をどうぞ」

「気が利くな。貰おう」

「にやつ!? あたしを挟んでもお茶の受け渡しを!」

「いいからお前は早く食べる……昼休み、後5分しかないぞ」

「えっ、嘘!」

「嘘だ。そんな訳ないだろ。落ち着いて良く噛んで食ってろよ」

「だ、騙したな!? くっ……やっぱ悪い男だ……」

水筒のお茶を飲みながら池田の恨み節を無視する。たまには仕返しとかないな。なんか舐められまくってるし、こんくらいは許されるだろ。むせてしまえ。

だが……はあ、こんな池田も一応は見てやらないといけないのがな。午後の練習では福路に役満直撃を狙いたいが、相変わらず池田が俺を狙ってくるだろうし……こう、どうにか確執を取り除いてその妨害も取り除きたいのだが……。

どうにかして真面目になってもらうとかか? ぶつちやけ池田が真面目になる方法とか、俺がいなくなるか……あるいは別のことで火を点けさせるとかか。

なんだろう。ライバルのことで煽ったりしてみればいいか? 例

えばだ――

「……それより、そろそろ真面目に練習しろよ、池田。そんなんじやあ、全国どころか地区予選で苦勞するぞ」

「っ……そ、そんなの、言われなくても……分かってるし……」

お、ちよつと効いた。やっぱその辺りは効果があるというか、自分でも分かってるのか。

ならもうちよつと焚き付けてやろう。池田はメンタルを鍛えるのが強くなるのに最も良い手だからな。多分。だから別にこれは池田を大人しくさせるためじゃなくて、池田の成長を促すためにやるの

だ。決して福路攻略の為の足がかりという訳ではない。

俺は厳しい口調で言う。敢えて、不安を煽るように、

「いや、分かってないな。お前は今年も——あの、天江衣と対戦する可能性がある。それをちゃんと分かっているのか？」

「っ……」

その名を出してやると、池田が分かりやすいくらいに怯えた。分かりやすいくらいの恐怖を感じてる。だがまあそうだろう。俺はその理由を知っている。

何故なら調べたからな。去年、インターハイ長野県予選の決勝で、風越女子高校が龍門渕高校と対戦したことを。

団体戦のメンバーに1年の時から選ばれていた池田は、同じ1年だった龍門渕高校の大将、天江衣と対戦し、倍満を振り込んで敗北した。

まあ言葉にすれば大した事なさそうに見えるが、魔物と対戦して、なおかつ振り込んで敗北つてのは、周りから見るとトラウマを抱えていたりするものだ。団体戦であれば尚更。個人戦であれば自分1人が負けるだけで済むが、団体戦であればチームの仲間全員の夢が絶たれる訳で、1年が背負い込むには重すぎるものだろう。

だからまあ、池田もそうなんじゃないかって思ったが、やはりそうらしい。

だがしかし……発破をかけてやろうと思ったが、なんか怯えまくってるし、逆効果にもなり得るか？　ぶっちゃけ池田みたいなやつはそれを乗り越えたら妙に爆発力があるというか、強くなりそうな予感もあるんだが……まあ俺は別に風越に思い入れがある訳じゃないし、強い方が勝てばいいと思うが、指導しに来てる以上は一応それっぽいことをしないとイケないしな。

とりあえず言っておこうかと、

「今のままじゃ勝てない。今よりちょっと強くなっただけでも勝てないぞ？　あれはおそらく——『魔物』だからな。それでも勝とうと思うなら、お前も一皮剥けないといけない」

「っ……だから練習をして——」

「なのに昨日今日とお前は練習に身が入ってないな？ 俺を目の敵にするのはまだいいが、それで集中を乱して結果が出ていないなら意味がないな。俺くらい倒せないと天江衣には絶対勝てないぞ？ お前は今年も去年と同じことを繰り返すつもりか？」

うーん、なんとというブーマラン。邪な考えでここにいる俺に言えたことじゃないな。

ただ俺ぐらい簡単に倒せないと天江衣に勝てないのは本当だし、言ってることは間違いじゃないと思う。俺が言うとなんか説得力がないように聞こえるっただけ。

ただまあ、これだけ言えば怒って奮起するか、もしくは逆に――

「……そんなの……そんなの、お前に言われなくても分かってるし!!」
「華菜!？」

「この場では逃げてもいいが、練習にはちゃんと来いよ」

「っ……うっ、くう……」

声を張り上げてベンチから立ち上がった池田にそうやって声を掛けると、池田は半べそを掻きながらその場から走って立ち去っていった。

福路がそれを心配そうに見たが……なんか、さすがに厳しすぎたか？ これだと福路からの印象も悪くなるかも……。

ぶつちやけ池田を強くする義務は……いやまあ、久保さんから頼まれてはいるとはいえ、そこまでやる必要はない気がする。精神を鍛えるには精神攻撃だよなと追い詰めてみたが、追い詰めすぎたかもしれない。

とんでもなく気まずい空気がその場に流れるし……いやどうしよう。とりあえずもう立ち去るか。

「……弁当、ありがとな。俺はもう部室に戻る」

「あつ、はい……その、東郷さん……」

「少し強く言い過ぎたか。悪いな、部員を虐めてしまって。後で池田にも――」

「……いえ、東郷さんが華菜と……風越のことを真剣に考えてくれてるのは分かっています。そんな東郷さんを責めることは、私には出来

ません」

えっ。いや、別にそういう訳じゃないんだけど……。

むしろお前のことしか考えてないけど？　って言ったらさすがに幻滅されそうだから言わない。言わないが、そうやって勘違いされるのもなんとも言えないな。敢えて訂正する必要もないから黙ってるけど。

「午後の練習もよろしくお願いしますね？　私はちよつと、華菜の様子を見てから部室に戻りますから、東郷さんはお先に……」

「……ああ、分かった。それじゃあな」

と、池田が走っていった方へと小走りで向かう福路。やっぱ部員思いというか、面倒見が良いな。

福路からの印象が悪くなっているのは僥倖だが、なんというか、これはこれで面倒くさそうな気配がするな……池田が覚醒したらどうしよう。それはそれで福路に役満をぶち当てるのが難しく……つて、そうだ。仮に池田が今強くなったりしたら俺が困るな……。

というか池田が練習に来なかったらどうしよう。久保さんになんて言えばいいかな。あの人、池田がお気に入りだし、自分以外が虐めると怒りそうだから本気で、東郷オツ!!　される覚悟もしておくか。うん……これ失敗だったかもしれない。

俺は自分のしたこと若干の後悔を抱えながら部室へと足を向けた。

猛指導

午後の練習が始まる時間までドキドキしながら待っていたが、一応、池田は練習に現れた。現れた。現れたのだが……。

「……ツモ。1000、2000」

「……………」

——午前中より、明らかに覇気がない。

今も俺のツモ和了りで親被りを食らったというのに、少しびくつとただけでほぼ無反応で点棒を寄越してきた。

いや、まあ地味にこちらを睨んでいるから完全に意気消沈したという訳ではないだろう。

俺に怒られたことが気に入らないのか、だが正鵠を射ているのを自覚し、練習を真面目にしようとしているが、天江衣という脅威を思い出してやはりビビってるのか、それともやっぱりこちらがムカつくから集中しようにも出来ないのか……。

まあ、人の心なんて完全には分からないからな。どれが正解かは不明だが、色々と渦巻いているんだろう。それで吹っ切れて強くなってくれればいいんだが……今は微妙に調子を落として弱くなってるから困るな。

大人しくなったからこれで福路を落とすのには都合が良いのだが……その肝心の福路の方がな——

「……華菜、大丈夫？」

「っ、はい、大丈夫です……気にしないでくださいキャプテン。その、食べて眠くなってるだけですからっ……………」

「……そう……あまり無理はしたら駄目よ？　少しでも気分が優れないとか、調子が悪かったらいつでも言っつて？」

「……はい、ありがとうございます。でもほんとに大丈夫ですから」

「……華菜……………」

と、こんな感じで池田を凄いい心配してて何とも言えないのよな。

まあそれはそれとして役満来ないかな、と思っつて打っているが全然来る気配はないしな。普通に麻雀打ってるだけなので嫌でも池田の

消沈振りが目立つ。

そのせいか久保さんが池田に喝を——入れるのかと思ったが、今はまだ遠巻きに見て眉間に皺を作っているだけだ。どうでもいいけど、久保さん、その顔と勢いが怖がられる原因だよな……周囲の部員達もいつ怒声が来るのかとビクビクしてるし。

いやもう、なんか騒がしい池田が大人しいってだけなのに、妙に空気が悪い気がするから困る。いや、そのことで福路がちよっと心配そうにしているのも原因か？ やっぱキャプテンである福路が困っていると周囲もざわついてしまうのだろう。心情的に。全体的に打ち筋に勢いが無い。

まあ、そもそも風越女子の部員は強豪校なのにそこまで際立ってはいないというか……まあそこそこのレベルでまとまっただけだが、結構平凡なんだよな。牌効率なんかもそんなには悪くはないし、理論的なこともよく分かっている。

だがそれだけだ。どれも一流には程遠い。全国レベルではない。良くて地区予選決勝レベルってところだ。

やっぱ福路一強の次点で池田。それから大きく離れて……うーん、そうだな……このメガネっ娘の吉留さんや、後は何気にドムが部員の中ではマシってのが何とも言えない。どちらも手堅い打ち方をする良レベルの打ち手って感じ。強キャラではないけど、良キャラってレベル。例えるならそれくらいだ。

まあ、昨日久保さんに言ったとおり、福路と俺と常に打つことで全体的なレベルを底上げ出来ると見ているのだが……なんだろうな。別に悪い指導をしてるって訳じゃないんだが、これで龍門渕に勝てるかって言うとなんな感じもしないから困るな……。

部員が多い弊害と言うべきか。80名近くを指導し、それなりに出来る面々に絞ったとしても10名程だとしても、打てる数には限界があるし、個人に集中して強化することが難しい。

これが有珠山高校の時みたいに5人ギリギリとかであれば、端から5人で団体戦を戦い抜くしかないのだからいつそのこと腹も決まるし、5人が強くなればいだけだからそういう意味で楽ではある。指

導もしやすい。

「ただ団体戦に出るメンバーはランキング5位以内の部員とはいえ……変動だつてあるし、正直福路と池田以外はいつ入れ替わつてもおかしくないから誰を強化すればいいのかつてのが中々見えてこない。」

「個人的には眼鏡ちゃんこと吉留かなあ……俺の経験上、美少女つて高確率で麻雀強いし、どうせ指導するなら可愛い子が良い。完全にえこひいきになるが、それでも吉留は現状ランキング3位だし、指導するのはおかしくないことじゃないしな。これで胸があれば……全くないからなあ……可哀想に……。」

「……？ えつと、なんでしようか、東郷さん」

「……今の局の——8巡目か。捨てるならこつちの牌が良かったかもな」

「あ、はい。そうですね……私もそう思います。その、実は捨てる時に思つたんですが、他家とは点差があつたし、危ない橋を渡る必要はないかなと思つて躊躇してしまいました。結果、それで逆転されてしまいました……」

「後から河を見てみればこつちが最善だつたと気づけることはよくあることだ。まあ、何度も打つて経験、記憶してけば自ずと正解を引ける確率も上がる。お前は判断力は悪くないし、セオリーに縛られずに自分の判断にもつと自信を持った方がいいかもな」

「そ、そうですか？」

「ああ、自信を持つて頑張れよ。練習に費やした時間は裏切らないからな」

「は、はいっ！……ご指導、ありがとうございますっ」

「吉留が俺の指導にお礼を言う——まあ、何気にビビつたというか、一瞬胸を見ていたことを気づかれたのかと思つたし、声を掛けられて内心焦つたが、なんとか誤魔化せて良かった。」

「それに今もそれっぽいことを言えたしな。うん、いや、別に嘘をついてる訳でもないし、ちゃんと思つたことを言つたまでだが、最後の言葉とかはあまりにも適当というか、無難すぎる。練習に費やした時

間は裏切らないとか、別に誰でも言えそうな言葉だ。裏切らないとも限らないし。調子を上げさせるための言葉だと思えば安いものだし、別にいいかって感じだが、これでお礼言われるんだから指導って気持ちいい。プロ時代からそうだが、割と無難なこと言うだけでも感謝されるからプロの立場ってすごいな……って思う。

それと、そうだな。次は一応、ドムの整備でもするか。——さあ見せてもらおうか、風越軍のモールスーツの性能とやらを……！

「ド……ゲフンゲフン、んんっ——深堀、今は……高めを狙ったのか？」

「？ ……はい。裏目に出てしまいましたか」

「お前は堅実な打ち方が持ち味かと思っただがな。高めを狙って振り込むとは珍しいこともあるものだ」

「……ここで負けると順位が下がる可能性もあるので慌ててしまいました」

「慌てるな。下手に動くとかえって当たる」

「？ はい。それは……そうかもしれませんが、どうにも迷ってしまいました……」

「うろろう逃げるより当たらんものだ。私が保証する」

「……私？ ……いえまあ、確かに振り込まなければ……」

「どれだけ高い手を張ろうとも、当たらなければどうということはない」

「……あの、さつきから妙に格言めいてるのは一体……？」

「和了率の低さが、団体戦の結果を決める決定的差でないことを教えてやれ」

「……なる、ほど……？」

「では私はこれで失敬するよ」

「……あ、はい。ご指導ありがとうございます」

ふっ、まあこんなところでいいだろう。良い整備——アドバイスが出来たと思う。……ドムの名前、一応憶えてて良かった……ちよつと危うくそのままで呼ぶところだったし。

なんというか、こういう体型の奴を見ると、昔、風俗に行った時の

ことを思い出す。爆乳ボディが最高だと客引きによって連れてこられた俺を待ち構えていたのはドムが可愛く見えるほどのモ○ルスーツ。格ゲーで言うくと女になったエド○ンド本田みたいなのが出てきたのだ。いやもう……あれは地獄だった……あれで俺はソープの詐欺度というか、当たり外れの厳しさを知ったのだ……ふっ、認めたくないものだな……自分自身の、若き故の過ちというものを……ちなみに、この手のかっこいい名言はその時の客引きの兄ちゃんと同様になつて沢山教えて貰った。

まあ実際、ドムこと深堀はこれでいい。長所を伸ばす方針だ。堅実なデジタルタイプの打ち手。それなら無理をすることなく、防御重視で行くのも手だ。

団体戦であれば、点数を増やすことも重要だが、それが無理なら被害を最小限に留めて次に回すことも重要である。深堀はエースが集まる先鋒や、大将に据えられることはないだろうし、堅実に次に回すことだつて立派な戦術である。

——と、こんな感じで同卓していた奴に軽く指導をしたところで、久保さんの声が響いた。

「おおし！ 全員聞け！ 今からはレギュラーも交えていつものランキング戦だ！ 対戦表を張るからその通りに席に着け！」

バン、とホワイトボードを叩いて部員全員に久保さんがそう告げると、部室の空気が少しピリピリし始めた。ホワイトボードに張られた対戦表を皆が見て卓に着き始める中、俺も久保さんの元へ向かって聞いかけろ。

「久保さん。自分は……」

「東郷さんも見て回つてくれますか？」

あ、はい、と久保さんの言葉を承諾。相変わらず、部員相手と応対の差が凄くてこつちが戸惑いそうになる。

まあしようがない。部員同士の対局だし、少し休憩か。出来ればもうちよつと試行回数稼ぎたいところだったんだがな。

しかしこの部室のちよつと緊張したひりつくような空気には覚えがあるというか、校内ランキングを決める対局ともなればしようがな

いだらうとも思う。

白糸台でもあったからな。というか強豪校だと結構ある。部内での対局戦績でランキング作って強いやつから順番に団体戦のメンバーになる——みたいな感じで。

まあ例外もあるっちゃあるけどな。その最たる例が白糸台。1番強い“チーム”が団体戦に出る方式はあまり他の学校では見ない方式だ。

名門である風越女子も、他の学校のように校内ランキングを作っているらしい。さつきまでは俺も入って打っていたし、普段の対局とは違うのだろう。俺に負けて勝率下がるのはノーカウントみたいなものだし、ランキング上位の面々と回し打ちをしたのもあるしな。今からは全員、適当に振り分けて部員全員——それこそ入部したての1年生ですら、ランキング上位の2、3年生と打てる絶好の機会であるため、多くの部員が緊張しながらも試合のようなやる気を見せている……いや懐かしいな。俺もよくこういうのやったけど、ぶっちゃけ白糸台のランキングとかあつてもなくても変わらないし、割とどうでも良かったんだよな。負けると調子に乗るだろうから全力でぶちのめしたけど。他の部員は超気合を入れていたはずだ。

とりあえず俺は福路や池田を見たり……後はそうだな。あまり見てない1年生の部員でも見てみるか。もしかしたら掘り出し物があるかもしれない。二重の意味で。ぶっちゃけ真面目な方の意味だと、まだ入部したてだから飛び抜けるような才能を持ったやつはいないとは思いますが、一応は見ておくことにする。

程なくして対局が始まり、自動卓の音、牌を打つ音が連続する。俺は部室を歩き回って適当に対局を見て回るが、さてさて……。

「久保さん、一応ランキング見せてもらえませんか？」

「ん……ああ、そうですね。ではこれを」

と、久保さんは自らが持つてるファイルの内から3枚ほどの紙を渡してくれる。

それは順位が書かれた紙だ。1番上に福路美穂子、その下に池田華菜、その次に吉留未春……と、知った名前が書かれている。

……というか紙で管理してるんだな。ランキングって結構変動するんだろうし、データ管理すればいいのに。

久保さんって結構アナログなのか？ タブレットがあれば一々印刷する必要もない気がするんだが……まあ、そこは俺がケチをつけることでもないので何も言わないが、風越程の名門ならそれくらいの備品を取り揃えられていてもおかしくない気もする。

白糸台でも、最近はレギュラー用に何台か用意されていたりするし、強豪校ならその辺りの設備、備品にもお金が掛かっているものだ。でも確かに、久保さんって見た感じ昔のヤンキーっぽいんだよね……高校時代を思い出す。やたらと絡まれたからな。よく知っている。

ちよつと聞いてみようかと思うが、聞くのは今じゃないな。タイミング的に。今はとりあえず真面目に見てやるとしよう。

まあ知った奴らはいいとして……うーん、なんかパツとしないな……別に見どころのある奴もいそうにない。

誰か1人くらい良さげな奴がいてもいい気がするんだが——お？でもなんか調子良さそうな1年はあるな。糸目の。2年、3年が集まった卓でトツプか……ええと、名前は……あれ？どこだ？

対戦表に書かれた名前と手元のランキングの書かれた紙を見比べてめくっていく。1枚目にはおらず、2枚目にもいない。3枚目と成って……つと、ようやく見つけた。文堂星夏か。78位……微妙な順位過ぎるが、それにしても悪くない……か？

見た目は普通。そこらで見る女子高生だ。容姿に優れている訳ではないので対象外だが、単純に麻雀の腕の方だと意外とやれる方かもしれない。

少なくとも昨日今日と打ったランキング10位から5位辺りの奴らとはそれほど腕に差はないように感じるし、今も対戦してる相手はランキング20位程度の相手に快勝だ。まあ一回くらいならまぐれでもあり得るが、これが2回3回と続くととなると……ふむ、まあ今の所そこの何の特徴もない連中よりはマシだな。

対局を終えて息を入れている文堂を見て、少し悩む。一応、何もし

ないのもアレだし、軽く声でも掛けてやるかと、

「お前、中々やるな」

「わっ!? と、東郷プロ……!?!」

声を掛けると驚かれた。何やら動揺している。なんだ？

「……なぜそんなに驚いてるんだ？ あと、俺はもうプロじゃないからな。プロと呼ぶ必要はない」

「あ、いえ……すみません。その、プロと会うことなんて殆どないもので」

「ほー、風越ならプロの1人や2人——って、いや、そういや1年か。入学したばかりならそりや会うことが少ないってのも納得だ」

「はい……ですから少し、び、びっくりというか、緊張しています」

どうやらプロと会うのは初めてらしい。まあ厳密にはもうプロじゃないので初めてはまだなんだけだな。

でも風越ならそのうち嫌でもプロと会うことになる気がする。と
いうか、そうか……久し振りにこういう反応見たな。

もしかしたら俺のこと知ってるのか？ と思っていると、正にその
答えを示す行動を文堂が取った。

「……あ、あの……出来ればいいんですが……」

「あ？ どうした？」

「こ、このカードに、サインを……サインをいただけませんかっ！」

「うおっ、びっくりした……って、これは……げっ」

と、ポケットから取り出したカードとともに頭を下げられる。

それは見覚えのあるカードだった。プロ雀士カード。しかも見覚えのある顔。というか俺だ。

ああ、もしかしてきっきのプロ麻雀せんべいってこいつの……と納得してしまふ。多分そういうことなんだろう。コアなファン。マニアってやつだ。

「実は、東郷プロが来るって聞いてから、どうにかサインを貰おうかと思ってる……家からカードを持ってきました。なのでどうかよろしくお願いしますっ……!」

「……いや俺はいいが……俺のサインなんているか？ しかももうプ

ロじゃないただの男のサインだぞ」

「いやいや！ 東郷プロのカードはプロ1年目の第一弾にしか収録されてないので結構レア度高いんですよ!? だからカードもサインも貴重です！」

ええ……というかこいつ、俺じゃなくて俺のカードがレアで箔を付けただけなのでは……？

どうやら俺のファンという訳ではないらしい。純粋なマニアだ。プロ雀士カードの。たまーにこういう奴はいるが、どいつもこいつも似たような感じだ。

俺の高校の後輩の倉橋って奴もオタクでそういうコレクションが好きだった筈だ。確かプロ雀士カードも集めていたはず。語らせるとウザいと評判らしいが、先輩であり怖がられていたであろう俺の前で語る訳がないので俺はよく知らない。あいつも、プロ1年目の俺のカードとか持っていたりするんだろうか……いや、ないな。顔も見たくないだろうし。破り捨てられてても不思議じゃない。

まあ今となつては俺のファンも貴重だし、たまにはファンサービスしてやろう。この後の事を考えると可哀想だし。

「……これでいいか？」

「ありがとうございますっ！」

「いや、いいけどな。ただ……まあ、気張れよ」

「……はい？ それはどういう——って、あつ」

「………文堂オ……！」

頭を下げてお礼を言う文堂の元から離れる俺。顔を上げた先にいるのは怒りの形相の久保さん。うん……まあ、練習中にサインなんて貰ったら怒られるよね。そりゃあそうだ。これは仕方ない。

「文堂オツ!! てめエ、練習中にサインを強請るとはいい度胸だ!! 随分と面の皮が厚い1年もいたもんだなア!?!」

「ひっ、す、すみませんでしたコーチ!!」

俺のせいじゃない。俺のせいじゃない。いやほんとに。俺は普通に声掛けただけだし……悪い気はするが、俺に責任はないはずである。

久保さんの怒声と謝る文堂の声を尻目に別の卓を見ることにする。他の部員も気が気じゃない様子だが、なんとか耐えてくれ。福路も、そんなにオロオロしなくてもいい。眼の前の対局に集中してくれ。後、やっぱおっぱい大きい子を側で上から見下ろすと胸の膨らみがよく分かってエロかった。抜ける。それと池田アツ!! お前はもうちよつと頑張れ! このまま調子悪いままだと本気で俺が悪い感じになつちやうじゃねえか!! それは避けたい。なんとか立ち直つてくれないかな。久保さんのお気に入りの生徒潰したとか後でめっちゃ怒られそうだし。福路からの評価も下がりそうだし。ここはなんとか評価をあげたいところだ。

というわけでせっかくだ。俺の愉快的教え子の助けを借りよう。俺は携帯を開いて以前に参加させられた有珠山高校麻雀部のグループチャットに書き込む。

東郷『落ち込んで調子が悪い奴を慰める方法を求む』

よし、これでそのうち返信が——つて、もう来たあ!

獅子原『お腹をいっぱいにする!』

岩館『女の子なら可愛くお洒落だよね!』

真屋『先生が抱きしめる』

本内『褒めるのが素敵です』

松森『そもそもどういう子か分からないことには……何で喜ぶかは人それぞれですし……』

獅子原『まー、チカみたいな気分屋だね。機嫌悪い時は何しても機嫌悪かったし』

松森『な』

岩館『あー、噂の1年の時のチカセンってやつね。相当暴れまわってたっていう』

本内『チカちゃん、そんなに悪だったんですか……?』

松森『暴れまわってないし悪でもないわよっ!!』

真屋『ダークサイド……かっこいいですね』

岩館『えっ』

本内『えっ』

獅子原『皆聞いてくれ。今、近くにいたチカに直接ぶ』

桧森『なんでもないからっ!』

東郷『お前ら……いつもこんな会話してんのか……?』

カオスなチャット欄を見てげんなりする。賑やかで良いことだが、賑やか過ぎる。というか桧森は獅子原に一体何をしたんだ……?まさかぶつたのか? さすがの悪だと感心するがどこもおかしなところはない。

そんな愉快な北の大地の住人達のチャットは随分と役に立たないようなので自分で考えるしかないか……と思ったその時、個人の、ユキの方からチャットが届いていた。

『いつも通りの先生でいればきつと大丈夫です』

……いやユキ。なんか信頼してくれてるのは伝わるし有り難いんだが、具体的なあれこれがなくてなんとも……いつも通りだからこうなってるんだよなあ……。

『あと、また自撮りを取ってみました。受け取ってください』

と、しかもついでのように、ユキから下着姿の自撮りが送られてきて——って、おおい!!

俺は慌てて携帯を隠す。誰かに見られたらヤバいしな。というか、ユキはあれから妙に俺にそういうエロい自撮りを送ってくるので困る。見る度にすっごいムラムラするのだ。しかも後から——『使えました?』とチャットが送られてくるのでなんとも言えない。出来れば自家発電は控えたいんだけどな……あのロリ爆乳っ子め……今度会ったら覚えてるよ、とムラムラを溜め込みつつ、俺は眼の前の問題に取り組むことにする。

要は自信をつけさせればいい。自信を取り戻させて、ある程度強くしてやればいいのだ。

出来れば俺を目の敵にするのは止めてほしいが、もしかしたらそのことで恩義を感じて目の敵にすることを止めるかもしれないし、結果的に俺の為にもなる。ひいては福路とJK新妻プレイを目指す俺の糧となるのだ。

そして池田を強くすることは……まあ、難しいようで簡単かもしれ

ない。今やってることの強化版でも行えば行ける。多分。ついでにその面子なら勝手に励ましてくれるかもしれないし、計画した俺の株も勝手に上がる。

と、全てネタバレしつつ、俺はその面子に話を通すことにした。対局後に呼び出して説得する。

そして練習後に時間を設けてその企みを実行することにした。

——まあ簡単に見てもらおう。こういうことだ。

「よく来たな、池田」

「華菜……少し打ちながら話さない？」

「池田……そこに座れ」

「な………な………！」

夕方。部室へと呼び出した池田が俺達を見て絶句する。

自動車に座っているのは、俺と福路、それと久保さんだ。

そこに池田1人が呼び出され、空いた席に座れと言われる。それはつまり、麻雀を打つということだ。雀士であれば——いや、雀士でなくとも理解出来るだろう。この状況であれば誰でも理解出来る。

だが池田は言葉を失っている。なのでもう一度俺からも言うてやることにした。

「池田、打つぞ。これもお前を強くするためだ」

「い——いやいやいや!! ど、どんな地獄だしっ?」

池田が我に返り、状況を理解すると慌ててそれを拒否しようとする。

まあ無理もない。池田よりも強い福路に、池田よりも強いであろう久保さんという池田が恐れる人物。一応俺も元プロで、池田よりは……うーんまあ、一応強いか……? うん、強いつてことにはしておこう。池田はそう思ってるみたいだしな。

そんな3人との対局は二の足を踏むだろう——が、断らせはしない。

「華菜、大丈夫。あなたならきつと乗り越えられるわ。私もコーチも東郷さんも、皆華菜のことを信じているの」

「きや、キャプテン……そう言ってくれるのは有り難いですけど、この

面子で打つとかさすがの華菜ちゃんも——」

「つべこべ言わずに座れエ、池田アツ!! 今日私直々にお前を扱いてやる!!」

「ひっ、は、はいっ!」

福路の全幅の信頼が籠もった視線と笑顔でそう言われ、更には久保さんの怒声による追い打ちで池田を卓に座らせることに成功する。すかさず場を決めるとサイコロを振って対局を始める。一度始めれば逃げることはしないだろう。池田も雀士の端くれならな。

「こ、こんなの……あつ、あたし、お家の門限があつて……今日は早めに帰らないと——」

「親御さんの許可は取ってあるから安心しろ池田アツ!」

「えっ」

久保さんの声に再び間の抜けた声をあげる池田。なんでも小さい三つ子の妹たちがいるらしい上、親の帰りが遅かったりするのでよく池田が面倒を見ているらしいのだが、今日は土曜日で親も早目に帰ってきているとのことなのでその辺りも問題ない。久保さんが一分でやってくれました。

「それに帰りはきちんと車で送ってやる。——そうだ、ついでに飯でも奢ってやろうか? それがあればやる気も出るだろ」

「まあ、楽しそうでいいですね! 華菜、一緒に頑張りましょう!」

「え、あ、あの……拒否権は……」

「おら、早くツモれ池田ア……まさか一度卓についておいて逃げるなんて情けない真似はしないよな……?」

「う、あ……」

うん。まあこれも池田の為だ。池田を強くして自信をつけさせるため。恐怖を克服させるための荒療治。

正直俺が上手い方法を都合良く見つけられるはずもなし。強くなって自信をつける方法なんてこうやって強い奴で囲ってボコボコにするくらいのものだ。スポ根漫画みたいに綺麗な解決方法なんて思いつくか。現実にはひたすら練習なんだよ池田アツ!!

「う、うにゃー!?!? こんな、むちゃくちゃだしー!?!?」

お、調子が出てきたな。いいぞ池田アツ!! 今日朝まで——は無
理だが、日が暮れるまでひたすらボコるぞ池田アツ!!
——このあと、滅茶苦茶麻雀楽しんだ。

焼き肉

「ロオン！ 6400！ 池田アアツ！ てめエ、その捨て牌は何だ！！ 簡単な筋引っかけなんか引っかかりやがって！ てめエ、それでも風越のレギュラーか!？」

「ひいつ!? ご、ごめんなさいコーチ!! でもそういう時もありますよお!!」

「——ロンです。8000。ごめんなさいね、華菜」

「うっ……い、いえ……キャプテンに振り込むのが1番マシですし……」

「それロンだ。16000。悪いな池田。珍しく高めだ」

「な、なんてことするし!? これでまた飛んで——」

「池田アツツ!! てめエ、何飛ばされてやがる!!」

「す、すみませんコーチ!!」

「最下位脱出するまで終わらせねえからな池田アツ!!」

「現実的に下校時間になったら終わるしかないけどな池田ア！ ……

あ、でも雀荘という手がなくもないな」

「えっと……コーチ、東郷さん、それはさすがに……」

「お、鬼だ！ 鬼がいるし！ 助けてくださいキャプテン!!」

「いいから早くツモれ福路イツ!! 池田アツ!! てめエ、次振り込んだら許さねえからな!!」

「うっ……は、はい……」

「ん……どうしたんだ福路?」

「あ、いえ……その、ごめんなさいね、華菜——ダブル立直」

「キャプテーンツ!!」

——そんなこんなで、楽しい麻雀は日が完全に落ちるまで続けられた。

池田をひたすらにボコした俺達は、池田を連れて夕食の席を一緒にしているのだが……、

「にやーん!! もう、食べまくって財布をすっからかんにしてやるし!!」

「好きなだけ食っていいぞ池田。どれだけ食べても値段一緒だからな。——あ、すみません、食べ放題コース4人分で」

「そ、それは卑怯だし!」

というわけで焼肉屋だ。やっぱ部活の打ち上げといえは焼き肉だよなつて。別に何も成してないけど。とりあえず肉を食わせとけば高校生は喜ぶ。男だろうと女だろうと関係ない。有珠山高校の面々で実証済みだし、大人だって喜ぶ。

その例に漏れず、池田は一応喜んでるようだ。……若干やけくそ気味に見えなくもないが。これも成長と言えるか……?

「私までご馳走になってしまつて……ありがとうございます、東郷さん」

「ん? いや、元から飯にはお前達2人とも連れてくるつもりだったが……」

「いえ、頑張ったのは華菜ですし、私は大したことをしてませんから隣に座る福路が相変わらず聖母の微笑みでそんなことを言う。それを聞いた池田が声を大にして、

「そんなことないですキャプテン! キャプテンはいるだけであたしの助けになります!」

「そ、そうなの?」

「はい! ……だつて、大人2人と食事とかちよつと気まずいし……」

最後の言葉だけ小声で目線を逸らしながら言う池田。うん、まあ気持ちは分からないでもない。大人2人に囲まれての食事。しかも1人は池田が苦手とするコーチで、もう1人である俺のことも目の敵にしているのだからそうなるのも致し方ないだろう。

福路はこの場の清涼剤である。実際、福路がいないと場を取り持てない可能性がある。

「池田……さっきの気の緩んだ打ち方はなんだ?」

「うつ、コーチ……それはですね……」

「あんなんじや全国で通用しねエからな。名門、風越の顔に泥を塗るような打牌は——」

と、久保さんが隣に座る池田に説教をしている。さすがに店の中で

まで池田アツ！ と声を大きくはしないらしい。まあ何気に常識人というか、大人だし、マナーは弁えている。

ただ食事の場でも説教とかいたたまれないな……そういう時こそ福路の出番だ。

「コーチ。そろそろお肉も来ますし、指導はその辺りで……それに、最後のの方は華菜も良くなりました。今日一日で精神的にはかなりの成長していますし、私はこの子を褒めたいと思います」

「きや、キャプテン……！」

「……チツ、まあお店の方や東郷さんに迷惑を掛ける訳にはいかないからな。今日はこの辺で許しておいてやる。……分かったら好きなだけ食え。今日は私と東郷さんが奢ってやる」

「！ あ、ありがとうございます、コーチ」

「ふふ、それじゃあお食事にしましょうか」

あつさりとその場を収めてしまった福路。さすがの聖人力だが、何気に久保さんが……なんだろうな。もうなんかただのツンデレにしか見えないというか、池田の頑張りをそれとなく肯定してる辺りが何とも言えない。やつぱお気に入りの子生徒なんだな。あれかな、好きな子に意地悪する感じか？ ——言ったらぶん殴られそうだな……。

まあでも確かに最初はおっかなびっくりだった池田も、馬鹿みたいにボコされたおかげで逆に悩みが解消されてそうというか、やけくそ気味でも元氣を取り戻したので良しとしよう。一応、俺もそれっぽく声を掛けてやるか。

「まあ、お前はその調子でいい。その調子で明日からも練習を続ける」「な……急になんだし。さつきは、もつと練習に集中しろとかその調子じゃ駄目だみたいなこと言ったくせに……」

「その調子じゃ駄目だ、なんて言った覚えはないな。真面目に練習しなきゃ、勝てるもんも勝てないと言っただけだ」

池田が不満顔でそう言うので先程の言葉をもう一度分かりやすく告げてやる。また落ち込まれたら困るが、今度はそうならないだろう。

だがその代わりに、何やら考えるような、少し真面目な顔になって

池田は続けて言った。

「……勝てるものも勝てないって……おま——東郷、さんは、あたしが天江衣に勝てると思ってるんですか?」

途中で久保さんの睨みを受けてか、多少言葉遣いを直しながら池田が問うてくる。ふむ、中々難しい質問だな。

だが俺はそんな答えをなんとなく予想しながらも答えてやる。

「ああ——勝てる。だからお前はそのまま調子に乗って、調子を維持しつつ練習に励め」

「つ……そんなの気休めじゃ——」

「気休め? お前にはそう聞こえるか?」

「……そうじゃないと……?」

俺は頷く。焼き肉のタレを小皿に注ぎながら、

「ああ、勿論、気休めだ」

「どっちだし!」

「冗談だ。気休めじゃないぞ、うん、お前は勝てる」

「そう思ってるなら目を見て話すし!」

おっと、ついからかってしまった。いやあ、池田の反応が良くてついふざけてしまうが、あまりふざけすぎると真面目に聞いてくれなくなるし、一応真面目に答えてやるか。

「……お前、焼き肉のタレならどの味が好きだ? お店のスタンダー

ドのタレか? 味噌ダレか、それとも塩ダレか?」

「普通のタレが1番好きだけど——って、自然に話を変えられた!」

「変えてないぞ。ちよつとした例え話だ。多くの人が好きなのがこのスタンダードな甘辛い醤油ベースのタレだよな。焼き肉はこのタレに肉をじゃぶじゃぶつけて食べるのが1番美味い。大人から子供まで誰もが好む1番人氣がこの醤油タレだ。つまり——このタレが1番、圧倒的に強いとする」

「私は味噌ダレ派だ」

「塩もさっぱりとしてて美味しいですよ?」

「……そうでもないみたいだけど?」

「話がまとまらなくなるから今はちよつと黙っててくれ……」

久保さんと福路が好きなタレを言い出したのでちよつと黙つてくれと願ひする。そうか……長野つて愛知と一緒に味噌派が多いのかな……ひよつとして。まあ久保さんはそれでなんとなく分かるが、福路は塩派か……まあタレをじゃぶじゃぶつけて食うイメージは確かにない。この後すぐに分かることだが、お上品に頂きそう。焼き肉1つ取つても育ちが出るな。この場に限つて言えば圧倒的多数派という訳でもないらしい。好みで言う、普通のタレが1番美味いけどな、正直……天ぷらとかもそうだが、塩をつけてあっさりとか、かいう奴をあまり信用出来ないとか、通ぶつてるだけじゃねーの？ つて言いたくなくて困る。福路みたいな上品な女の子や、大沼さんみたいな渋い人が言うならともかく、そこらの男とかは、「いやー、焼き肉とか天ぷらは塩だわ。素材の味がね？ あ、お前には分かんないかw」——みたいなことを言つてきて、タレやつゆ派を下に見てきたりするから困るといふか、絶対味とか分かつてねーだろつて言いたくなる。

まあそれはともかく、俺は池田に言う。3つの小皿にそれぞれのタレを入れながら、

「この醤油ダレが1番強く圧倒的だ。それに比べたら、味噌と塩は悪くはないが劣つてしまう。だが両者の優劣は……まあ味噌だとしよう。味噌が塩と比べて強い……そして池田、お前は「塩」だ」

「あたしは塩……？ ……醤油が良かったな」

「塩も美味しいわよ、華菜」

「キャプテンが好きならあたしは塩でいいし！」

「なんで味噌じゃねえんだ池田アツ!!」

「ええっ!? そこを怒られても困りますコーチ！」

「……話を進めてもいいか？」

直ぐに話が脱線するので、焼き肉のタレなんか例えなければ良かったな……と思つてしまう。そして久保さん、別に味噌じゃないだけで怒る必要はくないか……？ 怒るところそこかよ。

とりあえず話を続けようと咳払いし、

「そして、天江衣が「味噌」だ。そして醤油は多くのプロ。天江衣で

も敵わないような怪物、一部のトッププロだ」

「……つまり……？」

「分かるか？ プロからすれば、天江衣もお前も、五十歩百歩。同じ高校生の枠にいる存在でしかない。であれば、だ。お前が負けるとも限らないだろ？ プロと比べれば、天江衣とお前の差なんて大したことないからな」

「そういうことに……なるのかー……？」

池田が腕を組み、首を傾げて唸る。まあ悩むのも当然だろう——実際、池田が負ける確率の方が圧倒的に高い訳だし。

実際のところ、天江衣はプロに入ってもやっつけていける。この眼で見えないので確かとは言えないが、一部のプロを駆逐し、トッププロの世界で戦える逸材かもしれない。

だがそれでもだ。それでも天江衣はまだ高校生で、池田も同じ歳の高校生。そうになると、池田を納得させる根拠、理由付けは色々ある。俺は池田に向かって迫真の顔で言ってる。自信をつけさせるために、

「敢えて言うが……池田、お前は十分強い。調子にノッてもいいくらいにはな。天江衣に、今はまだ僅かに及んでないというだけだ」

「あたしが、強い……」

「ああ、お前は強い。例えばだ。お前、自分が全国の女子高校生の中でどれくらい順位にいると思う？」

「えっ？ あたしが、全国で？」

「ああ、適当でいい。思った順位を言ってみろ」

俺はまだ俺の話に半信半疑な様子で池田を促す。池田は迷いながらも、

「……ひゃ、1000くらい？」

「ほお、思ったより自己評価は高いな？」

「う、うるさいし」

少し恥ずかしそうにする池田。が、俺はそれほどからかわずに話を進める。なぜならそれほどズレてはいないからだ。

「だが、それほどズレてもない。俺の見立てだと、お前の強さは全国

1万人と言われる女子高生雀士の中で——」

俺は言つてやる。掌を広げ、

「——50位以内には入る」

「50……」

「ああ。1万人の中のベスト50だ。上位1%どころか、上位0.5%。同年代でお前に勝てる奴を探す方が、本来なら難しい」

俺は池田にそう断言してやる。実際、それほど間違つてはいない。高校生という枠の中で池田を越える奴はそれほど多くはないだろう。頂点からはまだまだ遠いが、それ以外の同年代と比べれば鬼のように強いはずだ。

ただ天江衣は……ベスト50どころか、本当に魔物であれば全国で五本の指に入つてもおかしくない。

それを敢えて言わず、池田にはそれだけを伝える。ちなみに福路であれば、全国でもベスト20……もしくは16か、それ以上に入つてもおかしくないだろう。

ただどちらも天江衣に敵わないだけ。全国クラスの打ち手であることには変わりない。

俺は池田の強さを更に強調するように言う。久保さんや福路は黙つて聞いてくれていた。福路はともかく、久保さんはちよつとあまり過剰に褒めるなど止めてきそうだったが、思うところがあるのか眉間に皺を寄せながらも黙っていた。

誰の介入もない中、俺は池田に更に強調するように続ける。

「当然の話だ。お前は名門、風越女子の特待生。1年生ながらもレギュラーに選ばれ、校内ランキングも2位。福路という全国上位の選手を除けば、お前に勝てる同年代はほぼいない。それは十分誇つていいし、調子に乗つたつていい強さだ」

「……でも全国には——」

「——ああ、そうだな。たまたま行けなかっただけだ。お前は本来、全国に行つて当たり前前の選手だ。それくらいの才能がある。多くの選手と比べたら、お前は牌に選ばれた側の人間。勝つて当たり前前の人間だ。実際に、殆どの勝負には勝つてるんだから調子に乗つたつて構わ

ないんだよ」

「調子に乗ったっていい……」

池田にも思うところがあるのか、小声で俺の言葉を反復する。

まあ普通の指導者なら気を引き締める、調子に乗るな、お前はまだまだ弱い、と諫めるようなことを言うものだが、俺としては強いなら強いと誇ったっていいと思う。何故ならだ。俺は池田に言ってやる。「ただ、相手を侮るな。軽んじず、お前の実力を素直に出し切れればいい。そのためなら幾らでも調子に乗れ。自分が負けるなんてあり得ないと思うような、ある程度の傲慢さ、凶々しさってのがトップ選手には必要だ」

「……でも調子に乗ってたら、怒られたり、ウザがられるし」

まあそうだけだな。だが、それがどうした。

「ならウザがられる。相手が嫌がるくらいにな」

「ええっ!? むちゃくちゃだし! ……でも、そんなんでいいのか……?」

「ああ、別にいい。……というかだ池田。実際に強く、ある程度の実績を持つような奴が大口を叩いたりすることを調子に乗るとは言わない」

「え、じゃあなんて……?」

俺は言ってやる。池田に何よりも必要なものを。

「そういうのはな——『自信』って言うんだよ」
「!」

池田の眼が見開かれる。俺はその驚きを確認しながらも逃さず言葉が続けた。

「自信を持つてる選手は強いぞ池田。そういうタイプの選手は、勢いに乗らせると手に負えない。——そしてお前は、そういう選手になれる……」

「東郷……さん……」

池田の眼に炎が、光が灯る。

そこで俺は更に言ってやった。現実的に、

「……かもしれない」

「——どっちだしー！」

半目になった池田にツツコミを入れられる。いやまあ、だつてそんなのわかんないし……確かなことは言えない。もう肉も来たしな。

「そんなのお前の頑張り次第だ。俺は知らん。そんなことより肉食うぞ」

「なつ……くううつ……一瞬でも感動仕掛けたあたしが馬鹿だつた……！」

「ふふ、まあまあ、華菜。そろそろご飯にしましょう」

「ふん……おい福路、焼くのは任せたからな」

「はい、任せてください」

と、久保さんの声に応えて肉を網に乗せていく福路。そしてそれを管理して、適切なタイミングでそれらを裏返し、各々の皿へと分けていく——つて、福路はやっぱお奉行タイプというか、肉を率先して焼いてくれるタイプか……いるよな、そういうやつ。いると助かるタイプの人間というか、やたらと焼きたがる奴は。ただ、下手なのに焼きたがるのもいるので、そういう奴は微妙にありがた迷惑なのだが、福路は料理が上手いだけあつてそれも適切だった。

「はいどうぞ、東郷さん」

「ん、悪いな」

「いえ……ありがとうございます」

福路が肉を焼いて俺の取皿に置いてくれる……つて、んんつ？ 今なんでお礼言われた？ 言われたよな？ 俺が肉を焼いてくれたことに対して、悪いな、つて言ったら、お礼で返してきたよな？

どういう意味だと思うが、特に何もない可能性もある。というか、タイミングを逃して聞きそびれてしまう。福路は池田や久保さんにも肉を置いて回った。そして再び肉を——つて、よく見たら福路の右目が開眼してるじゃねえか！ しかもその効果か、肉の管理が完璧だ。網やテーブルの状況を完全に把握し、適切なタイミング、適切な場所、火加減で肉を焼いている。ええ……何その無駄な応用力……いや、無駄ではないけど、やっぱリアルでも応用出来るのね……。

——と、そーいや昨日今日との対局で、福路の力を大体推察出来た

んだよな。池田とのことで手一杯だったが、明日からはその対策が打てるかもしれない。

ぶっちゃけ池田への指導云々でそれっぽいことを言いまくってやったが、俺の目的はあくまでも好みの美少女に役満をぶち当てて惚れさせてエロいことをすること。その目的を考えると、今日の対局は俺にとってかなり有益だった。

福路の能力の考察が大分捗ったし、役満をぶち当てるための布石を打てる——まあ、出来るかどうかは肝ではあるが、問題はないだろ、多分。というか大丈夫って信じないと挫ける。これで駄目なら俺では攻略出来ないことになってしまいうからな。なんとかやりたい、もとい、やりたいところだ。

まあ、今は肉の時間だから性欲よりも食欲が勝ってるので煩惱に塗れてはいない。肉にタレをじゃぶじゃぶつけてご飯と一緒にかつこむ。美味い。たまにキムチとかとも一緒に食べたり、たまにタレを変えたりして肉とご飯をかつこむ。これが美味いのだこれが。焼き肉は肉も美味いが、肉と一緒に食べるご飯も美味い。

まあ去年からは、酒と一緒に食べる肉の味も体験して、悪くはないとは思った。うん、それもそれで良いものだった。

だが……焼き肉と酒の場合、酒もメインになってしまいうので、食事っていうか「飲み」って感じた。酒と一緒にだどご飯はいらなくなるが、それはそれで微妙というか……なんかご飯が恋しくなる。焼き肉食うと言ったら肉とご飯をめっちゃやくちや食べまくりたい気がするのだ。

酒も良い。酒も良いんだが……そこが悩ましいところなんだよな。かといって、酒もご飯もつてなると胃の容量が中々な……。

まあどちらにしても、今は高校生と一緒にだし、そもそも車で来てるうえ、帰りは送っていかないといけないので酒はNGだ。正面の久保さんも似たような理由で酒を頼んでないのだろうな。

「……ふーっ、東郷さん、焼き肉来ると、お酒が飲みたくなりませんか？ その、ビールとか……」

「分かりますけど、俺はビール、そんなに好きじゃないですよ。ハ

イボールとかサワー系なら……」

「あー……若者のビール離れってやつですか」

「久保さん、俺と1つしか歳違わないじゃないですか……」

「どうやら久保さんは酒を、特にビールを飲みたくなる派らしい。まあよくいるタイプだ。珍しいことじゃない。ただ、全員がビール頼むと思つて、〃とりあえず人数分生中〃とか言う奴は消えてほしい。なにがとりあえずだ。こっちはビールそんなに好きじゃねえんだよ。勝手に俺の飲むもんを決めるな。俺は他人になんて言われようがグレープフルーツサワーとかを飲むんだよ！ カシスオレンジとかも！ 女子大生みたいなチョイスとか言うな。柑橘系が好きなんだよ！ そもそも苦いのがそんなに好きじゃない。甘い方が美味しいに決まつてる。子供舌とか言うな。辛いもんも好きだから。わさびは食えないけど。唐辛子とかの香辛料系ならそれなりに辛くてもいい。そうすると後でアイスクリームとか甘いものが食べたくなる。なんの話だ。飯の好みつて人それぞれなんだよつて話か。」

「東郷さん、どうぞ」

「おお……つて、さっきから焼いてばっかりだな。お前も食べるよー
ーほら」

「あつ……」

福路が俺の取皿に肉を置いたタイミングで、福路が焼いてばっかりなことに気づいたので、トングを使って明らかに焼けてる肉を福路の取皿に入れてやる。焼く係に自然となつてる奴つてそればかりになつて食えない奴とかいるよな。気を使いすぎてる奴によくいる。

まあそういう奴にこそ食べさせてやりたいよな。……逆に気にせず差し出される肉にひたすら齧り付ついてるネコ娘にはおあずけしやりたくなるが……まあ今日は頑張つてたしな。この激辛タレカールビをくれてやろう。俺も食べてみたが普通に美味しいぞ。受け取れ。

「池田、これ食べるか？ 結構辛いが美味しいぞ。それとも辛いのは無理か？」

「ふつ、見くびるなし。あたし、辛いのか結構食べるからなー。これ

くらいどうってこと……」

「……東郷さんは、優しくて良い人ですね」

「えっ？ そうか？」

「にやつ!? 辛っ!? なにこれ辛いっ!」

「あれ、そうか？ よく味わってみろ池田。辛く感じるのは最初の一瞬だけだ。味わえば美味しく感じるぞ。もし無理ならいいが、試しに米と一緒に食ってみろ。お勧めだ」

「ん……？ あれ、確かに美味しいような……辛いけど美味しい……辛ウマ……」

「池田アツ!! 美味しいならまだまだあるぞ！ 食べてみる池田アツ！」

「んぐ……はむ……確かに慣れて普通に美味しく感じてきた——あつ、でもこれ後からくるタイプだしっ!」

「はい、とても親切で良い人だと思います」

あれ？ 眼の前が見えてないのかな？ それとも右側が見えてないんだろうか。右目閉じてるし。左に座る俺を見ている福路だが、正面では池田と久保さんがぎゃーぎゃー言ってる。その原因は俺なんだが……まあ池田なら普通に食べるかなって思ったんだが、ギリギリ駄目か？ 激辛とは言うが、俺とか久保さん、何気に福路も普通に食べれるくらいの辛さだ。チェーン店の激辛なんて名前負けしてるとうか、割と万人が食べれるくらいの辛さで落ち着いてるからな。辛そうなのは見かけだけだったり、もしくは後からちよつとくるくらいだったりする。

ただ無理なら無理強いはよくない。辛いのが苦手な人に無理矢理辛いのを食べさせるとかパワハラとかいじめになるからな。良い大人が面白がってそういうことをしてはいけない。マジでよくない。東郷お兄さんとの約束だ。良い子達はそういうことをしてはいけないぞ！

まあ、俺とボブみたいな対等な友人同士とかだと、ロシアンルーレット的な遊びもしたりするんだが……そういうのは立場が対等で、お互いに納得してるから問題にならない訳で、無理矢理だと訳がちが

——うん、この話はやめとこう。今は福路の話だ。ええと、俺が親切で良い人か……。

「今日も、部員の子達に色々と親身に指導してましたし……」

「いやまあそれは……やるべきことを当たり前にやっただけなんだが……」

「ふふ、東郷さんにとつては当たり前なんですね。そういうところ、私も見習わなきゃって思います」

「……いや、それこそ福路は十分優しくして気遣いも出来てると思うが……」

「えっ、そうですか？」

「ああ。お前ほど出来た高校生はいない」

「え、えっと……そんなことは——」

「そうだ！ キャプテンほど凄い高校生はいないし！」

と、福路の褒め言葉に俺が思ったことを口に出していると、池田が割って入ってきた。まあ深く考えることでもなければ、食事中の軽い会話なので池田と同じように福路を褒めてやる。こいつも自己評価が低そうだからな。褒めて伸ばすのが俺のトレンドだ。

「麻雀はめちやくちや強いし……」

「ああ、確かに強いな」

「勉強だつて出来る！」

「へえ、そうなのか。頭も良いとか、羨ましい限りだな」

「家事だつて万能だし……」

「料理も美味かつたしな」

「おまけに可愛い美人だし！」

「ああ、凄く可愛いと思う。良いお嫁さんになりそうだな」

池田と俺が褒めて同意する。肉を食いながらの軽い会話だったが、そこで気づく。隣に視線をやると、

「か、華菜……なんだか、すごく恥ずかしいわ……その、東郷さんも、あまり褒めないでください……か、可愛いとか……」

顔を赤くした福路が恥ずかしがった表情で顔を下に向けて視線を逸らしていた。——その様子も可愛いが、まさかそこで照れるとは、

と微妙にやつちやつた感を感じてしまう。

マジでナチュラルな茶化す感じで言っただけでいやらしい感じも他意もなく言ったのだが、まさかそこで素直な反応を見せられるとか、ちよつとなんだ、むず痒い。まだ役満ぶち当ててもないのにこうとか、勘違いしそうになるからやめろ。普通の相手にすらこうとか、惚れたらどうなるのか楽しみにはなるが、こんな満更でもないみたいなの反応は男を勘違いさせるやつだ。福路美穂子、罪な女め。まあ美人、美少女はちよつと仲良くなるだけで男は皆好きになるだろうから一概に罪とは言えないけど。

ただここでフォローすると俺の方がガチっぽい気がするので、ここは何とも思っていない感じで受け流す。よくあるラブコメでの「あつ、悪い……」みたいなのはなんかその気があるのが丸わかりだからな。普通はそういう時、何とも思っていない風を装う。大したこと言っていないよってスタンスだ。

他意がないなら、可愛いとか言っても問題ないからな。大人だし、むしろ子供をからかっているみたいになるだろう。……そう考えるとスルーするよりは自然に会話した方がいいか。まあそんな感じで、後は流れで行ってみよう。

「……ははっ、なんだ照れてるのか？ ならもつと言ってやろうか？

可愛いって」

「う、うう……からかわないください東郷さん……」

「からかう？ 素直に思ったことを言っただけだけだな」

「つ……うう……そういうの……」

引き続きからかう感じで行ってみると、かああ、と更に顔を赤くしながら下を向いて顔を隠し始めた。顔から湯気が出そうな感じになってる。うーん、恥じらい方も可愛いな。隙がない。ある意味で。実際、嘘はついてないのだからすらすらと言葉が出てしまう。

「む……そういうの、セクハラだしっ！」

「なんでだよ」

と思つてたら池田が突然のインターセプト。福路を見かねて助けに入るが、ぶつちやけお前も同罪だけだな。お前も褒めてた訳だし。

俺だけが褒めたくらいで福路が恥ずかしがるかっていうとちよつと微妙だしな。周囲から持ち上げられ、親しい後輩からも褒められたのが大きいだろう。

まあしかし、こういう反応を見ることが出来て良かった。惚れられた時の楽しみが増えた。これで明日も頑張れる。そして今日の夜は辛い。いや、美少女と接するのつて役得だけど、後からめっちゃムラムラするから困るんだよなあ……今日はユキからのエロ自撮り写真も来たし……あー、早くやりてえなあ……。

段々とお腹いっぱいになると、性欲が湧き出てくる。しかしそれを抑えて俺はなんとかその日が無事に乗り越えた——ちなみに、飯は俺と久保さんで割り勘。それぞれ車なので、池田と福路を家まで送っていった。久保さんが自然に池田を連れて行ったのはさすがお気に入りだと感心する。俺の車の助手席に座った福路はエロかった。パイストラが。だからムラムラするんだよなあ!! そういうの!!

対策

風越女子麻雀部では基本、日曜日の練習は午前中だけらしい。

一応生徒に配慮して用事があれば休めたり、隔週で休日だったり、学校のイベントや状況を見て練習休みはそれなりにあるそうだが、名門校であれば毎日の様に練習することも珍しくないの、意外と緩く感じる。今日も、本来は休みだったという。

だが今日は俺がいるので、希望する奴らはそのまま残って俺の指導を受けたら、練習——自主練とすることが出来る。

まあ割と普段から言えば部室を開けて自動卓を使わせていたりするそうだが、日曜日は残る奴が多そうだ——というのは久保さんの談。

つまり俺は今日も昨日と同じく夕方頃まで麻雀を打つ、そして指導する訳だが……まあそれはいい。仕事だしそれはしょうがない。明日になれば部員はまた学校で、俺は授業が終わってからの指導になる訳だしな。ある意味土日こそが本番だと言えるな。

だから本当は十分な睡眠を取って備えたかったんだがな……。

「……もう朝か……」

ホテルの部屋のカーテンって結構光を遮ってくれるが、それでもまあ朝になれば分かる。太陽の光がカーテンの端から僅かに漏れてるのを見て俺は溜息をついた。

今日はいつにも増して眠れなかったな。1時間か、2時間か、多分そんなくらいしか寝ていない。何度も寝ようとベッドで横になって目を瞑っていたが……まー眠れない。眠れないんだよなあ、色々と考えてしまうしよ。

後はまあ、体力が有り余ってたりするんだろうな。疲れ切つてしまえば眠れたりするからちよつと身体を動かしたりもしてみるのだが、多少の運動くらいだとそんな疲れないし、やっぱり眠れない。

まあ倦怠感で眠る方法として自家発電を——要は射精しまくれば眠れたりもするが、出来ればそれはしたくないし、結局俺は横になりながら考え事をひたすらにしたり、妄想の中で俺の女達や、落とす予

定の福路とエロエロしてみたり、それでムラムラして余計に眠れなくなったり、そうなったらまた考え事に没頭したりを朝まで繰り返し返してしまつた。

朝飯を食べば多少は元気が出るが、それでも時折眠くなつたりはするし、さすがに身体が怠い気もする。……これで眠れたらいいんだが眠れないから困る。俺の身体、やっぱおかしいわ。

ただ、美少女の体温を感じながら寝ると割とよく眠れる。柔らかいし温かいし、マジで良い抱き枕になる。たまにムラムラしてしまつて睡眠欲よりも性欲が勝つ時もあるけど。

まあたまーに別の弊害もあつたりはするが……それは今はまだいいだろう。そこまで深刻じゃないし。

そんなことより俺は福路のおっぱい枕で眠りたい。もしくは膝枕。抱きながらでも可。

2日間、福路美穂子という美少女を見てきたが、やっぱり美少女というのは良いものだ。新しい娘は、まだ落としてない娘はめちゃくちゃ魅力的に感じる。

別に落とした娘に魅力を感じない訳じゃないし、むしろ今でもめちゃくちゃやりたいが、それでも新しい女の子相手の高揚感は特別だ。見ているだけなら目の毒にもなるが、これが落とせる、やれるとなると楽しくてしようがないし、めちゃくちゃムラムラする。

今も頭の中でまとめた福路へのちよつとした対策を思い、俺はどうしても口の端を歪めてしまうのだ。ほぼ徹夜明けなのでテンションも高い。思わず独り言だつて呟いてしまう。

「それにしても……こんだけ真面目に考えたのは久し振りだな……」

麻雀で相手への対策。プロ相手のオカルトとかだと対策とか、どうせ無理だろつて感じて諦めることも多かったが、今回は久し振りに真面目に考えた気がする。それを思うとエロつて偉大だ。麻雀への情熱が中途半端な俺をここまでやる気にさせてるんだからな。

ただそれも、福路との対局で役満を張らなければ始まらない。逆にそうなれば、また最高の時間を過ごせるのだと——俺は着替えて準備を整えると、ホテルを出て風越女子高校へと向かつた。

——というわけで、俺は一日、昨日と引き続き風越女子麻雀部の部室へとやって来た訳だが……。

「立直だし！」

「！」

「つ……これで……通——」

「通らないし！ ロン！ 立直一発！ 純全帯三色一盃口ドラ4の本場は……36300！ ふふん、裏ドラが乗らなくて残念だし！」

「さ、三倍満……ッ！」

……ほー、なんか池田がやたらと調子いいな。

俺の視界の先——俺が座ろうとしていた横の卓では池田が他の同級生にとんでもなく高い手を直撃させて飛ばしていた。それもランキングがそれなりに高い相手……10位以内には入ってた奴らだ。

昨日の午後は俺に凹まされて調子が悪かったのに、昨日の特訓のおかげかもう調子を取り戻してしまっている。……調子に乗りまくっててなんかちよつとイラツとする。

「ふつ……今なら東郷さんにも余裕で勝てるし」

「ああ？ 寝言は寝て言え。もしくは勝ってから言え」

「昨日は沢山寝たからもう寝れないし、当然勝ってやるし！ なにせ今朝の華菜ちゃんは絶対調だからっ！」

どやアアア、と得意げな顔を浮かべて胸をそらす池田を見て俺は思う。うぜえ……と。いや、うん、俺が言ったことなんだけど、マジで鬱陶しくなったな……。

正直、これから福路を落とすため本格的に役満を狙いに行く俺にとっては厄介な邪魔者でしかないというか、そういや池田が邪魔だから大人しくさせようとしたのに、これではまた振り出した。どうせ福路との間に入ってきて邪魔するんだらうしな。

だが今はマジでちよつと待ってて欲しい。どうせ言うことなんて聞かないだろうが俺はダメ元でも言う。

「後で相手してやるから今はあっちで対局でもしてろ。福路や他の奴の指導もあるんだからな」

「む……仕方ない。絶対後で倒してやるし！」

「……あ？」

俺はその言葉が予想外過ぎて間の抜けた声を出して内心で思う――
言うことを聞きやがった？

あの池田が素直に俺の言うことを？ どういう風の吹き回しだ？

俺は思ったことをそのまま口に出す。池田に向かって眉を潜めつつ、

「お前……なんか悪いものでも食ったか？」

「？ 別に食ってないし……つて、そうだ敬語使わないと怒られるんだった……昨日も帰りにコーチで怒られたし……というわけで、絶対倒しますから！ 東郷さん！」

「……気持ち悪いから使わなくていい。なんか違和感が凄い」

「えっ……いや、それじゃあ困るし――困るんですけど!? あたしの方が怒られる！」

「いやそんなん良いから……マジでどういう風の吹き回しだ？ 俺に敬語とか……」

ちよつと池田が急に敬語を使って普通の生徒みたいになったので気持ち悪くて問い質す。幾ら久保さんに怒られたからと言っても、昨日まではそれでもタメ口で目の敵にしていたというのに、今更そんなことで訂正するののかと。

ただなんか……池田は聞くと何か思うところがあるのか、軽く目を逸らして言った。何やら不服そうではあるが、

「……やっぱ、プロの……元プロの指導しに来てくれる人には失礼だと思っただけだし」

「ああ？ 今更か。昨日まではあんなに反抗期だった癖に」

「ふふん、華菜ちゃんは毎日成長するんだし！ というわけであたしに敬われて貰うからな！」

「なんで上から目線なんだ……」

別に敬われてる気は全然しない。ただ……なんだ。ある程度は認められたのか？

池田に認められても別に嬉しくともなんともないが、まあ、それで

池田が俺を目の敵にしないというならやりやすいし助かる。そういう意味では嬉しいな。後はまあ……成長したならそれでいい。俺のやる事がなくなつて助かるしな。

「……はあ、分かったから向こう行つてろ」

「押忍！ 了解です師匠！」

「誰がお前の師匠だ」

「ま、間違えただけだし！」

と、池田は最後に訳の分からない言い間違いをして別の卓へ移つていった。いや、マジでなんなんだ？ 昨日の肉にヤベーもんでも紛れ込んでたのかと疑つてしまう。まさか俺のあの程度の薄っぺらい言葉だけで俺を見直した的な？ いやいやまさか……でも今の反応を見ていると……。

「ふふ、華菜つたら、すつかり元気になつて……ほんと良かったですね」

「——つと、福路。待たせて悪いな。お前には今日も俺と打つてもらうぞ」

池田の反応になんとも言えない気持ちになつていると、背後から福路が声を掛けてくる。振り向くと相変わらずの美少女っぷりだ。右目を閉じているのも相変わらずである。

今日こそはお前を攻略してやると、強い気持ちを心に抱いていると……そこで気づく。福路が後ろ手に何か包みのような物を持つていることを。というか、なんか見覚えがある。俺がその答えを出しかけると、それよりも前に福路が俺の言葉に頷きつつ、

「はい。今日もよろしくお願いします。……あと、それとなんですけど……その、これをどうぞ」

「お……」

と、後ろ手に持っていた物を差し出された。眼の前で見るとはつきりと分かる。これは……弁当だ。

「あれ？ 今日……というか昨日は別に今日の分の弁当は頼んでなかった気がするが……わざわざ作ってきてくれたのか？」

「あ……はい！ そうなんです！ 今日朝から指導をしてくださる

訳ですし、外に買いに行ったり食べに行くのも大変でしょうから一応……その、ご迷惑でした？」

「いや、そんなことはないけどな……むしろありがたい。お前の料理は美味かったし、飯を食いに行く暇も確かに省けるしな。ただ、悪いと思つてな」

「いえ、気にしないでください。私も、その……つい作ってしまったというか、朝起きてから勝手に手が動いてしまったというか……ですからその、私が勝手にやったことですので、東郷さんは……ええと、とにかく、気にせず頂いてくれると……」

「……？ あ、ああ、分かった。わざわざありがとな」

「……はい。こちらこそありがとうございます」

だからなんでお前がお礼を言うんだ……弁当もそうだが……あ、いや待て。もしかして池田の件のお礼か？

一応、客観的に見れば俺が池田の調子を良くしたように見えなくもないしな……そのことで面倒見の良い福路が俺に対して礼をしないといけないとも思つたのかもしれない。それならば分からなくもない。福路は聖人だし、実際昨日もタイミングが合わなかったが、普通に今日も弁当を作ってくると約束してたかもしれないしな。

ただ……なんだ？ 福路にしては微妙にしどろもどろというか歯切れが悪いな……目も逸らしてるし……そんなに弁当を作つてきてしまったことが恥ずかしいか？

見ようによっちゃあ弁当を好きな人とか気になる異性に渡して恥ずかしかつてるようなワンシーンに見えなくもないが、まさか役満をまだ上がつてすらないのに俺に惹かれる筈もないしな。それはない。男としては勘違いしたくなるが、好ましい人と恋愛感情は別だし、良い感じに見えても実際はただちよつと頼りになる大人として信頼してもらつてるくらいだろうな。しかも福路だし、誰に対してもこんな感じだろうし。

……ある意味風越女子が女子校で良かったかもしれないな。共学なら多くの男子が勘違いしまくつていただろうし、福路なら頼まれれば好きではない男性であつても弁当を作つてきそうさ。それで強引

にデートに誘われたりとかして……まあ断る時は断るだろうが、相手が普通の人であれば抵抗無く親しくしそうだし、というか女子相手でも惚れられてそうではある。今どき珍しくもないし……ただ身持ちが固そうなんだよな。好きになったらすっごい一途で尽くしそうでかなり魅力的だ。なんかエツチなこと頼んでも恥ずかしがりながら頑張ってやってくれそう。健気な感じで。ヤバい、興奮してきたな。ちよつと落ち着こう。今はまだその時じゃない。

「……それじゃあこつちも始めるぞ」

「はい、よろしくお願いします」

俺が対局を始めると声に出すと、福路が挨拶し、他2名の部員も挨拶をしてくる——つて、吉留と……もう1人は確か、文堂だったか。1年の。えー、何気にここの部員の中ではマシな2名じゃねえかよ。ちよつと面倒だな……。

というか覚悟はしていたが、やっぱりツモ和了りだと福路以外の面々も落ちそうな上、不確定な感じもあるから直撃を取らないといけないな……さて、頑張ってみるか。

と、俺はしばらく普通に対局を進める。一昨日と昨日と同じだ。大体福路が優勢。俺もまあ頑張るが、福路がトップで俺が2位。吉留が離れて3位で文堂が最下位。だがなんとか飛ばされないように食い下がっている。やっぱり何気にやるな、こいつ。吉留も判断に迷いが少なくなってるし、微妙に面倒だ。俺が面倒に思うつてことは強くなってるつてことなので、面倒は褒め言葉みたいなもん。褒めてる場合じゃねーけどな。というか、やっぱり真面目に指導したせいで自分の首締めてるな……これ……手を抜くわけにはいかないとはいえ困るな、ほんと。

しかも手も……まあそれなりに良い手牌が来ることはある。配牌の時点で和了りまで一向聴とかはな。そういうのはまあ来るんだが、肝心の高い手——役満には中々出来そうにないし出来ない。

役満を上がろうと思うなら、やっぱりある程度配牌の時点で出来上がっていないとキツイんだよな。ただそれが中々来ないから役満つてのは役満な訳で……はあ、ほんと俺のオカルト使い勝手悪すぎる……

勝ったら落ちるとかで良くね？　こんな馬鹿なオカルト持つてる奴の顔が見てみたいわ。俺だけだ。

内心で幾ら愚痴ったところで役満は来ないし、普通に麻雀するしかない。そんなこんなでオーラスに入って俺の親。ここで連荘して一応機会を増やそうと思つた矢先のことだった。

……き、来たアアアア!!　来たぞ池田アツ!!　一昨日と同じ!　字一色の二向聴だアアツ!

内心で思わず叫んでしまう。というか、ここ最近久保さんの池田アアツ!　を聞きすぎて思わず池田を呼んでしまった。いやでも、この役満が出来そうな時の手牌って誰かに見せたくなるよな。池田でも誰でも。オンラインゲームで超レアなアイテムツモった時に似てる高揚感。どつちかかっていうと俺の場合、そういう時に役満上がった時に例えることが多いんだが、それはまあどうでもいい。とにかく役満だ役満!

後はなんとかするだけ……これを福路に振り込ませるだけなのだが——これが厄介なのだ。

対面の福路の眼は、既に開眼している。これはすなわち、福路特有のオカルト……正確には準オカルトと言うべきか。福路特有の能力を発動している証拠だ。

俺はこの2日で福路の能力を考察し、一応、それをある程度突き止めてやった。当たってるかは知らないけど。多分当たってるはず。

その答えは——簡単に言えば、場の把握である。

右目を開眼し、河の状況や相手の手牌などをほぼ丸裸にしてしまう能力。別にスケスケだぜ、つて訳じゃない。透視出来るとかなら強すぎる。福路王国完成。風越コール起きそう。福路なら眼力持つてそうだし。というか、よく考えれば福路の能力はそれに近い。

何故なら……福路は、対局している三者、相手の癖や拳動、視線の動き、打ち筋を完全に見切ること、相手の手牌を理解し、場を操っているからだ。

めちやくちやな能力だと思つたが、多分これで合っているとと思う。福路が右目を見開く意味や、その視線の動きを見てなんとなくその答

えに至った。

俺はこう見えて視線に敏感だ。女子並か、それ以上に。誰かに見られてるとか、どこを見ているとか、そういう視線はある程度分かる。多分俺が女なら、胸とか尻に来る視線を感じまくって辟易としているだろう……女じゃなくてよかった。

そして俺のその感覚を信じるなら……福路は俺の挙動や視線の動き、手や指の動きなどの細かい動きをかなりの速度で見て計算している——と思う。

そういう能力を持っていながら、普段から右目を開かないのは思考力の問題か、常に開いて計算していると眼とか脳が疲れるとか、そもそも見る必要がないとか、色々理由があるのだろうが……ただ能力的にインチキくさいので、それくらいのデメリットがあつて貰わないと困る。

福路は明らかに相手の手牌を見切つてしまっているし、場をほぼ完全にコントロールしてしまっている。支配ではない。支配系のオカルトという訳ではない。福路は、己の能力でそれを成しているのだ。謂わば才能か特性か。どっちにしるオカルトじゃね？ つて感じもするが、一概にはそうとも言い切れない。なので準オカルトと勝手に俺は言っているが、どっちみちチート染みた力ではある。

昨日の焼き肉でも使っていたが、日常に応用出来る——というか、普段から使ってるものを麻雀に應用しているというのが正しいか。オッドアイは生まれつきのものだろうし、よくあるオカルトを偶然持っていたので麻雀に應用してみました☆ つてやつだ。遅い時期から麻雀を始めた奴に多いタイプだが、福路はどっちだろうな。麻雀歴は長いらしいが、後から発現したのか、それとも以前まではそれほど力ではなかったか——まあそんなことはどうでもいい。重要なのは今の福路は卓上を完全に把握しているということ。そして、それだと誰かに振り込むようなことはないということだ。

高い手を流したり、相手を削るためなら相手に和了らせることもある福路だが、さすがに俺の手が役満だと知れば和了らせないだろう。役満だとバレるかどうかは分からないが、少なくとも高い手を見切つ

てくることは確実に、そうであれば振り込むことはない。

だからまあ……対策をする必要がある。難しいが単純なものだ。色々考えてみたけどな。結局対策としては……癖とかを変えたり、そもそも理牌をしないとかならうか。

ただ理牌……配牌されて最初に分かりやすく並べることをしていないというのは、いきなりそれをする、理牌をしなかった”という情報を相手に与えるし、警戒されてしまう。最初の理牌の時の手付きや並べ方なんて如何にも癖が出るところだ。故に福路は真つ先にそこを見ているだろうし、それをしなければ配牌を完全に見抜かれるようなことはないだろうが……どつちにしろ対局が進めばそれも意味がない。結局牌を捨てたりツモったりする時にもバレるからな。

ぶつちやけチートすぎてどうしたらいいんだって感じたが、オカルトとかで無理矢理突破しないのであれば、やれることは一つしかない。

「……っ」

おっと、やっぱり気づかれたな。これじゃあ利くのはこの局だけだろう。

もつとも、それで十分だ。癖が見抜かれなければ、それだけで福路は俺の手牌を読み取れず、振り込む確率が普通の麻雀並には上がる。

とはいえこれはしんどいからあまりやりたくはないな——自分の視線や手の癖を変えるってのは。

口で言うほど簡単な事じゃないし、俺も完全には出来てないが……視線の動きくらいなら、まあ一時的に読み取られないようにするくらいなら……まあ、って感じた。あまり麻雀で使いたい技術ではないが、エロの為なら使つてやろう。福路を落とす為なら多少は無理をするくらい訳もないんだよ池田アツ！ 池田関係ないな池田アツ！

……まあとりあえず、これでいいだろう。いや、頼む。これで振り込んでくれ。これが駄目ならもう無理。もう福路は諦めるしかない。ただそれはしたくない。エッチしたい。福路のそのおもちを俺の物にしたい。JK新妻プレイしたい。

最低な願いを強く思いながらそれを待つ。福路は若干だが、俺を見

て険しい表情を浮かべていた。ふふふ、どうだ？ 俺もこういう狡いことは出来るのだ。初めてやったが、割と上手くいつているようで何よりである。

俺はついでに視線を福路に合わせ続けながら手を進める。そして——遂に聴牌。後は福路が白を振り込めば終わる。役満、字一色だ。オカルト発動で俺に惚れる。そうすればめくるめく快楽を俺は楽しめる。

さあ、来い！ 来い！ 早く振り込め！ さあさあ！

「……東郷さん、その眼は……」

「お前を見てるだけだが？ ——ははっ、というかお前のその眼、初めて真正面から見たが綺麗だな」

「つ……と、東郷さん……」

「ん、なんだ？」

「……なんでもないです……」

福路が俺の手牌を読み取れないことを声に出して遠回しに告げてきたが、生憎と俺は情報を漏らさない。逆にちよつとからかつて動揺を誘ってみる。効果は微妙だが、全く効果がないという訳でもないか？ ちよつと声が震えた。どうにも福路は褒められると照れてしまいうらしい。もし落としたらいっばい褒めてやろう。そうしてエロいことをいっばいしてもらおうか。思考がクズになってきたな……。

そうしてまたツモリ、捨てる。ツモリ、捨てる。麻雀がただ進んでいく。吉留と文堂に聴牌気配はない。これでは振り込んで流すことも出来ない。今から副露させて凌ぐという手もなくはないが……それをしない辺り、2人は副露するつもりがないのだろう。そういう時もあるよな。オーラスだし、逆転を狙うなら高い手を目指すだろう。鳴いて早上がりする意味はあまりないのだから、幾ら福路が場をコントロールしていても無理なことは無理だ。やるなら福路自身が和了るか、そのまま凌ぎきるかの2択のみ。ただ自身で和了るにしてもベタオリするにしても、今までより危険はある。和了るために牌を捨てるなら、必然的に俺の待ちに振り込む確率が高いしな。

だからこそ——それはやはり、必然だった。福路が捨てたそれは、

真っ白い絵柄のない牌で、

「——ロン……役満、字一色だ。48000。……はははっ、上がり止めで、逆転勝利だな」

「……！」

福路の眼が今まで以上に見開かれる。その意味は驚きだ。

明らかな驚きの表情と逆転による終局。俺の1位で対局が終了する。周囲がざわついた。

「や、役満……！ しかも、キャプテンに直撃させるなんて……！」

「私、キャプテンがそんな高い手に振り込むところ初めて見ました……！」

「キャプテンが最下位なのも珍しいどころじゃないですね……」

「なっ……!?! あ、ありえないし!? まさか、キャプテンが振り込むなんて……！」

部内でトップ。全国上位の打ち手として部員に一目置かれている福路が役満に振り込み、そして最下位で終わるなど、ちよつとした事件のようなものだ。

80名以上いる部員たちの視線を感じる。めっちゃ驚くやん……君たち……いやまあしようがないけどな。元プロとか福路より下だと思われてもしょうがないし、そもそも福路との対局は2位ばかりだったし。

ただそんな視線よりも、今は福路の様子が気になる。さあどうだ？ 露骨な態度を見せてくれるのか？ 今は出来れば止めてほしいが、とにかくオカルトは発動したはずだ。どうなるか見せてほしい。

俺は数秒待った。すると、福路も我に返ったのか、右目を閉じながらニツコリと笑みを浮かべ、

「……役満に振り込んだのは初めてかもしれませんが。ふふ、東郷さん……凄いですね?」

「……まあ、たまたまだ。そういう時もある」

俺は内心の高揚感は見せずに冷静な調子でそう言う。めっちゃ浮かれてるけどな！ ひゃっほう!! これで福路は俺の物才!! おっばいおっばい！ おまんこおまんこお！

「ふふ、ほんと……凄いです」

「……そうか？」

「はい。なんとというか……東郷さんって……」

と、俺はその先の言葉を待つのだが……福路はそこまで言いかけたところで、

「……っ、いいえその、なんでもありません。それよりも、なんだかその、凄く熱いですね。ちよつと私、最下位なので一回抜けますっ。対局、ありがとうございますっ！」

と、席を立ち上がっていそと部屋を出ていこうとした。

なんだか頬は赤く、様子はおかしい。表情はいつも通りに見えるが、なんとなく、負けて悔しいという感じでもない。

やはりこれは来たか、と俺は内心でほくそ笑んでしまう。こうなればこつちのものだと、

「……そうか。確かに今日はちよつと熱いかもな。少し休憩してこい。室内競技とはいえ、水分補給は怠るなよ」

「お、お気遣いありがとうございます。その……」

「ん、まだ何かあるのか？」

俺は敢えてそう聞いてやる。何かあるのなら大歓迎だと。

だが福路はチラチラと俺の顔を見て更に顔を、かああと熱く紅潮させる。

「い、いえ、やっぱりなんでもありません。あはは……ご、ごめんなさい、失礼しますねっ」

「……おう、そうか」

福路が部屋を出て行く。その一連のやり取り。それを俺は見て思った——勝ったな、と。

もう完全な勝利だ。あの様子なら、その時は近い。ここからの時間は完全にただのウイニングランだ。ただ普通に接していてもいい。ちよつと人気がないところで2人きりにでもなれば、後はころつと頂ける。……あー、ヤバイ！ 興奮してきた！ やっべえー！ 美少女の赤面顔サイコー！！ JK美少女！ 巨乳美少女ゲット！ 最高だぞ池田アツ！！ 今なら幾らでも指導してやる！ 勝つても負けて

もどつちでもイライラしない自信があるぞ池田アアツ!!

そして俺はしばらくの間、部室で指導を続けた。こつからはどうとでもなる。後は仕事を終わらせるだけなんだと——そう思つて美少女を落とした高揚感をしばらく味わつた。

さて諸君、放課後だ——セックスだ。

練習も無事に終わり、後はもう帰るだけだ——となれば逢引してセックスだ。

午前中に役満を福路に直撃させた。そして今日一日、練習中の福路を見ていたのだが……明らかに俺の方を気にしていた。

チラチラとこちらを見たり、話しかければ顔を赤くしたりしていた。これはもう完全に惚れている——だからセックスをしても良い。合意の上であればしてもいいのだ。

だからこそ、俺は敢えて校門付近で時間を潰している。福路と会うためだ。

邪魔者はいない……はず。池田は午前中で帰つたしな。妹の面倒を見なきゃいけないとかで。俺に何回か勝つたのがちよつとイラツとするが……それはいい。福路を落とせた喜びの方が勝る。だから快く褒め称えてやつた。

学校の敷地内で会つてというのも結構危ないような気もするが、まあ、何気に信頼されているみたいだから大丈夫だろう。久保さんとかも俺を信頼してるっぽいしな。他の部員も多分大丈夫。

となれば後は福路を待つのみ。そして偶然会つた風を装つて、後は流れでいけるはずだ。……まあ家の門限とか言われたらちよつと困るけどな……大丈夫だと思いたい。その場合はどうしようかな……おあずけつてのも辛いが——、

「あ……東郷さん……」

「！——福路か」

とかなんとか思考を巡らせたところで、後ろから声が掛けられる。聞き覚えのあるその声は福路美穂子のものだ。彼女は相変わらずこ

ちらを見て、ちよつと普段とは違う感じの表情を浮かべている。笑顔だが、どこかぎこちないというか、どうしていいか分からないといった表情だ。迷っているようにも見えるが、迷う必要はない。俺に任せろ。

「今帰りか？ 良ければ送ってやろうか？」

「え、あ……その……東郷さんの、ご、ご迷惑ですし、それは……」

「気にするな。ホテルに戻るついでだしな——ほら、ついてこい」

「う……は、はい……わ、分かりました……それじゃあ、お言葉に甘えて……」

多少強引についてこいと言ってみると、福路はぎこちないままに頷いて俺の後ろからついてきた。横ではない。ちよつと後ろからだ。なんか昔の日本女性の慣用句みたいな感じだな。3歩後ろからつてやつ。福路には似合うといえれば似合うが、俺的には隣に来てくれた方が目の保養的な意味で助かるんだけどな。そう思いながら駐車場へ。そして車のロックを解除して乗り込むと、福路も「お願いします」と言つて助手席へ。シートベルトをしてパイ斯拉に。昨日は目に毒だったが、これを今から味わえると思うと見かたがまた変わってくるな……趣深いというか……中々に唆る。というか襲いたくなつてしまう。ただ初めてがカーセックスはさすがにどうかと思うし、このまま自宅まで送つて、出来ればユキちゃんコース。あの時のように、そのまま家に上がつてセックスが理想だが、両親がいないとかいう偶然が再び起こり得るのかと言うと……どうだろう。ちよつと不自然だが聞いてみるか。

「そういえば、福路は池田みたいに門限とかはないのか？ 遅く帰ってきたら両親に叱られる、みたいな」

「あ、はい。その、家は両親が仕事で忙しくて帰りも遅かったり、泊まりの時も多いので門限という門限はないんです。実は、今日も泊まりみたいで……」

「へえ……だから家事とか出来るのか？ 料理もあんなに美味しいんだもんなあ」

「そ、それほどでもないですよ。……でも、褒めてくださつてありがと

うございます。その、私……嬉しいです」

あ、確かに嬉しそう。可愛い。それと朗報だ。どうやら両親は今日は帰ってこない。

やっぱ最近多いのかな。仕事が忙しくてやってやつ。まあ片親とかも多いもんな。結婚とかそもそもしてなくても子供とか作れるし、最近は家庭での問題も多いという。やっぱどこも色んな事情があるもんだな。

だがそれよりもだ。家にいないというならどうするか……うーん、こう言ってみるか。話の流れ的に。

「そりゃ褒めるだろ。昨日今日と弁当もすごい美味かったしな。……あー、でももう食べれないか。明日からは福路も学校で会えるのは授業が終わってからになるしな。残念だ。もつと食べてみたかったんだが、あまり負担を掛けるのもな」

「！ それなら……明日も作ってきましようか？」

と、言われる。が、俺が求める答えはそっちじゃないので、嬉しいし是非ともお願いしたいが……敢えて拒否する。

「いや、さすがに朝や昼に会って弁当を手渡してもらうってのもな。俺も用事があるし。……あー、でも食べたいは食べたい。福路の料理、ほんとに美味しくて好きなんだけどな……」

割と本気の言葉なので不自然さはあっても演技ではない。本音の言葉だ。残念ではある。でも別の目的もあるのだ。今食べたいのは料理もだが、福路自身でもあるというだけだ。

さて、俺の言葉を聞いた福路がなんと答えるか。福路ならそう言うしてくれると信じてる。だから言ってくれ。

俺が祈りを捧げて待つ中、福路は少し気恥ずかしそうに、それでいて何か考えるように下を向いていたが、やがて目線だけをこちらに向けてると、

「……その、でしたら……夕食はどうでしょう……」

「夕食……今から福路の家でってことか？」

「は、はい。どうでしょうか？」

——来た。やはり聖人福路美穂子。そう言ってくれると信じてい

た。

俺は勿論頷く。少し遠慮してみせながらも、

「……いいのか？ いや、俺は是非ともお願いしたいくらいだが……」
「はい。私も東郷さんと一緒に——あ、いえ、その、御飯を一緒にしたくて……その、是非もつと、私のご飯を食べてほしいんです……」

こちらを見て上目遣いで、食べてほしいんです……、は中々に破壊力高い。うおー！ 食べる食べる！ そんなこと言われたら美穂子も一緒に食べたくなるだろ池田アツ！ だから池田はいないんだよなあ……。

「……ならこのまま福路の家に向かうか。悪いが頼む」

「あ……はいっ！ 任せてください！」

あー、すつごい笑顔で嬉しそう。可愛い。嫁にしたい。いや出来る。もう出来るんだよ俺エ！ だが勃つのはもうちよつと待て！

セックスの予感を感じるのは間違いじゃないが、もうちよつと後だ！

もうすぐだからもう少しだけ辛抱しろ息子！

というわけで俺は恋した様子の福路と一緒に、彼女の実家へ車を走らせた。……よっしや行くぞオラアツ！

嫌よ嫌よも好きのうち

「それじゃあ東郷さん、少し待っててくださいね。……その、少し退屈かもしれませんが……」

「いや、大丈夫だ。それよりも何か手伝うか？」

「い、いえ、東郷さんはその……お疲れでしょうし、ソファに座ってテレビでも見ながら待ってて下さい」

「ん……ああ、わかった」

福路の家は2階建ての一軒家だった。その家のリビング。ソファに座り、俺は福路が夕飯を作るのを待つことにする。

福路が荷物を置いて、制服姿のままエプロンを身に着けたのだが……やっべえ……なんかこう、身体の内側から溢れるような可愛さというか、たまらなさがある。尊いって言えばいいのか？ 現役JKの制服エプロンとかエッチ過ぎる。油断すると表情が崩れてしまいそうだ。

「〜♪」

しかもなんか料理をしながら鼻歌を歌っている。嬉しそうだ。やはり普段から料理は慣れているのか、テキパキと手際良く料理を進めていた。包丁捌きも完璧で淀みない。まな板から一定の間隔で音が聞こえてくる。食材を切る音、そのリズムが良くて耳が気持ちいい。というか……なんだろうな。前にも思ったが、巨乳美少女が自分の為に料理してくれていると思うと中々にたまらない。

単純に嬉しいのもあるが、その後ろ姿。動く度にヒラヒラと動くスカートや、その下にあるであろうぷっくりしたお尻や、制服の上からでも分かる腰つき。胸の大きさやサラサラした髪が靡くのを見ていると、ほんとたまらない。

美少女の後ろ姿。それも家の中というそれほど広くはない空間の中で、無防備な状態の背中や白いうなじなんかを見ていると……後ろから抱きついて襲いかかってみたいくなる。別にセックスするということだけでなく、単純にじやれついでみるのも、きつとめちやくちや気持ちいいだろう。福路の反応が目には浮かぶようだ。料理中だからやん

わりと駄目と言いつつも断りきれずになすがままになる福路の姿が……つと、やばいやばい。まずは飯だ。飯を食べて落ち着いてからじゃないと駄目だろう。物事には順序というものがあるし、今やるのは飯も食えなくなるし色々と面倒だ。

だから今は冷静にテレビでも見ながら落ち着くべきだ。……でも俺、普段からテレビを流し見するタイプじゃないんだよなあ……別にテレビは見ないってタイプではないけど、特定の好きな番組だけを見るタイプ。スポーツ中継とバラエティくらいかな、見るのは。後はニュース。日曜はとりあえずジャ○クス○ーツでも見るか……つてまだ時間じゃないし、結局流し見するしかないな。

だがあれだな。こうやってソファでテレビ見ながら料理が出来るのを待つのもってなんか新婚生活感ある。福路が嫁味に溢れてるから余計にそう思う。

というか普通に過ごしてるけど、これ、また福路の方から誘ってくるのか？ それともこつちからちよつとそれとなく誘導してみるか？ よくあるラブコメ会話みたいな感じで。もしくは少女漫画とか恋愛ドラマの俺様系ムーブ？ ちよつと強引にいつちやう系の……どうでもいいが、ああいうのってイケメンで漫画だから許されるけど、普通に考えたら色々とおかしいよな……ああいうのでキュンキュンするらしい世の女性の感性が俺には分からん。分からんが……惚れてる状態なら効く可能性があるし、今度色々調べとくか……。

——そうしてしばらくテレビをぼーつと見たり、料理をしている福路を見ながら考え事をしながら待つこと約1時間。料理が完成して俺と福路は食卓についた。

「おー、すげえな……」

「その、お口に合うかどうか……」

「いやいや、これは絶対美味いだろ。マジですげえな……」

テーブルに並べられた料理——ご飯や味噌汁を中心に……これはぶり大根か。それに野菜を中心にした和え物に、ひじきの煮物とか冷奴とか……なんか凄いいやまあ普通の夕飯と言われればそれまで

なんだが、これを普通に出してくることが凄い。しかもまだ女子高生だつてのに。料理をする奴なら分かるだろうが、こういうちゃんとしたメニューと品数ならまあまああの労力が掛かる。男だと料理とか大体2、3品で終わるしな……酷い時は1品だ。何かおかず作つてご飯と一緒に食うとか。後、麺類つて偉大だね。そうめん、パスタ、うどん、焼きそばとか……大体簡単で1品だけで事足りるやつ。

だからまあ、こんなに色々作ってくれる上に、どうせ味も美味しいんだろ？ 食わなくても分かる。食べる前からもう美味しい。

俺は、いただきます、と一言口にしてから箸で一口。すると案の定美味しい。

「美味しいな……」

「お口に合いますか？」

「ああ、美味しい。いや、大変だったろ、こんなに作つて。わざわざ悪いな、ほんと」

「いえ……その、気にしないでください。東郷さんに美味しいって言ってもらえたら、それだけで……」

下を向いて腕を組みながらもじもじしている福路。どうでもいいが、そうやって胸を二の腕で締める感じはおっぱいが強調されてエロいから今はやめてくれ。今は飯の時間なんだ。

それと、俺には聞こえてるからな？ 最後の方は恥ずかしそうにだんだんと声が小さくなっていったが、その言葉はどう聞いても気のある男性に向けて言う言葉だ。もうほとんど告白みたいなもん。

それに反応するべきか、しないべきか。ちよつと言葉に迷っている、先に福路が今の自分の発言に気づいたのか、慌てた様子で顔を上げ、

「あ、あつ、いえ、そのつ、深い意味は……その、東郷さんに手料理を食べて頂けると嬉し——で、ではなくて、あの、その美味しそうにしてくれる顔が——で、でもなくて、だから、その……あつ、ううう……」

ごめん。可愛すぎてよく分からん。え、ヤバくない？ 何そのあざとい感じ。くっそ萌えるんだけど。萌えるとか死語なのに萌えるとか言えるくらいヤバいんだけど。計算ならアレだけど、天然なのがま

た何とも言えない。天然巨乳美少女、しかも年下なのにちよつと母性あるお姉さん風——とかもう芸術だろ。重要無形文化財に指定しろ。「……いやほんと美味いし、福路は凄いな。そういうところ、凄く女の子らしくて良いと思う」

「う……女の子らしい………は、はい………ありがとうございます………」
……と、東郷さんも、その、あの………」

ちよつと露骨に褒めてみると、分かりやすいくらいに顔が赤くなつて目を逸らした。そして俺に対して何かを言いかけて——言わない。厳密には、恥ずかしくて言えない、か。はー、くそかわ。なんなんこれ。もう襲つてもいいんじゃない？ マジで可愛くて困る。ただ飯を粗末にする訳にはいかないしな………悩ましいな、マジで。

「……その、さ、冷める前に頂いてくださいっ」
「……ああ、ならいたただかせてもらうな」

と、福路が誤魔化すように手を叩いて飯を食べてと促してきたので、俺はしばらく飯を食べることに没頭する………あー、ほんと、飯も美味くて困るな………なんか温かい手料理すげえ良いな………家庭的な味付けがまたなんとも………ちよつと色々と満たされるのを感じる。嫁力高え………これはもう実質嫁なのでは？

——ただもう、これは飯を食い終わってからは行くしかない。ちよつと可愛すぎて我慢が効かなくなってきたからな。

「ごちそうさま。美味かった」

「お粗末さまです。……あの、片付けますね………」

と、俺が食べ終わり、福路も食べ終われば福路は食器などを片付け始める。というわけでちよつと準備だ。

まずは一言言つてトイレを借りる。用を足すだけじゃない。ちよつとブレスケアでもしとこうかなつて。こんなこともあろうかとコンビニで買ったといた。後はちよつと汚い話だが、用はちゃんと足し終えてからだ。なんでかって？ ……いや、分かるだろ？ エロいことはストレスフリーでやりたいのだ。邪魔になるようなことは全部排除してから臨むのが基本。だから携帯だつてマナーモードどころか電源を切るし、体調は万全に、用だつてきちんと足す。エロ漫画

とかだとそういうのって言及されないが、現実はそのはいかないからな。あまりないが、エロいことしてる最中に催すとありえないくらい萎えるからな……多分他の男もそうだと思う。デリケートなことなんで話したことなんてないが、多分そうだ。そういう時って射精の時の快感もあまりよろしくなかったりするしな。とにかくセックスだけに集中出来るように準備を整えるのだ。そこまで臭わないとは思うが、一応ブレスケアとかも大事。エチケットってやつだな。

そんなこんなで色々終えてからリビングに戻る。福路はまだお皿を洗っていた。

まあここに来た建前としては夕飯を食べに来たので、もう帰るのが筋ではあるが……そうはいかない。今日はもうここで決めるのだ。

もうぶつちやけ俺の肉棒はギンギンである。射精したくてしようがない状態。収まりが効かない。

というわけで一応は隠しつつ、リビングでなんとなく食後の休憩。そうして福路が皿を洗い終えるのを待つ。

そしてそれはそこまで時間はかからない。故にそれが終わると、福路はキッチンからリビングへ、俺の横まで来て、

「……お、お隣、失礼します」

「おお……って、お前の家のソファなんだから許可取らなくても」
「そ、そうですよね。私ったら……」

と、そのまま福路がぎこちなく笑い、なんとなくテレビを見つめる——が、おそらく俺だけでなく、福路もテレビなんて見ていない。

相手の方を気にしている。俺も、福路が俺の隣に座ったことで、ソファがその重みで少し沈んだことが、福路の距離の近さを自覚出来てヤバイ。

手を伸ばせば抱き寄せることが出来る。押し倒すことも出来る。横目で見れば福路の紅潮した美しい横顔。瑞々しい唇。サラサラの金髪。胸の膨らみ。スカートから伸びる足。太腿が眩しい。女の子らしい腰のくびれは距離が近いと、当然だがその華奢な腰を間近で感じ取れてたまらない。今直ぐ色んなところを掴んで味わいたくなる。

……ただまあ、初めてでいきなり襲いかかるのは駄目だからな。紳

士的に行こう、紳士的に。

「……あ、あの……」

「ん、なんだ？」

声を掛けてきた福路の声を待つ。まあ向こうから来るかな？ とちよつと楽しみにしながら待つ。だが、

「……あ、熱くないですか？」

って、言わないんかい。これはひよつとして長引くか？ 奥手そうだし、いつまでもこの調子の可能性だってあるんじゃないかと思えてきた。

しようがないからちよつとこつちからアプローチしよう。惚れられてるって分かっているならちよつとキザで大胆な事だって出来る。

まあ、そうだな——、

「ひゃうっ……！」

と、福路が突然の事に可愛い声を上げた。まあいきなり手なんて握ったらそうなるよな。俺もちよつとドキドキした。大丈夫だろうとはいえ、そういう関係にまだなっていない女の子にそういうことをするのはちよつとした度胸が必要だからな。まあ最初の一步さえクリア出来れば後は流れて行けるが。

「福路の手は温かいな……熱いと聞いてきたってことは、福路の方が熱いのか？」

「と、東郷さん……て、手……繋ぐなんて……」

「嫌だったか？」

「い、嫌じゃありません……ありませんけど……これ、凄いドキドキして……こんなの、初めてで……あう……んっ……♡」

俺が福路の女の子らしい白くすべすべな手を掴んでスリスリと擦り合わせると、福路がもうその度に小さく声を漏らしながら恥ずかしそうにしている。俺が掴んでいない反対側の左手で顔を軽く隠すようにしていた。はあ……手がすべすべで触ってるだけで気持ちいいし、福路が一々反応するからヤバイな。もうこれ、実質セックスでは？

「……福路は可愛いよな。しかも優しくて面倒見も良いし、料理だっ

て美味しい」

「そ、そんなこと……んっ……と、東郷さんだつて……や、優しいと思います……皆の指導を一生懸命やってくれて……そういうところがとても……あつ」

「どうしたんだ？ そんな可愛い声出して」

「んっ、んんう……手を繋いでこうやって触れ合うのが……その……」
「その？」

福路の手の感触を味わいながら問う。すると恥ずかしそうにしながらも、福路は小さな声で、

「……その、好き、なんです……」

「っ……福路……」

「あつ……♡」

その言葉にたまらない気持ちにさせられ、福路の肩を抱き寄せる。女の子らしい華奢な撫肩。ただの肩だが、されど肩だ。普通は男に触らせはしない。許可なく触ろうものなら嫌悪感を抱かれるだろう。

だが好きな相手なら別だ。福路は俺に触れることを受け入れ、しかし身の置き方が分からずにもじもじとしている。この慣れていない感じが可愛い。処女厨という訳ではないが、それでも真っ白なキャンパスを自分の色に染める楽しみは格別だと知っている。

「そういうこと言われるとたまらないな……福路は、俺を誘ってるのか？もしかして、俺のことが好きなのか？」

「っ……そ、それは……あ、ああああの……」

と、俺が白々しくも自分から聞いてみると、福路は分かりやすく反応を示しながらも顔を背け、

「……恥ずかしくて言えません……」

「っ……またそうやって可愛いことを言うな……」

「あつ……」

顔を背けた福路の顎に手を当ててゆっくりとこっちを向かせる。

「嫌なら言え」

「……そ、その言い方はズルいです……」

と、福路はそう言いながらもこちらを見て、やがてゆっくりと目を

閉じた。

それは受け入れた証だ。福路が俺という男を受け入れた。もう我慢する必要はない。俺は顔を近づけ、そのまま福路の唇を、ファーストキスを奪った。

「んっ……んっ……♡」

そのまま何度かキス。福路の唇の柔らかさ、瑞々しきを感じる。とうとう触れることが出来た。ここまで来た。美少女の唇の感触と軽く抱きしめた際の体温や福路から漂う甘い香りが俺を急激に興奮させる。いやもう、女の子ってなんでこんなに気持ちいいのかと改めて疑問に思ってしまう心地よさ。

キスをしながら背中にも手を回し、軽く腰などを擦るとまたたまらない。福路がピクツと身体を跳ねさせ、顔を離す。

「あつ、駄目……駄目ですよ、東郷さん……んっ♡」

「駄目と言いなながら抱きついてくるなんて矛盾してると思わないか？」

———というか、何が駄目なんだ？」

「んんっ……そ、それは……」

福路の方からも俺の身体に手を回して抱きついてくれば、その身体の柔らかさや熱さが伝わって気持ちいい。その大きな胸だつて俺に押し付けられている。

ただ俺の方から手を触れると、そこからは何をするのか理解はしているのか、口では拒んでみせた———が、正直、嫌よ嫌よも好きのうち、を地で行ってるだけである。

「可愛いぞ、福路……いや、美穂子って呼んでもいいか？」

「んっ、はあ、はあ……そ、それはいいですけど……ああ……駄目です東郷さん……そんな、ふしだらなこと……恥ずかしい……」

俺が福路を、美穂子を、名前で呼んでいいかと問いながらそつとソファに押し倒す。無理矢理ではない。軽く押すようにして押し倒せば美穂子はそのまま背中から倒れた。

その濡れた瞳が、白い肌が僅かに赤く染まっているのがたまらない。俺の眼下に制服姿の美少女がいるという事実。恥ずかしそうに顔を背けているが、それもまた趣がある。スカートから伸びる白い

足、太腿の間に俺の膝を置く。ソファに寝転がったことで僅かにその丈が上がって上の方まで——まだ下着などは見えていないが、魅惑の太腿が見えている。制服に押し上げられた巨乳が美穂子の荒い息に合わせて上下に動いている。

今からこの美少女を自分のものに出来る。誰もが憧れるようなこの巨乳美少女をだ。制服姿の彼女はまるで、俺だけに捧げられた宝物のようにも感じられる。こんな男の願望を詰め込んだようなエッチな女の子に、俺の欲望を吐き出すことが出来るのだ。

その現実を敏感に感じ取って俺の肉棒は先程からズボンの下でバッキバキになっている。しばらく抜いてないのもあって辛抱たまらない。美穂子に触れていると、もう今すぐにでも扱きあげたくてしようがなくなる。

「美穂子は可愛いな……」

「あつ、ああ……駄目ですそんな……」

美穂子の首元に顔を埋め、美穂子の香りを吸い込み、耳元でささやく。すると美穂子は身を振り、可愛らしく鳴いた。しかもその上でこんなことを言う。

「はあ、う、ああ……つ、せ、せめて、シャワーを浴びてから……ベツドで……」

「……駄目なんじゃないのか?」

「駄目……つ、駄目ですけど、その……東郷さんとするなら……せめて……あつ、駄目え……」

駄目と言いながらも、嫌とは言わない美穂子が可愛くてしようがない。きつと美穂子はこの行為をいけないことだと思っっているのだろう。事実、いけないことではある。

だがその一方でそれをした気持ちも、受け入れたい気持ちもあるのだろう。その狭間で悶えているのだ。

そんな可愛い少女を放っておける筈もない。俺はそつと太腿に触れて、同時に胸にも手を置いた。

瞬間、美穂子が可愛い声を上げ、俺の脳で快感が弾けた。美穂子の肌の感触。女性らしい柔らかさや弾力に満ちた太腿を撫で、制服のス

カートの中に手を忍ばせる。そしてもう一方の手では美穂子のその巨乳を、制服の上から揉んだ。生ではないため、少々抵抗感のある硬い感触もあるが、それがまた俺を興奮させる。いけないことを、女子高生を味わっている背徳感やら優越感を感じてヤバイ。制服と下着の奥にある柔らかさをむにむにと手で味わい、俺の手の動きに合わせて形を変えるところを見るともう止まらない。いつも思うが、初めての女の子に初めて触れてエロいことをする瞬間というのは、もう頭がバグリそうなほどに興奮する。冷静な筈なのに理性はない。止まらないのだ。手つきは勝手に美穂子という極上の美少女の感触を味わおうと身体を弄るし、口は勝手に正直な言葉を吐いていく。

「はあ……シャワーまでは待てないが……ベッドには行くか……ほら、美穂子の部屋に連れて行ってくれ……」

「ん……は、はい……こっちで——あつ」

俺は一度美穂子の上からどいて、美穂子に自分の部屋まで案内させる。——が、美穂子に正面から抱きつきながらだ。

美穂子のスカートの中に両手を潜り込ませ、外とは違う空気の中、そのぷっくりした男好きするお尻を鷲掴みにして揉みしだく。下腹にはギンギンになった肉棒を押し付けた。それだけで気持ちよくて困る。このままこれが続けるだけで射精だつて出来そうである。

「と、東郷さ、ん……あつ、こ、これ……んっ、男の人の……ああ……こ、こんな存在感が……んんう……」

「美穂子が可愛すぎるからだ……ほら、部屋まで……はあ、行くぞ……」

「わ、分かりましたから……あつ、んっ、もうちよつと、待って……あつ、駄目ですよ……」

美穂子はいっぱいいっぱいだった。初めての男性との、好きな異性との接触。未知との遭遇に戸惑い、どういう姿勢でそれを受け止めればいいのかまだ分からない様子である。俺が手を動かす度に気持ちよさそうにしているが、その度に俺の耳元で、駄目、駄目え、と甘い声を出していて、ゾクゾクしてしまう。美穂子の熱い吐息とその甘い声が気持ちいい。鼓膜を通じて俺の脳を震えさせる。俺が腰を、肉棒

をグイグイと押し付ければ、美穂子はそれから逃げているのか、それとも欲しがっているのか、腰を左右にくねくねと振っていた。もうそれがまたエロい。天然でどこまで興奮させてくれるんだと思う。

俺は歩きながら、美穂子と抱き合いながら美穂子の部屋に向かう。ゆつくりと、だが着実に。美穂子の声を聞きながら俺が殆ど運んでいるような状態だ。

そうしてようやく、2階の部屋までやってくると、俺は美穂子の白いベッドに美穂子を再び押し倒し、その唇に吸い付いた。

「ちゅっ、んっ、あ、そんな、ちゅ、れろ、ひたはあ……ちゅうつ、んっ、ああ……♡」

今度は唇を触れさせるだけじゃない大人のキス。舌を絡ませるセックス用のキスをして、美穂子を蕩けさせる。

そしてそのまま、今度はスカートを捲り上げる。すると、可愛らしいライトグリーン色のパンツが目に入った。

「あっ、駄目です……んっ、そんな、恥ずかしい……」

「可愛い下着だな……はあ、美穂子によく似合ってるぞ……」

「んう、あ、ありがとうございます……東郷さんが、喜んでくれたなら、良かったですけど……ああ、恥ずかしいわ……」

美穂子が可愛い顔を手で隠す。でも真っ赤になった首筋や耳などは隠せていない。もう可愛くてチンコがさつきからヒクヒクと動いてしょうがない。

だがまだだ。次はその大きな膨らみに目をつけた。

「おっぱいも見せてくれ……」

「っ、だ、駄目……その、私、その……」

駄目と言っても脱がすが、それでも一応言葉は耳に入ってくる。制服に手をかけながら、彼女が呟いたのは、

「お、大きいから……変じゃないですか……?」

「——いや、最高だ。大きい方が好きだぞ」

「……そう、なんですすね……んっ、それなら、良かったです……ちよつと恥ずかしいですけど、嬉しい、です……」

思わず、間髪入れずに答えてしまう。大きなおっぱいは俺にとって

の宝に等しい。

制服という名の宝箱を開いて、俺はそのお宝を目にするのだ。そこにあるのはお宝だ。おっぱいだ。まろびでてきたのはたわわな巨乳だった。

「はあ……良いおっぱいだ……」

「あ、ありがとうございます……」

美穂子のおっぱいを褒めるとやはり恥ずかしそうに身を振っていたが、やっぱりエロすぎて見ることも触れることも我慢出来る訳がない。はあ……なんで美少女の巨乳ってこんなにエロいのか。見るだけで幸せな気持ちになれる。信じられないくらい形が良い美巨乳。手で触れればずっしりと重く、弾力のある柔らかさが俺の掌を幸せにしてくれる。手で形を変え、谷間を作ったり、ぷるぷると揺らしてみ。なんだって出来るのがたまらない。今まで誰にも触れさせてこなかったであろうこの特盛の果実を、俺の手で収穫するこの幸せっぷりがなんとも言えないよな。

「あつ、ん、東郷さん……そんな……夢中になつて吸うなんて……♡」

「夢中になるだろこんなの……でつかくて柔らかくて綺麗なおっぱい……ああ、ヤバイ。最高の感触だ……」

「ああんっ……と、東郷さんの手が、私の胸を掴んで……はあ、はあ……んっ、ああ……♡」

おっぱいを揉む度に美穂子は熱を帯びた息を漏らす。いやほんとエロい。大人顔負けの色香にクラクラしそうになる。

美穂子の身体はどこもエロい。出るところは出ているのに引っ込むところは引っ込み、無駄な部分がない。男好きするエロい身体だ。

胸の大きさは今までの俺の女に比べてやや控えめに感じるが、それは今までの子達がかなり大きめだったからこそ思うことだ。美穂子も十分、女子高生にしてはでかすぎるおっぱいだ。たまらない。顔を埋めてみる。ふわふわたぷたぷの感触が俺の顔を包んだ。めちゃくちゃ気持ちいい。股間がギンギンになる。もうなってるが、更に大きくなってる気がしなくもない。先走りがどんどん出てくる。もうたまらなかつた。

「美穂子……気持ちよくなってるどころ悪いが、俺のも弄ってくれ
か……?」

「はあ……はあ……と、東郷さんの……あつ……すごい……こんな
……」

美穂子の手を、俺の股間へと導くと、美穂子は一瞬驚き、しかしおっ
かなびっくりな様子で股間をゆっくりと確かめるように撫で回して
きた。ズボンの上から触れられてるだけなのにやっぱいい気持ちいい。
美穂子のすべすべの綺麗な手がくにくにと俺の肉棒を気持ちよくし
てくれる。……こういう時のつたない手つきがほんと気持ちいい。
予想出来ない手の動きに変な声が漏れそうになる。あー、それ。その
触り方エッチすぎ……。

「っ、直接触ってくれ」

「直接……あつ、こんな、こんな風に……あつ、凄いわ……」

もう我慢出来ない俺はズボンをさっさと脱ぎ捨てる。美穂子の
前に現れる俺の肉棒。それを美穂子が両目で捉えると、手で顔を隠し
——しかし指の間からまじまじと見つめている。貞淑なのに興味は
あるのか。それとも惚れた俺の物だからか。どっちにしろ美少女に
見られるのはそれだけで気持ちいい。美穂子のオツドアイから絡み
つくような視線を感じて肉棒がビンビンに跳ねて喜ぶ。

「……ど、どういう風に触れたらいいのかしら……?」

「……そうだな。まずは握ってみてくれ」

「……はい……こ、こんな感じですか?」

きゅっ、と美穂子の手が優しく俺の肉棒を握る。力加減が分からな
いのか、そつと握ってくるがまたその感じがエロいな。

「そう……そうだ……ああ、それで上下に扱くように動かす感じで
……」

「は、はい……はあ……はあ……こんな、大きくて……硬いなんて
……」

「ああ……もっと強く握っても大丈夫だぞ……くっ、そう……はあ、い
い……」

「と、東郷さ……あつ、胸……んっ、そんなに揉むなんて……駄目です

「……ああっ♡」

「うっ、ああ……何が駄目なんだ？ 美穂子もそんなに感じて気持ちよさそうにして……」

「だ、だってこんな……あつ、駄目え、東郷さん、胸、そんな吸うなんて……んんんっ♡」

快感を感じて首を振っていやいやしてる美穂子。美穂子の乳首に俺が吸い付いたせいだ。瑞々しい弾力の柔らかいおっぱいの中心にあるピンク色の綺麗なそれを口に含んで舐めしゃぶる。顔を埋めて大きなおっぱいを顔で感じるのは最高だ。このまま肉棒を扱かれれば夢の授乳プレイである。推定、GかHカップのJKおっぱいを味わえるのだ。やらない訳がない。

「っ、はあ、美穂子、そのまま扱いて……くっ、ああ……」

「ああ……ああっ、東郷さん……東郷さん……っ♡」

もう美穂子は余裕がないのか、俺の名前を呼んで喘いでいる。中々に聴覚も刺激してくれる。美穂子の様な貞淑な女の子がこんないやらしいことをしながら、感じてくれてるのは中々にクるものだ。手の方もシコシコときこちないながらも扱いてくれて……あーヤバイ。最初だからなんかもうイキそうだ。興奮してるからか早くなってしまう。

「男性器が、こんなに逞しいなんて……知りませんでした……あつ、んっ、んんっ♡」

「っ……美穂子、男性器じゃなくて、もっといやらしい言い方で言ってみてくれるか……ほら、オチンチンとかオチンポとか……」

「……お、おちんちんですか……？」

「ああ、そうだ……うっ」

美穂子のいやらしい言葉に俺の肉棒も反応する。美穂子を俺色に染めていく実感が湧く。俺の好きな扱き方と俺の好きな呼び方。何かを教える度に美穂子は俺のモノになっていく。

「んんっ、はあ、んー……ぷは……はあ……美穂子、ほら、扱く時は、しこ、しこ、って言うんだ。シコシコって」

「あつ、は、はい……っ……しこ、しこ……しこ、しこ……こ、こうで

すか……?」

「あー、良い……気持ちいいぞ、美穂子……その調子だ……ああ……っ」

「はあ、手の中で脈打って……凄いです……っ、っ……気持ちいいんですね……っ、っ……」

自分は口を動かしておっぱいを、巨乳を舐めしゃぶるだけ。高まつた官能は美穂子がしこしこ言いながら、その手でして発散してくれる——こんなのもう最高だ。女子高生の感触はどこもかしこもすべすべで、身体からほんのり甘い匂いがする。おっぱい越しに聞こえる可愛い声もたまらず、我慢なんて出来ない。だが、我慢する必要だってない。彼女はもう俺に惚れていて、まだまだやる事が出来る。いや、やらなければならぬ。こんな可愛い女の子を他の男のモノにする訳にはいかない。自分のモノにしると俺の中の雄の本能が言っている。

そしてその雄の本能は股間の昂りに変換されたが、すぐに美穂子が肉棒をしこしこと扱いて……俺はもう耐えることが出来なかった。

「っ……はっ、出っ……!」

「あっ……」

びゅううううっ。びゆるるっ、びゅううっ。びゅううっ。

美穂子の手の動きに耐えきれずに俺は射精する。彼女の手の中でびゆるびゆると久し振りの射精を感じる。

顔はおっぱいに埋めながらだ。左右に顔を動かし、おっぱいの谷間で甘やかされる。そうしながらの射精は格別で幸せすぎる。多幸感が溢れて、今の俺はだらしのない顔をしているだろう。それを隠す訳ではないが、おっぱいに強く顔を押し付けながら射精し続ける。

「ああっ、男性の射精……こんなに沢山出るなんて……はあ、はあ……」

♡

「はあ、美穂子……ヤバイそれ……うっ」

美穂子が射精時もしゅっしゅっとならぬと無自覚なのか、残った精液を絞り出すような、まるで牛の乳しぼりのような手の動きで絞り出してくれる。俺は美穂子のおっぱいに甘えるようにその細い腰に抱きついて

しばらく射精する。なんか、段々と上手くなっていた。上達が早い。もつと長引かせればもつと楽しめただろうかと少し思うが、

「っ、はぁ……美穂子、そろそろ準備は出来たか？」

「と、東郷さん……えっと、その……私……は、初めてで……上手く出来るかどうか……」

「……大丈夫だ、俺に任せろ」

「……はい……あっ……♡」

美穂子が見上げてうっとりとしながら頷く。もう耐えられないな、と。俺は美穂子を押し倒し、一線を越えに行くことにした。

嫁プレイ

「それじゃあ挿れるぞ……」

「は、はい……んっ♡」

服を完全に脱がし、ベッドの上で足を広げさせると、俺はその間に俺の肉棒を突きつけ擦りつけた。

既に俺の方も服を脱ぎ捨て、お互いに生まれたままの姿で相對しており、美穂子の方も俺をちらちらと見て、同時に胸の辺りで手を縮こまらせ、見られてることに恥ずかしそうな反応を見せている。……そういうったポーズはちよつとあざとく、ぶりっ子がやるようなそれだが、美穂子のそれは天然だろうし、イラツとすることもない。単純に可愛いだけだ。おっぱいが腕に締められて余計に強調され、むしろ俺は興奮するのだが、そういうったことも分かっていないし、気づいていないだろう。計算なんて以てのほかだ。余裕はなくいつぱいいつぱいで、緊張しているのが窺える。

こちらは美穂子の美しく、男を魅了するエロい体つきを前にただただ興奮して喜悦の気持ちしかないが、やはり初めてだと緊張するだろうし、その美穂子の緊張がこちらにも伝わってきて、どうにも静かな雰囲気になってしまう。

だがそれも、初めての空気。JKとセックスをするインモラルな感じに思えてむしろ興奮した。2人でイケないことをするかのような雰囲気はまだ堪らない。巨乳美少女の自宅で初体験。最高の巨乳美少女である彼女を頂ける俺はどれだけ幸せなんだと思う。

しかし緊張を少しはほぐしてやらないとな、と美穂子の耳元に顔を近づけ、覆いかぶさるようになりながら言う。

「美穂子、好きだぞ……」

「あ……そ、その……わ、私も……私も、その……好き、です」

恥ずかしがりながらも俺の耳元にそんな言葉を聞かせてくれる。めっちゃ可愛い。美穂子の熱い息が耳元、首筋に吹きかけられゾクゾクとしてしまう。

そうして彼女の肩から僅かに力が抜けた瞬間に、俺は肉棒を美穂子

の膣内に押し進めるように埋めていった。

「あつ、ああ——っ」

愛撫なんて殆どしてないのにびしょびしょで、処女であることを踏まえてもきちんと俺の肉棒を受け入れてくれる。入り口から熱とヒダが俺を猛烈に歓迎してくれて溜息が漏れる。そう、この女の子の初めてを貰う瞬間が——最高に気持ちいい。

「あああああつ——♡ んっ、と、東郷さん……!」

美穂子が俺の首に手を回し、ぎゅうううっつと強く抱きしめてくる。まあ痛みは当然あるだろう。が、それほどでもないのか、俺に甘えてくるように首元に擦り付いてくるのがまた可愛い。というか気持ちいい。あー、やっぱり女の子って気持ちいい……なんでこんなに気持ちいいんだろうな……どこもかしこもすべてで柔らかく、男を誘う造形美というのか、魅力的な体つきで、めっちゃくちゃ甘い匂いがする。美少女を抱いた男だけの特権。気持ちいいとこだらけの美穂子の身体を全身で味わい、その肉棒を搾り取るための雌の器官に他でもない俺の肉棒が埋まっている。その中の溶けそうな熱さと、きゅつきゅつと俺を愛するように敏感な先っぱやカリ首などに甘く吸い付いてくるおまんこの感触に酔いしれそうになる。

「全部入ったぞ、美穂子……」

「んっ、ちゅっ、んんっ、は、はい……中にいるのが分かります……っ

♡ お腹の中が、東郷さんのでいっぱい……♡」

「っ、ああ、可愛い……気持ちいいぞ美穂子……」

「か、可愛いだなんて……そんな……んっ、あつ、東郷さん……♡」

美穂子のおっぱいを右手で揉みしだく。片手で両方の乳房を掴むように揉んでみるが、大きいせいで中々掴みにくい。量感たっぷり巨乳を片手で支えるのは厳しいが楽しい。こんな巨乳美人ちゃんとエッチ出来るの最高すぎる。

「はあ……動いていいか? それともまだ痛いかな?」

「んっ、い、いえ……大丈夫です……続けてください……はあ……♡」

俺の肉棒を感じているのか、思ったより平気そうに動いていいと言ってくれる美穂子。その姿がまた健気だ。やはり嫁力が高い。

そこで、不意に俺は思いつく。ちよつとしたプレイなのだが……あの提案を美穂子にしてみた。

「……美穂子。俺のことを、あなた、って呼んでくれないか？」

「はあ、はあ……あ、あなた、ですか？ んう……でも、それって……その、まるで……」

美穂子が俺の提案を聞いて俺と同じことを連想したのだろう。恥ずかしそうに息を整えながらも目をそむける。

だが俺は念を押して、美穂子を真正面から見る。目を合わせる。彼女のオツドアイを両目で捉えながら、その上で、

「美穂子がそう呼んでくれたら、俺は嬉しい。だから頼む」

「あつ……わ、わかりましたからそんなに見つめないでください……その、んっ♡ えつと……」

美穂子が一呼吸置いて、恥ずかしそうに上目遣いで、

「……あ、あなた……？」

「うっ……」

「ひゃんっ、あなたっ♡ あなたのが、中でまた大きく……だ、駄目え……駄目です、んんう……♡」

美穂子の、あなた、呼びに肉棒が興奮でドクンと跳ねる。ヤバい可愛い。たまらん。凄まじい破壊力だ。

「ああつ……美穂子、可愛すぎる……！ もうたまらん、俺の美穂子……！」

「あつ、あつ、あつ♡ だ、駄目です、あなた……そんなに動いたら、私……ああつ♡」

美穂子に真正面から覆いかぶさり、上から腰を連続で突き入れる。柔らかい肌、胸の下で潰れる巨乳。美穂子という華奢で肉付きの良い美少女の肌の感触と甘い香り、その嬌声を堪能しながら肉棒を媚肉で扱く。

あなた呼びで、まるで美穂子が俺の嫁になったかのような錯覚。どうしようもなく征服欲が満たされる。

「美穂子……っ、ほんと可愛いぞ……！ くっ、はあ、気持ちいい、美穂子気持ちいい……」

「あつ、ひやつ、やつ、だ、駄目え……激しすぎです、あなたあ……♡
おかしくなつてしまします……♡」

「ああ、おかしくなつていいんだぞ……！ お前も気持ちよくなれ

……！ はあ、このおっぱいも凄い……！ 最高……っー！」

「ああ、胸え、恥ずかしい……んんっ、駄目ですう……♡」

処女なのにいきなり感じてしまうほどの惚れ具合。その反応の良さと俺の肉棒を締め付ける膣の感触で美穂子の蕩けっぷりを実感する。

俺の下で乱れる巨乳JK。胸もお尻もぷつくりと膨らみながら、無駄なところが全くない最高の美人の身体をまさぐり、味わいまくる。

特におっぱいが最高だ。やはり巨乳美人とエッチするのは最高だ。おっぱい大きい美少女とエッチするなんて気持ちいいに決まってる。突くと俺の突きに合わせてぶるんぶるんと上下に跳ねる。その乳揺れが俺のピストンでもたらされているのだ。まるで俺のモノだと自ら主張しているかのようなたまらない光景。それにたまらず胸を掴めば、柔らかく、しかしそれでいてみっちり詰まった乳肉が俺の手の中でむっちり弾ける。想像以上の感触に興奮し、股間を硬くし、その肉棒は美穂子にキツキツヌルヌルと締め付けられる。この穴も俺専用のハメ穴となつているのだ。今まさに、俺のピストンによって美穂子のおまんこが俺の形に矯正されているところである。

仮にだ。絶対にそんなことはないと思いたいし、そんなことはさせないが、仮に将来、美穂子が俺以外の男とセックスを、俺以外の男の肉棒を受け入れたとしても、初めての相手が俺であることはもう絶対に変わらない。

セックスの事を考え、別の相手とヤツたとしても、1番に思い出すのは初めてを奪った俺の肉棒であり、比べられる運命にある。可哀想なことだ。相手からすれば嫉妬で気が狂うだろう。これだけの美少女なだけに、初めての相手が自分じゃないということに行き場のない憤りを憶えるのだろう。

まあ、そんなことは絶対にないが。この雌は、美穂子は俺のモノであり、もう絶対に手放さない。何度も言うが、もう俺のモノなのだ。

「ああっ、美穂子……美穂子……！ はあ、美穂子、おっぱいのサイズ教えて……」

「はっ、あっ、ああっ……♡　だ、駄目え……あなた、そんな、あっ、は、恥ずかしい……」

「お願い教えてっ、はっ、はっ……おっぱい何センチ？　カップは……？」

「む、胸は……あっ、ううっ……胸はっ、あっ、はあっ……んんんっ♡　それ、駄目っ……頭が真っ白になりますっ……♡」

美穂子の奥、1番奥の子宮口にグリグリと肉棒を押し付け、おっぱいのサイズを問い質す。俺の嫁の胸の大きさだ。将来有望な美少女女子高生雀士のおっぱいの大きさは――

「んっ、あっ、はあ……きゅ、93の……んっ、Hカップです……あなたあ……♡」

「はあっ……そうか……！」

「ああっ、また中で大きいです……♡」

俺は美穂子の1番奥に肉棒をぐりぐりと押し付けながら、圧倒的な優越感に酔いしれて溜息を吐く。

女子高生でHカップ。そんなエロエロボデいの美少女を今俺は犯しているのだ。

抱きしめれば俺の胸板でむにゆりとHカップおっぱいが潰れた。そのまま腰を振れば、美穂子の嬌声が耳元で聞こえ、俺の身体が美穂子の柔らかい身体に受け止められる。女の柔らかさだ。特にこのHカップのおっぱいだ。はあ……おっぱいでっか……気持ちいい……っ。気持ちよくて自分から胸を倒したり少し緩めたりしておっぱいの感触を味わってしまう。

「はあっ、くっ、気持ちいい……どうだ、美穂子は……！」

「んんうっ、し、痺れて……お腹の奥が熱いです……♡　はあ、あっ、ああん……んっ、ちゅっ、あっ、ちゅう、れろ……♡」

美穂子とキス。舌を彼女の口の中に差し入れて、舌を絡ませる。いきなりの行動だが、美穂子はそれを受け入れる。初めてであるため、ただただ舌を動かすだけのものだが、俺もそれほどテクニクがある

訳ではない。ただそれでも気持ちいい。舌を絡ませあい、ただただ快感を求めるセックスを楽しむ。

腰を動かす、喘ぎ声が連続する時間が続き、もっと、もっとと楽しみとうとするが、久し振りであることや極度の興奮により、もう既に高まりきっている。出したい。美穂子の中に出したい。それだけしか考えられない。

「ああっ、もう出そうだ、美穂子……っ！」

「んっ、ああっ、はい、出してください……っ♡」

美穂子は駄目とは言わなかった。駄目とは言わずに、とうとう言った。

「はっ、ああっ……だ、大好きです、あなた……っ♡」

「っ、美穂子お……！ ああああっ……っ！」

びゅううううっ！ びゅうううっ！ びゆるるっ！ びゅううっ！

「うっ、うううっ、美穂子っ、あああっ、めっっ、はあ、出る……っ！」

「ああっ、あっ……んんんっ♡ 奥う、ああっ、熱い、駄目えっ……っ♡」

美穂子が口を噤んで快感に耐えようとしたが耐えきれていない。俺の容赦ない吐精に美穂子が首を振りながら俺の身体をぎゅうっつと抱きしめる。美穂子の体温、その柔らかさ、駄目と言いながらも快感を感じて可愛い仕草を見せ、俺を受け入れて引き寄せてくる彼女に俺はうっとり気持ちのいい射精を彼女の中にし続ける。

矛盾するような行動だが、そんなことを一々気にするような余裕も俺にはないし、そもそもどうでもいいことだ。女の子のおまんこにずっぽり肉棒を埋めて射精するのは正に男の悦びだ。物凄く満たされてしまう。

「ああ、最高……美穂子、可愛い、好きだ……美穂子……」

「あっ、ああ……あなた……私も……好きです……大好き……っ♡」

美穂子に覆いかぶさったまま愛の言葉を囁くと、美穂子もうわ言のように俺への好意を口にした。あなた呼びが心地良い。呼ばれる度に産毛が逆立つような気持ちよさがある。ああ……と意味のない声を出しながら幸福感に包まれてしまう。そう、そうだ。この幸せ感。

これを味わうために俺は生きているのだと思ってしまふほど。

可愛くておっぱいの大きい女の子とやれる。新しい女の子を落とすとして男の夢であるハーレムを作っている。複数の美少女を俺のモノとしている現実に凄まじい優越感を感じる。

「はあ、美穂子……」

「んんんっ、あつ、だ、だめえ、今動かしたら……ああっ♡」

腰を軽く動かし、肉棒で美穂子の中を掻き回すと美穂子がまた可愛い反応を見せる。

俺は美穂子の首筋にキスを落としながら再び快感を求めた。突けば突くほど、奥が熱く、そしてジユクジユクに濡れて気持ちよくなれる。

俺はその夜、満足するまで美穂子を味わい続けた。

——結局、俺はそのまま泊まることになった。

美少女の身体に吐精しまくり、満足しきってから眠りにつく。

勿論、俺の横には巨乳美女である美穂子がいて、気持ちのいい身体をいつでも味わうことが——

「……………？」

まどろみの中、ほぼ無意識的に隣にいるはずの美穂子を抱きしめようとしたが、そこには何の感触もなかった。

あれ？ と反対側にも手を伸ばしてみるも、いない。どこにいったのか。

ここは確かに美穂子のベッドで、昨夜は美穂子との初体験を確かになに済ませたはず。何度くらい射精したか……多分、二桁行くか行かないか程度だろう。何度か休憩を挟んで何度も、おまんこだけじゃなく、口や胸でも抜いてもらった。

我ながら中々の性豪っぷりだと感心してしまうが、そんなことより美穂子だ。美穂子はどこにいるんだろう。目を瞑った状態、半覚醒の状態でベッドの中をもぞもぞしていると、不意に音が聞こえた。戸を開けるような音と足音。そして、

「——あなた……起きてください」

「……あ……？　美穂子……？」

「はい、そろそろ朝食が出来ますから、起きてください。もう朝ですよ」

紡がれる言葉をゆつくりと頭の中で噛み砕く。朝食か……それと、その呼び名……まるで新婚さんみたいだな……と。

「……東郷さんがお願いしたんですよ？」

「ん……？　あ、あー……そういえば……」

そういえばそんなことを言ったな、と俺は昨晚の事を思い出す。確か、あなた、と呼ぶように言ったり、色々とお願ひしたのだった。

そしてプレイの途中で、俺は美穂子に朝もそんな感じで頼むとお願ひして……ああ、うん。確かに言っただし、ということはだ。

「美穂子……これ、鎮めてくれ」

「！　凄い……朝からこんなになるなんて……」

美穂子が俺が指し示した場所——起立した肉棒を見て顔を赤らめる。私服のニツト姿にエプロンの美穂子を見て、なんだかムラムラムしてしまっていた。

「……えっと、それじゃあ……」

「昨日教えた通り、胸でしてくれ」

「っ……もう……あなたつたら……エッチ……」

エッチ、なんて女の子の口から言われてもご褒美でしかない。しかもあなた呼び継続のマジっぽい新婚プレイだ。その言葉だけで肉棒がビクツと跳ねる。朝からギンギンのそれを美穂子に見せつけ、奉仕を催促しているのだ。

その美穂子も、まだ恥ずかしそうではあるが、幾分か慣れては来たのか、躊躇わずにベッドの上に乗ってくる。2人分の重量でベッドが僅かに軋む。そして俺の股間に近づいて、衣服の上部分を脱ぎ始める。すると、たぶんっ、と重量感のあるHカップが出てきた。

そして俺の腰を膝に乗せると、

「確か……こんな感じで……んっ、熱い……」

「ああっ……あー……」

美穂子のおっぱいに肉棒が挟まれる。

朝っぱらからのパイズリ。目覚ましパイズリだ。

現役女子高生にそんなことをさせていると思うと股間が硬くなる。しかも新妻プレイ——いや、JK新妻プレイだ。

自覚すると更に肉棒が喜んで天を衝く。だがその肉棒は美穂子のあったかいおっぱいに包まれていた。というか、

「なんか温かい……気持ちいい……もしかして、また風呂に入ったのか？」

「あつ、はい。シャワーですけど、起きてから入りました」

「うおつ、ああつ、道理で、温かい訳だ……しつとりしたおっぱいがチンコに吸い付いて……あー、最高、気持ちいい……」

「んっ、気持ちいいなら……良かったです。あなた……んっ、はあ……」

むにゆうっ、むにゆんっ、と美穂子はその自慢のぷっくりした乳肉を肉棒に押し付けてくれる。両手でおっぱいを持ち上げ、股間の上で巨乳を跳ねさせてくれる。ほんの僅かに飛び出した俺の肉棒の先端が確かに挟まれていることを実感させてくれる。風呂上がりでしつとりもちもちの温かいおっぱいに包まれるのはたまらない。温かさと乳圧が肉棒の芯まで伝わってくるようで腰が浮いてしまう。すぐ出せそうな気持ちよさだ。

「あつ、んっ、あなた……腰が浮いて……んっ、気持ちいいですか？」

「ああ、最高……朝から美穂子に抜いてもらうの気持ちよくて幸せ……はあつ……」

ただの本音を口に出す。いや実際、朝から抜いてと言ったらすぐに抜いてくれるとか幸せすぎる。勃起した肉棒を鎮めるために自分の手を使ったり、治まるまで放置したりしなくていいのだ。硬くなったら即ヌキ。しかも可愛い女の子、めっちゃくちゃ美人でおっぱいがでかい現役女子高生に、そのHカップおっぱいで目覚まし新婚パイズリ。前世でどんな徳を積みばこんな体験が出来るのだろう。どれだけ金を払えばこのサービスを受けられるのだろう。現実味のないような体験だが、間違いなく現実で、俺がそれを受けている。腰から伝わ

る感触が気持ちよくてしようがない。

「……ふふ、良かったです。ん……」

「っ、はあ、ああっ……ヤバい、気持ちいい……」

美穂子が笑みを見せて、おっぱいをむぎゆうつと肉棒に寄せてくれる。深い谷間の中で肉棒が幸せなホールドを受ける。溜息のような声が漏れる。美穂子が段々と奉仕に熱を入れていつてる。こちらをジッと見つめて、

「男の人にこうやってエッチなこと喜んで貰えると……いえ、好きな人に喜んで貰えると、エッチなことでも沢山してあげたくなくてしまつて……不思議です。恥ずかしいのは変わりませんけど……」

「ああ……ありがとうな、こんな気持ちよくしてくれて……はあ、やばっ、朝一番だとやっぱすぐ出そうになる……」

「いつでも出してください……受け止めますから。んっ……それと、お礼を言うのは私の方です」

「お礼……？ あっ、くっ……」

パイズリをしながら美穂子は俺をその両目で見つめて、微笑を浮かべる。慈愛に満ちた微笑みだ。柔らかく、母性を秘めた女の表情。それで美穂子は言った。

「……東郷さんに……あなたにはお世話になって……それで、その……好きになるってことを教えてもらって……恥ずかしいですけど、なんだか嬉しいんです。だから、ありがとうございます」

「っ、お礼を言われるようなことじゃ……あっ、やばっ、くっ……」

こんな良い話の最中なのに美穂子のパイズリが気持ちよすぎて出そうになる。……いやまあ、良い話かどうかは微妙だが。オカルトが原因だし。しかし俺は一応、なんとか耐えようとして——しかし美穂子の奉仕が激しくなったことでその試みは無駄になった。

見れば美穂子が胸を揺らしながら、少し恥ずかしそうに、

「その……出会ったばかりでおかしいかもしれませんが、本当に好きです。あなたの為に色んなことをしてあげたくてしようがないんです。そうやってあなたの喜ぶ顔が見れるなら……っ、こうやってエッチなことだつて……できちゃいます」

「っ、ああっ、ヤバい、本当に出る……美穂子……!」

「はい、出して下さい……♡ それと、何でも言ってくださいね？」

「……あなた？」

「っ、あああっ、出る……!」

びゅるるるっ! びゅううっ! びゅるるる! びゅううっ!

っ、ああ……やっぱっ……ちよつと、あなた呼び破壊力高すぎて死ぬる……! ああ、めっちゃ気持ちいい……!

「んっ、胸の中でこんなに……。ふふっ、沢山出せたんですね……あなたの……おちんちん、とてもがんばり屋さんで、良い子です。んっ……♡」

「ああっ、美穂子……抱きしめるのヤバい……絞られる……!」

胸の中で射精をして、柔らかい乳房の間で余韻に浸っていると、その余韻の最中の肉棒が美穂子にぎゅうっとおっばいで抱きしめられる。俺の精液でにゆるにゆるになったHカップの谷間に扱かれて絞られる。まだ微妙に気持ちよさが残ってるというか、まだ硬い肉棒を、特に精液が残ってるであろう裏筋の辺りを乳肉でにゆるくと擦られるとゾクゾクしてしまう。

残った精液をドクドクと美穂子の胸に吐き出し、全てを吐き出した頃には肉棒はギンギンになったままであり、

「……はあ、美穂子……」

「んっ、駄目ですよ、あなた。朝食がもう出来るんですから……その、その後なら学校に行くまでまだ時間はありますし……いいですけど……」

めちやくそエロいことを言ってくれる美穂子がたまらん。何この子。ヤバない? 嫁力高いとは思っていたが、ここまで高いとは……。

いやだがそんなことを言われるとムラムラしてしょうがない。……が、確かに飯を粗末にするのはアレだし、美穂子の学校の時間だつてある。

現実是非情というか、そんなにガッツリ出来る時間は残っていないだろう。出来ても後1回くらいだ。

しかし、そういうことなら――

「……美穂子。それならお願いがあるんだが……」

「はい。なんですか、あなた？」

ああ、だからその感じやめろ。問答無用でラブラブ孕ませセックスの刑になる。そんな新妻感出されると。

だが俺はグツと堪えてお願いした。それは、

「……通学に間に合う時間まででいいから――裸エプロンでいってくれ」

「あ、あなた……これ、恥ずかしいです……」

「いや、最高だ。ああ、生きてて良かった……」

「全部見えちゃって……んっ、これ、エッチです……」

――というわけで朝の時間。俺は美穂子の素晴らしい姿を拝んでいた。

それは……裸エプロン。男のロマンの1つだ。

俺はそれを、美穂子という巨乳美少女に、現役女子高生に叶えて貰っている。

正面からは白い手足や肩、僅かに胸元が覗き、横からみれば横乳が、生足が、腰のラインが。そして後ろから見ればお尻やら背中やら何もかも丸見えで、とてもエッチな格好である。

こんな格好を見せられれば、やはり我慢出来ない。俺は即、美穂子の後ろに回って抱きついた。

「ああ、美穂子……お尻もぷりぷりしてて気持ちいいぞ……」

「あんっ、ああ、硬い……んっ♡」

美穂子のお尻にグリグリと肉棒を押し付ける。興奮しすぎて美穂子の身体を撫で回しながらだ。ただでさえ男好きする美穂子のぷつくりしたお尻は、押し付ければ弾力のある柔らかさが俺の腰を気持ちよくしてくれる。男を誘うエロエロ尻だ。しかも押し付けければ美穂子もそれを感じて、僅かに腰を左右に揺らすのだからもうたまらない。

「美穂子、そこに手付いてお尻上げて……」

「んっ、こう、ですか……？ あっ——♡」

にゅくくくくっ♡

「ああっ、最高……気持ちいい……！ もうこんなにほぐれて……ははっ、美穂子も興奮してたんだな？」

「ああっ、だ、だって……こんな格好で、あなたのその、おちんちんを見てたら……なんだかおかしくなっちゃって……んんうっ、ああっ、はっ、あっ♡」

後ろから美穂子を犯す。キッチンの洗面台に手をつかせ、お尻を高く上げさせたスタイルでだ。

つま先立ちで俺の腰の高さに合わせてくれるとかヤバイ。好きな男にしか絶対やらない裸エプロンでの立ちバックは視覚的にもエロいし、何より征服欲が満たされる。

美穂子のお尻に向かってパンパンと音を鳴らして腰を打ち付ける。美穂子のお尻や弓なりになってエロい腰から背中の中のライン、揺れるのが見えるHカップのおっぱいなど、とにかくその全てを視界で楽しみ、時折好きな場所に手を伸ばしてガン突き。天国すぎる性行為に官能がありえないくらい高まっていて、気持ちよすぎる。

「あっ、ああっ、あなた……もつと、あっ、もつと、気持ちよくなって……♡ んっ、もつと、突いてください……あなたあ……♡」

「っ、ああ、もうっ……！ エロい……っ！ ああ、たまらん……！ もうめっちゃ突いてやる……！ めっちゃ突いて出してやる……美穂子お……！」

甘ったるい声で、あなたあ、と呼び、お尻を振ってガン突きのおねだり。こんなのを耐えられる訳がない。もう聞いた瞬間に、めっちゃくちゃに腰を振る。そしてすぐ気持ちいい。俺の肉棒がグンツと大きくなるのに合わせて、美穂子の中もきゆうつと締まった。

「んっ、中で、あっ、やっ、あなたのおっ、おつきくなって……ああ、気持ちいいっ、です……んっ、ああっ、んんうっ、だ、だめえ……っ♡ 頭が、頭がまた真っ白に……♡」

「はっ、はっ、くうう……気持ちいい、気持ちいい……！ 中で、出し

てやる……！ 俺の子種、受け取れ美穂子……！」

「んっ、はい……大好きです、あなた……っ♡ あ、あなたの、子種……中に、中にください、あつ、あああつ♡」

「あああ、でっる……！ ああ……！」

びゅ——っ！ びゆるるっ！ びゅううっ！ びゅうう！

中がキツく締まった瞬間、俺は肉棒を美穂子の一番奥にグリグリとくっつけながら射精した。

お尻に腰を押し付け、細いウエストにしがみつきながら、そこに射精してるところを確かに感じる。凄まじい快感で頭が真っ白になる。中がうねうねきゆうきゆうと締まり、熱い美少女の膣内で射精する。男の至上の悦びだ。中出しはあまりにも甘美すぎる。

「ああっ、ああっ、美穂子……！」

「んんうっ、あなたあ……あなたのが、中で……ああっ……♡」

射精の最中も、その気持ちよさをもっと味わいたくて奥に入れたまま軽く揺すってしまふ。あなた、と呼ばれる度に子宮口に亀頭でキスをしてやると、俺の女感が凄くて陶酔してしまふ。亀頭が一番奥の抵抗にぶつかつた時に、全部、奥まで犯したのだ感が凄くてもうずっとそこにいたくなる。

だが現実として、もうすぐに止めないと美穂子が遅刻してしまうだろうし、止めないといけない。それは凄く残念だが、同時に焦ることもないと思う。

何故なら、美穂子はもう俺の女だからだ。これから先もエッチは出来る。俺だけがエッチ出来る。だから焦ることはない——と俺は自分に言い聞かせ、名残惜しくも肉棒を美穂子から引き抜いた。

嫁になったキャプテン

月曜日という平日の始まり。その憂鬱さは……俺にはそこまで分らない。プロって別に土日祝日休みとかないし……休養日、オフとかはあるけど、別にそういうのに縛られないしな。オフシーズンにそれなりに休みがあるって感じで、後は週に1日か2日、まあ忙しい時なんかは全然休みはないが、そういう時つてのは大体対局以外の仕事が決まってる時である。俺はちよつとしか経験ないけど。

というわけで世の社会人の方々、サラリーマンの方の苦しみは分からないが……学生だった頃のそれなら理解出来るので、ちよつとは分かる。土日明けの月曜日ってダルくてしょうがない。

が、今の俺や……美穂子にとつて、今この時の月曜日の朝は苦しい時間ではなかった。

「はい、あなた。食後のコーヒーです」

「ああ、ありがとう」

俺はソファに腰掛けながら、制服にエプロン姿の美穂子から笑顔でカップを受け取る。コーヒーの良い香りが鼻孔を突き抜けた。普段俺、コーヒー飲まないけどな。昔飲みすぎて胃壊したから飲まないようにしてる。

だが今回は特別。新婚っぽいやり取りをするためにちよつと美穂子にコーヒーが飲みたいと言ってみると、笑顔でコーヒーを入れてくれた。もうすぐで出ないといけないというのに。

あなた、と呼ばれながら尽くされるのはなんとも心地良い時間だ。久し振りのコーヒーもとても美味しく感じる。というかだ。

「その呼び方、2人きりの時は続けてほしいんだが……いいか？」

「……はい。私も……なんだかドキドキしてしまつて。東郷さんにあなたって呼ぶと……その……」

「新婚さんみたいってか？」

「は、はい……だからドキドキして、でもなんだかふわふわもして……足元が覚束なくなるような感じなんです。きつと、これが人を好きになる……好きな人と触れ合うことの良さなんでしょうね……」

隣に座った美穂子がそつと俺の手を撫でてくる。まだまだ初々しい感じで遠慮がち。どこまでやっていいのか分からないのだろう。

だからまあ、俺は幾らでもやっていいと教えてやる。美穂子の肩を抱き寄せ、

「もつと遠慮なく甘えてきてもいいぞ?」

「あつ……はい! それじゃあ……えいっ」

ぎゅうつと俺に横から抱きついてくる美穂子。温かくて華奢な身体が左半身に飛び込んでくる。巨乳がむにゆりと俺の身体に押し付けられて気持ちいい。しかも美穂子はすりすり俺の身体に擦り寄ってきて、

「ん……こうやって抱きついたりして触れ合うの、凄く温かくて気持ちいいです。男の人の……あなたの身体、逞しくて、凄く安心します」

「あー……美穂子の身体も気持ちいいぞ。柔らかくて最高だ」

「んっ、キス、好きです……ああつ、ちゅっ、んっ、れろ……あなた、大好き……」

ソファの上で制服姿の美穂子とイチヤイチャする。制服エプロン姿の美穂子の柔らかい身体を抱きしめながらラブラブちゅっちゅ。それがどうしようもなく気持ちいい。というかまた勃起そうで困る。これだから女の子を堕とすのは止められない。めちやくちや好意を感じて気持ちいい。優越感はんぱないのだ。何しろこれで5人目である訳だしな……ハーレムを自覚するとなんだか全身がむず痒いような、うずうずとしてしまう。自然と顔がニヤけそうになるというか、全能感すら感じてしまうからヤバイ。今なら何をされても許せそうである。最高の気分だ。

「そろそろ行かないと……あなたは、夕方からまた来るんですよね?」

「ああ、そうだな。今週の金曜日までは風越で練習を見ることになってる」

「金曜日まで、ですか……」

ただまあ、現実には色々制限があるんだよな。美穂子とこうやってイチヤイチャ出来るのも限られてるし。明日の朝には親が帰ってくるらしいから家に泊まってエッチというのも難しい。中々悩ましい

ものだ。

「まあ、しばらくは長野に滞在して別の学校も回る予定だからな。暇があれば会いに来るさ。……デートとかもしたいだろ？」

「！ デート……はい。あなたとお出かけ、してみたいです。凄く楽しそうで……あつ、その時はまたお弁当作っていきますね！」

「ああ、楽しみにしてる。——さて、そろそろ出るか」

邪魔したな、と美穂子に言っただけで家を出る……のだが、エプロンを取って、制服と学校鞆を手にとった美穂子が玄関と一緒に出ようとして……あーヤバイ、改めて離れて制服姿を見るとムラムラする。いや、なんか触りたくてしようがない。というわけで手をのばす。

「きゃんっ、んもう、あなた……駄目ですよ？」

「最後にちよつとだけ触れ合おうと思っただけ。次はいつこんなことが出来るか分からないし……あー、やっぱ美穂子気持ちいい。可愛いぞ」

「くすっ、もうあなただったら……仕方ないですね、ちゅっ……」

美穂子のお尻やおっぱい、太腿などに手を伸ばし、制服越しに何度か揉みしだく。こうやって手を伸ばせばいつでも触れる距離感がたまらない。もう俺の女だからこそ出来ることだ。軽くたしなめられるが、このエッチなことをして窘められるだけ、別に本気では怒られない感じもまた心地良い。

美穂子と軽くキスをして、家を出る。……さて、ここからは普通の距離感でいらないとな……残念ではあるが仕方ないと、俺は美穂子と早々に別れて、一度宿泊中のホテルに戻った。

「さて……どうすっかな……」

ホテルの部屋。備え付けの椅子に腰掛け、俺は今後の予定に少し悩んでいた。

というのも、長野での滞在にちよつと問題があるのだ。

それは俺の一応の仕事、依頼である麻雀指導のことなのだが……ちよつと整理しよう。

ええと、今週の金曜までは風越女子で指導があるからそれは問題ないとして、来週からは噂の長野県代表校である龍門渚高校に指導に行く。そこでの滞在はホテル……なのだろう。詳しいことは分からないが、多分そうだ。

というのも龍門渚から依頼を出してきた相手方のメールによれば、宿泊先はこちらで用意するから心配ないとのことなので、俺は向こうでのホテルの予約を取っていなかったりする。しかもそのお金も結構とのことで、随分と太っ腹だった。依頼金も通常の5000円どころじゃないし……最初、その20倍近い金額を提示されて、冗談かと思ったら、一応それは冗談で、その10倍の5万だった。いや、それでも高いというか……まあプロに依頼するなら安いかもしれないが、元プロの指導料金にしては高い。しかし、向こうはそんなに安くてもいいのか？ という態度だったので、どうもおかしいと調べてみれば、向こうはどうもお金持ちらしい。というか普通に財閥だった。龍門渚グループとかいう。その辺りの詳しいことはまた後で整理するとしてだ。問題はこれではない。

実は……後2校程、追加の依頼が来ているのだ。

そのどちらとも再来週——龍門渚高校への指導が終わってGWを越えた翌月の5月を希望している。そして依頼してきたのはどちらも高校の麻雀部……長野県、清澄高校と、同じく長野の鶴賀高校。

まあ俺が長野で指導しているってことを、実はSNSで軽く載せたからだろうか……それを見て依頼してきたのだろうからそれはいい。こちらとしても想定していたことだ。

ただ……そうなると滞在の予定を色々考えないといけなくなるんだよな……。

そして1番面倒なのがホテルの予約だったりする。いや、同じホテルでいいじゃんって人によったら思うかもしれないが、長野って意外と広い。北海道よりはマシだが、何気に今いる風越は長野の中でも南の方だし、ここから行けるとしても清澄高校くらいであり、後は車で1時間ちよつと掛けて龍門渚高校。そして鶴賀高校に至っては長野の北も北。車だと2時間ちよつと掛かるし、出来れば近場か、もう

ちよつと長野の真ん中辺りにホテルを取らなければ指導に通うのも一苦労なのだ。

後、何気に宿泊費が結構掛かるし、貯金を切り崩して生活している俺にとつては何とも頭が痛いというか、ちよつと考えなければならぬのだ。

清澄高校は5月初旬から中旬希望で、鶴賀高校は中旬から下旬辺りを希望しているので、一応はそれに応えて予定を組みたいのだが、こうなると1ヶ月以上は滞在する計算になる。そして長期の滞在には金が掛かる……まあ、1日5000円で、龍門渕からの予想外のボーナスやら、色々考えると、そこまで問題ではないかもしれないけどな。一応安めのビジネスホテルとかならプラマイゼロに出来なくもない。宿泊費以外を考えなければだが。ご飯とか結構掛かるからな……後はガソリン代とか。自分の車で来ているため、レンタル料が掛からなくて済むのは有り難いが、ガソリン代はガソリン代で少し掛かる。それでもレンタカー借りなくて良かったとは思うが。

「はあ……どうせなら一泊か二泊くらい、どこか温泉旅館とかに泊まって息抜きとか……ねえかあ……」

別に多少なら良いかもしれないが、そうやって浪費し続けるのもアレなので、諦めて携帯でホテルを探す。一応、再来週くらいからにはなるだろうが、早めに決めておくに越したことはないな。

……でもいつかは美少女を集めて温泉に浸かるハーレム入浴を……ヤバイ、興奮してきた、自重しろ。今日は抜いたばかりだから比較的落ち着けるはず。多分。美穂子が大分エッチだったので助かった。

ただその美穂子で心配があるとすれば、学校で会った時の美穂子の対応だが……多分大丈夫だとは思う。あれで結構強かだしな。学校ではしれつと普通に接してくれるはずだ。

「……暇だな。外に飯でも食べに行くか」

そんなことを考えていると、もう何気に昼過ぎになっている。美穂子や風越女子の部員達は皆、当然授業だし、放課後になるまで俺の出席はないのだ。これが金曜日まで続く訳だが……あー、やっぱり美穂

子とはしばらく出来そうにないか……？　ちよつとお触りくらいなら出来そうだが……どうだろうな。

——と、俺はそんなクズい心配をしながら、昼飯を外で頂き、頃合いを見て風越女子の部員たちに引き続き指導を行ったのだが、

「——東郷さん。私、一度抜けますね」

「ん、ああ。なんだ、雑用か？」

「洗濯物や買い出しが溜まっているんです。それでは失礼しますね？」

「……ああ、分かった。それじゃあ池田、代わりに入れ」

「分かりました！　ということで、今日こそはボコボコにしてやります！」

「はいはい、わかったわかった」

と、池田に適当に対応しながら対局を始める……のだが、本当に普通に接してくるな。いや、そうでないと困るんだが、ちよつとはそれっぽいニヤニヤ出来る反応が見られるかと期待していたので、微妙に残念な気もする。相変わらず雑用をしようとして、1年生の部員から窘められてちよつと軽いやり取りを交わしているのが微笑ましいが、そういうことじゃないんだよな。

とか思つてしばらく対局を進める。すると不意に卓を囲んでいる生徒から声を掛けられた。ちよつとした雑談のようなもので、

「東郷さんって、結構体型がシュツとしてますけど、何か運動とかやってるんですか？」

「……別に何もやってないが……それがどうかしたか？」

「いえ、最近弟が太ってきて……なんとか痩せさせるためにダイエットとかさせたいんですけど、痩せてる人はどういった運動してるのかになって気になって」

ああ、なるほど。そういう話か。まあ、麻雀には関係ないが、少しは構わない。ずっと無言で対局つても息が詰まるだろうしな。

と、少し考えて発言しようとする、池田が話題に反応して、

「あー、分かる分かる。うちの妹達もたまにお菓子食べすぎてちよつとぷつくりする時があつてなー。まあまだ小さいからそういうのは

させる必要はないけど、大きくなって太ったらどうしようとかたまに考えたりするし」

「妹か……まあ、別に多少なら太ってもいいんじゃないか？」

「ええー、でも痩せてる方がカッコいいじゃないですか」

「痩せすぎよりはマシだ。それに、痩せてるように見えて腹が出てたりする男も多いし、そういうトラップを身体に抱えるよりは予め明らかに太ってる方が分かりやすくもいいだろ」

「そういう問題ですか……？」

横からもう1人、吉留が緩いツツコミをこちらに入れてくる。まあ冗談で言ってるからツツコんで貰わないと困るので、言ってくれて有り難いことだ。

とか言っていると、ちょうど洗濯から戻ってきたのか、美穂子が部屋に入ってきた。会話が続けているため声を掛けはしないが、軽く目は合う。一瞬右目も開いたが、すぐに閉じた。……ちよつと法則が分からないが、一応好意的な意味だと受け取っておこう。そう思いながら話を聞いていると、何気に男のタイプの話になっていた。さすがは女子校。意外と肉食系なのか？

「男はやっぱり財力じゃない？ お金がないと苦労しそうだし」

「見た目は並以上なら後は性格とか」

「やっぱり男って言ったたら筋肉とか逞しさがないと勿体ないよねー」

おー、色々言ってるなあ……そういう話題は微妙に混ざりにくい気もするが、さてなんて言ってるか……と、一瞬の思考で会話のやり取りの内容を考えてると、その中の1人が美穂子に気づいて声を掛けた。

「キャプテンは男の人のどういうところが好きですか？ やっぱり筋肉ですか？」

「筋肉……」

「ちよつ、こらっ！ キャプテンにまだそういうのは早いし！ 付き

合うなら、まずあたしを倒してからに……」

「華菜ちゃんはその視線なの？ 父親？」

美穂子に声を掛けて、美穂子が突然の話題に一瞬考え込むと、池田

と吉留がいつも通りのやり取りを行う。……また微妙に絡みにくいというか、美穂子へのそういう話は俺が下手に混ざると変な感じになりそうだな。

いや、見てみたくもあるが、ボロを出させるのも駄目だし、悩ましいところだ。今はとりあえず静観していると、美穂子が素直に、ポンッと手を叩いて、

「！ ええ、わかるわ……！ 男の人の身体って、服を着てると気づきにくいけど、実際に見てみると筋肉質で凄いわよねっ」

「えっ？ きゃ、キャプテンって筋肉フェチなんですか……？」

「なんか意外……でも確かに、テレビとかで芸人とか俳優がいきなり脱いだりすると、地味にドキッとしたりするよね」

って、おい。なんか微妙に危ない話してないか？ 周りは特におかしく思ってはなさそうだが、結構スレスレの話題な気がする。美穂子の信頼の高さが窺えるが、人によっては、結構突かれそうな発言だ。実際に見たってどこで？ ってな感じで。まあ普通はテレビとかだと思っし、この場ではそうはなつてないが、冗談交じりに誰かがそう言うことも十分にあり得る。

だから何気に危ないな、と思っていると、今度は池田が、

「男の筋肉か……よし、それならここにちようど東郷さんがいるし、ちよつと見せて貰おう」

「……は？」

おい、池田アツ!! てめえ、何いきなりふざけたことぬかしてやがる!! いきなり筋肉見せるとかアニメとかに出てくる変態筋肉系キャラくらいしかやらねえよ! まあ軽く腕の、とかならギリギリ分かるが……、

「というわけで東郷さん、腹を見せてください」

「ふざけろ」

「東郷さんの腹筋……」

おい、美穂子。俺には聞こえてるからな? 小声でちよつと顔赤くして何期待してるんだ? 散々見ただろうが。そういう空気を演出すると、マジで見せる羽目になるからやめろ。もう手遅れっばいけど

な!

「ははーん? もしかして、東郷さんはおじさんみたいなお腹ぷよぷよだったり? それで恥ずかしくて見せられないって感じだったりするのならしようがないし!」

「てめえ、池田ア……」

なんだそのクソみたいな煽りとにんまりとしたしたり顔は。すげえムカつく。関節技決めたい。もしくは役満——はアレだから、麻雀でボコボコにして戦犯顔にしてやりたい。

しかし……くそつ、なんだか乗せられてるようでムカつくが、ここで意固地になって見せないのも気にしてるみたいで嫌だしな。嫌だが、まあしようがないと、

「……少しだけだぞ。くそ……ほら」

「おつ……つて、バッキバキだし!」

「うっ、わあ……すごい……」

しょうがないので軽くシャツの腹の部分を持ち上げて、見せてやると池田が驚きの反応を見せ、吉留や、それを見ていた他の部員らも俺の腹筋に注目して声を上げる。微妙に恥ずかしいから勘弁してほしい。

「東郷プロって、細マッチョなんですね……」

「おー……割れてる……ていつ! うわっ、硬いし!」

「おい、何勝手に触ってやがる池田……」

「ええー、減らないからちよつとくらいはほら……好奇心が疼くというか……あー、なるほど、これなら確かに、ボクシングとかでバシバシ殴られても平気な訳だ……」

「……いや、まあ、たしかに多少は緩和されるが、別に平気ではないと思うけどな……なんだかんだで腹は人間の急所の1つだし……」

私見を口にしなから頭を抱えていると、別の部員がおずおずと近づいてきながら手を挙げた。何を言うかと思えば、

「……あ、あの、私も触ってみていいですか?」

「あ?」

「あ、私も触ってみたいです!」

「なら、私も……」

「後学の為に……」

「筋肉筋肉ー！」

と、続々と手を挙げて触りたいと表明する部員達。いや、お前ら麻雀しろよ。たかだか腹筋如きで……いや、まあ女子校なら珍しいというか、意外と興味津々だったりするんだろが、それにしてもどうかと思う。

「それじゃあ順番に並んでー。はい、勝手に触ったら駄目だし。そういうのは事務所を通してからじゃないと……」

「お前は俺のマネージャーか。……はあ、もう好きにしろ」

池田がふざけたことを抜かしていたが、なんだか抵抗する気も失せてさっさとしろ、と女生徒達のおもちゃになることにする。順番に女生徒らが俺の腹筋をつんつんと突いたり、軽く触れたりしてくるのだが……なんなんだろうな、本当に。まあ女子高生相手だし、そこまで悪い気がしないのが救いだが……って、

「……久保さん、何してんすか？」

「……いや、せつかくだし……ふむ、なるほど。確かに硬いな……」

せつかくだし、じゃねえよ。なんでご丁寧に並んでやがる。ぺたぺたと腹筋に触れてくる久保さんにげんなりする。それでいいのか鬼コーチ。部活中に変なことしてる部員達をいつも通り注意しないのか。その池田とか、明らかにふざけてるが。

一応、触り終わった者から練習に戻っているが……いやなに、この異様な光景……80名近い部員が俺の腹筋を触って席に着いていくのがシユール過ぎる。

……いやまあ、もうここまで来たら早く終われって感じだが……それにしても腹筋くらいで大騒ぎするのは女子校あるあるなのだろうか。あー、でもキャバ嬢の中にもやたら筋肉触ってから褒めてくる奴とかいたし、意外と女子ウケするのもかもしれない。個人的にはそういう筋肉で相手を墮とすみたいなのは営業はしたくないのだが……いや、筋肉営業ってなんだよ。変な言葉をナチュラルに使うな。

「んっ、東郷さん……」

「！ 最後は福路か……」

気がつけば美穂子以外の面子は捌けていた。というか、美穂子こそ別にそういうことしなくてもいいと思うのだが、割と興味津々で触れてきているから困惑する。しかも妙に触り方が……こそばゆいというか、ソフトタッチはやめてほしい。なんかエロい。美少女の手つき。こんな可愛い子が顔を赤らめて触れてくるのは、ちよつと意識したらエロくて興奮出来る。ようは勃起しようと思えば出来そうなエロさだ。

ただまあ、一応美穂子もあまりやりすぎるのは駄目だと思っているのか、ひとしきり触り終わると、ふう、と息を入れ、

「……えつと、ありがとうございます」

「……おう……」

そこでお礼を言われてもなんと返せばいいのやら……というかマジでムラムラしそうになるから困るな……くそつ、つってもエロいことなんて出来ないしな……。

この可愛くて美人でおっぱいの大きい美穂子が、今朝には俺の手や肉棒であんあんとよがっていたと思うと中々にたまらないものだが、それを思い出して優越感に浸っても、ここで手を出す訳にはいかなないのでちよつとした生殺しであった。

「……ふふつ、それじゃあ練習に戻りましょうね、東郷さん……」

「！ ああ……」

俺の顔をまっすぐに見つめてそう言うが、その瞳の中に好意が隠れているのが明らかに分かってしまったたまらない。というか、なんか色っぽい。女は恋をすると綺麗になると言うが、なんか美穂子の仕草が昨日までよりも、更に女性らしくなっていて、なんともこちらを感わせてくれる。生殺しで辛い。

でも、この子を大人の女にしたのは俺なんだよな……と、思うとやっぱり幸せである。あーもう、絶対長野にいる間にまたセックスするからな、と俺は美穂子を見ると、美穂子もまた、両目を開いた状態で流し目を送って、嬉しそうにしていた。またなんとも嫁力高すぎる子を墮としたな……と、俺は劣情をぐつと堪えて練習に戻った。

龍門瀧家

本当の金持ちってスケールが違うよな、と時々思う。

いきなりなんだって感じだが、いやほんと、たまにこういう下らないことを考えること、誰にだってよくあるだろ？

例えば……自分が金持ちの家に生まれていたら、とか、そういうどうしようもない、「もしも」の話だ。

そんなこと話してもしようがないと、誰もが言うし、思うことだが、なんだかんだでそういう話って結構しがちだよな。なんか意外と話が膨らんだりもするし。

だがそこらの一般人が想像する金持ちと、実際の金持ちにはそこそこの乖離があったりする。

俺達の国には金持ちが結構いるので、身近にそういう人物がいたり、話を聞いたりすることもあるだろうが……まあ、殆どの金持ちは、自分は普通のそこらの人と変わらない。感覚は一緒だと言う。

まあ実際に、庶民的な店を利用したり、妙に所帯じみてる奴はいる。いるが、そこらの人と変わらないというのは、大体が嘘である。

意識してないだけで、金持ちとそれ以外では大きな隔りがあるのだ。例えば……服を値段を見ずに買ったり、車検の時期毎に車を買って換えるような、金銭感覚の違いは特に大きいと言える。

そもそも育ちが違うのだから感覚が一緒になる筈がない。金持ちでなくとも、育った環境の差というのは如実に現れるのだから。

友達の家で夕飯をご馳走になったら、味噌汁とかカレーに入ってる具が違うとか、よくある話だろう。……ちなみに俺は味噌汁の具はネギと豆腐とワカメに豚肉だ。なんかちよっぴり豚汁っぽいけど、豚汁だとワカメとか豆腐とか入ってない変わり種な気がする。が、家だとそんな感じだ。

これが金持ちなんかになると、食事の時に出てくるものとかで結構な差があったりする。だからといって、金持ちらしい露骨な物を食べるとは限らない。頻繁にステーキ食ってたりする訳じゃないのだ。

ただ、使ってる食材一つ一つが高級品だったり、食器が充実してい

たりするだけだ。お昼に素麺食ったり、みたいなことも全然ある。ただちよつと上品で色々入ってるだけだ。一本7000以上はする国産松茸とか。ぶつちやけ松茸とかそんな言うほど美味いって思ったことはないが。椎茸で良くね？ まあそもそも素麺にきのこいらんけどな……ネギがあれば十分。むしろネギが一番美味いまでである。マジ俺って貧乏舌。

……とまあ、それは良いとしてだ。自分では常識と想ってることが、実は世間一般とはズレていたりすることなんて例に事欠かないだろう。金持ちの常識は一般人の常識ではない。だが、彼らにとつては紛うことなき常識であるが故に、一々他人に言ったり、ひけらかしたりしない。態々人に言ったり、SNSなんかこんな凄いことした、凄いもの買った、なんて載せてる奴らは真の金持ちとは程遠い。金をそこそこ持つてるだけの成金か、ちよつと無理をしてでも、他人よりも上だと喧伝したがってるマウント人間だ。勿論、そうじゃない純粋な人も中にはいるだろうが……まあ、それもいいとしておこう。

ただ、なんだ。要は純粋な金持ちって俗世からかけ離れてるっていうか、1周回って漫画みたいなイメージでの金持ちだったりする。

そういう人、家は本当に少ないけどな。現代の金持ちなんて殆ど成金だし。親とか一族が元々金持ちってなるともつと少なくなる。財閥とかを経営してる一族とか、そういうのがありがちである。

俺はまあ……プロにいたこともあって、金持ちと関わることはそれなりにある。トッププロとかはやべー金持ちだからな。前に聞いた良子の年間で稼ぐ金額なんかを聞いた限りだと、マジではやりさんみたいな人気も実力も経験もあるトッププロだと……多分、桁が違うはずだ。

だからまあ、そこまで驚くことはない。金持ちと会ったとしても——と、俺は普段通り、自然体でいたのだが、

「でっけえ……」

俺は正門——洋風の屋敷の前でちよつともう感心するような声を出して立ち止まっていた。

なんとも馬鹿でかい家だ。和風ならともかく、洋風のこんな、ステ

レオタイプの金持ちが住んでるような家は初めて見た。

広々とした庭まで付いてて、噴水とか庭園があつて、専用の庭師とか、メイドとか執事がいるような家。これだと多分料理人とかもいるんだろうな。中々お目にかかれなレベルの豪邸である。

まあ、俺が何故そんなところを訪ねているかと言うと……ここに、俺の依頼主が住んでいるからである。

「間違いないここだしな……」

右の方を向いて独り言を呟く。正門の横にある大きめの表札にはきちんと、「龍門渚」と雇い主の名字が刻まれていた。

「……しようがねえ、入るか……インターホンは……」

何とも言えない気分にはなっているが、入らざるを得ないのでインターホンを鳴らすことにする。

まあもう誰でも分かるだろうが、龍門渚っていうのは、龍門渚グループという日本でも有数の財閥、上から数えた方が早い超お金持ちの家であり、同時に、去年の全国高校麻雀選手権、女子の部で長野県代表校を務めた私立、龍門渚高校の母体、当主が理事長を務める、あの龍門渚である。

学校の方じゃないのか、とも思うが、依頼主から渡された住所がここなのだから仕方がない。実は麻雀部からの依頼じゃないのか、とも思うが、よくよく調べると龍門渚高校の団体戦メンバーに、龍門渚という名前があるのでそういう訳でもないらしい。

ならやっぱ学校にしろよ感凄いが、依頼主には逆らえない。報酬も倍以上貰ってるし……と、俺はインターホンを鳴らす。すると少しして、

「——お待ちしております」

「！」

と、中から執事が現れた。もう執事としか言えない。テンプレな執事が現れた。

しかも黒髪の超イケメン。ムカつくな……イケメンは嫌いだ。いや、まあガチで嫌いって訳でもないし態度に出す程でもないが、イケメンというのはズルいから内心でちよつと文句を言うくらい良いだ

ろう。といふかなんか執事つてだけで完璧そうだし、明らかにモテそうなのがムカつく。俺も割と目の隈さえなければイケてるはずなのに……いや、でも今はオカルトのおかげでモテてるからマシだ。オカルトがないと悲惨で劣等感半端なかっただろうが、今はオカルトのおかげかそうでもない。やっぱオカルトつて神だわ。

「東郷仁様ですね。私、龍門瀏家で執事をしております、ハギヨシと申します」

「……ああ、はい。東郷です。今日からよろしくお願いします」

「はい。では透華様の元にご案内致します。どうぞこちらへ」

「はい、お邪魔します」

会話もそこそこに屋敷の中へ。それにしてもマジでデカイというか、豪華な屋敷だな……さすがにここまで広い家は見たことがない。完璧そうな執事もいるし。龍門瀏家つてヤバいんだな……。

そして、敷地が広い所為か、中々辿り着かない。しょうがないから会話をするしかない。沈黙過ぎると気を使ってしまう大人の良いのか悪いのか分からない癖だ。

「ハギヨシさんはここに勤めて長いんですか？」

「そうですね。幼少の折りから龍門瀏家にお仕えさせて頂いております」

「へえ、そうなんですか」

「はい。それと東郷様、私に敬語は不要です」

と、言われてもな……初対面で年上の人に敬語を外すのは中々やり辛いものがあるんだが……と俺はそれを言うことにする。

「ですが年上相手には……」

「……いえ、私はまだ19歳で、東郷様より年下ですよ？」

「えっ」

は？ こマ？ いや、全然そうは見えないんだが……え、19歳？

マジで見えねー!? 嘘つくなよ。お前、どう見ても20そこそこつて感じだろ。アラサーとかには見えないが、22から24辺りだと勝手に思っていた。俺よりは年上か、あったとしても同年代くらいかと。そう思っていたらまさかの19。成人すらしてないとか……

ええ……。

「……ということは、俺の2個下の学年か……」

「いえ、私は早生まれですので学年で言えば東郷様の1つ下になりますね」

「あつ、そうなのね……」

早生まれ。ということは来年の1月から3月辺りが誕生日で、今年度に20歳になるという訳だ。まあ俺の誕生日は4月の初旬で、同い年の中では一足早く年齢が上がるし、今はまだ4月下旬ということもあつて、今年19になるのかと勘違いしてしまったが、まあそういう言い方もあるよな。今年に何歳になるとか。

ただこいつは一応1個下で……うん、まだ良かったな。何故かちよつと安心した。1個下でも驚きだが、まあ俺もよく年齢を間違われるしな……目のクマとか、雰囲気で初対面の人には24、25辺りに思われることが多いし。そういう意味ではハギヨシと俺は似てるのかもな。光と影的な。どっちもイケメンだし。……いやごめん、調子乗ったわ。一応、イケメンカテゴリにはギリ入るかもだが、ハギヨシには敵わねえ……ハギヨシが上の上か上の中なら、俺は上の下くらいだわ。性格もクズだし。勝てるのは性欲とかかな？ 最低過ぎる。……んー、まあ、そう言うなら敬語は崩すが……」

「はい。私としてもその方が落ち着くのでお願い致します」

「おお……根っからの執事なんだな」

「ありがとうございます。ですが東郷様も……根っからの雀士と言いますか、普通の人とは違う気配を漂わせておりますね？」

「はは、さすが執事。お世辞が上手いな」

「いえいえ、お世辞ではありませんよ。透華様にお呼ばれするだけはあると思えました」

「褒めすぎだ」

屋敷の長く広い廊下を歩きながらハギヨシの言葉を聞く。いやこいつ、さすが執事というか随分と相手を褒めるのが上手だ。お世辞過ぎるが、嫌味な感じも、露骨な感じもしないので、例えそれがお世辞でも悪い気はしない。冗談が上手い奴だが、人から好かれたりする

奴ってこういうお茶目なところがあるんだよな。くそっ、やっぱり性格までイケメンなのか……？ まあ真のイケメンって普通に良い奴も多かったりするから困るんだよな……責めるところがなくてブサメンからすると劣等感半端ないっていうか、少しくらいなんか嫌なところがあつてくれ、つて思つてしまう。まあ、俺がブサメンとか言うところの中のモテない男性の方々に失礼なので、謙虚は程々にするけどな。俺は容姿だけで言うなら割と見れる容姿。ほんのりイケメンである——あつ、イケメンの悪いところ思いついたわ。このハギヨシみたいなガチのイケメンって、イケメンだよねって言うのと、そうでもないって遠慮してくる奴がいるけど、そういうところは悪いところだと思う。絶対そんな訳ないしな。見るからにイケメンなんだから自分でも分かつてるはずだし。謙虚も過ぎると嫌味に聞こえるやつ。俺だって自分がそこそこのイケメンであることは分かつてるしな……そこそこ止まりでオカルト無しだと全然モテない上にクズだからアレだけでも。オカルト無しでもモテまくるイケメン共、マジで羨ましい。

「東郷様も元プロですし、やはり幼少の時から麻雀を打つたり、もしくは何か特別な事をしていたりするのです？」

「……いや、特には何もやってないけどな。麻雀を始めたのは確か小3の冬くらいだったし、別に物心ついた時から麻雀を打つてたつて訳でもねえよ」

「……そうですか。でしたら、相当努力されたんでしょうね」

「努力はそこそこだから才能がちよつとあつただけだろうな。プロ、クビになつてるし」

「なるほど。東郷様は自分のことをそう評価しているんですね」

「いや、評価っていうか……純粹に思つてることを言っただけだけだな。言つてしまったとも言うべきか。」

まあ俺の麻雀への熱は中途半端になつていったし、高校の時にはもう努力なんて殆どしていない。そういう意味では俺には才能か……もしくは、それまでに積み重ねてきた経験と知識があつたからプロになれた。

そしてプロになって少し努力を再開したが……やっぱり駄目で、俺は結局墮落した。

そして今では女の子を墮としてエロいことをするために活動して……うん、やっぱりクズだな。なーんでこんなクズがお呼ばれしてるんですかねえ……こう言うのもなんだが、皆見る目がないのでは？

まあそうは言っても人が人を見抜くのは難しいからしょうがない。人を見抜く目を持つてると自称する世の人事職やお偉いさんも、ぶっちゃけ見抜けてるかって言うとなんも見抜けてない。自分が気に入った人間を良い奴だと適当に言ってるだけだし。マジで人の本性を見抜ける人間はほんの一握り。それこそ——

「——着きました。それでは東郷様、先にお進みください」

「ああ……って、ハギヨシ……で良いか？　ハギヨシはもう行くのか？」

「いえ、私は後ろから。お付き致しますので、東郷様はどうぞお先に」
そんなこんなで部屋に着いた俺はハギヨシに先に進むことを勧められるが……なんかこういうのって普通、執事が扉を開けてくれるものじゃないのかとちよつと不思議に思う。

まあそこまでおかしなことじゃないが、なんかハギヨシから視線も感じるし……いや、まさかとは思うが……俺の後ろを狙ってるのか？　それなら確かに——って、待て待て。さすがにそれはない。ないと思う。ないと思わせてくれ。俺にそういうケはない。俺はノーマルなんだ。

「……如何なさいましたか？」

「……ああ、いや、なんでもない」

扉の前で立ち止まって頭を抱えていると、背後からハギヨシの疑問視する声が届き、なんでもないと扉に手を掛ける。うん、何もなし。ちよつと気にしないようにしよう。これから仕事だし。一応元プロとしてちゃんとしようと、俺は扉を開けて、

「——ようこそいらっしやいましたわねっ!!」

「……………」

「わたくしが龍門^{りゅうもん}^{びんぐら}透華！ 龍門^{りゅうもん}^{びんぐら}高校麻雀部部長にして、あなたの雇い主ですわ!!」

えっ、なんかテンプレお嬢様が出てきた……テンプレ執事にはテンプレお嬢様ってか？ お約束過ぎて呆然としてしまう。

バンツ、ともし漫画なら見開きで効果音が背景に付くような勢いでその龍門^{りゅうもん}透華という……まあ美少女ではあるか、その美少女は自信満々といった様子で名乗りを上げた。

金髪の、少しウエーブのかかったロングヘア。それでアホ毛でツリ目気味で強気そうなお嬢様か……なんかアレだな。そういうの好きな奴がいたらどストライクそうというか、お嬢様属性をこれでもかと盛り込んだ奴である。

まあ胸がないので俺としては普通。いや、美少女なので悪くはないが、やっぱおっぱいが欲しいんだおっぱい……変な語尾つけるな。でもお嬢様とかそういうキャラって特徴的だったり変な口調、語尾つかうよね。全く、変な語尾でキャラ付けとかやめて欲しいザウルス。

「……東郷仁。元プロです。依頼して頂いてありがとうございます。態々倍以上の報酬まで頂いて——」

「遠回しな美辞麗句やよいしよは結構ですわ！ 敬語も使わないで結構！ あなたに求めるのは麻雀。それ以外にありませんわ！」

と、またしても勢いよく言われてしまう。まあ確かに、金持ちでお嬢様ならそういうやり取りというか、ごますりとかお世辞は嫌いかもしれない。まあ一応指導として来ている訳だし、そういうことなら——と、普段どおりの口調で喋ろうとしたが、

「……それに、褒めるならもつと直接的に褒めてくださいまし！ 美しいとか凄いとが目立ってるとか！」

「そういう問題なのか……」

続いてそう言われて、げんなりとツツコミを入れてしまう。ああ、うん。やっぱりなんか変な子だわ……最近変に自信過剰だったり、キャラが濃い奴と会うことが多い気がする——池田アツ！ お前のことだからなあっ!!

いやでも実際、麻雀やってる奴って変な奴多かったりするし、高校

での有名選手やプロとかヤベー奴だらけなので慣れてもいる。お嬢様キヤラくらいならまあ……よくいる……こともないが、キヤラ的には薄い方の筈だ。多分。ということとで気を取り直してその部屋の面々を見てみると、

「へえ、今度はプロか。つて、目の下のクマ凄いな、おい……」

「うわあ……確かに、あれはヤバいな……ちやんと寝てるのかな……？」

「……調べたけど、どうやら不眠症気味らしい……」

広々とした部屋。自動卓が1つ置かれたその部屋のソファには、3人の少女が座っていた。

1人は長身。男……ではないか。男っぽいが、女だ。長身でボーイッシュというよりかは、マニッシュな少女。余裕で俺より身長高いのは何とも言えないな……うん、容姿が醜い訳ではないが、無しだ。というかイケメンに見える。

そして次の1人は……頬に、なんだ、タトゥー……か？ 星型のタトゥーを付けた可愛い黒髪の少女だ。短めのポニーテールで……何故か手錠を両手に付けてる。ええ、なにそれ……もしかしてそういう趣味の子なの？ ……ちよつとエロいな……うーん、有りっちゃ有りだ。胸はないけど華奢で可愛いし。

そして次は黒髪ロングで眼鏡。パソコンを手に持ったインドア系の……ん……？ んんっ？ これは……どうだ？ おもちの気配がする。身体の線が出ない緩い服を身に着けてるので分かりにくい……隠れ巨乳か？ 可能性としてはあり得る。そうでなくともこの面子の中では大きい方だろうし……有りだな。

「はいはい！ 座ってないで自己紹介ですわ！ 一応、使えるかは分かりませんがお客様ですよ！」

「引つかかる言い方だな……」

俺が内心で品定めという名の評価を下していると、龍門洩透華が手をパンパンと叩いてその場の面々に自己紹介を促した。すると全員が立ち上がり、俺の前に並ぶ。そして透華が、

「ここにいるのが龍門洩高校麻雀部のメンバー！ 1人いませんが、

そちらは後で紹介致しますわ！」

「オレは井上純だ。一応このメイド1号」

「ボクは国広一。えっと、純くんの言い方だとメイド3号かな？ 2

号はともぎーだしね」

「メイド2号の沢村智紀……よろしく」

「よろしく……って、全員メイドなのか？」

「全員、龍門瀏家で雇っているメイドになりますわね。全員同学年で団体戦のメンバーですわ」

「マジかよ……」

中々に特殊な環境だな……って、ん？ 麻雀部のメンバーって、

「というか、麻雀部ってこれだけなのか？ ここにいる4人と、あの天江衣だけ？ 長野県代表校だつてのに随分少ないな」

「あら、衣はさすがにご存知ですね。ええ、以前の龍門瀏高校の麻雀部は去年、わたくし達が殴り込みをかけたところ、全員退部してしまつたので、今はわたくし達だけですわ——って、衣は知っていてわたくしは知りませんの!？」

「透華が時間差でショック受けてる……」

「ははは、懐かしいよな。透華がいきなり、殴り込みですわ！ っていうきなり物騒なことを言うから驚いたもんだ」

「まさか暴力に訴えかけるとは思わなかった……」

「じ、実際に殴り込んだ訳ではありませんわ！ 道場破りのようなものですよ！ 以前の麻雀部は旧態依然としていて、進歩もなく、見ていられない有様でしたので、看板を乗っ取ったままですわ！」

いや、それでも中々ヤバいけどな……うん、しかしそうか。やはり特殊というか、龍門瀏高校は他の高校とは全然違う環境にあるみたいだな。

メンバーというか部員も5人だけ。去年の代表校ではあるが、強豪校と言うよりは、突然現れた台風の目。去年のダークホースだ。昨年は全員1年だったのに、長野屈指の強豪校である風越女子を下して全国に名を轟かせた。まあ良い感じのドラマがありそうな高校。テレビとか雑誌記者とかが好きそうだな、こういうの。

というか、部員は少なく、この4人が打ってる姿をまだ直接見ては
いないものの、確かな風格のようなものを感じるし、少数精鋭という
言葉が似合うチームだ。……いやなんか、風越が可哀想になるな……
風越は美穂子と池田以外はこの面子に敵いそうにないのがなんとも
……一応指導はしてやったが、今年の県予選もかなりキツそうだよ
な。

「天江衣は欠席で……ん？　　というか、そういう事情ならここが部室
にでもなるのか？」

「そうなるな。いやだって、俺達ここに住み込みで働いてるし、部室を
使うよりこっちでやった方が便利で快適なんだよな」

「だねえ……学校だとちよつと他の人の視線が気になるし……」

「それに、いつでも引き籠もれる……」

「ふふん。屋敷に部室以上の設備を作るくらい、わたくしからすれば
朝飯前ですわー！」

「まあ、たった5人だからそんな豪華な設備はいらないんだけどね」

「おかしとか飲み物とか幾らでも出てくるのが重要だよな」

「椅子が気持ちいいのと、通信速度が快適……」

「ですわっ!？」

「……なんかノリが良い部活だな……」

「東郷様も、必要な物があればいつでもお申し付け下さいませ。滞在
中、東郷様のお世話は私が担当致しますので」

　　ああ、そうか。滞在中は——ん？　　というかまさか。

「……俺、ここに泊まるのか？」

「そうなります」

「あら？　　メールに書いた筈ですが……泊まる場所はこちらでご用
意すると……」

「透華。多分、東郷さんはホテルか何かを用意してくれると思ってた
んじゃないかな？」

「まあ、普通はそうだよなあ……まさか屋敷に直接泊まらせる。泊ま
れるような屋敷だとは思わないだろうし」

「ここは客室も沢山あるし、そこらのホテルより快適……」

「……なるほどな」

皆が補足というか説明をしてくれて、俺は合点がいく。そうか、お金持ちだということのを失念していた。いや、気づいていたが、お金持ちの意識の差というものを忘れていたと言うべきか……。

ガチの金持ちってというのはやることこのスケールが違うというか、これだけの屋敷を持つてるなら客を泊まらせるくらい訳ないということだ。いや、太っ腹だな……井上、国広、沢村が言うように、普通のホテルより快適だろうし、意外と滞在中は良い生活を送れるのかもしれない。

それに、なんだかこの面々は空気が緩いというか、ノリが良いな。風越なんかの強豪校だと、割とピリピリしてたりするもんだが、ここは皆リラックスしてる感じがする。まあ勿論、練習となれば真面目に真剣にやるのだろうが、普段は気を抜いて、快適な空間で寛ぐというか……なんかプロチームとかに似てるな。海外とかのチーム。後は、親会社が金持ちの一部のチームだとかこういう環境も多いと聞く。

どちらが良いかは俺には分からないが……ある意味理に適ってるというか、新興の強豪チームらしいか。風越のような伝統もいいが、こちらが悪くはない。個人的にはこちらが羨ましい。慣れているのは風越みたいなどころだけでも。

今のところ、不安要素は皆無だな。まあ墮とす相手が……まだなんとも言えないのがちよつと俺的に思うところはあるが、不安要素ではない。あるとすれば――

「……それじゃ、早速打つか？ それとも――もう一人に会わせてくれるのか？」

「そうですね……ハギヨシ、衣は？」

「今は別館に戻っておりますが、お連れ致しますでしょうか？」

「……ふむ。でしたら先に練習を済ませましょう。夜になったらもう一度練習として……衣に会わせてますわ」

「畏まりました。ではそのように伝えておきます」

失礼します、と言ってハギヨシはその場から消えた。うん、いや、なんだだろうな……執事ってそういう素早い動きみたいなのはデフォな

んだろうか。執事は特殊な訓練でも受けないとやってられないのか。恐ろしい世界だ。

「よし、それじゃあ先に打つか！　まずは俺が入るけど、いいよな？」
「別にいいけど、どうする？　透華は後にする？　最初は純くんとかボクにともきーでいいかな？」

「真打ちは後から登場するのですわ！　というわけで東郷さん、席に着いてくださいましー！」

「おお……うん、よろしくな」

「今、明らかに透華へのツツコミの言葉を飲み込んだね……まあそれはともかく、よろしくお願いします」

「よろしくな。元プロの実力、見せて貰うぜ」

「……よろしく」

「ああ、まあお手柔らかにな」

と——そんなこんなで龍門瀏高校……龍門瀏家での麻雀指導が始まった。俺は席に座り、一応、最初くらいは真面目に、やる気を出すかと思つて……、

「——と、失礼します。言い忘れていましたが、お飲み物は何に致しますか？」

「あ、ハギヨシさん。俺、コーラで」

「ボクはオレンジジュース」

「アイスティー……」

「わたくしは紅茶をいただきますわ」

「はい、畏まりました。東郷様もお好きなものをどうぞ」

「えっ……じゃあグレープフルーツジュース」

「承りました。では、しばしお待ち下さい」

シユンツ、と再びハギヨシが室内から消える。……まあ、ノーコメントだ。とりあえず、ここに来て最初の感想は——ハギヨシはヤバい、ということである。

月の支配者

「——ツモ。1200、2300」

「あつ」

「ちえつ、オレ達の負けか」

「……………」

龍門渕高校麻雀部との最初の対局。オーラスを俺のツモで終えると、順位は俺がトップだった。

なんとか元プロとしての面目を保てたか、と内心で安堵する。……正直、中々やる連中だったのでちよつと怖かったが、まーなんかなった。

「ふむ、一応、元プロとして一定の実力はあるようですね」

「うん。……デジタル寄りの打ち方というか、ちよつとだけ、透華に似てるね」

「いや、それだけじゃなくて流れを見てる感じもしたぜ？ どうなんだ、そこるところ」

「……プロの打ち方」

その場の面々が俺に対する評価を口にするが、褒められてんのか微妙なところだな……悪くはないってところか？ 別に褒められたからどうってものないが……。

「別に普通に打ってるだけだ。麻雀には牌効率などのデジタル打ちも欠かせないが、それだけじゃない。それ以外の要素だって存在する。それを考慮して打つのが……一応、俺の打ち方だ」

と、俺は一応それっぽいことを語ってみせる。別に打ち方に信念も何もないんだけどな。強いて言うなら今は役満狙いの打ち方だけど、今回はチャンスは無かったし。なので勝つたことを良いことにプロとしての威厳を演出してみたのだが、

「へえ、やっぱプロにもなると凄いなね……」

「まあ普通に腕はあったな。——地味だけど」

「普通の打ち方だけ強い……」

「確かに地味ですが、麻雀の強さというのはそういう細かい基礎の部

分も大事ですわ。ええ、地味ですけども」

「……………俺、ひよつとして馬鹿にされてるのか？」

「と、透華流の褒め言葉だよ」

「なら目を逸らすなよ」

「あ、あはは……………」

国広が俺に対しての気遣いというか、皆のフォローをするも、目を逸らして苦笑いをしたので、多分国広も同じように思った可能性が高い。ちくしょう、終いには帰るぞこの野郎……………しかし金払いはいいから帰りたくねえな。うん、しばらくはいよう。金には弱い。大人の悲しい性だ。

「ということで、次はわたくしが入りますわ！」

「なにがということなのか分からないが、好きにしたらいい……………後の面子は？」

「それじゃあオレはもっかいやらせて貰うぜ」

「んー、ボクはどっちでも……………ともきー、どうする？」

「……………私が一度抜ける」

「わかった。それじゃあボクがもう一度入るね」

と、沢村と交代して龍門洩が席に着く。どうでもいいが、龍門洩って呼ぶと紛らわしくなりそうだな……………他の龍門洩も居そうだし、内心では透華って呼んでやろう。中々に生意気だし。

まあ自信過剰と言うべきか。しかし実力的には龍門洩のNo. 2ということ、あまり甘く見ない方が良い筈だ。

「さあ……………元プロの力、見せて貰いますわっ！」

「……………いいから黙って打てよ……………」

「透華は目立ちたがりだからなあ。公式戦ならともかく、こういう時に黙るのは無理だ」

「透華だからねえ……………」

「当・然！ 目立ってなんぼですよっ！」

なんぼて。お嬢様なのに関西弁が混ざって変な口調に聞こえるが……………まあ、嫌いじゃないのでよしとしよう。

それよか、この目立ちたがりの性格はどうにもプロ向きだな。麻雀

の方も……なんというか、似てると言われるだけはある。かなりのデジタル雀士だ。

この場の面子だと、堅実に強い国広。流れを重視した打ち方をする井上というが、その中でも龍門瀏透華はデジタルもデジタルだが、どちらかと言うと攻めっ気が強いデジタルという感じだ。

実際に打って、その打ち方を見ても特に言うことが無いレベル。引く時は引く。だが、押せる時は押していく。

「リーチですわっ!」

「! ポン」

龍門瀏透華の親リー。その捨牌。立直宣言牌を鳴いて一発消しをする、手番が回っていく。

……まあ、こういう勢いがあつて前向きな雀士には牌が応える……とはよく言うものだ。仮に一発を消してツモ巡をズラしても――

「いらっしやいまし! —— ツモ! 2600オールですわ!」

「……ほら」

「つて、無反応ですよ!?! もつと悔しがつたらどうです!?!」

「いやなんでだよ……まだ一回上がっただけで……」

……ただなんだ。デジタルかと思つたが、それだけでもないか。

目立ちたがりな所為なのか、どうもデジタルを逸脱してノリに合わせるような部分が透華にはある。立直しなくてもいい場面で立直したりとかな。初心者なら聴牌即リーなんて珍しくもないが、上級者ならその状況によってダメに取ったり、高めを狙って手を組み替えたりするなんて普通の事だ。

言つた通り状況にも寄るが、例えばネットだと闇聴が多い気がする。まあ立直つてのは相手に警戒されるからロンする確率も低くなるし、ツモ切りしか出来なくなるつてもデメリットだからな。雀士によつては全く立直しない奴もいるくらいだ。

まあ俺もどつちかつていうと防御寄りだからな……とはいえ、役満狙いともなるとそうもいかないのだが……中々良い手牌が来ない。今回も無難に対局を終わらせるしか無さそうだな。

「わたくしが1位ですわ!」

「あー、また勝てなかったか」

「純君はまだ良いよ。ボクなんて最下位だし……」

というわけで対局が終わって、順位は透華が1位で俺が2位。井上が3位で国広が4位だった。

まあ、地味に負けたがそういうこともある。元プロとはいえ、常に1位を取れるような雀士ではないからな。

「……………」

「……………なんだ？」

だというのに、この雇い主のお嬢様は俺をじーつと訝しむように見つめていた。

なんだ？　　と思い、口に出したのも束の間、透華は立ち上がり、俺に向かってビシッと指を突きつけると、

「やはりあなたは……ヤクマルですわねっ!!」

「っー」

……………は？　えっ？　ん？　いや、なんで気づかれた？　なんでバレた？

まさかの言い当てられ、俺は声に出ない驚きを見せてしまう。いや別にバレたからどうってこともないのだが、一応、

「……………どうしてそう思ったんだ？」

「ふっ、実はわたくし、前々からあなたの打ち方とネット雀士、ヤクマルの打ち方が似てると感じていましたの!」

「あー、いつもの牌譜研究とかでか。好きだよなあ、透華はそういうの」

「ネット麻雀の強豪とかの牌譜は大体チェックしてるもんね」

そういうことか。こいつ、デジタル打ちの中でもデータとか集めて研究するタイプか。珍しい方という訳でもない。俺も一時期やっていたことがある。強い奴の牌譜は見るだけで勉強になるからな。自分の打ち方と違うところを研究、考察するだけでも腕は上がる。

この龍門瀏透華はそういうことで、俺のネットでの名前を見破ったのだろう。……………にしても、そんな核心に迫るほど特徴的な打ち方をしてはいないはずだが……………。

「プロとしてのあなたとヤクマルには、放銃率が異常に低いという共通点がありますわ！」

「！」

「そうなの？」

「はい。かなりの防御寄りの打ち手で、調べたところ、意図的なものを除けばほぼ振り込んだことのない……躲すのが異常に上手い打ち手……！　ただ、プロだと攻めることが殆どないせいで、稼ぎ負けて成績を残せないようですが、防御率だけなら二軍プロどころか一軍での数字に引けを取りません」

「へえ、なのにクビになったんだな」

「うっ……」

「ちよ、ちよつと純くん。言葉に気をつけようよ」

「あ……悪い」

いやほんとだよ……くそつ、この男勝りの井上め……今のは中々効いたぞ……かなりグサツときた。微妙に褒められてから落とされるのは効く。直ぐ謝る辺り悪気はない正直に思ったことを口にしただけなんだろうが、それでも効くものは効く。というか、その話は止めて欲しいんだがな……透華の方が止める気配がないというか。

「純の言う通り、確かにその部分は解せませんが……まあ、何か事情があったのでしよう。——しかし！　これで確信しましたわ！」

あなたは麻雀への理解も色々な意味で深いようすし、こうして雇ったことに間違いはないと！」

「……まあ、評価してくれるのは有り難いが……色々な意味でつてどういう……」

「ふふん、わたくしには分かっていますのよ？　あなたは、デジタル一辺倒の雀士ではない。デジタルはデジタルでも……他者の特殊な力を考慮して打つ雀士だと言うことを」

「……プロなら当然の事だ」

こいつが言っている意味は分かる。特殊な力——つまり、オカルトのことだ。

オカルトを考慮して打つデジタル雀士というのは、意外にも少な

い。そもそもプロや一部、強豪校の学生でオカルトをある物として捉える奴らだけが、それらを考慮した打ち回しを行う。

オカルトとて傾向や条件があるのだから対策は出来るし、対策をしなければ好き放題されるだけだ。……対策しても意味のないオカルトとかもあるけどな。そもそも支配系のオカルトとかだとあんまり意味ないというか、マジでボコボコにされたりするし。

しかし透華がこう言うということは、龍門渕の連中は皆、一応それらのことを知っているらしい。

そしてその理由はやはり、この場にはいない最後の1人が担っているのだろう。

「麻雀の実力は最低限持ち合わせていて、オカルトに理解が無ければ練習相手になることも難しいのですが……それらがクリア出来ているのであればもう勿体ぶる必要はないですわね」

「って、透華!? まさかもう——」

「あ、あー……まさか、もう行くのか?」

「……立ち上がったってことは……」

国広を初め、井上、沢村と、透華の言葉と行動にこれからの流れを察する。俺の方も、なんとなく分かった。テストは終わり、これからが本番なのだ。

透華は言う。部室代わりに使っている練習部屋の扉を控えていたハギヨシに開けさせ、外へと誘いながら、

「——衣と合流しますわよ。さあ、行きましょう」

龍門渕の屋敷は広い。山の中に建てたその邸宅は何百坪あるのか。とにかく広い。

周りに他の家が見えない辺りヤバいと思う。俺もこんな家に——いや、別に住みたいかって言うともないか……広い屋敷くらいならまあいいが、ここまで広いと逆に不便そうだ。もうちよつとくらい狭くてもいい。

移動にも時間が掛かることだしな——というわけで、俺は透華や龍門淵の面々と一緒に数分程歩いたところで、何故か外に出た。するとそこに見える建物を差して透華が、

「あそこですわ」

「あれは……」

「龍門淵の敷地内に建てられた別館。あそこに、わたくしの親戚である衣が住んでいますの」

「親戚……親戚と一緒に住んでるのか」

「ええ、まあ。色々ありまして、衣は両親がいないので家で暮らしてますの」

ほーん。いやまあ、それを聞かされても俺は何とも思わないけどな。同情することもない。なんでかって言うと、そういう他人から見れば不幸っぽい境遇も、本人からすれば大したことないと思っていたり、そこまで気にしてなかったりすることもあるからだ。何とも思っていないのに、気を使われる方が気になる奴だって当然いる。

まあだからといって全く気を使わないのも地雷を踏む可能性があるるので、特に何も言わない。触れない。どっちにしろ俺には関係のないことだ。踏み込むこともない。

ただほんの少し気になったのが、

「……態々別邸なんだな」

「ええ、おかしいですわよね。わたくしのお父様の所為ですわ。お父様は衣を相当に怖がってますので。大の大人がちゃんちゃらおかしいと、大爆笑してもいいですわよ？」

「なんで大爆笑……？」

「それ、昔ボクも言われたなあ……」

国広が少し懐かしむような声色で言う。うん、なんだろう。透華の父親が天江衣を怖がってる理由は分かるような分からないようになって感じたが、透華がおかしいことは分かる。このお嬢様、やつぱりちよつと変な言葉使いたがるよな……。

そんなことを思っていると、後ろの井上が、

「でも麻雀に関しては明らかにヤバいからな。恐れるのもしようがな

いというか……」

「……衣は特別」

「今はもうじき夕方つてところだからマシだけど、夜はちよつとヤバいよね……」

「麻雀に関して言えば、怖がる思いも理解出来ますわ。衣と打った相手は皆多かれ少なかれそうなりますから。一なんて、頬に貼ってた月模様のタトゥーを星に変えるくらいは怖がってますし」

「そ、その話は止めてよ。もう、透華のいじわるっ」

深刻なのかそうじゃないのか。もつとも、この場にいる面々は軽口を叩けるくらいにはその天江衣に対する耐性が出来ているらしい。

麻雀に関して怖いというのも確かな様だけどな。確かに、ここからでもちよつとヤバい気配を感じるし……これはマジで魔物か。魔物つてヤバいもんなあ……魔物と打ってしまった為に麻雀辞めてしまふ奴なんて掃いて捨てるほどいる。そうじゃなくても酷いシヨツクを受けるものだ。

そして俺は今からその魔物と打つんだよな……うん、帰っていいかな、やっぱり。

なんというか、ここに来て報酬が高かった理由に納得が行く。天江衣の異常さを理解しているからこそその金額の高さという訳か。

俺は内心でちよつと悩んだが、もう別館の眼の前。透華が扉を開けたことで、もう俺はそこから逃げられないことを悟つたため息を吐いた。はいはい、魔物特有の気配気配。うんざりするやつだ。

「衣！ 今日元プロを連れて来ましたわ！」

透華の声が室内に響く。すると、その奥。闇の中から月のような僅かな明かりが差し込み、同時に幼い声が聞こえた。

「ほう、今度は彼方者あっちものでも連れてきたか？」

「……お前が、あの天江衣か……」

室内にある麻雀卓。そこに座っていたのは、幼い子供だった。

身長は130にも満たない子供——に見えるが、彼女はこれでも高校2年生であり、麻雀の実力で言えば全国の高校生でトップ10には必ず入るレベル。

長くてサラサラの金髪を持ち、頭にまるで兎のように枝分かれした赤いリボンを身に着けた美少女は、俺を見て不遜な笑みを見せ、古風な難しい言葉で話しかける。

「如何にも。……だが、けつぼう 闕望した。物故者ぶつこしやと言えど、その程度では衣の相手には不足」

「……いやまあお前の親戚に呼ばれたからな。悪いが相手してくれ」

「ふ、衣の漁火いさりびに手繰られたか。是非も無し。ならば無聊を慰める一助としよう」

「……え、なに言ってるのこいつ。言ってる意味が半分くらい？ なんとなくでしか理解出来ないんだけど？」

あれかな、難しい言葉を使って大人っぽく見せてるとかそういう感じか？ もしくは……、

「なんか難しい言葉ばつか使って訳分からんが、中二病なのか？ そういうのは早く卒業しといた方がいいぞ」

「ちよ、ちゆうに病!? 衣は中二病じゃないっ!」

お、ようやくなんか分相應な感じになった。やっぱり中二病なのかな？

まあそういう時期って誰しもあるし、俺は気にしない。うん、ちよつと恥ずかしい奴だなとは思うけど、大人として生暖かく見守ってやろう。一応注意する感じで、

「まあ、難解な言葉だと格好良く見えたり大人っぽく見えるもんな。だがまあ、相手が分からない言葉を使ってドヤ顔決めるのは恥ずかしいから止めておいた方が良い。——というわけで、元プロの東郷仁だ。よろしくな」

「……ふ、ふんっ。元プロなんて三流雀士では衣の言葉を理解出来ないか。正に三流に相應しいおめでたい脳みそ。片腹大激痛」

「はいはい。片腹大激痛片腹大激痛。難解な言葉で大人っぽく見せたいんだよな？ でも本当に大人なら相手が理解出来るように言葉を使うもんだ」

「な、生暖かい眼で諭すな——っ! 衣の言葉を理解出来ないのはお前がアホなだけだこのアホ雀士っ!」

「はいはい、俺がアホなんだよなー？ それは良いから早く打つぞ」
「ぐ、うぐぐぐぐつ……このつ……ボコボコにしてやるっ！」

おっと、微妙に機嫌を損ねたみたいだ。

だがまあ、子供っぽいしそういうこともあるだろう、うん。まあ直ぐに機嫌は直るだろう。後で土産のお菓子でもくれてやるか。

「……どうやら打ち解けたみたいですね。いい傾向ですし、早速始めますわ」

「打ち解けてないっ！ こんな奴嫌いだっ！」

「子供はそんなに嫌いじゃないからな。プロとしての仕事で子供に良く麻雀を教えてたし」

「子供じゃない！ 衣だっ！ くっ……ふんっ、そんなことを言われるのも今のうちだけだゴミ雀士。衣の力に怯え、己の迂闊を呪うが良い……！」

その瞬間、天江衣から何かが発せられた気がした。井上や国広といった面々が僅かに顔色を変える。……なるほど、麻雀の実力は大人顔負けだな、これは。

「ではわたくしと、後一人は……智紀！ 入りなさい」
「えっ」

「……まあ、さつき一人外れてたもんな」

「災難だねともきー……頑張つて」

「……善処する……」

俺と衣、透華に、最後の一人は沢村が入るらしい。うん、確かにこの衣の相手はキツそうだな……分かる分かる。ついでに俺とも誰か交代しないかな……いや無理か。

というわけで麻雀の時間だ。しかも相手は魔物。去年のインターハイで全国にその名を轟かせた魔物、天江衣。

こうして席に座って対峙してみると……まあ、圧が凄い。紛れもない魔物級の圧。同席した雀士だけでなく、周囲のある程度オカルトを察知出来る雀士を震え上がらせるだけの力がそこにはある。

こういう奴はさつきとプロに行け、と思う。なんというか、これと同年代の面々が可哀想というか、池田は去年、これと戦ったんだよな

……そりゃ負けるわ。プロ相手でもどうにか出来そうな奴だもん、これ。

その証拠に、対局が始まって直ぐに異変は起きる。正確には一局目が少し進んで、

……手が進まない。

配牌から一向聴。直ぐに聴牌というところまで来て、全く手が進まないのだ。

まあ麻雀だとちよいちよいあることではあるが……他の面々も険しい顔をしているところを見ると、衣以外の他家は皆、俺と似たようなことになってる可能性がある。

鳴けないし、和了れない。というか、聴牌すら出来ない。なるほど、これが魔物の力か。

「やはりな。力が充盈でない衣を相手にしてこの程度……懦弱な。これで衣の相手をしようと息巻いて来たのか」

ふっ、と不敵な笑みを浮かべる。その目に炎が宿ったような気がした。

そして流局が近くなると、衣の力が急激に増す。山から最後に引くのは衣。それを引いて捨てて、流局ではあるのだが、流局にはならない。

衣はそれを確信を持って引くと、そのまま牌を見ること無く表にして卓に打ち付けると、

「はいていらおゆえ海底撈月」

「！」

最後の牌で和了ると、役が付く。

中々見ることの出来ないその役の名前こそが、海底撈月。

海底牌……最後の牌を引いて和了ることで成立する役は、その性質上、和了ることが非常に難しい役だ。

しかし、この天江衣はそれを可能とする。

海底牌を引く相手を自分にして、その牌を自分の和了り牌にする。更には、他家を水底に引きずり込むかのように、聴牌すらさせない。

明らかに支配系のオカルト。卓を、牌が積もった山を支配する厄介

な力だ。

「絶念したか？ お前には和了らせない。心が拉ぎ折れるまで、存分に戯れてやる……！」

「……そうか」

なるほど。これは怯える訳だ、と俺は納得する。こんなのを続けられれば心は折れるだろうしな。

しかもこれで全力ではないと言う。さっきちらつと聞いたが、夕方はマシで、夜はヤバいと言うからには、夜が更けるほどに力が増すのかもしれない。こうなると月も関係してくるか？ 海底摸月って月の字も入ってるし。オカルト持ちってこういう関連付けが重要というか、そのまま特徴が正解に繋がっていたりするし、あながち間違っていないだろうと俺は予想する。

その後、しばらく打ち続けるが――

「ツモ――海底摸月」

「海底摸月」

「海底摸月」

「ロン！ 18000！」

わー、一瞬で飛ばされたー……うっわというかこいつ、明らかに俺を狙ってきやがったし……そんなにさっきのが気に障ったか？ やはりお菓子で手加減して貰うか。

ぶっちゃけ支配系オカルト相手に出来ることは少ない。こちらに對抗出来るオカルトがない以上、精々鳴いてズラしてみたりとかくらいだが、それでようやく聴牌したらそれで和了られるとかいうやつな。

さつき異様に放銃率が少ないとかで褒められた直後に放銃する辺り、俺ってやつぱは持ってない。しかしこれで、天江衣からはさつきと見限られたか――

「……っ！ お前！ 何故衣に恐怖しないっ!？」

「……は？」

と思っただけなら急に衣が俺に向かって櫂を飛ばした。え、なに？ 急に……恐怖しないって言われても……。

「……いや、怖いけどな……お前の強さ、その特異性は」

「どうかしましたの衣？ 東郷さんが恐怖してないというの……こう言っただけなんですけど、にわかには信じられません……」

「いや、衣には分かる!! 貴様、何故恐怖しない!? どんな絡繰だ!」
「絡繰って……まあ、衣に恐怖しないって聞いたら種や仕掛けを疑いたくなるのも分かるけどね……」

衣が俺に向かってなおも問い詰めてくる。……まあ、その様子は怖くはないが、対局の時の衣は普通に怖かったし止めたかったんだけど。何を勘違いしてるのか……。

「……別に絡繰なんてない」

「空言を！ お前のような鼠輩そはいが、衣に恐怖しないなどあり得るかっ！」

「いやだから恐怖してるっての……」

しかし衣は聞く耳持たないと言った様子で納得してくれない。……仕方ない。まあ一応、そう見えない理由を話すか。

「……反応しにくいのは、俺がお前みたいなヤバイ打ち手との対局に慣れてるからな。多少は耐性があるというか、怯えてないように見えるだけで、心の中は恐怖でいっぱいだよ」

「……解せん。奇々怪々……東郷と言ったか。お前、本当に死者ではないのか？ 根堅洲国から来た彼方物じゃないのか……？ 衣に恐怖しないとは、まるで——」

「死んでねえよ。クマが酷いからってきつきから死人扱いするな。怖いのは怖いけど、それが表に出にくいってだけだ」

「……そう、か……」

衣はまだ納得しきってはいないようだったが、一応頷いてはみせる。何かを考えているようだったが、ぶっちゃけ俺には何も無いんだから考えるだけ無駄だ。強いて言うなら、役満を和了れば相手を惚れさせるとかいう、怪しいオカルトがあるくらいだが、それは関係ないだろうし、いやほんと止めてほしい。

「納得したなら、俺は一回休憩させてもらうか。今のは結構心に来たからな」

「まあ衣相手だと体力を消費するのは確かだよな」

「ええ、構いませんわ。それじゃあ次は——」

「……いや、もう一度だ」

と、休憩しようと思ったたらまた衣が不穏な事を言い出す。意味は分かるがマジで言ってるのか？ 他の面々もちよつと驚いているが、

「いや、疲れたって言うてるだろ。後でまた打つから少しは待て。大人なら待てるだろ？ それとも待ちきれないほどに子供なのか？」

「衣はこどもじゃないっ！ ええいつ、調子が狂う……なら後でまた、衣の相手をしろっ！」

「期待には応えられないと思うが……まあ、どっちにしろ雇われて来てるから打つは打つけどな……はあ」

「えつと……よく分からないけど、衣に気に入られて、ご愁傷さま……？」

「……？ まあ、いいですわ。よく分かりませんが、練習を続けますわよ」

透華の一声で再び練習が、対局が始まる。やはり魔物と言えど、一応日々の練習は欠かさないというか、この面々は天江衣との対局には一応慣れているので問題ないのか。俺が休んでも練習は続く。

俺は少し後ろで一息付いて、その魔物の対局を眺めた。……まったく、何を思ったんだかな……。

団欒

日が沈み、夜の帳が下りる。

一般的には夕方5時から6時も過ぎれば子供はお家に帰って大人しくするのが普通だろう。小さい子なら遊び疲れておねむになるかもしれない。

だと言うのにだ。この子供は、

「——海底撈月」

——夜になればなるほど、その力が増している。

最初はまだ少しの隙があった。牌の支配は盤石ではなく、こちらも何度か聴牌し、和了ることだつて僅かだが存在した。

だが日が沈んで月が出てからの天江衣は、正に魔物の名に相応しい圧倒的な支配力を卓上に行き渡らせている。

「ふふ、どうした？ 淵底えんていに沈み、啾啾しゅうしゅうと泣き喚く声が聞こえるようだ。やはり衣は無謬むびゅう。お前も、衣の力に恐れをなし——」

「あー、怖い怖い。怖いなー。凄く怖くて腹が減ってきたし、ここらで休憩にしたいなー……ということ、どうだ？」

「むーっ！ 巫山戯るな〜っ！！ お前、なんで衣に恐怖しないんだ!？」

「いやだから恐怖してるって言ってるだろ。和了るところか聴牌すら出来ないとか超怖いつつーの。夜になればなるほど力も増してるしな。あー、こわっ」

「この昼行灯め……！ その程度で衣の炯眼を誤魔化せると思うなよっー！」

……しかしまあ、本人の力とは裏腹に、その容姿や振る舞いは別に怖くも何ともない。その顔で凄まれても……なあ？ むしろ可愛いまである。微笑ましいと言うべきか。子供が怒っているようにしか見えないしな。俺はポケットに手を入れながら、

「……ほう。よく気づいたな」

「……む？ やはり、何か奇怪な何かがある——」

俺はポケットから取り出した物を手に、怪訝な視線を向ける衣に差

し出すと、

「——ほら、お菓子だ。パ〇の実だ。甘くてサクサクで美味しいぞ」
「ぐ……また飄々と……ん、だが一応貰ってやろう……はむっ」

隠していたお菓子を衣に差し出すと、一瞬眉根を寄せたが、それはそれとして受け取って口にする。俺はお菓子を口に入れた衣に向かつて問う。

「どうだ？ 美味しいか？」

「うんっ！ 甘くてサクサクだ！」

「ははは！ やっぱガキじゃねえか！」

「なっ……貴様あ——っ！ また馬鹿にして……衣はこどもじやないっ！」

衣はからかうとそれだけ反応を示すので中々面白い。怖さなど皆無だ。

もつとも、その力は皆恐ろしいと思うだろうけどな。池田が天江衣の名前を出すだけでビビっていたが……ちよつと後で写真でも送ってやるか。飛び跳ねて喜びそうだし。ついでにボブ辺りにも。こっちはまた別の意味で喜びそうだ。

だがまあ、結構良い時間であることは確かだ。俺だけでなく、他の面子も軽く伸びをしていたり息を入れていたりする。結構打ったしな。それを見て透華も、

「そろそろ夕食の時間ですし、練習も切り上げることしましょう。」

——ハギヨシ」

「はい、透華お嬢様。本日は東郷様がいらっしやるとのこととで、シエフが腕によりをかけて夕食をぐ用意させて頂きました」

「ということですね」

「ああ、それは態々どうも……」

「ふん……こんな輩、歓待せずとも——」

「衣様の好きなハンバーグとエビフライもご用意してあります」

「！ ハギヨシ、絢爛豪華！ 今日はお祝いか!？」

好物まで子供っぽいな……言ったらまた怒りそうだし、そもそも俺もあまり人のことは言えないから言わないけど。子供の好きな食べ

物って普通に大人も好きだからな。子供があまり食べない物も好きだったりするっていうのが、いわゆる大人ってだけで。単純な好物の数の差が大人と子供の差だと思う。食べたことのある物だって大人と子供では生きてきた年数で差があるだろうし、それはしょうがない。

とはいえこの衣も、俺と4つしか歳変わらないんだよな……そう考えるとヤバい。全然そうは見えないって言うか……何を食べたたらこんな小さく入れるのか。やっぱり少食なんだろうな、と思う。

というかシェフが腕によりをかけてハンバーグとエビフライを作るって、逆に気になるというか、俺も食べたくなる。そもそも、なんだ。メニューは色々あるってことか？ ビュッフェスタイルとかだったりするのか、もしくは満漢全席みたいな感じなのか。屋敷的には前者が似合いそうだが。

「メニューとか聞いていいのか？ ……まあ、ハンバーグとかエビフライがあるくらいだから、多分洋食——」

「はい。本日は東郷様の好物である穴子を中心にした料理をお出しする予定です」

「まさかの和食!？」

ハギヨシから返答に俺は驚く。いや、ちよつと予想外。嬉しいけども。というか、なんで俺の好物知ってたんだよ。怖いな。……でもよく考えたら普通に載ってそうだな。俺、雑誌のインタビューとかの好きな食べ物でも答えた覚えあるし。結構前にだが、SNSやブログにも書いたことがあるような……うん、多分おかしくねーわ。検索したら普通に出てきそうだし、予め調べておいたんだろうな。ご苦労なことで。

しかし食べ合わせとか考えないんだろうか。それとも、衣だけ特別に別メニューとかか？ なんか満漢全席みたいに色々出してくるスタイルっぽいな……というか、型に嵌まらなそう。龍門洩家って金持ちだけどその一人娘の透華がこんなんだし、深く考えず好きな物全部出してしまえって感じかもしれない。形式とかどうでもいいって感じで。

「——というわけで、1名様食堂にご案内ですわ」

「というわけで、って時間じゃないけどな……屋敷広すぎだろ……」

そんなこんな考えながら屋敷の本館に戻り、食事用の食堂へ。移動に時間が掛かるし、食堂はめちゃくちや広いしでもう何とも言えない。お金持ちってヤバいわ。

そして何気に衣もついてきている。……いや、悪いとかそういうんじゃないで、さっきの説明を聞く限り、別館で軟禁でもされてるのかと思っただから、普通に来ているんだ……って、思っただけだ。そういうブラッくな事情でないことにホッとする反面、別に行き来が自由なら一々別館に住まわせる意味もないよなって思ってしまう。

そうして席に着き、俺は周囲を見回しながら口にする。

「……お前らっていつメイドの仕事するんだ……？」

「えっ……あ……いやほら、今日は……」

「きよ、今日はオフなんだよ。普段は働いてるから……平日の朝とか昼とか、練習が無い時とか……」

「今日は休日だから……」

「——平日の朝と昼は学校だろうが」

バツが悪そうに視線を反らしたメイド3人に即ツツコミを入れる。いや、それじゃあマジでいつ働いてるんだよ。こういう時こそ給仕はメイドの出番っぽいのに、それどころか普通に席に着いているのは何なんだ。

「金持ちの家って普通、メイドが主人の食事の席に同席したりしないよな……？」

「メイドである前に部員で友人で仲間なのですから同じ釜の飯を食うのは当然ですわ！」

「食堂もありえないくらい広いし……」

「？ 食堂は一応、狭い方を選んだのですが……」

「——マジかよ」

「マジだよ。こっちは私用というか、ボク達も同席する時用の小さい方で、大きい方はもつとちゃんとした……えっと、なんて言えば良いんだろう」

「ああ、アレだよな。有名なファンタジー映画みたいなの……なんだっけか……」

「……ホグーツみたいなの」

「ああっ、それだ!!」

「ええ……」

透華の相変わらず江戸っ子みtainな言葉選びとズレた回答に驚く中、国広や井上、沢村達の例えとやり取りに渋い顔をしてしまう。いや、分かる。分かるけどな……そうか、ホグーツ並か……そりゃ広い。って、それは広すぎだろ。家にあれくらいの大サイズの食堂があるとかドン引きだわ。いやまあアレ、天井とか馬鹿高かった気がするし、ここは普通に屋敷だから、あくまでもあんな感じってだけだと思っうけど……いや、ないよな? さすがにマジであんなのがあつたら引くんだが……うん、気になってくるから考えないようにしよう。

「しかし、夕食まで少し間がありそうだな……よし、衣。10文字以上、日本にはないもの、子供が好きなもの禁止でしりとりをしよう。まず俺からな——ンゴロンゴロ保全地域」

「ふっ、衣にしりとりを挑むとは無謀な——って、テーマが難解な上に最初から“ん”で来るのか!? ……いや、そもそも子供が好きなものの定義が曖昧で……」

「暇潰しなら一が面白いことを今からしますわ」

「え、ええ……なにその無茶振り……ボク、手品くらいしか出来ないんだけど」

「出来ることがあるだけ十分じゃねえか。名指しされるの、オレじゃなくて良かった……」

というわけで衣をからかって遊ぼうとすると、透華がいきなり無茶振りをする。名指しされた国広の前に出て、他の2人……井上に、沢村も首を縦にコクコクと振って安心しているが……ああ、なるほど。多分、透華専属のメイドとかだったたりするんだろうな。距離は近いが、他の仕事は他の使用人に任せてる感じがするし、あくまでも麻雀部としての活動や他の事を優先していたりするのだろう——と、勝手に納得しておく。

しかし、それにしても手品か……うーん……。

「あら、浮かない顔ですね。手品は不評ですか？」

「えっ、まさかのやる前から不評？」

「ああいや……そういう訳じゃない。悪いな、続けてくれ」

「……？ うん、それならいいけど……それより透華。手品やらせるなら手錠外してよ」

「ああ、忘れてましたわ。それじゃあ——はい、どうぞ」

「ん……ありがとう」

……これは何か言うべきなのか？ ツツコミどころ満載というか、さつきから気になっていたことではあるが……なんか特殊な趣味だったりすると悪い気がして聞きにくい、が、一応聞くだけ聞いてみるか……。

「……さつきから気になってたんだが、国広はなんで手錠を付けてるんだ？ ……趣味か？」

「ぶっ、国広君の趣味……くく」

「ぼ、ボクの趣味じゃないよっ！ ……というか笑わないでよ純くん！」

国広が恥ずかしそうに顔を赤くして否定し、小さく吹き出して笑い出す井上に怒る。

「……これは何か事情があるらしい——と思っていたら、横から透華が口を挟んだ。」

「一の手錠はすり替えなどのイカサマ防止用ですわっ」

「……まあ、そういうことだね」

「イカサマ？ ……なんだ、経験でもあるのか？」

「……小学生の時にちよつと……」

イカサマとは穏やかじゃないな。元プロとしては。まあだからと言つて責める気もなければ、どうこう言う気もない。極めてフラットな状態でそれを聞く。

「一の父親はマジシャンで、一も父親譲りの手品が使えるのですわ。それで、手癖で手品を使わないようにと手錠を掛けていますの」

「はあん、なるほどな。と言つても、今どきイカサマなんてすぐバレるだろ。公式試合は全て全自動卓だし、カメラも腐るほどあるからな。」

「……もつとも、手積みでカメラも少なかった時代だとプロでもやる奴がいたとかは聞いたことがあるが……」

「だからやる訳ないのに。やった瞬間バレて失格になるんだから」

「透華は心配性だから未だに疑ってるんだよ。仲間なのに酷いよな？」

「なつ——べ、別に信じてない訳ではありませんのよ？ た、ただ、万が一ということもありますし……子供の頃から習っていた親譲りの技術ですから、その気はなくても、手癖でやってしまう可能性も0ではないでしょう？」

「ふーん……子供の頃から手品を習ってたのか」

「……うん、まあ……確かに染み付いてはいるけどさ。手癖ではやらないよ、さすがに……」

親譲りの技術でイカサマねえ……俺はイカサマなんて出来もしないし、やろうと思ったこともないから分からないが、良し悪しは別として凄い技術だとは思う。

まあ殆どは下手くそだからすぐ分かるけどな。たまーに、賭場の雀荘なんかで見かけるが、見破った瞬間、相手が破滅するから困る。自業自得ではあるが、黒服なんかに入れて行かれるところを見ると、あの後どうなったんだろう……って、考えていたたまれない気持ちになるからな。

俺は一応プロだったからそういうのは考えたこともないが……やるやらないはともかく、本当に出来るならそれだけ手先が器用ってことだし、ある意味凄くはある。この国広は微妙にそれを、文字通り、枷と思っっているようだが……。

「……でもまあ、手品ってのは人を楽しませる技術だろ？ それを子供の頃から習って、手癖になってると思えば誇らしく思えるんじゃないか？」

「まあ、確かに手品は嫌いじゃないけどね……それでも今はちよつとだけ複雑な気分だよ」

「衣は一の摩訶不思議な手品、好きだぞ。透華は心配し過ぎだ」

「む、むう……皆してわたくしを責めて……これではわたくしが悪者

みたいですの」

「ははは、透華は悪役とか似合いそうだもんなー」

「純っ！ あなただけ夕飯抜きにされたいんですのっ!？」

「冗談だから許して下さい透華お嬢様」

「一瞬でメイドらしくなった……」

「あはは……それじゃあ、気を取り直して軽くやってみるね」

話が一段落ついたところで国広の前に出てテーブルの上で軽く手品をやり始める。……まあ、イカサマ云々の方は、皆そこまで重くは捉えてないというか、国広がちよつと思うところがあるくらいで、冗談に出来るくらいには風化してるのか。なんだかねで仲が良いからこそとも言える。

それはともかく、国広の手品を見るのだが――

「――はい。コインは逆さまになったグラスの中に現れました」

「凄い凄い！ 摩訶不思議!」

「はい。今度は反対側のポケットに」

「んー、相変わらず、種も仕掛けも分からないな……」

「純くん。そういうのを見破ろうとするのは野暮だよ。分からせるつもりはないけど、分かったとしても言わないでね。……はい。そんな純くんのポケットにさつき選んだトランプのカードが」

「うおっ!?! いつの間に……」

「はい。それじゃあお次は東郷さん、好きなカードを引いてくれる?」

「……それじゃあこれで」

「はい。それじゃあ皆、そのカードを確認して、憶えててね。そのカードをボクに見せないように混ぜて……シャツフル。はい、ここでカードを開いてみると、さつきのカードがこんなところに!」

「わあっ! ー、凄い! 奇々怪々!」

「うーん、やっぱり分からん……」

「……検索しても出てこない……」

「って、ともきー? ネットで調べるのも駄目だよ。多分、出てこないとは思うけど……というかなんで皆種を見破ろうとするのさ。少しは衣を見習ってよ」

「見慣れてますから自然とどうやってやるのか？　に見る目的がシフトしてますわね」

「やりにくいなあ……って、東郷さん？」

「……ん？　ああ、どうした？」

国広の手品を黙って見ていると、不意に話しかけられる。何やら首を傾げており、

「……もしかして、面白くなかった？」

「あら、まさかの不評ですよ？」

「あー……いや、そんなことはない。反応が薄くて悪いな。凄いなと思うし、ちゃんと楽しんでるぞ、うん」

「そう？　それだったらいいけど……あまり驚いてないように見えたから……もしかして、見慣れてるとかだったり……？」

「いや、そういう訳では……なんだ、面白さより、単純に感心してたからか。普通に見入ってしまった」

「ああ、確かに、感心しますわよね。一の手品は中々本格的で」

「だよなあ。これはイカサマしてもしょうがないっていうか」

「本格的……」

「そ、そう？　そう言われると照れるんだけど……って、純くんのそれは褒めてないよっ！」

国広の手品を皆で楽しみ、軽く褒める……ちよつとぎこちなくしてしまったのが悪いと思ったが、なんとか持ち直せたようで良かった。

俺がほつと一息つくと、そのタイミングで声が掛かる。

「——ご歓談中失礼致します。ご夕食をお持ち致しました」

お、来たか……さすがに夕食を運んで瞬間移動染みたことはしないか。物理的に無理そうだし。普通に……ああいうのってなんて言うんだ？　トレーカー？　みたいな料理を乗せた台車を押してハギヨシが現れる。

やはり豪華過ぎるな、と俺は賑やかな龍門渚の面々とそのまま夕食を囲んだ。

大いに食べて飲んで——ではないが、俺の好物を中心に飯を食べまくると、俺は客室へと案内された。

「広いな……」

そこらのホテルのスイートルーム……は言い過ぎだが、そこらのホテルの一般的な客室と比べると断然、こちらの方が広いし、ベッドやソファなどの家具も高級そうだ。

飯も美味かったし、この部屋に泊まれるだけでも大分お釣りが来るレベル。うーん、確かに、これならマジで屋敷で活動した方が良さな……他の部屋がどうなってるかは知らないが、快適過ぎるし。

「部屋に風呂も付いてるのか……マジでホテルだな」

「ご満足頂けましたか？」

と、背後からハギヨシが話しかけてくる。いつも突然なのは止めてほしいが、親切だからなんとも言えない。

「ああ。いたれりつくせりとはこのことだな」

「それは何よりです。それと、ご入浴には大浴場もありますので、よろしければそちらもご自由にお使い下さい」

「大浴場もあるのか……ならそっちに行ってみるか。案内してくれるか？」

「はい。ではこちらへどうぞ」

と、ハギヨシが先導してくれる。いやほんと、こうやってると自分が偉くなったように感じるが、気の所為だ。ただ麻雀しに來ただけなのに物凄い高待遇で逆に申し訳なくなるほど。

……ただまあ、魔物と打つことを考えると体力的に消耗するのは事実だし、それを慮ってくれてるのかもしれないな。

何気に、夜も暇があれば打つかもしれない——衣の方も地味にそれを望んでるっぽいし、屋敷にいる間は麻雀漬けになりそうな気がする。

とはいえ面子が軽いというか、結構息抜きもするのでキツくはないか。

——と、そんなことを考えながらハギヨシに大浴場まで案内されるのだが……。

「また、めちやくちや広いな……」

マジで高級ホテルの大浴場。大理石の床を踏みしめながら周囲を見渡し、改めて龍門渚の財力をその身で実感する。ここまで来ると一周回って馬鹿なのかと思ってしまう。この場合の馬鹿は褒め言葉だ。

俺は風呂が好きなので有り難い限りだ——というか貸し切り状態だし、贅沢過ぎる。

強いて言うなら、ここに俺の女を呼んで身体を洗ってもらったり出来れば最高なのだが……それは叶わないので自重する。こんなところでムラムラしても——ん？ 誰か入ってきたか？

背後の戸が開く音を聞いて、まさか、と思う。まさか、誰か入ってきたのか？

ここで俺の頭の中には幾つかの予想——もとい、妄想という名の選択肢が。

龍門渚高校の面々。その誰かが入ってきたのではないかという推測だ。

そうだとしたら一体誰だろう。メイドの誰か……沢村なら巨乳疑惑もあるし、中々凄そうというか、脱いだところを見たい。そして身体を洗って欲しいところ。国広は普通に可愛いし、普通に有りだ。背中を流してもらえると嬉しいし、むしろこっちから洗って反応を楽しみたい。井上は……入ってきててもぶつちやけ、一瞬男だと勘違いしちゃうだから困るな……。

それとも大穴で、龍門渚透華か？ まあなんか逆に男らしいところがあるので、全く気にせず入ってくるころも想像出来るのがまた……でもさすがにないだろう。むしろ、衣の方が有り得る……というか、1番可能性が高いかもしれない。なんと言っても子供だし……ただあれだな。衣で反応したらそれはそれで新たな扉を開きそうで怖いような……ボブとは美味しい酒が飲めるようになるかもしれないが、俺のクズ度が更に上昇してヤバイ。大人として躊躇する。ないとは思うが、要警戒だ。

そんな感じで幾つかの選択肢を頭で考えたところで、その相手が俺の前に姿を現す。声を掛けてきた、その相手は——

「——東郷様。良ければ、ご一緒してもよろしいですか？」

「——知ってた」

「？」

ハギヨシだった。うん、マジで知ってた。そりやそうだろ……女の
子が間違つて入ってきた時点で、どうせハギヨシだろって思ってたし、な
……もう入ってきた時点で、どうせハギヨシだろって思ってたし、な
んならシルエットで分かったけど、ちよつと現実逃避してみたかった
んだ……。

というわけで、ハギヨシと一緒に風呂に。正確には、先に身体を洗
うのだが、

「……東郷様は、良い身体をしていますね」

「……背中を洗いながらそう言うこと言われると微妙に寒気がするん
だが……いや、この際だから聞いておくが、ハギヨシ。お前、まさか
そういう——」

「ふふふ、実は……」

「やつぱやめろ。聞いておいてなんだが、聞きたくない」

「いえ、冗談ですよ。東郷様が想像しているような趣味ではありません
ん。私は普通に女性が好きです」

「そ、そうか……それなら良かった」

ふう、驚かせやがって……一瞬、マジでそういう趣味なのかと思つ
て酷い寒気がした。ぶっちゃけ俺史上1番の恐怖を感じたかもしれない。
同性愛者と一緒に風呂とか、衣よりよっぽど恐ろしいわ。

「ただ、良い身体をしてると思つたのは本当です」

「そういう勘違いしそうなことを言うのは止めて欲しいんだが……」
「すみません。ですが私も身体を鍛えている身として少し気になって
……東郷様は、何かスポーツをやっていたのですか？」

「……いや、特にはやってないけどな」

「それにしても筋肉の付き方、そのバランスが素晴らしいですね。特
にこの、広背筋から僧帽筋の発達が……一見細く華奢に見えますが、
その実、いわゆる細マッチョとは……こう言つてはなんですし、少し
下世話な話になりますが、さぞ女性におモテになるのではありません

か？」

「はっ、お前に言われると嫌味にしか聞こえないな。ぶっちゃけモテないし。俺なんかよりハギヨシの方が相当モテるんじゃないのか？」
「いえ、私は身も心も龍門瀏家に捧げておりますので、そういうことは……」

「ない、とは言わないってことはモテるんだな？」

「……まあ、そういうったことも、0とは言いませんが……」

「やっぱモテるんじゃないか」

珍しく言葉を濁して言うハギヨシに軽くイラツとする。まったく、これだからイケメンは……どうせ学生の頃は告白されまくったりしたんだろうな。いや、もしかしたら今でも同僚のメイドとかから想われてたり……？

「何を考えているか大体想像は付きますが、言った通り、私は身も心も龍門瀏家に捧げておりますので、恋愛事にうつつを抜かすようなことはしませんよ。私はまだまだ、執事として未熟者ですしね」

とか考えていたら釘を刺された。いや、お前で未熟者って、一人前とかどうなるんだよ。完璧超人の癖に……せつかくだから何かボロを出させたいな。こいつも男だし、そうだな……。

「どういう女性が好みとかあるのか？」

「……そうですね。強いて言うなら、芯のある女性が好ましいでしょうか」

「……ああ、うん。そんな感じの事言う気はしたけど……」

「仰りたいことは分かりますが、性的なフェティシズムを抱えていたりしませんよ。容姿に拘りはありません」

うわっ、マジでこいつ漫画とかでよく見る聖人君子みたいなイケメンじゃねえか！ ふざけやがって。見た目もイケメンなら中身までイケメンかよ。はー、マジで勝ち目ない。劣等感はんぱねー。でも良い奴っぽいから変に嫌うことも出来ねえし、邪険にすることも出来ねー。無敵型のイケメンかよ。これで性格悪い奴とかならめっちゃくちゃ嫌いになれるのに良い奴だとなんなら友達になれそうだから困るんだよなあ……。

「……話は変わりますが、衣様が、後でまた打ってほしいと……」

「マジか……いや、まあ、拒否権はないけどな……」

「衣様は随分と懐いておられるようですので。大変かとは思いますが、衣様のこと、よろしくお願い致しますね?」

「懐いてるか……? むしろ嫌われてるような……というか、その言いは方は執事としてどうなんだ?」

「ここだけの話ということで、内密でお願い致しますよ。……自分に恐怖しない相手は、衣様にとって貴重ですからね。出来れば東郷様には出来る限り相手をして欲しいのです」

「……恐怖ね……つっても子供だからな。恐れるも何も……つーか力に関しては俺も怖い」

「ふふ、そうは見えませんが……まあそれは良いでしょう。まだ子供——いえ、幼い容姿であるとはいえ、己の理解できない力。自分ではどうしようもない力に、人間は恐怖するもの。龍門渕の当主様を始め、周囲の者達が恐怖するのは致し方ないことです」

「……なんか引つかかる言い方ばかりするが、まあ、要は衣には遊び相手が少ないから相手をしてあげてつて言われてる感じだ。」

別にそれは構わないんだが……正直、さつきも言ったが懐かれてる気はしないが。

「それと、他の皆の指導もきちんとお願致します」

「めっちゃ頼んでくるな……まあ、そっちは言われずともやるが……」
「ふふ、透華様が随分と東郷様に期待しておりますので、私も期待してしまおうと言いますか。……それに不躰ながら、東郷様とは、少し気が合いそうな気がしまして……つい口が軽くなつてしまいました。気に障ったのなら謝ります」

「今更だな。気に障ってたらもつと早く怒ってるし、気にしなくていい。これくらい普通に喋ってくれた方が気楽だからな」

「……そうですか。それならお言葉に甘えさせて頂きます」

——と、まあそんな感じでハギヨシと風呂場で親睦を深めた。……いや、なんでハギヨシと仲良くなつてんだ? 良いんだけど、そんなことより女の子の方が重要な筈。役満で上がつて女の子を墮とすの

が目的だ。

とはいえ衣のあの支配力だとなあ……役満張れないし、張ったとしても和了れる気がしないからどうしようもないんだよなあ……。

俺はどうしようもなさを感しながら、龍門渚での1日目を終えた。

——ちなみに、風呂を出た後の対局は夕方以上にボコボコにされた。ころたん強すぎいッ！

衣日和

龍門渚の邸宅での寝泊まりは、客室とはいえ中々の居心地だった。不眠症気味の俺もある程度は寝ることが出来るくらいには快適。俺も今度、寝具を買い替えてみようかとも思うが、寝具だけでなく、この環境にも依るところがあるだろうし、そもそも慣れたらあまり意味は無さそうな気もするのでそこは懐と要相談だ。

まあ、ここに泊まつてる間はまだ宿泊費とか食費とか浮きそうだから良いとしても、今週末からはGWだし、次の指導の準備もしなきゃならないし、そもそもGWの宿泊とか高いから色々と面倒だったりするんだよな……。

いつその間も龍門渚に泊まれたらいいのだが、さすがにそれは無理だし、微妙に頭を悩ませる。うん、それと、頭を悩ませると言えば

「起きろ、とーげー!!」

「おふっ……!?!」

布団の中でグダグダしていると、突然の奇襲。……いやまあ、部屋の中に誰か入ってきたのは気づいていたが、どうせメイドとか、ハギヨシ辺りだと思って、普通に起こしに来たのかと思ったら衝撃が来た。しかも高めの声。子供っぽいこの声はやはりと言うべきか、天江衣だった。

「もう辰の刻を過ぎるぞ！ 早く起きて衣と麻雀を打て！ 今日こそは衣を恐れさせてやる！ さあ起きろ！ 懈怠な生活は許さん！」

「んー……はいはい、もうちよつと後でな。後で飯食ったり色々してから……」

「ふっ、自ら逢魔時を望むとは命知らず！ ……でもそれだと今日がすぐ終わってしまう！ だから早く覚醒しろー!」

耳元で凄く騒いでるのが聞こえる……子供って朝は元気だよな……衣は夜の方が強いけど、夜は夜でそんな夜更しが得意という訳でもないし、ある意味ちぐはぐな力だ。

早く打てと言われて打たなきゃならない辺り、指導の単位を1日毎

に設定したのは間違いだったかな、と思う。1日って、究極24時間だもんな。そんな連続で打たされることなんてないはずだが、朝から夜までってのは確かに十分あり得る。それで5000円とか俺って優しすぎる。時給幾らだよ。最低賃金も真っ青……いや、龍門渕に限っては多めの報酬なので適用されないけども。

だからまあ、打てと言われれば打たなきゃならんのだが……うちよつと待って欲しい。何事にも自分のペースというか、特に朝は自分のタイミングで起きたい。

……というか、今は朝勃ちしてるからちよつと収まるまでは待つてほしい。後ちよつとで収まりそうだし、それが終わってから起きるとしよう。だから、

「あー、もうちよつと待て。ほら、部屋の外出てろ。起きる、起きるから……あー、眠っ」

「そんなこと言って、黒甜郷裏こくてんきょうりじゃないかっ！ むーっ……！」

相変わらず難しい言葉で俺の状態を表している。いやほんと、起きるからもうちよつとだけ待つて欲しい。そう思っていると、

「早く起きろー！」

「うおっ……!?!」

今度は俺の上に衝撃。何かのしかかってくる——というか、明らかに衣だった。衣がベッドで眠る俺の上に、正確には布団の上から乗っかって来ている。そしてそのまま、俺の腰の上で飛び跳ねて、

「ごらーっ！ 早くおつきしろー！」

「おふっ、わ、わかったわかった。起きるから飛び跳ねるな」

「……ほんとか？」

衣がなおも疑り深い視線を俺に向けてくるが、いやほんとと止めて欲しい。起きるも何も二重の意味で起きているしな。というか、もろに衣の股の下にある。布団が間に挟まってるだけマシだが、それでも大分ヤバいことをしてる自覚があるのだろうか。……いや、ないだろうな。衣だし、子供だし。ただこんなロリとはいえ、圧迫されると変な気分になるからマジで止めて欲しい。何がおつきしろだ。もうおつきしてるっつーの（最低）。

「本当だ。ほら、もう普通に起きて会話してるだろうが」

「それは確かに……ふうむ……」

「……なんだ？ まだ疑ってるのか？」

「……いや、そうじゃない。衣は感心していた」

「感心？」

ああ、と頷く衣。俺が目覚めたことは分かっている筈なのに、何やら興味深そうに俺を眺めている。なんだ？ と今度は俺の方が訝しげな視線を向けていると、衣は軽く俺の上で身じろぎしながら、

「男の身体とは中々に硬いものだな……筋肉量の差か？ こうして座しているだけでも違いが分かる。身体の硬さが……」

「……ああ、うん。そうだな」

俺は何とも言えない顔で頷く。ほぼ声も棒読みだ。……いやうん。男の身体と女の身体は違う。確かに衣の言っていることは間違いではないのだが……衣、お前が感じてる硬さは筋肉って言うか、ただのチ○コだ。それも分からないのか。やはり見た目だけでなく、知識までお子様なのか？ ……いや、単純に意識してないだけって可能性の方が高いな。頭は良さそうだし。

「お、おおっ？ 筋肉が鳴動している……面妖な……」

いや、だからそれ、筋肉が動いてるんじゃないやなくてチンコが動いてるんだわ。勘違いさせてすまん。……いや、いくら見た目が小学生みたいな幼女とはいえ、勃起したチンコの裏側を圧迫されると一応気持ちいいんだわ。衣の触れてるところ、なんかめっちゃ温かいし、ぷにぷにしてるしで何とも言えない。これはもう実質素股。いや、もう実質セックスでは？ 完全に入ってるよね——とか、こういうシチュと絵、漫画とかだと絶対ネタコメント付けられるやつじゃん……まさか現実で俺が体験することになるとは……貴重な体験ではある。人に言えないけど。というか、ボブ辺りのロリコンに言ったら血涙流しながら殴りかかってきそう。

「……堪能したか？ 堪能したならそろそろ起きるからどいてくれ」

「あ、うん。……んっ、でも、なんだこの感覚は……？ 少し変な感じがした……？」

「お前も打ちすぎて調子が悪いんじゃないか？ ほら、着替えるから部屋出てろ」

「むっ、調子は悪くないっ。その証拠に、後でこてんぱんにしてやるから覚悟しておけっ！」

……まあ、俺はロリコンじゃないので、割とあっさりとその状況を手放す訳だが……俺はさっさと衣を部屋の外に追い出しながら、何気に朝勃ちよりも微妙にギンギンになった息子を見て思う。……やっぱもうちよつと堪能しておけばよかったかな？ いやロリコンじゃない。ロリコンじゃないんだけど……性欲って恐ろしいよね。ロリコンじゃないのに、ちよつとアリだと思わされた。はあ……なんだか負けた気分だな……。

——そうして、朝から貴重な体験をしつつ、朝食を食べて昨日同様、龍門渕高校麻雀部の面々に軽く指導する。

今日は最初から衣もいる。俺と打つためらしいが、俺も衣ばかりに構ってはいられないんだよな。俺が打たないタイミングで、もう一人、余った面子を一人一人指導したり、アドバイスしていく。軽い会話を交えながら、

「井上は流れを読む……いや、流れに乗るのが上手いな」

「おっ、褒められた。それは元プロのお墨付きを貰えたってことでいいのか？」

「ああ、筋は良い。学生の内から……しかも、特殊な力を持たずにここまで場の流れを感じ取れるのは稀有な才能だな。……どこで習った？」

「ドイツ。昔留学してたんだ。ギーセンっていうヘッセン州にある……って、分かるか？」

ドイツ。そう聞いて感心する。ドイツと言えば麻雀先進国の一つであり、世界的な強豪国だ。ランキングも常に上位で、数多くの世界的選手を輩出しているし、ドイツの麻雀リーグと言えば日本のプロが目指す一つの到達点でもある。

そこに留学していた……ということであれば、確かにそういった稀有な才能に目覚めていてもおかしくはない。確かにドイツは色々……うん、まあ色々あるしな。俺は思い出しながら井上の言葉に頷く。

「一応、何度か行ったことはあるが……しかし、そうか。それなら相当揉まれただろう。あそこは化け物だらけだからな」

「ああ、まあ……やりがいがあったけどな」

井上が苦笑しながら曖昧に頷く。過去を思い出してるのだろうか、まあ確かにやりがいはあるだろう。やりがいって言うか、めっちゃくちゃボコられた可能性もあるけどな。ドイツの有名選手って言えばニーマンとかブルーメンタール姉妹とか、とんでもない怪物、魔物がいるし、その他にもヤバすぎる強豪がぞろぞろといる。一応今でも欧州や米国、中国辺りのプロリーグは見てるし、ちよいちよいニユースにもなるから分かる。

まあ日本のニユースだと、ドイツという世界最高峰リーグで活躍するワールドレコードホルダーさんがいっつも記事になってるけどな……いやもう、あの人マジ化け物。確か、はやりさんとは小学生の時から知り合い、中学高校と同級生で同じ年の親友なんだよな……一回だけ会ったことあるけど、あの人だけは……マジで出会った瞬間にちよつと震えた。というかはやりさんの同級生は黄金世代過ぎるというか、そもそもはやりさんの出身である島根県が魔境過ぎる。魔境っていうか、もう魔界だよな。はやりさんの友達とか漏れなくトッププロばかりだし。しかもその殆どが海外のトップリーグで活躍してたりする世界的な名選手ばかりでヤバイ。同窓会とかしたらもうその面子で日本代表が結成できそうなくらいにはヤバイ。混ぜたら消し炭になりそう……って、思い出した。俺、その化け物黄金世代の1人に呼び出し食らってるんだ……あー、どうしよ、行きたくなえ……名古屋に戻ったら行かざるを得ないんだろうが、行きたくなえ……。

「お、おいどうしたんだ？ 急に頭抱えて……」

「……ああいや、悪い。ちよつと思ひ出したことがあってな……はあ、

井上はなんでドイツから帰ってきたんだ？」

「……？ あー、まあ、透華に熱心に勧誘されたし、色々思うところがあつたんだよ。それで日本で麻雀することにした訳だ」

詳しいところは教えてくれなかったが、どうやら透華に勧誘されたらしい。……というかこの部員は衣を除いて皆透華が連れてきたっぽいな……大体何の為かは見当が付くが、まあそれはいいだろう。他人の事情、過去を必要以上に聞き出すのはあまり良くないしな。それよりも問題は、

「……なるほどな。とはいえ井上。その打ち方はお前の長所ではあるが……流れに乗るだけではそれを乱された時に辛いぞ？」

「つ……中々痛いところを突いてくるな。でもまあ、それならそれで面白いと思ってるからオレ的には望むところだ」

「自信があるのは良いけどな。流れなんてガン無視。無理やり自分の打ち方を通してくる奴も沢山いる。謂わば、流れを自分で創り出すよいうな奴らだ。……いるだろ？ 身近にも」

「……確かに、衣には全然敵わないな。あー、そうか……流れを作る、か……」

「流れに乗る。断つ。奪う。それらだけじゃない。もつと幅広く流れを使い。例えば……流れを創ったり消したりすることが出来れば、お前の打ち方にも幅が出てくる。特にお前は先鋒だろ？ 先鋒には特異な打ち手……他校のエース級も出てくるからな。それくらい出来ないと全国だと厳しいぞ」

「……難しいこと言ってくれるな……でもまあ、そうだな。考えてみる、か……」

そうしろ、と井上にアドバイスを送り、次の対局に臨む。……いやまあ、相変わらぬ偉そうな指導だよな。プロをクビになった分際では説得力も何もありません。

ただ実際、井上は天江衣や龍門洩透華に続く3番手と言っている実力を持つ、特異な打ち手だし、伸びしろは大きいように見える。というか、やっぱり龍門洩って強い。そして風越がちよつと可哀想。確かに、全員が全国レベルの打ち手で、しかもその内1人は魔物とか、そ

りや負けるわ。全国でもかなり強い方だもんな、多分。というか透華が色んなところからスカウトしてきたって考えると、中々にこう……学生レベルだとやっつてることが桁違いというか、そういうのはプロとか強豪校の手口だっというのにな。これも財力が為せる技か。

まあその財力に釣られて指導しに来てる俺に言えたことじやないけど。……うーん、これ、風越勝てるかなあ……指導した手前、ちよつと鼻負したくもあつたんだが、実際に龍門渕にも来てみると厳しく思える。しかも、俺の指導に効果があるかどうかは知らないが、絶賛強化中だし。いやー、厳しそう。仕事なんで指導はちゃんとやるけどな。風越は頑張ってくれ……ということ下次のアドバイス。

「——この局面、あなたならどうしまして？」

「そうだな……3位の相手は6巡目立直……しかし1位の親との差もあるし、こちらは聴牌取れば満貫以上確定で1位に直撃取れば逆転か……最下位も1副露で和了りを狙ってる……まあこれなら降りてもいいかもな。どっちかが勝手に1位を削ってくれる可能性も高い」

「でもこの局面、実際には8巡目に最下位が倍満を和了ってこちらが3位転落。聴牌で両面に取っていけばこちらが先に和了ってしましたわ。結果論と言えばそれまでですが、ここは押してもいいのではありませんの？」

「とにかく稼がなきゃならん個人戦で考えるなら押した方が良いとは思うけどな。団体戦だとこの卓の状況で聴牌取るのは中々にリスクいだ。明らかな危険牌を切って勝負に出ることもない。それに、3位に落ちたとはいえ、1位との差は結果的に縮まつてる。何もしなくても削ってくれるならそれに越したことはない。まくるのは次の局か、次の味方に任せればいい」

「ええ、その考え方も分かりますけれども、団体戦だからこそ、個人戦程リスクではない。同じ面子と半荘2回を打って、点数にも余裕があるなら、勝負に行つてリターンを取りに行つた方が良いのではなくて？」

「そういう考え方もある。その辺りは意見が分かれる……個人の好みやスタイルによるだろうが……俺なら勝負しないな。いや、リーグ戦

とかでならありかもしれんが、トーナメント戦で勝ち抜けなら怖い場面だ。倍満にこちらが振り込んでいた可能性を考えるとな」

「……そうですね。確かに、こちらが聴牌に取ったら相手もそれに合わせて捨牌を変えているでしょうし、先に別の相手が和了る可能性もありますわね。ええ、これ以上は仮定になりますけども……それでも、わたくしなら押しますわ」

「いや、それでいいと思う。リスクを分かった上で攻めるなら良い。牌効率や確率が全てじゃないからな。そういった自信が良い結果に繋がることもある」

「ふふん。もつと褒めてもよろしくてよ?」

「……はいはい、凄い凄い」

対局を抜ける1人——透華が自ら質問してくる。

その結果に透華は鼻を高くしているのだが……こいつはあまり言うことがないな。

研究も分析もよく出来ている。というか、プロでもここまで研究してる奴は少ない。というか、なんでガツチガチの研究室の出した研究結果とか持つてんだよつて一瞬真顔になった。

なんでもハノーヴァーの研究所に依頼を出してるらしいが……これも財力の為せる技か。普通はこんなこと出来ない。

しかも財力だけじゃない。熱量がある。

龍門瀏透華は膨大な牌譜を、データを持っていて、それらを一打ずつコツコツと再生しながら研究し、自分の解釈と違っていたところは徹底的に追求して、それを理解しようと努める。

それにデジタルの打ち手ではあるが、それだけではなく、時にはデジタルを逸脱する……なんと言うべきか。まあ、言うなら目立つ打ち方をして、それで結果を出している。

それに、駄目なところがあってもそれを自分で理解していて、それを即座に修正出来るし、する。

……というわけで何も言うことはないな。うん。放つといっても勝手に成長するやつだわ、これ。

まあそれを言うなら俺の指導なんてなくても皆遅かれ早かれ成長

するだろうから元も子もないが、透華は牌効率とか理論のことだけで言うと、プロ並——いや、もしかしたらプロ以上に麻雀というものを理解している。

強いて言うなら、オカルト関連への理解だけは多少劣っているかもしれないが、そつちを強めるとデジタルの良いところも消えそうなので何も言えない。そもそもオカルトへの理解なんてプロや指導者の中でも出来てる奴は少ないしな……えーっと、誰だっけ……そういうのが得意な選手も昔いたよな……名前はド忘れしたけど、はやりさんの知り合いに居た気がする。

まあそういう意味でなら、俺はオカルトの感知だけならまあまあ出来るので、ある意味得意分野だ。

そして実は、そのセンサー的に、この龍門渕透華は引つかかっている訳だが……本人はそういう素振りを全然見せないし、今はまだその才能が眠っているとか、覚醒してない感じだったりするんだろうか。もしくは何か条件があるとか。……うーん、天江衣並……とまではいかないが、割と迫れるくらいのヤバそうな感じもするんだけどな……まあ見れなくて良かったような気もするし、指導的には見れないのが残念な気もするが、透華本人にそれをする気がないのならしょうがない。こちらとしては気に留めておくくらいしか出来ない。

まあ透華は良いとして、後の2人——沢村と国広については、特にオカルト的な何かはなく、普通に強い感じの打ち手だった。強いて言うなら、沢村は対戦相手の牌譜を研究して、それに合わせた打ち方をするデジタル派。透華に近いが、デジタルというかデータ派って感じで、国広はもつと堅実に強い。割とバランスが良いタイプで、どんな打ち方もある程度は出来る器用な打ち手だ。

……こつちも特別言うことはない。まあ無難に指導していく。

「へえ、沢村はゲームが趣味なのか」

「ともきー、結構強くてネットだとランキング？ とかにも乗ってるくらいなんだよ」

「……照れる」

「そうなのか。俺もゲームはたまにやるが……そういや、最近はおま

りやってないな……」

「後でする？ 古いのから新しいのまである」

「ともきーが乗り気だ……」

——とまあこんな感じで普通に……いや、これもう指導っていうか普通に雑談だけだな。普通に雑談してる。

一応、麻雀もちゃんとやってるのだが……なんというか、健全だなあ……いや、なんていうか、全然役満聴牌しないし、めちやくちや健全な時間を過ごしてる気がする。朝はちよつと怪しかったけど。

というか、どれだけ打つても衣がいる時はそもそも聴牌確率が激減するせいで役満もクソもない。昼だからマシで、まだある程度はやれてるが、それでも敵わないしな。だからほんと健全。役満和了るなら衣がない時なら可能性があるが、衣が俺と打ちたがる所為で、まず試行回数が少ないので、生憎と役満の気配はまだない。……一応、出来たらやろうと思ってるんだけどな……候補としては、沢村か国広か。この様子じゃ期待出来無さそうだな。

そんなこんなで指導しつつの休憩時間。ちよつとしたお菓子とかを食べつつ、寛ごうとするのだが、

「——どれがいい？」

「早速かよ……格ゲーとFPS以外なら何でもいいぞ」

沢村がゲーム機とソフトを大量に持ってきた。……いやまあ、良いんだけど、休憩時間にガッツリゲームか……久し振りだから一瞬身構えてしまった。

1番最近にやったのってスマホのアプリとかだもんな。いわゆる流行りのソシャゲーだが、俺は殆どソシャゲーをやらないが、一応唯一やってるのがある。というかこれも一応麻雀ゲームだ。キャラで戦う能力麻雀ゲームだけだな。

キャラが能力を持ってたりして、麻雀を有利にするとかいう……別にフィクションでもなんでもないけどなって思っちゃう系のゲームだが、一応俺はそれをプレイしてる。若者の間では結構流行りのものだ。この間も、池田がアカウント持ってたのでフレンドになってキャラを貸し出してやった……って、池田アツ！ 俺のおっぱいちゃん達

を使っておきながら負けてんじゃねえっ！ ちよつと携帯開いて確認しつつ、内心で叫んでおくと、気を取り直してゲームに臨むのだが、「何で格ゲーとFPSは駄目？」

「……その2つはちよつと……特に格ゲーは昔結構やり込んでたからな……色々と思いが……」

「……そう聞くと気になる」

と、沢村が格ゲーを選ぼうとする。いや、マジで止めといた方がいい。自慢じゃないが、俺はその手のゲームは得意分野だしな。高校時代、ボブと一緒にゲーセンに通ってた時期があるが、あまり勝ちすぎると反対側から台パンの音が聞こえたり、酷い時は灰皿がブーメランみたいに飛んできたりする。ゲーセンって怖い。まあここでそういうことが起こるとは思えないが……。

「——お、なんだゲームか……つて、智紀が負けてる!?!」

「しかも完封負けだよ……ええ……」

「とーごーはプロゲーマーだったのか？」

「智紀が物凄い顔になってますわ……」

「……ヤバイ……」

……だから言ったのに……しかも、よりによってまあまあヤバイゲーム選んでるしな。力こそが正義。いい時代になったものだ……。

ともあれ、この手のゲームは勘弁して欲しい。こつちとしてもちよつと色んな意味で疲れるし。というかこういう時はもっと和気あいあいと楽しめるパーティ系のゲームとかレースゲームとかの方が良いだろ……なんか衣もちよつとやりたそうにしてるし。

「ならとーごー！ 次は衣と勝負だ！」

とか思ってたらマジで勝負を仕掛けてきた。……いや、今を見て勝負仕掛けてくるのか……まあ、別のゲーム選ぶから良いけどな。

「衣はこう見えて強いんだぞ！ 純よりは強い！」

「去年の誕生日の時の話か……あの時はオレも調子が……」

「あの時は大変だった」

「わたくしが歌を作った時ですわね！」

「ああ、そんなこともあったよね。確か……」

「『ころたんイエイ』」

「——急にどうした？」

いきなり5人が謎のフレーズをハモったのでツツコミを入れる。いやマジでなんだその歌は……妙に耳に残るな……ころたんイエイ……衣の誕生日の略か？ でもイエイはどこから……いや、なんとなく付けただけなのか？

まあ、それはともかくちよつとしたゲーム大会が開かれる。家なだけあつて自由だ……風越ならそうはいかない。まあ練習中は皆真面目なので別に良いと思うが、普通の学校ならできそうにないしな。

「……それにしても、今日はちよつと熱いね……」

「あら、空調は効いている筈ですが……なんでしたら私服に着替えてきてもよろしいですよ？」

「そうするよ……」

「お、じゃあオレも」

「私も……」

……いや、そもそも何で今まで全員メイド服だったのかと。朝からメイドの仕事でもしてたのか？ 敢えて気にしないようにしていたが、最初見た時から何とも言えない感じだった。

まあ着替えてくるというので俺は先に衣や透華と軽く遊ぶ。透華はともかく、衣はこれ、別にそんなに強くないよな。何故あんなに自信満々だったのか。俺はコントローラーを操作する衣に向かって笑みを向け、

「どうした？ このままじゃ負けるぞ？」

「む、むむ……五月蠅いつ。ここから逆転——あつ」

「はははっ！ よそ見してるからだ！」

「むううっ！ 生猪口才っ！ 話しかけて集中を乱すとは卑怯な！」

「乱される方が悪いんだよ」

「ふふんっ！ 華麗にショートカットですわっ！」

有名なレースゲームを楽しむ。というか透華は意外とやり込んでいるのか？ これは……なんか意外と上手いな。お嬢様ってゲームやらなさそうだけど、やはり偏見に過ぎないというか、透華はデジタル

派だし、こういうのも割と出来るのか？ 身近にゲーム好きがいるからってのもありそうだが、少なくとも衣よりは強い。

とはいえ何気にこのゲームも油断しなければ俺がこのまま1位で終わるな。

と、俺は割とリラックスしながらコントローラーを操作していると、部屋の扉が開いて3人が戻ってきた。なんだ、着替え終わったのか——って、ぶっ!?

「着替え終わったぜーって、お？ 今度は結構いい勝負してるな」

「何故か東郷さんの集中が乱れたのでわたくしが大逆転ですわ!」

「衣も疾風迅雷の勢いで追いつけるぞっ!」

「結構楽しんでるね……でも東郷さんの方はちよつと苦虫を噛み潰したような顔に……どうかしたんですか?」

「眉根を寄せてる……?」

「い、いや……何でもない。気にしないでくれ……」

俺は平静を取り戻しつつ、ゲームに集中する……が、くそっ……何がどうかしたんですか? だ。お前の格好の方がどうかしたのかって問い質したくなる。

他の2人……井上と沢村は普通の私服だ。別に言うことは特にないのだが……国広の私服はヤバい。風紀的に問題はないとはいえ、この服は痴女では?

トップスもスカート? もどっちも露出が凄い。水着よりも露出が凄い。肩とかお腹とか丸見えなのはまだ良いとしても、スカートがスカートの役割を果たしていない。なんか輪つかとベルトみたいなので止めているが、丈は膝上何十センチって感じで、お尻がほぼ丸見えだし、上半身も、辛うじて胸の部分をギリギリ隠してるのみで、動けば色んなところがチラチラと見えてしまいうのである。ギリギリで決定的なところが見えないのはどういうカラクリなのか。いや、マジで集中出来ないから止めてほしい。

いやまあ、確かに、最近はこの手のよく分かんないレベルで露出してる服も多いというか、羞恥心を投げ捨ててる感じの奴が多い気がする。それと、こういう服を見ても何とも思わない聖人も多い。俺みた

いな普通に性欲旺盛な奴には嬉しいやら苦しいやら……というかこいつ、良い尻してんなあ……小柄で小ぶりだけど、それがまた……つて、ヤバい。そんなこと考えてたら負けちまう。あー……。

「わあい、衣の勝利だ！」

「ワンツーフィニッシュですわ！」

「……あー負けた……」

「あれ？ 急に失速したぞ」

「エンジントラブル？」

「いや、これゲームだから……」

透華と衣が勝ち誇り、負けた俺の後ろで3人が呑気に会話しているが、国広は自分の所為だとは露ほども思っていないっぽい。いやほんとムラつとするとどうか、困る。おっぱい聖人の俺を悩ませやがって……流儀には反するが、本気で落としてやろうか……？ いやまあ、厳しいんだけどな。若干そう思うが、龍門渕での滞在は風越程長くはないし、期間内だと無理ゲーなんだよな、多分。このまま健全に過ごすしか道がないので、精々後で思い返すことくらいしか出来ない。この昂りは次の学校で発散するしかないか……と、俺は妄想で次の高校の麻雀部員を勝手に巨乳にしつつ、龍門渕での2日目も特に何事もなく終えられた。

孤独

龍門渕での日々も、マジで健全かつ何事もなく終わろうとしていた。

ひたすらに麻雀打って、ちよつとアドバイスしたり、息抜きで遊んだり、美味しい飯を食ったりと、ある意味で充実しているが、肝心の事は成し遂げていない。

……というかもう最終日なので今から役満ぶち当てたとしてもやることは難しい。そもそも泊まれないしな。今日からはまた別の宿に行くことになる。はあ、いざ離れるとなると憂鬱だな……居心地が良いのもあってまだ泊まりたくなる。

だが現実的にそれは無理だし、今のうちに次の学校へと連絡しておくか。GWが明けてからにはなるが、一先ずメールを送信。指定日時の何時に伺いますという当たり障りのない連絡だが、こうやって数日前くらいに連絡しとくのがマナーだし、個人の依頼というのもあって本来に来るのかと向こうも不安になってるかもしれないので、ちゃんと行くよって連絡しておくのは大事だ。

なので朝からいそいそと出立の準備を進めつつ、最後の練習に向かったのだが……そこで俺は予想外の事を言われてしまう。

「——合格ですわ」

「……は？ 何がだ？」

開口一番。龍門渕透華にそう言われたのはいつもの練習部屋ではなく、少し離れた場所にある応接間のような部屋であった。

格式高く、高級な家具だらけの室内。まあそれには慣れはじめているが、客を出迎える応接間だけあってそこらの部屋よりも更にワンランク上質であるようにも感じるのは気の所為か。

なんで態々こんな場所に……と思いつつ透華の言葉に疑問を挟むと、透華は告げた。指を鳴らし、

「ハギヨシ。書類を」

「はい。——東郷様、こちらを」

「ん……？ これは……」

俺は透華の背後に控えていたハギヨシから渡されたその書類に目を通す。通すのだが……ん？ 雇用契約書？ ……えっ。

「お前、これは……」

「気づいたようですね。龍門渕高校、麻雀部コーチの正式な就任に当たっての雇用契約書ですわ」

「……マジで言ってるのか？」

「冗談でこんなもの持ち出しませんわ。理解したのなら話を進めますわよ。期間と報酬ですが、まずは——」

「いやいや、待て待て待て。理由を聞かせる理由を。なんで一々俺を雇う？」

「優秀な人材は即、スカウトするのがわたくしの流儀ですの。もたもたしてたら他所に掻っ攫われてしまいますわっ！」

……駄目だ。全然話が通じてない。

俺が聞きたいのはそういうことじゃ……いや、ある意味では答えになってるのかもしれないが、それでもそういうことじゃないし、そんな訳がない。あまりにも不可解過ぎる。俺を正式採用なんて馬鹿げた話だ。

「……俺が優秀？ ……はっ、冗談が上手いな。俺なんかよりもっと優秀な奴は幾らでもいる。それこそ、本物のプロを雇うことだって可能だろ」

龍門渕の財力ならぶっちゃけどうにでもなるはず。プロをコーチや監督に採用している学校は他にもある。そういうところのように本物のプロを呼び寄せればいい。

だから冗談だと思っただが、透華の表情は冗談という感じではない。……いやまあ、いつもの自信満々な表情なだけなんだが……。

「あなたの仰りたいことも分かりますわ。あなたのプロとしての経歴は、お世辞にも良いとは言えない。ですが、名選手が必ずしも名監督になるとは限らない。逆に選手として活躍出来なかったとしても、名指導者として活躍することだってありますわ」

「……俺がそうだと？」

「ええ。あなたの指導力はそこらのプロよりも上だと、わたくしは確

信していますの。麻雀への理解も深く、個人だけでなくチームとしての戦い方、戦術にも通じていますし……何より、特殊な力に対する理解力を持った人材は中々いませんわ」

「……オカルト——いや、そうか。衣のことか」

俺はそこまで話を聞いて、ようやくほんの少し、俺を雇いたがってる意味を得心する。

天江衣。言うまでもなく、強力なオカルトを持った、牌に選ばれた者の1人で、常人の理解の外にいる魔物。

確かに、デジタルだけに通じる雀士、指導者では天江衣を指導することは出来ないだろう。天江衣を指導するならば、オカルトに精通している者でなければ難しい。

そういう意味では、俺は確かに常人以上にオカルトのことを知っている。……だが……。

「腑に落ちた、といった表情ですわね。それならこの話を受けてくださると助かりますわ」

「……俺なんかを雇っても効果があるとは思えないがな」

「それを決めるのはあなたではなく、わたくし達です。……どうでしょう。今なら報酬にもう少し色をつけても構いませんのよ?」

「……というか、今更なんだが、コーチの就任とか報酬とか勝手に決めていいの?」

「お父様からある程度委託されていますので問題は皆無ですわ。まあ、あなたを雇うことはまだ言っていないですけど、特に問題はないはずです。報酬もきちんと予算内から割り振っていますしね。元プロであることや、過去の経歴から考えるに、それなりに色をつけてもおかしくはないでしょう?」

「……そうか」

全く、金持ちつてのは非常識にも程があるな……めっちゃくちゃ強引なスカウトだ。国広達もこんな風に強引にスカウトされたのだと思うとちよつと同情する。ありがたい話ではあるが、強引かついきなり過ぎて戸惑うだろうしな。

俺はそのスカウトについて考えるが……確かに、俺にとつても悪く

はない話だ。

今の俺は実質無職で、プロとして稼いだ貯金と、こうやって日銭を稼いで生活している身。早く定職に就くに越したことはないだろう。それに、俺を評価して雇ってくれるところが他にあるのかと考えると、破格と言える高待遇で迎えようとしてくれていた龍門渕は正に、渡りに船だ。都合が良すぎるほどに。

ここで断るなんてことは、普通ならあり得ない。だから、俺は言った。ため息を一つ入れて、

「……悪いが、断らせてくれ」

「何のですのっ!? 今のは頷く流れですわ!」

いや、流れとか知らんし……そんなびっくりされても……いや、驚くのも無理もないか。普通ならこの話を断るなんてあり得ないからな。

ただ俺は普通じゃないし、目的だってある。最低な目的だけど。

それに一応、ちゃんとした理由だってあるのだ。それは、

「ありがたくはあるんだけどな……他の学校からの依頼もまだ残っているし、そちらを放置する訳には……」

「……なるほど。それなら、その依頼が終わってからでも構いませんわ。いつ頃に終わりますの?」

「そう急かすな。……はあ、そうだな……夏が終わる頃までにはどうするか考えとく」

「遅すぎますわっ! 夏の大会は終わってしまうじゃありませんか!」

「だがまだ1年あるだろ。まあ、その頃には俺への依頼も一通り捌けて落ち着いている……筈だし、その時にも気持ちが変わらなかつたらまた誘ってくれ」

「……曖昧ですわね。ですが……分かりましたわ。そういうことならこの話は一旦保留に致しましょう」

取り消しはしないんだな……さてはこいつ、欲しいものは何かなんでも手に入れるタイプか。

「本当ならこの後、最後の練習の時にコーチとして正式採用した旨を

皆の前で発表しようと思っていたのですが……まあ、無しになったのなら仕方ありませんわ。最後の練習も、きっちりみっちり付き合っ
て貰いますわよ?」

「ああ、それは勿論だ」

依頼だし、仕事だしな……いやあ、随分と評価されているが、その
実、俺は女の子をオカルトで墮とすために色んな学校に行きたいだ
けってバレたら幻滅されそうだな。考えたいのは嘘じゃないし、夏
くらいまでには俺の将来についてどうするかを決めようとは思っ
ているので、そこも嘘って訳でもない。

——とまあ、そんなことがあつてから、俺は最後の練習に付き合お
うと練習部屋に向かったのだが、

「……とーごー、ここを去るのか?」

……今度は衣が話しかけてきた。

いきなりそんなことを聞いてきて何だという感じではある。日程
は聞いていた筈だし、そもそも衣は俺を嫌ってる筈だ。

だがまあ……何でそんなことを聞いてくるのか、理由は分からなく
もない。こいつは事情というか、境遇が境遇だしな。俺に対して変な
縁を感じていても不思議ではない。

はつきり言つて、俺にこだわる必要はないと思うが、それでも会話
には付き合つてやろう。一応今は指導者だしな。

「……ああ、まあな。今日が最後だ。だけどせいせいするだろ? 子
供扱いしてくる鬱陶しい大人がいなくなつて」

「そ、それはそうだ! 衣を子供扱いするなんて許しがたい! 不届
き千万!」

「ならいいだろ。今日で最後なんだからな」

と、俺はその答えに頷いて練習部屋に向かおうとする。……が、そ
の前に、

「……だが、衣と打てる……いや、衣と打つて恐怖を感じない奇妙な打
ち手は滅多にいない」

「……そうか? そうでもないと思うけどな」

「寝言を。お前には分かっているだろう。衣は特別で、衣は……孤独

だ。周囲の人間は衣を恐れて近づかない。衣はいつも独りぼっちだ」
衣は僅かに顔を下に向けてそう告げるが……俺からすればよく分からない。その理由を口にする。

「……いや、学校とか他の連中は知らんが、透華達がいるだろ。4人も友達がいれば十分だ。俺なんかそれより少ない」

「……皆は、トーカが衣の為に集めた友達で……仲良くさせられているだけだ」

「はあ？ そんなの、お前が勝手に思ってるだけで聞いてみないと分かんねえだろ」

俺が見た感じ、親戚で気にかけている透華は勿論、井上や国広、沢村もそんな無理くり仲良くしている感じはしない。

無論、麻雀を打つ時の……特異な力を振るう衣を恐れてはいるが、それは衣個人を恐れているものではなく、あくまで麻雀のスタイルそのものを恐れているだけだ。

だから衣は別に孤独ではない。そう思ったのだが、どうやら衣の方はそうは思えないらしい。

「……無理だ。もし、断られたら衣は……」

「……そうか」

……ああ、なるほど。衣はそつちを恐れているんだな。

曖昧にしていたことを明るみに出したくない。元から期待していなければ、悩み苦しむことはない……が、それでも心のどこかでは期待してしまっている。

その気持ちはよく分かる。分かるが……衣。お前はそうじゃない。

「……ま、無理に聞かなくてもいいけどな」

「……うん……って、そうじゃない。衣はお前が残るかどうかを聞きに来たんだっ！」

「その話か……一々俺にこだわる必要もないだろう。何で俺にこだわる？」

「それは……衣も、確かに未だ腑に落ちていない部分はある。最初に感じた印象から、まさか衣がこんなことを口にするとは慮外なものだ」

しかし、と衣は一旦言葉を区切って、迷いながら続きを口にした。「だが……お前と打ち続けるに連れて、衣は不可解だが、ある感覚を得た。お前は、衣と似ていると」

「……それで？」

「麻雀の実力は多少は出来るとはいえ、凡人の域を出ない……普通の打ち手に感じる……筈なんだ。だというのに、同時に衣の感覚がお前に同じ様な匂いを感じてしまっている。衣と同じ、人外の領域に足を踏み入れた者の匂いだ」

「……はっ、お前の目は節穴か？ こんな雑魚がお前みたいなプロ顔負けの打ち手と同じな訳ないだろ」

「衣もそう思う……だが、お前と打っていて、不思議と落ち着くのも確かだ。それと同時に……何か違和感もある。衣はそれが気になつてしょうがない」

「……また随分と買いかぶられたし、興味を持たれたもんだな……。衣の口ぶりは、自分でも確信に至っていないかのようなものだった。

ただ衣の鋭敏な感覚が、俺を捉えているのだろう——俺の本質を。……これ以上は……なんだ。オカルトのこともバレそうだし、そろそろ切り上げるか。

衣の感覚なら俺の不純過ぎるオカルトに気づいてもおかしくないしな。ある意味、今日でここを離れるのは正解かもしれない。危ない危ない……ある意味、オカルトが発動しなくて良かったのかもな。

ただ最後にアドバイスはしてやろう。指導者としてだ。俺の言葉に説得力はないだろうが、一応だ。俺は少し屈んで衣と視線を合わせ、

「……まあ、俺なんか拘らずとも、お前と遊べる友達なんかこれから幾らでも出来るだろ。お前は可愛いしな」

「可愛い……それは関係ないっ！ お巫山戯が過ぎる！ それに衣は可愛くないっ！ 衣は恐ろしいんだ！」

「可愛いことを否定するのか……いやまあ、お前の自己評価はさておきだ。麻雀だけに絞っても、お前と打ちたいって思う奴は腐るほどい

ると思うぞ」

「……噂に聞くトッププロであればそのような者もいるか」

「違う。トッププロとかじゃなくてもだ。お前みたいなのはちょっと人より優れた感覚と能力を持つ者じゃなくても、お前と打つことが楽しかって言う奴はいるだろうよ」

俺は確信を持って言う。それは断言できる。同年代に絞っても、今まで指導してきた奴らは良い子ばかりだし、麻雀を純粹に楽しんでいる奴らばかりだ。ぶっちゃけ俺なんかよりそっちと知り合った方が
良い。

だが衣は疑わしいといった顔をしてるな……いや、そもそもお前の周囲の連中もそんなただけだな。あんだけ仲良くしといて友達じゃないってのも無理があると思うんだが……。

「……そんな奴等がいる訳ない。お前が特別だ」

「だから俺は特別でも何でも無いっての……それが証拠にもなるんだが……まあいい。どの道、今日が最後だ。縁があればまたここに来るかもだけだな」

「！ それは、いつ頃だ……？」

「分からん。ただ、夏を過ぎる頃には来るかもな。透華にコーチにならないかって誘われてるし。だからそれまで適度に頑張るとけ」

「なら今直ぐなれ！ お前は衣の感覚だと——」

「……はあ、感覚に頼りすぎるのもお前の悪い癖だな……まー、その辺りはそのうち痛い目見て治るだろうが……」

「むっ、感覚に頼って何が悪い」

「全部が悪いとは言ってねえよ。それだけに頼るのが……あー、もういいや。面倒くせえ。とりあえず、練習場行くぞ。ちよつとだけ普通の打ち方も教えてやる」

「なっ——」

と、そう言っただけ俺は衣を抱えた。そしてそのまま運んでいくのだが——うわっ、軽っ。こいつ、何食べたらこんなにか軽く小さく育つんだ？ もっと食べた方が良さそう。今度デフォで結構大盛りの店でも連れて行ってやるか……って、今日で最後だったわ。ま、それは縁が

あつたらだな。

「こ、衣を抱きかかえるな〜っ！ みゅーっ、離せ〜〜っ！」

「おっと、はいはい。それじゃあここからは歩いていけ」

「あっ……」

衣が抗議の声を上げたので離してやる。というか、あまりこういうことすると事案だしな……JCとかJK抱いてる俺が今更気にするこではないけど。ご、合意だからね。まあ合意ならギリギリセーフ……ということにしておこう。

というわけで衣を下ろして廊下を歩いていく。衣は少し立ち止まって、歩いていくこちらの背後で、

「……もし、衣に血の分けた兄がいれば、このような……」

「……何してんだ？ いいから行くぞ。今日はお前の調子も悪そうだし、せっかくだ。最後にボコつてやる」

「！ わ、分かっている。ふんっ、このアホゴミ雀士め。衣が負けるわけないだろう。片腹大激痛」

俺が敢えて聞こえない振りをしつつちよつと煽つてやると、衣が普段通りの得意げな様子に戻ったので、俺は息を入れる。……全く、最後に可愛いこと言われると調子狂うよな……。

——それから、俺は龍門渚での最後の練習に参加し、いつも通り指導したり、衣にボコられたりして過ごした。

何気に皆も俺との別れを惜しんでくれているようで、指導者冥利に尽きる。いや、別に正式な指導者職に就いている訳じゃないけどな。ちよつと麻雀が出来る根無し草のお兄さんだ。……言つてて悲しくなるから止めるか……。

とにかく、皆と最後の交流を深める。なんだかんだで連絡先を交換したり、雑談をしていると、

「後1か月近くはこっちにいるの？」

「そうなるな。他の学校からも依頼が入ってるし、5月いっぱいまでは長野県内をうろろしてる」

俺は国広のその確認の言葉に詳しい補足を入れる。俺がまだしばらくこつちにいる旨を口にしたからだ。

そして、それを聞いた透華が言う。いつも通り、自信有りげに、「なら、もう少し期間を伸ばして県予選を観戦していくといいですわ！ わたくし達、龍門渚高校が長野県代表となり……そしてわたくしが大いに目立って活躍し、アイドルとして輝く日を！」

「……こいつはアイドル志望なのか？」

「単に目立ちたいだけだよ……でも、確かにそれはいい考えかもね」「だな。せつかくだし見に来いよ。もつとも、あつさり勝ち上がるだろうから見どころはそんなないかもだけどな」

「県内だと、風越女子と城山商業が強豪……」

「ふんつ、有象無象の塵芥共が衣に勝てるわけない。どれだけ修練を重ねようが衣と同じ地にいる時点で敗滅は決まっている」

「県予選か……いつなんだ？」

「6月4日が予選で準決勝まで。6月5日が丸一日使って決勝戦だね」

県予選を見に来いと皆が言うので日程を聞いてみると、国広が日にちを教えてくれる。県予選か……確かに、見に行ってもいい。風越の連中とこの龍門渚……どっちが勝つかは興味がある。一応知り合つて、麻雀をちよつとだけ教えた者としてな。

「5日は満月……」

「あ、そうなんだ……ということは……」

「マジか。相手はご愁傷さまだな、こりやあ……」

「ふふふ、衣の独壇場だ。決戦の日は他校が衣に生贄を捧げる日になる。今から楽しみにしておくといい」

あつ……こりや無理だわ。グッバイ池田。風越エ……どんだけ運が悪いんだ。衣が最も強くなる満月の日と県予選決勝の日程が重なるとか……これ、見に行く意味あるか？ 風越には悪いが、龍門渚の圧勝で終わる気が……いや、意味とかじゃないか。一応、応援で行つてやってもいいし……。

「……ま、それなら一応見に行つてやるよ。俺も関わつた連中がどこ

「まで進むかは気になるしな」

「あ、そっか。東郷さんは他の学校にも行くんだもんね」

「とはいえ、悪いですがわたくし達は手加減しませんわ！ 如何に東郷さんの指導を受けようとも、勝つのはわたくし達ですよっ！」

透華が自信満々に言うが、そうだろうなあ……としか言えない。風越が辛うじて可能性はあるくらいか。残り2校の指導校が龍門渕や風越に匹敵するレベルで強ければ別だが、そんな可能性は、ほぼあり得ない。ということでも風越、特に美穂子と池田に懸かっている……美穂子はともかく、池田か……どうしてだろうな。実力は文句なしの全国レベルで、衣と美穂子を除けば、1、2を争う選手だったのに、妙に不安になるのは……とにかく、頑張れと連絡しておこう。死ぬなよ池田……と。——お、一瞬で返信きた。なにになに……『よく分からないけどあたしは死なないし！』……おお、ポジティブだ。その調子で頑張れ——なんか俺、美穂子に連絡するより池田の方が連絡頻度高い気がして嫌になるな……美穂子にも連絡しておこう。こつちには普通のチャットで。そうして俺は携帯をしまおうと、

「——さて、それじゃあそろそろ行くぞ」

「ええ、ではまた会いましょう。——ハギヨシ、外まで送って差し上げなさい」

「承知しました透華お嬢様。では東郷様、こちらへ」

「ああ。それじゃあな」

「ばいばい東郷さん。また会おうね」

「今度会う時はもつと強くなってるぜ」

「……またね」

「……とーごー！ また、その……今度も、衣がボコボコにしてやるからなっ！」

「……ああ、期待してる」

——と、俺は皆に別れを告げて部屋を後にする。なんというか、いつもながらちよつと惜しい気持ちになる。

ただまあ、これくらいがちよつどいいだろう。エロいことも出来なかつたしな……結局、役満は和了れなかつたし。三倍満をツモるのが

限界だったが、まさかあれで惚れてくれる訳もない。結局衣には負け
たしな。うん、なんかやつぱ溜まつてる感じがするな……でも次の高
校に期待するしかないか。

そう思つて、俺は長い長い龍門渚の廊下を歩く。……相変わらず広
いなあ。人が俺とハギヨシ以外いないのもあつてめちやくちや広く
感じる。こことももうお別れか。居心地良かつたんだが、強いて言う
ならセックスどころか自家発電も出来無さそうなのがキツかつた。
いや、するつもりはなかつたけど、出来ないってなるとちよつとした
ような気がしてくるから困る。実際、墮とせてもヤれなかつたらう
しな。

「……東郷様。数日間に渡るお勤め、お疲れ様でした」

「お前もな。なんだかんだ俺の身の回りの世話は手間だつたら」

「いえ、そんなことはありませんよ。東郷様と親睦を深められて、私の
方も楽しかつたくらいです」

道中、ハギヨシに話しかけられたので応じる。こいつはずつと超人
だつたな……ぶつちやけ、麻雀もそれなりに強かつたし。いまいち実
力は掴みきれなかつたが、それでも並以上の打ち手ではあつた。とい
うかある意味で、衣よりもオカルトかつ化け物だつたと思う。

「……それにしても、東郷様は本当にお強いんですね」

「……はあ？ いやお前、ちゃんと見てたのか？ 衣にはずつと負
けつぱなしだつたぞ」

いきなり謎な事を言い出したので眉をひそめつつ軽く言い返す。
皮肉かな？ いやでもハギヨシはそういう性格じゃないしな……
まあ、他の連中には勝つてたし、そういう意味では強いのに間違ひは
ない。とはいえ、透華にはそれほど……うーん、俺の雑魚っぷりが分
かるな。やつぱり嫌味かな？

「ふふ、まあ、良いでしょう。私としては、そちらも気がかりですが
……」

「……？ 何の話だ？」

「いえ、こちらの話ですよ。……それはそうと、東郷様がここを離れる
のは嬉しいやら悲しいやら……」

「おい。やっぱりからかっているのか？ 悲しいはともかく、嬉しいはおかしいだろ」

笑みでそう言われて反射的にツッコむ。こいつ……やっぱり遊んでやがるのか。まあそれくらい打ち解けたということでもあるし、こちらもそれくらいい発言を気にすることもないが、ハギヨシにしては珍しい類の冗談にも思える。気の所為か？ ……気の所為だな。ハギヨシは変わらず笑みを浮かべている。その口から何が飛び出すかわからないが、別に何を言われてもどうということはない。だから肩の力を抜いていると、ハギヨシは続けた。俺のツッコミに対して、

「いえ、本心ですよ。東郷様とは仲良くなれただけにここを離れるのが悲しくもあり……仕事が楽になると思えば、嬉しくもある。それだけのことです」

「ああ、そういうことか。まあ、それなら分かるが……意外だな。お前も仕事について大変だと思うんだな」

ハギヨシにも仕事は楽とか、大変とかそういう概念は残っていたんだな、と微妙に安心する。こいつ、マジで龍門家に仕えることが使命って思ってたそうだしな。ちよつとだけ人間らしいところが見れたいし、その発言の意味も汲み取れたからよしとする……のだが、ハギヨシは何故かそこで立ち止まった。少し歩いてから俺も立ち止まり、ハギヨシを見る。一体どうした？ トイレか――

「通常の業務であれば慣れていきますので問題はありませんが……東郷様の監視ともなると、中々に骨が折れる仕事でしたので」

「――あ？」

俺は呆気にとられる。え、は？ 意味が分からない。こいつは何を言ってる――

「おや、気づいていない振りがお上手ですね。あるいは本当に気づいていないのか……それでしたら、態々、身辺調査をした甲斐がありませんね」

「！……身辺、調査だと……？」

俺はその発言に反応する。こいつ、今なんて言いやがった？

俺が目を細めてハギヨシを見ると、ハギヨシは変わらない笑みのま

まで更に続けた。互いの距離を開いたまま頷いてみせる。

「はい。とはいえ、当たり前前のことです。龍門瀏家で採用される者……透華様がスカウトしようとした人材は勿論のこと、龍門瀏高校の入学志望者、その親族。龍門瀏家に関わる者は全て、その経歴や身元を一度は調査します。……とはいえ多くの者は特に問題なしと判断されます。危険人物など日本は諸外国ほどに多くはないですからね。些か過剰ではありますが、これも龍門瀏家の皆様の安全の為」

「……それで……俺の身元も調べたのか？」

「ええ、まあ。それは勿論。ですが……」

と、ハギヨシはそこで笑みを消して、真顔になって告げた。一度言葉を区切った上で告げるのは、俺にとっては何とも言えない言葉だ。「率直に、結論から申しますと……東郷様。あなたからは——何も出てこなかった」

「……そうか。それなら……俺は問題ないってことか？」

自分でそう言いながらも、ハギヨシの顔にそう書いてないことを読み取り、辟易とする。——まるで、それこそが怪しいのだ、と言っているように。

「いえ、何も出てこない、というのは問題が無いことの証ではありません。むしろこの場合は……隠された。もしくは、知ることが出来なかった、ということになります。そしてその結果は、問題がないことと同義ではありません」

「……当然、だな。普通の人なら探られて痛い……とまではいかないが、恥ずかしい腹の1つや2つ、持つてるものだしな。……とはいえ、俺にもそういう過去は色々あるはずだが？」

「ええ。確かに、東郷様の過去……学生時代の活躍については色々出てきました。小学4年生の時に初めて参加した全国小学生麻雀選手権大会にて初優勝。それから小学6年生まで怒涛の3連覇を達成し、鹿児島の名門、千石中にスカウトを受け、そこでも不動のエースとして活躍。更には世界ジュニア、13歳以下の部では大会の記録を塗り替え——」

「——その辺にしてくれよ。過去の事を言われるのは……あまり好き

じゃない」

「……まあ、そこは良いとして……確かに、過去の事が全く出てこなかった訳じゃない。ですが……知ることが出来たのは、あなたの記録、公的な活躍だけでした。……この意味が分かりますか？」

分かる——が、俺は首を振る。親切に頷いてやることはない。

「……さあ。俺は情報の専門家でもないから分かんねえな。大卒の偉い先生にでも聞いてくれ」

「……分かりませんか。普通の人なら出てくるはずの——家族構成。そして家柄は勿論のこと……龍門渚の情報網であれば、その生い立ちから今に至るまでのあらゆる事が情報として出てくる筈。——だが、あなたにはそれはない」

ハギヨシは言外に眼で言う。それこそが、俺を不審に思う理由だと。

しかしそれに対しても、俺は呆れるように息を吐いた。とんだ勘違い野郎だと、

「……プライバシーの欠片もねえな。それで？ 人の個人情報も赤裸々に明かそうとしてそれで満足か？ 言っておくが、俺にそんな大それた秘密なんてねえぞ。俺には普通のどこにでもあるような生い立ちしかない。調べられなかったのは、その調べた奴がいい加減な仕事でもしたんじゃないやねえか？」

「……龍門渚の情報部門は優秀ですよ。ましてや、調べたのは私の師でもある——いえ、まあそれは良いでしょう。では、問いますが……家柄と家族構成。父親と母親の職業を教えてくださいますか？」

「家柄は知らねえ。多分、ごく普通の家だ。親父は外資系の企業に務めて海外に出張を繰り返していて、お袋もそれについて行っている。お袋は元巫女だ。後は妹がいる。まだ学生のな。……これで満足か？」

「ええ、まるで普通を演出するかのような回答をありがとうございます。色々と分かりましたよ。本当の事を話す気がないこととか」

ハギヨシの笑みの皮肉に、俺はため息を漏らす。肩を竦めて、

「信じる気がない奴には何を言っただって信じない。一応、本当の事を

言ってるんだけどな。インタビューでも家族の事は話さないからこれでも特別なんだぜ？」

「……まあ、その情報の真偽はまた後で精査致します。それと、誤解してほしくないのですが……龍門瀏家は東郷様を害しようとか、秘密を暴いて赤裸々にしてやろうとか、そういう悪意をもつての行動ではないことはご理解ください。私自身も、東郷様とはこれからも……不躰ながら、友人として、仲良くさせて頂きたいと思っております」

「……よく言うな。それならこんなことは止めてほしいもんだが」

「いえ、そうはいきません。私は龍門瀏家に仕える人間として……当主様や透華様の身の安全と利益を何よりも優先とします。その為にするべきことは、絶対にやらねばなりません」

ハギヨシのその言葉は本気のものだった。口は苦笑気味に笑ってはいるが、目は笑っていない。

ハギヨシは本気で、俺に悪意がある訳でもなく、むしろ仲良くしたいと思っているが……龍門瀏家の為に、俺に探りを入れているのだ。……まったく、迷惑な。悪意がないだけたちが悪い。俺は心底呆れ果てて、もうこのまま帰ろうかと思うが、ハギヨシの話は終わっていないのか、続けて口を開いた。それは、

「……そこで、東郷様の過去を調べた代わり……という訳ではございませんが、少し私の身の上話も聞いては貰えませんか？」

「お前の身の上話？」

「ええ、どうでしょう。興味はありますか？」

ハギヨシの身の上話と言われて、興味は……少しある。

この完璧超人がどのようなに育てたかを聞けるのだろうかという好奇心がある。人の過去に無闇に立ち入るなどあり得ないことだが、ハギヨシはその代わりと言ったし、確かに、先に探ってきたのは向こうである。俺があまり話したくないことも、ある程度は知られてしまった。

だから、俺も少しは相手のそれを知ってもいいと思ってしまう。

……別になんの等価交換にもなっちゃいないが、俺の気を晴らすために、俺は渋々と頷いた。

「……簡潔に言え。あんまり長かったり、面白くなかったら帰るぞ」
「ええ、留意しましょう。それでは……そうですね、まず私には、親が
いません」

話が始まっていきなり、まあまあ重いことを言われる。だが、俺は
気にせず先を促す。

「それで？」

「……眉一つ動かしませんね。大抵、これを口にすると言いた人は少
しバツの悪そうな顔を浮かべるというのに」

「先に俺の事を調べられたしな。悪いと思う気持ちは今に限ってな
い。ほら、さっさと続けろよ」

「……そうですか。ならば続けましょう。……まあ、両親は……私が
子供の頃に事故で亡くなりました。物心ついてすぐの出来事でした
が、それなりに鮮明に憶えています。両親が死に、施設へ預けられた
日。私の人生の始まりとも言える日のことは」

続けて重いことを言われる……が、まあそういうこともあるだろ
う。

世の中、普通のありふれた家庭環境ばかりだと思つたら大間違い
だ。世の中には、普通に生きる人々では想像もつかないような——ま
では言い過ぎかもしれないが、それでも、ドラマや漫画で見るような
特殊な家庭、不幸な生い立ちなどは沢山ある。

親がない、なんて比率で言えば珍しいかもしれないが、それでも
確かに、親のいない子は現実に一定数存在する。

それらは比率として珍しい……つまり普通ではないからこそ、普通
の人が聞けば気の毒なことだ、可哀想に、とその境遇に同情する。

だが、それを実際に体験している者にとっては、それこそが当たり
前の自分の環境である。必ずしも、それが不幸とは限らない。

貧乏人が金持ちの生活を、金持ちが貧乏人の生活をリアルに想像出
来ないように、普通の人間にその状況に置かれている者の本当の気持
ちは理解出来ない。それを理解出来るのは同じ様な境遇の人物だが、
それでも本当の意味では理解出来ない。同じ様な境遇と言つてもそ
れぞれ違う。ほんの僅かでも差異があるのならば、真の意味での同情

は不可能だ。相手の悲しみは相手にしか、その当人にしか知り得ないもの。実際のところどんな感情を抱いているのか、他者には分からない。分かると言ってるのは似たような境遇の人間……もしくは、話で聞いただけで悲しんで、分かった気になっているだけの人間である。故に俺は……その話を黙って聞いた。黙ることで続きを促すと、やや間を置いてハギヨシも口を回した。

「ですが私が施設で生活することにはなりませんでした。私を、養子として迎え入れてくれた人がいたからです」

「……つまりそれが……」

「ええ。この龍門渚家の関係者で、現当主様の執事……私の師でもある御方です」

「お前の師か……さぞ凄い……いや、ヤバい人物なんだろうな」

「ははっ……確かに、言葉を選ばずに言えば、ヤバい人物には違いありませんね」

俺がそう言うと、ハギヨシは珍しく、不意を突かれたというように破顔した。変にツボに入ったようだ。

だが、ハギヨシの師で、ハギヨシがヤバいという人物か……とんでもない化け物が頭に浮かんでしまうが……ともかく得心した。なるほど。それでハギヨシは執事になったという訳だな。

俺が勝手に納得していると、ハギヨシは更に続けて口にした。懐かしむように、

「ただ、かけがえのない恩人ではありません。あの方は私を育てました。ただ子供としてというだけではありません。私が執事になると志願したからこそ、あの方は私に執事としての全てを叩き込むことを決めたのでしよう」

「執事としての全て……嫌な予感しかしないな」

「ふふ、執事は主に尽くすため、万事に通じていなければならぬ——師の言葉ですが、まさにその通りに、師は私を鍛え上げました。礼儀作法は言わずもがな。一般的な学校で習う学問だけでなく、あらゆる知識を学び、それを実践し、プロフェッショナルなレベルで行使出来るまで。例えば——料理」

そう言つて、ハギヨシは手元にフライパンを出してみせる。……いや、それは手品だ、とツツコミたいがツツコミはしない。話の腰が折れる。

「料理であれば世界各国のあらゆる料理を学び、その調理法を実践出来るように。おかげで和洋中、何を作ってもプロの料理人が作った物と遜色のない料理が作れると自負しております」

「……ちよつと待て。そういや、度々飯の用意を、とか言つてたが、あれは……」

「そうですね。毎回ではありませんが、私も参加する時はありますよ。私の料理は皆様にも好評を頂いておりますので」

……やっぱり化け物だな。あれをまさかハギヨシが作つてたとは。

しかも他の仕事をしながらだ。それを示すような、ハギヨシの自慢のような話は続く。お次は、

「例えば、お裁縫。それであれば、ただの裁縫には留まらない……デザインを描き下ろし、型紙を引いて、実際に裁断、縫つて衣服を作るところまで鍛えられました」

「今直ぐパリにでも行つてデザイナーにでもなつたらどうだ？」

「パリには修行の為、一時期滞在していましたが、さすがにデザインや……これはまあ、他の芸術分野にも言えますが、本人のセンスが色濃く出るものは超一流と呼ばれる方々には敵いませんよ。技術で補える型紙などは才能があると褒められたこともあります。デザイン画も型紙も何もかも超一流の師にしてみれば、私など、どこにでもいるただの凡夫でしかありません」

いやいやいや……ハギヨシの基準はおかしい。いや、真におかしいのはハギヨシの師匠だが……もうそれはただの化け物なんじゃないか？ オカルト持つてるだろ。もしくは存在がオカルトだ。フィクションの中でしか聞いたことのないぞ、そんなの。

ハギヨシが凡夫なら、俺はゴミクスだな……と、俺は少し落ち込み引いていたが、俺が普通に思考出来たのはそこまでだった。

——ハギヨシが、自分の生い立ちを語つた真意を、俺はようやく理解した。

「あらゆる分野に精通し、透華お嬢様……ひいては龍門瀏家にお仕えし、その利益となること。そのためだけに、私は幼少期から修行を重ね、今に至る訳ですが……その中でも、最も力を入れて身に着けた者が、何か分かりますか？」

「……いや」

俺が首を振ると、ハギヨシは一旦溜めて頷き、答えを告げた。

それは確かに執事として——いや、従者として、必要と言えるものだった。

「透華お嬢様や龍門瀏家の方々を守るための技術……戦闘訓練や警護訓練です」

「！」

ハギヨシはそう言って、軽くその場で構えてみせた。それを見て俺は驚き、目を見開く。素早く、堂に入った動きだった。

「師は私に……あらゆる武術を叩き込みました。空手、柔道に始まり、古武術に中国拳法、システムやクラヴ・マガといった軍用格闘術なども……他の分野でやったように、世界中の様々な技術を学び、身体に叩き込んでいったのです」

「……武術や格闘技なんて習ってどうするんだ？ そんなものより、銃の訓練とかしたほうがいいんじゃないか？ 今時、格闘技なんて流行らねえし、銃の方が強いだろ」

「さて……確かに現代の戦闘は銃ありきのものと言っても過言ではありません。日本はともかく、海外では銃なんてさほど珍しくもない。確かに私も海外などでは環境に対応するため、射撃訓練は受けていますが……戦闘は銃が全てという訳ではありません」

と、ハギヨシは懐から一振りの得物を取り出してみせた。

それは——明らかに包丁とは違う、戦闘用の刃物。刃渡り10センチを越える戦闘用ナイフだ。

それを軽く見せつけるように振りながら、ハギヨシは言う。

「近距離において、有用なのは銃ではなく、近接格闘術。武器であればナイフなどが有用です。近距離で戦うケースが想定される以上、武術、格闘技のスキルはいつの時代も戦う者の必須スキル。単純に素手

同士でも、何も習っていない者よりは技術を持った方が強く、そもそも武術には恐怖を克服する術ともなり得る。一般人であれば、いざ鉄火場に遭遇した時に何も出来ず動けないといったことが多々あり得ますが、訓練を受けた者であればそういう時の対処法、動き方というものを知っている。単純に慣れるという意味でもそうです。声を出すことで身体の強張りを解放する術も、元は武術から来たもの」

「……良く喋るな。お前が格闘技オタクなのは分かったからそろそろ終わつとけ。話もそろそろ聞き飽きたしな……というか、そんな刃物持ってたら普通は通報だぞ。通報していいか？」

「それはご勘弁を。……ですがその各国の警察、軍隊も、必ず何らかの戦闘術を習っています。それは何故なら……必要とされているからです。必要のない技術であれば習う必要はない。だからこそ、私もあらゆる障害、危機から透華様をお守り出来るように、あらゆる戦闘技術を学んできました」

「……しつこいな。結局何が言いたいんだ？ 俺は強いです自慢か？」

付き合ってもらえないな、と俺は踵を返し、その場を立ち去ろうとする。道筋は憶えている。外までは難なくたどり着ける。

そう思ったのだが——背後からの言葉に、俺は立ち止まらざるを得なかった。

「東郷様……私は、あなたを知っている。たった一度ですが……ある場所で、あなたを見たことがある」

「おそらく、ですがね。それに、そうだとして龍門洩の情報網に引つかからない意味が、私には完全にまだ理解出来ていません……ですが、もしそうだとしたら……」

と、ハギヨシはそこまで言って、悩み、首を振る。そして、

「……いえ、だとしても私は東郷様を信じていますよ。あなたは龍門洩家や透華様、衣様にとって……良い影響を与えてくれましたしね」

「……………そうか」

俺はその言葉に迷いながら、内心で困惑しながらも頷く。そしてそ

のまま帰ろうとしたが、ハギヨシがそれより先に頭を下げた。それは俺に対する謝罪で、

「……色々と立ち入ってしまい、申し訳ございませんでした。不躰ですが、私としましても、東郷様とは今度とも良い付き合いをさせて頂きたいと思っています」

「……はあ、ほんと良く言うな……別に良いが、一々人の過去を探りまわるのはやめろ。俺は別に……大した人間じゃない」

「そのようですね」

「……頷かれるとそれはそれで腹立つな」

「冗談です。東郷様は優秀だと思いますよ」

「それはそれで……ああ、もういい。俺はもう行くからな」

「はい。お気をつけて。また会いましょう」

ああ、と頷き、俺は車に乗り込んで次の目的地に出立する。……まったく、最後にちよつとモヤモヤしちまったな。

発進し、少し離れたところでの信号待ち。車中で俺は先程言われた言葉を思い返し、何とも言えない気分になってしまう。

「どいつもこいつも……俺なんかに拘りやがって……」

まるで悪態をついているような独り言。それを口にする理由は——つまりとところ不可解。自分で自分の評価に関する答えを出しているからこそだ。

「俺なんかの何が良いのかね……」

正直、俺は皆が言うように良い人ではない。

むしろクズ。人間のクズだ。普通の人間とは程遠い人物が俺。

だからこそ俺が人に好かれるには……オカルトが必要不可欠なのだ。

……はあ、次は清澄高校か……良い女がいるといいけどな……。

俺は吐息混じりにそれを思いながら、胸の内に燻るモヤモヤを再び閉じ込めた。

清澄での出会い

——女向けサービスってセコくね？　って思うのは俺が男だからだろうか……。

「え、これ女性だけのサービスなんすか？」

「ああ、はい。すみません。男性の方にはやっていませんので……」

「……分かりました。ありがとうございます」

と、俺は長野県内にあるとあるラーメン屋で店員にそこそ愛想よく接して会話を打ち切ると、割り箸を取ってラーメン炒飯セット。煮玉子トッピング付き1050円を頂くことにした。

軽く麺をすすり、スープを飲む。信州味噌ラーメン……味噌ってそんなに食べないがたまに美味しいところで食うとより美味く感じる。炒飯の味も悪くない。ラーメンと炒飯の組み合わせは鉄板だよな、と内心頷く。

これが1050円。別にいいんだが、ラーメン炒飯サラダセットっていうラーメンに炒飯、そしてちっちゃいサラダがついて850円っていうのは、なんかこう……ズルくない？　というか、何気にレディース向けのセットの方が量多いってのもどうなんだ。男だつてミニサラダ欲しいんだが……というか1000円程値段が違うのがなんともな。

最近の世の中は男に優しくない。いやまあ、女性向けサービスを充実させるのは良いんだが、それなら男も……と考えては駄目なのだろうか。

俺は行ったことないが、婚活パーティーの参加費なんか男性の方が多めに取られるし、女性専用車両とかも、アレそんなに意味ないよな……女の痴漢とかいるくらいだし。なんなら男が男に痴漢することもある。嫌過ぎる。だから俺は電車があまり好きじゃない。

そもそも最近は女性の年収が昔と比べてかなり高くなっているらしい。女性同士の結婚とかもあるしな。それにプロ雀士は女性の方が年俸も高い傾向にあるし……でもデートだと、奢らない男性はクソだと言われる。世知辛い。まあそれでもやはりさん相手とかだと何

の苦でもなかったことを考えると、結局相手次第なんだよな。つまり、奢らないってことはそういうことだと思つて欲しい。いやまあ毎回奢ってるけどね。女性と行く時は。奢らないと印象悪いし。

ただ一番奢りたいはやりさんとか相手だと、年上で先輩だからって理由でお金を出してくれたりするので、奢れなかつたりする。男として情けないが、どう考えてもはやりさんの方が稼いでる手前、何も言えない。良子も同様だ。むしろ奢ろうとすると心配される。もう實質ヒモ。周囲の人に白い目で見られることも多数。つまり周囲からもクズって思われてるってこと。

……まあ、クズであることに違いはないけどな。何しろ俺は世に珍しきハーレム男。

美少女雀士をとつかえひつかえして、夢のおっぱいハーレムを築くために全国各地を周り、日夜戦い続けている元プロ雀士である。

世間的には一夫多妻なども認められているため、問題はない……：訳ないんだよなあ……。

認められてるとはいえ、それでも二股とかしてる奴は女の敵。クズとして扱われるのは変わらないので、あまりバレたくはないというか、出来ればひっそりとクズとして活動したいところ。結局クズだ。

実際、その程度を気にしてやめる俺ではない。美少女とのセックスは天にも昇る心地。最高の快感が得られる行為であるだけに、そのための努力は惜しまないのである。

……いや、それを考えると、この後も指導に出向くというのに、ラーメン食つて行くのはどうなんだと思わなくもないが、ニンニクとか使う系じゃないから許して欲しい。ブレスケアだつてちゃんとするしな。

それにしても久し振りのラーメンは酷く美味しく感じるな……：なにしろ、龍門淵に滞在中は常に食事は龍門淵の中で取つていたため、ラーメンとかは全然食べてなかった。

向こうの料理も美味しいんだが、やっぱりこういう普通の大衆向けの料理だつて食べたくなる。ガッツリ食べたくなる。その衝動のままにここに来たが、来て正解だった。レディース向けの値段設定は納得

行っていないが、だからといってどうこうなる問題でもないので食べ終わる頃にはそこまで気になってない。……ここ、宿からも近いし、美味いな。また来よう。何気に気に入ってしまった。悔しい。負けた気分だ。

「はあ……どこかで一服するか……」

と、俺はラーメン屋を出ると、そのまま近くのコンビニに。そこでアイスを買って車の中で食べる。脂っこいものを食べた後って甘いアイスとか食べたくなるのは何でだろうな。

そして周囲は……人があんまりいない。お昼過ぎだが、やはり平日だからだろうか。

それに加えてこの辺りは、これから行くことになる清澄高校がある。ちよつと距離はあるが、どちらにしる学生がいる時間帯ではないからな。というか、学校から最寄りのコンビニが割と遠いつて辺り、微妙に田舎っぽいよな。完全に田舎って訳でもないけど。長閑な場所だなんて印象は受ける。

それにしてももう5月。気温的にはもう初夏だと言っている。ぶつちやけいつもの格好だとそろそろ暑くなってくる時期なので、ジャケットは脱いだりすることも多々だ。室内ならクーラー効いているから大丈夫だけど。文明の利器って偉大。そんな文明の利器——携帯を開いて、俺は何となく色んなサイトや情報を流し見しながら、ふと思う。——そういうえば、オフ会もあるんだよな、と。

「のどっち、か……どんな奴なんだろうな——って、どうせおっさんなんだろうけど……まあ若い兄ちゃんの可能性もあるか」

ネット上で伝説とも言える打ち手——のどっち。

その相手とフレンドになり、オフ会の約束をしていた俺は、ついにこの間、日時などを決めた。龍門渚から出て、宿についた直後の話だが、

『お久しぶりです、のどっちさん』

『お久しぶりです。日程が決まりましたか?』

……そう、圧が凄い。文章、チャットの文面だけではちよつと伝わりにくい、いきなり日程の事を聞いてくる辺りとか、チャットを

打ったその直後、一秒以内に返信が来たこともちよつとビビった。……まさかとは思うがこいつ、俺が来るのをずっと張つてたとかじゃないだろうな。そうだとしたら勘弁。ホモのストーリーカーとかNG。……しかしそうとは限らないので俺は普通に接する。ただの偶然だよな。

『ええ、まあ。来週の土曜日なんて如何ですか？』

『来週の土曜日……はい、大丈夫です。行けます。行けなくても行きます』

『行けないならまた別の日でもいいですけど……行けるならその日にしましょうか』

『はい！ あの、オフ会は初めてですので粗相をされるかもしれませんが、色々ご教示ください。よろしく願います！』

『ああ、いや、自分もオフ会は初めてなので。そんなに身構えることはないですよ。普通に楽しみましょう』

『ヤクマルさんも初めてですね……』

え、なんだその余韻。三点リーダーやめろ。というか、いつも思うが、文章で……これ打つのはなんだか演出されてる気がしてたまに気になるよね。いや、俺も使うんだけど。ただその余韻はちよつと、なんだ。怖い気がする。マジで大丈夫なのかこの人。

『そういう訳で、当日はよろしく願います。一応、連絡先を渡しておきますね』

『ありがとうございます。嬉しいです』

『はい。それじゃあ待ち合わせ場所は——』

そうして、俺は待ち合わせ場所などを調整して、のどつちさんと別れる……のだが、うーん……連絡先を渡したただけでお礼を言われたのは、なんか意味があるのか、俺が気にしすぎなのか……なんというか、どうにも気になってしまう。

まあ、とはいえ仮にヤバめの人物だったら即逃げればいいし、そこまで危ないとは思っていない。そして俺は、当日の待ち合わせ場所と、その周辺のレストランやレジヤースポットを確認していく。マメだと思いかもしれないが、俺は男相手でも出かける際の下調べは怠ら

ない。

というのも普通に調べないと迷ったりして困るよね。土地勘もないし、美味しい飯屋とか、カラオケ店とか、雀荘とか、ゲーセンとかシヨッピングモールとか、色々調べとかないと、男同士でも暇を持て余す可能性がある。楽しく遊ぶためには必須だと個人的には思う。

しかし、どうせなら女の子が……それもおっぱいの大きい美少女なら良いよなって。それならやる気も数倍、数十倍になる。どうせ男だろうけど、理想はそれ。例えば……そうだな。俺は何気にツインテールとかサイドテールとか、ツーサイドアップみたいな、髪を両側とか片側で結んでるのが好きだったりする。おっぱい以外だとなんかそういうのが可愛く見える。……なので、最初はやりさんを見た時は勃起が止まらなかった。下品ですまん。いやほんと、可愛くておっぱいがめちやくちやデカいとか最高なんだよなあ……だからまあ、そんな感じの美少女とのオフ会になればいいが、そんなのは妄想でしかないの、頭の中だけに留めておく。下手に期待すると、実際に会った時に落胆しそうだし。

そんなこんなで携帯弄りながら色々考えてると、そろそろ時間だ……後、美穂子とのデートもどこかで時間取りたいんだけどな。土曜夜とか日曜とか？ その辺りも後で考えようと、俺は車を発進させて、清澄高校へと向かったのだが――

「……まあ、普通の学校だな……」

特に言うことはない普通の学校だ。有珠山高校のように、ミツシヨン系の学校という訳でもない日本中どこにでもありそうな普通の県立高校。

……なーんか、こう……パツとしないというか、ビビッとこないよな……こういう普通の学校にこそ、美少女が潜んでいるという夢を見れなくもないが……毎回毎回、美少女がいるってのもツモ運良すぎて俺らしくない気がするし。

しかし依頼を受けた以上はちゃんとやらないとな。悪評が入ると今後の活動にも支障が出るし……というわけで連絡しようとする、
「……も、もしかして東郷プロですか？」

「あ？」

携帯を取り出したところで背後から声を掛けられる。もうプロじゃないんだが、こういうことはままある。どこにも酔狂なファンというのはいるものだ……と、振り返ると、そこには金髪の男子がいた。身長デカいな……まあいい。普通に應對してやろう。

「……元、な。今はプロじゃない……が、俺を知ってるってことは麻雀部か？」

「は、はい！ 須賀京太郎すがきょうたろうって言います！ 1年生で麻雀部員です！

よろしくお願いしますー！」

「……おお、よろしくな」

と、物凄く元気よく挨拶されたので、その手を取って握手する——いや、なんか癖で握手しちゃうんだよな。プロ時代はそんなに人気なかったとはいえ、やはりプロ相手だとファンですって言われて握手や写真を求められることは多い。

だから握手してやったのだが……

「すげえ……本物のプロと握手しちまった……確かに、なんだか芸能人って感じが……」

……なーんか、普通の男子高校生って感じだな……反応も普通だ。田舎の学生ってのは大体こんな反応になる。今まではそういうことはほぼなかったが、学生ってのは芸能人——まあ厳密には違うが、プロ雀士なんてほぼ似たようなものだ。タレント業とか普通にやるし。だから大したことない相手でも、それがプロ雀士とか芸能人ならわーきやー騒ぐ。

まあ嬉しくないことはない。だが、男子か……イケメンだな。だが、ちよつと不安になる。もしかして、男子部の依頼を受けちゃったのか？

「あつ、すみません。1人で舞い上がっちゃって……その、部長から案内と出迎えを任されてまして……」

「ん、そうなのか。態々悪いな。……ところで、男子部なのか？」

「えっ？ あ、いや、自分は男子部員ですけど、他は全員女子で……って、あれ？ 優希の奴、どこに……っ？」

ああ、女子はいるのか……良かった——って、何い!? テメエ、今なんて言いやがった!? 自分だけ男子部員で、他は全員女子だと!? そんなのハーレムじゃねえか——って怒るかと思つたら大間違いだ。真面目に、リアルに考えてみよう。女子だらけの部員の中に男子が1人なんて……そんなの、普通なら辛すぎる。

そりやあ漫画みたいにモテモテなら良い気分だろうが、普通はそうじゃないし、肩身が狭いだろう。この須賀って奴、苦労してそうだな……少し優しくしてやろう。優先は女子だけど。

そんな須賀は周囲を見渡して誰かを探している。……なんだ? 誰かと一緒に来たのか? ——って、

「どーん!!」

「うおっ!」

俺が見ている前で、須賀の後方から走ってきた小柄な女生徒が、京太郎を脅かした。ん、中々可愛いな。……ただその一発目の行動からして俺がちよつと苦手そうな相手かもしれない。騒がしそう。

「キサマがプロだな!」

「……元、な。お前も麻雀部員か?」

「うむ! 片岡優希かたおかゆうきだじえ! よろしくお頼み申す!」

「ああ、よろしく」

その片岡優希と名乗った美少女は、何故か手元に……なんだ、タコスか? それをぱくつきながら元気よく挨拶してきた。キサマって言われるのはちよつとアレだが、それくらいでイラツとしてもしょうがない。女だし許してやる。というか、声が可愛いな。ロリ気味のショートカットの元気娘でこの声か……まあ、ありっちゃありだ。十分やれる。

「優希っ、お前、脅かすなよっ!」

「油断してる方が悪いんだじえ」

「ぐっ……この……」

「……仲が良いのは良いことだが、そろそろ案内してくれるか?」

「あ、はいっ! すみません!」

「京太郎が怒られてるじえ」

「誰のせいだ誰のっ」

……この2人、もしや付き合ってるのか？ だとしたら京太郎、お前に優しくすると言ったが、あれは嘘だ。俺は彼女持ちには容赦しない。エロエロハーレムを築いてる身であり、ある程度余裕はあるとはいえ、学生時代から彼女がいる男には厳しく指導してやらないとな。これも指導者として当然の事だ。

とまあ、そんなことを考えながら部室があるという旧校舎へ。部室の扉を開けると、そこにいたのは2人の女生徒だった。

「あ、来たのねー」

「ご苦労さまじゃ二人共。……と、そちらの方が……」

「へいつー！ 元プロ一丁ー」

「出前かよ……」

片岡の発言に対する京太郎の呆れるようなツツコミを聞きながら2人を見る。2人とも立ち上がり、俺の前に並ぶが……というか、少ないな人数、と2人の挨拶を聞きながら思う。

「おお、そいは……初めまして。2年の染谷そめやまごです」

「私は3年で部長の竹井たけいひさ久よ。いやあ、まさか本当に元プロが来てくれるなんて思わなかったわ」

「……東郷仁だ。よろしくな。……それで、他の部員は……？」

「ああっ、そういえばのどちゃんがいらないじえ」

「和にはちよつと備品を取りに行つて貰つてるわ。……とまあ、見ての通り、部員5名の弱小麻雀部。しばらくの間、ご指導お願いしますね？」

後1人か……ふむ、竹井も染谷も美少女つちや美少女だが……俺の琴線には触れない。刺さらない。胸もないしな。竹井はちよつと飄々とした感じのセミロングで、染谷はかなりの癖っ毛に眼鏡でちよつと特徴的な口調。多分広島弁。2人とも美少女だ。うん、せめて胸があればな……。

「ああ、出来る限りのことはしてやる」

「あら、頼もしいわね」

「まあ、元とはいえプロが打つてくれるだけでありがたいからのう」

「というか、よく呼べましたね……部費とかカツカツだって聞いたのに……はっ、まさか……」

「気づいてしまったな京太郎……そう、部長は会長権限で予算を横領——」

「してないわよ。知らないの？ その元プロ、自分のブログやSNSで5000円でどこでも1日麻雀を打つ、教えるってのを出しててお買い得だったのよ」

「マジかつ！ てつきり悪どいことをしてるのかと思ったじえ……」

「俺もちよつと思つた……」

「もうっ、酷いわね、皆して。こんな美少女がそんなことする訳ないじゃない。ねえ、まこ？」

「普段の行いが行いじゃけえ。諦めさんな」

……賑やかだな……というか、今のやり取りで大体掴めた。この竹井が掻き回すタイプの厄介な先輩で、染谷は縁の下の力持ち。片岡は賑やかしで、京太郎はツツコミ役つてところか。

バラエティ番組で例えるなら、メインMCが竹井で、アシスタントが染谷。ひな壇に座る芸人2人が片岡と須賀つてところか。こうなってくるとアイドル枠とかも一応必要か？ 後2人くらいいれば番組が成立しそう。謎のプロデューサー目線である。

「……まあ、俺はどんな相手とも打つし教えるけどな……ここはどういうのを目指してるんだ？」

「どういうのって？」

「そのまんまの意味だ。俺は5000円で教えるってしか言っていないからな。子供向けに教えたり、和気藹々とした感じで楽しむような感じなら程々にやるし、全国を目指したり本気でやっているとこなら本気で教える」

と、俺は内心はふざけていても、言葉ではそう言っておく。まあこれはそのまんまで、実際今までは結構本気の連中ばかりだったとはいえ、そういう奴らばかりが依頼してくるとは限らない。中にはちよつとお試しでプロと打つてみたいって思うやつもいるだろうし、弱小麻雀部相手に本気を出したってやる気が削がれたりして不評になる可

能性だつてある。

だからまあ、端的にどれくらいレベルでやるのかを聞いたのだが、竹井は笑顔であつさりど、

「それじゃあ、全力でお願いね?」

「……ほう?」

「え、ええつ!? マジっすか部長……」

「マジよ。せっかくプロがいるんだもの。本気で打ってもらわないと勿体ないでしょ?」

竹井はおちやらかした様子でそう言う……が、目の奥は本気のような。

というかこいつ、なんかちよつと変な感じあるな……例えるなら美穂子みたいな、準オカルトくらいの匂いがする。その片岡とかもそうだが、まさかこいつら……。

「……前者の質問にはまだ答えてもらっていないが……」

「……まあまあ、それは良いでしょ? とりあえず、依頼主の意向なんだから本気でお願いね?」

「まあ、それはそうだな……」

そう言われてしまつては俺としてはそうするしかない。元プロと学生とはいえ、依頼主からの意向と言われたらそうせざるを得ないしな。

実際、普通に打つても大丈夫そうな面子である。……いや、須賀は怪しいけどな。でも一応鍛えてやろう。後は、もう1人の女子部員がどうなのか……。

「——遅くなりました」

「あつ、戻ってきたわね。プロが来てるわよ」

「のどちゃん! 遅いじよ!」

——と、そんなことを考えていると部室の扉が開かれ、最後の1人が……。

「元プロですか……初めまして、1年の原村和はらむらのどかと言いま——」

「? 和、どうしたんじや?」

原村和——そう名乗った女の子を見て、俺は固まる。相手の言葉は

殆ど聞こえてない。

「……あ、いえっ……すみません。少しぼーっとしてしまつて……その、よろしくお願いします」

「……ああ、東郷仁だ。これからよろしく頼む」

「具合でも悪いのか？」

「それは大変だじえ！ のどちゃんはおっぱいが大きいから熱が籠もりやすいからな！」

「籠もりません……」

和が優希にジト目でツツコミを入れる。その際に、胸を軽く手で押さえていたが……俺は和から目が離せない。

まあ、端的に言うところ——でつつつかい。でつかいおっぱい。そして、超絶美少女がそこにいた。

改めて思考を冷静にしつつ品定めするが、冷静に見ても思う。めっちゃ可愛いなこいつ……顔の造形が綺麗で可愛い美少女というだけじゃない。長くサラサラで艶のある髪をツインテールに結んでいてめちやくそ可愛い上に、おっぱい。おっぱいがデカイ。もうおっぱいがおっぱいだ。語彙力死亡。いやもう白地の制服の胸元を押し上げるそのたわわなおっぱいが大変にすばら。胸が大きすぎて、制服を押し上げるせいで、お腹の裾の部分が浮いて、おっぱいから考えると信じられないくらい細い腰回りとかが見えてしまつてるのが最高にエッチ。しかも青のミニスカートも凄い短い。むっちりとした太腿だけじゃない。ちよつとお尻のラインが見えそうな、やっぱり見えなような……そんな感じの丈だ。きつと、下から見ると絶景だろう。プリプリのお尻がたまらない。肌もシミひとつなく白いし、無駄な肉は全くついてない。手とか肩とかもほつそりしてるのに、そしておっぱいは——あー、ヤバイ。くっそムラムラする……！

この衝撃はやはりさんを初めて見た時と同じくらいだ。ユキを見た時もヤバかったが、和もヤバイ。正直、好みだ。100点満点を上げられる。

これはなんとしても墮とすしかない……東郷は勃起した。必ず、かのエチ暴虐の雌とエロエロセックスするしかないと決意した。東郷

には貧乳がわからぬ。東郷は巨乳フェチである。おっぱいが女の子のパーツの中で1番好きで、おっぱいのでかい美少女ばかりとセックスし、パイズリばかりさせてきた。けれども、スカートから時折覗くであろう布に対しては、人一倍敏感であった。文学を汚すな。

その推定100センチ超えのおっぱいを俺の物にしなければならぬ……いやもう道德観とかこのおっぱいを見た瞬間、頭から消え失せた。前々から思っていたことだが、これを味わえるなら刺されても構わない。……いや、やっぱり嫌だけだな。ただ大事にはする。信じられぬと言うならば……そうだ。海外にボブヌンティウスという口リコンがいる。俺の無二の友人だ。あれに、人柱として代わりに捕まってもらおう。……最低かな？ だから文学を汚すな。

久し振りにくつそ頭の悪い思考を浮かばせていると、和と目が合った。

「……東郷さんですか。よろしくお願いします」

ペコリ、と礼儀正しく頭を下げてくる。マジ可愛いな……ちよつとクールさがあるのがまた良い。色気がある。というか、身体を前に倒すとおっぱいもたゆんと揺れて……最高かな？ 原村和……名前もまた……ん？ というか、その名前、どこかで聞いたことあるような……あつ。

「原村和……もしかして、インターミドルチャンピオンか？」

「……はい。一応」

「あら、さすがに知ってるのね」

「そりやそうだしえ部長！ のどちゃんは去年の全中王者！ 知らない方がおかしいじえ」

「すっげー、プロにも名前憶えられてんだな……やっぱ有名人なんだな」

「まあプロは大会の解説とかにも出るから……知っててもおかしくないじやろう」

いやほんと、マジで盲点というか……くそつ。こんなことなら見た目だけでも調べておくんだった。さすがに中学生とかはグラビアもなければインタビューなども少ない。試合も直接チエツクはしてい

なかつたため、こんなに可愛いとは知らなかった。いやほんと俺の馬鹿。……とはいえ、なんでこの学校にいるんだという疑問はある。全中王者ともなれば、強豪校から死ぬほどスカウトが来る筈だが……。

「それじゃあまあ、全員揃ったし、とりあえず打ってみる？」

「軽いの……というか敬語使った方がいいんじゃない？」

「いや、それは別にいいけどな。……そんじゃあまあ、打つか」

「おおっ、器が大きいじえ！ 京太郎とは大違いだな！」

「うっ、このタコス娘め……余計なお世話だつての」

「……よろしく願います」

というわけで、俺は早速清澄高校での1日目を。麻雀を早速打つことにした。……原村和は絶対に墮とす。が、妙に見られてる気もあるな。無口という訳ではないが、そんなにお喋りという訳でもないし、墮とすまではちよつとどう話していいか悩む。プロが珍しいのか？

分からんが……美少女に見られてるって考えると興奮出来そうなのがいいか（良くない）。

人和

長野県での指導、3校目となる清澄高校での初対局が始まる。対局者は――

「うわあ、プロと対局かあ……さすがに緊張する……」

「へっ、私が1位を取って今日からプロになるじえ！」

「プロに勝ったからと言ってプロになれる訳ではありませんよ、ゆーき」

清澄高校麻雀部の3名。須賀京太郎、片岡優希、原村和。全員1年生である。残りの2人、2年生で副部長の染谷まこと、3年生で部長の竹井久は後ろで眺めている。……まあ、様子見。お手並み拝見ってところか。

後、どいつもこいつもプロプロ言ってるが、元プロなんだからプロ扱いされるのは何とも言えないから止めてほしい。単純に嫌ともいえないんだよな。ただもうプロじゃないのにプロって言われるのを許してるのも、なんだかプロに未練があるみたいで……まあ俺の気にしすぎだろうけど。

とはいえ元とはいえプロの実力を疑われるのもそれはそれで癪なのでちゃんとやりはする。――特に今回はやる気が満ちているしな。

「普通に打てばいい。俺も、普通に打つからな……」

「！へえ……ちゃんと本気出してくれるんですね。さすが元とはいえプロというか……」

「な、なんか今ちよつと鳥肌立ったんですけど……」

「おおー！プロの凄みってやつだじえ！」

「……………」

「とはいえ、打つてみな実力は分らんからのお……ま、お手並み拝見じゃな……」

聞こえてるぞ染谷。……少し脅かしすぎたか？別に俺くらいが本気になったところで何も感じないかと思っただが、さすがおっぱい。おっぱいへの欲が俺の迫力を増大させたのか。最低過ぎる。いつも思うが、本心知られたら幻滅されるどころか死ねるよな……。

いやでもとにかく今はおっぱいだ。役満だ。原村和……全中王者か。相手にとつて不足はない。多分おっぱいでも全中王者だろう（最低）。こんな子がいるなら解説役をやり——いや、対戦相手に良い。俺のリー棒が立つ。普段は立直なんてしないけど、巨乳美少女相手なら立直も辞さない。というか既に立直してる。隠してるから闇聴だけど。下ネタが酷い。

「立直だじえー！」

そんな馬鹿なことを考えてたら一局目、親の片岡がいきなり立直。つてか速つ。3巡目立直か……こういうのつて読みにくいんだよな、当たり前だけど。限られた安牌……一巡目二巡目で相手が捨てた牌なんかを持ってるとそれで時間稼ぎしつつ、安牌稼ぐのが基本だが、それも無い。かといって簡単に振り込むことはないが……そうだな、こういう時は悪いが、

「——ポン」

「一発消されたじえ!？」

「いや、一発出るとは限らないから……」

「ところがどっこい！ それロンだじえ！ 立直ドラ2、ダブ東で12000！」

「うげっ!? マジかよ！」

「運が良かったな京太郎。東郷プロが鳴いてなければ一発ついておやっぱねだったじえ」

「ぐうう、くそお……いきなりこれかよっ」

おうおう早速か……ぶっちゃけ、俺としてはツモるんじゃないかって思つて一発消し&ズラしのもりだったんだが、須賀が振り込んだので……うーん、結果オーライとまではいれないが、被害を回避出来ただけ良かったか。

「一本場！ ここから私の天才伝説が幕を開く！」

騒がしいな……別にいいけど、あんまり調子に乗らせるのもあれだな……なんか速攻タイプっぽいし、ここは手早く流そう。

「——ツモ。タンヤオのみ。一本場は400、600」

「んなっ!? そんなゴミ手で、私の大事な親番を……！」

「嫌な予感がしたんでな……早めに流させてもらった」

「ぐぬぬ……」

片岡が悔しそうに唸っている。いや、まあ親流されたくらいでそこまで悔しがらなくても……とは思わなくもないが、もしかしたら高めの一向聴。もしくは、そういう雀士なのかもな。

「その気持ちは分かるが、ゴミ手と馬鹿にするもんじゃないぞ。中にはこれだけを和了って何万点と稼ぐプロもいるからな」

「最近では速攻型が流行ってるものね」

「そうなんですか……」

「へへんっ、私なら同じくらい速度でもっと高いのを和了りまくってやるじよ」

竹井の補足に須賀が感心し、片岡がまだ自信過剰に胸を張るが……果たしてそのプロの前で同じことが言えるのだろうか。あの人も化け物なんだよなあ……親番だと手に負えない人。その人もやはりさんの友人で同級生で島根人。島根ってなんなんだろうな……島根人、怖いです。

まあそれはともかく親が流れて東2局。さつきから大人しい和の親番だが、

「……ポン」

と、早速役牌鳴いて……って、こっちは対局中静かだなあ……いや、これが普通なんだけど。トラッシュトークはまあ何気にやりすぎなければ許されていたりする。特にプロとかだと興行の側面もあるのでやっても構わない。放送コードに引っかからなければ。後、よほど変なことを言ったり暴言とか吐かなければオーケー。

まあ、順位が決まる大事な試合とか、タイトル戦とかだとさすがに緊迫して喋る奴は少ないけど。それでも対局の合間とかに発言したり、対局中もまあまあうるさい人はいる。学生も同じ様なものだ。強い奴には変な奴も多いからな。

その点、和はそういうタイプではないらしい。全中王者……なんか、確か噂だとデジタル派の雀士らしいし、そういう意味では喋らないのはそれっぽい。デジタル派は常に思考してるから喋る余裕がな

いとか言われる。でもその理論だと感覚派やオカルトを駆使する奴らが何も考えてないみたいだからなんとも言えん。そんな訳ないからなあ……。

ま、この間会った衣とかはまだまだ考えるところより、感じて打つてるっぽかったので、全く的外れとも言えない。傾向としてはそんな感じだ。例外もあるし、型には嵌まらないのが雀士なのである。

「ツモ。2000オール」

と、そして無難に和了ってきた。しかも割と高い。早いし高い。

牌効率も良いし、判断も悪くない。やっぱデジタル派か。高校上がったばかりでこれなら全中王者というのも納得かもな。

とはいえ……もし中学の時にユキとかが公式試合に出てたりしていれば、割と勝負は分かんなかったか？ ユキは3月の時点ではいえ、既に全国クラスの打ち手と言っている実力の持ち主だしな。ひよっとしたら和といい勝負かもしれない。——おっぱいも。ううむ、やっぱり悩ましいな……制服着てるだけなのにエツロい……こんな同級生いたらヤバいだろ。毎日がオカズになる。体操服とかスクール水着とかぼいんぼいんでエロエロだろう。同級生の男子は辛そう。股間事情的に。告白とかされまくってたりするんだろうか。まあ、まだ高校入ったばかりの5月なのでそこまで行く奴は少ないかもしれないが……そここのところ、どうなんだ須賀あ……って、こいつ……。

「……須賀。お前、ひよっとして素人か？」

「うっ……分かるんですか？ そういうのって……」

「大体はな。捨牌とかが不可解だったり、色んなことで判断出来なくもない」

「うへえ……マジかあ……」

「犬は犬歴も麻雀歴も短いからな。確か、まだ1か月くらいだよ」

「麻雀歴はともかく、オレは犬になった覚えはないんだけどな？」

「お前ら、仲良いな……」

「いいから早くツモってください」

「はっ」

和に注意されて須賀と片岡がツモっていく。いや、なんていうかこう、まだ高校入って1か月なのに普通に仲が良いのはなんなんだろうな。同じ中学とかだったりするんだろうか。あり得るな……ただ、和と須賀はまだそこまで仲良いってほどではないような気もする。別に仲が悪いっていうか、単純に知り合ったばかり特有の空気？ まあ須賀が割とコミュニケーション能力高めつぽいので分かりにくいけどな。これは朗報。何となくだが、男の影は無さそう。多分。

それと須賀は麻雀始めて1か月か……ん？ でも1か月にしては普通に打てるし、割と成長早いのでは？ 才能無いと思わせてあるのか？ オカルト的な気配は感じないが……もしかしたらあれかもしれない。パワ○ロ君的な。ほら、始まってすぐのステータスは軒並みGとかFの最低ランクだけど、割と直ぐ能力が上がって、気がついてたらしめちやくちや強いっていうか、成長の早さがえげつないやつ。熱心に育てたら意外と主人公的な伸び方したりして……いやまあさすがにないか。物覚えは良さそうだが、普通だろう、普通。

——さて、そろそろ役満来ないかな。来なくても一局目だし、割と気合入れまくってるが……

「ツモ。2000、3900」

「ツモ。1600オール」

「……ロン。3900」

「じょっ!？」

「ロン。5200」

「て、点数が……」

……とまあ、こんな感じで連続で和了りつつ、片岡が和に振り込んだり、須賀の親を俺が直撃させて一瞬で流したり……結構ちゃんと麻雀をやった結果がご覧の通り。

「——ま、こんなところか」

「……ありがとうございます」

「う〜……タコス力が切れたじよ……」

「と、飛ばされた……」

1位が俺。2位が和。3位が南場からいきなり失速した片岡で、最

下位が最後に俺が飛ばした須賀と、まあ順当な結果に終わる。やはり全中王者とはいえ、元プロの俺には敵わない。……勝って良かったあ……ほっとしたぜ……。

「へえ、元プロもやるじゃない」

「じやのう……堅実に強い。これは良い練習になりそうじゃ」

「その為に來てるしな。……さて、先に評価でも聞くか？ それとも、先にお前らも入って打つか？」

「なら、先に聞かせてくれる？ うちの1年生はどう？」

と、竹井に聞いて先に評価を下すことになる。なんでもいいが、俺的には失敗だ。だってエロエロするために来てるしな……役満を和了れなかっただけで失敗だ。

後、そういえば思ったんだが、須賀もいるし、まさか男にも発動しないよな……？ もしそうなら安易にツモれない。純朴な男子高校生をヤバい道に引きずり込んでしまうし、俺だって男に惚れられるのは御免被る。無いとは思うが、可能性があるため、一応気をつけよう。やっぱ確実なのは和へ直撃させることだよなおっばい。あー、おっばい。おっばい揉みてえ……大人の男の手に余るでっかい美少女のおっばいを揉みまくりたい。

「……まず須賀は初心者としか言えないな」

「まあ、そうですね……」

「ただ始めて1か月でこれなら筋は良い。ちゃんと練習して牌効率やルールの理解に努めれば成長出来ると思う」

「あ……ありがとうございます！」

須賀が頭を下げて感謝するが、おっばい。俺は次におっばいが小さい片岡を見る。

「片岡は東場は良かったが、南場はてんで駄目だったな。東場だけ強くなるタイプなのか？」

「集中力が続かなくなるだけで最強だじえ！」

「優希は確かに、東場の成績が良いみたいね」

「ゆーきは、昔から飽きっぽいですからね……」

「それは言わない約束だ、のどちゃん！」

残念ながらそれは最強でも何でもないんだよなあ……まあ、有用な力であることには違いないが。こいつもちよつとオカルト風味がある。切っ掛け次第で化けそうだな……。

そして最後はやはり、おっばい。俺のものにする予定の原村和だ。

「原村は……今の所は、特に言うことはない。ほんの僅かにだがミスがあるようにも見えるが……」

「……はい。少し、思い返せばミスした部分があるのは確かですね。ご指導、ありがとうございます……」

はー、ヤバイ。この子、チンコにめっちゃ悪い。見てるだけで自然と硬くなる。俺の肉棒が既に、眼の前の美少女は俺のモノで、もうセックスが出来ると勘違いして準備万全になってしまっている。

まあでも、それも仕方がない。こんな好みどストライクの子とやれる。それが現実になる可能性が高くなると、胸も期待もチンコも膨らむものだ。

……後、真面目な話をすると、さすがはインターミドルチャンピオン。その闘牌はレベルが高いのだが……うーん、どこかで見たことあるような打ち方をするな……誰かに似てる気がする……が思い出せない。というか、決定的なものがない。勘違いの可能性もあるしな。プロの誰かか……もしくは学生か？ ……いや、割と最近見た気がするんだよな……。

「？ 今日のものどちゃん、いつもより大人しいじえ。どうかしたのか？」

「いえ、特にどうかした訳では……」

「本当かー？ ただでさえ高校に入ってからのもどちゃんはおっばいも大きくなってたまにボーツとしてたりするからなー。……はっ、まさかまた大きく——」

「な、なってますせんっ。もうゆるーき、怒りますよっ！」

「……………」

「……………」

和が少し顔を赤らめ、ムツとして片岡に注意する。その発言を聞いて、俺と須賀が無言になる。気まずいというだけじゃない。大きく

なつたと聞けば、そりやあ——つて、須賀……まさか貴様も……？
貴様も同好の士なのか？ だとしたら分かってると褒めてやりたい
ところだが、それはそれとして和は俺のモノにするので諦めてくれ。
すまん。

「……とりあえず、こんなところだ」

「なるほどね。大体分かったわ。それじゃあ次は優希と須賀君の代わ
りに、私とまこが入るわね。和もそれでいい？」

「ん、それじゃあ胸を貸してもらおうとするかの」

「ああ、構わない」

「はい、大丈夫です」

と、お次は部長と副部長。2年生と3年生のコンビが須賀と片岡の
代わりに席に着く。さすがに1年生の部員よりは強い——とは限ら
ないんだけどな、これが。打ってみなきゃ分からない。ぶつちやけ下
級生のほうが強いなんてことは幾らでもあるし、学生の頃の俺もそれ
で先輩にはウザがられてた。だから全然あり得るし、それにこの部
にはインターミドルチャンピオンの和がいるしな。団体戦にすら出れ
ないギリギリの部活に所属する奴ら。1年生よりも弱いことだつて
あり得る。

だが、そうは思っても、感覚的には割と強い気配を感じるので油断
はしないし侮らない。……というかこの卓でも役満和了れる可能性
あるしな。

「……………」

……それにしてもこの和は妙に俺に視線を向けてくるが、顔になん
か付いてたりするのか？ ……いや、それなら他の奴も分かるしな。
言い出さないのも不自然だ。

じゃあなんなんだつてことになるが……もう面倒だし聞いてみる
か。

「……俺の顔になにか付いてるか？」

「… す、すみません。その……元とはいえ、プロの方と出会ったこと
がないので物珍しくて……」

「……そうなのか」

「のどちゃん、意外とミーハーなのか？」

「全中で活躍しとったならプロに一度くらい会つとつてもおかしくな
いはずじゃがのう……」

「可能性としては全然あり得ますから。だからちよつと見てしまつた
だけです……」

んー？ そう、なのか？ なんか引つかかるな……もしかして、一
目惚れとか？ それだったら苦労しないんだよなあ……夢見てんな
よ。いやほんと。こんなおっぱいのでかい美少女JKに一目惚れと
かされるとか、もしあつたら明日死ぬんじゃねえの？ さすがにそれ
はない。それはないが、じゃあなんなんだろうな、ほんとに。結構見
てくるから気になる。麻雀に集中した方が良いと思うが……。

「ま、それじゃあ打ちましようか。お手柔らかに頼むわね」

と、竹井の言葉で対局がスタートする。最初の親は——和か。
……つて、うおおおおお!! え、この配牌は——つて、うわあああ
あああ!! 待て待て待て!!

「……なあ、1つルールの確認なんだが……」

「ん、何？ 急にどうしたの？」

俺は対局が始まつてすぐに竹井に質問する。すでに対局が始まつ
て和が牌を捨てたところだ。

「いや……なんていうか……あれだ。流し満貫とか……あとは人和と
かはアリなのか？ そういうのは無しだったりすることも多いから
な……」

「んー？ 何？ 最初から消極的ねえ。でもまあ、良いんじゃない？
今年のインターハイのルールだとうだったか確認しないといけ
ないけど、色んなルールでやることに越したことはないわ。……あ、
もしかして人和？ それなら和了つてもいいわよ？」

「ありません。そんな偶然、奇跡でもおきない限り——」

「……なら悪いが——ロンだ」

「……………えっ？」

「はっ」

「じよっ」

竹井がからかうようにそれをアリだと言った。その後、和の言葉を遮るように——俺はロンを宣言して牌を倒していった。

「……人和。役満、32000だ」

「……………え？ あ——」

部室内の空気が凍る。役満、人和を和了ったためだ。

説明すると、人和つてのは、役満の……まあ、日本だと比較的ローカル役とされる役だ。その条件は、最初のツモより前に、他家の捨牌で和了ること。それだけだ。

日本のプロなどでは採用されていないが、欧州のプロリーグとか、欧州選手権などでは採用されている役満で、その難易度は役満の中でもかなり高い。……まあ完全に運だからな。配牌の時点で聴牌して必要がある。

配牌の時点で揃ってる天和とかよりはマシだが、それでも普通は難しい。

何しろ、他家が捨てる牌で和了ること自体も完全に運だしな。普通は和了れず、ダブル立直で終わることが多い。

だからまあ……俺は配牌の時点で驚き、更には親の和が最初に捨てた牌が和了り牌だったため、ルールを聞いてみたのだ。……これで駄目だったら役満じゃないのだが……こ、これはどうなんだ？ 駄目か？ 駄目なのか？

「……はあ、なんてももの出してくるのよ。もう、せつかく私の良いところ見せようと思ったのに……」

「和の飛び終了……東郷プロの1位で終いじやの……これは仕切り直すしかないな……」

「すっげー……人和なんて初めて見た……」

「でも惜しいな！ 天和なら和了ったら死ねるじえー！」

いやほんとだよな……ただ俺の場合、問題は和の——

「……………」

「あれ、和？」

「放心しておるの……ま、人和なんて直撃させられたら無理もないけえ」

「おーい、和ー？ もう一回やるわよー？」

「……え？ あっ——」

和の様子がおかしいことに皆が苦笑し、竹井が顔の前で手をヒラヒラとさせる。すると我に返ったのか、和が恥ずかしそうにしながら、「ご、ごめんなさいっ。びっくりしてしまつて……も、もう一度ですよ、わかりました大丈夫です」

「運が悪かったと思つて諦めるんだな！」

「そうそう。役満なんて事故みたいなものだから切り替えていきましょ。ね、東郷プロ？」

「……まあ、そうだな。引きずるのは良くない。……とはいえまだ戸惑つてるなら変わるか？」

「あ……」

目を合わせてそう言うと、和は俺を見て戸惑つたように顔を赤くしている……ここ、これはまさか成功か？ 性交か？ ……まだそうと決まつた訳じゃないが——ひやつっぽう!! 神様ありがとう！ まさかこんな早く役満が和了れるとは！ これは早く眼の前のおっぱい美少女を我が物にしろという神からの啓示では？ これは期待に応えるしかあるまいて！

——と、思つていたのだが、和は一度咳払いをして、首をふるふると振ると、頬を両手で軽くパシンと叩き、

「……ふう、もう大丈夫です。やりましょう」

「ん、ああ……」

「おお……普段どおりの和に戻つた……」

「気合注入だじえ」

うん、須賀や片岡の言う通り、それをして顔の赤らみもなくなり、しかも普段どおりと表する冷静な感じになったことから、俺は内心で首を傾げる。……あれ？ これはまたしても判定が微妙だ。一体どつちだ？ ユキみみたいに反応が分かりにくいだけか？ 実はそれを隠してるのか？ 2人きりにならないと駄目とか？ 分かんが……あーくそ、ローカル役で和了ると判定が分からん……このオカルト、せめて発動したか否かだけでも俺に知らせてくんねえかな……発動

する条件もいまいちまだ絞り込めていないし、ほんとのオカルト使
いづれえ……。

すれ違い

和にオカルトが効いているかどうかは気になるが、清澄高校での指導、仕事を途中で止める訳にはいかないし、手を抜くことだって出来ない。

だから俺は逸る気持ちを一旦心の奥底に閉じ込めながら、眼の前のおっぱ——じゃない。眼の前の麻雀、仕事に集中する。集中出来てないな……とはいえ、だ。

「——ツモ。1600、3200」

「ぬおっ」

「普通にやるわね」

「……はい」

俺は染谷の最後の親番でツモ和了りし、対局を終わらせる。——これで、俺の1位だ。

まあ確かにインターミドルチャンピオンである原村和に、片岡と須賀よりも強い2人、染谷と竹井がいるとはいっても、こちらら元プロであり、簡単には負けないし負けられない。

集中は少し切れたかもしれないが、だからといって負けはしない。

実力もこちらの方が上……とはいえ、気になることはあつた。

「……染谷は対応力があるな。打ち方が堅実で悪くない」

「まこは普通に上手いわよ。経験だけなら私よりも上だからね」

「そりやあどうも。……なんか地味だと言われているような気がするけえ、褒められてる気がせん……」

染谷を褒め、竹井もそれに同調してくると、染谷が微妙そうな顔をするが……まあ、ちよつと思つたがそんなことはない。ちゃんと褒めている。

というか他人事じゃないからな。俺もよく打ち方が地味とは言われるし。

ただ麻雀において地味というのは堅実ということ。安定してぶれない打ち筋を持つ雀士は基本がしっかりしているため、応用も効いて、対応力もあり、強い。コンスタントに勝率を伸ばせるプロに向い

ている打ち方でもある。

ただ半荘一回か二回、個人戦だとそれよりは多いが、少ない対局で勝たなければならぬインターハイなどではあまり向いてない打ち方だな。そういうのは感覚派やオカルトを持つ者……ここぞという時の勝負強さを持つ者が有利となる。

染谷は……染め手が少し得意という程度で、他はどんな打ち方にもある程度対応出来るバランスの良い雀士だな。相手を選ばず、誰とでもある程度は戦えるが、想定外の事態には少し弱く、オカルト系の雀士とは相性が悪そうだ。団体戦なら次鋒とか副将が向いているだろうか。オカルト持ちが比較的多い先鋒や大将には向いておらず、臨機応変さが求められる合間のポジションが似合うだろう。

……とはいえ、こいつら人数足りてないから団体戦出れないけどな。そういう意味ではこの竹井も惜しいか。

「竹井は……悪待ちが多いな。捻くれた打ち方だ」

「あら酷い。これでも繊細で純粋な女子なのに……駄目かしら？」
「……………」

あつ、なんか和が凄く何か言いたそうにしてる。多分、デジタル派の雀士としては物申したい部分があるのだろう。

まあそうだとしたら気持ちからは分からんでもない。ただ、俺はそれを否定しない。

「——いや、その打ち方がお前に合ってるというならそれで良い」
「矯正しないんだ？」

「する必要がない。基本を弁えないでその打ち方をしてるなら問題だが……お前はそういう訳でもない。ましてや……半荘一回程度では俺には分からないが、結果が出てるんだろ？」

「分からないと言いながら分かってるじゃない。大体そんな感じよ」
「なら良い。お前はそれを伸ばせ」

と、俺は正しい打ち方に矯正する必要はないと言い切る。

悪待ち。少ない待ちで待つ事をそう言う。麻雀ってのは基本、確率が高い方を求める競技だ。待ちは多ければ多いほど、和了れる確率が当然上がる。そういう意味で、悪待ちというのは可能性の低い方に賭

けることから、悪い待ち、悪待ちと呼ばれる。

ただ悪待ちを選択する状況は少なからずある。そつちを選んだ方が和了った際の点数が高いとかであれば、低い可能性に賭けて、高いリターンを得ることは当然意味がある行為だ。

しかし、この竹井は点数が変わらない状況や、酷い時は点数が下がるにも関わらず、悪待ちを選択していた。

その打ち方は下手をすれば、素人にも思える打ち方で、デジタル派の雀士からすれば訳が分からない、不条理な打ち方に見えるだろう。そこらの麻雀講師、指導者であれば矯正することもあり得るかもな。

ただ、それは竹井の持ち味を殺すことにもなり得る。それで結果が出るというなら好きにさせればいい。

それに俺が見た限り、竹井のそれはちよつとしたオカルト……とまではないかないが、ジnkクスに近いところがある。

おそらく、悪い待ちの方が良い結果が出る——とか、本人は考えていたりするんじゃないかと。

ぶつちやけそうとは限らないと思うが、本人の意識つてのは重要だ。

牌効率、確率だけではない、何か潜む麻雀という競技では、本人の意識、姿勢が結果を分けることもある。

理論的な考え方ではないため、一般には受け付けない思考だが、プロであれば、それがデジタル派の雀士であってもその何かがあると考える者は多い。

自分には適用されていないかもしれないが、相手にはあると考える。プロのデジタル打ちつてのは、相手のオカルト要素を取り込んだ上でのデジタル打ちだ。

「……それにしても、初見でよく対応出来たわね。元プロとはいえ、ちよつと悔しいわ」

「そこは経験の差だが……まあ、悪待ちと分かっていたら、相手としても対策は出来る。お前はその対策に力を入れるべきかもな」

「ま、それは分かっているわ。どうすれば対策出来るかも……ね?」

少し思案顔になっていた竹井だったが、俺がそういうと、くすりと

竹井が笑みを浮かべて頷く。

実際、悪待ちは、相手の裏をかくことが出来るなど、メリットがない訳ではない。1つの戦術として有効な打ち方だが……当然、それを続けていけば相手はそれを知る。

悪待ちの可能性が高い、悪待ちの方が良い結果が出ると相手が知れば、それに合わせて打ち方を変えればいいだけのことだ。守りが固いプロや有名な選手であればこの程度は軽々と避けてくる。悪待ちしてくることも織り込んで、当たり前牌を割り出せばいいのだからな。

まあ、口で言うほど簡単な事じゃない。……ぶつちやけ、それに關しては俺も理論で躲してるというよりは……いや、いいか。まあ経験みたいなものだが、デジタル派の雀士もデータを完全に頭に入れていく訳でもなければ、完璧な牌効率で打っているという訳でもない。それに近いことはしてくるけどな。デジタル派はその性質上、理系や頭の良い奴が多い。……これを言うと、感覚派などのオカルト雀士は頭が悪いつて言ってるみたいで中々口に出しづらいのだが、あながち間違つてはないから困る。統計を取れば絶対そうだろうしな……オカルト派の雀士ってこう言ったらなんだが、妙に気が抜けたり、天然だったり、アホっぽい奴が多かったりするし。

この竹井も頭は悪くないのか、基本はオーソドックスなデジタル打ちだし……団体戦だと先鋒か中堅か大将か……どこでも悪くないな。その3つは各学校、エース級を出してくることが多い。先鋒は言わずもがな、大将も勝負を決定づける大事な役割。中堅も文字通り中盤、難しい判断を強いられるポジションでもあるため、ここに強い選手を配置するところも多い。

清澄で考えると、先鋒は和か竹井……ああでも、片岡って点数計算出来ないっほしい、しかもそのオカルトの特性からして、先鋒の方が良いかもしれん。ということ为先鋒。次鋒は染谷。中堅と大将は和と竹井だが……まあ、これはどっちでもいい気はする。というか和はどこでも大丈夫そうだから空いているところに入ってもいいかもしれない。

——まあ、どつちみち団体戦メンバー足りないから考えてもしょう

がないけどな。地味に惜しい。それにこのメンバーじゃどう足掻いても龍門漕、正確には天江衣に勝てないし、全国出場は絶望的。夢のまた夢だ。個人戦なら竹井や和は全然可能性あると思うけどな。団体だと無理。

まあ、天江衣とか宮永照級の魔物がいきなり入部してくるみたいな都合良すぎる奇跡が起きればいけるんじゃないかね？——と、そんな夢みたいなきっかけがない。役満級か、それ以上にキツいかもわからない。参加するだけなら1名部員を確保するだけで良いので楽かもしれないが、数合わせで今から全国に行くのは厳しいのは言うまでもない。もしくは須賀辺りに女装してもらって……でもなんか微妙に似合いそうだなこいつ……。

ただまあ、団体戦が無くとも個人戦があるので、そちらで頑張れば良いと思う。長野県予選は確か3名まで全国に行けたはず。3名か……衣が個人戦に参加しないし、割と行けなくはなさそう。美穂子か、まあ確定としても、竹井や和もワンチャンあるだろうな。後は透華とか池田とか……本命はその辺りか。うん、やっぱ個人戦だな。「……さて、とりあえずこれで全員と打ったが……まだしばらく打つか」

「当然でしょ？ 部費が勿体ないし、東郷さんにはずっと打って貰うわよ。……と、言いたいところだけど、程々に休憩は入れるから頑張ってるね？」

「……ま、そうだな。出来ればお前ら同士の対局も後ろから観戦させてもらいたいし、そんな感じでいいだろう」

「うわあ……プロと打つのも見られるのもどっちもキツそうだ……」

「だらしないぞ犬！ 元プロくらい倒せないで甲子園に行けるか！」

「甲子園は野球じゃ……」

「……………」

というわけで俺は4回に1回程度は休んで対局を見る感じで練習に参加することにした。これでいい。これで和のおっぱいを後ろから、上から眺めることが出来る。やったぜ。

……しかし和は大人しいな……役満……ローカル役とはいえ役満

をぶち当てたのに最初以外、特に変化はないし……いや、これはやはりユキパターンか？ 微妙に似てるし、2人きりになつたら誘われちゃうか？ ——やつべえ、待ちきれねえぜ……あー、やりたい。早くやりたい。実は龍門淵にいる間、何も出来なくて結構溜まつてるし、もう辛抱堪らん……練習の手を抜くわけにはいかないとはいえ、俺は早く和で抜きたい。いや、和に抜いてほしい。

俺は股間に血が集まり、ムラムラするのをなんとか耐え凌ぎつつ、次の対局に集中した。……どうでもいいけど、和が対面だやっぱ見ちゃう。牌よりものどパイを見ちゃう。今日のクスポイント。

——そんなこんなで、放課後。早速、和にアタック……といきたいのだが、その前に部活中の和の様子を思い返ししながら、俺は和と2人きりになる機会を待つ。

役満は当てた。つまり、オカルトはおそらく発動している……のだが、練習中の和は俺を……気の所為か、避けているような気がするのだ。先程も、

『あ、お茶菓子が切れたわね。須賀君、ちよつと買ってきてくれない？』

『はい。分かりました』

『東郷さんも何かいるなら須賀君に頼んでくださいね？』
『えっ』

……と、そんな感じで須賀が竹井に買い出しを頼まれる。それを聞いて俺は何気なく、

『……買い出しか。なら俺が金を出すから適当に買ってきてくれ』

『え、いいんですか？』

『ああ、どうせ購買だろ？ 好きなもん買ってこい。俺も食うからな』

『おお、太っ腹だじえ！ ならタコス！』

『タコスはお茶菓子じゃ……いや、今更か』

『あら、悪いわね』

『おお。……原村も好きなもの頼んで良いぞ』

『っ……えつと、私は遠慮しておきます……』

『のどちゃん、勿体ないじえ〜』

『そうよ。せつかくだから頼んじやえばいいのに。メニューの端から端までとか』

『おんしは遠慮を知らんのか……』

『……いえ、せつかくですが……』

と、そう言つて遠慮しながら、俺の視線から逃れるように顔を下に向け、距離を取る。

俺の申し出を遠慮するだけならまだしも、その距離感が初対面にしてても遠い気がするのだ。

……ただ、だからと言つて嫌われてるとは限らない。これも、好きの裏返しの可能性だってある。

恋するあまり、顔をまともに見られないとか、恥ずかしくてつい心がないことを言ってしまうとか、そういう女心というものがあるはずだ。美穂子とかがそれに近かったし、反応が分かりにくいという意味ではユキもそうだった。

だから2人きりになつて確かめてみるまでは、まだ分からない。最初の反応的にイケてる気がするのだが、100%ではないので確信を持った大胆な行動は取りづらい。

だからさりげなく、あくまでもさりげなく、俺は原村に接触する――と、考えていると早速、

「――原村。もう帰るのか？」

「！……東郷さん、ですか。はい、今帰るところです」

練習が終わった直後に、さつさと部室を出て校門から少し離れたところに車を移動させて止め直し、なんとなく一息ついているような感じで佇んでいると、原村が1人でやってきた。

この時点で1つの関門をクリア。何しろ、原村が他の……まあ、多分須賀はないにしても、片岡などの他の部員と一緒に帰る可能性だつてあったからな。

とはいえ、もし俺に惚れてるなら考え事がしたいとか言つて、同じ帰り道でも1人で帰る可能性はあるし、そもそも帰り道が被つていな

い可能性、もしくはもつと大胆に俺と2人きりになりたくて1人になる可能性だつてある。

だからまあ、1人で帰宅する可能性は意外と無くはないとは思っていたが、期待通りに進んだ。

それなら次に進む。まあ学校の近くだし、そんな明らかな言動は取りにくい。俺は何気なく話をしようと、

「今日はお前も含めて、実力を見せてもらったが、さすがはインターミドルチャンピオンだな。高いレベルのデジタル打ちだった」

「……はい、ありがとうございます」

和はそう言いながらも浮かぬ表情……というか、全然顔を見て話してくれない。

やはり恥ずかしいのか。それとも——うん、まあいい。続けよう。

「麻雀に対する真剣さが窺える良い姿勢だった。明日もよろしくな」

「つ……はい……明日も、よろしくお願いします……」

まあ見せてもらったのは主におっぱいだけだな。——とか言ってる場合じゃない。今、少し反応したな？

どういう意味で反応したのかは分からないが、まだ探れる余地はある。ほんの僅かに不自然だからな。俺はなおも会話を続けて糸口を探る。次は……そうだな。

「……原村、あまりこういうことを言うのもなんだが……人の顔を見て喋った方がいいぞ？」

「あ……す、すみません。いえ、分かつては……いるんですけど……」

「人見知りなのか？ それとも、男が苦手とか？」

先程よりも更に反応したのでそこを突いてみる。すると原村は少し、何かを思うような表情を見せた後、眼を細め、

「そう……ですね。人見知りという訳ではありませんが、男の人は、その、あまり得意ではありません……」

「……そうか。それは悪かった。なら話しかけたのは迷惑というか、困らせたな」

「そんなこと——」

と、顔を上げて原村が言う。しかし言葉を途中で止める。何かに気

づいたように、再び顔を下に向けて視線を横に逸らす。俺は一応その先を促そうと試みるが、

「? そんなこと?」

「……いえ、なんでもありません」

いや、なんでもあるだろ。そういう反応を見せるってことはそういうことだ。俺を誤魔化せると思うなよ。漫画やドラマとかで見ると鈍感な男と俺は違う。なんでもないって言っただけで納得はしない。明らかにおかしい反応を見せたなら怪しむ。それが出来る。そういうお決まりを知ってるからこそでもある。

だから俺は僅かに確信を持って、告げた。一応、周囲に人があまりいないことを確認してから、

「……もしかして、俺が気になるのか?」

「! いえ、そんなことは……な、ないですつ。ありえませんか?」

そう言うのと和は過剰なくらい動揺しつつ反応した。ははは、可愛い奴め。もう今の反応で分かったぞ。貴様、俺に惚れておるな?」

「隠さなくてもいい。……実は……俺も、お前のが妙に気になっていてな」

「~~~~つ、や、やめてください……何を言ってるんですか……」

和が顔を赤くしている。あー、ヤバい。可愛い。もうすぐこの子を俺のモノに出来ると思うと興奮してきたな。俺は口元の片方を僅かに歪め、

「というか、俺は何が気になっているかまだ言っていないと思うんだが……原村は何だと思ったんだ?」

「! そ、それは……」

「……お前が望むなら、俺はいいぞ。少し、2人きりで話してみないか?」

と、言つて俺は僅かに距離を詰める。

珍しく口説きに掛かるが、これも、沢山の女の子を墮とした賜物とも言える観察眼、経験則から出来ることだ。

こいつは、和はもう俺に惚れている。もういける。もう抱ける。だからこそ、少し押しにかかる。

まるでドラマや恋愛漫画のキザ男の様に自信を持っていける。我ながらどうかと思う。一歩間違えば勘違いしてる恥ずかしい男だが、そうではない。この口説きは成立してるはずだ。

「わ、私は……」

その証拠に、和は俺をようやく見上げて、何事かを口の中でもごもごと呟いている。ふっ、やはり恥ずかしくていっぱいいいいなのか。恋愛経験は皆無のようで好ましい。別に処女じゃなきゃ嫌だっこともないが、美少女の初めてを奪えるのは優越感が凄く、一種の快感すら覚える最高の瞬間だ。

俺好みのおっぱい美少女を出会ったその日に墮とす。——その最高の瞬間を、俺はこれから迎える。

「なんだ？ 遠慮せずに言ってみろ。お前の本心を」

「……私は……私には……」

と、俺は和を促し、それを聞く。深呼吸し、息を整えて僅かに落ちて着いた和は、俺をまっすぐに見て、それを言い切った。

「わ、私には——す、好きな人がいるんですっ」

「……………えっ？」

その瞬間——俺の思考も動きも、その表情も、全てが止まった。

だが和は変わらず動き続ける。口は回り、呆然とする俺に向かって頭を下げると、

「ですから……そ、その……失礼しますっ！」

そう言っつて、小走りにその場から立ち去っていった。

残された俺。俺はそこから動けないまま、それを見送るしかない。

だがやがて、脳がその状況を理解し始める。嫌でも理解する。

……え、は？ 何？ す、好きな人が……いる？

いや、好きな人がいることはおかしくはない。そういうオカルトだしな。俺が好きな人……になるはずだ。

だが、今の会話の流れで俺な訳がない。今のは、明らかに俺の誘いを、好きな人がいると言うことで否定した形だ。

そう考えると、断るための方便——嘘ということも考えられるが、あの表情は……いや、確信こそないが、あの表情は、恋をした女が見

せるものだったような……。

「……つまり……」

俺は思わず思考を僅かに声に出しつつ、それを理解していく。
つまりだ。和には元から好きな人がいる。

そしてオカルトは……発動したかしてないかは分からないが、して
いたとしたら、それを上書きは出来なかった……ということになるの
だろうか。

分からない。その事の真偽はまだ分からないが……今、確実に言え
ることはだ。

「ふ、振られた……？」

あんなに自信満々に口説いておいて——振られた。

学生を口説いて断られたのはマズい……と思うより前に、そのこと
に凄まじい羞恥心を感じる。

あの感じだと誰かに言いつけるような感じではない。少なからず、
俺に対してドキドキとしていたようにも感じられたが……振られた
のは確かだ。

「~~~~~!」

俺は頭を、顔を押さえ、声に出せずにその場で苦しむ……あ——

——!! はつつつづ! だつつつつさ! は? クソかつこ
悪っ!! え、何? うわ最悪……あーもう、めっちゃ死にてええええ
え!! はあ? 今のはないわー……ヤバイヤバイ。本気でアホじゃ
ん。勘違いとか……あああああ! 恥ずかしいいいいい!!

つーかどうすんだマジで……いや、大丈夫だとは思うが……あー、
馬鹿した。え、マジ? あの感じで俺に惚れてないの? 嘘だろ……
絶対惚れてると思ったのに……。

今のは我ながら、ない。間抜け過ぎる。くそっ……明日からどうい
う顔してればいいんだ……。

俺は夕日の中、一応車に乗り込み、しかし自分の行動の恥ずかしさ
にしばらく——夜まで悶絶し、同時に和を手に入れられなかったこと
に頭を抱えた。あー……恥ずかしすぎるう……ていうかおっぱい、俺
のおっぱいが……。

——長野県内にあるとある一軒家。2階にあるとある少女の私室にて。

「……はあ……」

少女はベッドに背中を預けながら天井をボーツと見ながら、先程の事を思い出していた。

少女にとっての——おそらくではあるが、初めての告白……に近い、異性からのアプローチ。

いや、告白自体は全然初めてでもなんでもないが……少女にとっては、同年代のそこらの男子からのアプローチなど、そういうものにカウントすらされていなかった。

だから少女の認識ではあれが初めて。気になった……初対面なのに、気になってしまった異性からのそれに、少女は身体が熱く、鼓動が早くなるのを感じていた。

しかし、少女はそれを断り、別の人の事を頭に浮かべる。先程も告げた、少女の好きな人の事だ。

「——さん……——っ、さん……！」

少女は約1か月前に出来た好きな人の事を思い浮かべて、右手でその大きな胸を、利き手である左手で自分の熱く濡れたそこに触れて動かす。

少女の身体はその年齢に反して、男を魅了するいやらしい体つきをしていた。

少女はあまりそのことを好ましく思っていないが……ただ、こうやって好きな人の事を考えながら自分を慰めはじめてからというもの、自分の身体で最も大きい部分が更に成長していることには気づいていたし、自分の中の恋心を完全に自覚出来るくらいには精神面でも成長していた。

ただ、だからといって慣れていく訳ではない。少女はそういう経験は全くない箱入り娘。仲良くなつた男子も皆無である。少女の事情を鑑みれば仕方ないかもしれないが、仮に男性の友人がいたとして

も、この出来事を前に落ち着くことは出来はしないだろう。

何しろ——自分には、2人目の好きな人が出来たかもしれないのだ。

そんなふしだらな自分を否定するかのようには、少女は前々からの好きな人の事を思い浮かべて、自分を慰めた。こういった行為だって、その人の事を思い浮かべてから、それが抑えきれなくなっただけからやり始めたことだ。

だが……その好きな人の、妄想で作り上げる好きな人の姿が、今日はまだもう1人と重なってしまい、少女は悶々としてしまう。

違う。自分の好きな人は1か月前に知り合ったその人なのだ。そう言い聞かせて、少女は机の上にある小さなカレンダー……そこに書かれている、その人と初めて出会う日のことを考え、疲れて眠る——ことはなく、再びベッドの中で声を抑えながら、自らを慰め始めた。

オフ会

「ゆーき。たまには、もう少し別の物も食べたらどうですか。栄養が偏りますよ」

「私にとつてはタコスが主食。タコスが栄養になるんだじえ」

「……タコスだけですか？」

「たこ焼きとかたこさんウインナーも可！」

「そうですね……」

「勿論、タコライスでもいいじえ！」

「まだ何も言ってますんよ」

そんな会話をする2人。それをひっそりと見守りながら、俺は思う。

和って、割と喋るんだよな……。

いや、昨日とかは割と大人しかったが、和はちよつとすました性格ではあるものの、別に大人しくはない。むしろ、主張すべきところはしっかりと主張するしつかりとした少女だ。なのに……

「元プロはどれが1番？ 勿論、タコが付くもの限定で！」

「……たこ焼きだな。たこ焼きなら結構色んな店で食べたことがある。大阪にもプロの時はよく行ってたしな」

「ほうほう。そういえば、のどちゃんはたこ焼き食べたことないとか言ってたような気が……」

「た、食べたことくらいありますつ。……一度だけ」

「食べたことないって言うなら、このたこ焼き味のお菓子を贈呈したのに……」

「——いりません」

「残念。それじゃあ元プロにあげても？」

「……いい、いいんじゃないですか？」

「……？ なんかのどちゃん。昨日から——」

俺に対して、あるいは俺の話題の時だけ、多少普段の感じから崩れてしまう和に、俺は助け舟を出す。出さざるを得ない。

「……なんでもいいが、元プロって言うな片岡。微妙に傷つく」

「ふむ、それならプロって呼ぶことに——」

「さん付けでいいだろ。別に……」

片岡は直ぐに話が脱線するから誘導しやすい……が、俺としては何とも言えない感じではある。

何しろ……はあ、マジでいたたまれねえ……帰りてえ……死にてえ……。

なんであんな勘違いをしちゃったんだろうな。いや、マジで気まずい。

対局中はなんとかボロを出さないようにしているが、それでも多少ぎこちなさはあるだろう。幸いにも、会ったばかりだから多少距離があっても、違和感はそのままで持たれない筈だが、とはいえこれは俺の心にくる。

ああ……やっぱ無理なのかあ……？ この超巨乳の美少女を前に、俺は諦めなきやならないのか……？

嫌だ。嫌だが、どうしようも出来ない。

まさか好きな人がいるとは……くそつ、誰だ。その幸せ者は。

しかも惚れさせておきながらも放置してるとか、男の風上にも置けん。そいつの顔を拝んでみたいものだ。

もしかしたら須賀かとも思ったが、特にそんな素振りは見せないの
で須賀ではなさそうではある。

ただ須賀の方は割と意識してっばいのが何とも言えない。いやまあ、こんなおっぱい美少女いたら意識するよな……悶々とするよな……と納得は出来るが。

いやほんと、マジでなんとかしたい。期限である来週までになんとかしないと、諦める他なくなる。

練習の間は何も出来ないし、土曜日は……オフ会がある。そう、オフ会があるんだよなあ……。

別にいいんだけど、こんな気分で楽しめるだろうかという不安がある。正直遊ぶよりやりたい。マジでのどっち、美少女だったりしないかな……。

「最近ののどちゃんは色っばいじえ。さては……好きな人でも出来た

か!？」

「で……出来てませんっ!」

「冗談だ。でも私の嫁だし、好みのタイプとか気になる」

「嫁じゃないですし……そもそも言いませんっ」

……なんだか片岡が凄いやタイムリーな話題を振ってくれているが、確かに気になる。それさえ知れば……いや、知ってどうするんだ。どうにも出来ねえだろ。

「ほほう、言いませんっことは好みのタイプはあるってことと見た!」

「確かにそうなるのう」

「気になるわね」

「な……なんですか先輩達まで。やめてください」

と、そこに染谷と竹井、2人の先輩が参戦。まあまあ、と2人も気になるのかそれとなく聞き出そうとしている。まあ女性からしても、和のようなスタイルも顔も良い超絶美少女の好きな人ってのは気になるだろう。

「まあ、のどちゃんなら——恋愛なんて非科学的です。ありえませんが——とか言いそうですけども」

「べ、別に言いません」

「ほうほう。それなら、好みのタイプは?」

「結局それに戻るんですか……もう……」

和がため息を漏らす。その上で、とても小さい声でボソリと、

「……大人の……」

「えっ? 今なんて——」

「え? ……! な、何も言ってません。ほら、早く打ちますよ」

「……? まあ、今日のところは勘弁してやるじえ」

と、話は打ち切られる。片岡も本気で聞き出そうとは思ってなかったのだろう。じゃれ合いみたいなものだ。だから普通に対局に戻ったのだが……俺には聞こえていた。多分、大人の男性だろう。くっ……ふざけやがって……どこのだいつだ……合意の上とはいえ、学生に手を出すなんざとんでもないクズもいたもんだ(特大ブルーメラン)。

俺だって大人の男だつてのによ……はあ、今からでも俺にならないかな……いやマジで……。

「……須賀。ちよつと購買まで付き合え。ちよつと欲しいものがある」

「え、そんなの俺が……あ、いや、分かりました」

と、俺は須賀を連れて部室の外へ。須賀もあつさりと付いてきたのは、いたたまれなかったからだろう。話的に混ざりにくいのは確かだったしな。

それに、ちよつとした確信もあつた。俺は道中で話題を振る。

「須賀。昨日貸した指南本はちゃんと読んでるか？」

「あ、はい。まだちよつとだけですけど、結構読みやすいですね、あれ。最初は硬い文章でとっつきにくいかと思つてましたけど読んでみると分かりやすくて……」

「だろ？ 大沼さんの著書はどれもそんな感じだ。興味があつたら自分でも買って読んでみる。麻雀への理解が深まるぞ。お前に渡した本みたいに初心者、中級者向けの本も結構あるからな」

「なるほど……態々オレなんかの為にありがとうございます」

「気にするな。これも仕事の一環だ」

須賀への指導。それはまあ、ぶつちやけまだ口で言えるほどの事を教える段階に来てないというか、割と基本的なことを教えている。

実際初心者だしな。俺なんか教えるより、分かりやすい本でも渡した方が効率が良い。

だがこれは本題ではない。本題はここからだ。先に聞いておくべきことを聞いたので、後は個人的なことを聞く。

「ところで須賀。お前……おもちは好きか？」

「おもち、ですか？ ええ、まあ好きですけど……東郷さんは餅が好きなんですか？」

「いや、食べ物の方はそうでもないな」

「！」

俺の食べ物の方はそうでもない、という言葉に、須賀の眼の色が変わる。何かを察した表情だ。それを見て、俺は更に確信的な質問をぶ

つける。

「……好きな女性プロは？」

「瑞原はやりプロ」

「好きなアナウンサーは？」

「佐藤裕子アナ。……実は誕生日が一緒なんですよね」

「……分かってるじゃねえか。お前も同志か」

「そういう東郷さんこそ。……いやあ、いいですよねえ……おもち」

「ああ、おもちはいいぞ」

俺は須賀と固い握手を交わす。やはり須賀もおもち好き——おっぱい、巨乳好きだった。

「そういえば東郷さん、元プロってことは……あの素晴らしいおもち達と出会ったことも会ったりとか……？」

「ふっ……自慢じゃないが、はやりさんとは何度も食事に行ったことがあるし、良子……戒能プロは俺の従姉妹だ。その縁で、佐藤さんとも会ったことがある」

「なっ……なんて羨ましい……！」

須賀からは羨望の……いや、もうそれを通り越して憧れの眼差しで見られる。ふっ、いいぞ。男にだが、そうやって持ち上げられるのも悪くない。

……まあ本当ははやりさんと良子は俺の女なんだが……それを自慢する訳にもいかないのでこれくらいで留めておく。……というか、佐藤さんも墮としてやりたいよなあ……あの人、良子とはよく試合の実況と解説でコンビを組まされてるので俺も会ったことはある。というか、俺がプロ1年目でまだテレビや取材、解説の仕事に出てる時なんかにお世話になったこともあるのだ。会った回数はそれほど多くはないが……どうにかして麻雀打って落とせないかな……うん、和が……はあ、考えると落ち込むな。和が駄目そうな感じがする今、次のことも考えなければならぬ。清澄での期間が終われば、次は長野北部……鶴賀学園という場所に指導に向かうことになっているが……そこでも美少女がいない、または墮とすことが出来なかった場合、もう後は……それこそ、アナウンサーとか女子プロに目を向ける

とか……また遠出とかしないといけないしな。あー、エロしたい。……それはともかく、せつかく知り合った年下の同志だ。少しは面倒見てやろう。

「……これも何かの縁だ。俺の連絡先をやる。指導期間が終わっても質問や、何かあれば連絡してこい。麻雀のことや……後はおもちのこどもな」

「い、いいんですか!？」

「先人は悩める若人を導くものだ。俺はプロは首になったが、プロとしての理念の1つ……麻雀の普及や振興の事を忘れたことはない」

「と、東郷さん——いえ、師匠! 師匠と呼ばせてください!」

「ふっ、好きにしろ」

と、須賀が感動して謎のノリ。……まあおもちの師匠って感じが凄いが、真面目な意味でも一応は慕ってくれているはず。こいつ、接してみたら分かるが、普通に好青年だからな。目上の人への礼儀も弁えているし、割と素直でもある。目上に可愛がられるタイプだ。後、女子部員だらけの中に男1人ってのも妙に不憫だしな……実力的にも1番劣るし、なんかこのまま放っておくと3年間、鳴かず飛ばずで終わるような気がするし、ちよつとしたアドバイスくらいは送ってやろうと思う。

俺はこうやって真面目にするしかない。和が落とせない今は……今日も何事もなく練習を終え、ただ宿に帰宅することしか出来なかった。メゲルわ……。

——オフ会。それはネット上の知り合いとリアルで会うこと。

「……遅いな」

俺はサンングラス越しに携帯の画面を開いて、時間を確認して、約束の時間が過ぎたことを思っただけ。

長野県内のある駅前。約束場所に指定したその場所に佇む俺。

この場に俺がいるということは分かるだろう。俺はどうとう、清澄に来てからの5日間を真面目に過ごすことしか出来ず、とうとう〃の

どっち”とのオフ会の日を迎えたのだ。

まあ来週の月曜日までは辛うじて清澄にいるが……だからといって何が出来るという訳でもない。もう一回役満ぶち当てたらなんとか出来るんじゃないかという淡い期待はあったが、簡単な事ではない。当然だが、そんな簡単に役満は来なかった。

あー、おっぱい。おっぱいを味わいたい。もう今からでも美穂子とのデートに切り替えてエッチしようかな……はあ、このリビドーを発散するのは最低でも明日か……来週にお預けだな。

俺は頭の中で改めて確認しつつ、待ち続けることにする。オフ会つてのはお互いに相手の見た目を知らないため、予め容姿の特徴なんかを相手に伝えておくことが多い。

俺はまあ、いつもの格好にサングラスなので、そんな見た目してるよつてことは伝えておいたし、向こうが俺を見つけることを待つしかない。

場所も間違っていないからそろそろ来ると思うんだけどなあ……まあすつぽかすならそれでも構わない。それならそれで、俺は適当に飯でも食って帰るか、美穂子と――

「――や、ヤクマルさん……?」

――と、そんなことを考えていたら背後からネット上の俺の名前を呼ぶ声。ようやく来たか……つて、声が……女? しかも妙に聞き覚えがあるような……というか女か! マジか! 俺は驚愕する。

ネットで知り合った相手が女である確率なんて……まあ無いとは言わないが、あまりない。

それに女だから良いとも限らないのだ。ネットで知り合った女が普通の女である確率もまた低い。

とはいえ女であればちよつとプランを考え直さないと……男だと思つて今日の予定を立ててきたし。麻雀打つのは良いが、男が行くような店に連れていくのもどうかと思うし……。

とりあえず、相手を確認だな、と俺は声を出しながら振り向くことにする。

「ああ、のどっちさん。どうも、ヤクマルで――え?」

「あ……」

俺は振り返り、挨拶をしようとして——そこで疑問の声を上げる。相手も口を開いて驚いていた。そりやそうだろう。その相手が問題だった。

その見た目は……いや、まず服装がヤバイ。

のどつちが着ていた服は……なんだ？　なんて言えばいいのか……とにかくエロい。

エプロンにも似た少し緑がかった白地の肩のストラップ部分にフリルが、胸元を結んでる布にリボンがあつて可愛らしいが……それ以外が問題だ。

まず……まあ、手や足がほぼ露出されてるのは辛うじて良いとしよう。健康的な素肌で、細い女性らしい手、無駄な肉が一切ない二の腕や、手を上げれば容易に脇が丸出しになるような上半身だが、そこは良い。スカートが短く、その肉付きが良い柔らかそうな太腿が露出しているのも、俺的にはエロくてしょうがないが、まだ理解出来なくもない。

だが……その胸元はいただけじゃない。えつつつろい。胸の谷間が、その大きなおっぱいの谷間が露出しているが、それだけでは済まないのだ。

何しろ、そののどつちの服は、その胸の下側の部分——胸の谷間の下、下乳とお腹の部分も見えてしまっているからである。

大事なところは隠しているとはいえ……なんなんだそのエロい服は。なんだ、突っ込めつてか？　パイズリ用のエロ衣装にしか見えな。痴女かな？　ビッチか？

……だがそれもヤバイが、それを着ている人物がヤバかった。何しろ、その桃色の長い髪を、赤いリボンで両結びにした少女は……。

「……は、原村……!？」

「と、東郷さん……」

俺が今、現在進行系で教えている清澄高校の1年生——原村和だった。

……え、マジ？　原村和がのどつち？　……あれ、そういえば打ち

方も確かに、どことなく似てるし……名前も、和とのどっちで繋がるな……え、マジで言ってるの？

「……原村が、のどっちだったのか……」

「……………」

「つて、大丈夫か？」

和は俺を見て呆然としていたようだが、ふと顔を下に向けて俯く。いや、無理もない。まさか知ってる人だとはな……これは気まずいだろう。

しかもこの間に口説いて、なおかつ振ったばかりの相手だ。俺の方も、振られた側として気まずい。どうするんだこの状況……。

だが、のどっち……いや、和はわなわなと震えている。な、なんだ？俺が少し様子を窺っていると、和は感情を抑えるかのような絞った声で、

「つつつ……！……こんな……悩んでたのが馬鹿みたいじゃないですか……！……」

「えっ？」

声はそれほど大きくないが、俺は聞き漏らさない。悩んでたのが馬鹿みたい？ という意味だ？

俺がその発言について考えていると、和が顔を上げた。その顔は——赤い。そして少し窺うような上目遣い。なおかつ、恥ずかしがっているようにも見える。

ぶつちやけもの凄く可愛いが、なんだとは思う。振った振られたの関係だし、帰ったほうがいいんじゃないかと思ってたのだが、あろうことか和は、

「ヤクマルさん——いえ、東郷さん……いい、行きましょう」

「あ……？ い、行くって……あ、いや、オフ会か……？」

「……………」

こくり、と首を縦に振ることで答える和。なんだろう……普段も可愛いが、今はいつもより更に可愛く見える。

恥ずかしがってる女の子って可愛いけど、それだけじゃない。なんだか、妙に色気もある。何かを孕んでいるような……と思っ

と、

「……一緒に……行きませんか……？」

「……まあ、原村が良いなら——、っ……！」

返答の最中、和が距離を詰めてきたかと思うと、なんと俺の腕を取って、おずおずと腕を組んできた。うおお……！ でっかいのが、俺の腕に……あつ、ヤバい、勃起。

ここ数日間、眺めることしか出来なかった和のJKにあるまじき爆乳。それが俺の腕に横から押し付けられる。そのおっぱい特有の弾力と柔らかさ、張りを感じられてヤバい。というか、衣服的にノーブラだよな……この柔らかさ的にも……ああつ、ヤバい……気持ちいい……！

俺はふと、初めて女性と触れ合った時のことを思い出す。あの、強制的に股間に血がかあつと集まって勃起させられる感じ。それに似ている。

ぶつちやけ、勃起って物理的に弄られなければある程度はコントロール出来る。勃起する気がなければ、普段は別に勃つことなどない。

ただ、こうやって美少女と触れ合うと、その身体の熱さや、女性特有の柔らかさ、側まで寄ってきた時に良い香りが、五感で女というものを感じられて、強制的に勃起させられる。

ましてや相手は原村和。男をメロメロにしてしまうともないスタイルの美少女だ。巨乳好きであれば、和と触れ合ったり、付き合ったりすることは至上の喜びだろう。身体つてのは心と繋がっているし、心つてのは精神や本能でもある。

こんな極上の雌との接触到、俺の中の雄は抑えきれないし収まらない。ちよつと触れ合うだけで身体がメロメロになってしまっている。その証拠が勃起だ。今直ぐにでもこの女を自分の物にしろと身体が訴えている。そして、それも分かる、俺自身が分かっているからだ。この娘は、絶対気持ちいい。

触れ合った瞬間に分かった。和の身体は、雄には強すぎる。その身体を自分の手で味わう。貪り食う。全身で瑞々しい肌の柔らかさを

感じ、己の肉棒を彼女の身体の至るところに、我慢汁と共に擦りつけることが出来れば、もう最高の快楽であることは言うまでもないし、この魅力に抗うことは難しい。

同じ清澄高校に通う男子学生は気の毒だ。こんな娘が同じ学校に、教室にいるなど、もう一種の拷問である。

大人ですら抗うことが難しい色気に、思春期でやりたい盛りかつ、性経験がないであろう彼らには刺激が強すぎる。きつと無為に自室で彼女の事を思って、妄想の中で犯して、肉棒を自身で扱きたてるしかないのだろう。だが、それすらも彼女がオカズならめちやくちや気持ちいいはずだ。

多くの美少女と交わってきた俺でさえ、これはちよつとたまらない。順序を弁えず、今直ぐ俺のモノにしてしまいたくなる。それが許される筈もないのに、今直ぐこの昂りを彼女にぶつきたい。

ただ、それには彼女をまず堕とさなければ——って、あれ？ そういや、和には役満を当ててる。好きな人もいるからと振られた。なのに、この状況は？ いきなり腕を組んできたのは一体……？ しかしまずは、

「……なら行くか。どこか、行きたい場所はあるか？」

「……東郷さんとなら、どこでもいいですっ……♡」

うつつつはっ、やべえ、ギョツとされた超気持ちえええ……っ！
かくそ可愛い……！ というか何？ もう堕ちてない？ マジでどういうことだ？ ああでも、なんかどうでも良くなってきた。やっぱおっぱいめちやくちやでかい……気持ちいい……はあ、腕にむにむむにゆが……あー、もう、考えてきた流れとか全部無視して宿に連れ込むか、もう。どうにかしてやろう。というか、この感じならヤれる。インターミドルチャンピオンの爆乳JKとオフパコする。待ち合わせして直ぐに部屋に直行して、このおっぱいを俺の物にする。

「……それなら、俺の取ってる部屋にでも来るか？ 一応パソコンなんかもあるし、麻雀も打とうと思えば打てるぞ」

「……はい。東郷さんの部屋に、連れて行ってください……♡」

建前を口にして部屋に行くことを了承させる。よっしやあ、爆乳J

Kお持ち帰りい！ まず第一段階はオーケーだ。ああ、ヤバイ。興奮してきた……和を伴って近くの車を止めてある駐車場まで歩いていく。もうほぼほぼウイニングランだ。気分がいい。爆乳JKを腕にまとわりつかせ、そのおっぱいをたっぷりと俺の腕に押し付けて貰いながらのそれは、周囲に、この女は俺の物だと自慢しているに等しい。凄まじい優越感を感じる。……ああ、これ。部屋に入って我慢出来るか？ 入ってすぐに襲わないように気をつけないとな……そう思っ
て、俺は自分の泊まる宿まで和を連れてとんぼ返りする。距離はそこそこ。まあ、10分、20分程度で着くだろう。

だからその間、ちよつと会話でもしようかと思っただが……和はこちらをチラチラと見はするが、ずつと無言だった。というか、ポーズがエロい。恥ずかしいのか、両手を太腿の間に挟んで、腕を組んで下を向いている。そうするとおっぱいの谷間が強調されるし、妙にモジモジしてるから更にエロい。もうこんな襲ってくれって言ってるよ
うなものだろう。

「——つと、着いたな」

「はい……」

まあそれでも俺は我慢して宿に帰ってくる。……実は今回、ちよつとだけ奮発、そして事情があつてビジネスホテルではなくちゃんとした旅館っぽいホテルを取った。

それは良いとして、俺はさっさと和を連れて自分の部屋へ。部屋は和室。だがベッドが付いてて、部屋に小さい温泉が付いている。結構いい宿、良い部屋だ。金はまだあるとはいえ、貯金暮らしの俺がこんな宿に泊まつてる理由も、結局ちよつとした縁あつての事である。

とまあ、そういう訳で部屋まで戻ってきた訳だがどうするか……ま
ずはお茶でも入れて、ちよつと話か、麻雀でも——。

「……原村。何か——んうっ!？」

「んっ……んう……♡」

——とか思つて振り向くと、その瞬間に胸に衝撃。そして柔らかい
感触。

え、何……いや分かるけど。和が抱きついてきたのだ。というわけ

で落ち着けない。ああ……！　ほんとおつきい……でかい……！
はあ、おっぱいが俺の身体に押し付けられて潰れるのヤバイ……！
落ち着きかけたのに一瞬で勃起させられる……！

俺は一瞬で興奮させられる。というか、今いきなりキスされたな？
唇にいきなり柔らかい感触と和の顔。身長差はおそらく15、6センチくらいはあるが、顔を上げて背伸びしてちゅつとしてきた。ああ、やばっ、めっちゃいい匂いするし、気持ちいい……華奢なのに全身柔らかくて蕩けそう……！　しかも和はそのまま俺を背後のベッドに押し倒し、

「はあ……はあ……東郷さん……す、好きです……♡　大好きです……んん……ちゅっ、ちゅっ……はあっ……♡」

「う、あ……は、原村……はあ……」

俺に覆いかぶさって唇に何度もキスを落としてくる。……え、ていうか俺、ひよつとしなくても襲われてる？　まさかの逆レイプ？　まさかの向こうがオフパコ狙い？

間近で見た和の表情は……俺が今まで墮としきった女達と同じ、雌の顔をしていた。もしこれが漫画なら、眼の中にハートマークでも浮かんでいるだろうかと思うほどに蕩けきった表情。口を半開きにして息を乱し、合間合間に何度もキスをしてくる、欲望塗れの行為。

かくいう俺もヤバイ。出会った爆乳JKによる逆レイプ。オフパコ。インターミドルチャンピオンである美少女との真っ昼間からのセックス。それを考え、実際に柔らかい肢体が、確かな重みと熱を持って俺の上に乗っている。密着している。

ギンギンの肉棒は和のくびれたウエスト。その中心、下腹の辺りで潰され、その綺麗で長い足は絡み合う。そして何より、男を惑わせるたっぷりと実った、この俺も見続けた爆乳が俺にたっぷりと押し付けられている。

意味も分からなければ、状況も分からない。何故こうなるのかと疑問はあるが、こんな夢みたいなりアルな状況では、相手の理由よりも眼の前の女を味わうことを自然と優先してしまう——俺も既に和に手を回していた。

「ああ、東郷さん……っ♡ やつと、やつと……っ♡」

「原村……いや、和……ああ……」

まるでそうなることが自然であるかのように。俺と和は2人だけの室内で性行為を始めた。

オフパコでおっぱい

——逆レイプを受けた際に男が取るであろう1番多い行動は何か。まあ簡単に分けると、そのまま身を委ねるか、抵抗するか。2択だろう。これは別に普通のレイプでも変わらない。

ただ——思う。抵抗するなんて選択肢、存在するのだろうか。

この場合、前提として、相手はある程度の容姿を兼ね備えているとする。美人、美少女から逆レイプを受ける場合だ。

そりやとんでもないブスや、気持ちの悪い男からレイプされたら抵抗する以外の選択肢がないから除外する。相手の容姿が優れているからこそ、迷う余地があるのだ。何しろ、レイプというのは相手の合意を得ていない上での性行為。悪い言い方をすれば暴行な訳だ。

俺が言うのもなんだが、性犯罪というのは重い。無理矢理相手を襲うなんてことは鬼畜の所業である。それが男でも女でもやつちやいないことだ。

それに加え、幾ら相手が美少女とはいえ、いきなりそんなことをされたら戸惑い、抵抗するというのも理屈では分からなくない。漫画などではよく見るが、誠実な主人公がヒロインから誘われたり襲われたりして、誘惑に揺れつつもそれを跳ね除け、こんなのでやるのは間違っていると説いたり、理由を問い質したりするのはよく見るシーンだ。

だが、思う。そんなのはあり得ないと。これを耐えられるはずがないと。

「んっ、はあ、んうっ、ちゅっ、ちゅっ、はあ、ちゅっ、んあ……♡」

東郷さん、東郷さん……♡」

「っ、ああ……和……」

旅館のベッドの上。俺にのしかかり、ちゅっちゅとキスを続ける美少女——原村和。

部屋に入るなり、俺を押し倒してきた、現在進行系で逆レイプに及ぼうとしているイケないエロ娘だ。

女の身で、逆レイプを成功させるのなんて、本来は難しい。何しろ、

男と女では筋力に差がある。

よっぽどのがなければ、男はこれを拒否することが、跳ね除けて逃げる事が出来る。実際、俺もどかそうと思えばそれは容易だ。今は、敢えてそれをしていないだけに過ぎない。

ただ、出来る訳がないのだ。

考えてみてほしい。相手は、ただでさえ自分の性癖のど真ん中にぶっ刺さる美少女だ。

こうやって密着してるだけで、もうめちやくちや気持ちいい。もういい匂いしかないし、触れる部分は全部柔らかい。まだ15歳の少女だというのに、その身体のフォルムは男を誘う雌そのもの。たっぷりと実った爆乳を俺の胸板で押し潰し、俺をたまらない感触で興奮させてくる。

胸が大きい娘というのは、これがズルいのだ。ちよつと抱きつくだけでおっぱいが当たる。柔らかく、弾力を伴って卑猥にひしゃげる。

ましてやこれだけの美少女で、推定3桁は行くであろうJKの若々しいエロエロデカパイだ。和がその気になれば、ほとんどの男はこれだけで墮とせる。ちよつとおっぱいを当ててやるだけでメロメロになるだろう。相手はやることしか考えられなくなるに違いない。

いや、実際清澄高校で彼女を知る男子生徒は、どうしようもなく懸想してしまっているだろう。

他の女子とは比べ物にならない爆乳。日常的動作に付随して揺れる重たそうなおっぱい。なのに美しい曲線を描いた細い腰は、制服を持ち上げるおっぱいのせいで半ば見えてしまっているし、ただでさえ短いミニスカートは、和の既に子供を問題なく産めそうなプリ尻の尻山の高さによって、時折お尻のラインが見えかけてしまうという。

そんなグラビアやAVなどの写真、画面といった現実のないようなスタイルの美少女が、リアルとしてそこにあるのだ。物理的な距離であれば、縮めようと思えば縮められる距離にいる。理性というものがなければ、あるいは捕まることを考えなければ、簡単にその身体に触れる事が出来る。

実際にはそれはない。それはないが——生の美少女の破壊力は、周

困の男の頭を、誰にも知られない部分を美少女でいっぱいにしてしま
う。

写真や動画だけではリアル感がない。アイドルや女優などの近く
にいない女性であれば、妄想力が試されるが、現実に出たことがある
女性であれば、そのリアル感で妄想の完成度は高くなるし、オナ
ニーもとても充実するだろう。

自分の身体とエツロい身体のサイズをその場で比べることが出来
るのだ。そうして気づくのは、やはり女性であるが故の華奢さ、自分
の手で簡単に横部分を掴むことの出来る腰の細さや、自分の手で掴み
きれないおっぱいの大きさだ。

それを抱きしめればとんでもない快感が得られる。やりたい。
おっぱいデカイ。このおっぱいを自分の物にしたい。好き——と、男
子の欲望に満ちた、露骨ではないが露骨な視線を一身に受けているだ
ろう。

「東郷さあん……ちゅっ♡ 私……大好きな……あぁっ、はぁっ、好
きです……っ♡ 好き……♡」

そして実際に抱きつかれ、逆レイプを受けようとしている自
分はなんて幸せ者なんだと思う。どっぷり実ったデカ乳が胸を圧迫
し続けていることに、理性はガンガンと溶かされている気がする。

なにしろ俺も結構溜まっている。多くの美少女を抱いてハーレム
を築いている、そこらの男よりは、性の快感に慣れた男であるという
自負はあるが、それでもこの快感は耐えられるものじゃない。

相手から襲ってきているのなら、自分もそれを受け入れればいい。
詳しい理由などを追求するより先に、自分の身体にもたらされるリア
ルな美少女の快感に、自然と身体が動くのだ。条件反射のように。

実際、これは本能なのかもしれない。雄としての生殖本能。とんで
もなく可愛く美しい雌を、乳も尻もデカくて、なのにお腹周りは自分
と同じ内臓や骨が入っているとは思えないほどの美少女を、自分の物に
してしまえと。

肉棒は馬鹿みたいに勃起している。おっぱいの感触やキスの感触、
五感や精神に敏感に反応して脈動している。和の下腹で圧迫されて

もいて、物理的にも甘い快感がある。

こうなると、もつと快感を求めてしまうのが男の性である。だからこそ、俺は手を後ろに回して、そのエロ尻を両手で掴んだ。

「ふっ、ううんっ……♡ あっ、ああん……んんっ♡」

「はあ、はあ……和……」

尻を五指で、それぞれ掴んで引き寄せるようにする。おっぱいも凄い、こちらも凄い。

そのエロ尻は触れているだけで多幸福感が湧いてくる素晴らしい丸みを帯びていた。その輪郭をなぞり、丸みを確かめるように円を描いて弄ると、両手がとんでもなく気持ちいい。顔がニヤけてしまいそうになる。チンコがより硬くなる。ガン突きしたい。今直ぐまんこに俺の肉棒を突き入れてガンガン突いて子種を放出したい。この娘を孕ませて、俺の子供を産んでほしい——といった欲求が湧き上がる。

痴漢の気持ちも分かるというものだ。こんなエロ尻。ちよつと触れただけで男は好きになるだろう。いや、見ただけでも好きになってるかもしれない。彼女の同級生などはこの生尻の感触を想像して、彼女への想いを吐露しながら自室で肉棒を扱き立てているに——ん？

生尻？　そこで気づく。こいつ……！

「っ、和……ノーパンで来たのか……」

「あっ、ああ……言わないで……♡　ああ、はあ、東郷さん……あっ♡

そんな触って……はあ……♡」

和は俺が尻を掴んだことで先程よりも分かりやすく喘ぎ始めている。それもまたエロく、ツツコミたい部分ではあるが、それよりもノーパンでやって来たことの方が問題だった。

とんでもなくエロい私服でやってきたものだと思ったものだが、ノーブラに加えてノーパン。しかもいきなりのこの行動。さすがに分かる。

この和は、最初からこんなことをするつもりでやって来たのだと——そう思った時、俺の理性の壁は、一部、崩れ去った。

「っ……！　このエロ娘め……！　最初から俺とエロいことするつもりで来たんだな……！」

「あつ……ち、違っ♡」

「違わないだろう……はあ、こんなエロい服着て誘惑して……！」

「ああつ……♡」

スカートの下に手を潜り込ませてエロ尻を揉みしだく。時折太腿の方にまで手を伸ばしたりして、美少女の下半身のフォルムを確かめる。とんでもなくエロい身体だ。しかも、既に太腿には液体が垂れてきている。既に濡れているのだ。たった数分にも満たない接触で、俺を相手に発情していた。

「んっ、んあつ、ああ……東郷さん、好きい……♡」

しかもだ。俺に尻をいきなり触られて、何をするかと思えば、和は下半身を自ら左右にフリフリと動かして、快感を貪っている。

厳密に言えば、その下半身を動かすことで、俺の肉棒に下腹を……その秘部を、擦りつけているようであった。

とんでもないエロ娘だ。ここに来て、こいつは初めてなのかという疑惑が浮かぶが、別にどちらでも構わない。処女だろうがそうじゃなからうが、どちらにせよこうなつた時点で、俺の女にするのだ。

「っ、はあ、この……もう知らないからな……！俺の女にしてやる……！」

「あつ、あつ、だめ、んっっ♡ はあ、あつ、ああ……♡ 東郷さんの、女に……♡」

お前が悪いんだという言い方で、俺もその逆レイプを受けて犯し返すくらいの意志を固める。そうして手を更に別のところへも伸ばそうとしたところで、

「あつ……ああああああつ——♡」
「っー！」

和が、俺の腕の中で一際大きく震えた。

そのアニメ調の可愛らしい喘ぎ声を大きな声にして、涙目にも似たとろんとした瞳と表情で、ピクツ、ピクツと俺の腕の中で跳ねる。それを見て俺は驚愕するしかない。まさか、ではない。今のは確実に、

「お前……まさかもうイツたのか……？」

「あつ、ああ……ごめん、なさい……ああ、気持ちいい……♡ 東郷さ

ん……ヤクマルさん……好き……♡ はあ、東郷さあん……大好きです……♡」

俺の2つの名前を呼んで、俺の胸に顔を埋めて頬ずりしながら絶頂の余韻に浸っている和。まさかこんな簡単にイクとは。

俺が今まで墮としてきた女の中でも最速記録かもしれない。というか、俺の身体で勝手にイキやがった。俺の身体を使って、オナニーをしたのだ。俺からのアクションもあったとはいえ、俺はまだ尻を少し触って揉みしただけだ。殆どは和からのアクション。和がキスして、和が尻を振って俺の肉棒に身体を擦りつけ、俺の身体を感じてイッた。

とんでもない淫乱。これで当初思った通りの処女であるのなら、素質がある。変態か淫乱の。

そして俺への好意を口にしながらのオナニーと絶頂に、俺の中の欲望も唸りを上げた。肉棒も、憤ったかのようにグンツと大きく脈打つ。勝手に1人で気持ちよくなるな。俺も気持ちよくしろと震えている。俺も同じ気持ちだった。

「……この淫乱め……！」

「ああんっ……♡」

俺は尻の上にあつた手を、その秘部に伸ばして擦る。すると身体がビクンツと面白いくらいに反応した。

「まさかこれで終わりとは言わないよな……？ 俺を襲っておいで、興奮させて……！」

「あつ、やつ、あああ……♡ あつ、はあ、東郷さんの、はあ、これ、硬い、硬いです……♡」

「お前が硬くしたんだ……！ 責任持って鎮めて貰うからな……！」

「あつ、は、はい……♡」

硬くなった肉棒をグリグリと和の下腹に強く擦りつける。もう遠慮のない強めの押し付けだ。

しかし一度イッた和も蕩けているのか、その肉棒の感触に顔を赤くしながらも、その好きな雄の感触を堪能しているようにも見える。より一層強く抱きついてきたのが証拠だ。

もう俺も堪らない。俺は手を尻から和のほっそりとした肩に伸ばして、その衣服の肩のストラップを横にずらして脱がせるようにした。生の肩が露出し、少し色っぽい感じになる。が、俺の目的はその先だ。

「和……脱がせるから少し身体を浮かせる……」

「んっ、はあ……こ、こうですか……んんう……♡」

和が手に力を入れて身体を浮かせる。それからほぼ間をおかず、俺は肩から衣服を下にずり下げて、そして胸元を止めているリボンを引っ張って脱がせると、

——ばるんっ♡

「っ……すっげえ……」

「う……あつ、恥ずかしい……♡」

和の僅かに残った理性が、その羞恥心を顔に、言葉に出す。

対する俺は釘付けだった。そのまろび出てきた——和の生乳に。

俺の顔の前にぶら下がっている、最高級の爆乳。和が身体を浮かせて四つん這いのようにになっている体勢上、重力に従って俺の前で垂れ下がり、綺麗なI字型の長い谷間を俺の前で見せつけている。柔らかさもありませんが、張りも抜群で瑞々しいおっぱい——本格的に触れていないのにそれが分かる。おっぱい星人の俺にとっては常識だが……もし垂れすぎていれば、谷間は離れ乳になって隙間が空いていたりする。

だが和のおっぱいは、その大きさを持ちながら、形も綺麗に保ち、必要以上に重力には従わない。そこにあるのはメロンのような大きさの爆乳が、あくまでも谷間という一体となつてぶら下がり、和の動きに合わせて僅かに揺れている——そんな素晴らしすぎる光景である。

その先端のピンク色のツンと突き出た乳首も、大きすぎず小さすぎない完璧な形と大きさ。というか、俺の首元辺りで、その爆乳がふるふると重そうに揺れて、乳首が俺の身体に触れるか触れないかの辺りで動いているのがエロ過ぎる。和が身体を浮かせているのにおっぱいが触れそうになっているのだ。そのポリウム感が、大きさがよく分かる。

「たまらない……………！ はあ、和……………俺の顔にこのまま……………」

「はあ……………はあ……………ん、あつ、東郷さん……………」

俺の導きに流されるように、和が身体をもう少しだけ上側に調整すると、俺の顔の上におっぱいがやって来る。待望のおっぱいだ——むしやぶりつくしかなかった。

「はあつ……………ヤバイ……………！ おつきい……………おっぱいでかつ……………はあ、最高つ……………！」

「ああつ、東郷さんが、胸の間に……………♡ あつ、そんな触つ……………ああつ♡」

和を抱きしめるようにして再び俺と密着、抱きつかせると、その推定100センチ超えのおっぱいが、俺の顔にむにゅんっ♡ と落ちてきて、そのまま俺の顔を挟み込んだ。

視界いっぱいにおっぱいが広がる。鼻先を和の谷間の奥につけて、耳までおっぱいに挟まれる。視界はおっぱいだ。顔全体でそのおっぱいの感触を感じる。

もうとにかく最高だった。和のおっぱいは信じられないくらいモチモチしていた。

ぼよんぼよんでたぶたぶ。でっかいおっぱいが俺の顔を挟んで、幸せ過ぎる柔らかさと弾力を撒き散らしている。おっぱいは重く、そして温かい。俺の顔にもんにゅりと合わせて形を変え、瑞々しい乳肌、滑らかで自然と肌が滑るような、常にすりすりとしていたくなるようなすべすべ肌。乳圧は極上で、顔を左右に振り動かせば、重たくて柔らかいずっしりとしたエロ爆乳が、むにゅん♡ むにゅん♡ と俺の顔の動きに合わせて形を変える。右に顔を動かせば、右の乳房が俺の顔に乗っかるような、抵抗してくるような弾力と柔らかさが来て、同時に左の乳房が元の位置に戻ろうとして結果的に俺の顔を追いつがる。左の顔部分に、構つてと言わんばかりに吸い付いてくる乳房。その乳圧というべき左右のコンボに夢中になる。逆に動かせば逆だが同じ結果に。おっぱいを楽しめる。そのでっかいおっぱいを堪能出来る。それだけで最高に幸せだが、手を背中から両端に持ってきて、左右からおっぱいを掴めば、触れた瞬間に指が、掌が、おっぱ

いの素晴らしい柔らかさに沈み、しかし一定の位置まで沈み込めば抵抗感——気持ちのいい弾力が強くなる。

「ああ、おっぱい……………」

「ああっ、んんんっ…………♡ む、胸、そんなに舐めるなんて…………ああ…………気持ちよすぎます…………♡」

そして結果的に、間で挟まれる俺の顔への乳圧が増して、気持ちよすぎた。おっぱいを押し込めば、その谷間は深まり、ボリユーム感が増すし、顔の凹凸におっぱいが嵌まり込んでくる。左右から押したため、当然だがおっぱいが行き場を求めて余裕のあるスペースに入り込むのだ。顔の全てに乳肉がむにゅむにゅと甘えてきて、多幸感がヤバい。柔らかい。でかい。左右から揉みしだきながら顔に押し付けて夢中になっておっぱいを求める。おっぱいのことしか考えられなくなってしまう。

「はふ、はあ、おっぱいっ…………あー、ああっ、おっぱいでかつ、最高お、はあ、和、のどばいすごっ……………」

「あつ、そんな、胸に夢中になって…………あつ、好きですっ♡ ああ、東郷さん、もつと、はあ、もつと、ああ、胸、来てください…………♡」

「和あ…………ああっ、柔らかい…………幸せえ……………」

和を強く抱きしめながらおっぱいの中で顔を振る。体重を掛けると更に乳圧が増して気持ちいい。息苦しくもあるが、それすらも気持ちいい。おっぱいで窒息するなら本望だ。実際に窒息するほどではないにしろ、それくらいの気持ちよさがある。

そして、こうやっておっぱいを堪能していれば当然行き着く思考——ここに、己の肉棒を挟み込めば、死ぬほど気持ちいいだろうという、経験則から来た確信に近い推測に俺はもう我慢することが出来なかった。

ずっと顔を埋めていたのは山々だが…………というか俺の理想を言うなら、この状態で挟まれるとめっちゃくそ気持ちいいのは前にしてもらったから分かっているが、それをやるのは2人以上が必要なので無理だ。

それにこのままでは俺の肉棒が辛い。もう和の肌の感触に、特にこ

のおっぱいを堪能してるだけでバツキバキになってしまっている。我慢汁も凄いことになっているだろう。とにかく抜きたい。

「はあ、ああ……和、こっちも……」

「っ……これって……あっ……東郷さんの……♡」

腰を突き出して、テントを張った俺の股間を見せつけければ、和もそれを見てはあ、はあ、と荒く熱い息を吐く。俺と同様に、彼女も興奮しているのだ。

そんな和に俺のチンコをパイズリしろと指示する——のだが、予想外なことに、それより先に和が行動を起こした。

「はあ、はあ……東郷さんの……モノ、こんなに大きくて硬いなんて

……はあ……ああ……♡」

「和……っ、はあ……」

和が下にずり下がっていく。俺の股間を見て、とろんとした表情を見せながら、その爆乳を俺の胸板からお腹まで、むにくっ♡ と押し当てた状態だ。これがまた気持ちいい。おっぱいの感触を全身に塗りつけられているかのような気持ちよさ。

しかもそれが下に下がっていくに連れて、当然だが俺の股間に到着する。思わず腰を浮かせ、ああっ……と声を上げてしまった。おっぱい好きなら分かるだろう。このエロさ、気持ちよさが。

ズボンの上からとはいえ、おっぱいで勃起した肉棒を、その裏筋を中心にべっとりと擦られると堪らない気持ちにさせられる。和の片乳が、肉棒の形になって歪む。我慢汁が漏れた気がする。それだけ気持ちいい。肉棒の裏側、主に股間全体で和のおっぱいを受け止める。その重柔らかさに蕩けそうになる。精液が通るための道を、おっぱいの圧が刺激する。そのまま擦られるだけでも気持ちいい。射精に導くことだって出来るだろう。

だが和は更に下に下がり、おっぱいも肉棒から陰囊の部分へ下りて、そのまま遠ざかっていってしまった。

気持ちよさが遠のいて残念に思ったのも束の間、和は顔の目の前にやってきた俺の股間を見ると、その隆起した股間に顔を埋めた。

「はあ……ああ……東郷さん……♡ 東郷さん……好き……♡」

「っ……い」

とんでもないドスケベな光景が現れる。

何をするかと思えば、和は俺の肉棒に顔を擦りつけてきていた。

何かの動物が顔を、身体を擦りつけるように、肉棒に向かってその可愛らしい顔で甘えてきている。鼻先を股間に埋め、左右にフリフリと動かし、その匂いを嗅ぎながらはあはあと興奮している。しかも、

「はあむ……んっ、んんっ、あむっ♡ 東郷さん……んあ……はあ……ちゅっ♡」

「っっ……このっ……ドスケベめ……！ はあ……っ」

和は俺の肉棒をズボンの上から啄み始めた。天然なのか、俺の肉棒の膨らみの、裏筋に当たる部分を軽く口で食み、亀頭の部分にキスを落とし、頬ずりをしている。

明らかに俺の肉棒を欲しがっている。

もうヤバイ。俺はズボンをさっさと脱ぎ捨てて、和に奉仕させることにした。和に肉棒を突きつけ、

「和……そのおっぱいで挟め……挟んで気持ちよくしろ……」

「あ、あぁ……東郷さんのそれ、を……私が……♡」

俺の勃起したら自然に剥ける程度の仮性包茎チンコがピンツと天に向かって反り立つ。既に我慢汁でトロトロで、外気に触れたことで解放感と気持ちよさを感じる。

これほどのおっぱい美少女との触れ合いで、既に気持ちいい勃起をしている肉棒が、おっぱいの前に曝け出される。期待によっていきり立つ。既におっぱいはチンコの目と鼻の先ということもあって、包まれる瞬間を敏感に感じ取っているのだ。

そして、その期待通りに、和は起き上がってベッドの端に移動した俺に合わせて、足の間にペタリと座ると、

「はあ、はあ……挟む……こう、ですか……？」

そう言って恥ずかしがりながら和は自分の胸を持ち上げると、深い谷間を作り、

上から落とすように俺の肉棒に招き入れた。

むにゆうううう♡

「あつ、あああ——……！」

挿乳、おっぱいの谷間を肉棒でかき分けていく感触に息が漏れる。17センチ近い俺の肉棒は和のおっぱいに完全に埋まってしまった。

「ああ、あつ、やばつ、ああ……」

「んっ♡ ……そ、そんなにいいんですか……？」

「ああっ……ヤバイ……幸せすぎる……！ くっ、ああ……」

心の底からそう口にする。上から俺の股間を見ると和の爆乳の谷間しか見えない。

しかし俺の肉棒は和のおっぱいの中の感触をしつかりと味わっている。ふわっふわでたつぷたぶの柔らかさと肉棒に絡みついてくるような弾力、滑らかな肌と温かな体温。それに完全に包み込まれているのだ。

挙げ句鼠径部には下乳の感触まである。

おっぱい星人の夢、パイズリ。それをこんな最高の爆乳美少女にしてもらおう。

男ウケ抜群のエロエロおっぱいによる乳奉仕。優越感もそうだが、快感も凄い。気持ちよすぎて溜息が漏れる。

とうるか肉棒がさつき以上にギンギンに固くなり、ピクピクとおっぱいの中で歓喜に震え、先走りを漏らしまくってるのが分かる。ほんつとに気持ちいい……動かされたらイッてしまうんじゃないか、と思いつつも動かしてもらわざるを得なかった。

「和……抜いて……」

「抜く……はあ……はあ……♡ こんな感じで……あつ、熱い……♡」
「っ、ああああ……そうっ、そう……ああ、ふわふわっ……ああ、気持ちいい……！」

「んっ、はあ……胸の中で……動いています……♡ ああ、カツコいい……♡ すごい硬い……♡」

包まれただけでもヤバかったが、動くとそれ以上に気持ちいい。もはや天国だ。夢のような気持ちよさだ。

ギンギンに張り詰めた肉棒に向かって左右から、たつぷりと乳肉が

包み込んでくる。とんでもない乳圧。吸い付いてくるモチモチ肌のおっぱいは、先程俺の顔を挟んだ時のように、しつかりと俺の肉棒の形になってみっちり柔らかさを伝えてくる。その温かさもあって、尿道や肉棒の芯まで特大おっぱいの圧が染み込んでくる。

それに加えて和がぎこちなくも左右からおっぱいを押さえて動き出せば……もう喘いでしまう。最高過ぎる。気持ちよすぎた。

みちみちの谷間の中を俺の肉棒が行き来する。亀頭で乳肉を掻き分けていく気持ちよさ、カリ首を弾き、しかしその隙間にすら吸い付いてくる。裏筋を乳肌がにゅるりと擦り、根本までたつぷりと扱かれる。

おっぱいが大きいから、常に全体が扱かれ、それらが一気に快感として押し寄せてくる。加えて、ビジュアルだってヤバイ。

「和のおっぱい気持ちよすぎ……！ ああ、そう、上下に、動かして……俺のチンコ愛して……そう、ギュツと……あぁっ」

「んっ、あっ、はぁ……東郷さんの、熱くて……♡ ああ、想像よりも……♡」

「くっ……あっ、この、エロエロ娘め……はぁ、ちゃんと俺の好きな挟み方を学習しろ……ああ、やばっ、たまらないっ……」

もう和の爆乳が俺の腰の上で、ちんこ包みながらたぶん揺れてるだけで視覚の暴力というか最高すぎる。ちんこ全く見えない上に、鼠径部に下乳が当たって、音が鳴ってるのとかエロすぎて腰が浮く。

するとびっくりしたのかおっぱいを横から締めて抱きしめるようにされてしまい、乳圧が強くなって気持ちいい。

というかこっちの先走りで胸の中がびしょびしょなせいかな、ニチツ、ニユルツ、ニユチュツ、と音が鳴っててエロい。

もうこんなの、チンコを愛するためのおっぱいでしかない。パイズりするためのおっぱいだ。でなきゃこんなに気持ちよくする必要はない。

「あー……気持ちいい……さいっこう……！」

「東郷さん……はぁ、はぁ……んっ♡ あっ、胸の中で大きくなって

……ああっ♡」

たぽっ、たぷっ、たぱんっ、たぽんっ♡

「ああ、ヤバイ……おっぱい、すごっ……ああ、好き……」

狭くてみちみちの乳穴をちんこ全体で犯す感触に酔いしれる。

ただ、犯してはいるが、同時に食べられているようでもあった。でかすぎるおっぱいに、俺の肉棒が食べられている。むにゅんっ♡ むにゅんっ♡ と密着して咀嚼されている。しゃぶられているとも言えそうだ。

腰は浮いて、腰の奥からグツグツと煮えたぎった快感が溢れ出しそうになる。長くは我慢出来ない。ぶっちゃけ、もうイキそうだ。早いかもしれないが、こんなの我慢出来る訳がないとも思う。

こんなエロエロデカパイ、レギュレーション違反も良いところだ。これがまたJKで15歳。そう考えると更に肉棒が硬くなるような気がする。

実際、こんなエロい身体は男子高校生には勿体ないと思う。というか、こんな子が仮に同年代の男子なんかと付き合ったら猿になって何も手につかなくなるだろう。

きつと毎日パイズリをせがむ。ムラムラしたら学校の男子トイレや、お決まりの校舎裏、体育倉庫、更衣室、シャワー室などに連れ込んで、そのエロ爆乳でずっぽりぬっぽりパイズリして射精。そのままお掃除ついでにフェラをさせたり、そのままぶち込んで、綺麗で長い髪やその学生にしては大きすぎるおっぱいをばるんばるん揺らして生エッチ。そのまま中出しして、もう一回パイズリさせたり、とにかくやりまくって勉強だろうと部活だろうと何も手に付かないはずだ。

普通の女子ですら男子高校生にとっては甘い毒と化すだろうが……原村和はそれ以上。

「ああっ……はあ、頭が真っ白に……んんうっ♡ 東郷さんの、胸の中で熱くて硬くてえ……ああ、挟んでると気持ちいい……あっ、これ好きです……♡ 東郷さんの、挟むの大好きい……♡」

「っ、ぐ、ああっ……っ、この……」

和がパイズリしながら、まさかの感じて尻を左右に振っているのを

見て、そのとんでもないエロさに目の前がチカチカしそうになる。女性が気持ちいいプレイでないのは明らかなのに、それを好きという都合の良さ。

全身全て、その発情っぷりもそうだが、童貞男子の妄想で具現化したようなエロさだ。

俺が自分のモノにしてきた他の美少女達もそうだが……おっぱい1つとつても、和の爆乳は、童貞の想像通りか、それ以上の気持ちよさがある。

おっぱいが好きなら、和を彼女にただけで、もうこの先の生活はバラ色だろう。可愛くておっぱいがめちやくちやでかい女の子とラブラブセックスする以上に気持ちのいいことはこの世に存在しないと確信するに違いない。

実際には、それを受けるのは俺だけなので、誰も確認することの出来ない机上の空論……俺だけが提唱できる説でしかない。

そしてこれだけのおっぱいに対しての愛を考えたが、結局は——おっぱい好き！ でっかいおっぱいでイク！ でっかいおっぱい気持ちいい！ と翻訳しても良い。

とにかく気持ちいいのだ。もうイクそう。

「ああ……和……イクそう……はあ、おっぱいのサイズ教えて……」
「っ……♡」

俺の変態的な欲求。和はそれを聞いて、顔を赤くし、しかし恥ずかしそうにしながらも、

「……胸の大きさは……はあ、あっ♡前はJカップでしたけど……この間測ったら100センチのKカップになって……」

Jカップから100センチのKカップ——その言葉を聞いて、俺の肉棒が肥大化し、射精の為の一線を越える。

ヤバい、イクっ、射精する……！ と腰を浮かせ、和の乳内に射精しようとする数秒前。更に和は、

「でも、最近はキツくて……んっ♡今はまた大きくなってるかもしれません……♡そ、その……恥ずかしいので、誰にも言わないでください……♡」

「つつつ……！ ああ、イク！ 出るっ……！ 和、出すぞ……！
おっぱい孕め……！」

びゅううううつつ！ びゆるるるっ！ びゅうっ、びゅうっ！
おっぱいのサイズを聞いて、それだけ大きいおっぱいで挟まれてる
ことを自覚した俺は、その優越感を快感に変換して引き絞ったものを
解き放つ。尿道から精液がたつぷりと吐き出される快感に頭が真っ
白になる。

「あっ、あっ、これが……東郷さんの精液……♡ これも……はあ、大
好きです……♡」

和はそのおっぱいで射精をうっとり受け止めていた。谷間から
飛び出した精液が和のおっぱいや俺の下腹の方まで飛び散る。柔ら
かいおっぱいの乳圧の中で射精するのは何度受けても極上の快樂で
腰が溶けそうになる。

凄まじい多幸福感と快感だが、それでも満足することなく、肉棒は勃
起を維持したまま未だに気持ちいい。——当然だ。こんな極上の
女相手に一発で我慢出来るはずもない。

「はあ……はあ……っ、もう、めちやくちやにしてやる……」

「あっ……♡」

だから俺は、そのままもう一度パイズリしたくなる欲求を後回しに
して、和の初めて(?)を奪うことにした。

オフパコ本番

「はーっ……………♡ はーっ……………♡ と、東郷さん……………♡」

「和あ……………ああ、挿れる……………ぞ……………！——あ、ああ……………！」

エロ過ぎる裸体を前に、俺は我慢など出来なかった。

ベッドに押し倒した和の肢体——顔の造形は間違いなく可愛い。少女らしい童顔な部分と女性の綺麗さを併せ持つ美少女で、くびれた腰にむっちりしたお尻に太腿。仰向けになっているというのに、重力に負けずに形と高さを保っている素晴らしい爆乳。女子高生とは思えないほどのスタイルは見ているだけで自然と唾液が溜まり、生唾を飲み込んでしまうほどだ。

「っ……………！」

「あっ……………私……………あ——♡」

くちゅっ、と肉棒の先端が和の入り口へと当たって音が鳴る。もうびしょびしょの濡れ濡れであり、男のモノを受け入れるには十分な状態だ。……………だがそれでも中々キツイ中に腰を押し進めていく。あれ？ もしかして処女か？ まさか、こんなエロエロで誘ってくる上に発情してる和が——

「んっ、んうううううう♡」

「っ、お……………」

肉棒の先端が何かを突き破って奥に進めば、和が甲高い声を上げる……………うお、マジか。本当に処女だった……………。

いや、嬉しいことではあるのだが、処女なら処女で、処女の癖にこんなどエッチだと思うと……………ぶっちやけ興奮するな。

「入ったぞ和……………大丈夫か？」

「あっ、は、はい……………その……………んっ♡ 少し痛みますけど……………はあそれよりも、なんだか……………あっ♡」

「気持ちいいのか？ 処女なのに、初めてで感じてるのか？」
「っ……………！」

少し甘い声を漏らしている和に俺がそう言うと、和は恥ずかしそうに紅潮している顔を逸らしてしまった。だがその上で、ボソリと、

「……し、仕方がないじゃないですか……好きな人との初体験なんですから……♡ ベ、別に普通ですっ」

「……うおおっ！ 和あー！」

「あっ♡ やっ♡ 急に動いたら、だめです……♡ あっ、んんんうっ♡」

小声で呟いた言葉を耳で拾い、俺は興奮して肉棒を跳ねさせる。しかし和のトロトロじゅくじゅくの熱い中で、きゆうきゆうに締め付けられているので実際にはそれほど変わらないまま、ただ気持ちいい具合を感じる。

こんなに気持ちいい時にそんな男心をくすぐるような事を言ってしまうえば、そりゃあ腰を動かすことを我慢できるはずもない。もう今すぐにでもこの中で己の子種を吐き出したいという気持ちでいっぱいになる。

「はあ……はあ……和、気持ちいいか……？」

「あっ、ああっ♡ と、東郷さあん……♡ んっ♡ はあ、はあ……頭がもう……ああっ、何も考えられませんか……♡」

腰を振りながら和を見下ろす。腰を振る度に和の身体が突き動かされ、バインバインに揺れるKカップ以上と思われる爆乳はこちらの官能をガンガン刺激してくる。そのエロ過ぎる乳揺れが見たくて、腰の動きも激しくなる。ただでさえエロいのに、セックス中ともなれば容赦なく乳を振り回して男を刺激するのだから罪深い女だ。見る人が見れば下品だと評するかもしれないが、俺はこの光景を素晴らしいものだと称える。

「あーっ、くう……エロい……はあ、可愛い、気持ちいい……！」

「んうっ♡ 東郷さん……好き……っ♡」

「おおっ……!?!」

不意に和が俺の首に手を回し、更には足を回して俺の腰をホールドした。いわゆるだいしゆきホールドというやつだ。突然のそれに驚きと興奮が入り交じるが、気持ちいいのはそれだけじゃない。

「ちゅっ、んっ、れるっ、ちゅうっ……♡ 好き、大好きです……♡ んっ、ちゅうっ♡」

「っ、はあ……」

顔を近づけ、和と何度もキスを、舌を絡ませてキスを行う。

密着感が上がり、鼻孔を和の甘く淫靡な匂いがくすぐり、こちらの胸に和の爆乳がたっぷりと押し付けられて気持ちいい。腰を動かせば、その密着した状態のままおっぱいがむにゅむにゅと俺の胸板で弾んでおっぱいの柔らかさと弾力をこれでもかと撒き散らしてくれる。

肉棒はほかほかのおまんこ肉に絡みつかれてヤバイ。全力の歓迎を受けているようだ。一番奥をコツ、コツと突くと、それに合わせてきゅつきゅつと締め付けられるのがエロ過ぎるし気持ちよすぎる。

ポリユームたっぷりのおっぱいを左右から揉み上げてみれば、相変わらず気持ちよすぎる掴みきれない幸せを味わえるし、同時におまんこの方も、出して、出して、と言わんばかりに肉棒に情熱たっぷりにまどわりついてしゃぶられる。

「はあ、気持ちいい……っ、もう出そう……」

「んっ、はっ、あっ、で、出るんですか……あっ♡」

快感に喘ぐ和が僅かに戸惑いを見せる——が、その顔は明らかに期待していた。

中を出してほしいと言わんばかりの蕩けきった表情。口を半開きにし、俺をじつと上目遣いで見上げるその表情に俺はより一層肉棒を肥大化させる。

というか、そもそもどこもかしこも気持ちよくてエロい。男をメロメロにするための要素をこれでもかと盛り込んだ美少女だ。触れる場所が全部柔らかくてすべすべなのは反則だと思う。なのに奥を突いてみれば、

「あっ——んんっ♡」

和が面白いくらいに感じて身体が跳ねる。同時に、それを抑えようとしてこちらにしがみついてくる。この性感に夢中になつてる感じがまた堪らない。自分自身の手で美少女を女にする。調教するかのような征服感で興奮も高まり、もう腰も止まらない。俺の方も頭がおかしくなるくらいに性感に支配されていた。

「はっ……はあっ、和あ……！ ああっ、気持ちいい……」

「んっ♡ あっ、あっ、ああんっ♡ そ、そんなっ、はげひっ♡ あっ、中で、あっ、そんなのっ♡ んんんうっ♡ あっ、ああっ……♡」

腰を振り、手で和の跳ね回る爆乳を掴んだり、体中の至るところを撫で回しながら、自分の下にいる美少女を見て興奮がとにかく収まらない。

汗ばんだ首筋にキスを落とし、甘い匂いを吸い込む。もう少し顔を落としておっぱいに顔を埋めて腰を振る。そうすると和が俺の頭を手を回してぎゅうぎゅうと胸に押し付けられてヤバイ。このポリュームたつぷりのむにゅむにゅを堪能しつつ、腰を掴んで美少女の素晴らしい丸みを帯びた輪郭を撫で回す。おまんこはもうドロドロのきつきつで、奥へ奥へと俺を誘うかのように収縮している。

今からこの最高の雌に、己の遺伝子を吐き出せる——そう自覚すればするほど、顔が馬鹿みたいにニヤけそうになって、股間がギンギンになっていく。もう我慢は出来ないと、

「っっっ、はっ、出る……！」

「っ、あっ、す、すきい……大好きい……♡ な、中でだひてえ……♡」
「っ！ ああ、出すっ……！ 出すぞ……！ はあっ、おねだりなんかしやがって……くっ、出してやる……！」

その言葉に肉棒が跳ねる。たぱんっ、たぱんっとおっぱいが上下に円を描くような形で揺れててエロい。そして奥へと突き刺したまま、びゅううううっ、びゅうううっ、びゅうっ、びゆるるっ。

「かっ、あっ、出るっ、ああっ、あっ、最高っ……」

「んんんんんんううっ——♡」

最高にエロくて可愛いおっぱいのでかい美少女に中出し。気持ちよすぎて声は自然と出るし、軽く痙攣だっしてしまふ。和の中を肉棒で意識し、おっぱいを鷲掴みにしながら射精。他の雄が絶対に味わえない至高の快樂に優越感を感じ、それすらも快感に変換して唾液が垂れる。

もはや、これを味わえないなんて他の男が可哀想だとすら思える。だが、これを味わえるのは俺だけだ。他の男には渡さない。実際に、初めての男は俺になったがこれ以降も彼女を味わえるのは俺だけな

のだ。オカルト様様である。

「あつ、ああ……はあ、気持ちいい……和……」

「ひゃつ、はつ……あふ……♡ あつ♡ とうごうさあん……あつ、だ
いしゅきい……んっ♡」

和もイツたのだろう。身体をビクンビクンと跳ねさせながら、うわ
言のように俺の名前と好意を口にし、すりすりと倒れ込む俺の身体に
擦りついてくる。

この好意がまた堪らないし、何より溜め込んだ俺の性欲はまだまだ
止まらない。こんな極上の美少女相手に肉棒が萎える筈もない。

「和……っ、まだやれるな……っ？」

「ふえ……っ？ あつ、ああっ……んーっ♡ あつ、らめえっ♡ おか
ひっ♡ あつ、あたまがっ♡ あつ、ああっ♡」

まだ頭が絶頂の余韻でぼーっとしてるのか蕩けた瞳で首を傾げた
和に、俺は再び腰を振る。

精液で更にドロドロになった中を感じながら、処女には刺激が強す
ぎるか一瞬思ったが、どうにも和は素質があるらしい。首を振って
涙目になりながらも、快感に喘いでおり、足はしっかりと俺の腰を
ホールドしたままだ。

それどころか、自分から押し付けてきているようにも感じられるド
スケベ娘だ。エロ漫画で見えるようなことをしてくる処女。もう淫乱
ピンクと呼ばざるを得ないだろう。

それにまだお昼だし、時間はたっぷりある。和を存分に味わい尽く
してやると、俺は腰の動きを早めた。

——その2時間後。俺は見誤ったことを悟った。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ とう、ごう、さんっ、すきい♡ だいす
きい♡ もつとくださいっ♡ 格好いいですっ、大好きい♡」

「おつ、あつ、やばっ、ああ、待てっ、はあ、また出る……っ！」
俺の上に乗った和が俺を抱きしめながらめちやくちやに喘ぎなが
ら好意を口に出している。

当然、セックスをしている訳で俺が下から突き上げている——ので
はなく、腰を振っているのはどっちかという和の方だった。

なんというか……最初は俺の方が攻めており、和が受け身の状態がずっと続いていたのだが、何回かの射精の後、数十分前から和に変化が訪れたのだ。

「んっ、ああっ♡ 気持ちいいですっ♡ 東郷さんのおちんちん♡ 私の中でっ♡ あっ、んっ、東郷さん好きいつ♡ 中で出してくださいっ♡」

……とまあ完全に快樂墮ち……とまではいかないが、何度もイカされて振り切れてしまったのだろう。和の方もセックスの快感に病みつきになつて本能のままに俺とのセックスを愉しんでいた。

理性とかは既に頭から抜け落ちてきているのだろう。慣れていない所為でもあると思う。初めてのセックス。初めて味わう快樂だ。まだ15歳の高校生には制御できるものではない。もう夢中になつてしまっている。

まあ俺も制御出来ているかどうかは怪しいが、それでも美少女とのセックスが初めてではないこともあるし、一応の余裕はある。……というか、和はそれにしても淫乱だ。やはり素質がある。いや、ありすぎる。淫乱の素質が。

「ちゅっ、んっ、れろっ、あああ……♡ また出て……んんっ♡ はあ、大好きい……♡」

「お、ああ……やっぱ……腰抜けそう……」
何回目かの射精。和の柔らかい重み、その体温を感じながら中出しする。

さすがにそろそろ一度休憩したいところではある。落ち着きたいというか、やるならまったりとやりたい。激しいセックスを続けすぎでチンコがひりひりしてきた。

ただそれでも萎える気配がないのはさすが和と言わざるを得ない。エロ過ぎる美少女とのセックスは何度やつても最高。おっぱいでかい女子高生とするセックスなんて気持ちいいに決まっていると俺が身を持って証明している。他の人に教える手段はないけどな。

「くっ……はあ……和……そろそろ一旦——」

俺が一度、和の中から肉棒を引き抜き、一度休憩しようかと口に出

そうとする。内風呂もあるし、そこらで一度身体を流しながらまったりしようと思ったのだ。

——しかし、

「……はあむっ、んっ、ちゆるっ、んんっ、ふあ、おっきい……ちゆる、おいひい……♡」

「うっ……ああ……」

移動しようと引き抜いた肉棒が和の顔の前に来たためか、和はあっさりとそれを頬張り、一心不乱にしゃぶりはじめた。

和の熱くぬめぬめとした口内の感触に思わず呻いてしまう。ああ、くっそ気持ちええ……というか、やっぱビジュアルが圧倒的だからヤバイ。見ているだけでイケそうになる。

出会った男をガチ恋させまくるようなとんでもない美少女である和。その顔が、その口が、俺の肉棒を愛おしそうにしゃぶっているのだ。

さつきまでのもそうだが、この和とのセックスを動画などにすればとんでもない収益になるだろうなとそんなことすら考えてしまう。多くの男性の夜のオカズのスタメンとなり、見れば男子小学生の精通を促し、老人の性欲すら復活させるかもしれない。もしかしたら貧乳好きだっておっぱい星人になってしまいかねない。そんな魔性の魅力がある。

「ちゅうううっ、んっ、れろお、ぷはあ、はむっ、んっ、んっ♡」

和の口はほんと気持ちいい。裏筋や亀頭をペロペロと舐め回し、首を振る姿は確認したというのに、本当に処女かと再度疑ってしまうほどだ。

ただ気持ちよすぎてヤバイ。男だって、気持ちよすぎるとおかしくなりそうになる。絶え間なく続く快感は本能を引き出してしまう。

「ぐっ、あっ、ああっ、くそっ、もう、また出してやる……！ その後はまた中にも注いでやるからなっ……！」

「っ♡ んっ、んっ、んっ♡ れろ、れろ、ちゅっ♡ んむ、はあむ♡ れろ、ちゅっ、んっ♡」

俺がそう言うのと和の口奉仕も激しくなった。言葉は理解出来ない

る。が、それに対する答えに理性を落とし込めない。

もつと気持ちよくなりたいという、ただそれだけの気持ちで和も求めてきている。実際のところどうかは分からないが、ここまで発情しているということは、やはりオカルトは発動しているし、俺への好意はきつちりと持っているのだろう。疑う余地もない。

そうして俺は和へ口内射精を決めると、再び和を押し倒して二桁目になるであろう行為に突入した。

——そういう訳で更に2時間後。

「ああっ、あっ……あひっ♡ あ……うっ♡ ああ……♡」

「っ、出る……ああ……」

何度目——いや、何十回目かになる射精を和の中で行い、俺は深く息を吐き出す。

休憩無しでの約5時間以上にも及ぶセックス。もう日も落ち始めてきた。

さすがに休憩無しでのこの長時間の性行為はキツイ。体力には自信があると自負する俺だが、さすがにクラクラと目眩がしてきたので、水を飲む。

このペットボトルの水も、ずっと離してくれない和を持ち上げたまま冷蔵庫から水を取るというアクロバティックなことをして手に入れたものだ。

「はあ……はあ……ほら、和……」

「あふっ……♡ ああ……しゅきい……♡ しゅひれす……♡ どう

ごうしやあ……ん……んっ♡」

……さすがの和ももう体力の限界だろう。

むしろここまでよく意識を保っていられるものだ。まだ微妙に快感を求めないように腰をほんの僅かだが動かしているし。目の焦点も定まっていない虚ろな目で、口角を上げて気持ちよさそうに笑みを浮かべているドロドロの和はこれこれでエロいのだが、さすがの俺も疲れてきた。水も受け取れない有様だし、さすがに休憩したいと俺は思う。

「……ほら、口開けろ」

「んっ……ふああい……♡ あー……♡ はむっ、んむっ、んんっ、んく……あー……♡」

しょうがないので水を口に含んで渡す。いわゆる口移しだ。和はそれを俺からのキスと勘違いしたのか、従順かつ蕩けた様子で口を開き、訳も分かっていない様子のまま水を飲み込んだ。

もう理性は残ってない。俺の方は逆に賢者モード気味になっているが……さすがにやりすぎたか？ キスマークも身体にたくさんつけてしまったし、ベッドもお互いの体液でドロドロのぐしょぐしょ。さすがにどうかと思う有様だ。

しかしこれも、和が全然離してくれなかったからだしな……それに、手加減は出来なかったのだ。なにしろ、

「……んんう……ふあ……もっとお……♡ しゅきい……だいひゅき……♡」

「……あー……やっぱいなマジで……また気持ちよくなってきた……」

迎え腰のように腰をゆらゆらとさせてくる和に反応して俺の肉棒に甘い官能がやってくる。手に掴んだ和のKカップ超えの爆乳が相変わらずもちもちずっしりのふわふわでどれだけ触っていても飽きない心地だ。

やはり、これだけ己の性癖に合致する美少女が相手だと興奮も中々冷めやらないし、何度だつて股間をいきり立たせてしまう。その肉棒を包み込む和のおまんこも、完全に俺の形になって最高の締め具合だ。

なんならもうこのままずっとセックスしたいとも思ってしまうほどだが、休憩を入れないと俺も和もそろそろ気絶してしまう。特に和の方は結構ヤバそうだし、俺も気絶というか、単純にめっちゃくちゃ眠い。セックスって体力を使うだけじゃなくて倦怠感もあるからな。

ただ美少女相手だったのもあって、かなり良い気分の微睡みが襲ってきている。久し振りに良い睡眠が取れるかもしれない。

「あー……後一回だからな……それが終わったら……」

「はあ……ああ……ひゅきい……んっ……あっ……はふ……らいひゅ

きでふ……んう……♡」

その最後の腰振り、射精を感じて、和の蕩けきった声を耳にし、俺の意識はそこで途切れた。

——目を覚ました時、最初に感じたのは温かさと疲労だった。身体が重い。

まるで長距離走をした後のような全身の疲れがあり、半覚醒している今もまだ起きたくないと感じてしまう。

だが気持ちが悪いかというとそうではない。

なぜだかふわふわした心地良い感覚を感じる。自分にはないような温かさ、身体の硬さを感じる。

まだ起きたくはないが、それが気になる。この多幸福感ともいえる心地の中にあるものを確かめようと薄っすらと瞼を上げ、眼の前を確認すれば、

「……あ……」

そこには、男の人の姿があった。

誰かは言うまでもない。東郷仁。ヤクマル。自分の想い人だ。

故に何があつたかも直ぐに思い出す。そう、自分はこの人に抱かれたのだと。しかも、自分から……。

「っっっ」

思い出すと急激に恥ずかしくなる。

昨晚？ いや、お昼だったか。自分は初めてだというのにあんなにいやらしいことを沢山してしまい、色んな恥ずかしい部分をこの人に見られたのだ。

普通ならあり得ない。恥ずかしいを通り越して死にたくなるような行為だ。

しかし……不思議と好きな男の人相手だと、恥ずかしいながらも、嬉しいような気持ちになるのだから不思議だ。

「東郷さん……ヤクマルさん……」

相手の名前、名字を口にする。

続いて自分が今まで、自室で1人呼んできた名も口にする。
そうするだけで恥ずかしさと嬉しさが同居したふわふわとした気
持ちになってしまう。

最初こそ、この人に惹かれてしまったことを認めたくない気持ち
だったが、まさか想い人と同一人物だとは思わなかった。どのよう
な確率だと思ってしまう。今度、計算してみようとも。

実際の数学的な答えこそ今ここで導き出せはしないが、とんでもな
い極小の確率だということは明らかである。

この人が和了った役満のように、とてつもない低確率のことなの
だ。

偶然でしかない。それは今でもそう思っている。

役満を和了ったのも、その日、彼が自分に対して言葉を送ってくれ
たのも、リアルで会ったことも、リアルで自分が惹かれて、しかもま
た役満を和了られたり、その好意を見破られたりしたことも、オフ会
でその2人が同一人物だったことも全て偶然でしかない。

そう偶然。偶然だからこそ、和は思ってしまう。

「……………こういうの……………運命の人とか言ったり……………」

と、そう僅かに口に出し——そこで凄まじい恥ずかしさを覚えて口
を噤む。

和は恋愛というものが分からないし、運命の人だとか白馬の王子様
というものを現実の物として考えたことはない。友人がそんなこと
を口に出しても、そんなオカルトありえませんが、と一刀両断してきた。

だが、自分も女の子である。

実は周りには言ったことはないが、将来の夢の1つはお嫁さんだつ
たりする。

ただ男性というのはよく分からないし、同性相手というのもよく分
からない。そもそも恋愛をするということ自体、自分には想像もつか
ないことであり、今まで恋愛というのは極稀に想像する現実離れた
妄想でしかなかった。

だが……………実際に好きな人が出来て、こうやって結ばれてみるとだ。

「……………はあ……………」

眼の前の想い人に抱きつく。

男性の硬い身体。素肌で感じるその温かさ、想い人の体温に吐息を漏らして夢中になってしまう。

「これは駄目になりますね……」

なるほど。世の女性が恋愛を至上のものとして崇めて夢中になる意味を理解出来た。これは嵌る。

もう好きな人が眼の前にいて、想いを受け止めてくれて、抱きしめられることの心地が凄すぎる。そりゃ先程まで理性で制御出来なかったのもしょうがないだろうと、

「……仁、さん……」

相手が聞いてないだろうと思ってちよつと名前で呼んでみると、まるで恋人同士みたいで顔が熱くなる。

いや、よく考えたらこうやって裸で抱き合ってる時点で殆どそんな感じだ。そもそもそれ以上のことを先程まで沢山した訳だし、もしかしたら遠慮する必要はないのかもしれない。

「んっ、ちゅっ……ちゅっ……はあ……好き……」

彼の上に乗って頬にキスを落とす。その一回はお試しにするつもりだったが、それが気持ちよすぎてもう一度してしまい、寝ている彼の顔を見て堪らなくなつてまたキスしてしまう。

そうして彼を堪能していると、不意に硬い感触が増えた。それは、

「っ……東郷さんの……」

股の間で自己主張をし始めたのは、先程まで何度も自分の中を犯していた——彼の男性器だ。

それは何を思ったのか、先程までは特に硬い感触は感じなかったのに、いきなり大きく硬くなったのだ。

寝ている時に硬くなるなんてあるのだろうかと思議に思い、同時に恥ずかしくなってしまう。

「ど、どうすれば……」

そして戸惑う。

こうなつたということは、性行為の準備が整つた——ということは分かる。

しかし彼は寝ているし、自分の方も心の準備が必要だ。

ただこのまま放置しているのも収まりが悪い。ならどうすればいいのか。和は頭を働かせ、

「……だ、出せば収まるんですよね……？」

と、誰が聞いているでもないのにそう疑問形で口に出す。

確かそうだった筈だ。先程までの事は一応憶えている。完全に暴走してしまったため、ちよつとした黒歴史であり、彼が目覚めるのが怖いところがあるが、色々やったことはきちんと記憶しているのだ。

犯されたし、手や口、胸で奉仕したりもした。

だからこの場合は……

「……と、とりあえず検索しましょう……」

自分の衣服に入っているであろう携帯をいそいそと手に取りながら、和は彼の下半身に移動した。

和と夜エッチ

自慢でも何でもないが、俺は起きやすい。

起きやすいのがどういふことかと言うと、要は些細な物音や気配とかで起きてしまうということである。

まあ、誰かと一緒に寝ている時なんかは、それを「その場の環境」として見ているから多少動きがあったところで起きることはないが……それでも体を揺り動かされれば普通に起きる。

俺が減多に取ることがない深い睡眠中に、そうやって起こされるのは普通に辛い。辛いが、今回の目覚めは快感と困惑が同居したものであった。

「……なるほど……ここはこうなつて……ここを刺激すると気持ちよく……あつ、確かに少し大きくなつたような……」

薄目を開いて俺は自分の状態を確認する。旅館のベッドの上、全裸。そして股間のおっぱいの大きい美少女。言うまでもなく原村和だ。先に目覚めたのだろう、意外とタフな奴だ。

しかし、何故か和はスマホを手にながら俺の肉棒を弄っていた。手でシコシコしたり、ちよつと舐めてみたり、目覚めた瞬間から甘い快感が股間から流れ込んでくる。

……いや、何やってんだこいつ……。

だが困惑の方が大きい。まあ、朝からチンコ弄ってくるのは気持ちいいし、男的にはロマン溢れる行為なので別に構わないどころか大歓迎ではあるのだが、問題はスマホ片手にそれを行っているところだ。一体何をやっているのか……まさかハメ撮りか？　なんかチンコを映しているような気もする。ちよいちよい画面に目を移しているからそうでない可能性もあるが、この淫乱ピンクちゃんならハメ撮りをしてきてもおかしくないのではないか。いやあ……女性の方からハメ撮りされるとかたまげたなあ……さすがの俺もそんな経験はないので困惑してしまう。

「この出っ張りがカリ……んっ、凄いやらしい形ですね……なるほど、ここが引つかかるような構造になって……」

……というか、なんか観察されてない？

気持ちいいからいいけど、何なんだろうなあ……この状況……どうするべきか。

まあこれも和がオカルトの影響で俺にべた惚れしてる証拠だろう。つまり俺の身から出た錆。いや、悪い出来事ではないのでこう言うのは正しくはないかもだがともかく俺がやったことだ。

多少和がエロエロであり、内に秘めていた素質を開花させたとしても切っ掛けは俺。和はエロいだけで悪くはない。

何が言いたいのかと言うと、和は淫乱ピンクだということ。よし、そろそろ声を掛けるか。

「……和……何やってるんだ……？」

「！ お、おはようございます……えっと、その、これは……」

俺が声を掛けると和は一瞬驚いた後、恥ずかしそうにしながら挨拶をしてきた。エロいことをしてることも、もとい、事後であることに羞恥してるのか、それとも惚れた俺に対するデフォの反応なのか判断に困るところではあるが、俺としては携帯を持ったまま行っていることが気になるのでそこを突っついておこうと思う。欠伸をし終えてから、

「ふあ……んっ、あー……まあいいけどな……気持ちいいし……でもまさか和の方からハメ撮りをしてくるとは……」

「ハメっ——し、してませんっ！ これはちよつと、その、調べ物をしてるだけですっ」

顔を真っ赤にして声を大きく取り繕う和。なんだ、一応ハメ撮りは知ってるのか。調べたのかな？

「調べ物……」

「そ、そうです。その……こ、これのことを……」

恥ずかしそうに俺の肉棒を見て言う和。羞恥心が復活してるとうか、寝る前にあれほど乱れていたとは思えないほどに貞淑な感じになっている。

というか外がまだ暗い。もしかして今は、

「ん……？ 今何時だ？」

「今は……21時47分です」

「マジか……帰らなくていいのか？」

「あ、はい。今日は友達の家泊まるって言ってるので……」
「……そうか」

学生には時間的にヤバいと思ったがどうやら大丈夫のようだ。

まあそれならまだしばらくこの時間を楽しむことが出来る。なのでとりあえずは、

「あつ……♡」

「はあ……ほんと柔らかくて大きくて最高だな……」

手を伸ばして先程から見ていた和のおっぱいを下から揉み上げる。四つん這いの状態なのでダイレクトに乳の重みが手のひらで感じられて凄い。ずっしりとして指が埋まる。もちもちとした瑞々しさ。起きてから直ぐに好きにおっぱいを揉めるとか贅沢だよな。和は嫌がる素振りも見せないし、どうしていいか分からないといった状態で受け入れている。

「和、そのまま舐めてくれ」

「んっ、は、はい……はあむ……♡」

「あー……最高……熱くて気持ちいい……」

やはり目覚ましフェラは良い文化だな。厳密にはもう起きてるが、朝っぱらから反り立った肉棒を爆乳JKの口内に収めさせるのは背筋が震えるほどに気持ちいい。

「和……そう……はあ、そう、裏筋とかカリ周り舐められるのゾクゾクする……！」

「ふあい……ちゆる、れろ、んっ、んー……♡」

和が俺の指示通りにチンコを舐めてくれる。普通にエロいことを許してくれる辺り、やはり昨日のことは夢でもなければ、オカルトはちゃんと機能している。はあ……めっちゃ気持ちいい……和が的確に俺の——そういういえばさつき携帯でチンコのこと調べてたし、そういう部位もバッチリってか。昼はどうだったか……覚えてないが、まあどうでもいい。今はこの快感を味わうことだけが全てだ。

「どうだ和、美味しいか……？」

「ちゅっ、はむ……お、美味しいわけないじゃないですか……んっ、はあ……♡」

「その割には熱心にしゃぶってくれてるな」

「んっ、んっ、ちゅうっ、れる、れるお……んっ、だ、だって……東郷さんのだから……じゆるるっ、はあむっ……♡」

「あー……それ、それ最高……」

和が俺の肉棒を啜えたまま頭を前後に動かす。美少女が自分の股間に顔を埋めて熱心に奉仕している光景は何度見ても最高で征服欲や優越感がガンガン満たされる。

それにしても今朝までは処女だったというのにこの技量……天性の才能があると言う他ない。淫乱の才能が。

学校ではすまし顔で『男とか恋愛なんて興味がありませんけど?』とばかりにクールな表情を見せる和が、今は俺という男の肉棒に愛おしく奉仕している。どんな男も彼女に奉仕されればメロメロに、骨抜きにされるだろう。それだけ彼女のビジュアルは清澄高校……いや、女性の中でも突出している。

上から見下ろして、和の素晴らしくいやらしい肉体を視姦し、手で掴みきれないでっかい乳房を揉みしだき、自ら何もしなくても和が首を動かして口淫を続け、自動的に俺を気持ちよくしてくれる。一度寝たおかげでまた張り詰めたようにピンピンで敏感になっており、熱くヌルヌルの口内と舌で舐め回される感覚に精液が込み上げてくる。これを我慢する必要はない。和のピンク色の唇の輪っかが肉棒の真ん中辺りを通り過ぎて裏筋がたつぷりと刺激され、亀頭とカリを舌でれるれろと舐め回され、しかも俺のことをその可愛い顔で上目遣い。これで我慢出来る男は稀だろう。俺も無理だ。

「はあっ……出る……っー」

「んっ、んんー♡」

和の口の中で思いつき射精する。裏筋を舐められながらの射精。美少女の舌の上に、これまでとても良い物ばかりしか味わってないであろう舌の上に俺の精液を吐き出すのは舌の感触だけでなく、精神的にもめちやくちや気持ちよくてウツトリしてしまう。

「ちゆるっ、んくっ、ぐくっ……はあ……凄くどろどろしてて……んっ♡」

「ああ……起き抜けの射精気持ちいい……」

和がぐくぐくと俺の精液を飲んでくれる。そこまで勉強したのか？ いや、俺が昼に教えたような気もするな。どんどん俺色に染まっていると思うと気分が良い。

余韻をじっくりと愉しんでから俺も軽く身体を起こす。部屋の中は明るい外は暗い。一回気持ちよくなって若干落ち着いた上にも覚めた。チンコもまだビンビンだけど。とりあえず精液堪能中の和に話しかける。

「変な時間に目覚めたな……和、身体は大丈夫か？」

「んっ……はい。少し気怠いですけど大丈夫です」

「そうか……それじゃあ風呂にでも入るか」

「お風呂……はい。それじゃあ湯を溜めて——」

「ああ、それはいい。ここは部屋に温泉があるからな」

「！ それはいいですね……」

和が若干だが反応して喜ぶ。まあ温泉に入れるってのは普通に嬉しいだろう。身体も汚れてるしな。結構良い部屋に泊まって良かった。

それに部屋に温泉となればやることは決まっている。俺は和に顔を向け、

「なら、一緒に入るか」

「んっ……はあ、気持ちいいです……」

「ああ、さっぱりするな」

部屋の中にある温泉は檜風呂だ。

ちゃんとした旅館の温泉なだけあって育ちの良さそうな和も上機嫌である。

まあ俺は同意しつつもまだ湯に浸かっていない。浸かっているのは先に身体を洗った和だけで、俺はまだ身体を洗ってる最中なのでこ

れから入るって感じだ。

泡をシャワーで流しつつ、湯の中で足を伸ばしてうっとり温泉を堪能してる和を見る。

当たり前だが、和は全裸であり、髪も下ろしている。ロングの綺麗な髪。湯に浮かぶ和のおつきな乳房。Kカップ超えの女子高生が持つには大きすぎる爆乳を自然と見てしまう。でっかいおっぱいって見てるだけで幸せになれるというか、いろんな動作の度に揺れ動くのが見てて楽しすぎるのだ。

というか見てるだけじゃ我慢出来ないな。和の美しい身体を見ると股間が自然と上を向く。その可愛い顔や女の仕草にたまらない気持ちにさせられる。

「隣いいか？」

「あつ……はい、どうぞ」

身体を洗い終えた俺は和に一声掛けてから浴槽に入る。和はまだ少し照れているみたいだ。そういう女の子らしい恥じらいもまた良いものだ。その目が一瞬、俺の肥大化した肉棒を捉えたのを俺は見逃さない。

が、今は特にそのことを指摘することもなく湯に身を沈める。

「はあ……確かにこれはいいな」

「はい……気持ちいいですね。その……はい」

俺が浴槽の縁に手を広げて背中を預ける。和は俺の言葉に同意しつつも、先程より僅かに身を縮こまらせた。

やはりまだ少し恥ずかしいのだろう。お湯によるものなのかもしれないが頬を紅潮させた状態で腕を前に、和のむっちりした太ももの間に挟んでいる。

そうするとその谷間が腕に寄せられて堪らないが……まあそれはいい。とりあえず俺は右手を和の肩に回すと、

「あつ……♡」

和を抱き寄せる。和が短い声を上げて俺に密着する。その気持ちのいい身体。爆乳もたつぷりと俺の胸板に押し付けられて気持ちいい。お湯に濡れた和の身体は昼とはまた違った気持ちよさがある。

「嫌か？」

「い、いえ……このままでいいです」

一応問いかけてみると、和は予想通り嫌がってはいないどころか嬉し恥ずかしといった様子で俺の身に身体を寄せてきた。あ……おっぱいがむぎゆつて押し付けられて気持ちいい。温泉で美少女を侍らせるのって最高だな……温泉の気持ちよさに加えて、爆乳美少女の気持ちよさも感じる。俺の肉棒もお湯の中でいきり立つというものだ。

「和は可愛いな。それに気持ちいい。和はどうだ？」

「んっ、はい……私も、気持ちいいです……東郷さんの身体、逞しくて硬くて……」

「和の身体には負ける」

「も、もうっ、東郷さん……！ あっ、もう、また胸揉んで……んっ♡」

「あー、ほんとでっかい。手が幸せ……いや、触れてるとこ全部幸せだ……」

「あんっ、もう……いやらしいです……」

「それも和には負けるな」

「そ、そんなことないですっ」

言いながら右手を和の脇の下に差し入れておっぱいをもみもみ。こうしていると自分がとんでもなく偉くなった気分だ。普通の男では絶対に味わえないレベルの美少女と温泉に入っただけイヤイヤ出るんだからな。

それにしても和は可愛いな。顔をこっちに向けたのでキスでもしておこう。

「んっ、んんうっ……♡」

一瞬驚いた和も直ぐに俺の口と舌を受け入れる。べた惚れした美少女はほんと気持ちよくて最高だ。何をしても喜んでくれるしな。

「はあ……もう、ほんとに東郷さんはエッチです……♡」

「可愛くて我慢出来ないんだ。つまり、それも可愛い和が悪いな」

「きゃんっ、あっ、はあ……東郷さん……♡」

和を更に抱き寄せ、左手で和の乳を持ち上げるとそのまま乳首を中

心にしやぶる。ぷるんぷるんのおっぱいの深い谷間に顔を埋め、瑞々しい肌の柔らかさを堪能すると、興奮がまたしても高まってきた。

「和……挟んでくれ」

「……は、はい……」

立ち上がり、肉棒を突き出してお願いと和もそれに頷いてくれる。視線はじーつと俺の肉棒を捉え続けながらだ。

浴槽の縁に座り、足を広げると和がその間に。そして和がその細腕で胸を持ち上げる。

むにゅんっ♡

「あー……やっべえ……はあ、蕩ける……」

「んっ、また、凄く硬い……」

和のもちもちしたおっぱいに俺の股間が覆われる。ぎゅつと左右から手で押さえて挟み込んで和を谷間と一緒に上から見下ろす。

和が昼間の発情しきったものとは違い、観察するような初々しい反応を見せてくれるが、これはこれで良いと思う。

「和、扱いて」

「はい……確か、こんな感じで……」

「うっ、そうそう……はあ、最高……」

女子高生の張りのある爆乳に亀頭の先から根本まですっぽりと包まれて溜息が漏れる。左右から乳圧を掛けられると腰が浮いてしまいう堪らない気持ちよさだ。

「風呂に入ってるからかさつきより温かいな……ぽかぽかで溶けそうだ……和のおっぱいまんこ……」

「は、恥ずかしいこと言わないでくださいっ。も、もうっ……♡」

そう言っただけで恥じらいながらも胸を動かす動きは初心者から逸脱しようとしている。昼間にやらせたのもあって力加減が徐々に上手くなっているのだ。

肉棒に吸い付くようなおっぱいの柔らかさと弾力に自然と上を向いたり溜息を漏らしながらパイズリ奉仕を楽しむ。

たばたば、ぐちゅぐちゅと淫らすぎる音を鳴らしながらのKカップ超えのパイズリ。3桁はあるであろうサイズの、多くの男性が味わう

ことが出来ず、妄想するしかない極上の乳奉仕に精巢はグツグツと煮え滾っているのを感じる。

既にこのエロ乳も、和の女子高生らしからぬ肢体も美貌も、全ての俺の物になったのだ。彼女という存在がこの世に生まれ落ちて15年。高校に入学して1か月近く。

きっと運良く彼女という存在を見かけた男子は悶々とした日々を送っているだろう。あるいは、どうにかして仲良くなれないか。付き合えないか。恋仲になってこの男を魅了するエロエロボディを味わえないかと思いを巡らせているのかもしれない。まだ1カ月だし、まだまだチャンスはあるはずだと。

「んっ、はあ、東郷さん……♡」

「どうした？」

だが、

「……あ、後でまた……私に……その、私の中に、これ、ください……♡」

「っ……ああ……！ 幾らでもくれてやる……！」

——既にこの子は俺に惚れている。

俺の女になったのだ。もう取り返しはつかない。

入学してから1カ月という短い期間に起きた男子達にとっての悲劇。ファーストキスも処女も何もかもを俺という男に捧げられてしまった。

一か八か、告白でもなんでもしていれば、役満並に低い確率だろうが、それを受け入れられる未来もあったかもしれないというのに。清澄高校の男子は可哀想だ。彼女という存在を知りながら、知らぬ間に決して届かない存在になってしまったのだから。

「はあ、はあ……東郷さん、ほんとこれ好きですよね……んっ♡」

「ああ、好きだ……それをしてくれる和もな」

「……だって、好きですから……と——、じ、仁さんのことが……♡」

「くっ、和……！」

ぱちゅんっ、ぱちゅんっ、と俺の腰におっぱいが叩きつけられる。重量感のある和の爆乳。圧倒的な質量を持ちながら、みちみちもち

もち、触らせるだけで多くの男を陥落せしめる魔性のエロエロおっぱいに、こうやってパイズリさせることも、俺以外の男には不可能なのである。

おっぱいが大好きな俺の肉棒も、全方位をみっちりと包まれ、にゆるにゆる、むぎゆむぎゆと扱かれてビクビクと跳ねている。吸い付くような乳房の圧力を受けて股間は直ぐに限界まで高められる。この最高すぎる和の爆乳パイズリはおっぱい星人にとって最高過ぎる。

ぎゅうつと和が左右からおっぱいを締めて、谷間が楕円形に、肉棒が圧倒的な深さの谷間に閉じ込められ、たつぷりと乳圧を掛けられると、そのビジュアルとのあわせ技であっさりと一線を越えてしまう。

「っ、はあ、出る……いー」

「きゃっ……♡」

びゅうううつ、びゆるるっ、びゅうつ。

おっぱいの重さをたつぷりと肉棒で味わいながら射精する。谷間に埋もれたままの射精。唐突に射精したため、和が咄嗟におっぱいを抱きしめて谷間を深めるが、それがまた快感を助長する。腰を突き上げて根本をおっぱいが密着するほどに肉棒を突き入れても、肉棒の先端はおっぱいの谷間の中。余すことなく肉棒が乳肉に包まれて更に気持ちの良い射精が出来る。この股間の上にあるポリウム感が堪らないのだ。見えないのもまた唆る。

「っ、はあ……はあ……和……そこに手をついて、後ろ向いて」

「んっ、はあ……わかりました……♡」

谷間から肉棒を引き抜き、和もおっぱいから手を離す。谷間には俺の精液が橋を作り、汚した証を刻み込んでいたが、俺は興奮のまま和に後ろを向かせた。

和もその意味を理解し、期待の色を目に浮かばせながら言う通りにする。

胸だけでなく、全身が男を欲情させるためのドスケベボディ。尻も腰からのラインも何もかもがエロすぎて、後ろから見ると堪らない。むしゃぶりつきたくなってしまう。

出したばかりの肉棒もギンギンのままにひくつき、狙いを定める。

腰を前に突き出し、和の秘部に向かって亀頭を侵入させた。

「あつ、ああつ、仁さんっ、好き……好きなんです……もう駄目……♡
仁さんのこれを受け入れると、頭が真っ白になっちゃいます……他
のこと、考えられないっ……♡」

肉棒を和の膣内に埋めると、直ぐに媚肉が俺の肉棒を全力で歓迎し
てくれる。

トロトロで熱々。きゆうきゆうに締め付けて離そうとしない。和
の好意を示すかのように、全力で俺を奥へ奥へと引き込もうと誘い、
俺の遺伝子を求めている。

早く出して、射精して、と和の中も全身も、俺を悦ばせるために動
いていた。

「く、おおっ、和……！」

「あんっ、あつ、そんなっ♡いきなり激しいっ、あつ、あつ♡」

その事実には俺は悦び、腰を激しく動かす。和の奥にぐりぐりと腰
を、肉棒を押し付け、和の桃尻が俺の腰にむにゆりと押し付けられ、子
宮口が亀頭にちゅっちゅつとキスを落とす。前後に動かせばパンパ
ンと音が鳴り、反動で爆乳がぶるんぶるんと揺れ動き、水滴や俺の精
液をぴちゃぴちゃと床に落としていく。淫らで下品とも言える光景
を見て、俺の興奮も高まり、もつとそれを見たいと更に腰も早くなる。
駆け引きなんて存在しない、本能のセックス。自分の女と快感を求
め合う——種付けを目的とするような交尾だ。

実際に生命を宿するようなことはないとしても、和が俺の遺伝子を欲
しがり、俺が和の中に遺伝子を刻み込みたいと思う欲求は変わらな
い。性器の敏感さは持ち主の興奮に比例して敏感になり、快感を強く
していた。

「和……っ、お前は、もうっ、俺の女だからな……！」

「は、はいっ、なります……っ♡女にしてください……大好きです
……♡もう自分で抑えきれなくらいに好きでっ、あつ、堪らない
んですっ……♡」

「言っただな……！もう駄目と言っても聞かないからな……！ほ
らっ、もつといやらしくなれ……！」

「んんっ、あっ、はいいつ♡ わたしっ、あっ、仁さんのためにっ♡
んくっ♡ いやらしく、なりますっ……♡」

腰を動かし、言葉を発する度に淫らに発情していく和。快感に悶え、甘い声を出して愛しい人の欲望を受け止め、それと比例して和も欲求を高めていく。

きっと今までは性的なことも恋愛も興味はそれほどなかっただろうに、俺に惚れて性行為をしてからは今までが嘘のように内心に変化があっただろう。俺のためにエッチなことだっしてみせる恋愛脳になったとも言える。

真面目なところに変化はないかもしれないが、俺という駄目男の頼みを断れないエッチな娘になってしまっているのだ。

「こんなエロい身体して……乳もこんなに揺らして……はあっ、俺が我慢できると思うなよ……！」

「あ、ああっ、んっっ♡ はあ、んーっ♡」

快感に悦ぶ嬌声が浴室に響く。

ぶるんぶるんと揺れる乳房を後ろから鷲掴み、肉棒を突き入れまくる。

デカ乳を掴み、揉みしだきながらのバックはまた格別だ。背後から見ると腰のくびれ、母性を感じる丸い尻。

そこに腰をガンガン打ち付けると支配欲が満たされる。ここに射精するのだ、この美少女に射精するのだと自覚して、股間がさらにいきり立つ。

「くっ、はあ、やばい、もう……！」

「んっ、ちゅっ、はあむ、キスしゆきです♡ んむっ、れろっ、はあ……♡」

身体を前に倒し、和のほっそりとした首筋に手を這わせると顔を横に向かせてそのまま唇を奪う。その間も尻に向かって杭打ちのようにピストンを続ける。

もはや快感でろれつが回らない和の乱れた姿を視界に収めながらどんと射精への欲求を高めていく。

このどうしようもなく己の性欲を、性癖を刺激する美少女の中に出

す。精神的な優越感や興奮と共に、実際にもたらされる全身の快感が肉棒をビクつかせる。

「あああつ、出るっ、出すぞ和……！ お前の中に……！」

「あああつ♡ 出してっ、出してください……♡ 私の中につ、仁さんの精液……沢山……♡」

中に出すことを嬉しそうに許可する和に俺の腰の奥が震える。

お尻を強く掴み、激しく動く。亀頭が太くなり、幹がぐるぐると燃えつくような堪らない快感が溜まっていく。

そして止めに溜め込んだものを吐き出す極上の射精を、和の中で行う。強く一突きをお見舞いし、

「ぐっ、あああああああ——」

「あああああああ♡ でて、でてますうっ♡ はあつ、ああーっ♡」

びゅうううううっ、びゅうううううっ、と強く射精。

お尻にびったりと密着し、最奥にぐりぐりと強く押し付けるように精液を吐き出す。子宮に精液を塗り込むような雄が一番気持ちのいい射精だ。

もうその瞬間の快感は何もかもがどうでもよくなるほどに最高だ。眼の前にある和という美少女のビジュアル。実際に美しく柔らかい肌に触れて、その甘い嬌声を鼓膜が通り抜ける感覚、実際にその中で射精し、射精しているという事実を自覚する。その全てが快感に変わり、ううっ、ううっ、と情けないうめき声を漏らしてしまうほどに気持ちいい。精液を吐き出す度に多幸福感が全身を突き抜ける。美少女の中で射精することのなんと気持ちのいいことか。自身の幸せつづりを一秒毎に自覚してしまう。

「はあーっ、はあーっ……和……くうっ……好きだぞ……」

「んう、あ……仁さあん……大好きです……♡」

射精が終わると、その快感の余韻から本能から来る言葉を口から吐き出す。和も同様だろう。ビクッ、ビクッ、と全身を跳ねさせ、蕩けきった瞳で好意を口にする。

そのまま肉棒を抜こうとするのだが、その時ですらにゆるーっ、と俺の肉棒に吸い付いてくる。まるで、行かないで、とおねだりされて

いるようで堪らないが、その誘惑を跳ね除けて一度肉棒を引き抜く。にゅぽつ、と音が鳴り、愛液と精液に濡れた俺の肉棒が姿を現す。

まだまだ味わいたいのは山々だが、浴槽に浸かりながらのセックスで和はのぼせ上がりそうだし、俺の方も頭がクラクラする。ここでやりすぎて気を失えばシャレにならない。

故に俺は最後に残った理性を振り絞り、身体をもう一度さつと流し、和を部屋の中へと連れて行った。

「こんな時間に外に出るのは初めてですね……」

「まあ学生ならそれが普通だしな」

和との風呂場でのセックスも終わると、俺は和を連れて外へ向かった。

車の助手席に座る私服の和。だが別に送り届けようって訳ではないのだ。こうやって外に出たのは単純なことだ、

「さて、この時間に開いてる店は……」

「すみません。私はあまり詳しくなくて……その、コンビニくらいしか」

「まあ最悪……と言うほどでもないが、何もなければコンビニでもいいか。気にするな。最近はコンビニの飯も色々凝ってるしな」

——とまあ、要は腹ごしらえである。

昼頃に会ってから何も食わずにセックスして寝て風呂入ってセックスするという一日を過ごしてしまったのだ。さすがに腹も減る。

だが時間は既に0時を回ってしまい、旅館で飯は……まあ、出来ないことはないが、さすがにそこまでやらせるのは酷だし、外に出て何か食べようということになった。

しかし地元でもなんでもない俺や学生の和がさすがに夜中に開いてる店を知っているはずもないのでとりあえず車で街の方に。軽く調べてもいいが……面倒だな。もうコンビニでも良くね？ から〇げクンのレッド食べたい。

そんなことを考えていると、ふとあるものを見つける。ああ、あそ

こでもいいかと、

「和、ラーメンは好きか？」

「えっ？ あつ、えつと、その……」

「いや、そういう気分じゃないとかなら別にいいけどな。ただその店開いてたからどうかと思っただけだ」

そう。俺が車中から見つけたのは一軒のラーメン屋である。

まあ確かにラーメン屋って夜中も開いてる店多いよね。深夜2時まで開いてる店とかよくあるし、中には朝までやってる店なんかもある。

行くなら居酒屋とかでもいいかと思っていたが、ラーメン屋でもいい。

と思っただのだが和は何故か答えに戸惑った。ラーメン嫌いなのか、そういう気分じゃないのか。まあどっちでもいい。そういうこともある。食べたくないなら別の店を——と思っただ瞬間、

「あの、そういう訳ではなくて……その、実は私……ラーメン、食べたことないんです」

「えっ？ マジ？ 一度も？」

「はい……あつ、でも別にこういうものは知ってますっ。ただ食べる機会がないだけで……」

和が若干恥ずかしそうに言う。そうなのか……いやまあ、そういうことも……まあ、あるのか。結構驚いてしまったが、相当育ちが良いんだろう。ラーメンを一度も食べたことがないとは……この分だとファーストフードなんかも食べたことなさそう。マックとか連れて行ったらドハマリしたりしてな。

「……どうする？ せっかくだし行ってみるか？」

「そう……ですね。せっかくの機会ですし、仁さんへ行けるなら……」

「……そうか。なら車を止めるか」

……なんか言葉の節々に俺への好意が表れててむず痒いな。いつの間にか名前呼びになってるし。別にいいが、学校でいきなり名前呼びされたらヤバそうだから後で注意はしとこう。

というわけで駐車場に車を止めて店の中に。……その際も自然と

腕を組んできたのはなんだろうな。好き好きオーラがヤバイ。セツクスして歯止めが利かなくなつてないといいが……。

「内装は結構普通なんですネ」

「ただの飲食店だからな。どこも似たようなものだ」

初めてラーメン屋に足を踏み入れた和はきよるきよると興味深そうに辺りを見渡す。店内に人はそこそこ。時間帯もあつて大盛況つてほどでもないが、かといって閑散しているというほどでもない。

「さて、何を食べる？ まあ最初なら普通のがいいか？」

「えっ？ つて、あ……学食みたいに食券なんですネ」

「ラーメン屋だと食券のところが多いな。普通に注文聞くとところもあるが」

店によるよな、と俺はお金を入れて自分の分を注文。そのまま和にどれにするかを聞く。和がその際に俺を見て、

「あの、お金……」

「気にするな。奢られとけ。学せ——女に払わせるやつがあるか」

「は、はい……ありがとうございます。それじゃあ普通のを……」

学生、と言い掛けて別の言葉に言い直す。そこまで気にする必要もないかもしれないが、一応だ。和が俺の言葉にドキツとしたようだが、実際はケースバイケースである。俺は女だからと無条件に奢るほど優しくはない。どうでもいい相手だと奢らん。奢るのは年下と美少女だけだ。

まあそんな俺の主義は置いといて、食券を店員に渡してから角の席へ。結局和は普通のにしたようだ。

「んっ」

「どうした？ 椅子に何かあつたか？」

「いえ、そういう訳では……ちよつと、座り辛くて」

そう言つて顔をほんの少し赤くする和。それを見て聞いて、俺は察する。

「気が回らなかつたな。すまん」

「いえ大丈夫です。ちよつと変な感じはしますけど……」

若干もじもじとしながら言う和。まあ今日一日でめちやくちや

ヤツたもんな……しかも処女だったのに。さすがに手加減してやれば良かったか。

だが今こうして割と平気そうにしてるのはやはり才能か。淫乱ピंकか。どうやら和は身体もエッチだが、そういう素質も備えているようだ。

「……視線がいやらしいです」

「……何のことだ？」

和にジト目で見られる。さすがに露骨過ぎたか。思いつきり胸とを見てたしな。でもそういう服着てる方にも責任があると思う。こんなん、男なら誰でも見る。なんなら店員も見てた。そう考えるとムカつくな。周りを気にしつつ軽く手をのばす。

「きやんっ」

「こんなエロい服着てたらそりや見るし触るだろ」

「え、エロくないですっ、可愛い服で……んっ、というか、こんなところで触らないでくださいっ」

右手を和の谷間に潜り込ませてもみもみ。もっちりたつぷりののどばいの重さと柔らかさを手のひらいっぱいを感じる。

和はそれに身じろぎし、軽く注意してきたが……なんかこう、あれだよな。こうやっていきなり胸を揉んでも軽い注意だけで済むのってエロくね？　なんかじゃれあいエロい。他の男が遠目で盗み見るしか出来ない極上エロ乳をいつでも触れる感じもエロい。こうやって爆乳を外で鷲掴むと、俺の物だと喧伝してるようにも感じる。別に見せつけてはいないけどな。

「悪い悪い。見てたら触りたくなってるな」

「もうっ……ほんと、エッチです」

こうやってイチヤついてるとバカップル感半端ないなと思う。これもオカルトの力か——と、そういえば気になることがあったな。

「和は俺のどういふところが好きになったんだ？」

「！……それは……その……」

唐突に聞いてみる。これもちよつとした実験というか確認だ。

オカルトの力で惚れた女はなんかこううまい具合に惚れた切っ掛

けに辻褃を合わせる傾向にあるが、和の場合はちょっと特殊だ。

和の言葉から察するに、和はヤクマルというネット雀士に惚れていたようだ。

それは俺がネット麻雀で役満をぶち当てたから……だと思うのだが、ネット麻がありなら色々やりようがあるし、弊害もありそうなのでちょっと確認しておきたかった。

「……麻雀のことを褒められて……麻雀への想いが感じられるって言ってもらえて、嬉しかったんです。それからどうしても気になって……気がついたら……」

と、恥ずかしそうに和がそれを告白する。ふむ、やはりあのときの役満が原因か。

つまり和が微妙におかしかったのは、そちらへの好意を優先して——いや違うな。ヤクマルを俺だと認識していないと、俺への好意は発動しないのか？

まあネットだと誰だか分からないのだからそりやそうだろうって感じだが、その状態で現実の俺が役満をぶち当てるもんだから変な感じになったと、そういうことか？

「……そうか、ありがとな」

「あつ……」

とりあえず、聞きたいことは聞けたので和の頭を撫でてやり、話を打ち切る。……なんかナチュラルにグズいことをしてる感マシマシだが、それは今更だ。気にすることじゃない。

「ズルいです……もう……」

そう言いながら距離を詰めてきた和の温もりを感じる。和は惚れっぷりが凄いな。これもオカルトのおかげだ。

そんなこんなで甘い空気を醸し出していると、店員がラーメンを運んできた。というわけでさっさと腹ごしらえだ。

「あつ、いい香り……」

「美味そうだな。熱いから気をつけろよ」

「そ、それくらいは分かっています。いただきます。えっと、ふーっ、ふーっ……」

箸を使い、恐る恐る麺に息を吹きかける和。その間に俺は一口。うん、美味しい。というわけで和を観察すると、俺の真似をするように口に運び、しかし啜れずにちゅるちゅると麺を口にした。

「あつ、美味しい……」

それは良かった。再び食べ始める和を見て俺は思う。……こう、女の子が髪をかき上げてラーメン食べる時の横顔って良いよな。

たまにそれを横目で見ながら俺達はラーメン屋での遅めの夕食を終えた。因みに和はしっかりと完食していた。食べないよりいっぱい食べる子の方が好きだから良いと思う。後でカロリーとか塩分量教えてみようかな。……怒られそうだからやめとこう。

ちよつとした縁

遅めの夕食を食べて旅館の部屋に戻ってきた俺と和はしばらくゆったりとした時間を過ごした。

「今更だが、和があのだどつち」ってのは知った今だと納得がいくな。打ち方が似てる」

「私も、今思えば仁さんが『ヤクマル』さんだというのは気づけたはずですね……最初見た時から見覚えがありましたから。んっ」

「和もそうなのか。俺の打ち方なんてそこまで特徴あるものじゃないと思うけどな」

「そんなことは——あんっ、東郷さんも元プロですし、それを聞いてから東郷さんの昔の対局とか調べてみたりもして、んっ……あの、さつきから胸を揉みながら話すのは何なんですか？」

「のどつちのおっぱいが気持ちよすぎて自然と手が伸びるだけだ。あー、温かくて気持ちいい……」

「ね、ネットの名前で呼ぶのはちよつと恥ずかしいんでやめてくださいっ」

「恥ずかしがる場所は多分そこじゃないと思う。そう思いながらも、ナチュラルに手を動かし続ける俺。」

椅子に腰掛け、和を膝の上に。そして机に俺が持ってきたノートパソコンを置いて何となく麻雀をしながら俺は和のデカ乳を後ろからもみもみ。そしてそのまま雑談だ。

なんというか、いつでも揉めるおっぱいって感じで最高だな。和の方も段々と慣れ……まではいってないか。顔赤くなったりするし。でも許されてる感はある。

それに身体も火照ってきて温かいし、後ろから抱いているので髪からはいい匂いがするしでなかなか趣が深いのだ。あれだけヤツたのにまた勃起するくらいには。

「名前の由来はやっぱ実の名前からなのか？ 可愛い和に合う可愛い名前だもんな」

「……も、もうっ！ そんな恥ずかしいこと耳元で囁かない

「……しかも、押し付けながらとか……」

「ん？ 何が押し付けられてるんだ？ ちよつと分からないから教えてくれ」

「……仁さんのエッチ……」

軽く睨まれるように目を向けられるが、そんな和のお尻の下では俺の肉棒がギンギンに主張を続けている。

おっぱいも気持ちいいが、和は全身柔らかくてスベスベで張りがあって気持ちいい。女性らしく実ったお尻だっぺちんちんを擦りつけたくなる素晴らしい形をしており、そして実際にやってみるとやはり気持ちいい。

しかも可愛い反応が返ってくるのだから男からしたら堪らない。雄の本能をめちゃくちゃに刺激されるというかな。美少女って性欲の歯止めが効かなくなる要素しかなくて困るよな。乳を揉む手も止まらない。

「……仁さんこそ、んっ、ヤクマルって名前、何か由来でもあるんですか？」

「ん？ あー、まあ、いや……特に由来はない。子供の頃に適当に付けただけのアカウント名だな」

「へえ……それじゃあ結構昔からやってるんですね」

「……まあ、麻雀は小学生の時からやってるからな……と、そんなことより眠くはないか？ もう4時になるが……」

「先程寝ましたからそれほどでもないですけど……お昼頃に眠くなつてしまいそうですね……今日が学校じゃなくて良かったです」

「そうか……なら何かしたいことはあるか？」

やれることもそんなにないけどな。パソコンと携帯があるから多少は時間は潰せるが、それ以外だとやはり、

「……それじゃあ……もつとイチャイチャしてみたいです」

「……もう十分イチャついてる気もするけどな」

「ま、まだ足りないですっ」

おおっ、グイグイ来るな……ちよつと吹っ切れたか？

和がこちらに向き直ったかと思えば赤面しながらぎゅつと抱きつ

いてくる。押し付けられる和の瑞々しい身体。特におっぱい。肉棒に自然と血が集まる。なかなか萎えさせてくれない凶悪なエロ可愛さだ。

「それじゃあベッドに行くか」

「はい……エッチは駄目ですからね?」

それは振りか? 我慢出来ると思うてか?

……まあ、またやりすぎて気を失うのもアレだし、処女だった和への負担もある。パイズリとかフェラくらいで我慢してやろう。

「仁さん……♡」

そういう訳で、俺は服を脱ぎ捨て全裸になった和と一緒にベッドに——つて、あれ? おかしくない? エッチは駄目と言いながらんで全裸になる必要があるんですかね……(困惑)。でもそれ見て股間は更に硬くなった。当たり前なんだよなあ。

「またこんなに大きく……はあっ……♡ んっ……♡」

「うおっ……和あ……いきなりそれはヤバいつ……!」

和の方が実は望んでるんじゃないかという疑いを持ったまま、俺はベッドに入り、和としばらくイチャついた。——結局胸で4回、口で2回ほど抜かれたんですけどね! 俺も大概だが和も元気あんなあ、おい!

「ふう……」

俺はベッドの上で満足気に息を吐く。

時刻は……もう昼前。あれからかなり時間が経った。

つい先程、和を家の近くまで車で送り届けてきたところである。無事にオフ会、もとい、オフパコは終了したと言えるだろう。

和も満足してたしな。帰り際はちよつとアレだったけど……なんというか、離してくれなかった。こんな感じで、

『和。そろそろ帰らないのか?』

『まだ大丈夫です……んっ、もつとキスしてください……ちゅっ』

『いやまあ……また会えるからいいだろ? 明日は学校で……』

『……でもそれが終わったら仁さん、行っちゃうじゃないですか』
『まあそれはそうだが……連絡は出来るし、ちよいちよい会うことは出来る』

『いつ会えるんですか?』

『まあ、今月は長野にしばらくいるしな。後は……あつ、和がインターハイで全国に来ればまた会えるかもな』

『全国……』

『ああ。俺もその時には用事で東京に行くから会えるぞ』

『………分かりました。頑張ります』

『……おお、頑張れ』

『はい。それと……連絡先を交換しましょう』

『ああ。それじゃあ送っていくから準備してくれ』

『はい』

——とまあ、こんな感じの会話をした訳だが、なんだろう。惚れ方が半端ないので言葉の節々から好意を感じるといっつか、マジで旅館を出る直前までくっついてきてたので理性を保つのが大変だった。

連絡先も交換したし、これから頻繁に連絡が来るんだろうな……というのも、他の女達もそうだし、大体わかるし慣れている。おかげで俺の携帯は忙しいのだ。

何にせよ、これで6人だ。俺が落とした女の数。1人でも得難い美少女を6人も抱いた。

その事実を改めて自覚すると、頬が緩んでしまいそうになる。この圧倒的優越感。支配感。ハーレムの精神的な快感を感じてしまい、それだけで勃起できそうなくらいである。

以前にはやりさんや良子、栞と4Pをして、頭が馬鹿になりそうなほどの快樂を楽しんだ。今でも時折それを思い出してニヤついたりムラムラしてしまうほどには気持ちのいい多幸感に溢れた体験だったが……俺がその気になれば、6人全員と、7Pだって出来る。

男1人の俺に対し、巨乳美少女が6人。

俺の身体が女の子達の身体に埋め尽くされる光景を想像すると堪らない。ただのエロい妄想だが、それはもう非現実的な夢ではなく、

可能な現実の話なのだ。

それを思うと股間に血が集まりそうになる。さすがに今更自分で抜くことはしないが、それでもこの想像がいずれ来る最高の快楽を後押ししてくれるだろう。オカルト様様だな。

それにこれからも女の子を増やせるし……あー、今俺ヤバイ幸せだな。

まあ美少女とのエロの後なので素直にそう思う。しばらく時間が経てば他の悩みが噴出してそうも思っていられなくなるが、今は——
「……腹が減ったな」

うん、そうだ。腹減った。

夜中にラーメンを食べはしたが、それから何も口にしていない。口にする暇がなかったのだ、和とイチヤつきすぎた所為で。

和を送っていく時も割と急いでいたのでどこかに寄ることもなかったし、普通に腹が減った。

まあ性欲の次は食欲でも満たしにいくか。さつき外に出たばかりだが、もう一度外に行くとしよう。

と、俺は鍵やら携帯やら財布やらの標準装備だけを手に部屋の外に出た。するとその直後、

「あつ」

「ん？」

旅館の廊下に出ると、そこをちようど歩いていたのは旅館の従業員が着るような紺色の作務衣を着た猫目っぽい若い男の姿。

俺を見るなり「げっ」と言わんばかりの顔で顔を強張らせたその男を、俺は見知っていたためごく普通に呼びかける。あくまでも普通に、

「……池田アツ!! こんなところで何してやがる!!」

「ひ、ひいつ!! し、仕事ですつ東郷先輩!」

「オーナーのお前自ら仕事か! 結構なことだな! よし、それじゃあ俺に付き合え! 飯行くぞー!」

「な、何がそれじゃあなんすか——いつ!」

と叫ぶ男と肩を組んでそのまま連れて行く。

まあ折角だし、飯でも奢つてやろうという先輩の粋な計らいだ。決して暇つぶしに絡みにいった訳ではない。

実際、こいつには今現在進行系で世話になっているのだ。この池田——あ、池田と言つても風越のあの池田ではない。

こいつは今、俺がこの高そうな旅館に泊まれている要因であるちよつとした縁のある相手。

高校の後輩——チーム獅子王の中堅だった男、池田一樹であった。

「まあそう緊張するな。ここは俺の奢りだからよ」

「いや緊張しますよ……東郷先輩と2人きりで飯とか……あの頃の東郷先輩を知る人なら……自分が気が弱いのは知ってますよね？」

旅館の直ぐ近くにあるとある料亭。ランチもやっているお店にやってきた俺は眼の前の後輩に気安く声を掛けてやる。

まあ俺としても久しぶりな相手ではある。先週に偶然再会したばかりだからな。

名前は池田一樹。下の名前が最初出てこなかったのは内緒だ。

身長170センチで中肉中背。白糸台高校出身で、俺の1個下の後輩であり、チーム獅子王の中堅。そしてまあ……こいつが自分で言うようにだ。

「ああ、お前パシリが似合う奴だったもんな」

「改めて真正面から言われると微妙にグサツとくるんですけど！ いやまあいいんですけどね！ 自分からやってたことですし……」

そう、こいつはなんとというか……気が弱いのと、ちよつと雰囲気的にパシリにされやすい奴なのだ。

いじられキャラとも言えるだろう。このどことなく猫っぽい顔とか……どことなく、最近出会った奴を思い出すが。

「……お前、風越に親戚の子供とかいないのか？」

「え？ 急になんすか？ 別にいないですけど……？」

「……いや、いないならいいんだけどな」

池田が首を傾げて頭に疑問符を浮かべているが、首を傾げたいのは

俺の方だ。同じ長野出身で池田という名字。しかもこの顔つきはどう考えても関係があるようにしか見えないが、全く関係ないっぽいのがなんとも言えない。

さしずめ、男版池田というべきか。……いや、こいつも池田だし、どうか俺が最初に知った池田はこいつなので、むしろ池田——ああ、ややこしいな。池田華菜の方が女版池田と言うべきはずなんだが、女版の方がキャラが濃いのでなんかそう思ってしまう。

「……それにしても今更だが、お前が長野で旅館経営してるなんてな。随分と出世したな」

「そんな良いもんじゃないっすよ……親の家業なんで継いだけですけど、仕事は大変だし、できればもうちょっと遊んでいたかったっす……」

「ああ？ でも彼女はいるんだろ？ しかも結婚する予定の」

「——そうなんですよっ!!」

「うおっ、声がでけえ……」

俺が出会った時に聞いたことを改めて口にするると急に声のボリュームを跳ね上げさせた池田（男）。まだお昼には少し早い時間で周りに客がそんなにいないから良いものの、周りに人がいればもっと厳しく注意する声量だ。

「ああっ、すみませんっ。いやでも東郷先輩には先週にも言ったかもしれませんけど、うちの嫁——いや、まだ彼女なんすけど、実質嫁がね……うへへ、なんか嫁つて言うの恥ずかしいですねえ。いやでも嫁なので嫁つて言いますけど、その嫁が本当に良い子で——」

……凄まじく鬱陶しい。この照れた感じで惚気を聞かされるとウザいというか殴りたくなるというか。俺がハーレム状態でなければ殴ってたかもしれないな。

ただ、そう。なんでも結婚を前提に付き合ってる彼女がいるらしい。なんでも相当な美人とこいつは言うが……、

「……そうか。写真とかないのか？」

「え？ いや、東郷先輩。もう見たことあるじゃないっすか」

「は？ いや見てねえよ。誰だよ」

「えっ、いや、うちの中居さんで1人かなり若い娘がいたと思うんですけど……会ってないっすか？」

「中居……あつ、そういやなんか見たような……」

池田の言葉を聞いて思い出す。確かに、こういう旅館の従業員にしてはえらく若い、しかも美人がいて気になっていたが……あれがそうか。なるほど。

「死n——結婚はいつするんだ？」

「今なんか物騒な言葉が聞こえかけたんすけど!？」

「気の所為だろ。俺は普通に喋ってるだけだ死ね」

「な、なんか語尾おかしくないっすか？」

「おかしくない。……いや、でもそうか。あの年上好きでパシリで気の弱くてヘタレのお前が結婚か……」

「ま、間違いじゃないですけどもうちよつと良い印象はないんすか……?」

他の印象、と言われてもな……ぶっちゃけ、高校時代の俺は周りにそんなに目を向けていた訳じゃないし分からない。これだけ憶えてるだけでも印象深い方だ。

それにだ。こいつが言うように、あの頃の俺は荒れてたのもある。

むしろそんな関わり合いになりたくないであろう先輩を泊まらせたこいつの行動が不思議でしかないが……この際だ。聞いてみるか。

「……そんで、俺なんかを泊まらせて良かったのか？」

「え? それはどういう……?」

「別に今は高校時代でもないしな。無理して先輩だった俺を立てなくてもいいんだが……」

「えっ……あつ、まあ……そう言われればそうなんすけど……いや、その……」

俺がそう言ったことで池田はしどろもどろになり、微妙な空気がその場に流れる。

そのことを申し訳なくは思うが、実際、俺を一々泊まらせる必要はなかっただろう。

先週、偶然にも泊まるホテルやらを探してる最中の俺と再会して、

態々家が旅館だから家に来ないかなんて言う必要はないはずだ。嫌ってる先輩ならなおさらな。別にそのことを誤魔化しても、先輩だった俺を邪険に扱っても俺は怒りはしない。そう伝えたつもりで、別にお金だつて払うし今直ぐべつのとこに移つてもいいのだが、俺の後輩だった池田は視線を迷わせていた。

しかししばらくして呼吸を整えると、少し落ち着いた様子で喋り始める。

「……正直、東郷先輩には……その、感謝してます」

「……………は？」

予想外の……あまりにも意外すぎる言葉が飛んできて俺は面食らつてしまう。

パシリにしていた後輩が俺に感謝？

……いや、感謝する要素なんてないだろ。そう思った俺は正直にそれを口にする。思わず半笑いで、

「……はっ、冗談も上手くなったな？」

「い、いやっ、冗談じゃなくてマジっすよ。……そりやあ東郷先輩は確かに先輩の中ではぶつちぎりに怖かつたっすけど……感謝してるのは本当っす」

「……感謝、ねえ……俺がやったことなんざチームに入れてやってこき使つたり厳しく指導したりしたくらいだけだな」

「そりや厳しかったし東郷先輩は噂通り怖かつたっすけどね……それでも自分が麻雀部でそれなりに活躍して大会に出れたのは東郷先輩やボブ先輩のおかげですし、それに……それ以外にも助けてもらつてますから」

——助ける？ 何のことだと俺は眉をひそめる。

そんな俺の様子を見て池田は軽く笑つた。思い出すように、

「やつぱり忘れてるんすね……いやまあ東郷先輩にとつてはあんまり大きなことじゃないかもしれないんすけど……ほら、東郷先輩が2年で自分が1年の時の夏、憶えてないっすか？」

「……悪い。憶えてないな」

「はは……まあ、そうっすよね。でも聞けば思い出すかもしれないっ

すから言いますけど……あの頃、自分に彼女がいたのは憶えてるっすか？」

池田がそう言ったことで俺もおぼろげだが少し思い出す。

「あー……そういやいたな。一瞬だけ」

「そうそう、一瞬だったんすよ。あの後、結局別れたっすからね……でも、その時は普通に好きだったんすよ。夏祭りにデートに行つてたくらいには」

と、行つて池田は語りだし、俺も思い出す。確か、池田の言うように4年前の話だったか……。

——4年前。

『花火、綺麗だね……』

『そ、そそそ、そうっすね……!』

そう、その時自分は人生で初めて出来た彼女、美奈ちゃんとの夏祭りデートで良い雰囲気になつて——

「つて、待てこら。てめえ……高校1年の夏の大会前にそんな羨ま——けしからんことしてやがったのか……!?!」

「い、いやいやいや! 未遂ですよ! だから話の腰を折らないで欲しいっす!」

池田の必死の説得に俺は一先ず落ち着いて話を聞くことにする。話の内容によつてはしばくけど。

改めて4年前のこと。

『池田君……』

『美奈ちゃん……』

——そう、夏祭りが行われた神社の境内裏。人気のない場所で良い雰囲気になり、今まさに大人の階段を登ろうとしていたところに、

『こんなところで何やってんだ、お二人さーん?』

『っ!?!』

『!?!』

——その時、6人くらいの見るからに不良みたいな奴らが声を掛けてきたっす。もう日焼けしてるわピアスしてるわタバコ吸ってるわ服装はDQN丸出しだわで如何にもな連中の登場に自分と美奈ちゃんには驚いたっす。

でも自分は勇気を出して一歩前に出て、

『な、なななんですか……?』

『あー? こっちが何やってんだって聞いてんだよ。殺すぞ』

『ひっ……』

——でもそのドスの聞いた声と睨みにビビって腰が引けてて、しかもその間に不良達は距離を詰めて美奈ちゃんの方を見ると、

『おっ、結構可愛いじゃーん』

『浴衣姿可愛いー。ねえ、俺達とも遊ばねえ?』

『今俺達暇しててさあ。せつかくのお祭りだし、遊ぼうぜ』

——と、そんな感じで不良達は美奈ちゃんに目をつけて明らかにたちの悪いナンパをしてきたっす。

『い、いや、その、ごめんなさい……私……』

『ちよっとくらいいいじゃん。帰りも送ってやるしさー、こんな奴といるより俺らという方が楽しませられる自信あるぜ?』

『そーそー。俺らの方がイケてるしな!』

『俺達こころじゃ結構ブイブイいわせてんだぜ?』

『い、いやです……私、もう帰りますから——あっ!?!』

——美奈ちゃんがその場から逃げようとしたその時、彼女の手が不良の1人に捕まって、

『いいから来いよ。なあ?』

『っ……!?!』

『み、美奈ちゃんっ——がっ……!?!』

自分が美奈ちゃんに駆け寄ろうとした瞬間、自分は殴られ、地面に蹲まってしまっす。

『お前はすつこんでろよ』

『ごめんねー。彼女さん、俺らが貰ってくから』

『いやっ、やめてっ！ 離してっ……！』

『あー、うっせえな。さっさと車連れ込もうぜ』

『うぐっ、あっ……！』

——そうして地面に蹲るしかなかった自分の眼の前で、美奈ちゃん
は不良達に連れて行かれてしまいました。

自分の無力さに打ちひしがれ、眼の前で彼女が連れて行かれる悔し
さ、絶望が胸に落ちた——そんな時です。

『——YOYO！ お前ら何やってんだYO！』

『あ？』

何やら聞き覚えのある声と共に、見覚えのある人達が不良達の前に
現れたんです。

『なんだお前ら？』

『なんだじゃねえんだYO！ こっちのセリフだぜイエア！ 女の子
を攫うなんてありえないヒエア！』

『……なんだこの黒人、頭イカれてんのか？』

『おいテメエもどっかいてろ。見世物じゃねえぞガキ』

『黒人って呼ぶなYO！ オレにはボブっていうパパとママから貰っ
た名前があるんだZE！ それとこっちはオレのブラザーだぜイエ
ア！』

『……おいボブ。こいつらもアホだが、アホなだけにお前だと話が通
じねえし、ちよつと黙っててくれ』

『オーケーだぜブラザー！』

——と、言って不良達の前に現れた2人こそが、白糸台高校男子麻
雀部、チーム獅子王の2人、東郷先輩とボブ先輩だったんです。

白糸台高校の中で最も恐れられる不良の2人の登場に、当時の自分
は助かったというよりさらなる絶望が胸を占め——

「——おいちよつと待て。当時の俺のどこが不良なんだ。別に普通

だっただろうが」

「授業をサボったり先輩や他校の生徒と喧嘩したり深夜に出歩いたりする時点で十分不良っすよ……ましてや白糸台つて一応進学校ですし……まあ、確かに今思えばそこまで不良って訳じゃなくても、そこそこ素行が悪いだけでも十分不良扱っすよね。うちの学校じゃ」

「……………」

「というわけで話を続けますけど……」

『婦女暴行は犯罪だぞ。目撃者もいるからな。未遂だけでも十分通報ものだが、今なら見逃してやるからさっさと放してから帰れ』

——と、東郷先輩は不良たちにそう言いました。至極もつともな言い分っす。

しかし不良達はそれを聞き入れるどころか、より一層睨みを利かせて、

『ああつ!? テメエらフザケてんのか!?』

『舐めてんじやねえぞゴラツ!!』

『言いたくねえが、俺らのバックには本物もついてんだぜ! 分かったらさっさと消えろや!』

その言葉に自分や、おそらく美奈ちゃんも震え上がりました。

でも東郷先輩達はお互いに目を合わせて、

『……………おいブラザー。ブラザーでも話が通じねえじやねえかYO』

『……………うるせえぞボブ。ちよつと今穏便な解決方法を考えてんだから黙れ』

『もう無理だと思うぜイエア。こんなこともあろうかとブラザーの為に武器も持ってきたYO』

『……………まあ、使うかどうかは置いて貰つとく』

『いや、もう100パー使うと思うYO。めっちゃ囲んできてるしな! H A H A H A!』

ボブ先輩が服の背中の部分に入れていた木の棒を取り出して東郷先輩に手渡す。東郷先輩は物凄く嫌そうな溜息を吐き、ボブ先輩は何

が可笑しいのか陽気に笑っていた。

そしてボブ先輩の言う通り、不良達は2人を取り囲んで今にも殴りかかろうとしているところであり、そんな状況でどちらにも何故そんなに余裕そうなのか分からなかった。

『調子乗ってんじゃねえよ。お前ら2人とも半殺しだからな。全裸にして写真取ってそこらに捨てていつてやる』

『あー、ヤバイヤバイ。普通に頭イカれてんじゃねえか……』

『YOYO、ブラザー。それにはオレも同感だが、そういうこと言うと挑発になっちゃうぜイエア』

ボブ先輩の言う通り、それを聞いた不良達は明らかに怒気を滲ませた後、

『——死ねぐらあつ!!』

一斉に2人に襲いかかった。

自分は怖くてそれを見ていることしか出来なかった。

このまま全員リンチにされて彼女は襲われてしまうのだと怯えていた。

だが数分後。終わってみれば、

『HHHHH! 口ほどにもないとはこのことだYO』

『あー、結局こうなるのかよ……くそつ、こんなことなら関わるんじやなかった……』

『うぐつ……ああ……やめでくれ……やめでくれよ……』

陽気に笑うボブ先輩と何故か悪態をつく東郷先輩の周りには、逆にボコボコにされた不良達が地面に蹲る——そんな光景が広がっていた。

リアルの喧嘩なんて初めて見たのでよく分からないが、印象に残ったのは、やられても分かりやすく気絶するのではなく、ボコボコにされて地面に蹲って子供のように泣きじやくるか、一目散に逃げていくかのどっちかであること。

それと、2人の先輩が不良6人程度では相手にならないほどに強いことだった。

そこでようやく自分が助かったことに気づいた。美奈ちゃんも地

面にへたり込んではいるが無事である。

『しかしブラザー。こいつらヤクザがどうこうとか言ってたけど大丈夫かY O? ついにオレ達の戦いも仁義ない感じになっちゃったりするのY O?』

『んなわけあるか。こいつらが適當言ってるだけだろ。ガチだったとしてもヤクザがこんなガキの喧嘩如きに落とす前つけにくるなんてありえねえからな』

『でもファミリーに危害が及ぶのは怖いぜイエア』

『いや、お前の親父……元海兵隊の高級将校なんだろ? じゃあ危害なんて加えられねえだろ、多分』

『……それもそうだけヒエア。でもブラザーは平気なのか?』

『いや……俺も問題ねえよ。というか、だからありえねえっての』

『そうか……残念だY O。どうせなら100億の少女を守ってみたかったY O……』

『養護施設開いたりタクシードライバーになったりするの? ……』

いや、そんなふざけたこと言ってる場合じゃねえ。もう行くぞ』

『帰りにたこ焼き買って帰ろうぜブラザー。それでブラザーの部屋でオールスマ○ラだぜイエア』

『……はあ、なんでもいいから行くぞ』

と、2人はそんな適当なやりとりをしてその場から去っていきました。

が、その直前にこちらを見て、

『……おい』

『っ! は、はいっ!』

何を言うのかと身構えていると、東郷先輩が、

『お前らも、今日はすぐ家に帰れよ』

『え、あつ……はい』

自分と美奈ちゃんにそう言っつて、今度こそ2人は去っていきました。

「——と、こんなことがあったんすけど……思い出しました？」
「……………」

俺はその話を全部聞いて真顔になる。そして頭を抱えながら、
「……なんだそのNTRエロ漫画の導入みたいな展開は。お前、そんなことに巻き込まれてたのか……」

「そうなんすよ……いやあ、あの時は怖かったす……結局、あの後頼りないとか色んな理由つけられて彼女は別れたんすけどね。でも、東郷先輩とボブ先輩には感謝してます」

「なんだ、その……不良が実は良い奴で人知れず人を助けてた的な展開は。そんなこと、実際にありえるのか？」

「あり得たんだからしょうがないっすよね。だからまあ……ちよつとした恩返しみたいなもんで……家で良ければ幾らでも泊まっていいですよ」

「……それは助かるが……」

俺はなんとも歯がゆい気分になる。

何故か感謝を覚えられているが、ぶつちやけ、そんなことは大したことないというか、そもそもその件は憶えているがそんな感動的な良い話でもない。

「……俺は……」

「？ なんですか東郷先輩？」

俺は言いかける。

喉元までその言葉が出掛かる。自分のことを、その本性を口にしかけ——

「……ああ、いや……何でもない」

「……？ そうっすか。あ、それじゃあこっちから聞きたいことがあるんすけど……」

「……なんだ？」

俺は気を取り直してその質問を耳にする。話さなかったことを安堵し、同時に別の負の感情を胸に秘めながら、

「今日一緒にいた可愛い女の子は……あれ、東郷先輩の彼女だったり？」

「——池田アツ！ そのことは誰にも喋るなアツ!!」

「えっ!?.. なんですですか!?!」

「何でもだ！ 喋るな。秘密にしろ。いいな?」

俺は有無を言わさずそれを黙秘するように言う。突然の言葉に先程までの落ち込んだ気分が完全に消し飛んだが、代わりに焦らしてくれる。

まさかJKと付き合ってるって表立って言うのはさすがにちよつと……駄目過ぎる。

だから固く口止めさせる。何がなんだか分からない池田は首を傾げていたが、昔の関係性もあつておずおずと、

「は、はいっ。東郷先輩がそう言うなら……でも先輩と一緒にいた娘可愛かったつすよねえ……どこかで見たことある気もするんですけど……」

「あんまり探るならお前の学生時代の恥ずかしい秘密をお前の嫁に喋るからな」

「そ、そそそそれは勘弁してくださいっ！ 分かりました！ 絶対に他言しません！」

よし、これでいい。これでバレる心配はないな。ふう、安心安心。これでこれから旅館に連れ込んで変にバレる心配はないな。そんなに長く泊まる予定もないけども。

しかし今日はとりあえず、

「よし、それじゃあ飯を食え。俺は昼からまた用事があるからな」

「えー……? 東郷先輩から誘ったんじゃないですか……」

「何か言ったか?」

「何でもないですっ！ はいっ！ 池田、飯を食べます！」

と、最後は昔のようにハキハキと返事をする体育会系のノリで締めておいた。

……まあ、出来る後輩を持って俺はなんとも運が良い。恵まれてるな、と思いつつ、明日からもまた続く指導とハーレムへの道程を思考することにした。

そして、何気なく震えた携帯を見ると、

『仁さん。明日もご指導、よろしくお願いしますね?』

という和からのチャットが和の写真と一緒に飛んできていた。

……何故か胸の谷間の部分を緩めたエッチな写真だった。

それを見て、明日も暇があれば犯そう、と俺は固く決意した。

初夏の出会い

——スタートダッシュというのは人間にとってかなり重要である。別にソーシャルゲームを始めてしばらくはスタミナ消費が半減だとか石が貰えるとか成長率が高いとか、そういう様々な恩恵が得られるキャンペーンの話ではない。

例えば——こう思ったことはないだろうか。

子供の頃、それこそ物心がついたばかりか、それよりも前の時に、何かしらのスポーツや習い事を始めていけば、今頃はその分野でそれなりの実力が身につけていたのではないかと。

ありえない妄想、もしくは、IFの話ではあるがそういう馬鹿なもの話をしたことや考えたことは、誰しも1回くらいはないだろうか。

それこそ、何かの競技、スポーツや習い事、趣味のことで何かをしている者であれば考えるはずだ。始めたのが遅ければ遅いほど尚更。

例えば中学から部活に入った時。小学生やそれ以前からそのスポーツを始めた者と比べて劣っていたりするだろう。

まあ経験値が違うのだから当たり前である。その分野を始めた年月。練習すればするほど、知識を蓄えれば蓄えるほど、経験が積み重なって実力がついていくのは当然の話だ。

多くの場合、積み重ねてきた経験の多い方が実力は高い。それは勉強や社会、仕事においてもそうだ。

入ったばかりの新入社員よりは勤続年数3年とか5年、あるいは10年と年数が高い者の方が実力を持っていることが多いだろう。

勿論、何事にも例外はある。経験に胡座をかいて努力を怠る。もしくはもつと単純に、老いによって身体能力や脳の働きが衰えることもあり、単純に経験の差だけで決まらないことだってある。

だが基本的にスタートが早い方が、少なくとも同年代と比べて有利なことは間違いないし、もつと単純な有利であるという根拠もある。

子供の頃の方が憶えが良い——というのは誰もがなんとなく知っ

ている常識だ。

これは人間の身体の機能が原因なのだが……例えば運動。アメリカの医学者、リチャード・スキヤモンの有名な発表に「スキヤモンの発育曲線」というものがある。

これによれば、人間の二十歳の脳の発育状態を100%とした場合、それまでの発達の仕方をグラフにして表したものである。

そしてその中で、運動に必要な神経系。これの発達に重要なのは、主に4歳から12歳までの間。4歳から急激に伸びて12歳にはほぼ成人と同じに達することからそう言われている。

この期間の間に運動をすることで運動神経が良くなる。運動が上手くなる。

一般的に、この時期をゴールデンエイジと言うが、その時期の過ごし方が未来を決めると言っても過言ではない。

特にスポーツ選手などを志すのであれば、この時期に運動させることが何よりも重要なのは言うまでもない。

無論、ゴールデンエイジを過ぎてからその競技を始めても大成する可能性がないとは言わないが……それには「才能」という生まれ持った恩恵が必要不可欠だ。

才能の有無は重要ではあるが、才能を持つ者も、持たない者も、この時期を疎かにするのは競技者としては愚行でしかない。

ただ、子供の自由を考えればそれを強制させることは難しいため、教育熱心な多くの親が子供の気まぐれなどによって今までの出費を軽くぼやいたりするだろう。

しかし中にはそれを成功させる者もいる。

子供が好んでいるか否かは置いといて、幼い頃から特定の分野を極めさせんと虐待にも近い熱心な指導を行う親がいることも事実だ。

しかしそうやって成功した子供の多くは成功しているが故に親のことを恨みはしないし、総合的に感謝している。感謝しているのだから虐待には当たらない。だから許される。

それに熱心な指導とはいえ、本当に世の中で言うところの虐待のよくな行いをする親はそういった親には少ないため、精神を病んだり自

殺したり……などといった失敗は少ないだろう。世に出てきてないだけかもしれないが。

——だが、倫理的な部分を見捨てて考えれば、子供の成長に無限の可能性があり、試す価値があるのもまた事実だ。

例えば——物心がついた4歳という年齢ではない。それこそ物心つく前。それこそ赤ん坊の頃に触りだけでもやらせてみたらどうだろう。

ただそのことだけを極めさせんと子供の頃からありとあらゆることを叩き込めばどうだろう。

12歳で成人と同じ発達率になるとはいえ、12歳で大人を凌ぐ者など、競技の世界、特に運動要素がある競技には存在しない。

だが理論上、少なくとも神経系だけであれば成人と同じ、完成を迎えるのだ。

ならば12歳までに全ての技術を叩き込めばどうか？

身体能力におけるの限界はある——が、それについてはまた別の方法で解決すればいいし、例えばそれが無理でも肉体の方はそれから鍛えても十分間に合う。

もしかしたらそれにより、人間という生物のスペックを大幅に塗り替えるような個体が誕生するかもしれない。

実際に、世の中にはオカルトという摩訶不思議な力を使う者もいるというし、超人的な力を使う者には前例がある。決して不可能とはい切れないだろう。

……だが完成させるためには前提条件として才能の有無と環境、どれだけ早く効率的に指導を施せるかに懸かっている。

上述にあるように、虐待とも言える教育を子供に課すことになるため、それらを行うには狂気と熱量が必要不可欠である。

何が何でも子供にその道を進ませるといふ熱量と、子供を子供と思わぬ——まるで道具を相手にするような狂気。その2つを持った者が行えば——。

……人の生は短い。

短い生の中で何かを極めることは難しく、極められたとしても1

つ。多くとも2つ、どんな天才でも3つ程度が限界だろう。数が多くなればなるほど1つ1つの完成度は同じ道に進む他に比べて劣ってしまう。

故にこそ、なによりも早くその道に進ませるための教育が必要なのである。

『——タイトル戦はいよいよ佳境ツ！ 男子プロ雀王戦決勝卓！ 前半戦が終わりお昼の休憩に入って順位はご覧の通りですが、前半戦が終わって小鍛治プロはどのように思いますか？』

「……………あ？」

突然、意識が覚醒してどこか聞き覚えのある声が耳に届く。いや、ひよつとしたら先程から聞こえていたかもしれない。自分が寝ていたと気づいたのは液晶画面を見て直ぐのことだった。

『そうですね…………やはり赤羽プロが飛び抜けていると思います。他の選手も頑張つてはいますが…………前半戦を見る限りだと——』

『はい！ そんな赤羽善光プロのお昼の昼食は定番のきつねうどんのようです！ ちなみに小鍛治プロはさつき楽屋でコンビニで買ってきた日高昆布のおにぎりを食べていましたが美味しかったですか？』
『ええ、まあ普通に——つて、こーこちゃん！ なんて私の昼食紹介するの!?!』

『タイトル戦の実況解説の時つて普通こつちも協会御用達のお店で名産の物を食べたりするのに、なんで小鍛治プロは態々コンビニで地味な味のおにぎりを食べたのかなーつて』

『怒られるよその説明!?! というかお昼外に行かなかつたのは今朝こーこちゃんが待ちきれないつて先に食べに行つたからでしょ!?!』

『あれそうだつて? ……というつて前半戦トップの赤羽善光永世七冠と同じ、女子の永世七冠、小鍛治健夜プロの昼食は女子力の低いコンビニの日高昆布おにぎり野菜ジュースでしたー!!』

『だからなんで私の昼食に注目するの!?!』

…………小鍛治プロに福与アナか…………相変わらず騒がしいなこの2人

……。

なんというか、ネタに事欠かない2人だよな。そんな2人が男子プロのタイトル戦の実況解説をしているが、小鍛冶プロは国内リーグだと最強と名高い選手で知名度も高く、解説は的確だし、福与アナの実況もライブ感があって悪くない。

おまけに2人のやりとりはネタ満載で普通に人気だし、実況スレなんかは大盛りあがりだろう。

しかも放映している試合は男子とはいえタイトル戦で、出ているのが男子のトッププロである赤羽善光永世七冠ともくれば……まあ、視聴率が取れない訳がないな。

「……はあ」

とはいえ俺はスマホを操作してチャンネルを変える。気がついたら何かの拍子にチャンネルが変わっていたが、元々寝る前はぼーっとニュースを見ていた。試合の方には興味もない……とまでは言わないうが見たくはない。結果も分かりきってるしな。

「身体が痛え……」

変な体勢で、しかもベンチの上で寝てたから微妙に身体に違和感を感じる。

スマホを持っていない方の手で肩を擦りながら起き上がり、お昼のニュースに目を向ける。なんか色々やってるが……、

『——では次のニュースです。昨夜行われたボクシングヘビー級のタイトルマッチで起きた競技中の事故について、チャンピオンが死亡しま——』

……なんか興味の引くニュースはやってないな。新しいニュースもそれほどないし。一応大人として時事には詳しくないとな、と思つてちよくちよく見るが、興味がない時は見ない時もある。気まぐれな感じだ。

アプリを閉じて一息。時間はお昼過ぎと言ったところで、学生的には放課後と言つてもいい時間帯。

そして今日は5月16日月曜日。5月の中旬。初夏という言葉に相応しいお日柄である。

そのため珍しく眠くなつたのかベンチで呑気に昼寝なんかしてしまつたが……学校の敷地内で大人が、それも元プロが昼寝つてのは風聞が悪いな。

そこまで気にすることは無いとは思うが、噂とか立つのもアレだし振る舞いには気をつけないな……放課後までの暇潰しにはなつたが生徒に見られてたら不審者に思われそうだし。

「お……」

とか思つてたら遠くから女子生徒が歩いてくる。起きといて良かった。それに結構可愛いな。ショートカットで大人しそうな少女。なんか田舎の普通の女子高生。文学少女つて感じで悪くない。気弱そうでもある。何故ならだ。

「っ……」

ほら、俺を見るなりちよつと足早になつた。俺つて顔立ちが悪くないと思うんだが目つきは悪いわ目の下のクマはエグいわいつもの服装も顔も合わせてホストみたいって言われるし、総合してガラが悪く見えたり、ちよつとチャラく見えたりする。この溢れ出るマイルドヤンキー感。自分で言つてると悲しくなるな……俺を見てやさぐれたホストつて例えを最初に出した奴はなんとも的を得ていると思う。見つけたら一発殴らせてほしいけどな……。

ともかく、気弱な奴なら俺を避ける。そこまで致命的に近寄り難い見た目をしている訳ではないので避けるのは見た目派手な人間とかに耐性はないおとなしい奴が殆どだ。

まあ俺の方も別に声を掛けるつもりもない。普通にその少女が横切るのを視線を切つたまま感じて――、

「ツツ……!!」

――不意に、俺の背筋に何か嫌なモノが走り抜ける。

「今のは……?」

――まさか今の少女か?

そう思い視線を少女の方に向けてみるも、少女は既に……確か小川がある方か。そちらに向かつて去っていく。

それに今は何も感じない。少女が通り過ぎた瞬間、酷い悪寒を感じ

たが……気の所為か？

まるでオカルト持ちのプロや、天江衣や宮永照のような魔物にも似た気配を感じた。俺はオカルトとかそういう強者特有の気配には敏感であるため、何かがあの少女に……いや、あの少女とは限らないけどな。

だが少なくとも近くにオカルトが、それも魔物級のオカルトがあることは確かだ。

清澄高校の麻雀部の面々に強いオカルトの持ち主はいない。精々竹井と片岡くらいだ。どちらも魔物級とは言い難い。

……ならばやはりさっきの少女か？

「わっかんねー……」

三尋木プロの口癖で端的に心境を表す。いや知らんし。マジで分からん。

考えても分からないことを考え続けていてもしょうがない。情報が少なすぎるし、そもそもあの少女だったとしてもこれから関わることもなさそうだし。

「そろそろ部室の方に行くか……」

まだちよつと時間はあるが授業自体は終わったっぽいしな。

ということであはベンチから立ち上がり、麻雀部の部室がある旧校舎の方に向かう。旧校舎、地味にここからだど距離があるしな。

というかどうせなら部室で待たせて貰えば良かったなと今更ながら思う。律儀に外で時間潰さなくても、旧校舎なら一部の文化部以外は立ち入ることもないし部室なら尚更ゆつくり出来ただろう。ベツドもあるしな。

「——あつ、仁さ……東郷さんっ」

「おっ」

とかなんとか言いながら旧校舎への道のりを歩いていると、背後から声。そして小走りで近づいてくるのは和だった。俺を見て顔をパアツと輝かせてくれるのが可愛い。それと、こっちに並んでくる際にその制服を押し上げる爆乳が重そうにたゆんつ、と揺れる。うん、相変わらずいいおっぱい。改めて制服姿を見ると和のスタイルの良

さもあつてえつちだ。

俺は少し歩くスピードを落としつつ和と並んで旧校舎に向かう。

「昨日はあの後大丈夫だったか？」

「あ、はいっ。ちよつと眠るのがいつもより早かつたくらいです」

「そうか。……後、今は周囲に誰も居ないから別に名前で呼んでもいいんだぞ？」

「ふふ、そうですね……でも、油断すると皆がいる前でも名前で呼んでしまいそうで……」

先程名前呼びを名字に訂正した和に名前で呼んでもいいと告げると、嬉し恥ずかしといった様子で、しかしそれを否定してきた。

なんか初めての彼氏が出来て浮かれてる感が満載で確かに危なっかしいかもしれない。一見普通に見えるが、真顔で先週末までの和なら言わないような……例えば恋愛とか男のこととかを喋ったり、俺への声の掛け方とかでバレないとも言いつれない。

どこまで気をつければいいかというのは難しいが、まあ、決定的でなければ幾らでも言い訳が出来る気もする。なのでこちらが少し注意していればいだろう。

「……まあそうかもな。それはお互いに気をつけるとして、そんなことよりも——」

「え？——あつ……」

俺は旧校舎の敷地内に入ったところで、和のスカートの中に右手を潜り込ませる。

胸とは違った柔らかさ。ミニ過ぎる、しかしギリギリ見えないレベルのスカートの中に隠れた尻を掴む。

スベスベとした肌触りと女性らしい丸みが堪らない。下着がない直の感触を楽しみながら、俺は和に囁いた。

「昨日の写真はどういうつもりで送ったんだ？ あんな写真を送つて、しかも指導してくださいって……しかも今も下着着けてきてないな？ 俺には誘ってるようにしか感じないんだが」

「んんっ、それは……仁さんが喜ぶかなと思って……ネットで、彼氏とか、男の人を喜ばせる方法を相談したらそう書いてあったので……」

ネットで相談したのか……いやまあ意外と良いかもしれないが、エロ撮りしろって言われて出来る時点で和はエロい。

「そうか。確かに嬉しいけどな。でも、こんなタダでさえ可愛くてエロい和相手に我慢するのは大変なのに、あんなことされたら抑えが効かないぞ？　このお尻が見えそうな超ミニスカートもけしからんよな。周りの男子が興奮して、今みたいに急に触られたらどうするつもりだ？」

「んっ♡ いきなり触ってくる人なんて仁さんくらいですっ……」

お尻を触られながらもさすがにままたなっている和。色気に満ちた熱っぽい息遣いに喘ぎを口から漏らし、俺の方を見上げて切なそうにしている。瞳の方も熱っぽく、好意を物凄く感じる。漫画的表現であるハートマークが瞳の色に浮かぶあはれは、今この時の和のようなキラに使うのだろう。

「でも男子にはよく見られるだろ？　特に……胸とか」

「っ……確かに時折視線は感じますけど……不愉快ではないです……仁さんなら別にいいですけど……」

背中から手を回し制服の上から男子の視線を集める爆乳を鷲掴みにする。服の上からでもこの柔らかさ。もにゅもにゅと指が埋まって気持ちいい。もう股間の方も自然と立ち上がってしまう。

「……それで、俺のことを誘ってどうするんだ？」

「べ、別に誘っては……」

「和からエッチなことをしてくれると思って期待してたんだけどな」

「……その……そう、ですね。でもはしたない気も……」

いや、土日にとんだけはしたくないことしたと思ってるんだとツッコミたくなる。思いつきり和の方から求められまくったけどな。

ただまあ今はそれを指摘するのはやめておく。代わりに和を諭すように、

「好き合う男女なら、別に女性の方から誘ってもはしたなくなんてないと思うけどな。和だって、好きな相手から求められたら嬉しいだろ？」

「……はい」

「なら俺の方だって、好きな相手……和みたいな可愛くて俺のことが好きな女の子から誘われたら嬉しい。だから普通のことだ」

「……それじゃあ、別に我慢しなくてもいいんですか……?」

ああ、と俺は頷き——ん？ 我慢？

なんだやつぱり和の方から——んほおつ!?

「あつ……今日も硬い……♡ズボンの中でピクピクしてます……♡」

急に和が後ろ手に俺の股間の膨らみにその細くしなやかな指を絡ませてきた。そのいきなりの感触に俺は驚く。

だがそんなことはすぐにどうでもよくなる。和の手が自然に俺の肉棒をズボンの上からさすさすと上下に擦ったり、にぎにぎと硬さや大きさを、形を確かめるように握ってくる。

まるで手慣れた風俗嬢のような手つきだ。先週末では何も知らなかったであろう和がやる手の動きじゃない。

だが土日で俺が教え込んだことにより、もう俺を悦ばせる動きを実践している。

ただでさえ雄の精子を搾り取るために作られたような可愛さ、身体つきをしているのに、こうやって知識やテクニクまでも上達してしまえば……しかも俺のためだけに憶えたテクニクでだ。

「仁さん……あの、こつち……こつちに來てください……♡」

「っ……ああ……」

興奮で思わず唾を飲み込む。顔を紅潮させながら和は俺の手を引いて旧校舎の人気のない教室へと誘う。

部活までそれほど時間はないが、数発ならいけるだろう。和も完全にその気だ。

和が俺のズボンを外そうとベルトをカチャカチャと鳴らすのを優越感たっぷりに見下ろしながら、俺は頭の片隅で冷静に部活が始まるであろう時間までの計算を始めた。

「うっ！……はあ……最高だった……」

「んんう……♡ 仁さんの精子……♡ ああ、溢れちゃいます……♡」
空き教室の窓の縁に手をつき、四つん這いになっていた和の秘部から肉棒を抜く。ひだひだが最後まで行かないでと言わんばかりに俺の肉棒に甘くきつく絡みついてきていたが、断腸の思いでここで終えなければならぬ。

和も俺の精子が膣内から垂れたのを感じて身体をビクビクとさせていてなんともエロいが……いや駄目だ。もう部活の時間。さすがにそろそろ向かつかないとまずい。

パイズリで2回、中出しを2回したのだから十分だろう。十分だと思え。いや、実際時間としてはそれほど経っていないのにこれだけ出せたのはやはり和のエロさが原因だ。

ドチャシコボデイの和が自ら俺を誘って、しかも何も頼んでもいないのに自らパイズリし始めたり中出しを懇願してくるのはチンコに悪すぎた。正直、まだまだヤツていたい……が、後始末をして行かないとな……。

「うっ……和、そろそろ行かないと」

「ちゆるっ、んっ、れろ、んう……♡ そうですね……」

お掃除フェラをしてくれていた和に声をかけて終わりを告げる。その奉仕の熱心さに肉棒がまだまだガチガチになっているが、まあこれは気合で収める。少し時間はかかるが……まあ俺が少し遅れるだけなら問題ないだろう。

「和、先に行つといてくれ。俺はちよつと掃除して……これが収まつてから行く」

「……はい。分かりました……少し残念ですけど……」

身体に付いた色んな液体やらを拭き終わり、服装を整えた和が俺のチンコを見て残念そうに頷く。いやだからそういうのがチンコに来るからやめてほしい。抜いてあげたいって顔に書いてあるんだよ。

悪いが続きはまた今度だ……いやほんと、非常に残念だけど……と俺は先に教室を出ていく和を見送る。

「それではまた後で、指導をお願いします」

「……それはどつちの意味だ？」

「あつ……ま、麻雀の方です……その、できれば両方がいいですけど、時間がないので……」

自分の発言に気づいた和が顔を赤くしてもじもじと身体を揺らす。だからそういうとこやぞ。もうこのままもう一度即ハメボンバーしてやろうか。くそっ……このエロさでよく今まで処女でいられたな……世の中が平和な証拠か。如何に和の身持ちが固かったかがわかるというか、オカルトの強力を思い知ったというか……なんにせよ、また出来るのだからいいだろう。

もつとも週末にはもう別の学校に行ってるからしばらくお別れだけだな。……はあ、長野から離れたらまた別のとこって考えると鬱だな……と、今度こそ先に部室に向かった和を見送る。

「さて、さっさと後始末するか……」

と、俺はトイレから持ってきた雑巾とかトイレットペーパーで軽く行為の痕跡を消していく。証拠隠滅だ。まあ使われてない教室だと言っていたし、問題はないだろうが一応な。

液体を拭き取って換気をする頃には俺の肉棒も普通に収まった。和が相手だっただけに満足とまではいかないが、そこそこスッキリした。

「後はこれを返して——あん？」

そして雑巾やらを元の場所に戻しに行こうと教室を出る直前、携帯が震えたので確認しておく。……結構溜まってんな。先に返信しとくか。

俺は携帯を操作していく。まあ、大体はチャットだ。オカルトを手に入れて行動を始めてからの俺は交友関係も広がったため、こまめな返信が欠かせない。

特に、はやりさん、良子、葉、ユキ、美穂子といった俺の女達からは、頻繁に連絡が来る。俺がないのが寂しいのだろう。結構熱い恋人のようなやりとりをしたりする。これに和が加わるため、更に忙しくなるが必要経費、ハーレムを築く男の責務のようなものだ。やる時以外放置なんてクズみたいなことを俺はしない。皆可愛いから放っておけないよね。全員等しく恋人や愛人のように扱うのだ。結局ク

ズなことには変わらないな。

それと、今までの指導先で会った奴ら。有珠山高校の面々や、龍門
淵高校の面々。風越の池田とか、後はハギヨシとか、割と色んな相手
と交流してるため、携帯は大忙しだ。

後は何気に京太郎からも来てるな……何々……今日1人連れて
きてもいいですか？”——って、どういうことだ？ しかも届いたの
が20分前か。文脈的に部員候補とか友達とか連れてくるのか？
俺は構わないが……いやまあいい。部室で確認しよう。20分前な
らもうじき来るか、もしくは来てるだろ。

「……なんだかんだ時間掛かるな……こんくらいにしとくか……」
気がつけば和が出ていってから20分近くここにいる。返信を一
旦終えてそろそろ向かうとするか。あんまり遅いとクレーム来そう
だしな。

ということとで階段を上がって部室へ。麻雀部の部室、何気に最上階
なのが面倒だよな。

さて、今日も仕事するか……と、俺はスイッチを切り替えて麻雀部
の部室の戸を開いて中へ。

「おう、来たぞ——って、もうやってんのか」

「あ、東郷さんちわつす」

「元プロが来たじえー！」

「……おはようございます、東郷さん」

部室に入ると既に打ってるようで、いつもの面子——京太郎、片岡、
和の1年生ズがこちらに気づいてそれぞれ声をかけてきたが……ん
？ 知らない奴がいるな。

「あ……？ お前は……」

「あの、どうも……お邪魔してます」

卓に座っており、俺を見るなり若干バツが悪そうに挨拶をしてくる
少女——って、さつき見た女生徒じゃねえか。

あ？ ってことはやっぱりこいつがさつきの悪寒の正体か？ な
んでここについてことよりそのことが気になる。

「東郷さん、こいつ、俺の幼馴染なんすけど、連れてきて大丈夫でした

? チャット送つても反応無かつたんで結局連れてきちやつたんですけど」

「あ? あー……そういや来てたな……」

あつ、京太郎が連れてきてもいいかって聞いてたのはこいつのことか。というか幼馴染……京太郎、お前も意外と隅に置けないじゃねえか……可愛い幼馴染と同年代のロリっ子に好かれてるとか……余裕で俺よりモテてるな。俺がモテないだけでも言えるが……言つてて悲しくなるな。オカルトがあるからそこまで気分は沈まないが。

「あの……面子揃つたなら私抜けますけど……?」

「……ん? あーいや、そのまま打つていいぞ。俺はまだ入らねえ。しばらく見てる」

「うっ……はい……」

……? なんだ抜けたいのか? つうか明らかに怖がられてる気がする……いやまあちよつと水商売とかやってそうな雰囲気知らない大人がいたら文学少女は怖がるか? 派手に遊んでそうな奴とか体育会系とかなら意外と耐性あるんだろうが、見るからに大人しうだしな……。

ちよつと本内の奴に似てる。あいつもよく怖いですつて言ってるし。俺のことは割と早い段階で慣れてたというか、不思議とそこまで怖がってなかつたけどな。

まあ竹井や染谷……あ、染谷は今日来ないんだったか。何でも実家の麻雀喫茶のバイトが欠員出たとかで……そんじやあ竹井が来てからだな、打つにしても。それまではゆつくりと1年生達の初々しい対局を見守ることにしよう。

「そんじやあサイコロ振るぞー」

「どんと来いだしえー!」

「……………」

「東郷さん、お茶淹れますね」

「ああ、ありがとな」

と、どうやら一回目の対局は終わったようで2回目が始まる。和が俺の分の紅茶を淹れてくれたが、それだけするとすぐに席に戻った。

俺もそういう関係になったということはおくびにも出さずに部室備え付けのパソコンの前に座って観戦だ。古いパソコンだが、ここに対局のデータ、牌譜や成績などが記録されているので割と使える。こういうのってガチで麻雀やるなら必須と言ってもいい。データってのは嘘をつかないからな。長所や短所、牌の偏り方や内筋など、データを見れば分かることも多い。

ということでは俺は既に終わった半荘一回目の結果を見る。えーつと？ 順位は和が+15で1位。片岡が+2で2位で、少女……名前前は宮永、宮永咲か。宮永が±0で3位。京太郎が-17で最下位か。ふむ、和はさすがと言うべきか、当然のトップ。片岡は相変わらずの東場は良いが南場で失速。宮永は……うん、なんとも言えない。普通。それで京太郎エ……麻雀部員でない相手に……いやまあそういう時もあるのは分かるが、もうちょっと頑張れな？ せっかく指導してやってるんだからもうちょっと成績良くてもええんやで……。

「っ、ツモ」

お、とか言ったら現在進行系の半荘2回目で京太郎が和了った。ゴミ手だが、まあ良し。なんか和が暴れてるし、その中で和了れただけでもいいだろう。

しかし和は……あんなことがあった後なのにすまし顔でいつも通りに打ってるな……さすがだ。

だがこのすまし顔で、私、麻雀にしか興味ありませんけど？ とか言いそうな感じなのに、さっきまであんなに淫らで、俺のチンコを率先して、その高校生にあるまじき推定Kカップ越えのおっぱいで抜いたり、中出しおねだりをして挿れただけでイキかけたりしてたんだよな……と思うとそれはそれでエロいな。

今は牌を握っているその手はついさっきまで俺のチンコ握ってた手だし、今も和の子宮には俺の精子が元気に泳ぎ回って——あつ、ヤバいからこの辺にしておこう。こんなところで勃起したら洒落にならんしな。

「今回も和の圧勝か……あー、さすがに敵わないな……」

「……んっ、ありがとうございます」

「ぎゃー、やられたじょー」

「……………」

そうこうして色々考えてる内に2回目も終了する。さてさて結果は……和が+31で1位。宮永が±0で2位。片岡が-13で3位で、京太郎が-18で最下位。やっぱり和は学生レベルだと強いな。安定感が違う。片岡は相変わらずで、京太郎は頑張ってはいるみたいだがまだ結果が伴わないな。まあ俺も色々アドバイスしたり本を薦めたりしてるがさすがに結果は出ない。良くはなっているが。

後、何気に和が今ちよつと身体をピクツと跳ねさせたが……どうした？ まさか俺の視線でも感じたか？ それともさつき注いでやったのが溢れそうになったとか？ エロ漫画とかにありがちだが、それだったとしたら——いやだから想像するのはやめよう。興奮してしまう。真面目に麻雀のことを考えよう。

和はな、真面目な話、強いには強いが、ネットで打った時と比べると明らかに弱いのが気になるんだよな……土日はエロで頭がいつぱいだったからその違和感が頭になかったが、今朝色々考えてる時に気づいた。和って、のどっちにしては弱くね？ って。辛辣な言い方だが、正直な感想だ。ネットだと、最近はまだ俺も食い下がれるが、最初の方は負けまくってたほどの実力。

だが現実でインターミドルチャンピオンの原村和と打てば、ほぼ俺の勝ちだ。9割方、俺が勝っている。

プロとアマチュアの差と言ってしまえばそれまでだが、和がのどっちなら、実力的には高校生でもトップクラス。プロレベルの実力を持っているはずだ。そこが気になる。今度そのことについても聞いて、問題があるようであればアドバイスでもしてみるか……ネットでの実力をリアルで出せれば相当上を目指せるだろうしな。

まあ和はそんなもん。そして疑いがある宮永なんだが……微妙に違和感があるな。

京太郎には素人かよって言われてて、実際に見え見えの当たり牌を捨てて、振り込んだり、高い手をあつさり捨てて安い手で和了ったりもする。

だから初心者という評に一見間違いはないように思えるが……点数計算は出来ているようだし、牌を打つその手は淀みなく、極めて自然だ。それこそ、幼い頃からの当たり前前の動作をしている様に見える。

……なんだ？ 何を見落としている……？

どう見ても初心者……だというのにこの違和感は何なんだ？

先程からどうにも気になってしまふ。こいつの闘牌から目を離せない。本人は気合のきの字もない。頼りない気の抜けた様な感じで打っているというのに……くそ、なんか気持ち悪いな。なんだこの――

「……汗……？」

俺は何気なく手を擦り合わせ、そこで気づく。脂汗が滲み出ていることに。

それに気づいた瞬間、俺は自分が寒気を感じていることに気づく。熱？ 病気？ ——いや違う……と思う。

この寒気は、この宮永の麻雀を見たから感じているものだと感覚が言っている。

だがそれが余計に不可解だ。このパツとしない麻雀のどこに寒気を感じる要素がある。

自慢じゃないが、俺は麻雀でこんな寒気を感じたことなんてほぼない。それこそ、世界で戦えるようなトップ雀士を相手にした時くらいだ。

だが現に俺はこの宮永に寒気を感じている。

……なんだ、何をしている……こいつの麻雀におかしなところは――

些細な部分でもいい。何かないか？ もしオカルトなら何か分かりやすい特徴があるはずだ。

だが特定の役で和了りまくっていたり、特定の牌を集めているような形跡もない。防御系か？ しかし振り込むことも多い。成績も2連続±0――……。

……まさか。

まさか、と俺は思う。

もしそうだとしたら……とんでもない化け物だ。やってることが出鱈目過ぎる。

トツプロならまだしも、高校1年生でそんなことをやってのけたとすれば……本物だ。ありえない。

だがそんな判断を他所に俺の本能はそれを間違いないと認めている。

俺は自分の感覚を信じている。どうしようもない雑魚プロ、元プロだが、オカルトや強者に関する感覚はトツプロの良子と比べても劣るものではない。

ならやはり——と、俺は冷静にその事実を受け止める。

半荘3回目が始まり、それを真剣に観察する。

もし次もそうなら……確定だ、と——、

「——夕立がきましたね……」

「——うそっ!? 傘持ってきてないわ!」

その時——外で雷が鳴り、激しい雨が降り始める。

外の音の所為か、和の呟きに反応したのか、ベッドの方から聞き覚えのある声が……って、竹井かよ。まさか既に来てたとは……くそ、宮永に気を取られすぎて気づかなかった。

「あれって——生徒会長!?!」

「んー? この学校では生徒会長じゃなく学生議会議長ね」

「おはー」

「麻雀部のキャプテンなんですよ」

「なんで麻雀部に……」

まあそれはいい。とにかく竹井が起きてきたことで皆がそれぞれ声を交わし合う。

「麻雀が好きだからに決まってるっしょ——あなたが今日のゲストね」

「はは……ども」

と、宮永が部長である竹井に僅かに緊張した様子で挨拶。

それを終えて竹井がこつちに歩いてくる。今度は俺に目を向け、

「東郷さんは観戦中？ あ、お茶菓子美味しそうね」

「……見れば分かるだろ。お茶菓子は好きに食べる」

「あら、今日はそっけないわねー。さて、どれどれ……？」

竹井が俺の隣からパソコンを覗き込む——さて、竹井。お前は気づくか？

「——ロン、1000点」

「っ——!？」

竹井がパソコンで先程までの結果を覗いている間に、宮永が和了る——それに反応して竹井が驚きの表情を浮かべたが、そりや驚くだろうな。

なにセタンピン三色、最低でも7700点の手を自ら1000点にまで落として和了ったのだ。

結局それで条件はクリア出来るのだろう。着々とそれに向かっている辺り、これはもう確定だな……。

「……なあ竹井。お前、全国に行けるなら行きたいか？」

「……な、なによ急に……そりや、行けるものなら行きたいけど……」俺は困惑顔の竹井に苦笑を浮かべながら小声で問いを投げる。

全国、という言葉はまあ通じる。そりやそうだ。

麻雀部で全国。しかもこの時期にそれを口に出した——それはとどのつまり、インターハイのことに他ならない。

そしてそれは、麻雀をする高校生、誰もが夢見ると言っても過言ではない頂点の舞台だ。行きたくない筈がない。

「なら良かったな」

「……へ？ 何が？」

だから俺は言っちゃった。

「——行けるかもしれねえぞ？」

「……な、何を言っちゃ……というかさそれより、あの子ちよつと——」

「ああ。気づいたか？ 結構な化け物だぞ、アレ。精々捕まえとけよ」

「ば、化け物って……——」

竹井が俺の言葉に更に困惑を返した瞬間——半荘が終わったように京太郎と片岡が声を上げた。

「3回目終わりました」

「今回ものどちゃんかトップか」

「っ……今回の宮永さんのスコアは？」

竹井がそれを慌てて問う。

そして結果は当然の様に――

「プラマイゼロっばー」

「!!」

――3連続±0だ。

ハッ……外の雷よりもやべえのが眼の前にはやがる。

常識外、埒外の打ち手だ。

竹井もそれを感じ取ったのだろう、何かを思案するかのように真剣な表情で立ち止まっている。

「……私はこれで。会長起きてメンツも足りてるようですし、抜けさせてもらいますね」

「えっ、オイ……」

「もう帰っちゃおうのー?」

「……………」

「図書室に本返さなきゃ」

その間に、宮永は席を立って部室から去ろうとする。気を使ったよ
うな笑みと借りてきたという本を見せながら。

「また打とうねー!」

片岡が最後に手を振って別れを告げると、宮永も礼儀正しく軽い礼
をして部室を後にした。

そして部員だけになれば話は対局のこととなる。ただそれは宮永
のことではない。

「慌てて帰っちゃいましたね……」

「そりゃやっぱのどちゃん強すぎだからだじよ」

「圧勝って感じだね……やっぱ相手になるのは部長か東郷さんくらい
か……」

和が3連続でトップ。そのことを片岡も京太郎も自然と話題にする。
……何気に京太郎は竹井と俺のことまで持ち上げてきたが……

まあそれはいい。問題は宮永のことだ。

「……圧勝？　なに甘いこと言ってるのよ」

「え？」

その言葉が面白かったのだろう、竹井が笑みで2人の言葉に異を唱える。パソコンの方へ向き直りながら、

「スコア見て気づかないの？」

「……宮永さんのスコアは……3連続プラマイゼロ……まさか、それが故意だと言うんですか？」

「えっ、んなバカな。たまたまつしよ」

「そうだよ」

竹井の言葉を聞いて和がそのスコアの並びが偶然じゃないとでも言うのかと問いかけたが、その問いは京太郎や片岡に否定される。片岡はそのまま続けて、

「麻雀は運の要素が大きいからプロでもトップ率3割いけば強い方——ましてやプラマイゼロなんて普通に勝つことより難しいじえ。それを毎回なんて——」

「そんなの不可能ってかい？　……って、言ってるけど東郷さんはどう思う？」

そこで竹井が俺に話を振ってくる。……ま、プロ云々って話になればこつちにそりや飛んでくるよな。

だからまあ言ってる。分かりやすく、

「……普通は無理だな」

「……で、ですよー」

「ほっ……ほら部長！　元プロが言ってるんだし、やっぱ——」

「だが」
と、俺は一度言葉を区切った。片岡の言葉を遮る形になったのは申し訳ないが、そのまま告げる。

「普通じゃない、圧倒的な強さが……いや、力量差があれば——不可能ではない」

「！」

俺が結論を言い終わると、タイミング良く空に稲光が走った。いや

雷、空気読みすぎだろ。逆に空気読めてねえ。俺がとんでもなく衝撃的なこと言って皆がショック受けたみたいなき感じになつてんじやねえか……いやまあそうなんだろうけど。

「っ……………」

「！ のどちゃん！」

俺がそれを言い終えて数秒後。和が一瞬、噛みしめるような口の動きを見せると、立ち上がって駆けていく。十中八九、宮永を追いかけにいったのだろう。和って地味にプライド高いからな——ベッドの上だと形無しだけど。こんなときでも下ネタを脳内で出せるとかさすが俺ってクズ。

「…………フッフ」

「な、何笑ってるスカ、気持ち悪い」

「キサマ、会長になんてことを……」

「いや、あの子がうちの部に入ってくれないかなって思ってたね。東郷さんの言うように、全国狙えるかもだしね——ですよ？」

「えっ？」

「…………まあ、あくまで可能性だけだな……それよりだ、竹井」

「ん？ 何かしら？」

先程俺が言った言葉を差して改めて問うてくる竹井に、俺は告げる。息を入れて、

「…………サービスだ。本当なら今日で指導は終わりだが……明日も来てやる。予定ももう少しは空いてるしな」

「あら……良かった。ちょうど私も1日延長をお願いしようと思つたの」

「……………なら正式に依頼を——」

「サービスありがとうございまーす♪」

「……………くそっ、もう少し早く言うんだつた……」

竹井の媚びるような営業スマイルに憎たらしいものを感じながら俺は顔をしかめる。

…………だがまあ気になるし、1日くらいならいいだろう。元々この指導も金銭を求めてやってる訳ではないしな。次の学校に行くまでま

だ日数もある。

だから……明日は見極めてみるか。『宮永』……宮永咲という少女が、本物の天才——『魔物』なのか否かを。

そうして俺は携帯を開いてあることを調べる……余談だが、帰ってきた和は傘も差さずに追いかけていったため、ずぶ濡れになっていてエロく、危うく勃起しかけた。

峰の上に咲く花

『——スコアを毎回プラマイゼロに調整？　どういうことですか？』
「そのままの意味だ。簡単に説明すると……そういうことが出来る奴が今指導に来てる学校にいるんだよ」

朝。旅館の部屋で俺は電話越しの相手にそう説明する。

机の上にスピーカー状態で置かれたスマホ。画面に映る名前は戒能良子。俺の従姉妹であり女でもある若手トッププロだ。

良子は俺の言葉を聞いて再度意味を聞いてくる。俺が補足してやると良子は少し間をおいて答えた。

『それは……本当だと思ったらすっげーモンスターですね……』

「だろ？　何でも、麻雀打つと自然とそうなるらしい」

『無意識でそんなことを……？　何があつたらそんな手加減みたいな——』

と、そこまで言つて良子はハツとしたように言葉を止める。俺はパソコンを操作する手を止めてスマホに目を向けた。

「どうした？」

『あ、いえ……何か事情があるかもしれないと……失礼なことを言いかけたのでお口をクローズしました。すみません』

「……いや、別にいいけどな。俺に謝られても……まあ事情があるのは確かみたいだが」

『そうですか。あ、言う必要はないですよ』

良子の気遣いの声を聞きながら俺は溜息をつく。俺の方はそれを昨日、戻ってきた和から聞いた。厳密にはずぶ濡れだったので家まで送り届ける車中のだが。

何でも、子供の頃にお年玉を親に巻き上げられないように覚えたらしいが……単純に勝つのではない辺り、勝ったら怒られるとかそんな感じかと考察出来る。つーか親は何してんだ……要は家族で正月とかにお年玉賭けて麻雀してたってことなんだろうが、普通に酷くて呆れてしまう。やることがセコいというかちやっちいというか……子供にとってお年玉って結構大事なもんだろうし、普通に駄目だろ。俺

はお年玉のことで悩んだことなんてないから知らねえけど、一般的には虐待みたいなもんだ。

俺はそのことを思って、しかし気を取り直して聞くことにする。

「ま、そいつの事情はいいとしてだ。良子はやろうと思えば出来るか？ プラマイゼロ」

『プラマイゼロですか……試したことがないので未知数ですが……やるなら最初に和了って30000点前後に、プラマイゼロにしてから後は聴牌させないように色々呼び出してシャットアウトすればなんとか……』

「出来んのかよ、おい」

さすがプロきつてのオカルト雀士。まあだから連絡してるんだけどな。良子はほんと色々出来るし……支配系だろうが能力無効化だろうが割と何でもありだ。

『でもある程度実力差がある前提ですね。それに、それでも毎回プラマイゼロは私もちよつと……』

「……だよな。普通は無理だ」

『ましてや学生でそれをやってのけるレベルだと……全国でもトップクラスのモンスターですね』

「しかもそいつの名字がまさかの『宮永』なんだが……どう思う？」

『物凄くヘビーな冗談ですね……宮永照のシスターか何かですか？』

「ちようどさっきまでそれを調べてた。だが、そういう情報はどこにもないな。そもそも家族の話がほぼ載ってない」

と、俺はパソコンを操作して最小化状態にしていたブラウザを画面に表示する。そこには先程まで調べていた宮永照の記事などが幾つか開かれているが……言ったように、そういう情報はない。

言わずとしたインターハイチャンピオン。白糸台高校団体戦2連覇の立役者である宮永照。その親族が宮永咲なのではないかと俺は思っていた。

昨日の闘牌に名字。それによく見れば似てるしな。割とありえると思ってる。

生憎とそれを決定づける情報は無かったが、逆にそれが家族である

可能性を残している。

そもそも宮永照はインタビューなどでも家族のことを殆ど喋っていない。学生の有名選手なんて家族の話が出ることも珍しくないのにな。というかインタビューでも聞かれる。聞かれたことがあるから分かるし……もし何か事情があつて話したくないという可能性も大いにありえる。

つい数ヶ月前まで白糸台に通っていて、同じチーム虎姫として面識のある栞にもそれとなく聞いてみたが、どうやら向こうも家族のことは知らないらしく、もつと言うなら他のチームメイトも知らないだろうとのことだ。

別にそのことを弄つてどうこうするつもりもないし、深入りするつもりもないが、姉妹であることくらいは聞いてもいいのか。……難しいところだな。

「……まあとにかく、今日は後で打つてみようと思つてる。さすがに気になるからな」

『私も機会があれば見てみたかったです……』

「まあひよつとしたらインターハイとかで見れるんじゃないか？」

『それに期待しておきましょう。……ところで今は私、風呂上がりで全裸なのですがどう思います？』

「脈絡のない全裸カミングアウトに困惑してるが？」

『興奮しませんか？』

「服着ろバカ。風邪引くぞ」

興奮するというよりか、気の抜ける発言を聞いて溜息が漏れる。

……そうか……今良子は全裸か……いや、これっぽっちも興奮してないけどな。うん。でも風呂上がりならバスタオル1枚とかの方が……。

『……今、想像しました？』

「……してない」

『そうですか。ではそういうことにおきましよう。ではまた』

「……ああ、またな」

スピーカー越しに軽い笑みの声に眉をひそめながら別れを告げる。

くっ、見透かされてやがる……！ このオカルト娘め……。

しかし良子は他の俺の女と比べると割と落ち着いてるといっか、喋ってる感じは昔と全然変わらん……オカルトで惚れさせる前もこんな感じだったし。強いて言うならちよつとだけ俺のことをからかってくる頻度が増えたくらいか。それでも以前と殆ど一緒だけだな。

まあそれは良いとしてだ。そろそろ一度出るか。まだ早朝で学校すら始まる前だが、今日は和が俺に弁当を作ってきてくれるらしいので朝に会うことになっている。昨日、チャットで約束した。……ただまあ、和は精神的にちよつと困惑気味というか、昨日の宮永のプラマイゼロに頭を悩ませてるみたいで色々とそのことで相談——というほどでもないが、ちよつと話をした。おそらく今日もその話は避けられないだろうな。

——そう思いながら車を出して清澄へ。正確には和との待ち合わせ場所に行けば案の定と言うべきか。

「おはようございます、仁さん」

「おはよう和。……おっ、それが弁当か？」

「はい……お、お口に合うか分かりませんが……是非食べてください」
「ん、ありがとな」

俺が和の持つバスケットをお礼と共に受け取ると、和は顔を赤くしながらコクリと頷いた。今日も可愛いな。弁当の中身は多分サンドイッチとかそんなところか？ 態々弁当を作ってきてくれるなんて和も中々に嫁力が高い。ただ俺の女には葉、それと美穂子という嫁力がほぼカンストしてる2人がいるからそっち方面で勝負するのは分が悪そうだ。いや、何人いてもいいんだけどね。謎の勝負を脳内で勃発させてしまった。

「……あの、東郷さん」

「？ どうした？」

「昨日の宮永さんの……プラマイゼロ。東郷さんなら同じこと、出来ますか？」

俺が脳内で思考していると和がそんなことを聞いてくる。その答

えは分かりきってるな。

「無理だな。俺にはそういう力はない」

「そういう力……？　あの、それはどういう意味ですか？」

「和にもそのうち分かる。なんというか……宮永のアレは結構特殊なんだ。プロでも出来る奴はそういうない」

「そう、ですか……プロでも……」

和が真剣な表情で何かを考えている。うん、まあ無理だよな。だって宮永のプラマイゼロ、どう考えてもオカルトだし。単純に上手い奴が技術でどうにかなるものでもない。

和や他の連中にもオカルトのことを告げてもいいんだけど、こういうのって知らない奴に言うとうケが悪いというか、和なんかは特に否定的だし、俺が言っても信じるか？　いやまあ惚れてる俺が言うなら多少は信じるかもしれないが……まあ教えるならタイミングを考える必要がある。

後、オカルトってあんまり広めすぎるのは良くなかったりするからな……オカルト持ちもそういうのは大体隠す。偶然って体を装うもの。だから俺も気を使う。

そしてプロでも出来ないと聞いて何故か気落ちしたっぽい和に俺は言ってる。オカルトのことではないが、

「……でもまあ、太刀打ち出来ないことはない」

「えっ？」

和がぼかんと呆気にとられた表情になる。それに俺は苦笑しながら、

「ま、俺が敵うかはまた別問題だけどな」

そう嘯き、和に別れを告げ、俺は放課後へ向けての準備を進めることにした。

「——待ち人来たる——」

——放課後。

俺は部室でその時が来るのを待ち続けた。

しばらくはパソコンでネット麻雀をする須賀を教えていたが、少しして竹井が宮永を連れて部室に現れる。

「あつ……」

「……………」

その瞬間、和と宮永の目が合い、どちらも僅かに気まずそうな顔をした。

……さてまあ、本当に来た訳だが……竹井の奴、一体どんな手を使ったんだ？

昨日の放課後の時点で、私に任せといて、と言うので任せたのはいが、和から宮永が麻雀はあまり好きじゃないとも聞いていたので来るかどうかは半々だと思っていたんだが……。

まあそれは良いだろう。とりあえず、宮永がもう一度やってきた。

つまりは麻雀を打つということだ。——実際に、竹井が須賀に片岡を呼ぶように言いつけ、染谷と和を加えて4人を集める。

「この4人で2回戦戦って」

「あれ、会長や東郷さんはやらないんですか？」

「ふふ、私が入ったら皆トンじやうでしょ」

「言ってるさかい」

竹井の調子づいた発言に染谷がツツコミを入れる。いやまあどうだろうな。でも確かに初見だと竹井の悪待ちが通用する可能性もあるか。

もつとも、俺の方は——、

「それと、東郷さんはまだ早いわ。後のお楽しみつてことで」

「……あまり持ち上げるなよ」

全く、俺も随分と偉くなったもんだな。オカルト持ち相手に真打ち扱いとは。

だがまあ、俺の見立てでは……この宮永はまだ……。

「今回は東風戦の赤4枚ね」

「やた」

俺が思考する中、竹井が追加のルールを告げる。それを聞いた皆の反応は分かりやすく、片岡は露骨に喜び、和と宮永は驚いた表情を見

せた。

「東風戦の赤4枚……つまり、いつもは南場までやるところを東場まで。しかもドラが8枚で……いつもより運要素が高め……ってことで合ってますか？」

「そうよ。それで25000点の30000点返しね」

「お、犬う！ よく知ってたな！ 褒めてつかわすじえ！」

「お、おう。って、別に褒めてもらう必要ねーつつうの！」

須賀がルールを口に出して確認したことで、片岡といつものやり取りをするが……須賀もちゃんと勉強してるようで何よりだな。

まあ、麻雀を高校から始めて麻雀歴はまだ1か月半。教えれば教えるだけ着実に伸びるため、ある意味、この中で一番伸びしろが期待出来る部員でもある。

県予選個人戦までは一ヶ月弱あるし、男子のレベル。それも特に激戦区という訳でもない長野県であることを考えるとワンチャンなくもないか……？ このままちゃんと練習し続けられればだが。気分は栄冠ナオン。育成シミュレーションゲームである。

まあ須賀のことは今は置いておくとして、早速対局が始まる。和の顔が明らかに昨日と違うというか、目元がキリツとしていて、明らかに本気モードって感じだ。

ただ和の本来の強さを考えると、そうやって気負うよりも自然体で淡々と打った方が良い気がする。

「——ドーン！ 立直一発ツモドラ3、18000！」

とかなんとか考えながら見ていたら、早速片岡が二巡目立直からの親の跳満ツモ。東一局の親だけあっていつもの片岡って感じだ。

「うお、いきなり……」

「相変わらずだな……これが南場まで保てば部内トップで全国でも通用すると思うんだが……」

「優希は東場では稼ぐけど、南場では失速して弱くなるものね」

「天才だけど集中力が持続しないんだじえ！」

「飽きっぽい間違いで……」

「それだ！」

「それだ、じゃねえんだよ」

まったく……自覚があるなら少しは頑張ってほしいところだが……ただ、片岡は自分ではそう言うが、集中力の問題かどうかはまた違う気がする。

というのもこいつ、東風戦を連続でやる場合はスコアが殆ど落ちないため、集中力というより、そういうオカルトじみたものだと考えた方が自然だろう。

東風戦を2回やるのも半荘戦を1回やるのも変わらないからな。区切りがあるだけで、局数は同じだ。

片岡を鍛えるならそのオカルトを改良して（出来るかどうかは分からないが）南場まで保たせるか、さらにオカルトを鍛えて東場で相手を飛ばせるようにするか……。

いや、もしくは片岡は牌効率とか理論はそこまでだし、そこを鍛えて南場を凌ぐ方法でも教えるかだな。

というか東風戦に限定するなら世界も狙える人材な気がするし、東風戦の世代代表とかA代表でメダルを狙える気も――。

「……片岡。タコスのおかわりいるか？」

「じよっ!? 急に優しくなったじえ!」

「どうしたんすか東郷さん……?」

「む……」

片岡と須賀が俺を見て驚き、そして困惑する。いや須賀……お前、こいつは捕まえておいた方がいいぞ。お前、好かれてるみたいだし、将来は専業主夫も夢ではない。

俺も優しくしておけばちよつとはおこぼれが……つていうのは冗談だが、将来が期待出来るのは間違いないと思う。

「……ロン。8300です」

「じよ!!? 今染谷先輩が捨てた牌だじえ!」

「……直撃狙いです」

と、そうこう言ってる内に和が片岡を狙い撃った訳だが……今の、トップだから狙い撃つただけだよな? 俺が片岡に露骨に優しくしたから嫉妬した訳じゃないよな? さつき一瞬、僅かに眉をひそめて

たのはいきなり跳満和了られたからだよな？ うん……まあ嫉妬なら可愛いけどな。

「それだ！ 1000点！」

「なぬっ」

俺が和からの嫉妬を受け止めていると、片岡が染谷に直撃。まあ明らかに逃げ切りを狙ってるが、東風戦だし、今は片岡のトップ。良い判断ではある。

ただ次は宮永の親番。プラマイゼロを狙うならそろそろ和了らなければならぬが……おつ。

「張つとる？」

「はい——ロンです」

「あつ」

「タンピンドラドラ、11600」

「イタタ……」

——おいこら染谷アツ!! 何あつさり振り込んでんだ! この中で一番麻雀歴長いお前なら今の躲けただろお!! 張つてることが分かったならドヤ顔決めてないで用心しろオ! いっちよ前に様子見してんじゃねえぞオ! ……ふう。思わず久保コーチインストールしてしまった。これは池田限定の技で他の奴にやってはいけない……ことはないな。ただ久保さんがこの場にいたらマジで言いそうではある。

「プラマイゼロは29600点から30500点の僅かな範囲だけ」

「えつと……100の位を五捨六入でしたっけ」

「そうだ須賀。だから、宮永は100点差で今は+1。プラマイゼロにするには点数を捨てなきゃならない」

京太郎が頭を掻きながら自信が無さそうに言ったため、それに同意して解説する。

宮永の今の点数は30600点で+1。今のままではプラマイゼロでないため、点棒を自ら失わなければならない。

ならここで宮永は他家に和了らせるだろう。

「ツモ。メンホンツモ中・ドラ1、3000、6000の一本付けじゃ

あ

今度は染谷がツモ。これにより、オーラス。点数は片岡が依然トツプの32600。3位が和の24200。4位が18700点の染谷で、プラマイゼロを狙う宮永は2位の24500点だ。

さて、これで宮永がプラマイゼロを狙うためには40符3翻と80符2翻の5200点か、90符2翻の5800点のみ。

これくらいならオカルトがなくとも絶対に無理とは言い切れないが……。

「とりやつー！」

「……………」

——門前混一聴牌で、片岡からの五筒をスルー。

これで和了れば5200点だが、トツプの片岡からの直取りは逆転トツプになるため見逃したか。

「……………」

と、続いて和が一巡後に赤五筒を捨てたが当然これもスルーか。

「えつと、これは……………」

「…………須賀。1位になると返しがあるだろ」

「え？ ……あつ、そうか！ オカか！」

「まあ、プラマイゼロだけを考えるならどちらも見逃すしかないってことね」

そう。須賀が少し遅めに気づいた麻雀におけるオカという要素が宮永の縛りをキツくしている。

多くで採用される麻雀の25000点持ちの30000点返し。最後の精算が30000点基準で計算されるため、ゲーム開始時では皆5000点低いことになる。

なら4人分の5000点はどこに行くのか——これがオカであり、ゲーム終了時に1位に与えられるのである。

つまり、トツプは+20。1位になればそれだけスコアの上では差が発生する。

プラマイゼロを目指す宮永はこのため片岡から直撃を取ることが出来なかった。和了れば5200点で29700点のプラマイゼロ

だが、トップにはオカで+20されるため、最終的なスコアは+20
になってしまう。

和の赤ドラで和了ればもつと単純に点数が上がって、満貫。800
0点で32500点で2位だが+2になってしまうため和了れない
のだ。

ただこのままではプラマイゼロを達成することは容易に想像出来
る……とは限らない。狙いが分かっていたら邪魔することだって可
能だ。例えば今、和がやるように、

「リーチ」

「あ……」

そう——リーチをすれば場にリーチ棒。つまり1000点増えた
ことになる。つまり、

「これって、場に1000点増えたってことですよね？」

「そう。こうなるとプラマイゼロに出来るのは4100点から500
0点まで。つまり——70符の2翻のみ」

と、俺が考えていたことを京太郎と竹井が口に出す。続けて解説す
るように、

「70符って……」

「部の記録を見る限り、70符なんて千局に一回出るかどうか」

「役満以上のレアですか……」

「それを2翻で作るとなると、もっと難しい」

……ま、そういうことだな。態々俺が口にするともない。

更に言うとなれば、40符3翻の手を今から70符2翻に作り変え
るのは至難の技だ。

ただの70符2翻であれば出ないこともない。さつき竹井は部内
だと千局に一回と言ったが、プロの試合で言うともうちよつと出やす
くはなる。

俺も和了ったことがない訳ではない。やるならカンしたり副露し
たり色々して符をあげないとならないが……ここから間に合わせる
となれば、とりあえず……。

——まさかとは思いが……。

「っ……い」

瞬間、俺の身体に再び悪寒が走る。

脳裏によぎった70符2翻に至るとある道筋と、宮永から感じるこの感じ。

これは……来る。

「——カン」

「えっ……っ？」

宮永がツモった西を手牌の暗刻と合わせて暗槓する。

カンとは同じ牌が4つ集まった時に槓子となり、ドラ表示牌を増やし、王牌と呼ばれる牌山の最後、嶺上牌と呼ばれる牌を取ることが出来る。

ドラを増やすことになる諸刃の剣ではあるが、暗槓の場合は副露に含まれなかったり、槓子を使って作る役もあるため、上級者向けと言えるカンだが……この場合、宮永の目的はドラを増やすことではないだろう。

宮永の手が嶺上牌に伸びる。そう、目的は正にそれ。

現在、宮永は聴牌している。この状態で、嶺上牌が当たり牌であった場合どうなるのか。

その場合、麻雀において最も珍しいといっても過言ではない役がつく。その役の名前は——

「——嶺上開花自摸」

嶺上開花。

暗槓の場合、牌を他家に晒すことにはなるが、副露にはならず、門前は維持される。

門前で1翻。嶺上開花で1翻。符計算は副底で20符。二索の単騎待ちと自摸。それぞれ2符で4符。

更に面子点。ヤオ九牌、暗刻子で8符に暗槓子で……32符。

これで合計64符。符計算は1の位を切り上げるため、これで——
「70符の2翻は、1200、2300」

これで4500点に場のリーチ棒の1000点を合わせて5500点。

締めて、ちょうど30000点でプラマイゼロだ。

この結果に和は呆然とし、他の皆が一斉に湧いた。

当然だろう。この結果は凄まじい。

今彼女達はプロの試合を目の前で見たに等しい感動を憶えている筈だ。

ああ、それは正しい。これを見て感嘆の感情を憶えない方がおかしいのだ。

「咲ちゃんはまたプラマイゼロ……昨日のを入れて4連続……」

ああ、それは十分凄い。

ただ――

「宮永さん、麻雀は勝利を目指すものよ」

「え……」

「次は勝つための麻雀を打ってみなさい！」

「……わ……わかりました」

竹井がそう発破をかける。

宮永がそれに戸惑いながらも頷いたことで、皆が再び驚きの声をあげた。

「な――わかりましたって……」

「うちに確実に勝てるっちゅうんか!!」

「っ……」

片岡と染谷が声をあげる。和は自分のスカートの端を強く掴み、手を震わせていた。

だが、なおも宮永は言う。

「勝つ……って、トップってことですよ。でも――」

困ったような表情で、

「プラマイゼロじゃ、トップにはならないですよ?」

「――」

その発言に皆がガクツと氣勢を削がれる。

天然とも言える発言だが、それに竹井は考え込み、

「……じゃあ、自分は1000点。他の3人は33000点もっている……そう思っちゃって見たら?」

「はあ……それをプライマイゼロにするように打てば『勝てる』んですね」

そう提案した。

すると宮永は少し悩みながらも、視線を鋭くし、

「大変そうだ……」

と、呟いた。

……なるほど。あくまでプライマイゼロを守るか。

その後、再び同じ面子での対局が始まるが……俺は複雑な気持ちだった。

「——ダブリー、一発ツモ。2000、4000」

「そそそーゆーのうちのお株なんですけど!」

「積み込みか……ツ!」

「自動卓です……というか、東郷さんの時の方がヤバかったじゃないですか」

京太郎がそんなことを口にするも、俺の思考はそちらには向かない。

「ツモ。4000オールです」

和が宮永に負けまいと親番で連荘するが、あくまでも俺は宮永のその闘牌のことを考えていた。

「——今日はコレ、和了つてもいいんですよね」

カン、と宮永がオーラスで再び西カンをする。

それで引いた牌で和了るのは、

「ツモ——四暗刻」

「や、役満?!」

「しかも……また嶺上開花で……」

京太郎と竹井が言う通り、卓では宮永の役満、それも嶺上開花での和了りが出来上がっていた。

「私、役満和了ったの初めてだ……いつもはできても崩してたよ……」

宮永がそれで身震いをしている。

その結果に皆が驚き、俺は顔が強張っていく。

「でも勝つって難しいですね。またプライマイゼロになっちゃった」

「はい？ 何言ってますか咲ちゃんは……」

「だって今回も原村さんのひとり勝ちじゃないですか」

「え……？」

……ああ、そうだよな。

「私は1000点スタートだから2位ですよ？」

宮永の言葉や周囲とのやり取りが頭の中で反復し、自分の中で像を作り上げる。

「いやいや宮永さん。1000点と思えて私は言ったけど、実際は全員25000点からよ？ フツーに」

「え……じゃあ……」

「実際の点数はこんな感じだじえ」

「あなたの勝ちよ」

……1つ分かったことがある。

宮永のプラマイゼロは、本人の調整次第でしかなく、条件付きのオカルトではないということ。

本人は無意識にプラマイゼロを望んでやっているだけであり、やろうと思えばもつと強力な支配を行うことが出来る。

でなければ、今のような仮定の話で大幅にプラスになることはない。

もしそうでないなら、実際の点数は25000点なのだから5000点前後の収支でおさまる筈なのだ。

ということは宮永は――

「咲にも取り柄があつたんだな」

「しかもまたプラマイゼロにしようとしたなんて……」

「すごいじよ咲ちゃん！」

「そう、よくやったぞ」

「勝った……私が――」

……こいつも――。

「私が、勝った……！」

宮永が涙ぐみながら喜ぶ。

――だが俺は椅子から立ち上がり、卓に向かって近づいた。

「！…………東郷さん…………？」

和が俺の名を呼んだが、そちらに反応することはなく、俺は後ろから声を掛ける。

「…………勝利を喜んでいるところ、悪いが…………」

「えっ…………あ——」

宮永の眼が俺を捉える。

その瞬間、宮永の中に湧いた怯えを感じ取ったが、俺は構わず席に着いた。

「——次は俺と打ってもらおうか」

——悔しさを身を震わせ、今にも耐えられずその場から逃げ出してしまいそうなその時。

私の前を横切ったのは私の愛しい人でした。

「あ、あの…………あなたは…………？」

「東郷さん。元プロ雀士よ。今は期間限定で部員の指導をしてもらってるの」

宮永さんが彼の顔を捉え、少し怯えた様子で問いかける。東郷さんが答えるより先に部長が彼の説明をした。

「元プロ…………って、元プロの人と私が打つんですか…………!？」

「…………嫌なのか？」

「い、いえ、そうじゃなくて…………私なんかが、勝てる訳が…………」

宮永さんは手を顔の前で振り、いやいやと遠慮をする。

ただ彼は…………仁さんは、いつもよりも鋭い表情で言った。

「やってみなければ分からないだろう。ほら、後2人入れ」

「ん、そいじゃあ…………」

「のどちゃん、どうするじえ？」

染谷先輩がそのまま。そしてゆーきが私に向かって声を掛ける。

私は少し悩んだが、やはりそちらの方が気になり、

「…………ゆーきに任せます」

「ああ、誰でもいい」

「それじゃあもう一回行くじえー!」

仁さんとゆーきがそう言う。

私は仁さんのその様子が気になったため、対局を遠慮した。

「……宮永はさつきみたいに勝ちに来てもいいし、プラマイゼロを目指してもいいぞ」

「う……わ、わかりました」

「あら、これは面白い勝負になりそうね」

部長が呑気にそう言うが、やはり気になる。いや、気にならないのだろうか。

どういう訳か、いつもより、彼の雰囲気違って見える。

これはなんだろう。普段自分達と打つ時とは違う。

これがプロとしての顔なのだろうか。

……かつこいいです。

私の顔が熱く彼の知らない一面を発見出来て嬉しく思う。いつもの優しく頼りがいのある男の顔とはまた違う。真剣勝負に臨む好きな人の顔は身体が熱くなってしまう。

お腹の下の方がぐるぐると熱を帯びるのを感じる。今日は朝にキスとハグをしたくらいで何もしていないからか、より疼いてしまう。

「俺の親番からだな……」

対局が始まり、仁さんと宮永さんの初対局が始まる。

どちらの方が強いのか。まだ分からないが……私は彼のすぐ横につき、内心で彼を応援する。

「——割きて……——に至る……」

「……?」

その時、彼が小声で、それこそ隣にいる私に辛うじて聞こえる程度の声で何かを呟いた。

だがよく聞き取れなかった。彼が真剣であるため、聞き返すことも出来ない。おそらく独り言だろうとは思うけども。

しかしその次に起きたことは私だけでなく、その場にいる全員を驚かせた。

「——立直」

「!?」

「え……」

一巡目。彼が捨牌を横に向け、リーチ棒を場に出す。

それは先程宮永さんがやったようなダブル立直。

まさか2試合連続でダブル立直が起きるとは。凄い偶然だ。

しかもだ。その次に起きたのは、やはり、

「——ツモ」

ツモ宣言。それとともに手牌が晒される。

だがそれは先程よりも更に、

「ダブル立直一発ツモ。三暗刻、ダブ東、ドラ4——12000オール」

「っ……!」

「い、いきなりじゃのお……」

「だからそれこっちのお株だじえー!」

皆が驚きを声にする。隣で見ていた私もきつととても驚いた表情を見せていただろう。

「と、東郷さんも負けてねえ……」

「さすが元プロ……って言ってるのかしら?」

須賀くんや部長もそんな風に言う。なんだろう。彼が褒められると私まで嬉しくなってしまう。

恋人が褒められると誇らしいようなこそばゆいような……それと、こっちまで身体が熱くなる。

「……一本場だ」

なんにせよこれで仁さんが圧倒的有利。

そのまま連荘して是非勝ってほしいと思うが——

「——立直」

「……は……?」

「なっ——!?!」

だがその矢先。

再び彼が一巡目に立直。連続でダブル立直。

……今度は私も頭が一瞬真っ白になった。

2連続ダブルリーチなど、どれくらいの確率で起こるものなのだろう。考えてみると凄まじい偶然だが……仁さんならそれでも格好いい。いつもの手堅い隙のない麻雀も好きだが、これはこれで良いものだ。

そして……まさかと思つた時、再びそれは起こる。

「——ツモ」

「まただじえー!?!」

再びのツモ宣言。ゆーきが卒倒しそうな声をあげる中、仁さんは再び牌を倒し、

「ダブル立直一発ツモ。混一色一気通貫、役牌、ドラ2の一本場は——
12100オール」

「つ……そんな……」

しかもまたしても三倍満。一本場で12100オール。

これで仁さん以外の3人の点数は僅か900。立直すらかけることが出来ない。

「……二本場だ」

……なんでしよう。

彼のその雰囲気は私には魅力的に映る。しかしだ。それとはまた別に、こうも思う。

オカルトや非科学的なものを信じない私だが、その時は珍しくそう思ってしまった。

今の彼の、その闘牌はかっこいい。かっこいいが——

「——立直」

「——」

——いつもと……明らかに違うのだと。

「——ツモ。ダブル立直一発、三暗刻、小三元、役牌2、ドラ2……:1
2200オール」

「ちよつとちよつと！ 本気出しすぎよ！ そんなんやられたら誰も勝てないじゃない！」

「あ……？」

——俺はその時、ようやく自分に掛けられた声に気づいた。

「東郷さん、ヤバいですよそれ!？」

「3連続三倍満なんて勝ち目ないじよ!」

「やっぱり積み込みか!？」

「しかも3連続ダブル立直で一発ツモ……東郷さん、明日死んじやうんじやない?」

「仁さん……♡」

「あれ、のどちゃん?」

気がつけば、俺の周りを清澄高校の部員達を取り囲んでいた。

そこで俺はようやく自分の状況にも気づく。

「……今のは……」

「う、うう……」

あ……宮永……。

そうだ。俺は今、三倍満を3回ツモって宮永を……。

宮永が涙目になって震えている。泣いてはいないだけマシだが、そう言っではいられない。

「わ、悪い……今のは……その、運が良すぎたな……ただの偶然だから気にするな」

「……は……はい……」

「東郷さんの言う通りよ、宮永さん。あまり気にしちや駄目。これでも東郷さん、元プロだしね。本来は負けるのが普通よ」

「まあ、4連続プライマイゼロがあればこういう時もあるということじゃけえ……」

「もう今日はめちやくちやだじえ。のどちゃんも様子が変だし……」

「えっ……? あ、その、別におかしいことなんてないですっ! ちよつとぼーつとしてただけで……」

「まあさすがの咲もプロ相手はやっぱ厳しいかー」

俺の言葉を皆が後押ししてくれる。そりやそうだろう。今みたいなのは偶然としか思えないからな。

ただ宮永はどう思うか……。

「いえ……あの、気にしないでください……ちよつと……久し振りにこれだけ凹まされてショックだっただけですから……」

「……そうか」

これ以上謝るのもおかしいだろうと俺は頷くだけに留める。罪悪感は消えてくれなかったものの、宮永はそこまで落ち込んではいないようだ。

「……ま、これで勝つ喜びも負ける悔しさも分かったってことで宮永さん」

「は、はい？」

「約束の本はここにあるからね。対局の時の待ち時間の読書本棚。麻雀部に入れば読み放題」

「あ……」

竹井が部室の隅にある読書本棚の前まで行き、指し示しながら言う。……なるほど。一体どうやって宮永を連れてきたのか気になつてはいたが、本で釣ったのか。やっぱり本が好きなんだな……あの姉と同じで。

しかし竹井はこれで宮永を麻雀部に入れようとしてる訳だが……さて、宮永の返答は……？

「……少し、考えさせてください」

「……そう。じゃあ返事はまた」

「はい。一晩考えてきます。今日のところはこれで……」

と、宮永は迷った様子でそう返答する。竹井もしつこく勧誘はしない。

……これで部に入らなかつたら俺の所為でもあるか……？

いやまあ俺のことがなくてももともと麻雀がそれほど好きじゃないらしいからアレだが。むしろ考えてくれるだけ気持ちがいいとも言える。

だが今日のところは宮永は帰るようで、俺はそれを見送るしか出来なかつたのだが……、

「……部長、東郷さん。私、ちよつと出てきます」

「え？ あ、おい……」

「……ふふくん？ まあいいわ。それじゃあ私らはその間に練習しましょうか。東郷さんの指導も今日が最後だしね」

「……すぐ戻ります」

と、何故か和は宮永を追いかけられるように——いや、実際追いかけたのか。何か言いたいことでもあるのだろうか。実際宮永相手にプラマイゼロとかされて凄く悔いそうであつたしな。

……俺も反省だな。

気分的にはできれば今直ぐ帰りたいところだが、仕事もある。大人は難儀なものだ。

——その後、何を話してきたかは知らないが、用事を終えたらしい和が戻ってくると彼女も加えて対局を行い、俺の清澄高校での指導は終わった。

そして翌日……俺は宮永が麻雀部に入部することになったと竹井と和からの連絡で知り、人知れず安堵の息を漏らすのだった。

——東郷仁が清澄を去った翌日。

「それにしても、昨日の東郷さんはすごかったわね。あれがプロとしての本気ってやつかしら」

「はい……私、全然敵いませんでした」

「そうですね……でも、東郷さんって、普段は防御寄りの打ち手ですし、昨日の打ち方はびっくりしました。いえ、あれも良いと思いますけどね。東郷さんはああいうのも似合うと思います」

「のどちゃん、いつもより饒舌だじえ」

清澄高校麻雀部の部員達が昨日の東郷のことを話題にしていた。

だが、和がその感想を口にする、竹井が意味深に笑みを浮かべ、

「——あら和。知らないの？」

「？ 知らないって何がですか？」

「東郷さんのプロ時代の有名な試合とか色々。ほら、タイトル戦に挑戦した時の東郷さんとか……確か、あんな感じだったわよ？」

「……え……？」

その時、和は初めて東郷のことをネットで検索していない自分に気づいて慌ててそれを確認し——しばらく夜のお供にした。

見える人

人にとって必要不可欠なモノの1つに、コミュニケーションというものがある。

原語は日本語ではないが、もはや日本語として受け入れられている言葉の1つで、一応日本語に翻訳するなら交流や通信、意思疎通といった意味になる。

だがこんな説明をしなくても誰しもが分かるだろう。なにせコミュニケーションという言葉は現代社会で生きる自分達が、子供の頃からずっと言われ続けている言葉だからだ。

別に現代人でなくとも人であるなら、もつと言うなら動物であるならコミュニケーションというものなくして生きることが成り立たないが、特にヒトの現代での生活は人と人のコミュニケーションが盛んかつ重視されている。

幼稚園、小学校、中学校、高校、大学——物心がつく前からおおよそ殆どの人間が行くことになるそのルールも、対人関係の練習の効果が見込めるんじゃないかということは、誰しも思うことであると思う。

実際、誰かと関わらざるを得ない狭いコミュニティの中では、否が応でもコミュニケーション能力——いわゆるコミュ力が鍛えられる。

実際、幼稚園よりは小学校。小学校より中学校。中学校よりは高校。高校よりは大学。大学より社会人と、確実にコミュ力は誰しも上がっている筈だ。

子供の頃であれば些細なことで喧嘩したり、行き違いがあったりしたが、大人になればなるほどその対処法、適切な距離の取り方や、無駄な軋轢を生まないためのコミュ力が鍛えられ、コミュ力によって解決していったり成長していったりするものである。

まあ中には小学校とか中学校くらいの方が対人関係が上手だったとか、友達が多かったとか、そういうこともあるが……悲しくなるのでその話題は避けた方が懸命だ。傷を抉ることになる。

しかしまあ、良くも悪くも大人になればコミュ力は一定水準以上は

持つものだ。

少なくとも、俺はそうだ。俺は子供の頃に比べて確実にコミュ力が上がっているし、その重要性も理解している。子供の頃の俺は酷かったからな……うん。あまり思い出したくない過去ではある。

俺はコミュ力の重要性を大人になるに連れて知った。子供の頃は下らないと切り捨てていたものだが、社会に出ればそれは間違いなのだと分かる。

社会ではコミュ力がコミュ力がと、狂ったようにコミュ力を求められるからな。いや、俺はまあいいんだが、企業、会社に勤める方々はさぞ苦労していることだろう。

そもそもコミュ力と一口に言うが、その方法は様々だし……後、生まれつきの容姿や雰囲気なんかも関係してくる気もする。

抽象的かつ曖昧、客観性のない主張かもしれないが……人間の第一印象は見た目で決まると言われるように、生まれ持った容姿などでコミュニケーションを取るかどうかの是非や、どれくらい手を抜いていかなどを見られたりもする。

きつと誰しも経験があることだろう。

ぞんざいな扱いを受ける。いや、そもそも相手にしなくていいものとされ無視される。いや、更に下に見られ、虐げられたりすることだってある。

誰しも見た目が好ましい異性や、見た目が怖い者をぞんざいに扱う人などいない。黒人のマッチョを夜道で襲う日本人がいないように、人は見た目で対応を変えることもある。

それが好ましいものであれば良いが、多くの人はそれによる被害を受けていることだろう。いや、誰しもが受けていると言っても過言ではないし、もつと言うなら誰しもが被害を与える側にもなっているかもしれない。

昨今のネットやSNSを通じたコミュニケーションなどを見ればよく分かるが、人にマウントを取ってる人の多いこと多いこと。無意識が悪気がないのかもしれないが、人つてのは自分より下の人間を見て安心するものだからな。別にそれが悪いとは言わないが。という

か、その善悪はどうでもいい。程度の差はあれ誰だって、俺だってやってることだ。

大事なのは、人によって対応を変えるのは仕方ないとはいえ、それがマイナス方向の変え方でないことを心がけるのが良いだろう。少なくとも、相手側からマイナスが発信されなければ。

……まあなんだ。結局何が言いたいのかと言うと――。

「……………」

「ねえ、あの人……………」

「1人とかチョーウケル」

……うん。要は、見た目とか性別とか1人で来てるからって差別しないでほしいってことだ。

「……………来るんじゃないかな……………」

思わず人に聞こえない程度の独り言を呟く。周囲には人も多し、変な行動を取ることは出来ないしな。

というのも俺が今いるのは、長野県にあるとある有名タピオカ店。そう、あのタピオカ店だ。

あの女子ウケが良いすぎる食品。とりあえずタピっとく？ とか訳の分からないことを言いながらつい並んじやうあのタピオカである。

正直、たかがデンペンにそこまで執着する奴の気がしれないが……いやまあ好みは人それぞれだけだな。個人的にはそこまでじゃないというだけで。うん。口に出したり発信しただけ俺は大人だ。

それに実際店にやって来ている今の俺に言えることではない。……そして、周囲からやたら見られたりヒソヒソとこつちを見てなんとも言えないことを言っていたりするのが面倒だ。

まあ女子ウケが良いとはいえ、今時男でもタピオカの1つや2つは嗜むだろう。だからそこまで奇異の目で見られることはないと思っただが……如何せん、ここは例外だった。

店の外にまで並ぶ行列。ここに並んでる間にスマホで検索して分かったのだが、ここは長野市内じゃ知らぬ人がいないほどの有名店で、なおかつカップル向けのタピオカミルクティーのお店らしいのだ。

まあカップル向けとは言っているが、女の子の友達同士で来る奴が大勢だけだな。……いや、でも同性愛くらい今時珍しくもないし、ひよつとしたらカップルの可能性はある。俺が分からないだけで。

とにかく、俺は失敗したのだ。暇潰しがてら、ちよつと並んでみようと思っただけの間違いだった。俺は並ぶのはそこまで苦じゃないとはいえ、軽率な判断だった。それは並んでからすぐに気がついた。

並んでる人はその殆どが女子で、それ以外でいる男は全員女子が隣にいる。つまり、カップルである。男1人客は俺だけ。

「ひそひそ……」

「チョーウケル」

そう、そのため俺は針のむしろ状態なのである。お店から出てきたカップルが俺の方を見て何やら話している。何がウケるだ。ウケねえよ死ぬ。

ただほんとまいったものだ。なんだこの状態は。

まるでラーメン食べようと男だらけの列に並んでたら、いきなりタピオカ店の行列に異世界転生した感じになっている。異世界でも転生でもないけど。タピオカ店は異世界だった……？

「しかもそこまでだな……っーか飽きた……」

しかも更に不幸なことに、味は普通だった。いやうん……タピオカだ。タピオカミルクティーだ……って感じ。

前に飲んだ時ははやりさんと一緒に行って、しかもそれが結構美味かったのちよつと期待したのだが、久し振りに飲むと普通だ。いや、不味くはないが、途中で飽きる。一個丸々飲むことは不可能だ。

おすすめであり定番セットであるカップルセットを頼んだのだが、もう一個はとてじやないが飲む気になれない。何でも、異なる味のものカップルで飲み比べするように2つセットで売ってるらしいが……単品で頼むべきだったな。勿体ないことをした。どうせなら俺の女の誰かにあげたいところだが、生憎と和も美穂子も長野県では南の方に住んでおり、俺が今いる長野市内からはちよつと遠い。近ければデートと行きたいところだけだな、それはちよつと厳しい。

全く、土曜日の朝から俺は何をしてるんだと自分で自分に呆れてし

まう。そんな腹減ってないからって適当なモンで腹を満たそうとしたのが間違いだったな……。

ただまあ、やっちゃったものはしょうがない。残ったタピオカはこれから行く学校への差し入れにしてやろう。男子部だったらお察しだが、多分女子だろう、多分……いや、女子であってくれ、マジで。そうして俺はさっさとタピオカ店を後にしよう——って、お？

「……………はあ」

「(こ)こ、(こ)こー！ (こ)こ、前から行きたかったんだよねー」

「わかる！ 早く並ぼう！」

……え、えー……さすがにマナー違反過ぎだろ……いや、マナーとかそれ以前の問題だよな、横入りは……。

俺は車に戻ろうと行列の最後尾の方へ歩いて行こうとしたのだが、途中で列に横入りする連中を見かけてしまう。いやマジ……あんなさも当然のように横入りする奴、初めてみたぞ。

並ぼうとしていた黒髪の女の子は……って、結構可愛いな。いや、結構じゃない。大分可愛い子だ。黒髪のボブカットで身長は和と同じくらい。華奢だがおっぱいがでかい。良いことだ。……いやまあそれは置いといて、ともかくその子は並ぼうとしていたところを女子二人組に横入りされて小さく嘆息している。それほど怒っている訳でもなさそうだが……ただちよつと立ち止まってしまった。

その行動はなんとなく分かる。あるあるというか、ちよつと嫌なことがあった時に急に冷める時ってあるよな。店とかで。もういいわ、行くのやめよってなる感じの。わかるわかる。怒るまでもなかったりするんだが、自分の中でもよくなったりするんだよな。

俺は見知らぬ女の子に共感を得てしまい、そこから立ち去ろうかたちよつと悩む。……いやまあ立ち去ってもいいんだろうが、今のを目の当たりにして無視して立ち去るよりは、一声掛けた方が良いことではある。面倒事ではあるし、普段なら絶対にやらないが、まあちよつと気分的に注意してやろう。

「——なあ、横入りだぞ」

「えっ?」

「え？ 急になんですか？」

「……………え？」

俺が行列の最後尾。横入りされてしまったおっぱいの大きい女の子と女子2人に近づいて声を掛ける。すると全員、え、何？ みたいな反応。特に横入りされてしまった子が一番驚きが大きい気がするのが地味に傷つくが、もうここまでできたなら引けない。俺は端的に指摘してやる。

「その子が並んでただろ。そういうのは良くない」

「え？ 並んでたって……………は？」

「何言ってるの？」

うわ……………しらばつくれるのかよ。最悪だな。男ならちよつと強気になってしまいそうだが、相手も女子だし、こっちは社会的立場もあるからあんまり強く言えない。あくまでもプロ……………元プロとして穏便に注意しなければならぬ。

「……………いや、並んでる子がいるのに横入りは良くない。なあ、そうだろう？」

「……………え、あ、は、はい……………」

俺が隣の女の子に声を掛けてやると、何故かその女の子はかなり動揺して目をパチクリとさせていた。混乱してるみたいだが、何故混乱するのか。まあいいけどな。

問題はこの女子2人だ。さて、どうやって説き伏せようかと頭を悩ませて……………何故かその2人も俺が差した女子の方を見て、目を丸くしている。え、何だ？

「え、あ……………ごめんなきいつ。全然気が付かなくて……………」

「ちよ、ちよつとボーツとしてたのかも……………その、横入りしてごめんなさい……………」

「……………べ、別にいいすけど……………その、こういうの慣れてますし……………
……………なんだこのコミュ障というか、ぎこちない会話は……………え、
とい
うか本当に気づいてなかったのか？」

ナチュラルに横入りしたのかと思ったが、2人の反応を見る限り、本当に気づいてなかったし、申し訳ないという気持ちが見て取れる

し、どうやらマジのようだ。

逆に、横入りされた女の子の方も困惑気味なのが気になるが……まあ良いだろう。巨乳美少女との接点は惜しいが、見知らぬ子とその場で知り合いになって仲良くなれるほど俺は器用でもないし、勇者でもない。そういうのはデフォでモテモテの奴がやることだ。

「……解決したか。それじゃ、俺はこれで」

ということできらばだ巨乳ちゃん——と、俺は両手にタピオカを持ったままその場を後にする。駐車場へ向かい、

「ま——待ってくださいっす!」

「えっ?」

と、ちよつと歩いて駐車場に足を踏み入れたところで後ろから呼び止められた。つて、さっきの巨乳ちゃんか。どうしたんだそんな追いかけてきて……?

「……あー、何か用かな?」

「——なんで私のことが見えるっすか!」

「……は?」

巨乳ちゃんは俺に近づいてくるなりそう勢いよく質問してくる。意味が分からんけども。思わず、は? つて顔になる。そりやなるだろ。誰だつてなる。

だが一応落ち着いて、外向き用の対応で、

「……なんだ、君は幽霊か何かなのかな?」

「幽霊ではないけど似たようなものっす!」

「似たようなもの……?」

冗談っぽく言ってみたが、まさかの返答に頭に疑問符が浮かんでしまう。また意味がわからん。なんだ、電波な子なのかな?

しかし冗談を言ってる風には見えない。……それが余計に電波っぽくもあるが……とにかく巨乳ちゃんの話を聞く。

「私、存在感めちやくちや薄いんすけど……どうっすか!」

「……いや、そんな迫るように聞かれてもな……」

「あ、それもそうっすね。それじゃあ——」

と、その女の子はそこで黙る。眼の前で何もせずただ突っ立って

いる——すると、だ。

「……あ？ 確かに、ちよつと影が……いや、よく感じてみたら、確かに気配がめちやくちや薄いな……？」

「そうっすよね！ そうなんすよ！」

「つと、大声を出すとまた元に……いや、それでもちよつと気配が……」

その巨乳ちゃんが言うように、確かに気配が薄くなった。それも、異常な程に。

眼の前にいるのに、まるでいないようにも感じられる。それこそ、普通なら気づくことすら出来ない。眼の前についても誰もいないと認識してしまいかねないほどの存在感の無さだ。

これなら確かに、先程の2人が気づけなかったのも納得だし、幽霊みたいなものって言うのも領けるが……こいつは一体……？

「これが『ステルスモモ』の力っすよ！」

「……ステルスモモ？」

「……も、モモっていうのはあだ名っす！」

俺が真顔で聞き返すと微妙に恥ずかしかったのか誤魔化すように説明する。肝心のその力の説明はしてないが……まあ、そこまで聞けば俺には何となく分かる。俺は領き、

「……なるほどな。生まれつき、そういう力……いや、そういう特性って訳か」

「え、分かるんすか？」

「まあ……そういう特殊な力とは結構関わるが多くてな」

「へえ、そうなんすか……だからお兄さんは私のことも見えるんすか？」

「……そんなところだ」

正確に言うなら、特殊な力と関わってるから分かる訳じゃないけどな……ただこれは言う必要がないってだけで。

「……そうっすか……そんな人もいるんすね……」

そしてそのモモという女の子は俺が見えるということに何か思うところがあるのか、下を見て、呟くようにそう口にする。

……まあ生まれつきそうだとしたら思うところは色々あるだろう。それこそ、容易に想像出来ることもあれば、他人が想像する以上の苦労があったはずだ。

しかし、こうやって推測するのも少し失礼だが、本人は割り切れているようなので良かったとも言える。それで絶望などしてしまえばもっと酷いことになっていた可能性もあるからな。

だからそこまで悲観することもない。ま、今日はちよつと良いことがあったというオチで終われば――

「……お兄さん、ちよつと頼みがあるんですけど……」

「？　なんだ？」

と、息を入れてこちらを見上げるモモ。頼み？　いや別にいいけど、もうちよつとでこれから指導する学校に行かなければならないんだけどな。

しかしまあ、少しくらいならいいだろうと俺はモモの声を待つ。何を言うのだろう。タピオカくれ、とか。それなら全然構わない。むしろあげたい。適当な理由をつけてあげようかと思っていると、

「私と……と、友達になってほしいっす！」

「……友達？」

「そうっす！　私、こんなだから全然友達がいなすす！」

……そ、そうか……いや、そんな明るく言われると反応に困るな……予想外の頼みだ。それに、

「……そうか。お前も苦労したんだな……」

「あれ？　その反応……あつ。もしかして、お兄さんもぼっちっすか？」

友達がいないことを内心で憐れんでいると予想外のカウンターを食らう。くつ、失礼な……だが俺はぼっちではない。それを何とか口にする。

「……いやいや、友達くらいいるぞ」

「何人っすか？」

さらなる追撃。い、いやいや、友達くらいいるし……ぼ、ボブとかハギヨシとかボブとか……。

「……………2人」

「……………ほぼぼちつすね……………」

うるさい。友達なんていなくとも生きていける。

それに俺には友達こそ少ないが、仲のいい相手はそれなりにいるのだ。関係性が友達っていうか、恋人とか後輩とか先輩とか教え子とかそういうのが多いだけでぼちちという訳ではない。断じて。

「それじゃあ友達ということでもいいっすか?」

「……………いや、なんだ、その……………友達って言われても俺、この辺りに住んでる訳じゃないからな。それにお前、多分だが学生だろ?」

「あ、そうなんですか。それじゃあメル友的な感じでどうっすか?」

いや、メル友って古いな。今日日聞かない言葉だ。

っーかそれでもどうなんだ……………? 学生と友人か……………いや、学生と肉体関係にある俺が何を躊躇してるんだって感じだけだな。

それに有珠山や龍門渕、今まで行った学校の生徒ともチャットで普通にやり取りしてるし、特に問題ないと言えばないな。それなら……………、

「……………ま、いいけどな。それじゃあ連絡先でも交換するか」

「お願いするっす」

と、あつさりとした承してお互いに携帯を取り出す。なんか変な感じだな……………まあ気にしない方がいいか。

「お兄さん、東郷さんって言うんすね」

「ああ。まあ、それじゃあ暇な時にでも連絡してくれ。これから俺は仕事なんぞな」

「あ、はい。私もこれから部活が——って、もうこんな時間っすか。急がないとヤバいっす!」

ほー、モモはどうやら部活に入ってるらしい。部活か……………なんだろう。影の薄さを活かしてバスケットか? なんかミスディレクションとか使えそうだな。

それはともかく、遅れそうか……………車で送って行ってやろうかと提案したくもなるが、出会って直ぐに車に乗せるのもなんだかな……………それに、俺の方もぼちぼち向かわないとならないし。ここは見送るか。

「それじゃあな」

「はい。お兄さん、また今度つす」

と、お互いに別れの挨拶を告げると、モモは小走りでその場から立ち去っていく。

……確かに、離れるに連れて気配が薄くなってるような……なるほど。そういう体質か。

十中八九オカルトだろうが、なんとも言えないオカルトだ。麻雀とは関係なく作用するタイプで生活にも影響を及ぼしている。

何気に大変そうだが、まあなんだ。個人的にちよつと同情してしまうし、何かあつたら相談に乗るなりしてやろう。一応友人つてことになつたしな。ちよつと変わってるが……。

「さて、俺の方も向かうか……」

モモと別れたところで俺はタピオカを持って車へ乗車し、目的地に向かつて車を走らせるのだった。

「ここか……」

俺は眼の前にある建物、ここ数ヶ月で割と慣れた類の施設を見て咳く。

長野での指導もここ——鶴賀高校で4校目となる訳だが……やはり大人が学校に入るのは若干緊張もするし、懐かしくもあるような独特な感じを受けてしまう。

特に特徴もない、と言つたら失礼だが、極めて普通の学校だからだろうか。風越や龍門渕とは違い、普通の高等学校。私立ではあるが特に特徴も無さそうな普通の学校だ。

特に麻雀が強い訳でもないっぽい学校への来訪は、麻雀を仕事にしていた俺とは縁がないためそう感じるのかもしれない。

それこそ、強豪校へ来訪した際は慣れ親しんだ空気感というものを感じた気がしたが……ここはそういう感じでもないしな。

「えつと……部室はこつちか……」

とりあえず部室に向かおうと事務室で案内を受けて部室へと向か

う。

土曜日ということもあって生徒の数は少ない。外であれば運動部が練習している姿を見られるが、室内は部活動をしていたとしても部屋に籠もっているため廊下に出ている生徒が少ないのは道理である。

ただ夏の大会……それこそ、麻雀以外の部活でも大会は近いだろうし、土日でも練習している部活は多いため、人の気配はそれなりに感じるけどな。道中、部屋の中から声が聞こえたりとかもあるし。ほんと学生生活って感じがして良いと思う。……おっさんみたいな感想だな。やめとくか。

そろそろ暑くなってきたよな、と別の事を頭に思い浮かべながら部屋へ真っ直ぐに向かっていると、途中、向かい側から生徒が小走りで行ってきて、

「——つと、遅れてしまったか……」

「あ?」

その生徒が俺を見るなり立ち止まり、頭を抱えて独り言を口にする。なんだ? もしかして……、

「申し訳ありません。私は依頼させて頂いた麻雀部の加治木ゆみです。そちらは東郷さんで?」

「——ああ、どうも。態々迎えに来たのか」

挨拶をされて得心する。メールで俺に依頼をしてきた加治木という相手は眼の前の女子であるらしい。

丁重に礼をしてくる女子にしては身長が高めで高校生にしては大いにつぼい加治木を見て俺も応対する。髪の色とか目の色が俺とか良子に似てるよな。ちよつと親近感だ。それに雰囲気的に付き合いやすそうでもある。

「本当は駐車場か事務室で待っている予定でしたが、所要で少し……ここからは案内します」

「ああ、頼む」

「ではこちらに」

と言って先導する加治木についていく。うん、何も問題はない。無さすぎて逆に不安になるレベルだ。

この加治木という女生徒……なんというか、話していると全然高校生っぽくないな……。

ほんと大人のキャリアウーマンと話をしてるみたいだ。学生相手なのに一瞬普段の話し方じゃなくて敬語を使っつてしまいうになる。話も簡潔で無駄はないし年上への礼儀も弁えてるし、めちやくちやしつかりしてるな……。

何十名と部員がいる強豪校の部長でもここまでしつかりしている奴はそういない。少し遊びがないようにも見えるが、そういう気遣いまで求めるのは酷だろう。こういう時は大人の方から話を振るものだ。

「……加治木、だったか。とりあえず事前に聞いていた通り、1週間部員の指導に当たってほしいとのことだが……」

「はい。私も含めて、東郷さんにはうちの部を鍛えて頂きたい」

「……鍛えるのは指導する以上当然だが、どの程度が良いんだ？」

「……具体的な目標設定ということでしたら、大会で勝ち抜けるくらいに……と言うことで如何でしょうか」

なるほど。大会を勝ち抜けるくらいに、か。結構本気な上、ガチめを……ご所望のようだが、

「……それにはまず、部員の程度を見ないと。ただ長野県内で大会で勝ち抜ける……というのは中々厳しいってのは分かってるか？」

「……無論です。昨年の優勝校である龍門渕に、龍門渕に負けたとはいえ県内屈指の強豪である風越女子。その他にも我々より実績がある学校は無数にある……」

「ほう……よく理解しているみたいだな？」

「勿論。大会で出来る限り勝ち抜くと目標を設定した以上、対戦相手の情報収集は……いや、出来ることは何でもしておきたいと……そう思っているだけですよ」

「……俺へ依頼したのもその一環ということか」

「ええ。うちの部は大会での実績もなく、部員も団体戦に出れるギリギリの数。当然、部費も少なく、無駄遣いは——と、すみません。これは言うべきではなかったです」

加治木が俺に気を使ったのか途中で言葉を止める。他人に値段をつけているようでどうかと思っただろう。

「いや、気にしなくていい。元プロへの依頼料にしては安すぎるのは自分で分かっているからな」

「……正直なところ、最初は疑わしいと思っていましたが、猫の手も借りたい状況であれば、手段を選んでいる暇はないと」

「まあそうかもな。なりふり構わずやるつてのは良いと思う。俺が部長か指導者でもそうするかもな」

「はは……部費に余裕があれば学校に申し出て正式に指導者を呼びたいくらいなのは間違いないです。……つと、ここです」

「ん、そうか」

加治木と話している内に部室の前へとたどり着いた為、一度会話を打ち切る。というか……こいつ、めっちゃ話しやすいな……なんだろう、凄く無駄がない会話が出来て悪くない。アホっぽいやり取りも嫌いじゃないが、俺はどちらかというと受け手でツツコミの方だから自分からどうこうっていうのはしないしな。

多分、この加治木もそんな気がする。会話が疲れないというか、フラットで落ち着くな。会話的には何も面白くないだろうが、誰かに聞かせている訳でもないし面白さは必要ない。

と、内心で加治木の評価を上げていると、その加治木が部室の扉を開けて中に足を踏み入れたのでそれに続く。そして、その中では、

「――戻ったぞ」

「――お、ユミちん。プロ連れてきたのかー?」

そして加治木の声に応えて中からお気楽そうな声がちちらに届く。見ればショートカットの……外ハネ? 少し髪が外側にハネている小柄な女生徒が加治木をユミちんと呼んだ女生徒のようだ。

それに加えて部室には他の部員もいた。その中の2人がこちらを見て、

「す、凄い……本物の東郷プロだ……!」

「有名な人なんですか……? あ、でも確かにちよつと芸能人っぽい感じが……」

「う、うむ。東郷プロは知る人ぞ知るマニア向けではあるけど麻雀ファンにはそこそこ有名で——」

……おいそこ。聞こえてるぞ。その麻雀ファンらしい子。俺のことを知ってるなら結構マニアックだな。

黒髪ポニーテールで前髪が跳ねた女子が俺のことを差して言い、それを金髪のサイドテール、巨乳の眼鏡っ娘という中々に好みの女の子が俺を物珍しそうな表情で見て、ポニーテールの子に相槌を打っている。うーん、やっぱ麻雀部って美少女率高いな。この時点で大分当たり感がある。

しかし、ちよつとこの面子は清澄程ではないが賑やかそうだな——
って、んん？

「……モモ？」

「——あれ？ 東郷さんじゃないっすか」

「ひゃっ?! 桃子さんいつからそこに!」

部室の中。金髪眼鏡っ子の隣には先程街で会ってメル友(?)になったモモの姿が。凄い奇遇だな。いや、秒速で理解した。

「この麻雀部の部員だったのか……」

「あー、今日から指導に来る元プロってホストのお兄さんのことだったんすね」

「凄い偶然——って、俺はホストじゃねえよ」

「あ、つい思っていたことが口から出たっす……」

「……知り合いだったのか——って、それより東郷さん、今モモを……!」

加治木が困惑気味に俺達を見た後、何かに気づいて驚いた顔で俺を見る。うん、多分モモの体質のことだな。

「ワハハ。まさかモモのことが見えたのかー?」

「う、うむ……まさかそんなことが……あ、でも確かにさつき普通に見かけて名前を……」

「私や加治木先輩達でもまだ見失うのに……」

次いで他の3人も俺がモモを見つけたことを口々に驚く。やっぱ普通はそうなんだろうな……。

「そうなんすよ！ 東郷さんは街中で困ってる私を見つけた凄いい人っす！」

「いや、まあ……確かにそうだが……」

モモが俺の斜め前で俺を称えるようなポーズを取って言う。なんだその大げさで動きがでかいポーズ……あれか？ 存在感が薄すぎるから変なポーズや動きで目立とうとしてるのか？ 涙ぐましい努力だが反応に困るな……。

しかし他の部員達はそんなことより俺がモモのことを見えることが気になっているというか驚いているらしい。おそらく部長である加治木も他の部員よりは落ち着いてはいるが、驚いた表情で俺の方を見て、

「……驚いたな……モモに気づくことが出来る人間がいるとは……しかし、何故街中で？」

「いや……なんか店の行列で横入りされてたから注意したら驚かれて——あ、そうだ。誰かタピオカいるか？」

「……なるほど。確かに、モモならそういうこともあり得るか……しかしこれは僥倖だな。モモの特訓にも使えるか……？」

「ワハハ、元プロは気が利くなー。ありがたく貰うぞー」

顎に手を当てて考え込む加治木。なんというか、真面目だな……その横で平然とタピオカを受け取る部員がいるのに。

何となくだが、加治木は苦勞してそうである。なんかこの面々と加治木の性格を鑑みるとそんな感じがするな……特にこのタピオカを受け取った能天気な部員の所為で。

「東郷さん、見た目とか服装的にホストかと思ったんすけど、麻雀のフロ……元プロだったんすね？」

「よく言われるが……そんなにホストに見えるか？ 目のクマとか見たらそう見えないだろ」

「……言われてみればホストというより、そういう怪しいお店の裏方とかやってそうっすね。インテリ系のこれっぽいっす」

「違えよ。つーか、そっちはそっちでなんとも言えないな……」

「あー、知ってるぞ。肉とか食べたら歯に挟まるやつなー」

「もつと違えよ。それはただの筋だ」

モモが顔の頬辺りを指で差して言ったのでツツコミを入れると、続けて口の大きい女子が別のことを言うのでツツコむ。……って、筋という言葉が出てくる時点で知ってんじゃないかねえか。スジモンな。何気にモモの手の動きも古いポーズだし古い言い方だよな……。

「……はあ、それよりも、お互いに紹介をしておこう。蒲原から頼めるか？」

「分かったぞー、ユミちん。私は3年で部長の蒲原智美だ。はい、次佳織とむつきー」

「あ、うん。えっと、2年の妹尾佳織です。よろしくお願ひします」

「う、うむ……2年の津山睦月です。よろしくお願ひしますっ」

「そして私が、1年の東横桃子つすよー！」

「ああ、俺は東郷仁だ。よろしくな」

順番に挨拶されて俺は頷く。えーっど？ 外ハネで脳天気な奴が蒲原で、金髪サイドテールメガネっ娘おっぱいが妹尾で、黒髪ポニーテールの真面目そうな子が津山。

それに影が薄いオカルト持ちの東横桃子ことモモか。それに部長の加治木を合わせて鶴賀高校麻雀部——って、あれ？

「……あ？ 部長は加治木じゃないのか……？」

「……ん？ ああ、いえ、私は部長ではなくて……」

「ワハハ、部長は私だぞー」

「……そうなのか」

え、マジ……？ まさか過ぎる。てつきり加治木が部長だと思っていたが……蒲原なのかよ。全然そんな感じしないけどな……仕切ってるのが完全に加治木だし。ほら今もホワイトボードの前に自然と立って、

「——それでは東郷さんも揃ったところでミーティングを始めよう」

ほら。もうなんか完全に様になってるし、他の部員も全然違和感持っていないもん。部長だと言う蒲原も普通に椅子に座ってアホ面で俺があげたタピオカ吸ってるし。部長ならミーティングとかで仕切れよ。いや、確かに加治木の方が向いてそうだけどな……。

……しかしまあ、なんだ。ここでもちよつと期待出来そうという
か、オカルトを使いたい相手がいるし、ラツキーだな。

俺はミーティングの為に席に着く部員を見渡して……その中でモ
モ。それに次いで妹尾を見て、内心でこれからに期待した。

ステルスモモ

「——大会は2週間後、6月4日、5日の日程となっている。それまでにやれる限りのことをやっていく」

「要は沢山練習するってことだなー」

「ああ。そのために元プロである東郷さんを招いた。ここにいる5人、私も含めて大会までに少しでも強くならなければならぬからな」

始まった加治木のミーティングは手慣れたものであった。全員の前立って堂々とホワイトボードを差しながら説明し、部を取り仕切っている。

多分、本当に慣れてきているのだろう。監督とかコーチがいるようにも見えないし、采配を取っているのは加治木ということだ。珍しい……ことは無い。強豪校なら監督やコーチがいることは当たり前だが、俺が今まで指導に出向いた学校の殆どは監督やコーチなどの指導者はいなかった。顧問の先生——名義だけ貸し出しているであろう学校の先生などはいらぬだろうが。

有珠山は獅子原が皆を引っ張っていたし、龍門渕だと透華が、清澄だと竹井が——といった風に。風越だと久保さんというちゃんとしたコーチがいるが、キャプテンとしてしっかり活動もしている美穂子なんかもな。

なんだかんだでどいつもリーダーシップを發揮していて素直に凄いなと思う。俺みたいなそこらの大人よりよっぽどしっかりしているんじゃないだろうか。

特にこの加治木はかなりしっかりしているな。落ち着いていて頼りになるというか、後輩は安心出来るだろう。

「さすが加治木先輩っす！」

モモも、さすがと褒め称える。その眼差しは尊敬にも似た……うん。なんか結構心酔気味な気もするが気の所為か？ でもモモの特性とかを鑑みるに、敢えてこういった部活に在籍するのも何かがあったからではないかと思わなくもない。

「それじゃあここからは東郷さんと実際に打つていこう。……それで構わないだろうか？」

「ああ」

と、加治木が横に立っていた俺に向かって声を掛ける。まあ、ここからは仕事の時間ということだ。ここに来る前、メールで行った打ち合わせ通りでもある。

「まずはここにいるメンバー全員、俺と打ってもらおう。順番は任せるから席に着いてくれ」

「は、はい。それじゃあ……」

「わはは。プロと打つなんて緊張するなー」

最初に返事をして席に着いたのは津山と蒲原の2人だった。津山は分かりやすく硬くなっており、蒲原の方は口ぶりとは裏腹に脳天気な表情を崩していない。俺があげたタピオカも飲んでるしな。

そして最後は、

「それじゃステルスモモの実力を見せるっすよ！ ホストのお兄さん！」

「だからホストじゃねえんだよ……いいから早く座れ」

はいっす、と割と威勢よく全自動卓の席に着いたのは東横桃子ことモモ。1時間ほど前に俺の友人となったこの中で唯一の1年生部員だ。これで俺を含めて4人。麻雀をするための面子が揃ったことになる。後の2人は、

「えっと……加治木先輩、私はどうすれば……？」

「妹尾は私と一緒に実際の対局を見てほしい。それを見ながらルールと流れを説明するが……構わないか？」

「うっ、難しそうですが……やる以上は頑張ってみます……」

「おー、頑張れ佳織ー」

わはは、と佳織の方を見て笑う蒲原。俺も2人の会話が気になって顔を向ける。少し眉をひそめてしまいなながら、

「ん？ そっちの子……妹尾は初心者なのか？」

「はい。団体戦の登録のために出てくれると……」

「わはは。佳織は私の幼馴染だからなー。幼馴染権限で引っ張ってき

たぞー」

「べ、別にいいけどもつと早く言ってほしかったよー……」

佳織が少し困ったように言う。へえ、初心者か。初心者を連れての団体戦か……。

しかしまあ、初心者を指導するのはついこの間やったばかりだし、別に構わない。俺は指導の為に、対局前に少し聞いてみることにする。

「それで加治木がルールを説明するのか……って、始めてどのくらいなんだ？ まさか1、2週間とかか？」

「……いえ、それは……」

「？ どうした？」

ここまでずつと落ち着いた様子の加治木が珍しく言い淀む。だが隠していても仕方ないと直ぐに頭で理解したのか、溜息と共に答えを吐き出す。それは、

「……妹尾は今日が初めてです」

「えっ、マジ？」

「マジだぞー。佳織は今日初めて練習に参加するからなー」

ええ……ってことは、大会まで2週間しかないから、麻雀歴2週間。練習期間も2週間でインターハイ予選に臨むのか……流石に困惑してしまう。

他のメンバーの実力にもよるが、どう見ても龍門洩や風越、後は……清澄も何気にヤバいな。その3校を超えるほどの実力は無さそうな気もするし、結構厳しいんじゃないだろうか。

「えつと……なんかすみません」

「……いや、別にいいんだけどな。俺はやるべきことをやるだけだ」

「気にしなくていい。妹尾が参加してくれたおかげで団体戦にエントリーすることが出来た。むしろこちらの不手際で練習への参加が遅れたことを謝りたい」

妹尾が俺の表情を見てなのか、軽く謝ってくるがその謝罪を俺と加治木で首を振って気にしなくていいと伝える。実際俺は仕事をするだけだし、加治木は今言ったことこそが真実でしかないだろう。感謝

と謝罪しかないはずだ。

「苦労をかけるが、我々も全力でサポートする。大会までは耐えてほしい」

「は、はいっ。頑張りますっ……！」

「ああ。それじゃあルールを説明するが……まずは場決めと言って――」

……まあ内心では苦労しそうだと思いを抱えるしかないけどな、俺は。今からルール説明となると、憶えにもよるが殆ど何も出来ないんじゃないかなろうかと思ってしまう。

麻雀は意外と憶えることが多くて最初は大変だ。とりあえず、ルールを憶えさせてチョンボさせないようにするので手一杯になりそうだな……。

というか俺もルールを教えることになるな、これは。ガチの何も知らない初心者に麻雀を教えるとか、プロ時代にも何回か経験があるが、大分久し振りだしそこまで得意じゃない。俺の教え方は多分、面白みに欠けるだろうし……初心者相手の指導とかそういうのはやっぱりやりさんとかが得意だ。牌のお姉さんだしな。子供相手に教えることもあるし、はやりさんの説明、指導は聴きやすくて面白いのだ。声可愛いし。あの声でエロいこと言われると中々に股間にクるものが――つと、危ない。自重しよう。今から仕事だ。私用もあるけど。「始めるか」

「う、うむ……よろしくお願いしますっ」

「よろしくな」

「よろしくお願いするっすよー」

というわけで対局を始める……ただまあ、俺の予想、推測、直感だとモモ以外はそこまでじゃないだろう。単純に対局のことだけ考えるならとても楽だ。

しかし、そのモモが俺の仕事としても私用としても厄介だ。多分ではあるが、モモの力は麻雀においても通用するだろうからな――と、言ってる間に、

「ツモ。 1300・2600」

「なっ……早い……」

「わはは、親つかぶりかー……」

さっそく、東一局から俺の和了りで幸先の良いスタートを切る。点数もまあまあで速さもある和了りは麻雀という競技において理想的なもの。

ちなみに今ので蒲原の親が流れ、次は東二局。津山の親だ。順番としては蒲原、津山、東横、俺という風に始まったため、俺はラス親ということ順番もまあ良い。

って、いきなり和了ってしまったが、もう少し様子見もしいとな。実力が分からない。……ただ、この分だと様子見していても、

「……ツモ。1000・2000」

連続で俺の和了り。そこそこ様子を見て和了もちよつと遅めだったのだが、どうやら運は俺に傾いているらしい。

そしてまあ……この時点で大体分かった。なんというか、この卓に座る2人は可もなく不可もなくということころだろう。

「ん〜……この辺かー?」

「それ、ポンです」

東3局でも2人を見て思う。蒲原と津山。この両名は麻雀はそこそこ出来る。学生レベルの話ではあるが、弱くはない。蒲原の方が3年生ということ若干出来るが、津山とそれほど差があるわけでもない。どちらも地区予選レベルではそこそこ。20位前後に入れるくらいといった実力。オカルトの気配もない普通の打ち手だ。

全国に出てくる選手と比較すれば実力は下位で劣りはするが、戦えないというほどではない。麻雀は運も絡む競技。その場の状況や巡り合わせによっては十分戦いようはある。

先程も俺や他家の捨牌から当たり牌を探っている様子を見せたり、とにかく和了ろうとして鳴きを見せたりと動きや判断だって悪くない。少なくとも基本は出来ている。

「……ロン。6400」

「っ……はっ」

津山から直撃を取り、僅かに表情を崩すところを見ながら思う。

……やはり悪くはないと。

ただそれはあくまで学生レベルの話で、プロや全国クラスの魔物相手に通用するほどの確固たる何かがある訳でもない。元とはいえ、俺に劣るのは当然のことだ。

逆に言えばきちんと今まで麻雀を打ってる痕跡が見えるため、ちゃんと指導をすれば伸びる素質だつてある。普通の打ち手ならちよつとしたコツやテクニク、牌効率を高めたり、経験と自信を積ませることで順当に伸びていくものだ。

だから2人は悪くない。今は元プロの俺と、オカルト持ちであろうモモがいる場なのだ。

「——ロン」

「……！ あつ……」

——そして東4局。津山が捨てた牌に対して、俺の右隣からようやく声が聞こえた。

津山は驚き、自分の迂闊さに今更ながら気づいたように声を上げるが、それも当然だろう。

何しろ、津山は気づいていない様だったが、その牌は危険牌とも言える牌であり、

「3900点つすよ、むっちゃん先輩」

「う、うむ。……はあ、また見失ってしまった……」

と、モモが津山から点棒を受け取って俺の親番が終わる。……まあ親番は流されたが、それよりもモモのオカルトのことだ。

……なるほどな。消える打牌……いや、モモという対局者そのものを見失っているのか。

今、モモの捨牌、河の状況を見ればモモの当たり牌はある程度推測出来るものであった。実際の和了りを見ても引つ掛けない素直な待ちをしており俺の予想とも合致していた。

麻雀初心者で当たり牌の予想が全く出来ないというのならともかく、津山や蒲原くらいなら危険牌と真ん中を意味もなく捨てる筈もない。

聴牌を取るためにリスクを背負って仕方なく——といった表情で

もなかった。見えたのは、うつかり、といった表情。見失うという言葉。

それらを合わせると、やはりモモは消えていたのだ。それも牌ごと。

これがモモの言う「ステルス」なのだろう。

モモの元々持っていたその特性、存在感の薄さを利用して牌ご自分の姿を相手に見失わせる。

無論、ただ存在感が薄いくらいでそういうことが出来るはずもないので、これは明らかにオカルトだ。一瞬だが、龍門渚の国広が得意とする手品で使われるような視線誘導のテクニク。漫画みたいな手法でやっているのかとも思ったが、やはりそれとは違う。

牌ごと消えたように見せかけるなんてことはモモほどの気配の薄さ……言わばマイナスの気配でもなければ不可能だ。

多少消えるのに時間は掛かるように思えるが、それでもこのオカルトは麻雀において非常に強力だ。見ていてそう思う。

「……………」

「……………」

モモの打牌を見て思わず鼻で笑ってしまう。別に杜撰だったとかそういうことじゃない。その大胆不敵さと言うべきか、不条理さに笑ってしまったのだ。

今、モモは明らかに蒲原の危険牌を捨てたが、蒲原がそれを見ることはない。俺の予想だと、それは当たり牌であると思うのだが、蒲原はそれに目をくれることもない。

「……………」

「これ以上点数を失うのは……………」

津山も同じだ。今の言葉もまるでモモのリーチ宣言に反応したように見えて、実はそうではない。単純に点棒を失って最下位になつていることを憂いているだけのようだ。

……反則級のオカルトだな。対応出来ないとボコボコにされるだろう、こんなの。

全く理不尽極まりないオカルトだ。どうやらモモが消えると、相手

はモモが放銃したことにも気づかないどころか、立直宣言にも気づかないらしい。

モモの聴牌気配や牌の推測が出来ないどころか、モモが当たり牌を捨ててもそれに気づけず、いつの間にか相手はフリテン状態になったりするわけだ。そして、気づかないうちにモモに振り込んでしまう。

……まあ、俺からするとマイナスの気配はむしろ不自然に映るけどな——つと、

「——ロン」

「あつ……」

モモの捨牌を見て俺は宣言する。モモが驚いた表情を見せるが、いや、さっきから分かった筈だろう。

「5200だ。……言つとくが、危険牌だぞ。俺には見えてるからちゃんとしろよ」

「……！はいっすー！」

モモが元気よく、笑顔で点棒を渡してくるが……いや、なんで放銃したのに嬉しそうなんだよ……そんなに見えてることが嬉しいのか？ 注意すら受けてるし、麻雀的にはマイナスだが……本人としては色々あるのだろうか。

それはともかく、これで殆ど俺のトップは決まったようなものだ。後は油断しなければ良い。

……しかしそれとは別に、重要なことがある。まあ、俺のオカルトのことだ。

役満を当てて女の子を惚れさせてエロいことをする——その目的が俺にはある訳で……そして当然、ターゲットはこの正統派後輩系巨乳美少女のモモな訳だが……やっぱり、役満を和了るには運が必要なのだ。

最初の対局で和了れる筈はないとは思っていても、和了る気がなければ和了れないし、試しはするのだが……やはりこれに関しては試行回数を増やして狙えるときに全力で狙うしかない。

ただまあモモがオカルト持ちであるとはいえ、俺には通用しないのが不幸中の幸いと言える。俺からするとモモはむしろ存在感がある

方だ。おっぱいもでかいしな。……いや、別にそれと見えることは関係ないけど。多分。

出来るなら早めに役満をぶち当てて滞在中に沢山エロエロしたいところだが、モモにオカルトがある所為で若干だが不安要素もある。

「……ロン。8000つすよー」

「わはは、振り込んでしまったなー」

「……ふう」

俺は聴牌した手牌を手前に倒して息を吐く。一応、跳満ではあったんだけどな。

また真面目な話にもなるが、こうやってスピードで負けることが懸念される。というのも、モモはオカルトによって他の相手からは見えていない。俺は見えているが、ある意味でそこは関係ないのだ。俺に気を配ればいいだけで、後は放っておいても振り込んでくれるのだから。

普通に麻雀として考えてもこれはかなり厄介だ。見えている者が1人いても、その他の相手は見えていないため、結局モモに振り込む確率も高いし、捨牌を考慮しなくとも良く、他家から放銃される確率の高いモモの方が当然和了るのも平均として速くなる。

何しろ見えている1人は普通に麻雀をしている訳で、他家からは普通に警戒だつてされるし、隙あらばこちらを狙つてもくるだろう。麻雀は4人で競い合う競技であり、誰か1人だけに気を配っていれば良いという訳ではない。

それがある意味で許されるのが、モモだ。見えていなければ他家に気を配る必要は殆どなく、見えている人が1人いたとしてもそこにだけ気を配っていれば良い。

つまり、俺が役満だろうがなんだろうが狙っていても、相手が振り込む確率はモモの方が高く、それだけ和了れる確率が減っていくのだ。

そして何気に素の麻雀の実力も高いため、対戦相手として見ると非常に厄介だ。元プロの俺でもそう思う。全国クラスの打ち手だな、モモは。オカルトも対処は難しいし、誰か1人対処出来たとしても放銃

確率から考えて稼ぎ負けるだろう。

この分だと団体戦もそうだが、個人戦でも結構良い結果が期待出来るようではある。……役満狙いの俺からすると面倒だけどな。——関係ないけど牌をツモる時に乳の動きを見てしまいそうになる。後輩おっぱい揉みてえなあ……。

「……ツモ。2000オール。で、和了り止めだ」

「ありがとうございますでしたっす！」

「わはは、やっぱプロは違うなー」

「桃子も相変わらずすごかったですね……」

と、それでもなんとか最後まで俺の和了りで終えて結果は俺のトップ。プ。

2位が何故かちよつとテンションが上がってるモモ。3位が相変わらず脳天気な笑いを見せる蒲原。もうわははって呼んでやろうか。そして最下位が緊張していたのか、対局が終わったことに露骨に胸を撫で下ろす津山だ。

そして横で対局を見ていた2人に俺が目を向ける。俺から声を掛けないのはまだ喋っているからだ。

「えつと……今のは……？」

「ああ、今のは和了り止めと言って、オース……最後の親がトップであつた場合、その和了りで連荘を放棄して試合を終えることが出来るというルールだ。ローカルルールに分類されているが、プロの対局など採用している大会も多い。インターハイでもこのルールは適用されるから、出来れば憶えてほしい」

「和了り止め……和了り止め……は、はい。頑張つて憶えますっす」

「よし。——それで対局の方も終わったが……結果はやはり、東郷さんがトップか……」

と、実は何気に対局中もずっと妹尾にルールの解説をしていた加治木がようやく向き直る。

そのタイミングで俺も話しかけようと思ったが、それより先にモモが話しかけた。

「どうっすか加治木先輩！ 私、頑張ったっすよ！」

「——つと、ああ。元とはいえプロのいる対局で2位はさすがと
他ない。……それに、やはり東郷さんにはモモが終始見えてい
る様子だったしな」

「そうなんすよ。お兄さん相手だとガチの麻雀つすからね——でも
いつもより楽しかったつすよ！」

モモがその言葉の通り、楽しそうに加治木に向かって報告する。
……やっぱ結構仲が良さそうだな……もしかしたらもしかし
そうなので留意しておこう。

「確かに、今日のモモは活き活きしてたな」

「それ以上に東郷プロが暴れてましたけどね……」

「ふっ……ああ。だが、モモに東郷さんも暴れて貰った方が都合が良
い。私達が強くなるためにはな」

蒲原と津山の言葉に不敵な微笑を浮かべ、加治木が席に着く。どう
でもいいが、こいつ学生の貫禄じゃねえなやっぱり……リーダーとし
てのスキルが高すぎるというか、ちよつとカリスマ性すら感じるな。
強豪校の部長でもこういうのは中々いない。どつちかつていうと指
導者みたいな感じだ。

「……それじゃ、次は加治木も混ぜて打つか」

「ああ、どんどん頼みたい。——津山、悪いが抜けている間は妹尾に
色々教えてやってくれ。他の皆も抜ける際は頼む」

「はい、分かりました。妹尾さん、大変だと思いますが頑張りますよ
う」

「はい、頑張りますっ……！」

「わはは、出来れば私が抜けたかったけどな。この面子は中々にへ
ビーだ」

「加治木先輩に東郷さんつすか。確かに強敵つすね」

「そう言うモモもな。……だが、やるからにはモモ相手でも元プロ相
手でも負けるつもりはない」

加治木がそう言って静かに闘志を覗かせる。なるほど、気合は十
分つてところか。

「……胸を借りるつもりで来るんじゃないのか？」

「ええ、勿論。……ですが麻雀では下位の者が上位の者を打ち倒すことは珍しくない。それに、勝つつもりでないと練習にならないでしょう?」

「……ふっ、まあ、それもそうだな」

随分と真面目で熱意とやる気に満ちた言葉だ。

それに応えて俺も本気で指導しよう。……それはそれとしてモモ相手に役満は狙っていくけどな。うん、真面目に指導はするから許して。

そうして次の対局が始まった。

——そうしてしばらく。

「……なるほど。これが元プロの実力か……」

「そんな大したものじゃないけどな。それより加治木、お前はかなり良いな」

「……元プロにそう言つて貰えると励みになります……3位では素直に喜ばせんね」

対局が終わり椅子に背を預けた加治木が、ふう、と息を入れる。そして最終的な順位を告げて苦笑した加治木に俺は続けて言つてやった。

「いや、筋がいい。俺とモモ相手にここまで健闘出来るのはお前の地力が良いからだ」

「そうっすよ加治木先輩。私とはりー棒分の差じゃないっすか。消えるのにもかなり時間がかかりましたし……正直ヒヤヒヤしたっす」

「……そうか? だがこれくらいで喜んでいては——」

「わはは……飛ばされて終わった私よりはマシだぞ……」

「……す、すまない蒲原。そうだな、一応喜んでおこう」

蒲原がハイライトの消えた目でそう言うのと加治木の方が蒲原に気を使う形でそう言う。

ただまあ、実際加治木の実力は俺が見る限りではあるが、かなり高い。

オカルトこそ全くないが、単純に上手いのだ。牌効率を良く理解し、他家を良く見てる。特筆すべきはその視野の広さと観察眼だろうか。聴牌気配を推測し、当たり牌を的確に予想しているのだろう。殆ど放銃しない。

するときは誰かが高い手を張つていそうな時であり、そういう時は安そうな相手に振り込んでもみせる。戦略眼、戦術眼にも長けているというか……おそらくだが、考える能力が全体的に高いのだろう。

当たり前の話ではあるが、常に最善を模索して打っている。その導き方が加治木は抜群に上手いように感じる。

自分で言うのもなんだが、俺という元プロでそこそこ出来る雀士と、モモという厄介なオカルト持ち雀士相手に一步も引かない戦いぶりは見事と言う他ない。全国クラスの打ち手だ。長野でも10位以内には入れる。……まあ最近長野に結構ヤバイ奴がいることが分かったのでこの順位だが、他の地区ならもうちょっと上位も狙えるかもな。

とにかく、自分より上位の相手に対してどう打つかの答えを常に想定して実戦でそれをぶつけてくる。デジタル型と言えばそうだが、オカルトに対してもそれがあるものとして考えて打てる……言うなれば、プロのデジタル雀士に多いタイプだ。

正直鶴賀のメンバーの中だと一番素の実力は高く、それでいてプロ向きかもしれない。大学とか実業団とかで経験を積んでプロに——という想像が出来なくもない。あくまで順当にいけば、の話だが。

「……なるほどな」

「……ふむ、しかし……」

「……………あの、ちよつといいつすか？」

と、俺が加治木も含めた部員達の評価に対する答えを出そうとする直前、モモが俺と加治木を見て一声掛けた。なんだ？ と顔を向けると、同じように加治木もそちらを向き、

「どうした？ モモ。何か気になることでも？」

「いえ、大したことじゃないんですけど……加治木先輩と東郷さん——なんか似てるなーって」

「え？」

「は？」

モモが突然言い放った言葉に俺と加治木は揃って間の抜けた声を出してしまふ。いきなり何を言い出してんだと。

だが直後、周囲からは「あー」という得心したと言った風な声が揃い、

「わはは、確かに。ちょっと似てるかもなー」

「髪の色とかそっくりですね」

「性格もなんだか……私、どっちも会って間もないから分からないですけど、ちよっと似た印象を受けますね」

「そ、そうなのか……？　そう言われてもどういふ反応をすればいいか分からないが……」

「……そうだな」

加治木の言葉に俺は同意する。蒲原、津山、妹尾と口々に俺と加治木が似てるということ盛り上がるが、それを言われても困るな。というか、俺からするとそこまですでもないような……俺の方は目の下のクマが酷かったりするし……どっちかっていうと良子に似てるって言われるが……いや、でもそう考えると良子と加治木は似てなくもないか……？　よく話のネタになる「似てると言われる芸能人」くらいのレベルではあるが、加治木も美人だし似てるっちゃ似てるか。

後はまあ――

「加治木先輩と東郷さん、実は生き別れの兄妹とかじゃないっすよね？」

「私は一人っ子だが……」

「……妹は別にいる。加治木に似てない妹がな」

「へえー、どんな妹なんすか？」

「あつ、そういえば東郷プロは戒能プロと従兄弟って聞きましたけど、もしかして――」

「違う。良子は妹分なだけで妹じゃねえ。本当の妹の方は生意気だがめついい馬鹿だからな……」

「そ、そうなんですか……」

モモの質問と津山の勘違いに答える形で口にする……が、俺は頭に手を当てて息を吐いた。

別に他の事に比べれば妹はまだマシだが……実家のことがあるのでここ最近は何となく会ってないのだからなんとも言えないのだ。気がかりでもあるがどうせ放っておいてもそのうち強請つてきそうだし、逞しいから平気だろう。俺の方から連絡を取るのには微妙だ。というか無しだ。

……ま、今はオカルトでエロエロする方が大事だしな！

後、仕事の事も考えないといけないし、実家に関わってる暇はない。というか今後10年くらいは関わりたくない。10年くらい経てば大丈夫そうだが、今は無しだ。自分のことで精一杯だしな。

「……ほら、お喋りは打ちながらも出来るだろう。打つぞ。時間は限られてるからな」

「東郷さんの言う通りだな。時間は有限で限られている。部費と大会までの時間を無駄にしないためにも、やれる限りのことをしよう」

「わはは。普段はユミちゃんだけで真面目要素がいっぱいなのに、東郷さんまで増えたから部屋の真面目の空気が色濃いなー」

「真面目の空気ってなに、智美ちゃん……？」

「自分もそれに含まれている気がする……」

「真面目でも真面目じゃなくても空気感満載の私がここにいますっすけど……」

「……いいから打つぞ」

話が止まらなくなりそうなのでもうさつさとサイコロを振って場決めをする。……いやまあ俺は真面目の空気を出してるだけで実際は真面目かどうか怪しいけどな。打つ回数増やしてとにかく役満和了りたいだけだし。

だがそれまでは、この一応大会に向けて真面目に頑張ろうとしている部に真面目に指導することになりそうだった。

休日コミュニケーション

「……ふう、ちよつと疲れたな……」

何度か——いや、何十回かの対局を終えて、刻は既に17時前。そろそろ練習時間も終わるという中で休憩として俺は学校の中庭のベンチにどかつと座り込み、自販機で買ったジュースを一口飲んで息をつく。

殆どぶつ続けで麻雀を打ったからな。さすがに疲れる。

他の部員は交代交代で麻雀を打てるが、俺の方はそうもいかない。加治木の方は休んでもいいと言ってくれたが、俺としては出来る限り打ち続けて機会を増やしたいのだ。

……いいおっぱいだつたな……。

先程まで部室で見ていたモモのことを思っただけ染み染み。まだ実際にこの手で掴み味わった訳ではないが、間違いなくモモという美少女は最高の抱き心地に違いないという確信が俺にはある。

身長は和と同程度だが、モモの方が華奢というか細く見える。……いや、別に和が太いと言っている訳ではない。和は胸だけでなく尻とかもムチツとしててなのに細いというエロの塊だが、モモの方は一見普通のそこらにいる女子高生のような華奢さなのに、胸だけはたっぷりと実っているのだ。

なんというか……なんだろう。ザ・女子高生って感じでエロいのだ。女子高生なのに爆乳というロマンがより感じられるのがモモだ。ちよつとクラスにいそうな美少女ってのが趣き深い。和は学校のマドンナって感じ。どちらが良いというか、どちらにも魅力があるというだけのこと。当然、その中身にだって期待が持てるというものだ。

だからまあ……早くオカルトを、役満を上げて惚れさせて彼女の身体を思う存分に味わいたいのだが……こればかりは中々な……。役満は運だ。だからこそ、対局を続けるしかない。

しかし1日で打てる数にも限界があるし、俺だってそりゃ疲れる。なのでちよつと休憩がてら適当に連絡することにした。

『よう』

『あ、東郷さん、いらつしやい』

『いらつしやいましー!』

『む、来たな! 元ゴミプロめ! さっさと衣と麻雀を打てー!』

『いや、打たねえよ……』

携帯を取り出し、俺は龍門渕高校麻雀部のチャットルームに文を打つ。なんというか、相変わらずだな、こいつらも……。

『子供は置いといてだ。もし幽霊と麻雀を打ったらどうなると思う?』

『ころもはこどもじゃないっ!』

『幽霊と?』

『また随分とオカルトな話だな』

『そんな非科学的なことありえませんかと言いたいところですが、やることは決まっていますわ! —— 塩を投げますの』

『非科学的な対処法だなあ……』

『……大喜利?』

違う。違うのだが……別に明確な答えを求めている訳ではないので別にそれでもいい。そもそも俺にとってモモのオカルトはそこまです脅威ではないし、一応大会で当たるかもしれないこっちの情報を龍門渕の連中に流す訳にもいかないからな。こういうふざけた話くらいでちょうどいい。

と、同時に別の相手にもチャットを送る。今度はつい最近まで会っていた相手だ。

『なあ、幽霊っていると思うか?』

『そんなオカルトありえませんか』

『だよな』

……うん、そりやそうだよな。和はこう答えるに決まっている。話が広がる筈もない。

『……でもお化け屋敷とか……そういうところには興味があります』

——と思ったら広がった。うん、でもこれ、和はほんとに興味があるか微妙なところだな。単純に俺とそういう場所にデートに行きた

いというサインな気がする。

「じゃあ次。今度は……そうだな。幽霊とかに興味がありそうない。」

『幽霊っているじゃん？』

『イエス。日本は結構多いですね。私の実家のある石槌山や有名所だと恐山。ジンは今長野でしたか。長野だと御嶽山が幽霊スポットですね。後は都心部でも最近では怨霊が多くて困ります』

『いや、まあ……』

『私も今幾つか連れてますよ。今日は大事な試合なのでテスカトリポカにミスラにチエルノボーグ。オーデインとか斉天大聖とか……ジンに見せていないスピリットも結構いますね。興味があるなら1体そつちに送りましょうか？』

『やめろやめろ！ ポ○モン交換とかソシヤゲのフレンド支援並みの気軽さでやべーもん送ろうとしてんじゃねえよ！』

『そうですか……そこに3体のスピリットがいるでしょう？』

『やめろ！ 選ばねえよ！』

『冗談ですよ。試合に必要なので今はパワーが低めなスピリットしかあげられません』

『そういう問題でもねえんだけどな』

急いでチャットを打って止めさせる。危ねえ……聞く相手がある意味で間違えた。良子はむしろ詳しすぎる。

こいつと話していると常識が破壊されそうになるんだよなあ……俺はもう手遅れ感あるけど、最初の方はマジで聞いているだけで頭が痛くなるレベル。

もうちよつとレベルを落とそう。うん。これじゃあ息抜きにならない……ということをやつば安定は……か。

『幽霊に興味ある人』

『え……何急に』

『ゆ、幽霊……怖いです……』

『幽霊！ カッコいいです！ 幽霊欲しい！』

『ユキが今までにないレベルで食いついてるけど』

『私、靈感ありますよ系アイドルもありだな!』

……うん、まあまあ食いついてはくるな、ここも……有珠山の奴らはこういう下らない話がしやすい。特にユキはこういうオカルトな話が大好きだからな。何故か幽霊欲しがってるな……良子紹介したら喜びそう。

——つと、ん? 有珠山高校麻雀部のグループでやり取りしていると急に個人で獅子原からチャットが……。

『先生、興味ある? それなら全国にも連れて行くからその時に見せれるけど』

……あ、ああ、そういえばこいつもそういう系だったな……ちよつと失念していた。

全く……良子といい獅子原といい、俺の周りには常識外れのオカルトだらけだな……。

さて、ここでちよつと癒やされよう。

『はやりさん、幽霊好きですか?』

『はやっ!? ゆ、幽霊はちよつと嫌だなあ……あ、でもデフォルメされた幽霊とかは好きだよっ!』

うん、はやりさんは可愛い。続けて、

『栞、幽霊に興味はあるか?』

『え、ええっ? 私、そういうオカルト全然分かりませんよ? むしろ先輩に教えてほしいくらいです』

『俺が教えられるのは栞のほくろの数くらいだな』

『も、もうっ、先輩! そういうエッチなのは試合前によしてくださいよ! ……そういうのはまた今度で……』

よし、栞も可愛いな。合格。それで次は、

『美穂子。幽霊って信じるか?』

『はい。東郷さん。幽霊はいると思います』

『俺もそう思う。ところで俺のこと好きか?』

『はい。あの——』

……と、言ったところでチャットが止まったな。うん、美穂子は機械音痴だからチャットとかメールは苦手で、これでも大分上手くなっ

た方なのだ。

だがこれはこれでたどたどしさが可愛いのでオーケー。

まあこういうやり取りで精神的に癒やされるといいうか、やっぱ可愛い女の子との触れ合いは重要だな。疲れた時に効く。

さて、このままやり取りしてもうちよつとしたら戻るか――

「……何してるんすか?」

「っ! ……つと、モモか」

気がつけばモモがベンチに座る俺の後ろから便利に顔を覗かせるような形で話しかけてきた。地味にびっくりした……モモもそれに気づいたようで首を傾げ、

「あれ? 見えるのに驚くんすか?」

「いや、他のことに気を取られてたしな。それに存在感があるうがなからうが後ろから急に話しかけられたら普通は驚くだろ」

「……はっ! そう言われてみればそうっすね! デフォで驚かれるから気づかなかったっす!」

「ツツコミにくい理由だな……」

今気づいたと驚くモモになんとも言えない感じで息を吐くしかない。いや実際携帯に気を取られすぎて気づかなかった。

普通の人間なら多少気を取られていてもなんとなく気配で分かるもんだが、モモクラスになるとさすがに分からないな……まあ絶対に気づかないといけない訳ではないからいいんだろうけど。

「モモも休憩か?」

「はい。かおりん先輩がルール確認がてら軽く打つらしいので私はちよつと休憩っす」

「あー……なるほど。確かに初心者相手にモモは……」

「さすがに私がいるとルール確認どころじゃないっすからね……というわけで、隣失礼するっす」

モモは特に気にした様子もなく理由を告げて隣に座ってきた。

多分加治木の指示だろうが、まあそりゃそうするだろう。

麻雀始めてまだ1日目の初心者。ルールすらまだ把握出来てないのに、モモが入ったらルールの確認どころじゃない。他家の捨牌とか

鳴き方とか見せるのにモモがいるとそれに気づけないというよく分からぬ事態になって混乱しそうだしな。

モモも今更自分の存在感の無さを気にしてどうこうってのはないかもしれないし、すんなりと来たのだろう……と思ったところでモモがこちらを向いて、

「ところで、誰かとやり取りしてたっすか？」

「ん？ ……ああ、まあ知り合いとな」

「知り合い……恋人とかっすか？」

「……いや、なんでそう思うんだ？」

意外と鋭いような質問をしてくるモモに逆に問い返す。するとモモは逆に目を丸くし、

「え？ だって東郷さん、友人は2人しかいないって言ってたじゃないっすか。だから知り合いって言うからにはそれ以外じゃないかなという推理っす」

「あ、あー……それもそうだな……」

俺は若干対応も答え方も間違ってしまったかと内心、頭を抱える。言われてみればそうだ。友人が少ないのに知り合いっていうとちよつと限られてくるか。

ただまあ、だからといって恋人とは限らないのだ。いやまあ恋人だけど。それを言う訳にもいかないので俺は何でもないような振りをしてこう言う。

「でも違くてな。やり取りしてたのはプロの時にお世話になった先輩とか、指導の依頼をしてくる……謂わば顧客とかだな」

「へえ……そうなんすか。結構人気者なんすね？」

「ありがたいことにな。こんな俺を気にかける奴もそこそこいるというか……ま、ちよつとした縁ってやつだ」

俺は本当の事を交えてモモの質問を躲す。嘘は言っていないからな。実際にプロ時代の先輩とか後輩、指導した生徒とのやり取りだし。

「それじゃ人付き合いに不自由とかはしてない系っすか？」

「それは……うーん、どうだろうな……なんとも言えないな」

満足してたらこんなオカルトつかって色々、もとい、エロエロすることなんてないだろう。

ただ俺には勿体なくくらいに良い奴らが仲良くしてくれてるなとは思う。ほんと、俺なんかにな。

「それはそうと明日、遊びに行かないっすか？」

「何でそうなる。っつーか明日も部活だろ」

「お昼過ぎからっすから時間はあるっすよ？ それに夜でもいいっすし」

いや、学生を夜に連れ回すのは問題が……っつて、またしても今更な懸念だな。この間も夜中に和を連れて行ったりしたし。

まあ、それは良いとしてもだ。

「遊びにねえ……別にいいが……」

「いいんすか!？」

「お前が聞いたんだろ。なんで驚く」

「いや、なんか学生と一緒に大人が——とかで怒られるかもしれないとは思ったっす」

「……まあ友達だしいいだろ。2人きりだとデートみたいだけどな」

「……あつ、そういえば……」

「今気づいたのか？」

「——なーんて、冗談っすよ。加治木先輩も誘ってみたっす!」

一瞬手を口元に当てて驚いたような表情を浮かべたが、すぐにけろりとした様子で追加の情報を口にするが、俺としてはその追加の情報に目を細めるしかない。

「いやお前……加治木と俺は出会ったばかりだぞ？ 来るのか？」

「誘ったらオツケー貰えたっすよ？ とうるか……私とも今日会ったばっかりっすよね？」

「……言われてみればそうだ」

いやほんと、言われてみれば……うん。よく考えたら今までも出会ってすぐに打ち解けまくってたからな。相手が良いなら俺としては拒否することもない。俺、実はコミュ力強者なのでは……?」

「ま、加治木が良いならいいだろ。後で詳細を送ってくれ」

「……やっぱ似てるっすね」

「え？」

「加治木先輩も同じ様に答えてたっすよ」

「……そう言われると何も言えなくなるな……」。

でも本当に兄妹どころか従姉妹でもないし血の繋がりも全くない。むしろ加治木が妹なら色々——いや、いいか。この話は。

「……とりあえず後でメールでもチャットでも好きな方で送ってくれ」

「じゃあ電話するっす」

「第3の選択肢が好きなのか？ ……いやいいけどな。それじゃあ後で電話してくれ」

「了解っす！」

ビシッと俺に向かって敬礼ポーズをしてくるモモ。その際に、紺色の制服に包まれた胸がたゆんつと重そうに揺れた——やめろ、くそっ……見ないようにしてたのに……見たらチンイラするからやめろ。

「ふふっ、楽しみっすね！」

「！ ああ……そうだな」

ベンチから立ち上がり、手を後ろにしてこちらを向くモモの屈託のない笑みにドキリとする。ぐっ、可愛い。そういうちよつとキュンとしそうな仕草やめろ。なんか俺に似合わないラブコメみたいなのが始まりそうになる。

美少女って別にそういうつもりじゃなくても可愛いし好きになるからずるいよな。まあ俺の場合は単純な性欲でしかないんだろうけど、常に可愛いしエロいからもうずっと実はやりたくて仕方がない訳だ。

しかし……そうか。明日はモモと加治木と遊ぶのか。普通に楽しそうなのが困るな。出来れば麻雀を打つ機会を増やしてさっさと役満をぶち当たりたいが、それはそれとして年下の美少女達と遊ぶのは楽しいし、なんかそこはかとなない優越感。いつものヤツてる時とか美少女を自分のモノにした優越感とはまたちよつと違う気持ちよさがある。

というわけで俺は結局断ることなく、次の日の約束に備えることにした。

「——ただいまーっす」

自宅のドアを開けて帰りの挨拶をしても真っ暗な家の中からは誰の声も返ってこない。

——そう、これは私のステルス（仮称）の所為で、家族からも存在を認識されない……。

「なーんてことはないんすけどねーっす」と

パチッと家の電気を点けて部屋を明るくする。そしてリビングのテーブルの上には書き置き。

要約——仕事で忙しいから今日は一人でご飯食べてね、みたいなこと。

うん、いつものことだ。いや、いつもって程でもないけど、稀によくあるというやつ。

父も母もお仕事忙しいというだけのこと、別に私を認識してないなんてことはない。

別にステルスのおかげで親からも愛されずに育ったとか蔑ろにされてひどい扱いを受けている……なーんて、漫画のような境遇という訳ではないのだ。

そりや生まれ持った特性は漫画みたいなものだし、親にも効いていたりするが、別にそのことで親がこちらへの愛情を失っていたりする訳ではない。

ありがたいことだ。親には感謝っす、とテーブルにあった夕飯用のお金を拝借しておく。

……まあきつと、普通の家庭ならもうちよつとコミュニケーションを取るのかもしれないが、うちはこんなものだ。若干放任主義なところがあつて子供に結構な自由があるタイプの普通の家庭。お小遣いだって毎月貰えれば、食事だって朝と夜の余裕がある時は一緒に食べる。

ただちよつと、人よりコミュニケーション不足かな？　と思う程度。仲も悪い訳ではないし。」

「ふふん、テレビ見ながらお料理するっすよー、ふんふくん」

しかしそのことで悲観的にはならないし、特にそのことで気にしてはいない。

こうやってテレビをつけながらお小遣い節約のために冷蔵庫から食材を取り出して鼻歌交じりに簡単な料理をするくらいの明るさだつてある。これだけで家の中がとつても陽気になる。

昔から家では声を出して何かをすることが多かったからこういうのにも慣れてる。声を出さないと親も気づけないのだから親に気苦労を掛けないようにと始めたことだが、こうやって明るく振る舞うのは精神的にも良い気がするので良いのだ。

「ご飯食べたら何するっすかねー。いつも通り、お風呂入ってからラジオを聞きながら勉強とか……」

毎日のローテーションとも言える過ごし方。ご飯とお風呂を済ませたら趣味のラジオを聴きながら勉強したり漫画を読んだり……まあ普通の女子高生らしいことをする。

麻雀もたまにやったりする——いや、ここは麻雀でもした方がいいのかも知れない。麻雀部に入ったし、大会も近い。

私を誘ってくれた加治木先輩の為に、特訓あるのみっす！　と心の中で意気込んでみる。

そう、加治木先輩。加治木先輩は高校でも一人きりだった自分を「欲しい！」と熱く求めてくれた恩人だ。

その人の為にも負けられない。なんだかんだで麻雀部は居心地が良いのもあるし、頑張りたいと思う。

「あ、でも……」

加治木先輩のことを考えたが、途中で今日会った新しい人のことも思ってしまう。それは、

「東郷さん……ふふーん、初めての男性のお友達っすー」

料理の途中ではあるが、携帯を開き、その名前を見て自慢気に口角が緩んでしまう。

ちよつと顔が熱いのはやはり男性だからだろうか。男性には縁が無かったし。

「不思議な人つすよねー」

その名前を見て改めて思う。東郷さんは自分のことが見える人なんだと。

今日街で出会った紫色の髪の男性で大人の男。

紫色のジャケットにちよつと赤みがかかった色のこれまた紫のワイシャツに紺色スラックスという、大人ではあるが、とても真つ当な会社員には見えない大人の男性に出会ったのだ。顔は結構カッコいい？ と思うが、目の下のクマが濃くて寝不足なのかな？ とも思う。なんというか、最初は二日酔いのホストか、ちよつとアレな職業に就いている人かと思った。後は……これは後から聞いて納得がいったが、ちよつと芸能人っぽくも思った。

実際に元プロ雀士ということではほぼ芸能人だった訳で、自分の直感とは間違いじゃなかったと後で思ったのだ。

しかし外側の情報も重要かもしれないが、私にとっては「私が見える」ことが最も重要なのだ。

私のことを他の人のように普通に気づけた人はいない。いなかった。

だけど東郷さんはどういう訳か、私が他の人と同じように普通に見えるようだった。

その時の衝撃はまだ残ってる。衝動的に走り出して友達になってと誘ったのもその所為だ。

今でもちよつと思ひ出すとドキドキするが、後悔はしていない。初めてだ。こんなことは。

「ふふ、明日着ていく服、後で考えないとつすねー」

人付き合いの為に着ていく服を選んだり、時間を掛けるのは面倒だ。

だが、今の自分は面倒に感じていない。

理由は分かる。新しく出来た2人の友人がいるからだ。

ただその友人のうちの1人は、

「……そういえば意外だったっすねー」

と、口にして言うのは今日の練習終わりのこと。

視界の端に入ってしまった——恋人らしき人とのチャットだ。

「ちよつと悪いっすね……」

覗いてしまったことに微妙に罪悪感。

加えて、一応女性の自分と遊びに行くことに対する彼女さんの心情を思っただけ少し申し訳ないと思う。

それと……ちよつとした残念もあるけども、それについては頭を振って誤魔化す。ちよつとした想像と期待だ。気づくのが早かったので執着もない。

「あ、そうっす。加治木先輩と東郷さんにそれぞれ連絡しないと」

と、そのことを頭から消して私は順番に大事な人に連絡を入れる。まずは加治木先輩から。

予定を確認するチャットを送りながら、私は明日を楽しみに声をいつも以上に大きくしてしまうのだった。

生まれ持ったモノ

「えーっと……待ち合わせ場所は——こつちか」

5月22日の日曜日。

俺は朝からスマホを片手に長野市内を歩いていた。

昨日の約束通り、今日は朝からモモと加治木と一緒に軽く遊ぶことになっていたのである。

まあ別に構わないんだが、出会って1日しか経ってない奴ら……しかも女子高生2人と遊ぶことになるなんてな……。

知らない人からしたら羨ましがられるかもな。もしくは通報されるか——いや、通報まではいかないか？ 腐っても元プロ雀士だし、社会的立場がある。

一応指導している子供の相手をしているようなもんだしな。何もおかしなことはない。

いや実際に今回は本当にただ遊ぶだけだし、やましいことは何もない。……まあそういうことをしたいとは思っているが。

「しかしそろそろ熱いな……まだ5月だつてのに」
歩きながら日差しが強くなってきたなと思う。

しかしそう言いながらも、なんだかんだで毎年5月くらいは既に暑かったりもするよな、と近年の異常気象っぷりを感じてなんとも言えない気分になる。

一応このいつもの服は通気性が良いのか、そこまで暑くは感じない……まあ良子がプレゼントしてきたものなので、何らかの曰く付きのものである可能性もあるが……とにかく物は良いので気にしないことにする。

さて、そうしている間にも目的地にたどり着く。

「ん……東郷さん」

「よう、来たぞ」

待ち合わせ場所に指定している神社の鳥居の前に近づいていくと、そこに鶴賀高校麻雀部の部長——じゃない。なんて言うか……まとめ役の加治木ともう1人が立っており、数メートルほどの距離になっ

たところで挨拶。そのまま近くまで行くと加治木が息を入れて、

「今日は付き合ってもらつてすみません、東郷さん」

「いや、気にするな。俺にとつても息抜きになる。それにまあ……モモとは友人だしな」

「……ええ、そういうことならいいんですが……つと、そういうえば肝心のモモは遅いですね」

加治木がポケットから携帯を取り出しながら言う。……なんでもいいが、私服の加治木は身長も高く、スレンダーなこともあつてモデルみたいだな……ショートデニムにスパッツ。ブーツやインナーの黒アウターの白が一体化したトップスも大人っぽい。肩にかけているレディースのバッグもオシャレだしな。

身長も女性にしては高い方だし、モデルとか向いてそうだな……と
「……おい、加治木。モモならそこに——」

「……ここにいるつすよー!」

「おおつ!? も、モモ! いたのか!」

「ふふん。最初からいたつすよ。驚かせようと思つて。……まあ、やつぱり東郷さんにはバレたつすけど。驚いたつすか?」

「心臓が悪い……」

加治木が胸を押さえてやれやれと言つた風に息を吐くと、モモは、大成功つす、と悪戯っぽい笑みを浮かべて喜ぶ。……うん、まあ実際俺にはずつと見えていたし、遠くから見た時も加治木の後ろにいたので何となく察していた。

しかしモモの私服も……これまたお洒落で可愛いな。

白いワンピースドレスのような服に半袖ジャケットのようなものを前を開けて着ており……つーかやつぱ乳でけえ……本当に高校1年生か? その乳で1年生は無理だろ。

いやまあ和やユキほどではないにしろ、それでもかなり大きくて目を引く。うーむ、揉みたい。吸いたい。挟ませたい。手が届く位置に

動く巨乳娘がいるとどうにもエロいことを考えてしまうな……一応今日はまだ遊ぶだけだし、自重しないと……そういうのは墮としてから考えることだ。

「それにしても……どうせなら親睦を深めるために部員全員呼べば良かったか」

「仕方ないっすよ。むっちゃん先輩やかおりん先輩達2年生は宿題があつて、部長さんは家の手伝いっすからね」

なるほど。一応誘いはしたのか。

まあ確かに、土日一部活がある以上、昼間は宿題なんて出来ないし、やれるのは朝と夜であるため、遊んでる余裕はないのかもしれないし、家の手伝いはまあ……しようがない。

昨日のモモは朝から街にいたが、もしかしたら部活まで暇だったのかもな。1人で街に行くのもアクティブで結構なことだ。俺もそうだから気持ちは分かる。ぼっちが全員インドア派かと思ったら大間違いなのだ。

「……ま、朝も早いからな。それでどうするんだ？」

「行く場所か……実は私も知らされていないんだが……どうするんだ、モモ？」

「行く場所は決めてるっすよ！早く行きましょう！」

「つと」

「うおっ……!?!」

モモが俺と加治木の腕を掴んで引っ張る。そのまま腕を組むようにして思わず声を上げた。何故ならだ。

横乳が俺の腕に……!!

むぎゆうっ♥ と俺の右腕に押し付けられるモモの女子高生らしからぬ乳房。服の上からでもその柔らかさと弾力は伝わってくるもので、中々に気持ちいい。

いきなり男に向かってこういうことを……と思ったが、どうやら気づいてないっぼいな。

くっ、気づいてないのか？ 役得だが、これを繰り返されるのは辛いぞ……。

男との距離感が分かっていかなかったりするのだろうと納得は出来るが、これは中々にムラムラさせてくれる。くそっ、これで今夜は地獄だな……抜きたくないのに思い出したりして。

「あまり引つ張らないでくれよ……？」

「あつ、ごめんなさいっす。はしゃいじやってつい」

「……ん、まあ良いけどな」

軽くそう告げるとモモがあっさり腕の力を緩める。……それはそれで残念なんだよなあ……くう、おっぱいの感触が離れた……。

とりあえず、俺と加治木は楽しそうなモモについていくことにした訳だが――

「――ああ、なるほど。ここか……」

「確かに……色々出来る場所ではあるな……」

俺と加治木は揃って高い建物を見上げて頷く。するとモモが胸を張り、

「ここなら移動時間をあんまり考えずに遊べるっすよ！」

と言って示すのは某有名アミューズメント施設。ゲーセンからカラオケ、ボウリングからダーツにその他各種スポーツ……なんでもござれの施設だ。

まあ、確かに、街を歩いて色んな場所を……ってやると移動時間で時間を浪費しそうだし、色々揃ってるここが良いと言えばそうなのかもしれない。

男の俺1人引つ張って買い物するつても気を使うだろうし、割と最適かもな。

――というわけで早速、3人中に入った訳だが、

「ゲーセンか……来るのは久々だな」

「私もだ。友人とたまに訪れる程度で……」

まず中に入ると1階と吹き抜けになった2階部分にゲームセンターがある。

周囲からは特徴的なここでしか聞くことの出来ない電子音が入り混じっており、俺からすると懐かしさを感じる。学生の時、一時期ボブと通ってたな……その所為か、一通りやったことがある……と思

う。3年生になってからは頻度が減ったし、プロになってからは殆ど行っていないため新しいゲームなどは知らないだろう。直近で行ったのはプロの時に1度、通りがかった店先のクレーンゲームをやりさんにせがまれたので1回やったくらいである。

「任せてくださいっす！ 私は時々来てるから大体は遊んだことあるので！」

「おお……それじゃ任せる」

了解っす、と元気よく返事をするモモについていく俺と加治木。なんというか、モモは詳しいみたいだな……。

まあモモが遊びたいと言うものをやればいいだろ。しかし何のゲームだろうか。女の子が好きそうなゲームか……クイズゲームか？ あれは確かカード持っているけど今も使えるんだろうか……しかし別に使えなくてもどっちでもいいとしてだ。女子が意外と好きなゲームといえばガンシューティングゲームとかか？ あれは割と老若男女誰でも楽しめると思う。2人プレイが出来るしな。あれもボブと記録塗り替えたな……。まあこれは大いにある。それ以外だと……コアな音ゲーとかか？ 音ゲーは苦手というほどでもないが、難しいんだよな……やっぱ他のゲームと比べるとちよつと苦手かもしれない……あ、いや1番苦手なのはパズルゲームだな。テトリスとかぶよぶよする奴とか未だに理解出来ん。階段とか聞いても理解出来ん。2連鎖が限界だわ。他はなんだ。シューティングか？ そういやシューティングはあまりやったことはないな……なんだ、白糸台の後輩だった倉橋って奴が持ってた女の子が撃ち合う謎のシューティングゲームならやったことはある。ただ巨乳キャラがいなくてちよつとな……と思っただけなんかに止めた気がする。逆にボブはガッツリ嵌っていた。アイツ、ロリコンだからな……。

「——さあ、ここっす！」

「ん……って、ここは——」

色々と候補を考えていたところでモモがある一角で足を止める。

これは紛うことなき、

「ふむ……いわゆる、エアホッケーというやつだな」

と、答えを加治木が口にしてくれた。

モモがやりたいと言つて連れてきたのは、まあゲームといえばゲームなのだが、体を動かしてやるタイプの……なんて言うんだ？
分からん。とにかくアクティブなゲームだった。

なんでこれをモモがやりたいのかはよくわからないが――

「ふふふ、他のゲームは1人でも出来るんですけど、これは複数人いないと遊べないっすから一度やってみたかったんすよね！」

「あー……」

なんとも言い辛い理由をご機嫌な様子で答えるモモ。なるほどな……そう言われるとやらない訳にはいかない。

「それじゃあやるか」

「ああ。だが3人だとチームを分けなければならないな」

「どう分けるっすか？」

「俺1人でいいだろ。お前達で組め」

そういう訳でさっさとチームを決めて硬貨を投入する。まあ唯一の男で大人の俺が2人側つてのも……まあ遊びなのだからおかしいとまでは言わないが、それが適当だろうしな。

「それじゃあ行くっすよー！」

「ああ、来い」

という訳で早速、モモの掛け声でゲームがスタート。それぞれマレットと呼ばれる器具でパックを打ち出し、相手のゴールを狙う。先に10点を入れれば勝利だ。

……まあこのゲームはシンプルだし、一々説明することもないな。俺も何度かやったことある。

とはいえ2対1は初めてだし、どうだろうか……と考えているとモモがマレットを振りかぶり、

「ていつ」

「っと」

「！くっ……」

「ああっ!? もう1点入れられたっす!?!」

……あー……なんというか、コメントに困るな……。

ぶつちやけ運動がそれほど得意じゃないのか、モモのそれは本当にそこらにいる普通の女子って感じた。

強いていうなら乳揺れが最高ってだけ。うん……いや、それだけで十分じゃないか？

昔ボブとやった時のような激しい打ち合いはない。あの時はパツクが相手に激突するくらい白熱してたからな……。

とはいえこれはこれで女の子とキャツキャしてる感じが楽しい。

「角度を計算して……ここだ！」

「つと、危ないな」

「あつさりと防がれるか……モモ、次はコンビネーションだ。2人で協力するぞ」

「分かったつす！」

……とまあ、加治木が時折油断ならないこととしてくるので完全に気を抜ける訳でもない。

やっぱり加治木は頭が良いし、指揮も上手い。的確にモモのカバーをするし、角度を計算して返しにくいところを突いてくる。

とはいえな……2人とはいえ女子に負けるほどではない。モモならこのゲームでもステルスを応用出来そうだが、モモのステルスは俺には効かないからな。俺にとってはやはり普通の女の子だ。

しかし1点も入れさせないのはそれはそれでなんとも言えないため、一応適度にミスっておく。4点くらいでいいか。

「やったあ！ 入った！ 入ったつすよ！」

「ふう……麻雀と同じで、東郷さんの守りは堅いな……」

「まあ、これでも運動はそれなりに得意だからな——ということで終わりだ」

「あつ」

「つ……油断した……！」

と、いうことでひとしきり楽しんだところで最後の1点をゴールに叩き込む。喜んでる隙を狙うとか割と常套手段だよな。

「ああ!? 東郷さんずるいつすよ〜！」

「ははは、馬鹿め。勝てばいいんだ、何を使おうが」

「む、油断したつす……」

「まるで悪役のような台詞だな……」

ぐぬぬ、とこちらを見て悔しそうにしているモモと、苦笑気味にツッコミを入れてくる加治木らに向かつて勝ち誇る。

まあなんであろうと勝つのは良い気分だし、こうやって分かりやすく勝ち誇った方が盛り上がる。

「それじゃまた次のゲームで勝負つす！ 今度は負けないつすよ！」

「……ああ、何でもこい」

それにまあ……モモが楽しそうなのでノツてやるのも悪くないだろう。

下心がある身ではあるが、彼女とは友達として遊びたい、友達として付き合いたい筈だ。

ならちやんと友人として一緒に楽しまないと。

「ふっ……モモ、楽しそうだな……」

「……そうだな。お前も楽しんでるか？」

「ええ、勿論です。こういうった息抜きも悪くない」

加治木がはしゃぐモモを見て微笑を浮かべる。一応こっちも楽しんでるようで良かったが……まるで保護者みたいだな。

まあ今の俺もひよつとしたら人のことを言えないのかもしれないが……俺の方は下心がある分マシだろう。マシってなんだっけ。

まあとにかく、俺と加治木はモモに付いていき、色んなゲームや遊びに挑戦した。

「モモ！ そっちいったぞ！」

「任せてください加治木先輩！ ステルスは得意つすよ！」

「ずっと隠れてたら時間切れになるぞ……」

——ガンシューティングゲームをやる2人を後ろから眺めたり、

「何……？ どういう意味だ……？」

「加治木先輩、一応分からないなら問題飛ばすことも出来るみたいっすけど……？」

「いや待て……もう少しで分かる筈だ……ふう、冷静になれ……焦つていては分かる物も分からない……こうやって落ち着いてじっくり

と問題を眺めれば……そう、知っている筈の答えが出ない筈がない——！」

「あ、時間切れっす」

「……………」

「……時間、見てなかったのか……」

「は、恥ずかしいから指摘しないでくれ……！」

——クイズゲームで白熱してミスったところを恥ずかしがる加治木を見たりと……まあ他にも色々をやった。

「とりやつー！」

「見事なスイングだな……」

「当たってないけどな……」

「うう……難しいっす……」

途中からスポーツが楽しめるコーナーに行つて卓球やら野球やら色々やってみるが……どうにもモモは運動がそれほど得意じゃないようで、かなり苦戦していた。

楽しそうなので良いにしても、ちよつとせがまれるので面倒ではある。

というのも今やってるバッティングセンターは、

「最高難易度メジャー級……160kmの剛速球をホームランに出来れば豪華賞品をゲット……か」

「ああああああ！ 全然当たらないっすー！」

「なお、危険なので小さなお子様の挑戦はご遠慮下さいって……いやいや、そもそも打てる奴がいらないだろう……モモ、諦めた方がいいんじゃないか？」

「うう……でもあの商品、ちよつと欲しい——っすー！」

そう言つて再び空振りするモモ。スイングの音ではなくクツションに当たったボールの凄まじい音が裏にいる俺と加治木にも聞こえる。

あの商品、というのは受付のショーケースに飾つてあつた幾つかの商品のうち……おそらくぬいぐるみか何かだろう。多分。やたらデカイダイオウグソクムシのぬいぐるみがあつたし、モモもそれを見て

いた——気がする。

なんでもショーケースの中から好きな商品を選べるみたいだが、確かにゲーム機やフィギュア、先程のデカイぬいぐるみなど、全体的に高そうな物ばかり置いていた。

ただまあ……加治木が言うようにこれクリア出来る奴いないだろう……それこそメジャーから現役バリバリのスラッガーでも連れてこないは無理そうだ。まず当たっても飛ばないだろうしな。当たっても力負けしてバットを落としてそうだし、自打球喰らいそうでハラハラする。

「むう……こうなったら東郷さんに交代っす！」

「……無茶言うな。こんななんただの麻雀元プロでやさぐれたホスト扱いされる俺が打てると思うか？」

「自分で言うのか……」

うるさいぞ加治木。自分で言った方がダメーシは少ないから言っただけだ。

それにこんなのやってもしょうがない。野球つてあんまり好きじゃないから経験も殆どないし……。

「……やっても結果は見えてるからな。やってもしょうがないだろ」

「……実は小さい頃はプロを目指していた天才野球少年だったりしないっすか？」

「悪いがしないな……むしろ外にはあまり出ないインドア少年だったぞ」

「というか野球経験者であっても難しいだろうな……」

「むう、やっぱり駄目っすか……商品欲しかったっすけど……」

肩を落として残念そうなモモ。それほど残念そうにするとは、よっぽど欲しかったのか？　しかしまあ、無理なものは無理だからなあ……。

「ほら、そろそろ腹減ったろ。食い物奢ってやるからそれで我慢しとけ」

「おお！　さすが大人の東郷さん！　その財力に憧れるっす！」

「えっと、いいんですか？」

「いい。むしろ子供に払わせると外聞が悪いから大人しく奢られてくれ」

年上の大人としてもそうだが、元プロという立場を考えるとそういうのはかつこ悪いし無しだ。

これはお世話になった人から教えてもらったことだが、プロってのは子供に夢を与えないといけないから、金があるならどんどん使つて見せつけておくのが良いらしい。

良い車とか腕時計とか、とにかく羽振りを良くしておく、それだけプロって儲かるんだなつてことで夢が広がる。プロを志望する人が増える——つてことらしい。

そんなことしなくてもプロ雀士志望が少なくなることなんてない気もするが、確かにプロなのにセコいつてのもなんか……というわけで俺はそうしている。

とはいえ俺の財力なんてゴミみたいなもんだから憧れるのは止めとけ。憧れるならはやりさんとか良子とか三尋木プロみたいなスター選手に憧れた方が良く。日本の女子プロは結構タレントが揃つてるしな。儲けもとんでもないぞ。

しかしこの場において、俺が1番の財力の持ち主であることは言うまでもないのでさつきとフードコートで飯を買ってやることにする。

「何食べるんだ？」

「午後には部活も控えてるからな。栄養はきちんと摂っておいた方がいいだろう」

「んー、色々ある……つてほどでもないっすね」

「フードコートつってもデパートのとは規模が違うしな。……後、こういうところのは微妙に割増だ」

「でも奢ってくれるんすよね？ あ、私ホットドッグにオレンジジュースで」

「少し気が引ける感じもするが……私はナポリタンとアイスコーヒーをお願いします」

「……まあセットだと若干ドリンク安くなるからな。別にいいが……」

というわけできつさと注文することに。ちなみに俺は焼きそばにメロンソーダだ。……どうでもいいけど、こういう外のお店じゃないとメロンソーダって飲まないから何故か頼んでしまう現象ない？俺だけか……？

「時間的に食べて少ししたらお開きになるか。もう少しで部活もある」

「そうっすね。部活もありますし。あ、先輩達のお土産にポップコーンでも買っていったらどうっすか？」

「ナチュラルに出費を増やそうとしてるな。いいけどよ」

たかだか数百円、数千円の奢りくらいで懐が厳しくなるでもないが、塵も積もれば山となるとも言おうし、なんかこう奢ってばっかだと予想以上に貯金が無くなりそうだな……。

「——あっ」

「ん？ どうした？」

「いや、中学の時の同級生がいて……」

と、俺が懐の心配をしながら注文を終えて席に戻ろうとしたところでモモが遊びに来ている女子を見てそう言う。

俺も見れば確かに同じくらいの歳の女子。女子高生って感じだな。特に興味もないが、俺はなんとなく質問する。

「知り合いか？」

「えっと、まあ、何回か話したことあるかなーってくらいっすね」
「なるほどな……」

と、俺も加治木もそれほど深くは突っ込まない。

モモの過去には触れていいかどうか分からないからな。本人は気にしてないように見えて気にしてるのかもしれないし。

なので気を使って別の話題でも振ろうかと思っていると、モモが一瞬、俺や加治木をチラツと見て、

「……私、ちょっと話しかけてくるっす！」

「え？ ——あ、おいつ……！」

「それはどういう——」

モモが急にその集団を追いかける。

俺と加治木が虚を突かれたという風に驚きを見せている間に、モモは小走りで彼女らの背後から、

「お久しぶりっすー!」

「え……? 急に声が——って、きゃあっ!」

「あー……やっぱそういう反応になるっすよね……ってことで私のこと覚えてないっすか?」

同級生だと言う集団にいきなり話しかけたモモは驚かれつつもそのまま自分を指して憶えてるかと質問する。

ちよつと心配になるが、まあ幾らモモの影が薄いとはいえ、一度話したことがあるなら忘れようもないだろう。ある意味でインパクトは凄いいからな。

だが、

「えつと……知り合い?」

「あ、あー……そういえば同じクラスにいたような気も……」

俺の予想に反して彼女達はモモのことを憶えていないようで、

「……えつと、ごめん。名前、なんだっけ?」

「……あー、あはは、憶えてないなら大丈夫っすよ。ちよつと話したことがあるくらいで、名乗ったかどうかも憶えてないっすから」

「……そっか。ごめんね、憶えてなくて」

「ううん。気にしなくていいっすよ。それじゃ」

「……? うん、それじゃあ……」

モモと話していた少女は頭に疑問符を浮かべながらも、モモに軽く手を振って別れる。

さしずめ、なんで話しかけてきたのか。何か用事でもあったのだろうか、ってところだろうか。

まあそれほど関係の深くない同級生からいきなり話しかけられたら誰でも面食らうといえはそうかもしれない。

モモもそこまで気にしてる様子はなく、あっさりとこちらに戻ってきたからな。

しかし、

「……あ、ちよつとお手洗いに行ってくるっす」

「ん、ああ……」

「……おう」

モモは突然、そう言って再び席から離れる。

何となく、微妙な空気になったのは気の所為ではないだろう。

実際、俺も加治木も今のやり取りは聞いていたからな。

だからだろうか。俺も加治木もなんとも言えない様子で露骨に口数が少なくなった。

「……気を使わせてしまった……といったところだろうか……」

「……さあな。とはいえ、モモもあまり気にしていないようだし、他人が気にするのも違う気もするが……」

「そういうものですか……」

と、何気ない会話をしたところでまた会話が止まる。

加治木は話しやすいが、俺も加治木もお喋りな方じゃないからな。

それに加治木は俺に対して目上の方に対する姿勢を崩していないのもあるし、モモが間に入ってくれた方が接しやすいかもれない。

部活ならこれでも問題ないんだが、こういう遊んでる時だと……ちよつとだけ気になる。

いやまあもつと気になることはあるんだが……、

「……ちよつと俺もお手洗いに行ってくる」

「……えつと、私もちよつと行くこうと思ってたのですが……」

あれ？ そうなの？ それなら加治木に任せるが——

「……ふっ。ですが全員お手洗いに行つてその間に注文が来たら店員が困るでしょうし……ここは私が残ります」

「……いやまあ、別に俺が残つてもいいんだけどな……」

「いや、ここは年長者にお任せします」

しかし加治木は譲らなかつた。いや、そもそもトイレの話の筈なんだけどな……俺も加治木もトイレの話として話していない。

……だが加治木がここまで言うなら仕方ないと自分を納得させつつ、俺は席を立つ。

そしてモモと同じ方向に向かって歩いていく。

するとお手洗いが見える——が、モモはそのお手洗いが廊下の

奥のベンチに1人でいて、

「……あ、東郷さん」

「ん」

と、俺はトイレに入ることとはなくそのまま、虚空を見つめてアンニュイな表情のモモに近づき、ベンチに腰掛ける。

そして隣を見ずに話しかけた。

「なんでここで座ってるんだ？」

「……なんでつすかね？ やっぱりに気にしてるのか？」

「なんでお前が疑問形なんだよ……」

「あはは、ごめんなさいっす。いや、なんていうか……自分でもよく分かんないんすよ」

と、モモは一応の笑みを見せながら言った。自分の手のひらを広げて見つめながら、

「正直、本当に1、2回話したことがある程度ですし、そもそも私は気にしてないっす。こんなこと今更っすからね」

と、諦めてるのか、ちよつとだけ寂しそうに微笑を浮かべる。実際、モモの特異性を考えると本当に今更で、今まで何度もあったことだろう。

いや、そもそも気づかれなれないことの方が多いのだから、憶えられるほど関わるのがほぼないのだろうし、それを考えると先程のケースは珍しいのではないだろうか。

「私としては、東郷さんと加治木先輩が私に気を遣わなくていいように、ちよつと自虐ネタみたいな感じで、やっぱりに憶えられてなかったすっつて場を和ませようと思っただんすけどね。……ただ——」

と、モモは前置きして表情を変えて、

「……久し振りに誰だっけ？ って言われるとダメーじ結構デカいっすね。最近はそもそも関わるのが少なかったから予想外っすよ。それに、その状態で2人のところに戻ったら、なんかまた気を遣わせそうでこうやって……はは、私、ダメダメっすね」

そう言っつて今度は自虐……自嘲するように笑みを見せるモモ。

俺はそれを見て、

「……気にするな——つて、自分でも言い聞かせてるだろうけどな。実際俺や加治木は駄目だなんて思っただけで……別にそのままでもいいだろ。嫌なことでも落ち込むことなんて誰にだってあるもんだ」

「あはは、そうなんすけどね。……ただまあ、こういうことがあると時々思うんすよ」

「……時々思う？」

はい、とモモは笑みを表情から消して頷く。

「この……私が生まれ持った特性が無ければ……私はもっと楽しい普通の人生を送れたんじゃないか。なんで私はこうなのか……」

「……………」

「生まれ持った自分の……なんていうんすか、力？ ……まあなんでもいいつすけど、それは変えられない。一生付き合っていくしかない」

つまり、

「私にはこれからも……こういうことが起きるってことつすよね。なんかそれを考えると……時々凄い嫌というか……とにかく気が滅入るつすよね……ひよつとしたら数少ない私のことを知ってる人も、いつか私のことを忘れてたり……もしくは完全に誰からも気づかれなくなるのか……そういうことがありえないことじゃないんじゃないかって思っちゃうんすよ」

馬鹿みたいっすよね？ とモモはこちらを向いて、そこで再び笑みを見せる。

だがその笑みは……ただの空元気。力のない笑みだった。それを見て俺は考える。モモの悩みは分からないことではない。自分の生まれ持った力。自分に嫌なことを引き起こす能力。

それらが引き起こす “孤独” というものに慣れているとはいえず……傷つくことに完全に慣れたという訳でもないだろう。

いや、慣れたとしても、辟易することは避けられない。

そして同じことが起きる度に過去の傷を思い出すし……もっと悪いことが起きるかもと不安に思うのも分かる。

……ああ、確かに理解するな。

気にしてない。慣れてる。吹っ切れたつもりだ——とはいえ、それを連想させるようなことをすれば嫌でも過去のことを思い出すものだ。

誰だってトラウマや、それに繋がる物は避けたがる。

モモにとつてはそれが……コミュニケーション。

人と関わることで自分が嫌な事を思い起こさせる物なのだ。

故に今まで避けてきたし、これからも狭いコミュニティの中で生きることを彼女は望むのだろう。

どうせ無駄になるのなら最初から期待せずに何もしなければいいということだ。

加治木や麻雀部の部員。それに一応……俺とも出会ったことで多少はマシになってるのかもしれないが、モモにはそういう悩みがあった。

……まいったな。

俺は重たい息を吐く。その気持ちは理解るとはいえ……俺にはその悩みを解決する方法はない。

漫画やドラマみたいに、分かりやすく言葉や行動を起こして悩みを解決してあげてハッピーエンド——なんてことは俺には出来ない。

……俺に出来るのは、精々——

「……はあ~~~~~……モモ」

「はっ。」

俺は重すぎる腰を上げる。

こんなこつ恥ずかしい上に酷く気が乗らないことはしたくないが……俺はモモに向かって言う。

「お前の悩みに指導者らしい答えが出せればいいんだが……俺が出来るのは聞いてやることと……あー、なんだ……その……」

「……まあ聞いてくれるのは普通に……というか結構ありがたいつすけど……」

歯切れの悪い俺に対し、モモは控えめに感謝を示す。

だがそうではなくてだな、と俺は咳払いを一つして、

「それと……ちよつと、二元気を出させてやることくらいだ」

「……元気、つすか？」

「ああ。……ついてこい」

「えっ？ あ、ちよつと……!」

俺は決心と共に頷き、モモの手を引いてやる。女子高生（巨乳）のスペースの手。いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。

このブースの隣だったな、と俺は何がなんだか分からないといった様子のモモを連れて隣の施設へ。

そこは飯を食いにくるまで、さつきまで遊んでいた――

「……バッテリーセンター？」

モモがその場所の名を疑問符付きで口にする。

そう、俺がモモの手を引いて連れてきたのは先程、モモや加治木と遊んでいたバッテリーセンター。

とはいえだ。

「え……ひよつとして遊ぶんすか？ ……でも東郷さん野球はそんなに好きじゃないからつてやつてくれないっすし、私はもう十分遊んだっすよ?」

「……ああ、さつきは悪かったな」

そう。さつきまで、俺はどれだけせがまれてもバッテリーングに挑戦しなかった。

しかし今は違う。非常に気は乗らないが、

「……さて、商品が出るのはここだったか」

「え? ……つて、さつきの――」

俺はつい先程までモモが挑戦しまくってた1番奥のボックスの前で立ち止まる。――良かった。人は殆どいない。

「えっ……えっ?! いやいや、無理っすよ東郷さん! あの、なんとなく何してくれるかは分かったっすし、気持ち嬉しいんですけど……さつき東郷さんも言つてたじゃないっすか! さすがに160キロをホームランは出来っこないっすよ!」

「……まあ、そうだろうな」

扉を開けて、網を潜り、ボックスの中に入る俺をモモが背後から驚いた様子で止めようとしている――が、俺の意識は既にそこにはな

い。俺はバットを選びながらモモの声に応答する……つと、木製バットがあるな。これにしよう。

「やつても結果は見えてるからやるだけ無駄って言ってたじゃないっすか！ だから別に……私の為に無理しようとしてくれなくても——」

「……ああ、確かに言ったな」

だが、と俺はポケットから硬貨を取り出し、それを手前の機械に入れながら、

「……別に出来ないって言ったつもりはない」

「えっ？ いや、言ってたんじゃ——」

「まあいいから見てろ——」

と、俺はモモにそう言い捨て、バッターボックスに立つ。

息を整え、足を開いて木製のバットを構えて正面を見据える。

するとモモが俺を見て、

「つて、なんかフォームが変わっすよ!? 私が言えることじゃないっすけど！ 明らかに野球未経験じゃないっすか！」

「……………」

「……あれ？ でもなんか様になってるといなか堂に入ってる感じがするっすね……？ これはもしかしたらもしかするんすか？」

……ちよつと後ろの声が気になるが……まあこのくらい何でもないっっちゃ何でもない。

ただまあ——野球は本当にやったことはないからな。体育の授業で触りだけやったことがある程度だ。

「！ 来るっすよー！」

と、モモの声が届くより先に俺はそれを見ていた。

遠く——おそらく実際の野球のピッチャーと同じ程度に離れた場所からマシンがボールを放つ。

「！」

そして一瞬。

ボールがストライクゾーンに辿り着くのに1秒と掛からない。気がつけば通り過ぎてるレベルの速さでボールが飛んできた。

俺はそれをじつと、ただ眺める。

するとまたしても後ろから、

「傍目から見てもやっぱ速すぎつすよね……いや、やっぱ無理つすよ。真つ先にここに来て商品取ってくれようとするっただけで十分嬉しかったつすし、危ないからやめた方が……」

「……だから見てろっつの」

全く……せつかく重い腰を上げたっつのにそれをさせた本人がめつちややめさせようとしてくるんだが……。

正直やめていいならやめたい気もするんだけどな。

ただもう——こうなったら、やめられない。

そういうものなのだ。

だからもう俺はやり切る。

バットをしつかりと握り、正面、そしてホームランマークを見る。

……確かに、野球経験はないし、160キロっつののは中々の速さだったな。

——マシンが2球目を放とうと動いている。

昔聞いたことがあるが、確か野球で出るような最高速度である160キロっつののはバッターに到達するまでに0.38秒ほど掛かるらしい。

——マシンが今にも2球目を放とうとしている。

人間の単純な反応速度っつののはアスリートで0.1秒。全身反応をするなら0.3秒は掛かる。

つまり160キロに反応して打つというのは、普通の人間なら不可能。アスリートでも目で見ていているというより、殆ど反射的に動いているということだ。

並の人間にこれをヒットにする——ましてやホームランを打つことなど難しいだろう。

繊細なバットコントロールだって要求される。

この棒を的確に、それこそ目で見て的確な角度で叩かないと無理なのだ。

——だが、

「！」

——マシンがボールを放つ。

この時には既にバットを振るくらいの気持ちでいかないと難しいだろう。

……しかしこんなものは——

「……ッ！」

「ほら空振——ええっ!?!」

俺は自然体でボールにバットを叩き込む。

狙いは正確。寸分変わらず狙ったところを叩き、ボールを遠くへ運んでいく。

打球は同じ様に高速だ。本当の球場のように130メートルとか飛ばさないとホームランって訳でもない。

故に必然的に、打球が到達するのは一瞬で、

『——ホームラン!!』

バント、とホームランマークにボールが当たり、同時に上からキャラクターのような声でホームランコールが響く。

「……ふう」

そこでようやく俺は息を吐いてバットを下げる。

バッターボックスに付いた己の靴の足跡を消しながらバットを戻し、そのまま網と扉をくぐって出る。

また球数は残っているが目的は果たしたし、そもそもこれ以上やりたくはない。

だからさっさと受付に行つてモモに欲しい商品を選ばせてやろうと思つたのだが、

「……モモ?」

「……」

モモが固まっている。

こちらを見たまま、驚いた表情のまままで固まっている。

「……ほら、受付行くぞ。好きな物やるから選べ」

「……え? えっ? ……ええっ!?! と、東郷さん……今のは……今のはなんなんすか!?!」

3回くらい驚きの声を上げてモモが動き出す。

俺は目をそらしながら、一応その質問に答えた。

「ホームラン打ったぞ。これで商品が貰えるだろ」

「いやいや！ そうじゃなくて……めちやくちやすごかったつすよ!? 私、バット振るの見えなかつたつす！ なんなんすか！ 東郷さんって実は本当に元プロ野球選手なんすか!?!」

「一度もプロ野球選手だったことはないし、野球経験も本当になんないんだけどな……まあ、なんだ。偶然打ったら当たったぞ。良かったな」「や、ヤバすぎるつす……うわあ……今の、なんていうか……ちよつとビリッて来たつすよ……ヤバいつす……」

「何がだよ……」

俺は若干げんなりしながらも受付に行つて、混乱？ 状態のモモに代わつて商品を受け取る。……受付の人から物凄い目で見られたし、実際モモみたいにプロ（野球選手）ですか？ って聞かれたから、はい、プロ雀士です”——つて答えておいた。もっと見られたけどな。とはいえ商品はゲットだ。

「うおっ……受け取つてみるとマジでデカイし意外と重いな……ほらっ」

「うわっ……ととつ……」

「大丈夫か？ 重いなら俺が持つてやるが……」

顔が隠れるくらいにでかいぬいぐるみをモモに渡すと、若干ふらつきながらもそれをしっかりと抱きかかえる。一応気を使つて持つてやるうかと尋ねるが、

「……い、今はいいつす……しばらくは私が持つ感じで……」

「……まあそれでいいなら構わないが……それで、なんだ。元氣は出たか？」

「それは……はい。なんていうか、色んな意味で元氣づけられたつていうか……とにかく嬉しいつす。東郷さん、ありがとうございますつすよー!」

「……そうか」

その歯切れの悪さに思わず笑つてしまうが、とにかく元氣が出たな

ら良かった。

これなら俺が身体を張った甲斐もある——

「っ……」

「うわつと……東郷さん、どうしたんすか？ 急に立ち止まって」

「……いや、何でもない」

「本当っすか？ あんな豪速球打って腕が痛んだりしないっすか？」

「いや、本当に大丈夫だ。まあ打った瞬間は若干痺れたかもしれないが……今は問題ない」

「それならいいんすけど……怪我とかしてたら申し訳立たないっすし、なんかあったら言っつてほしいっす」

ああ、と頷いて再び歩き出す。

加治木のところまで戻ろうとしたところで僅かに頭を押さえて立ち止まるが——まあ大丈夫だ。実際に、腕や身体に痛みはない。

それにもし、何かがあったとしても……それは、一々口に出すことじゃない。

とにかく良かった。たまには良いこともあるもんだな……。

「——加治木せんぱーい！」

「っと、遅かつ——なんだそれは……？」

「ぬいぐるみっす！ 聞いてください加治木先輩！ 東郷さんっつてば、すごかったんすよ！ 160キロの豪速球をこう——ズバーンツ！——と一瞬でホームランにして……！」

「ああ、それで遅くなったのか……まあ良かったな、モモ」

「はい！ それと遅くなって申し訳ないっす！」

「いや、気にしていない。——それより、注文していた料理もそろそろ届く頃だぞ」

「あれ？ 意外と遅いつすね？」

確かに。俺達が注文してからもう結構経った筈だが……？

「なに、少し遅くなるかもと思ってな。店員に言っつて、少し遅く作っつて持っつてきて貰うように伝えておいたんだ」

「おお……！ さすが加治木先輩っす！」

「ああ……なるほどな……」

さすがの気遣いだ。やっぱこいつ、実は大人だったりしないか？
もう成人してるとか……。

——それはその後、小声で俺に伝えてきたことにしてもそうだ。

「……モモのこと、ありがとうございます。東郷さん」

「……気にするな。これでも友人だからな」

「ふっ……そうですか……」

と、お互いに口角を上げて小さくやり取りをする。

それにモモが気づき、何を話してるんすかと混ざってきて——まあそんなこんなで午前中のちよつとしたお出かけは終わった。

ゲームセンターに遊びに出かけた日の午後は普通に部活だ。

「うーん……このままじゃ負けてしまうぞー……むしやむしや」

「蒲原……私達との対局ならともかく、元とはいえプロとの対局でそんなにながつり食べながら打つのは如何なものかと私は思うのだが……」

「そ、そうだよ智美ちゃん！ 真面目にやらないと……」

「わはは。皆は固いなー。そもそもこのポップコーンは東郷さんが持ってきたものだぞー？」

「そ、それは確かに……うむ……」

「……まあ真面目に打つなら別に飲食くらいなら構わないと思うぞ。麻雀中の飲食ってのはプロでもよくある。……誰だったか……ど忘れしたが、対局中にカツ丼をがつり食べるプロに比べたらマシだ」
「む……それは確か——あれ？ 確かに憶えてたのに思い出せない……カードも余ってるのに……」

「あー、分かるぞー。絶対憶えてるのに何故か出てこないのってあるよな。テストとかでよく——」

「それは勉強してないからだろう……！」

「わはは……正論は時に人を傷つけるぞユミちゃん……」

……いつも思うがこいつら、黙って麻雀打てないよな……。

まあ今まで行ってきた学校の殆どがそうだった気もするが、風越女

子や清澄は意外と真面目だったか？ 逆に有珠山とか龍門渚は喋りまくりだったな……特に有珠山。

それだけ仲が良いと捉えることも出来るため、あながち悪いこととも言えないし、別に注意する気もない。真面目に打ってあればそれでいいのだ。

だがそんな中で1人、気になる奴がいる。

「……………」

「……なあ、ユミちゃん。なんだかモモの気配がいつも以上に薄い気がするんだけど……なんかもう消えてる？ というか最初から実は対局してなくて、実は三麻だったり……？」

「……いつもなら何を馬鹿な、と真面目に取り合わないところだが……確かにモモのステルスが極まってるな。比較的気づく頻度の高い私でも見失ってしまう……」

「うむ……」

「えっ……？ も、桃子さんいたんですか……？ 一体どこに……？」

対局を眺めてるだけの妹尾が辺りをキョロキョロと見渡すが……一応、普通に席に着いて麻雀打ってるんだよね……。

俺にはモモが見えるから分かるが……他の奴では気づけないほどにステルスが効いている。

その原因は定かではないが……俺から見ておかしいことは確かにある。それは、

「……………」

「……………」

……まあ、なんだ。目を向けると目が合って、モモがふいつと目を逸らしただけなのだが……。俺が目を向けると即目が合うということとは、即ち俺の方を見ているということだ。

そう。モモは先程から俺を何故かチラチラと、あるいはじーつと視線を送ってくる。

そしてそれ以外には麻雀を打つ以外に何の行動もしない。

それが無意識のステルスの強化に繋がってるのかもしれない——が、ぶつちやけよくわからないな。因果関係があるかどうかとも全然知

らんし。

そもそもなんで俺を見てるのかも分からない。なんだ？ まさか先程のことで俺が気になる訳でもあるまいし……。

それともあれか？ そろそろ俺が胸を見てることがバレたか？ でもあれは仕方ないじゃん……モモみたいな可愛いのに細くておっぱいがでかい。しかも動いたりすると揺れたりするんだからそりや見るだろ。男なら見る。見ない奴はおかしい。女でも巨乳には自然と目が行くという研究結果が出てるといふのに。

だから俺が巨乳に目がないのは何もおかしくないのだ。……とまあ、クソどうでもいい言い訳をしたところで、何が分かるでもない。俺が出来るのは普通に麻雀を打って……イケそうなら役満を上がつて女の子を墮とすだけだ。

そういう訳だからモモと同卓してる今はチャンスだ。それに何故かモモは今ちよつと上の空だし、振り込む確率が高い。

それもステルスだから俺以外には当たり牌を切っても相手がロン宣言しないので振り込んだことにならない。

つまり俺にしか振り込まない訳だから直撃させやすいのだ。それは俺のオカルト的に非常に良いことと言える。

そういう訳でさつきから一応真面目に打って指導してモモの視線に耐えながら役満来ないかなーつてのんびりとしてる訳だが――

「――！」

つと、キタ――！!?

そんなこと考えてたら役満来たぞ!? 正確には和了れそう！ 狙えそう！ そんな手牌だけど！

でもまあこれはいけるか……??

今の俺の手牌は……索子だらけだ。

それも二索、三索、四索、六索、八索……それに発。

役満、緑一色に必要な牌が殆ど……暗刻で揃ってる。一向聴だ。

この役満、緑一色は簡単に言えば――緑色の牌。

竹、とも言われる索子の緑色の牌。赤が含まれてない牌で作る役である。

そしてこの役満。意外と自由度が高く、和了りやすいのだ。なにせ待ちはなんでもオツケーだし、鳴いても構わないから牌だつて集めやすい。

まあ役満であるため、それでもそれなりの和了りにくさはあつても、他の役満よりは十分和了りやすい。

故に期待値は高い。振り込む確率だつて高い。待ちも広く取れるから仮に他の奴のを見逃しても和了れる確率が全くないとも言えない。

これはなんとしてもモモに直撃させねば……！

「そろそろ逆転しないとなー」

「そうはさせない。……が、私としても一度くらい元プロに土をつけてみたいところだ」

俺は期待しながらその時を待つ。蒲原や加治木も頑張ってるが、俺の狙いはそつちじゃない。

和了りやすいだけあつてそういう意味でも気を使う……別にツモ和了りでもいいっちゃいいんだが、ツモ和了りつて墮ちたり墮ちなかつたりで微妙に信頼出来ないんだよな……なんか条件がありそうな気もするが、実験が中々出来なくて辛い。

まあ今回はとりあえずさつきとモモを墮としてエツチしたいところだ。今日中に落とせば5日間はエロのチャンスがあるし、その辺りの期待値がでかい。

だから頼む……頼む……！ 俺に乳を！ 溢れんばかりの乳と可愛い女子高生を！

モモって普通に可愛いし、妙に構いたくなるというか……やっぱ後輩キヤラって最高だな。なんか妙にエロいもんな。

頭の中では既にモモを脱がすという気持ちの悪い想像をしながらそれを待つ。……というか、相変わらずモモはぼーつとしてるな……大丈夫なのか？ エロを狙ってる身でなんだが、ちよつと心配になるぞ……。

「っ……」

と、思つて見ていたらモモが気づいて目を逸らした。いやまああん

まりぼーっとしてると——って……。

「つつっ!? ——ロン!!」

俺は慌ててロン宣言をする。危ねえ!? 普通に見逃すところだった!?

とはいえ俺はロン宣言をして、モモの捨牌で和了る。その役と点数は、

「緑一色! 48000!」

「……!」

「うっわ……」

「なんと……役満、か……」

親の役満。そういう訳で48000点。

既にトップだったが、モモから奪ってトップ。

そしてモモが飛んでゲームが終了する。

ヒュー! これでオカルトが発動した筈だが……さて、どうなる?

「お、驚いたっす……さすが東郷さんっすね。私が役満を振り込む日が来るとは思ってたっすよ……」

「ん……まあ気付ける奴じゃないと無理だろうしな」

……あれ? あんまり変わってないように見えるな?

モモは普通に役満に驚いているだけのように見える。

いやしかし、今までもこういうことはあった。

何も起きてないのかな? と思っただけのようならば皆落ちて積極的に俺に好意を見せてくれるのだから、きっと今回もそうなのだろう。

だから慌てずに待ってしよう。そのうち相手の方からそれらしい反応を見せてくれる筈だ。

「……さて、1度勝ったところで俺はお手洗いに行ってくる。お前らは普通に対局を続けてろ」

「はい、わかりました。……それなら妹尾。次は入ってみるか?」

「は、はいっ! まださっきの凄さがよく分かってませんが、頑張りますっ!」

分かってないのかよ……でもまあ初心者だもんな……まだ始めて1日しか経ってないんだからしょうがない。

俺がいない間に打つみたいだが、その加治木の判断は的確だ。まさかプロとの真面目な対局でルールがあんまり分かってない初心者が入る訳にもいかないからな。

だから何気に狙っていたが、諦めざるを得ないというか……いや残念だな。機会があれば墮としたいものだが……まずルールを憶えて貰わないと……。

「はあ……にしても役満和了れたな……」

俺はお手洗いを済ませながら独り言を呟く。いつ味わってもこの役満を和了った瞬間は高揚感があるな。

オカルトによって女の子を墮とせたという事実が中々に良いものだ。

それも好みの女の子とも来れば期待も興奮もしてしまう。

……でもまあまだ大人しくしてるか。さすがに部活中だしな。

狙いは放課後だろう、と俺はいつもの墮とした後の予定を決めつつ、人気のない廊下を歩く。それにしても人がいないな……日曜日で文化部だし、やっぱこの辺りは生徒はあんまりいないのか……？

外からは遠くで運動部が声を出しながら運動に励んでいるのが分かるが、文化部が揃ってるであろうこの建物には人の気配が少ない。

それこそ、モモや他の部員らの気配が感じ取れるくらいに――

「……東郷さん」

「――お？ モモ？」

とか考えているとだ。

不意にモモが背後から声を掛けてきた。

なんだ、まだ練習中なのに抜けてきたのか？ と俺は少し不思議に

思いつつ振り返ろうとして、

「どうしたんだ？ 交代して――」

「っー」

いきなり背後に衝撃。柔らかい。熱い。

「……えっっ？」

え？ 何？ ——いやマジで。

突然の事に俺は混乱する。え？ なんか後ろからこれ……え？
まさかとは思うが……抱きついてきてない？ きてるよね？ こ
れ。

背中にモモらしき少女の体温と柔らかさを感じる——特にこの
たつぷりと背中を圧迫するような柔らかさは……おっぱいだ。

明らかにモモの乳房が押し付けられている。間違いない。これは
モモだ。

しかしいきなりもいきなり過ぎないか？ 嬉しいには嬉しいが、今
は授業中で——うおっ!?

「も、モモ……？」

「……東郷さん……私、多分……いえ、間違いなく、東郷さんのことが
好きっす」

え、いやまあオカルトで落としたから当然だし、それは勿論嬉しい
のだが、今はちよつと……。

というかなんだ……モモの手がなんか際どいというか……ちよつ
とヤバい。マズい。胸を押し付けられてるだけでもヤバいのに、この
ままじゃ勃起しそう。

せめて放課後にしてほしいのだが——

「東郷さんには彼女さんがいるみたいっすけど……そんなの関係無し
に、東郷さんが好きっす」

「え……」

えっ……えっ？ いや、なんでバレてるの？

まさか昨日の携帯か？ いや、まあ確かにちよつと際どいメツセー
ジ打ってたけどさ。

というかその告白の仕方はなんかヤバいな。まさかとは思うが、

「私には……私と一緒にになれる男性は東郷さんしかいないっすから。
だから——」

「っ……!」

モモが正面に回り、今度は正面から抱きついてくる。その瞳は完全
に、恋する女の熱を持っている。

そして彼女は俺を壁に押し付けるような——まるで逆レイプする
ような力強い動きでそれを為した。

「東郷さん……大好きっす……♡」

「——っ」

——ちゅっ。

俺の唇に落とされるその音と共に、俺は彼女の方から襲われている
ことを自覚するのだった。

ステルスおっぱい

——襲われるのは初めてのことではない。

「はぁ……♡ んっ……ふふ……キス、しちやっただつすね……こんな学校の廊下で……」

今までに何度かそれはあった。

むしろ相手から誘われた時の方が多かったかもしれない。

だが、

……学校で襲われるのはやべえ……お前、ここ廊下だぞ……！

俺に抱きついてきているモモと共にいる場所は、学校の校内。それも廊下だ。

そんな場所で今モモが言ったようにキス。なんてことは誰かに見られれば1発でアウトになりかねない危険な行為である。

だから出来ればやめてほしい。少なくともここでは。

「……モモ。お前の気持ちは分かった。だが、ここではマズい。少し落ち着んんっ!」

モモに静止を促そうと努めて冷静に言葉を送った俺は、しかし、その途中でモモの口によって声を塞がれてしまう。

美少女に口内を舐め回される感覚。柔らかい唇に甘い舌。女の子特有の匂いが鼻孔を突き抜ける。

加えて俺にとっては鬼門となる女体の——特に、その凶悪な胸部を押し付けられ、その柔らかさで否が応でも興奮してしまう。

いやそもそも、こうやって女の子に襲われるのに興奮してしまう自分がいることを認めざるを得ない。

「ぶはっ……んっ♡ 東郷さん、全然分かってないっすよ」

「っ……分かって、ない……?」

そして……このモモの発情し、僅かに暗さを伴った瞳から目を離せない。

浮かぶ表情は笑みで、こちらを見上げる視線は明らかに悦楽を感じている。

身に纏う空気は既に淫靡なものとなり、こちらの身体をその細いし

なやかな指でなぞりあげる。

制服越しに感じる女体の熱と柔らかさは……いつも思うが、どうしよもなく気持ちよさを感じる。

背徳感を感じてしまうのだろう。女子高生とそういう行為をすることに。

イケないことをしている——それを自覚し、今直ぐ離れなければと思いつながらも身体は動かさず、俺はモモの声を黙って聞くしかなかった。

「……私は……東郷さんと、心も身体も通わせるような関係になりたくないよ」

「……心も身体も？」

はい、とモモは頷き、より一層強く密着してくる。

胸元が俺の身体の上でたつぷりと気持ちよくだわんで、俺の背筋が震える。

そうして聞く内容は、

「別に恋人じゃなくてもいいんですけどね……ふふ……でも、東郷さんにはずっと私を見て欲しいっす」

だから、と。モモは俺の股間に右手を這わせ、

「他にはない唯一無二の関係でいたい……他では言えないこと、出来ないことも、東郷さんなら全然出来ますし……むしろそれをやりたいんすよ——んっ……♡」

「っ……」

モモの手が、俺の股間の膨らみに到達する。

既に硬くなり、起立してテントを張っているズボンの上から、モモはそれを手のひらで確認するように撫で回し、

「はあ……凄い硬いっすね……♡ 男の人のつてこんな大きく硬くなるんすか……確か、興奮したりエッチな気持ちになったら大きくなるんすよね？」

ということとは、と、モモは俺の内心を見透かすように、

「東郷さんも興奮してくれたんすね……♡ 私と……エッチなことをするって期待してくれたんすね」

「っ……そりや、いきなり抱きつかれたら……いや、だからここじゃ——」
「大丈夫つすよ。文化部って基本的に日曜の部活はないつすから。精々麻雀部くらいで……だから、ここは殆ど人は通らないつすよ」
そうモモはこちらから目を離さずに言う。手は相変わらず股間を撫でてきており、どうしようもなく甘い快感が走ってくる。
確かに、人の気配はあんまりしないし、今日は一度も他の生徒や教師とはすれ違っていない。

だがそうは言っても、人が来ないとは限らないもので、

「……でも人がいるかもしれないって思うと興奮するつすよね？」

「……！ お前……あつ、くっ……」

「んっ、エツちな声……♡ ふふ、どうつすか？ 彼女さんがいるのに……こうやって学校の廊下で、現役女子高生に手で触られてるんすよ？ 自分で言ってるなんすけど、変態さんっぽいつすね……♡」

そう言ってるモモは俺の肉棒をズボンの上から扱く。彼女つて……勘違いしてるのだろうか。確かに彼女といえば彼女だが、きつとモモの思う様な綺麗な関係ではないのだが。

それに、だ。モモの声は妙に耳を突き抜けるというか……なんともエロい。

存在感の薄さを象徴するような透き通る声。それでいて可愛らしさを残す少女らしい声。

その声で囁かれると妙にゾクゾクする。

インモラルさの極地のような状況も相まって、肉棒が大きくなり、ヤル気になるのを止められない。

そして極めつけは——やはり、モモの囁きと行動だった。

「東郷さんはシたくないんすか……？ 私、自分で言うのもなんすけど、結構見た目は良い方つすよ？ それに女子高生で……その、おっぱいも大きいつすよ？ きつきからすっごいおっぱいにエツちな視線が来てるんすけど……ふふ♡ 東郷さんなら、別に触ってもいいですし……もつとエツちなことをしてもいいんすよ……？」

むにゅっ♡ むにゅっ♡ と、モモはその大きい乳房を俺の身体に

アピールするように擦りつけてみせる。

葛藤する。確かにモモは可愛いしおっぱいもでかい。そもそも墮とそうとしていたのはこっちであり、場所がここでなければ願ったり叶ったりなのだ。

だが今はやはり、

「彼女さんがいても別にいいです。だって私と東郷さんは……そうっすね。——セフレとかどうっすか？」

「ぐ……」

その単語に妙に興奮してしまう。

更にモモは言葉を変えて、

「女子高生セフレ……♡ 言葉にするとすっごいエッチっすね……でも、東郷さんシたいっすよね？ おっぱいが大きい女子高生セフレと、学校内で内緒のエッチ……♡ こうやって誘惑してくるエッチな女の子を、東郷さんのおちんちんでわからせてみないっすか……？」

——そこまで言われたところで、俺は行動に移してしまった。

もにゅんっ♡

「あっ……♡」

「はあ……柔らけえ……！ くそっ、こんなデカ乳、さつきから押し付けてきやがって……我慢なんて出来るか……！」

右手を伸ばし、モモの膨らみを持ち上げるように鷲掴みにする。

手のひらに収まらない大きさ。女子高生。そして美少女特有の瑞々しい柔らかさと弾力に興奮する。

それだけじゃない。むっちりしたお尻や、細い腰つきも、おっぱいと同じ様に撫で回していく。

女体を欲望のままに堪能するのは、どうしようもなく甘美で興奮するものだ。

「はあ、くう、全身エロ過ぎるだろ……いい加減にしろよマジで……そんなこと言われたらマジでセフレにするぞ……」

「んっ♡ はあっ……♡ ああ……♡ えへへ、東郷さんこそ、いいんすか？ 女子高生をセフレにしたとか最低っすよ♡ 彼女さん、幻滅

しちやったらどうするんすか？」

「っ……そんなの、お前が気にすることじゃねえよ……！ このっ……どうせ処女の癖に変に誘ってきやがって……！」

「あっ……んうっ……♡ はあ、はあ……♡ でも私が処女なのはきつと、東郷さんにあげるためなんすからしようにないっす……♡

私にとっての運命の人で、大好きな東郷さん相手だから、こうやって処女なのに、おちんちんさん扱いちゃうっす……♡ んっ、ほーら、シコシコ気持ちいいっすか？♡」

「っ、はあ、気持ちいい……！」

モモのドチャクソエロい身体を欲望のままに撫で回しながら、モモは俺の肉棒をシコシコと言葉責めをしながら扱いてくる。

確かに処女というだけあって、テクニクはそれほどでもないが、発情して懸命に弄ってくるのがまた妙にいやらしさを感じる。

お互いの身体を触り合い、お互いに興奮している——その互いの熱量でどんどんと淫靡な空気も増していく。

「はあ、肌もスベスベだな……くっ、はあ……可愛いし気持ちいい……！」

「んあっ♡ あ、ありがとうございますっす……♡ んっ、スカートとか服の中に手入れて触るなんて痴漢みたいっすよ♡ おちんちんさんもこんなにガチガチになって押し付けて……♡ シコシコしてっしておねだりしてるんすか？♡ こうやって……シコ、シコ……♡ シコシコ……♡ ん、おちんちんさん気持ちいいっすか？♡

おっぱいやお尻触りながら女子高生におちんちん扱かせて……ほんと、東郷さんは変態さんっすね……♡」

「お前のほうの変態だろ……！」

と、モモに肉棒を扱かれながら、俺はモモの制服を乱しながら触り続ける。

スカートの中に手を差し入れお尻を撫で回し、制服のお腹の部分を少し捲くりあげ、そこから手を入れて乳房を掴んだ。

どこもかしこも柔らかくすべすべで丸みを帯びていて熱くて気持ちいい。

女の子の身体ってなんでこんなに気持ちよく、男を興奮させるのか
と思ってしまうほど。

そしてこれだけの美少女が俺の手によって乱れ、これから俺のモノ
になるのだと思えば更に興奮する。

優越感どころか全能感すら感じてしまう気持ちよさ。自分の好み
の女の子を味わうというのは、雄として最高に満たされる行為だ。

しかもこれで7人目だと思おうと……、

「んっ——また硬くなってるっす……♡」

そんなに興奮したんすか？ とモモになじられるが、今はモモで
あつてモモだけじゃない。

己の状況、その現実ではありえないハーレム感を思い知って気持ち
よくなったのだ。

そしてそれは1人墮とす度に強くなる。美少女の数だけハーレム
の気持ちよさを感じて肉棒に血が回る。

そのうちおかしくなってしまうんじゃないかと思ってしまうほど
に。

あるいはもうおかしいのかもしれないが、

「……モモ、もっと気持ちよくしてくれ……!」

そう、お願いしてしまう。

ヤバイのは頭で分かつてはいるが、それよりも欲望を優先してしま
う。

求めすぎて理性が効いてない。

それはモモもそうなのか、

「……いいっすよ……ふふ、それじゃあおちんちんさんと……ご対
面っす……♡」

「っ……はぁ……」

モモが屈んで床に膝をつき——そのままズボンのチャックを開け
て中からそれを取り出そうとする。

「んっ……ちよつと、出しにくいっすね。なるほど……こうなってる
んすか……よつと……」

ズボンと下着の形状に迷ってほんの僅かに苦労はしたが、そのまま

モモの手が俺の肉棒に直に触れ、

「はい♡ こんにちはつすよ、おちんちんさん♡ 外の空気はどうつすか?♡」

「……いつもより、緊張するな……」

己の肉棒に話しかけるモモに、代わりに答えてみせる。するとモモは上目遣いでこちらを見ながらも、

「大丈夫つすよ♡♡ ちゃんと、見えないように……気持ちよく隠してあげるつすから……んしょつと」

「!」

言って、モモは己の制服の内側に手を伸ばし、その中からあるモノを脱ぎ捨てた。

それはピンク色の、大きいサイズのブラで——

「……ふふ、期待してるつすか? おちんちんさん、ピクピク動いてるつすよ?」

「くっ……」

先端を指でツンツンとつつかれ、そう言われると僅かに羞恥が襲う。期待しているのは事実だったからだ。

しかしエロいことを、期待していることをされるのであればそれくらい羞恥はなんてことない。俺は黙ってモモがやる行為を見つめていた。

「先っぽが凄い濡れてるつすね……♡ ん、それじゃあ——」

と、モモは床に膝を突いたまま、上体を俺の股間に近づける。

正確には——胸を持ち上げて、それを俺の露出した肉棒に被せるようにした。

くちゅっ♡ むにっ♡ と下乳の谷間に俺の肉棒が突き刺さる。

甘美過ぎる大好きな感触に思わず腰が浮く。

そしてモモが胸を下ろすのと同時に、蕩けるような挿入感を肉棒で味わっていき、

むにゅう~~~~♡

「はい♡ おちんちんさん、おっぱいで全部隠して、見えなくなつたつすよ♡ ……す、ステルスおっぱいっすね……」

「……………は、あ……………」

制服に包まれたままのおっぱいに、俺の肉棒が挟まれ——いや、包まれてしまった。

亀頭の中から根本まで、密閉された爆乳の谷間に閉じ込められてしまっている。

着衣パイズリ——その行為の名前を頭に浮かばせ、同時に実際にそれを受けている感覚に浸る。

どれくらいのサイズかは分からないが……………俺の肉棒をすっぱりと包んでしまうサイズの圧倒的な乳量。

まろやかで重みのある乳圧と、制服の中で熱が籠もっており、普通のパイズリよりも熱さを感じ……………総じて溜息が漏れ出る。

もうこれだけでも気持ちいい。肉棒で感じるおっぱいはいつ味わっても趣深く——

「……………な、なんか言ってほしいんですけど……………スベったみたいになったじゃないっすか……………」

「ん……………ああ、いや……………悪い……………気持ちよすぎてぼーつとしてた……………」

「……………それなら良かったっす。ん、それじゃあ気を取り直して——こっからはステルスおっぱいの独壇場っすよ……………」

たぶんっ♡
ああ……………蕩ける……………っ！

モモが左右から胸を押すようにして、俺の肉棒に乳圧を与えてくれる。

女子高生。なのに胸は女子高生らしからぬ大きさで、大人の肉棒をすっぱりと飲み込み、服の中にある谷間で咀嚼されている。

腰が浮く。本能でもっと気持ちよくなろうと動いてしまう。

モモの動きはまだぎこちないものだが、それでも俺を懸命に気持ちよくしようというのは伝わるし、このシチュエーションだけでも射精ものであるのだ。

視界で見る興奮や優越感に背徳感、実際の気持ちよさも加味して昂ぶってしまう。ここが学校の廊下だということを忘れてしまうほどに。

「んっ、あつ、ん……♡ どうつつすか♡ 私のおっぱい、結構自信あるんすけど……」

「はあ……いいぞ……強いて言うなら、唾液で濡らしたり、緩急をつけたり、左右で互い違いにしたり、乳圧をもつと高めたりだな……」

「……結構色々あると言うか……奥が深いんすね……んっ♡ 大変そうつつすけど、東郷さんの為なら私、頑張るつつすよ……♡ よいしょつと——」

むにゅっ♡ むにゅにゅんっ♡

「うっ……はあ……それ……ああ、いい……!」

「んっ♡ ほんつつすか? よーし、気合入ってきたつつすよ……んっ、……れー……」

俺が褒めてやるとモモもスイッチが入ったのか、制服の胸元を開いてそこに唾液を垂らす。

そして先程までよりも大胆に胸を動かし始めた。

「ん……これで……あつ、確かに動かしやすくなったつす! んっ、凄いいぬるぬるつつすね……わー……すっごいエッチつつすね……♡」

「はあ……それ、そう、それ……あー……やっべえ……」

滑りが良くなり、更に肉棒が胸の谷間で擦られる。

肉棒の凹凸。カリのくぼみにもひたついてくる乳肉とヌルヌルのハーモニ―。

爆乳だからこそ出来るストロークの長さで、肉棒の長さで乳の長さ分、乳圧とそれに扱かれるのを楽しめる。

カリ首がぎゅつと締められ、一本の線となった谷間を見る度におっぱいのホールド感というものを実感してしまう。

谷間から飛び出さずに、中で舐めしゃぶられるような感覚。それを制服姿で……モモが普段着ているそれで味わい、馬鹿になりそうな気持ちよさを感じられる。

思わず上を向いてしまう。その間もモモはしっかりと胸を動かしてパイズリ奉仕で気持ちよくしてくれて、それを実感したくて一度下を向けば、実際にパイズリしているモモの姿が見れる。俺の股間の上で跳ねる乳房を見て、肉棒がしっかりと扱かれていることを確認し、

再び快感で上を向いてしまう。

オナニーでは味わえない快感。何もしていなくてもしつかりと気持ちよくしてくれる美少女の存在に股間が熱くなってしまふ。

しかもそれだけでなくモモはパイズリしながらもいやらしい言葉をその可愛らしい口から寿ぐのだ。

「はっ、んっ♡ 随分と気持ちよきそうっすねっ♡ んっ♡ 女子高生の……しかも彼女さんでもないセフレの女の子に学校でパイズリされてる気分はどうっすか？♡ はあ……♡ そんな腰も浮かせて……♡ パイズリそんなに気持ちいいっすか♡ ふふ……私の98センチの……Jカップのおっぱいと、彼女さんのおっぱい、どっちが大きくて気持ちいいっすか……？♡」

「うっ……ぐっ……！」
特大サイズのおっぱいによる着衣パイズリを愉しんでいたところに来る、新たな情報に腰が震える。

今俺の肉棒を包んでいるモモのおっぱいは98センチのJカップであるらしい。

中々の大きさ——いや、かなりの大きさに興奮する。女子高生でそれだけ大きい子は少ないだろうし、それに惚れられてパイズリされている俺はどれだけ果報者なのかと思ってしまう。

まあ、彼女……と言つていいのかわからないが、俺の女達にはモモよりも大きい子が沢山いる訳だが……それは言わぬが花だろう。実際、モモのパイズリは今まで味わってきたそれと遜色ない快感がある。

だからこそみつともなく快感に喘いでしまっている訳なのだ。

「ふふ……♡ ほーら、おっぱいでたぶたぶ♡ むにむにー♡ 気持ちいいっすかー？♡ これからは、東郷さんがシたくなったらいつでもパイズリしてあげるっすよー♡ 彼女さんがいない時に会って内緒のパイズリ……♡ おちんちんさんのムラムラをモモの身体で解消してあげるっす……♡」

たぶんっ♡ むにゅんっ♡

「くっ……はあ……！」

「んっ♡ 勿論、パイズリだけじゃないっすよ……お口でも手でも……下のお口でも……♡ 東郷さんがシたくなったらいつでもいいっすよ……♡ 私は東郷さんの特別になりたいっすから……東郷さんが彼女さんに言えないような欲求があったとしても、私は受け止めてあげるっす……♡ きつと気持ちいいっすよ？ ♡ 私存在感薄いつすから……こうやって外とかでエッチしたり……んっ♡ そうっすね……あ、電車の中で痴漢プレイとか……東郷さんの為ならしてあげるっす♡」

「ぐ、あ……モモ……！」

モモの献身的な奉仕。その男を悦ばせるためだけの台詞も何もかもが俺の興奮をガンガンと刺激してくる。

女性の象徴とも言えるモモのJカップのおっぱいでたっぷり包まれてパイズリされながらの言葉責めは効きすぎる。

1番感じる部分をヌルヌルのおっぱいの中で揉みくちやにされて、もう頭には射精のことしかないのだ。そんな先のことなど考えられない。

だがそれが気持ちいいということだけは分かるし、興奮はしてしまふ。そう聞いている間にも股間では、ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡ とパイズリが続けられており、脳に快感が刻み込まれていくのだ。

もうこのおっぱいの中で射精したい——モモと会う度に思い出してしまいそうな快感の中で、

「くっ、お、あ……！ おっぱい、気持ちいい……！」

「あっ♡」

と、遂に俺は腰を自分からも動かし始めた。

腰を前に押し出し、ぱちゅんっ♡ とおっぱいが股間を叩く音が廊下に響き、

「ああ……っ！ くっ、もう我慢出来ん……！ ああ、出したい……！」

「あっ♡ んっ♡ はっ……♡ いいっすよ……♡ そんなにめちやくちやに腰振って……私のおっぱいに出したいんすよね……？ 私のおっぱい、犯して気持ちよくなってくれてるんすよね……♡ 嬉し

いつす……私を求めてくれる東郷さん、好きっすよ……♡ 大好きっす……♡ 私のことを見失わない東郷さんの子種……んっ♡ 考えるだけでぞくぞくしてしまうっす……♡ ちよつとヤバいというか……はあっ……♡ この後、おっぱいだけじゃなくて、その……下の口でも、おちんちんさん、迎えてあげたいっす……♡」
むにむにっ♡ たぶっ♡ たぱっ♡
「うぐっ、モモ……！」

モモの方もどうやら興奮して濡れてしまったのか、腰をもじもじと揺らし、先程よりも濡れた瞳で胸の動きを激しくする。

その表情は嬉しそうでありながらも切なそうだ。

実際、彼女はその下のお口でも精子を受け止めたがっているのだろう。胸の激しい動きと言葉から、それがありありと伝わってくる。

そしてただでさえ理性が溶け落ちている時にそんなのを見せられれば……もう耐えられない。

「くっ……出る……モモ、出る……っ！ おっぱいでっ……出す……！」

「んああっ……♡ いいっすよ……♡ 出してください……♡ モモのおっぱいで沢山受け止めてあげるっす♡ ほらおちんちんさん♡

おっぱいむぎゅむぎゅ♡ 精子、ここに出していいんすよ♡

女子高生セフレのJカップおっぱい♡ ここで出すと気持ちいいっすよ♡ たぶたぶたぶ♡」

「うぐうっ……！ ああっ……！ 出すっ、出るうっ……！ ああ——っ」

そしてとうとう、モモの責めに耐えきれなくなり、肉棒は乳房の中で決壊した。

びゅるるるっ！ どびゅんっ！ びゅばあっ！ どぶっ！ どぶっ！

「うづうづうづうっ、あああああ……！！」

腰を思い切り浮かせて、谷間の中に突き込んだの射精。

乳圧で甘く締め付けられながらの吐精は腰が震え、涙目になってしまふほどに気持ちいい。

女子高生で美少女のJカップに隙間なく包まれての射精なのだ。
乳肉で裏筋やカリ、亀頭などを甘やかされながらの射精は、濃く深い心地を味わえる。

自身で出した精液の熱さを感じるほどの密閉したおっぱいの中で出す——乳内射精に、肉棒は幸せでしかなかった。

「んっ、ああっ♡ すごい出てるっす……♡ おっぱいの中でドクドクって震えて……♡ んっ♡ 熱い……♡」

「ああっ、あああ……！ あー、気持ちいいっ……！ おっぱいの中で射精やばいっ……！」

本当に、何度味わっても凄まじい心地だ。

己の性的嗜好を、こつてりと満たすような多幸感溢れる射精。

射精中もそれが収まり始めた時も、こうやって肉棒でおっぱいの重柔らかさをニユルニユルと感じていると、雄に生まれてきて良かったと本気で神に感謝してしまう。

「あー……ほんと、やっべえ……めっちゃ出した……気持ちいい……」
「んっ、胸の中ドロドロっすよ……♡ というか、まだ硬いつす……♡ そんなにおっぱいの中、気に入ったっすか？」

「ああ……！ ちよっ、また動かされると……ああ、やばっ……待て……！」

「ぬるぬるっすよ♡ んっ♡ もっと大きくなってきたっす♡」

精子でおっぱいの中がヌルヌル状態で、モモにいたずらっぽく扱かれると、このままもう一度——と欲してしまう。

だが2回目はやはり……もつと奥に吐き出すべきだ。

「はあ、はあ……も、モモ……もう許さんからな……ちよつと後ろ向いてそこに手えつけ」

「あっ……♡ もしかして……襲われちゃうっすか？♡」

モモが期待の眼差しでこちらを見上げる。

胸の谷間に精液を垂らし、太ももからは透明な液体を零している美少女の期待に満ちた誘惑するような表情。

「ここまでやられたのだ。俺はもう、我慢する気はなく、
「望み通り……俺の女にしてやるからな……！」」

「東郷さん……あっ——♡」
——そして今度は、俺が攻める番だった。

ステルスえっち

廊下の窓の縁に手をついたモモは既に濡れきっていた。

スカートを捲くりあげて確認すれば、既にぬれぬれ状態で染み付いたショーツのスジが露わになる。

俺はとりあえず、モモのプリプリした尻を撫でながらそれを脱がし、肉棒で濡れたおまんこの入り口を擦ってやった。

「んっ、はあ……♡ 東郷、さん……んんうっ……♡ じ、焦らすなんて意地悪っすよ……♡」

「ん？ なんだ、処女なのにさっさと挿れられたいのか？ 変態か？」
「っ、あんっ♡ んく……そ、そうっすよ……早く、東郷さんに挿れて欲しいっす……♡」

モモは俺に尻やおまんこを弄られてなすがままになりながらも、こちらを流し目で見て挑発してみせる。

「東郷さんも……早く気持ちよくなりたくないっすか？ 女子高生セフレの処女おまんこの中で……溜まつてるモノ、全部吐き出したっすよね？」

「っ……モモ……」

「私のこころ、使つていいっすよ♡ ——あっ♡」

——そこまで言われて、挿れない理由はなかった。

龟头をモモのおまんこに嵌め込み、一気に奥まで貫いてやる。

「——っ、はっ、あっ♡ 東郷さ、あっ、そんな、一気に……っ♡」

じゅぷぷっ♡ と、処女にしてはすんなりと肉棒を飲み込み、処女膜も、ぷちっ、とあっさりおまんこの肉棒によって破れてしまう。

しかし奥まで挿れると——やはり、と言うべきか。

「くっ……はあ、やばっ、気持ちいい……」

「んっ、ああう……こんな感じ、なんすね……♡ おちんちん挿れられるのって……ん、はあ……♡」

「っ……痛みはないか？」

「は、はいっ……大丈夫っす……♡ むしろなんか、疼いてくるような……んっ、凄く熱くてたまらないっす……♡ はあ、セックスって凄

いんすね……♡」

俺の肉棒を感じているのか、ずっぽりと下の口で啜え込みながら喘ぎを漏らすモモ。

対する俺の方も、処女特有のキツさ、発情した女の濡れ具合、膣内から感じる熱さなど、その全てをチンコで感じてめちやくちやに気持ちいい。

「ああ、やべつ、幸せ……！」

「……ん……♡ そんなに気持ちいいんすか……？ 私の中……」

「ああ……分かるだろ……？ 俺のがめちやくちや硬くなってるの」

軽く腰を揺すって分かせてやる。それだけでもオマンコの柔らかく熱い肉に扱かれて気持ちいい。

「んあつ、はあつ、た、確かにこれ……凄いつすね……♡ カチカチなのが分かって……んっ、はあ……♡」

だがそうすることでモモも俺の興奮が分かり、そしてチンコで中を擦られる気持ちよさを理解したようで身体をくねらせる。

後ろから挿れた状態で、モモみたいなおっぱいも大きく、腰もくびれていて、お尻もむっちりした美少女が感じているのを見下ろすと、支配感が凄くて興奮する。

お尻が俺の下腹に密着し、腰が弓なりに反っていると、それだけ身体の美しさや艶やかさ、淫靡さが際立つのだ。

それに何と言っても、これで7人目という事実を実感して肉棒が硬くなってしまう。

肉体関係、ほぼ恋人関係にある相手が7人。それも全員がおっぱいが大きく、スタイルも抜群な美少女で、誰もが俺の好みに合致する美女なのだ。

それだけの女性を抱いてきた。これからも抱ける。1週間毎日違う娘を抱くことも出来る。

そんな俺の背景がエッチの興奮と快感を彩っていた。

ただ1人とエッチしてるだけなのに浮ついてしまうような快感が全身を襲う。

これがハーレムの醍醐味の1つだろう。多くの男が味わうことの

出来ない最高の快楽の1つだ。

「あー……もう無理っ。動くぞ……！」

「ひゃっ♡」

肉棒で味わう快感に我慢出来ず腰を動かす。

ぺち、ぺち、と控えめだが確かなセックスの音が廊下に響き、汗や愛液が床に滴り落ちる。

「はあ……はあ……冷静に考えたらヤバいが……今更止められないな……くっ……」

「んっ、あっ、あっ♡ん……そうっすね……♡はあ、ヤバいつす……♡突かれる度に東郷さんのこと、どんどん好きになっちゃうっすよ……♡んっ、はあっ、あっ♡」

「っ、そうか……ならもっ好きになってもらわないとな……！」

後ろから、モモの一番奥を突いて自分の快感を高め、同時にモモの快感も強めれば、その可愛い声がかまた聞けた。

「はあ……くっ、見られてるかもしれないっのにな……！ほら、外だと運動部が部活してるぞ……！」

「んっ、あっ♡はあ……ほんつつすね……♡」

そうして突きながら見るのは窓の外。校庭で部活動に勤しむ生徒の姿だ。

校内には人が殆どいなくても、外にはいる。

そして、見られる可能性があるのだ。このモモの痴態と俺の醜聞を。

「く……モモでもドキドキするんじゃないか……？こっちに顔向いたりしてるぞ……」

「はあ……はあ……♡確かに、ちよつとなんか、変な感じっす……♡

見られてないとは思うんすけど……♡んっ♡見られてると思

うと……♡あっ♡はあ……♡」

モモが僅かに不安そうに、しかし感じている。

幾らモモとはいえ、こうやってエッチしてるところを窓際でさらけ出しているのは、どうなるか分からない危険性があった。

だがそれが……モモは快感に変換されてしまってるのだろう。

普段から見られるということに慣れてないからかもな、と俺自身も若干の不安を感じながらモモとセックスする背徳感に燃え上がってしまう。

「ほら、もっとそのでっかいおっぱい、見せつけてやれ……！ どうせ俺以外には見られないんだろ……？」

「あつ♡ だ、駄目っすよー……♡ ううっ♡ 東郷さん、急にいじわるというか、なんかSっ気が……♡ はあ……♡」

モモを後ろから押し、その女子高生らしからぬJカップを窓に押し付けるようにしてやる。

窓に当たった撓む乳房の広がりが見え。きつと反対側から見れば凄いい光景になっているのだろうと興奮する。

「ぐっ、はあ……お前が誘惑するから……だからな……！ お望み通りセフレとして……めちやくちや可愛がつてやる……ほ——らっ！」

「あつ、あつ、あつ♡ そ、それっ♡ それヤバいっす♡ 奥、コツン♡ コツン♡ ってされるの……♡ うう……♡ ああ、なんすかこれ……♡ こんなの、一度知ったらハマっちゃうっすよ……♡」

「……ならもっと激しくしてやる……！」

モモの腰のくびれ。スカートの生地と生の肌の境目辺りを掴んで腰を激しく振る。

するとそれだけでモモの淫らな声が大きくなり、後ろから見えるJカップの乳揺れも大きくなった。

「あつ——♡ ああつ♡ は、げしっ♡ んっ♡ はあ……♡ こ、こんな……ヤバいっす♡ 本当にセックスにハマって……っ♡ 東郷さん専用のセフレになっちゃうっすよ……♡」

「そうだ……！ 俺だけの女だからな……もう……っ、今更嫌って言うっても聞かないぞ……！ ほら、俺のチンコの味を今のうちに覚えろ……！」

「んあつ♡ は、はいっす……♡ 私はもう、東郷さんだけの女の子っすよ……♡ んっ、あつ♡ 私の身体も、全部東郷さんだけが味わっていい、東郷さんだけのエッチなセフレっす……♡ あつ、はあ、おつき……♡ ちんちんさん、またおつきくなってるっすよ……♡ 硬い

のも大きいのもこんなに分かるものなんすね……っ♡ん、くっ♡
はあ……♡

「っ……！・モモ、こっち向け……！」

「えっ……？ あっ……んんう♡」

可愛いことを言つて俺の性感を高めるモモにたまらず、身体を前に倒して無理やりキスをする。

モモが背中を反つて、顔をこちらに向けるキツめの体勢だが、こうやってがむしやらかなセックスになってしまうのは、やはり興奮が尋常でない証拠だろう。

やりたいことを優先、快感を求めることを優先してしまうのだ。

モモの柔らかく甘い唇と蕩けきった表情を見て俺も堪らなくなる。

これだけ可愛い美少女が俺相手にトロトロに蕩けきっているのだと、可愛く鳴かせているのだと思えば優越感が凄い。肉棒の胴部分から根本にかけてグルグルと渦巻くような快感が来て堪らない。

しかもそうやって気持ちいいところを更にモモの媚肉がきゅーきゅーと締め付けて愛してくれる。

「んっ、ちゅっ、はあっ、んぷっ、れろっ♡ はあ……東郷さん、大好

きっす……♡ こんな、んっ♡ ちゆるっ♡ はあ……好きな人との

エッチが……んあっ♡ んくっ♡ う、嬉しくて、気持ちいいなんて

……♡ 東郷さんがいなかったらずっと知らないままだったっすよ

……♡ ん、ちゅう……れろ……れろ……♡」

唇にキスを何度も落とし、途中から舌でペロペロとお互いに舌を絡め合う。

そうする度にモモの膣内がきゅんきゅんと収縮した。

それはまるで俺のチンコがモモのおまんこに愛されてるようで、ヤバい。

激しく動き、モモの中を擦る肉棒を、その場に繋ぎ止めようとするように熱い媚肉で、きゅーきゅー……♡ と締め付け、結果的に動く俺のチンコを強く擦って気持ちよくしたかと思えば、粘膜が動いて俺の肉棒をにゅくにゅくと揉みほぐす。

しかもそれは突く度に俺の形になっているような、矯正しているよ

うな素晴らしい心地すら感じさせるのだ。

芯を持った俺の硬い肉棒を確かに受け止めて気持ちよくなる——
惚れた女の気持ちよさを数日振りに味わっている。

「ぐっ……！ ああ、やば……エロすぎ……！」

「ああっ♡ また、激しく……♡ というか、エロいのは東郷さんの方っす——あああっ♡」

快感が1段階上昇する。

良い女で射精するという男にとって最高の至福の為に走り出す。
欲求が湧き出すのは突然だ。

見てるだけでエロい美少女相手に腰を振って気持ちよくなっていくというのは、いつも思うが気持ちよすぎて本能が理性を凌駕するのだ。

無論、落ち着ける時もあるものだが、こんな廊下で初めてを、しかもセフレとか言い出す女子高生とのエッチ。

これで我慢出来る男はいない。早く中に、この美少女の中に己の遺伝子を吐き出してやりたいと思うのが自然だろう。

快感が強くなったのはその本能が身体感覚に表れたのかもしれないと思ってしまう。とにかく気持ちいいのだ。

「くう……ああっ、モモ、好きだぞ……！」

「んっ、あっ♡ ほんとっすか……？ 本当なら嬉しいっす……♡

あっ、んっ♡ あっ♡」

「ああ、本当だ……！ そういういらしいところも大好きだ……！」

「っ♡ んあっ♡ はっ♡ それ、ヤバいつす……っ♡ 好きって言

いながら突かれるのっ♡ 頭がおかしくっ♡ あっ♡ んああっ♡」

俺が好きと口にしただけでモモの反応は露骨に大きくなる。
気持ちよさそうに身震いし、おまんこは、きゆうきゆう、と締め付けが連続し、表情も甘く色っぽくなっている。

「くっ……！ なら何度でも言っつてやるっ！ 好きだ、好きだぞ、モモ……！」

「あっ♡ あっ♡ す、好きっす♡ 私も、東郷さんが……♡ はっ♡
ああっ♡ もう、めちやくちや大好きっす……♡」

「モモ……！」

口を半開きにして快感に震えるモモの姿は可愛さを残しながらも、とても色っぽく淫靡なものだった。見てるだけで、肉棒の硬さが増すほどに。

「おっぱいもっ♡ おまんこもっ♡ もう全部東郷さんのものっすからね……♡ いつでもエッチしてくださいっす……♡ はあ……♡ あっ♡ 他の人……彼女さんのことも好きでもいいっすから……♡ ちゃんと私のことも好きでいて、エッチしてくださいっす♡」
「っっ……！ ああっ！ もうお前は俺の女だ！ モモ！ 俺のだ！ 可愛いぞっ！ くうっ……！」

「あああああっ♡ おっぱい、揉まれて……♡ それもヤバいっす……っ♡ っ……っ♡」
後ろからぶるん、ぶるんと揺れるJカップの乳房を持ち上げるように揉みながら突く。

身体を前に倒したことでモモの艶のある黒髪から女の子の匂いが立ち上ってくる。身体が熱くなり、汗もかいてる筈だが、その匂いは未だ心地良いものだし、実際に、細い首筋にうっすらかいた汗や揺れる髪まで艶かしく感じる。

手のひらに乳房のもちもち感、重さ、柔らかさを感じておっぱいも俺のモノになったと実感する。そうしながら腰を突いて、モモという美少女で快感を貪る。俺の女。俺の雌。中出し。射精。女子高生。Jカップ。セフレ。7人目。学校の廊下で、射精——と、快感と優越感を煽るキーワードが頭の中で幾つも駆け巡る。

「モモっ！ モモ……！ くうっ、はっ、はっ……射精してやる……！ 中に出すからな……！ うぐ……！」

「は、はいっ……♡ どうぞ……っす♡ んっ、あっ♡ っ……っ♡ 東郷さんの精子っ♡ たくさん、たくさん出してくださいっす……♡ ん、あっ、はあ♡ あっ、あっ♡」

モモが自分から腰を押し付けてくる。お尻の肉が俺の腰に密着して気持ちいい。堪らない。

しかしそうすることで中では——子宮口と俺の肉棒が、コツン♡

とキスをする。

別に先程までもあったことだが、モモの、ここに、という言葉で子宮口という女の子の大切な場所まで実感してしまう。

ここに、俺の精子を、俺の精子を出す。ぶちまけたい。子種を沢山。睾丸がきゅつと持ち上がった気がした。モモの中の感触に集中してしまい、思わず快感がせり上がってくる。亀頭で膣穴をほじくり、カリが膣壁を引っ搔いた。幹を包むあつあつのぬるぬるのキツキツ。裏筋や他の全部をにゆるゝ♡ つと擦り、包み、根本まできたら亀頭の先、鈴口で感じる子宮口のコツンとした感触。手でJカップを揉んだ。柔らかい。こちらの鼠径部辺りにお尻がむにゅつと押し付けられた。何となく、腰のくびれからお尻までの美しくエロい曲線をなぞって、この中に俺のちんこが入ってるのだと思うと、

——あつ、無理。

男の決壊、導火線に火がつくのはいつだって突然だ。しかも、殆どの場合には止められない。

そして、そのまま火がついて爆発するのに任せただ方が気持ちいいことを知っている。むしろ、もつと燃やした方が良いのだと。

「つつっ！ 出すっ！ 出すぞ！ モモ！ モモっ！ 中出しするっ！ イクっ……！」

「ああっ♡ あっ♡ あっ♡ 来てっ♡ 出して、ください……っす……♡ JカップのJKセフレに射精っ……気持ちいいっすよっ♡ きつとっ♡ 中につ♡ 精子っ♡ 出して……♡ 私も、イクっすからっ……♡ あつ、というか、もうっ♡ 駄目……っす——♡」

「っ、ああ——!!」

こんなときまで、最後の時まで、モモが射精を煽るようなワードを連続させてくる。

しかもその途中でモモが、

「っ、あつ♡ ああああ~~~~っっっ♡」

きゅうううっ♡ と、肉棒を包む媚肉の締め付けが強まる。

モモが再び窓に乳房を押し付け、背中を弓なりに反らした。——

イッたのだろう。わかる。わかるが、それを冷静に見ている余裕は俺にはなかった。肉棒から引き絞るような精液の波が、

「いっつっ——くっ……!!」

びゅうううううっ♡ びゅううううっ♡ どびゅっ♡ どぱっ♡

びゅぱっ♡ びゆる……♡

腰を強く、モモの尻に押し付けながら射精。子宮口に亀頭をぐりぐりと押し付けながらの射精だ。

先端に熱い感覚。子宮口に注いでいるのを感じて身震いする。

男にとって至福の瞬間、最高の快感を感じて頭が真っ白になる。

この時ばかりは知能が動物並に落ちていることが分かる。もう射精の快感を感じることもしか出来ないのだ。

「うっ、ぐううっ……! ああっ、かつ、うっ、気持ち、いい……!」

あっ、中出し……!」

「んあっ……♡ ああ……♡ 出て……るっす……♡ んうっ……♡

こんな場所で……♡ 見られるかもしれないのに……♡」

そう、幾らモモでも、これだけ大声で、しかもこれだけの動きを見せれば見られるかもしれないのに。

それでも絶頂の快感を味わうように、その場で強く身を寄せ合ってしまう。もつとも、俺が押さえつけてるだけかもしれないが。

「はあ……はあ、ん……♡ ふふ……これで、イケない関係に、なっちゃったっすね……♡」

「っ……ああ、そうだな……」

射精が落ち着き、モモも絶頂が落ち着くと、モモは顔を紅潮させ髪を若干乱れさせた状態で、イタズラっぽく、どこか色気のある笑みをこちらに向けた。

その様子がまた可愛い上にエロくて生意気で、分からせてやりたくなるが……一度射精したところで少しだけ冷静になる。

「……というか、関係はともかく……かなり危なかったな……」

「……そうっすね……でも……ふふ、私にとっては忘れられない初体験になりそうっすよ?」

「まあ、そうだろうな……」

誘われたとはいえ、初めてが学校の廊下って明らかに一般的ではないだろう。どう考えてもアブノーマルだ。モモが満足しているようなので、それでいいのだろうか。

というかイケない関係というのも……よく考えれば他も同じ様なものだよね……。

まあセフレという言葉がついた時点で若干興奮する自分もいないでもないのが構わないが、別にそういうことなら恋人ってことでいいんだが……他もそんな感じだし。

それより、若干落ち着いた所為で怖くなってきた。見られたら終わりだし。なので一先ず肉棒をモモの中から抜いて声を掛ける。

「……とりあえず、後始末をして部屋に戻るぞ……ちよつと時間を使い過ぎた気がするしな」

「んっ♡ つと、了解つす。……まあ続きは後つすね、東郷さん？」

「……そうだな」

処女なのに遅しいな……まあ落とした女、大体そうだったけど。

とりあえず、近くのトイレとか掃除用具から色々持つてきて後始末を終えると、俺はこちらの腕に抱きつくように、嬉しそうにくっついてくる友人——セフレのモモと一緒に、部屋に戻ることにする。

——すると戻るなり、ちよつと一局終わったところなのか、加治木が話しかけてきた。

「——ん、東郷さんに……モモもいるか？」

「はいっすー！ 加治木先輩！ ステルスモモ、ただいま戻ったつすよー！」

「ああ、遅くなってすまないな」

「……モモのテンションがやけに高いが……まあ、それはいいとして、少しアドバイスをお願いしたい」

「ああ、いいぞ」

……ふう、どうやらバレてはいないようだな……。

ぶっちゃけセックスの後だから匂いとかでバレるかと思って怖かった。見た目とかは綺麗にしたし、お互いにチエックしたから大丈夫だろうと思っていたが、匂いは自分達では分からないところがある

からな……。

しかしこの中で一番洞察力のあるであろう加治木が見抜けないということは、他の部員も気づけないということ、

「……ん？　なんか匂うぞー？」

「!?」

「えっ」

——と思っていたところだったので、蒲原のその言葉に俺は内心で激しく驚いてしまう。

モモも思わず驚いた表情でビクツとしていた。多分、俺もびっくりしている。表に出さないようにはしているが、多分若干出ているかもしれない。

「？　匂い……？　……何の匂いもしないけど、智美ちゃんの気の所為じゃないの……？」

「ワハハ、分かってないなー佳織は。これは明らかに何かある匂いだぞー」

「む、むう？　何かあるとは……？」

しかもこの蒲原、いつになく自信に満ち溢れている。確信を持っている様子だ。

……え、ていうかマジ？　マジでわかんのか？　変な匂いってところまでは分かってても匂いの正体までも分かるってのは……なんか色々ヤバい気がするんだが。

というか、態々車に戻って消臭スプレーまで掛けてきたのにバレるのか？　ヤリまくる予定ならこういうのは必須だろうって予め買っておいた諸々の一つである消臭スプレーすら見破るのか？

……いや、でも消臭スプレーの匂いという可能性もあるか……そうでなかったらヤベーな。ヤバいどころじゃないけど。

「えっと……に、匂いつすか？　私は全然しなかつすけど……」

「匂い……？　私も特に感じないが、蒲原。一体なんの匂いを感じ取ったんだ？」

「ワハハ、それはだなー……」

と、緊張の一瞬。俺とモモは互いに声も目配せもしないが、同じ気

持ちでそれを見守る。

すると蒲原はこちら——ではなく、窓の方に近づくと、その窓を全開にし、

「ずばりこの匂いは——カレールだな！」

「……………え？」

「……………カレー、だど？」

俺とモモが呆気に取られる中、加治木の問いかけに対し、そうだと蒲原が頷く。くんくん、と鼻を鳴らすようにして、

「家庭科室とかどつかで作ってるんじゃないか？」

「……………あ！ 確かにちよつと匂うかも……………！」

「うむ……………言われてみれば……………徐々に……………」

妹尾や津山も風に乗ってきたカレーの匂いを感じ取ったのか納得してしまふ。というか、俺も分かった。確かにカレーだ。モモや加治木も理解したようので、

「カレーっすね……………」

「確かにカレーの様な匂いだが……………それがどうしたんだ蒲原」

「分からないのかユミちん。カレーの匂いを嗅いだら……………」

と、蒲原は一度溜めて、

「——カレーが食べなくなる！」

「あつ、確かに、そういうことあるよね！」

「うむ……………あるな……………」

「あるあるネタっすね」

「いやまあ……………」

蒲原の発言に思い思いのトーンで頷く一同。

俺としては困惑する加治木に近いだろうか。なんとも言えない気持ちになる。わかるんだけどな……………。

俺は気が抜けてしまい、一度息を吐く。その上で皆に向かって、

「……………練習が終わったら食べに連れてってやろうか？」

「おっ！ 本当かー!？」

「えっ、いいんですか？」

「ああ、奢ってやる。練習頑張ったらな」

まあカレーくらいいいだろうと俺は半ば投げやりというか適当に言う。ちよつと練習サボってしまったし、その謝罪というか申し訳無さもあるしな。ちよつとくらいは奢ってやってもいい。

「それだとまたぐ馳走になってしまいが……」

「東郷さんは太っ腹つすね。さすが元プロつす」

「ああ、元プロだからな」

と、自分で言つて悲しくなることを繰り返す。……っーかモモ。もつと露骨になるかと思つたら距離感上手いな……墮とす前までと何も変わつてない気がする。

まあその方がバレずに済むからいいんだが、と俺は練習を再開させようと卓に着く直前。

「……東郷さん」

「ん？ どうし——、……!?!」

小声で話しかけてきたモモの方を向いて、仰天する。

何故なら話しかけてきたモモは、スカートを軽く捲くり上げ、液体が垂れる太ももやそのスジを見せてきたからで、

「……ふふ、練習終わりが楽しみつすね♡」

「お、おお……」

「ワハハ、よーし、サイコロ回すぞー」

しかし、周囲の面々に気づいた様子はなく、今の行動くらいではモモに気づかないことに俺は気づいた。

危ねえな……いやほんと、このセフレ、色々とヒヤヒヤさせてくれる……。

とんでもない美少女を墮としてしまったな、と俺はまだ鼓動を早くさせながら席に着くことにした。

ステルスデート

「——そういえばカレーってインドだと手で食べた方が美味いって聞くよなー」

「藪から棒に一体なんだ蒲原……いや、まさかとは思うが手で食べようとするなよ?」

「ワハハ、バレたか」

「だ、駄目だよ智美ちゃん……ほら、作法とか間違ったら怒られそうだし……」

「うむ……いや、好きに食べていいのでは?」

「そもそもインドにカレーって料理はないんすよね、確か」

「えっ……」

「ああ。カレーみたいな料理が幾つかあって、名称がかなり分かれているとは聞くな。そもそも『食事』などの意味を持つカリという言葉が英語に訳されてカレーになったとか」

「東郷さんの言うように、カレーという料理は1772年に英国領インドの初代総督、ウォーレン・ヘースティンクスによってイギリスに渡り、そこから日本に渡って、日本独自のカレーライスというものが出来たと言う」

「お詳しいんですね二人共……」

「自分から振っておいてアレっすけど、なんで東郷さんも加治木先輩もそんなに詳しいんすか……?」

「いや……俺はちょうどこの間、そういうことを気まぐれで調べてな……」

「いや、私は世界史の勉強用に借りた本で、そういう記述が——って、蒲原。この間一緒に勉強した時に口に出した筈だが、まさか憶えてないのか……?」

「えっ……」

「智美ちゃん、さっきから驚いてばかりだね……」

「……こいつらもこいつらで賑やかだな……」

練習終わり。俺は鶴賀高校の面々を揃って約束通り、近くのカレー

専門店に連れて行ったのだが——まあ、やっぱり女子高生って感じが
凄いい。

よく食べるしよく話す。まあ別に静かに食べるってタイプじゃないし、そんなことを言う気もないから全然良いんだが、やっぱり若いとエネルギーが違うよな。とはいえ俺も充分若い方だし、こんなこと言う
うと本当に若くない人から怒られそうだが、それでも学生と大人でな
んかちよつと勢いとかノリが違うのはあると思う。歳の上ではそんな
に離れてなくても、なんとなく話が噛み合わないとか、そういう話
はたまに聞いたりする。ジェネレーションギャップという奴かもし
れない。違いかもしれない。

しかし俺は割と合わせられる方だし、問題ない。カレーも美味いし
な。うむ……やべ、津山のが移った。うむ。いやまあ、問題があると
すれば、隣に座るモモのことで、

「——あ、東郷さん、福神漬け取って貰ってもいいですか？」

「っ……ああ、分かった……ほら」

「んっ♡ つと、ありがとうございますっす」

モモがテーブルの端にある福神漬けの入った容器に手を伸ばそう
として——届かない。そんな仕草をして俺に頼む。

別に取ってやるのも構わないのだが、問題はそうやって取ろうとす
る時にさりげなく、胸を身体に押し付けてくるのだ。

おかげで結構辛口なのに別の意味で身体が熱くなってしまう。い
やほんと、肩口辺りに、もにゅんっ♡ と押し付けてたわむ乳の柔ら
かさや弾力は昼間に味わったばかりなのに癖になるこつてり感とい
うか、出来ることなら今直ぐ襲いたいくらいだ。

「はー、沢山食べたなー」

「えっと、本当にご馳走になって良かったんですか？」

「ああ、別に良いぞ。これでも元プロだからな」

妹尾の遠慮に俺は元プロという理由で気にせず奢られとけと言う
が、お金が余ってるとは言わない。言えない。まあ稼いでるかって言
われると、悲しいことに全然だからな……一応貯金があるからまだな
んとかなるっただけで。ちよつとした見栄って奴だ。

「プロって凄いですね……」

「ん、まあな……」

しかし正面の席に座る妹尾からの返答、キラキラした眼で見られてちよつと照れくさいというか、気恥ずかしいが、まあこういう感じで尊敬されるのは気分がいいので、奢るのも問題ない。大した金額じゃないしな。

それにしても……妹尾の乳も中々に捨てがたいな。眼鏡巨乳。眼鏡JK美少女か……俺の女にはいないし、ちよつと、いや、かなり唆るが……。

「む……、——東郷さんっ、そろそろ帰るので送って行って欲しいっす」

「あ……？ ……いやまあ別に構わないが……」

と思っていたらモモに袖を引かれながらそんなことを言われる。いや、まあ、なんか思惑というか、モモが何を考えているか微妙に察せられるのだが……あまり露骨なのは困るな、対応に。

という訳で俺は他の奴らにも顔を向けて、

「ん……まあいいか。送って行ってほしい奴がいたら送ってやるが、誰かいるか？」

「私と佳織は大丈夫だぞー、家も近いしなー」

「あ、はい。そうですね、大丈夫です」

「私もそこまで遠くはないので……」

「私もそれほど遠くは……というか、皆家は結構近いんだな……」

加治木が俺の言いたいことを代弁してくれる。モモじゃないが、やっぱり加治木は俺と感覚が結構合うのだろうか。生き別れの妹でも親戚でもないけど。

「それじゃあ送っていくのはモモだけか」

「！ そうつすね！ それじゃお願いするっす♪」

「ん、ああ……それじゃそろそろ会計して出るか」

と、俺は皆が食べ終わったのを確認してテーブルの伝票を取ってレジへと向かう……明らかにモモが嬉しそうにしていたが、ちよつとこの後なんて言い出すのか楽しみなような、怖いような……。

——とか思いつつ、皆と別れてモモを俺の車の助手席に乗せたのだが、やはりと言うべきか。

「——今日、東郷さんのお部屋に泊まっていったら駄目っすか？」
「……………」

助手席に乗ってドアを閉めるなり、そんなことを言ってくるモモ。思わず何も言えなくなる。いや、予想はしていたのだが、まさか本当にそんなことを言ってくるとは…………。

「…………いやお前、明日は学校だろ？ さすがに駄目だろ。親はなんか言わないのか？」

「そこはちよつと、友達の家泊るとかで誤魔化していく感じで…………駄目っすか？」

「駄目っすよ…………」

思わずモモの口調に合わせて断っていく。いやちよつと、危ない橋だからな。明日が学校だっていうのに友達の家泊まるっていうのは…………どうだろう、一般的にかどうかは分からないが、俺の感覚だとあんまり無いことだと思う。

ちよつとやんちゃな子であったり、親同士が勝手知ったる仲だったりすると、そういうこともあるのかもしれないが、

「というかお前、友達俺と…………加治木達以外はいないんだろ？ 絶対怪しまれるだろ」

「それはそうなんすけど…………うー、もうちよつと一緒にいたいっす…………」

くっ…………中々可愛いこと言ってくれるじゃないか…………そうやって残念そうな感じで甘えられるとちよつと俺も惜しくなってくる。

「でもなあ…………さすがに明日学校で外泊つてのは…………」

「えー、東郷さんはせっかく出来たセフレの女の子ともっと一緒にいたくないんすか？」

「そりや…………まあ、いたいけどな…………」

「ならもうちよつとイチヤイチヤ…………しないっすか？」

「っ…………お前、またそういう…………」

モモが隣から手を伸ばして俺の太ももを撫でてくる。先程の飯の

席から時折やってくるモモの誘惑でありおねだりだ。

それも先程までは皆にバレないように手を伸ばしてくるだけだったが、今はこちらを真つ直ぐに見上げて誘うように。

制服の上からでも分かるJカップの爆乳やスカートから伸びる太もも、おみ足がどうにも唆る。

それらを見て、俺は僅かに逡巡する。今の時間は……19時40分。高校生を22時以降連れ回すのは駄目なので、それまでと考えたら2時間20分。帰る時間を考えれば余裕を持って2時間。

それまでということであれば、まあ――、

「……わかった。22時までな。それまで一緒にいるか」

「！ やったつす……！ えへへ、東郷さんのそういうところ、私めちやくちや好きつすよ♪」

「うおっ……と、運転中なんだが……」

俺がもう少し一緒にいるかと許可を出すと、モモが嬉しそうに顔を綻ばせ、俺の肩に頭を乗せ、左腕にむぎゅつと抱きついてくる。

先程から味わっていたモモの胸の柔らかさ、女の子の体温、重みを感じて気持ちいいが、運転中なんだよなあ……まあ大丈夫っちゃ大丈夫なんだが、危ないといえれば危ない感じの行動。

「でも抱きつきたくなつたんすよねえ――あ、せつかくなので、セフレらしく運転中にちよつとエッチなことでもするつすか？」

「カーセックスは運転中じゃなくて、車を止めた上で、ただ車内でやる性行為のことなんだけどな……」

「するつすか？」

「やめとく……が、こんくらいはやつとくか」

「――あっ♪」

あんまりにも挑発され続けた鬱憤か、モモの軽いノリに触発されてか、俺は信号待ち中に左手を伸ばしてモモの乳房を制服の上から驚掴みにする。手のひらいっぱいに至高の重みと弾力、柔らかさを制服という汚してはならない布越しに揉み込む。

「あー、柔らかけー……モモ、ほんとおっぱいでつかいな。気持ちよくて困る」

「んっ……♪ 東郷さんに揉まれるのも気持ちいいっすよ♡ ん、それじゃお返しにこっちにいたずらしちゃうっすっ♪」

「ああ……っ」

モモがいたずらという言葉通りにいたずらっぽく、俺の股間をその女子高生らしい綺麗な右手で撫でてくる。気持ちいい。誘惑と乳揉みで半勃ち気味だったチンコに甘い快感が送られ、ぐんぐんと硬く大きくなってしまう。

「いや、気持ちいいが、俺が運転ミスしたらどうする」

「んっ、その前に射精させるとかつすかね？」

「したらどうするかって聞いているんだけどな。ってか、イチヤイチヤするっつってもどうするか……行きたい場所とかあるのか？」

「……ゆっくり出来るところ？」

「また難しい注文だな……、ってか、あく……普通に気持ちいい。ちよっと待て。普通にムラムラするから」

会話中にも、シコ、シコ♡ と。俺の股間の膨らみを撫で回し、軽く握りながら扱いてくるモモに気持ちいいからやめろと軽く注意する。いやほんと、女の子にチンコ弄られるのってなんでこんなに気持ちいいんだろうな……。

しかし俺の嫌とは言い切れない注意など意に介さず、モモはこちらを笑顔で見上げ、

「えー、東郷さんこそ、私のおっぱい揉みまくってるじゃないっすか……んっ♡ それ、止めたらやめてあげるっすよ？」

まあ、それはそうなんだけどな……実際俺はモモのJカップをぽよん、たぶんっ♡ と左手で持ち上げたり跳ねさせたりして乳の気持ちよさを掌から手放せていない。離れた方がいいんだろうが……なんというか、こういうつても揉んでいい巨乳があるとなんか……堪らないというか、手持ち無沙汰の時にでも揉みたくなる感じがあるんだよなあ……しかもモモは嫌がらないし、むしろ良い反応を返してくれるから感触だけでなく気分的にもなんか良いのだ。

「いやほんと、それも難しいというか悩ましいんだよな……いやほんと、どうするか……」

「そうっすねえ……んっ♡ ……あ！ あそこなんてどうっすか!？」
「え？ ——ああ、アレか……いやまあ、確かに……」

と、モモが会話の途中、通り過ぎる窓の外の街並みを見て、道の先のある店を指差す。

そこはなんて言うか……まあ、端的に言えば、ネットカフェ。通称ネカフェって奴だ。

「あそこなら時間潰せるし、それにペアシートとかカップル席みたいなものって、なんか入ってみたくないっすか？」

「確かに俺も入ったことないけどな。大体1人で入るし……んー、行くか？」

「レッツゴーっす!」

「はいよ。……大丈夫か？」

モモの号令に従い、俺はハンドルを左に切りながら小声で心配を口に出す。

というのもネカフェとかって身分証明書とか出すし、大人と高校生つてのが普通にバレると思うんだよな……いやまあ年齢的に大学生とかって思われるか？ 大学生と高校生ならまあ平気っちゃ平気か。グレーゾーンって感じだが、通報されるほどでもないだろう。2時以降って訳でもないしな。

……後、モモの場合、店員に気づかれなさそうってのがあるな……いやまあ勝手に入ったら駄目だし、入ったとしてもカメラとかならバレるっばいから無理だけでも。

そんなことを考えながら、俺はネカフェの駐車場に車を止め、モモと共にネカフェへと足を踏み入れたのだが、

「いらっしやいませ……お一人様ですか？」

「いや、2人です。ペアシート空いてますか？」

「……? 2人、と言うと……?」

「あ、いるっすよー」

「——!? えっ? ……えっ?」

……案の定、店員がモモの存在に気づかず、言葉は少なくともめちゃくちゃに驚いていたりはしたが、

「え、えつと、それじゃあ身分証明書のご提示と、入会書類の記入をお願いします〜……」

「はい」

「はいっす」

と、まあ普通に初めてのネカフェに入る時のお決まりの手続きを踏んで、

「はい。それじゃこちら、伝票と会員証になります〜。フードの注文の際は、お手数ですがフロントまでお越しください〜」

「はい、分かりました」

と、お決まりの言葉と共に中へ通された。

「おー………ここがペアシート………結構広いっすね」

「なんか普通に快適な広さだな」

お店の奥の方にあつたペアシート。通称、カップル席というやつにモモと足を踏み入れたのだが………人3人くらいが並んで寝転べるくらいの広さがあつてちよつと驚いた。

パソコンのモニターも2台あるし………備え付けのハンガーや枕、座布団も2つある。

それと、ちよつと思つたのが、

「………なんかネカフェって、たまに来ると普通に楽しみたくならないつすか？ ドリンクバーでエナジードリンク入れて、漫画とかめちやくちや読みたい衝動が………」

「………俺と同じことを思つたな。いやほんと、すげー分かる。学生時代によくやつたな、それ………」

ゆつくりといちやつくつもりで来たと思つたのだが、なんか予想外というか予想内というか、普通に漫画とかが読みたくなって困る。昔読んだ漫画とか、人気だけど何故かまだ読んでない漫画とかこういう機会に読んどきたいとかあるよな………。

「とりあえずドリンクと漫画取ってくるか」

「おっけーっす」

まあそういうデートもありか………と、思いながら、自然にそう言つて2人して部屋を一旦出る。

その際に、モモが俺の左腕にひしつと抱きつくように腕組みしてきたが、これも気持ちいいしいかかってなる。人もまだいるんだけどなあ……ペアシート周辺は全然人がいないが、離れた場所のシングル席はちよいちよいい人がいなくもない。

だがまあ、漫画とドリンクを取るってなると両手を空けなければならぬので、腕組みは直ぐに解消された。

しかし適当にドリンクと漫画を取って部屋に戻ってきたところで、

「東郷さーん、そこに座ってくれないっすか？」

「ん？　こうか？」

戸を閉じてドリンクと漫画を置くと、何故かモモが壁際に座るようお願いしてくる。特に断る理由もないのでそのように胡座をかい座ってみたのだが、その意味は直ぐに分かった。

「よいしよつと。失礼するっすよ〜」

「おっ……」

一声掛けたモモがこちらに背中を向け、スカートを手で押さえたかと思うと、こちらの足の間に入り込むように腰を落ち着けて、もたれかかってきた。

すると女の子特有の柔らかかな重みや、人肌の温かさとか、なんなのか分からないいい匂いとかが、一気に押し寄せてくる。

「ふふ、こういうの、イチヤイチヤしてる感じでよくないっすか？」

「まあ……そうだな」

不意打ちを喰らった所為で気の利いた返しが出来ず、つい普通に頷いてしまう。そして普通に漫画を手取るモモだが、この体勢で漫画か……いやまあいいんだが、絶対途中で別のことがしたくなるに決まってる体勢だな。

というか今既に気になる。だってまあ、こんな距離が近くて普段の感じで見てみると……やっぱモモは美少女だしスタイル良いしで非の打ち所がないのだ。漫画とかよりもくつついてるモモの身体の方が気になる。首元をくすぐるモモのサラサラで艶のある黒髪はなんかこそばゆい気持ちよさがあるし、上半身で感じるモモの背中、その制服の生地や、ブラの感触がなんか良いし、そもそもモモのお尻が俺

の股間辺りにある訳でこれまた弾力のある重みと柔らかさでムラつときそうになる。それに加えて、手の置きどころに困ったのでなんとなくモモの脇下辺りからお腹に手を回してみたのだが——って、こうやって見るとやっぱ腰ほっせいな……思わず掴んだりさすさす擦ったりなぞったりしてその曲線を楽しみたくなる。そしてその手を上に伸ばして——じゃねえよ。待て待て。さすがに早すぎる。これじゃ漫画とか持つてきた意味がない。

という訳で真面目に漫画を、真面目に漫画つてのもよく分かんないが、とにかく漫画とか読みながら適当に雑談しつつイチヤイチャする。モモが俺背もたれを堪能している様で、時折スリスリと背中を擦りつけてくるが、それも平常心だ。平常心ちよつと高めくらいで。絶対平常心じゃないな。

「……モモは漫画とかよく読むのか？」

「んー、普通くらいじゃないっすかね。めちやくちや読む訳じゃないっすけど、なんとなく目についたのを買って読んで、気に入ったら揃えてみるくらいっすか」

あー、なるほど。モモはどうやら週刊誌とか月刊誌とかネットとかで連載してるのを見るというよりかは、単行本とかで気まぐれに読むタイプらしい。アレだな。週刊誌で最新話まで読んでる前提で話するとネタバレになって怒られるやつ。あれは嫌だもん……1回ボブと喧嘩したことがある。そう、当時の俺は週刊誌というものをあまり読んでることがなくて、単行本で買うもんだと思っていたら、週刊誌派のボブにめちやくそネタバレされたから俺がキレて、ボブが笑ってるもんだからボブが見始めたアニメの最新話を俺がネタバレしたらボブもキレてお互いに掴み合った。最終的に何故か後輩も巻き込んで某鉄道すごろくゲームで遊んだら俺とボブが妙に逃げるのが上手いパシリの池田とゲームを知り尽くしてるオタクの倉橋にゲーム内でボコボコにされたからキレてスマ○ラに移行したんだけど今度はまたオタクの倉橋がゲーム内でクソ変態ムーブかましてボブのゴリラと俺のエスパ―少年をボコボコにしゃがったんだ……くそ、あの恐竜ふざけやがって……おかげで俺とボブは色々技が出なくなつた。

「まあ、おっばいおつきいっすもんね、あのプロ。東郷さん、昔っからおっばい星人さんだったんすか？」

「あっ……まあ……そんな感じで……」

一瞬でバレた。そりやそうだろ。こんなんで誤魔化せない。

ましてやモモとはもう肉体関係がある訳だしな……。

「……まあいいっすけどね。私はセフレなんで」

「お、おお……そう言いながらチンコ触るのなんかアレだな……」

「セフレだから当然っす。だからこうやって……ネカフエでシコシコっつて、してあげてもいいんす」

その理屈はどうかと思うが……だが後ろ手に股間を撫でてくるのはまたしても気持ちいいから困る。さっきまでも乳揉んだり同じこととしてたりしたからな。あー、なんか普通に射精したくなってくるから困るな……。

「……あー、話を戻すけどな。趣味とか共通する友達とか作れそうだよな。深夜ラジオってファン同士だと結構仲良くなれそうないメージがある」

「……そういえば、そういうのは考えたことなかったっすね。まあ、結局気づかれないと意味ないのと、自分で言うのもなんなんすが、同じ趣味の同年代って少なそうっすね……」

「んー……言われてみればそうかもな……あ、もしくは別の趣味を始めて見るとか良さそうだよな——」

「セックスとか？」

「んひっ……って馬鹿お前……変なこと言いながら敏感なところ触るな……変な声出ただろ……」

「ん、ふふふ……んひっって言ってたっすよ？ 男の人も可愛い声出るんすね？」

「こいつ……」

モモと適当な会話をしながら軽くペッティングをしていると、モモにいきなり亀頭の辺りをきゅっと握られて変な声を出してしまい、酷い羞恥に襲われる。くそ……嫌な気分ではないんだが、こういうことされると仕返しに犯してやりたくなるな……というか冷静に考えて

みるとこのやり取りはなんかバカツプル感凄いな……もし俺達みたいな奴がいて、俺がそれを見たとしたらちよつと爆発しろつてなるな、これは。

「んくく……はあ、それはそうと、趣味って言ったらどういのがいいんすかね?」

「……そうだな……あ、自撮りとか?」

「……いきなりそのチョイスはどういう理由なのか聞いてもいいっすか?」

「いやほら……カメラだと映るんだから、意外と自撮りとかしてSNSに上げたら人気出そうだなって……」

と、俺は思ったことを適当に言う。まあこのモモの為の話題つても、モモも理解しているだろうが、適当な会話だからな。なんかモモはもう、俺とか加治木達で満足してる感凄いし。話しててもそこまで深刻そうな感じはないので、逆に話せる。

それとモモの方も、俺の提案に対して目を上に向けて、あー、と多少納得したような様子を見せ、

「わかるっちゃわかるかもっすねー……でもあんまりピンとは来ないっす。別にやってもいいっすけど」

「どっちだよ……あ、後はあれだ、コスプレとか」

「それはコスプレエッチしたいってことっすか? いいっすけど」

「違——うと言おうと思ったが、許可してくれるならそれはそれでやぶさかではないな、うん……」

「ふふ、正直者のスケベさんっすね。ちよつぴりまた硬くなつたっすよ、うりうり♪」

「あつ、やっぱ……気持ちいいな、それ……あー……」

からかうようにチンコを握って小刻みにシコシコしてくるモモに普通に快樂を与えられてしまう。あー、もういい加減ムラムラする。ちよつと射精させてもらおうかな……

「……でも意外とコスプレとかして街歩いたら意外と気づかれたりしてな……、あー、良い……」

「試したことないっすから分からないっすけど、多分無理じゃないっ

すか？　というか、それで見えるようになってもなんとも言えない気分になりそうっす……」

「それもそうだな……うーん、モモは可愛いからイケる気もするんだけどな。俺からしたら気づかない方がなんか……あー……」

「……………やっぱ漫画読んでる場合じゃないっすね……つと」

「え？　——おおっ……………」

とかなんとか適当に言っていると、モモが不意にこちらへ向き直って抱きついてくる——だけではない。

それどころか、こちらを横に倒して押し倒すようにして俺の上で四つん這いになって見つめてくる。そして俺の頬に手を当てて、

「んっ……………♡　ちゅっ……………♡　はむ……………♡」

「っ……………ん……………」

唇に何度もキスを落としてくる。

いきなりなことだが、やられていることは理解出来るため、そのままモモからの気持ちのいいキスを受け取り続ける。

遊びとガチの中間のような若干軽めのイチヤイチャするようなキスをしながら、モモは俺の間近で声を送ってくる。

「んっ……………ちゅっ、んむっ……………♡　はあ、東郷さん、やっぱ優しくて格好良くて大好きっす♪　東郷さんを気持ちよくしてあげるだけのつもりだったんすけど、なんかこっちの方が我慢出来なくなってきたちゃって……………♡」

「ああ……………いやまあ俺も我慢出来ないっちゃ出来ない感じなんだけだな。我慢してるけど」

理性で頑張ってるのだ。辛うじて。

しかしこうやってモモに積極的に迫られると……………我慢してるのがアホらしくなってくるといっうか、理性が段々と削ぎ落とされるようだ。というか、女の子の方から積極的に迫ってくるの、やっぱエロすぎない？　こんなんされて我慢しないっていう方が無理なんだけど。「ふふ、それじゃ我慢比べでもしてみるっすか？　ほら、こうやって……………」

「！　おお……………」

モモが一旦俺の上からどいて座った体勢に戻ると、しかしそのまま自分の制服の上半身に手をかける。

シャツを下から、お腹の裾を持ち上げる感じで肌を露出していく。まずモモの細いくびれが見えた。相変わらず肌も白いし、くびれもしつかりとあつて撫でたくなるような感じだ。

だがその上、服を徐々に上げたと思つたら、今度は当然、モモの自慢の98センチのJカップ。その下乳が露出し始め、

「——つと、ここのままでっすよ〜♡」

「っ……お前……」

「ふふ、このまま全部見れると思つたっすか？」

——うん、思つた。内心で素直に答える。っーか見せろ。おっぱいおっぱい！

いあまあ下乳はエロいけどな。というか、こうやって制服を持ち上げて下乳まで見せてくる美少女JKという図がエロすぎてなんかたまらなくなってきたな……なんだこのエロ漫画みたいなシチュエーション。

「ほらほら、触つてもいいっすよ〜♡」

「……そういうの、男が我慢出来ると思つてんのか？」

「あつ——♡んやあつ♪ 制服の下から手入れてくるとか、んっ♡

エッチっすよ〜♡」

「くっ、いやもうこんなこう触るに決まつてるだろ……ああ、生乳柔らか……すっげえ柔らかくておつきくて最高……制服に手入れてJカップ揉むの堪らないな……」

モモが持ち上げた制服の裾部分から手を伸ばし、見えない部分にあるモモの大きな膨らみを両手で揉みあげる。

制服の上から俺の手の形と、Jカップの爆乳が俺の手の動きでたわんだり動くのが見えてエッチだった。それと、制服の中に手を入れてるため、中が温かいし、おっぱいも柔らかくてさっきよりも温かい気がする。

「んっ……結局、エッチな雰囲気になっちゃったっすね……？」

「お前が終始エロいからだ……あーもう無理。ちよつと……なんだ。

挟んで貰っていいか？」

「ふふ、東郷さん、やつぱりおっぱい大好きっすねー……♡ いいっすよ……♡ それじゃ、静かに内緒のエッチの始まりっす……♡」

ギンギンになったチンコがもうちよつと先走りすら漏れてくる有様だったので、モモにそうお願いする。

するとモモも直ぐに了承してくれたので、指示して俺の腰を膝の上に乗せる形になった。……後、どうでもいいがネカフエって普通にカメラあるから見られる筈なんだよな……カラオケボックスとかもだけど、お目淫しされたりしてるだけで駄目っちゃ駄目だし、バレる可能性は高い。

でもなんというか、ペアシートって……なあ？ しちやうよな……そりゃあ。

「今週はこんな感じで、毎回隠れてエッチする感じになりそうっすね？」

「今週どころじゃなく可能性も——あつ、やばっ……はあ、乳に飲み込まれる……！ やばい、すぐイクかも……」

「ふっふっふっ♡ 東郷さんの元気なおちんちんさん、私のおっぱいで捕獲しちゃったっすよー♪ むぎゅつと♡ それで……たぶたぶ♡ ぽよんぽよんって、東郷さん専用のセフレおっぱいでたっぷり扱いてあげるっす……♡」

「ああ……最高……！」

制服のシャツを捲りあげて曝け出されたJカップの爆乳に俺の肉棒はあっさり挟まれて根本から先端まで全部が呑み込まれる。

お昼振りのパイズリ。しかもネカフエの中でそれを受けて、俺は呻く。っーかモモ、エロすぎ……そういう男のツボ抉ってくるのはチンコ敏感になるから止めてほしいけど止めてほしくないな……。

モモが得意気に愛情たっぷりのパイズリ奉仕を行い、100センチ近いJカップが俺の股座にたぶたと叩きつけられているのを眺めながら、随分とエロいセフレを手に入れたな……と、今週の明るく淫靡な未来を思い、俺は更に肉棒を硬くしてしまった

決意

——5月27日、金曜日。

5月の下旬ともなれば、もう初夏という言葉が相応しくない程の暑さが長野県の地表を襲っていた。

……いや、この場合は相応しいと言うべきか。

まあどっちでもいいが、とにかく、外は暑い。

調べてみたら日中の気温は30度を超えていたりする。5月にしては暑い。いわゆる真夏日というやつだ。

しかし、クーラーの効いた室内に居座る分には特に関係はなく、

「——ロン。3900だ」

「あつ」

今日も今日とて、俺は鶴賀高校麻雀部の面々に麻雀を指導、対局をしていた。

対面の妹尾の捨牌で和了って俺は1位でオーラスが終了。対局が終われば多少緊張感を持っていた部屋の空気も弛緩し、口も開きやすくなる。

「……ふう、これでまた東郷さんの1位か……正直、プロとアマチュアでこれほど差があるとは思っていなかった。認識が甘かったか……」

「……まあ、こんなこともある。それにオーラスまでは加治木がトップだったろう。言うほど差はないと思うけどな」

「そうつすよ。加治木先輩が1番食い下がってたつす！ 元プロ相手にここまで戦えるのはすごいつすよー！」

「……そう言ってもらえると気が楽になる——が、樂觀しすぎるのも良くない」

対局が終わり、加治木が椅子に背中を預けて息を吐くが、直ぐに気を取り直したように真面目な表情で俺やモモ、他の面子にも聞こえるように続けた。

「1週間、元プロである東郷さんとの対局で、皆それなりに腕は上がった筈だが、大会で勝ち抜けるかどうかは分からないところではあるな……」

「私はまだまだ初心者ですけど……」

「佳織も基本のルールは憶えて打てるようになってきたしな。マシにはなってきたと思うぞー。とはいえ、大会ではまだまだ初心者だろうけどな！」

「大会まであと1週間ですもんね……」

と、睦月が部室内のカレンダーを見てそう呟くのを見て皆は聞いたし、聞くまでもなく知っている。

全国の高校生雀士の頂点を決める夏の大会、全国高等学校麻雀選手権大会こと、通称——インターハイ。

その地区予選が6月4日、5日に行われる。

故にこの鶴賀高校麻雀部だけではなく、全国の高校生雀士がこの1週間で最後の仕上げ、調整を行っているところであろう。

当然世間にも注目されており、マスコミ、各記事、ネットでも今年のインターハイの有力校、有力選手が誰か。春季大会や昨年のインターハイ、国麻、インターミドルや世界ジュニアなどで活躍した選手などを中心にリストアップされており、麻雀ファンはそれらを見て、今年はどこが、誰が勝つのか、どんな活躍が見れるのかと大いに期待し、熱を上げている。

俺もその辺りのニュースや記事は一通り目を通して。去年までは現役プロとして解説の仕事なんかもあつたからな、普通に有力選手、有力校の情報などは大体頭に入っているのだが。

……余談だが、やはり優勝の本命は俺の母校でもある白糸台高校であり、最も活躍が期待される選手もやはり、白糸台の団体戦2連覇の立役者、個人戦でも2連覇を成し遂げているあの宮永照である。

まあ今の3年生の世代は宮永世代って言われるくらいだからな。他にも活躍してる選手はいるが、やはり宮永照の活躍が頭一つ抜けているし、マスコミやプロのスカウトなんかもとつくの昔から注目している。

他にも注目校が幾つかあるが……まあ今俺が注目すべきは長野県予選に出てくる有力校だろうな。

「どこまでいけるかっすよねー。どうせなら優勝したいっす！」

モモが気合十分、といった感じで両の手を握って「優勝」という言葉を出す。情報が頭に入れ、他校のリサーチなども行っている加治木などは苦笑しつつも冷静だ。

「……まあ組み合わせは恵まれている。出来る限り上を目指したいところではあるな……」

「組み合わせ、ですか？」

「ああ。優勝の大本命……龍門渕や風越女子とは決勝まで当たらないようになっている」

と、加治木は自分の携帯を取り出し、皆に組み合わせ表を開いて見せる。

すると確かに、龍門渕は第1シード。1つ目の山に入っており、風越女子は第2シードで3つ目の山に入っており、鶴賀はそことは違う、4つ目の山に入っていた。

……そして俺は、その3校と決勝まで当たらない、2つ目の山に「清澄」と書かれているのを見て、なんとも言えない気持ちがかんてくる。

「わあ……参加校ってこんなに多いんですね……！」

「2回トップを取れば決勝なんですよ……3回勝てば優勝……う、ううむ……」

「ワハハ。でも激戦区に比べたらこれでも全然少ない方だぞー」

「そうなんすか？」

蒲原の発言を聞いて、モモが俺の方を見上げて確認してきた。俺は頷き、

「ああ。東京や大阪なんかだと200校くらいは参加してるからな。それに比べたらずっと少ない」

「へえ、そうなんすね」

俺は簡潔にそう説明してやる。いやほんと、しかも西東京に東京、北大阪と南大阪とかで分けてそれだからな。参加校はめちゃくちゃに多い。

確か、後多いのは神奈川とか愛知とか北海道とかか。どこも地区が2つに分けられていたりする。どこも激戦区だ。

……そういや、有珠山は南北北海道地区だったな……後で確認しとくか。

やはり俺が関わった高校はちよつと気になる。有珠山は言わずもがな……この長野で指導した学校も、それぞれ気になるというか、もしかしたら決勝で4校が当たる可能性もあるため、ある意味困ってしまう。どこを応援するべきかで。

「……まあ、頑張れよ。俺は今日で終わりだが、大会まであと1週間はあある」

「はい。ご指導、ありがとうございます。正直、予想以上に捗りましたよ」

「はっ……まあそれなら良かったな」

もつとも、本物のプロの指導の方が捗ったとは思うが……一々それを口に出すことはない。練習ももう終わり、部の雰囲気も悪くないしな。それに水を差す気にはならない。

「大会は俺も見に行くし、また会うことにはなるが……まあ、記念だ。最後に飯でも奢ってやる。何が食べたい？」

「験担ぎでカツだな！」

「安直過ぎないか……？」

「というか部長、この間もカツカレー食べてたような……」

「あれれ？ そうだっけ？ ま、なんでもいいだろ。奢ってもらえるんだしなー。ワハハ」

「そんな感じで奢ってもらっていいんですか……？」

「……まあ、気にするな」

ぶつちやけカツとかその辺りは意外と安いし、奢る側としては助かるっちゃ助かるので俺は頷き、携帯を取り出す。とりあえず、近くのお店でも調べるか……と、俺は鶴賀高校麻雀部との最後の練習日を終えた。

「——うぶ……ちよつと食べ過ぎた……くそ……特盛りなんか食うんじゃないかったな……」

夜になり、ホテルの部屋に帰つてくると、ジャケットを脱ぎ捨てて即座に口元を押さえながらベッドに横になる。

練習が終わった後、ネットで調べた市内のとんかつ屋に行き、鶴賀高校麻雀部らに飯を食わせたのはいいが、ちよつとしたノリで俺は大量のとんかつを食う羽目になったのだ。

まさか大盛りの更に倍……通常サイズと比べて10倍の量があるとは思わなかったけどな……まさかカツの下にカツが隠れているとは……度し難いトラップだった。

とはいえなんとかその戦いに勝利し、俺は皆と別れ、意気揚々とホテルへと帰還した。ちゃんと備え付けのキャベツの千切りや豚汁も完食してやったぜ……ははは……気持ち悪っ。油断したら吐きそう。むしろここまで吐かなかつた自分を褒めたいくらいだ。

「はあ……おかげで締まらない別れになったな……」

そう独りごちるが、とはいえ来週の大会ではまた再会するだろうし、大した別れではない。

……強いて反省点を言うなら、最後の最後まで、あわよくばと妹尾にも役満を当てようとしたが出来なかつたことくらいか……これに關しては運が悪かつたとしか言いようがない。いやまあむしろこれまでが良すぎたというか、上手く行き過ぎていた訳だが……、

「これで長野での依頼は終わり、か……そして、成果は3人……」

天井を見つめていた瞳を閉じて、瞼の裏に長野で墮としてきた女達を描く。

福路美穂子、原村和、東横桃子。

出向いた4校の中で3人も墮とせたのだから上出来だ。俺のハーレム計画は中々に上手くいってると言えるだろう……計画と言うほど大した考えはないけどな。オカルト様様って奴だ。

それに、だ。そういうクズい意味以外でも、良い出会いだつたと言えるのかもしれない。どいつもこいつも、俺と関わるには勿体ないほどの良い子ばかりだつたからな……いやほんとに。

おかげで来週のインターハイの地区予選にも顔を出さなきゃならなくなつた。見に来てって言われたのもそうだが、単純に気になるし

な。風越女子、龍門渕、清澄、鶴賀……何処が勝ち上がるのか、はたまたどの学校も勝ち上がらないのか——いや、それはないな……可能性としてはめちやくちや低いだろ。天和並みに。

というか天江衣や宮永咲といった魔物だけでもお腹いっぱいなのに、それらに勝てる化け物がこれ以上長野に居てたまるかつて感じだ。美穂子や池田、透華に原村や竹井、加治木やモモ……その他の連中も中々に高校生レベルだとかかなりの腕を持つ奴がごろごろいるし、これだけでも他の地区よりもレベルが高いんじゃないかと思ってしまう。故に俺が見てきた4校の内どのれかが勝ち上がるんじゃないか……と想っている。まあ大本命で龍門渕、次点で清澄か、風越。そして鶴賀つてところか。割と面白そうな戦いになりそうだな、と柄にもなく楽しみになってしまっそうだ。以前までは麻雀プロではあつても、高校生の試合を純粹に楽しみにする麻雀ファンかって言われると微妙だったんだけどな……やはり知り合いが居るって言うのは大きいか。

……それと、やはりプロをクビになったのが——つて、ああん？

「つと……電話か……」

いきなりポケットから聞き慣れた電子音が鳴ったので俺はポケットから自分のスマホを取り出す。そういやポケットに入れたままだったな。普通は帰ってきたら直ぐに取り出して充電ケーブルにでも差すんだが、腹がいつぱい過ぎて忘れていた。

俺は携帯を取り出すついでにベッドから起き上がり、財布やら鍵やらも取り出して机の上に置く。そしてベッドの縁に座り直し、液晶画面に表示された名前を見て……ちよつと思案しながらも電話に出た。

「——もしもし」

『あつ……もしもし、仁さん、夜分遅くにすみません。今大丈夫ですか？』

「ああ、大丈夫だ」

と、スピーカーから聴こえてきた声は液晶に表示されていた名前の人物の声——和の声だった。

どうでもいいが、気遣いとはいえ、今大丈夫ですかって電話で聞か

れるのってちよつとだけ気になる時あるよな。大丈夫だから電話に出てんだよつて言う……まあそれでイラツとするほどでもないが、頭の片隅で思う時はある。

当然、それを口にするでもなく、俺は和の続く声を聞いた。

『えつと……少し、聞いてほしいことがあつて』

「聞いてほしいこと？」

『はい……』昨日のことなんですけど……』

そう前置きする和の声は、真面目で何処か悔しさを滲ませた様な声だった。

『……放課後に部長に言われて咲さんと一緒に染谷先輩のお家でやっている麻雀喫茶でメイド服を着せられて対局してたんですけど……』

「……え？ 何？ メイド服で対局？ あいつのお店つていかがわしい店なのか？」

『ち、違いますっ！ その、お店の制服がそれで……あ、でも……可愛かったんですよ？』

いや知らんし。つて言いたくなる言葉をぐつと飲み込む。どうか何処からツツコめばいいのか……まあ、なんだ。竹井がやりそうなことだな……和も宮永もご愁傷さまって感じた。

あ、だがメイド服はいいな、うん……今度、和にメイド服を着てもらおう。それでエツチなご奉仕をしてもらおう。最高だな。

『……エツチ』

「……まだ何も言っていないんだが」

『何も言つてなくても雰囲気で分かりました。もう……そ、そういうのはまた今度です……』

はい、エロい。ドスケベ淫乱ピンクのどっち。今の嬉し恥ずかしみたいな声で半勃ちした。眼の前で見えていたらフルボツキ不可避だったな。そして襲つてた。まだ今日は抜いてないしな。

しかしここでムラムラしたところで辛いだけなんだよなあ……モモは今日は普通に帰っていったし——まあ一緒に居たそうにしていたが、今日は泊まりは難しいらしい——それに、大会まで後1週間ということもあり、長野にいる俺の女は全員麻雀の練習に打ち込んでい

るし打ち込みたい筈で、暇な時に出会ってセックスという訳にもいかないのだ。

やれるとしたら精々大会後とかその直前とかそのくらいで……はあ、考えたら憂鬱だな……ここから俺は1週間以上生殺しにされる可能性があるって言うのがなんとも……。

だがそうは言っても仕方ない。とりあえず、ムラムラするのを抑えて和の話の続きを聞く。それは、

『……それで話を戻しますけど……そこで、咲さん共々、プロの方に負けてしまつて……』

「……プロだと？」

は？ なんていきなりプロと打つ羽目に——と思つたが、竹井がその麻雀喫茶にこの大事な時期に清澄のキーマンであろう2人を行かせたのだから、間違いなく彼女の差し金だろうな、と俺は軽く眉間に皺を寄せる。

まあ俺に依頼したくらいだし……元プロの次は本物のプロつてか？ 贅沢なことだな、と率直に感想を思う。しかしプロか……誰だ？

ぶつちやけプロつても数は結構いるからな……言われても分らんかもしれないが、一応——、

「……なんてプロだ？」

『確か……藤田さんって呼ばれてました』

誰だよ。藤田？ さすがに名字だけじゃ分からんな……聞いたことがある気もするが、気の所為な気もする。うーむ……。

「他に特徴は何かないか？」

『……何でも、実業団時代から“まくりの女王”と呼ばれているらしくて……』

「あ、あー……」

和からの追加情報で判明した。頭の中で1人の人物像が浮かび上がる。そうか……あのプロつて藤田つて名前だったっけか……ぶつちやけ有名と言えば有名だが、そこまで興味が無かったので名前までは忘れていた。

「……カツ丼とか食つてたか？」

『え？ あ、はい……言われてみれば食べてましたけど、何で分かるんですか？』

「いやまあ……それより、その藤田プロに負けたって？」

カツ井ばかり食うことで有名だからな、という言葉を飲み込み、俺は和に話の続きを促す。……まあ俺もさつき大量のカツを食ってきたばかりだから出来ればカツの話なんかしたくないんだけどな……和からの相談だし、しょうがないと耳を傾ける。

『はい……負けてしまって……それで、その人に言われたんです。私達の実力じゃ、龍門渕高校の“天江衣”には勝てないと……』

「あー……なるほどな……」

今度はまた知ってる奴——和と同じく、長野に来て最近知り合った有名人の名前が出てきて俺は思わず納得してしまう。

確かに天江衣相手に和や宮永が勝てるかって言う……正直難しいだろうな。

和はネットなら、宮永ならもう少し頑張れば食い下がれる可能性はありそうだが……少なくとも、この間見た実力では勝てないだろう。まだ全然衣の奴の方が強い。

まあ勝負は団体戦になるのだから、総合的に勝ち越せばいい訳だが、龍門渕は別に他のメンバーが弱いつて訳でもないしな。どいつもそれなりに麻雀が出来る連中だ。

清澄もその点は同じ——いや、ひよつとしたら総合的、平均的には清澄が僅かに上かもしれないが、そうだとしても衣の圧倒的な実力があれば、多少の点差はハンデにすらならないだろう。

そして実力を知ってる俺ならこう色々と言えるが、和は天江衣がどういった選手でどういったオカルトを持っているか知らないだろうし、不安なのだろうな、と何となく電話してきた理由を察する。

「……それで、不安になって俺にまた依頼して——って訳ではなさそうだが……」

『あつ、いえ、そうして貰えるなら有り難いですけど……今日から合宿することになってまして。これから大会まで、猛特訓する予定です』
「そうなのか。気合が入っていて良いことだな」

『はいっ。それで電話したのは……ちよつとした決意表明みたいなもので……』

ん？ どういうことだ？ と俺は和の言葉に疑問符を浮かべる。

すると思つたより不安そうではなかった——むしろやる気に満ちた声音で和は言った。

『……私、絶対に勝ちます』

「……おお」

『絶対に勝ち進んで……優勝して、大切な物は全部勝ち取って見せませす』

「……ああ」

『だから……見ていて下さいね仁さん。大会で私の成長した姿を……』

「……ん、わかった」

『お願いします』

と、和は俺にそう頼んできた訳だが……。

……ぶつちやけ、事情がよく分からんな——あ、いや、ちよつとだけ親云々の話は前に聞いたっけか。確か、親にはあまり麻雀のことを良く思われてないとか何とか……もしかしたらそれもあって、こんな真剣な宣言を俺にしたのかもしれない。

正直いきなりそれだけ言われても何がなんやらだが、真剣な事は伝わるし、頷かない理由はない。

……それに、だ。もしそうだとしたら、その理由は——、

「……和」

『はいっ？』

俺は言っておく。別に言わなくても良いかも知れないが、気まぐれで何となく、

「……あー……何だ。麻雀が好きなら……それを最後まで貫けよ」
『！』

「何に悩んでるかは知らねえけどな。……いや、悩んではないのか？
そう決意とか言ってくるくらいだしな。……まあ分かんねえ。と
にかく、周りのことを気にしすぎず、好きなものに打ち込め。和はそ

れが持ち味だと……なんだ。俺は勝手に思ってるからな」

と、俺はグダグダというか、言葉を迷わせながらそう励ましにも近い言葉を通話口に投げる。

若干こつ恥ずかしいことを言ってるような気もするが、一応事実というか本心だ。

和は今まで会ってきた雀士の中でも、特に集中力が凄まじいと思う。

特にネット麻雀をしている時の和は、俺が後ろから胸を揉んでも頬を赤くするくらいで全く反応しなかった。……今考えるとやってること最低だな……それも今更だが。

とにかく、その集中力をネットだけではなく、リアルでも出せるようになっていたら——和が目指しているであろう目標にも手が届く可能性はグツと高くなると……思う。多分。

曖昧でしようがないが、俺如きに確実なことは言えないし、確証がある訳でもないからな。まあこんなもんだ。

とりあえず、俺はそう言ってる和の返答を待っていると、和はややあつて、吐息を漏らしながら、

『……ありがとうございます』

「……おお。いやまあ……とにかく頑張れよ。当日は見に行くからな」

『はいっ……！ そのっ、あのっ……』

「？ なんだ？」

電話を切る感じの雰囲気になったところで、和は途端に言葉を詰まらせる。

何かを言おうとして、言い切れない。そんな感じが数回続いたところで、

『~~~~♡ あの……す、好き、です……♡』

「……えっ？ ……あ、ああ……。あー……まだ何かあるか？」

『……えっと、それだけです……おやすみなさい……』

「……ん、おやすみ。それじゃあな——」

と、俺は電話を切って——そこで気づく。

……あつ、今の多分……あれだ。恋人とか特有の、別れ際の好き確認みたいなのしたかったんだな……。

ちよつと不意打ち過ぎて素でスルーしてしまった。いや、なんとなくか直前まで真面目っぽい話してたからな……それでも気づけよって話だが。はやりさんとはよくそういうのやつてるんだしよ。

ちよつと何も言わないのはアレなので、チャットでそういうのを送っておく。えーつと……まあ無難に、『俺も好きだぞ』つと……なんというかバカツプル過ぎる上に俺に似合わなすぎて寒気がしてくるな……男のこう言う甘いのは気持ち悪い気がしてくる……。

しかしまあ、こういうので女の子側は喜ぶのははやりさんとか他の相手によく分かっているし、和も今頃喜んでるに違いない。もしかしたらその勢いのまま自家発電とか——いや、ないな……幾ら和が淫乱とはいえ、合宿って言ってたし、他の部員がいるようなところでオナニーはしないだろ……。

「むしろ俺の方が欲求不満だな……あー、セックスしてえ」

ちよつとここ最近、やりまくってたのもあつてもつとやりたくなる。……いやまあ普通は落ち着くと思うだろうが、なんていうかな……ハーレム状態で好みの女とやりまくれるってなると性欲ってとめどなく溢れてくるんだわ。

複数の美少女と関係を持つているっていうのは男として堪らないもので、それでいて複数プレイとかが出来ていなかったり、意外とやれる時が限られているのがムラムラを加速させてくる。

ともあれ先程も思ったことだが、ムラムラしても出来ないものは出来ない。ムラムラしても仕方ない。今更自家発電つてのもの……と……ということで俺はシャワーでも浴びて頭を冷やすことにする。

「……………あー……………それにしても……………」

服を脱いで浴室へ。

そしてシャワーの栓を捻ってお湯を出しながら、俺はふと、先程の自身の発言を思い出す。

「麻雀が好きなら……最後まで貫け……か」

反復し、ややあつて——ハッ、と嘲るような乾いた笑いが口から漏

れ出る。

「どの口が言うんだってな……」

ノズルから降り注ぐお湯を頭に被りながら、俺は洗い流せない複雑な感情を胸の内に浮かばせた。

——その後。清澄高校の合宿所。消灯後のある部屋では、

「……んっ……♡ はあ……はあ……、——ん、さん……♡ んう……っ♡ あっ……♡」

「………うう……(な、何やってるんだろう和ちゃん……ベッドでもぞもぞして……って、気の所為じゃなければ、アレだよね……)」

「………ふあ……(のどちゃん……いつの間にムツツリから淫乱に……。まあそれはともかくとして、これじゃ眠れないじえ……早く終わって欲しいじよ……)」

並べられた布団の両隣。和の隣で眠った振りであり気づかない振りをしている咲と優希は、和のその行為に何か言うことも眠ることも出来ず、ただただ耐え続けていた。

「はーっ……♡ んあ……♡ ——さん……♡ 勝ちます……んんっ♡ だ、だから勝ったら……♡ はあ……♡ ご褒美……っ♡」

気づかれていることに気づいてないのはベッドの中で荒く熱い息を吐くピンクだけ。

妄想の中で相手に犯される。それを思い描きながら両手を動かす

——合宿所の1年生トリオらが眠るその部屋の夜は、彼女の一人舞台であった。色んな意味で。

——高校生の頂点を決める大会まで後7日。

——麻雀に青春を懸ける少女達の最も熱い夏が、今まさに、始まるうとしていた。

長野県予選1日目

——6月4日。土曜日。

この日は麻雀ファンにとって読んで字の如く、待ち望んだ待望の日である。

……まあ別に6月4日そのものが特別な日という訳じゃないけどな。日程は毎年違うし、そもそも1番の期待度で言うなら本戦の開始日の方が盛り上がる気もする。

とはいえ、本戦も先んじてこれを行わなければ始まらない。それが、

——全国高等学校麻雀選手権大会予選。

全国各地で開催される高校生の頂点を決める大会——インターハイの予選。

その中の団体戦。長野県予選が、今まさに俺の眼の前の会場で行われようとしている——。

……そういう訳なのだが、今の俺の感想としては率直に、

「あつっ……人多っ」

予選会場にいつもの服装とサングラスを身に着けて来たのだが……思ったより暑いし人も多い。

だがこれは俺が馬鹿だったというか、忘れていただけだ。地区予選に真正面から観戦に来るのなんて久し振り過ぎて忘れていた。

予選とはいえ、インターハイが始まるんだからそりゃ人も多いわなと。

何しろ団体戦ってことでそこら中に様々な学校の制服を着た女の子がいる。

選手だけではなく応援だつてあるからな。それがまず50校分いる訳で、単純に250人以上は確実にいる訳だ。

それに加えて、近隣住民。出場選手の親族、友人なんかも集まっているだろうし、地区予選では他の観戦客に比べて比率こそ少ないが、コアめな麻雀ファンなんかも普通に観戦しに来ているだろう。

そして、俺としては地味に関わりたくないのが……やはり記者だ。

こちらでも地区予選では本戦に比べて数こそ少ないが、それでも一定数の記者はいる。予選とはいえ有力校や有力選手が出場するし、そうでなくともどの学校も本戦に出場する可能性も活躍する可能性もあるとして見逃せない。

麻雀ファンからすればそういった新しい選手を発掘するのが楽しみでもあるが、それは記者も供給する立場としては同じという訳だ。なので、そういう奴らは麻雀に詳しい——いや、正確に言うなら、選手とか学校、チームの事情とかに詳しいと言うべきか。

だからこそ、俺はサングラスなんかを身に着けて会場入りしてる訳だ。

ぶつちやけ元プロの俺なんかを知ってる奴は少ないだろうし、自意識過剰な気もするが、やはり知ってる奴は知ってるだろうし、記者に目をつけられるのも面倒だからな。だからまあ、やらないよりはマシな身バレ防止としてサングラスって訳だ。つーかやり過ぎると目立つし。これくらいがちようどいい塩梅だ。

「……はあ、さつさと中入るか……」

無駄に気を回しているようで酷く馬鹿らしく感じる時もあるが、それを無視して俺は歩みを進める。

「ん……」

だがその途中、携帯が震えたので俺は携帯をタップしてそのメッセージを見る。

そこに書かれているのはついさっきまで一緒にいた相手からのチャットだ。そう、俺は高校生相手に3日程になるか。夜に麻雀の指導を行い、昨日など俺が泊まっている旅館の部屋に泊めてしまった。

ここまで言えば分かるだろう。そう、俺が泊めた相手は——

『東郷さん!! 3日間俺の無理な願いに付き合っていただけでありがとうございました! どこまで出来るかわかりませんが、精一杯頑張ってきます!』

……京太郎。そう、男だった。

俺は指を動かして返信する。

『そりゃ依頼だったからな。でもまあ頑張ってこい。麻雀つてのは運

の要素が強いんだからよ。諦めなきや予選突破も出来るかもな』

『！ はい！ そうっすね！ やれるだけやってみます！』

『後で応援に行く。……つつても男子で個人戦のお前の応援じゃないけどな』

『笑 了解です！ それじゃまた後で応援お願いします！』

と、既読にして携帯を閉じる。そして息を吐いた。

……いやまさかインターハイ直前に京太郎から依頼が来るとは思わなかったな……。

そう、俺はインターハイが始まるまで、ゆっくりとする予定だった。

一応観戦しに行く約束は色んな相手としてるし、もうしばらくは長野に留まるつもりだったのだが、とはいえ大会直前に……やっぱ身体に負担を掛けるのもあれだし、会ったりするのはどうかとさすがの俺も思うわけだ。

だから俺から会おうとするのは自重した。

……しかしまあ、向こうから会つてと言われるならそれはもうしょうがないことだと思ひ、悶々とした気分を旅館のベッドで浮かべていた時——遂に連絡が来た。

だがそれは京太郎からのもので……何でも、今度の大会で勝ち進みたいということ、俺に依頼がしたいとのことだった。

どういう心境の変化があったのかはわからないが、金も払うし、少しの時間でもいいから見て欲しい。ほんのちよつとでも構わない。無理な願いかもしれませんが……とまで言われて……さすがの俺もそれを突っぱねるほど薄情でもないの、了承して3日程麻雀を見てやった。

部活終わりに京太郎だけを迎えに行き、雀荘に連れて行ってアドバイスを交えながら打つ。あるいは俺のパソコンを使つてのネットマで後ろからアドバイスしつつ打つ。

そして終われば負け越して凹んでる京太郎の肩を叩き、ラーメンでも食うかとラーメンを奢って、ラーメン屋で他愛もない会話や意味深な会話をしつつ、きちんと替え玉まで奢ってやり、家まで送つてやって、親御さんに挨拶する——なんていうマジで麻雀のコーチみたいな

健全な3日間を送ってしまった。

そしてそのせいで、他の女の子達と絡むことが一切なかった。……いやまあ元々会わないようにしようと思っただけだな？ 連絡されても会わなかった……そう、大会前にそういうことするのは良くない。だからしようがない。しようがないと思うことにした。……くそ……帰る前に全員抱いて帰ってやる……。

「さて……中は……やっぱ記者が多いな……」

会場に入るとそこそこの数の記者がいたので、俺は思わず舌打ちしそうになるが我慢する。

サングラスを掛けてきて正解だったか。いやまあ元プロの俺がいたところでそこまで騒がれるかと言ったら微妙なところだし、自意識過剰かもしれないが慎重に動くに越したことはない。

何しろ自分が応援する相手の中にはこの会場で最も騒がれる連中が半分程。麻雀のガチのジャーナリストになると俺の顔を知ってる奴もいるだろうし、一々ゴシップになることもない。

「——あ、東郷さん！」

「——お」

と、俺が会場の隅で選手達が待機している様や記者達の動きを見て試合までの時間を潰していると、俺を見つけて声を掛ける奴等がいた。

清澄高校だ。京太郎が俺を見つけて手を挙げ——

「——仁さん……!! 応援に来てくれたんですね!!」

「うおっ……和……!!」

京太郎を追い越して凄い勢いで俺の元まで駆け寄ってきたのは原村和だった。顔を輝かせ、俺の目の前まで抱きつかんばかりに近づきがさすがに止まる。——しかし近い。後名前で呼ぶのは色々と勘ぐられるんだが……。

「まあ約束したしな。和は……絶好調みたいだが」

「はいっ……♡ 仁さんが応援に来てくれたから……ですよ……!!」

「のどちゃん、勢いがすごいじえ」

「あはは……お久しぶりです、東郷さん」

「先日はありがとうございます」

「ん、一年生ズも久し振りだな」

動揺しないように極めて平静に片岡、宮永、京太郎にも応える。何で動揺しないようにしてるかって？——そりゃ、和がその暴力的な乳を俺に当ててきているからだ。他のところは当たってないし、こちらを見上げて我慢でもしてるのか抱きついてはいないが、制服越しに乳房がぴとつと当たっている。いや堪らん……が、ここでそんなことをされても困る。周囲には人が大勢。というか記者までいるつての……おかげで俺は性欲と理性の狭間で戦いつつ何とか他の清澄メンバーと話して平静を保つ羽目に。

「わざわざ応援に来てくれてありがとね」

「おう……まあ他の用事もあったからな。今日と明日は観戦してやるから頑張れよ」

「あら、個人戦は来ないのかしら」

「行けたら行く。予定が入るかもしれないからまだわからん」

今度は遅れてきた竹井が気安く話しかけてくる。染谷も一緒だ。清澄高校麻雀部の6名。全員気合十分といった感じだな。……まあ京太郎の試合はまた来週だし、若干一名ほど気合いいとか別のやる気見せてるような気もするが……いやほんと、いい加減離れないとこつちまで変な気分になるので、俺は自然に和の横に逸れて皆の前に立つようにする。

「あ、せっかくだし一緒に観戦する？ 予選は控え室とかもないし」

「！ 良い考えです、部長。仁さん、そうしませんか？」

「ん……あー……そうだな。一回戦だけなら構わないぞ」

「一回戦だけ？ 何か予定でもあるんですか？」

と、そのまま話していると竹井がそんな提案をしてくるので、俺は一回戦だけならいいと答える。染谷が何か予定があるのかと尋ねてきたが、もちろんある。というかありすぎて困るのだ。

「いや……他にもお前らと同じ様に指導した学校があつてな。そっちの試合も見に来て欲しいって頼まれてる」

「なぬっ!? 裏切りおつたか!!」

「裏切りもクソもねーよ」

片岡のオーバリアクションというかふざけた調子も相変わらずだな……と、そう思っていると和は俺を見上げてやや間を置いてから、「……でもその学校が2回戦まで勝ち進むとは限らないのでは？」

「確かに。それもそうね。先にそっちの学校から見てきたら？」

「こらこら、失礼かよお前ら」

和の発言に竹井が悪ノリして同意する……が、まあそれはそうなんだよな。二回戦や決勝は見に来てと言うが、勝てなければその約束も叶えられない。

ただまあ、俺が指導した清澄を含む4校はどれも中々に骨がある連中というか、わりかし強い奴等ばかりなので勝ち進むだろう。多分。まあ予想外のダークホースがいる可能性もゼロではないので確実にはないが、4校とも別の山にいるしな。

ちなみに決勝を見に来てほしいと言ったのは第一、第二シードのあいつらで、2回戦に行くのは消去法でもう1校だ。

まあ決勝をその4校で戦うなら全員観戦することになるので、ある意味明日が1番の楽しみではあるのだが。

「それじゃ行きますか？」

「ああ……あつ、いや、少し挨拶してくるから待っててくれ」

「挨拶……他の学校の生徒ですか？」

そんなところだ、と和の質問にも答えて俺は行く——が、背後からまだ視線を感じる……これはバレるな……だがまあ向こうから来るだろうし、避けきれないな……と俺は手を挙げて軽く挨拶をする。

「よう」

「！ 東郷さん！ お久しぶりです！」

「げっ、来たな目つき悪い元プロ」

——風越女子高校。キャプテンの福路美穂子と……池田アツ!!

誰が目つき悪い元プロだア!! と、俺が言う前に、

「——池田アツ!! 指導して貰った目上にその言葉遣いはなんだア!!」

「ヒツ……す、すみません!! コーチ!!」

久保さんに怒られていた。相変わらずだな、この人も……怒ってる時の恐さは中々だし、池田相手への厳しさも相変わらず。

「いやまあ、別に構わないですけどね」

「そういう訳にはいきません。——ご無沙汰してます、東郷さん。1ヶ月振りくらいですか」

「そんなところですね」

と、久保さんと一応大人として普通に挨拶をする。久保さんも同じ大人相手だと普通……というか強豪校のコーチってこういうところあるよね。野球とかのスポーツとかでもそうだけど、厳しいのは教える子にだけって感じで……まあそりゃ対等な大人には大人の対応をするのは当然なんだが、今の時代では中々珍しいやり方でもある。

「お久しぶりです東郷さん！」

「東郷先生！ この間はご指導いただきありがとうございますございました！」

「おう。お前らも頑張れよ。明日も見に来るからな」

「——はい。私達は勝ちます。私も精一杯頑張りますので……東郷さん、見ていてくださいね？」

風越女子のレギュラー陣や他の生徒達とも話し、頑張れと伝えてやる。特に美穂子が意味深だ。いや、俺が勝手に意味深に感じてるだけかもしれないが、美穂子の対応は普通の生徒と指導者の関係性に相応しい物に見えて……よく見れば違う。両目開いてるし、その視線も妙に色っぽく感じるというか……これ大丈夫か？ 気づかれてないよな？ 全体的に美穂子の雰囲気は初めて会った時のお母さんのようなそれから、また大人っぽくなってるというか、色気を感じる。学校とかで噂になってないだろうか。俺は池田にひそひそと皆に聞かないように。

「……おい、池田……」

「あつ、東郷さんも気づいたし。最近、キャプテンがますます母性に溢れて……ふふん、これはきつと華菜ちゃんのおかげだし。最近はよく練習後にお話したり相談も受けるからな」

「相談？」

「お洒落した方がいいのかとか、女子力がどうかそんな相談だし。ふふん、いいだろ？　これは華菜ちゃんが信頼されてる証だし！」

いや池田……自慢気に言ってるがそれを俺に喋っていいのか……？　しかしお洒落や女子力……もしかしてそのせいかな？　以前よりも色気が出る気がするの。とはいえだ。

「……福路は元々女子力もある方じゃないか？　お洒落かどうかはそこまで知らないが……」

「そう、キャプテンは元々完璧だし！　だからそこまで変える必要はないと思っただけ……キャプテンのやりたいことを否定する華菜ちゃんではない！」

「……さよか」

……まあ池田のアホっぷりは置いておくとして……周囲のアドバイスでもあったか。細かい変化があるように思える。

しかもそうだった相談をした理由は……十中八九俺だ。

「……では東郷さん。私達はもう行きますね」

「……ああ。それじゃあな」

「はい——また今度」

と、美穂子と普通に挨拶をして風越と別れる——うーん、やっぱり美穂子は自然だな。俺との関係など微塵も匂わせない。……だが俺にだけ分かるような意味深な行動がなんとも……エロいな。いや、気のせいかもしれないが去り際に目配せされてちよつと柄にもなくドキツとしてしまった。

だがまあどんだけムラつとしたところで今日明日は何かするわけにもいかないし、そろそろ大人しく清澄と合流——げつ。

「——お久しぶりですわっ!!」

「………おう。相変わらず声がデカいな、透華は」

「あー、すつごいわかる。ボク、目立つの苦手だからこういう場所だとちよつと困るよね……」

「なにをおっしゃいますの!?　目立ってなんぼ！　目立ってなんぼですわっつ!!」

「……国広も相変わらず大変だな」

「あはは……まあ」

と、視界の端で捉えた連中から逃げようとしたが、声のデカいお嬢様に補捉されてしまい、俺は諦めてため息と共に会話に応じる。あまり目立ちたくはなかったので今ここで話すのはちよつと嫌だったが、目立ちたがりのお嬢様は俺の気持ちなど知る由もない。

「ははは、諦めろよ。国広君に東郷さんも。透華が今更言つて聞くわけないだろう?」

「昔から変わらない……」

「純に智紀まで何を言っていますの! 我らは前年の優勝校! 長野の覇者龍門渕!! 今年の優勝候補筆頭でもあり、こんなにもマスコミが集まっているのですからスマイルですわスマイル! 真のアイドルになるためにも!」

「お前らアイドルを目指してんのか? 紹介してやろうか?」

「目指してないよ……っていうか紹介って何? 怖いんだけど」

龍門渕高校——透華を筆頭に国広、沢村、井上と、龍門渕の四天王と呼ばれる連中が騒がしくやって来る。もう全然目立ってて困るな……帽子とマスクも持つてくりや良かったぜ。……つーかもう1人いないな。

「というか衣はどうした?」

「あいつなら寝坊だ。多分な」

「ええ……いいのか?」

「まあ予選は副将まででトバしてしまうしかないかな……」

「わたくし達なら余裕のよっちゃんですわ!! 衣はハギヨシに任せてありますので無問題!」

という訳で衣は子供らしく寝坊らしい。これで弄ったら「こどもじゃない! ころもだ!」とまた怒りそうだ。

だがまあ確かに透華達4人なら予選くらいは問題ないんだろうな。全員が全国クラスの打ち手だし、そこらの奴らに負ける筈もない。

それにいざとなればハギヨシが衣を連れてくるだろう。ハギヨシはメチャクチャだしな。瞬間移動使えるし。いや、冗談じゃなくてマジで使えるから。漫画の執事キャラかよってな。

「そうですね。1回戦はお暇ですし、わたくし達と一緒に暇をつぶしませんこと?」

「あー……そうしたいのは山々だが、別の試合を観戦する予定があつてな」

「別の試合?」

「どこの山ですか?」

「ん、Eブロックだ」

Eブロックは東福寺、今宮女子、清澄、千曲東の試合。つまり清澄だ。

それに気づいたのか、彼女達は僅かに眉根を上げ、

「Eブロックって……」

「——清澄高校」

「あ、もしかして……原村和?」

「原村っていうか……まあ」

清澄の応援に行くだけなんだけどな。とか言葉を曖昧にしてると透華が薄く笑みを浮かべ、

「ふふふ……なるほど。やはり東郷さんも気になりますのね」

「気になるっていうか……」

「いえいえ、何も言わなくて構いません。——では、また後で。……ほら行きますわよ!!」

「あつ、ちよつと待ってよ透華!」

と、今度は透華が意味深に笑って行ってしまった。また後で……? どういう意味だ。

しかし考えても仕方ないな……龍門渕も行ってしまったし、今は清澄と合流して——あ?

「……後ろから近づいて来てもわかるからな?」

「!~~~~つ! さつすが東郷さんつすく!!」

「つ!!? おいバカ……!! こんなところで抱きつくな……!!」

俺は背後に気配を感じたので機先を制するように話しかけると、後ろから思い切り抱きついてくる誰か。むにゅんっ♡ と超高校級の柔らかさを感じる。もう最初っから大体わかつてる。こんなことを

する奴は1人しかいない。

「モモ……お前、1人か？ 加治木達はもうした？」

「加治木先輩達ならあつちにいるっすよ？ 私はちよつと東郷さんを見つけたので、ちよつと挨拶に来ました」

「そうか。……ならちよつと離れてくれないか？ お前、今周り見えてるのか？ 見えてるならこんなところで抱きつかれたら社会的に死ぬんだが」

「大丈夫っすよ。変に隠すからいやらしく感じるっす。堂々と抱きついてたら兄妹か親戚か、そうじゃなくてもそういう関係には見えないと思うっす。——それとも……抱きついてたら、ここが反応しちゃうっすか♡」

「っ……」

モモが正面に回り、周囲から俺を隠すようにして抱きついてくるが……俺は気が気じゃない。見えてはない……とは思うが、それでも俺からすればバレバレだからな。今のようになら抱きつかれ、ズボンの上から股間をスリスリとモモの手で擦られると困る。くっ……このステルス痴女め……いやまあ俺のせいなんだけど、惚れたからといってここまで迫られると……ぐっ。

「お前、こんなことしてる場合じゃないだろ……？ 加治木達のところに戻って試合前のミーティングとかそういうのはないのか？」

「心配してくれるんすね。それじゃ一緒に来ます？ そしたら……後でサービスしてあげるっす♡」

「この……」

胸を更に押し付けてそんなことを囁くような声で言われると、思わずついていきそうになる……ただでさえ久し振りの女の感触。この女子高生の制服越しの爆乳と肢体を擦りつけられて反応しない筈がないのだ。

だが今はこれから試合の観戦があるし、モモも本当はやってる場合ではないだろう。モモのオカルトならそういう行動も可能かもしれないし、魅力的過ぎる誘いではあるのだが——

「……今はやめとけ。また今度だ……」

「あんっ♡ いけずっすね。ふふ、それじゃまた後で楽しめるように頑張ってくるっす♪」

「おう……頑張ってこい。加治木達にもよろしくな」

と、俺が鋼の理性で試合に行ってこいと告げると意外にもあっさりとももは身体を引いた。その表情はいたずらが成功した時のような小悪魔的な笑顔を浮かべているが……くそ……長野で落とした女の中で1番エロいのは、いや、積極的なのはももかもしれない。ステルスが悪用してくるからな。公共の場でもアタックしてくるのがヤバい。

だが何とか耐えきった。マスコミにも……気づかれてるかもしれないが、気づかれてないと信じてさっさと清澄と合流しよう。そうすればマスコミもそこまで追いかけてこないはず——

「——少しいいか?」
「!!?」

とか思っているとまた背後から声。今度は油断していたのでちよつとビビってしまう。だ、誰だ? もう全員と話したぞ? まさか加治木が今のを見ていたとか? もしくはポリスメンか? もしくはマスゴミ? 1番良いのは俺が気づかずに落としていた女の一人だったりしたらいいし、落としていなくても新しい巨乳の美女との出会いだっいたらいいのだが——

「私は藤田靖子。麻雀プロだ。——そちらもそうだろうか?」

——あ、チェンジで。

違和感

「……違いますけど」

「そうだろう。出来るプロは私でもわかるくらいの独特の雰囲気があるから——え？」

「違いますけど」

俺は念の為2回言った。そうすることで自信満々だった相手の表情が崩れる。

そのつい数秒前まで自信満々でクールに決めていたゴシック・ファッションに長煙管の……まあなんとも特徴的な女だ。というか見たことある。名前は忘れたが……そう、カツ丼だ。まあ名前は忘れたから知らない振りで通そう。元プロってことを一々明かす必要もない。

「そちらも、ということとはあなたはプロなんですか？」

「あ、ああ。と言っても雰囲気とか空気とかを読むタイプのプロではなくてね……勘違いしてしまつてすまない」

なんだその言い訳は……今更取り繕つても遅いだろう。

とはいえそれは本当のこのようだ。俺の記憶でもカツ丼プロはデジタル寄りの雀士……ただ負けている時の勝率が高い、準オカルト的な要素を持つプロだったはず。相手の気配やオカルトを察知は出来ない……少なくとも対局時以外で出来る程ではないだろう。まあ、俺にとつては逆にわからない奴の方がわからないが……一般人的な感覚というのはそういうことだ。

ともかく、さっさと話を打ち切つてしまおうと俺は気持ちサングラスを指で上げて、

「そうですか。それじゃ、自分はこれで……」

「いや待ってくれ。少し聞きたいことがある」

「……なんですか？」

そのまま立ち去ろうとしたが、聞きたいことがあると呼び止められてしまえば、中々行きづらいものだ。仕方なく立ち止まって話を聞く。

「先程、出場する幾つかの学校……風越や龍門渕も含めた選手達と話をしていたようだが……失礼かもしれないが、どういう関係か聞かせてもらっても？」

「ああ……まあコーチと教え子という関係ですかね。一応外部からの臨時コーチとして行ったことがありますので」

一瞬ドキツとしかねない質問だが、鋼の心でそれを受け流す。別にこれくらいは言っても構わないというかこれ以外言えない。まさか肉体関係にありますとか言える筈がない。まあ久保コーチみたいな大人と話してるところも見てるようだし、そこまで怪しまれてはいない、純粹に優勝候補の2チームと話していたところを見て興味を持ったというところか。

その証拠に俺の答えにカツ丼プロはすぐに納得したように頷いた。

「コーチの方でしたか。……もしかして、私が知らないだけで有名な方とか？」

「はは、コーチを始めたのは今年からなので有名ではないと思います
が……なぜそんなことを？」

軽く笑って親しみやすい雰囲気を作る。……ぶつちやけさつさと行きたいのは山々だが、好印象を与えておくに越したことはない
と俺はプロ時代を経てよくわかってる。人の印象つてのは大事だ。
麻雀プロつて半分は人気商売みたいなところもあるからな。

まあ俺は目つきの悪さと2年目の墮落からそこまで人気は出な
かったが……とはいえ外だとサングラスを掛けることもあるので、そ
ういう時は誤魔化せる。俺くらいならサングラス1つで変装は簡単
だ……で、なぜ俺を有名だと思ったかの答えだが。

「龍門渕と風越女子……長野の強豪二つに呼ばれるなら、それくらい
指導力のあるコーチなのかと……」

「あー……確かに。そう思うのも当然ですね。ですがそういう訳でも
ないですよ。運良く先方が声を掛けてくれたので微力を尽くしたま
でです」

「なるほど、そういうことでしたか」

俺は自然に受け答えをする。まあ言った通り、そう思うのも当然だ

な。強豪校の外部コーチなんて、基本元プロ、学生時代に活躍した元OB。プロチームや実業団で実績を残した指導者。現役のプロ。そんな経歴や肩書を持つのが普通だ。

だがまあこれで納得してくれただろう。そろそろ話を切り上げようか——と思っている。

「なら少し参考までに聞かせてほしいのだが……今年の優勝はどこになりそうです?」

——そんなことを聞いてきて中々帰らせてくれないカツ井プロ。カツ井の出前でも取ってやった方がいいのか? つーかそんなことかよ。

まあ彼女達を見た指導者目線の意見が聞きたい、あるいはそれで話でもしたいのだろうが……生憎と一々真面目な議論をしてやる義理は俺にはない。だから聞きたい言葉を聞かせてやろう。

「龍門渚ですかね」

「やはりそうなりますか。龍門渚の天江衣は怪物ですからね」

と、まあこう言っておくのが無難だ。まあ風越女子と言っても良かったが、プロの意見だと天江衣だというのが普通だろう。その証拠にカツ井プロも頷いて——

「他の学校……風越の福路や……後は清澄の原村なども悪くはないが、天江の前には力不足と言わざるを得ませんからね」

「……………まあ」

「清澄とは私も少し縁がありますが……彼女達も勝てないことはわかっていた筈。そこからどう気持ちを持つてきたか……」

……………いやまあ……優勝候補筆頭が龍門渚というのはそうなんだが……なんだろうな。こう、あんまり勝てないとか力不足とか言われるとちよつと……。

「しかし個人戦には天江は出場していない。個人戦であれば、他の学校にも——」

「——藤田プロ」

「!」

俺は思わず名前を呼んでいた。名前を思い出した。そうだ、『まく

りの女王』藤田靖子。彼女に向かって俺は言う。

「彼女達が現時点で天江衣より格下であるのは事実ですが……格下とはいえ、その身に隠された刃の輝きを舐めない方が良いかと」

「……その身に……隠された？」

「……ああ、いえ……ポテンシャルが高いと言うことですよ。それの中には——天江を超えうる程の選手も」

「……！」

藤田プロが一瞬、眼差しを真剣な、それでいて驚いたものに変える。そこで俺も踵を返し、

「すみません。そろそろ失礼します」

「えっ……ああ、はい……」

俺は戸惑う藤田プロを横目で見てその場を後にする。藤田プロの背後からリポーターやカメラマンが近づいてきていたが……さすがにバレてはいないだろう。まあ余計な事を言わないで欲しいものだが、マスコミってのは信用ならないからな。あまり期待しない方が良いかもしいれないと、俺は席へと急いだ。

職業、麻雀コーチを名乗る男はそう言って去っていく。

紫色のジャケットに髪色。サンングラスを掛けた細身の男だが、その雰囲気はどこか独特で、歳もまだ若そうだ。

そのためプロであるかと藤田は誤認した。プロの中には藤田でも分かるほどの存在感を放つ者もいるからだ。

だがそうではなかったらしい。それより最後に気になることも言っていたので、そちらについて考えを巡らせていると——

「藤田プロ！ 今の人は……？」

「ん、ああ。麻雀コーチらしい。龍門渕や風越女子……それに原村のいる清澄にも招かれていたこともあるそうだ」

取材をある程度終わらせたのだろう。『WEEKLY麻雀TODAY』の記者である西田順子が藤田の元へとやってきて先程のコーチのことを聞いてきた。そして藤田は何気なく答えるが、返ってきた

のは藤田のジャーナリスト特有の何かを嗅ぎ取った表情と声色だった。

「いや……あの人、もしかして——『東郷仁』じゃ……」
「……東郷？」

西田の言葉に藤田は首を傾げる。やっぱり有名人なのか？ 先程の言葉は謙遜だったのか。

だが東郷という名前にどこか聞き覚えがあり、藤田は頭を悩ませる。元々人の名前と顔を覚えるのは得意ではない。記者の西田に聞いた方が早いと悩むことをやめて顔を向けた。

「聞き覚えがあるような……有名人？」

「え、知らないんですか？ ほら、今年クビになった元プロで戒能プロの従兄弟の！」

「……あ」

——藤田はそう言われて思い出す。そうだ。どこかで見覚えがあると思ったら……。

「鹿児島出身の……全小と世界ジュニアの記録保持者か——」

観戦会場は映画館のシアターに似た室内だ。

それぞれの試合毎に会場が分かれ、そこを映すモニターで観戦する。

県予選は決勝まで行かないと控え室などはない。出場する選手達も観戦室で試合を見ながら応援するし、そこが控え室みたいなものだ。

ミーティングなんかも適当なスペースでやる。まあどんなスポーツ、競技でも地区予選まではそんなものだ。ここまではお遊びで参加してる連中も多いしな。

とはいえだ。大会特有のこの空気は懐かしい。不安や緊張、意気込みが伝わってくるようなこの感覚。

「長野県予選の出場校は全部で58校。1回戦で16校になって、午後の2回戦で4校になる。そして明日が決勝というわけね」

そして今、清澄高校の面々が集まってミーティングをしている。部長の竹井が大会のルールや仕組み。オーダーなどを発表して色々説明していたが……俺の目の前でやられるとまるで俺が監督をしているみたいだ。というか聞かせていいのか？

「中学の時よりずっと多い……」

「激戦区の大阪にくらべりゃあ3分の1もないがのう」

そして和がトーナメント表を見上げて驚き、染谷がその説明をしている。そうそう、そうなんだよな……俺も高校時代はビビった。

「東郷さんの高校時代はどうだったんですか？」

「ん……ああ。俺は高校の時は西東京地区だったからな……男子だがメチャクチャ多かつたぞ。……200くらいだったか」

「うえっ……そんなに……」

とか思っていると和がピンポイントでそんなことを聞いてくるので俺は答えてやる。すると宮永が口元をへにやりとさせて気の抜けた驚き方をした。……こいつは麻雀の実力に反比例して普段は抜けるよな……さつきも迷子になってたらしいし。いや麻雀の実力が強いからこそか？ 強い奴ほど普段は抜けてたり変だったりするものだ。相手からするとその方が不気味で怖かったりもするしな。

「——1回戦の相手ぬるいなー。清澄・東福寺・千曲東だつて」

「らくしよーじゃん」

「！」

と、観戦室横の廊下を歩く別の高校の生徒が何やら話をしている。容姿は……どつちもCつてところか……いや、顔立ち自体は悪くないか？ どうも最近容姿ランクAの美少女ばかりと出会って触れ合っているため、以前は割と良い感じに見えた相手でも微妙に見えてしまう。以前は知り合いの美少女といえれば良子にはやりさんに栞に……いや、思えば前から結構多かつたな……

「清澄ってアレでしょ。原村なんかの！」

「あーさつき記者相手に全国優勝とか言ってたの見たー」

「ありえないって！ ちよつと胸が大きいからってチャホヤされてるだけっしょ」

——ちよつと胸が大きい……？ いや、ちよつとじゃないだろ……お前らどこに目つけてんだ。そんなお前らは……ふん、戦闘力70台。AからBか……ゴミめ……いや女子高生の胸のサイズを計測する俺の方がゴミだと思います（冷静）。

「おーおー……好き勝手言ってるなあ……」

「原村さん……」

まあそれはともかく和はどうだろう。気にしてるのか？ 宮永が心配しているが……。

「大丈夫ですよ。あんなのは胸の小さい人の僻みです。私は全然気にしていませんから、宮永さん。1回戦頑張りますよ」

「う……うん……そうだね」

「……………」

すまし顔でそう言う和に宮永が気を使ったような、それでいてなんとも言えない気にした笑みで頷いた。俺も無言だが似たような感じだ。いや、まさか胸の大きさを誇り始めるとは……まあ色々言ってた通りすがり相手なら良いかもしれないが、やめてやれ和。その煽りは味方にも微妙に効いてるぞ——って、ん？ 今宮永の奴こつちを見たか？ 一体何が……。

「なにかあったのか？」

「なにも……強いて言うなら、嫉妬を受けました」

「じぇっ？」

やめろやめろ。片岡にまで傷を負わせる気か。——って、片岡までこつちを見て……ん？ なんだ。何かがおかしいな。なぜ俺を気にする？ こいつら……いや、たまに気にしてるのは宮永と片岡だけで竹井や染谷は違和感はないな……何なんだ。原村以外に役満を当ててはいない筈だが……。

『あと10分で1回戦が始まります。各校の先鋒は所定の対局室入室してください』

——と、俺が違和感の正体を考察していると、1回戦が始まる旨のアナウンスが会場内に流れた。

すると清澄の先鋒、片岡以外のメンバーが片岡を見送ってから観戦

室に移動する。俺も一緒だ。とはいえ、全く心配はしていない。1回戦でこいつらが負けるはずないからな。他の学校の奴らも。ぶっちゃけ気になるのは決勝くらいで、今のところは試合が気になるというよりは、

「——どうぞ、東郷さん」

「……ああ」

「……………」

和が俺の手を引いて、観戦室では俺を促した後、座ったのを見て俺の隣に座ってくる。——そして宮永は試合で僅かに緊張し、そして俺と和のやり取りをチラチラと気にしており、それが非常に気になった。

『第1回戦開始！』

そしてそれは1回戦が始まってからも続く。

「ゆーきは問題なさそうですね」

「そうだな」

そう、片岡は全く問題なく相手をボコボコにしている。やっぱりこいつ、東場だとバカみたいに強いな……片岡優希東場最強説。さすがにないか？ プロでもそういう奴はいないこともないしな……。

それよりだ。——和が近い。椅子は大きめで仕切りもあるのに、態々俺の方へ寄ってきている。

ぶっちゃけこんな人目のあるところで距離が近かったり、露骨に親しげに話すのはあまりよろしくないし、和もそれを分かっている筈だが……なぜそうなってる？

そして宮永も相変わらず応援はしているが、こちらをたまに気にするのとはなぜだ？

「一番槍の帰還だしえー！」

「お疲れ様です、ゆーき」

「お、おかえり！ 優希ちゃん」

——そしてあつと言う間に先鋒戦が終わり、次は次鋒戦。染谷が試合会場に向かう——が、これもまた快勝で中堅戦へ。竹井の出番だが……ここでも若干気になることがあった。

「和と咲は2階の喫茶店で何か食べてきたら? —— 東郷さんの奢りで」

「おい」

「え……なんで……」

「!」

竹井がそんなことを言う。テレビの雑学で脳の活性化がどうたらという話だが、ぶっちゃけそれはどうでもいい。気になるのはその他の面子の反応だ。

俺は一応ツッコんだが、まあ別に奢ってやってもいいと思い、立ち上がって声を掛けた。

「……ま、いいけどな。なら行くか?」

「ええ、是非……お願いします……♡」

目を輝かせて承諾する和の反応は困るが予想通り。輝いているとどうか、ハートマークが浮かんでいるような気もするが……まあこれは良いとしよう。

その後の宮永と片岡が、

「わ……私は大丈夫です!」

「あ? いいのか? 遠慮しなくてもいいんだが……」

「特にお腹は空いていなくて……あはは、私はいいので、和ちゃんと一緒に行ってください」

「! そうだじえ! のどちゃんは胸に栄養を取られるからよくお腹が空くのだ!」

「取られてませんっ」

宮永が露骨に遠慮し、片岡はいつも通りフザケているように見えるが……なぜか宮永と同じくこちらを気にするようにしながらそんなことを言う。……そしてそう言われれば俺も和と2人で行くしかないのだが……。

「……それじゃ行きましょうか、東郷さん」

「……ん、じゃあ行くか」

そうして一旦観戦室の外に出て……そして気づく。この空気の正体に。

女子達が友達の女子と特定の男子を近づけるために、バレないようにココソコソと動くが、割とバレバレなアレ——そう、アレだ！

………もしや、あいつらに俺と和の関係がバレてる………!?

「喫茶店に何かあるか楽しみですね」

「喫茶店の食い物は意外と美味かったりするからね……」

和と会話をしながら俺は考える。本当にバレたのか？ と。

……いやだが仮に関係がバレてるなら、敢えて2人きりにさせる必要はあるか？ そういうのは2人がまだくつついていない時の行動に思える。それとも単純に気を使った？ この大会中に？ ……いや、ちよつと確かめてみるか。

「………和」

「！ はい、なんですか？」

「お前、俺との関係、誰にも言っていないよな？」

俺は小声でそれを問う。大丈夫だ、周囲に人はそれほどいない。今は試合中だしな。人通りもあまりない。

すると和は俺の方を見上げ、口元に手を当てて、

「お、お前って言われると夫婦みたいでなんだかいいですね………♡」

「——おい」

そうじゃねえ。そこじゃない。いいから答えてくれ、と俺は再度問いかける。

「どうなんだ？」

「……誰にも言ってません。2人だけの秘密ですから。バレるような行動も取ってません」

「ふむ………そうか………いや、そうか？」

「ええ、勿論です」

キリツとした表情と言葉でそう言う和。まるで麻雀をしている時のように真剣な顔なので俺としては信用したいところなのだが……。

——むにゅんっ♡ と俺の腕には和の女子高生としては大きすぎる乳が押し付けられている。

つまり………人通りが少ないことを良いことに、ナチュラルに腕を組み始めたのだ。信用出来ねえ………出来ないが、少なくとも和は何も

言っていないってことか……。

「……だが黙ったままああいう行動に出るってことは、友人を応援しようとしてるだけか……」

「……そういえば仁さん。私も少し聞きたいことがあります。いいですか?」

「? いいぞ。なんだ?」

階段を登り、2階についてたところでそう言われる。目的の喫茶店まで後少し……だがそこからまた離れて人気の少ない場所へ。……ん?

俺が何気なく和の質問を許し、人気の少ないところに手を引かれて連れて行かれる。そして、和は言った。

「私が先程取材を受けている時……誰かと身体をくっつけて話してましたよね?」

「! あ、あ……見えてたのか?」

俺は鼓動を跳ねさせる。やばい、聞かれてしまった。

これは美穂子……じゃなくてモモのことか。何故見えてるんだと思っただが、そうか、和ならもしかして――

「見えてました。あんな人気の多い場所で堂々と……身体をくっつけて触るなんて……!」

……まあそれを言うならお前も身体はくっつけてきてたけどな……と言いたいが、今は揚げ足取りをしている場合じゃない。なんと言うべきか、脳を活性化させて考える。バナナと乳製品をよこせ。先に食べておけば良かった。

「いや、あれはだな……前の教え子で……」

「それにまた別の人も仲良さそうに話してました。……もしかして、2人とも仁さんの――」

あつ、さすが和、理解が早いな……つて言ってる場合じゃねえ。さでどうするか……下手に誤魔化すのみな……。

「……! 仁さん! 答えて下さい! あの痴女は一体どういう――」

「――痴女呼ばわりは失礼っすね」

「!」

——和が俺を問い詰めようとしたその時だ。まさにその相手……モモが和の背後から現れた。

「あ、あなたは……!」

「ふふん、清澄のおっぱいさんっすね。はじめまして、私は鶴賀高校の東横桃子っす。同学年っすね、よろしくっす」

その登場に和は驚き、反対にモモは笑顔を浮かべ、友好的な態度で挨拶をした。

俺はどうしていいか戸惑う。これは中々に対応に困る事態だ。はやりさんと良子、それと栞やユキの時とは違う。元々知り合いだったり、察してくれたりとか色々あった時とは違っている。

和は俺が複数の女性と関係を持っていることを知らないし、逆にモモは知っていて、その上で付き合っている。

こうなるとどうなるか。ちよつと予想が出来ない。これがいわゆる修羅場ってやつか？

「よろしくじゃないです! あなた、仁さんとはどういう関係なんですか!」

「どういう……? どういうって……こういう関係っすよ ♡ ——ちゅっ」

「!」

むぎゅっ ♡ と俺の左半身に抱きついてきて、その柔らかい女体の感触を制服越しにたっぷりと押し付けてきたモモは、そのまま俺の口にキスをしてくる。

そしてそれを見て、和が絶句した。

「な、な……何をしてるんですか!」

「ん……♡ 何って、キスっすよ? もしかしてキスもしてないんすか? ——なら私の勝ちっすね♡」

「それくらいしてます! それより、離れてください!」

「なんでっすか? 私は東郷さんの1番っすからね ♪ こうやってキスもするし、エッチなことだっすても何もおかしくないし、止めら

れる筋合いはないっすよ」

「あります！ 私に仁さんの恋人です！」

いやいや、こんなところで言うな。誰がどこで聞いてるか気が気じゃない……が、久し振りのモモのJカップおっぱい、その気持ちのいい女体の感触に別の意味でも気が気じゃない。

「あつ♡ 勃ってるっすね♡ ふふ、東郷さんするっすか？ 出番までに少しくらいなら相手出来るっすよ？」

「い、いや……今は……」

「っくく!! す、するなら私がします!! だから離れて下さい!!」

「!? うおっ……和……!!」

モモが俺の股間をその白い左手の指で撫で回してくる。より乳房を押し付け、俺を誘惑していた。

が、それを見て我慢ならなかったのか何なのか。和が右側から抱きついてきて、俺の股間をモモの手から奪い返すように右手で掴んでくる。久し振りの和の身体の感触がたつぷりと身体の右側にやってくる。推定Kカップの爆乳の破壊力も健在だ。俺の身体の右側を押し返すような柔らかさかさと弾力。その存在感たつぷりの感触に理性を支配される。ヤバい。このままでは……。

「ふくん、少しはやるみたいっすね。でも私には敵わないっすよ。東郷さんと私は身体の相性抜群っすからね♡ もう何度もエッチしてるんすから」

「わ、私だって沢山してます！」

「どうっすかね〜？ 回数もテクニックも私が勝ってると思うっすけど」

「……！ 胸は私の方が大きいですし、他の部分でも負けてません！」

2人の抱きつく力が強くなる。

互いのおっぱいがそれぞれ、俺の右側と左側に押し付けられてたまらない。

2人の大きすぎるおっぱいが俺を挟んでその柔らかさをたわませてくる。

超絶可愛いくてスタイル抜群の女子高生の制服越しの柔らかさと

鼻をくすぐる甘い匂いと乳房の柔らかさでどうにかなりそうだ。

「……なら」

そして欲望が首をもたげる。

2人の俺の取り合いは都合よく、2人の対抗心に火を付け、そして俺にとつてもつとも気持ちのいい展開となった。

「——ちよつと勝負しませんか？」

「——受けて立ちます……！」

——長野県予選1回戦で少女たちの激闘が始まる中、ここでも女子高生雀士達による淫靡な戦いが始まろうとしていた。

裏長野県予選一戦目

ここは公共の場。

自身のやってきたこれまでの練習。その成果を見せるための最初の登竜門。

……だが今の俺にはこんな場所では慎むべきという理性ある社会人として当然の思考は出来なかった。

「ん……仁さん……どうですか？ 私の胸好きですよね？」

「いやいや、私の方がいいですよ？ 東郷さん♡」

「ん……はあ……んふ……」

長野県予選の会場。その屋上へと続く階段。

その最上段の踊り場に置かれていた背もたれのない長椅子の上に3人で座る。

制服姿の2人。清澄高校の制服であるセーラー服を身に着けた原村和と鶴賀高校のブレザーの制服を着る東横桃子。

正真正銘の女子高生の2人。15歳の2人の間に……俺は挟まれている。

2人のおっぱいに頭を、顔を——挟まれていた。

「正直に言ってください。私の胸の方が気持ちいいですよね？」

「んむっ……！」

「私のおっぱいが最高つすよね？ 正直に言っいいんすよ♡」

「はあ……！」

2人の言い争い。それは俺の1番を決める争いだ。

そのために2人は俺に性的な魅力をふんだんに押し付け、奉仕しようとしている。

修羅場と言っいいいのかもしれない。ピンチだと思う。

だが……俺の顔は2人の乳の間でニヤけまくって……あるいは弛緩してだらしないうつとりとした表情を浮かべてしまっていた。

むにゆうう……♡

「ああっ……気持ちいい……！」

「どっちがですか？」

——無論、どっちもだ。だがそう言える余裕は今の俺にはない。
制服越しに感じるグラビアアイドルもかくやという乳房の感触は
俺の脳みそを完全にとろけさせる。

制服の生地のスリスリとした感触。ブラのごわごわとした感触す
ら、それが現役JKだと思えば……その感触が現役JKのJKカップと
Kカップという事実には血流が加速する。

俺の顔を全方位から包んでしまうその大きさがたまらない。頬越
しに、目元をたわむおっぱいで埋め、鼻先を埋めて息苦しくし、首元
を撫でてくる3桁超えおっぱい。

この誘惑に勝てる者がいると思えない。男性なら、おっぱい星人な
ら——この幸せを甘受するために全力を尽くすだろう。

「はあ……はふっ……ん……！」

「あつ……♡ 仁さん……もつと押し付けてほしいんですか？ 私に
……」

「あんっ♡ 痴漢さんがいるっすね♡ 私に目をつけちゃったっすか
？」

口元が塞がれていて喋ることが出来ない。だが、出来ても言うこと
もやることも同じだ——欲望のままに動くこと。

右手で和の細い腰に手を回し、その美しいくびれを撫で回した。
セーラー服を着た和は胸が大きすぎるため、セーラー服の前を押し上
げてしまい、裾が短くなり、お腹が見えてしまっている。

まるでグラビアアイドルやAV女優が男の性を刺激するためにわ
ざとするような着こなしをナチュラルにしまっているのだ。周
囲の男……同級生などはたまらないだろうな、と思う。

だが俺は違う。普通なら見ることでしか出来ない他の男と違って、俺
はそこに手を伸ばした。白い肌。すべすべとした感触と気持ちのい
いなだらかな曲線をなぞる。折り曲げられたスカートの中の生地の手が
触れる。信頼された男性にしか触れることの許されない女子高生の
若々しい肢体。そこを撫でて、軽く乳房の付け根に近いところまで触
る。

だが同時に左手はモモのスカートの下に忍び込み、むっちりすべす

べの太腿を触り、そしてお尻まで撫で回している。

ショーツの心地の良い触り心地。その下にプリプリの尻の感触。和にも言えることだが、アイドルや女優になれるほど可愛いのに、スタイルは抜群。15歳で3桁のおっぱいでウエストは50台。胸やお尻は大きい。

この美貌、この身体だけで何百万、ウン千万と稼げるほどの気持ちのいい身体。それを1人だけでなく2人同時に味わうなど、男として幸福にも程がある。

「んっ……ちよつと熱くなってきたっすね……そろそろ脱いじやうっす」

「えっ!? こんなところで……ですか?」

「今更何言ってるんすか? ——ま、でも脱がないならそれはそれでいいと思うっすよ。私達は楽しむだけっすから♡」

「ぬ、脱がないとは言ってますん! ……ここなら多分人も来ませんし……そのために勝負を受けたんですから……!」

突如、モモが熱いからとブレザーのボタンを外し始める。和が若干躊躇したのはさすがに外でやるのに抵抗があったのだろうが、それから先程まで誘惑してきたのは何だったのだと内心でツツコむ。

だが口には出さないのは、やはり自分もこんなところで終わりたくない。もつと快楽を望んでいるからこそだ。和とモモが、俺のすぐ隣でストリップを始める。和はセーラー服を捲くりあげ、モモはブレザーのボタンを外していった。

——ばいんっ♡ たぶんっ♡

「……! 相変わらず……二人共大きいな……!」

「私の方が大きいですから……私の方が好きですよね?」

「むっ……確かにこれは予想以上のポリウムっすね……だけど大きさだけでは決まらないっすよ」

2人の生乳。特大サイズのブラが外され、俺の前に突き出されたその2つのおっぱいに目が奪われる。

久し振りのおっぱいだ。それだけに興奮する。大きすぎるJKの爆乳。神乳。

2人の身体の動きに合わせてゆらゆらと揺れる4つの乳房。我慢出来る訳がない。俺は両手を伸ばして同時に鷲掴んだ。

「んんんっ♡ はあ……久し振りの仁さんの手……♡」

「ああんっ♡ んっ、揉まれるの良いつす……♡」

「はあ……はあ……でつか……柔らかか……あー……やばい……揉んでるだけで幸せ……」

右手で和のKカップを。左手でモモのJカップを。それぞれ同時に揉みしだく。

この張り。この重さ。掴みきれない大きさ。俺の手の動きに合わせて形を変えるおっぱい。

手のひらに吸い付くような肌触りのおっぱい。そう、これだ。これに俺は夢中になってしまうのだ。

「んっ、あっ♡ 久し振りだからか……すごい夢中になってるっすね？」

「当たり前だろ……毎日……常に側に置いて好きなきに揉みたいくらいだ……」

「私なら、んっ♡ 毎日揉まれても構いませんよ……!」

俺の手で揉む度に軽く挑発するように笑みを浮かべるモモと好意をストレートに告げるようなことを言ってくる和。

2人とも胸を揉まれて軽く感じているのか、身体を時折ピクツと跳ねさせる。五指を波打たせるように揉んでみれば指の隙間に乳肉が食い込むように変化し、余裕のある場所に逃げようとした弾力のあるおっぱいが俺の手の中で気持ちよく形を変える。コリコリとした乳首もアクセントだ。先端についた桃色のそれらを親指と人差し指で摘んでみると反応も大きくなる。可愛い反応だ。

指が埋まって離れない。もにゆり♡ もにゆり♡ と、どこまでも柔らかく、それでいて潰れない。形を保とうとする熱を持った至高の柔らかさが俺を興奮させ、手の動きを激しくさせる。

「でも……揉むだけでいいんすか？」

「!」

「はあ……はあ……もうズボンの中でこんなに……♡」

だが——幸せはそれだけでは終わらない。

モモが視線を下に向ける。そこは俺の膨らんだ股間。男性の象徴がテントを張っており、そこに和が軽く発情しながらちようど手を伸ばしてきたところだった。

白く細い指。女の子の手に撫でられるだけで肉棒は当然甘い快感を送ってくる。しかもそれが2人となると、溜息が混じる情けない声も出てしまうものだ。

「ああ……！」

「ふふ……この期待に震えてるおちんちんさんに決めて貰わないとつすよね♡ パイズリ勝負つす」

「そうです……私が1番……仁さんのオチンチンを1番気持ちよく出来るんですから……♡ 受けて立ちますよ」

そう言つて2人は俺のズボンを脱がしにかかる。ベルトをカチャカチャとさせて、2人の美少女にズボンとパンツを脱がされるのがこれまた趣きがあった。2人とも、俺との経験でこういうことにも慣れてきている。あつという間に俺は剥かれ、天を向いてそそり勃つ肉棒が露わになった。

「はあ……♡ すごいピンピンになってます……♡」

「先がすっごい濡れてるつすよ♡ そんなに待ちきれないんすか？

私のおっぱい奉仕♡」

2人に肉棒を見られる。それだけでもこれから起こる性感の期待に肉棒がうち震えた。

この外気に肉棒を晒した瞬間、先程までも完全に勃起していた肉棒が、より力強く芯を持つて勃起している不思議な感覚。

相当興奮している証拠。そして爆乳美少女2人に視線を向けられて自然と動いてしまう。2人のゆらゆらと揺れる長い谷間を見れば、よりのまらない気持ちになる。早く、早く気持ちよくしてほしい。表情が緩みそうになるのを耐えながらじつと成り行きを見守る。

「まず私からやります」

「まあいいつすよ。後でも先でもどうせ私が勝つつすから」

「私はもう何回も仁さんのモノを挟んでますし、最近は勉強だつてし

てます。大きさも含めて私が負ける要素はありませんね」

「回数なら私も東郷さんと関係を持ってから教え込まれてるっすからね。それくらいじゃ決まらないっすよ」

「む……まあいいです。見ていてください」

「お手並み拝見っすよ」

……凄いい真面目に張り合ってるが、内容は女子高生の話すことではない。が、一々それを指摘もしない。やらせたのは俺だし、やってもらえないのも困るからだ。

とりあえず最初は和から。和の100センチのKカップだ。

やはりその大きさに目を奪われる。ベンチに座る俺の足の間に和がその爆乳を揺らしながら近づいてきただけで期待で脳がおかしくなりそう。距離が近くなり、和のふわりとした甘い匂いが長い髪から感じられる。

「仁さん……気持ちよくなってくださいね♡」

「ああっ……うっ……！」

みっ……ちん♡

——そして当たり前のように俺の肉棒をその深い谷間で包み込んでしまった。

興奮し、敏感になっていた肉棒をみっちり詰まった乳肉の圧が隙間なく密着し、それが気持ちよすぎて思わず腰を浮かせてしまう。

「あっ……ああ……やっぱ……！」

「あっ♡ んっ……ふふ……仁さんってばそんなに腰を浮かして……大丈夫です。ちゃんと胸で包み込んであげますから……♡」

俺の催促だと取ったのか、和が腰を浮かせてより腰と下乳が密着した俺の肉棒を左右から拳を握るように胸を押し込み、肉棒を完全にホールドする。

パンパンに張り詰めた肉棒とその中にある硬い芯を、全方位から乳圧で押し潰していく。

和のすべすべでもちもちの肌は当然おっぱいにも適応されている。そのモッチモチの爆乳は肉棒の形に沿って……それこそ、カリ首にすら乳肉がフィットしてくるほどに吸い付く。

「おっぱいの中で動いてます……んっ、気持ちいいんですね♡」

「確かに大きいっすね……おちんちんさん、完全に隠れちゃってるっす。まあ私もそれくらい出来るっすけど……気持ちいいっすか？

東郷さん」

「ああ……気持ちいい……包まれるの最高……！」

モモが横から聞いてくるが、和の言うように胸の中で動いてしまっていることがある意味証拠だ。

俺のそこそこ大きさのある肉棒をすっぽりと包み込んでしまうそのおっぱい。それは性感を求める肉棒に余さずおっぱいの気持ちよさを伝えてくる。

中途半端な大きさなら完全には挟みきれず、先端や色んな部分が見出してしまったりするだろうが和のおっぱいにそんな心配はいらない。

「それじゃ動かしますね♡ よいしょ……」

「うっ、あっ……！」

にゅっ♡ たぱっ♡ たぱっ♡

そして至福の時間が始まる。

和が改めて乳房を左右からまるで持ち上げるように押し込むと、そのまま乳房で俺の肉棒をたっぷりと扱き始めた。

一度むぎゅっつと乳房を押し込んだことで高まる乳圧。そして持ち上げ、落とす。持ち上げ、落とす。

その言ってしまったえばただの往復運動だが、それがあまりにも良すぎる。

おっぱいで興奮し、性感を欲しがっていた肉棒の先端から根本にまでしっかりと乳肉で物理的にも快感的にも逃げ場をなくしてから、肉棒を擦る。

「気持ちよさそうですね……♡」

「あ……良すぎて蕩ける……！ はあ……うああ……」

腰の上で揺れるKカップ。大質量のおっぱいが股間にくっついてる光景は最高だ。中で起きてる快感を増長する。

キツイ乳の肉の海を肉棒がかき分ける。肉棒全体が乳肉に締め付

けられる快感が浸透してくる。

無条件で絞られるようなこのおっぱいでどんどんと興奮と性感を高めてくれる。

「やべえ、上手すぎ……」

「仁さんが教えてくれたんですよ♡ んっ……」

むにゆうう……♡

たぶっ♡ たばんっ♡

——ああ……これはヤバイ。気持ちよすぎる。

腰を浮かせ、快感を貪ろうとしてしまう。久し振りの美少女との性的な接触。パイズリの感覚に酔いしれてしまう。

おっぱいを上に持ち上げて扱かれると、重たい乳房を持ち上げるため腕の力が増して、乳圧が増す。おっぱいで肉棒が握られているかのように、ぬっぽりと乳房に舐められ、たまらず腰を浮かせる。

だが次の瞬間には下におっぱいが落ちてくる。今度は亀頭の先や肉棒全体でモチモチの乳肉を掻き分けていく。Kカップの谷間を自分の雄の象徴で貫く。肉棒の感覚全てで最高の挿入を味わう。

おっぱいマンコ、と最初に言った奴はよく言ったものだ。これだけ極上のパイズリだともはや性器でしかない。

そして贅沢だ。この手でも掴みきれない面積たっぷりの乳房は、ただ俺の肉棒を挟み潰して揉みほぐすためだけに使われている。

「あっ……あゝ……これは……く……!」

「んっ♡ んっ♡ ん……乳内で大きくなって……イキそうなんですか?」

快感がどんどん引き出される。和が胸で俺の肉棒の反応を感じ取り、高まりを察する。俺は頷いた。

「ああ……久し振りだからやばっ——んっ!」

「ああっ!」

「んっ♡ ちゅっ……れろっ♡ んんっ♡」

だがその時。横から俺の口にキスをして、そのまま舌を絡ませてくるものがある。言うまでもなく、モモだ。柔らかい唇と滑らかな舌の感触。押し付けられて俺の胸板でたわむJカップの爆乳。

だがそんなモモの行動に和は眉を立てた。

「なにキスしてるんですか！ 今は私の番ですっ！」

「んんっ……ぷはぁ♡ いや、別に横入りがダメとは言っていないですよ？ 感じる顔が可愛かったので……キスしたい時はするのが恋人つてもものつすよね♡」

「そ、そんなのずるいですっ。あつ、また！」

和が抗議する中、モモは構わず俺とキスをする。横目で和を見てまるで見せつけるようにだ。モモもやるなあ……いや、俺としては気持ちいいだけなので止める気は全くしない……どころか思わず手を伸ばしてモモの乳房を揉みしだしてしまう。このおっぱいも俺のだ。

「うっ……はぁ……!! ヤバい……!!」

「ちゅう……はぁ……んむっ……♡ はぁ……後で、私のおっぱいでもしてあげるっすから楽しみにしてくださいっすよ……♡」

「む……ならわかりました。搾り取って……ターンすら回さずに勝ちます」

ぬぽっ♡ にゅぽっ♡ たぽっ♡ たぽっ♡

「うっ、ああああ……!! やばっ、あつ、マジで……！」

対抗心からか、和がパイズリの動きを速める。乳圧を高め、完全に抜きに来ていた。腰に打ち付けられる下乳の音が艶めかしい。

ハーレムの快感に背筋がぞくぞくとした。Jカップを押し付けられ、肉棒はKカップでたぱたとパイズリ。

2人の爆乳美少女を独り占めすることに陶酔する。その陶酔と興奮が表れた肉棒が、乳肉で揉みほぐされる。

もうイク。長くはない。射精前特有のムズムズがやってきた。

「はっ……はっ……和の……Kカップのおっぱいでイク……!! 出す……!!」

「はぁ……んっ……そういえば、言い忘れてたんですが……」

と、射精が近づいてきて言葉が口を飛び出した時。不意に和が俺の方を見上げながら、

「胸……また大きくなってました……Lカップです……んっ……はぁ……仁さんの、せいですよ……♡」

「っ……あっ——」

その言葉を聞いた瞬間、一線を越えて股間の奥がドクドクと震える。

現役JKの……Lカップのパイズリ。

自分が仕込み、おそらく自分の影響で大きくなったその爆乳の奉仕。

自覚しながらその扱きを受け、俺は最後にもまた腰を浮かせた。

「うっ……ああああっ……!!」

びゅうううっ、びゅううっ、びゆるる、びゆるっ、びゅうう……♡

「あっ♡ 凄い、出て……飛び出て……♡」

「んっ、凄いつすね。溜まってたつすか？」

「ああっ、やばっ、ああ……!!」

2人の言葉に答える余裕はない。

肉棒を完全に包まれたまま。そのみっちりとした谷間の中での射精はとてつもない快感と幸福感を俺に与えてくる。

最後に腰を浮かせたが、和はしっかりと俺の肉棒をおっぱいで閉じ込めたまま、俺の射精を受け止め続ける。

教えた通り、しっかりと肉棒を扱き、乳圧を与え続け、搾り取るようなパイズリホールド。

完全なる乳内射精。腰を浮かせ、肉棒をまだ少し擦りながら、まるで種付けをするように腰を押し付けながらの射精は気持ちよすぎて興奮が止まらない。

「はあ……んっ♡ どろどろ出て……んっ……はあ……まだ出てる……まだ硬い……♡」

「あああ……最高……うっ……」

事実、射精は長く、しかも射精が収まった後も俺の肉棒はギンギンのまま萎えなかった。興奮が持続している。

和が乳圧を掛けながらにゅっぷりと俺の肉棒を扱き、抜いても、肉棒は赤黒く、血管も浮き出ており、未だ射精前の様な雄々しい姿を維持していた。

「ほら……こんなにも出したんですよ……っ」

「ああ……すごいよかった……」

そして和はその深い谷間を開き、そこに出された俺の子種……ドロドロの白い液体を見せつける。

谷間に橋を掛けたかのように白い線が繋がり、重力に沿って下に落ちる。だが多くは未だ乳房の上にまとわりつき、俺が汚した証をたっぷりと見せつけてきていた。

そのいやらしい姿に肉棒がまた跳ねる。……すると和がそれをつつとりと見つめて、

「……1回では、満足しませんよね……♡ なら、このままいつも通り、2回目も——」

「いやいやいや！ それは無しつすよ！ 次は私！ このステルスモモモとい、ステルスおっぱいの独壇場つす！」

「んぐつ……！」

しかしそれをモモがインターセプト。俺の顔を抱きしめるようにして、Jカップの谷間に収める。顔いっぱい広がる柔らかさに幸せを感じる。思わず自分からも顔を押し付けてしまった。和が若干不満そうにしながらも、息をつき、

「……まあわかりました。そういう約束ですし、どうぞ」

「ふふん、そうやって余裕ぶつてられるのも今の内つすよ！ ——と
いうことでほら、代わってくださいいっす」

と、和は既に自分の勝ちを確信しているのか、少しすまし顔で……まるで麻雀の時の様な表情でモモと場所が変わる。……いや、ぶつちやけどつちが勝ちとか俺にはないし、あつたとしてもどちらかを選ぶ気はないんだけどな……どちらか選べるくらいなら2人とも落とさないしヤツてない。

なのでまだまだ俺は状況を楽しむことにする。和が俺の横に——地味にポケットから取り出したウェットティッシュで谷間を拭きながら——移動し、モモが俺の足の間に入ってくる。そして顔を上げて俺と視線を合わせた。

「東郷さん♡ 久し振りのおっぱい奉仕で気持ちよくなってくださいいっす♡」

「ああ……頼む」

たぶんっ♡ むにいい……♡

二人目。たった今滅多に味わうことの出来ない極上のLカップパイズリで射精を決めた後に、また別の爆乳で包まれる感触は格別と言っつていい。

ハーレムの醍醐味の1つ。一対一で1人の女の子に気持ちよくしてもらおう肉棒が、ほぼ同時刻に2人目からも責められる。

優越感だけでも顔がニヤつき、興奮が留まらなくなってしまう。モモの乳房は和に負けず劣らずの気持ちよさだった。

「うっ……また包まれて……」

「おちんちんさん胸の中で震えてるっすよ♡ ふふ、2回目だからっつて油断してるとあつと言う間にイカせちゃうっす♡」

ぬぽっ♡ ぬぽっ♡

たっぷりと柔肉を集めて未だバキバキの肉棒をもっちりと包んで肉棒を抜き始める。

2回目だから、とモモは言うが当然そんな長く保つとも思っつてない。というか2回目だからこそ……2人目に連続パイズリ抜ききされているという事実でより肉棒がいきり勃って感度がよくなっつてしまっている。

しかも精液のローションで若干ぬるぬると滑りがよくなり、より乳肉が肉棒に絡みついて擦ってきていた。

「あー……あー……また気持ちいい……!」

「……少しは出来るみたいですが、それでも私には及びませんね」

「これからもっと気持ちよくなるっすよ♡ だからいっぱい感じて沢山出してくださいます……私のおっぱいマンコに♡」

たぶっ♡ たぽっ♡

「うっ……はあ……おっぱい気持ちいい……」

「仁さんっ、我慢してくださいっ。私の方が気持ちいいですよね!」

——いや、無茶言うな。ちんこを美少女の綺麗で長い谷間に包まれてイカないなんてあるか。

モモはしかも言葉責めも得意だし、俺の反応を見ながら的確にその

爆乳で肉棒を責めてくる。

雁首の辺りに乳房を押し込んで、先の辺りを乳肉で圧迫してくれば浸透してくる乳圧に堪らず腰を浮かせて快感を貪ろうとする。

そうして谷間に肉棒を突き入れれば、今度は若干力を緩めて谷間を股間に落とす。俺の腰をその爆乳クツションで柔らかく受け止め、その瞬間にまた乳圧を強めてたばたと小刻みに扱いてきた。

「後……おっぱいさんだけが成長してる訳じゃないっすよ?」

「おっぱいさん……って私のことですか!？」

「……どういう、意味だ?」

と、モモの的確な責めに俺が息を乱しているとモモが突然そんなことを言ってくる。どういう意味かと尋ねると、モモは乳房を強く寄せ、深く、深い谷間を作って俺の肉棒を閉じ込めると、

「私も大きくなったんすよ♡ 今東郷さんのおちんちんを包んでるおっぱいは……100センチの、Kカップっす♡」

「っ……はぁ……!」

「私は102センチのLなので勝ちですね。先程私の奉仕を受けた仁さんにその手は……って、なんで感じてるんですかっ」

——だから無茶を言うな。感じるに決まってるだろう、こんなの。

モモにそうサイズを告げられ、以前された時よりポリウムがアツプしているのを視界で、そして肉棒で自覚する。

言われてみればこの間より肉棒に絡んでくる乳肉の量、乳圧が増している感じがして、たまらなくなる。そして腰をまた浮かせるとジトツとこちらを見てくる和と打って変わり、モモが小悪魔のようにこちらを見上げ、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「あんっ♡ おちんちんさん、胸の中でビクビク震えて大きくなっ
たっす♡ おちんちんさん、嬉しいっすか? 帰ってきたらおっぱい
が大きくなつて……ふふ、おっぱい好きにはたまらないっすよね♡
んっ……♡」

「あぁっ……あぁっ……はぁっ……モモ……」

むぎゅううう♡ たぱっ♡ たぱっ♡ たぱっ♡

肉棒を谷間の奥でしっかりホルドして、リズムカルに乳房を跳ね

させるモモ。

その言葉通り、俺はまんまと喜んでしまっていた。深みを増したパイズリ奉仕。3桁おっぱい。Kカップ。

ワンサイズ上がるだけでも俺みたいな巨乳好きは無条件に喜び、肉棒を反応させてしまう。

おまけに……隣にはもう1人、爆乳を持つ美少女がいる訳で。

「和……和も可愛いぞ」

「えっ——んっ♡ あっ、そ、そうですか……べ、別にそんなのじゃ誤魔化されませんからね……♡」

右手で和を抱き寄せ乳を掴む。そしてキスをする、和が顔を赤くした。口では誤魔化されないと云ってるが、そう云ってる間もされるがままで咎めることもない。和の可愛い反応を間近で見ながら、Lカップの爆乳をもみもみ。揉みきれないずっしり感が最高だ。先程まで俺の肉棒を挟んでくれていた神乳を好きなように弄ぶ。

「！うっ……モモ……！」

「ほらほら東郷さん♡ 余所見してていいんすか♡ おちんちんさん、おっぱいでいじめちゃうっすよ♡」

モモが乳房を交差させて、俺の肉棒を更にズリ倒していく。

先程までのパイズリとは違い、左右で別々の快感が来る。乳房で持ち上げられ舐められる快感を片方で受ければ、片方では落とされ、擦られる。

爆乳にしゃぶられている。芯の通った肉棒、一本の棒が中で舐め解されている。

「んっ、ちゅっ♡ 仁さん……好き……♡ んっ……♡」

「はあ……！ あっ……」

そして同時に和を侍らせ、そのデカ乳を揉み、舌を絡め合う。

股間から精液が昇ってくる。もにゅもにゅと乳房を揉みしだき、愛情たっぷりキスをしながらも、股間は別の女の子にぬっぽりたっぷりとパイズリ奉仕を受けていた。抱き寄せて、俺の胸でたわむ和の深い谷間を見してしまう。そうしてキスをされながら、

びゅうううっ、びゆるるるっ、びゆるっ、びゆるるっ♡

「あつ♡ んっ……………また沢山出てるっす……………♡」

「うあつ……………あつ……………!!」

「ちゅるっ♡ れろお……………♡ はあ……………むっ♡ 仁、さあん……………♡」

和がうつとりとした表情のキス顔を、舌を絡ませるところを間近で見てしまいながら、モモのKカップの谷間に腰を突き上げて思い切り射精する。

たまらない。頭がバカになりそうだ。なぜ1人の女の子と恋人のようなことをしながら、別の女の子とも恋人のようなエロいことをするのが気持ちいいのだろう。

今感じてるのは背徳感なのかどうなのか。厳密にはわからないが、2回目だというのに先程と同等以上に濃い精液をどくどくと放出してしまっている。

おっぱいに隙間なく包まれたまま。やはりモモは俺が教え込んだ通りに、乳圧でむぎゅっ♡ むぎゅっ♡ と射精で跳ねる肉棒を受け止め、あやすように扱いてくれる。この射精の最中でも感じる乳圧と腰で感じるおっぱいの重みが中毒になりそうなくらい気持ちいいのだ。

「あつ……………ああ……………モモ……………うくっ……………はあ……………凄い出しちまった……………」

「ふふっ♡ まだちよつとびくびくしてるっすね♡ どうっすか？

大きくなった現役女子高生のKカップ乳まんこへの中だし♡ お望みならもつとしてあげるっすよ？」

「！ だ、だめです……………やるなら次は私なんですからね……………♡ そもそも私の方が気持ちよかった筈ですし……………」

モモがまだカチカチな俺の肉棒を感じ取ってそう言うが、和がまた対抗心を露わにする。

これでどつちが気持ちいいのか決めないといけないのか……………と、そう思ったが——やはり、まだだ。

「……………2人とも……………勝負を続けるなら良い方法があるぞ」

「えっ……………？」

「良い方法……………あつ。なんか予想ついたかもしれないっす」

俺は欲望に従い、その良い方法を実践させることにした。

——おっぱい好きで、2人の爆乳を好き放題出来るとすれば……やはりこれをするしかないだろう。その方法とは……。

「うっ……ああ……!! 最高過ぎる……!!」

「——まあおっぱい星人の東郷さんなら、やっぱりこうなるっすよね♡」

「互いの胸で押し潰すようにして合わせて擦る……なるほど。2人で同時にすれば確かに合理的ですね……少し恥ずかしいですが……んっ♡」

むっ……にゅううう……♡

ベンチに横になった俺の股間に、爆乳をばいんばいと揺らして身を寄せてくる2人。

2人はその自慢のおっぱいを持ち上げ、真ん中でそり勃つ俺の肉棒へと寄せ——そのまま左右から挟み潰した。

いわゆるダブルパイズリ。おっぱい星人の夢とも言える行為である。

「くっあっ……幸せ……!!」

「んっ……2回も出したのにさつきよりも硬いです……♡ はあ……はあ……素敵……♡」

「まあそれは2人でしてるからだと思うっすけどね。よいしょっ……」

たぽんっ♡ たぽんっ♡

「あっ、そう、だ……動かしてく……ああ……そう、それ最高……」
みっちり。俺の幸福な肉棒が和とモモのおっぱいにたっぷり押しつぶされる。

股間は見えない。乳肉の山で肉棒は埋まり、腰の上は重柔らかいおっぱいがたっぷりとのしかかっている。

だがそれも当然だ。1人でも股間を覆い隠すおっぱいが2人分。

肉棒一本でとびつきり可愛く美しい現役女子高生LカップとKカップの爆乳を占有している。その優越感をたっぷりと味わっている。

どんな権力者だろうが大富豪だろうが、これを味わうには普通の方法では不可能だろう——それほどの贅沢な乳奉仕を俺は受けている。もう興奮しすぎて自分を保ってられない。欲望が口から出てしまう。

「おっぱいで肉棒を包んで動かして……ああっ、やばっ、気持ちいい……!! 溶けそう……!!」

「東郷さんってば腰が踊ってるっすよ♡ まあ気持ちいいのはわかるっすけどね——私のおっぱいが♡」

「違います……! 私の胸がより気持ちいいはずです……! そうですよね?」

「どっちも気持ちよすぎ……!」

あまりにも贅沢。4つの豊乳が俺の肉棒を左右から挟み潰し、そして抜く。その度に多幸福感で頭がおかしくなりそうになる。

極上過ぎるモチモチで特大の乳房の押しつけ。両側から乳肉が絡みついてきて肉棒が埋まり、その状態で擦られる。

腰はやはり浮くが、肉棒ではみ出ることはない。どこまでも乳の中で溺れていた。

「はあ……はあ……KカップとLカップ……! うっ……ああ……チンコ押し潰されて蕩ける……! どっちも、俺のおっぱいだ……!」

「んっ♡ んっ♡ もう……仁さんってば、そんなに腰動かして……♡」

「すっごく幸せそうっすね♡ ダブルパイズリ♡ たまらないっすか? ほくら、むにゅむにゅむにゅ♡」

「うおっ……腰から先がおっぱいで埋もれ……! ああっ、最高……!!」

揉みくちやにされて、跳ね回るおっぱい。

ぱんっ、ぱんっと音を鳴らしながら腰を打ち付けて4つのおっぱいが俺の腰に合わせて持ち上がるのを見ると無限に口角が上がりそうになる。

4つのおっぱいが合わさり、俺の肉棒を完全に包み込んで。腰の先がおっぱいで埋まってる。

まさに天国だ。味わうのは初めてではないが、この快感は中毒性がある。嵌まりそうだし、もう嵌ってるかもしれない。腰も止まらないし、止める気もない。

「2人とも可愛いぞ……！　はあ、はあ……ほら、身体寄せて……おっぱいで俺の肉棒を受け止めてくれ……！」

「言われずとも、いつでも受け止めてあげるっすよ♡　東郷さんが言えば……お家でも学校でも外でも、好きなところで何回でもパイズリしてあげるっす♡　勿論、それ以外でも♡」

「だ、ダメです♡　私が……私が入りますから♡　仁さんが欲情したら、私がいつでもパイズリ抜きしますっ♡　ほら、学校でもさせてたじやないですか♡　制服を少し捲くりあげて、谷間の下から突き込んで……いつも男らしく勃起して、気持ちよさそうに胸の中に出すから……私慣れちゃったんですよ……♡　胸も大きくなっちゃいましたし……責任、取って下さいっ……♡」

「それを言ったらこっちだって、何度もして慣れちゃったっす♡　わかるっすよね？　好きなやり方教えてくれてましたし、何度もびゅーびゅーっ♡　って、中出しして……人気のないところでも気持ちよかったっすよね♡　廊下とかで膝立ちして、制服のボタンを少し開けてそこにおちんちんを入れる着衣縦パイズリとか……♡　興奮してめちやくちや突いてくれて、音鳴ってたっすよ♡　今もそうっすけど……もしかしたら人が気づきかねないくらいエツチで大きな音だったっす♡」

「ああ……そうだな……！　2人とも俺の女だ……！！　このエツチなおっぱいも……！　だからいつでも、俺が言ったらパイズリしてくれ……！！　俺だけに……！！」

そう、どっちも俺のだ——腰を2人の合わさった下乳に押しつけ、俺のモノだと男根で示してやる。

ここに沢山出してきた。無論、身体中に。フェラだろうがパイズリだろうがなんだろうと俺が初めての相手であり、最後の相手だ。

ここに出していいのも俺だけだ！　征服欲を感じて、優越感に酔いしれる。

この合わさった深い谷間。4つの極上の乳房の間に出すのだと強く意識する。

「それは勿論、ですっ……♡ だから——」

「いつでもするっすよ♡ だから——」

と、2人はパイズリをしながら、俺の顔を熱っぽい表情で見つめてきて、

「——私の胸に出してください……♡」

「——胸の中に沢山出してほしいっす♡」

「っ——ああああ……!!」

びゅうううううっ、びゅうううううっ、びゆるるるっ、びゆるるるっ、びゆるるるっ♡

甘美過ぎる谷間の締め付けを肉棒で感じて、俺は射精した。

乳肉に完全に包まれて、乳圧を芯までたっぷり受けながら、むにゅむにゅとたわむ感触を受けて、そこに濃ゆすぎる射精を行う。

「あっ——胸の中に……沢山……♡」

「飛び出してきてるっす……♡ んっ……♡」

「あっ……あっ……ああっ……」

腰を浮かせて、下乳に肉棒を埋め込み、ぐりぐりと押しつけ続ける。

4方向から来る乳圧。射精と腰の動きに合わせて形が変わる爆乳。そこを汚していく精液。

何もかもが気持ちよく、陶醉してしまう。満足感が凄すぎる。

4つのポリウム満点のおっぱいがむにゅうっ♡ むにゅうっ♡

と緩急をつけて押し寄ってくるその動きに合わせての射精は格別。男に生まれて良かったと自分の幸運に感謝してしまうほどだ。ぴったりと射精中も肉棒に吸い付いてくる爆乳にいつまでも引っ付いていて欲しくなる。

「はあ……はあ……ものすごく……沢山出ましたね……♡」

「よっぽど興奮したみたいっすね……♡ まだガチガチっすし……」

「うっ……あ、ああ……ほんと、天国だった……和……モモ……ありがとう……」

「い、いえ……それほどでも……それより、もっと……しますか？」

「まだカチカチっすね……さすがは東郷さん。絶倫っす♡」

2人が谷間に溜まる白い精液を見て呟く。俺もうつとりとして息を荒く吐き出す。

ほんと、口にも出したが天国だった……いや、なんなら今も天国だ。このままもう一発……そして2人をこのまま抱いてしまいたいと思う。興奮はまだ収まってはいなかった。

だが——さすがにもうここまでだ。時間的に。

「……2人とも、そろそろ中堅戦も終わるかもしれないから後始末を終えて戻るぞ」

「! そういえば……」

「まあ確かに余裕をもって戻ったほうが良いには良いっすけど……」

「なら決まりだ。俺としても残念だが……戻るぞ」

俺は頭を切り替え、冷静にそう言ってみせる。そして言えた自分を褒めたい。

こんな気持ちのいい状況を途中でやめるというのは、この快感を知った俺としては中々に耐え難いものだ。

だがそれでもやめることが出来たのは、さすがに試合に間に合わないという事態は2人にも2人のチームメイトにも悪いからだし……後は、またこういうことも出来なくはないかもしれないというゲスな計算もあつてのこと。

だから俺は非常に残念だが、肉棒をおっぱいから抜いて、軽くフェラで掃除をしてもらってから——まあそれで若干また欲望に流されそうになったが——そこから立ち去ることにする。

……のだが、その直前。2人は俺を見て、

「——それで、どっちが気持ちよかったっすか？」

「——それで、どっちが気持ちよかったですか？」

「………まあ……今のところは五分だな……」

そう問いかけてきたので、俺はそう返すのが精一杯だった。決められるかつ、こんなもん!

恋

「すみませんっ！ 遅れました！」

「あはは、大丈夫大丈夫。時間ピッタリよ。——勝つてきなさい！」

「……はいっ！」

「和ちゃん、頑張つてね！」

「はい」

中堅戦が終わった後の竹井にその声を掛けられ、宮永にも声を掛けられ、和はそのまま副将戦へと向かっていく……なんとか間に合つて良かったな。さすがに遅れたらヤバかった……というか和はよく切り替えられるな。さつきまであんなに淫乱だったのに……女つてすげえわ。俺はまだちよつと身体がふわふわしてるとつてのに。

「……仁さ——東郷さんも、見ててくださいいね……」

「お、おう……頑張れよ」

「はいっ！」

——と思つたが前言撤回。こいつ……秘密にしろつて言つてるのにそんな意味深なやり取りで今日イチの笑顔を見せるな。嬉しいが、他の部員が見てるんだが？ 匂わせにも程がある。これだと付き合つてるかどうかまではわからないが、和の好意はひよつとしてバレバレなんじゃないだろうか……そんな懸念を覚えながら俺は副将戦を皆と観戦するために席に座る。

「あの……東郷さん」

「……ん？ どうした宮永？」

そして席に座ると少しして宮永が隣に掛けてきて話しかけてくる。

……正直宮永とはそれほど接してないし、清澄の部員の中では一番話しにくい相手だ。宮永も、なんとなく苦手意識を持つてると思つたのだが……そうでもないのか？ とりあえず会話には応じる。なんなら試合の為に気分を解してやるか。

「和ちゃんのお食事、どうでした？」

「あー、そうだな……まあ普通に良かったぞ。良い気分転換になつたし、和も喜んでた」

実際には食事には行っていないし、味わったのはおっぱいのフルコー
スだ。後で念の為メニューとか調べとくか……しかし和が喜んでい
たことには間違いない。なのでそう言っておく。

「えっと……あ、和ちゃんって料理が上手なんですよ！」

「ああ、そうらしいな」

「そうなんですつ。だから、その……今度味わう機会があれば良いん
じゃないでしょうかっ」

「……味わう機会があれば良い？ ……ああ、まあ……そうだな」

……こいつ、一体何が言いたいんだ？ 話とか言葉がおかしく
て何が言いたいのかちよつとよくわからない。どういう意味だ？
味わう機会があれば良いかと言われても、そうだな、としか返せない
んだが……。

「あつ……その、ですね……和ちゃんはとつてもお淑やか……とまで
はいかないかもしれませんが、物静か……思ったよりはそうではない
かもですけど、友達思いで優しいですし……上品……上品……じよ、
上品ですし、学校でも人気があるんですよつ」

「お、おう……」

なんだこの下手くそなセールストークみたいな話は……宮永、お前
絶対営業は向いてないな。受付とか接客とかも向いてない。ぽんこ
つ感が凄いというか……なぜか和の良いところを話しているが、何げ
にデイスつてもいないか？ こいつ——つて、んん？ セールストー
ク……売り込み……つて、まさか——

「え、えーつと、その……ですね……」

自分でもあまりうまく行って無さそうなのは分かっているのか、し
どろもどろに次の話までの間を作り出す宮永。……俺の勘が正しけ
ればこいつは——

「——あつ！ 東郷さんは、どういう女性がタイプなんですか？」

「——えっ？」

唐突……いきなりそんなことを聞かれて俺は間の抜けた声を出し
てしまう。

こいつ、そういうことを臆面もなく聞けるのは……どうなんだ？

そういう質問は勘繰られるというかな……というか予想は多分正しいな……。

「ちよつと咲ちゃん……」

「え？ 優希ちゃん……あ、すみません東郷さん。話の途中で……ちよつと外しますね」

「……ああ」

そして話を聞いていたらしい片岡が宮永に声を掛けて外へ連れ出す。

それを見送りながらだ。俺は確信する……今のはおそらく、和を俺に文字通り、売り込んでいたのだと。

和の良いところを言つて、好きな女性のタイプを聞き出そうとする……こんなのは人の恋路を応援するような目的でもなければ聞かない筈だ。バーや飲みの席でもあるまいし。ましてや大人しめの女子高生が大人の男性へする行動としてはおかしい。

これは多分、宮永が……というかあの分だと多分片岡もか。あの2人は和の俺への好意を知り、それを応援するために行動しているって間違いはない。まあ和のさつきみたいな言動が普段からならそりやバレる……なんかだんだん和のイメージが変わるな……もつとしつかりしてるかと思つたが、思つたよりわかりやすい……下手したらもつと露骨にイチャついてきそうなレベルだ。恋は人を変えると言うが、和もまたわかりやすく変わってる。

だがさすがに既に関係を持つてるとは言つてないだろう。多分、和としてはあれで十分秘密にしてるつもりだし、友達2人にも言っていない——が、気づかれていたために、応援されていると。

改めて考えると地味に面倒な……これからも和は無意識に好きな男の存在を匂わせる行動をしそうだ。なんというか、プレゼントを送つたら毎日身に付けたり友達に意味深に自慢したりするのだろうか。しつかりしてる様でも初めての恋愛だとそういう事には疎いということか……年齢相応とも言える。

まあ面倒とはいえ、決定的でなければ問題はないが……もしかしたら決定的なことをしてしまうかもだし、一応和にも後でそれとなく

言っておくか——つと、通知だ。

「ん……」

俺は携帯を取り出し、相手は誰だとそのチャットの相手を見る。そこに書かれていた名前は——龍門洩。

『右側、一番前の席に来て下さいまし！』

「は……？」

俺はその文面を見て、頭に疑問符を浮かばせながら右前方に目を向けると——げっ。見覚えのある金髪……。

「……何やってんだお前」

「ふふふ……変・装っ！ ですわっ！」

俺は億劫ではあったが、一応立ち上がり、竹井に知り合いがいると一応声を掛けてから席を離れる。右側の一番前の席。そこに座っていたのは、サングラスを掛けただけの龍門洩透華だ。

「……観戦しに来たのは辛うじてわかるが、変装してる理由がわからん。もう一度聞くんが、何やってんだ？」

「だって私がそのままの姿でこんな人の多いところにいたら目立ってしまうでしょう？ 目立つのは好物ですが、今はお忍びの観戦。こんなところで注目を集めるつもりはありませんわっ」

「……あー……もしかして、さっきまた後でって言ってたのは……」

「ふふん。さすがは私が認めた方。その通りですの。——共に観戦しますわよっ！」

やっぱりか……まさかと思ったが、透華節が炸裂してる。はあ……仕方ない、と俺は溜息をついて再び携帯を取り出して操作する。

「……」

「ちよつと？ 勝手知ったる仲とはいえ、人との会話中に電話をするとはマナー違反ですわよっ」

「お前も知ってる相手だ」

「……？ 誰ですの？」

「——ハギヨシ」

「ちよつと!! まさか連れ戻させようとしてませんっ!？」

「大声出すな。お前の方がマナー違反だぞ——つと、繋がったか。も

しもし」

俺は透華のツッコミを無視して電話に集中する。すると相変わらず涼やかな余裕のある声が聞こえてきた。

『おや、東郷様。電話とは珍しいですね。どうかしましたか?』

「いや、お前んとこのお嬢様が他の連中に黙って他の試合を見に来てしかも俺に付き合わせようとしてるんだ。だからさっさと迎えに来てくれ」

「わたくしは犬ではありませんことよっ!」

『なるほど……事情はわかりましたが、生憎と私はそちらに向かえませんが』

「あ? なんでだよ。いいから来い。お嬢様の身の保証はしねえぞ」

「なんだか誘拐犯みたいなこと言ってますわねっ」

「いえ、近くにいれば向かって構わないのですが、今私は衣様とまだお屋敷にいますので……」

『ハギヨシっ! 何処ぞの有象無象と電話しているんだ?』

『東郷様です。代わりますか?』

『何っ!? とーごーか! なら代われ!』

「代わるな代わるな。今はお子様と会話してる場合じゃねえ」

『聞こえているぞとーごー! 衣はこどもじゃないっ!』

「持ちネタ出来て偉いなー。でも新ネタはないのか? そろそろ飽きたぞ、それ」

『衣は芸人じゃないっ!』

「その返しは芸人みたいでいいぞ。さすがだな」

『むむむー! 怫然! 今日という今日は許さぬぞとーごー! 根の国に送ってくれようか!』

「はいはい、また今度ネットで対戦な。わかったからハギヨシに代わってくれ」

『む……約束だからな! 与太郎には針千本!』

相変わらず衣の言葉はよくわからん……そう思っていると衣が電話をハギヨシに返した。

『では、そういうことで』

「待て待て待て。お前までふざけるな。何も解決してねえよ」

『透華お嬢様のごことはお任せします。今はまだお嬢様の試合時間ではないのでしょう?』

「いや……そりやそうだろうけどな」

『なら付き合ってくださると助かります』

「……チツ、なら指定の口座に1億振り込め」

「まさかの身代金要求……!? って思ったより安いですわね。それでしたら簡単に払えてしまいますわ」

「無視し続けようと思ったがそれは無視出来ねえ……普通は払えねーよ!!」

『楽しそうですね……ではまあ今度食事でも奢りますよ』

「チツ……メチャクチャ高い飯要求してやる……牛〇だ。それも一番高い食べ放題のコースに飲み放題もつけてやる」

『凄くリーズナブルですね。それでは交渉成立ということですのでよろしくお願い致します』

そう最後に言つて、ハギヨシとの電話を切った。……結局、このお嬢様に付き合わなくちゃならないのか。

「交渉は終わりましたの? それで、私は幾らになりました?」

「約60000円だ」

「私の値段、安すぎですわっ!?!」

ショックを受ける透華。なんとというか、相変わらずノリが良いというか喧しいお嬢様だな……まあ変にお堅い奴よりは話しやすいが。

まあどうせ透華はこの和の試合だけ見たら帰るだろうし、それくらいは付き合っただけやるか。なので俺は透華の隣に座って和の試合を観戦することにした。

長野県予選会場E卓の観戦会場から一度出た宮永咲と片岡優希は話し合いを行っていた。

会場内では試合が始まるところであり、仲間が戦っているのだから応援するのが普通だが、その仲間の為でもある。

「えつと、どうしたの優希ちゃん。何かマズかったかな？」

「いや咲ちゃん……あの聞き方だとまるで咲ちゃんの方が気があるみたいだじえ……」

「えっ……結構頑張って和ちゃんの良いところアピールしたつもりなんだけど……」

「それもちよつと不自然だったじえ……」

「そうかな……」

そう。というのも何を隠そうこの2人は——和の想いに気づいていた。

「早いとこのどちゃんの恋を実らせないとこれから合宿とか大会の泊まりの度にアレが起きてしまうじよ……」

「うん……あれね……」

というより気付かされていた——和の例の行為によつて。

そのせいで2人は中々眠れず、悶々とする日々を過ごすことになっていた。なので、その原因を早めに解決するべく、そして一応友達の恋を応援するということで行動を起こしていた。

「我々の安眠のためにはなんとしてもくつつけるしかないじえ！ 元プロも悪い人じゃないみたいだしなー」

「うん……でもどうすれば良いんだろう……和ちゃんのアピール……男性の好きなもの……」

咲は誰かと付き合ったことなどないし、男性の友達もほぼいない。唯一の男友達が京太郎くらいだ。ゆえに自信なさげに考え込み、優希も似たようなものだが、しかしそこで指を一本立てて優希がはつとして案を出す。

「わかったじえ！ おっぱいだ！ のどちゃんのおっぱいがどれだけ良いものかアピールするんだじえ！」

「ええっ!? 流石にそれは恥ずかしいよっ！」

「でも男はおっぱいが好きな筈だじえ！ 東郷元プロもきつとそうに違いない！」

「う、うーん……どうなんだろう……でもそういうアピールはどつちにしる出来ないよ……」

「そうか……でもそれ以外には思いつかないじえ。……あ、咲ちゃんは京太郎の好きなものとか知ってるのか？」

「え、何で京ちゃん？」

「男の好みは男から調べるのが一番なのだ！」

「えー……でもそこまで知らないんだけど……」

「そうなのか……」

「うん……好みって言っても……好きな食べ物とか漫画とかスポーツとか芸能人とか動物とかしか……」

「——結構知ってるじえ」

優希はツツコんだ。だが咲としては本当にそんなに知らないつもりだった。

「そうかな……でもこれは中学の時に——」

その理由を説明しようとする。

だがその時。紫色の髪の少女とすれ違い——咲は怖気を感じて瞳目した。

「——!!」

「……咲ちゃん？」

「えっ……あ……」

優希に声を掛けられ、ようやく動くことが出来た。

それまでは振り向くことも……動くことすら躊躇われた。

咲の中の第六感がそのすれ違った少女の何かを感じ取ったのだ。

額に汗を掻き、表情を険しいものにした咲。そしてそれを見た優希が首を傾げる。今しがたすれ違った少女の後ろ姿を見て。

「今の人がどうかしたのじえ？」

「……今の人……」

「？」

咲はそれを伝えるべきか迷う。気の所為かもしれないからだ。

「……ううん。何でもない」

「……？ おかしな咲ちゃんだじえ。もしかして……こっちに目覚めたか!! 美少女だったし！」

「違うよー！」

咲は妙な勘違いを受けたことを慌てて否定しながら胸を撫で下ろす。嫌な気配はもう感じない。やはり気の所為だろう。

咲はもう一度だけその少女を見る。背中の空いたシヨルダーオフのニットを着た紫髪色のボブカットの少女。

その少女の気配が——あのコーチに似ていたことを、咲は気の所為だと切り捨てることにした。

『——ツモ。1000、2000です』

「これは……やはり〃のどっち〃ですわね……!!」

——そうだぞ、とは言わない。別に教える必要もないからな。既に確信を持っているみたいだし。

何はともあれ副将戦は和の圧勝だった。

おかげで会場は盛り上がっているし、隣の透華も〃ぐぬぬ〃と言った顔で唸っている。自分より目立たれるのが嫌いなのは相変わらずだ。

「これは決勝は心してかからなければ……私が圧勝して目立ってませんわっ!!」

「勝つことは確定なんだな……まあ、頑張れ」

「あら、私達を応援してくれますの？ やはりコーチとして正式に——」

「違うわ。どっちも応援するってだけだ。どこかに肩入れはしねえ」

「強情ですわねえ。……なら私は行きますわ」

「ん？ 大将戦は見ていかねえのか？」

「必要ありませんわ!! ——ということを送ってくださいまし」

「1人で帰れよ……はあ……まあ行くぞ」

「それでこそですわ」

一応ハギヨシに頼まれた手前、1人で行かせるのは気が引ける。何も無いとは思うが一応だ。こんなのもお嬢様だしな。

「それで午後は私達の試合を観戦しに来ますの？」

「ん、いやちよつと見てもいいが……一応他の試合で見るところも

あつてな」

「あらそうですね。でも確かに私達の試合の観戦は明日の決勝でも構いませんわ!」

透華が自信たっぷりにそう言うが、実際その通りではある。龍門渕が決勝まで行けないなんてことはありえないし、風越も似たようなものだ。

だから午後からは鶴賀の試合でも見に行つて……ああ、その前のお昼は風越……というか美穂子から誘われてるんだよな。美穂子のことだから弁当でも作つて来てそうだ。正直かなり美味しいし期待出来る。

そんなことを考えながら透華と歩いていると、龍門渕の面々が見えてきた——向こうも気づいたようだな。

「あ、透華と東郷さん」

「てめーどこ行つてたんだよ!!」

「原村和は『のどっち』でしたわ!!」

「帰つてくるなりそれかよ!!」

「ふーん……あ、東郷さん透華を送つてくれてすみません」

「別にいいぞ。身代金が貰えるしな」

「え、なんですかその冗談」

「冗談じゃない。お嬢様の面倒を見る羽目になった代金としてハギョシに請求した」

「……いくら?」

「約6000円。焼き肉に連れて行かせる」

「安すぎますわよねっ!! 一に智紀からも何か言ってくださいましっ!!」

「身代金は良いんだ……」

国広がいつもの透華に苦笑いする。沢村は相変わらずパソコンを弄っているが、一応話は聞いている。井上が1番呆れていたが……あ、そうだ。

「お前らも焼き肉来るか?」

「え、いいんですか?」

「ハギヨシの金だろ」

「だからいいんだ。あいつの財布を少しでも痛めつける」

「それなら庶民のお店ではなくて私行きつけの最高級焼肉店などどうですか？」

「行きたい……」

「それは痛めつけ過ぎだよっ！」

——というところで夜はハギヨシの自腹で焼き肉を食べに行くことになった。ざまあみろハギヨシめ。月初めの大出費で月末には節約しなければならぬという地味な悩みを味わえ……と思っただが龍門の執事とか絶対メチャクチャ貰ってるし、そもそも住み込みだから食事とか出てくるよな……くそ！ なら遠慮なく食ってやる！

そして俺は龍門と別れ、風越女子と合流しようとして廊下を行く——

「へえ……夜は焼き肉行くんだ……いいなあ♡」

「っ——！」

——そしてその声は突然、俺の背後から聞こえてきた。

気配が全く、直前まで感じ取れず、一瞬モモかと思っただがすぐにそうではないと理解する。

なぜならこの声は……知っているから。

「私もお腹空いたし、連れて行ってほしいな♡ ね、ね、後で連れて行ってくれない？」

「……………お前、いつ来た？」

「今日だよ。ここに居るっぽいって聞いたから来ちゃった♡」

俺は振り向かず、立ち止まったままその少女と会話をを行う。

そしてその甘ったるい声から紡がれる言葉に眉をひそめた。

「……………お前1人か？」

「うん♡ 久し振りに会いたくないなっと思ってね♡ だから誰にも来ることは伝えてないよ♡ 安心して♡」

「……………なら何しに来た？」

その言葉は辛うじて信用出来るが……その背後にいる者は信用出来ない。

少女は相変わらず媚びるような可愛らしい言動で答える。

「ん〜……本当に久し振りに会いたいなあつて思っただけなんだけだなあ……あ、でも1つだけ理由はあるよ♡」

「……何だ？ また物強請りか？」

「違う違う！ そうじゃなくって——」

少女は相変わらず笑みのままで告げた。しかもそれは——

「——オカルトが目覚めたんじゃないかなーって思っただけに確かめに来たの♡」

「……!!」

——思考が止まった。

どうしてこいつがオカルトのことを知っている？ なぜ？ 誰にも言っていない。どこでバレた？ どういうことだ？

「まあどうやら目覚めたみたいだし……今日はもう帰ろうかなあ♡」

「っ……!! ——おい待て恋!!」

俺は振り向き、その少女の名前を声に出し、呼び止める。

見ればやはりあいつだ。身長は160程でスタイルの良い露出の高い服装を身に着けてる泣き黒子。言っちゃあなんだが美少女でもある俺の妹、東郷恋は既に会場を後にしようとして歩き出しているところだった——だが俺が呼び止めたことで僅かに立ち止まって振り向くと、その紫色の瞳が俺を捉え、声を紡ぎ出す。

「フフ♡ またねお兄ちゃん♡」

「いや待て!! お前、なんでそのことを……!!」

「ん〜……でもここで話すようなことじゃないし……話されたらお兄ちゃんも困るでしょ？ だから続きは家でね♡」

「っ……」

確かに、誰が聞いているのかわからない場所でそんなことを話すのはマズい。

だがついて行ってでも聞きたい気持ちもある。……なぜ俺の妹がそのことを……!

「あ、そうそう。そういうえば私も麻雀始めたんだよね♡」

「……は!? お前が……麻雀……?」

「えへへ♡ お兄ちゃんと一緒だね♡ ……っでことで、出来れば早

めに帰ってきてね♡」

——それじゃ、と軽い調子でそれだけを告げて恋は帰っていく……が、俺はそれを必死に呼び止めた。

「おい待て！」

「待たない♡」

恋が去っていく。歩いていく。

それを見て、俺は諦めた。追いかけずにその場で立ち止まり、黙って成り行きを見守る。

すると数分後——目元に手を当て、泣きべそを搔いた恋が戻ってきた。

「うつ……ぐす……お兄ちゃ……ん。ホテルまでの道、わかんなくなっちゃった……」

「……だから待てつただろ……方向音痴なんだから………と
いうか、どうやって1人で来た？」

「知り合った男の人に連れてきて貰ったの……」

「……相変わらずビッチだな……」

「ヤリチンのお兄ちゃんに言われたくない……」

「ヤリチンとか言うな！」

「ぶー、お兄ちゃん先に言った癖に………というかちよつと精液の匂いするんだけど、もしかしてさつきまでやってたの？」

「………やってない」

「嘘だあ……うわあ……お兄ちゃんってば昔は私のこと変態呼ばわりしまくってた癖に、今はこんな場所してるんだ……へんた……い♡」

「うぜえ……くそっ………やっぱ1人で帰れ。男引っかけりや帰れるだろ」

「ああんウソウソ！ ごめんなさいするからちちゃんと後で送ってね？」

「はあ………と俺は溜息を吐きながらも結局、後で妹を送っていくために妹をそこに留まらせることには成功した………が、俺は後で、留まらせたことを凄まじく後悔する羽目になるのだった。」

妹

東郷恋。

俺の5つ下の妹である。誕生日は10月10日。てんびん座のA型。

ちよつぴりくせつ毛のボブカットでいつもお気楽マイペースでスタイルも良い美少女。身長は155くらいで胸は……まあ大きいサイズは知ろうとは思わないが大きくなるとどこかのタイミングで報告してくる。半年前はHとか言ってたから今はそれより上かもしれないがどうでもいい。

何しろこいつはビッチだ。妹をビッチ呼ばわりするのは一般的に酷いかもされないが、事実なのだからしょうがないし、それが許される距離感ではある。

というのもこいつは昔から男にモテた。そりやあまあ美少女なのだから当然だ。それ自体はなんとも思わない。精々悪い男に引つかかるなよってくらいだ。

だが実のところ悪いのは女——妹の方だ。

初デートは小学生4年生の時。それから週に一度は必ずデートに行っているが、問題はその相手が毎回違う人物だということ。昔、そのことを聞いたただしたら妹はあつけからんにこう言つてのけた。

『だって飽きちゃうんだもん。それに、色んな人と付き合ってる方が沢山好かれて気持ちいいし、お得でしょ？』

……とのことだ。それを聞いた時、俺は『さもありなん』と思った。妹には悪癖がある。他人に何かを強請る癖。

それは物やお金に限ったことではない——心もそうだ。

他人から好かれないし、愛されたい。そういう気持ちが強いのか、妹はどんな男も落として自分の虜にしてしまう。妹に迫られれば男はぞっこんになってしまう。

だが妹のその相手に対する感情は薄い。そもそも妹は大抵の物は好きではあるのだが、好きが軽い。男に対してでもそれは同じで、どんな男だろうとクスであろうと、それを面白いから好ましいと、好

き」に変えてしまう。

だがかけがえのない物ではない。ある意味で、妹は相手を好きではないのだ。それはそうだろう。

平等に殆どの人を好きというなら、それは誰も愛していないのと変わらない。特別扱いする相手ではないのだ。

妹は誰に誘われても遊びに行くし、気分が悪ければ断る。関係を断つことも容易で、なんなら平気で彼らを傷つけることだって出来る。

一部の例外があるとすれば、それは家族や親戚などの切っても切れない関係の相手だけ。それらは家族だからちゃんと好きだし特別扱いもする。

言うなれば常人とは感覚が違うのだ。身体を開くこともこいつにとっては特別、拒否することでもない。気分が乗らないとかそういう理由で断ることはあるが、相手の性格だとか容姿で断ったりすることはない。……なんならこいつは性別どころか――

「――恋の名前は恋でーす♡ 突然だけどよろしくね〜♪」
「……………えつと……………」

恋は俺の腕を胸に抱き込みながら、小首を傾げて満面の笑みで挨拶した。自分の可愛さを理解したあざとさだが、こいつの場合これが天然でもある……………ってそうじゃない。

「と、東郷元プロ……………不潔だし!」
「妙な勘違いするな池田……………俺の妹だ。お前も勘違いさせるような行動するな」

「あ〜ん、残念。ってな訳で改めて東郷恋でーす♪ 恋も15歳の高校1年生なのでよろしくお願いしまーす♪」

「あー妹……………って東郷さんの妹!? 言われてみれば髪とか目も似てるし!」

「ふふふ、仲良しなんですネ。私は福路美穂子です。よろしくね」
「私は池田華菜ちゃんだし! よろしくな! 1年!」

妹の思わせ振りの挨拶から勘違いしかけた風越女子の2人に説明しておく。昼飯時に美穂子と約束していたため、こいつは帰そうとも思ったが、そうもいかないため仕方なく美穂子に了解を取って同席さ

せた。美穂子の方も池田と一緒にのため、全然問題ないらしい。弁当を
沢山作ってきたため、ちょうどいいかもしれないとこのことで、今も妹
と俺のやり取りを見て笑顔を見ている。微笑ましいと言った感
じだろうか。

「美穂子さんに華菜さんですね♪ ——あつ、ところで美穂子さんに
質問なんですけど……」

「ええ、何かしら？」

恋の奴も一応は礼儀正しく接している。普段の態度はそこまで問
題ない……筈だからな。多分。変なスイッチが入らなければいいが
……それと、余計なことを言ったりしないよう俺が注意して——

「美穂子さんってお兄ちゃんのこと好きなんですか？」

「——おい！」

「いつ——た〜い！ ぶーぶー！ 可愛い妹の頭を殴るなんてお兄
ちゃんさいてー！」

「お前が変なこと聞くからだろうが！」

——言った側からこれだった。妹の頭を手ではたき、頬を膨らませ
て文句を言う恋に語気荒く注意する……まあ美穂子なら上手いこと
誤魔化してくれるから大丈夫だと思うが。今も虚を突かれたのか驚
き、両目を開いて可愛くぱちくりさせた後、にっこりと笑みを浮かべ
た。

「……ふふ。ええ、好きですよ」

「!?」

「え!? きゃ、キャプテン!!」

「わお♡」

そして誤魔化さ——ない！ えっ？ いやいやいや……美穂子？
さすがにそれは……どうした？ 池田も驚いてるし、俺も絶句して
る。妹はなんだか楽しそうだがこいつは後でシメる。だが……いや
ほんと急にここでそんなことを言うとは一体どういうつもりなんだ
？

そう思った直後、美穂子は同じ笑顔のまま首を傾げ、

「——コーチとして、凄く尊敬しています♪」

「えっ……」

「コーチとして……あつ、そ、そうですね！　そう、そんな訳が……」
「……ふーん？」

コーチとして、という枕詞をつけてその意味を変換させた。俺も一瞬戸惑ったが、遅れて理解する。今の言い方だと『コーチとして好き』と言ってるように聞こえる。ラブではなくライクだと。

しかも敢えて普通に頷いて否定はしないことで、その意味合いが強く見えた。確かに、何とも思っていないのならこういう風に答えるのが普通だろう。慌てて否定したり、慌てなくても別に好きじゃないと答えるのはちよつと違う。特に温和で人のことを嫌わなさそうな美穂子なら尚更だ。

「東郷さんには学校に臨時コーチで来て頂いた時に熱心に指導してもらって、今でも凄い感謝しているんです。だから今日も会場に応援に来てくれるって聞いて張り切ってお弁当を作ってきました♪」

「……なるほどねー♪　そっかそっか！　美穂子さんはお兄ちゃんに指導してもらったんですね♡　いや〜お兄ちゃんもやるなあ♪　こんな美人さんに好かれて良かったね♡」

「……まあな……って、池田、どうした？」

「とすると最近のキャプテンのあれこれは……え？　なんですか？」

「なんですかじゃねえ。お前、一人でブツブツと呟いて……何を言ってたんだ？」

「あ、あー……いやその……あの……つ、次の試合のことを考えてて、思わず口に出ってしまったし！」

「まあ……！　華菜ったら……熱心なのは良いことね」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「……なるほどね〜♪」

何かを誤魔化す池田に、誤魔化される美穂子。そして何かに感じていた恋。そして俺も……正直今のは明らかに嘘だと思っていた。小声で微かにしか聞こえなかったが、美穂子のことをどうたらと言っていたのは確かだ。……まさかこいつも気づいてたりしないよな？　そ

うだったらすすがに面倒だな……そうではないと信じたい。美穂子がボロを出すとは考え辛い……とはいえ池田は美穂子のことはよく見てるからな……まあ、留意はしておこう。

「ではいただきますしよう。どうぞ、好きに召し上がってください」

最も、留意したところでやることは振る舞いに気をつけるくらいしかないのだが。そうして俺は妹に注意を向けながら美穂子の弁当……大量の重箱に入った料理の数々に舌鼓を打った。そうして妹到来の不安は杞憂に終わる――

「――東郷さん。この人は誰ですか？」

「――また新しい人つすか？」

――らなかつた。食事の席に偶然……偶然……だよな？ まあおそらく偶然やつてきた和とモモが俺と親しそうにしている恋を見て話しかけてきた。2人は笑顔だが……どう考えても嫉妬している。

だがこいつに嫉妬する必要はない。それに関しては問題ない。問題はどっちかというところ以外だ。

「……いや、こいつは……」

「――ん？ なくにあなた達。お兄ちゃんのこと好きなの？」

「すっ……」

「……お兄ちゃん？」

恋が美穂子にしたように和とモモにも好きかと聞くがやめてほしい。和が言葉に詰まった。モモの方はそれをスルーしてお兄ちゃん発言の方が気になったようだ。俺も和がボロを出す前にフオーローに入るか。

「……妹だ」

「あ、そうなんすか。確かに似てるっすね」

「……東郷さんの妹……ですか」

「はい♪ 妹の東郷恋です！ それで？ 2人はどう知り合――」

「お前ちよつと黙ってる。……それで原村に東横も、自分のチームから離れていいのか？」

「――ええ、部長から許可は取っています」

「——同じく。加治木部長から許可は取ってるっす」

妹を黙らせて無理矢理帰るよう誘導したつもりなのに、2人は堂々とそう答える。……いや、帰れよ……一応他校の集まりなのに平然と混ざろうとするのはどうかしてるし、このままじゃボロが出そうでこつちとしては中々怖い状況なのだ。どうにか帰らせたいが……。

「……あー、だが福路や池田……こつちはこつちで午後の試合のこととかの話し合いもお互いあるだろうし、戻った方がいいんじゃないか？　なあ福路」

「えつと……そうですね。……でもそちらの2人がいいなら私は構いません」

「え」

福路なら俺の意を汲み取ってくれるか、気を使って頷いてくれると思ったが、その優しさ、包容力ゆえか普通に受け入れてしまう。くっ……ならば最後の砦——

「………まあ………そうだな。福路がこう言ってるしな」

「ちよつと!! 今なんで華菜ちゃんの方見てため息ついたし!!」

「いや別に……池田もいいよな？　福路がこう言ってるし」

「そ、それはまあ……強豪校の、それも先輩としての余裕だし！　どこの1年だろうがあのお原村和だろうが心良く——」

うん。池田はどうせ無理だろうから諦めた。池田がこの押しの強い連中を止められる訳がない。池田だしな……とはいえさすがの池田も若干きこちない。知らない人がいきなり3人も現れたらそりゃあそうなるだろう。そして美穂子なんかは初対面でもごく普通に笑顔を浮かべて接していてさすがだ。

「それじゃあ原村さんに東横さんだったかしら。2人も良ければ召し上がってくださいね♪」

「ええ、ありがとうございます……ふむ……これは……」

「ではお言葉に甘えてさせて頂くっす！　——って、うわっ……すごい量っすね。しかもどれも美味しそう……むむ……これは手強い……」

和とモモが今度は美穂子の弁当を見て何やら分析している。……

まさかこつちまでバレたか？　なんかさつきと同じ空気を感じる。しかも美穂子を警戒してもいる様だ。

だが俺が迂闊なことを言う訳にもいかないし、対応に困るな……とにかく今は無難に時間を潰すことを考えよう。——そう思った直後。「——それで、参考までに聞きたいんですけど、お三方はお兄ちゃんのこういうところが好きなんですか？」

「おい!!」

恋が突然そんなことを平然と言い出す。3人と言ったのは当然俺が落とした3人だろう。どういう根拠があるのかわからないが、やはりこいつは気づいているのか？　そんな疑問を思うも、それより止めるのが先だと声を大きく注意する。しかし、

「ん〜？　どうしたのお兄ちゃん♡　私は3人に、コーチとしてどんなところを尊敬しているのかって聞いただけなんだけど……どうして慌ててるのかな？」

「っ……だったらなんで3人なんだ。池田にも聞けよ」

「池田先輩は聞いてもつまんなそうだからいいかな」

「確かに池田に聞いてもつまらないかもしれんが、そういうことじゃねえだろ」

「兄妹揃ってデイスられた!?!」

池田がツッコミを入れてるが今はそっちに反応している場合じゃない。このバカな妹の謎の探りを躲す方が先決だ。

「……そうですね。私は、東郷さんの真摯なところを尊敬しています」

「ほうほう♪　そうなんですな♪」

って、美穂子が真っ先に答えた!?!　いやまあ……尊敬って体なら確かにどうとでも言えるが……今は池田もいるからな。バレたら面倒とかいうレベルじゃない。

しかしよく考えれば3人がバカ正直に答える筈はない。良い感じに尊敬しているところをでっちあげてくれる筈。でっちあげるのには悲しいが、まあそれはいい。無理に話をぶった切る方が不自然だし、このまま成り行きを見守るか。

「……確かに、東郷さんは紳士ですよ。でも私は東郷さんの頼れる

ところがす……尊敬しています」

「ふむふむ♪ なるほどなるほど♪」

うんうん、和も問題ないな。ちよつと危ないような気もするし、なんだか言葉の裏でマウント合戦みたいなのが始まっている気がするが、それは気にしないことにする。変なことを言い出さなければそれでいいのだ。

「私は全部好きっす♡」

「！へえ！ そうなんだ！」

——は？ お、おいおい……モモ？ 急に何を言い出してるんだ？

急に好きという言葉を使ってきたモモに俺は戸惑うし、和も美穂子も妹も驚いているようだった。そして池田もおにぎりを喉につまらせていた。何やってんだこいつは……とは責められない。とりあえず美穂子が持ってきた水筒のお茶を渡してやりながら怪しい話の流れを耳にする。

「あくまでコーチとしてっすけど、東郷さんは男の人の中で最も尊敬する大人の男の人っすね♡」

「くっ……」

「……………」

「あはは♪ そこまで尊敬してくれてるなんて妹としても鼻が高いけど……それだと男の人としても好きって言ってる風に聞こえるね？」

「そう聞こえてしまうくらい尊敬してて好きってことっす♡」

「…………ふふ、なるほどね♪」

いや待て待て……モモの言い方が意味深過ぎる。その言い方だと恋の言う通りそういう意味にも聞こえるし、ホントギリギリの発言だ。

「…………確かに。東郷さんは素敵な人ですよね」

「！…………ええ、そうですね。東郷さんはとっても格好良くて素敵な人です」

そしてモモ以外の2人にもなんだか微妙な……そこはかたなくひ

りついた空気が流れた気がする。まるで麻雀の、それこそ公式戦の駆け引きを見ているかのようだ……つて、そんなこと言ってる場合じゃないな？

「そうなんだね〜♡ ——あ、それとは関係ないけど、お兄ちゃんって家庭的な女の子がタイプなんだよね〜♪ 料理上手な子とか♪」

「あつ……♡ そ、そうなんですネ……」

「ふ、ふん……私だって料理は得意です。全く他意はないですけど、以前もお弁当を作って何度も美味しいって言ってもらいました」

「……でもまあ料理だけが家事ではないっすからね。私は家事は大体出来るっすよ？」

——おい。

俺は視線で恋に抗議する。この妹の質問でなんだか妙なマウント合戦みたいなのが始まってしまった。

確かに家庭的な女は嫌いじゃないが……だからといってここで一々言わなくてもいいだろう。

こいつ一体何を考えてるんだ……？

「あ、それと麻雀が強い女の子が好きとも言ってたような……？」

「……………」

「……………」

「おい……」

そんなこと言っていない。言った覚えはない。

だが俺の反論の声は出なかった。なぜなら、その場の空気が一気に冷え込んだから。

和とモモが黙る。どちらも長野県予選に出場してる麻雀競技選手であり当然優勝だって目指している。

それに加えて俺への好意と相手へのライバル心なのか、戦う前からバチバチと——

「なら長野だとキャプテンが一番のタイプってことじゃないですか

!!

「!」

「は？」

——おい池田アア!!? てめエ何てこと言いやがる!! 空気も読めねえのか!?! そんなこと言ったらどうなるか……。

「も、もう華菜つたら……タイプだとかそんな……」

「そんなことないですよ!! キャプテンは昨年の個人戦でも1位だったし、女性としても完璧です!! 東郷元プロとは釣り合わないくらいには!!」

「♪——あー確かにそうかも♡ お兄ちゃんには勿体ないけど、お兄ちゃんの1番の好みは福路さんかもですね♡」

「……そ、そんなこと……むしろ、私の方が……」

「ッ……!!」

「……」

……や、やばい。なんだかまた更に話題に入りづらく……というか、和とモモから伝わる気が恐ろしくなった。

和は歯を噛み締めているし、モモは無言で頬を手で押さえて赤くなる美穂子を見つめている。このままじゃ美穂子までボロを出しそうだな……まあこの場で匂わせるような行動や言動を取ったところでそれを知るのは池田くらいだからそれほどマズイ訳ではないが……しかしどう考えても引つ掻き回そうとしてるだけのこのバカ妹はそろそろ止めた方が良さそうだ。

「……おい恋。あんまりいい加減なこと——」

「あと、お兄ちゃんは胸の大きい娘が好きだよ♡」

「——知ってるっす」

「——常識ですな」

「あつ……えつと……その……」

「元コーチ、変態だし!」

「……さ、飯でも食うか」

——よし、今はスルーしよう。

俺の性癖というか好みをバラした恋は後で折檻。俺の好みを聞いて「え? 常識ですけど?」みたいなすまし顔でマウントを取ろうとしてるモモと和も後で注意だ。返答に迷ってしどろもどろに顔をかあつと赤らめてるだけの美穂子は……うん。まあ反応が可愛いだ

けだし、何も言わなくていいだろう……別に現実逃避してる訳じゃない。女の戦いに男が出ると碌なことにならないからな。今更恋を止めても無意味だし、なんなら俺が反応しない方がこいつは止めてくれるだろう……なので俺は怒りをしばらく溜めてガールズトークに対しては空気であり続けることにした。

——そして昼食の時間が終わり、笑顔の美穂子と嫉妬なのか頬を膨らませて不満そうにしていた和（とついでに池田）と別れた俺と恋はモモについていき、鶴賀と合流することにした。

「おい恋。次またふざけた言動したら……」

「んん……どうかな？」

「おい」

「冗談冗談♡ もう大体わかったから次は大人しくしてるね♡」

「……ああ？」

途中、恋にひそひそと小声で注意してやると、また意味深な返答が。

……大体わかった？

もしかして俺の交友関係でも調べてたのか……？　　そういや、こいつは良子や他の魔物級オカルト持ちでも気づかなかった俺のオカルトに気づいてたが——

「……そういえば恋さんって……もしかして、私のこと見えるっすか？」

と、俺がオカルトのことに思考を巡らせたところでこちらに振り向いたモモからの質問が飛んでくる。……ああ、でもそうか……こいつなら、俺と一緒にモモが見えてもおかしくはない。

「うん、見えるよ。でもモモちゃんすごいね♡　こんなに気配が薄い人、私初めて見たよ♪」

「まじっすか……東郷さん家って、そういう家柄なんすか？」

「そういう家柄ってどんな家柄だ……」

「……んん、どうだろうね？」

俺と恋は揃ってはぐらかす。まあ……家はオカルトには強いから

な……良子とか親戚の連中ほどじゃないが——

『——お前は……じゃ』

「っ……」

「？ 東郷さん？」

その時……映像がフラッシュバックし、思わず頭を押さえて立ち止まってしまう。

モモがそんな俺の様子を見て不思議そうにしていた。そんなモモを見た俺の方は息を整えて普段通りの表情へと戻す。

「……いや、何でもない」

「？」

「……」

そしてそんな俺を見て薄く笑みを浮かべる恋は俺の手を取り、

「あ、ごめんモモちゃん！ ちよつと忘れ物したから先行つといてく

♪ ——ほらお兄ちゃん」

「え？」

「あ？ いやお前、忘れ物って——」

「早くしないとモモちゃん達の学校の試合に間に合わないよ♪」

そう言っただけ俺を強引につれていく。モモも戸惑っていたが……おそらく話があるのだろうと俺もそれに乗っかることにする。

恋の引く手に逆らわず、人が多い場所から人気のない場所へ移動する。試合開始までには戻らないとな……。

「で……どこに行くかと思えば……トイレか」

「きちんと清掃されてて良い感じ」

人気のないフロアのトイレの個室の鍵を閉める。確かに内緒話にはうってつけだが……別にトイレにまで来る必要はないのでは？

と思ってしまう。

「近いな……」

「ドキドキするね♪」

「しねーよ。いいから話があるならさっさと話せ」

俺からも聞きたいこともあるが、そのことを深く話し始めると試合開始まで間に合わないかもしれないからな。それは一先ず後でもい

い。

「んー、しようがないなあ……それじゃ、さつさと用事を終わらせちやおつか♪」

「ああ……あ？」

ふざけた事を言う恋に早くしろと言うと恋は俺の両手を取り――

もにゅっ♡

「あんっ♡」

俺の手を自分の胸に誘った。俺はそのまま妹の豊満な乳房を揉み――
いやいやいや。

「……何やってんだビッチ」

と、俺は突発的な妹の意味不明な行動から逃れようと冷静に手を離そうとした。だが――

「あ、手を離したらオカルトのこと教えてあげなくい♪」
「！」

「やんっ♡」

そう言われ、離そうとした手をその場所へ留める。……思わず掴んでしまい恋が官能的な声をあげたがそれを気にしないように努めて恋を睨む。

「……それで？ お前、なんで俺のオカルトのことを知って……いや、なんでわかつたんだ？」

「んっ♡ それより恋のおっぱい♡ どう？ 高校にあがってからおっきくなったんだよ♪」

「……だからなんだよ」

「何カッパか当てられたら質問に答えてあげる♡」
「……………当てればいいんだな？」

……どうせ付き合ってやらないと何も話さないんだろう。

こいつは人をからかうのが好きだからな。俺の反応を見て楽しんでるのど……後は単純にこういうことが好きなのだ。

「揉みしだいて確かめてもいいよ♡」

「そうかよ」

「あっ♡ ふふ♡ 妹のおっぱいを容赦なく揉みしだくなんてお兄

ちゃんのすけべ♡」

「お前から言い出したんだろうが……」

俺が諦めて手に力を込める。……手のひらと指で恋のニツト越しのおっぱいの感触を確かめる。

するとすぐにあることに気づく。これは……。

「……ノーブラかよ」

「興奮した？」

「バカなこと言ってるな」

「あれ？ 否定はしないんだあ？ ふふふ♡」

恋が視線を下に向けながら意味深に笑う。くそ……こいつムカつくな……。

「妹のおっぱいで興奮して勃起しちゃうなんて……お兄ちゃんのえっちな♡」

「……うるせえ。そっちは生理現象だ」

……もうさっさと当ててこいつの遊びを終わらせてやろう。

俺は恋の胸に意識を集中させる。

「ああんっ♡ んっ♡ お兄ちゃんの手、気持ちいい♡」

恋が俺を惑わすためか甘い声をあげ続けていたがそれも無視だ。そんなに時間もないしな。

……にしてもこいつの胸……中々……。

ニツト越しでも指が沈む。そして沈んだ指が弾力で押し戻されて

「——お兄ちゃん♡」

「！」

妹の声が耳元に届く。ハツとして恋を見ると熱い吐息を漏らした恋が先程よりも近くにいた。

「そんなに夢中になっちゃって……そんなに恋のおっぱい良かった？」

「っ……そんなことより当てればいいんだろ」

「あ、誤魔化したく♪ お兄ちゃんずるく♪」

「黙ってる」

楽しそうな笑顔の妹が憎たらしい。思わず舌打ちを漏らしてしま
う。

「……だが……まあ……。」

「……お前、俺が当てられないと思ってるだろ？」

「ん〜、どうかな？」

「——Jカップだろ？」

「……………」

俺は確信を持って口にする。

すると恋は黙った。一瞬、驚いたような表情を浮かべる。

だがすぐに目を細めて薄い笑みを浮かべると再び甘ったるい声を
紡ぎ出した。

「……さくすがお兄ちゃん♡ またおっぱいソムリエっぷりがあがつ

たね〜♪ おっぱいの達人だね！」

「不名誉な称号をつけるな……。」

俺は息を吐いて恋の胸から手を離す。恋もそれには何も言わな
かった。やはり正解か。

「いやほんとすごいね〜♪ 昔のお兄ちゃんなら当てられなかったと
思うな〜♡」

「……昔の話は——」

「褒めてるんだよ？ これもオカルトで経験豊富になったおかげかな
？」

「……………そうかもな」

確かにそれは間違いではない。当てられた理由は間違いなくそれ
だ。

触った感じ、以前のモモと同じくらいだったからな……その経験が
なかったら難しかっただろう。

「和ちゃんにモモちゃんに福路先輩……みくんなおっぱいおつきくて
めちやくちや可愛かったもんね〜？ ねえねえ皆気持ちよかった？」

「……お前も同じオカルトを持ってんのか？」

「え？」

「あ？ ……違うのか？」

恐らくそうなのだろうと俺が当たりをつけて聞くが、恋からは虚を突かれたような意外な反応が返ってきた。おかげで俺の方まで間の抜けた声を出してしまう。

「……あ、そっかそっか。うん……まあそういうことになるかな♪」

「はあ？ どっちだよ」

「んーん。気にしないで。まあ同じ力を持つてるからわかるってことだね♪」

と思ったが恋は気を取り直したかのように頷いて俺の質問を肯定する。

何か隠しているようにも思えるが……まあ……いいだろう。それよりも話を進める。

「……つてことはお前も今までオカルトを使つて……」

「んく……そういうことになるのかな？」

「曖昧な答えだな……ん？」

今まで恋が男をとつかえひつかえしてたのは俺と同じでオカルトを使つていたからか。

まあこいつなら使わなくても男くらい余裕で落とせるとは思うが……そう思ったところで引つかかる。

「お前……昔から実は麻雀やってたのか？」

「んく？ 恋やつてないよ？」

「は？ 嘘つくくなよ。このオカルトは役満を上がった時に——」

「嘘もついてないよ？」

俺の言葉を差し止めるように恋がなおも言う。

だがそんな筈はない。役満を上がらなければ異性を落とすことは出来ない筈だ。

それはつまるところ、落としたい相手と卓を囲む必要がある。

つまり麻雀をやっていないければ使えない。

「それともあれか。昔はオカルト関係なく落としてたってことか？」

「……はあ……お兄ちゃんさあ……」

だが俺の質問に恋はジトーッと呆れた視線を向けてくる。

「……なんだってんだ」

「……んーん。何でもない。——はーあ。まさかお兄ちゃんがごこま
でわかってないなんて思わなかったなあ……」

「……お前は俺の知らないことを知ってるってことか?」

「それもそういうことになるかな」

「お前……」

要領を得ない曖昧な返答ばかりでさすがに苛立ってしまう。すると恋はそれを感じ取ったのか、逆に笑顔を浮かべた。

「あはは♪ 怒らないでよお兄ちゃん♪ 別に私も嘘ついてる訳じゃないし、煙に巻こうとしてる訳じゃないんだよ?」

「……だったら教えるよ。このオカルトについて」

「いーよ♪ でもそれは——」

——また今後ね♡

「!？」

「あはっ♪ それじゃあそろそろ戻ろっか♪」

恋が俺の耳元に顔を近づけてそう囁いた瞬間——変な感覚を俺は感じ取った。

身体の内側から来るような何か。血が熱くなる感覚。鼓動が強くなる脈打つ。

「お前……今何した?」

「——また今度、教えてあげるね♡」

「……今じゃダメだったのか?」

「うん♪ でも安心して♪ その時が来たら……全部答えてあげる♡」

今はまだ……ちよつとレベルが低すぎるしね」

「レベルだと?」

オカルト的にはあまり聞かない単語が出てきて俺は単語のまま質問を返す。

すると恋も頷いた。トイレのドアの鍵を開けながら、

「ヒントをあげる。お兄ちゃん、今まで何人の女の子を落としたの?」

「………7人」

「わーお。もうすっかりハーレムだね♡ ……でもまあ……それなら後半分くらいは落としてみたら?」

「後半分……後7人つてことか」

「そうそう。まあ正確に7人かはわからないけど……多分それくらい落としたら……ちよつとはわかってくるかもね〜♪」

——その時になつたら教える。

恋は言外にそう言っていた。

俺は少し考え……いや、あまり迷うこともなく——

「……わかった」

「即決だね〜♪ ま、もつと色々な女の子とエッチしたいだろうし、そりゃそうだろうけど〜♪」

「……話が終わりなら行くぞ」

「おっけ〜♪ あ、もう1つ……これはオカルトとは微妙に関係のない話だけど……」

「……何だ？」

トイレの個室から出ながら話をする。周囲に人の気配はない。聞こえる物音は遠くの喧騒とアナウンスだけだ。

「お兄ちゃん、中途半端に優しいところあるけど……ハーレム作るなら、ちゃ〜んと上下関係躰けといた方がいいよ？」

「……余計なお世話だ」

「え〜？ 聞いといた方がいいと思うな〜……なんなら、私が代わりに——」

「——恋」

「！……は〜い。やめま〜す」

恋がやりかねないことを止めて2人でトイレを出ていく。

少し不貞腐れた……だがなんだが微妙に嬉しそうな恋を見て、複雑な気分になる。こいつも昔から——

「ま、何にせよ恋はハーレム応援してるからね〜。……あ、そうだお兄ちゃんもう1つ。これは本当に親切で言うけど——」

「あ〜？」

「——」

——試合の始まりのアナウンスが聞こえる。

そんな中、俺は恋の親切心からの言葉を聞いて……息を入れた。

「……そうか。わかった。ありがとな」

「別にいいけどくお礼なら何かちようだい♡」

「……後で焼き肉連れてってやるよ」

「いいね！ 楽しみ♡ タン塩♪ カルビ♪ ネギタン塩♪」

「今日は幾らでも食っていいぞ」

……戻るか。

焼き肉に連れていくというだけでルンルン気分ではしゃぐ妹を見て張り詰めた気を弛緩させる。こいつも、いつもこれくらい歳相応なら可愛いんだけどな……悪いところが俺に似ちまって……。

今日と明日はどうやら妹と一緒に観戦することになりそうだ。そう思い、俺は少し遅れて鶴賀の観戦室まで恋と共に趣き、鶴賀の面々にも恋を紹介して……そして数時間後、今日行われる全ての試合が終わり、俺は息を呑むことになる。

明日の決勝戦。その組み合わせは――

『龍門渕VS清澄VS鶴賀VS風越女子』

……4校全てが、俺の関わった学校だった。